

『101番目の罫物語』

トカイナカ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

『羅刹』——俺、遠山金次は鬼の一味と戦い敗北した。

死んだ筈の俺はモンジこと一文字疾風に憑依してしまい、モンジとして様々な都市伝説を口説いていくことに……。

『都市伝説』が蔓延る世界で、俺は俺の大切な者を護る為に『物語』を紡ぎ込んでいく。
ノンストップ学園アクションラブコメディに開幕！

小説投稿サイト『アットノベル』『暁』様でマルチ投稿始めました

101番目の百物語と緋弾のアリアとのクロス物です。

更新は気まぐれ、不定期、文字少なめですので注意です。

目次

第一部 伝説の始まり

プロローグ。伝説の始まり | 1

プロローグ2。逃走中?!? |

12

プロローグ3。ヤシロ | 21

第1章 月隠のメリーズドール

第一話。8番目のセカイ | 38

第二話。恐怖の転入生 | 50

第三話。『今日は電話に出て下さいね』 | 66

第四話。甘い誘惑…… | 82

第五話。月隠のメリーズドール |

95

第2章 消えた花子さん

第六話。俺の妹（従姉妹）と、クラスメ

イト（毒舌）がこんなにかわいいわけがない

! | 118

第七話。ロア | 131

第八話。蜘蛛タンク | 144

第九話。世界の歪み、人の認識?

157

第十話。因果と縁 | 172

第十一話。女子トイレを撮影する男

186

第十二話。悪魔召喚士、キンジ?ドキ

ドキ添い寝は命懸け!?? ————— 207

第十三話。ドキドキ添い寝と誓い

223

第3章 魔女喰いの魔女

第十四話。深い霧の中で…… ————— 237

第十五話。魔女喰いの魔女 ————— 253

第十六話。遅咲きの桜 ————— 268

第十七話。背中暖かさ ————— 282

第十八話。美少女をお持ち帰りしても

いいのかな? ————— 298

第十九話。始まりの終わり ————— 314

番外編。

番外編1。とある休日の過ごし方

324

番外編2。とある魔女の現地調査

《フィールドワーク》

343

番外編3。とある妹の内心

357

第二部。不思議な夢

プロローグ。不思議な夢

366

第1章 人喰い村《カーニヴァル》

第一話。人喰い村の噂 ————— 386

第二話。富士蔵村の噂 前編

400

第三話。富士蔵村の噂 後編

418	第四話。 超えてしまった境界線……		
		534	
	第五話。 異世界にある村	518	
431	第六話。 リサ・アヴェ・デュ・アン	501	
	クと2人の子供……	483	
	第七話。 常闇からの襲撃者	466	
	第八話。 ジェヴォーダンの獣	617	
	第九話。 改変された物語		『次は……しましようにね』
	第十話。 超えた限界。 勇気の在り方。	617	
			妖精の神隠し
557	第十一話。 人喰い村からの脱出	647	
		632	
			一之江の秘密
			再会と神隠しの噂……
			妖精の神隠し
			『次は……しましようにね』
683	第十八話。 魔女の刻印《キスマーク》		
		664	
		647	
		632	
			一之江の秘密
			再会と神隠しの噂……
			妖精の神隠し
			『次は……しましようにね』

第2章

妖精の神隠し

『次は……しましようにね』

431

第五話。 異世界にある村

450

第六話。 リサ・アヴェ・デュ・アン

クと2人の子供……

466

第七話。 常闇からの襲撃者

483

第八話。 ジェヴォーダンの獣

501

第九話。 改変された物語

518

第十話。 超えた限界。 勇気の在り方。

534

第十一話。 人喰い村からの脱出

第2章

『次は……しましようにね』

588

第十三話。 一之江の秘密

605

第十四話。 再会と神隠しの噂……

617

第十五話。 妖精の神隠し《チェンジリ

ング》の噂

632

第十六話。 魔女の代償

647

第十七話。 夢の少女の正体は……

664

第十八話。 魔女の刻印《キスマーク》

683

	第十九話。奈落の底で……。	705		プロローグ2。キンジの日常②	865
	第二十話。託された想い	724		第1章 赤マントのロア	
	第二十一話。妖精の神隠し	751		第一話。雷雨の中の襲撃者	882
	第二十二話。選択の時	768		第二話。夜霞のロツソ・パルデモン	
	第二十三話。夢の終わり	785		トゥム	902
	番外編4。人喰い村と魔女と……			第2章 ベッド下の男	
795	コラボ編。biwanoshinコラボ			第三話。口は災いの元つて言うけど……ヒス金にとつてはそれがデフォ!	
	コラボ編① 逢う魔が時	810		930	
	コラボ編② 恋と戦は突然に……			第四話。メールとお泊まりと	945
828	第三部。終わる日常			第五話。ベッド下の怪人……	962
	プロローグ。キンジの日常①	849		第六話。魔王降臨?	976

	第七話。遭遇	998
	第3章 音速兄弟	
	第八話。『星座の女神』	1015
	第九話。『音速境界』	1037
	第十話。対決の刻	1056
	第十一話。散花	1075
	第十二話。魔女との接触	1093
	第十三話。魔女の誘惑	1107
	第十四話。魔女のアドバイス	1125
	第十五話。妹でも愛ささえあれば関係ない……よな？	1140
	第十六話。情報共有	1153
	第十七話。再戦の刻	1169
	第十八話。目覚めの刻	1188
	第十九話。終わる日常	1220
	突発的番外編シリーズ	
	連載1周年記念！ 突破的番外編。	
	ロア達の野球大会……	1258
	突発的番外編！ 温泉では変態に注意！	1278
	連載2周年&通算100話記念。突発的番外編。『もう一つの勢力』	1302
	第四部。変わる日常	
	プロローグ。『終わらない千夜一夜』	1317
	第1章 千夜一夜物語	

第一話。『對抗神話』	1335
第二話。消えない伝説	1355
第三話。パンツを拾ったら全力で、ランドリーへぶち込め!	1372
優しさ、だ。	1390
第四話。パンパカパーン!	1414
第五話。『異界の迷い家』〈テイルナ ノグ〉	1434
第六話。千夜一夜夢物語①告げられた 予兆	1450
第七話。千夜一夜夢物語②素直な転入 生	1565
第八話。千夜一夜夢物語③ ハグは	1583

涙と共に……	1473
第九話。千夜一夜夢物語④	1507
悪夢	1530
第二章 予兆の魔女	1548
第十話。デート・ア・ミズエ	1583
前編	
第十一話。デート・ア・ミズエ	1583
中編	
第十二話。デート・ア・ミズエ	1583
後編	
第十三話。デート・ア・キリカ	1583
第十四話。智の妹	1583

第十五話。	最悪の都市伝説	1600
第十六話。	二人の魔女	1620
第十七話。	予兆の魔女	1634
第十八話。	死の予兆	1651
第十九話。	螺旋	1668
第二十話。	音央の決意	1683
第二十一話。	変わる日常	1701
第五部。終わりの始まり		
プロローグ。	『白ヶ咲島』	1720
第1章	2000年問題のロア	
第一話。	告げる言葉	1738
第二話。	時計の真実	1757
第三話。	ドキッ♡ 男子禁制入浴タ	

イムは波乱がいつぱい?	1772	
第四話。	七里詩穂の過去	1786
第五話。	『勢力』として	1803
第六話。	誰かが……見てる	1816
第七話。	俺の背後に立つな、って某殺し屋が言うのも防衛反応の一種。人には不可侵領域つてあるんです。	1834
第八話。	キンジ、お説教される……の	1850
卷		

第一部。 伝説の始まり

プロローグ。 伝説の始まり

俺の知り合いの、友達の友達が実際に体験した話なんだが……って、なんだよ？
その、『また始まったよ、こいつ』みたいな顔は。

この話は本当に、実際にあつた話なんだぜ？

そんな、オオカミ少年を見るような視線で見るとよ。

まあ、熱っぽい視線で見られるのも嫌だけどな。

つと、そういう話は今はいいんだ。そう、今、俺が話したいのは、知り合いの友達の友達にあつた、本当の話なんだよ。

なんと、そいつは伝説の英雄になったんだ！

……ってなんで露骨にげっそりした顔をしているんだ？

レジェンドだぜ、レジェンド。ジャンパーなあの人みたいにレジェンドになったんだ

ぞ？

今どきレジェンドになる男なんてあまりいないぜ？

な、少しは興味持っただろう？

まあ、ネタバレしちゃうとな……奴は、なんと、ハーレムも築きやがったんだ！

つて、おい。なんでいきなり興味津々なんだよ。

まあ、男なら一度は憧れるシチュエーションかもな。

一人の子が選べないから、いつそみんなを取る！みたいな。

モテモテ幻想みたいなものを持つてるのかなー。

まあ、所詮は幻想なんだけどな。

だって、そういう時の女子つて、めちやくちや嫉妬深くて、我儘で、面倒なんだぜ？
『皆に好かれてるから気遣いとか大丈夫！』なんて都合のいい事はいつさいない。

女なんてものは全員が全員『自分は特別に愛されたい』とか思っているんだからな。

自分がその特別な一人じゃないってわかった時なんか、『この泥棒猫ー！』とか、『スリーアウト……』とか叫んだり、呟いたりして包丁や日本刀をブンブン振りまわしちゃつて、まず、同性の女性の方を『グサーッ！』だぜ、『グサーッ！』。

しかも『グリグリ』とかさされて、相手の内蔵は修復不可能レベル。

生き残れたとしても、まともな生活をおくれなくするわけだ。

ヤンが酷いやつなんて『お兄ちゃんの手と脚を斬って、動けなくして一生看病してあげる!』とか、平気で言ってくるんだぜ?

え?なんでわかるのかって?

前世でいろいろ経験したからな……。

って、俺のことは今はいんだよ。

重要なのはそこじゃない。

いきなり脱線したがそういう話じゃない。

まあ、そういう話もなくはないが……。

えっと、なんだっけ。あつ、そうだそうだ。

英雄になった奴の話だったな。

都市伝説って知ってるか?

そう、都市伝説。アーバンレジェンド。

俗にいう、『フオークロア』って呼ばれるものだ。

まあ、そんなに頻繁には使わないよな。

今は、たまにフアッション用語とかで聞くくらいだな。

民族衣装ちつくな服のことだ。

なんでこんな用語知ってるのかというと前世で兄貴が女装をする人だったからな。

そのせいで、女物の衣服や下着にも詳しくなった。

まあ、兄の話はどうでもいい。

都市伝説って言葉は知ってるよな？

ほとんどが眉唾ものなんだが、実在してなくてもなさそうな身近なお話。

内容はホラーが主流だが、コミカルチックな物中にもある。

割と広い年齢層に受け入れられている、気軽な世間話の伝説達。

それが都市伝説だ。

んで、今まで話してた彼は都市伝説になったんだ。

……ん？なんだ？

もつと詳しく聞きたいのか？

ひよっとして興味もったのか？

やめとけよ。聞いたら引き返せなくなるぞ。

『退屈だけど安全な日常』と『危険だけど刺激的な非日常』。

たった一つの端末、『Dフォン』を受け取ったことによって、運命が変わった2人の少年。

ん？ん？

なんだ、聞きたいのか？

仕方がない。あまり気は進まないけど話してやるよ。

んーと。……そうだなー。

これから挙げる三つの中から、選んでみるってのはどうだ？

1番。『迫ってくる呪いの人形』

2番。『消えた花子さん』

3番。『魔女喰いの魔女』

ん？少年達が出てこないって？

ああ、そうだろうな。

なんだって奴らは——これらの伝説を手に入れた、真の伝説マスター。

『101番目の百物語』の主人公で、前世では『罨』（エネイブル）と呼ばれた『不可能を可能にする』伝説の男だからな。



「人如きに助命されたは、生涯の恥。その恥、今宵雪ぐ」

俺が今いるのは、旧日本軍の、開発途中で製造を断念されたハズの超大型戦略爆撃機・富嶽。

第二次大戦中の、日本を苦しめたB29よりも、遥かに大きい、常識ハズレな軍用航空機だ。

その爆撃機の機内で俺は、眷属の、鬼の一味。

『閻』と相対していた。

アリアに撃ち込まれた緋弾を覆うカバー『殻金』を取り戻す為に。

「おい。閻。早う」

鬼の一味のボス。『霸美』がせつつき

「御意」

一言返した閻が、

「『羅刹』」

言うや否や

ズツツツツツン

ノーモーションからの、掌低を叩き込んだできた。

俺の胸の中心・中央に、掌がメリ込むように、極めて深く。

それは初めての、闇の、本気の一撃。

あまりの速度と威力に、橘花による、減速防御が不十分になった

俺は

うッ

！

その瞬間、自分の心臓が停止している事に気づく。

肺もだ。

心肺、共に、停止している。

たった一撃で、俺はたったまま

……突然死したのだ……。

そこで俺の意識はなくなり……。

こうして、俺、遠山金次は僅か17年間の生涯に……。

幕を下ろした。

君。

君？

「モンジ君？」

ガバあ。

机にうつ伏せたまま、寝入りついていた俺は、俺を呼ぶ美少女の声で目を覚ました。夢から覚めた俺は、その瞬間、全てを思い出した。

……は……う？

そうか、俺は闇に殺られて……ツ!!?

なんだこの記憶は!!?

それにこの身体、俺じゃない。

俺は……俺は、誰なんだ？

遠山金次だけ俺だけじゃない。

俺の中に、心の奥底に、もう一人俺がいる。

そいつはこう言っている。

自分は、一文字いちもんじ 疾風はやてだと……。

いや、待て……何だ、これは？

何の冗談だ？

闇達に催眠術でもかけられたのか？！

アリアと出会って以降、いろいろな超人、超能力者と戦ってきた経験があるとはいえ、さすがにこの状況は理解し難い。

俺は、確かに闇に殺られたハズだ。

だが、今、俺は俺として、意識がある。

という事はこれは、理子が好きな漫画やゲームにあるような転生とか、憑依とかいうやつだろうか。

だけど何で、『彼』に憑いたんだ？

それに、さつきから俺に話しかけてくるこの、目の前の少女は一体？

目の前の美少女の顔をマジマジと見つめたが、不思議な感覚がした。

今まで、俺は俺として覚醒していなかったからか、普通に女子と会話をしていたようだが、目覚めた俺には女子は、女は天敵だ。

少女の顔から視線を身体に向けると、豊かな谷間に視線がいつてしまった。

ま、マズイ。

慌てて視線を逸らしたが……。

ト、クン。

心臓の鼓動が早く鳴り。

ドクン。

今までの俺、一文字疾風だった時は大丈夫だったが、何故か俺が目覚めた途端に、
流が身体の芯に集まる独特な感覚を感じはじめた。

遺伝性体質のハズなのに、俺という異分子が目覚めたからか、あのモードにもなれそ
うだ。

「どうしたの？モンジ君？」

俺、一文字疾風をアダ名である『モンジ』と呼ぶこの女生徒。名を仁藤キリカという。
この世界での俺のクラスメイトで、『親友』だ。

プロローグ2。

逃走中!?!?

呪われてる人形に追いかけて回されたことってあるか？

そんな奴はいない？

まあ、そうかもな。

だったらメリーズドールの都市伝説って知ってるか？

知らない奴の為に簡単に説明すると……

ある日、知らない番号から電話がかかってきて、その電話に出たら、最期。

メリーさん、と名乗る『呪いの人形』に追いかけて回されるんだ。

どこに逃げても、携帯や電話を捨てても、電源を切っても近くに電話があれば延々とかかってきちゃうんだ。

……まあ、ホラー映画とか、ホラー小説の展開とかだったらいい導入かもな。

主人公は、ひたすら逃げ回って、自宅とかの室内に逃げ籠り、あらゆる出入り口を閉じて身を護ろうとするんだ。

だけど、電話の相手は止まらない。

ゆっくり、じっくり、と相手を追い詰め、電話で自身の居場所を知らせてから最期にこう告げるんだ。

『もしもし、私よ。今、貴方の後ろにいるの……』 ってな……。

何でこんな話をするのかって？

それは、な……俺、遠山金次。

この世界では一文字疾風として生きている俺が、その都市伝説に遭遇しちまったからだ。

あれは、この世界に来た日。

一文字疾風に憑依した日の出来事だった。

俺の運命は、とある白い少女との出会いによって大きく変わっちゃった。

武偵高生時代に、アリアとの出会いで俺の人生が変わったように……。

『8番目のセカイ』、『実際にあつた都市伝説』を集めたサイトにアクセスしてしまったことにより、俺の日常は粉々に砕かれ、揉まれ、一から新しい日常を作るはめになった。

『Dフォン』でのみ繋がる『8番目のセカイ』。

その『案内人』の彼女や『月隠れのメリーズドール』、『魔女喰いの魔女』、『神隠し』、彼女達との出会いによって、俺の人生はまたまた大きく変わってしまったのだ。

俺がこの世界で出会った奴の中でも、特に印象に残ってるのはアイツとの出会いだ。
アイツとの出会いは突然だった。

俺が俺、遠山金次として覚醒した次の日。

西暦2010年5月11日。

某県。夜霞市。

午後17時30分。

「ハア……ハア……ハアッ！」

くそっ、まだ追つてきやがる……」

正直な話、何が起きているのかさっぱりわからないまま、俺は走り続けていた。

説明をしようにも今俺が駆け抜けているこの街には、人という人がこぞつていなくなっている。

こんなにも街中を走り回っているのに、登下校に使う心臓破りの坂も、人で賑わう商店街の通りも、そして見慣れた住宅街の公園前でも。

誰ともすれ違わないばかりか、車の音すら聞こえないんだ。

まるで、世界にただ一人俺だけ取り残されたかの、ように……。

何らかの映画とかでこんな状況を見た事がある。

主人公を、誰かを頼る事が出来ない状況に起き、ゆつくりと視聴者を恐怖させる演出。もし、この状況を作り出している監督や演出家がいるのなら、大成功だ。

超常現象に巻き込まれやすい、ある程度はそんなことに慣れてる俺でも、この状況は勘弁してほしい。

いろんな事を反省しているし、助けてほしいとも思っている。

後悔もしている。

ああ、こんなことならあの子から、あの携帯を受け取るんじゃないかった、とか。そもそも一人で覇美の、鬼の一味に挑むんじゃないかった、とか。

今となってはどうしようもない出来事が、走り続ける俺の頭の中でぐるぐると回転しては、心をマイナス方面に落としていく。

何故なんだ、いつたい。どうして俺がこんな目に遭わなきゃいけないんだ。

こんな状況を作り出した奴がいるなら出てこい、今すぐに。

そんな怒りと恐怖が混じった想いを胸に抱いても、一向に事態は良くはならない。

「ハア……ハア……ハアッ！」

走り続けて、そろそろ二十分は経過しているだろう。

俺は住宅街にある公園を突っ切って、大通りに出た。

いつもなら車の通行が激しい通りだが、今は、予想通り、車は1台も走ってないし、人

の姿もまるでないゴーストタウンになっていた。

いよいよ本格的に為す術もなくなってきた、と思ったその時。

俺の、制服の胸ポケットに入れていた。最近、学校の正門前で『ヤシロ』と名乗る少女から貰った黒い携帯端末機が鳴り出した。

ピピピピピピピピッ

「くそッー」

どんなに逃げても、どんなに走っても、この無機質な電気音は定期的に鳴り響く。

制服の胸ポケットに手をつ突つ込み、ハンカチに包んだ黒い携帯電話を取り出した。

それは布地越しにも解るくらい熱を発していて、不気味なモノの接近を告げるかのよつに、うつすらと赤く光っていた。

俺が昨日、ヤシロと名乗る少女（幼女）から受け取った携帯電話。（ガラケー）

何故か、同じ端末を二台渡されたがどちらも同じ機種で触った感じ、まったく同じで素人目からでは区別はつかなかった。

『Dフォン』と呼ばれるこの端末は、着信を告げる電子音と共に赤い点滅を繰り返している。

プツツ、と電話が勝手に繋がると、そこから、悪夢のような声が再生された。

『もしもし、私よ。今、公園にいるの。……どこに逃げててもムダよ……』

そしてプツツ、と一方的に切られる。

同時に、俺の後ろからはコツ、コツ、と地面を歩く足音が聞こえてきた。

本日、何度も起きてるこの現象に、俺は霹靂としていた。

正直勘弁してほしい。こちとら、元武偵とはいえ、今は一般人なただの小市民なんだから。

こんな出来事の当事者になるなんて夢にも思っていなかった。

ちよつと怖い話好きなら、一度くらいは耳にしたがあるかもしれないオカルト。

いわゆる都市伝説と呼ばれる噂話。

俺もこの『電話で追いかけてくる何者か』の話は知っていたが、まさか自分が体験することになるとは思っていなかった。

(まるで探偵科で上級生に尾行されてる気分だ……。)

一体何が目的なんだ、そもそも、俺なんか追いかけてきてどうするつもりだ？

足音は止むことなく、俺が歩く、あるいは走る速度とまったく同じ速度でついてくる。

「くそつ、なんだってこんな事に！」

肺に残っていた空気を吐き出しながら走り続けた。

俺がどんなに走っても、走っても、走っても、走っても。

背後から聞こえる『コツ、コツ』という足音は消えることはない。

むしろ、気を緩めればどんどん近づいていくようにさえ響いてくる。

そう、俺がこんなことにある理由——ならいくつか心あたりがあった。

その始まりは昨日、キリカとの、朝のトークタイムからだ。

サイド???

俺がこの世界にやって来たのはただの偶然だったのだろうか？

今になっても、何故あんな出来事に巻き込まれたのかはよくわかっていない。

本当に、あんな方法でよかったのかと、悔いを残すことだってあった。

ただどたまに、こう思う。

全ては『運命』によつて、そうなったんだ、と。

運命に導かれたかのように。

運命から身を護る為に。

そして、運命を変える為に……。

プロローグ3。ヤシロ

「どうしたの、モンジ君？」

俺の席の真ん前に立つ女の子が、爽やかに明るい声で心配そうに告げた。

愛くるしい瞳は猫を思わせるようなクリクリとした輝きを放っており、やや洋風っぽく、整った顔立ちは、多少高貴な面影すら感じさせる。短いスカートを履いているので綺麗な脚線美が男心をくすぐる。そんな可憐な可愛らしい少女が、俺の親友の、仁藤キリカだ。

キリカの胸元を見たせいで、高まった血流を鎮めようと素数を数えている俺を心配そうな、不思議そうな、そんな感じの困ったような顔で見つめてきた。

「1、2、3、5、7、11、13、17、19、23、29、31、37、41、43、47、53……」

「えっと……モンジ君。1は素数じゃないよ？」

「な、なんだと!?」

（いや、まあ、知っていたけど……東池袋高とかで結構レベルの高い授業受けたからな……）

「んー。なんか今日のモンジ君、いつもと違うような……」
……ギクウ……。

鋭いな、記憶の中にある彼女の姿を思い出して思った。昔からキリカは人の事をよく観察しているんだよなー、と。

「そ、そんなことない……ゾ？」

俺の馬鹿。疑問系に言っただろうする。

「ふーん……まあ、いいや。それよりモンジ君って都市伝説って知ってる？」

「都市伝説？」

「そう、都市伝説ー！」

目の前に立ち明るい声でキリカは得意げに告げた。

「今日の話題はそれにしようと思うの」

キリカは得意げに都市伝説について語った。

俺が知ってる都市伝説についての知識はこんな程度だ。

都市伝説。

アーバンレジェンド。

現代の怪談。

有名どころからマイナーまで幅広く噂されている怪談話で『赤マント』とか『花子さん』とか、『死ねばよかったのに……』などホラーからコミカルな話までその幅は多岐に広がる。

アリア対策に昔、怖がらせてやろうと思ひ覺えた知識なんだがな。

「モンジ君は知ってる?」

「俺の名前は一文字疾風。疾風と書いてハヤテと読む名前があるんだから、そつちで覚えようなキリカ」

前世でも、同じ学科の峰理子に『キーくん』などと呼ばれてたなーと思ひながらキリカに告げた。

「あははっ!可愛いと思うのになあ、モンジ君つて名前」

まったく、何たって女子は他人に変なアダ名つけようとするんだ?

理子といい、キリカといい、ちゃんと名前と呼んでやれよ。

「都市伝説つて、あのホラーちつくな話の事だろ?現代の怪談、みたいな」

「そうそう。さつきまであつちで三枝さん達と話してたんだけどね?」

キリカが見た視線の先には、クラスメイトで委員長のメガネをかけた女子がいた。

その女子、三枝さんは俺を見てメガネの奥で目礼してくれた。

俺も彼女に習つて軽く会釈しておく。

女子は苦手だが、こういった礼儀作法をちゃんとしないとじいちゃんや兄さんにボコられるからな。

もつとも、もう会えないが。

『赤マント』とか『花子さん』とかは怪談なんだろう」

「そうそう、それも都市伝説だね。後は『口裂け女』とか、あるハンバーガーショップはミミズを使っている、とかそういう社会的な噂も都市伝説だよ」

「昔そんな噂があったなあ。『本当は食用ミミズを入れた方がコストが上がる』とかそんな話で、そんな事はしてませんって発表したとかなんとか」

「そうやって消えちゃう都市伝説もあるよね。後は定番だと『リコちゃん電話』をかけるトリコちゃんが電話をかけてきて、殺しに来るー、みたいなヤツ」

「あつたか?」

リコちゃん電話?

理子が電話をかけてくんのか?

実際、理子にはハイジャックとかスカイツリーで殺されそうにはなつたけどな……。

「知らないの?」

リコちゃん人形の呪いの話。

あれって、玩具会社の電話サービスから出た都市伝説なんだけどね」

「へー。さすがは情報通のキリカだなあ」

俺の記憶にはキリカは、話し上手で聞き上手。

『物知りキリカ』として有名とある。

情報通と言われて気を良くしたのか、キリカは胸を張って人差し指を立てて語り出した。

キリカの胸に視線がいかないようにビクビクしながら俺は彼女の話聞いていく。

「一昔前、自動応答の電話番号があつてね。雑誌の広告とかに番号が書いてあつて、その番号にかけて『もしもし、私リコちゃん、お電話ありがとう！』ってサービスだね」

「あー。なんか小話が聞けるってヤツか」

「で、『リコちゃん人形』を捨てた女の子がある日電話に出たら、『もしもし、私リコちゃん。どうして捨てたの？今から貴女のお家に行くわね』みたいに言われて、ガンガン家に近づかれていっちゃう、っていうお話」

「ベタだな……結局どうなるんだ？」

「最期は不明だね」

キリカは立てて人差し指を自分のほっぺに当てて、思い出すように首を傾げた。

「えーっと、順番に言うとその後は『リコちゃん』から電話が一方的にかかってきまくつて。『もしもし、私リコちゃん。今から貴女の家に行くわ』『もしもし、私リコちゃん。』

今、貴女の家の前にいるの』『もしもし、私リコちゃん。今、貴女の部屋の前にいるの』つて続いていく感じ」

あゝなるほどな……オチがわかったぜ。

「最後は、『貴女の後ろにいるの』か？」

「そうそう。そして振り向いたら……キヤー！～みたいなの？」

キリカは、キヤーに、合わせて大きくバンザイする。

あまりにも笑顔でかたるものだから、恐怖より微笑ましく感じてしまった。

元々キリカの方にも俺を怖がらせるつもりなんてないんだろう。

クスクスと笑ながら机の上で足をバタバタと降っている。

ヒス的に困る。揺れる太ももに視線がいかないようにしないといけないからな。

「で、その都市伝説がどうしたんだ？」

「それが出たの」

「……出た？」

「そ。隣の市に、すつごい進学校あるでしょ？」

「ああ。私立蒼青学園だな」

蒼青学園は隣の『月隠市』にある。

飛び抜けて頭のいい共学の進学校だ。

このあたりでは月隠市は都会にあたる。

学力も高ければ、学費も高い。

頭の良い金持ちが通う学校だ。

「あそこの女の子が、おつかない目に遭ったんだって」

「へえ………実体験なのか」

まあ、おつかない目に遇うこともあるかもな。

俺も吸血鬼やら人狼やら鬼やらと出会ったことあるし。

「三枝ちゃんのお友達が、実際に怖い電話口に追いかけられたらしいよ」

ふーん。

俺も昔、武偵高で強襲科の教師、蘭豹から電話がかかってきた時には恐怖を感じたなあ。

「元々、この『リコちゃん電話』っていうのは、別の話から派生したものでね」

派生か。

俺の体質の、あのモードも派生するんだけどな。

まあ、今は関係ないけどな。

「もしかして『メリーさん電話』か？」

それなら俺も知っている。

全国的にメジャーな都市伝説だからな。

「そうそう。本来この手の話の原典、元ネタっていうのはないんだけどね。

人から人へ噂されて発展して有名になるものだから」

「元ネタみたいなものがいくつもある、って事か」

「そ。んで、この『リコちゃん電話』の場合、有名な『メリーさん電話』が元ネタじゃないかって言われているの」

「なるほどなあ」

「『リコちゃん電話』とほとんど変わらないんだけどね、最後は殺しちゃう……みたいなお話」

「そっちは完全に殺しちゃうのか……」

「うん。『最後どうなったか解らない』っていうのは、その方が怖くなるからっていう創作だと思う。そもそも『メリーさん電話』自身も創作だろうし。

人が噂することに進化して、より怖くしていくっていうのが都市伝説の醍醐味なの」

「伝説もレベルアップする、ってわけか」

「そういう事。で、その被害者が蒼青学園にいた、ってわけ」

「ふーん。で、その子はどうやって、切り抜けたんだ？」

「なんかね……」

キリカが対処方を語り、その後はチャイムが鳴った為、HRになった。

席が近い友人のアランにしつこく絡まれたりした。

お前は武藤か。

思わずツツコミたくなるほど話す内容とかも武藤が好きそうな巫女さん物のエロ雑誌やらナンパをしたとか奴を思い出すくらい同じだった。

さすがに乗り物オタクではなさそうだが……。

んで、放課後になり、一文字疾風が所属していた陸上部で軽く汗を流そうと思いついたが驚いた。

普通の状態でも、通常時の俺でもそこそこ速く走れたからな。

六時半頃。

校門付近で一文字疾風が憧れていた先輩に会ってしまった。

「モンジクーン！」

背中側から爽やかで甘い声が聞こえた。

先輩にまでそのアダ名で呼ばれてんのかよ！

コミつつ、振り返ってその先輩を見た。

パツチリとした瞳、小さな鼻と口、ふわふわの柔らかかそうな髪の毛、制服の上からで

もわかる豊かな胸、頭の上にはオシャレな帽子をかぶるヒス的に大変危険なこれまた美少女。

彼女は生徒会長を務める、七里詩穂先輩だ。

俺の幼馴染だった武偵高の生徒会長で、武装巫女だった白雪とは違い、真正正銘の普通の生徒会長だ……多分。

彼女と何故か一緒に帰る事になったが、その彼女との会話の中で過去の話題を聞いて、彼女から聞く昔の俺、一文字疾風は本当アホな奴だと思ってしまった。

先輩と校門を出ると……。

先輩が何かに気づいた。

視線の先には……。

「あれ?」

そこには……ビスクドールの、人の膝丈くらいの大きさをした人形が寂しそうに柱にもたれかかるように佇んでいた。

薄い金色の髪、真紅の目、ボロボロのドレス。

元々は綺麗であった人形が、まるで世界を恨むかのように薄汚れていて、いかにも怖い気配を漂わせている。

「こんな所に……?」

俺は朝の会話で話題となった、『捨てられた人形』が追いかけてくるという話を思い出す。

その時だった。

「お兄さん」

突然女の子の声に呼び止められた俺は、振り向いた瞬間心臓が口から飛び出るんじゃないかと思うほど驚いた。

俺の真後ろ、1mも離れていない場所にピッタリと、小さな女の子が立っていたからだ。

その子は真っ白いワンピースに身を包んでいて、真っ白なつばの広い帽子を目深にかぶっている。顔は帽子に隠れて見えないが、唯一見える口元には柔らかな笑みを浮かべていた。

その笑みがまた、何か深い意味がありそうでなんとなくゾツとしてしまう。

背丈からして小学生高学年に入るくらいだ。

あまりの驚愕と恐怖で頭の中が真っ白になった。

どこからか甘い……花の香りのようなものも感じた。

意識もぼんやりしてきた。

「これ。お兄さんの」

両手に一つずつ、握りしめた何かを差し出す少女。

その何かはよく見ると漆黒の携帯電話だった。

黒い不思議な光沢を持った、中々デザインのかっこいい携帯電話。

艶やかなその表面を見ると、どこか吸い寄せられるような気分になる。

「俺の……ではないな」

休み時間に確認したが、一文字疾風が使う携帯電話は制服の内ポケットにちゃんと入っている。

そう告げたが、白い少女は首を振って、さらに高く差し出してきた。

「ふふっ、はい。これはお兄さんの『Dフォン』だよ」

「デュー……フォン？」

「そう。運命を導く為の。そして運命から身を守る為のお兄さんだけの端末。だから

……持っておいた方がいいよ」

「いや、それが本当でも一台で十分だろ？」

「だってお兄さん、一人じゃないでしょ？」

驚愕する俺を見つめ、言葉が続ける白い少女。

「きつとお兄さんを助けてくれるよ。多分だけどね」

「……わ、解った」

有無を言わせないほどの強い言葉に、俺は少女の手から二台の『Dフォン』を受け取った。

手に馴染む質感と、見ているだけで心惹かれるようなデザイン。

持っているだけで落ち着いてくる感触に、不思議と違和感は感じなかった。

確かにこれらは『俺達の』だと思えてくる。

「そのDフォンは、お兄さんと因果……縁みたいなのが繋がっているロアを探してくれるから。大事にしないとダメだよ？」

「……因果？ロア？」

聞き覚えがない言葉に首を傾げると彼女は説明してくれた。

「そう。コードを読み取る事でお兄さんを助けてくれるの。……試しに、そのDフォンのカメラで、あつちの人形を見てみて？」

少女の示す先には、さっきの人形があった。

俺は携帯のカメラを言われるまま、その人形に向けた。
直後。

ピロリロリーン♪

何かを読み取ったかのような音が鳴って、ハッと我に返る。

「な、なんだよ。今のは!?」

「ふふふ。きつとお兄さんを助けてくれる口アだよ。もつとも……」

「もつとも?」

嫌な予感がして聞き返すと……。

「殺されなければだけど」

殺される……殺される?

少女の表情を見てわかった。

脅しや忠告じゃない。この少女は本当にただ純粹に、「殺されなければ助けてくれるかもね」と言っているだけなんだ。

「ど、どういう意味だ!?」

「そのままの意味だよ。じゃあね?」

「待て!」

少女の手を掴もうとしたがするりとすり抜けてしまった。

「お前は一体……」

何者なんだ、と聞く前に彼女は笑ながら告げた。

「私の名はヤシロ。生きていたら『また』ね、お兄さん『達』っ」

「ヤシロ、ちゃん……か」

Dフォンを握りしめて眩くと、クスクスと笑って。

「ばいばい」

と小さく手を振り……

「モンジくん、モンジくーん？」

気づけば目の前に、七里先輩の顔が至近距離にあった。

どれくらい至近距離かと言うと、おでこで体温を測るくらいの距離くらいだ。

ちよつと顔突き出せば「ちゅっ」とできてしまいそうだ。

マ、マズイ。

近い。

離れようとしたが先輩から何かいい香りがしている。

ヤバイ。このままではマズイ。

そう思ったが血流は止まらなかつた。

トク、トクン……ドクン。ドクン。

なる。なつてしまった。

ヒステリアモード、に………!

「やれやれ、こんな可愛らしいお嬢様に寄られるのは大変光栄だね。

だが気をつけた方がいい。君みたいな可愛いらしい人は狼に狙われやすいからね」

「んにゃ!?」か、かか、かかか可愛らしい!?」

顔を赤く染めた先輩にさらに近づき、その手を握る。

「さあ、狼が現れる前にお姫様はお城に帰らないと。

騎士役をやらせてもらおう」

「おおお、お姫様!?」

「ああ、ちよつとだけ——お姫様にしてあげよう」

そうやって彼女を抱き上げた。

お姫様だつこで。

顔を真っ赤にさせた先輩を抱き上げて校門前を歩く俺。

周囲に人は少ないとはいえ、通りすぎる男子生徒からは嫉妬と増悪の目を向けられ、女子生徒からは黄色歓声と驚きの声があがった。

明日、俺死ぬかも……。

「それにしても……」

……さっきのは白昼夢だったのか？

そう思い直そうとしたが、自分の制服の外ポケットに入っている物に気がついてその考えを捨てた。

何故ならしっかりと二台の『Dフォン』は制服の外ポケットに入っていたからだ。

周囲に視線を向けたが、ヤシロという少女や人形はどこにも見当たらなかった。

第1章

月隠のメリーズドール

第一話。 8番目のセカイ

お姫様様抱っこしたまま、先輩を自宅まで運んだ。顔を真つ赤にさせて終始俯いていた先輩を抱きかかえながら街中を走りまわった。先輩が何かを言おうとするたびに〈呼蕩〉を使い耳元で「詩穂、ああ、詩穂。君みたいな愛くるしいお姫様を一人で帰らせることなんてできない。何故なら君ほどの美少女を知らないからね。だから送り届けてもいいだろう? さあ、もう少しの辛抱だ」などと囁いて黙らせた。

本当は、悪用するのは禁じられているがこれはセーフだと自分に言い聞かせた。

そんなこんなで、俺は。

なんと女子の、それも一文字疾風が憧れていた先輩の家の前まで来てしまった。

駅前から歩いて10分くらいの距離にある、大きなマンションが七里詩穂先輩の自宅だ。

ここまで来るのに、知らない男子生徒から睨まれ、他校生からは空き缶を投げられ、夜坂学園新聞部を名乗る女生徒から走りながらインタビューを受けたりしたが俺が思った事は一言だけだ。

情報得るの速すぎだろ！お前ら……。

「さあ、ついたよお姫様」

両手で抱きかかえていた七里先輩を降ろし、脇に抱えていた鞆を渡す。

まだ『呼蕩』が聞いているのか、どこかポーツとしている先輩。

いつまでもこのままではマズイので先輩に詰め寄った俺は――。

――ばん！

目の前で拍手を打って、猫騙し。

ビクツと音が響いた事で驚き、正氣に戻ったのか、先輩は顔を再び真っ赤にさせて玄関の戸を開けるや否やすぐに部屋の中に駆け込んでしまった。

先輩に一言、「また明日」と声をかけマンションから出て自分の家に帰る途中で、ヒステリアモードが切れた俺はその場で崩れ落ちて四つん這いになった。

自分ででかしたことにゾツとする。

人前で、それも先輩をお姫様抱っこして街中を駆け抜けるとかって。

（何してくれちゃってんの……ヒス俺！）

ヒステリアモード時の体験は大抵現実味がなさすぎるので、事後、こつちの俺には夢から覚めたような感覚が残る。

ところがどっこいこれは現実で、あつちの俺はドラキュラ公を倒したり、ミサイルを

徒手ではじき飛ばしたり拳銃と刃物だけで原潜にカチ込んだりしちやつてるのだ。

前世ではな。

(……また、やつちまつたよ……)

H i s t e r i a S a v a n t S y n d r o m e
ヒステリア・サヴァン・シンドローム。

俺は『ヒステリアモード』と勝手に呼んでいるが、この特性を持つ人間は、一定量以上の恋愛時脳内物質βエンドルフィンが分泌されると、それが常人の約30倍もの量の神経伝達物質を媒介し、大脳・小脳・脊髄といった中枢神経系の活動を劇的に亢進させる。

その結果、ヒステリアモード時には論理的思考力、判断力、ひいては反射神経までもが飛躍的に向上し、うんたらかんたらどうたらこうたらで……わかりやすく言うとは。

この特性を持つ人間は、性的に興奮すると、一時的に人が変わったようなスーパーモードになれるんだ。

これだけなら便利そうだが、無論欠点がある。

一つは『何が何でも女を守りたくなる』こと。

もう一つ。これが非常に厄介なのだが……。

『異性に対してキザな言語を取ってしまう』ことだ。

今は元に戻ったものの……七里先輩、すなわち女子の前でヒステリアモードになって

しまった事に、俺は激しく落ち込みながら記憶を頼りに帰宅した。

「ただいま……」

家に帰っても気分は落ち込んだままの俺はちよつと控えめな声で挨拶をした。

リビングの方から歩くスリッパの音が聞こえてくる。

「お帰りなさい」

エプロン姿の少女が玄関まで出迎えてくれた。

その顔を見るだけで、思いつきリドキットとしてしまう。

茶色の髪に黒いリボンがトレードマーク。彼女は中学生で俺、一文字疾風の従姉妹にあたる。

名を須藤理亜という。

「か、帰ってたのか」

記憶でわかっているとはいえ、俺からすれば初めてあつた赤の他人と同じだ。

どう接していいのかわからない。

「はい。どうしたんですか？」

「なんだか疲れているみたいですが……」

「ちよつと部活で頑張り過ぎてな……父さんとかは留守か？」

「叔父さん達は仕事で泊まるようですよ。」

昨日言っていたではありませんか」

「そ、そうだったな……」

話す度にボロが出そうだったので俺は自室がある二階へ上がった。

「あ、兄さん。えっと、その……大丈夫ですか？」

上がろうとしたが呼び止められた。

「何がだ？」

「あ、いえ……たいした事ではないのですが、なんとというか兄さんの様子がいつもと違うような……いえ、きつと気のせいですね。

呼び止めたりしてすみません」

そう言うのと彼女はリビングの方に歩きだした。

(キリカといい妹といい、勘が鋭い奴らが身近に多いなあ)

俺は今は見ただけには一文字疾風なんだが中身は違う。

実は中身は赤の他人だとバレる事はないだろうと思っていたが、これだといつバレてもおかしくないな。

憑依の事話しても信じてくれないだろうし、どうしたらいいんだ……。

次から次へと起こる問題に頭を悩ませ、俺は二階にある自室へ向かった。

その夜、俺は自室のベッドで寝転がりながら、普通の携帯電話（一文字疾風の私物）でメールを打って時間を潰していた。

打ち終わり、不意に部屋を見回すと、綺麗に片付いた状態になっていた。

記憶によると一緒に住んでいる従姉妹が毎日のように部屋を綺麗に掃除してくれているらしい。今日の夕飯もその従姉妹特製のカレーライスだった。

普通に美味かった。なんか、昔、まだG I I Iの仲間だった『かなめ』が作ってくれたような温かく、どこか懐かしさを感じる家庭の味だった。

家事を万全にこなせる辺り、彼女はいいお嫁さんになるだろう。

初めてあったが美人になる要素を大量に持つてるし。

クールな性格をもっと社交的にすればモテモテになるだろうなあ。

……そう思ったら何故か悔しい気持ちになった。

きっと自分の義妹だった『かなめ』と彼女を重ねてい見ているからだろう。

可愛い妹を持つ『兄』ならきつと当たり前な感覚の筈……だ。

「しかし、『お兄さん』か……」

さつきヤシロという少女に呼ばれたのを思い出す。

あんな不思議体験をしたのは始めて……ではないな。

吸血鬼やら鬼やら人狼やら超能力者とか魔法使いなどのオカルトも何度か経験しているからなあ。

「殺されなければ……か」

武偵高時代、特に強襲科にいた頃によく言われたが、挨拶みたいなものだったしなあ。『死ね！』とか『殺す』は……。

死んだ後にまで、転生した後にまた言われる事になるなんて夢にも思わなかった。

今度こそ、普通の人生を歩めると思ったんだけどなあ。

「白昼夢だった、と思いたいんだが……」

だが、机の上には漆黒の携帯電話が置いてある。

それも二台も。

『Dフォン』と呼ばれた、いわく『運命を導く為の。運命から身を守る為の。俺だけの端末』……そんな大層な物、何故俺が手に入れたんだ？

わからん。

あのモードの俺ならともかく、普段の俺はごく普通の高校生だ。

前世ではヒステリアモードを抱えているせいか、女子を極力避けて生きてきたし、『ネ

クラ』や『昼行灯』などと呼ばれていたせいか友人もあまりいなかったのに。それなのに。

「こんな特別っぽいやつが手に入ってもなあ……」

机の上にあるその携帯を手取る。

女性にも男性にも受けそうな、シンプルなデザイン。

手に持った感じだとおかしい所はない。

「う〜ん……」

電源を入れて起動してみたが、『Dフォン』というロゴが表示される以外、普通の携帯と変わりはない。

ただ、普通の電話の機能はあっても普通に使うことは出来ない。

プロフィールを見ても、番号やアドレスも載っていない。

Dフォンから自身の携帯にかけても繋がらず、117、110すらかけられない。

「う〜ん……ん?」

どうしたもんかと悩んでいると基本画面に『サイト接続』とあった。

押してみると『8番目のセカイ』とタイトルが表示され。

その瞬間。

パンパカパーン！

「おおっ!?」

突然鳴り響いたファンファアの音に思わずDフォンを手放した。

ベッドの上に落ちたDフォンはブーブーと振動している。

一体なんなんだ、と思いながら手を伸ばすと……『おめでとうございます!』

「おわっ!?」

握ろうとした瞬間に再びでっかい声が聞こえた。

ありえないことに、もう一台の、机の上に置かれているDフォンも起動して振動を始めた。

触っていないのに。電源を入れてないのにな。

「貴方は見事、『百物語』と『不可能を可能にする男』の主人公に決定しました! いやあー、これは大変おめでたい事ですよ! 素晴らしい!」

二台のDフォンは声を揃えてそんな事を言ってきた。

ノリの軽い、まだ若い女の声だった。

どつかで聞いたことのある声のような気もしたが、誰なのかははっきりとはわからな
い。

解るとすればその明るさとノリが胡散臭いという事くらいだ。

「素晴らしいって……何が素晴らしいんだよ!?!?」

主人公に決定というのもよくわからん。

携帯を拾ってみると、画面には大きく『8番目のセカイへようこそ』と描かれており、
『祝！百物語と不可能を可能にする男の主人公！一文字疾風！』とクリスマスツリーや
ら正月やらの絵文字でデコレーションされていた。

いかにも『胡散臭い』装飾で俺の名前が祝われていた。

まったくもって嬉しくねえ。なんだこれは？

嫌がらせに感じる。

……というか、サイトに繋いでだけで名前バレしてるとか、どうなってんだ？

あまりのことに混乱していると……。

ピピピピピピピピピピピッ。

「電話か？」

Dフォンを枕の下に二台とも突っ込んで、さらに布団までかぶせた俺は、普通の携帯電話への着信を見る。そこには『仁藤キリカ』の文字が表示されていた。

俺は彼女からの電話に出て会話を始めた。



???

「ふむ。おかしいですね……。感づかれましたか……。電話に出ませんね」

私は手に持つDフォンで標的である『魔女喰いの魔女』の手下と思われる男に『電話』をかけましたが、全く繋がりません。

どうやら標的はこちらの動きに感づいたようです。

電話さえ繋がればザクザクつと刺して殺すことができますが残念ながら繋がりません。

仕方ありません。なら……。

「近づいてから『殺害』しましょうか……」

第二話。 恐怖の転入生

「それじゃねー！」

「おうよ」

キリカとの電話を終えて通話を切った。

時計を見ると電話を切った今の時刻は夜中の3時だった。

耳が熱くなるまで電話してしまっただが、会話が思ってたより弾んだ事に自分でも驚いた。

前世でも女子とこんなに電話する事なんて任務以外になかったなあ。

長電話で疲れた俺はそのままベッドに入って寝る準備を始めた。

風呂は明日入ればいいや。

「……………そういえば」

「……………」
ごそごそと枕の下を探り、Dフォンを取り出す。

これが本当に「8番目のセカイ」に繋がるのだとしたら、キリカが話した蒼青学園の女生徒の話なども解明出来たりするのかな。

Dフォンを見るとライトの部分に着信を示すかのようにチカチカつと光っていた。

「なんだ？」

俺がDフォンを開いて見てみると……。

『着信100件』

と不在着信表示がされていた。

「ひゃ……百……？」

あまりの多さにビックリしつつ、慌てて着信履歴を開いた。

履歴は全て非通知設定でこちらから折り返すことはできなかった。

「……ヤシロちゃん、って事は……ないだろうな」

あの謎の少女からだったとしたら……100件もかけてくるなんて、かなりホラーだ。

前世の知り合いに1人、長文かつ要領の得ないメールとか大量に送ってくる武装巫女はいたが……。

（白雪ならともかく、あの子は見た目の割に聡いイメージがあるから、連絡は別の手段を使つてきそうだな。

だとしたら、別の誰かとなるわけだが……いかんせん、今日突然こつちの世界にきたばかりで、しかもこの端末は貰ったばかりの物だからさっぱりわからん）

ならこういう時の……。

遠山憲章4条。

『触らぬ神に祟りなし』だ……。

「誰だかわからないけど……悪いな」

俺は手に持っていたDフォンを机の上に置きベッドに戻り横になり目を瞑って眠りについた。

2010年5月11日。午前8時15分。

翌朝。

俺は学校に向かう途中にある急斜面で長い坂へ夜坂^{やさか}を上っていた。

この坂の名前をとって学園名に『夜坂学園』と付けられたとされている。

坂の周囲は自然に囲まれた静かな坂だが、ほぼ全ての生徒がこの坂を上らないと学園にはたどり着くことができない……と記憶では知っている。

実際に上るのは今日が初めてだけだな。

坂から階下を見下ろすと街並みが一望できるほど景色を楽しむのには最適だ。

だが毎日この坂を上ることを考えると元々低いテンションがさらに引くようになった。

まあ、強襲科^{アサルト}の訓練に比べたら準備運動にすらならないけどな。

(強襲科といえればアリアや不知火、蘭豹とかどうしてんだろうな……蘭豹やアリアを懐かしむなんて俺、どうしちやっつたんだ……)

ホームシックにでもかかったのか、アリアやその周囲にいた奴らの事を考えて落ち込んで気分をさらに悪くした俺が坂を上っていると……。

俺の眼前で動く女子の太ももが目についた。

あの綺麗な後ろ脚は……。

「キ、キリカ……」

「あつ、モンジ君、おはようー!」

昨日の夜、俺が珍しく苦に感じずに電話越しとはいえ会話ができたクラスメイトの二藤キリカが俺の呟きが聞こえたのか、くるりと振り返り朝から元気な笑顔を向けて挨拶してきた。

「ああ、おはよう、キリカ。朝から元気だな」

昨日の電話でも高かったがキリカのテンションは朝だといふのにかなり高い。

「元気が一番だからねっ！モンジ君は眠そうだねっ！」

「ああ。今日の授業は睡眠時間に充てる……」

「あははは！あんまりサボツたらテストの時ピンチだよ？」

「……そういやテストとかあつたな」

武偵高にもあつたが、武偵高の場合は一般科目より専門科の試験の方が重要視されてたからほとんど聞く奴なんていなかった。俺は単位を取って一般高校に転入する為にそこそこ聞いてはいたが武偵高の授業レベルが元々偏差値50の学校だった事もあり、進学校である夜坂学園の授業にはついていけないというのを昨日の授業中に痛いほど感じた。

（このままじゃ……留年かもな……最後の手段で遠山家に伝わる秘術があるけど日本国内での使用は禁止されてるしな……）

「どうしたの、モンジ君？」

キリカが心配そうな表情で俺を見つめてきた。

「何でもない……」

「そう？調子悪かったら言っただけっ！私でよければ癒してあげるからっ！」

「キリカたんに独り占めさせるものか！」

と、そんな会話をしていた俺達の間に割り込んできた男がいた。

同じクラスのアラン・シアーズだ。

金髪碧眼で長身なイケメンなのだが見た目はいいのに、性格がアホなせいで女子からは面白い人としか認識されていない。

つまり、見た目だけがいい三枚目、それがアランだ。

「おりよ、アラン君おはよっ」

「グツモーニン、キリカさん。今日も美人だね？」

「あは、ありがとうー！アラン君も、今日も素敵だよっ」

「はっはっはっ、いやあ、それほどでもあるよ！」

（あんのかよっ!!?）

ナルシストっぽく髪のをかきあげながら得意げにしているアラン。

こいつは本当に見た目はいいので、そういう仕草が絵になるのは確かだが。いかんせんアホっぽいせいで、微笑ましきの方が際立ってしまう。

「さつきモロにキリカたんって言ってたろ」

「そこは、当人を前にすれば切り替えるものだよ」

したり顔で言うアランを見て、キリカは目をキラキラさせて俺を見上げる。「モンジ君も私がない時はキリカたん、って呼んでくれたりするの？」

そう期待が混ざった瞳で見つめてきたキリカ。

今まで、気づかなかつたが今日のキリカからは甘い匂いがしている。ヤバイ、危険な雰囲気だ。

そう思つて視線をキリカの顔から逸らしたが逸らした先が悪かつた。視線の先にはキリカの豊富な胸元があつた。

デ、デカイ。

つて馬鹿、見るな！

ドク、ドクンドクン。

ああ。手遅れだ。

また、なつてしまった。

「ふつ、そうだね……キリカ。君が望むなら今からキリカたんと呼ばせてもらおう。

だけどアランが呼ぶ呼び方でいいのかな？もつと可愛いらしい呼び方もあるかもしれないよ。可愛い娘には可愛いらしい呼び方がたくさんあるものだからね。

キリちゃん……は子供っぽいかな。ならキリンとかはどうだい？」

「あはははっ！それじゃあ私、首が長い草食動物になっちゃうねっ！」

「じゃあ……キリリンとかはどうだい？」

「うゝん、やっぱりモンジ君にはキリカつて名前と呼んでほしいな」

「わかつたよ。ではキリカ。もう学校に着くけど手に持っている鞆を貸してごらん。

持つてあげよう。可愛い女の子に荷物を持たせたままでは紳士失格だからね」

「えへっ！ありがとう」

キリカから鞆を受け取りその鞆を手に持つと、アランが驚愕したような顔をしているのが目についた。口をパクパクと金魚のように開いたり閉じたりして動かしている。

「モ、モモ……」

桃？

「モンジがキリカさんの鞆を持つている……だと？」

なぜだか物凄く驚いているが何故だ？

「女の子好きでも行動ができないへタレモンジが紳士になった……だと？」

モンジ、大丈夫か？なんか変な物を拾い食いつかないよな？」

アランが心配そうな、なんだか残念な人を見る目で見つめてきた。

残念なアランに残念な人認定されたら俺の人生は終わるのでここはきっぱり否定しとこう。

「そんな理由あるかー。女性に優しくするのは当たり前だろ！」

「うんうん。紳士モンジ君、とつても素敵だよっ！」

キリカが同意してくれた。

キリカが頷いたせいか、アランは俺とキリカの顔を交互に見てから視線を俺に向けて

言葉を放った。

「僕だつて紳士だ！紳士といえば僕。アラン・シアーズは本日から紳士になる！」

まるで某海賊が俺は海○王になる！と宣言したみたいに坂の途中で周りにたくさんの生徒がいるにもかかわらず大声をあげて宣言した。

(本当、アホだな。武藤よりもアホだ)

周りには皆、アホのアホ発言で引いたが本人は気づいていない。

「あははっ……そうなんだ。頑張つてねー」

「うん、だから僕もキリカたんに優しくするよ」

「結局、キリカたんって呼ぶのかよ！」

「当然！キリカたんは可愛いからね！」

「あは、どんな時に呼んでくれるの？」

「それは勿論！皆でキリカたんを褒め讃える時さ！」

「ありがとうね！私も女の子達と、アラン君って顔はいいよねーってお話してるよっ」

「おおおお、マジでか？！」

超嬉しそうにアランが食いついた。

だが、俺は女子の容赦なさに気づいていた。

『顔は』という事は、……まあ、うん。女の子って強いよなー。

「ええと、そうだ！キリカたんが話していた、都市伝説についても僕は調べたぞ！」
「お、そうなんだ？」

キリカが俺を見たので「俺は知らない」と首を横に振って答えた。

「うむ！昨今流行っているのは、『月隠のメリーズドール』と呼ばれるものらしい」

メリーの、人形。昨日、俺とキリカが話していた『メリーさん電話』の事なのか、と納得した。

「捨てられた人形が、復讐の為に電話をかけまくり、時間も空間も超えて必ず相手の所に辿り着き逃がさない！そして最後は背後に立ち、宣言と共に振り向いた対象を確実に抹殺する！まことにファンタステイックでエレガントな物語というわけさ！」

アランが両手を広げて「凄いだろ！」といった仕草をしたが、今の話のどこにエレガントがあったのか疑問だ。

キリカの方を見ると、意外にもちよつと真剣な顔をしていた。

「キリカ？」

「あ、うん。そっか、今だとそんな風に広がっているんだね、隣街では」

ほつぺに人差し指を当てて、首を傾げて考え込んでいる。

「アラン君、そのお話ってどんな風に聞いたの？」

「フツ、やつと食いついてくれたねキリカたん。僕は君の為ならどんな話であろうと調

べまくってあげよう」

「えへ、ありがとう♪」

キリカの小悪魔スマイルにアランがメロメロになり、アランは誰から聞いた話でどんな噂がされているのかを語りだした。

「ふむふむ、つまり月隠ではその『メリーズドール』が有名になっている、と」

キリカは納得するように何度も頷いている。

アランはドヤ顔で俺を見た。

その顔には「やったか？ やったよな、僕!?？」というような表情が出ている。

アホな奴だがキリカにとってはいい情報だったようなので頷いてやった。

「うーん……しかし、月隠だと、かあ……」

「どうしたんだい、キリカ？」

「あ、うん。都市伝説ってくらいだから街単位で広がっている噂って違うんだけどね。

月隠市の『メリーさん電話』はすっごい怖いものになってるんだなあ、って思ってるな」

そう言われればそうだな。

時間や空間も超える、とか。確実に抹殺する！とか、ホラーが強めになってるな。

「怖い話って広まるとどんどん強い逸話がついちやうからね……」

キリカはその噂をあまり快く思っていないのか、どこか憂いを秘めたような瞳に、俺

はドキっとしてしまった。

血流が強まりヒステリアモードも強化された。

「まあ、そんな感じなんだな。あつ、そうだアラン。」

教室で男子に何かを言われても誤解だから本気にすんなよ！」

なんとなくこの会話を続けるのはよくないと思った俺は無理矢理締めて、話題逸らしスラッシュユニーを使い話題も逸らした。

アランは「うん、なんの事だ？」とまだ聞いていなかったのか、首を傾げて不思議そうな顔を浮かべたがキリカは俺を見上げると、どこか真剣な眼差しを向けて。

「もし何かに追いかけられたら、絶対に振り向いて、相手を見ちゃダメだよ？」

そんなアドバイスをした。

2010年5月11日。午前8時40分。2年A組教室。

三人で教室に入る頃には、ちょうどチャイムが鳴る時間だった。

割と坂道で時間を費やしてしまったらしい。

「ホームルームの前に、転入生を紹介します」

担任の安藤先生がいつもの生真面目な声で教室に入ってきて、いつもと違う言葉を告げた。転入生と聞いて、俺は視線をドアに注目した。

安藤先生に促されてやってきた小柄な少女は……まるで日本人形のように綺麗な黒髪と白い肌で、いかにも『清楚！』な雰囲気を持っていた。

だが、どこかその顔には西洋の雰囲気もあるような気がして、なんとも言えない不思議な魅力を醸し出している。

身につけている制服は私立蒼青学園そうせいがかくえんのものだ。

「蒼青学園から、両親の都合でこの学園に転入する事になりました、一之江瑞江いちのえみずえです」

ぺこりと丁寧にお辞儀する仕草はたおやかで、その顔は怜悧と言える瞳と無表情なクールな振る舞いを感じさせた。

「座席は、窓際の……彼、一文字君の後ろにお願いします」

「わかりました」

安藤先生の言葉に従い、俺の方に歩みよってきた転入生。

朝にヒステリアモードにかかったことにより、ヒスリにくくなっているとはいえ、極力女子との接触は避けたかったが担任の指示なら仕方ない、と諦めて彼女が俺の後ろに座るのに了承した。

「よろしくな、一之江さん」

挨拶くらいはしとくかと、礼儀で声をかけたが。

彼女はそんな俺をひと睨みしただけで、特に返事をする様子もない。

……人見知りするタイプなのか？

もしくは、レキミみたいな無口キャラを通しているのだろうか。

どちらにしろ、あまり深く関わりたいタイプではないな。

そう思つて前を向くと。

カタン、と後ろで席に着く音が聞こえた。

後ろに座る気配を感じながら何故か彼女の事が気になった。

彼女みたいなタイプは経験上直接関わるとロクな目にあわない。

だから彼女みたいなタイプと関わる時は誰か間に入れてワンクッション置こう。

となると、誰がいいか。

脳内に浮かんだのはアラン、先輩、隣のクラスの腐れ縁な友達、キリカ。

やっぱりこの中だったら……。

人見知りのタイプには、理子やキリカみたいなタイプの方が心を開きやすいだろう。

と考えていると。

ゾクッ

背中から恐ろしいほどの寒気を感じると共に、胸ポケットとズボンのポケットに入っていたDフォンが、痛いくらいに熱を帯び始めた。

「っ!?」

慌てて出そうな声を押えながら、背後から感じる冷たい『視線』に戸惑いと動揺を隠せない。Dフォンが熱くなっている事が、まるで危険を告げているようで怖かった。

Dフォンを取り出して確認してみるか!

そう思った俺がポケットに手を入れた正にその時。

俺にだけ聞こえる声で、一之江が囁きかけてきた。

それは……俺の魂を驚掴みするかのような、全身の冷や汗を全て吹き出させるような、恐ろしく冷たさと恐怖の色を含んだ声だった。

彼女はこう言った。

「どうして、電話に出なかったのですか？」って、な……。

第三話。『今日は電話に出て下さいね』

2010年5月11日。午前8時50分。

朝のホームルームが終わり一時限目までのちよつとした休み時間。

俺は彼女、一之江瑞江から離れた場所で多くの人に囲まれるその姿を眺めていた。

憑依する前の俺なら喜んで転入生に近づききつと今頃、『転入生質問攻め大会』の司会とかやってたんだろうな。

転入生に近づく奴らを見つめながら思う。

（何が楽しいんだ？女子なんかに進んで近づく奴の気持ちなんかよくわからん）

「珍しいね？美少女だよ？」

珍しい物を見るような顔で近づいてきた美少女がいた。

仁藤キリカだ。

普段なら俺（一文字疾風）と同じように司会をやっている筈なんだが何故か俺の方にやってきた。

「……ちよつとな」

キリカは心配顔で俺を見つめる。

「なんとなく、近寄り難い空気というか、なんと言うか……」

「それを突き崩すのがモンジ君だと思ったのに」

「……一体キリカは俺に何を求めてんだ？」

前の俺、一文字疾風は何をやってたんだ？

一之江瑞江の方を見てみると、普通にアランやクラスメイト達と会話していた。

その顔は常に無表情ではあるものの、質問や会話にはちゃんと丁寧な返事をしていった。

無口そうな見た目に反して、普通に社交的な感じだ。

（レキみたい人に人見知りなタイプなだけか？

いや、でもそれならさっきの殺気は一体……）

「もしかして、具合悪い？」

考え事をしているとキリカが心配そうに聞いてきた。

「あー、実はそうなのかもしれないな」

実際、胸の辺りがひりひりと痛む。先程の携帯発火事件のせいであつと火傷を負ったみたいだ。

確認した

が携帯にはどこも異常はなかった。

突然発火した理由や原因は分からないままだ。

あんな風に今後も突然熱を持つ時があるなら、ちゃんとしたケースを買うなりした方がいいのかもしれないな。面倒だが今日の放課後にでも家電量販店に行くか。

「一緒に保健室行ってあげようか？」

「……遠慮しておく」

キリカみたいな美少女と二人で保健室に行くとか、そんなヒステリア地雷はいらん。

「そこは喜ぶシーンだよ？」

うーん、やっぱりなんかいつもよりノリ悪いね……先輩と何かあった？」

「なんでそこに先輩が出てくんだけ？」

昨日の放課後にしてしまったヒステリアモードの事を思い出してしまった。

街中でのお姫様抱っこ。柔らかかった先輩の身体……。

ドキツとしつつ、キリカに対して強めに反応してしまう。

「キリカ、いいか。誰に何を聞いたのかは知らんが昨日のアレはただの誤解だ！」

なんか、浮気がバレた夫や彼氏みたいないい訳だな……キリカは奥さんとかじゃないが。

「あはっ。なんだか浮気がわかった夫を問いただす奥さんと浮気がバレた夫みたいな感じだね！」

でも、そっか、そっか。やっぱり昨日何かあったんだ」

言った後に気づいた。

これは嵌められた、と。

誘導してワザと挑発し相手の情報を得るやり方。昔、理子とかかなめ相手にやられた気がする。

「ナニモナカッタ、ゾ」

「棒読みだよ、モンジ君。」

でもよかつたよ。そうやって反応する元氣があるなら、私も安心かな」

キリカの氣遣いが身に染みた。こいつは 本當に氣遣いができる。キリカは理子と似ているがこういったところはリサ、白雪、ワトソン君ちゃんにも似てるかもな。

それにひきかえ、アランの馬鹿は一之江瑞江の方に向きつきりだ。あいつに何かあつても助けてやる事はないな。

……と、その時。一之江瑞江がアランや他のクラスメイト達から視線を逸らして。

「……」

冷やかな視線で俺を見た。

偶然……ではない。

チラ見する度に、俺と一之江の視線は何度も重なつたのだ。

つまり、一之江は俺をしょっちゅう見ている、という意味でもある。

「……なんかおイタしたの?」

こんなに俺を見つめてれば、キリカだって気づくだろう。

そつと小声で尋ねるキリカに、俺は渋い顔しか出来ない。

(何だ? 一之江、お前は何か知ってるのか?)

「いや、した覚えはないな……今は」

と言つてしまつてから気づいた。

失敗したな、と。

「今は、つて事は昔なんかしたの?」

キリカが目を見開き、驚いている。

不味い。これは大変不味い。

誤解を解かなくては俺は、先輩をお姫様抱っこして街中を走つた挙句、隣町に住む美少女転入生にもちよつかい出していた最低男という大変不名誉な名が付くかもしれない。

武偵高時代に『たらし』、『昼行灯』、『根暗』とか呼ばれてみたいにな……。

まあ、全部間違つてると言えない辺りが不運に定評のある俺らしいが。

「いや……してない」

嘘は言つてない。

今の一文字疾風である俺は何もしていない。

俺が憑く前の一文字疾風が何かしらのおイタをしてもおかしくはないがな。

少なくとも今の俺は何もしてない。

「ふうん、ま、いいや……」

キリ力は納得はしてないけどこれ以上踏み込まないよ、的な感じの眼差しを送ってきた。

助かる。

憑依の事は結局誰にも相談してない。

原因も分からないし、相談したところで相手を困らせるだけだしな。

（それより今は一之江の事だ）

一之江がさっき言った言葉。

『どうして、電話に出なかったのですか？』

……あれは、どういう意味だ？

俺がその言葉に心当たりがあるのは、一つだけ。

そう、昨晚にかかってきた百件もの着信履歴だ。

携帯の着信履歴がずっと埋まっているという、あんな経験は初めて……ではないな。

幼馴染みの武装巫女からのメールや着信も似たようなものだった。

……元氣かな、白雪。

アリア達と上手くやってるかな。女子に襲いかかったりしてないよな？

まあ、白雪の事は置いておこう。

問題なのは『非通知』で送られてきたのにも関わらず、電話に出なかった事を彼女が知っていた事だ。

あの電話の主が一之江だとしたら……？と考えるのは飛躍し過ぎだろうか？

謎の着信、謎の転校生、謎の言葉……。

「はふう」

昨日から何だか厄介な事に巻き込まれているな。

憑依してから、いや、あの携帯を手に入れてからおかしい事に巻き込まれている。

「難しい顔してるね」

「まあ、なあ……」

「モンジ君に昨日の続き、『8番目のセカイ』の事を聞こうと思っただけだ。今日はやめといた方がいいかもね」

「……なんか、悪いな。恩に着るぜ、キリカ」

「いいっていいって。何かわかったら教えてね」

キリカは笑顔のままパタパタと手を振ってくれた。

よくできた子だな。なんだか望月萌にも似てるかもな。

などと感心してしまった。

そして、そんな俺達のやり取りや様子をじっと観察している視線があった。

「……」

一之江瑞江の鋭い視線は、俺達の一挙一動を逃さないようにしているかのようだった。

2010年5月11日。午前9時20分。

「これらの公式を当てはめれば、この問題は簡単に解くことが出来……」

担任の安藤先生がよく通る、涼やかな声が午前の教室に響いていた。

授業中だが俺は全くといっていい程に集中できないでいた。

原因は俺の背後から感じる圧迫感のせいだ。

「……」

無言のプレッシャー。

かつてレキからも感じた事がある圧迫感が俺の背中越しに背後から感じる。

おそらく背後の少女。一之江瑞江は俺の背中を見つめている。

その視線に物理的な感触を当てはめるとしたら、正にチクチクと刺すような痛みだ。

「……なあ、一之江……さんや」

耐えかねた俺は、意を決して背後の少女に話しかけた。

「はい」

その声は朝聞いた怖い声よりも幾分か柔らかくなつたものの、それでもトゲトゲしい鋭さを感じた。

他のクラスメイトにはもつと穏やかに話しかけていたのを知っている分、転入生にいきなりそんな態度を取られるとやりにくい。

親密になりたいくもないが訳もなく睨まれるのも気分が悪い。

やっぱり聞いてみるか。

「朝の言葉はどういう意味だったんだ？」

「……」

極力私語がバレないように小声で語りかけるものの、それに対する返事は皆無だった。

非常に気まずい沈黙が俺と彼女の間で流れる。

気まずい。女子になんて声をかければいいんだ？

こう言った時の対処法をジャンヌに聞いとくんだったぜ。

スマン、ジャンヌ。もう自称策士なんて思わんからどうか助けてくれ！

ここにはいないジャンヌ神に祈る。

祈りが通じたのか、一之江は俺にだけ聞こえるようなボソツとした声で呟いた。

「今日は電話に出て下さいね」

……やはり、あの電話が鍵となっているらしい。

あの大量着信。あれは一之江本人か、もしくは彼女が関わっている何かなのだろうか。どうして、どうやって俺のDフォンにかけることが出来たのか。聞きたい事は大量にあるが、どうやらともかくにも『電話に出る』という前提が必要らしい。

……嫌な予感がするなあ。

だが、出ないと理由が分からない。

昨晩はキリカとの電話に夢中だったせいで、全く気付けなかった着信だが今日はちやんと出よう。

「解った、必ず出る。出ないと一之江さんが困るなら、絶対に出るよ」

武偵憲章にもあるしな。

『2条。依頼人との契約は絶対守れ。』ってな。

「私が？」

「あれ、違うのか？ いやほら。内容は分からないけど……一之江さんみたいな可愛い奴がそこまで言うなら、俺は力になってやる」

元武偵で、前世は『先祖代々正義の味方』をやっていた家で育ったしな。

俺は正義の味方にはなれない……けど困ってる奴の味方にならなれるかもしれないから。

「……」

一之江は俺の言葉に無言で答える。

流石にちよつとキザっぽかったかな、と思っていた時。

「貴方は、真性のバカなのですね」

凄い失礼な言葉が聞こえた。

「くっ……ま、まあ、電話は出るよ。はい」

「……」

背後から頷いたような気配が感じられる。

どうやら、本日も電話はかかってくるようだ。

それだけでも十分……だよな？

2010年5月11日。午後17時30分。

今日は部活を早めに切り上げて帰宅することにした。

アランの『一之江さんと仲良く会話出来た自慢』を聞きたくないってのもあったが、何よりその一之江との約束である『電話に出る』を実行しなくてないけないからな。

アランの馬鹿が一之江に話しかけれなかった俺に「モンジ。僕は友達として君にこれを送るよー！この芸術を見て元氣出すんだ！」とか言って渡してきたDVDのパッケージを見たせいでヒスってしまったのは予定外だけだな。

パッケージの表紙は先輩そっくりの女優さんが足を開いて……いや何を言ってるんだ俺は。

女性をそんな邪な視線でみるのはいけないことだ。

校門の近くでふと足を止めて考えた。

『今日は電話に出て下さいね』

あの言葉はどういう意味だったのか？

彼女は何者なんだろうか。

そして俺はこれから何を体験するのだろうか。

武偵高時代に、『魔女』、『吸血鬼』、『人狼』、『妖怪』、『神』、『鬼』なんかとは対決したり共闘したりしたことがあるが超常現象は正直あまり得意ではない。

厄介な出来事でない事を祈りながら校門を出て、夕暮れに染まる坂を下りつつ考え事

にふけていた。

そのせいか、俺は周囲の異常に気づく事が出来なかった。

「あれ？」

気づけば、周りには人が一人もいなくなっていた。

昇降口にはまばらに下校の生徒がいたはずなのに。

いや、待て。

校門を出るまでは何人かの生徒は確かにいた。

はつきりと覚えている。

だから今、この瞬間に生徒が誰もいないという状況はおかしい。

それに……。

人だけではない。車の音もなければ、鳥のさえずりさえもない。

誰もいない。何も無い、静寂に包まれた夕暮れの坂道。

昨日、謎の少女。ヤシロちゃんに会った時もこんな感じだったが、俺はそれ以上に不気味なものを感じていた。

ピピピピピッ。

「うわっ」

Dフォンが着信を告げると同時に、再び熱くなった。

ハンカチ越しに携帯を持つと、黒い携帯は再びぼんやりと赤く光っていた。
ピピピピピッ。

コール音が鳴る度にライトの部分が赤く点滅している。
携帯を開き、通話ボタンを押した。

「……………もしもし、と……………」文字です」

おっと、もう遠山じゃなかった。

うっかりしてたね。

『もしもし私よ』

耳に聞こえていたのは、少女の声。

ゾツとするような迫力を秘めた、電子音に似た印象のある声だった。

「……………どなたかな？」

尋ねた瞬間、なんとも耳障りなクスクス笑いが聞こえてきた。

それは心の底から楽しそうな、無邪気な少女の笑い声に似ていた。

『クスクス……………やっど電話に出てくれたのね』

「待たせてごめんよ。君はどちら様かな？」

相手は質問に答える事はなく、ただ楽しそうにクスクスと笑って……………。

『今から……………しに行くわ』

ブツツ、と電話が一方的に切られてしまった。

……今、なんて言った？

普段、普通に生きていればそうそう言われることのない言葉を言われたせいで、一瞬脳が拒否したのかもしれない。

いや、本当な聞こえていたのに、俺がそう思いたくなかったただけだろうか。

武偵高時代、特に強襲科アサルトの奴らやアリアにはよく言われていたが……憑依してまで言われるとは思わなかった。

電話の主はこう言った……ような気がする。

『殺しに行くわ』と。

第四話。甘い誘惑……

「殺す……殺しにくる、だと!?？」

そのあまりに直接的過ぎる殺害予告に、俺は呆然としてしまう。

(どうして、何で?)

という疑問符と、『来たか』と思う冷静な知識。

ヒステリアモードの思考力で考えると脳内に浮かぶのは

『お兄さんを助けてくれるロアだよ』

初めてあつた日にそう告げられたヤシロちゃんとの会話。

『殺されなければだけど』

そう忠告をしていたのも思い出す。

『確実に抹殺する』

アランがぬかしていた噂話も同時に頭に浮かんだ。

冷静に分析すると、俺を殺しに追いかけてくるのは

(俺を助けてくれるかもしれないモノだが、殺すかもしれない奴で、しかも、確実に抹殺するような存在、って事か?)

「ふ、ふざけんな……」

殺されるなんてそんな現実、認めるわけにはいかない。

一度、いやすでに二度、オランダと日本上空、戦略爆撃機『富嶽』の機上で死んだ事がある身としても再び殺される事を認めるなんてできやしない。

ピピピピピッ

「チッ」

Dフオンから再び、呼び出し音が鳴り響く。

通話ボタンを押したわけでもないのに、まるでハンズフリー機能のように電話からは声が聞こえてきた。

『もしもし私よ。今、貴方の学校にいるの』

（学校!?）

今出て来たばかりの場所を慌てて振り返ろうとして——俺は首を止めた。

振り返りそうになったその時、不意に今朝聞いたキリカの言葉を思い出したからだ。

『もし何かに追いかけられたら、絶対に振り向いて、相手を見ちゃダメだよ?』

オカルトマニアを自称するキリカのアドバイス。そういえばそのアドバイスを聞いたのもこの坂道だったな。

ギリギリのところまで振り向かず済んだのは、ヒスったおかげで冷静に対処できてい

ると、幸運が重なったおかげだ。

ピピピピピッ

律儀に呼び出し音が聞こえるが、さつきみたいに勝手に繋がってしまったのなら、敢えて無視することにした。

声しかわからないが電話の相手はおそらく女性だ。

それも俺の推測が正しければ相手は彼女だ。一之江

相手からお願いされたら今の俺だと断わりにくいのが、わざわざ自分から出ようとは思わない。

Dフォンを胸ポケットに仕舞い胸とズボンのポケットにきちんと入ってるか確認する。

この黒い携帯端末は不気味だが捨てたり壊したりしたいとは思わない。

それをしてしまったら『アウト』な……。何故だか、この携帯端末を失ってしまったが最後、俺は二度と生きて帰れないような、そんな気がする。

兎に角、今は彼女から逃げないとな。

Dフォンをポケットに仕舞った後、俺は背後を振り返らないように気をつけつつ、その場から全力疾走をした。

『もしもし私よ。どうして逃げるの?』

駆け出した俺の足音とは別に……

コツ……コツ……

と、靴がアスファルトを踏んで歩くような音がすぐ背後から聞こえてきた。

(なんだなんだ、これは?)

こんな事がありえるのか。一步の歩幅が長すぎる。

絶対にありえない歩き方だ。

走っているのに、歩いて追いつくってどんな歩き方だ!?!?)

内心でツツコミを入れながらどうしたものかと、考えながら走り続けた。

『逃げてても無駄よ』

「無駄、か……それはどうかな」

確かに状況は悪すぎる。

誰も、自分と彼女以外、人っ子一人いない空間。

会話できるのは追いかけて来る彼女のみ。

それも会話の内容は殺害予告。

どこまで逃げてても鳴り止まない電話。

どこまで逃げてても追いかけて来る足音。

普通の人なら精神的に耐えられない状況だろう。

けど俺は、ここで素直に諦めるなんて事はできない。

前世、前いた世界で俺は諦める事を禁止された。

俺のただ一人のパートナー、アリアによって。

「無理、疲れた、面倒くさい。この言葉は、人間の持つ無限の可能性を自ら押し留めるよ
くない言葉だ」

それに元武偵として守らないといけない教えもある。

武偵憲章第10条。

『武偵は決して諦めるな』

「君が言うように本当に無駄なのか。

この俺が試してあげるよ」

『そう、なら試してみればいいわ』

低い、地獄の底から響くような暗い声が聞こえた直後、電話がぷつつ、と切れた。

電話が切れた直後、俺は逃走経路を、どこに向かうか思案し始めた。

学校は、彼女が、電話の主がいる、と言った以上向かえない。

このまま住宅街か大通り、もしくは商店街辺りまで走れば、少なくとも車の一台は通
るはずだ。

そうしたら前に出て止めて強引に乗るなり、ヒッチハイクするなりして乗せてもらえばいい。

乗せてもらえれば脱出できるはずだ。

それか、その辺にある車を自分で動かすか。

普段の俺ならともかく、ヒステリアモードの今なら車の運転くらいどうにでもなる。

いくら彼女でも車より速く歩けるわけないだろう。

(そうと決まれば

)

俺は道端に停めてあつた乗用車、運がいい事にキーが差しつぱなしになつていた車に乗り込み、後ろを見ないように気をつけつつ、エンジンをかけて発進させた。

前世の友人、武藤の運転を思い出しながらアクセルを吹かして加速させていく。

ぐんぐん速度が上がっていき、誰もいない町中を俺が運転する車のみが走行している。

信号機は変わらずに機能しているが、対向車一台すれ違わないなんてどういうわけだ

？

車に乗ってからあの足音は聞こえて来ない。

「ふう。助かった……」

強がってはいいたが、ヒステリアモードとはいえ、未知の超常現象を相手にするにはか

なり疲れた。

安堵して息を吐いたその時

ピピピピピッ

再び電話が鳴り響いた。

『もしもし私よ。まさか、高校生なのに車を運転できるなんて……でも無駄よ。

バックミラーを見てみなさい』

視線をバックミラーに向けると、ミラーの中にいつの間にも車内に入ったのか、ポロポロのドレスを着た人形がちよこんと後部座席に座っているのが目に入ってしまった。

その人形は金髪の少女の姿をしていた。

その身には黒ずんだ霧みたいな、靄がかかっていた。

「うわっ」

慌ててブレーキをかけ、車を急停止させた。

道の端に止まっていた別の車の背部にガツと軽く衝突してしまった。

車が止まるとすぐに運転席から出て再び町中を走った。

(なんなんだよ。

なんなんだ、あれは?)

混乱しながら脚を動かし続ける。十字路を右に曲がり、すぐにある曲がり角を左に入

ると、走るペースを速くした。

曲がり角にあるカーブミラーをチラッと見るとあの人形の姿が映っていた。

「クソ……」

先ほどの人形の姿は最近見た気がする。

思い出したのは、Dフォンで確認したあの人形。

あの一瞬だけでは確認できなかったが、そのドレスに赤い染みみたいなのが付着しまくっていたのはうっかり確認していた。

その赤い染みが一体なんなのか、は想像したくはないけどな。

——
ピピピピピッ

『もしもし私よ。今、曲がり角を曲がったところよ』

俺の方向転換にもきちんと付いて来ている、という宣言とも取れる言葉だ。

『私の姿を見たわね?』

その言葉に心臓が凍り付きそうになるくらい驚いた。

『遠慮しないで……振り向いてくれればいいのに……』

その言葉に、甘くかけられたその言葉に我を忘れて振り向きたくなかった。

俺は彼女に恐怖を抱いていた。

それなのに、その恐怖を与える張本人からの言葉が、とても甘い誘惑に聞こえた。

そう、このまま一気に振り向いて、その姿を確認し、心から安心したい、みたいな気持ち、になる。

『大丈夫だつて。単なる悪戯だよ。こんな現実あるわけないだろ？もしあつたとしても、聞こえて来るのは女の子じゃないか。大丈夫、見ても平気だつて。振り向いて、手を確認する。たつたそれだけでこの恐怖ともおさらばだ』

「えっ？あ、あつ？！」

なんで俺はこんな事を考えているんだ？どうして俺は今すぐにでも足を止めて、背後を振り向こうとしているんだ？

『大丈夫、気にするなっ！全然そんなの問題じゃないって。むしろ相手をちゃんと見て、それから対策を考えた方がいいに決まってるだろ。背中を向けていたら何をされても解らないじゃないか。な？』

だから、振り向いちゃえよ。

一文字疾風。

ほら、足を止めて。

ゆっくりと……』

『振り向いちゃえよ、一文字疾風』

「振り……向いちゃえ……よ……一文字……はや……え？」

うわごとのようにつぶやいていた自分の声に気がつく。

「つて、ウオツ!? 俺の口、勝手に!?」

『大丈夫だつて。心配いらねえつて。な、恐がる必要なんかない。ささつと振り向いて、パパつと見ちゃえよ。それが一番……』

……恐ろしい事に、俺の声……俺が自分で理解している声、胸ポケットのDフォンから響いていた。

それはまるで、自分の声を録音して聞いた声ではなく、頭に響いている時の自分の声と同じ……つまり。

『……気づいたのね。ふふ……残念♪』

「ツ!?」

そんな声がすぐ耳元、俺の背後から聞こえてきた。

俺は止まりそうだった足を奮い立たせて、一目散に逃げ出した。

彼女はどうかやってか知らないが俺の位置を正確に知ることができ、俺の声真似もできて行動も予測できる、そんな存在のようだ。

(逃げられない。)

もう逃げるのはやめた方がいい。

いつそ、振り向いて楽になってしまおうか)

そんな気分になってきた。

「クソ、すっかりしろ遠山金次！」

自身を叱責して走るペースをさらに上げる。

町中を駆け出しても携帯に、Dフォンには相変わらず着信が鳴り響き、彼女の声が響いた。

胸元から聞こえてくる声は無視して前へ、前へと突き進んだ。

『クスクス……クスクスクス』

胸元のDフォンからは、ただただ彼女の笑い声だけが響いていた。

気がつけば俺は自分の家。

一文字家の前に辿り着いていた。

すぐに玄関を開けて中に入ると、鍵とチェーンを閉めた。

何か身を守る物はないか、と家の中を探し台所から包丁と果物ナイフを持ち出してすぐさま自分の部屋がある二階に駆け上がる。

当然のように家の中には誰もいなかった。

何時もならとつくに帰ってきているはずの従姉妹リもいない。

半ば予想していただけに、心構えはできていたが……。

こうなると、この街から人が消えた、というより、俺の方が街から、世界から隔離された、と考えた方がいいのかもしれないな。

念のために部屋の鍵をかける。

さらにドアの前に洋服タンスを移動させておく。

こんなんで時間稼ぎになるとは思えないが、何もなによりマシだ。

家の中に戻ってくるなんて普通ならしない行為だろう。何故なら何処にも逃げ場がないのだから。

かといって当てもなく町中を彷徨っても状況は不利になるだけだ。

家の中も決して安全ではないが、それでも帰って来たのには理由がある。

都市伝説には撃退法があるものもある。

走りながら思い出したのは『口裂け女』や『トイレの花子さん』にも呪文を唱えたり、

犬が苦手だったり、などの撃退法が存在することだ。

『メリーさん電話』にも何かしらの対処方法がある……はずだ。

ネットを使えば簡単に調べられるだろう。

そう思い、パソコンがある自分の部屋に戻ってきたが……。

「……やっぱりか」

パソコンは点いた……と思いきや、画面が青くなつた。

どういうわけかタイミング悪く……いや、この手の怪異にはお約束のようにタイミン

グよく、パソコンが故障した。

仕方なくパソコンの電源を落とすと

ピピピピピッ

その呼び出し音が鳴り響いた。

『もしもし私よ。今、貴方の家の前にいるの』

第五話。月隠のメリーズドール

そんな、定番とも言える言葉が聞こえてきたが予想していた俺は然程驚きはしなかった。

『パソコンが壊れたのは、残念だったわね？』

クスクス……』

「君の仕業かい？」

『クスクス、クスクス……』

プツツと再び切られた電話。

切られる直前まで彼女のクスクス笑いが聞こえてきた。

まるでその笑い声で恐怖を仰ぐように……。

「これは……マズイな」

何もかもお見通しなのか。それとも俺の予想通り、パソコンが壊れたその現象すら彼女の仕業なのか。

もう、本能レベルで理解していた。

この電話の主は、本気で俺の命を狙っていることに。

それも、圧倒的なまでの恐怖と緊張を与えた上で、最終的に殺害するつもりなのだ、と。

「まあ、でもこのくらいの恐怖なら既に何度か体験してるし、その都度どうにかしてきたから大丈夫だ」

思えば、前世は大変だった。

チャリジャックから始まったアリアとの出会い。

武偵高生を人質に取られたバスジャック。

イギリス行きの飛行機内で起きたハイジャック事件。

幼馴染みの白雪の護衛任務。

地下倉庫での魔剣との対決。

峰・理子・リュパン四世と協力しての紅鳴館でのお宝強奪。

横浜ランドマークタワーの屋上での吸血鬼ブラドとの戦闘。

ピラミッド形カジノの警備。

船上での砂礫の魔女『パトラ』との戦い。

原子力潜水艦『伊・U』内での世界最高の名探偵との冪乗弾幕戦。

アリアとの戦い。

生きていた英雄、シャーロック・ホームズとの一騎打ち。

犯罪組織『伊・U』の崩壊。

単位不足によるクエストブーストで受けた粉雪の武偵高案内とサッカー試合の依頼。
レキの求婚、狙撃拘禁。

京都での修学旅行。

曹操三姉妹の襲撃。

新幹線ジャック。

武偵チーム登録。

師団、眷属による戦う前の話し合いの場『宣戦会議』と『極東戦役』の始まり。
転入生、LIIワトソンや吸血姫『ヒルダ』とのスカイツリーでの戦闘。

謎の人物、GIII & GIVの襲撃。

自称妹、GIVとの同居生活。

かなめ（GIV）と白雪&ジャンヌによるランバージャック。

GIIIとの戦闘機上での激闘。

武偵高からの退学通告。

東池袋高への転入。

平和な学生生活。

裏社会からの誘い。

ヤクザ相手に殴り込み。

幹部によるクーデター。

G I I I & 星の女神（アリア）とヤクザさん掃討。

武偵高へ復学。

修学旅行 I I I による香港旅行。

藍幫との激闘。

孫との戦い&レーザービーム攻略。

ジャンヌと共にフランスへ。

極東戦役ヨーロッパ戦線の助太刀。

妖刀の襲撃。

師団からの逃亡、リサとの出会い。

オランダでの静養。

ナチスガールとの接触。

武器庫からの脱出&戦車戦。

メイヤとの話し合い。

襲撃、魔剣アリスベル。

颱風のセーラ。

囚われの竜の巣。

死と復活。

オランダの魔獣『ジエヴオーダン』

鬼の一味、閻との激闘。

極東戦役の終了。

日本への帰国。

武偵戦友会。

コンビニでのアルバイト。

戦略爆撃機『富嶽』への浸入。

鬼の一味、閻との死闘。

そして……敗北。

よ。
自分の人生をあらためて振り返ってみると、既にとんでもない体験をしてるな……俺

前世が前世だっただけに自身が今置かれている状況でもわりと冷静に対処できる。

「……騒いだって仕方ねえしな」

普通の人なら恐怖で声や体が震えたりしてしまうかもしれないがそんなことにはならない。

今の状況でただ怖がついていても何も進まない。
なら……進めるだけ進んでから絶望してやろう。

そう心に決めた時だった。

カシャン……ガチャ。

家の玄関の方から、鍵の外れる音と、ドアを開ける音がした。

「ありえん」

ありえない。

ドアが開くなんてありえないんだ。

何故なら玄関には鍵とチエーンをかけたからな。

しかし……常識が通じない存在なのに何でわざわざ鍵を外すんだ？

ドアを通り抜けるなり、ぶち壊すなりすることも余裕でできそはずだ。

それなのに、わざわざ『鍵を外す音を聞かせる』というのは……つまり、俺を怖がらせるという悪意によるものだろうか。

彼女は俺を動揺させて、怖がらせて、徹底的に怖がらせて、それから命を奪う……そういうつもりなのか。

だが、何故？

その対象が元々の人形の持ち主だったら、理解できる。

捨てられた人形が持ち主を恨んでしまうのは、解らなくもない事情だ。

その復讐心が、相手に後悔を徹底的に与える方向性を選ぶからだ、とな。

だけど俺は前世も含め、人形を捨てたこともなければ、持っていたこともない。

なのに何故、これほど恨まれなければならないんだ？

それとも。

それとも、もう彼女にとっては『復讐』は二の次で、誰でもいいから、恐怖を与えて殺す。そういう存在になってしまっている、ということなんだろうか？

それはなんと言うか……

「助けてやりたい、よな」

もう殺す相手がいないのに、復讐を続けなければいけない人形。

そんな理由があるとしたら……。

ヒステリアモードがまだ続いているせいか、そんな事を思ってしまったている。

ピピピピピッ。

きし……きし……

電話の着信音と、板張りの階段を上ってくる音が聞こえる。

それはワザとゆっくりと歩くことで、やはり俺の恐怖心を昂らせているように思えた。

携帯の方からは声は聞こえない。

……もう、俺との距離は目と鼻の先だから、わざわざ話さないのだろうか。
きし……

その足音が俺の部屋の前で止まった。

心臓の鼓動が煩いくらいに鳴り響いているが、これが恐怖からきた鼓動なのか、ヒステリアモードの血流の高まりによりものなのかはわからない。

俺は後ろを振り向かないように、観念しながら瞳を閉じた。

しかし、その時間こえてきたのは……。

「兄さん？帰っているのですか？」

聞こえたのは、馴染み深い従姉妹の、理亜の声だった。

「り、理亜か？」

「はい。どうしたのですか？ドアを開けてください」

「ああ、ごめんよ……」

緊張感から一気に解放されたせいか、足腰の力が抜けていく。

妹のように可愛がっている従姉妹の、クールな物言いにこんなに安心できるなんて、思っていないかった。

ヒステリアモードの今なら彼女のどんな願いも、我儘でも聞いてやりたいと思ってし

まう。

だが……。

「どうしたのですか、兄さん？早くドアを開けてください」

「なあ、理亜。家の前に誰かいなかったか？」

ドアの前に行き、彼女に語りかけた。

「誰か……ですか？」

「ああ、ボロボロの服を着た金髪の女の子とか……」

「いませんでしたよ。そんな事より、兄さん。早く開けてください」

「……なあ、理亜。どうして俺の部屋に入りたいんだ？」

「どうして、って。そんなのどうしてでもいいじゃないですか。早く開けてください」

「……なあ、理亜。どうして」

「なんですか、もう。いいから開けて、それからお話しましょう」

「どうして、お前はドアに触れていないのに、ドアが閉まってるって知ってるんだ？」

そう、理亜は一度もドアに触れてない。

触れればガチャガチャと音がした筈だ。

「それに、玄関にはチェーンをかけておいたのに、どうやって中に……」

「……………」

「もしもし」

『もしもし私よ。今、貴方の部屋の前にいるの』

「知ってるよ」

『自分から電話に出るなんて。そんなに早く死にたいのね』

「そのつもりはないが……少し君と話しがたくてね」

『クスクス……ねえ、ドアを開けて？中にいるのでしょうか？』

「いない、って言ってもバレているだろうしな」

『開けてくれないのなら、私から入るわね』

ぶつと電話が切られた。

会話も何もあつたものではなかった。

彼女はどうかやらアリア並みにコミュニケーションらしい。

「後はもう、だな」

絶対に振り向かない事。

これを実証すればいい。

どうやれば振り向けないか。

俺はヒステリアモードの論理的思考力で考えた。

背後を振り向かないようにするには、マズ、相手が見えないようにする。

後ろを向けない状況を作り出す。

その為には。

「……よし、これなら振り向けない」

俺は部屋の壁に背中を当てるようにして立ち、視界を遮る為に、机の中に入っていたアイマスクを被った。

背中を壁にくつつける。

視界を遮る。

古典的な方法だが、これなら相手に背後を取られることも、相手を見ることができない。

後は朝が来るのを待つだけだ。

来るなら来てみる、なんて思っていた俺は……。

数分経ってもDフォンに着信がないままなのと、ヒステリアモードになっていたせいか脳神経に負担がかかっていた事もあり、いつの間にか意識を落として背中を壁につけたまま、座り込んで眠りについていた。

2010年5月11日23時30分。

「……んあ？」

目が覚めた時、外はすっかり暗くなっていた。

いや、アイマスクをしているせいかな暗く見えてだけかもしれないが。

「……寝ちまった、のか」

……俺は確か……。

都市伝説でよく聞く、『もしもし私よ……』という人形に追いかけていたはずだ
リコちゃん人形とか、メリーさん電話とか、そう言われるものに。

「もしかして……夢か？」

そう思い体を起こそうとした、その時

「もしもし私よ。今、貴方の後ろにいるの」

耳元で聞こえてきたその声に、俺の体は一瞬で凍りついた。

直後、『夢のはずないじゃないか！』と気づいたのと、もう一つ。

(ヒステリアモードが解除されてる?!?)

エロDVDではかかりが甘かったのか切り札とも呼ぶべきヒステリアモードがすでに収まっていた。

（落ち着け。落ち着け！）

そうだ、相手を見なければいいんだ）

幸いな事に俺はまだ背中を壁につけた状態だ。

これでは後ろは振り向けない。

「ねえ、早く振り向いて。

私を見て？」

「誰が見るか！」

見たら殺る気だろうが。

「見ないと殺しますよ。ハゲ」

「ハゲてねえよ!!?」

「見ないとアレですよ？」

ほらアレ、アレ？」

「なんだアレって？」

新ての詐欺か？

「見ないとバキューンしちゃうぞ！」

「可愛く言っても見ねえよ！」

なんなの、こいつは。

「振り向かないと逮捕しちゃうぞ☆」

「ネタ古!!?」

「いいから振り向いてくださいよ。」

「いいじゃないですか、チラッと私を見るだけですよ」

「いや、見たら死ぬだろう」

「大丈夫ですって。ちゃんと六文銭は用意しますって」

「そんな準備いらねえんだよおおー!!?」

耳元で彼女、一之江瑞江が甘い声で誘惑してきたが、こんなんで振り向くアホはいないだろう。

彼女は何故か焦っている。

「一之江。」

「お前が何者で、どういった存在かはわからない……けどな」

「俺は背後の一之江に語りかけた。」

「俺はお前に殺されない。」

「お前は相手を振り向かせないと殺せない。」

「今の俺は背後を振り向けない。」

「よっってお前に俺は殺せない」

俺がそう宣言した瞬間

「……そんな……どうし、て……嫌だ」

一之江から彼女が出したとは思えない弱々しい声が聞こえた。

「……嫌……こんなところで……消えたく……ない」

一之江からは泣いているのかかなり弱々しい声が聞こえてきている。

消える？

「消えるだつて!!?」

「消えたく……ない、あの子は……優都は……妹は、私が守る」

「妹?」

何故だろう。

先ほどまで、俺はこの少女の事を呪われて、人を死なせるだけの人形だと、そう思っ

ていた。

いたが、今は……。

「なあ、お前つて、あの……道端に捨てられていた人形か?」

校門前でヤシロちゃん示した先にあつた、あの捨てられた人形。

彼女はそれを『因果』と呼んでいたがその意味はまだわからない。

「……それは、きっかけに過ぎないわ。『捨てられた人形』を見つけて、それになんらか

の心の動きを見せた人物に私は呼び寄せられる。そういうコードになっているから……」

「……やっぱりお前が生まれたきつかけって、捨てられたからなのか？」

「何を尋ねられているのかわからないけれど、その逸話から生まれたロアなのは確かよ」
またでたよ。

ロアという謎の言葉。

ロアというのは彼女みたいな存在を示す言葉なのだろうか。

しかし、それを聞いて頭によぎったのは……悲しいな、という思いだった。

「私はこんなことで消えるわけにはいかないのよ。」

あの子を守る為なら誰だろうと殺す！

だから無理やりでも振り向かせて……」

彼女には彼女を待つ妹がいるみたいだ。

妹を悲しませたら駄目だよな。

「仕方ねえか……悪い、振り向くぞ」

「え？」

突然、起き上がって彼女と距離を取った俺に彼女は不意をつかれたのか、素っ頓狂な声を上げて驚く。

振り向かないようにアドバイスしてくれたキラカと目の前の彼女に謝罪して、俺は彼女を見ないように体を反転させて

「……ッ!?」

彼女にそのまま、抱きついた。

彼女の体と、ボロボロのドレスの肌触りが感じられる。

ツン、と鼻を刺激するのは血の匂いだろうか。

薄い色の金髪がチラツツと見えたがなるべく見ないように顔を上げた。

それと同時に——来た!

ドクン、ドクンとあの血流が体の芯に集まるのがわかる。

抱きついた感触では彼女はキラカや理子、白雪とは違い、どちらかと言えばアリアミ
たいな体型をしている。

そのせいか血流の流れも速い。

俺が振り向いても死んでないのは理由がある。

何てことはない、『振り向いた』が『相手を見る』まではしていないからだ。

「な、なんの、つもり?」

「昨日、電話に出なくてごめんね」

「……何を言われているのか、わからないのだけど」

「捨てられた人形の寂しさの化身、みたいなものが君なんじゃないのかって思ってた」
だから、捨てられた人形を見て気を引いた人に現れる化け物になった存在。

どれだけ寂しいか、どれだけ辛い気持ちでいたのかを誰かに知らせたい、思い知らせたい。その強い想いの化身が彼女なのではないかと。

それに彼女は言った、消えたくない。

あのままでは彼女は消えてしまう。

女性をそういつた辛い気持ちにさせたままにいるなんてことは、今の俺にはできない。
い。

「だから……まあこのままザックリ殺されてしまうのかもしれないけどさ、でも、だった
らせて……寂しくないようにしてやりたいって思ったんだ」

「さ、寂しいとか……」

「いいんだよ。寂しい時は寂しいと言ってもいいんだ。」

人間は……いや、人形も一人では生きていけないものなんだからさ。

だから何ていうかさ、俺を殺すのは寂しくなくなつてからにしてくれ。

じゃないと俺に未練が残るからな」

「……未練？」

「君がどんな存在だろうと、君が寂しさのあまり人を殺してしまったら悔しい、って思う未練だよ。」

どうせ殺されるのなら、相手が『あー、殺し、超スッキリした!』って気持ちでない……悔しいだろう?」

これは完全に俺の我儘だ。

本当なら女性をそんな目にあわせたくない。

ただどうしても殺さないといけなくなつた時、未練を残すような、そんな殺しをするのだけは辞めてほしかった。

「……………貴方は」

俺に抱かれたまま、俺の腕の中で、低く押し殺したような声が聞こえた。

「さあ、満足するまで刺せ!」

だけど満足しないのなら、もっと強く抱きしめるよ?」

声を張り上げてそう叫ぶと、俺の腕の中で彼女はもぞ、と動いて。

ただ一言、呟いた。

「貴方は真性のバカですね」

「え?」

彼女の言葉に俺はうっかり彼女を『見そう』になつてしまい

——直後。

ゴツンッ！

「ぐはあ……」

顔面に凄まじい勢いで頭突きを喰らって、悶絶した。

「遠山家の奥義を……」

痛みに悶絶しているうちに、いつの間にか彼女は俺の手の中からいなくなっていた。

ピロリロリーン。

とDフォンから音がして、赤かった発光が青白い光に変化していた。

部屋を見渡しても彼女の姿はどこにもなかった。

「助かった……のか？」

青白い光は消えて、元の静かなブラック携帯に戻った。

「……みたい、だな」

耳を澄ませば外を走る車の音、道を歩く人の足音、虫が鳴く小さな音、家の中から聞こえる家族の生活音が聞こえてきた。

どうやら俺は元の空間に戻ったらしい。

「兄さん」

一階から俺を呼ぶ従姉妹の声が聞こえる。この声は多分、本当の理亜の声だろう。

「どうやら俺は……。」

無事に、生き延びたみたいだ。

「兄ーさん。聞こえてますかー？」

理亜の声が再び聞こえてきた。

今日はいつもより優しくしてあげよう。

そんなことを思いながら俺は一階に降りていった。

第2章 消えた花子さん

第六話。俺の妹（従姉妹）と、クラスメイト（毒舌）がこんななに可愛いわけがない！

「もう、兄さん。降りて来るの遅いです！」

一階に降りてリビングに入ると、テーブルの上に出来立ての料理を並べていた従姉妹の理亜が俺の姿を見かけるやいなや、そう声をかけてきた。

「ごめんよ。せつかく作ってくれた料理が冷めてしまったね」

ヒステリアモードが続いていた俺は理亜に近寄った。

「い、いえ……温め直しましたので大丈夫だと思えますけど」

「それは悪いことをしちゃったね。せつかく理亜が作ってくれた料理を冷ましてしまったなんて兄失格だ。」

でも理亜の料理は美味しいから冷めても食べるのが楽しみだよ。

やっぱり理亜みたいな子が作るとそれだけで食材が活きて、食べる時も華やかになるから美味しいのかな？」

「あ、ありがとうございます……ええつと兄さんですよね？」

「もちろん、君の兄だよ。」

理亜には誰に見えるんだい？」

急に近寄ってきた俺に驚いたのかジリッ、ジリッと後ずさりながらそう返す理亜。

何だろう。側に近寄っただけで後ずされると兄として凹む。

「兄さん。何だか今日はいつもと雰囲気違くありませんか？」

「違う？」

「何がだい？」

「なんとというか、女性慣れしてるような……。」

兄さんはいつも積極的でしたけど今日の兄さんはいつもよりも、その……女の子の扱
いが上手いような……いえ、気のせいですね。

兄さんにそんな甲斐性があるわけないですし」

戸惑ったのかそんな事を呟く理亜。

この子はやはり鋭いな。

俺がいつもの俺じゃない事に気づきつつあるね。

後半部分はものすごく失礼だけだね。

「お鍋を温めて来ますから、兄さんは手を洗つてうがいをしてくださいね」

「わかったよ。」

それがすんだら俺も手伝うよ。

理亜ばかりに働かせるのは悪いからね」

「いえ。兄さんは席に着いててください。」

すぐに支度は終わりますから」

「じゃあ、そうさせてもらおうかな」

「はい、ふふっ」

「どうしたんだい？」

「あ、ごめんなさい。」

何だか 新婚さんみたいだなーって……」

「ん？」

「あ！な、な、なんでもありません！今のはその、違うんですからね！

そう言った意味じゃなく、でもそう言った意味もあるかもしれないんですがって何言ってるんですか私!?!」

ああ、もう……とにかく違いますからねっ！」

ものすごい早口でそう言った理亜はキツチンの方に引っ込んでしまった。

走り去る際にその顔を見たが、顔を真っ赤にさせていたがどこか体調がわるいのだろ

うか。

心配だな。

風邪薬の準備くらいはしておこう。

大切な妹の体調管理は兄の責任でもあるしね。

夕食はロールキャベツに、コンソメスープ、サラダに昨夜の残りのカレーだった。

普通に美味く、一流レストランとはいかないが家庭料理でも十分、お金が取れるレベルだと思う。

「どうですか?」

「美味しいよ。」

こんな美味しい料理が食べれるなんて幸せだよ。

きっと理亜は将来いい奥さんになるね」

「お、おお、奥さん!?」

中学生相手に奥さん呼ばわりは流石に早すぎたのか、理亜は熱が引いて元に戻っていた顔を再び赤くしてプルプルと震え始めた。

（しまったな。やっちゃった……）

ヒステリアモードとは言え、時間が経った事もあり、血流も収まってきたせいで理亜

にとつて触れてはいけない話題を話してしまつたみたいだ。

「ごめんな。理亜。」

奥さん呼ばわりは駄目だったな」

俺は言つてしまつた言葉を訂正しようと謝る為にそう言つたが

「駄目じゃありません。嬉しいです。」

兄さんにならもつと言つてほしいです」

「え？」

「あつ……。」

そ、その……違います。違いますからね！

そういう意味じゃないですからね！」

両手の掌を振つて違います、と発言を否定する妹様。

慌てて否定しでしたが妹よ。

そんなに全力で否定されると兄としては落ち込むぞ。

そんな心境を知つてか「はふう……」と溜息を吐いた理亜。

今の「はふう……」は何か心配事がある時に出る「はふう……」だと記憶で知る。

こんな時にはどうしたらいいのか？

それは

理亜に近寄り、俺は彼女に『許可』を求めろ。

「理亜。ちよつと触れてもいいか？」

「え？あ、はい。ガマンします」

理亜は極度の潔癖症だ。

それは掃除や家事の事だけではなく、人や物にも当てはまり、男女関係なく気軽に触れられるのを嫌がる。

その嫌がりようは尋常ではなく、他人が理亜に触れようとするとな彼女の身体が勝手に反応して避けてしまうくらいに異常に敏感だ。

そんな理亜だが、前もって伝えれば親しい人や心を開いている人なら我慢して触れさせる事ができる、と記憶にあった。

理亜に一声かけた俺はその頭の上に掌を乗せて力を軽くして撫でた。

「あ……」

「大丈夫か？」

「あ、はい。兄さんなら大丈夫です」

この日は理亜が寝るまでヒステリアモードが続く限り、彼女の頭を撫でた。

2010年5月12日。午前8時。一文字家。
翌日。

理亜に起こされて彼女の朝食を食べた俺が登校する為に玄関の扉を開けて外に出ると
と——ビックリするようなイベントが待っていた。

「おはようございます」

家を出た瞬間、目の前に蒼青学園の制服に身を包んだ一之江が立っていた。

「待ってたのか？」

美少女が登校前に自宅前で待っているこの状況。

俺が憑依する前の以前の俺、一文字疾風なら心から喜んだだろうな。

だが、この俺はそんな気分にはなれない。

彼女の昨日の言葉、昨夜の出来事、そして今朝のこれだ。

言葉の中に懸念が残っていたとしても仕方ないだろう。

「お話があるので付いて来て下さい」

話があるからちよつと面を貸せや！

ということだな。わかりました。

「ああ、いいぞ」

正直、これ以上厄介事に関わりたいくないんだが放つて置くとさらに厄介な事態になり

かねん。経験上。

「つて、あれ？」

つてきり学校に向かうとばかり思っていたが一之江が歩き始めた先は学校とは別の方向だ。

「学校には行きません」

「サボるのかよ」

転入してきて日が浅いのにもうサボるとか、案外不真面目なんだな。人の事言えねえけど。

「はい、サボタージユです」

あつさり言い切った一之江。

彼女はサクサクと歩いていく。

その歩調はかなり早い。小さな身体なのにな。

さつきチラツと顔を見たがおデコに冷え○タみたいな物を貼っていた。

何処かにぶつけたんだらうか？

小さな体付きなのに行動力はあるみたいだ。

「だれの身体つきが小さいですか？」

殺しますよ、ハゲ」

「だからハゲてねえよ！」

昨夜した会話みたいな感じで言い合いながら彼女の背中を追いかけていく。

昨日とは立場が逆転したみたいでちよつと楽しい。

そんな一之江の後を追って住宅街を抜け、大通りに出ると俺達の前に黒塗りの車が止まった。

やたら大きな車で後部シートにはスモークが貼られていて中がみえない。

まるで菊代のセンチユリーに乗った時のような状況だ。

「まさかと思うが……」

「乗ってください」

「だよな……お邪魔します」

初老の紳士が後部座席のドアを開けてくれたので仕方なく中に入り座席に座った。

中はやはり広くて、シートはふかふか、コーヒーメーカーやDVDが見れるスクリーンまで付いていた。

車が発車すると一之江がコーヒーを入れてくれた。

「はい、どうぞ。砂糖とミルクはこちらです」

「あ、悪いな」

コーヒーカップを受け取り一口飲む。

「美味しい」

普段インスタントしか飲んでないが間違いなく高級な豆を挽いた物だとすぐにわかる。

昔、アリアが俺に出すように命じた魔法の呪文のコーヒーはきつとこんな感じなんだろう。

「えーと……話して何だ？」

「コーヒーを一口飲んでから切り出してみたが

「まだ言えません」

訪ねた言葉に一瞬で返事が返ってきて、思わず口をつぐんでしまう。

まだ、っていうのはどういう事なんだろうか。

会話らしい会話は続かず終わり、気まづくなつた俺はメールを送る為に携帯を取り出した。

「メールですか？」

「ああ。学校休むなら連絡しないと……だろう？」

「どなたにですか？」

「いや、ほら。クラスメイトの仁藤キリカ。ちよつと猫っぽい感じの奴」

「ああ……はい」

「あいつに休むって伝えようと思つて」

「それには及びませんし、メールもまだ待つてください」

「へ？」

「三枝さんに我々が欠席する旨は伝えてありますし、誰かへのメールによる因果の接続は今暫くお待ち下さい」

「なんだって？」

何故か委員長である三枝さんの名前と、その直後に出た『因果』の言葉に俺は驚いてしまう。

そのまんまマジマジと一之江を観察するが、彼女は意に介した様子もなく、静かにコーヒーを飲んでいる。

……説明はもう少し待て、という事だろうか。

その「もう少し」がどのくらいかはわからないけどな。

そんな事を思っていた、その時——俺達を乗せた車は夜霞市と隣町の月隠市を隔てる大きな川。

『境川』の橋を渡りきった。

「それではお話しします」

「もう、いいのか？」

「はい。夜霞から出ましたからね。月隠に入れば大丈夫です」

「別の市に入ればいいのか？」

「ええ。基本的にロアの影響範囲は街単位ですから」

『ロア』

一之江から出た、その言葉に俺は固まった。

この少女が口にしたそれは、昨日の人形が言っていた言葉で

「なあ、一之江……さん」

「何ですか？」

「昨日、俺を追いかけて、襲ってきた人形は……」

「私です」

一之江は悪びれた様子もなく、きつぱりと言い切った。

「私です、つてお前な……」

「お前、とか親しげに呼ばれるのも心外ですが」

「いや、そういう事じゃねえだろ。俺、死ぬところだったんだぜ？」

「そうですね」

（そうですね、じゃねえよ！）

と、心の中で突っ込みつつ、会話を続けた。

つまり。

「お前がやろうとした事は殺人未遂だ！」

「わかつてんのか？」

「わかつてますよ。なんなら今日も殺しに伺つてもいいのですよ？」

「お前！」

「すぐに熱くなると、今後生き残れませんよ、一文字疾風」

「掴みかかりたくなつたが、思えば前世ではアリアにバイオレンスな虐待を日常茶飯事にされていたのを思い出し、手を引つ込めた。」

（耐えろ、俺。銃撃されて風穴開けられるのに比べたら一度くらい我慢できるじゃないか。なあ、許そうぜ）

「そう自分に言い聞かせ、一之江に告げる。」

「まあ、今回だけは目を瞑つてやるよ」

「おや。意外と冷静になるのが早いですね」

「まあ、な」

（一々つつかかつては身が持たないからな。俺の心身が）

「そのまま、視線を彼女に向けてジツとしていると彼女が「では、そろそろ本題に入りますしうか」と前置きをしてから質問してきた。」

「貴方は、『ロア喰い』ですか？」

第七話。ロア

一之江の車で、月隠市内を走っている中、俺は一之江から、この世界で起きている現象。

『ロア』と『ロア喰い』についてを掻い摘んで説明して貰っていた。

「と、言うわけでした。ではDフォンをください」

「待て！何が『と、言うわけ』だ!?!?」

まだ何も話してないだろ」

一之江との会話はそんな掴みから始まった。

「様式美かな、と思ひまして」

そんな様式美いらん。

「そんな様式美とかいいから時間かけて最初から話せ」

「面倒なんですよ……」

心底面倒くさそうに溜息を吐きながら話す一之江。

（コイツ、朝から人の家の前で待ち伏せしておいて学校までサボらせておいて、何だこの態度は？）

「心底面倒嫌そんな顔で言うなよ、お前！」

「誰がお前ですか。『あなた』と呼びますよ」

「止めろ！」

そんな風と呼ばれたら『また』変な噂が立つちまうだろうが。

ただでさえ、詩穂先輩の件であちこちの男子から妬まれてるといふのに……。

「七里詩穂の前で『あなた』と呼んでから、『あ、失礼しました。一文字君』って呼び直しますよ」

「絶対止めろ!? 確実に誤解されるだろ!?」

そんな風と呼ばれたら『詩穂先輩をお姫様抱っこして、口説いた挙句に舌の根も乾かない間に転入生を口説いた最低男』という大変不名誉な名が付くだろう。

……もう、手遅れかもしれないが。

「というか、何であの先輩の事や、俺が困る事も知ってるんだ？」

「転入する前に調べておきましたからね」

サラッと恐ろしい事をしれつと言う一之江。

そんな彼女の事を、ついマジマジ見てしまう。

あくまで無表情でマイペース。それがこの少女だ。まるで感情が読めない。

レキを相手に話してる感じに似ている。

「俺の事を何故……?」

「貴方の事というより、調べたのは七里詩穂と仁藤キリカ辺りです。他にもいますが、メインはこの2人です」

「どうしてその2人なのか気になるが……」

「それについて、今は語るつもりはありません」

きっぱり言い切る一之江。

「こう言い切るからには絶対に『その時』が来るまで口を割らないだろうな、この少女は。」

「じゃあ、俺の事を知ってるのは何でだ?」

俺は彼女が転入して来るまで、あの人形をDフォンのカメラで撮影するまで、関わり合いはなかった……筈だ。

「七里詩穂に付きまとうストーリーカー気味な男、と」

グサリ、俺の心臓に『ストーリーカー』という言葉が突き刺さる。

「わざわざ部活の時間を合わせてまで一緒に下校しようとしたりするか……何かこう……アレ……ですよね……」

俺の記憶に、『その時』の光景がフラッシュバックして次々と浮かんできた。

止めてやれ。

本物の一文字がここに居たら精神ダメージ半端ねえぞ。

「止めろ!!? もう、止めてくれー」

止めてやれ。

一文字のライフはもう0だ。

それ以上挟らないでやってくれ。

「なんかこう、もつと正々堂々出来ないもんですかね? 男らしく」

だが、一之江の毒舌は止まらなかった。

「何でお前がそこまで言うんだ!!?」

「あなた、キモくてよ」

「優しい奥様みたいな口調で毒吐くなよ!」

思わず連続ツツコミを入れてしまった。

これが素の一之江なのか。

フランクだが、清楚で可憐、病弱なイメージは一瞬で消え去り、食えなくて面白いヤツ、という認識になった。

「まあ、とつとと話して、とつとと下ろして放置しますか」

「放置しますか、じゃねえ!!?」

「すんなー、もつと大切に扱え!」

「私は色男がびーびー泣く姿も見てみたいのです」

「うわっ、ドSなのか一之江さんは」

「ドSな人は優しいんですよ。相手の喜ぶ事をしてあげる達人ですからね」

「それ、ドMな人にとつては、だろ？」

「皆さん喜んでくれますって」

「その自信はどつから出てくるんだ!?!?」

一之江とここまで話して解つた事だが、彼女はかなりの自信家だ。

完全に俺に嫌われても気にしないかのように、自分を通し続ける。

その姿勢に、俺は好意みたいなものを抱いた。

「モンジが余計な事を言いまくるせいで話が進みませんね」

「モンジって言うな!?!?しかも脱線させてるのお前だろ!」

「はいはい」

「流しやがった!?!?」

脱線させたのは一之江なのに、あたかも『貴方のせいで話が逸れた』みたいな感じになつてるが、さつきから会話が進まないのは一之江が原因だ。

この理不尽さ。

何処ぞの、桃まん武偵を彷彿とさせる。

こう言ったタイプには逆らっても無駄だ。
なのでさっさと話しを進めて、とつとと帰ろう。

そう思案していると

「まあ、そんなモンジの為に簡単に色々お話しするとしましようか」

コーヒを一口、口に含んでから、ようやく話す気になつたらしく、姿勢を正す一之江。

俺もコーヒを口に含み、その話しを聞く為に体を一之江に向けた。

「都市伝説については、もう色々とご存知だと思います」

「まあ、それなりに。昨夜も経験したばかりだしな」

リアル『メリーさん人形』に追いかけられる、なんて経験、普通はない。

そうでなくても昨日辺りからキリカやアランとその話題で盛り上がったから都市伝説の概要については大体解る。

「それら都市伝説が実体化したものを、我々は『ロア』と呼んでいます。フオークロアなどの語源に使われている、『ロア』の部分です。伝承とか知識とか、概ねそんな意味のある言葉です」

「『ロア』……昨日の夜も言つてたな」

ちよくちよく聞く言葉。あまり聞き覚えはなくても、覚えやすい単語だ。

「ええ。それぞれの『ロア』には、それぞれしか持たないルールがあります。

例えば私の『呪言人形』メリーズ・ドールのロアはご存知の通り、相手を追い詰め、最終的に振り向かせ、自分の姿を見せる事で殺害及び復讐します。

いざとなれば相手の首をへし折ってでも振り向かせて、殺害となるわけです」

「……だけどな、首を折って、と言うがそれだと相手を振り向かせる事は出来るが振り向かせる前に死なせる事が出来るんじゃないのか？」

首を折られれば人は死ぬ。

我ながら物騒な事を言っているが人を殺さないように相手を仕留めなければいけない武偵ならそうならない為に強襲するのは常識な事。

いや、武偵じゃなくても常識な事だ。

首を無理矢理折られれば、普通人は死ぬ。

だから、『殺害する為に振り向かせる』と『振り向かせる為に首を折る』という行為には矛盾が生じる。

「二度『ロア』の持つ都市伝説的なルール、『ロアの世界』に包んだ相手ならば、そのルール以外の行為はあまり影響を与えない可能性が高いのです」

「どういう事だ？」

「簡単に言えば、私が追いかける対象は、首を跳ねても死なない可能性があります」

「……マジか」

その『矛盾』すらも、まるで物語のしかけのように語る一之江。

実際に誰かの首を跳ねた事はなさそうだが、その可能性がある、というだけでも恐ろしい。

「都市伝説で発生する現象の多くは、論理的、科学的な検証が不可能です。

『物語』的な論理が全てを支配します。

それらの都市伝説が現実のものとなり『ロア』という存在になった瞬間。そのロアが影響する範囲の世界法則はそれぞれの『ロア』の法則となります。

それが『ロアの世界』です」

もの凄い話で大変馬鹿馬鹿しい話したが、笑うに笑えん。

昨日、その『ロアの世界』というものを身を以って体験したからな。

あの、誰もいない、音もない空間がその『ロアの世界』だったんだろう。

「故に、私のように『殺す』系のロアの場合、基本的に殺害します」

「本当に……殺すのか」

「それはもうさつくりと。それが私のロアですしね」

「そういうもの……なのか」

認めたくないが『そういうもの』としか現せない現象。それが『ロア』なのだろう。

今こうして自分が生きている事が奇跡に思える。

もしあの時、ヒステリアモードではなかったら？

一之江に振り向いたあの時、『姿』を確認しながら抱きついていたら？

果たして俺は生きていられただろうか？

そんな風に思ってしまった。

「それに、もし殺さなかったら、噂を流される可能性もありますから」

「ん？どんな感じのやつだ？」

『振り向いて、姿を見た。可愛い女の子だった。もえもえ。しかし別に死ななかった』
という噂が流れてしまい、その噂が『定説』になった瞬間。私は『ただの追いかけるだけ
の可愛いもえなロア』になってしまいますから」

そんな都市伝説がいてもいい気もしなくてもないが、本人からしたらたまたまもんじゃないな。

「噂に左右される存在なのか『ロア』は？」

「その通りです。従って私のような『ロア』達は、その存在を隠しながら、時折犠牲者を作る事で存在性をアピールし続けなければなりません」

「存在性のアピール……ああ、蒼青学園の女子が襲われたけど生き延びた、とかか？」

「あれは定期的に、様々な学校にいる『三枝さん』に広めて貰っているものです」

一之江の話によると、三枝さんは様々な学校にいる『ロア』に協力している人物達らしい。

彼女達はロアと人間を繋ぐサポーターみたいな感じのようだ。

その後も一之江の話は続いた。

『ロア』という存在は要約すると伝承や噂話から生まれたり、改変されたりしたものらしい。

『元々そういう人間以外の存在が『ロア』になった』のか、『噂される事で『ロア』として生まれた』のかはわからないみたいだが。

「大変だな、『ロア』達も」

「何を他人事のような顔をしているのですか『百物語』の主人公さん」

「……は？」

「貴方は『8番目のセカイ』によって『百物語』の主人公に選ばれた、101番目の主人公……『ハンドレッドワン』、そう呼ばれる存在なのですよ」

「……」

驚きのあまり、言葉を失ってしまった。

今、彼女はなんて言った？

「貴方もとつくに、『ロア』として片足を突っ込んでいる状態という事です。

いずれは私と同じ『ハーフロア』になるでしょうね」

「ハーフ、ロア……?」

「人間から、ロアになった者です」

彼女の口から出た言葉に、この時の俺はただ、ただ、絶句する事しかできなかった。

時は少し進み

2010年5月12日13時20分。

夜坂学園2年A組。

「わっ、モンジ君が瑞江ちゃんと遅刻して来た!」

昼休み。教室に入った瞬間にキリカが大きな声で騒いだ。

直後、『ざわっ……』とクラスメイ卜男女全員が弁当を食べる手を止めてどよめいた。

「ふっ、あんまり騒がないでほしいな。

ほら見てごらん、彼女が子猫のように怯えてしまったよ?」

あの後に起こったちよつとしたハプニングでまたなつてしまった俺はキリカを嗜めながら、視線を隣りに立つ一之江に向けた。

「こ、子猫とか、な、何を言っているんですか!?!?」

馬鹿なんですかー貴方は」

「わあー。瑞江ちゃん怖がりな子猫ちゃんだったんだっ!」

「いえ。ただの子猫なんかじゃないありません。

むしろ、猫は猫でも獲物を捕食する虎や獅子ですよ」

「猫なのは否定しないんだねっ!」

ところで半日休んで何したの?」

「愛しの子猫さんに拉致られたといっても過言ではないね」

「わおっ、瑞江ちゃん、大胆だね!」

「か、勘違いしないでください。私とモンジ君はそういう仲じゃ……以下略」

いい加減そうに、ツンデレ娘を演じて中途半端に答えた一之江に俺も驚いてしまう。

「わっ、ツンデレだ!」

おおー、と感心するクラスメイトの男子達。特にアランはツンデレでクールなタイプが大好きなはずだ。見れば、一人でガッツポーズをしていた。

……今のツンデレっぽさはいいい加減だが、そこが逆にツンデレっぽくて良かったのか
もしれない。

って、そうじゃねえ!?!?

一之江のツンデレっぽさで忘れてたが、きちんと遅れてでも登校して来たのには理由がある。

彼女が狙う『魔女』の正体を突き止めるためだ！

「意外にノリはいいんだね、瑞江ちゃん？」

「基本的に私はノリノリでお笑いも大好きです」

「あはっ！無表情なのに面白いんだっ！」

「と、いうわけでコンゴトモヨロシク、キリカさん」

「うんうん、コンゴトモヨロシク！」

一之江は無表情のまま、キリカは満面の笑みで嬉しそうに握手していた。

第八話。蜘蛛タンク

放課後になり、従来は閉鎖されている為人が入れない屋上に俺と一之江は来ていた。高い網のフェンスに囲まれた屋上は現在、手入れする人がいないとの理由から閉鎖されている場所だ。

もつとも、出入り口の鍵は壊れているから、誰でも入れるのだが……。

高いフェンスの他にはコンクリートの床がそのまま広がっているだけの、無機質な屋上。

目立つ物と言えば、貯水タンクが入り口の上に設置してあるだけの場所だ。

そんな人がいない場所に二人つきりやって来たのには訳がある。

『ロア』や『ハーフロア』についてもつと詳しく話しを聞く為だ。

「こんな所呼び出して、どうするつもりですか？」

屋上に着くや否や、目の前の少女。一之江瑞江は開口一番にそう切り出した。

「心配いらないよ。ちよつと君と二人でお話しをしたかっただけだからね」

ヒステリアモードの俺の口から普段の俺からは考えられないくらい甘い声でそんな言葉をお口にしていた。

「ちよつと言つてみただけです」

一之江は悪びれた様子もなくさきらりと告げて。

「さて……結局貴方の疑いが晴れたのは確かですが、貴方は危険なので私がしばらくの間監視する事にしました」

「俺が、危険？」

まだ俺に疑いを持っているのか？

「狼的な意味ではありませんよ。あ、そちらの方も心配といえは心配ですが」

「大丈夫だよ。女性が嫌がる事はしないからね」

「……やっぱり心配ですね。」

貴方は真性の馬鹿女たらしですから」

「いやいや、それは誤解だよ、一之江」

「呼び捨てになりましたね」

「瑞江、つて呼ぶには早いだろう？」

「別に呼ばれてもなんとも思いませんけどね、どうせ偽名ですから」

「そうなのか？」

「何処その駅名から取りました」

「安直だね」

「駅名を作った人に失礼かもしれませんが」

「そうかもしれない、と思っていると一之江は風に吹かれて乱れた制服や髪を整えながら「さて話を戻しますが」と前置きをしてから本題を切り出した。

「モンジはなんせ『主人公』ですからね。どんな能力を持っているのか解らないっていうのもあります。」

「ですが、いろんな口アに狙われ易いという方が強い理由ですね」

『主人公』という存在がどれほどの力を持った存在なのかは解らないが、どうやら他の口アから狙われ易いという事は先ほど一之江から説明された為理解できる。

「そうなのか？自分だと実感が無いのだけど」

「成長すれば色々出来るようになるでしょう。今は私を切り抜けただけです」

「一之江は『私を切り抜けただけ』と言っているがはつきり言つて一之江を切り抜けたのは偶然が重なっただけだ。」

一つでも偶然が起きなかつたら俺は此処にはいなかった。

一之江の電話に出る前にアランからDVDを渡されていなければ、そもそも俺が一字疾風に憑依していなければ、ヒステリアモードになる事はできなかったし、ヒスラなければ対処法なんかも浮かばなかつただろう。

「ああ……なんとか切り抜けたつてのが今でも信じられないな」

「私もあんな方法でなんとかされたつてというのが信じられませんので、やり直しを要求したいところです。今度は殺されてみませんか？是非」

冷やかな視線を向けながらまるで食事に誘うように気楽に言ってくる一之江。

「女性の頼みだからね、是非……と言いたいところだけど君の本心ではないようだからね。

「遠慮しとくよ」

やり直したいというのは彼女の本心だろうが人を殺したい、というのは本心ではない。

なんとなくだが彼女の考えが解る。

彼女は好き好んで人を殺したいわけではない。

殺さなければならぬ理由や使命がある。

それと、あんな解決方法抱きつき行為は認めたくない。

と言ったところかな。

……最後に關しては本当に悪いと思っっているが。

「まあ、見張る一番の理由は囮ですけどね。貴方は狙われ易いですから」

「……ストレートな理由だね」

囮と堂々と言われるとなんとも言い難い気持ちになる。

もつと他に言い方あるんじゃないか？

「では、そうですね……色々とお話しを……おや？」

「ん？」

一之江が目を丸くして視線を向けた先には一匹の蜘蛛がいた。

とても小さいサイズでよく見なければ赤い単なる点にしか見えない。

だが、一之江はその蜘蛛をじつと見つめている。

「一之江、この蜘蛛が……」

どうかしたのか、と続けたかった言葉を口から出せなかった。

一之江が瞬きをするかしないかという一瞬の間に、音もなく俺の目の前まで距離を詰める。俺の頭をジャンプして片手で鷲掴み、着地と同時にぐいつと強く引つ張ったからだ。

「……ツヅ……」

頭から激痛を感じながら、俺はされるがままに奇妙な前屈姿勢になった。

直後。

俺の頭があつた位置を、何か掠めて飛んでいった。

「今のは？」

「虫ですね」

一之江は眩くと、俺にそのまま軽やかな足払いをかけて転ばせ、自分の後ろに倒れ込ませた。

(ツ???)

ヒステリアモードなのに、彼女の素早い動きに反応できない!!?)

何から何まで俺の動きを完全に制御した動きにより俺は反応することもできずに、頭から床に叩きつけられた。

「ぐっ、何を……!!?!」

やっぱり言葉は最後まで出なかった。

頭と足がやたらと痛い、その痛みが吹き飛ぶくらいの物を俺は一之江の上履き越しに見てしまったからだ。

(何だ、あれは……?)

俺がさっきまで立っていた場所。

……そこには、赤い点が無数に存在しており、ざわざわと蠢いていた。さっきの小さな赤い蜘蛛が、大量に湧き出し、ぴよんぴよんと跳ねていたのだ。

俺の頭があつた位置を掠めた物の正体はこの蜘蛛の一匹だったようで、その跳躍距離は人の頭を軽く超えるものだった。

蜘蛛というよりノミみたいな物だな、あれは。

(……一之江が引つ張つてくれなかったら俺はこの蜘蛛達に襲われていたな)
 「助けてくれたんだね、ありがとう。」

ところでこれは何だ？」

「不明です。ですが、この世のモノではないでしょう。」

後、上を見たら殺します」

(上?)

一之江の言葉を見無視して俺はついつい視線を上に向けてしまった。

視線の先には

(ちよつ、な、なんで見え絶そう対なスカート領の中域がすぐ側にあるんだよ!?)

上を見たらスカートが下から覗けてしまうくらい彼女との距離は近かった。

「見たら殺しますからね」

(遠山一文字疾風金次。

絶体絶命……つて、ちよつと待て!

これは事故だ。

故意じゃない。

だから落ち着け。

止まれ、俺の血流)

だが、俺の思いとは裏腹に、血流の流れは加速し、それと同時にヒステリアモードが強化されていく。

「この世のモノじゃない、っていう事は、あの世のモノかもしくは……」

「ええ。もしくは『ロアの世界』のもんです。いずれは貴方も作れますよ」
彼女に言われて思い出したのは、あの誰もいなくなった街だった。

耳を澄ませば確かに、先ほどまで聞こえていた学校の喧騒がすっかり聞こえなくなっていた。

「それで、モンジ。この学園で、虫にまつわる何かの噂はありますか？」

「虫か……あつたかな？」

一之江の質問に、俺はヒステリアモードの論理的に強化された思考力を使って記憶を呼び起こしていく。

虫にまつわる噂話。

それも場所的に屋上に関するものだろう。

一文字疾風の記憶の中を探っていると痺れを切らしたのか、一之江が呟いた。

「仕方ありません」

一之江は一度俺の方を振り向くと、そのまま予備動作なしでジャンプした。

バシャン！と、彼女が足を揃えて蜘蛛の上に着地すると、蜘蛛達は水飛沫のように飛

び散って四方八方に跳ねた。

蜘蛛達は周囲に飛び散って……いや、よくよく見れば赤い水飛沫に変化していた。

さつきまでは小さいまでも8本の脚が確認出来たのに、今はごく普通の丸い雫になって床に飛び散っていた。

まるで蜘蛛が液状化、あるいは溶けたかのように……。

「どういう事だ？」

蜘蛛の水溜りがあった場所に立った一之江は、悠然とくるりと回転した。

その姿は鮮やかなダンスを踊っているようでもあり、思わず見とれるところだった。「私のロアの方が強いから、噂が本来の姿を取り戻しただけです。」

……で、『蜘蛛』、『水飛沫』辺りで何か思い出したりしませんかね？」

「ちよつと待つてほしい。」

……あつー！

『蜘蛛』や『虫』ではなかったが、『赤い水』というものなら記憶にあった。

「蛇口から赤い水が流れたかと思うと、そこから蜘蛛が出てきたって噂があったよ。」

『蜘蛛タンク』と呼ばれてたものだね。

去年に噂されたものだよ」

「なるほど。去年の噂で……なおかつ解決しているもの、と」

(解決しているもの?)

疑問に思い、一之江の視線の先に目を向けると

屋上の上にはまだ新しい貯水タンクが設置されていた。

記憶によれば例の騒ぎの後に完全に古くなった貯水タンクを新品の貯水タンクに取り替えたらしい。

取り替えてからすぐにその噂は消えたようだ。

だからもう終わった噂だ!

そう告げようとした俺に一之江の呟きが聞こえてきた。

「解決し、消えた噂を再び利用する……正に『ロア喰い』の『魔術』ですね」

「え?」

一之江は呟いた瞬間、再び高く跳躍した。

その跳躍力は、普通の人間が跳べる距離の軽く三倍から四倍はある。

『ロア』の力を使っていない今でも、彼女にはこれくらい朝飯前な能力が備わっている、という事なんだろうか。

貯水タンクの上に片膝をついて着地した一之江は、そのままタンクに手を当てた。

「モンジ、一応見ておきなさい。これが……私のように『人間からロア』になったモノ、『ハーフロア』が使える力です」

「ハーフロアが使える力……」

一之江は触れた手を大きく振り上げ

「えい」

チョップした。

ブシヤアアアアア!!？

一之江がチョップした箇所から真下に向けて、パツクリと縦に裂けたタンクから大量の水が流れだした。

(新品の貯水タンクを手刀で一刀両断しただって!!？)

あまりの衝撃的な光景に呆然としていると

タンクから流れた水が俺に降りかかってきた。

「ちよっ……っ(ぼ(ぼ(ぼ

俺と赤い水滴を流すかのように、水は屋上をあつという間に満たすと、そのまま階下に流れていった。

俺の体はフェンスにぶつかかった事で止まったが、赤い雫は綺麗に流れていった。

「(い)ほ(い)ほ……っ(ぼ(ぼ(ぼっ、げほっ、(い)ほっ!」

水を飲んでしまった俺は咳き込みながらも立ち上がり一之江の方に視線を向けた。

「長い間ロアとして過ごした人間は、このように他人の『ロアの世界』であろうと、一瞬

だけなら力を發揮する事が出来るようになります」

「……これが、『ハーフロア』が持つ力なんだね」

「ええ。一部ですけど。」

そして、『蜘蛛タンク』の噂は、よりちゃんとした水と入れ替える事によつて消えました。

今回も『より大量の水』によつて洗い流し、同じ末路を辿らせた形になります」

ここで彼女が言いたい事が解った。

「噂と似た結末なら、それは解決になる、つて事だね」

「その通りです。故に、『ロア』との戦いは情報戦になるのです」

情報戦というのも理解出来た。

一之江は僅かな情報だけで今回の事件を理解し、そして解決の為に動いたんだ。

「凄かったよ、流石は一之江……へっ、へっくしゅん！」

「うわっ、水に濡れたからつて解りやすくくしゃみする人なんているんですね」

「……俺は主人公のロアだからね」

「ああ、納得しました」

漫画ならお約束。つまり『主人公ならお約束』という意味での照れ隠し、悔し紛れの言葉に上手く納得されてしまった。

気づけば元の屋上に俺達は立っていた。

周りには音が戻っている。

どうやら、何者かの『ロアの世界』から無事に脱出できたようだ。

ホツとしたのも束の間、一之江の眩きにより俺は自身に迫る危険を認識させられた。

「しかし『魔女』には私達の事がバレているようですね」

……今の『蜘蛛タンク』のロアを仕掛けたとされる『魔女』。

どうやらそいつが俺達を狙っているのは、明らかかなようだ。

第九話。世界の歪み、人の認識?

時は少し戻り、一之江の車で月隠市内を走っている時。

俺は一之江の「人間からロアになった」発言に膠着していた。

「人間も、『ロア』になるのか……」

その事実には戸惑ってしまう。

(何の冗談だ!!?)

人間も都市伝説のお化けみたいになるだ!!?

そんな事……)

あまりに突飛過ぎる発言に内心戸惑ってしまい、無言になってしまった俺。

そんな俺を氣遣ってか、一之江は「どうぞ。お熱いので氣をつけてください」と言つてコーヒーを淹れ直してくれた。

「あ、悪いな……」

「いいえ。ちやつちやつと飲んでちやつちやつと落ち着いてください」

「……いただきます」

コーヒーを一口、口に含むと豆の薫りが漂い、ほどよい苦さで淹れられたコーヒーの味を楽しんだ。

「美味しいな」

「そうですか。」

「お代わりはまだありますからいくらでも飲んでくださいね」

「ああ」

「……」

「……」

（か、会話が続かねえ……）。

一之江に聞きたい事、尋ねたい事はもつとあるんだが話すタイミングが合わない。

『ロア』という存在の事、『ハーフロア』の事。そして『俺という存在』の事を色々話を聞いた上で彼女が信用できるのなら相談したいんだがどうやって聞けばいいんだ？（俺がそんな事を思っていると一之江がコーヒーカップを置いて話しかけてきた。）

「そうですね。貴方も狙われやすい立場である以上は、もつとロアの事を知っておいた方がいいですね」

「狙われやすい？」

「ええ。貴方は私と違って『主人公』のロアですからね」

「狙われやすい？」

「ええ。貴方は私と違って『主人公』のロアですからね」

「主人公だと何で狙われやすいんだ？」

「それを語るには『ハーフロア』について知らないとわかりにくいかと思います。

なので先に『ハーフロア』について語ってもいいですか。いいですよ、では語りま
す」

「俺に選択肢はないのか？」

「貴方にはおとなしく殺られるか、殺らせるしかありません」

「何だ、その選択肢？？どっちにしても俺の身は危険だろ？？」

「一之江は真顔になり、「キリッ」とした表情でこう口にした。

「貴重な時間を貴方に費やすんです。

「授業料は貴方の首でいいのでお安いですよ？」

「安くねえよ！！？」

「俺の命はそんなに安くねえ。安くない……よな？」

「ふう。ハゲが騒ぐせいで会話は続きませんね。

「脱線させないでください」

「だからハゲてねえし。会話を脱線させてるのもお前だろ！」

「だから誰がお前ですか。クラスメイトの前で『あなた』って呼びますよ？」

「絶対やめろ！」

誤解されるだろう!?？」

冗談だとは思うが一之江が言うのと冗談に聞こえない。

もし、そんな発言されてみる。先輩をお姫様抱っこしただけで男子から睨まれてるのに一之江とそんな噂が立てば俺は学校どころか、街中すら歩けなくなるぞ。

「さて。ハゲをからかうのはこれくらいにしてサクサク話しを進めますので質問は後回しにしてください」

「……」

(ハゲてねえよ！)

と突っ込み入れたいが後にしてやろう。

話が進まないからな)

一之江は俺に向かい合うように座席に座ったまま、無表情の口で語り始めた。

「まず、『ハーフロア』についてです。

そうですね、例えば……『口裂け女』という都市伝説をご存知ですか？」

「ああ、それなら知ってる。べっこう飴とか、ポマードとか嫌いなヤツだろ」

「ええ。大きなマスクをした女性が、子供に『私綺麗?』と尋ね、『綺麗だよ』と答えると『これでも綺麗かしら?』と、マスクを取る。そこには、耳まで裂けた口があった。

というようなお話です」

「ええっと、なんだっけ、ニュースにまでなったから、色々配慮されて都市伝説としても、語られなくなった、みたいなヤツだよな？」

「そうやって消えていく都市伝説もある、って事だよな。」

「ああ、という事は都市伝説が実体化した『ロア』も消えていくのか、と考えていたら、一之江は表情を曇らせて、静かに語り始める。

「ええ。ただ、我々ハーフロアの恐ろしい所はここからです。我々は『世界』の認識が歪んだ所から発生します」

「……認識の、歪み？」

「綺麗な女性、ここではAさん、と名付けましょうか」

「ああ」

「Aさんが、たまたま大きなマスクをして歩いていました。そして、それを見た心ない子供が、その女性を見て、『あ、口裂け女だ！』と言ったと仮定します」

「それは失礼な話だが、子供なら……まあ、言いかねないな」

「何を言うのかわからないのが子供達だからな。相手に対して失礼な事も平気で言っちゃったりするだろう。」

「はい。それが子供達の間だけで広がるならば、大した問題ではありません。ですが……その噂を聞いた学生や大人が『この街には本物の口裂け女がいる』と噂し、そして

広め始めたとした場合」

一之江の口調はほとんど変わらない。ずっと淡々と、感情を込めずに語る。

それが妙な恐怖心を煽っているんだが、一之江は解ってるのか？

「やがて、Aさんを見て『口裂け女』だと言う人が増えていきます。多くの人々から、Aさんはもう『口裂け女』の体現として認識されたわけです。そしてその結果……Aさんは『口裂け女のロア』になってしまいます」

「ちよ、ちよと待て！」

「待ちましょう」

一之江は淡々と語ったが今の話には致命的に怖い部分が含まれている。

Aさんは元々普通の綺麗な女性だ。それが、たまたま悪ガキの一人に『口裂け女』と呼ばれてしまう。きつとAさんは「全く失礼な子ね」と思っただけだろう。

だが、その子供が噂を広め、その噂が子供達だけではなく学生や大人達に広がり、やがて周囲の人々からAさんは『あ、噂の口裂け女の人だ』と思われるようになった。彼らに悪意があるうとなかろうと。

それが当たり前の事実として定着してしまうと、Aさんは『口裂け女のロア』になってしまい、一之江のように人間ではなく『ハーフロア』になってしまう。

なんというか恐ろしい話だ。

「人の噂が、人間を『ロア』に変える……のかわ？」

「この世界は大いに『歪んだ認識』によつて存在しています。人の心は常に不安定である以上、その歪みが正される事はありません。

……そういった歪みが世界をより不安定にし、『世界からの認識のズレ』を発生させるのです」

『世界からの認識のズレ』、それが都市伝説や噂として語られると発生するのが……ロアでその噂の対象が人間に向かった場合に発生するのが……。

「つまり、……この『世界』がAさんや一之江を、『そういう都市伝説的な存在である』つて認識してしまつた存在が……」

「はい。我々は人間でも『ロア』でもない、『ハーフロア』という存在になりました」

きっぱりと語る一之江の表情は読めない。Aさんという人物は架空だとしても一之江という『歪んだ世界から発生した存在』は実際にここにいるんだ。

いや、もしかしたらそのモデルとなつた『口裂け女』はいるのかもしれない。

……なんというか、おつかないけど哀想な話だよな。

『ロア』の持つ独自のルールがあるため、ある意味私達は人間として、おいそれと死ぬ事はありません。

ですが『噂』が消滅すると自分も消滅してしまうので、定期的になんらかの事件を起

こす必要があります。そうやって、恐怖対象であったり、風刺対象であるように、人間達に認識して貰わなければならぬのです」

「……事件を起こさないと、どうなるんだ？」

「人々の記憶や文献から消えた瞬間、消滅します」

消滅。

定期的に噂させるような事件を起こさないと消えてしまう存在。

(それが彼女達一之江のような『ロア』が事件を起こす理由だと!??)

なんの冗談だ?)

そう思ったがそれより気になるのが……。

「俺も、それになりかけているんだな？」

「ええ。特に『主人公』などの位置に立つ人物はより多くの制約に縛られるはずです。

例えば……昨日、私が学校にいる、と言った時にあっさり振り向いてしまった場合」

学校を出た時に、一之江からの電話で振り向きそうになったあの時を思い出す。

(キリカやアランのアドバイスを思い出したあの時か……今思えばかなり危なかったな)

そんな事を思いながら一之江の話に頷く。

「今回の百物語の主人公は、最初の二話目にして可憐なロアに敗れたのでした。めでたしめでたし。チャンチャン。おしまいになったのです」

「めでたくねえし、誰が可憐なロアだ!?!?」

「……騒がしいですね。」

「こんな可憐な美少女な私に敗れるなら本望でしょう。次は殺されてみませんか?是非」

「お茶に誘うみたいな感じで殺害に誘うな!

……で、おしまい、になるとどうなるんだ?」

「消えますよ、おそろく」

「マジかよ」

「貴方がヤシロさんからDフォンを受け取った瞬間から、貴方もまたその『ロア』としての運命を受け入れた形となるのです」

(……そんな説明は一切されてないんだがヤシロちゃんよ)

彼女ヤシロちゃんからしてみれば、俺が死のうが死ななくても結果は良かったのかもしれないな。

むしろ、彼女ヤシロちゃんも『ロア』なのだとすれば……『8番目のセカイ』に接続できる端末Dフォンを

渡すという事が彼女の存在を維持する術なのかもしれない。

「そして、私は『あの百物語の主人公を一瞬で倒すほどの強力なロア』として噂され。

しばらく何もしなくても有名なまま過ごせたのですが、……失敗しました」

「なるほど、成功していれば自分の伝説にインパクトが付くんだな」

「ええ。ちなみに私はそんなインパクトがなくても、『月隠のメリーズドールは、既に無数のロアを屠っている』という『噂』がありますので、おいそれと消えませんけどね」

一之江は得意げにそう言った。

「屠る、というのは他のロアを倒しているっていう事だよな？」

「ええ。ハーフロアは元々が人間なのでそこまで大きな悪事や犯罪はしませんが、純粹に発生した『ロア』は生まれた瞬間に事件を引き起こしますからね」

「ああ、さっきの例で言うと、Aさんがいなくても『口裂け女』は生まれるって事だよな？」

「はい。噂が広がり『いる』と信じられた瞬間に『ロア』として発生します。

そして都市伝説をなぞられた行動を行うのです。また、そうして現れる『ロア』は噂に尾ひれが付いた状態なので……大抵は残虐性や危険性が増していたりしますね」

「一之江はそういったのを退治してるのか」

「貴方もいずれしくりますよ。『主人公』は、事件を解決してナンボです」

「……マジかよ」

うわあ。嫌だな。

せつかく新たな人生を平穩に過ごせると思っていたのに、様々なお化けや伝説との戦いに巻き込まれるなんて、なんていうかついてないな。

いや、一文字に憑いてるんだけどな、俺は。

「ちなみに、解決し続けなければ多分貴方は消えてしまいます」

「忘れられたら、消滅してしまうからか。

人知れず戦っても、か？」

都市伝説VS人間（？）、こんな戦いを一般人の前でやれるのか？

「この場合……『世界』へのアピールが重要ですから問題ありません」

一般人がいない場所で戦っても、それは『世界』へのアピールになる。

関係ない人を巻き込む危険はないのが救いになるな。

しかし……人を『ハーフロア』にしてしまうのも『世界』。そして、『ロア』が生き延

びられるか、消えるかを判断するのも『世界』。

……融通が利いているんだか、利いてないんだか解らないが『世界』っていうのはど

うにも厄介な相手らしい。

「まあ、悪い事をするロアばかりではないので、退治の見極めは大事ですけどね」

「なるほど、な。」

その辺りは臨機応変に対応するんだな」

「これからは貴方にも私の手伝いをしてもらいます。

役に立たなかつたら次こそ無理矢理振り向かせますしね」

「役に立たなかつたら、つてのは？」

「本来、主人公というものは知恵や勇氣、機転などで窮地を脱するものでしょう？」

「ん、ああ」

「ところが昨日の貴方はどうやって切り抜けましたか？」

「……………昨日の俺……………」

『満足しないなら、もっと強く抱きしめるよ？』

「うわああああー」

機転でも何でもなかった。

ただ、己の欲望に正直に、お化け少女を抱きしめた男。

側から見たらそう思われるだろう。

「……………き、切り抜けられた事は確かだろ？」

「いきなり初対面のホラー少女を抱きしめながら口説いた男に超引いただけです」

「ダ、ダヨナー……………イヤイヤ、なんと言うかそういう機転も利く男という事で……………何とかならないよな？」

「……………ここでアピールしておかないと、俺は『脅されたから主人公を辞めたヘタレ』として

有名になってしまいかねない。それは流石に勘弁だ。

「なりませんね。」

ですが、まあ、いいでしょう。

しばらく夜霞やがすみで行動しなければなりませんし。

貴方のヒーロー的な能力も、もしかしたら役立つかもしれないしね」

「そ、そうか。」

「そういや、さつきから俺が住む街の『ロア』を警戒してるが夜霞には何かヤバいロアがいるのか？」

「いますね、さつき言いました『ロア喰い』こと『魔女喰いの魔女』です。」

その候補者となっているのが、先ほど話した七里詩穂と、仁藤キリカです」

（詩穂先輩とキリカが『魔女』？

一体何の冗談だ？）

と思ったが一之江の目はかなり真剣なままだった。

「候補者ですが『裕福な家庭』で『時代に合った美貌』を持ち『才色兼備』でありながら『社交性も高い女性』というのがメイン条件です。他にも交友関係やら性格などで細々と検証した結果……夜坂学園には2人いたという結果でした」

「……その条件には超ピッタリだな。」

2人とも金持ちだし」

「この市内に候補者は10名。たまたま同じ学園に2人いたので私は転校してきました」

「どちらかかっていうわけではないんだな？」

「ええ。ですが転校前日に、私の『ロア発動』を回避した男が現れました。

通常ではあり得ない不可能な事です。

ですので、その男を『魔女の手下』か、或いは『利用されている者』と判断しました。

故に仕留めるつもりで貴方を襲ったのですが……どうやら違ったようですね」

「……そういう事、か」

勘違いされて命を狙われた。

怒りも湧くが話を聞いた後だと理由があった、と理解できるから納得してしまう。

「ところでちよつと気になったのですが……」

「なんだよ？」

「貴方は二重人格者なのですか？」

一之江のその発言にどきりとしてしまう。

(コイツ、ヒステリアモードの事に気付いたのか?)

「抱きつく前と抱きついた後で様子が違ったようなので……」

「……あ、あー違うがまあ、うん。似たようなもんだと思っていてくれ」
「？」

首を傾げる一之江だが深くは追求してこなかった。

これはバレるのも時間の問題かもな。

第十話。因果と縁

しばらく首を傾げていた一之江だが、流石にヒステリアモードの事は解らないみたいで「後ほど無理矢理でも口を割らせて聞き出すとして」と前置きしてから発言した。

「ではそろそろ学校に向かいましょうか」

「今から行くのか？」

「ええ。サボタージュしてもよいのですが『魔女』の情報を得るいい機会ですので遅れてでも行った方がいいかなと思ひまして」

「今から行ったら目立たないか？」

「目立ちますね」

「だろ？」

「だから今日はもう帰ろうぜ」

「まあ、貴方はいつからそんな不良少年みたいになったんですか。不審者として通報しますよ」

「誰が不審者だ！」

「昨夜、私に抱きついた変態はどなたでしたっけ？」

「……昨日は本当悪かった」

ヒステリアモード時にやらかした行為を容赦なく抉ってくる辺り、本当一之江はドSだな。

「そろそろ夜霞に入りますのでこっから先はロア関連の話題は極力避けてください。『魔女』に色々知られると厄介ですので」

一之江の言葉通り、俺と一之江を乗せた車は先ほど通った『境川』の橋を渡って『夜霞』市内に入った。

「そう言えば貴方はクラスメイトや仁藤キリカから『モンジ』と呼ばれてますが何か由来とかあるのですか?」

大通りを車が走る中、突然、一之江がそんな質問をしてきた。

「あるちやあるが……大した由来じゃないぞ?」

「後学の為にも知りたいですね、是非」

話すまで逃がさねえぞ!

と言う感じのニュアンスで言ってきたので仕方なく話す事にした。

「本当、大した事じゃないんだが……一文字をカタカナにしてみろ」

「イチモンジ……ああ、成る程。」

安直ですね」

確かに安直だがお前が言うな、と思つたが口には出さないでおく。

「成る程……なら私もモンジと呼ばせていただきますね。」

よろしくお願いします。モンジ」

「普通に名前で呼べよ！」

「嫌ですよ。」

モンジはモンジで十分です。

いい響きじゃないですか。電子レンジみたいで手早く簡単に調理できそうで」

「殺る気か!?」

手早く簡単に調理できるとか、一之江が言うとは冗談に聞こえねえ。

「ええ。殺られたくなつたらいつでも電話をかけてあげますから是非出て振り向いてく

ださいね」

「誰がするか!?」

そんなやり取りをしていると車は夜坂を上つて『夜坂学園』の校門前に着いた。

車の中で座っていた俺だが流石に疲れたので一之江よりも先に降りた。

一之江が車から降りようとした時に——それは起きた。

新緑の季節とあつて、暖かい日差しが照らす中、突如強風が吹き上げた。座席から降りた一之江の制服のスカートがめくれ、たまたま一之江より先に降りていた俺はそのス

カートの中をバツチリ覗いてしまうといったハプニングが起きた。

ドクドクドク。

全身の血流の流れが加速し、また俺はなってしまった。

あのモード。ヒステリアモードに。

「顔に似合わず、大胆な下着を身につけているんだね。

一之江の好みはもつと清楚な白色だと思っていたけど黒もよく似合っているよ。

やっぱり可愛い子は何を身につけても映えるものだね」

パチツとウインクした俺だが、目の前の一之江はプルプルと全身を震わせていた。

「いす」

「ん？何だい？」

低い声で呟いた一之江の言葉は聞き取る事が出来なくて思わず聞き返してしまった。

「この、変態男 絶対殺害します！」

この後無茶苦茶……された。(勿論卑猥な事はしてないぜ)

そしてその日の放課後。屋上から降りた俺と一之江は一緒に下校していた。

『一之江と下校』というシチュエーションに緊張してしまう。

一之江は黙っていれば物静かな育ちの良い清楚なお嬢様なので周りを歩く男子生徒からの嫉妬の籠った視線をあちこちから感じる。

出来ることなら今すぐ変わってやりたいくらいだ。

ヒステリア地雷がどこにあるか解らない状況で、美少女との下校というシチュエーションは俺にとって地獄と言っていい時間だ。

一之江は愛想こそ悪いものの面白い奴だけだな。

それでも一緒に下校しているのは『ロア喰い』の調査をする為だ。

「それでは『ロア喰い』探しに早速協力して貰います。Dフォンはありますか？」

制服の胸ポケットとズボンのポケットからDフォンを取り出すと一之江が驚いた声をあげた。

「え、何故二台もあるのですか？」

「解らないな。ヤシロちゃんにこれは俺のDフォンだと言われて渡されたからね」

「……この変態には何かあるんでしょうか？」

「誰が変態だ！」

「まあ、いいでしょう。」

で、ですね。Dフォンは『8番目のセカイ』に接続する為の端末です」

「キリカが言ってたな、電話で」

「仁藤キリカですが……ふむ」

一之江は何やら考え込んでから「やはり利用されていた可能性が高いですね」などと呟いてから語り始めた。

「新しい『ロア』が生まれたり、新しくハーフロアになったりした人がいた場合、『ロアの世界』の案内人、入り口を開く人物として『社』^{やしろ}が現れる……そういう物語が彼女の『ロア』となっていて。故に、ヤシロさんも『ロア』なのですよ」

「『世界』を神様に見立てた、神社みたいな役割を持つてるんだな、あの子は」

「なので、ほとんどのロア、ハーフロア、そしてこの世界に関わる人間がこのDフォンを持つています。Dフォン同士なら通話やメールが無料、というのも特徴です」

「そうなのか、便利そうだな」

それだけ聞けば便利だが……

（都市伝説とメアド交換！

とかできんのかよ。

だから一之江みたいな『電話系』のロアに知られると電話の着信に100件とか履歴が残るといわけだよな。

電話系や情報系のロアに知られると厄介な事になりそうだな

「時代と共に進化するそうです。昔は出せば必ず飛ぶ矢文、とかだつたらしいですよ」
「そんな昔からあんのかよ」

しかし、矢文の時代からあるとか、昔から語られる噂や伝承に纏わる影にはロアがいたって事になるんだよな。

もしかしたらセーラの先祖『ロビン・フットのロア』とかもイギリスにいたりしてな……つて流石にそれはないか。

「そろそろ画面にタッチするタイプになってくれませんかね」

「そのうちなるかもな」

時代と共に進化するなら、将来的にはタッチするタイプとかになったりするかもしれないな。もしくは小さいパソコンタイプとか。

「で、このDフォンの機能の一つに、『コードの読み取り』機能があります」

「コード……ああ、捨てられた人形にカメラを向けたら、何かを読み取った時のアレか？」

「え、どこですか？」

「ヤシロちゃんにDフォンを渡された時。そこに人形があるから、つて」

（あの時、何故だかカメラを人形に向けないといけないという気になったんだよな。

場所はちょうど校門のこの辺りだったな)

一之江にその辺りを指示して示す。

一之江は何かを考え込むような顔をして、唇に手を当てていた。

「……どうかしたか？」

「ヤシロさんが誰かにわざわざ干渉して、しかも最初に私に接続させた……？」

そして、俺の顔をマジマジと見上げてきた。見返してやると、一之江がやつぱり凄美少女だというのがよく解った。

まつ毛は長いし、髪は綺麗だし肌は透き通っているし、頬は柔らかそうだし、鼻は小さいし、唇はピンク色で……って俺の馬鹿！

あまりジロジロと見るな。

ああ、遅かった……。

ドクドクドクと血流が再び身体の芯に集まっていく。

一之江のあまりの美しさに思わず見惚れてしまった俺の血流は高まり、ヒステリアモードは強化された。

「このムツツリスケベにはやつぱり何かあるのでしょうか」

「ムツツリとは酷いな。君のような可愛い女性を拝みたい、愛でたいと思うのは自然な事だよ？」

「可愛い、とかどの口が言うのですか？」

「事実を言ってるだけだよ」

「なるほど……ムツツリではなくオープンエロリストだったのですね」

「嫌な呼び方だな、それは」

「性に関してフルオープンである。そういう意味です。」

「すぐに口説くこととする貴方にはピッタリな呼び方ですね」

「……ムツツリの方がいいな、うん」

「最初からそう言ってください、全く」

「何で俺、デイスられてんだ。」

「この屈服した気分。一之江はやはり一之江^ト_スだった。」

「で、コードについて話しますよ」

「ああ、頼む」

「コードとは、『因果』の事です。因果とは簡単に言うと、出来事と出来事の結びつき、つ

まり『縁』みたいなものです」

「ヤシロちゃんの説明でもあったが縁を繋ぐと言った感じなんだろうか。」

「聞いてみると」

「『縁』があればそれを『繋ぐ』って意味か？」

「ええ。モンジと因果関係にある『ロア』的な事象。つまり、貴方の百物語の一つかもしれない『縁』を読み取る事で、そのDフォンは貴方とロアを引き寄せます」

ちよつと入り組んだ会話だったので、まだ理解が追いつかないが俺と『縁』がある『ロア』と『百物語』の主人公である『俺』を『繋ぐ』物。

それが渡されたDフォンという事になる、という認識でいいのか？

そんな俺を察したのか、一之江は一瞬考えてから言葉を選んでくれる。

「例えば『棒』と『犬』をコードとして同時に読み取る事が出来るとしたら。貴方の前で犬が歩いて棒に当たるわけです」

つまりその棒と犬が、俺の前で『当たる』。

そういう因果で繋がっていたという意味なのか。

「基本的に『縁』があっても結ばれないのがこの世の常でしょう？Dフォンは、その『縁』をコードを読み取る事で結んでくれるのですよ」

コードを読み取れば俺と関わりのある『ロア』と自動的に結びつけてくれるのだとしたら、かなり楽だな。

多くの物語の主人公が『巻き込まれ型』であるのに対して、コードになる物を探す事で、俺は能動的にその『事件』を引き寄せたり出来ると言う事なんだろう。

俺は『百物語』の主人公のロアだから物語を最低でも『百個』集めないといけない

しいので『巻き込まれ型』だと全部集めるのにえらい時間がかかりすぎるからな。

「しかし、コード探しかあ……」

適当に周囲を見ても、反応するものは特にない。『ロア』的で『俺に因果がある物』でなければならぬわけだが、そこら辺にありまくっても困る。

一之江みたいな『殺害系』のロアと因果がありまくるだとしたらそれはそれで対応に困る。

「ゲームみたいはその場所が解る、とかなら楽なだけだね」

「そこまでシステムチックなゲームになると、簡単過ぎるかもしれませんよ」

「君はゲームはシビアな方が好きなタイプかな」

「無敵コマンドとか大好きです」

「それはシビアじゃないな!?!?」

「中身のやり取りやストーリーを楽しむタイプなんですよ」

「名作って呼ばれるゲームはその辺りもいいからな」

「それに、ゲームはシビアで大変なのに、無敵で進むあの優越感つたらたまらないじゃないですか。こう、ボスを雑魚のように捌り殺すみたいな」

「君は本当にDSだね」

「ありがとうございます」

「褒め言葉かな、今の」

「いずれ貴方も好きになりますって。責められるの」

「……君が断言すると本当になりそうで嫌だな」

「ふふふ……」

「うわあ……」

「ま、ゲームトークはここまでにして、貴方のコードを探してみましようか」

「俺の手伝いでいいの？」

「ええ。コード探しに大変向いてる『主人公』ですからね。色々なロアに関わって行くうちに『ロア喰い』とも遭遇するでしょうし」

「確かにね……ちなみに一之江のロアだと、コードってどのくらい見つかるものなんだろう？」

「俺は『百物語の主人公』だから、残り九十九個と巡り遭う可能性が高いというのは解る。」

「だけど普通のハーフロアである一之江はどんなもんなだろうか。」

「超毎日街中を調べて、良くて一週間に1個。悪ければずっと見つかりませんね」

「……そんなにレアなのか」

「若者の人形離れが目立ちますからね」

「そんなレアな口アといきなり遭遇しちやたのか、俺は」

「ええ。運の悪い事に私は女たらしの男と出会ってしまったわけです。」

ですから今度からは慎重に襲わないといけませんね。いきなり抱きつかれますし」

「それは誤解だよ、瑞江」

「何が誤解ですか。あと名前で呼びましたね」

「君だから抱きつきたいと思ったんだ。」

君を俺の物語にしたいと思ったから抱きついたんだよ」

「……貴方は真性の馬鹿ですね」

そう言つて、頬を赤く染めて眩く一之江の姿はとても可愛かったが、一之江が抱きつき行為をとことん根に持った事はよく解った。

しかし、そんなレアな口アの一之江といきなり『縁』を結べたという事を考えると、確かに俺は『特別』なのかもしれないな。

『主人公補正』というのは便利だな。

「さて、与太話はここまですべてにして貴方と『縁』がありそうな『コード』を調べるとしましょう。」

……夜坂学園に『花子さん』の噂はないですか？」

「『花子さん』？ああ、学校の怪談の？えーと……あつたけなあー」

記憶にある『花子さん』の噂について記憶を探ると

あつた。

「中学時代はあったよ」

一文字疾風が通っていた中学の部室棟……旧校舎に纏わる噂を思い出した。

「どこですか、その中学は」

「俺の家とこの学校の中間だよ」

「ではそちらに向かいましょう」

俺と一之江は、『花子さん』の噂がある俺の出身中学校に向かって歩き始めた。

第十一話。女子トイレを撮影する男

「ところでどうして調べるのが『花子さん』なんだい？」

もつと近くを探せばコードがあるかもしれないのに」

一文字疾風

俺の出身中学に向かう途中で、ふと気になった俺は隣を無表情で歩く小柄な少女、一之江瑞江に聞いてみた。

『花子さん』の噂はどここの街にも一つは必ずあるものですからね。しかも定番なのでかなり強い口アだったりします」

「かなり強いのに大丈夫なのか？」

『振り向いた相手を確実に抹殺できる』そんな存在の一之江が強いというほどの口ア。

全国の小中学校、あるいは高校などで一度は誰もが聞く存在の『トイレの花子さん』。

そんな存在に俺達だけで挑んで大丈夫なのだろうか。

そんな心配をした俺の問いに一之江は

「まあ私もサポートしますし。死んだら死んだで貴方の物語が終わりなだけです」

自信満々にそう告げた。

(ちよつと待て!!?)

自信持つのはいいけど、俺を見捨てる気満々に語るなよ!!(?)

「君はそういうところになると冷たいね」

「そんな事はありません。クラスメイトの皆さんやキリカさんなどには大変優しいです」

「俺限定なのかな」

「特別扱いです、嬉しいでしょう?」

「ああ、嬉しくて涙が出そうだよ」

笑顔を作り喜びの表情を浮かべてみたものの、その顔は引きつっていただろう。

今の一之江との会話で解った事は、定番のロアだと強いという事だ。

おそらく『認知度』みたいなものが彼女らのパロメーターとなっていて、有名であれば有名であるほど、強かったり、怖かったりするのだろう。

そう考えると……『ロア喰い』の怖さも改めて認識出来る。

なんたつて、その正体は、その噂は『魔女』だ。

どんな小さな子供でも、老人でも、どの国でも、共通して『怖い女性の代名詞』として恐れられているからな。

そんな存在を倒すと一之江は言っているが出来るのだろうか?

いや、違うな。

出来る、出来ないじゃない。

『やる』んだ。

俺達には『やる』という選択しかないんだ。

人類はこれまで数多の不可能を可能に変えてきた。

俺だって不可能だと言われた事をやり遂げてきたんだ。

だからやろう。

そう思い、隣を歩く小柄な少女を見ると俺の視線に気づいた一之江が俺の方に振り向いてきた。

「どうかしましたか？ 惚れましたか？」

「ああ、惚れ惚れする外見だなあと思っただけだよ」

「性格はもつと素敵ですからね」

「……そうだね」

「今の間は何ですか？」

「殺しますよ、ハゲ」

2010年5月12日。午後17時。

俺達は、かつての俺、一文字疾風が卒業した市立十二宮じゅうにのみや中学校の校門前に着いた。校門前にはかつての担任。四条先生の姿があつた。

「こんにちわー」

「おや、久しぶりだね、一文字君」

「四条先生もお元気そうで何よりです！」

記憶によると、三年の時の担任であり、当時所属していた陸上部の顧問でもあつた一文字疾風にとって恩師とも呼べる先生の一人だ。

細身で甘いマスクをしていて女生徒からの人気がある教師で、今はスーツ姿のまま、外周を走る部員を見守っていたようだ。

「今日は部活を見に来てくれたのかな？」

「久しぶりに寄つたのでOBとして様子を見て来ようかな、って感じで」

「なるほど。そちらのお嬢さんは？」

四条先生は俺の隣に立つ一之江を見た。

俺が女生徒を連れて歩いて来たのに興味を惹かれたようだ。

「初めまして、一之江瑞江と申します。本日は私が一文字さんにお願ひし、是非彼が卒業した中学校を見てみたい、と申し出た形です」

お前誰だよ!!?」

と突つ込みたくなつたくらいに一之江はびっくりするくらい丁寧に先生にお願いしていた。

先生も流石に驚いたらしく、彼女を見てから俺の方を見つめる。

その視線から、「こんな素敵なお嬢様をどうやって?」

という心が伝わってきた。

言つてやりたい。

「いいいえ、思いつきり猫かぶつてますよー。

中身は毒舌なホラー少女ですから」と。

「なるほど。そういう事ならちゃんとお客さんとして招かせて貰います。僕は四条、彼

が三年生の時に担任と、部活の顧問をしていた者です」

「ご丁寧ありがとうございます、四条先生」

四条先生はどうやら『色恋方面』に勘違いしたらしく、俺に向かい一度頷いた。

そして近場にいる陸上部の生徒に自分が席を外す事を伝えたと、そのまま俺達を事務

所の方に案内してくれた。

事務所に向かう途中で四条先生がかつての俺、一文字疾風がした赤裸々なエピソード

を話して一之江が、意地悪な笑みを浮かべた。

「そういう話しは出来れば本人がいない時にお願ひしたいのですが」

俺の抗議に二人は笑いあっていた。

それにしても一之江の清楚なお嬢様ごっこは上手いな。

いや、元々あつちが素で毒舌面白娘は俺の為に作ったのか？

いや、それだったら清楚タイプなおとなしい方が嬉しいからあつちが素のはずだ。

「はい、これがお客様用の入校証と、スリッパだよ」

事務所に着いて入校の手続きが終わると四条先生が備品を貸してくれた。

「ありがとうございます」

「それじゃあ僕は校門か、グラウンドにいるから」

「簡単に、彼女に校内を案内してから練習を見に行きます」

「うん、了解。また後でね」

俺に目配せしてから、一之江にはお辞儀して先生は立ち去っていった。

四条先生、勘違いしてますが……一之江とは何もないんですよ？

そんな四条先生の、色男の背中を見ながら、一之江は呟いた。

「いい先生じゃないですか」

「ああ、ルールに厳しいけど、理解力のある先生だよ」

ああ、凄えー羨ましい、いい先生だよな。

一文字が羨ましいぜ。

武偵高にもこんな先生がいたら……こんな先生が武偵高に来たら1日で退職しちまうな。

奇人変人の魔窟だからな、あの学校は……。

「そういう教師に恵まれたからこそ、今の貴方がいるのですね」

「……そうだったらよかつたんだけどね」

「ふふっ」

「何かな!?」

「いえ。それでは早速案内して下さいね、一文字さん」

一文字さんと呼ばれて違和感を感じてしまう。

「その呼び方辞めてほしいな。何だか違和感を感じる」

「ですね。ではモンジ、とつと『花子さんのいるトイレ』に案内して下さい」

その命令するような口調を聞くと『ああ、一之江はこうじゃないと一之江じゃないよな』と思ってしまった。

「わかった、こつちだよ」

俺は一之江を連れて噂がある部室棟に向かって歩き始めた。

しかし、名門学校の制服を着たお嬢様を中学校案内するのにまず向かう場所が部室棟の女子トイレとか、何とも不思議な光景だな。

2010年5月12日。午後17時10分。

部室棟に向かう途中で俺は、この中学校、『十二宮中学校』に伝わる『花子さん』の噂について簡単に説明する事にした。

「部室棟ってというのは、取り壊されれない事が決まった旧校舎なんだよ」

「ああ、つまり昔からある校舎だから、そのトイレに『花子さん』がいるっていうケースですね。よくあるベタな話なのでバッチリです。戦前からある建物って噂はありますか？」

「正にそういう噂がある建物だね」

「戦時中に子供が神隠しに遭ったとかも？」

「正にそういう噂がある建物だね」

「ベタベタですね。バッチリです」

つまりそういう話だった。

古い建物に纏わる噂話や怪談なんてあまり変わらないのかもな。

この中学校ではそれなりにみんな怖がり、女子達はそのトイレには近づかなかつたくらいだ。

「ベタであればあるだけ、その能力も強いのですよ」

「有名な方がいいんだっただね、ロアにとつては」

「はい。なので、まあ気をつけて下さい」

一之江が俺を心配するくらい『花子さん』の能力は恐ろしい、という事なんだろう。

俺は記憶の中から『花子さん』に遭った時の対処法』を思い出していた。

確か花子さんの質問に、何か上手く返事をすれば大丈夫とか、そんな感じの対処法があつたはずだ。

この中学校の花子さんは返答に失敗すると便器に引き込まれるというタイプだったので慎重に返事しないと大変な目に遭う。

そんなこんなで、校舎から少し離れた場所にある旧校舎、部室棟に辿り着いた。

部室棟を見ると、如何にも何かいそうな雰囲気、木造建築からしている。

「雰囲気もバツチリですね」

辺りの木々が俺達の浸入を歓迎しているかのように騒めいた。

そんな騒めきを気にした様子もなく、一之江は大きく放たれた入り口から中に入り込んで行った。

慌てて追いかけると中はカビ臭さに包まれ、裸電球の頼りない明かりに照らされていた。

床を歩けば「ぎし……ぎし……」と軋んだ音が響き、壁や天井には謎の染みが人の顔

のように広がっていた。

「目的のトイレの位置は？」

「階段を上がつてすぐの所だよ。『花子さん』の噂があったから、ほとんどの女子が使つてなかつたからかなり寂れているかも」

「なるほど」

一之江はそんな雰囲気など意に介した様子もなく、いつもの調子でスタスタと歩いて階段を上つていった。

その様子からかなりこういう現場に慣れているという事が解る。

部室棟の二階に辿り着くと、女子のワイワイした声が聞こえてきた。

「ん？」

見れば、体操着姿の女子生徒が4人ほど、『花子さん』のトイレから出てきた。

「あれ？」

俺が変な声を出すのと、一之江が俺を睨むのはほぼ同時だった。

「あ、モンジ先輩、お久しぶりっす」

しかも、そこにいたのは俺が知っている陸上部の後輩達だった。

一人だけ知らない金髪ドリル少女が一緒にいるが新入生か転入生だろうか。

俺の記憶にはない子だ。

返事をしてくれた女の子以外の2人は、ペこりと会釈してくれた。

金髪ドリル少女は「誰よ、コイツ？」みたいな顔で見つめてきた。

視線を俺から一之江に向けると、何故だか驚いた顔をした。

(……一之江の知り合いか?)

「やあ、久しぶりだね。部室の様子を見に来たよ」

「今、一年にいいのが揃ってるから、バリバリ鍛えちやて下さいっす!」

「本当かい?ならちよつと部室に寄ってから行くよ」

「はーい、お待ちしてるっすよー!」

サイドポニーテールの髪型の子がニコニコと俺に手を振って、他の2人も嬉しそうに

お辞儀してくれた。

(後輩から慕われていたんだな、一文字は)

そんな事を思っていると金髪ドリルの少女が三人の少女達に話しかけた。

「あつ!ええと……」

「ん?ミレニアムさん、どうかしたっすか?」

「ううん。私先に帰るよっ」

「え、でも……」

「一人で大丈夫?」

「私は絶対大丈夫！」

でも……」

ミレニアムと呼ばれた少女はそこで何故か俺達を見て。

「貴方達は気をつけた方がいいかもねっ」

金髪ドリル少女はそう口にしてその場を去って行った。

何だったんだ？

「知り合い、ですか？」

一之江がそう聞いてきたが俺にはあんな金髪ドリルの知り合いはいない。

金髪の知り合いなら前世で2、3人いたけどな。

「いや、俺よりあの子は一之江を見ていたけど一之江の知り合いではないのかな？」

「知りません」

その無表情な顔からは何を考えているのかはわからないがおそらく本当に知らないのだろう。

知っていても一之江なら話さないかもしれないけどな。

立ち去っていった金髪ドリル少女の後ろ姿を見ていた俺はこの場に來た理由を思い出した。

さっそくだから聞いてみるか。

そう思った俺はこの場に残った少女達に聞いてみた。

「そういえばさつき、『花子さんのトイレ』から出て来なかったか？」

「ほい？『花子さん』？」

ポニーテールの子が他の2人を見て首を傾げている。

2人共よく解らないと、首を振っている。

……あれ？この子達は『花子さん』を知らないのか？

「そのこのトイレって先輩の代では『花子さん』いたつスか？」

「いや、まあ……そうだったんだよ。悪いな、気にしないでくれ。部活頑張つてね」

「了解つス！それではー！」

可愛らしく敬礼して、ポニーっ子達はパタパタと走り去つて行つた。

「大人気ですね、モンジ先輩」

「まあ、そうだね」

「で、女子が誰も使つてないっていうのは嘘ですか、モンジ先輩」

「ぐっ……俺達の時は使つてなかったはずなんだけどなあ」

年月が過ぎて、『花子さん』の噂が廃れたりしたのだろうか？

「まあ、元々男子はあんまり関係ない噂だったから、女子が噂に飽きて気にしなくなつたのかもしれないね」

「場所が女子トイレですしね。先輩が一緒に入って確かめてあげよう、でへへ、とか言わなかったのですか？」

「……一之江は俺を何だと思ってるのかな？」

「初対面の美少女に抱きつく変態男と思っています」

「その節は大変失礼しました……」

「大変失礼されました」

一之江はまだあの事を根に持っているみたいだ。

いつまで言われるんだ？

一生か？

ずっと言われ続けるとか嫌だぞー。

「女子トイレに入りたいとかは思わなかったんですね？」

「ああ、別に入りたいとかは……」

「入ったら変態ですしね。でも入りたかったんでしよう？」

「どうしても人を変態扱いたくないようだね」

「自分を殺しに来たおぼけをいきなり抱きしめた変態ですからね」

「いや、だからあれは」

「入りますよ、変態さん」

「……はい、すみません」

一之江が先にトイレに入っけいき誰もいないのを確認してから俺も中に入った。入る際に清掃中の看板を出入り口にかけて置いた。

これならちよつとやそつとじゃ誰も入っけ来ないだろう。

……なんか計画的に女子トイレで何かしようとしている不審者みたいだな。

「さて……Dフォンを取り出して下さい」

「ああ、2台出した方がいいのかな？」

「そうですね。何かしら反応があるはずですから一応2台出して下さい」

「了解」

「熱くなったり、赤く光ったりはしていませんか？」

一之江と初めて会った時や追いかけられた時は熱くなったり、赤く光ったりはしていません。

取り出して確認してみたが両方とも熱くなったり、赤く光ったりはしていません。

「特になんともないな」

「おや。少なくとも貴方に危険はないという事ですね」

「危険を感じすると赤く光ったりするの？」

「ええ。相手が持ち主に危害を与えるつもり満々だったり、その口アとして取り込もう

として、なんらかの力を発生させていると熱くなります」
なるほど。

Dフォンにはロアが危険かどうか察知する機能があるのか。

……つて待てよ！

「つて事はあの時、一之江は俺を……」

「本気で殺すつもりでしたからね」

「やっぱりそうなんだね」

危なかった、疑いが晴れてなければ今頃、俺は一之江に……。

疑いが晴れて本当に良かったー。

「あの時は貴方が『ロア喰い』の手先である可能性もあつたので、脅しも兼ねました」

「そうか。前の晩に電話に出なかつたから警戒されている、と思つたんだね？」

「そうです。ロアとの戦いこっちに慣れている『主人公』であつた場合、私は全力で殺そうとしなければいけません。物語が取り込まれる前に」

『主人公』という存在は、一之江にしたらそこまで言わせるほどの要注意人物という事になるのか。

「では、そろそろ『花子さん』探しを始めましょうか。」

Dフォンのカメラでトイレ内を撮影して下さい」

「ああ、わかったよ。

じゃあ撮るよ」

一之江の言う通りに、Dフォンのカメラでトイレ内を撮影し始めた。

「どうですか？Dフォンに反応はありますか？」

「いや、何の反応もないな……」

（しかし……『メリーさん電話』の逸話を持つ一之江が恐れる『魔女』と『主人公』の口アか。

『魔女』の事は詳しく解らないが、『主人公』についてはよく知らないといけないよな。

自分に関わる事だしな……）

「しかし……」

考え事をしながら女子トイレ内に俺がカメラを向けていると一之江が口を開いて

「中学生の女子トイレを携帯のカメラで撮影する人が隣にいますね、なんと
言うのは、なんと
か凄く微妙な気分になりますね」

そんな事を言ってきた。

「仕方ないだろ!?」

言われると物凄く申し訳ない気分になってくる。

「まあ、モンジ弄りはこのくらいにして、本当にコードはありませんか？」

「うん、反応ないね」

「問題のトイレはどこですか？」

「確か、一番奥の個室だったはずだよ」

「では撮って下さい」

一之江に言われるまま、個室トイレの中をDフォンのカメラで撮り始める。

「そして、女子トイレの個室を撮影する男」

「だから仕方ないだろー！」

一之江は俺弄りを辞めていなかった。

ああ、もう、どうにでもなれ……。

それからしばらく中を撮影したが特にDフォンに何の反応もなく、俺達は女子トイレを後にする事にした。

トイレから俺が先に出た所で廊下の角を曲がって来た四条先生に遭遇した。

（危ぶねえー!?）

あと一歩タイミングが悪ければ女子トイレに浸入してた不審者として職員室に連れ行かれてもおかしくなかったぜ……）

「おや、トイレを案内していたのかい？」

「ええ。一之江はちよつとオカルトに興味があつて」

「オカルト？」

へえ、確かに綺麗なお嬢さんだからちよつと似合う趣味だね」

「だからこのトイレに案内したんですよ」

「ふむ……このトイレに何かあつたかな？」

……え？

「いや、俺達の時代に『花子さん』の騒動があつたじゃないですか」

『花子さん』……？

そういう噂話が生徒の間であつた、という事かい？」

……待て。待つてくれ！

おかしい。何かがおかしいぞ。

先生と一文字がこの学校で過ごしていた頃。

女子達の本気が怖がつたせいで先生は対策を取つたり、注意を呼びかけたりしてくれ
た、と一文字の記憶にはある。

夏休みの合宿とかでもみんなでわざわざ見回したくらいだ。

勿論、先生も。

一文字の記憶が間違つてなければ……先生の記憶が改竄されている？

……そんな事出来る奴なんて。

「どうかしましたか？」

一之江が手を拭きながらトイレから出てきた。

「いや、ほら、一之江……」

何て言つたらいいんだ？

ヒステリアモードで導き出した答えを言うか。

いや、まだ情報が少な過ぎる。

「ああ、この学校にも『花子さん』の噂などがあると一文字君にお聞きしたので、連れてきて頂いたんです。私は趣味で民俗学を少々かじっていますので」

「ああ、そういう事でしたか。なら詳しい先生にお取り次ぎしましょうか」

「まあ、本当ですか！はい、是非お願いしますっ」

一之江はスーパーパーお嬢様モードで四条先生と会話して、見事図書室にまで行く事を取り付けた。

「それじゃあ、図書室に行こうか」

「宜しくお願い致します」

四条先生の案内に一之江は丁寧にお辞儀してから付いて行く。

……先生が忘れてる。

あるいは記憶を改竄されている?!?

その事実には、俺の胸の中に広がるモヤモヤとしたものに、眩暈と似た気分を味わった。一之江の後に付いて行った図書室で詳しい先生から話を聞いたが、その先生は戦時中の体験や歴史については詳しく教えてくれたが――何故か、当時から噂されていたはずの『花子さん』については全く覚えていなかった。

第十二話。悪魔召喚士、キンジ?ドキドキ添い寝は命懸け!?!?

2010年5月12日午後19時。

一之江と別れた後、俺は自室のベッドの上でDフォンを眺めていた。

私立十二宮中学校からの帰り道、一之江から『貴方がすっかり勘違いしているのではなければ、Dフォンが壊れているかもですね』と言われたりもしたが、もし壊れているのだとしたら、初期不良だ。

交換とか、返品とかできるのか?

「うーん……」

ベッドに横になり仰向けになりながら天井をDフォン越しに眺めつつ、俺が唸っているところ

「兄さん、夕飯ですよ」

「あー、すぐ行く」

わざわざ部屋の前まで来くれた従姉妹の理亜がドア越しに声をかけてくれた。

呼びに来させておいて何だが、ドア越しではなく部屋の中に入ってくればいいのに

な。

そんな事を思いつつ、体を起こした俺は『そう言えば……』とドア越しに会話している理亜が十二宮中学に通っている事を思い出し声をかけた。

「そうだ理亜？」

「はい、なんですか兄さん？」

返事を受けて立ち去ろうとした理亜がドア越しに聞いてきた。俺は理亜にふと思つた事を聞いてみた。

『花子さん』の噂って知ってるか？」

「花子さん……？」

「ああ、学校の怪談でよく聞くアレだ」

「はい。そちらなら聞いた事ありますよ。小学校のトイレなどによく出るとか
ん？あれ？」

「理亜が通つてる中学にも、その噂があるはずなんだが」

「え、そんなんですか？」

……2年間通つていますが、聞いたことはありませんね……」

その口調からして、本当に何も知らないようだ。一文字が通わなくなつてからまだ一年ちよつとしか経過していないが、その間に噂が廃れた、という事だろうか。

駄目だ、解らん。

ヒステリアモードが切れている今の俺ではさっぱり解らん。なので何故『花子さん』の噂が突然消えたのかについては俺よりも都市伝説こういつた事に詳しい、一之江やキリカにでも聞いてみるか。

そう思っているとドア越しから理亜が聞いてきた。

「花子さんの噂がどうかしましたか？」

「ちよつと最近、民俗学に興味があつただけだ。ありがとうな」

「兄さんが、民俗学？」

「どんな学問かご存知なんですか？」

「あー、いや、都市伝説を調べたり、解決したり……みたいな」

「解決……？」

「兄さんつかぬ事を聞きますが最近、変わった事とかありませんでした？」

「変わった事？」

「ええ。例えば、見知らぬ女の子から何か渡されたり、何かに追いかけられたり、何かにとり憑かれたり……しませんでしたか？」

理亜の言葉に心臓が驚掴みされたように呼吸が早くなり、冷や汗も出てきた。

そんな……という言葉やまさか理亜が？

という言葉が喉から出そうになる。

(コイツ、何か知ってるのか?)

いつからだ?!

一体いつから彼女は解っていたんだ。

俺が抱えている問題に……)

「……何もなかった、ぞ」

内心では動揺しながら、しかし表面上は何もないかのように振舞って俺はそう返事をした。

「……そうですか。変な質問してすみません。

すぐに下りてきてくださいね、ご飯冷めてしまいます」

「ああ」

彼女がドアの前から去っていく気配を感じつつ、俺は考えもしなかった可能性を考える。

もしかしたら俺や一之江を狙う『ロア喰い』の正体はキリカや詩穂先輩ではなく、『魔女』の標的ターゲットになっていて俺にもっとも近い人物で、すぐ側にいる存在……従姉妹の須藤理亜ではないのか、という事を。

2010年5月12日。午後23時50分。

家族で夕飯を取った後、俺はインターネットで『花子さん』や『魔女』について検索してみた。

どちらも大量にヒットするし、かなり詳しい情報もたくさん見つかる。書籍や映画もあつたりするくらいにメジャーな都市伝説だと解る。

それと似たような噂の『トイレの花子さん』が一文字の出身校から、消えている……これはどういう事なんだろうか?

「……解らん。明日一之江と相談してみるか」

理亜の事もその時間聞いてみよう。

そう思った俺はベッドに寝転がりながら、Dフォンの一つをカチカチと弄った。

このDフォンだが、何気に『8番目のセカイ』に繋がらないのだ。

それも2台ともな。本当に初期不良なのかもな。

その辺りの事も一之江に相談してみるか。

「あの時は『人形』を読み取ったから……一之江に繋がったんだよな」

俺とアイツにはそういう『因果』と呼ばれる縁があつたという事なんだが、そう考えると俺と『花子さん』には縁がなかったという事にもなる。

それならそれで別のコードを探すつていう流れになるからいいっちゃいいんだが

……などと考えながらDフォンを弄っていると、データフォルダにヤシロちゃんとお会った日に、あの時撮った人形の写真が残っていた。

「ああ、ここに記録されるのか」

写真に写っているのは、校門にひっそりと佇む、寂しそうな人形の姿。

「これが一之江とはなあ……」

正確には、一之江のロア『メリーズドール』の『コード』だが。

とてもこの人形と一之江が同一人物だとは思えない。

一之江の印象は、クールな無口お嬢様からクールな面白毒吐き娘へとその印象は変わっているからな、俺の中では。

なんの気なしに、そのデータを読み込んでみる。

と、その時。

ピロピロリン♪

Dフォンから軽快な音がなった瞬間。

俺は背後から恐ろしく冷たい気配を感じ取った。

直後、Dフォンが熱くなり、赤く明滅を、開始した。

(この感じ……まさか!??)

「……………ふう」

その溜息を耳のすぐ後ろから聞いた時、ゾクツと背筋が凍り付いた。

「……………もしもし私よ。今、貴方の後ろにいるの……」

「え、あ、あれ?も、もしかして……」

このDフォンの機能がなんとなく解った瞬間だった。

「そのDフォンは『百物語』の主人公の特別仕様のようですね。貴方はそうやって、攻略した都市伝説のデータを呼び出し、私達ロアを召喚出来るのかもしれない」

「す、凄えな!悪魔召喚士みたいだなー俺」

「ええ、そうですね……」

Dフォンはめちやくちや熱いままで、赤い光は今にも『お前、殺されるぞ!』と光り輝いて警告しまくっているが前世で散々、相棒アリアアから『風穴!』と実銃を向けられていた俺の経験上、このくらいで慌てたりむやみやたらと怖がったりはしない。

こういった相手に対して有効なのは――

気を反らして逃げる。

この一手に尽きる。

「しかも我々は、自分の意思に関係なく、無理矢理呼び出されるみたいですね……」

地獄の底から響くような、イライラとした声が背後から聞こえる。

そのイライラが俺に向かう前に俺は行動を起こす。

何か物を、気を反らせられる物を投げれば……桃まんを投げれば……って駄目だ。

今手元とに桃まんなんかねえし、桃まんを投げて気を反らす技はアリアにしか使えね

え！

遠山金次、一文字疾風 絶体絶命……

「え、えーと……怒ってるのか？」

恐る恐るそう尋ねると、一之江からは

「ベッドで、うとうと幸せ気分にいる時に呼び出されて、マジで殺したい気分満々なん

で、是非振り向いて、私を見てくれませんか？」

そんな返事が返ってきた。

うわあ。機嫌悪っ？

「振り向いて、姿を確認するまでが、メリーストール 一之江のロアだから、だよな」

「ええ。スイッチみたいなものです。『振り向いて確認』したら絶対殺害出来ます。です

が、その行動をしなければ、こうやって後ろにいるままです」

絶対殺害ときたよ。

なんとかして命を繋がないと、俺の人生はここで終わる。

「……いつまでですか」

「つい、敬語で聞いてしまったが命タマア取られるよりマシだ。

ブライド矜持?何だそれ、食えんのか?

「こういうのは大抵朝までと決まっています。なので、貴方を殺さないと私は家のベッ

ドでぬくぬく寝れないわけです。なので殺す」

「丁寧語がいきなり断定になった!?」

「殺す」

「2度も!?」

寝る直前の一之江はかなりの危険人物のようだ。

「いやいや、ちよつと待てくれ、一之江」

「知らなかったんだから仕方ないと思いますが、知らなかったんだからこそ、2度とやらないように躡けるのって大事だと思いませんか?」

「き、きつと2度とやらないと思いますよ」

「でも何かの間違いで2度目があるかもしれない場合、その可能性が残っているなら

やっぱり殺すべきじゃないでしょうか」

「い、命は地球より重いんだぞ！」

「私の睡眠もそれだけ重いのです」

「地球規模の自信満々さだな……」

「何か？」

「いや、重い。重いですとも」

常に背後を取られているというのは、大変マズイ状況だ。

後ろを確認したくてもできないというのは危機管理的にも大変マズイ。

背後に何かがあるのか、確認しようにも振り向いてうっかり彼女の姿を確認してしまっ

たら本当に殺されてしまうかもしれないしな。

もしかしたら、後ろを振り向いて姿を確認したら一之江の意思とは別に、意思とは無

関係に殺されるのかもしれない。

ロアというのは、そういう独自のルールに縛られているようだから朝になるまで俺は

なんとか生き延びるしかない。

元の世界みたいに防弾物置とかがベランダにあれば一晩中入って過ごすんだがそん

な物はないしな。

だから朝までなんとかしてやろう。

なんとなくだが……一之江にはもう誰も殺して欲しくないからな。

グサ。

(つて痛てえ!!?痛てえー!!?)

背中になにか刺さってるー!!?)

「何か良い事を考えていい話に持って行こうとする空気を感じました」

「痛い!何かチクチクした物が背中をチクチクしてやがる」

「優しいツンツン攻撃ですよ。グサグサ」

「言葉が全然優しくないんだが……」

「ザク、ザクだと弱そうでしょう?」

「そうかもしれないが」

背後に怖い気配があるが、会話のやり取りは本当にいつもの一之江と同じだ、と判る。

……ロア状態だからと言って性格までは変わらないんだな。

「はあ……まあ、仕方ありません。今回だけは特別ですよ。私とのドキドキ添い寝を楽

しんで下さい」

「……はい?」

神様。

一つ聞きたい。

俺が何をした？

何でこんな目に遭わなきゃならないんだ。

あともう一つ。これなんてエロゲですか？

2010年5月13日。午前0時30分。

そして、それから黙って過ごす事数十分。

「起きてますか？」

「まあ、な。眠れないからな……」

毒舌クール娘とはいえ、一之江は間違いなく美少女と言われる分類に入る。そんな一之江と添い寝しなきゃならないとか、一体どんな罰ゲームなんだよ！

普通の男なら喜んで添い寝したいだろうが、病^{ヒス}気^ス持ちにはただの拷問だぞ、これは。

「それは良い心がけです。手を出したら殺します」

「絶対手は出さん」

病^{ヒス}気持ちな俺が手を出すわけないだろうが!

それが無くても、一之江の殺します、は信憑性もあるだけに逆らえないしな。

「しかし……Dフォンが壊れていない事だけは解ってしまいましたね」

「……まあ、な」

一之江を不可抗力とはいえ、呼び出せたのがその事実を示している。

多分、俺が持つ2台のDフォンうちの1台、このDフォンは『百物語の主人公』専用のDフォンなんだろう。

Dフォンはそれぞれのロアによって違いがあるのだろう。

様々な制限がかかっていたり、別の機能が付いていたり、な。

「まさか取り込んだロアを召喚する能力が、『百物語の主人公』にあるとは思いませんでした。

——ある意味、最強アイテムですね、未来では」

そうだな最強だな、未来では、な。

今は一之江を呼び出せるだけだが、俺が無事に生き延びれば合計百のロアを呼び出せるはずだ。

悪魔召喚士。

さつき自分で言った言葉だが、本当にそうなる可能性がある。ただし、懸念事項もある。

「『百物語』の主人公役は他にも百人くらいいたらしいが……」

「そうですね、確かに『百物語』の主人公が存在している事は、『8番目のセカイ』にも記載されています」

「それなのに、能力は解らなかつたのか？」

「そこは詳しい内容はありませんでしたから。あるのは、『ロアを統べる可能性がある』というもので……脱落率も高いという事だけが記載されていました」

「百人の主人公がいて、その全員が脱落しているって事か？」

脱落率100%かよ!!?

今まで誰も無事に物語を完成できなかった、完成『不可能』なロアという事か。

「はい。そしてそれぞれの物語は詳しく語られませんでしたからね」

謎が多い物語でもあるようだな。

あのモードになつてない俺さえも最近になつて自覚が出たところもあるからな。

何も知らない状態で主人公に選ばれた人や主人公の自覚を持ってないままロアにやられた人とかもいたのかもな。

「どうにか、無事にやり遂げないとな」

「そうですね。私もあっさりやられる主人公に捕らえられた、間抜けな最初のロア、とか言われたら大損です」

「失敗したら……そうなるのか」

「なので、モンジには見事『百物語』を完成させて貰わなくてはなりません。『素晴らし
い主人公と最も縁のあったロア』となれば存在も安泰ですから」

一之江に何かしてやれる事はないのかと考えていた俺だったが、こいつ自身の為
が出来るかを知った。

無事に百個物語を集める事。

俺が百物語を完成させれば一之江はもう、他のロアやハーフロアを襲う必要はなくな
る。

存在性を世界にアピール出来れば一之江は消えなくて済むのだからな。

そうすれば一之江は戦わなくてもいいんだ。

だから手助けしてやろう。俺は正義の味方にはならないけど
味方にならなれるから。—— 一之江の

そんな事を考えていた俺だがお約束のようにソレはやって来た。

思えばこれも『主人公のロア』の能力の一つだったのかもな。

一之江との会話中に微かに甘い香りが部屋の中に漂うのを俺の敏感な嗅覚は感じていた。

(それにしても、何で女はこう、甘い匂いとかが身体から出てるんだよ！

一之江からも、背後から良いニオイが……って俺の馬鹿)

ああ、ダメだ……なっっていく……あのモードに……。

第十三話。ドキドキ添い寝と誓い

一之江の匂いや体温を背中越しに感じながら俺は……『あの感覚』を、感じていた。体の芯が熱く、堅く、むくむくと大きくなっていくような——言いようのない感覚。

ドクン、ドクン——！

火傷しそうに熱くなった血液が、体の中央に集まっていく。

——ああ、なつてしまった。

ヒステリアモード、に……！

「……そうか、頑張るよ。君を最高のロアだって『世界』に認めさせる為に！

いや、違うね。君が最高のロアというのは俺が一番よく知ってるからね。

君が最高の女性だという事を世界中にアピールするよ」

「また調子の良い事を言い始めましたね。まあ、楽しい百物語ライフ、残り九十九話。

3日に一度解決したとしても297日。1週間に1話だとなんと、693日。1年と約9ヶ月となりますが」

「……長いな」

「毎週戦うヒーローの大変さが解りましたね」

「そうだね。やっぱりヒーロー達って凄いな」

「しかも、ロアは美少女率が高いので良かったですね」

「そうなのかい？」

「魔女もそうですが、恐怖や負の力などの影響を女性は受け易いのです」

「男より繊細だって言うからね」

繊細だから傷つけないようにしないといけないな。

だから女性と接する際には明るく前向きになれるように接しないといけない。

ヒステリアモードの俺はついつい、そんな事を考えながら呟いてしまった。

「命の危険に晒されても、美少女を救えるのならそれはそれでいいのかもしれないね

……」

「やはり今のうちに殺しておく方がいいかもしれないね」

「ん？どうしたんだい、一之江？」

まるで浮気をした旦那さんを虫けらを見るような視線で見つめる新妻のような顔を

して

「あなた、キモくてよ」

「いきなり罵倒!?」

「浮気男は、殺す」

「殺害予告!!??」

「殺す」

「二度も!!??」

「私を貴方の物語にしたいから抱きついたとか言つといていきなり浮気ですか? 死んで下さい、ハゲ」

「浮気は文化だ」

そう言った俺の背中をチクチクと何か尖ったもので突付く一之江。

彼女は常に刃物でも持つてるのか?

「痛い、痛いし怖い!」

「いつでも私が後ろに居ると思ひ、色々自重するのですよ」

「解った、解りました」

背中を刃物らしきもので突いてくる一之江。

まさか嫉妬か?

と一瞬思ったが、一之江に限って嫉妬という事はない……と思う。なら、これから遭遇するロア達を守る為とかだらうか? だが、一之江はそんなロアも倒しているしな。

うーむ……よく解らん。

しかし、一之江はどんな気持ちでハーフロアとして過ごしているのだろうか。彼女は今、どんな気持ちで……俺の背中にいるのだろうか？

ヒステリアモードの俺はそんな事を考えてしまった。

一度考えるとモヤモヤした気持ちになってしまったので駄目元で一之江に聞いてみた。

「なあ、一之江……」

「なんですか？」

「あ、いや」

聞こうと思ったがここで、どんな気持ちなんだ？なんて尋ねてもいいのだろうか。

まだ知り合ってから日が浅いの……むしろ迷惑すらかけている。

そんな俺に心配される事は一之江も望んでいないだろう。

だからそれを聞くのはもっと一之江から信頼されてからにしよう。

そう思った俺はまずは先ほどの普段の俺が導き出した推理、従姉妹の須藤理亜が『口ア喰い』ではないのか？という疑いを一之江に告げた。

「……というわけなんだが、君はどう思う？」

「そうですね。その可能性は0ではないですが低いと思います」

「そうだよな。やっぱり違うか……」

ヒステリアモードになってからよくよく考えてみたがこっちの俺が出した推理では理亜は『ロア喰い』ではない。

何故なら一之江が追っているロア喰いは魔女であり、純粋なロアであるからだ。

さらに一之江が車の中で言ったロア喰いの条件に理亜は当てはまらない。

理亜は家族の鼻目が無くても美少女だが、『裕福な家庭』ではなく一般家庭で育ち、『社交性がある』という条件にも当てはまらない。

人付き合いとかは苦手な方だし、他人と触れ合うのを嫌がるからな。

「ですが、そうですね。」

その妹さんが何らかの都市伝説、あるいはこつちの^{ロアの}世界に詳しい人物の影響を受けているとは思いますが。

妹さん自身が何らかのハーフロアという可能性もありますし、誰かに吹き込まれて利用されているという可能性すらあります」

「そういう可能性もあるのか……」

「はい、ですからまずはそれとなく妹さんを観察する事を勧めます。」

あ、もちろんストーカーはしないで下さいね、ストーカーさん」

「俺はストーカーなんてしないよ」

「七里詩穂をストーカーした前科がありますので」

「それは誤解だよ！」

それをやったのは俺だけど俺じゃねえ！

ストーカー犯は一文字疾風、ただ一人だ！

……まあ、今は俺も一文字だけど……ややこしいな。

「はあー、まあ、いいや。それとなく聞いて見るよ。」

それと理亜もあの中学通っているんだけど、『花子さん』の噂を知らなかったんだよ。俺や俺の先輩の代は、かなりみんなで盛り上がったんだけどな。夏の定番だったし」

「ん……やはり、ですか」

「やはりなのか？」

背後で考え込むような一之江の息遣いが聞こえる。多分、唇に指を当てているのだろう。

「……もしかしたら、『花子さん』は『ロア喰い』に既に食べられてしまった……そういう事かもしれない」

「……そうなのか」

「四条先生も、図書委員顧問の先生もご存知ありませんでしたしね」

「ああ、絶対知ってるはずだからね、あの先生方なら」

意図的に隠しているとかではない限りな……まあ、そんなメリットはないだろう。

「なので『ロア喰い』に食べられてしまったのではないかと」

「……そんな力があるのか、その魔女には」

「おそらく、となります。ただ、こう考えれば今回も辻褄は合いますから」

「……確かに……いや、でもそれは」

「ええ。『ロア喰い』に食われたロアは、存在していなかった事になる。

つまり、覚えている人物がいなくなり、ロアとしても消滅してしまう」

「……そういう事になる、というのか」

「完全なる消滅。絶対の死。それが『記憶の消去』ですからね」

『記憶の消去』によるロアの消失。

魔女がロアを食べる事で人々の記憶から消えるのか。

それとも、人々の記憶から消して弱らせた後に、食べるのか。

どちらにしても……多くのロアにとっては恐ろしいロアのような……魔女という存在は……。

しかし……

「何で俺は覚えたままなのかな？」

「なんか主人公パワーじゃないでしょうか？」

「主人公だから、か……そんなもんなんだな」

思わず一之江を呼び出したDフォンを確認してしまう。

皆んなに忘れられた物語を覚えていられるというのは
い事かもしれない。

なんとなく嬉し

「この業界、不可解と特別扱いは当たり前ですからね」

「都市伝説が実際に現れる業界、か……」

それは、法則やルールが物語ベースになる業界。

そんなロア達の世界を『8番目のセカイ』と言うのかもしれないな。

「それじゃあ……」

「なんでですか特別扱いさん」

「君も、一之江も、食べられたら消えるのか？」

「おそらく、食べられたら消えるでしょう。私の物語の記憶と共に、人々の記憶からも。

それが『ロア喰い』に食われた者の末路のようですから」

「そっか……」

様々な方法で消えてしまう『ロア』達。

一之江は一体いつから、そんな自分が消えるかもしれない可能性と戦い続けたのだからか？

何もしないで過ごそうとしても、人々が忘れてしまうからそうもいかない。

世界に存在性をアピールし続けないと消えてしまうのがロアだからな。

しかし、事件を起こせば、『ロア喰い』のような存在に見つかってしまうかもしれない。俺が昨夜『死ぬかもしれない』と思った事なんて、一之江はとつくに何度も何度も経験して、苦しんで、悩んで、それでも戦い続けているのかもしれない。

……本当に強い自信があるから、余裕を持てる。

だけど……それが今の一之江だとしても……

「大丈夫だよ。一之江」

「何が大丈夫なんですか？」

「君は消えない。」

俺が守るから……君が消えないように頑張るから」

絶対に一之江を消滅させたりはしない。

そういう誓いも込めて、俺は一之江の手を握った。

「っ!?」

握った瞬間、一之江の身体がビクツと跳ねた。

「君も、俺の大事な物語に出来るように頑張るから、だから大丈夫だよ」

手を握ったまま一之江に語りかけた。

このまま手を離されても仕方ない。

「……はふ……」

背後から何処かしつとりとした吐息が背中に

安心したような、許してくれたような、諦めたような、そんな吐息がかかる。

そして、一之江は手を握り締めた俺に……

グサツ

「痛てえええええ——!!?」

俺の背中に何か尖ったものを突き刺した。

「何乙女の手を握ってるんですかうんこ野郎」

「ちよつ、女の子がそういう事を言うんじゃありません。めっ!」

「貴方はそういうトコは気にせず、とつと寝て下さい。貴方の意識が完全になくなれば、私も家に帰る事が出来るのですから」

「え、あ、そうだったのか」

「そうです。なんなら、永眠させてあげてもいいのですが」

「わかったよ。直ぐ寝るよ、君の為なら」

そう言つて俺は目を閉じた。

しかし、背中を刃物らしき物で突き刺されたままなのに最初の痛み以外は特に感じないのがまた恐ろしい、な。

「全く……貴方は、真性のバカなのですな」

溜息と同時に、何処か安心したような吐息が交ぎつていたのは間違いだらうか。

こんな状態で、一之江みたいな美少女とのドキドキ添い寝な状態ですぐぐつすり眠れるはずはないんだけどな。むしろ、最初に話しかけてきたのは一之江の方からだったよな？

そう思ったが、そんな事は言葉には出さない。

女の子が我儘を言つて、それを叶えるのが俺の役目だからね。

ヒステリアモードの俺がそう思つていと

背中にとん、と何かが……一之江の頭らしきものが当たる感触があつた。

「ん？まさか……」

「ん……くー……すー……」

「……何だ、先に寝たのか」

握り締めている手を緩く握り返されるのを感じながら、俺はホッと吐息をこぼす。

今までの態度は……照れ隠しだったのかもしれないな。
そう感じていると、俺も眠気を感じ始めた。

(ヒステリアモードが解け始めているな。)

昨日からヒスリまくりだから身体休めないともたんな)

背後からは一之江の寝言が聞こえてきた。

「ん……むにゃ……ころしますよ……くう」

「ロア状態でも、こんなに安心して眠れるもんなんだね」

残念ながら寝顔を見る事は出来ないが、それでも安心して俺の側で寝てくれた一之江の事を思うと思わず頬が緩んでしまう。

(一之江にも、こんなに可愛いところがあるんだな……)

「早く一之江の役に立てるように頑張ろう」

一之江の穏やかな寝息を聞きながら、俺は握った手に少し力を込めて思う。

(君(お前)を消させたりしないからな、主人公として)

握った手にそんな想いを込め、俺も意識を閉ざした。

2010年5月13日午前5時。

早朝。目が覚めた時にはもう一之江の姿はなかった。

あいつの体は基本的に冷たいので、温もりみたいなものもなくなっている。

俺が眠った事で、無事に家に戻れた……のだろうか？

……なんとかなく寂しいと思ってしまう。

……つて、いかん。いかんぞ。キンジ。

気をしっかり持て！ヒステリアモードになんか、もうなりたくないだろう？

だから気にすんな。一之江とはあまり関わるな。

そう思いつつも、どうしても気になってしまう。

……後で確認のメールしよう。

電話だとまた呼び出してしまうからな。

「まだ、時間は早いなだよな」

時計を見ると、まだ夜中と言ってもいい時間帯だった。

こんなに朝早く起きてるのは、新聞配達の人と、早朝ランニングをする人くらいしか

起きてないな。

「……目覚めちゃったし、偶には体動かすか」

そう決めた俺は、気分をリフレッシュさせる為にもトレニングウェアに着替え、早朝ランニングに出る事にした。

手早く準備を済ませて家を飛び出した俺は走り始めた。

早朝という事もあり、霧が出ていたが車に気をつけながらゆっくり走れば問題ない。

標高が高いこの街ではよくある事と記憶にもあるしな。

走るついでに『コード探し』もしてしまおうと軽めに体を動かしていく。

軽く動かしてから数分後。

体が温まった俺は

せっかくだし、近所にある市立夜坂公園にでも行ってみるか！

そう思い、走る速度を上げた。

公園に向かって走る速度を上げ、家からそんなに離れていないところにある十字路を

右に曲がった途端

俺の背後から声がかげられた。

「お前さん、もうすぐ死ぬぜ」

第3章 魔女喰いの魔女

第十四話。深い霧の中で……

背後を振り返るとそこには、銀髪の長い髪をこれでもかとはばかりに伸ばした綺麗な青い目の女の子が道端に立っていた。

辺りには霧が出ているのにも関わらず、まるで台風の目にいるようにその少女の周りだけ霧が晴れていた。

お洒落な帽子を片手で押さえながら、もう片方の手で俺を指差している。

その女の子の表情は口の端が釣り上がっていて、いかにも『不敵』といった雰囲気なのだが、顔立ちがとても可愛いらしい部類であるせいか、憎めない印象を与えている。

その印象はヤンチャなお嬢様とか、男勝りな妹キャラみたいな感じだ。

しかし、声をかけてきて、その第一声が『死ぬ』とか、この女の子は突然何を言っているんだ。

「死ぬ……だど？」

俺が……か？」

突然、『死ぬ』と伝えてきた少女に戸惑いながらもそう聞き返すと少女はきっぱりと告

げた。

「そ、お前さんさ」

きつぱりと頷きながら、今度は人懐っこい笑みを浮かべて腕を組んだ。

その仕草や表情はまるで悪気がないように見えて悪気しかないような。アンバランスなのに、バランスが取れている不思議な女の子だ。

多分、からかっているニュアンスがほとんどなく、当人の口調はいたって気さくだからだろう。

「俺が？」

「そ、お前さんだつてば」

聞き間違いか、と思い確認の為に全く同じ質問をしてみるとやはり聞き間違いではなく、俺が死ぬみたいだ。

「俺はもうすぐ死ぬのか？」

実感が湧かない。前世も含めて死ぬ、死ぬ言われたのは何回目だろうか？

だが、『死相』が出てると言われたのはヨーロッパに極東戦役の助太刀に行った時に俺を襲った『妖刀』、『颯風のセーラ』に言われた時以来だ。

くだらねえ、と言って笑ってやりたいがその時の『死相』も結局当たっていたからくだらねえ、なんて言って笑えねえな。

「ま、実感なんて湧かないのは当たり前だと思うがな。どんな人間だって、いつ自分が死ぬかなんて解らないから気楽に生きてられるんだし。生存率なんて、場所や環境での確率でしかないからな」

人が生きるか死ぬかは確率でしかないと言い切る彼女を見ているとどこか……見た目だけではなく、心の在り方すら人と違う印象を持ってしまう。

同時に頭の片隅で、チリツと何かが反応する。

もしかしたらこの少女が理亜に影響を与えているブレインなのでは……と。

違ったら物凄く失礼だし、当たって欲しくないんだけどな。

「つまり、俺の死亡率が高まっている、と言う事か」

「話が解るじゃないか。それにしてもお前さん、落ち着いているな？」

「騒いだって仕方ねえしな」

そう言われると自分でも不思議だがわりと冷静にいられている。

まあ、既に前世で『死』というものを体験済みだからな。だからヒステリアモードじゃない、こっちの俺でもわりと冷静になって考えられている。

じゃなきゃあ、パニツくてるぜ。

「それに実は何パターンか悩んだりもしたさ。

怒って問いたです。焦って問いたです。怖がりながら問いたです、の三択だな」

「で、結局どれを選んだんだ？」

「どれを選んでも結果は同じなら、普通に問いただしてやろうかなあ、と」

「ははは！面白いな、お前！三択まで用意しておいて結局どれも選ばないのかよ！」

少女はケラケラと笑うと、ニヤリと顔を覗き込んできた。

「うん、素質があるのかもしれないな、お前さんにも」

「素質？」

「ああ。私が探していた男のロアなのかもしれないな、お前さん」

少女の口から出たロアと言う言葉に、俺は顔色を変えて少女に問いかけた。

「お前は……一体」

「一体誰なんだ！」

そう言おうとした俺の顔を少女は両手で押さえ、口づけをしてきた。

唇と唇が触れ合う感触がし、俺の体の体温が急激に上昇していく。

それと同時に火傷しそうになるくらい、熱くなった血液が、体の中央に集まっていく。

ああ、なる。またなってしまった。

ヒステリアモード、に……。

「へえ、やっぱりな」

俺の顔を覗き込んでいた少女はそう声を上げると俺からバツと距離を取った。

「お前さん、死亡率が下がったぜ！」

「今やほぼ0になりやがった」

「……突然、キスをするなんて随分と大体なんだね、君は」

「口調も変わるのか」

「君は欧米出身かな？」

「キスは向こうでは挨拶だけど日本だと恋人とかとするものなんだよ？」

「今のキスは果たしてどっちかな？」

「俺としては君みたいな可愛い女の子が相手なら大歓迎だけどね！」

「ウインクをしながらそう目の前の少女に告げると少女はケラケラと楽しそうに笑った。」

「ははははは！面白いな、お前！」

「初めて会った奴にいきなりキスされたのに、怒るところか逆に口説くのかよ！」

「女性は愛でるものだからね！」

「ははははは！面白い！なるほどな！これはいい。」

「私みたいな『魔女』を面白がらせられる存在か……私達の仲間に対応しい」

「少女が呟いた言葉に、聞き間違いではないかと思えば反応してしまう。」

「『魔女』？」

「ああ、そう言えば自己紹介がまだだったな。

私は『予兆の魔女・アリシエル』。通称アリサだ！

よろしくな、『不可能を可能にする男』の主人公をその身に宿す『101番目の百物語』の主人公、一文字疾風を名乗るお前さん！」

「なっ……!?？」

コイツ、知っているのか!??

俺が一文字疾風ではない事を。

いや、驚く所はそこじゃない。

コイツが『魔女』なら……。

「まさか……君が『ロア喰い』か!?？」

「おいおい、人をあんな凶悪で最悪な『魔女』と一緒にするなよ！

私は『予兆』の『魔女』だけ」

「予兆……の魔女？」

予言ではなく、『予兆』か。

違いがイマイチ解らないが未来予知や死相みたいなのが解るのか？

「本当は今すぐにも勧誘したい所だけど」

「だけど？」

「勝手にお前さんを勧誘すると私の『マスター』が怒るからな、だから今日は挨拶だけにしとくぜ！」

またな！」

そう言ったアリサの姿は台風の目を覆うように発生した深い霧の中に消えていく。

逃すまいと彼女が着ていた『市立十二宮中学校』の制服を掴もうとしたがスルリと躲かれてアリサの姿は霧の中に消えていった。

霧が薄れてアリサの姿を確認したが……。

「……消えた!?？」

彼女の姿はどこにもなかった。

それからしばらく辺りを見回したが結局、アリサと名乗る『予兆の魔女』の姿はどこにもなかった。

仕方なく、モヤモヤした気持ちを持ったまま、俺はランニングを再開した。

目指すは市立十二宮公園。

日中は主婦達の憩いの場になる公園も、早朝はほとんど誰もいない。

だから『コード』探しの為にカメラ撮影をしても不審に思われる事もない……と思う。

「公園という場所には、何かしらの都市伝説がありそうな雰囲気あるしな」

辿り着いた公園は、霧がかかっているせいかとても幻想的だった。

この霧の向こう側から何か、怖い存在が現れたりしそうな雰囲気がある。

もしなんか現れたとしても、そういう恐ろしいものじゃないといいな……そう思いながら、辺りをDフオンのカメラで撮影していると

「ん？あれ？」

不意に自販機の側にあるベンチに目が向いた。

そこには、赤い点がぼつんと存在していた。

「血……か？」

恐る恐る近づいてみると

そこにいたのは一匹の蜘蛛だった。

直後、記憶に、あの屋上で起きた出来事が思い浮かんだ。

「赤い、蜘蛛……？」

慌てて辺りを見回してみたが周囲には誰もいなかった。

念のため蜘蛛にファイティングポーズをとってみたが特に動きはなかった。

「ただの蜘蛛か……だけど屋上にいた蜘蛛に似ているな」

昨日の蜘蛛よりも大きい蜘蛛だった。全身が真っ赤で不気味な感じをする所とかも

似ている。

俺の頭に『人面犬』や『人面魚』、あるいは『女郎蜘蛛』などが思い浮かんだ。

ああいう、不思議な生き物や妖怪も都市伝説に入るのだろう。

なら、こういう『真つ赤な蜘蛛』みたいな都市伝説もあるのだろうか？

「うーん、珍しい虫、みたいな都市伝説ってあるのかな？」

独り言を呟いて、Dフォンでその蜘蛛を覗こうとした時。

背後から明るい声が聞こえた。

「例えば、人を食べる虫、っていう都市伝説があるよ」

聞き覚えのある声に振り向くと、そこにはキリカがニッコリと立っていた。

「え、あれ、キリカ？」

「んふふ、モンジ君まるで気づかなかったね、私の事。霧が深いからっていうよりは、何

かを探していたから、に見えたけど？」

「おはよう、キリカ。」

随分と朝早くに起きているんだね」

「うん、目が覚めちゃったからね！」

せつかくだからちよつとお散歩して来ようと思って家を出て公園に来たらモンジ君の姿があったから声をかけてみたんだよ」

「一人で来たのかい？」

「うん、一人だよ」

「こんな霧深い朝の女の子の一人歩きは危ないよ？」

危ないから、めっ！、だよ！

次からは誰かと一緒に来るようにね！」

「んふふ、はい！」

クスクス笑うキリカはいつも通りだった。

その姿を見ていると、本当にこの子や先輩が『ロア喰い』なのか、間違いじゃないのか、と疑ってしまう。

疑いたくない、違ってほしい……とは思いつつ、キリカの事を考える。

俺なりに考えた結果、キリカは……。

「ん？どうしたの、モンジ君？」

あつ、ほらここのベンチに座わって！」

キリカにベンチに座らされた俺は、同じベンチの端に真つ赤な蜘蛛がいたのを思い出した。

「そう言った都市伝説があるなら、この蜘蛛は人を食べたりするのかな？」

「さっきのは単なる都市伝説だよ。この子は、ジヨロウグモの一種だね。」

……まあ、真っ赤なのはかなり珍しいけれど」

「なんだ、詳しいなキリカ？」

「幼稚園時代の私の通称は『虫博士』だからね」

「へえー、キリカは凄いなだね。」

俺はカブト虫博士だったよ」

「私の方が広い範囲をキープしてるってわけだ」

「うん、虫博士度ではキリカの勝利だね」

「ふふっ、やった♪」

満面の笑みで笑いながら、キリカはツンツン、と蜘蛛のお尻を突く。

キリカに突かれてビックリした蜘蛛は、一目散に逃げていった。

「あーあー、逃げちゃった。」

でも座れるからいいやー。

モンジ君はまだランニングする？」

「いいや、座ったままキリカとお話してみたいって思っていたところさ」

「やったー！」

キリカはニコニコと笑いながらベンチに座わった。

無邪気に喜ぶ姿を見ていると——『日常』に戻ってきた気分になる。

……意外と『ロア』関係の話は、俺の精神に堪えていたみたいだな。ずつとこのまま、この『日常』が続くといいなあと思いつながら俺は……。

「なあ、キリカ……」

「んー、なーにー?」

「いや、その……」

言わないといけない。はつきりと確認しないと進まない。

そう頭では解っているが、俺の中にあるキリカと過ごした記憶が、感じた感情がそれを阻む。

もし俺の推測が正しかったら?

俺に近づいて来たのが演技だったら?

そう言った不安な感情に押し込まれそうになる。

「転入生の瑞江ちゃんと仲良しっぼいね?」

キリカが突然、そう聞いてきた。

「ああ、俺の席が彼女の前なのもあるし話してみたら面白い子だったからね、キリカも話してみたら面白い子だったろ?」

「うん、瑞江ちゃんって本当に面白いよね、なんて言うかな。毒舌クールなんだけど、どこか天然っぼい、みたいな」

「そうだね。ちょっと難しい属性だよな。」

見た目は人形っぽいいお嬢様なのにね」

「てつきりモンジ君ってああいう、ロリちつくくな子が好みなのかと思っちゃたよ」

「いや、俺が好きなのは……」

「好きなのは？」

誰が好きかと言われたら俺の頭の中にはやはり……アリアの姿が浮かんだ。

もう会えないアリアの事はとくに諦められたと思つたが……やはり抱いた想いはすぐには消えていかなかった。諦めないといけないんだけどな。

続いて浮かんだのは……一之江の顔とキリカの顔だった。

「……皆んなの事が好きだよ？」

「……ねえ、モンジ君？」

そんな風に悶々としてしているとキリカが何やら興味津々な目で見つめてきた。

「私達……私はモンジ君の、なあに？」

「キリカは、俺の……」

「うんうん、俺の？」

嫌いかと言われたらノーだ。

キリカを嫌う要素なんてこれっぽっちもないからな！

ただ……。

いや、今はよそう。

それよりキリカをどう思っているのか、という事だが。

嫌いなわけではない。むしろ、好きになる要素しかないな。

どう言えばいいか、こんな時に一文字ならどう答えるか？

そう思った俺は一文字が言いそうな返事をした。

「……俺のマイエンジェルだよ」

「俺の、とマイ、が被ってるよモンジ君」

「しまった！」

一文字の口説き文句は大失敗だった。

「クスクス、しかもエンジェルって」

「天使のように可愛らしいからだよ？」

「そう思ってた貰えてるなら、まあいいかな？」

んふふー、と笑いながら空を見上げるキリカの横顔に、なんとなくドキツとしてし

まった。

ドク、ドク、ドク。

心臓の鼓動が高まり、それと同時に血流の流れも速くなる。

「……ねえ、モンジ君？」

「ん？」

呼ばれた顔をキリカの方に向けるとキリカはかなり真剣な……潤んだ瞳で俺を見つめている。

「どうしたんだい？」

「誰もいない朝の公園。しかも霧に包まれていて、誰かに見られる可能性は少ない状況。いくらドンピシャなタイプじゃないとはいえ、美少女と二人つきりできて、何か思うところははないのかね？」

「ぎ、キリカ？」

「最近、ちよつぴり小悪魔ちつくで、いつもバカやって過ごせる子も、いいなあーと思ったりは……しないかね？」

「キリカの誘惑によりヒステリアモードが強化されつつ、誘惑に負けそうにもなる。魅力的過ぎて襲つちやいそうになるよ。」

「だからもう……」

「これ以上はいけない。」

「そう思つてキリカを突き放そうと思つた時」

「……私、結構……男の子の楽しませ方知ってるよ？」

キリカはそう囁いた。

第十五話。魔女喰いの魔女

「き、キリカ？」

「ふふ、モンジ君はどこを弄られたら喜ぶのかなあ？」

「……じ、実践経験があるのか？」

「目下、試す相手を検討中……かな？」

その試す相手って誰の事だよ!!?

と、いう突っ込みを心の中でしっつ、俺はキリカの顔を見つめる。

キリカは俺に寄り添うように体を密着させてきて、その体からは甘い香りが漂ってくる。

「モンジ君が望むなら……いいよ？」

何がいいんですか？

キリカさん。

「例えば、こうやって……そつと撫でるのを、フェザータッチと言うのだよ」

キリカは色っぽい手つきで、俺の顔をじーつと見ながらソフトなタッチで俺の胸元などを撫でてくる。

「お、お、お、な、なんかぞわぞわしてくるな！」

「ちなみに、モンジ君がして貰って気持ちいいことは、相手にもしてあげると気持ちいい。」

これは未来でもずっと役に立つ知識だから……よく覚えておくんだゾ？」

色っぽい目つきは俺を見つめたまま、手先はあくまでフェザータッチをしたままで俺を攻めてくる。

そんなキリカの色気に気づいた俺は、このままやられっぱなしなのもどうかと思ったのでちょっと彼女に悪戯を仕掛けた。

多用は禁じられているが、目の前にいる彼女が俺の予想通りの存在ならば、その『正体』を確認できるかもしれないしな。

「そうか、でも……」

声質は、こんな感じで良かったかな。

「キリカ」

落ち着けキンジ。落ち着けば出来るはずだ。

「キリカは俺の事を心配して言ってくれているんだね。ありがとう。でも俺は大丈夫だよ。」

キリカみたいな可愛い女の子にこうされる機会なんてそうそうないだろうしね。

それに俺がこうされたいのはキリカみたいな子だけだよ？」

「か、可愛い？私が？」

「ああ、キリカは可愛いよ。自覚してなかったのかな？」

キリカみたいな可愛いくて、清纯悪戯小悪魔系なタイプも俺は好きだよ。

それにお姉さんキャラなところもあるんだね？キリカ」

ヒステリアモードの甘い艶を交えた声で、キリカ、キリカ、と名前を織り交ぜて語る。
「好きでしょ、年上のお姉さんキャラ？」

だからそんな催眠術なんてかけようとしなくてもいいんだよ？」

しかし、キリカは普段と変わる事がない、いつも通りの態度で返事を返した。

まさか……『呼蕩』が効いていない？

いや、それどころか、バレている……だと？

俺が驚いた顔を見るとキリカはその口元をニヤリとさせて、ねめつけるような視線で俺を捉えたまま、手をお腹の方を持って行き

「で、手はこうやって焦らすみたいに、そっと回転させるようにすると……」

キリカが手を動かすと俺は体を動かせようと、抵抗する気がなくなりキリカにされるがままにされてしまう。

「ぐっ、ちよっ……キリカ……やめ……」

「ふっ……」

蜘蛛が獲物をとらえた相手をじわじわと糸で包み込むみたいに、キリカは俺を捉えようと動いた。

顔を俺の頬に近づけてくるキリカに、完全無抵抗な俺。

なすがままにされる中、その手が俺の下半身の方に行き

バチツツツ!!?

「っ!!?!」

「痛でええええ」

突然、そのキリカの手と俺の手元から、赤い火花が散った。

その衝撃は、それまでキリカに抵抗しようとしなかった俺が我にかえるほどであった。

「痛え……大丈夫か、キリカ?」

ヒステリアモードの俺は自分の事よりもまず、キリカの心配をしまいキリカの方を見た。

見るとキリカの手からは血が出ていた。

「ごめんよ、痛むかい?」

「ううん……ふーん、なるほどね」

キリカの手をハンカチか何かで慌てて抑えようとする俺だったが、キリカのその視線を見て手が止まる。キリカの視線は、無邪気なものでもなく、色っぽいものでもなかった。

まるで人が虫を見るかのような冷たい視線で……

俺の手

に握られた、Dフォンに向いていた。

そう、さっきの火花は、Dフォンがキリカを拒絶するかに電撃めいた力を発したものだっただ。

「キリカ……?」

その雰囲気さがさっきまでとはまるで違う事に気付いた俺は、キリカの名前を呼んだ。
「なるほど、プロテクトも万全という事か。」

「やられたなあ、モンジ君なら簡単に落とせると思ったのに」

「キリカ……やはり君は……」

彼女は俺のDフォンから目を離さないまま、自分の手についた血をペロリと艶めかしい舌で舐めた。

「ふふつ。なあんだ、やっぱりバレていたんだね」

その舌が、唇が、妙に赤く感じられて

俺はようやく確信を得た。

仁藤キリカ。

彼女が、彼女こそが俺と一之江が探していたロアで……アリサが言っていた、『凶悪で最悪な魔女』なんだと。

「ふふっ」

キリカの手からベンチに血が一滴落ちると、先ほどの蜘蛛がその血に駆け寄ってきた。

いや、先ほどの蜘蛛だけじゃない。

『赤い』色をした蜘蛛以外にも、赤い色の蟻、百足、ヤスデ、芋虫、アブラ虫、名前も知らない無数の『赤い虫』達が、まるでベンチの下から湧いて出たかのようにワラワラとその血に群がった。

「うわっ、気持ち悪いな」

そんな感想を抱いた俺とは対照的に、キリカはそんな虫達の女王様であるかのように『いつものように』クスクスと笑っていた。

「キリカ？君は……」

「モンジ君を気に入っているのも本当だけだね。でも、モンジ君にもバレちゃったし、そのDフォンにも嫌われちゃってるみたいだしね。そのDフォンがあれば私も便利だと

思ったんだけど……」

「便利って何がだい？」

「お・しよ・く・じ♪」

言葉と同時に、大量の虫達が赤い巨人のように、むくりとキリカの隣に立ち上がった。その内部も表面も、まるでエサに飢えた獣のようにざわざわと蠢いている。

「……まさかと思うがお食事って」

キリカの目はいつの間にか、爛々と赤く輝いていた。

まるで人間ではないかのように。

大量の虫達を脇に従えて、ベンチの上でニコやかに佇んでいる。

「本当はね、もつとゆつくりと過ごすつもりだったんだけど……モンジ君がそんな凄い存在になっちゃうなんて思わなかったしね」

「そんなに凄い存在なのかな」

「まあね！素質はあるなー、と思ってたんだけど。ロアの世界に来てもやっていけるよ

うなそんな素質があるって。でもだからって、よりによって『百物語の主人公』だなんて。しかも『不可能を可能にする男の主人公』も同時に持つてるなんて。本当にビックリしたんだよ？あの当選を教えてくださいました時は」

「まあ、俺もビックリしたからな」

「ノーマークだった『お友達役』に選んだ子が、まさかの大抜擢。私としては、おかげで長居できなくなっちゃったんだよね。いつか、正体がバレるかもしれないから」

「まさか、って言いたいのは俺も同じだよ。」

君みたいな子がまさか、本当に魔女だったなんてね」

「もう、私がこの公園に来た時には既に解ってたくせに」

「キリカ……君が『ロア喰い』なんだね」

「うん、私の別名みたいなものだね。本当の私は『魔女喰いの魔女ニトウレスト』っていう、ロアなの」

「ニトウレスト……」

その名前にどんな意味があるのかは解らないが、それがキリカの本当の名前なんだろう。

「ロアを食べて、ずっと生きてるっていう魔女のロアか……」

キリカが『魔女喰いの魔女』

今まで何度もこの可能性を否定してきた。

それは信じたくなかったからだ……キリカがロアで俺の事を、クラスメイトの事も騙していたなんていう事を。

だが、本人の口からそれを言われてしまったからには、信じるしかない。

別に本当の『ロア喰い』がいて、キリカを操っている、という可能性も考えられなくはないが……希望的観測過ぎるしな。

何より、俺のDフォンがほのかに赤くなっているのが証拠だ。

しかし、一之江の時と比べて熱すぎるわけではない。

……絶対的な危険ではなく、あくまで警戒レベルつて事かな？

となると、キリカは俺に危害を加えるつもりはないのかもしれないな。

「ロアを食べて生きる、つて言われているんだけど……ただ、私は『魔女』だからロアに限らず……」

キリカがその手をベンチに平行に持ち上げると、さらにぼたぼたと血を落とす。

そこに、さらにどンドン、群がる赤い虫達。

その中には、見たこともない不気味な足がいつぱい生えた虫までいた。

「美味しそうな、強い魂の人間は食べちゃうかな？」

その瞬間、ゾツとした。

もしかして、いや、もしかしなくてもこの虫達が俺を襲って食べる、という事だな……これは。

それに、もしかしたらこの虫達のように、自動的に群がるような状態だった場合……Dフォンは、警告出来ないのではないか？

そう思った俺は片手を動かしてDフォンを操作しようとして

「おっと、ダメだよモンジ君」

「何がだい？」

内心ギクリと動揺しながらも平然を装ってキリカに返事を返した。

『『百物語の主人公』がどんな能力を持っているかは解らないからね。多分、そのDフォンが特殊である、というのは……他の物語の『主人公』達の経験からして、間違いないと思うんだけど』

「他の主人公達とも、面識が？」

「うん、私は魔女だからね。何人もやつつけたよ♪」

「その人達も食べた……のかな？」

ちよつと意地悪な質問かなあ、と思いつつ尋ねるとキリカは

「うん♪」

すっごいいい笑顔で頷いた。

「……物理的意味で、かな？」

「性的な意味で」

「本当に!?？」

「う・そ♪」

「く、これが『魔女の口車』か……」

「あははー！モンジ君ってばやっぱり面白いねー」

楽しそうなキリカはやはりいつも通りだった。

だからこそ、ちよつとだけ寂しくなったり、悔しく思ったりした。

キリカが人間ではなく口車だから……という理由ではない。

キリカが『口車喰い』である事や、『魔女』である事とか、そんな事はぶつちやけ、俺にはどうでもいい事だからな。

そんな事より……俺はキリカがちよつと怖いと思ってしまった。

そして……そう思ってしまった自分が許せない。

「ごめんね、キリカ」

「うん？」

「キリカの事、友達なのに、親友なのに、ちよつと怖いって思ってしまったんだ」

それが俺には悔しかった。

一之江と違って姿も見えているし、キリカらしい部分もいつも通りだったのに、親友で大好きなキリカの事を、一瞬でも怖いと思ってしまった。

そんな自分が許せない。

「……なんで謝るの？」

「それは大切なキリカの事を、大好きなキリカの事を怖いって思ってしまったからだよ。女性に対してそんなの失礼だろ？」

キリカはそう告げた途端、目をきよとんと丸くした。

直後、肩を揺らして笑い出した。

「あ……あはははは!!?そっか、怖がらせてるのにな、私!なのに、モンジ君ったら、そう受け止めるんだ、あはは!だからモンジ君の事、好きだよ私!」

ベンチの上でお腹を抱えて笑うキリカ。

「俺も好きだよ、キリカ」

きちんとウインクしながらベンチから飛び起きた。

その際一瞬だけ、腕を亜音速にさせ『桜花』を使って正拳突きを放って近づいてきた虫達を吹き飛ばした。

もちろん、キリカに腕が当たらないように気をつけながらな。

しかし、こういう、凄い子らにしてみると、俺の返事っていうのは爆笑の対象なんだ

ろうか？

「ふはー、可笑しい。面白かった……うん、やっぱりモンジ君ったら、美味しそう」

「君が望むならもつとドキドキハラハラさせてあげるよ？」

「へえー、それはそれで楽しみだなあ。」

でもそつか、君は『不可能を可能にする男』のロアでもあるから虫さん達からも逃げられるんだね」

「その『不可能を可能にする男』のロアの事も詳しく聞きたいな」

「うん、それじゃあ『物知りキリカ』さんが特別に教えてあげるね。」

最期の友情の証として。

8番目のセカイにね、載ってたの。

そのロアは……

あらゆる物語を改変して——新しい物語を生み出す事が出来る……そういう可能性がある物語ってね！」

「あらゆる物語を改変して新しい物語を生み出す？」

「過去に一度だけ生まれたみたいだよ。」

詳しいことは載ってなかったけどその能力の効果だけは8番目のセカイにも載ってたし……」

「へえー、何て書いてあつたんだい？」

「あれ？8番目のセカイを見てないんだね？」

「ってきり知つてるとばかり思つていたんだけど……」

「何故か繋がらなくてね」

「ふうん、でも既に敵である私に知られているのに慌てないんだ？」

「キリカみたいな可愛い子に隠し事はしたくないからね！」

「それに人間の、俺の全てを知るなんて事は誰にも出来ないからね」

「自信があるんだね。」

「そっか……なら私も本気でやるよ！」

「あつてもその前に教えてあげるね。」

『不可能を可能にする男』が持つとされる能力名を……」

「あれ？いいのかわ？」

「うん。君とは対等なままで最期までいたいからね。」

「だから教えてあげるね……その能力名は……」

キリカは一度言葉を止め、胸にかかる赤色の長い髪を片手で払ってから俺の顔をじつと見つめ直してから口を開けた。

「君が持つロアの能力は……『^オ事象^パの上^ラ書^イき^ド』だよ」

第十六話。遅咲きの桜

「オーバーストライド
「事象の上書き？」」

「うーんとね、簡単に言うとな作家さんになった気分で物語を描くんだよ。

編集とか、添削とか言った方が解るかな？

もし、モンジ君が『物語』を変えられたら？

変えたい物語が『メリーさんの人形』というタイトルだったら、どんな物語に変える？

モンジ君はそう言った強いイメージ力を持って物語に干渉する事で物語を改変できる、そう言った能力を秘めているんだよ」

「強いイメージ力を持つて？」

「うん。強いイメージ力は人をハーフフロアに変えるように、ロアを、あるいは世界をも変える力を持つからね」

強いイメージ力は世界を変える？

「今はまだ解らないと思うけどモンジ君がもしこの先、生き残れたら、私を倒せたら君はハーフフロアとして完全に目覚めるかもしれない。」

ハーフロアとして完全に目覚める方法があるの。

その方法はまだ教えてあげないけど、もし私を倒せたら……いつか、その方法で君が目覚めたらきつと私が言ったイメージ力については解ると思うよ」

「そうか……」

キリカは笑顔のまま、淡々と話続けた。

話せば話すほど自分が不利になるかもしれないのに……俺が知りたい事を話してくれる。

キリカにとって、『不可能を可能にする男』の能力は驚異じゃないのか？

それとも何かしら對抗策を持っているのか？

キリカの心意は解らない。

ただ、解る事が一つだけある。

ハーフロアとして完全に目覚める方法があるという事。

キリカはその方法を知っているが俺に教える気はないという事。

ただし……。

まだって事は君を倒してその時が来れば教えてくれるんだね。

「モンジ君が知ってる通り、私達ロアはこの世界に存在性をアピールしないと消えてしまう存在だから。」

そして、私達ロアはそれぞれの独自性に則ったルール、『物語』的な力に縛られて存在しているの。

その『物語』的な力に強いイメージ力を持って『干渉』して『改変』できる力を持つのが、モンジ君が持つ『不可能を可能にする男』の力なんだよ

「そんな事を教えていいのか？」

「うん。さつきも言ったけど8番目のセカイにこの情報は載っているからね。

だから大丈夫だよ！

それに……」

「それに？」

「もうすぐ消えちゃう君に知られても問題ない情報だからね！」

キリカが人差し指を虫に向けてると虫達がキリカの隣に集まり、その虫達が一つに集まると巨大な物体へと変化した。

その外見はRPGなどでお馴染みのゴーレムや巨人兵みたいな姿をした化け物だ。

「それにしても、モンジ君は本当に美味しそうだね」

「性的な意味で言ってるのかな？」

「なら可愛がってあげるよ？」

「ふふっ。そう言う魂も美味しそうだし、いろんな感情も美味しそうだもんね。モンジ

君は一人グルメの塊だっ」

「おや？キリカの食事って、精神的なモノなのかな？」

てつきり、キリカが虫達を操って俺の肉体を食べるとばかり思っていたが……精神だけなのか？

なら、命までは奪われない？

そう心の中で安心してキリカを見つめると

「うん、私が食べるのは精神、魂の方」

「そうか、それなら……」

やはり命までは取られないようだ。

よかった。

そうだよな。いくら魔女でも命は取らないよなー、と思つたが……

「ただ、それで発狂しちゃったり意識をなくしちゃったりした子は、私の可愛いこの子達赤い虫達が物理的にムシヤムシヤーつと食べちゃうんだよ」

その発言でキリカは全く安心出来ない存在という事がよく解つた。

「そうか……」

しかし、発狂や意識をなくす、か……。

キリカに精神やら魂を食べられるという行為は、それだけデンジャラスさを含んでい

るといふ事なんだろうか。

精神が耐え切れなくほどの食事。

具体的には解らないが、尋問科ダキユラスの問題教師、綴つづりと同じくらい卑劣な事をされるのかもな。

まあ、命を奪わないだけキリカより綴の方がまだマシかもな。

『人を食べる虫』の都市伝説だったかな？」

「発生は逆だけどね？」

「ん？」

『魔女ニトウレスト』が操る蟲は、人を、ロアを、物語を、記憶を食べる。つまり、『人を食べる蟲』つていう都市伝説は、私のサブエピソードみたいなものなんだよ」

人差し指を立てて、もつともらしく語ってくるキリカ。

その様子がいつも色々教えてくれるキリカの教室での姿と重なって見えた。

「なんか、将来の俺は都市伝説マスターになれそうだね。キリカといれば」

「その暁には、都市伝説を全て語り継ぐ者『友達の友達』こと、『FOAF』の称号が手に入るかもね」

「友達の友達……ああ、自分の事だね？」

「そ。千以上の都市伝説を体験したモノに送られる『どんな伝説でも消せない者』の称

号。

さて、今のモンジ君は私で何人目なのかな？」

「まだ2人だよ。『8番目のセカイ』のヤシロちゃんも入れれば3人目だけどね」

「あれはプロローグみたいなものだからね。そのDフォンを手に入れてからの、1人目はやっぱり……？」

「黙秘権を行使したいね」

キリカが確認しているのは一之江の事だろう。

多分キリカは、一之江がなんらかのロアかそれに関わる人だという事は掴んでいる。だが、それがどんなロアなのかは解ってない。

……やはりロアとの戦いは情報戦になるんだな。

より相手の事を知っていれば知っているほど、その抜け道や対抗策が見つかる。

有名であれば有名であるほど、そういう不利も生まれるわけだ。

そういう意味では、『魔女』という存在は不利なのかもな。

様々な物語、童話、神話などで大量に倒されているからな。

だから多くの弱点も存在していたりするのだろう。

多くの弱点を持つから正体を一之江に掴まれる前に、キリカの方から仕掛けたい。だから利用できそうな俺をすぐには食わずに、情報を吐かせたい。

……そういう事なのだろう。

「なんだか色々考えたー。みたいな顔をしているね？」

「キリカは本当に人の顔色や空気を讀むのが上手いね？」

「うんうん。モンジ君が、あの子の事を語らないようにしようと思つたのも理解出来ちゃったよ」

「女の子の秘密は守るのが紳士の鉄則だからね」

「ふふっ……そのご馳走の情報は、どうやったたら紳士さんから引き出せるかな？」

ニマニマと微笑みながら、キリカはベンチからゆつくりと下りた。

そして俺と顔を合わせないようにするかに着地し背を向けた。

下りた場所にいた虫ゴーレムや赤い虫達は、一瞬でキリカから等距離に離れる。

その足元には赤い円が出来上がっていた。

……赤い円がある限り虫達はキリカには触れない、という事だろうか？

そんな事を考えながらも俺はキリカから距離をとつて少しずつ後ろへ後退していく。

「モンジ君、この状況で自分が何か出来ると思つてる？」

「ああ、もちろん出来ると思つているよ！」

「そつか……失敗しちゃったなあー」

君にはもう『主人公』になる覚悟があるんだね」

キリカは俺を振り返らないまま、そう呟くと、ゆつくりと噴水の方に歩いていき、そこで一度足を止めた。

赤い虫達はキリカの後を追いかけるようにして群がっていく。

自分の周囲には決して虫を寄せ付けないままに。

だけど、彼女はその虫達を意のままに操る事が出来る。

蟲使い、という存在でもあるのか。蟲を操る『魔術』を使えるのか、は解らないが……。
『魔女』という存在からして後者だとは思うけどな。

「なあ、キリカ」

「うん？」

「……どうして、かなり勿体ぶっているんだい？」

「あ、うーん、やっぱり、そうだよな」

「ああ、この場合。時間稼ぎをするのは襲われる俺の方で、襲うキリカにとっては時間稼ぎなんて事はむしろされたくない事だからね」

そう。キリカはいつでも俺を襲えた。

そして襲ってしまえばキリカはすぐに俺の精神を食べたはずだ。

大量の虫に襲われればいくらヒステリアモードの俺でも不利だからな。

数の暴力には、ヒステリアモードであろうと、まともな装備もない俺ではひとたまり

もないからな。

「うん。どつちかと言うと、他のロアがこの霧に気づく前になんとかしたいんだよね」

この霧もキリカの力のようだ。

魔女だから、『霧の魔術』とかも使えるのかもしれないな。

「それじゃあ、何で俺に色々考える余地とか余裕とか、俺のロアに関する情報とかくれたんだ？」

「あー、うーん、多分……」

「多分？」

「多分、本気でちよつぱり、モンジ君との生活が名残惜しいんだと思う」

……そっか。

なら仕方ないな、と思うし、同時に嬉しいとも思う。

「こんないかにも『悪い事も笑顔でいくらでもします！』みたいなキリカに、そう思っ
て貰えるというのが、とても嬉しい。」

嬉し過ぎたからこそ……やっぱり悲しくなった。

名残惜しいという事は、それでもここで終わらせるつもりだからだ。キリカは。

「でも、うん、そうだね。モンジ君、君の事は結構好きだったよ」

名残惜しいと言ったキリカも心の中で切り替えたのか、真っ直ぐに俺の目を見つめる

と、そこにはもう迷いはなくなっていた。

……こういう、名残惜しいものを、名残惜しい気持ちのまま、何度も食べたのだろうか。

だとしたら、あまりに可哀想過ぎる結末で可哀想な生き方ではないだろうか。

「それじゃ、いくよ」

キリカが決意して言い放った言葉に負けずと俺もお決まりのセリフを言う。

今はもう、五月。

その花びらはすでに散っているけど……。

「この桜吹雪」

「バイバイ、モンジ君。君の事は、やっぱり好きだったよ」

「散らせるものなら、散らしてごらん」

これが最後になるかもしれないこの決めゼリフも、言うのは前世を含めると何度目になるのだろうか。

キリカが手を俺に向ける。

瞬間、大量の虫達があんな向かってドバツと遅いかかってきた。

もう、何匹いるのかも解らない。どんな種類の虫達がいるのかも解らない。

おぞましい塊が、俺のいる場所に大量に群がってくる。

中でも虫ゴーレムはその姿とは裏腹にかなり速い速度で向かってきた。赤い巨人が向かって来る姿はかなり不気味だ。

それでも俺は怯む事なく、自ら、自分から虫達に向かって駆け出した。もう、がむしやらに。

俺には一つも武器はない。

何もない。

だが、一撃入れる。絶対に。

それだけ考えて……拳を振るう。

(この距離なら——出来る……！)

「ちよつとだけ季節外れになってしまふ花だけどね。

それでも咲かせてみせよう……遅咲きの桜を」

俺の得意技で、自損技でもある超音速の打撃技。

『桜花』。

全身の骨格・筋肉を同時に動かし連動させる事で時速1236kmの速さで放つ、散つた桜の花が二度と元の枝に戻れないように、一度使うと二度目はない——相打ち狙いの超音速技。

もつとも、何度も使ううちに改良ができて半自損どころか、逆ベクトルに『桜花』放

つ第2の『桜花』の『橘花』きつつかや亜音速に留める事で自損しない『桜花』が放てるようになったんだけどな。

その『桜花』を自損しないように亜音速で放ち、さらに遠山家に伝わる奥義も放つ。

「桜花ッ」

「！」

俺の拳の先から、桜吹雪のような円錐水蒸気ツエイパー・コーンが放たれる。

拳が虫ゴーレムに直撃したのと同時にインパクトの瞬間に『秋水』しゅうすいを放ち、体重を乗せて全ての力を虫ゴーレムに伝えた。

ドシャアアア。

大量の虫達のおよそ3分の1にあたる虫ゴーレムは俺が放った一撃により吹き飛んだ。

地面に倒れた虫ゴーレムは赤い光の粒子となって消えていく。

「うわぁー、凄いや、凄いや！」

キリカは興奮気味に目を丸くしながらもはしゃいでいる。

喜んでいいるのなら何よりだ。

だが……。

「チツ……数が多いな」

虫ゴーレムを倒しても、それでもまだ大量にいる虫達に襲われ、俺は身動きが取れな

くなっていく。

『桜花』気味に蹴りを放ち、牽制しながら後退していくがこのままだと喰われるのは時間の問題だ。

数の暴力には、装備品もない俺ではさすがに辛い。

「もう諦めたら？」

諦めれば楽になるよ？」

絶対絶命な状況。

確かに俺の不利な状況だ。

だが、諦めるといふ選択肢はない。

武偵憲章10条。『武偵は決して諦めるな！』

「^アパート^アナーから禁止された言葉。

『ムリ』『疲れた』『面倒くさい』。

この3つは、人間の持つ無限の可能性を自ら押し留める良くない言葉。

二度と言わないこと』

ヒステリアモードの俺の頭の中でそれらの言葉が浮かんだ。

そしてその言葉と共に俺の頭の中であるイメージが浮かんだ。

そして俺が思い描くそのイメージは具現化されていく

俺にとってのロアとは何かを。

「もう、諦めなよ。」

この状況をひっくり返すなんて不可能なんだから」

キリカの呟きが聞こえた。

「不可能？」

キリカは本当にそう思っているのかな？」

そして――大量の虫達が一斉に俺に迫ってきて俺の視界は真っ赤に染まっ

た。

大量の虫達が俺の全身を覆い被さるかのように、俺を包み込むかのように喰らいつい

てきた。

ザワザワと獲物に群がる大量の虫達。

だが、その気持ち悪さもまた、俺に闘志を起こさせてくれている。

そして顔を虫に覆われる中で、俺は口を塞がれる直前に、その言葉を言い放っていた。

「なら、この不可能を可能にしてみせよう」

第十七話。背中の暖かさ

その言葉を言い放った瞬間、俺は自身の体が軽くなつていくのと俺の周りから音が消えていくのを感じた。

それは、まるで空中に浮かんでいくような無重力空間を漂うような不思議な感覚で、だけど不思議な事にそれは決して嫌な感覚ではなかった。

そして、体が軽くなつたのと同時に、虫達に遮られていた視界も良くなつていく。

瞼を開き辺りを見渡すと俺に覆い被さっていた虫達が一斉に俺から離れていくところだった。

まるで何かから逃れるかのように。

虫達が体から離れていく感触を感じながら自分の体を改めて見渡すと動かさなかった体全体からは赤い、緋色の光が溢れていた。

その光の源を探すとその光は制服のズボンから溢れていた。

その光源の中心はズボンのポケットだ。

ポケットに左手を突っ込んで光源の元である緋色に光り輝いくDフォンを取り出すと俺はそれを握りしめたまま、熱い左手の甲をキリカに向けた。

直後Dフォンが勝手に動作し、俺自身を写真に写す！

すると、今までにない不思議な和音のメロディーが動作音として鳴り響き

。「わあー！」

キリカの驚く声が聞こえた。

霧深い公園の景色が赤と金の色に包まれた。

俺の周囲を蠟燭の炎に似た無数の緋色の光が回転していく。

その炎を見つめると炎が変化し、一条の光の線となつて俺の頭の中に入ってきた。

頭の中に入った光は俺が持つ力の使い方の情報として頭の中に流れ、ヒステリアモードの俺はその情報により俺の力の使い方を理解していく。

そして使い方を理解した俺は俺を襲った蜘蛛を3匹捕まえ、その蜘蛛の中から一匹を選び、その蜘蛛に触れた。

その蜘蛛の物語に『干渉』してその物語の存在性を『変化』させて俺が思い描いた『イメージ』を具現化させる為に。

『不可能を可能にする男』。

『エネイプル
』

それは俺自身を示す二つ名。俺自身の事だが、その姿、その存在とは一体どんなものなんだろうか？

俺が思い描くその物語とはなんだろうか？

その姿を想像し、蜘蛛に触れながら自身の姿をイメージすると自分自分が想像した姿へと俺の姿が変化していく。

「うわ、わあー。変身だー！

変身ヒーローになったー」

キリカの驚いた大声が聞こえた。

『主人公は変身する事で強くなる』ものだからね！』

俺が思い描いた姿は、俺自身が着慣れていた前世での格好。

そう、トレーニングウェアから東京武偵高の制服姿へと俺の姿は一瞬で変化していた。

その制服に使われている防弾繊維や防刃ネクタイも俺自身のイメージから具現化したものだ。

手に握っていたDフォンは緋色に光り出したかと思えば何故か細長い棒状のものに変化していた。

光が収まるとその棒状のものの姿がはつきりした。

それは俺がかつて使っていた細身の刀。

その直刀に近い形状をしたそれは……スクラマ・サクス。

香港で孫のレーザービームによりクリスマスツリーに変化し、今はヴィクトリア湾の底に沈んだはずのそれが目の前にあった。

(これは流石に予想外だ。)

……これも武器をイメージしたせいかな？

確かに刀欲しかつたけど……)

「そして主人公は変身してからが本番だよー」

戸惑いながらもスクラマ・サクスを手に取り、キリカに向かってそう告げながら動かないでいる蜘蛛に近づく。

残った蜘蛛2匹を使い、その内の1匹に触れて体を『変化』させていく。

流れ込んできた情報によると俺は他のロアに接触する事でそのロアの存在を改変できるといふことになる、らしい。

らしい、というのは全ての能力を把握したわけではないからな。

俺が知ったのはロアに触れる事で『干渉』して、新たなロアや事象、モノに『改変』できるといふ能力を俺のロア、『不可能を可能にする男』が持つという事だ。

赤い蜘蛛に触れると蜘蛛は俺がイメージした形に変化していく。

前世で俺が長い間、使っていた相棒へとその形を変えていく。

「うわ、うわあ。蜘蛛が銃に変化した!?」

興奮したキリカの声でBGMに蜘蛛を銃に変えた。

キリカの言葉通り、一匹の蜘蛛は一丁の自動拳銃へとその姿を変えていた。

俺が前世で使っていた、自動拳銃の一つ。

ベレッタM92Fへと。

武器を作り出す事に成功した俺だが俺の能力はこれだけじゃない。

「驚くのはまだ早いよ?」

さあ、糸を出してごらん」

俺が片手で触れていた最後の蜘蛛は、俺の指示に従い公園の木々に向けて口から糸を吐いた。蜘蛛の口から吐き出された糸は木の枝に掛かると一瞬で蜘蛛の巣を形成した。

『糸を吐き出したらすぐに巣が出来る』。

そう俺が想像しながら蜘蛛に触れた事により、その想像がイメージ力の具現化により現実には蜘蛛の巣となった。俺のイメージ通りに。

吐き出された蜘蛛の巣は網目状に広がっていた。

やがて霧が立ち込める中、強風が吹き蜘蛛の巣を飛ばした。

飛んだ蜘蛛の巣はキラキラとした光の粒子となり、その粒子は飛ばされた蜘蛛の巣の真下にいた俺に降り注いだ。

その光を浴びた俺は驚くほどポジティブになった。

何をしても今なら成功する。

そうとしか思えなくなっている。

何をしても良い事しか起きない。そういつた加護を受けたかのように。

まるでメーヤの『強化幸運』^{ツェントゥラ}を受けた時のような。

「風で飛ばされた蜘蛛の巣かあ。『幸せの前兆』の都市伝説の中にある『風で飛んできた蜘蛛の巣は幸運の印』を現したんだね！」

なるほど……私が放った『人を食べる虫』の都市伝説に、その蜘蛛の物語に『干渉』して『改変』したんだね。

人を食べる虫だったその子に蜘蛛の巣を作らせてその『巣が風で飛ぶ事で幸福を与える存在』としてその子の存在自体を『改変』したんだね」

『物知りキリカ』の異名の通り、蜘蛛の巣に纏わる都市伝説についても詳しく知っていたキリカが解説をしてくれた。

「ああ、蜘蛛の口アだから蜘蛛に纏わる怖くない都市伝説としてその物語を変えてみた

んだ」

「そんな事が出来るなんてね……やっぱり君は面白いね！

面白いから、危険だから次は確実に殺さないかね……」

「出来れば見逃してくれるとありがたいんだけどね……」

「それは駄目だよ？」

もう、正体を明かした以上は……君を逃せないよ。

というか、何で逃げようとしなの？」

キリカが不思議そうな顔をしながら俺を見つめているがそう、俺は自分から逃げようとは一度もしていない。

襲いかかってきた虫達を排除してはいるが、逃げるという行動は一度も取っていない。

「なんというか、逃げたらいけない気がするんだよ」

「気がする、つてその虫達、超キモいよ？むしろ虫を3つくつつけた漢字の蟲って感じだよ。」

「それは嫌だね。嫌だけど……ここで逃げたら、嘘になるからね」

「嘘？」

「ここで逃げたらキリカ。君と過ごした期間とか、友達って事とか、諸々がそうだった事

が全て嘘になりそうだからね！」

キリカとは俺が一文字として目覚める前から、元々の一文字疾風の親友として結構上手くやってきたんだ。

ここで逃げたら親友として過ごしてきた時間が、思い出が、それらが全部嘘になるみたいで、俺は嫌だった。

「あ……あは、あはははは!!? うん、いいんだよ、モンジ君、それはそれで！」

「だって嘘だもん」

「……え？」

「みんなの記憶の中に、さりげなく私が混ざりこむ魔術つてのがあってね」

「……うん」

「私と過ごした大半の記憶は嘘だよ。私と君は知り合ってから実はまだ一週間くらいだしね」

「……え？」

キリカが言った言葉に、絶句してしまふ。

「そうか。君は記憶も操れるのか……」

十二宮中学での出来事が脳内で再生された。

誰も覚えていなかった『トイレの花子さん』の噂。

まるで記憶を改竄されたかのように話す、四条先生。

噂があつた事すら知らないままで女子トイレを利用していた、後輩達。

一つ、一つのピースがジグソーパズルのように当てはまり、ここでようやく繋がった。

彼女は虫を操り、その虫達に襲われた人やロアからキリカは精神や記憶を、虫達が人

やロアの肉体を食べていたんだ。

『魔女ニトウレスト』。君が操る虫は人を、ロアを、記憶を、物語を食べる……それはこ

う言う意味だったんだね」

「うん！大正解！よく解りましたー！

では当たったお祝いに……」

キリカが両手を広げると

「四方攻めからの虫さん達によるお・しよ・く・じ・ショーにご招待しまーす！」

俺の四方を固めるように虫が集まった。

俺を完全に取り囲む形で。

「それはご遠慮したいな……」

「ダ・メだよ！だってそのショーの餌は……」

「餌は？」

予想はつくが、外れている事を願って聞き返す。

「君だからね」

「やっぱりか……」

「うん。残念だけど……ここまで明かしちゃったからにはね。

バイバイ、モンジ君。やっぱり君の事は、好きだったよ」

予想通りの言葉と本日3度目かになる告白の言葉を言ったキリカが、右手の人差し指で俺を指すと虫達が一斉に襲いかかってきた。

『『干渉』、『変化』……糞、数が多いな』

俺は能力によって虫達を排除しようと試みたが……駄目だ。

1体1ならその物語に『干渉』して『改変』できるが複数を、それも四方を囲むように展開している虫達を同時に改変するなんて事は出来ない。

少なくとも今現在の俺では……。

銃を撃つて虫達の排除を試みるが数が多過ぎる。

すぐに弾切れを起こした俺に虫達が一斉に覆い被さってきた。

スクラマサクスで払うが数が多い。

(ああ、糞……これはさつきと同じ状況だ。

能力に目覚める前と同じように顔面にまで蜘蛛やワームが覆い被さって来やがる！

ちきしようー、気持ち悪いなー)

抵抗する間もほとんどなく俺は虫達により襲われた。

頭から全身を包み込むかのように。

何の抵抗もできなかった。

いや、違うな。

抵抗しなかったんだ。

本当は……！

正直な話。

こうなる前に俺は逃げようと思えば逃げられた。

キリカはそれくらい油断というか、猶予をくれていた。

だけど俺は逃げようとしなかった。

出来なかった。

ヒステリアモードの俺には。

いや、違うな。素の俺でも逃げようとはしなかっただろう。

キリカを、女の子を置いて、そのまま逃げ出す事なんて事は。

「わっ、こんなに凄い目に遭っても、まだ心が折れないの!?」

キリカは全身を虫達に覆いつくされている俺にやたらと驚いていた。

……そうか。

さつきキリカは言っていた。

まずは自分が精神を食べてから、虫達が肉体を食べる、と。

逆に言えば、俺の心が折れない限り、キリカは、虫達は俺を食べれないんだ。何故ならここに居るのは現実の虫ではなく、あくまで『ロア』の蟲だからな。

だからこそ、ルールが存在しているんだ。

「がぼ(づ)ぼがぼつ」

口を開こうとしたが、蟲が口の中に入ってきて開けなくなつた。

(死ぬ！)

『殺しても死なない男』とか呼ばれてたけど、これは死ぬ！

精神的に死ぬ！

口の中で蟲が蠢くとか死んだ方がマシだー!!?)

いきなり心が折れそうになつた。

「何が言いたいのよ、もう……」

キリカの呆れたような声はすっかりいつも通りな調子に戻っている。

まあ、心に余裕が無いのは、迷いがあるのは、むしろ俺じゃない、な……。

だとしたら伝えないといけない。

キリカに。

『ロア』すらも喰い尽くす魔女『キリカⅡニトウレスト』に。

「げほっ、ごぼっ、うえー、ぺっ、ぺっ！」

口の中に入っていた蟲達を吐き出しながら叫ぶ！

「俺は、————それでもキリカの事、大好きだよ！」

顔面には、虫達が這い回っているせいで、キリカの姿を見る事は出来ない。

だけど声なら届く。

「……偽りの記憶なのには？」

「偽りでも、キリカはキリカだ！」

ならそれでいいっ！」

「女の子はみんな役者だよ？演技上手だよ？」

「それでも、俺は————」

キリカの声には、若干の戸惑いがあった。

「そんな事は、嫌う理由にはならない！どうしてもキリカを嫌いになれないんだ！」

ヒステリアモードの今、俺は女性に優しい、甘くなっている。

だが、それだけの理由でこんな事は言わない。

「俺には君が必要だ！」

「……そっか」

キリカの声に、申し訳なさそうな響きが込められる。

「じゃあ……ごめんね。本当は絶望とか、怒りとか、増悪をいっぱい引き出して、それを私が食べて……その意識を失わせてから、ゆつくり蟲達がモンジ君の体を食べて、そのDフォンを奪い取るつもりだったんだけど……」

「それは無理だよ。俺がキリカを嫌いになるなんて事はまずあり得ないからね。キリカ、君は人選を間違えたんだよ。仲良くなる相手として、ね」

そう、俺は余程の事がない限り、仲良くなった相手を嫌いになる事はない！

特にヒステリアモードの俺は。

まあ、いきなり虫とか蟲で襲われてはいるが、前世でも実銃とかで撃たれたりしてるしな。

「……みたいだね。だから、ごめんね、モンジ君。なるべく痛くないようにその子達に食べさせるからね？」

「……やつぱり食べさせるのは変わらないんだね」

「うん？だって、その子達は私の攻撃手段でもあるから」

「攻撃手段？」

「食べちゃえ♪　　って言えば、みんなが一斉にバクバクバクー！　　つとー！」

「やっぱりかー」

「それじゃあ一斉に……」

ぞわぞわぞわー!!?

足元からも大量の蟲達が溢れ出して、俺の体を包み込んだ。

全身を蟲達が駆け上がり、制服の下。肌までもわらわら群がってきた。

羽虫とか、蟲同士が重なる音とか、謎の濡れた音とかが耳に入る。

あまりの気持ち悪さに意識が飛びそうになる。

……だけど、どうしてだろうか。

意識を飛ばされそうになるが飛ぶ事にはならない。

なんとなく不思議な感じを背後から感じてしまうからだ。

背中が熱くて。

その熱さが、俺の意識を繋ぎ止めてくれているような。

「あれ？モンジ君」

「もいもいっつ……」

既に口を封じられている俺は返事を返せなかった。

「うん、モンジ君。気づいてないかもしれないけどさ」

「もいっつ……」

「どうして、モンジ君の背中が虫で包む事が出来ないの？」

キリカがその疑問を発した瞬間だった。

ピピピピピピピピピピピピピピピピピピピピピピ！

突然、携帯の着信音がたましく鳴り響く。

しかも俺が驚いている間にそいつは勝手に鳴り止み、

『もしもし、私よ』

スクラマサクスとなったDフォンからそんな電子音っぽい声が聞こえてきた。

『今、貴方の後ろにいるの』

「なんせナイスバディで、なおかつ様々な所がチラリズムの塊ですからね」

「も(も)も(も)？」

「あははっ！　　そっか、モンジ君からは絶対に瑞江ちゃんを見る事は出来ないんだ。背後にいる存在だから」

「見た瞬間殺しますしね」

「も(も)ーも(も)っ(っ)？」

明らかに助けに来たっていうタイミングでの登場なのに、あんまり助けに来たという空気がないのは一之江らしいな。というか、助けに来た筈なのに止めを刺しに来た感があるのは気のせいだよな？

いろいろとツツコミ所満載な一之江だが、少なくともナイスバディではない事は、以前抱きしめた時に解っている。

まあ、指摘したら刺されるから……確実に背中を刺してきそうだからしないがな。

「そっか、『月隠のメリーズドール』。それが瑞江ちゃんのロアなんだったんだね」

「はい。私は対象の背後に常に存在する事が出来るロアですから。つまり、このハゲの全身をどうにかするには、私をまずなんとかする必要があります」

「も(も)も(も)も(も)っ(っ)？」

「貴女の蟲達も、魔術も、基本的に『精神汚染』という形での侵略型。つまり、どこか一

箇所でも貴女が侵食出来ない場合、相手を食べ尽くす事は出来ない……違いますか？」

「あはつ、どの辺りから気づいた？」

「モンジに好き好きアピールしまくったのは、後で『結局助からない』と絶望させるため

だとみましたからね」

「も(も)も(も)も(も)も(も)も(も)も(も)こつ!!??」

「貴方はちよつと黙っていてください蟲野郎」

「も(も)も(も)……」

と、い、う、か、一、之、江、の、声、が、や、た、ら、怒、っ、て、い、る、よ、う、に、感、じ、る、の、は、気、の、せ、い、か、？

今、の、言、い、方、も、ま、る、で、浮、気、現、場、に、踏、み、込、ん、で、き、た、奥、さ、ん、み、た、い、な、感、じ、だ、つ、た、し……い

や、何、を、考、え、て、い、る、ん、だ、俺、は、？

一之江だぞ。毒舌ドS（見た目は）清楚なクール娘な彼女だぞ？

きつとあれだ。怒っているのはこんな早朝から俺が勝手に出歩いて、コード探しなん

てしたせいで魔女に挑んで消えそうになっていたからだ。

俺が消えたら一之江の噂にマイナスな事になるからな。俺が消えれば一之江はあつ

さり殺られたマヌケな主人公に捉えられた口アとか呼ばれるらしいからそれで怒って

いるんだ。

きつとそうだろう。

「なるほどね。大体正解かな？」

「まあ、その『正解』の言葉も信じませんけどね」

「魔法の口車だもんね」

「ええ。乗るのはよつぽどのお人好しか、バカだけです」

「これも多分俺の事なのだろうな。」

だが、ハゲという所だけは後で否定しなくては。

「これでモンジ君の能力も全部解ったよ、瑞江ちゃん。『百物語の主人公』には、手に入れたロアを自分の能力のように使役する事が出来る……」

「ええ、そのようです。私も昨晚知ったばかりですけどね」

「なるほど……それは……おっかない能力だなあ」

キリカの声に、剣呑な響きが交ざった。

今までは余裕のある可愛い魔法的な乙女の声だったが、今、彼女の内部でスイッチが変わったみたいだ。

まるで、理子が『裏理子』になるように。

「おっかな過ぎて、すっごい興味が湧いてきたよー！」

どこか病的な空気を含む口調で、魔法として、調べずにいられない実験体を前にした

かのようなそんな感じで俺を見つめている。

彼女の中で俺は『ただのお友達役』から『興味対象』に移行したようだ。

その目を見つめると彼女の中に引き込まれそうになる変な感覚を感じた。

正しく魔女だ。その内側に、どんな深い闇を秘めているのか、想像もつかない。

「彼女は貴方が思っているような善良な存在ではありませんよ。」

一之江が背中から警告してくれるが、それも解っているんだ。

キリカという魔女は、それこそ倫理的に許されなくらいに大量の犠牲者とか、悪い事なんかを繰り返して、ここに存在しているのだからかな。

だけど、それでも。

そんな程度で俺の心を折る事は出来ないんだ。

「フウ」

一之江の呆れたような溜息が背後から聞こえた。何故だかその溜息が、彼女の吐息を感じただけで心強く感じる。

「……蟲さん達。こちらを向いて……」

一之江が呟きながらその手を俺の口元に触れさせると、その周囲にいた蟲達がシューッと消滅していった。

『振り向いた相手を確実に抹殺する』。

蟲達すらも、その状態の一之江のルールには逆らえないのか。

一之江の声に、彼女の姿を見て確認してしまった蟲達は、成す術なく消滅していった。これが一之江のロア、『メリーズドール』の能力……。

『見返り殺害』！初めて見たけど凄いな！」

キリカの歓喜した声が聞こえた。

なんだその中二病な名前は……。

いや、まあ、人の事は言えねえけどさ。

「それでは、言いたい事を好きにだけ叫んで下さい」

「ああ。任せて。ちゃんと伝えるから」

俺は顔面と全身を覆う蟲達をさらに素手とスクラマサクスの刀身で蟲達を軽く払うと、キリカを軽く睨みつけながら叫んだ。

「キリカ！」

「モンジ君？」

きよとんとした直後……真紅の目が、とても濃密で魅惑的な視線をしながら俺を見た。

食べたくて食べたくて仕方ない。ご馳走を見つけた。そんな風に俺を見ている目だ。

「俺は、君ともずっと一緒にいたいんだよ！君が魔女だろうとなんだろうが関係ない！」

トン、と背中が押された感触がある。

俺は、その勢いに乗って走り出そうとする。

だが、その一步は蟲達に完全に挟まれている身では、踏み出す事は出来ない。

「あはっ！無駄だよモンジ君！その足は完全に封じているからね！」

「その距離を無意味にするのもまた、私のロアの能力です」

一之江が俺の背中告げると、俺の背に手を当てたまま言う。

「さあモンジ、行きたい場所を叫びなさい」

「俺はキリカの側に行く！」

そう、叫んだ瞬間だった。

不意に足が軽くなった。

いや、足だけじゃない、自分の身体が本当に『一瞬』で、キリカと俺の距離を詰めて

いた。

これは……『短距離絶界橋』イマジナリ・ジャンプか？

疑問に思う間もないくらい、技の発動をほとんど感じる事ないくらいあつという間に

移動していた。

どうやら俺は猴や孫が使う『筋斗雲』きんとうんのような『瞬間移動』テレポルトの能力でキリカの側まで

移動したようだな。それも一瞬で。

「え、凄いー」

「キリカの声で我に返り後ろを振り向かないように気をつけながら元々いた場所を見ると……足を捕らえていた蟲達が、いや、俺の全身を包んでいた蟲達は、元々俺がいた場所に置き去りされたままだった。

俺の全身を覆っていた蟲達が置き去りにされた事実から考えるとどうやら一之江の持つ能力は、彼女が使えば俺にも使用出来るという事になるようだな。

『想起跳躍』です」

「凄い、凄いね！言葉を聞いた対象の場所に、空間を超えて移動する能力……瑞江ちゃん！モンジ君！貴方達、本当に凄いよ！」

間近に迫ったキリカが、目を大きく見開いて俺達を賛辞してくれていた。

……おそらくだが、本気で純粋に喜んでいるのだ、この顔は。

『自分の予想を超える相手。それが魔女の弱点です』

耳の後ろからではなく、頭の中にその声は響いてきた。

ああ、こうやって聞かせるから、電話がなくても『もしもし私よ……』は聞こえるのか、と妙な納得をしつつ、同時に一之江の思考が流れてきた。

魔女の弱点っていうのは、どうやらどの時代でもあまり変わらないらしい。

魔女は、知識が豊富だから……様々な予想や予測は既に終わってしまったよう

だ。

だからキリカが予想外の返事の時に大笑いしてくれたのも、今なら納得出来る。

『今の彼女はとても油断しています。だから、今私がころ……』

(待ってくれ！)

おそらく一之江のこの声は俺だけに聞こえるもの。

だから俺も心の中で強く彼女を止めた。

一之江にキリカを殺させる？

そんな事、出来るわけないだろう。

「キリカ！」

俺はキリカの顔に、自分の顔を近づける。

間近で見るとその瞳は、爛々と赤く輝いて……とても、綺麗だ。

「あはっ、流石だね、モンジ君。私をこんなに楽しませてくれたのは君が初めて。正に初

体験の相手は君だねっ！」

「その言葉は違う所で聞きたいな……君はとても魅力的だからね！」

ヒステリアモードの俺がそう言うと、キリカは恥ずかしそうに顔を赤くして、一之江は俺の背後をツンツングサーツと何か尖ったもので刺しやがった。

「痛だだだだっ」

「真面目にやりなさい」

「どうする？ 私を瑞江ちゃんに殺させる？」

キリカがそう言うのと、一之江の殺気が背後で高まっていくのを強く感じる。

背後の一之江の事を考える

(一之江はキリカとも仲良くしていたが……ここで『ロア喰い』を殺さない選択肢を選ぶほど、優しくもないな。

キリカはどこか満足している表情をしているし……仕方ねえ)

『ロア喰い』を、キリカを一之江に殺させるという選択肢は却下。

キリカは満足した表情で、まるで自分の予想を超えた存在になら、殺されてもいいかのような笑顔を浮かべているが殺害なんて出来ない。

かといって、このまま見逃すなんて出来ない。

なら俺がすべき事は……。

「いや、俺はこうする！」

俺は制服のポケットに手を入れて中かDフォンを取り出して

「何を？」

一之江の声はスルーして。

ピロリロリン！

キリカの、その笑顔をカメラに収めた。

「ふえ?」

「これで嘘じゃない記録が出来たね。君はもう俺の大事な物語だ!」

俺が告げると、背後で絶句したかのような気配があつた。

だが、俺はキリカの返答があるまで、じっとその瞳を見つめる。

見つめているとキリカの顔がみるみる赤くなつて……

「ぶはっ! あはははははははははは?」 お、面白い、面白いよ、モンジ君っ! あひ、あはは

ははは!!? うひゃー、苦しい! ダメ、笑いしぬ! あははははははは!」

「あれ? 俺今おかしな事言つたか?!?」

キリカの爆笑っぷりは予想外だった。

「あはははははは!!? ううん、凄く格好良かったけどね。

モンジ君っ! つて言つて思わず泣きながら抱きついてもいいかなー、つて思つた

けどさ、あはっ」

流石キリカ。

男がされると嬉しい行為をよく知っているな。

だが、それをしなかつた理由がやっぱりあるわけで。

「ほら」

キリカのその言葉で……

「うん？」

チクリ。

自分の背中に何か刃物的なものが当てられている事に気付いた。

「貴方は誰にでもそうやって言うのですね」

一之江の地獄の底から響くような声が背後から聞こえた。

「ちっ、違うよ！そう言うんじゃないよ！」

思わず浮気がバレた亭主みたいな事を言ってしまった。

「ちなみにね、モンジ君」

「あ、うん、何かな、キリカ？」

って痛い痛い痛い痛い痛いっ、刺さってる、何か冷たいものが俺の背中に刺さってるっ！」

「私達ロアにとつては、『自分の物語になれ』って、プロポーズみたいなものでね」

「痛でええええええええええ……って、え？」

プロポーズという言葉に、痛みも忘れてキリカを見てしまう。

「お前のロア人生、俺のロア人生にしてやるよ……みたいな。未来永劫、一つの物語として共に歩もうね、みたいな意味になるの」

「え？ 本当か？」

「本当本当！」

それは確かにヤバい。

『一之江^君を俺の大事な物語に出来るように頑張るから』

俺は昨晚、一之江にも『俺の大事な物語にする』という発言と似たような事を言い、そしてキリカにも今言っちゃまったからな。

「スケコマシさんだね、モンジ君ってば」

その評価、いらん。

女性と関わりたくないんだよ。

普段の俺は。

だが、悲しかな、こっちの俺は、クラスメイトの2人にさりげなくプロポーズまでしまっている。

「人生って上手くいかないものだよねー」

「ですね。でもいいじゃないですか。貴方にはピッタリな^{相手}パートナーがいますから」

「へ？ 誰だ？」

「この間の四条先生とでもバラバラしてて下さい」

「それはごめんこうむりたい」

「モンジ総受けて」

「言葉の意味は解らんが、とにかく嫌な響きだな!!?」

「えいえいつ」

「やめろー！ 背中にこれ以上刺すな！」

俺の背中を何か鋭利なものでザクザク刺す一之江。

それが何なのかは解らんが、解らん方がいいな。

一之江が背後にいる限り、刺されても死なないはずだし。

痛いけどな……。

「ふふつ、まあ、いつか」

そんな俺達を見つめていたキリカは、ふう、と溜息を吐き出すと

「こんなにワクワクさせられたのも、ドキドキしたのも初めてだから……」

「うん？」

「だから、そうだね。もう少しモンジ君の側にいるのも楽しいかもしれないね」

「え？ それじゃあ……」

「うん。面白くない物語達を見せたら食べちゃうけどね？」

「うっ……つまり、それは……」

「はあ……貴方は先程、キリカさんを写真で捉えた事により、魔女と契約してしまったのですよ。」

キリカさんが満足する物語を見せ続けないと、貴方ごと食べられてしまう、と」

「ちよっ、嘘だろ!!?」

「あはっ！

不束者ですが、よろしくお願いします、マスター」

「マスター!!?」

「うん、私達ロアを使役する事が出来るマスターだからね。」

それとも、ご主人様がいい？

旦那様がいい？それとも、あ・な・た？」

「そのネタは既に私がやってしまいました、キリカさん」

「おおう、既に夫婦漫才も抑えていたとは、流石だね瑞江ちゃん」

「いえいえ、それほどでもありません」

「あはははっ！」

「ふう……」

キリカの突き抜けるような笑い声と、背後の呆れるような、諦めるような……しかし、

どこか嬉しそうな吐息。その二つを聞きながら、俺は霧が晴れていく公園を眺める。
「さて、俺は2人の美少女をお持ち帰りしていいのかな？」

第十九話。 始まりの終わり

「冗談は存在だけにして下さい」

「存在を否定された!?」

「流石にお家に行くと、従姉妹さんが気にするだろうからね。私はお家に帰るよ」

「え? お家つて、ええと……」

キリカのような魔女に家と呼ぶべき場所はあるのだろうか。

童話に出てくるような森の中にあるひっそりとした小屋や洋館だろうか?

「この街には長居する事になるみたいだからね。少なくとも残り98個の物語を集めないといけないでしょう?」

「あ、あー、うん。そうだね。そうなるな」

残り98個。

まだ98個というべきなのか、もう98個というべきなのか。

どちらにしても全て集め終わるまで先は長いな。

「モンジは女を口説くのは得意ですが、それ以外はきちんと教えていかないとなりませんからね。私達の主人公になって貰う為に」

「そうだね。一緒に叩き込んでいこうね、瑞江ちゃん」

「ええ、ザクザクグサグサ叩き込みましょう」

「うんうん。モグモグムシヤムシヤ叩き込むよ！」

「ははっ、可愛い2人に教えて貰えるなんて光栄だね。

「だけど2人が言う言葉の擬音が大変嫌なものな件について、ちよつと異議があるんだけど」

「却下（です）！」

2人同時に却下された俺は、肩をがっくりと落としながらもすぐ様2人に話しかける。

すぐめげるだけでは女の子を幸せになんて出来ないからね。

それに、こんなに可愛い2人が俺の側にいてくれたんだ。

俺だけが落ち込んでるわけにはいかないからな。

「よし、それじゃあ帰ろうか！」

直ぐに思考を切り替えて、正面のキリカと背後の一之江に告げる。

「うん。そうだ……あ！」

「うん？」

「どうしたんだい、キリカ？」

「ちよつとモンジ君に聞きたい事があるんだ」

「私もあります」

黙つてキリカが喋るのを聞いていた一之江がそう告げた。

「瑞江ちゃんも？」

「ええ、おそらくキリカさんと同じ事です。

ですからキリカさんが言つて下さい」

「うん。それじゃあ、私が聞くね」

「うん。何かな？」

「モンジ君。」

そもそも君つて結局、何者なのかな？」

俺に近づいて来ながらキリカは何が面白いのかニコニコ笑つて、俺の顔を覗き込んできた。

魔女として、調べずにはいられない興味対象を見る瞳で。

その目で見つめるキリカは、少し機知に富んだ答えを求めているみたいだ。

でも、良かった。それには決まり文句があるからね。

「ただの高校生だよ。わりと偏差値高めな、都市伝説（変わり者）が集まる学校のね」

俺がそう答えると、キリカは……

小さく笑ってくれた。良かった。良かった。

俺の背後からも「クスクス」と小さく笑う一之江の声が聞こえる。

「あはははははー！モンジ君ってやっぱ面白い！」

うん、うん。君となら色んな物語が見れそうだね」

「そうか。じゃあ今回の件は、これにて一件落着、って事で」

「うん！それじゃまた、学校でね」

「ええ。私がない時にコード探しとかはしてはいけませんよ」

キリカは、自分が生み出した霧に隠れるように消えて。

一之江は、まるで忍者のように音もなくいなくなっていた。

そして、早朝の公園に一人残された俺は……

「……………ふう……………どうなるんだろう。本当に」

背伸びをしながら呟いた。

一之江の『メリーズドール』の能力は、かなり半端ないものだった。

キリカの『魔術』や『知識』も、きっと凄いものなんだろう。

そんな2人と共に生きていけるのは心強いし、嬉しいのだが……。

『俺の物語』としては、どうなっていくのだろうか？

『不可能を可能にする男』の能力は凄かった……と思う。

思うが……まだ能力を把握しきれていない分の不安がある。

まだまだ底が知れない能力という不安が……。

それに、『101番目の百物語』ハンドレッドワンに至っては、意味不明だ。

普通の百物語なら解る。

だが、101番目の百物語って何だ？

百物語なのに、101番目の時点で異質だろ。

「どうなるんだろうな、本当」

「どういう物語にしているのか、とっても楽しみだよ。お兄さん」

突然、真横からそう声をかけられて声が出た方に振り向くと

「や、やあ。ヤシロちゃん。おはよう」

俺の真横にヤシロちゃんが立っていた。

「おはよう、お兄さん。上手く2人をたらしこんだね？」

「ヤシロちゃんみたいな年頃の女の子がたらしこんだとか言っではいけないよ」

「ふふっ、はい」

ヤシロちゃんは注意すると、素直に返事をしてくれた。

ヤシロちゃんの見えた目は7、8歳くらいだが年齢は知らない。

本当の年齢はもしかしたら見た目よりも上なのかもしれないけど、女性に年齢なんて

聞けないからね。

まあ、外見は幼女だし幼女枠でいいか。

それにしてもヤシロちゃんのなんと言うか、仕草とか、雰囲気誰かに似てると思つたらあの人にソツクリなんだよなあ。

この前会つた時も白い帽子被っていたが、そういう帽子好きなどところかも似ている。

ひよつとして知り合いとか、親戚だったりするのだろうか？

「それでお兄さんはどんな物語を作っていくつもりなの？」

「そうだなあ……かなり難しいんだけど……」

「あれ？ 何か思う事があるんだ？」

ヤシロちゃんは不思議そうな声を上げて俺に向き直つた。

幼女に不思議そうに見つめられる俺って……なんと言うか。

『この人、ちゃんと考えてたんだ!!?』って言われているような気がして何か嫌だな。俺の考え過ぎだとは思ふが。

俺もヤシロちゃんを向く形になり、せつかなのでしゃがみ込んだ。

この角度でもギリギリ顔は見えないが、愛らしい口元は見えた。

「うん。『不可能を可能にする男』の物語はまだ解らないけど『百物語』は終わりのない

物語、ネバーエンディングなストーリーにしようかな、と思ってるよ」

「ふえ？　ハッピーエンド、とかじゃないんだ？」

「それだと全部終わっちゃうからね。キリカも、一之江も。」

ハッピーエンドだと彼女達の身が危ないかもしれないだろう？」

ハッピーエンドは一見すると、全てが解決してめでたし、めでたしとなる、と思われるが、俺達ロアからして見ると『存在性』のアピールを終わらせる場所としての意味合いも含まれる。

物語が終われば、俺達ロアは消えるのだから。

「うん、そうかもしれないね」

「だから、俺はこの物語を終わらせない。百の物語を集めても、俺の物語はずっと続けてみせるよ、ヤシロちゃん」

「へえ……」

「百物語なのに、俺は101番目の物語なんだよね？　つまり、規格外のハンドレッド

ワンなわけだ。だから、俺の物語はそのまま繋げてもいいはずだ！」

「出来る、って思ってるの？」

「うん。俺は『不可能を可能にする男』でもあるからね。」

だから終わる物語を終わらせないように変えてみせるよ、ヤシロちゃん」

「ぶっ！ あははは!!？」

俺の発言の何処かが、笑いの琴線に触れたらしく大笑いを続けるヤシロちゃん。

「ほんつと、面白いね、お兄さんつて」

「そうかな？ ヤシロちゃんみたいなの可愛い女の子が喜んでくれるのなら良かったよ。」

「可愛い女の子は笑顔が似合うからね！」

「ふふつ、私まで口説いちゃうんだ。お兄さんつたら」

「女性を幸せにするのに、年齢なんて関係ないからねっ！」

ヤシロちゃんに微笑みながらそう伝えると彼女は、身につけている帽子をつい、つとちよつと上げて。

「なら、期待してるよお兄さん。私の事も幸せにしてくれるっ、つて」

帽子の下にある、とつても綺麗な顔でニッコリ微笑んでくれた。

「…………え？」

だが、やっぱりその帽子の下にある顔に覚えがある気がして、俺は戸惑う。

「お兄さんのDフォンを、『8番目のセカイ』に接続出来るようにしといたよ」

「え、あ、ありがとう」

「ふふつ、それじゃあねお兄さん。バイバイっ」

ヤシロちゃんはそのまま手を振ると、スーッと空気に溶け込むように消えてしまった。

ロアには、瞬間移動や突然消える能力が標準装備されているのだろうか。

「……帰るか」

一人公園に置いてけぼりにされた俺はランニングしながら公園を後にした。

家の近くに帰ってくると、ヒステリアモードが切れた俺はアスファルト道端の上に四つん這いになり自己険悪に陥った。

（ヒス俺の馬鹿野郎ー!!?）

何やっちゃっててくれたんの!!?

何が「俺の大事な物語だよ」だ!

何が「女性を幸せにするのに年齢なんて関係ない」だ!

ああ、もう……死にてえ。

誰か俺にもう一度『羅刹』とか、『メリーさん電話』をかけてくれー!

糞、朝っぱらから変な女に『死ぬ』とか言われて、キスされてヒスった挙句に、魔女に襲われてプロポーズしちまうとか。ああ、チキショウー!二度寝してやるー!!?）

一人、内心で絶叫していると通りかかる人々に不審者を見る目で見つめられた。

ああ、なんつうか……不幸だ。

『幸せの前兆』とかの加護なんて嘘だな。

朝から女子達に絡まれるとか不幸としかいえんし。

プロポーズとか、誤解しか与えてないしな。

その後、帰宅した俺は宣言通りに二度寝したが、夢の中で和服を着た少女に話しかけられるという不思議な夢を見る事になる。だが俺はその夢が新たな騒動の始まりだという事に、この時、まだ気づかずにはいた。

番外編。

番外編Ⅰ。とある休日の過ごし方

つい最近までただの高校生だった……少なくとも自分ではそう思っている俺こと、遠山金次は、ある日突然、死亡してしまった。死んだはずの俺が目覚めると、そこは全く見覚えがない学校の教室で、これまた見覚えのない少女に声をかけられた。

戸惑いながら俺は自分の体を見ると、なんと、俺の姿は見知らぬ男になっていた。疑問に思った俺だが、疑問に思った瞬間、俺の頭の中で様々な記憶が呼び起こされた。俺、遠山金次は、何故だか、全く知らない人物に憑依してしまったらしい。

そう、一文字疾風の体に……。

どうやら俺は転生とか、憑依とかをしてしまったようだ。

戸惑いながらも帰宅しようとした俺は背後から声をかけられる。振り返るとそこには白い少女がいて、彼女に話かけられて、謎の携帯電話を渡される。

渡されたそれは、Dフォンと呼ばれるもので、『本当にあった都市伝説』に繋がるサイト、『8番目のセカイ』に接続できる唯一の端末だった。

帰宅後、俺はそのサイトに接続すると何と、俺はそのサイト選ばれてしまった。

『百物語』と『不可能を可能にする男』の主人公にな。

2つの物語の主人公に選ばれてしまった俺は様々な都市伝説と遭遇するはめになつてしまったんだ。

言ってる意味はよく解らないかも知れないが、実は俺もよく解っていないままだ。

ようは、そういう『都市伝説』が本当に存在していて、俺は2つの物語の主人公に選ばれた男、つてわけだ。

他の都市伝説や関係者からはハンドレッドワンやエネイブル、なんて呼ばれたりする。

どこから話したものが大変迷うのだが、順番に語っていくのが、一番解り易いかもしれないな。

最初のキツカケは憑依直後に、クラスメイトで親友の仁藤キリカつていう少女と、都市伝説トークをした事から全てが始まった。

放課後に、『ヤシロ』と名乗る女の子にDフォンを手渡され、『メリーさん人形』の都市伝説である一之江瑞江いちのえみずえという転入生に襲われて、親友だと思つていた女の子の正体が実は『魔女喰いの魔女』という凶悪な魔女で……。

やっぱり襲われたりとか、そんな怒涛の展開があつた。

今は落ち着いてそんな二人とも仲良くやっている。

そんなわけで、俺は『都市伝説のオバケ』達こと『ロア』と今後とも仲良くやってい
かないといけなくなったわけだが……。

そんな俺は最近、不思議な夢を見たりしていた。

夢の内容は覚えていないがその夢は決して嫌な夢ではなかった。

ただし、また厄介な出来事に巻き込まれそうな予感はしていて……そんな予感が見事
的中してしまった。

そう。また厄介な出来事に遭遇してしまったんだ。

今日は、その話しを語ろうと思う。

今回の話しは一本の電話から始まった。

それは、新緑が深まった、5月のある休日の事だった。

2010年5月某日。

「兄さん、電話鳴ってますよー」

休日、自宅のリビングのソファで寛いでいた俺は、従姉妹の須藤理亜すどうりあに声をかけら
れた。

俺の側に寄ってきた理亜は俺に携帯電話を手渡してきた。

「ん？ あ、悪いな」

「いえ。兄さんの部屋を掃除してましたら偶々鳴ったので……出ないんですか？」
理亜に手渡された携帯電話からは着信音がやかましく感じるくらい鳴っている。

「休みの日にかけてくるなんて一体誰……って キリカ、か……」

着信を現す画面には、仁藤キリカと表示されている。

「はい。もしもし」

電話に出るとキリカの声が聞こえた。

会話を続けると、どうやら皆んなでケーキバイキングに行くらしい。

参加者は、七里詩穂先輩、キリカ。

一之江にはまだ連絡していないようだ。

「……ああ。わかった。そんじゃ、一之江に電話してみるよ。うん、じゃあ、また後でな」

電話が終わった俺は、次に一之江にかけようとして躊躇ってしまう。

流石にこの時間まで寝てるって事はないよな？

時計を確認すると今の時刻は午前11時。

昼間というには早い、かといって朝っぱらというわけでもない。

なんとも微妙な時間だ。

「流石にまだ寝てるなんて事はないよな……」

以前、寝てる彼女に誤って電話をした際に、不機嫌な彼女に殺されかけた事がある。比喩ではない。彼女には電話をかけるだけで人を殺せる能力があるのだからな。

「躊躇つてもしかたねえ。ええい。繋がりがれー」

トウルルル……ガチャ。

「あ、一之「もしもし私よ。今すぐ殺しにいくわ」って早い！ 色々はしよぎすぎだ！」

「殺す！」

「早えーよ!!?」

「何ですか？ せっかくの休みの日に電話なんかかけてきて。つまらない用事ならモ

ギますよ?」

「もぎっ…」

「はい、モギます」

一之江はいつだって、一之江だった。

大変不機嫌な一之江を諭しつつ、ケーキバイキングの事を告げる。

「ふむ。ケーキですか……いいでしょう。ケーキバイキングの女王と呼ばれた私の手腕を見せてあげます！」

「なんだよケーキバイキングの女王って?」

「月隠のケーキドールと呼ばれた私の能力みせてあげます」

「メリーさんですらなくなつた!?!?」

そんな突つ込みをしながら一之江との会話を終えると

「あの、兄さん……」

会話が終わるタイミングで理亜が話かけてきた。

わざわざ側で俺が電話を終えるのを待っていたのか……うーん。

何だが悪いな。

「悪いな、何か用があつたか?」

「あ、いえ。その……いえ、やつぱりなんでもないです」

「そうか?」

なんでもないようには見えなかったが、まあ、本人がなんでもないって言ってるんだ。

気にしない方がいいだろう。

俺はそう思い、自室がある二階へ上がった。

だからわからなかつたんだ。

この時には、もう理亜はある決意をしていた事や……。

「……やつぱりメリーズドールのマスターは兄さんでしたか……」

リビングに残された理亜がそう呟いていた事にも……。

待ち合わせ場所の月隠駅の西口にある時計塔広場に着くと、そこには既に待ち人がいた。

猫を思わせるクリクリとした瞳。

やや洋風っぽい顔立ち。

赤くて長い髪を緑色のリボンで留めている美少女。

俺の親友でクラスメイトでもある仁藤キリカと。

まるで日本人形のように綺麗な黒髪。

透き通るような白い肌をした、いかにも『清楚』な雰囲気を持ったこれまた美少女。

隣町月隠在住のミステリアスな転入生、一之江瑞江。

その2人が既に待ち合わせ場所の時計下にいた。

「悪い、遅くなった」

「大丈夫……今来たところだよ！」

「人を呼び出しておいて、遅刻とはいいい度胸ですな！」

まあ、今回は許しますが、次からは耳にところ天を流しこみますよ」

「怖えーよー！」

「詩穂先輩は遅れて来るって。」

だから先にケーキバイキングに行つてつて」

「なら行きましよう！」

ほらさつさと行きますよ、ハゲ」

「ハゲてねえよー！」

一之江に弄られながら俺は彼女達の後を追っていった。

ケーキバイキングの店に着き、色とりどりの様々な種類のケーキを皿に取つて先に戻ると、そこには遅れて来た先輩の姿があつた。

「詩穂先輩、来たんですね」

「うん。こんにちわーモンジクーんー！」

いつも通り、ニヤパー☆、と笑う、詩穂先輩。

今日もオシヤレな服を着て、頭にはトレードマークのこれまたオシヤレな帽子を被つている。

夜坂学園の生徒会長、七里詩穂先輩。

夜坂学園では知らない人はいない学園のアイドルだ。

本来なら俺みたいな奴が近づけるような人ではないのだが、何故か一文字はこの先輩

と仲がいい。

一之江の情報だと、一文字の憧れの人で、行きすぎた愛故にストーカー紛いな行動もしていたとか。

……………何やってんだよ。一文字疾風。

そして、困った事に、俺。遠山金次もこの先輩に色々やらかしてしまっているのだ。

「あ、はい。こんにちは」

くつ、顔を合わせにくい。

ヒスっていたとはいえ、あんな事を人前でしかしたからな。

笑顔で挨拶されてもマトモに顔を見れねえよ！

先輩の笑顔が眩し過ぎて思わず顔を背けてしまう。

「モンジくんと話すのは久しぶりだね！

最近、放課後見かけないけど何かあったの？」

心配そうに顔を覗き込んでくる詩穂先輩。

「い、いえ。何もありません。

先輩を抱き上げたアレ以来、何も……………あ……………」

しまった。

余計な事を言っちゃまった。

そう思い――。

恐る恐る、先輩の顔を見ると。

先輩は顔を赤く染めて俯いてしまった。

「……………」

ヤベえ。何しちゃってんだ、俺は。

「あ、あーココのケーキ美味いですよ。

先輩も早く取ってきたらどうです?」

「う、うん。そうだね。ちよつと行ってくるねー」

顔を背けたまま、小走りでケーキの方に向かっていく先輩。

その後ろ姿を見て改めて思う。

――またやつちまった、と。

しばらくして、全員がケーキを皿に取って戻って来ると、女子達は山盛りのケーキを次々平らげていた。

見てるだけで胸焼けがしてくるぜ。

少食な印象がある一之江も次々ケーキをその小さな口にパクパク入れていた。

ケーキは別腹とかいうけど……男と女じゃ、明らかに体の作り違うな。そんなに甘い物入らねえよ！

「ふうー食べた、食べたー」

「美味しかったねー！」

「ええ。ケーキバイキングの女王である私を唸らせるとはやりますね！」

「それ、まだ続いたのかよ！」

ボケの一之江に突っ込みつつ、久しぶりの休日を満喫していると、紅茶を飲んでいた先輩がカップをテーブルに置きながらソレを口にした。

「ところで、大事なお願いがあるんだけど聞いてくれる？」

「何をですか？」

「モンジくんとキリカちゃん、それとみずみずとかつて都市伝説に詳しいって本当？」

「ええ。まあ……」

誰だ、先輩にそんな事を言ったのは？
キリカを見るとニマニマ笑っているし、一之江は『何も言ってますんよ？』的な顔をしながらケーキを小さく切ってから口に運んでいた。

どちらも言っただけの顔だ。

「とつても怖い話を聞いちゃったの！」

実は、夜霞市内にある境山のトンネルで怖い噂が流れてるの！」

「噂……？」

ピクツと一之江が反応した。

キリカの方を見ると、キリカの片手にDフォンが握られている。

「うん。出るんだって……」

「出るって……何が？」

「トンネル内を車で通っているとね、トンネルの出口で突然目の前に女の人が飛び出して来るみたいなの。」

それでびつくりした人が慌てて車を止めると、そこには誰もいないの。

で、気になった人が車から降りて出口の先を見るとね、そこは崖になっていたんだって。

それで危なかったって思って車をバックさせるとね……耳元で突然、声が聞こえてきたんだって。

「誰もいないはずなのに……」

「声？」

「そう……『死ねばよかったのに……』って」

「……」

「……」

無言になる一之江とキリカ。

「多分、ただの噂だと思うんだけど、うちの学校の生徒の親御さんとか、親戚の人とかがその噂と同じ目に遭ったって言う子が増えてるからちよつと調べてきてほしいんだよね」

「……ええつと、それは……」

「駄目？ モンジくん？」

うるうるつとした目で見つめてくる詩穂先輩。

先輩にそんな顔をされたら断りにくいな。

「いいんじゃない、モンジ君？」

「ええ。ぱっぱと行って、サクサクと終わらせましょう」

躊躇う俺とは逆にやる気満々な都市伝説さん。

「……俺、帰っていいか？」

「ダメだよ（です）！」

2対1。当然、俺の意見は却下されたわけで……。

ケーキバイキングを終えた俺達は先輩と別れてさっそく現場に向かうことになった。

月隠駅前に停車していた、一之江御用達の黒塗りのハイヤーに乗った俺達は、噂の現場に向かった。

「織原さん、とりあえず境山にあるトンネルまでお願いします」

「あいよ、瑞江ちゃんっ」

一之江と運転手さんは知り合いらしく、気さくな若い声が届いた。

助手席のところにある写真を見ると、まだ若い運転手さんみたいだ。

車内を見渡すと内装はかなり豪華だ。

「すごいなあ……」

「わあ、ふかふかだっー」

「織原さんのタクシーはそれなりの人しか乗れませんから」

一之江がさらりと告げた。

そんなタクシーの運転手さんと親しい一之江って……世の中って不公平だな。

俺がそんな事を考えているとキリカはふかふかなシートで飛び跳ねていた。

「こら、やめんか。」

スカートでそんな事するんじゃない。

めっ！

俺がヒスつたらどうするんだ！

そんなこんなで現場のトンネルに辿り着くと、一之江とキリカは一度車を降りてトンネルの前で立ち止まった。

彼女らの後ろからトンネル内を見てみると。

トンネル内は薄暗く、灯は点いているが昔のいわゆる白熱灯でオレンジ色のライトがポツリ、ポツリと等間隔でトンネル内に設置されている。

車は通れるが一車線の道で、それが一直線に暗闇の先に続いていて、トンネルの壁はよく見ると煤けた煉瓦で作られている。

かなり年代物のトンネルだ。

そんな不気味なトンネルを前にしているのにも関わらず、一之江とキリカはいつもと変わらない様子でトンネルの暗闇を見つめていた。

トンネルの先を見つめている2人だが、2人とも片手にきちんとDフォンを持っている。

そして、そのDフォンが赤く、まるで危険を知らせるように光っている。

「うん、やっぱり。思った通り……これ『ご当地ロア』だねっ！」

「ええ。トンネルで、境山という時点で『ご当地ロア』だと思いました」

「なんだよ、その『ご当地ロア』って」

「場所限定で現れるロアです。場所限定になる分、その能力は強いとされています」

「場所限定？」

「はい。トンネルで現れるのに、海で現れたらおかしいでしょう？」

「こういった山にあるトンネルには、特に古いものほど強いロアが発生しやすくなります」

「私達のDフォンにも反応あるしね。」

モンジ君のDフォンには反応あるかな？」

キリカに言われて俺は自分のDフォンを二つズボンのポケットから取り出した。

両手に1台ずつ握って見たがなんの反応もない。

ただの黒い携帯電話のままだ。

「ふむ。どうやら貴方には危険はなさそうですね……念の為に『コード』を読み取ってみてください」

一之江に言われた通りにカメラをトンネルの入り口に向ける。

しかし、やはり反応はなかった。

「ふむ。どうやら貴方のロアとは因果……縁がないロアのようですね……」

「因果がないって事は……」

「うん。モンジ君が持つ『101番目の百物語』や『不可能を可能にする男』とは縁がないロアって事になるね！

だから倒しちゃってもいいって事だよ！」

「殺るのか？」

「はい。今はまだ犠牲者が出てませんが、放っておけば大事故を引き起こしかねませんので」

「まあ、十中八九、純粋な『ロア』だから早めに退治した方がいいと思うよ」

そこまで言って、キリカや一之江は俺を見てきた。

その眼差しは俺に問いかけてるような強いものだった。

まるで、『ロア』と戦う覚悟を問われているかのような。

「……わかった。

行こう！」

「いいんですね？」

「本当に大丈夫？」

「ああ、キリカや一之江だけに殺らせるわけにはいかないからな。

だから俺も戦るよ！」

そう言つて、一歩足を踏み出す。

トンネルに向けて、そこに存在しているであろう『ロア』を倒す為に……。

いつまでも一之江に頼つてはいられないしな。

それに……。

「本当に大丈夫？」

経験浅いんだから無理しなくてもいいんだよ？」

キリカは心配そうに言つてきた。

「邪魔だけはしないでくださいね。」

それに不可能なら早めに言つてください」

一之江は相変わらず言葉にトゲがあるがこれも彼女なりに心配しているのだろう。

俺は気がついたら憑依していた。

突然の出来事で戸惑つたり、色々危険な目に遭つたり、毒舌少女に刺されたりしてる

けど。

だけど……こんないいパートナー達に出会えた俺は今、とても幸せだ。

だから。

俺は彼女達を守りたい。

俺にロアを救える……変える力があるのなら……

例え、それが誰にも出来ない不可能な事だとしても……

俺はその……

「不可能を可能にしてみせよう」

番外編2。とある魔女の現地調査《フィールドワーク》

「やつと着いたよん♪」

モンジ君達と別行動をとる事にした私は、調査対象のあの子、彼女がかつて通っていたとある小学校に来ていた。調査対象にあの子が入っているのは私の独断で、本当は外れてほしいなー、なんて思っている。

あの子とは一カ月くらい前に、モンジ君と出会った際に知り合った。

『魔術』で記憶は改竄したから、あの子からしたら私は高校入学時からの友人だけどねっ！

「さて、始めようかな」

ここまでアラン君の案内で来た。一緒に入ろうと言っても用事かあるとか言つて先に帰ってしまった。

慌てて走り去っていくアラン君の背を見ていたら……。

顔はいいのに、やつぱり残念な人だなあ。

なんて思っちゃたよ。

彼からももう少し情報を引き出したかったけどアラン君は何故か、私と二人つきりにな

るといつも借りてきた猫のように大人しくなる。

モンジ君が側にいるとあんなに騒がしくなるのに、なんだか残念な子だと思っちゃうな。

……つて、話が逸れちゃったね。

今回の目的は『神隠し』を調べる事。

その為に私は境山の麓まで現地調査フィールドワークに来た。

いろんな人や物から情報を得るのが『魔女』の私の役目。

『魔術』を使って人の記憶を操作して情報を引き出すのが私のやり方。

今回も事務員や教職員の記憶を弄って、図書準備室に保管されている過去数十年分の児童の名簿を読み漁っていく。

たくさんある名簿を見てみると、ちよつと気になることがあった。

それは普段から『魔術』をよく使う私だからこそ解る些細な変化。

他の記録に比べると、とある学年の名簿だけやたらと薄くなっているのが解る。

少子高齢化社会だから子供の人数が毎年減少していくのは不思議な事ではない。

だけど他の学年や他の記録と比べて、とある生徒達の間だけ名簿が薄いな

んて事は変だ。

「これ、改竄されてる?」

「……ううん、違う。いなかっただ事にされてるんだ」

『魔女喰いの魔女』として様々な人やロアの記憶を食べてきた私だからこそ解る。

他の記録より薄くなっているのはその存在を失ったのが原因だという事が。

記録の消去。

つまり、この世界の人や文献から存在そのものがなくなってしまったという事。

世界から存在そのものが消されてしまったという事になる。

「……神隠し、かあ。」

『魔女』と呼ばれている私と同じくらい大変な存在だね。

あの子には同情するよ」

「君にだけは同情されたくない、って全ての真実を知ったらいいそうだけどね、ニトウレ

スト君」

「つ……いつからそこにいたの!?? んもう、驚いたなあ。」

久しぶりだね、プロフェッショナル教授」

突然背後から聞こえてきた声に驚きながら振り向くとそこには、白いタキシードを着

こなしたいかにも紳士! という感じの初老の男性が杖を片手に佇んでいた。

「久しぶりだね、ニトウレスト君。」

いや、今は仁藤キリカ君と言った方がいいのかな？」

「あはは、うん、キリカ♡って呼んでもいいよ？」

「さて、キリカ君」

「うわあ、スルーした？！」

「その返答は推理していたよ。そしてその要望にはノーと答えよう。

流石にこの歳でキリカ♡って呼ぶのは紳士道に反するからね。

だから敢えてこう呼ばせていただこう『魔女喰いの魔女・ニトウレスト』君と」

「ちえー、相変わらずお堅いんだから、プロフェッショナル 教授は……」

そう言いながらも私は彼と出会ったあの日の事を思い出していた。

彼の事は本人の希望もあつて教プロフェッショナル 授と呼んでいる……本名は知らない。名前を聞く前に消えてしまうから解らない。

この老人と初めて出会いは今から10年ほど前に遡る。

当時、10数年前、日本のみならず世界中でとある都市伝説が流行っていた頃で、『世界中』を巻き込んで大パニックになっていた時だった。人間にはあまり知られていないが当時、世界各地ではその都市伝説を倒す為に人間、ハーフロア、ロアが手を組み合って世界中を巻き込んだ大きな戦いが起こっていた。

私は当時、その戦いに参加していた。この世界を守る為に。

その戦いは大きな犠牲が出るくらいに激しい戦いで沢山の人やロアが消えた。

元凶となったロアはとある『ロア』の中に封じ込められ、その結果、世界に平和が戻ったがその戦いであまりに大きな犠牲が出てしまった。

まあ、『魔女』の私からしたらどっちが勝とうが、負けようがどうでもよかったというのが本音だけ……偶々仲良くなった子が人間側にいたからそっちの『勢力』として参加していただけだからね。

戦いが終わった後、『魔女』と呼ばれた私は多くのロアと戦った影響で疲労困憊した身体を休める為に英国でバカンスを楽しんでいた。

バカンスというより療養していたといった方が正しいけど。

私の魔術は代償を支払う事で強力な術が使えるからね。

体調がある程度回復した私は街中のカフェでアフタヌーンティーを嗜んでいると店員が私に声をかけてきた。

周りの席がいっぱいで相席を求められてきた店員に領いて相席を許可すると私の目の前の席に彼が座った。

それが彼との出会いだ。

英国紳士と自称するように立ち振る舞いは紳士的で会話しなくても利発という雰囲気を感じられる男性だった。

「やあ、初めまして。この時間のここに来れば君に出会えるとそう、推理していたよ」
席に着くやいきなりその声をかけてきた彼。

「『魔女喰いの魔女』……いや、正確には————といた方がいいのかな？」
最初はナンパかなあーと思ってしまったけどナンパとかじゃなかった。

いや、ただのナンパならまだよかったかな。

基本的に人を嫌いにならない私だけど彼だけは苦手だと今でも思ってしまう。

彼は私の全てを知っていたからだ。

私が隠している秘密も全て。

「……どうして知ってるの？」

今まで私の秘密に気づいた人はいない。

気づかせる前に全て消してきたからだ。

「それは初歩的な推理だよ、ニトゥレスト君」

彼は私の秘密をその場で全て言い当ててみせた。
イタズラに成功した子供のような笑みを浮かべて。

「日本に来てたんだ!!?」

「うん。僕の推理通りなら、面白い人物がこちらの世界に来ているはずだからね」
過去を振り返っていた私が我に返って目の前にいる男性に尋ねると私の顔を見つめる彼は微笑みながらそう言ってきた。

「こちらの世界?」

ああ、その人は私達みたいなロアなの?」

私の知らないロアについてなのかと、そう結論づけて聞いてみると彼は。
「残念ながらその問いにはこう返すよ。」

半分正確で、半分外れだ……とね」

意味深げに言った。

「?」

半分正確で、半分外れ……どういう意味だろう?」

「こちらの世界に僕が来れたくらいだから彼が来てもおかしくはないんだけどね。ただ運命を感じてしまったよ。」

まさか彼が物語の『主人公』になるなんてね」

「ほえ？」

まさかモンジ君の事。2人は知り合いだったの？」

一体いつの間にモンジ君は彼と出会っていたのだらうか？

私が知らないうちに出会っていた事実には戸惑いを見せると彼は驚きの発言をした。

「彼とは深い縁があるからね。」

だからいつかは再び出会う、それは推理していたよ。

今日、こうしてわざわざ僕が来たのは君達に忠告しておくことがあるからだよ。

まず一つ目。君達が追っている神隠しだが今回騒がれているこれはただの神隠しではない。真実を知れば君達だけではなく彼女達も傷つく事になる。

それでも続けるかね？」

彼の口から出された質問に私は一瞬戸惑ったが戸惑ったのはほんの一瞬で自然と口からその質問に対する答えが出ていた。

「うゝん、私もなんとなくそんな気はするんだけどねー。でもモンジ君なら大丈夫だと思おうよ？」

「……何故だい?」

「うーん、はつきり言えないんだけど彼って、スケコマシで女たらしだけど……やるって決めたら最後までできちんとやる子だからかなー」

「ほう……」

「それに……もし神隠しが女の子ならモンジ君なら何がなんでも助けようと思うんだよねー」

瑞江ちゃんの際の状況は詳しくは知らないけど少なくとも私の時は、彼は最後まで私を見て、ロアとかそういう目で見ないで、一人の人間として仁藤キリカとして、私を信じようと足掻いてくれた。

私は彼を襲って殺そうとしていたのにも関わらず、ましてや、襲った私を助ける為に『自分の物語』に加えるなんて普通はしらないと思うのに。

これまでいろんなロアと戦ってきたけど彼みたいなタイプはいなかった。

「お人好しというか、女の子に甘いというか、普通ならしない選択肢を迷わず選ぶところとか……モンジ君って本当、面白いよねー」

クスクス私が笑いながら言うのと彼は「ふむ?」とよく解らないといった感じで首を傾げて呟いた。

「それについてはよく解らないな。女性の恋心は僕の苦手な分野だからね。」

ただ解った事もある。この世界でも彼は女たらしだという事はよく解ったよ」
「モンジ君が女たらしなのは結構昔からだと思うよ?」

私がそう言うのと彼はクスツと笑った。

「それも因果かな? まあ、どつちにしろ彼が来てくれた事は喜ばしい事だよ。

彼なら君が抱えている問題も神隠しもすぐに片付くだろうからね」

「教授がそこまで言うなんて珍しいね?」

「彼は僕が認めた男だからね。」

「なんたって彼は『史上最高の名探偵』と呼ばれた僕の推理を翻した男だからね」

「へー、『史上最高の名探偵』かあ。」

まさか教授の正体が——とはね?」

「おっと、そう言えばキリカ君にはまだ名乗っていなかったかな。」

では改めて。僕は——だ」

「英国が誇る『最高の名探偵』かあ。」

有名なロアの正体が教授だとはねえ。

そんな教授が私に会いに来たなんて……なんだかおつかないなあー」

「『魔女喰いの魔女』にそう思ってもらえたなら光栄だよ」

手にパイプを持って口に含んだ彼に私は一言告げた。

「構内禁煙だよ？」

それに、まずって事はまだ忠告する事があるって事だよな？」

「安心したまえ。僕が手にしているこれは電子パイプだよ。

だからタバコではない」

「いや、そういう問題じゃないと思うけど……」

「忠告の二つめだが……」「ああ？？」　またスルーされたー？？」これは君より彼に関

わる事だが……近いうちに『最強の主人公』が君達の前に現れるだろう。

いや安心したまえ、それは僕ではないからね。

僕はこの世界でも『最高の名探偵』と呼ばれているが『最強の主人公』では残念なが

らないからね」

教授はそう言いながら電子パイプを蒸しはじめた。

「最強の主人公……まさか？？」

その存在については聞いた事がある。

当たってほしくないくらい私達ロアにとっては危険で最悪な都市伝説だけど。

本心でも当たってほしくない。いくら私が『魔女喰いの魔女』だとしても噂通りなら

『消される』可能性が高い存在だからだ。

「3つ目だが……もう間も無く封印が解かれるだろう。」

あの『予言』の彼女が解き放たれる日が近い。早くて夏頃かな。僕はそう推理したよ」

あの『予言』と聞いて、私の脳内ではあの『都市伝説』が浮かんだ。10年前に流行った終末の予言。

世界を終わりに導く世紀末の大予言。

そして、その後には噂された。

あの『都市伝説』の事も。

「そっか……復活しちゃうんだ」

「残念ながらもまず間違ひなく復活するだろうね。」

それは避けられない出来事だよ。復活した後、この世界がどうなるかは推理出来なかつたけどね。

歳のせいとか、『条理^{コグニス}予知』でも完全には解らなかつたよ。

ただ……今回復活してもなんとかなると個人的に思ってるよ」

「え？　何で？」

彼の発言にビックリしてしまった。

あの『都市伝説』が復活するからではない。遅かれ早かれ復活しちゃうもんだとは思っていた。

そして一度復活しちやえばまた大きな戦いが起こるのも解っている。

『大予言』は世界を終わりにする為に動くのだから。

物語的な動きに従うのが私達ロアの行動だから。

だから戦いは避けられない。

この世界を守りたいと思うロアや人間、ハーフロアは数多く存在しているのだから。

私が驚いたのは彼が『なんとかなる』という自信有り気に発言したからだ。

「解らないって顔しているね。」

初歩的な推理だよ、キリカ君。

僕が楽観視しているのは彼が来たからだよ。

『不可能を可能にする男』がこの世界に、ね」

『不可能を可能にする男』ってモンジ君の事？」

「ああ、そうとも。」

そしてこれが最後の忠告になる。

まず間違いなく君の真のマスターに彼はなると推理しているがあまり彼に依存してはいけない。

何故なら彼は君が知る一文字疾風ではないまったくの別人だからね」

「え？」

「どういふ事なの!?？」

聞き間違いかと、戸惑う私に彼は言い放った。

「彼は憑依されている。」

今の彼は君が知る一文字疾風ではない。

まったくの他人だよ。

遠山金次というネクラで無愛想、女たらし。

そんな色んな意味で人間を辞めている人間が一文字君に憑いているのだからね」
教授プロフェッサーから告げられたその事実には私は衝撃を受けた。

番外編3。 とある妹の内心

2010年×月×日×時×分。

「こんにちは、お姉さん」

突然かけられたその言葉に、世界は凍りつきました。

いえ正確には凍りついたのは私だけで世界はいつも通りのままで、変わらない刻を進んでいった事でしょう。

しかし、何も知らなかった私は、突然背後から声をかけられて、びっくりして慌てて背後を振り向いてしまいました。

振り向いた先、1メートルも離れていない距離には、大きな白い帽子を目深に被った白いワンピース姿の女の子が立っていました。

同時に、何処か甘い、花のような香りもしてきます。

「私はヤシロだよ、お姉さん」

ヤシロと名乗ったその女の子は7、8歳くらいの女の子でした。

「こんにちは、ヤシロさん。私は理亜です」

「うん、よろしくね、理亜お姉さん」

クスクス笑いながら自己紹介をするヤシロさんに私は何処か不気味さを感じてしまいました。

小さな女の子に対して、不気味に思うなんてとっても失礼な行為で、そんな行為をしたのが兄さんならお説教コースですが、何故か目の前の少女に関しては不気味としか言い現せられませんでした。

「はい、これ。お姉さんのDフォン」

そんな失礼な事を思っていると、目の前の女の子は両手を掬い上げるような形をして『何か』を差し出してきました。

よく見てみると、女の子の手の平には、漆黒の携帯電話が乗っていました。

「私の?」

それは見覚えのない、黒い不思議な光沢を持った、デザインのいい携帯電話でした。

艶やかな表面を見てみると吸い寄せられるような気分になってきます。

「そう。お姉さんのDフォン」

「デー、フォン?」

聞きなれないその言葉に、思わず聞き返してしまいました。

なんとなく、その携帯を受け取ってはいけなような、気味の悪さみたいなものを感じていたからです。

「運命を導く為の、そして、運命から身を守る為のお姉さんだけの端末。だから持っていた方がいいよ。」

特にお姉さんみたいな才能のある人はね？」

運命という言葉は先ほど水泳の時間にアリサさんが言っていた言葉でしたが、こんな短時間で再び聞く事になるなんて思いもしませんでした。

なにより、私が気になったのは……。

「才能ですか？」

「うん。お姉さんがどうして触られそうになると体が避けちゃうかって解る？」

「単に、潔癖症の延長による癖だと思ってましたが」

「お姉さんはね、普通の人がおいそれと触っていいモノではないの。」

人の体は不浄だから、お姉さんに触る事を許可されていないというわけ」

私の体が不浄を受け付けない？

確かに人に触れられるのは嫌ですが……それが何で許可しないと触れないモノになっちゃったのでしょうか？

私には身に覚えがありません。

「……いつの間になんな凄なものになったのでしょうか」

「あはは、生まれつきなのか、それとも後天的なのかは解らないけどね。」

今のお姉さんにとっては特別な人。聖女とか、女神になる子が大体似たような才能を持つているかな。

例えば、戦争で活躍するような女の子っているでしょう？

彼女達がどうしてそんな戦場で生き残れたのか、と言えば。そうやって『他者』からの害を受けないという才能があったからっていう人も多いんだよ。有名などころだとフランスのジャンヌちゃんとかね」

重要な情報を何事もないかのようにさらっと語るヤシロさん。

フランスのジャンヌちゃんとは……もしかして、ジャンヌ・ダルクの事でしょうか？
ちゃん付けで呼ぶという事はヤシロさんと知り合いとかだったりするのでしょうか？

いえ、ありませんね。

ヤシロさんはどう見ても小さな子供ですし。

「でも、そんなお姉さんもそろそろ危ないかもしれないんだよ。

だから、危険を熱くなったり、赤く光って教えてくれるDフォンはいい道具になると思ってる」

ヤシロさんの表情はニコニコ笑ったままですが、その声と瞳は真剣で素直に受け取った方がいいと思いました。だから私は躊躇いながらもヤシロさんの手からDフォンを

受け取りました。

「なるほど。ではいただきます」

Dフォンを受け取った瞬間、不思議な事に違和感が無くなって、これは自分のものだという感覚を感じました。手に馴染むような不思議な感覚で、昔から常に身につけているかのような不思議な感覚です。

「そのDフォンは、お姉さんの身を守るだけではなく……様々な危険や恐怖を倒す為の『武器』になるから。肌身離さず持つていてね？」

「武器ですか？」

「そう。対象のコードを読み取ることで対抗できるようになるの。」

もつとも、ロアはみんなおつかないから、コードを読む前に殺されちゃうかもだけど」
「殺される……私はもうすぐ死ぬ、と言わたのですが。このDフォンを使って、その……ロアというものに殺されるという事でしょうか？」

アリサさんから告げられた言葉。

『お前さん、もうすぐ死ぬぜ？』

アリサさんは『予兆』と言っていました。私は死ぬ運命にあるという事でしょうか？
「うーん、これから起きることは、それとは別かもしれないけどね」

私がそう尋ねると、ヤシロさんはうーん、と考え込んでしまいました。

「ある意味正しいかもだけど」

ニコニコ笑ったままの表情でそう告げてきます。

この後に何かあるのは確かなようです。

「お姉さんはこの後。もしかしたら死なない道を選び取るかもしれないね？」

意味深に語るヤシロさん。

その口調は何処か、『予言』めいていました。

まるで、解釈が幾つもあったって、だから最終的には当たっていたかのように思わせるような。

占いみたいな、そんな口調でした。

「もっとも、攫われて殺されなければだけど」

攫われて殺さる……どちらにしても体験したくない出来事ですが、きつとこれから私の身にそれは起こるのでしよう。

「殺される、というのは怖くて仕方ないですが」

殺されるという言葉と攫われるという言葉で四糸先生が言っていた事件を思い出しました。

最近、若い女の子が攫われる事件が立て続けに起きていると。

攫われてしまった子は今だに帰ってきていないようです。

殺されたり、攫われたりされたくありません。

だけど、ここにいるのが私の尊敬する兄さんならこう言うでしょう。

『女の子を見捨ててくらいなら攫われても構わないって』

そんな事を思っていると、目の前にいたヤシロさんはクスクス笑い、片手を上げました。

「じゃあ、お姉さん。生きてたら『また』ね？ バイバイ」

手を振って別れを告げて消えてしまいました。

2010年6月2日。

「懐かしい夢を見ましたね……」

気がつけば私は自宅のリビングのソファでうたた寝をしていました。

学校から帰った後、一通りの家事を済ませた私は兄さんの帰りを待つているうちにどうやらうたた寝をしてしまったようです。

私があつちの世界。

『ロア』の世界と関わるようになってからあまり時間は経っていませんが、それでもこの数ヶ月で多くの『ロア』や『主人公』達と戦ってきました。

大切な兄さんの生活を守る為に。

兄さんが安心して安全に表の世界を暮らしていけるように。

『ロア』とかと関わらないように、それとなく守ってきました。

兄さんには『ロア』の世界については知らせていません。

これからも私は兄さんを守っていきます。

今日から新しく私の姉となった『あの子』と共に。

だけど、最近。兄さんの様子がおかしいです。

今まで、女の子にしか興味がなかった兄さんが『民俗学』に興味を持ち、最近では何

故か女の子からも『距離を空けています』。

女の子大好きな兄さんがまるで別人のようになってしまったんです。

そう。まるで妖精の神隠しに遭ったかのように。

監視や盗聴、公に出来ない方法で兄さんの様子を探っていましたが、兄さんはどうやら『ロアの世界』に来てしまったようです。

あ、盗聴とか、監視は私がしたわけではないですよ？

私の姉となった『女の子』がしてくれているんです。

何でも前にいたところでは、斥候や哨戒、破壊工作とか、監視とかが得意だったよう
で……『ハーフロア』となった今でも兄さんの様子を見つかりにくい場所から『監視』し
ているみたいです。

その子はとっても可愛らしい女の子でとっても強い子なんです。

あらゆる科学の兵器を使いこなせる万能の科学剣士で、『あらゆる科学兵器や飛行機
などの機械を狂わせる悪戯妖精』的な存在で『どんな小さな隙間』からでも兄さんを監
視出来る能力を持った、まさに私の勢力を支える『もう一人の主人公』といった存在で
す。

物語としては異例中の異例。

二つの能力を持った存在。

私の能力でも完全には敵にしたいくない人です。

だからと言って、兄さんを渡す気はありませんけど。

まあ、それを言ったらまたあの子はこう言うでしょうですけどね。

『非合理的！』って。

第二部。 不思議な夢

プロローグ。 不思議な夢

よお、久しぶりだな。

ん、なんだか浮かない顔をしているが、どうしたんだ？

こないだ話したハーレム男子の物語が気に入らなかつたのか？

なるほどなるほど、イケメン爆発しろよ！ そう思ったわけだな。

モテる男子が羨ましい、と。

まあ、その気持ちは俺には全くわからないんだが、そんなにハーレムが羨ましいのか？

そんなに羨ましいのなら奴に関する別のエピソードとかはどうだ？

あれ？ あんまり興味はない？

どうせまたイケメンが上手いこと言つて美少女を誑かす話だろう？ と思つたの

なら……ああ、全くその通りだな。

だが、誑かされたからといって双方が無事つていうわけではないんだぜ？

ちゃんと、そこには痛みのようなものが存在しているんだ。

つまるところ、『傷つきたくなかったら何も行動しなければいい』というのが結論なわけだ。

しかし、その『行動できるか否か』こそが、モテと非モテの境界だと知り合いが言っていたがな。

お、なんだかやる気が出てきたみたいだな。

ん？　まずは何をすればいいのかだと？

うーん、わからん。

女性がどういった基準で男を選ぶのかなんて、俺には全く興味ない分野だし、興味を持たないように今までできてきたからな。

体質的に……。

おっと、俺の話はいいんだ。

それより、『痛みがあるかわかっていながら行動する』とどうなるか、という話だが、これは前に話した『伝説になった男』が体験した話だ。

『百物語の主人公』はハーレム系主人公だが、よくよく考えてみると奴は自分自身も都市伝説なんていう普通じゃない、おっかない話になってしまったんだ。

『伝説』の『主人公』なんて、正直なってしまうたらロクな目に遭わないわけで、そういう、人間からちよつとした物語の登場人物的な存在になってしまった人達を『ハーフロ

ア』と呼ぶわけだ。

これについては前に話したよな？

うん、覚えていないのならまた読み直してくれ。

さてはて、今回はそんな『ロア』になってしまいうつていう事がどんだけ大変でおつかない話なのかって事をレクチャーしたいと思っただけだ。

まあ、と言つても『化け物になっちゃつても美少女に囲まれて暮らせるならそれでいいじゃん』と思うかもしれないけどな。

いや、ある意味ではその思考を持つている人こそ、主人公の素質があるという事なのかもしれないがな。

本気でそれを楽しめるのであれば。

一度なつてみないか？ 『ロア』に？

俺と変わってくれよ……是非。

まあ、冗談はここまでにして……ええと、そうそう『ロア』になってしまうのがどんだけ大変かという話だったな。

ロアになって危険な日常を送るとか、ノーセンキューだよな、普通。

誰だって大変な危険な目に遭うよりか、普通の生活を送る方がいいよな。

今回、俺が語るのは、そんな、『普通』を求めていた、人間ではなくなった少女と。人間になりたかった『ロア』のお話。

では、不可能を可能にする百物語のエピソード2を語るとしよう。

2010年??月??日??時??分。

夢の中で。

不意に目を覚ました場所は、物静かな和室だった。

畳の匂いが仄かに鼻をくすぐり、外の光が障子越しに薄く眩しく差し込む。

目に優しい配色の板張りで作られた、落ち着きのある部屋。

ぬくぬくとした布団の中はお日様の下で日向ぼっこしているかのようにとても心地良く、起き上がりたいたいという気持ちを削っていく。

ああ、二度寝したい。

その衝動を抑えることなんて出来なかった。だから。

ここがどこなのか、とか。

今がいつなのか、とか。

—— 自分は誰なのか、とか。

そんな些細な問題は気にならなくなっていた。

唯一、気になるとすれば……。

「お目覚めですか？」

着物姿で枕元に佇む、この少女の事だけだ。

見覚えのあるような、ないような、曖昧な記憶。

そもそも、自分の名前すら思い出せない自分が、彼女を覚えているはずはない……は

ずなんだが、よく知っているような気もするし、やっぱり何も知らないような気もする。

そんな不思議な感覚を持つてしまう。

—— よく知っている人が、いつもと違う服を着て笑っていると、違和感と同

時にドキドキするような、あんな感覚だ。

見覚えのあるような、ないような、どちらともとれる彼女についてだが、唯一わかっ

ている事がある。

それは

自分は彼女の事をとても気に入っているという事。

この気持ちだけあれば、他の事なんて忘れていてもいいんじゃないだろうか。

そんな風に思ってしまう。

「まだ眠そうですね」

クスクスと玉を転がすように笑う彼女の仕草がとても上品だった。

口元に添えた手。その小指の白さすらも色っぽく見えてしまう。

ドク、ン。

心臓が高まり、血流が身体の芯に向かって早めに流れる。

この子とずっとここにいられたら、どんなに素敵だろう。

ドクンドクン。

この子となら、ずっとここにいられる気がする。

ドクンドクンドクドクドク。

この子となら

「大丈夫ですよ」

丁寧な口調で「大丈夫」と言われると、何故だか解らないがなんとなく大丈夫なんだな、という気持ちになっていた。

まるで誘導されているかのような気分になりながらも、不思議な事に逆にそれが心地良い。

最近、ちよつと怖い目に遭っていた気がするからか、こういう安らぎみたいなのが本当に嬉しく思える。

やっぱり、女の子っていうのはいいものだね。

特に彼女のような和服が似合う美少女が側にいたら1日中愛でたくなってくるね。

それも彼女が誰かに似ているからかな。

とても安心できる。

昔からよく知っている人のような。

彼女を改めて観察してみると

腰まで伸ばした長い漆黒の髪、何処かで見たとのことのある顔、それに……身体の一部が弩級戦艦並みのポリウムをしている。

弩級戦艦並みの大きさと純情、黒髪の美少女なんて、ははっ！

なんだか前世の幼なじみを思い出すね。

ん？ 前世？

なんだろう。何かを忘れているような。

誰かを忘れているような……駄目だ、思い出せない。

そこまで考えた時、俺の頭の中には他の女の子の面影が不意に浮かんできた。じわり、と背中が熱くなる。

「また、いらして下さいね」

その言葉に促されるかのように、強い眠気に襲われて。

「次は……しましうね」

彼女が何を言ったのかは解らない。

だけど……。

——その誘惑は、とても甘美に……心に残った。

2010年6月1日。夜坂学園。2年A組。

「夢？」

「ああ、凄い美少女が出てくる気がしたんだが……覚えていないんだ」

朝のホームルーム前の会話。

俺は日課となりつつある、クラスメイトの仁藤キリカとのトークをしていた。

女嫌いな俺だが、不思議な事にアレ以来、キリカとはまあまあ普通に会話出来るようになっていた。

「へえ、モンジ君が見る美少女の夢かあ……」

「モンジって言うなよ」

「ふふ？　じゃあ、一文字君、って呼ぶ？」

「それはそれで他人行儀で嫌だなあ」

「じゃあ……気持ちさをタツプリ込めて、『疾風』って呼ぶとか」

『疾風』とキリカに呼ばれた瞬間、身体の芯に、血流が集まる感覚がした。

うっ、ヤバい。なっちまう。

「うっ、ドキドキするから、モンジでいいや、うん」

「あはっ、じゃあモンジ君、だねっ」

なんとか血流を落ち着かせようとしたが、キリカは俺の机の上という特等席に座って、パタパタと足を振り始めた。

その太ももがチラチラ、と動いてスカートの中が見えそうになる度に俺の中で血流が激しく高まった。

その体勢、今すぐ止めろ！

こんな所でヒスったら、大変な目に遭うのはキリカなんだぞ！
慌てて視線を逸らしたが遅かった。

若干、かかりが甘いがまた、なつてしまった。

あの、モードに。

「ふつ、全く困った子猫ちゃんだ」

「ふふつ、子猫は甘えたがり屋……なんだよ？」

「いいよ。君が望むなら好きだけ甘えさせてあげるよ」

「あはっ、ありがとう。」

で、美少女の夢ってことは、エッチな夢だったんでしょ？」

「いや、それだったら君には話さないな」

「あれ、そうなんだ？ ……もしかして誰かのエッチな夢を見たことあるとか？」

「あー……ノーコメントで」

追求するように顔を近づけてくるキリカの視線を避けるように廊下の方を向いた。

前世だと俺がそんな夢を見るなんて考えられない事だったが、最近、よく美少女の夢を見るようになった。

内容はあまり覚えてないが……朝起きると軽い倦怠感を感じる感じ事もあるからもしかしたら夢の中でヒスっているのかもしれない。

それとエツチな夢は、一文字の記憶の中にたくさんあった。ほとんどが先輩だが、中には……。

「ふむ。先輩の夢は当然として―」

「うぐつ、ま、まあ、ね」

「もしかして、わ・た・し、のも?」

さらに顔を近づけてはニヤニヤーと笑うキリカ。

ああ、クソ。

バレバレじゃねえか!!?

「わっ、赤くなつた!　モンジ君って解り易いよねっ!」

「し、仕方ないんだ、魅力的な女友達がいると仕方ないんだよ!」

「へええ。男の子って罪な生き物だねえ。好きな子じゃなくてもいいんだあ」

ニマニマ笑っているキリカ。

『そういう対象』として見られている事自体は気にしていないのか?

なら、ちよつと意地悪してみよう。

「そんな事はないよ。」

だって、俺はキリカみたいな可愛い子も大好きだからねっ!」

パチンつとウインクしてちよつと小声気味にそう言うと、キリカは驚いた顔をして、

ぼんつと顔を真っ赤に染めてしまった。

近くにいた女生徒が不思議そうに首を傾げている。

やり過ぎたかな？

そう思ったがキリカはすぐ様表情を戻し

「ま、まあ……夢の中ならいつか」

あつけらかんとそう言った。

だが、ヒステリアモードの聴力で聞こえたが微かに声が震えていたぞ。

まあ、言わないけどね。

「なんだ、いいのか。」

「じゃあ今度キリカの夢を見たら、ちゃんとしよう」

「ちゃ、ちゃんと!?」

「ナニをちゃんとするの?」

俺の発言によほど驚いたのか、キリカが大声を上げた。

「しっ! 声が大きい!」

嘘だよ。ただの冗談だ……だから安心していい」

周りのクラスメイト達に愛想笑いをしてキリカに向い合い宿めにかかった。

「うー、モンジ君の意地悪つ……」

ほっぺを膨らしたキリカも可愛かった。

「ごめんごめん。」

今度キリカの頼み何でも聞くから」

「もう、仕方ないなあ。」

それならまあ、いいや。

それはそれとして。モンジ君の夢はちよつと気になるね？」

「そうなのか？」

「夢っていうのは記憶の整理って言うけど、実際オカルト的に使われる事も多いでしょ。」

予知夢とか、明晰夢とか。色々と逸話も多いし」

「うん。確かにそうだね。なんかおつかない都市伝説とかあるのかな？」

「猿の夢っていうのならあるかな？」

「猿？ ああ、ウツキーの？」

「そ。ウツキーの。お猿さんの夢」

キリカの話では猿の夢という都市伝説はいわゆる続き物と呼ばれるもので、夢の中で電車に乗っていると車内アナウンスが流れ始めて、いきなりおつかない事をいい始める、というものらしい。

『次は、活け造り〜活け造り〜』という感じでな。

この活け造りは魚の活け造りではなく、人を活け造りにしてしまうものだという。

夢を見ている人が後ろを見ると、電車の一番後ろに座っていた人が、大勢の小人に刃物でズタズタにされて、魚の活け造りにされてしまった、というのが始まりらしい。

しばらくすると今度は『次は、抉り出し、抉り出し』という車内アナウンスが流れてたくさん出てきた小人達が後ろの席に座っていた人の目玉を抉り出した……そして次は、いよいよ自分の番。

早く逃げないと……と思っても、体は動かない。

そうこうしているうちに、流れるアナウンスからは『次は、挽き肉、挽き肉』とアナウンス音が流れて。

挽き肉になりたくないから大慌てで『夢から覚めよう』と願ってもすぐ近くから『ウーン』っていう機械の音が響いてきて……。

そして……。

そこで辛うじて目が覚める。

ここで終わればただの怖い夢だ。

しかし、この都市伝説が続き物と呼ばれるのには勿論理由がある。

それから何年か経った頃、そんな夢を見た事をすっかり忘れていた時に、再び同じ夢を見る。

で、今度は目を覚ます直前に『また逃げるのですか？次に来た時は最期ですよ』と言われた、っていう話だ。

夢を見たその人は『もし次に同じ夢を見たら私は死んでしまうかも』と他の人に語っていた。

現実世界の死因は心臓麻痺かもしれないけど、夢の中では挽き肉ですつてな。

そして、この話を聞いた人が、自分も『猿の夢』を見た！　　って言い始めた事から、『聞いたら同じ目に遭ってしまいう話』として語られるようになった、というのが猿の夢の都市伝説だ。

キリカからその猿の夢の都市伝説を聞いた俺は少し考え込んでからキリカに告げた。

「まあ、俺が見た夢はそんなに怖い夢じゃなかったはずだよ」

「そうなんだ？」

「起きた時、ちよつと残念だったくらいだからね」

そう、目が覚めた時、寂しさみたいなものを感じたんだ。

それに何処かで会っているような不思議な感覚も……。

そんな感覚を思い出していると

「おーい、モンジいるー？」

教室のドアの方から俺を呼ぶ声が聞こえてきた。

「おとよっ？」

キリカの視線もドアの方に向かい、俺もそちらの方を見ると、薄い茶色の髪をいわゆるツインテールにした、快活そうな女の子が立っていた。

まるで前世のパートナー、アリアを思わせる強気な瞳をした少女が。

瞬間、教室中からざわめきの声上がる。

「モンジって呼ばないでほしいんだけどね、ねお音央。」

君が来るなんて珍しいね？」

「いいじゃない、呼び易いし」

別のクラスであろうと気にせずカズカ入ってくる少女。

それだけで男子達は目で彼女を追った。

無理もない。雑誌の読者モデルを何度もやっていて、アイドル事務所からスカウトされてきているほどの美少女が、俺の方に歩いて来たのだからな。

前世のパートナー、アリアそっくりだよ。そういう所は。

ただ、似ていない点もある。

特にスタイルの良さ、バストの大きさではこの少女の完勝だ。

本来なら大きいと太って見えるのだが、彼女の場合は身長がやや高めなおかげもあって、均整のとれた大変悩ましい体つきをしている。

彼女を見ていたらヒステリアモードが思わず強化しちまったぜ。くそ！

彼女の名前は、六実^{むつみ} 音央^{ねお}。

そのスタイルがここまで良くなる前……つまり、中学時代からの一文字疾風の友人だ。

「モンジはモンジ、それでいいでしょ？」

「親しい仲にも礼儀があるんだよ、音央」

「親しい仲にあだ名で呼ばれるのは普通でしょ？」

「親しくない奴がすっかり真似してるじゃないか」

「いいんじゃない？　それだけ親しみ易い男って事だもの」

ああ言えばこう言う、典型的な強気娘だ。

ヒステリアモードの俺の話術でも音央には勝てる気がしない。

そんな事を思っていると、キリカも俺達の会話に交ぎって来た。

「そうだよ、いいんじゃない？　モンジ君」

「ほら、キリカちゃんも言ってるわよ？」

腰に手を当てる仕草や、勝ち気そうな目と口調はとことん自信に満ち溢れている。

ああ、くそ。可愛いなあ。

仕草とかがアリアみたいだ。懐かしい。

音央は生徒会の副会長もやっていて、常に自信を崩さない。

だからこそ、こうして別のクラスに姿を見せるだけでもザワザワと人の視線を集めるんだ。

しかし、いつもなら美少女の登場と同時にやって来るアランが来ないな。

そういや、あいつ、音央に苦手意識を持っていたなあ。

後で理由を聞いてみるか。

「ところでどうしたんだい？」

「こんな朝っぱらから」

「会長に聞いて来たのよ」

「詩穂先輩に？」

「別に会長からメッセージがあるわけではないわよ。」

「ちよっとモンジ達が詳しいだろうから、相談してみたって頼まれただけ」

「俺、達？」

「なんだろう。」

「なんだが嫌な予感がするなあ。」

「そ。モンジと、キリカちゃんと、転入生の一之江瑞江さん？」

「キヨロキヨロと辺りを見回す音央。」

そういえば親しげに『キリカちゃん』とキリカを呼んでいるが友達関係なのか。もしくは、そういう記憶があるように『魔術』か何かで仕向けてあるのか。

キリカならどつちでもやってそうだな。

「一之江ならまだ来てないよ。病気がちで有名なんだ」

「そうなの？」

病気という理由で一之江はよく休んだり遅れて来たりする。

本当に病気がちなのか、面倒くさいから学校をサボっているだけなのかはわからないが……。

まあ、一之江ならおそらく後者だろうな。

背中が微妙に熱くなった気がしたが……気のせいだよな。うん。

しかし、やたらとピンポイントな人選だな。

「あんた達、都市伝説に詳しいんでしょ？」

ああ、やっぱりそっち系の話か。

そう思い、キリカにアイコンタクトをすると、目の端にアランが『キリカたんとアイコンタクトしやがって』とでも言いたげに中指を立てているのが見えた。

こら。そんな仕草を良い子が真似したらどうするんだ。

お前は一昔前の弱そうな不良か。

外見は金髪碧眼のイケメンなのになあ、残念過ぎるぞ。アラン。

まあ、そんなアホな友人より今は音央達の用件だ。

「また先輩はおっかない話でも聞いてしまったのかな？」

「と、いうよりちよつと噂になっているみたいなのよ」

「噂？」

もう一度キリカにアイコンタクトしてみると、キリカは小さく首を振った。

「そ。とりあえず、放課後に生徒会室まで来てくれる？」

「それは構わないけど……一体何の噂なんだい？」

俺が尋ねると、音央はちよつとだけ思案してから。

その噂の名前を口にした。

「神隠し、よ」

第1章 人喰い村《カーニヴァル》

第一話。人喰い村の噂

2010年6月1日12時50分。夜坂学園屋上。

「『神隠し』とはまた厄介なものですな」

昼休みに堂々と遅刻してきた一之江と一緒に、俺とキリカは屋上にいた。

従来は閉鎖されていて中に入れないはずの場所なんだが、鍵は開いているので俺達は当たり前ここを訪れている。最近では他の生徒もくつろぎに来ているようだ。

そんな屋上の片隅にあるベンチに座って、三人で語り合う。

一之江は、小さなお弁当箱を膝に乗せながら呆れたように先ほどの言葉を呟いた。

この少女が本当は『都市伝説』が具現化した『ロア』だなんて、一見しただけでは普通は解らないだろうな。

肌の色も真っ白だし、見た目は本当に病弱そうに見えるしな。

しかし、一之江は見た目だけはいいよな。本当に……。

「なんだか、不愉快な視線を感じます……というわけですから死んでください」

「待て！ 何がというわけ、だ！」

小柄で黒髪のお人形さんのような美少女が、ジト目で俺を見ているというのは精神上あまり良くないよな。

体質的にも。

それにジト目で見てくるその姿を見ていると、なんだかオランダで会った『かぜ颯風のセーラ』を思い出す。

あのチビっ子はまだ傭兵やってるんだらうか？

「あははは！ 相変わらず仲がいいね、2人共！」

それにしても、さっき聞いた時は私もビックリしちやったよ。いくらなんでもモンジ君には早いんじゃないかな

「私や貴女の段階で、既に『早過ぎる』ってのも確かですけどね」

「あははっ、そうかもっ」

キリカは学食で買ったサラダポテトをモグモグとしながら話している。

一之江はご飯をひとつまみしては小さな口に入れて、よく咀嚼していた。

話の内容を除けば、大変平和かつ幸せなランチ風景だよな。

「そんなに凄いのか、『神隠し』って」

「以前も話したように、有名な『ロア』ほど強いわけですよ」

「そして『神隠し』はモンジ君みたいに怖い話をあんまり知らない人でさえ知っている単

語でしょ？

「世界中にも似た事例があるし」

そう言われれば、確かに神隠しとか、〇〇の大予言とか、世界中で通じる伝説や神話とか誰でも知っているものでもないな。

そして、一之江の話ではそういう噂話を世界が認識した途端、ロアが生まれるんだつたな。

「つまり、『神隠し』はメジャーなおつかない『ロア』って事か」

しかし、『呪言人形』、『魔女』、『ご当地ロア』ときて、次は『神隠し』かよ!!?

主人公のロアって、皆んな毎回、こんな大変な都市伝説達を相手にしてんのか？
ちよついと、初心者に厳し過ぎませんかね？

俺はうんざりしながら、従姉妹アが作ってくれた弁当アに箸をつけた。

うむ。今日の鳥そぼろご飯も大変美味しいな。

将来は、いいお嫁さんになるな。まだ誰にもやらんけど！

「先輩に話を聞く前に何か出来る事ってあんのかな？」

いきなり神隠しと遭遇とかなったら洒落にならんぞ。

この中で俺が一番弱いんだからな。

なので遭遇する前に出来る事があるのかを聞くと

。

「まあ、基本は予習と復習ですね」

一之江は懐から自分のDフォンを取り出しながら答えた。

『8番目のセカイ』には、実際にあった都市伝説が記載されますから」

「ああ、もしかして解決方法とかも載っているのか？」

「いえ、ある場合もありますが、ほとんどは『都市伝説』の形を守っています」

「つまり、完全には解決しない感じに語られているって事だな。うーむ」

自分のDフォンを取り出してみる。

以前はサイト接続は出来なかつたが、あの日、ヤシロちゃんと会ってからは自由にサイトを閲覧出来るようになった。

とはいっても8番目のセカイにしか繋がらないんだけどな。

出来る事ならあまり都市伝説とかとは関わりたくない。

だが、現状は間逆だ。

関わりたくないのに、関わらずにはいられなくなっている。

普通、ゲームとかでは、序盤は弱いヤツと戦って段々と強くなっていくはずだろう？

なのに、何故か俺はいきなり強い仲間を手にして強敵と戦っていく羽目になっているわけだ。

昔、シャーロックが俺やアリアにやった武力パワースタンプの急騰の手法を使って強くさせられてい

るかのようにな

「解決しちゃった！　　つていう都市伝説は載らないんだよ。ほとんどの『ロア』がそれを知られちゃうと消えちゃうからね」

キリカも自分のDフォンを取り出して、早速検索を開始していた。

その手元が凄い速度で動くのを見て『慣れてるな』とも、『今時の女子高生らしいな』とか、『情報怪盗とかって呼ばれてそうだな』なんて思ってしまう。

その慣れた手つきなのを見て安心したのか、一之江もDフォンを懐に仕舞い込んだ。

『『8番目のセカイ』に載るのは『人物紹介』みたいなものって事です。』

どんな都市伝説として広がっているのか、それが判明するようになっていきます」
「なるほどな」

と思ったが、ふと気になった事がある。

それは、キリカとの戦いでキリカが俺に言ったセリフだ。

「あれ？　　でもキリカは俺の能力を知っていたよな？」

『『8番目のセカイ』に載っているとかが言っていたが……』

「え？　　いつですか？」

「キリカとの戦いの時。一之江が来る前に」

「あ……。そ、そんな事言っただけえー」

あははは……覚えてないなあ」

キリカはバツが悪そうな顔をして、愛想笑いを始めた。

これは、問い詰めても口は割らないだろうな。

「まあ、いいか。」

そのうち理由も解るだろうしな」

「ええ。今、問い詰めてもそれが本当の答えとは限りませんからね」

「うん、私は『魔女』だからねっ!」

『魔女』だから、本当のことを話すとは限らない。

『魔女の口車』に乗せられたら痛い目に遭うからな。

だから今はその疑問は置いておく。

それより、『神隠し』の情報先だ。

そう思い、俺もDフォンを操作して『8番目のセカイ』を確認してみる。

『検索』という枠に、試しに『神隠し』と入力してみた。

検索ヒット数、514件。

俺はそこにあるタイトルをざっと眺めた後、静かに画面を閉じた。

「多過ぎだろ!?」 神隠し。百物語が5回繰り返し返せるレベルを超えてたぞ」

「『ドキッ、神隠しだらけの百物語』ですね」

なんだその、アランとかが持つてそんなDVDのタイトルは。

「みんな消えそうで嫌なタイトルだな」

「首のポロリくらいはありそうです」

「そのポロリは全然嬉しくないだろう」

「というか、首ポロリしたらそこに間違いなくいるな。」

お前
一之江が。

「まあ、検索にはコツがいるんです。キリカさんに任せておくといいですよ」

一之江はすっかり任せる気満々なのか、その後は静かにパクパクと弁当をつついていった。

「あー、じゃあ、後は任せるぞ。キリカ」

「うん、こういうのはオカルトマニアだから得意だよ」

「それって『魔女』だから知識があるってもんじゃないのか？」

「もちろんそれもあるけど、ごく普通にオカルト趣味があるっていうのもあるからね」

キリカという少女は、いわゆる『魔女』という存在の『ロア』なのだが、こうしてごくごく普通の人懐っこい女子高生という一面も持っている。

なので、つつい油断してしまう俺だが、一之江はそんなキリカをちよくちよく警戒している。

元から『都市伝説のおバケ』として生まれたキリカのような『ロア』と、人間から都市伝説のおバケになってしまった一之江のような『ハーフロア』はそこに違いがあるよ
うだ。

決定的な、価値観や存在そのものが違う。

そんな空気をなんとなく感じていた。

「あ、これこれ」

キリカの声で我に返った俺は、手招きしているキリカの側に近寄った。

キリカの髪からふわっ、といい香りがして、思わずドキっとしてしまう。

うっ、マズイ。

また、あの血流が！

「ふっ、相変わらずいい香りだね。

君からは男を惑わす魔性な香りが出ているのかな？

だとしたらやはり君は魔女だよ。最高の魔女になれるよ、俺だけのね」

また、やつちまった。

あのモードの俺は、自重しないな。本当に。

キリカの手元を見て見ると、そこに書かれていたのは

『人喰い村の噂』

友達の友達に聞いた話なんですけど、いきなり人が消えてしまう！

そんな神隠しみたいな事件が必ず起きるテーマパークがあるんですよ。

そう必ずです。

私も半信半疑だったんですが、私の友達は何通り消えてしまいました。

もう信じざるを得ないかなー、って思いました。

そこは『ワンダーパーク』っていう少し寂れた遊園地なんですけどね。

ウチの近所にある山にあつて、でっかい観覧車が見えるから町の人のほとんどが知っているテーマパークです。

その入り口は無人ゲートになっているんですけど、丁度日没の時間ピッタリに入ると、いきなり異世界にある村に入ってしまったんです。

元々、昔、そこに村があつて、廃村になってたんですけど。

時空みたいなのが繋がってしまうのか……外で見てる私の前で、友達がゲートの向こうにあるその『村』に入ってしまったんです。

そして、その時。私は見えてしまったのです。

ゲートの向こうにある村。その村の中を駆ける……

金色に輝く、獣の姿を。

そう、ゲートのこちら側からも、その村は見えていたんですよ？

……その村に迷い込んだ人は二度と出ることは出来ないらしいですね。

あれからもう、結構な月日が経ちましたけど、私の友達は帰ってきません。

風の噂で聞いたんですが、その村ではかつて『神隠し』があつたらしくして。

それで村の人々が一齐にいなくなってしまったとか、なんとか。

まるで、村そのものが村人を食べてしまったみたいですね。

『ワンダーパーク』という寂れたテーマパークがあつたら、日没と同時に入ってしまうと、神隠しに遭つてしまいますよ。

そうすると、貴方も『人喰い村』に食べられてしまい、二度と出る事が出来ないかも
しれません』

「ワンダーパークって、境山にある『境山ワンダーパーク』の事か？」

「町の人のほとんどが知っているって書いてある以上、その通りでしょうね」

なるほど、な。そんな所まで事実に基づいて書いたりするのか。このサイトは。

「隣町在住の私でさえ知っているテーマパークですから。」

しかし、あそこにそんな都市伝説があつたとは驚きでした」

一之江でも知らない都市伝説。

やっぱり都市伝説ってというのはかなりの数があるようだ。

「タイミングがシビアなのかもね。『日没』って言われても、太陽がピツタリ沈む時間を測るのなんて難しいわけだし。もしくは、氣象庁辺りかな？　　が発表している時間、という意味なのかもしれないし」

サイトを検索したキリカは、その発生条件を気にして首を傾げていた。

確かに日没辺りとか、アバウトな時間に皆んな行方不明になっていたら、もつと大量の被害者が出て有名になっていたはずだ。

「ふむ、行方不明者がホイホイ出まくってるわけではないんだな」

噂になるベースっていうのも曖昧なんだなあ。

一体何人が犠牲になれば噂になるんだろうか？

いや、寧ろ、そういう噂が出たから行方不明になる、だから噂が広まるのか？

噂が先か、事実が先か……。

ああ、もう。ややっこしいなあ。

モヤモヤしているとキリカが一之江に尋ねていた。

「でも、これって『村系』だね、瑞江ちゃん」

「確実に『村系』ですね」

「なんだ『村系』って」

ゲームとかの系統か？

都市伝説にもそういうジャンルがあったりするの？

「『村系』の都市伝説っていっぱいあってね？　怖いものがほとんどなんだよ」

「へえー。なんだか、のどかなイメージがあるジャンルに聞こえるけどなあ」

俺がそう返すと、オカルトマニアな魔女っ子さんは何故か嬉しそうに胸を張った。

そして、人差し指を一本立てて、俺にレクチャーを開始した。

「この村みたいにならないうつたら出られなくなっちゃう村から、化け物……人狼みたいなものが出てきて、滅びてしまった村、村人がみんな死人の村、などなど。」

色んなパターンがあるのが『村系』都市伝説の面白くて、おつかない所なの」

「へえー」

『村系』の都市伝説には人狼とかも出るのか。

人狼かあ……リサの奴大丈夫かなあ。

「ご主人様どこですかあ……ぐすん」とか言って、泣いてないよな？

というか、さつきサイトに気になる情報があったが気のせい……だよな？

「少数の閉鎖的なコミュニティ……そういったものを感じる威圧感や疎外感のせいで、昔から『村』っていうのは恐れられてきたからね。ここで語られている村も、人が減ったり廃村になったりしたから、きつと怖い噂がいくつも立っただろうし」

なるほど。本当のところは単なる過疎化が原因でも、人の噂は色んなものが立つ。そ

の中で、まことしやかに流れたのが『ロア』になっちまったのか。

「この村も、ただ単に『異世界の村』でなくて、人が出られない何かの原因があるに違いないの。」

「この『語り部』は中に入っていないから、その辺りの情報が一切書かれていないけどね」「人が出られない何かの原因か」

「その辺りは、噂を調べてみるしかありませんが。情報収集の時間は？」
「多分、放課後に先輩達の話聞いた後、すぐ出発だろうな」

3人でのんびり情報収集する暇はない……って事か。

「まあ、普通はちよつとこれから様子を見に行こつか、って話になるでしょうね」

「短気な音央ねおの性格だと1人でも行くって言い兼ねないね」

そんな事になれば、彼女が行方不明になる確率だつてある。

中学時代からの友人を、女性をそんな目に遭わせたくないからね。

「あはっ、それじゃあ私が別働隊になって、色々調べておくよ。」

「この手の話題を調べるのってとても楽しいからねっ」

朗らかな笑顔で小さなガッツポーズを見せるキリカ。

うん、この子は、本当。理子に似てるね。

「魔女の調査力を頼りにするとしますか」

「瑞江ちゃんの解決力も頼りにしてるよ」

単独だと出来ない相談も、仲間がいれば出来る。

まさこ。

武偵憲章一条。

『仲間を信じ、仲間を助けよ』、だな。

俺も早く彼女達に頼られる男にならないとな。

そんな風に思っていると

「あーっ!!? てめえ、何、美少女2人と食ってんだ!!?」

いきなり賑やかな声が聞こえてきた。

第二話。富士蔵村の噂

前編

血相を変えて走ってきたのは、やっぱりアランだった。

「丁度良かった、アラン。境山の噂を何か知らないか？」

抗議をスルーして尋ねてみるが、アランは俺にイライラしているみたいだ。

「プイツ、と顔を背けられた。」

「何で僕がお前にそんな事を話さなくちやいけないわけ？」

「ヤレヤレ。」

不貞腐れてしまったようだな。

仕方ない、べらべらと話したくなるようにしてやろう。

「キリカ、キリカ」

小声でキリカを呼び、ツンツンとその腕をつつく。

キリカはうん、と頷くとアランの方に体を向けて囁いた。

「アランくん、何か知らないかによ？　それと、一緒に御飯食べよ？」

「このアラン、キリカさんの為ならなんなりとお答えしましょう」

「変わり身早えな！」

白雪に対する武藤みたいな変わり身の早さだ。

アランはすつごく嬉しそうな笑顔で学食で買ったパンの袋を開けている。

その姿を見ていると、憎めないヤツだな、と思ってしまう。

「んで、アラン。何か知らないか？」

「おうー」

すつかり上機嫌だ。

アランの目は今、ぼそぼそと小さな口で御飯を食べている一之江の方に向けられている。すつかり鼻の下を伸ばしている辺り、あのお人形さんのような清楚な食べっぷりにドキドキしているんだろうな。

うん、イケメンの顔が台無しだな。

以前、キリカが言っていたが女子からのアランに対する評価は『アランくんって顔はいいよねー』というものらしい。

顔は……って、女の子って怖いな。

そんなアランだが、本人はそう言った周囲の評価に気づいていないようだ。

うん、残念なヤツだな。

『境山ワンダーパーク』の辺りに、村があつたつて噂、知ってるか？」

「あん？　境山にあつた村って、『富士蔵村』の事じゃねーの？」

「フジクラ？」

「なんだ知らないのか。有名だぜ、富士蔵村」

「いや、俺の記憶にはないな。境山の事はあまり知らないんだよ」

一文字疾風の記憶には、境山についてはほとんどない。

境川についてならそれなりにあるみたいだが。

一文字の家からだと言山に行くより境川に行く方が近かったようだ。

「アランくんは山育ちで、モンジ君は川育ち、みたいな感じなんだ！」

キリカが面白そうな顔をして尋ねてきた。

「やっぱ、男は高い山を目指さないといけないわけだよ、キリカさん」

アランが俺の方を向いて、ニヤつとした顔で言ってきた。

山育ちじゃないと思って馬鹿にしてるのか？

よし、なら受けてやろう。

ヒステリアモードの俺は、アランの言葉を鼻で笑いながらキリカに告げた。

「いやいや、雄大な川の流れのように落ち着きを持たないと、キリカ」

「あははは！ 私山も川も好きだよ？」

キリカが屈託なく笑ってくれたので、アランと俺はそれでいいか、とお互い納得した。

美少女が笑ってくれればいい。

それがヒステリアモードの俺とアランの共通認識だ。

「で、アランくん。どんな噂だったの?」

「えーと……そうだな」

アランは視線をうろつかせた。

こいつは外見こそアメリカとかイギリスの人だが、生まれも育ちもこの街なので、幼い頃の記憶は、この街での記憶なのだ。

「小さな頃は、夕暮れ時にワンダーパークで遊んでいると、富士蔵に連れて行かれて帰って来れないぞー、って言われてたんだよ」

一之江の眉毛がピクツと一瞬だけ反応する。

しかし、食べるテンポは一切変わらない。

キリカはキリカで、一瞬だけDフォンをしまった胸元に手が触れていた。

2人が反応したのも、無理はない。

———
今の話だけでも、かなり符号は一致していたからね。

「でも小さい頃はさ。実際あの辺りに村なんかないから、よくある母さんとか先生達の『夜まで遊んでいると怖いよ』系の話だと思ってたわけよ。でもなんとなくおっかないから、その時間には近寄らなかつたんだ」

アランは昔を懐かしむかのようにそう告げる。

なるほど。

そういう意味では、その噂はきちんと子供達を守っているものだったんだな。

「ねえ、アランくん。他にはその村のお話、なんかなの？」

「キリカさんが求めるなら、僕は何だって出しちゃいますよ」

「うんうん、いっぱい出してねー」

「ぶふっ」

アランが撃沈した。

鼻を押さえて蹲った。

キリカの言葉はアランには刺激が強すぎたようだ。

「んっ？」

キリカは解っているのか、解っていないのか、いつものようにニンマリしている。

……小悪魔的な魔女の本領発揮な場面だった。

「ほらティツシュだ、アラン」

「サンキュー、相棒」

とりあえずティツシュをくれてやると、鼻に詰めて礼を言うアラン。

しかしイケメン外国人が鼻にティツシュを詰めている姿は、いかにもシユールな光景

だな。

「その村は、えーと、なんだっけな。小学生の頃は色々噂があっただけどなあ……」
「そうなのか？」

「うむ、同じ小学校のヤツなら僕より詳しいかもしれん」
「誰がいるんだ？」

あいにく、アラン以外に境山育ちの知り合いに心当たりはない。

なのでアランに他に知っている人を尋ねると意外な人物の名前が挙がった。

「お前の知り合いだと、音央たんが丁度同じ小学校だぜ」

「アランと音央は知り合いだったのか」

「フツ、僕はクラスが一緒になつた事はないから『隣のクラスの可愛い子』止まりで面識などない、しかも、どんどん可愛いく、スタイルも凄い事になっていったからな。

僕は遠くから見ていただけで満足してしまつたのだ！」

自信満々に語るアラン。

つまり、チキンな性格だから、美少女に話しかける甲斐性はなかった、って事だな。

今でこそキリカや一之江に話しかけているが、それは俺が近くにいるからであつて、アラン単独だと足踏みしてしまうという意味だな。

顔はいいのに……残念なヤツだな。

「僕が出せるのものだところんなモンかなあ」

アランはまだ何かを考えている。

多分、そういう親のいいつけを守って、のびのびと育ってきたんだな。そんな事を考えていると

キリカがアランに向かって、左手で髪を抑えながらウインクしていた。

「そうなんだ、いっぱい出してくれたね、アランくん！」

あつ、コラ！ そんな風に言ったら……。

「ぶふっ！」

アランが再び轟沈した。

キリカを見るとその顔がニンマリしている事から、ああ、これはわざとだ、と理解できた。

この魔女っ子、マジ恐ろしい子!!??

「ん？」

「……………」

不意に一之江の方を見ると彼女は、箸を止めてじつと虚空を見つめていた。

何か考え事をしているのかな？

レキみたいに風と交信とか、してないよな……。

その難しそうな顔を見つめていると、俺の中で一抹の不安が湧き起こった。

2010年6月1日午後16時50分。

夜坂学園生徒会室。

「失礼します！」

放課後になり、俺達は、詩穂先輩と音央がいるであろう生徒会室のドアをノックした。
「はーい、入っていいよん♪」

ガラツとドアを開けると、そこには我が学園の生徒会長、七里詩穂先輩がいつものように、ニヤパーという笑顔で待ち構えていた。

その横には、気が強そうな顔をした音央が立っている。

「あはっ、いらっしやい、モンジくん！ みずみず！」

「うん、いらっしやい」

「お邪魔します」

見る人全てを包み込んでくれるような笑顔の先輩と、見る人を萎縮させてしまいそうな強気な音央の視線。会長と副会長で、中々バランスの取れた2人に見えた。

「……やはり、みずみず、って言いにつらくありませんか?」

みずみずこと、一之江瑞江は先輩に会うたびにそう抗議している。

「うふふ!　　そこがチャームポイントだよ♪」

「そうだぞ、みずみず」

「殺しますよモザイク男」

「人をいかがわしいもののように呼ぶな!」

「はいはい」

ヒステリアモードがすでに解けている俺は一之江に抗議したが、一之江は澄まし顔で受け流しやがった。反論したいが言うだけ無駄なので先輩に話しかける。

「そして、ついでに言う俺の名前は一文字疾風です、先輩」

「うふ。いらつしやい、疾風……♪」

語尾にハートマークが付きそうなくらい情感たつぷりに俺の名前を呼ぶ先輩。

思わずその姿にドキつとしてしまう。

途端、身体を中心に血流が集まるあの感覚が再びしてきた。

(くっ、静まれ!　俺の血流!)

こんな所でヒステリアモードになってみる!　　大惨事を引き起こすぞ……耐えろ、

俺!)

「ど、ドキドキがヤバイので、モンジでいいです、ハイ」

「あは、了解、モンジくんっ」

この世界でも俺は年上に弱いみたいだ。

生徒会室に来たのは結局、俺と一之江だけだ。

キリカはアランが暮らす町に、聞き込みなどの調査をしに向かった。

1人で大丈夫なのかを尋ねたが、『こういうフィールドワークは任せて!』と楽しそうに返事をしていた。

アランも誘ってみたが、彼奴は怖がって『僕は怖い目に遭いたくない!』と、きっぱり断った。

きっぱり言い切れるあの態度が羨ましい。

幼少時代の親の教育が行き届いているようで安心した。

まあ、俺だって出来れば厄介事や怖い目には遭いたくないのだが、『主人公』という存在である以上、避けては通れない。

「モンジと一之江さんだけなのね。キリカちゃんは?」

俺や一之江に座るように促しながら音央が不思議そうな顔をした。

他の生徒会メンバーは来てないようで、俺達は適当な席に座った。

「キリカは情報収集が得意なんだ。だから別行動で調べてくれてるんだ。」

それとモンジって言うな！」

「ふーん、役割分担があるのね」

文句に対してはさりとスルーしやがった。

しげしげと腕を組んで俺達を見る音央。

無理もない、一之江が転入して来てからまだ少ししか経っていないからな。

別と同じ部活でも同好会に入っているわけではない。

それなのに、チームワークみたいなものがあるのが不思議なんだろう。

だが、一緒に遊んだ事のある先輩はごくごく自然に受け止めてくれた。

きつと前回の頼み事を果たした件でそれなりの信頼を寄せて貰えているのだろう。

「今日はモンジくんとみずみずが調べに行ってくれるの？」

会長席から身を乗り出すようにして、眉を寄せて心配そうに言ってくる先輩。

「ええ。まあ、はい」

詩穂先輩は、座っていた椅子から立ち上がった。

「実はワンダーパークで神隠しになっちゃう、っていう噂が学校内で流れててね」

そして、背後にあったホワイトボード、そこに書かれていた『ワンダーパークで神隠し！』という表題と、そこについている矢印の先にある『超怖い！』という文字の前に立った。

まるでその文字を背に隠すように。

うん、先輩が怖がっている、というのは確かなようだな。

「その噂ならちらつと聞きました」

昼休みに調べたばかりだからな。

「日没と同時に入ると、神隠しに遭っちゃう、みたいなお話なの」

先輩は胸の前で指を合わせて、しょんぼりした顔をした。

俺は先輩の顔を見ようとして、ついつい視線がその胸元にいつてしまった。

(うっ、で、デカイ……。おそらくメーヤ級の大きさだぞ。

軍艦で表すなら、原子力空母級のたわわな胸だ。弩級戦艦胸を持つ、音央を上回っているな)

そんな事を思ったその時だった。

突然、左足に激痛が走った。

「痛だつ!?」

「どうしたのよ、いきなり変な声をあげて」

「いや、今、左足を踏まれたみたいなの激痛が……」

やったとしたら、一之江だろうが……。しかし一之江は俺の右側に座っている。

犯行は不可能だ。

「踏まれた？」

「……何でもない」

「気のせい……だよな？」

「つまり、俺達でその『神隠し』の調査をして欲しい、と。そういう事ですね？」
痛みに耐えながら先輩に尋ねると、音央が自分を指差し……。

「モンジとあたしでね。一之江さんも色々詳しいみたいだから、いてくれればそりゃ心強いけど。ちよつと今からワンダーパークの様子を見に行くって感じよ」

予想通り、音央は自分で行こうとしていたな。

まあ、勝手に行かれるよりか数倍マシだけだな。

「はあー、わかった。行って、何もなかった、だから安心だよ、っていうのを広めたいんだな？」

「そーいうこと。ここからワンダーパークまでちよつと距離があるから、途中でタクシーでも拾って行かないといけないけどね。日没と同時に何かあるっていう話だし」

タクシーか。財布の中身大丈夫かな。

こつちでも金欠気味だからな。

「私のよく利用するタクシーがありますので、それを使いましょう」

一之江が小さく手を挙げて提案してくれた。

一之江が利用するタクシー……また、あのタクシーか。
「あれ、いいの、一之江さん？」

例のタクシーの事を知らない音央が不思議そうに聞く。

「ええ。問題ありません。私の家はご覧の通りお金持ちです」

未だに蒼青学園そうせいの制服を着ている一之江はそう告げた。

裕福なご家庭の御息、御令嬢が通うことで有名な学園のその制服は、この上ない説得力を持っている。

因みに、何で未だに蒼青学園の制服を着ているのか、一之江に尋ねてみたところ。

蒼青学園の制服を一人だけ着ていることで、周りに『噂されやすくなるから』だそうだ。

謎の転入生という立場は様々な憶測を呼ぶらしく、それが広がり『月隠のメリーズドールドールつてもしかして……』のように広がれば、その存在は強固になる、ようだ。

適度に噂されれば存在性をアピールできるからな。

「つていうわけなので、俺達は早速行ってみます」

俺がそう言うと、詩穂先輩はトトトツ、と小走りに走ってきて。

ぎゅつ、と俺の手を両手で握った。

(うっ、マズイ……ヒスる!!?)

「ごめんね。みんなが怖がっているから、何も無いよーって言うるように調べてくれるだけでいいの」

「うおっ、あ、はい」

先輩の温かい手が、俺の右手を握ってくる。

「モンジくん達が危ない目に遭うのは嫌なんだけど、頼りになる子がモンジくんしかいなくて……」

そして、先輩はあろうことか、俺の手を自分の胸元に寄せた！

「つつつつ!!?!」

胸に触れるか、触れないか、の位置……柔らかさを堪能出来るわけではないが、その布の先はいわゆる先輩の胸なわけで……。

「か、会長っ!」

「うにゅ?」

音央が赤くなつて抗議し、そつちに先輩が体を向けた弾みで……。

むにゅ。

「つつつつつつつつつつ!!?!」

(デ、デカイ!!?) やっぱり原子力空母級はある……つて馬鹿!

何考えてんだ、俺は!?!? ま、マズイ……来た。ヤツがくる、ゾ)

ドクンドクンドクドクドク。

また、なつちまった。

しかし、この感触は、凄まじい。

俺の右手は楽園に到達していた。

右手が触れた禁断の世界。そこは柔らかく、温かで、程良い弾力を持ちながら、制服越しにも伝わる心地よさをもっていて……。

女性の胸をあまり物に例えたくないが、戦艦に例えるなら、詩穂先輩、原子力空母級。音央、弩級戦艦。キリカ、戦艦。一之江、ゴムボ……。

ザクウウ!!?!

「切り落とされた!?!?」

あまりの激痛に左足が切断されたかと思ったほどだが、足はなんともなかった。一之江はあくまで俺の右側にいる。

左足を鋭利な刃物で刺すには、かなりの高速移動が必要だ。

もしくは、あれだ。居合とか。

つていうか、あれか、一之江は胸の大きさとか気にしてるのか?

俺が痛い目に遭うのは、そういうタイミングだよな。

というか、何故解ったんだ。

一之江の口アには、相手の心を読む能力とかもあるのだろうか？

一之江なら何でもありそうで怖い。

「わっ、どうしたの？」

「ここにいると、どうやら俺の左足は殺されるみたいです」

「わっ、大変だねっ！」

先輩は大慌てで俺の手を離して、肩に触れてくれた。

「それじゃあ、行ってらっしゃいだね、モンジくん？」

「はい、一番怖いのは都市伝説よりも身近にある、というのがよくわかりましたよ」

「ふえ、そうなの？」

「そうですね。」

一之江は素知らぬ顔をし続けている。

音央はそんな俺達の様子に気がついたのか、苦笑いをしていた。

「本当に気をつけてね？」

「大丈夫ですよ」

「まあ、お任せください。少なくとも音央さんは無事に戻します」

俺が席を立つと、一之江も席を立ち上がった。

「俺は？」

「足がもげないといいですね」

「もぐなよ!!?」

「あはは、みずみずとモンジくんは相変わらず仲良しだねっ」

安心したような笑顔で、詩穂先輩は俺達を送り出してくれた。

第三話。富士蔵村の噂

後編

2010年6月1日。午後5時30分。

校門から出た所で、一之江は携帯電話を操作していた。

その直後、坂の下から個人タクシーがやってきた。

俺達の前にその車が停車すると一之江はしれつとした顔で携帯電話を閉じて

「乗って下さい」

そう、当たり前のように促した。

「お、お邪魔します」

俺が先行して入ると、音央がその後についてきて、最後に一之江が乗った。

「え、うわ、すごっ」

音央が感心したように、驚きの声を上げる。

彼女が感心するのも無理はない。

3人で座っても余裕がある座席の広さに、内装は豪華で座席も居心地のいいふわふわ感があるからね。

「織原さん、ワンダーパーク入り口に、日没前に着いて下さい」

「あいよ、瑞江ちゃん」

例の運転手、織原さんは一之江が行き先を告げるとそう返事をした。

「ふええ」

音央は俺と一之江に挟まれてなんだか落ち着きなくそわそわしていた。

「ん、どうしたんだい？」

「あたし、タクシーとかつてあんまり乗らないから、なんか落ち着かなくて……あたしの知っているタクシーよりちよつと豪華だし……」

「織原さんのタクシーはそれなりな人しか乗りませんからね」

前回同様、一之江がさらりと告げると

「い、一之江さんってそれなりな人なのね……」

音央がちよつとシヨックを受けていた。

「ええ、かなりのそれなりです」

「なんかややこしいが、凄い人っぽいよ」

俺が一之江の言葉を補足してやると

「ふええ……」

音央は一之江と、タクシーと、景色を見て、すっかり感心しっぱなしだった。

彼女の目はキョロキョロと忙しく動いては、感心の吐息をこぼしている。

外の風景は山道だが、車内は快適なままだった。

安全運転な上に巧みなドライビングテクニクを持っている運転手。

流石は、一之江御用達の人だと感心してしまった。

「んで、音央よ」

「あ、うん、何？」

音央のテンションが落ち着いた頃に俺は彼女に話しかけた。

「アランから聞いた話なんだけど、君も境山近くの小学校出身なんだって？」

「ああ、そうよ。クラスは一緒になった事はないけど、金髪でやかましくて目立つヤツだったから、小学校の頃から知ってたわ」

「目立っていたのはお互い様だったみたいだけどね」

「そうなの？　　なんで？」

「小さい頃から可愛かったからだろうね」

「あはは！　　どうかしら、小さい頃は結構ヤンチャだったわよ。女の子よりも男の子達と一緒に外を走りまわってたし」

「可愛い子が一緒に走りまわっていたんだったら、余計に目立っただろうね。」

基本的に男なんていうものは、自分と楽しく遊んでくれる女の子に弱いし、音央はその頃からサバサバして話し易かったに違いないからね。きつとモテモテだっただろう。「きつと元気いっぱいの可愛いらしい女の子だったんだらうね！」

それはそうと、ワンダーパーク辺りの噂って、昔っからあつたみたいだけど音央は知っているかい？

例えば、夕暮れ時までワンダーパークで遊んでいると、なんとか村に連れて行かれて帰って来れないぞー、とか」

「あー……その話ね……」

解り易いくらい顔をしかめる音央。

「なんだかバツが悪い、みたいな表情を浮かべてから……ま、いつかと表情を緩めた。

「小さい頃、ウチの小学校でよく出回った噂なのよ。暗くなるまでワンダーパークの近くで遊んでいると『富士蔵村』に連れて行かれて、帰って来られなくなるって」

「やっぱり言葉に苦味を含みながら、音央は思い出すように語り始めた。

「ワンダーパークってウチらの学校から結構近いからさ。自転車で行って、金網から忍び込んで、中で勝手に遊ぶっていうのが流行っていたのよ。だから、それを危惧した親とか先生とかが、そういう怖い噂を作って流したっていうわけ」

「ヤレヤレ、と首を振る音央。」

確かにそう言われると、それくらいは噂ならよく聞く話だと思う。
でも……。

「では、作り話なのですか？」

そう、それが単なる作り話なら何の問題はないんだ。

問題なのは作り話ではない、場合だからね。

「んまあ……とある女の子が、一度あの辺りで一晩だけ行方不明になってね。ま、結局すぐ次の日に帰って来たんだけど……それでまた、すつごい噂が広がっちゃって……」

やっぱりバツが悪そうに語る音央。

この話をしたくないわけではないが、話しづらい、みたいな雰囲気を感じる。

もしかしてこの噂そのものに、音央も関わっているのかな？

「まあ、うん……で、あそこにあるって言われている村の話だったけ？」

「うん。やっぱりそんな村はないのかな？」

「ううん。元々あのワンダーパークの辺りには、ずーっと前に『富士蔵村』っていうのがあつたらしいけど。小学校の時に、社会か何かの時間で習ったもの」

「ふむ……実際にあつたのは確かなのですね」

一之江は情報収集モードになっていた。

これなら俺が質問しなくても上手くやってくれそうだな。任せよう。

「うん、実際にあったみたい。でも境山なんて山奥にあつても不便でしょ？」

人々も皆んな、夜霞市とか月隠市に流れていっちゃって、廃村になつたて話よ。

んで、その村だつた辺りにワンダーパークを作つたらしいわ」

「ああ、なるほど。元々村があつた場所なら、道路とかの交通の便はある程度整備されていたでしょうしね」

元々村に通じる為に作られ、整備された道路なんかをそのまま使えば、テーマパークへの行き来は楽になるってわけだな。

今思えば、先日、俺達が訪れたトンネル。

あれも村に通じる為に作られたものだったのではないだろうか。

そう考えると、音央の話は彼女の歯切れこそ悪いものの、『そこに村があつた』というのを裏付けるには充分な話しだったな。

そして、その話が噂されまくつたのだとしたらそれが原因で『神隠しのロア』を生み出してしまったとしても仕方ない事なのかもしれないな。

『本当にあつた都市伝説』しか載つてない『8番目のセカイ』で514件もあつた検索結果。

あれはつまり、『神隠し』という現象は割と多く発生している、という意味ではないだろうか。

もしそうだとしたら……少なくとも、近所で起きている神隠しは止めないとな。

「他に、その村の噂で覚えている事はありませんか？」

一之江は真剣な声で音央に質問していた。

一之江が真剣になるのも無理はないと思う。

『村系』のロアは厄介だとキリカも言っていたからね。

『ロア』を食べる『魔女』であるキリカが厄介に思うくらいのロアだから、その大変さは物凄いものなんだろう。

「うーん……そういえば、富士蔵村が廃村になった理由、色々尾ひれがついてたかな」
「尾ひれですか？」

「子供達の適当な噂なんだけどね。なんか、めっちゃ狂っちゃた人が村人を全員殺しちゃったとか、満月の夜に金色の獣が村に現れて辺り一帯を襲っちゃたとかなんとか。

そんな噂が流れていたのよ。

まあ、そんな事件があれば、でっかいニュースになってるはずだから、多分単なる噂だと思っただけ」

……。

……そっか全員殺しちゃった、という噂が流れたのか。ジエイオン村みたいな感じだったのかな。

怖いなー。

……。

……駄目だ。話しの前半に集中して後半聞き流そうと思っただけど、聞き覚えがありません。話が出てきちゃったよ。

満月の夜に現れる金色の獣って……違うよな？

一之江や音央はそんな俺の内心には気づかずかずに会話を進めていた。

「まあ、廃村になった理由をおっかなくしたかったのでしょうね」

「うん、とにかく凄いいものにしたがるもんね、子供って。当時は大人の中にも気味悪がって、怖がっていた人がいるみたいだったけど」

そして子供の噂だけではなく、大人にまで浸透してしまったのか。

確か、『ロア』が発生するシステムは人々の噂が広まりまくって世界が認識したら、だったな。

つまり、今俺達が目指している『富士蔵村』は……。

大量虐殺や、獣の襲来によって滅んだ村、みたいになっているってわけだな。

「……しかし……大量虐殺があった噂や獣に襲われた噂がある村、ですか……」

一之江もその危険度を把握したらしく、音央越しに俺を見てきた。

出来ればそんな危険な口アとは戦いたくないが、いざとなったら戦るしかないだろう。

狂った殺人犯はともかく、金色の獣は俺ならどうにか出来る……と思うからね。

「その村人を皆んな殺してしまつた殺人鬼や凶暴な獣が、次の犠牲者を求めて町まで降りて来るから、夜は家を出ちゃダメよ、みたいな事を言われたわ」

最初は単なる『遅くなるまで遊んじやダメ』というだけの話。

それが、1人の少女が行方不明になってからはその噂に尾ひれがつきまくって『神隠し』が起きた事になってしまった。

しかも、その行方不明になった山には元々村があつたわけで。

その村も、面白おかしく『大量虐殺』や『金色の獣が村人を襲つた』噂がある村なんて言われてしまつていた。

そう考えると……今回俺達が向かうワンダーパークで『神隠し』に遭う……。

「可能性は随分高いわけか……」

「ん？」

「ああ、いや。俺や一之江が知っている噂で『人喰い村』っていうのがあつてね。

それなのかも……なんて思ったんだよ」

「あ、確かにそう言われてたわ。『富士蔵村』！入ったら食べられちゃうぞー、って」

ビンゴかよ。

つまり、今ワンダーパークに行つて『神隠し』に遭うと、もれなく入つたら二度と出てくる事の出来ない『人喰い村』に入つてしまふ、と。

そしてその『人喰い村』には、大量虐殺者や獣がいて、その被害者になるかもしれない。

そんな噂が成り立ってしまったっているようだ。

中に入った人が殺されてしまつてゐるなら『帰つて来れない』村になるわけだよ。

「念のため言つてみますが、日を改めませんか」

そんな提案を一之江は音央にしていた。

その真摯な瞳を向ける彼女を見て……音央は優しく微笑んだ。

「ごめんなさい、一之江さん。ちょっと怖がらせちゃったわね。大丈夫大丈夫、子供騙しの噂だから」

まるで安心させるように、一之江の小さな手を両手で握りながら音央は声をかける。

一之江はどこか困つたように、手をそのまま、視線を上に向けていた。

……子供騙しの噂。

それが一番怖い、というのを音央は知らない。

そう、最初からそんな噂が実現するなんて誰も思つていないんだ。

だが、俺と一之江は、少なくとも『日没と同時』にワンダーパークに入ってしまったうと、その村に突入できてしまう事を知っている。

「殺人鬼とか、獣とか、神隠しやオバケなんて、本当にいないわよっ」

目の前にいるからねー！

それは妙に実感のこもった言葉だったのだが……リアルオバケである一之江を安心させるために伝えているのを見てみると、なんとも不思議な気分になった。

「まあ、『ワンダーパークの怖い噂はあくまで噂で、実際は何もありませんでした』っていうのを証明すればいいんだよね？」

「うん、そういう事。あたしらが実際に調査して、そのレポートをあたしが書いて。

んで、新聞部が内部掲示板にでっかく貼り出してくれる手はずになってるわ」

「ふむ、理にかなってますね」

キリカや一之江から聞いた話だが都市伝説の倒し方はいくつかあって。

中には、『対抗神話』などと呼ばれるものもあるが一般的なものとして。

人々の間に安心出来る噂を広める事。

それは『都市伝説』の間接的な倒し方であるため、気をつけなければいけないらしい。「会長つてば、そういう新聞部を使った校内のメディア操作みたいなものも得意なのよ」

「へえー、凄いなだね、詩穂先輩つて」

「あんたが釣り合うためにはもつともつと勉強しなきゃいけないわね？」

「そうだね、頑張るよ！」

因みに音央も勉強が出来る人がタイプなのかな？」

「へ？　　あたし？」

あたしは……あたしのタイプは……秘密よ！」

「そうか、秘密か……」

なら音央のタイプにもなれるように頑張るよ」

「バ、馬鹿なんだから！」

あんたはそんな事は気にしないで先輩の事だけを考えてればいいの！」

「ははっ、そうだね。そうするよ」

「ふふっ、頑張りなさいな、恋する男の子っ」

一之江の手を離して、ペしペしと俺の肩を叩く音央。

肩を叩かれながら思った。解ってしまった。思い出してしまった。

この子は俺も怖がらないように、わざと明るくしてくれているんだ、と。

六実音央という少女は確かに、そういう人物だった。

場の空気や雰囲気明るくする事が得意な、アイドルチックな才能のある少女だという事に。

ただ一つ解らない事がある。

……そんな彼女がどうしてさつきはバツが悪そうにしていたんだろう？

「あ、入り口が見えてきたわね」

音央がタクシーの行き先となっている目の前に見えてきた『境山ワンダーパーク』の入り口を指差した。

その入り口を見ながら、俺と一之江は目配せをして、頷き合った。

これから向かう先でどんな危険や困難があるうと。

——少なくとも、この明るく朗らかな少女は「物語」に巻き込まないよう
しよう、と。

第四話。超えてしまった境界線……

2010年6月1日。18時20分。境山ワンダーパークゲート前。

何気に物凄いスピードが出ていた織原さんの運転により、俺達は予定の時間よりかなり早くワンダーパークに到着した。

乗っている間はその速度に気づかなかったが、あの運転手さんはかなりの凄腕なんだろう。

前世の友人、武藤よりも運転技術は高いかもしれない。

車輻^ロ科^ジにいれば、間違いなくSランクが付くと思つたほどだ。

「君の知り合いは凄い人が多いんだね」

「同じ格の人が集まるのは世の常です」

自分も凄いと堂々と言い放つ辺り、やっぱり一之江は一之江だと安心した。

「い、一之江さんて凄いのね」

「それはもう。惚れて下さっても構いませんよ」

「あははっ、その自信満々なところは惚れ惚れするわね」

仲良さそうに会話する一之江と音央の姿をみる。

恵まれた体つきをしている音央よりも、自己主張しない体つきの一之江の方が自信満々な態度をしているのを見ると、とても微笑ましく思う。

「ここでモンジだけ行方不明にしましょう」

「え!?? ど、どうしたのいきなり、一之江さん」

「いえ、その男が今、『自己主張しない体つきも微笑ましい』とか、そんなエロい視線でこの体を見つめていたものですから」

「うっわー。サイテー、モンジ」

「ごめんよ。音央みたいに出るところが出ている健康的な体つきも好きなんだけど、スレンダーな一之江みたいな体つきも好きなんだよ」

気心が知れた音央と、何を隠しても無駄な一之江相手なので、正直に語ることにした。

「ストリートに語り始めましたよ、このハゲ」

「だからハゲてないって!??」

正直に話してみたが、一之江も音央も『じとく』とした目つきをして俺を見つめてきた。

「そんなエロボケ少年は放置プレイするとして、私はちよつと入り口付近を調べてみますので、少しここでお待ち下さい」

「あ、うん……わかったよ」

エロボケではない、が反論しても勝てる気がしないのでおとなしくする事にした。エロボケとか文句言いつつ、一之江の機嫌は悪くなっていけないようなので安心した。音央にペコリとお辞儀をすると、一之江はそそくさと無人の入り口に向かっていった。

『境山ワンダーパーク』では、入場チケットを備え付けの自販機で購入し、それを自動改札機に似たゲートに入れて通る仕組みになっている。

監視カメラも何台か確認できるので、すぐ近くの建物にある事務所に映像は流れているようだ。

入場券自体はかなり安く、アトラクションは別料金となっていて、大きな噴水のある広場や飲食店などもあるようだ。

そのことから『境山ワンダーパーク』は多くの人が楽しめるような憩いの施設となっているのが解る。

とはいえ、今日みたいな平日では客足はほとないんだけどな。

「あと数年もしたら潰れちゃうのかしらね」

寂しそうに音央が呟く。

土日にどれだけの人が入っているのかは解らないが、最近では遊園地やテーマパークがどんどん潰れているというのは事実だ。俺達が大人になった時、自分の奥さんや子供達

を連れて遊びに行く場所が少なくなっていく……それはなんだか、とても寂しい事だ、
と思った。

まあ、そんな結婚相手がいればだけどな。

「あたしが将来誰かの奥さんになって、子供達と遊びに来るまでは……せめて残っていて欲しいんだけどなあ」

「くすっ」

「ん？　何よう、いきなり笑って」

「ごめんよ。俺も同じ事を思っていたんだ」

「あははっ、もしかして会長と結婚したら、とか思ったの？」

「もちろんそれも思ったよ。」

けど、その相手は先輩とは限らないよ？

音央かもしれないし」

「バツ、馬鹿じゃないの！　変な妄想するのはやめなさいよ！」

「妄想するのは自由だからね」

「はいはい、夢を持つのは大事よね。うん」

「それなら音央、君はどうなんだい？」

「あたし？　あたしは……そうねえ。今のトコ、ドキドキしてる相手はいないかな」

「そっか……」

なんだか、妙にドキドキしてしまった。

音央の言葉に安心した自分がいる。

「まあ、音央はモデルやつてるし、スタイルもいいからモテるだろうしね」

「体目当ての男なら大量にいるわね。モンジもエロい目でよく見てるし」

「女性の体を見てしまうのは本能なんだよ。

見ないと失礼にあたるからね。

音央にしてみると、肩とか凝ったり、嫌な視線で見られたりして大変なのは解るんだけどね……」

「あははっ、まあね。そりゃ、肩は凝るし、男共はあたしの顔や性格よりもまず胸を見てくるし。可愛いブラはないし、お風呂の時は腕が重いし、悪い事もいっぱいあるけど……」

ケタケタ笑いながらそう言う音央。

あんまり気にしていないのか、開き直ったのか、気にしているけど強がっているのか。なんとなくだが、強がっている気がするなあ。

「でも、せつかく誇れるものなんだもん。この胸も、綺麗な形を保てるように腕立て伏せとかしてるし。天から与えられたものは、嫌がるより好きになった方がいいでしょ？」

「……そうだね」

音央のその言葉は俺の胸に突き刺さる。

あつちの俺に聞かせてやりたい言葉だよ。

かつて、アリアに『あんたのその才能は人生のプラチナチケットよ』って言われたが当時の俺は要らなきやただの紙キレと同じだ、なんて言ったからな。

確かに俺は自分で選んで力を手に入れたわけではない。

ハンドレッドワン『百物語の主人公』、『不可能^エを可能^イにする男の主人公』のロアは成り行きでなっつてしまったものだ。

HSS……ヒステリアモードに至っては代々ご先祖様から受け継がれてきた厄介な体質だと思っているくらいだしな。普段の俺は。

だけど、その主人公に選ばれたから、ヒステリアモードを持っていたからこそ、アリア達武偵高の皆さんと出会えて、そして今、一之江やキリカとも仲良くできている。

今の自分、そして与えられた環境を精一杯好きになるように肯定していく。

うん、その生き方はとても楽しそうだな。

「音央は凄いな」

「え、何よ突然。気持ち悪いわねっ、バーカ！」

クスクスと笑いながら俺を見る音央。

夕焼けに輝く、その濃い茶色の髪はなんだか神秘的な雰囲気を出していた。そして、不思議な事に……。

どうしてか、夢の中で見た少女の面影が重なった。

あの子も確かに神秘的だった気がしたが、音央とは性格は似てない気がするのに……。

「何よ、あたしの顔をマジマジ見たりして。もしかして惚れた？」

「うん。惚れ惚れする顔なのはたしかだね」

「褒めても何も出ないわよ」

「それは残念だな。今のは、夢の中に出てきた子を思い出してたんだ」

「うん？ あたしが出たの？」

「うーん、残念ながら違うね。」

夢の中の子はいかにも清楚！ って感じだったからね」

「清楚キヤラじゃなくて悪うございましたねー」

「元気で強気な音央のキヤラも気に入ってるから、それはそれでいいさ」

「あははっ、あんたの為じゃないけど、解ったわっ」

うーん、顔も思い出せないけど、どうしてだか似てるという気がするなあ。

「そーいや、あたしも最近変な夢を見るのよね」

「え？　　そうなのかい？」

「ハッキリ覚えてるわけじゃないんだけど、あたしが、知らない部屋にいるの」

「男と？」

「男女問わず、ね。たまに見る夢んだけど、一緒にいる人はちよくちよく入れ替わっていく感じ」

「へえ……」

似たような夢、同じような夢を見る事はあっても、夢の登場人物がちよくちよく入れ替わっていきなんて変わってるな。

「なんだか知らないけど、悲しい気分になる夢でね」

「うん」

「あたしは、その人とずっと一緒にいたいのに、必ず『別れ』があるの」

『音楽の部屋』にはタイムリミットがある、みたいな感じか」

「そうそう、ずっと一緒にいちゃいけない、みたいな。それでお別れするときゆううつと胸が苦しなつて目が覚めるの。起きたら泣いてる事もあったりして」

ふむ。詳細はよく解らないがそれはそれで何か意味がありそうな夢だな。

俺が見る夢とは真逆な感じだが……。

もの凄く気になる夢だね。

うん、帰ったらキリカに聞いてみるか。

「大丈夫だよ、音央」

「何がよ？」

「何かあつたら俺が守るから」

「も、もう、馬鹿なんだから……」。

でも……ありがとう」

うん。ちよつと照れた顔の音央も可愛いね。

音央は手に持っていたポーチに何気なく手を入れると、巾着袋を取り出した。

「それは何かな？」

「お守り」

そう言うと、大切な物であるかのように、ぎゅつと胸の前で抱きしめた。

うむ。美少女が胸の前で何かを持つ姿もとても可愛いね。

『お守り』にしてはでかいと思うけど。

携帯電話とかが入りそうなくらいの大きさだな。

丁度あんな感じのケースが欲しいんだよね。突然、発熱する物を持っているから。

ある意味俺にとっても『お守り』だしね。

そう、あの袋に入りそうなの……。

……までよ……とも一瞬思ったが、そんなわけないと思ひ直す。

中学時代から彼女を見てきたが怪しい素振りは一度も見せなかつたからね。

それが演技かもしれないが、騙されたとしても騙された時に何とかしよう。そう、思つた。

「中にありがたい木片とか、御神体みたいなものとか入つてるのかな？」

「ううん。よく解らないんだけどね、開けてないから。」

でも、大事に持つていた方がいいって、小さい頃に言われたの」

「誰に？」

「うーん、覚えてないのよ、これがまた。叔父さんとかじゃないし……パパやママでもないしねえ」

「おつと……ごめんよ」

音央には両親がいない。

今は叔父さん宅にお世話になつてゐるみたいだ。

「ん？ ああ、全然いいって。つていうか、今の流れは別にモンジ悪くないじゃない」

「いや、でも……」

「あははつ、ほんとにモンジは女には優しいわね。いいんだつて。」

「パパもママも、きっと今でもあたしの事を見守つてくれているだろうから」

ケースを胸の前で抱えたまま、音央は夕焼け空を見上げた。

叔父さん達とは仲良くやっている、という一文字の記憶があったが、ちよつと失敗してしまった。

なんだかんだで俺も動揺していたようだ。

きつと不思議な夢の話題で気が動転していたからだな。

反省しないと。今の俺は女性を傷つけるなんて許せないからね。

「そっか。なら大事にしないとね」

「うん、大事にしまくってるわ」

巾着袋の口辺りから、黒っぽい物が見えたような気がしたが、それが何かは何故だか
いまいち思い出せない。

「お待たせしました。そろそろ日没タイムですね」

時間がゆっくり過ぎるような感覚を感じていると、一之江が戻ってきた。

一之江の言葉に俺は緊張をした。

『日没と同時に入ると神隠しに遭う』。

その噂が本当だという事を俺と一之江は知っているからだ。

「うん、それじゃあ、行こうか一之江」

俺は一之江に声をかけてゲートに向かって歩き始めた。

一之江は音もなく、いつものようにススツと歩いて後をついて来て俺の横を歩き出した。

「本当に異世界に入ってしまった可能性もあるので、音央さんは入らないようにしていただくとしましょう」

「うん、そうだね」

俺だって、ロアに関しては素人に毛が生えたくらい知識と経験しかないが、音央は完全に一般人だ。

だから巻き込むわけにはいかない。

なので……。

「音央、ちよつといいかな？」

「何？」

「俺と一之江が先に入るから、携帯のビデオカメラで俺達の姿を撮影してほしい」
携帯電話を構えながら、ジェスチャーをした。

「動かぬ証拠になるだろ？」

「そこまでするものなのね。まあ、いいわ。撮るわよ」

何も起きないと思っている音央にしてみれば、ただの記念撮影と変わらない。

その行動が危険回避となっているなんて思わないからね。

音央がデコレーションされた携帯電話を取り出したのを見て、微笑ましく思ってしまった。

いかに彼女が、普通の『女子高生』としての生活を楽しんでいるのか、よく解る。

「()でいい?」

音央はゲート脇の柵に立って尋ねた。

「うーん、もつと全体が映った方がいいんじゃないかな?」

「あんた達が消えるかどうかの撮影だもん。近い方がいいでしょ?」

それに、これってそんなに望遠出来ないし」

……うーん、本当はもう少し離れてくれた方が安心出来るんだけど……まあ、一応あの柵から向こう側が園内、という事になるのかな?」

なら、あの柵を超えなければ平気……だよな?」

俺はそう判断し、頷いた。

この判断が間違いだった、と……後になって後悔するとは知らずに。

「動画の時間は15秒間だけだけど、いいわよね?」

「うん、俺達がこのゲートに入るだけだからね」

「あいよ、OK」

携帯電話のボタンをポチポチ操作しながら音央は答えた。

一之江の方を見ると、『仕方ない』という顔をしていた。あまり露骨に遠ざけるのも不自然だしな。

音央を巻き込まない為にも、あくまで『仲が良い高校生3人組が、ちよつと都市伝説の噂を検証しに来た』という形で終わらせたいからね。

「はい、OK」

準備を終えた音央が、携帯電話を自分の目の前に構えた？

「いつでもいいわよ」

「んでは、そろそろ日没タイムなので私とモンジは同時に入ります」

チケットを俺に渡して、一之江と俺は隣り合って移動を開始した。

入り口は2個。

それぞれチケットを持った俺と一之江はチケットを右手側にある機械に投入するとカシヨン、という音と共に、目の前にある両扉を模したゲートが開く。

投入するまで、ゲートが開くタイミングと、日没時間がピッタリ合わないといけないのかは解らなかったが……。

「っー」

いぎ、その先に進もうとした時に制服の胸ポケットとズボンのポケットに入れていたDフォンが熱を発した。

これはっ！

「一之江！」

「ビンゴですわね」

胸の辺りを押さえながら一之江は鋭い視線をゲートの先に向けている。

おそらく胸ポケットにDフォンを入れているのだろう。

一之江ならすんなり入るだろうしね。

そんな事を思ったその時

ゆらり、と視界が霞み……今までテーマパークだった景色が、入り口を境に変化していった。

それと同時に背中が以上に熱くなったのは、きっと気のせいだろう。うん……。辺りを見回すと、そこは……。

テーマパークだった景色は、舗装されているものの、多少荒れたアスファルトの道路や草木が生えた道脇、いくつかある古い民家が変わっていた。

ここはもうテーマパークではない。

ならばここが『富士蔵村』なんだろうか？

「わっ、何これ？」

そんな事を考えていると、聞き覚えのある声が出た。

「え、何？ 村？？」

声が出た方を見るとそこには予想外の……いや予想通りに、驚いた声を上げている音央の姿があつた。

どうやら入り口にいる音央にも見えているようだ。

彼女は戸惑いながらも、携帯電話を反射的に向けて村の方を撮影している。

おそらく俺達の中に入れてはこの風景も消えるはずだ。

後で事情は説明するとして、今はさっさと村の中に入ってしまおう。

「行きますよ」

「うん」

「つて、ふ、2人共？？」

静止するような音央の声を横に聞きつつ、一之江と共に俺は一步を踏み出した。

その瞬間——。

俺達の視界は一変し……。

「ええ!?？」

何故だか、音央の上ずった悲鳴が横から聞こえてきた。

「っ、音央!?？」

辺りを見渡すと、ワンダーパークのゲートはなくなり、音央の前にあつた柵も消えていて、周囲は完全に『村』に続く道になっていた。

俺達は無事に村の中に入り込めたわけだが……。

……何で音央までいるのかな？

「どうして、音央まで？」

まさか柵超えした……のか!!？」

「してないわ！　　つていうか、え、あれ、ほ、ほんとうに異世界の村に繋がったの!!？」

手に持つ携帯電話をブンブンと振り回しながら慌てる音央。

そんな彼女を見た後、すぐにやって来た方向を振り向いた。

そこにあるのは、やっぱりワンダーパークの入り口ではない。

あるのは、真っ直ぐに森に続く道路だけだ。

「あたし、入ってないのに！」

おろおろと辺りを見回す音央を見ながら何で彼女と一緒に来たのか原因を考えていると……。

それが目に入った……。

——ああ……そうか……。

「……あれだね」

「あれのようですね」

「え？　どれ？」

自分では気づいていないようで、俺はソレを指差した。

「胸」

「……あつ」

ようやく彼女にも、伝わったようだ。

—— そう、おそらく。

一心不乱に村を撮影していた音央は、体の『一部』が柵を超えてしまっていたんだ。

だから、音央も俺や一之江と『同時に村に入った人』として認識されてしまい、異世界に紛れ込んだ、というわけだ。

慌てて気づいた音央は、自分の胸を抱き締めるみたいに庇ったが、もう遅い。

—— どうやら彼女も、俺達と一緒に

『富士蔵村』に入ってしまったのだから。

その胸……一之江にはない『弩級戦艦』のせいで……。

第五話。異世界にある村

ザクウウー。

俺がそう思った瞬間、再び激痛を感じた。

激痛を感じたのは右足。

一之江は左側にいる。

一瞬で光速移動でもしない限り犯行は不可能だ。

そして、その『一瞬』で移動できる能力を持つ人に心当たりがある俺はその人の方に視線を向けた。

一之江の方を見ると、『何もしてませんが何か？』みたいな顔をしている。

いつもの澄まし顔をしてくる辺り、一之江が限りなく怪しいが怪しいだけで動かぬ証拠はないので何も言えないな。

などとコメント(?)をしていると。

「ど、ど、どという事なのっ!?!?」

うろたえた音央の声が聞こえてきた。

訳も分からず突然異世界トリップしてしまったのだから、戸惑ったり動揺したりして

も無理はない。

俺は二回目だから慣れたけどね。

「まあ落ち着いて下さい」

「え？　あ、あう……」

一之江に突然握られて驚いたのか、音央は奇妙な吐息を零して大人しくなった。

「心配いりません。私より怖いものなど無いのですから」

自信満々に音央に告げる一之江。

「え、一之江さんより……？」

「はい。私はこう見えて、物凄くおっかないものなんですよ」

両手で音央の手を握り、薄く笑いながらそう言つて見せた一之江。

動揺しつつも、握られた手と一之江の顔を見て音央は下唇を噛んでから尋ねた。

「ん……よく解らないけど、一之江さんはおっかないというより可愛いわよ」

「可愛いものほどおっかないんですよ」

荒かった息が少しずつ、落ち着いてきた音央を見ながら一之江はそう告げる。

なんだかんだ言つて優しいんだよね。一之江は。

「安心して下さい……というのも難しいと思うので、今は私達に任せて下さい」

「……………ん、解ったわ」

不安なのか、眉は下がりつばなしだが、それでも音央は頑張つて小さく頷いてくれた。音央の小さな手を右手で握つたまま、一之江は俺の方を向いて話しかけてきた。

「私が撮影担当になつてモンジだけ入れればよかったですね」

「ああ……そうだったね」

そう、俺だけでも先に中に入れてもいいでも一之江は入つて来れるんだからね。

Dフォンがある場所ならどこでも一之江を呼び出せるのだから。

『呼び出した対象の背後に存在する事が出来る口ア』。

それが一之江の口ア。

『月隠のメリーズドール』なのだから。

……それに、一之江なら胸の先がラインを……。

「えい」

「痛い!?」

左足を思いつきり踏まれた。

「どうして……」

「一之江なら胸の先がラインを超えたりする事もないからね、と思ったからです」

「一字一句あつてるってどうなんだよ」

「おっかないでしょ?」

やっぱり心を読めたり出来るのか。一之江は。

だとしたらかなりおっかない存在だな。

「ま、過ぎてしまった事はさておきますよ。ぐりぐり」

「さておいてないや？」

俺の左足をぐりぐりと踏みにじりながら、一之江は辺りを鋭い目つきをしたまま見つめた。

足を踏まれた俺はなつてから時間がかなり経つた事もあり、ヒステリアモードがかなり弱まってきた。

そのせいでつい命令口調で言ってしまった。

「誰かの気配を感じてはいるんだけどその他に気になる事とかあるのかな？」

「っていうか、そろそろ足どけろ！」

「そうですね、私も誰かの気配は確かに感じられます。何者かがいる、というのは確かでしょう。」

「んでもって、命令しやがりましたね、今」

「いいえ。愛しの我がお姫様。その美しく綺麗な足をそろそろ私の足の上からどかしていただきたいのですが、よろしいですか？」

「よろしくてよ」

ようやく一之江が足をどかしてくれて、落ち着く事が出来た。

一之江が向けている視線の先に目を向けると、そこには一軒家があった。

「ロアでは……ないよな？」

「それはまだ解りません。ロアと人間の気配にほとんど違いなんてありませんから」
「うーん、敵意とかは感じないんだけどなあ。」

一之江も解つたりするのか？

「ええ。私は敵意とか、エロい視線に敏感なので」

「そ、そっか……」

「なのでそういう視線で見ないで下さいね」

「……善処するよ」

「よろしい」

そんなやり取りをしていると、そこで音央が何か言いたそうにしている事に気付いた。

「どうぞで」

「あ、うん。……やたら慣れた雰囲気ね、2人共」

おずおずと尋ねた音央の声には、いつもの自信はなかった。

まあ、無理もないよな。

こんな非常識な目に遭って、ただでさえ動転しているのに、同行者はごく普通に事態を受け止めているのだからな。

大事そうに握ったままの一之江の手が唯一の頼みの綱なんだろうしね。

「事情は後で話すつもりだよ。俺もこういう事(非日常的な怪奇現象)には慣れてないんだけどね」

犯罪者とかを追いかけるのは慣れてるんだけどな。

まあ、前世で超能力者や鬼とかとも闘りあった事もあるから割かしら平気なんだけどもね。

「う、うん(そっか、そうよね。よかった。モンジもやつぱ、普通の人なんだ)」

「まあ、念の為、俺と一之江の近くにいてくれ」

「解ったっ」

一之江の手を握ったまま、音央は俺の左側、すぐ近くまでやってきた。

……本当に心細いんだろうな。

いつもは強気な音央が不安いっぱいな困った顔で一之江と手を繋いでいる姿を見ると、すぐに安心させてやりたい、という気持ちになった。

「モンジ。Dフォンはどうですか?」

一之江に言われた俺はDフォンを取り出してみた。

「さつきは赤く光って熱もあつたけど、今はなんともないな」

「危険は無いつていう事かもしれないませんが……魔女の時も反応薄かったですからね」

だから油断は出来ませんよ……という声が聞こえた気がした。

「今思えば、誰かさんの時が一番怖かったよ」

「私つたら最恐ですからね」

「得意げだなあ」

最強じゃなくて、最恐という辺り都市伝説っぽい感じがするね。

それにしても——村かあ。

山の中に作られた小さな村。隣家までの距離は遠く、砂利の道が続いていて夜が近いからか、街灯には灯りが灯っているが、光が当たらない大部分は闇に覆われている。

周囲にある広大な土地は一見すると田園地帯のようだが、田んぼや畑に利用されるわけでもなく放置されている空き地も数多く存在しており目立っている。

過疎化している事を除けば平和な田舎。

それが今俺達がいる場所だ。

ここが噂の『人喰い村』だなんて、いまいち信じられないな。

「ん？」

しかし……何故だろう？

なんとなく、辺りの光景にデシヤヴ……既視感を覚えた。

俺はどこかで、この風景を見た事がある。いや、そんなはずは……。

それとも一文字が……俺が知らないだけで似たような場所に行った事でもあるのだろうか？

「どうかしましたか？」

首を傾げて不思議そうに、一之江が尋ねてきた。

「いや……なんかデシヤヴを感じたんだ、この風景に」

「あ、あたしもなんか……見覚えあるような、ないような……」

おずおずと挙手しながら音央も告げる。

まだ戸惑いが強いのか、仕草は控えめで。

「ふむ？」

改めて辺りを見回した一之江だが、やがて首を傾げた。

その様子から察すると、彼女には見覚えがないらしい。

「ねえ、モンジ？」

「ん？」

「本当に……って、怖い村なのかな？」

一之江の手を握りつつ、釈然としない顔をして音央が言った。

見覚えがある、というのものもあるだろうが……確かに、今の俺は恐怖よりも長閑のどかささを感
じてしまっている。

「まだ解らないね。だけど……今すぐ危険っていうわけでは無いみたいだよ」

「ん……そう、ね……」

そう返事をしつつ、辺りを見回しながら音央は首を傾げていた。

もしかしたら見覚えがある、という感情が一時的に恐怖を和らげているのかもしれないしな。

「で、村に入りましたが、これからどうしますか？」

一之江は再び俺の顔を見て尋ねてきた。

あくまで決定権は俺にある、という事か。

「そうだね。まずは本当に出られないかどうか調べてみよう」

俺達がここに来た理由は『ロア』を調査すること。

だけど……。

「それから、どうするつもりですか？」

一之江が尋ねているのは、そういう事ではない。

「俺の『物語』だったら手に入れるし、そうでなかったら……」

「なかったら？」

俺を見つめる一之江の視線は鋭い。

生半端な返答では満足しないだろうな。

だから俺は覚悟を決めた。

「もし、そうでなかったら……」

覚悟はしても、まだ迷いはある。

—— ロアを、倒して。消してしまっても本当にいいのだろうか？

その判断を俺がしていいのだろうか、とか。

大切な人を守る為に、いざとなったら俺は戦えるのだろうか、とも。

そう思う自分がいる。

何もしないで仲間や大切な人が傷つく姿を俺は見たくない。

出来る出来ないじゃない、立ち向かえないのが一番駄目なんだ。

そう思う自分もいる。

俺は前世で経験してきた様々な出来事を思い出す。

今思えば辛く、苦しく、時には絶望したりして、何度諦めかけたり、何度死にかけた

り、そういう大変な目に遭ったか。

一度は絶望し、普通の生活を送って一般人として過ごしたりもした。

そんな『普通』に馴染めず、本当の自分の居場所に戻ったりもした。

自分よりも遥かに巨大で、強力で、凶悪なヤツらに挑んだりもした。ただどそれでもなんとか諦めずにやってきたんだ。

武偵憲章10条。

『諦めるな。武偵は決して諦めるな』

だから……俺は覚悟を示す。

『そういった事から逃げない』のが、主人公をするのに一番必要な素質だと俺は思うから。

「そうでなかったら？」

「相手が諦めて大人しくなるまで、何度でも戦って説得するよ」

本当なら『このロアを退治しよう』の方が正解なのかもしれない。

だけど俺は相手を倒す事には賛同できても、相手を殺す事には賛同できない。

それにロアは女性の方が圧倒的に多いみたいだし。

女性に乱暴な事はあまりしたくないからね。

「……80点ですね。まあ、そんなもんでしよう今は」

一之江は俺の迷いを把握し、溜息交じりにそう言ってくれる。

呆れているわけではない。

早く成長しろ、とそう言っているんだ。

「ありがとう、一之江」

「構いません。貴方には早くすげえ『主人公』になって貰わなければなりません、焦っても自滅するだけです。」

それに、その手のメンタルケアはキリカさんにお任せです」

「……『主人公』？」

俺達の会話を聞いていた音央が不思議そうに、おずおずと尋ねてきた。

「ああ、深い話は……無事に脱出してから話すよ」

「出られるの？」

そう疑問に思うのも無理はなかった。

「出るんだよ。どんな手を使ってでもな」

脱出不可能ではないんだ。

『8番目のセカイ』には確か、こう書かれていたはずだ。

『二度と出る事が出来ないかもしれません』

……つてな。

つまり、『絶対に出られない』ではなく、『出る事が出来ないかもしれない』である以上、『出る事は出来る』んだ！

まあ、確証はないんだけどね。

「少し歩いてみようか」

「解りました」

「う、うん」

俺が歩き始めると、俺の横を一之江がスタスタ歩き、音央は俺の服の裾を掴んでついてきた。

2010年6月1日。富士蔵村。

しばらく歩いていけると、広い駐車場のある二階建ての建物に辿り着いた。

辺りはもうすっかり暗くなっていて、街灯が弱々しく道路を照らしていた。

空には、いつの間にか雲がかかかっていて、どんよりとした無色の空になっていた。

一雨降ったりしそうだが、こういう異世界の村でも雨つていうのは降るものなんだな。

「ええと、自治会館かな？」

音央が目の前にある建物を見て呟いた。

入り口の所には『富士蔵村自治会館』とある。

「そうみたいですわね」

そう頷いた直後

「んっ……」

一之江が両手を広げ、俺達を庇うようにして身構えた。

人影!!?

狙撃手か!!?

「何を!!?」

「ごめんよ」

俺は咄嗟に一之江に抱きついた。

一之江に抱きつきながら片手で『弾をキャッチ』するつもり、で一之江の前に右腕を出して構える。

「ど、どうしたの?」

音央が不安そうに尋ねていたが、一之江の視線の先。

自治会館の二階の窓。

そこに、俺達の事を見ている人影があつた。

狙撃手かと一瞬思ったが違った。

よくよく考えてみれば狙撃手が人前に姿をあらわすはずはないしな。人影を見るとその姿は……小さな子供。

男の子と女の子だった。

その2人の子供が、興味深そうな顔をして俺達を見ていた。

「子供……？」

音央は一之江の手だけではなく、俺の服も強く握って眩いた。

男の子と女の子は、そんな俺達を見てニコニコ笑うと。

そのまま、建物の部屋の奥に走り出して引っ込んだ。

……降りて出てくるつもり、だろうか？

「警戒だけはしておいて下さい」

「解った」

Dフォンは熱くなっていない。

とはいえ、直接的な危険ではない可能性もある。

警戒して損はない。

やがて、建物の入り口から、片手に白い傘を持った赤いワンピースを着た少女が出て

きた。

歳は俺達と同じか、やや下くらいかな。

そして……その少女のすぐ後ろには少女の背に隠れているさつきの子供達の姿と、赤いワンピースの少女から2、3、歩離れた位置に、見覚えがありまくるセーラーメイド服を着て、金色の髪を腰まで伸ばし、頭になっているヘッドドレスホワイトプリムから犬耳を隠さずに出している……困ったメイドさんの姿がそこに在った。

「ほんとだ、3人いるね？」

「わあ！　なんてモ素敵イな方々なんでしょう？」

第六話。

リサ・アヴェ・デュ・アंकと2人の子供

.....

「え、メイド……さん？」

音央が戸惑ったような声を発し、声こそ出さないが一之江はジツと鋭い視線をしたまま、目の前の少女達を見つめている。

「あ、はい。お初にお目に掛かります。

私、リサ・アヴェ・デュ・アंकと申します」

メイドさん、リサはスカートの先を摘み、優雅に一礼して名乗った。

「ふえー」

外国人のリサに挨拶されて驚いたのか音央は一之江の背後に隠れてしまった。

「くすつ、リサさん。先に戻って色々準備してきてくれる？」

「あ、はい。わかりました……」

赤いワンピースを着た少女に言われ、メイド服を着た少女……リサは自治会館の中に戻っていった。

「みんなー、また迷い込んだ人がきたよー!?？」

足早に建物の中に戻るリサの背を見ながら赤いワンピースを着た少女が大きな声を出して自治会館の中に呼びかけるとその声に反応して、中から老若男女。様々な人々達
がわらわらと出てきた。

「おつ、ほんとうだ」

「今回は3人もかあ」

「何があつたか解らんつていう顔してるなあ」

「まあ、無理もないよなあ」

口々に俺達を見て眩く。その様子はいかにも善良な村人といった感じだ。

俺達3人がリアクションに困っていると、赤いワンピースを着た少女が俺達の前に
やつて来て声をかけてきた。

「こんにちは、初めまして？　富士蔵村にようこそー！」

その少女は人懐こい笑みを浮かべた、なかなか可愛い子だった。

俺の知り合いの中だと理子やキリカみたいな感じで、キリカより少し幼くした感じの
体型をした子だ。

そんな子が満面の笑みを浮かべて俺達を見てきた。

「ご丁寧挨拶をありがとう。こんにちは、初めまして。」

村の子かな？　ちよつと聞きたい事があるから大人の方……出来れば村長さんと

かはいるかな？」

代表して俺が挨拶を返すと、少女は嬉しそうに目を細めて返事をしてきた。

「くすつ、村人の代表はわたしよ？」

わたしは、朱井あけいし詞乃。お兄さん達もこの村に迷い込んだ人じゃった人でしょ？

色々説明するから、一度この中に入ってちよ？」

「え、あ、うん」

村人の代表がこの少女？

色々疑問に思いつつ、一之江の方を見ると、彼女はしばらく悩んでから頷いた。

警戒を完全に解いたわけではないが……詞乃ちゃんからは敵意は感じられなかったし、村人達も……心配そうにしている顔、安心させようと頷いている顔、興味深げに俺達を見ている顔、などをしている為、噂にあるような『村系都市伝説』の怖いイメージはまるでなかった。

なので俺は詞乃ちゃんの言う通り、話を聞くために中に入る事を一之江達に促した。

「入ってみようか」

「……そうですね」

「……うん」

「うん！　じゃあ、3名様ご案内でいい？」

やたらと明るいい声に導かれて、俺達はその自治会館の中に入る事にした。

2010年6月1日午後8時。

富士蔵村自治会館内。

俺達は自治会館内の和室に案内されてそこで村人達に質問されたりした。

「おい、あれが新入りらしいぜっ」

「え、どれどれ、見えないようー」

中には、小さな子供にまで物珍しそうに見られた。

村人達に囲まれてまるで見世物になった気分を感じたね。

今は落ち着いて、部屋の中にいる村人は詞乃ちゃんを入れて3人だ。

都市伝説の中でも特に恐ろしいとされている『村系』のロアに『神隠し』されたはず
なんだけど……。

なんだか、やたらと平和だなあ。

「いかにも普通っぽくて驚いたでしょ？」

俺の内心を察したのか、詞乃ちゃんは俺の顔を見て微笑みながらそう言ってきた。

「うん……正直な話、こんなに人がいるとは思わなかったよ」

『誰もいない村』みたいなイメージを勝手に持っていたからね。

だからこんな人がいるなんて思っていなかったよ。

「まあ、無理もないでしょうなあ」

多くの村人達が退室した後には、部屋の中に残っていたおじいさんが笑いながら頷くと、隣にいるおばちゃんもうんうん、と首を上下に動かして頷いた。

「最初はみんな戸惑ってたよね？」

「うむ。俺も騒いだもんだ」

詞乃ちゃんとおじいさんが感慨深げに話し始めた。

「うーんと、つまりどういう事なのかな？」

「単刀直入に言うかね？　今村にいる人達は、みんなこの村に迷い込んだ人達なの」

詞乃ちゃんがそう説明すると村人達はみんな頷いた。

この場での説明役は詞乃ちゃん、他の人はサポート役みたい役割り分担がされているみたいだ。

おじいさんは山中を散歩中に、おばちゃんは家族でバーベキューをしている最中に、気がついたらこの村に迷い込んでいたみたいだ。

何処で迷い込んだのか尋ねると、日本各地から人々が迷い込んでいるようで、途中お茶を運んで来たメイドさんは……。

「わ、わたしは都内で……ご主人様を探している最中に……」

と瞳を潤ませながらしゅんと、した表情で話した。

ごめんよ、リサ。

辛い思いさせてしまったね。

君のご主人様は実は目の前にいるんだけど……ちよつと説明しにくいからもう少し待ってくれ。

というか異世界にいたはずのリサまでこれまた異世界の村に連れて来てしまうとは……恐ろしいな『神隠し』。

「……で皆さん、普通の生活が出来ているのですか？」

それまで黙っていた一之江が拳手をして質問をした。

「うん。川も近くに流れているし、農作物も取れるしね？」

「何故か電気は通っているみたいで助かっているんだ」

一之江の質問に詞乃ちゃんとおじいさんがそう返事をした。

「テレビとかは無理だけど、ラジオの電波だけは入るから。」

この村の外がどんな感じなのかも解つたりするんだよ？」

テーブルの端にあった古いラジオを手元に持つてきながら詞乃ちゃんは言った。

「へえー、ラジオは入るのか」

電気が通っていて、ラジオも入る。川もあるから水には困らないし、農作物で食事も摂れる。

不便そう、と思っていたがそれなりに快適に暮らせるのかもしれないな。

「みんなそれぞれ助け合って生きてるのよね？」

詞乃ちゃんが誇らしげに胸を張ってそう語った。

—— 神隠しに遭い、村に閉じ込められた人々。

それがこうして逞しく生きている。

そんな事実を目の当たりにすると、なんだか安心できるね。

「この村に最初に来たのはどなたですか？」

「お客様、お話しはそのくらいにしてこちらのお菓子はいかがですか？」

「いえ。喉も渴いていませんし、ダイエツト中ですのでお菓子もいりません」

「それでしたらこちらのお茶はいかがですか？」

ダイエツトに最適なカテキンが多く含まれていますし……」

「いえ、結構です」

「そうですか。失礼しました」

リサの得意な話術も一之江には通じなかつたみたいでリサは俺達に一礼するとそそくさと部屋を出ていった。部屋を出る際に目が合ったがすぐに逸らされた。

やつぱりこの姿では気づかれないみたいだな。

「で、先ほどの質問ですが……どなたです?」

一之江が再度尋ねた。

一之江は先ほどからリサがお茶やお菓子を勧めても頑なにそれを拒み続けている。

この建物に辿り着くまで結構歩いたから喉が乾かないはずはないんだけどなあ。

それに一之江にはダイエットは必要ない気もするし。

スレンダーな身体付きだからダイエットしたらよけい無くなるんじゃないかと、なんだか背中が熱いな。

それに……ポケットとズボンのポケットに入れているDフォンから発熱しているみたいだな熱を感じるな。

……何も思っていないですよ? 一之江様。

「うん、わたしかな?」

そんな俺の内心を他所に詞乃ちゃんは元気に返事をした。

2010年6月1日。午前11時30分。

それから村がどんな作りになっているか、村人がどこに住んでいるのかを説明して貰った。

話がひと段落した頃、ドアから見つめていた2人の子供……先ほどの男の子と女の子と遊ぶ事になった。

音央が面倒みると、言いだしただから本当は音央一人に任せるつもりだったが、一之江に追い出された。

一之江は何か考えがあるらしく、俺と音央の2人で面倒をみる事になった。

「モンジ、モンジ！」

「こらっ、タツくん！ 俺のことはハヤテお兄さんと呼びなさい！」

「モンジおにいちゃん！」

「ミーちゃんも！ ハヤテおにいちゃん♪ と呼ぼうね？」

「わははは、モンジ、モンジ！」

「きやはは、モンジおにいちゃん、モンジおにいちゃん！」

「つて、君らねー」

俺の周りをドタバタと走り回る子供達。

男の子は『タツくん』。

女の子は『ミーちゃん』。

そう詞乃ちゃんが呼んでいた。

「あはは、モンジ好かれてるわねえ」

「音央も一緒にどうだい？」

音央は笑いながら座布団に座って寛いでいる。

「よし、タツくん。あのお姉ちゃんのボインにダイブしてくるんだ」

「つて、何言つてんのあんた!!？」

「えー、やだよー！ 女の胸なんか！」

「タツくん、これは今しか許されないんだよ。」

女性の胸にダイブできるのはとても幸せな事なんだ」

「けしかけんなバカ!!？」

「わーい、じゃあわたしがいくー！」

パタパタと駆け出したミーちゃんが音央に抱きついていった。

「ふわー、すごーい、ふわふわー！」

「あつ、ちよつ……んもう」

ムニムニと胸を弄られている音央だが、流石に幼女に強い抵抗は出来ないようだ。

プルンプルンと揺れる胸を見ていたらヒステリアモードが強化された。

「つて、何見てんの!!？」

うん、ご馳走様です。

座布団を投つけてきたが片手で楽々キャッチしてタツくん到手渡した。

「タツくん、音央お姉ちゃんは座布団投げをしたいみたいだよ。

これで当てちゃえ」

音央に向けて投げるように促したが……。

「よーっし!!?」

「タツくん、悪モンはそつちよ！ 座布団で叩いちゃえ！」

「おうよー!!?」

まさかの裏切にあった。

「わっ、ちよっ、よっつと」

座布団で叩こうとタツくんが振り上げたが、振り下ろされた座布団を真剣キャッチング・ピーク白羽取りの

要領でキャッチして防いだ。

まさか、こんなところで白羽取りが役に立つとはね。

アリアに感謝だな。

「つて、硬い物は良くないぞ、ミーちゃんっ」

部屋の片隅にあった小型のラジオを投げてきたミーちゃん。

ラジオ掴み！

パシツと片手でラジオのアンテナ部分をキャッチしてどうにか落下を防いだ。古いとはいえ、貴重な情報源なんだから大事にしないと……。

「今だ！」

「えーい！」

「少しは手加減してくれー!?」

そんな馬鹿騒ぎをしばらくしていると

「あつ」

座布団を俺に向けて投げていたタツくんの手が止まった。

タツくんを見ると、その視線は壁にかけられた時計を見つめていた。

「どうしたの?」

音央の方を見ると、ミーちゃんも同じように時計を見つめてじっとしていた。

時計を見ると——時刻は、もう午前零時になろうとしていた。

「ああ、そろそろ寝る時間なのかな?」

「あ、うん。そうなんだけど……」

「ん?」

先ほどまでの元気な姿から一転し、タツくんは歯切れがわるそうにしていた。

「うー……」

見ると、ミーちゃんも何か言いたげな様子で音央にしがみついている。

「ま、しかたないよな」

「うん、そうだね」

タツくんがそう眩くと、ミーちゃんも渋々音央から離れる。

「そろそろ帰らないといけない時間なのね」

どこか寂しそうに音央がそう言う。

「音央ちゃん」

「ん？」

ミーちゃんが音央の手をぎゅつと、一度強く握った。

そして……。

「食べられないでね？」

そんな不吉な言葉を呟いた。

「……え？」

「コラッ！　いくぞ！！？」

ミーちゃんの言葉を叱るように、タツくんが声を荒げた。

「じゃあな、モンジ！」

「コラ。モンジお兄さん、だ！」

「わははは、じゃあ、生きてたらまたな！」

「……は？」

「だめ、なんでしょ」

ミーちゃんがタツくんは何やら注意している。

何やら良いあつた後、タツくんはミーちゃんの手を引いて、部屋を出ていった。

2人が去っていく後ろ姿を見ながら音央が呟いた。

「食べられないで……って？」

音央はミーちゃんに握られていた手を見つめた後で俺を見た。

「あんたにかしら？」

「ははっ、流石にこんな時にそういうことはしないよ。」

「そんな深い意味はないんじゃないかな？」

「……そうよねえ」

そう言ったものの、なんでだろう。

騒ついた感覚がするな。

この、ぞわぞわするような落ち着かない気分には……。

覚えがあった。

『食べられる』と言えば……そう、キリカだ。

あの時に感じた、ヒリつくような恐怖がじわじわと胸に広がっている。

—— どういう意味なのかは解らない。

……だけど、危険が迫っているという予感めいた感覚を俺は感じた。

「一之江と合流しておこう」

「う、うん、そうね」

音央も不安になっているようだ。

ミーちゃんとタツくんの言葉。

あれは「言っちゃいけない言葉を言っちゃた」みたいに思えた。

詞乃ちゃんや村人達との会話、そしてタツくんやミーちゃんの言葉。

遊んでいたから忘れかけていたが、ここは『8番目のセカイ』に載っている『人喰い

村』なんだ。

警戒心を持ってても損はないな。

「音央、それじゃ」

出るぞ、と言いかけた時だった。

フッ

と、いきなり部屋の明かりが消えて、真っ暗になった。

そして……。

ザザザザザザザザザツ!!?

俺達の足元辺りから、凄いノイズが聞こえてきた。

そして、俺の胸ポケットとズボンのポケットから焼けるような熱さを感じた。

これは――。

Dフォンが危険を告げている!?!?

「音央!」

暗闇の中、側にいるはずの音央に手を伸ばして自分の方に引き寄せた。

「も、モンジっ」

震えている音央の声と、カチカチと歯が鳴っている音まで聞こえてきた。

本気で怖がっているのだろう。

俺は音央の肩を強く抱きしめて……。

ああ、音央からいい匂いが漂っているな。

柔らかい肌の感触も……。

これは、止まらないな。

止められない。

この、血流の流れは……止まらない。

「なんで、暗く……今の音、なに……？」

「大丈夫、大丈夫だよ。」

約束したろ。何かあつたら君を守るって」

第七話。常闇からの襲撃者

「タツくん、ミーちゃん大丈夫かな……」

怖がって、荒い吐息を吐きながらも、音央はさつきの子供達を心配していた。

不安が不安を呼び、混乱しそうになりそうなる自分を必死に抑えつけているかのよう
に。

音央の肩を抱いている俺の腕をぎゅううつと強く掴みながら、瞳から溢れ落ちようと
する涙を堪えて。

「うくつ……」

「音央、大丈夫か？」

「あう……うう……今さつきまでは平和だったのに……」

そう。さつきまでは平和だった。

だが、今は平和ではない。

いや、元から平和なはずはなかったんだ。

音央はともかく、俺は最初から解っていたはずだ。

元々、平和なはずがない場所だという事を。

やたらと穏やかな時間をこの村で過ごしたせいで俺は音央を怖がらせてしまったんだ。

恐怖というものは一度安心した後には増大するものだからな。

音央を怖がらせた責任は俺にもある。

元々音央はこの村に来る予定ではなかったのに。

俺が樂觀視した為に……せめて柵越えしないようにもつと後ろに下がらせていれば音央は俺や一之江のように『富士蔵村』に入る事はなかったんだ。

だからこれは俺の責任だ。

「大丈夫だからな」

今俺がすべき事は、音央を守って無事に帰す事だ。

それには……。

「まずは、一之江と合流しないと」

Dフォンを取り出してみると、思っいきり赤く光っていた。

これは……マズイな。

こんなに赤く光っているのは一之江に襲われた時以来だ。

Dフォンが赤く光っている時……それは俺に危険が迫っている事を示す。

「なんか……真っ赤ね、その携帯電話……」

「ああ。」

……これが赤く光って熱くなっていると、ピンチって事なんだ」

「え、それって……」

音央が何か言おうとした瞬間だった。

——
ザザザザザザザザザザザザツ!!?

再び、そのノイズ音が鳴り響いた。

俺の足元からそれは聞こえて

と、その時。

赤くぼんやりと照らされた部屋の中に、小さな影が入ってきた。

「音央!」

俺は音央を突き飛ばした。

直後、刃物の先端が俺の目前に迫った。

「よつと」

両手を合わせるように刃物を包み込んで白羽取りの要領で刺さるのを防いだ。

その影は刃物を俺の腹部に突き刺そうとして力一杯動かすが、刃物の刀身を俺が両手で挟んでいる為、刃物はそれ以上俺の方には進まない。

すると、刃物を突き刺す事は諦め、今度は刃物を一度引いて抜いてから思いつき振り下ろしてきた。

「チッ」

エッジ・キャッチング・ピーク
二指真剣白羽取り!!?

パシッ!

俺は咄嗟に片手を出して、右手の人差し指と中指でそれを受け止め、俺を襲った襲撃者の姿を確認した。

「え、タツくん!?」

音央の驚いた叫び声が辺りに響いた。

彼女の視線の先、Dフォンの赤い光に、ぼんやりと照らし出されているのは、さつきまで遊んでいた少年『タツくん』の姿が見える。

見えるのは確かに『タツくん』だが……。

「ヒッー」

音央が小さく悲鳴を上げたが無理はない。

彼の目……眼球が、まるで闇色の飴玉のように真つ黒だからだ。

さつきまでの快活そうな表情はなくなっており、今はただ無表情に俺の右手の人差し指と中指の間に包丁を突き立てている。

……白羽取りができなければ、俺はこの包丁で刺さっていただろう。

「つと、タツくん、どういうつもりだ」

二指で受け止めた切っ先が俺の腹に向けて迫ろうとしていた。

子供の力とは思えないほどの、強い力だ。

強い力だが今の俺なら対抗出来ないほどではない。

しかし、普通の人間だったら押し返すことすら出来ずに刺されていただろう。

まあ、この言い方だと自分で自分を普通じゃないと言っているみたいで嫌だが、対抗出来ているのは事実だ。

ハーフロアとして覚醒したおかげか、或いはヒステリアモードを発動した今の俺だからこそ対抗出来ているのかは解らんが。

「……仕方ないか」

本当は子供相手に手荒な真似はしたくなかったが……。

そう思いながら行動に移る。

二指で包丁を受け止めながら彼に近づき包丁を握るその手を右足で下から蹴飛ばし

た。

そして包丁を手放せてからの足払いをちよつと強めにかけた。

彼の軽い体はいとも簡単に畳の上に転んだ。

倒れた彼はその場からピクリとも動かなくなった。

昔、強襲科^{アサルト}で習った護身術だが、子供相手にやり過ぎたか？

少し心配になったが、そんな心配する間もなかった。

「っ!?？」

冷や汗を拭う間もなかった。

その気配に気づいた俺は音央の方に転がり込みながら畳の上に転がるDフォンを拾

う。

まさに——その時。

ヒュン！ と俺が今までいた場所を包丁が通り過ぎた。

「ミーちゃんまで……!」

俺は直接その姿を見ていないが、音央の眩きで俺が今までいた場所にその子がいる事

を知る。

やっぱり、そうなるだろうな。

タツくんが襲ってきた時点でこうなる予感はしていた。

前世で強襲科アサルトの授業で蘭豹から訓練という名の体罰を受けてなかったら躲せなかったかもな。

まあ、ヒステリアモードの今なら習わなくても余裕で躲せたとは思いますが、通常時の俺だったらかなり危なかったな。まさか、こんな子供達が襲ってくるなんて普通は思わないからな。

それはともかく……。

「襲つてきている相手とはいえ……女性……それも子供相手に危害は加えたくないな」

ヒステリアモードの俺は相手が誰であれ、女性だと傷つけるのを躊躇ってしまう。

女を守りたいと思うのが今の俺だからね。

とはいえ……音央と約束したしな。

彼女を守るって。

音央を庇うように、彼女と音央の間に俺は体を滑りこませて立った。

俺の目の前には無表情なその顔で俺を睨みつけているミーちゃん、何事もなかったかのようにゆっくり立ち上がるタツくんの姿がある。

さつきまでの楽しそうな姿は一変し、その姿はまるでゾンビやアンデッドみたいな感じを連想させる。

「モンジ、どういう事……？」

「多分、さっきのノイズ音が合図か何かだったんだらうね」

音央の足元を見ると、そこには床に転がっているラジオがあった。

さつきミーちゃんに投げつけられてキャッチしたあのラジオだ。

何故足元にあるのかは想像だが、キャチ後に床に置いたものがふざけあっているうちに転がったんだらうな。きつと……。

そして……あのノイズ音は、おそらくこのラジオから聞こえてきたんだらう。

詞乃ちゃんが言っていた話を思い出す。

テレビは無理だけど、ラジオなら聞ける。

確か……そんな話をしていたね、彼女は。

「音央、ちよつとそのラジオ拾っておいてくれっ」

「え、あ、解った!」

音央がラジオを抱えるのと同時にタツくんとミーちゃんが俺に襲いかかってきた。

刃物を持っているとはいえ、相手は素人。それも子供だ。

だから正面から見ていると、その動きは読める。

まずは俺に向かって包丁を突き刺してきたミーちゃんを避け、突き出された手に手刀を入れて手から包丁を叩き落とした。

包丁はよく研いであったのか、床に突き刺さった。

そしてミーちゃんの体を引っ張り、向かってきたタツくんの方にその体をつき飛ばした。

たったそれだけの動きでもつれあって倒れる2人の子供。

常闇から襲ってきた幼い襲撃者達は仲良く畳の上で寝転んでいる。

「ま、こんなもんかな」

2人が倒れたのを確認して、床に突き刺さったままの2人が持っていた包丁を引き抜き、両手にそれぞれの包丁を握り締めた。

「持ってきたわよっ、て、怖っ！」

音央の方を振り向くとドン引きされた。

床に倒れた子供と手に包丁を持った男。

……側から見たらかなりヤバイ人だよな。

「大丈夫だよ、俺は何もしてないって！」

あの子達から取り上げただけだって」

ちよつと強く力を入れ過ぎたのか、2人は倒れた後、ピクリとも動かないけどね。

……大丈夫、だよ。多分……。

「殺しちゃったの？」

「いや、ぶつけて倒しただけだよ」

「だって、あれ……」

音央が右手人差し指を子供達に向ける。

その指先が示している方を見ると、じわあ、と2人の体から赤いものが流れはじめた。

あれは……血だ。

タツくんやミーちゃんの目や鼻、口、そして服の下から大量の血が流れているんだ。

「え、ちよつ、嘘だろ!?!」

一瞬、『殺してしまった』のか、という罪悪感に焦りそうになったが、よくよく考えてみれば俺は2人をつき飛ばしたただけだ。

ちよつと強めに押ししたが、それだけであんなに大怪我を負わせるはずはない。

『殺さないで相手を制圧する技術』を長年磨いてきた俺が相手にあんな大怪我させるような技をかけるわけない。

「つ、ミーちゃん、タツくん!」

「よせ!」

2人に駆け寄ろうとする音央の前に俺は立って止める。

「で、でもっ!」

「さっきの2人はどう考えても正気ではなかっただろ?」

何をしてくるか解らないんだ、無闇に近寄ってはいけないよ」

「う、ぐっ、だつて……っ」

「本当は俺だつてすぐに駆け寄つて、状態を確かめたい。

だけど、すぐに起き上がつてきて、襲つてくる可能性だつてあるんだ。

そしたら、また襲われるかもしれない。

襲われるのが俺だけじゃない。けど音央が襲われるのは嫌なんだ。

だから今は我慢してほしい」

「……うん、そう、ね」

「……とりあえず、一之江を呼び出そう」

「う、うん……」

一之江もおそらく似たような目に遭つてるだろうが、彼女なら絶対に無事なはずだ。

そう思い、Dフォンのデータフォルダを開いたところで

殺気!!?

「へえ、生き延びたんだ?」

強烈な殺気とともに、突然声をかけられた俺は

ガキイン!!?

咄嗟に振り向き、振り向きざまに手に握り締めていた包丁で振り下ろされた刃物を受

け止めた。

刃物と刃物がぶつかり合う音が響く。

振り向いた視線の先。

赤い光の中に浮かんでいたのは……。

「一筋縄ではいかないんだね？」

朱井詞乃。

彼女が手に持つ出刃包丁を俺が握る包丁に突きつけて、にこやかに微笑んでいた。

そして包丁を引っ込めてから俺を見つめてきた。

「ロアと戦うのに慣れてるのかな？」

「さあね。 黙秘権を行使したいね」

「ふーん、 じゃあ話したくなるようにしてあげる」

詞乃ちゃんは俺に向けて出刃包丁を振り上げてきた。

しかし、その切っ先が俺に届く前に俺は包丁の先端を二本の指で受け止めた。

「わあっ！ 刃物を指先だけで掴んで止めるなんて事ができるんだっ！

凄い、凄ーい」

「え？ 　え？ 　も、モンジ……人間……よね？」

俺がとった行動は簡単な動きだ。

振り下ろされた刃物の先を指先、人差し指と中指を使って挟み込むようにして止めただけ。

ただそれだけの動きをしただけにすぎない。

しかし、一般的な技ではなかったようで詞乃ちゃんは興奮気味で騒ぎ、音央は心底驚いた顔を浮かべた。

というか音央。驚くのは解るが後半の台詞は失礼だぞ。

俺はれつきとした人間だからね。

「その動き、モンジさんもロアなのかな」

「俺は人間だよ。どこにでもいるちよつと戦い慣れてるだけの普通の人間だ」

今の俺には普通に出て来る事なのでそう言うぞ。

「……モンジが……普通？」

音央がなんだか残念な人を見る目で見つめてきた。

いや、あの。音央さん、そこは疑問に思わないでほしいな。

内心で音央に突っ込んでいると、詞乃ちゃんは一旦包丁を引き抜き

「まあ、いいよ。どつちでも」

「っ!?」

標的を俺から音央に変えた。

「しまっ……」

詞乃ちゃんは音央に向かって駆け出した。

音央の頭上で出刃包丁が振り下ろされ出刃包丁の刃先が音央の喉元に突き刺さる……と思ったその時。

ガキイン!!?

「油断するなど言ったでしよう」

刃物と刃物がぶつかり合う金属音が聞こえ……。

音央の前に高速移動してきた人物により、その刃物は受け止められた。

「一之江!」

一之江が駆けつけてきてくれた。

それだけで何故だか安心できるね。

「ロアと戦え慣れてるんだね、お兄さん達?」

「私はプロフェッショナルですが、彼はルーキー、そしてこちらのボインさんは素人です」

一之江は音央を守るように立ちながら、両手にナイフを構えて告げた。

ナイフによる二刀流。

「まさに双剣ダブルの一之江、だね!」

「なるほどね?」

詞乃ちゃんは余裕そうな笑みを浮かべてタツくとミーちゃんを見た。

「強いんだ? モンジさんも」

「まあ、そのプロフェツショナルさんに日常的な特訓（虐め）を受けてるからね」

一之江の特訓は特訓という名の虐めに近いが、強襲科アサルトの訓練に比べたらかなり楽だ。

『象殺し』を乱射したりとか、「死ぬ!」とか、「風穴を開けるわよ!」とか、そういう物騒な行動や言葉はあまり出ないからね。

一之江の機嫌が悪いと、背中に何かを突き刺したりしてくるけど。

その辺はもう慣れた。

「徹底的に鍛えてます」

「なるほどね」

こんな状況になっても詞乃ちゃんの様子に変わった事はなかった。

目が真っ黒になったりもしなければ、表情や雰囲気とかも人懐こい雰囲気のままだ。

「なので、貴女の眷属の1人や2人では、モンジは倒せませんよ」

「眷属……?」

「所詮は死体だから脆いもんね?」

新鮮な頃はもうちよつと強度があるんだけど」

「死体?」

チラリ、とタツくとミーちゃんの姿を見る。

近寄らなかつたから解らなかつたが確かに、血を流してぐったりしている姿は、死体以外の何者でもない。

「そんな……さつきまであんなに元気に遊んでいたのに……」

音央はシヨックを受けているようだ。

無理もない。さつきまであんなに元気に遊んでいた子が実はすでに死んでいて死体となつて動いていた、なんて事を普通の人間が受け止められる訳がない。

「村に……貴女に、喰われた人々の成れの果てが、あれですか？」

一之江が静かに尋ねる。詞乃ちゃんはクスクスと笑つて

「そういえば、一之江さんは出したお菓子もお茶も口にしなかつたね？」

一之江に逆に尋ねた。

「異世界の食べ物を食べたら帰れなくなるのは、常識ですから」

「なるほど。その2人と違って、最初から警戒していたんだ？」

「当然です。獲物を安心させる理由なんて、童話の赤ずきんの頃から変わりませんから」

赤ずきんの童話は、狼が赤ずきんちゃんを油断させて食べてしまうお話。

それと同じでこの村では……詞乃ちゃんを筆頭に、死人となつている村人達が、俺達のような迷い込んで来た人を安心させて

食べてしまう、話。

これが『人喰い村』の実態。

本当にある都市伝説の真実のようだ。

「でもー！」

人喰い村の実態を考えていた俺の横で音央が声を荒げた。

「でも、さつき……ミーちゃんは、言ってくれたのよ！」

「うん？　　なんて？」

「『音央ちゃん、食べられないでね？』って！」

音央がそう叫ぶと、詞乃ちゃんのニコニコ顔は驚きが変わった。

「……ほんとに？」

「ああ、俺も聞いたから間違いないよ。零時になる前のことだったよ」

「へえ……」

それまで人懐こいものだった詞乃ちゃんの笑顔がまるで蛇のようなじつとりした、気味の悪い笑みに変化した。

「面白いねえ？　　ニンゲンって。まだそういう心が残っていたなんて、驚いた」

目を赤く光らせていき。

「そんな心を取り戻させた、貴女達も……食べたくなかったよ？」

ゾクリとするような気味の悪い笑顔なままでそう呟いた。

「ひうつ」

詞乃ちゃんから溢れる威圧感みたいなものに、音央は飲み込まれたのか、小さな悲鳴を上げる。

俺は両手に包丁を構えて

「何処の魔女っ子だ!?!」

食事好きなキリカを思い出してしまい、詞乃ちゃんに思わず突っ込みを入れていた。

「あいにく人喰いロア枠はいっぱいだよ」

俺が突っ込みを入れ終わるとすぐさま一之江が囁いてきた。

「モンジ、貴女達は先にさっさと逃げて下さい。足手まといです」

「いや、逃げるのは一之江の方だよ。」

「ここは俺一人で十分だ」

女性を一人残して逃げる……そんな選択肢は今の俺にはない。

第八話。ジェヴオーダンの獣

「何を「黙って！」っ!?」

一之江の言葉を遮り彼女の前に出た。

「……モンジ、はつきり言っつて足手纏いです。

貴方は音央さんを連れてさっさと逃げなさい」

「悪いがそれは聞けないね。

一之江一人に戦いを任せるなんて出来ない。

「ここは俺が引き受けるから一之江こそ、音央を連れて逃げてくれ」

一之江は俺の顔を数秒見つめたあと「ふう〜」と溜息を吐いてから囁いた。

「……仕方ありませんね。

では私は音央さんを連れてさっさと退散しますからしんがり殿をお願いします。

何かあつたら電話してください」

「ああ、わかった」

「ん、では行きます……つと」

「え? あ、ちよつと……きやあ」

一之江は音央を抱き抱えてくるりとその場で回転し部屋の外、廊下に向かって駆け出した。

「ちよつと離してよ。一之江さん、モンジも一緒に……」

「心配いりません。あのハゲなら大丈夫です」

「ハゲてねえよ!!?」

いつも通りのやり取りをしながら俺は一之江の背中を見送った。

そして俺は俺達を眺めていた詞乃ちゃんに向かい合う。

俺と目が合った詞乃ちゃんはクスクスと笑ったまま口元を歪ませた。

「あれ? お兄さん一人で戦^やるんだ。」

「あのお姉さんと一緒に戦っても私はいいいよ?」

「いや、君と戦るのは俺一人がいい。」

「一之江が出る幕ではないよ」

俺は子供達から拝借した包丁を握ったまま、右腕を垂直に伸ばし刃物の先端が詞乃ちゃんに向かうようにしながらそう告げた。

「ふーん、随分と余裕があるんだね」

「このくらいは修羅場なら何度も経験してきたからね」

「へえー、ならこういのはどうかなあ?」

詞乃ちゃんがニヤつと笑った瞬間

「私は、神を呪う……」

強烈な寒気を背後から感じ、後ろを振り向くと。

俺の真後ろ、距離にして3メートルくらいのところに入影らしきものが佇んでいた。
パッ！

「うおっ!?」 目が……」

突然部屋の電気が点き、あまりの光量の差に眩しく感じて瞼を閉じる。

数秒後、ゆっくり瞼を開けると目の前にいるその人物の容姿が目に入った。

典型的な、北ヨーロッパ人。

それ自体が光を放っているかのような、天然ものの金髪。

肌は抜けるように白く、瞳は翠玉色。エメラルド

その姿は紛れもなく……

「この力を私に与えた、神を……」

俺がよく知るとある人物のものだった。

俺の背後に佇んでいたその人物。

彼女の名前はリサ・アヴェ・デュ・アंक。

自治会館の前で俺達に挨拶をした例のメイドさんで、前世で世話をしてくれていた俺

専属の契約メイド。

そのメイド、リサが俺の真後ろに佇んでいた。

「リサっ!?」 その姿……」

リサの姿をよく見ると人間の姿から獣の姿へと変貌していた。

いや、正確にはまだ完全には獣になっていないが人間と狼の中間のような『獣人』と呼ばれる姿をしていた。リサの腕は白い獣の腕へと変貌していき、メキメキと膨れ上つて、どんな凶鑑にも載ってないような大型獣のものへと変化しようとしていた。

その姿はまさに――。

「……ジエヴオーダンの……獣……!」

『ジエヴオーダンの獣』

ウエアウルフ
『人狼』と似た怪物。

それは―― ルウガル **×**狼、人狼、狼男……日本語訳はいろいろあるが、ようは吸血

鬼のライバルとして多くの物語に出てくる伝説の獣だ。

あらゆる動物を従わせる能力のある、百獣の王。

18世紀、西ヨーロッパに現れて、村や町を荒らしまわつたとされる有名な都市伝説の一つだ。

日本に住んでいても狼男の話を知らない人はいないだろう。

そのくらい有名で強力な都市伝説の怪物だ。

「……厄介だね」

厄介な都市伝説と遭遇してしまった。

かつて、眷属グレンダのカツエ、イヴイリタ長官、パトラ達がリサの事を『眷属最強』と言っていた。

最初聞いた時は何かの間違いじゃないのかと思つたが間違いではなかつたというのが後になつて解つた。

リサは普段は大人しく、人畜無害だがある条件を満たすと、たちまち暴れまわつて辺り一面を壊滅しちやう困つた体質を抱えているメイドさんだ。

「さあ、リサさん。」

このお兄さんと遊んであげて！

なんなら食べちゃつてもいいよ」

「止めるんだリサ。俺は知つてるよ、君はそんな事を望んでいない。

人を傷つけるより、メイドの仕事をしている方が好きなんだつて事を」

詞乃ちゃんがりサに指示を出したので俺がそれを遮るように言うとりサは驚いたよ
うな顔をして俺の顔をじつと見つめると何やら考え込み「もしかして貴方jo bedo eit Bentuが

リサvan Lisa en hendの勇者、様……？」とオランダ語で呟いた。

「え？ 何、何？」

詞乃ちゃんが初めて戸惑ったような声を出した。

「ま、まさか……ご主人……様？」

今度は日本語でリサは呟いた。

「ああ、そうだよ。久しぶりだね、リサ。

こんなところで君に会えるなんてまさに奇跡だね」

俺が肯定して微笑みかけながらそう答えると。

「ご主人様！」

だきっ！ リサに飛びつかれて、抱きつかれた。

変身の途中だったのか、リサの細腕は今や太く膨張していて、身体中にはモツサモツサのモフモフの金毛が生えてきている。

「2人は知り合いなの？」

とーつても興味深いなあ」

「はい、私が探していたご主人様です。

容形は違いますけど間違いありません」

「どうして解るの？」

詞乃ちゃんが興味深そうにリサに聞くとリサは背筋をしゃんと伸ばして。

「メイドですから」

そう返答した。

「いや、その返答はどうかなあ……」

うん、なんかごめんよ。うちのメイドがおかしくて。

「どうやってこの世界に？」

いや、それよりその姿は？」

リサが『ジェヴオーダンの獣』に変身するのには、2つのトリガーが必要なはずだ。

一つ目は『死の淵』アゴニザント。

リサも俺のヒステリアモードと同じように、βエンドルフィンで変身するタイプで、

発動には『死にかける』という発動条件と、もう一つ。

『満月』が必要なはずだ。

さつきチラツと外を見た時は、雲がかかっていた為、今日の月の様子は解らなかった
がりサが変身している事からおそらく今日は満月なんだろう。

「そ、それは……主人様を探していたら気づいたらこの村に……」

村に通じる道を歩いていたら時に白くめの女の子に出会って、その子の紹介でこの建
物に来たら詞乃様に保護してもらえたのです」

目頭に溜まった涙が流れないようにしながら答えるリサ。

泣かしてしまった事に罪悪感を感じながらもリサの口から出た言葉に考え込んでしまおう。

「白い……女の子？」

果てしなく嫌な予感がしているが聞かなければいけない。

予想はついているが俺が誰なのか尋ねてみると、案の定、予想通りの返答が返ってきた。

「はい、ヤシロという可愛らしい女の子様でした」

「やっぱり、か……」

ヤシロちゃんは神出鬼没だね。まさか異世界の村にまで現れるなんて。

リサの正体に勘づくのなんて流石というべきか。

ヤシロちゃんがリサと出会っていた事も衝撃的で気になる内容だったが、それよりも気になる事がある……。

「変身しているって事はまさか……」

リサの変身には『死の淵』と『満月』が必要で、変身しかけているという事はつまり……。

「あ、いえ。今の私は満月を直接見なくても変身できるんです。

ヤシロ様からいただいたDフォンの機能に『変身ボタン』というボタンがありました

それを押せば何時でも何処でも自由自在に変身できるのです」

「このように」と言つてリサはDフォンを操作した。

すると半人狼化していたリサの姿がたちまち元の普通の人間の姿になった。

お尻から出ていた尻尾も、太くなった腕も全て元通りに一瞬でなつてしまった。

それは衝撃的な事実だった。ボタン一つで変身できるメイドつて。

それもモツサモツサの獣に変身つて。

辺り一面殲滅しちゃうような変身を自由自在に出来るメイドさんになつていたなんて。

「随分とシユールな光景が目には浮かぶな……うん」

「ふふつ、これからは必要な時に何時でもご主人様の元に駆けつける事ができますね」

「ああ。これからもよろしく頼むよ」

俺がリサにそう言った瞬間

「そんな事させないよ」

ゾクリ。

Dフォンがメチャクチャ赤く光つて警告を発している。

「お兄さん達も裏切り者のリサさんも決してこの村からは出さないよ」

「……詞……乃……様？」

リサが恐る恐る詞乃ちゃんに尋ねると詞乃ちゃんはニコッと笑ったまま、指をパチンと鳴らした。

途端に、部屋の外が騒がしくなり、3人の村人が部屋の中に入ってきた。廊下の方も騒がしいからきつとまだいるのだろう。

「この人達も……!!?」

「うん。この村にいる人達はみんな死人だよ！」

『人喰い村』だからね、この村は」

「そっか。という事は君が……」

「うん、私は『人喰い村』のロアだよ」

「なるほどね。『人喰い』と『祭り』をかけた名前なんだね？」

「そうだよ」

「やけに素直に答えるんだね？」

「これも罠かな？」

「ううん。私はロアだからね。」

「嘘はつけないんだよ」

「嘘はつけない？」

「うーん、その言葉を信じていいのか、迷うな。」

「リサさん。裏切らないよね？」

「も、申し訳ありません。」

私はご主人様と共に生きたいのです。

ですので私はここから……」

「出られるって思ってるの？」

「そ、それは……」

「大丈夫だ。後は任せて」

俺は手に持っていた包丁を床に下ろし、リサに近づいた。

そして——ぎゅつとリサを抱きしめた。

俯いてしまったリサに代わり俺が詞乃ちゃんに返答をする。

「出られるさ。君のロアは『二度と出る事が出来ないかもしれないかもしれません』というロアだからね。」

つまり……」

ビシツと指で詞乃ちゃんを指しながら告げる。

「出る事が出来てしまったら、その力はかなり弱くなるはずだ！」

「へえ、出来るんだ」

「出来るさ」

「ふうん？」

詞乃ちゃんは自信満々に告げた俺の顔を見ながら何やら考えていたが……クスツと笑って。

「じゃあ、見事に出てみせて」

その言葉と同時に村人達が一斉に走り寄ってきた。

「ぐ、ぐ主人様」

「大丈夫だ！」

俺を信じろ」

俺はリサをお姫様抱っこするように抱えてその場から飛び跳ねた。

ハーフロアとして覚醒したおかげか、身体能力がかなり上がっている。

斧を持った村人の頭上を楽々と飛び越えたとリサを抱えたまま、斧や鉈を持った村人達の攻撃を躲しながら廊下へ飛び出した。

廊下に出た俺は素早く周囲を見回して安全の確認したが廊下には村人達が大量に転がっていた。

よくみると腹や頬に靴の跡が残っている。

この靴跡は一之江のものだ。

蹴られた事がある俺にはよく解る。

一之江の匂いもするしね。

「姫はここでおとなしくご観戦を。ああいうのと戦うのは俺一人でもいいからね」

一之江の匂いや形跡が残っている事に妙に安心した俺はリサを床に下ろすとすぐ様村人達の方向に向かって駆け出した。

『せんりん潜林』 ツ！

駆け出した俺は村人が振りかざした斧を避けてから伏せるような姿勢で地を這うへビのように移動しながら床に置いた包丁を両手に持つて、その包丁で村人達の足のアキレス腱を斬りながら進んで行く。

「男性のみなさん、悪いがこれで成仏してくれ」

襲ってきたのは男性だけだったから遠慮なく代々遠山家に伝わる秘技を使って斬る事が出来た。

これが女性なら出来なかっただろう。

俺に足を斬られた村人達は赤い光の粒子となって霧散していった。

足の腱を斬っただけで消える……こんな事は今までなかった。

やはり『タツくん』や『ミーちゃん』と同じようにこの村人達はすでに死んでいるよ
うだ。

「凄いい、凄いい！」

村人達じゃあ相手にならないのかな？」

「諦めてくれるのかな？」

「まさか！」

まだまだ村人達ならたくさんいるよ！

それにリサさんを連れてじゃあ逃げ切れることは出来ないと思うけど？」

「何故だい？」

「だって彼女、私と同じで『神隠し』さんを裏切れないもの」

「っ!?？」

リサは『神隠し』と聞いた途端、ビクツと震え出した。

「リサさんは『神隠し』さんに救って貰った身なんだから裏切れない、よね？」

「そ、それは……」

「それとも『神隠し』さんを敵に回す覚悟がリサさんにはあるんだ？」

「ご、ご主人様ならきつと『お嬢様』の事も助「そう、裏切るんだ」……はい。」

リサは「ご主人様と一緒にいたいのです」

「ああ、一緒にいよう、リサ」

「勝手な事言わないで！」

そもそもモンジさんが何者であつてもリサさんを連れ出す資格はないよね？

関係ないあかの他人なんだから……貴方は。

それにリサさんははつきりいって戦闘の役には立たないと思うよ。

せつかく変身出来ても戦おうとしない人だし」

俺の事が気に入らないのか、ニコニコと笑いながらも俺とリサの間を引き離そうとする詞乃ちゃん。

「うっ、(´)主人様……私……」

関係ないあかの他人と俺とリサを糾弾してくる詞乃ちゃん。

その言葉に傷ついたのかりサは涙目で俺の顔を見ながら何やら期待するように俺の顔を見つめてきた。

「それは違うよ!」

「ん? 何が違うの?」

「俺とリサは他人なんかじゃないからね。」

俺はリサとある契約を結んでいるし、彼女を他の人に任せるつもりもない」

「でも彼女はロアになつたんだよ」

「わかってるよ」

「貴方が知る彼女とは違うよ?」

「それもわかってるよ」

「ふーん、じゃあどうするの」

「いうするよ」

俺はDフォンのカメラをリサに向けた。

カメラを向けた瞬間

ピロリロリーン！

手に持っているDフォンから音が鳴って。

それまで赤く発光し、発熱していたDフォンが青白い光を放つ。

「……何をしたの？」

詞乃ちゃんが驚きの声をあげた。

詞乃ちゃんの声を聞き流しながら確認を取る事にした。

念のため、そのDフォンを詞乃ちゃんに向けてカメラで写してみたがそのDフォンは

なんの変化もなかった。

詞乃ちゃんはどうやら『百物語』の対象ではないらしい。

詞乃ちゃんは違ったが……。

よし！

上手くいった。

青白くなったDフォンを操作し、データフォルダを見てみると俺の予想通り、そこに

は全身に金毛が生えた犬みたいな姿をしている獣がポロポロのドレスを着た人形の横に写っていた。

一之江の時と同じでちゃんとリサも出来たみたいだ。

俺の『物語』に！

「リサ。これで嘘じゃない記録が出来ただろう？もう君も俺の大切な物語だ！」

第九話。 改変された物語

俺がそうリサに宣言したまきにその時、俺の背後から聞き覚えのある彼女の何故だかイライラしているような声が聞こえてきた。

「心配して様子を見に戻ってくれば……また女を口説いてるんですか？」

「ほどほどにしとかないと刺しますよ、ハゲ」

「だからハゲてないって！」

「貴女つッ!?」

「モーイ……いつの間に」

いつの間にか俺の背後に一之江がいて、詞乃ちゃんとりサが驚愕したような声をほどほど同時にあげた。

「一之江がここに戻ってきたって事は外も？」

「はい、村人はみんなゾンビでした。」

切っても切ってもキリがないので逃げてきました。

音央さんも一緒です。今はこの建物の前で一人で待っていますので早く行ってあげてください。

「ここからは私が引き受けます」

「いや、だ……」

「たらしなモンジは女を口説く事は出来ても、傷つける事は出来ないでしょ？」

推測ですが、その彼女、『人喰い村のロア』を倒さない限り、この村から出るのは難しいと思われます。もちろん他の脱出方法もありますがそちらをやるにしろ彼女を足止めする必要があります。

足止めするにも多少は傷つける必要がありますので……なので私がやります。

それにそのメイドさんを連れてでは戦うのにも足手纏いになるでしょう？」

一之江は視線をリサに向けた。

一之江に見つめられたリサはビクツとしたがすぐ様、セーラーメイド服を摘んで普段通りに優雅な一礼を始めた。

「一之江様、改めてご挨拶を申し上げます。

この度、ご主人様のメイドになりました。リサと申します」

「たらしなモンジに仕える優秀なメイドですか。

なんだか犯罪臭がしますね……」

まあ、いいです。尋問は後でしますので今はさっさと逃げてください」

たらしつていうところや犯罪臭というところは後でキチツと訂正しておきたいが一

之江の言う通り確かに女性を傷つける事は今の俺では進んでしたくない行為なのでおとなしく一之江に従う事にする。

今の俺なら詞乃ちゃんを抑える事は出来るが、彼女がいくら凶悪な『ロア』だからと言つても『女性』である事には変わらないからな。

「……わかった」

それに、『タツくん』や『ミーちゃん』の事もある。

あの子達は確かに死人だった。

直接状態を確認をしたわけではないが、長年武偵として活動してきた中で多くの人達を見てきた経験により時には助けられなかった人達の姿を見る機会もあった。

だからわかる。

あの子達は間違いなく、死んでいる。

あの子達の事を呼ぶなら……死人以外の呼び名を思いつかないのであえて死人と呼ぶが、それでも他の言葉であらわすならばゾンビや屍人グールみたいなそんな存在なんだろう。

そんな死人の存在になっていたのにも関わらずあの子達は俺と音央に『食べられないでね』と忠告してくれた。

それにさつき詞乃ちゃんか言っていたが心を取り戻させた、という言葉が引つかかて

仕方ない。

本来ならタツくんやミーちゃんも、そういう人間らしい心を持たない存在だということなんだろう。

だとしたら、あの自然な振る舞いも、楽しそうな笑顔も、みんな詞乃ちゃんに作られたもの、という事になるのだろうか？

警戒していた俺達を分断させるには、確かに子供達を使うあの手法は上手いやり方だったと思う。

安心させて、子供に殺させる。

普段の俺だったらかかなり危なかつただろう。

だが、それだけではなくて。もし、詞乃ちゃんの計画を狂わせる突発的な出来事が起きているのだとしたら？

そして、あの小さな子供達の心を取り戻させる事が出来るとしたら、それは『不可能にする男』と呼ばれている俺がすべき事なのだろうか……。

もし、俺が詞乃ちゃんを倒す事で子供達が解放されるのだとしたら……。

「……………主人様……………」

俺の背後で弱々しく俺の名前を呼びサ。

リサの声で我に返った俺はリサの顔を覗き込む。

ウルウルとした涙目で弱々しく俺を見つめてくる。

そのリサの顔を見てみると改めて俺が守るべきものがなんなのかを認識出来る。

そうだ。俺の役目はここで詞乃ちゃんと殺しあう事ではない。

そして、非常に心苦しいが子供達を救う事でもない。

リサのような弱いものを助けてここから無事に連れ帰る事が今の俺に求められている役目だ。

子供達はすでに死んでいる。

死んでいる奴らを生き返らすなんて事は『不可能』だ。

死者の蘇生なんて現実的じゃねえ。

一度死んだ人間を生き返らせる事なんて不可能だ。

そんな事はわかつてる。

……だけど。

「……主人様？」

「悪い、リサ。

ちよつとだけ待っててくれないか。

試してみたい事があるんだ」

俺はリサから視線を逸らして一之江と刃物で切りあっている詞乃ちゃんに向かって駆け出した。

「……………モンジ!?」

「ん? 何、お兄さんはそんなに早く死にたいのかな?」

「いや。違うよ、つと……………」

詞乃ちゃんが突き出してきた包丁を避けて俺は彼女の背後に向かう。

その方向にあるのは……………。

「……………そんなにタツくんとミーちゃんが大切な?」

その先にいるのは、血まみれになって倒れている小さな子供達だ。

俺は2人の子供のすぐ側まで近寄り、その状態を確認する。

「お兄さん、もしかして……………死体フェチ?」

そんな人には見えないんだけどなー。

ま、いらぬからあげるよ。

もう、ろくに動けないゴミみたいなものだからね。

役に立たないゴミを動かすなんて非効率だし」

「……………いー!」

「ん? ……なんて言ったの?」

「この子達はゴミなんかじゃない！」

「何で怒っているのかわかんないな。」

まあ、ゴミじゃないならそれでいいよ。

どっちにしろ、その子達は消えるか、私の支配下で動くか、それしかないんだから」
「いいや、あるよ。」

「この子達を君から取り戻す方法がね！」

「どうやって？」

その子達はすでに死んでいるんだよ？

幽霊でもない。ただの残滓。本人の残りカス。物語のモブキャラだよ？

いくらお兄さんが普通の人じゃなくても死人を生き返らせるなんて出来ないでしょ

？

「そんな事は誰にも不可能なんだから」

微笑んだまま、そう告げる詞乃ちゃんは彼女が手に持つ包丁で俺に向かって切りか
かってきた。

だが、俺に刃が届く事はない。一之江が俺の前に立ちはだかり詞乃ちゃんが振り回す
包丁の斬撃を一之江が自身のその小さな手に持つナイフで全て防いでいるからだ。

一之江は詞乃ちゃんの攻撃を防ぎつつ、彼女が身にまとう洋服ワンピースを切り刻んでいく。

一之江がナイフを振るう度に詞乃ちゃんの肌や服に切り傷が出来るが、驚く事にそれは決して致命傷にはならない。

何故なら詞乃ちゃんの体についた傷口は瞬く間に、何事もなかったかのように塞がっているからだ。

切つても、斬つても再生する傷口。

一之江がナイフを振るう度に詞乃ちゃんの真つ赤なワンピースがズタズタのボロボロになっていく。

しかし、それでも彼女につけた傷口は回復していく。

「きりがいい……ですね」

「無限回復力……『魔臓』でも持つてるのか」

「ふふふ、あははは……無駄だよ。無駄、無駄。」

貴女じゃ、私は倒せない！

私はこの『富士蔵村』の『ロア』なんだから」

高らかに笑いながら一之江に斬りかかる詞乃ちゃん。

一之江は詞乃ちゃんの攻撃をナイフで受け止め、あるいは流しながら防いでいく。

攻撃を否しながら反撃し、ナイフで詞乃ちゃんの肌を切りつける一之江。

だが切つても切つても詞乃ちゃんの傷口はすぐ様塞がっていく。

一方、詞乃ちゃんは手に持つ包丁を振るい、一之江に向かって突き出していく。
「一之江ッ?」

咄嗟に一之江の名前を叫ぶと。

ガキイン

刃物同士がぶつかる金属音が鳴り響く。

詞乃ちゃんの攻撃を受け止めながら一之江が俺に向かって叫んだ。

「……心配無用です。彼女は私に任せなさい。

モンジ。貴方は貴方にしか出来ない事をしなさい!

救うのでしょうか?

その子達も、彼女達も!」

「ああ、もちろんだ!」

俺が頷くと、一之江は詞乃ちゃんにナイフを振るい切りつけた。一之江にナイフで切りつけられている詞乃ちゃんはまるで何も感じていないかのように相変わらず微笑んだままで顔を俺に向けて尋ねてきた。

「へえ、何か出来るんだ?」

詞乃ちゃんは、俺が何が出来ののだろうか、とワクワクしているような顔を俺に向けてきた。

「うん。さつき君は言ったよね？」

死人を生き返らせるなんて出来ない。そんな事は誰にも出来ない、不可能な事なんだって」

「言つたよ。それがどうしたの？」

「なら、その不可能を可能に変えてみせよう」

俺がそう口にした直後。

Dフオンが勝手に動作し、俺自身を写真に写す！

と、今までにない不思議な和音のメロデーが動作音として鳴り響き

辺り一面の街並みが一気に暗さを増し、赤と金の色に包まれた。

俺の周囲に、蠟燭の炎に似た無数の緋色の光が回転を始める。

その光の中で、俺は俺が思い描く『物語の主人公』の姿をとつていった。

『不可能^エを可能^ネにする男^プ』。

その姿を想像し、イメージをより強く頭の中で描いていく。

俺の周囲を回転していく、その緋色の炎を見つめると炎が変化し、一条の光の線となつて俺の頭の中に入ってきた。

頭の中に入った光は俺が持つ力の使い方の情報として頭の中に流れ、ヒステリアモードの俺はその情報により俺の力の使い方を理解していく。

俺の姿は、東京武偵高の制服姿へと俺の姿は一瞬で変化していた。

その制服に使われている防弾繊維や防刃ネクタイも俺自身のイメージから具現化したものだ。

Dフオンは緋色に光り出してスクラマ・サクスに変化した。

そして能力の使い方を理解した俺は倒れている子供の一人。ミーちゃんに近づき、その体に触れた。

俺が右手の掌で軽くミーちゃんの体に触れた途端、ミーちゃんの体は赤く光輝き、彼女の体中にあつた無数の傷口が塞がっていく。そして、止まっていた鼓動が聞こえてきた。

傷口はすぐ様塞がり、その死人のようだった彼女の肌色も、俺や音央と遊んでいた時のような健康的な人間の肌色に戻っていく。

だが黒い、闇色の飴玉みたいな瞳だけは元には戻らない。

すでに死人となっているタツくんとミーちゃん。

詞乃ちゃんの配下となっている意思を持たない操り人形。

迷い込んだ人々を襲い、喰らう存在。

そんな彼女達を救う方法だが、一つだけある。

それは俺にしか出来ない事。

ただの屍人では詞乃ちゃんの支配から抜け出せない。

ただ蘇生しただけではまた襲われる。

なら全く別の都市伝説に改変すればいい。

『人喰い村』の一部からミーちゃん個人の独立した都市伝説に。

それは口ア化した今だからこそ出来る方法で俺にしか出来ない事だ。

彼女達の存在を『改変』していく。

だが全てを改変するだけの時間はない。一部は残してそれ以外を改変していく。

『人喰い村』の命令を従うだけの屍人グールから黒い目ブラック・アイ・キッズの子供達の都市伝説に。

やがて光が収まるとそこには穏やかな顔をしたミーちゃんがいた。

瞳以外は普通の人間と変わらない血の通った人間の少女だ。

「えっ!?」

「凄いですモイー!ご主人様、とっても凄いですヘルモイーです!」

「確かに凄いです……どうやったの!?」

ミーちゃんの変わりように呆然とする詞乃ちゃんと、興奮気味にモイー! を連発するリサ。

2人の間にはかなりの温度差があるようだ。

「Nothing impossible人間に不可能な事なんてないからな!」

前世でお世話になっていた平賀さんの台詞を言いつつ、ミーちゃんの横に寝そべっているタツくんに近いつきミーちゃん同様、その存在を改変していく。

改変中、詞乃ちゃんか俺に向けて出刃包丁で切りかかろうとしてきたが全て一之江が防いでくれた。

数分後。

俺の前には意識と自我を取り戻した子供達の姿があつた。

「モンジ、ありがとう！」

「モンジ、ありがとうな」

「こらー！ 2人共。モンジお兄さんだろー！」

「ご主人様の今のお名前は疾風では？」

「はっ!?? しまった……」

「あはははっ！」

リサの鋭い突っ込みで場を和やかにさせつつ、俺は脱出のタイミングを図る。

詞乃ちゃんは相変わらず出刃包丁を手に持ち俺や一之江を切りつけようとしていた。

彼女の動きを見ていて解つたが、彼女は直接的な戦闘タイプではない。

その動きがあまりに雑過ぎる。

素人が包丁を振り回すのと変わらない。

総合的な戦闘力では一之江や俺の方があきらかに上だ。

「モンジ。彼女とその子達を連れてさっさと逃げなさい。」

足手纏いです」

「ご、ご主人様……」

「ん、ここは一之江に任せよう。俺達は一目散に逃げるぞ」

「は、はい……」

リサに頷きかけると、俺は詞乃ちゃんをまつすぐに見た。

『村系』と恐れられるロア。ブラドのように無限回復力を持つロア。

おそらく俺の予想以上に強いのだろう。

それでもハーフロアの能力に目覚めた、今の俺なら彼女に対抗出来るだろう。

リサや音央が近くにいなければ。

残念ながら無限回復力を持つ詞乃ちゃんを相手にするのならば彼女達の存在は足手纏いにしかない。

ならば、一之江の指示に従って2人を逃すべきだ。

「逃げられるかな？　まだ村人はいっぱいいるよ？」

「逃げられるさ。おつかないロアから逃げ切った実績があるからね！」

俺がリサの手を引いて走り出すと、詞乃ちゃんは出刃包丁を俺に向けて突き出してき

た。

しかし、その包丁を持った手首を、一之江が下から掬い上げるようにナイフで切った。スパアと、鮮血が迸り、詞乃ちゃんが手にしていた出刃包丁が落ちた。

「今です！」

「おうよ！」

「へえ……ま、後でいいかな？」

そう呟いた詞乃ちゃんの方を見ると。

しゅううう、と黒い煙が詞乃ちゃんの手首から溢れ、傷口はすぐ様塞がっていく。

やはり一之江の攻撃は効いてないようで、リサやブラドのように無限回復力を持つているようだ。

傷つかない口ア。

そんな存在の詞乃ちゃんに一之江を一人残して戦わせる事に不安や焦りがあるが。

「ご主人様……」

不安そうな顔を向けるリサの手を引いて部屋から飛び出した俺は廊下を駆け出した。

俺達の後ろに張り付くようにタツくんとミーちゃんが続いて走り抜けていく。

たくさんいる村人達が床の上に転がるその廊下をひたすら走り続けていく。

自治会館の前で待つ、音央と合流する為に。

たった一人、殿を務める為に残った一之江が作ってくれた逃走経路の中をひたすら走っていく。

無事に、この村から脱出する為に……。

第十話。超えた限界。勇氣の在り方。

自治会館の廊下は、血まみれで倒れている村人だらけだった。

手に包丁やら鋏やら鎌やらを持つている人々が、みんな目や鼻、口から血を流してぐったりと倒れている。その光景は大変気味が悪く、リサや子供達は口元を押さえながらその脇を駆け抜けていく。

タツくんやミーちゃんのように彼らも、零時を境に変貌して一之江を襲ったのだろうか。

彼らも、もうすでに死んでいて、その死体が動いていた、という事はそういう事なんだろうな。

『なんか、めちやくちや狂った人が村人を全員殺しちゃったとかなんとか』

不意に、音央が語っていた噂話を思い出した。

この村の人達は、みんなこの村に迷い込んだ人達で……そして『カーニヴァルのローア詞乃ちゃん』に取り込まれた人達の成れの果てなんだろうか。

そして彼女に操られて一之江に倒された人達は詞乃ちゃんが言っていたように幽霊ですらない、『残滓』みたいなものでその存在は本人の残りカスなんだろうか。

もし、詞乃ちゃんが言うような存在だとしたら……。

……悲しすぎるな。

悲しいがどうにも出来ないのが現状だ。

タツくんやミーちゃん存在を改変したが村人を全員改変するなんて事は残念ながら出来ない。

傷つけても傷つけても復活する詞乃ちゃんを相手にしながら、大勢いる村人を全員救うなんて事は現実的ではないからな。

そしてもう一つ懸念がある。

詞乃ちゃんは自らを『富士蔵村のロア』などと名乗り、リサに対して『神隠し』を裏切るのか？ などと言っていたがあれはどういう意味なんだろうか？

リサに詳しく聞いてみないと解らないが彼女の他に『神隠し』という存在がいるのだろうか？

「くそつ、解らないな……」

『人喰い村』というからには彼女が迷い込んだ人達を取り込んでいた、というのは間違いないだろう。

だが、もしも彼女の言う通り、彼女とは別に『神隠しのロア』がいるとしたらその存在はかなりの脅威になるに違いない。何故ならロアは有名であれば有名になるほど、そ

の存在は強くなるからな。

「ハアハア……ご主人様、出口が見えてきました」

「うん？ ああ……っ？？」

「きゃあああああ！」

隣を並んで走るリサの声で思考を中断して出口の方を見たその時。

建物の出口付近から女性の悲鳴のような声が聞こえてきた。

——今の声は？？

「音央？？」

声が聞こえてきた出口の方に全速力で走る。

走りながら驚いた。全速力で飛ばしているのに全くといっていいほど、疲れないからだ。

身体能力……とりわけ体力が上がっている？？

もしかして、これが一之江が言っていた『ハーフロアになった人が持つ力』か？

以前、学校の屋上で見た一之江の尋常ではない跳躍力を思い出した。

『人間からロアになった人』、『ハーフロア』に備わる力の一つに身体能力の強化がある。

この身体、一文字疾風は中距離走が得意で元々そこそこの身体能力を持っていたが全速力で飛ばして全く疲れないというような高い体力は持っていなかった。

今の俺はヒステリアモードになっているがそのヒステリアモードは程度や派生にもよるが、そもそも普段の俺の身体能力や思考力が30倍に上がるといった能力だ。

だから能力の向上には普段の身体能力や基礎体力が重要となる。

その身体能力が上がっている今の俺は通常のヒステリアモードより高い身体能力を発揮出来る。

そう。

例えば……超音速以上での移動にも耐えられるような。

それに俺が目覚めた能力は『事象の^{オーバー}上書き』だ！

その能力を使えば『不可能』を『可能』に変えられる。

音央が危ない!!?!

普通なら状況的にまずい。

相手は複数人。

武装している。

対する俺は刀剣一本。

さらに到着まで数十秒かかる。

部は悪い。

だが俺は諦めない。

状況が悪いなら、状況をよくすればいい。

速く着かなければ……。

もつと速く。

速く、もつと速く……。

もつと加速を……。

一之江の『想起跳躍』よりも速く。

限界を超えたい！

そう思いながら超光速で移動する姿を想像し、心の中で技名を叫ぶ。

夜桜!!^{よやくら}?)

その瞬間、俺の全身は緋色の光を解き放った。

心の中に暗闇を照らす1本の桜を体現させる。

暗闇に浮かぶ、幻想的な花びら。

見るものを驚かせて、感動させる、神秘的な輝き。

色鮮やかな桜の花。

その舞い散る花びらのように、暗闇の中を緋色の光が迸る。

桜花が見せるマツハ1の世界のとは全く別の……光の中にあるような、全てが眩くボ

ヤけるような

光の世界に、変わる。

その光の中を全速力で駆け抜ける。

音よりも速く動く、ヒステリアモードが見せる超光速の世界で俺は自身の限界を超えた。

(これが……光速の世界……)

一筋の光となった俺は瞬く間に建物の外に到達した。

「音央おおお——！」

「えっ、モンジ!?」

建物の外、自治会館の出入り口で数人の村人に囲まれている音央の姿が目に入った。

音央を囲っているのは全員男だ。

俺は速度を維持したまま、村人の一人に体当たりをした。光速でぶつかった相手はズンンという激しい音を立てて吹き飛ぶ。

吹き飛ばされた村人の一人、鎌をその手に持った男性は勢いよく吹き飛ばされて頭を地面に打ち付けた。

そして、ピクリともせず光の粒子となって霧散していく。

「モンジ……きやあつ!?」

「音央っ！」

「そこをどけええええー」

光速で移動し、音央に包丁を振り上げていた男の肩と首をスクラマサクスで切り裂いた。

「おりゃあー！」

続け様に、音央を囲む村人の一人の胸をスクラマサクスで切断した。

人の姿をしている為、切り裂く際はかなりの抵抗があつたが彼らを救う術を持たない俺は、心の底から謝罪しながらスクラマサクスを振るう。

今の俺は女性を傷つけられないが、相手が男性ならば話は別だ。

とはいえ、男性の身体を切断するなんて事は本来ならばやりたくない行為だ。

武偵法9条を破る……それは武偵が最もしてはいけない違反行為だからな。

本当なら彼らも救いたい。救いたいが、全員を救う時間はない。

俺の能力は対象に触れる必要があるし、一度に改変出来る人数にも制限がある。

救いたいのにな、救えない。

全知全能の神ではない俺は全てを救うなんて事は出来ないから。

それに、人の姿をしているが彼らはみんなすでに死んでいる死人だからな。

だから殺人ではない。

そう自分に言い聞かせる。

エゴだと言う事は解っているけどな。

「はああああー！」

スクラマサクスを振るい、音央や俺を襲おうとしていた村人を次々と切り裂いていく。

無我夢中でひたすら脚と腕を動かす。

数分で音央を取り囲っていた村人達を全員倒した。

「ハアハア……」

村人の数は6人だったが、終わった後の疲労は凄まじかった。

肉体的な疲労感、筋繊維を痛めたからかも知れないがそれだけじゃない。

それとは別の疲労感があるからだ。

これは精神的な疲れだ。

初めて人を殺した。

相手はすでに死んでいる人の残りカスみたいなものだが、それでも存在を奪った事実
は変わらない。

「ハアハア……キツイな」

予想以上に苦しいな。これは。

だが逃げ出すなんて出来ない。

一之江は当たり前のようにこんな事を続けてきたんだ。

彼女一人にこの重みを背負わせたまま、自分一人だけ平穩に暮らすなんて出来るわけない。

「ご主人様……」

「モンジ……ごめん。」

「ごめん……モンジ……」

俺を呼ぶ声が聞こえたのでそちらを振り返ると、悲しそうな顔をしたリサと泣きながら謝罪をする音央がすぐ側にいた。人を殺した現場を見た彼女らに、俺はなんて声をかければいいんだ。

甘く囁くべきか、斬ったのは人の姿をした残滓だと言うべきか、あるいは……。

どういった説明をするべきか、悩みながらも音央の手に触れてハンカチを差し出した。た。

そして差し出したハンカチで目元を拭ってやった。

「……なんて顔、してんのよ」

涙を拭ってやると、音央はいつもと変わらない感じで俺を見上げてきた。

「あんたは悪くない。」

さっきのあんたの動きは人間離れしていてちよつと怖かったけど……でも、大丈夫。

あんたは間違っていない。あんたのおかげで私は無事なんだから」

「そうだぜ？モンジがいなかったら俺もミーちゃんもずっと死人のままだったんだ」

「うん。モンジおにいちちゃんは悪くないよ？」

「タツくん、ミーちゃん……」

「そうよ。あんたは悪く……つて、待って！

タツくん、ミー……ちちゃん？」

俺を励まそうと音央に続いてそう言ってくれたタツくんとミーちゃんが彼らの存在に今更ながら気付いた音央はその顔を驚愕させた。

「ええり？ ちよつと、な、なんでり？」

え、えつーと……本物？」

啞然とした様子でタツくんやミーちゃん、俺の顔を交互に見つめる音央。

混乱している様子がよくわかる。

まあ、誰だって死んだと思った人がいきなり目の前に現れたらそうなるよな。

「見ての通り、無事だよ」

出来るか、出来ないかは賭けだったが2人の物語は無事に改変された。

『カーニヴァル人喰い村』の一部から、『ブラック・アイ・キッズ黒い目の子供達』の物語に……。

「よかった。よかったよ……うえーん」

鬼の目にも涙、ではないけど普段快活で明るい音央がこれほど感情を乱すなんて珍し

い光景だ。

音央は常に明るく、元気で、活発。

スタイルの良さとその性格から人気が高い女の子だからな。

人前でこれほど感情を乱したなんて事は今まで一度もなかった。

そう思った時だった。

ザザザザザザザザザザ!!?

音央が持つていたラジオがいきなり鳴り始めた。

俺は咄嗟に音央を引き寄せて、すかさずサイドステップした。

ブオン、と俺がいた場所を通り過ぎる金属バット。

「ひっ！」

「おつと悪い、な！」

後ろを振り返るとそこにはバットを持って、そのバットを振り下ろした状態のおっさんがいた。

俺は音央の腹辺りを左腕で抱き抱えると、そのおっさんの脇腹を右足で蹴り飛ばした。

「リサー！」

リサの方を見ると、いつの間に変身したのか、リサは金毛の狼のような姿をした魔獣、

『ジエヴオーダンの獣』の姿になっており、その背に子供達を乗せていた。

「よし、リサ！そのまま森の方に逃げてくれ！」

俺と音央もすぐに行くから」

……オオオオオオ

ン……………！！

リサが、百獣の王、ジエヴオーダンの獣が何かを喚んだ。

リサの咆哮が終わった直後、空を覆い尽くしている黒い影。

それは……。

(蝙蝠??)

鋭い牙を持つ、闇夜の狩人が俺と音央を守るように周囲を旋回し始めた。

蝙蝠が飛来してきたのを確認したりサは一声上げると物凄い速さで森の方に駆け抜けて行った。

「クジラ、渡り蝶、ハイマキ狼ときて、今度は蝙蝠か……相変わらずリサの獣を喚び寄せる能力

は凄いな……」

リサが駆け抜けて行った方角を眺めていると、腕の中に収まっている音央が口を開いた。

「も、モンジ、強いよね?」

腹を抱えられた事やリサが変身した事よりもそっちの事実には驚いたらしい音央は、目

をパチクリさせながら俺を見つめてきた。

「あー、いや……」

なんて説明しようか？

ありのままを伝えるべきか？

それとも……。

迷いながら俺はふと気になった事実を音央に尋ねた。

「つ、それより。そのラジオは便利だな。村人の接近を知らせてくれるみたいで」

急な話題転換に疑問を持ったのか音央は眉を一瞬だけ吊り上げたが問い詰める事はしなかった。

それどころか極めて明るい声で俺の疑問に答えてくれた。

「うん。このラジオが危険を教えてくださいたいだもんね。それにこれ、どつかで見た事がある気がするのよ……」

「デザインがよくあるものとか？」

「んー、そうかも」

極力何時ものように返してくれて、内心で感謝した。

彼女にどこまで話すべきか、という問題はひとまず置いて。

今は音央を無事に帰す事を優先しよう。

俺はもうこの『主人公』の道を覚悟しているからいいが、音央は単なる被害者なんだからな。

早く元の生活に戻してやらないといけない。

そう思った。その時だった。

ピピピピピッ。

Dフォンが着信を知らせてくれた。

相手は……キリカだ！

「もしもし！ キリカか！」

『わっ、食いつきがいいねモンジ君』

「今、丁度大変な状況だったんだよ」

『うん、普通の携帯の方にもかけたんだけど出なかったから、電波が悪いか、誰かの『口アの世界』にいるのかなー、と思って、Dフォンにかけてみたんだけど正解だったよ。』

近くには瑞江ちゃんいる？』

「いや、今はいない。音央ならいる。音央と一緒に逃げているんだ」と返事をした時だった。

ザザザザザザザザツ!!？

「またか！」

音央の持つラジオがノイズを発した。

見ると自治会館の駐車場の方から4人の村人がゆっくり歩いてきた。

俺達よりもちよつと歳上な若者、中年のおじさん、中年のおばさん、高齢のおじいさん、だ。

手にはそれぞれ、バットやらゴルフクラブやら包丁やら猟銃やらを持っている。

その目はやはり黒塗りで、顔の表情は無表情だ。気味が悪い容貌はいかにも亡者っぽい。

「音央、森の方に走るぞー！」

「う、うん」

『ほんとだ。凄いピンチっぽい状況だね』

「まあね！」

キリカと電話しながら音央の手を引き、彼らとは反対側に走り始めた。

その直後。

ズドオオオオン、と銃声が鳴り響いた。

彼らのうちの1人が手に持つ猟銃で俺や音央の背に向けて発砲したのだ。

放たれた銃弾は一発。

その弾の弾道は丁度俺の左側を通過する位置。

音央の心臓に当たる位置だ。

左手で僅かに逸らしても、音央の頭に当たってしまふ。

俺は咄嗟にその場を回転すると音央を繋ぐ手とは別の手で、その手の腕を一瞬だけ銃弾と同じ速度で引きつつ……あとはそつと、弾を掴んだ。

「熱いな、このカイロは」

握っていた銃弾を地面に捨てながらそう呟く。

銃弾^セ掴み。

腕に全身運動技・桜花の逆技、橘花をかけ、引いてから回転をかける。

普通なら手に弾丸の力がかかるが『ハーフロア』として覚醒しているおかげか、弾丸の力は残らずに普通に掴めた。

腕自体が発生させた運動エネルギーは、『秋水』を使い、逆技にする事で打ち消した。だから足元には若干、俺がズリ下がった跡が残った。

その結果

傍目には、単に飛んできた弾を掴んで止めたように見えた筈だ。

音央にはもちろん、俺にも怪我はない。

これは、鬼の一味。『閻』が使う、『バツと来たから、グツで受け止める』力任せなデタラメ技と似ているが違う。

この技は、弾の運動エネルギーをゼロにする技だ。

『うわあ！　今の音は銃声!?』

大丈夫なの?』

「ああ。平気だよ。これくらい」

キリカにそう告げて音央の手を引いて走り出す。

連続で撃つてくると思ったが、どうやら単発式らしい。

逃げるのなら今だ！

『ノイズ音も聞こえたけどラジオか何かかな?』

「うん。なんか村人が某ホラー映画や某ゲームみたいに理性を失って襲ってくるんだけど、それを察知して知らせてくれるんだ」

『なるほどなるほど。それは大事に持っててね、モンジ君。音央ちゃんが持っているのかな?』

とにかく大事にね』

「ラジオは大事に持ってろ、だってさっ」

「わ、解ったわっ!」

音央の手を左手で握り、右手に持つDフォンでキリカと会話する。

『ラジオっていう媒体は、よく電波とか周波数が混成するでしょ？』

その混成かきつけかけで異世界に繋がるー、みたいな都市伝説って多いの。ほら、死んだ人の声が聞こえてくる、みたいな都市伝説もあるからね。つまり、ラジオはそういうものを招き易いの』

右手側から聞こえてくるキリカのおカルト講義に納得する。

そういう逸話とかがあるのなら、このラジオも死者の何かを察知しているのかもしれないな。

「今、俺達を追いかけているのはその死人だ。

朱井詞乃という少女が『人喰い村』のロアで、彼女によって村人はゾンビみたいになっているんだ」

『シノちゃん、ね……他に情報は……』

「あー、実は……」

俺はこの村に入ってから体験した事や出会った人物、起きた現象を簡単に掻い摘んで説明した。

「他には、タツくんやミーちゃんっていう子がいるんだけど、目が黒塗りなの。

真っ黒に塗り潰されているわ！」

横から音央が口を出して、Dフォンの先にいるキリカに向けて叫んだ。

『おお、音央ちゃんの元気な声が聞こえて安心したよ。それだけの情報があれば検索もしやすいだろうから、早速しておくよ』

「ああ。頼むよ、キリカ」

『ううん、いいって。私だけ家でのんびり寛いでいるのも悪いしね。じゃあまた後で』
キリカが電話を切り、俺はようやく一息吐いた。

「今のつて役に立ったのかな？」

「うん。かなり検索しやすいつてさ」

「そう……」

音央もようやく安心した一息吐いた。

時間が少し経って、音央が落ち着いた頃。

自治会館から離れた俺達は森に続く砂利道を歩きながらちよつとした世間話をしていた。

音央が聞きたがったのはもっばら俺と一之江との出会いやキリカやりサとの関係だ。

「モンジ、あたし、なんとかしたい」

なんとか、したい。

この状況を、という事だろうか？

「ミーちゃん達はモンジが助けてくれたけど、他の人達もなんとかしてあげたい」

「……それはかなり難しいよ」

「うん。解ってる。」

けどあたしだけ守られてるなんて、嫌っ！」

「俺だつてなんとかしたいさ。だけど今は情報が足りない。」

だから、キリカの情報のを待とう。

俺達が先ずは無事に逃げる事が先決だ」

「ん……解った」

音央は俺の手をぎゅ、と握り返して……その手を離した。

「もういいのか？」

「恥ずかしいしねっ」

俺に引つ張られるのではなく、自分で走りたい、という事か。

この子は本当、気の強い子だね。

その気の強さを見てみると、俺も強くならないと、という気になる。

やっぱり、男は女性がいないと駄目なんだな。

「そういえば、キリカちゃんもなんか凄い子なの？」

「キリカはなんかどころじゃなく、もの凄い子だよ」

「一之江さんより？」

「一之江はそのもの凄い子をなんとか出来る子だったらしい」

「……………モンジは？」

「……………その2人をなんとか出来た男だよ」

「なんで自慢っぽい言葉なのに苦い顔してるのよ」

「いや……………だって、な。」

その、なんとかの仕方が（知らなかったとはいえ）プロポーズのようなものだったなんて、とても言えないからね。親しい間柄であるとはいえ、音央に言うのは恥ずかしい。そんな俺の心境を察したのか、ジツと見つめていたが音央は深く追求してこなかった。

「はあ……………それにしても……………」

「うん？」

「中学時代からの友人と転入生を連れて調査に来てみたら、まさかこんな『オカルトもの』を解決する人だったなんて、ね。ビックリしたわ」

「普通ないよな」

「モンジが一之江さんと組んでそんな事をしてるなんてね」

「俺らはまあ、こういうのを調査するのが、趣味みたいなものなんだよ」

「趣味って……………あんたの趣味は先輩の追っかけかと思っていたわ」

「そんな趣味はない！」

俺はストーカーじゃない。女性は守って愛でるものだ！

俺は女性の味方だよ」

「似たようなもんじゃない」

その言葉に反応しようとした矢先。

ザザザザザザザザザツ!!?

再び盛大にラジオが鳴り響いた。

咄嗟に辺りを見回すと、右の道から砂利を踏む音が複数聞こえた。

街頭に照らされていない道は真っ黒で視界ではよく解らないが、足音だけは聞こえる。

「左に行くしかないか」

その先の道は右手の道より真っ黒な森に続いていて、民家も街頭もないから何も見えない。

だがその分、村人が来る可能性は低いと思う。

「行くぞ」

「うんっ」

音央の手を掴んだ。拒否られるかと思つたが繋がれたままだ。強がつていたが、やっぱり怖いんだろう。

隣を歩く音央の手を引いて一步を踏み出した。

返事をした音央の声は、さつきよりも力強さを増している。

誰かを助けたい。

そんな気持ちに勇気を奮い立たせるといふのは、俺にも経験があつた。

第十一話。人喰い村からの脱出

「川、か……」

2人で走って真つ暗な森を抜けると、川に行き当たった。

川幅は大体10メートルくらいで、水位は膝丈くらい……に見える。渡ろうと思えば渡れる川だ。

だが、今は夜でDフォンのライトが無いと視界もよく見えない。

いざという時は渡って逃げないといけないだろうが、今はラジオのノイズが鳴るまでここで小休止をしようと思う。

「少し休もうか？」

「はあ、はあ、はあ……いいの？」

「うん。川の水は飲めないけど休むだけならね」

川の水を使って手や顔を洗いたいところだが、うっかり口に含んでしまい飲んでしまえば大変な事になる。

『異界の食べ物などを口にしたら戻れなくなる』。

キリカから聞いた言い伝えだが……確か、「黄泉戸喫」と言うんだっけな？

もつとも既に手遅れかもしれないがな。自治会館で食べ物や飲み物を出され、出したのがリサという事もあって俺は気にせず口に含んでしまったからな。

「はあ、はあ、ふう……」

隣を見れば音央もすっかり息を切らしていて、川をじっと見つめていた。

さつき、勇気を振り絞ったとはいえ、その表情には戸惑いが見える。

無理もないと思うが……変に気遣うよりも、いつも通りに接した方が彼女のためかも。

「川は使えそうもないな」

「ん……やっぱり川の水もアウトなのかしら？」

「異世界の物を口にしたら戻れなくなる……んだらうな、多分」

「なんかどつかで聞いた黄泉の国の話みたいね」

「一般人の音央でも知っている有名な神話。

伊奘諾イザナギと伊邪那美イザナミの異世界での夫婦喧嘩。

……そう。

確か黄泉の国の食べ物を食べると、人間の国には戻れなくなる、というのがその神話に出てきたはずだ。

黄泉の国、つまり死者の国。

そして、俺達がいるのは

人喰い村、人が消える村。

この村にいる人々はみんな死者だという。

その死者に追いかけてられているのだから、あながちその表現は間違っていない気がした。

「ふう……」

汗だくな体を持って余しているのか、音央は胸元をパタパタとして空気を送り込んでいた。じつとりと体に張り付いている衣服がなまめかしい。

その姿を見て気持ちが高ぶり血流が良くなり、ヒステリアモードがより強くなった。

「何見てんのよ」

じとーっとした視線は、いつも学校で彼女が見せるものだった。

本当ならこんな世界に入ってくる事はなかった彼女に、俺は……

「可愛い子の、可愛い仕草は絵になって目の保養になるなあ、と」

「バカっ。スケベっ」

「ははっ、男だからね！」

極力いつものノリ、いつもの会話を心がける。

音央もそんな俺の気遣いに気づいているのだろう。

なんとか頑張って『いつもの自分』でいられるようにしているように見えた。

「んもう……あんたって、ほんつとエッチよね。こんなピンチな時でもそうなんだもん」
「ピンチの時の方が生存本能が上がるっていうからね」

俺達、遠山の一族が持つ力……ヒステリアモードは性的な興奮をトリガーに発達したもののだが『生存本能』も発現には関わっている。あれは『子孫を残す』という本能により発現するものだからな。

「ハイハイ。一之江さんと会長にチクるわよ?」

「すみませんでした音央さん。清廉潔白せいれんけつぱくな紳士を目指します」

「よろしい」

くすつ、と笑いながら座り込む音央。俺もその横に座って、ふうふう、と息を吐いた。
……また連中が襲ってきたら、走り出さないといけない。

だから今のうちに休んでおかないと。

「ま、あんたがいつもと変わらないままでいてくれるから……助かってるわ」
「ん、こつちこそ、だよ」

「あんたも実は混乱してたりするの?」

「ああ、実は今回の事件は俺にとっては三つ目くらいの怖い都市伝説なんだ」

『ご当地口ア』の時は一之江とキリカが側にいたからそれほど恐怖は感じなかったから

な。

何も知らずに追いかけて回された一之江の時や親友だと思っていたクラスメイトに殺されかけたあの事件に次ぐ厄介な事件になってしまった、と今は後悔している。

俺一人がそういった事件に遭うのならまだいい。だが今回の事件は何も知らない一般人の音央も巻き込んでしまっている。しかも、事件現場となった村の中に前世の知り合いや死んで生き返った子供達もいるといった状況だ。

混乱しても仕方ないだろう。

「へえ、そうなんだ？」

音央は俺の顔をまじまじと見つめてきた。

俺はまだ口アといったものがどういった存在か、ある程度の知識があるからいいが、何も知らない音央からしたら怖くてたまらないだろう。

音央はそれでもついて来てくれてるんだ。

感じている不安は俺の想像以上なのかもしれない。

それでも落ち着いて見えるのは、多分……頑張つて強い姿勢を見せているからだろ
う。

「いめんな」

「うん？」

「本当は君まで怖い目に遭わせるつもりはなかったんだ」

怖い目に遭うのは俺だけでいい。

こんな、可愛らしく、明るい美少女に味わせていいものではなかった。

だから一之江と一緒に俺達だけでなんとかしようとしたんだ。

……いくら事故とはいえ、巻き込んでしまったのは事実だからな。

「ぶつ、あははは！」

巻き込むつもりはなかった、と謝罪したら何故か大笑いされた。

……なんか変な事言ったかな？ 俺……。

「なんだよ？」

「ううん、あんたらしいわ、と思っただけ」

「えっ？」

「元々はあたしが誘ったんだもん。あんたはあたしに巻き込まただけでしょ」

「いや、だけど……」

「いいの。別に気にしていないから。それに、なんだろう」

「うん？」

「怖いし、戸惑ってるし、落ち着かないけどさ。でも……なんでかは知らないけど、なんとなく大丈夫って気がしてるのよ」

「大丈夫……?」

「うん。なんだか怖い村なんだけど、同時に懐かしいっていうか……」

「懐かしい? この人喰い村が?」

それは意外な言葉だった。

改めて音央の顔を見ているが、当人もなんでかは解らないような、迷っているような面持ちで。

「うーん……ノスタルジックかな」

そんな事を眩き、考え込んでいる。

実は俺も似たような感覚をさっきから感じていた。

デジャヴっぽい感じなんだが、何故か妙にこの村が懐かしく感じるんだ。

知っている場所のような、やっぱり知らない場所のような、不思議な感覚。

「そういうえさつきも言ってたね。知っている気がするって」

「うーん。でもちゃんとした記憶はないのよ」

考え込んでいた音央はやがてふるふる、と頭を振って言った。

「懐かしい風景、って誰にでもあるのかもね」

「かもしれないね」

それが心の中で描く原風景的なものなどならいい。

あるいは家族や友人と遊びに行ったキャンプやバーベキューで感じたなら感動して終わるだけだろう。

だが、目の前の現実が違う。

今の俺達は危険にさらされているんだ。

……悔しいな。

音央の横顔を見てみる。

彼女だって、まさかこんな事になるなんて思ってもいなかっただろう。

当たり前のように、『何もありませんでした』で調査は終わり当たり前の日常を過ごしていく。

そんな程度の気持ちだったに違いない。

それなのに、今はこんな事になっている。

そういう当たり前の日、というもので……終わらせてやりたかった。

それができないのが悔しい。

「音央は後悔していないか？」

「うん？」

「……こんな事なら、とか思ってるか？」

「こんな事なら、ああすれば、こうすれば……。」

たら、なら、ればをいい始めたらキリがないが、そういう気持ちになってしまっても仕方ない事だと思う。

「だけど音央はあつけらかんと言いつつ放った。」

「そんなの、今思つてもしようがないでしょ?」

そして、目を細め。ちよつとだけ俺の方に身を寄せてきた。

「後悔なんて、すつごく安心した時にすればいいの。今はまだ危ないでしょ?」

「ん……そうだね」

その言葉は、正しくその通りだった。女は度胸と前世の幼なじみがよく言っていた気もするが……音央の度胸も半端ない。

「だから、無事にここから出て、それから後悔すればいいのよ」

「そうだな。今は出る事を優先しようか」

「うん。さつさと出ましよう。もしくは会長への想いでも語つてればいいのよ」

こんな時に、こんな場所で。

騒げばすぐに村人達に見つかりそうだというような状況だというのに。

音央はあくまでいつも通りを俺に要求してきた。

「そうだね、ここにいたのが先輩だったら……」

「だったら……もつとカッコつけてた?」

「いや、普通に会話してたと思うよ。」

普通に、『先輩の髪、いつもにも増して艶やかで纏まっていて綺麗だね』とか。『この前のようにお姫様にしてあげよう』とか言ってたね、きつと」

「……は？」

音央の顔を見ると、彼女は俺が言った言葉に呆然としていた。

その目は『あんた……へタレじゃなかったの?』と言っていた。

「……なんてね。冗談だよ。冗談」

「そ、そうよね。モンジだもんね。」

うん。モンジは不器用でへタレだし」

音央は静かに立ち上がると、川の方を見つつ、ラジオを耳に当てていた。

俺も視線を向けて、耳を澄まし、Dフォンを確認する。

「どうかな?」

「なんの音もしないわね。そっちも?」

「赤く光ってないし、熱くもなってるない」

「もう少し休めるなら、そのうちに色々教えてよ」

「そうだね。よいしょつと」

Dフォンを手に持ったまま、立ち上がった。

「やつぱ、一之江さんが転入してきた頃にこういうの始めたの?」

「まあな。あいつもちよつとした都市伝説のオバケなんだが、それに追われたんだ」

「へえ? オバケな転入生なのにモンジと仲良しになったの?」

「……仲良しだったらいんだけどねえ……」

思い返せば、死ぬだの、殺すだの、殺害予告しかされていない気がする。

ちよつとからかったり、胸の話題を出すとすぐにグサグサしてくるし。あの辺り、アリアと共通して『キレるポイント』になっているのかもな。

従姉妹の理亜もそうだった話題は苦手みたいだし。

「モンジって会長が好きなのよね?」

「うん? ああ。もちろんだよ」

「じゃあ、一之江さんは?」

「うん?」

「キリカちゃんは?」

「相手がオバケでも美少女なら大歓迎だよ!」

まあ、先輩やキリカは普通に友人や憧れている人っていう感じで、一之江に至っては相棒パートナーといった感じだけだな。

「そつか……そうなんだ」

音央は何か含んだように気にしている。

こんな状況でも、女の子にとって恋話は大事なのかもしれぬ。

「それじゃ……あたしは？」

「うん？」

音央の視線が俺の目を真剣に見つめていた。

不安……なのは確かだろう。強がっていてもやっぱり音央も普通の女の子なんだ。けれど、どうしてだろう。今の音央は、いつもと少し違う気がする。

まるで別人のような……そう、何故かは解らないが、誰かの代理でそれを訪ねているような、妙な違和感を感じてしまうんだ。

「当然、好きだよ。愛していると書いてもいい」

「あたしは嫌いだけどね」

「ええええええ？」

いい雰囲気があつさりと終わった瞬間だった。

「弱いわねー、いかにも雰囲気飲まれて」

「いや、そうかもしれないけどさー！」

「ふふっ、ばーか」

「いや、まあ……音央も可愛いからさ。っていうか、どうしたんだよいきなり、恋愛話な

んて」

今の状況でいきなり尋ねてくる内容としてはずれてるよな？

もっと、ロアとか戦いに関する事を聞かれると思っただけに戸惑ってしまう。

「わかんない。なんとなくこの村の空気を感じていたら……モンジに尋ねておきたいなーって思っただのよ」

「なんとなく?」

「そ。なんだろう……なんとなく聞いておきたくなっただけ」

音央は胸に手を当てて、目を伏せた。

何故だろう。

その横顔に見覚えがあるような気がして、胸がドクンと跳ねる。

そう、だ。

俺は……この村みたいな場所で……音央みたいな少女と……。

「……モンジ？」

「ん？ うおっ！」

気が付くと、音央の顔がすぐ側にあつた。

「どうしたのよ、ポーっとして」

「わ、悪い。ポーっとしてたか、俺」

「うん。なんか起きたまま夢でも見てるみたいにぼんやりしてたわよ？」

夢でも見てるみたいに、か。

そうだ。俺はなんとなく、夢で会ったあの少女を思い出していたんだ。

あの夢の中で感じた雰囲気や空気とこの村の雰囲気や空気は……どこか似ている、そんな気がする。

ただの夢のはずなのに、夢じゃないような……そんな気がする。

つといかん、いかん。

ポーっとしてる暇はない。

村人達が迫っている状況で音央を一人にするなんて大失態だ。

「ごめんよ。で、なんだい？」

「脱出の仕方の相談。この村から、ひとまず出るんでしょ？」

「あ、うん。そうだったね」

「あたし達が最初にいた場所に戻ってもダメなのかな？」

「入り口イコール出口、その可能性も考えたけど……スタート地点はあの村の中なんだよなー」

「そうなのよね。あの場所が分かり易いくらい『門』とかだったら良かったのに」

『門』か。

だけどその場合、『門番』とかがいそうで嫌だなー。

普通の門番ならともかく、『五十頭百手の巨人』とかが門番だったら帰還できない無理ゲーになるぞ。

「山の中をこのまま直進すれば……いや、ダメだな。今日、明日ならともかくずっと飲まず食わずだと持たないな」

「詞乃ちゃんをなんとかする……っていうのは無理なのかしら？」

「難しいなあ。あの子、傷つけても傷つけても回復しちゃうからな。普通に戦ってもジリ貧するだけだな、あれは」

人の姿をしているが、彼女は『人喰い村のロア』だ。

つまり『村そのもの』があの子なんだ。

そのロアは、迷い込んだ人を殺し、自分の村に住まわせるというもの。

ある意味、『村に食べられた』という事になるのだろう。

「脱出の方法が分かり易く、ボスを倒せば……っていうもんでもないだろうしね」

「うん。死んじやった人が生き返るなんてありえないしね……」

そのありえない出来事をついさつき『やつちまった』んだが、さすがの俺も村人『全員』を生き返らせるなんて事は出来ない。

全員助ける方法があるとすれば、それこそタイムスリップして、ここに迷い込まないようにするしかない。

もう、決して助からない人々や犠牲者も存在する。

それが『ロア』と戦うという事なんだ。

胸の中に重いものが積み上がったような感覚がして、音央に気づかれないよう、顎を下げて唇を噛む。

『大切な人を守る為に相手を殺す』

一之江はとづくにそれを知っていて、覚悟して戦っている。

俺も時には『殺す』覚悟を持たないといけないのかもな。

そう思つて顔を上げると。

「……モンジ……」

音央が心配そうに俺を見ていて、俺は彼女の手を握り締めていた事に気づいた。

「ごめん。もう大丈夫だ」

「ううん。……一人で考え込まなくていいからね？」

音央のそんな優しさが胸に染みた。

みんなを救いたい。

そう思っているのは音央も同じはずなのに、彼女は俺を気遣ってくれている。

そんな彼女の優しさに甘えながら思う。

—— 少なくとも、何があるかと音央だけはちゃんと帰そうと。

ザザザザザザザザザツ!!?

「チツ！ついに、来たか……！」

長い間休ませる気はない、って事か。

俺達はすぐに反応して、より村から遠ざかろうと川の方を目指そうとしたが……。

「モンジ、あれ！」

だが、川の方からいくつもの懐中電灯の明かりが見えた。

「挟み撃ちか!?」

村の方角からも複数の足音が聞こえる。

前後挟まれる形で、かなりの村人が迫っている。

まさか、一斉に集まってくるなんてな。正直、この数はどうしようもない。

「あははっ、モンジさんっ?」

その声に反応し、上を見上げる。

高い木の枝に、詞乃ちゃんがニコニコ顔を浮かべながら座っていた。

彼女の格好はさつきと同じ赤いワンピースだが先ほど見たときよりもビリビリに切り裂かれていて、痛々しい服になっている。

(……彼女がここにいるという事はもしかして……)

悪い予感が頭の中で過ぎつつが、今は弱みを見せるわけにはいかない。

「詞乃ちゃんか……」

彼女の名前を呟きながら彼女の顔を見る。

どうせ見つかつていて、挟み撃ちされているんだ。逃げ場はないだろうしな。

ならせめて時間を稼ごうと彼女に話しかけようとした。

だが、俺が声をかけるよりも先に詞乃ちゃんが口を開いた。

不本意ながら会話の主導権までもを彼女に取られてしまう形になってしまった。

「モンジさんだけじゃなく、一之江さんもハーフロアだったんだね?」

さつきまで可愛らしく聞こえていた声が、今は何処と無く怖く感じる。

「ああ——名乗りが遅れたね」

本当はまだルーキーで、この世界の戦いについてはよく解っていない、というのをバラすわけにはいかない。

ロアとの戦いは情報戦。

だからこそ、彼女は今ここで、話しかけてきたんだ。

俺がどんなロアなのかを見破る為に。

『『不可能を可能にする男』と『1001番目の百物語』の『主人公』、一文字疾風だ』

『『百物語』の主人公！』

詞乃ちゃんがいきなり声高に繰り返した。ビックリしたのか、ワクワクしてるのかは解らないが、やたらと興奮している。

『百物語』は、一之江が警戒し、キリカが驚いて排除しようとしたほどの存在だ。

知られているのだとしたら、警戒させるには充分なはずだが。

「物語を改変出来る、『不可能を可能にする男』だけじゃなくて、よりによって『百物語』の主人公も持っているなんて!?!」

詞乃ちゃんも興奮して俺を見つめているが、俺ってそんなに凄い存在なのか？

そもそも『主人公』と普通のロアの違いもよく解らないのだが、どう違うんだ。

そんな風に浮かんだ疑問も、今は顔に出ないようにする。

「百物語としては異質だからね。」

存在しないはずの1001番目の百物語。

言うならば『1001番目の百物語の主人公』っていう感じかな？」

「まさか、複数のロアを同時に持つ人がいるなんてね……モンジさん、貴方本当に人間？」

失礼な奴だな。

俺は紛れもなくただの人間だ。

「毎回、色んな人に言われるが俺は普通の人間だよ」

「でも、そっか……それなら、君を倒せば、わたしのロアも強くなるんだね？」

「だろうね。『二つの物語を持つ主人公』を倒したロアとして、より強くなるはずだ」

「そっか……さつきも名乗ったけどわたしは『人喰い村のロア』だよ」
カーニヴァル

「朱井詞乃っていう名前は誰が付けたんだ？」

「付けて貰ったんだよ。『神隠し』さんにね？」

一瞬、俺の背中に激しい寒気が走った。

この子は今、『神隠し』に名付けられたと言った。

つまり『神隠し』は他にいるという俺の仮説は当たっていたんだ。

「あれ、知らなかったんだ？」

意外に情報収集はないんだね？」

「情報収集担当が今はお風呂に入っているからね」

「適当な事を言つて誤魔化そうとしたが……」。

「へえ、情報収集担当がいるんだ？」

「いらん情報を与えてしまったな。」

しかし、詞乃ちゃんの話し方。

最後に語尾を上げる口調は、かなり精神的にくる。いちいち確認されているみたいなきっかけがするからな。

詞乃ちゃんみたいな美少女がやるから許せるが、男がやったら『桜花』で殴ってるな。間違いなく。

「で、モンジさんはこのわたしの村から出られるの？」

「ああ、出られるさ」

ニヤリと笑って音央の手を寄せる。

音央は俺の手を握り返しながら、それでも気丈な視線で頷いてくれた。

「ふうん？」

詞乃ちゃんは俺を見て何かを考えたようだが……クスッと笑って。

「じゃあ、見事に出てみせて、101番目の^{ハンドレッドワン} ^{エネイブル} 荷物さん！」

その言葉と同時に、大量の村人達が一斉に襲いかかってきた。

バシヤバシヤと川を渡ってくる音も背後から響く。

「ど、どうすんの、モンジ??？」

「とりあえず……!」

『待つ』のではなく、用意していたDフォンを操作して、彼女を『呼ぶ』。

「来てくれー！」

瞬間、俺の周囲にぶわっと風が吹き上がって

『もしもし私よ。今貴方の後ろにいるの』

一之江の声が背後から聞こえた。

「っ!?? 誰!??」

音央が俺の後ろにいるであろう彼女を見て驚く。

無理もない。どうやら普段の一之江とは見た目が違うようだからね。

俺は車のバックミラーやカーブミラーで見ただけだからハッキリと見た事はないが。

「わたし、わたし」

「え、一之江さん……?」

「そうそう、一之江ですよ。一之江」

「なんで詐欺っぽく言うのかな」

「はふう、そんな事より、もう戦い疲れたので帰りたいんですが」

背後の一之江が珍しく肩で息をするような語調でそう言ってきた。

「そうだね。とはいえ……」

まだリサ達と合流できていない。

そう告げようとした矢先。

集団の先頭にいた村人達が、突然倒れた。

「っ!? 何が……」

音も無く上空から飛弾した物体が村人達を潰していく。

あれは……石?

村人達に降り注ぐそれは上空から飛来した大小様々な石だった。

頭上を見上げるとそこには蝙蝠、鷲、鳥が飛来していて、その蝙蝠達が飛んで来た方

角からは獣のものと思われる咆哮が聞こえる。

……リサ達も無事なようだ。

「……今です。行きましょう」

背後の一之江がそう言つて俺の背を引っ張った。

途端に身体が自然に動き、襲ってきた村人達の攻撃をすりと回避した。

そのままふわりふわりと、俺と音央の体はまるで空を舞う綿毛のように、彼らの攻撃を回避して進んでいった。

「わっ、わっ、何これ!?」

「人の動きには流れがあります。それを見抜けば、こんな操り人形のような人達の動きはいくらでも操れるという事です」

一之江は凄腕の達人みたいな事を言った。

一之江が促した動きに沿っての移動。

時に引かれ、時に押され、ゆらりゆらりと人の波を流れる水のように動き続ける。

「ははっ、まるで流水のようだな」

名付けるなら『流水』で決まりだな。

一之江が使う技に名前を考えていると。

……気が付いた時には俺達ももう、詞乃ちゃんがいる木の真下に到達していた。

村人達は俺達はまださっきの場所にいると思っっているのか、わらわらとそちらに群がったままだ。

「ああ、上を見たら刺しますよ」

「……見ないよ」

詞乃ちゃんのスカートの中を見る気はない。

大変魅力的だが、今の状況でそんな事をするつもりはない。

いや、今の状況じゃなくてもしないが。

「へえ、面白い技を使うんだね？」

真上から聞こえる詞乃ちゃんの声。

俺は上も後ろも見れないという首固定の状態だ。

「詞乃ちゃんは強いのか？」

「何度ザクザクしてもすぐに治ったので、飽きて逃げてきました」

ああ。だから服がビリビリに切り裂かれているのか。

ブラド並みの回復力だったもんな。詞乃ちゃんの体は。

「そんなわけで逃げますよ」

「ああ、そうだな。」

「だけどうする？　今のままだと追いつかれるよ？」

「この村から脱出出来る手段があれば、な……」

「私の能力で出ればいいでしょう」

ん？

「一之江の能力で出る？」

「キリカさん辺りに電話かければいいんですよ」

「あー、なるほどな」

『どんな所からでもかけた相手の場所に移動する事が出来る能力』。

それが一之江が持つロア、『月隠の呪禁人形』の能力だからな。

「音央達も連れて行けるかな？」

「ええ、大丈夫です」

その言葉を聞いて安心した俺は、一之江の姿を見ないように気をつけながら詞乃ちゃんがいる場所を振り向いて見上げて言う。

「じゃあ、詞乃ちゃん。『また』ね！」

「そう、脱出手段があるんだね？　させないよ？？」

村人達が一斉に迫ってきた。

その速度は先ほどより速い。

「リサー！」

俺がリサの名前を叫ぶと、もの凄く速さで金毛の獣が村人達を薙ぎ払いながら近づいてきた。

リサは俺達の側に来ると、背中に乗せていた子供達を下ろして人間の姿に戻った。

みんなで輪になるように手を繋ぐ。

さつきかなりの距離を稼いだが、村人達との距離はもう百メートルくらいしかない。

「よし、行くぞー！」

俺はDフオンを操作し、キリカに電話をかけた。

操作を終えた後は耳に押し付けて首を倒し、肩と首の間で挟むようにして手を握つ

た。

トウルルルルル……トウルルルル……。

電話を待つ間にも村人は迫っており、一之江は何故かりサの胸をぎゅつと掴んでいる。

「ひゃん!?」 一之江様なんで後ろから胸掴むのですか!?」

「掴みやすかつたのでつい」

「掴みやすかつたなら、いいのかしら?」

驚いた声を上げるリサと、一之江の動きに戸惑いの声を上げる音央。

掴みやすいって……ああ、自分のは掴めないからもしかしてデカイのを掴みたかったのかもな。

「そして、このまま、モンジに抱きついてください。

音央さんも一緒に」

「えっ、ご主人様に!?」

「えっ、い、嫌よ!?」

「臭くてキモいかもしれませんが、なるべくくっついてください」

「臭くもキモくもねえよ!?」

俺の抗議をスルーした一之江は「脱出に必要ですから」とリサと音央に囁いた。

「わ、わかりました。えーい……」

むぎゆ。

リサが抱きついた事により、その豊富な部分が当たって……ヒステリアモードはより強くなった。

更にリサからは甘いメープル系の匂いがしてきた。

意識し始めたなら、一呼吸毎にヒス的な血流メーターが微増し始めた感じがしている。「相変わらずいい匂いがするな、リサは」

「んもう、ご主人様だったら。まだお昼ですよ？」

ですが今まで相手が居らずお辛かったのですね。ついにそのようなお気持ちになつて下さって……リサはリサは嬉しいです……」

なんだかよくわからん事を言っているリサは置いといて。

そのリサの発言を聞いた音央の顔が途端に不機嫌となり、背後からもゾクツと背筋が凍るような冷たい感覚を感じた。

「へ、変態!?? バカー!?? 匂いフエチ」

「……女性は胸の大ききで優れるわけではありません。

それが解らないなんて……そんなに死にたいならぜひ後ろを振り向いてください。

すぐに楽になりますから……」

前門の虎、後門の狼「之江」!!?」

このままでと村人や詞乃ちゃんではなく、音央や一之江に殺されそうだ。

「キリカ、早く出てくれ!!?」

そんな事を言っている間にも村人達は手に各々の武器を持って近づいてきている。距離にしてほんの10メートルほどだ。

「きゃあああ! 迫ってきてるわよ!!?」

「いのでで!!?」 抜ける。抜けてしまううう!!?」

俺に抱きつきながら俺の髪を引っ張る音央。

あまりの力強さに毛根が死滅しそうな勢いだ。

その時。

ようやく電話が繋がった。

『わっ、も、モンジ君? ごめんね今おふ……』

『ごめんキリカ、今からそっちに行くよ!』

『今!!? わ、ちよっ!!』

『想起跳躍です』

一之江が眩いた直後。

俺達の視界は一変し……そこは真っ白な空間になっていた。

第2章 妖精の神隠し

第十二話。『次は……しましうね』

……。

ん？

どこだこころ？

視界は霧のような靄に包まれていて見えにくいだが、何処と無くいい香りがする。

これは……石鹸の匂い？

状況を確認しようとした時。

靄の中から人影が目の前に浮かんできて……。

「げっ」

「おりよっ…」

キリカの綺麗な長い赤髪と、真っ白な肌、豊かに揺れる白い双壁が水滴で濡れているのが目に入って――。

(ま、まさか、こころは???)

「ぎやっ、こころお風呂??？」

「……えっ、お風呂場!?？」

音央とリサの叫び声と驚きの声が聞こえたのと同時に。

「そりゃ」

突然背後から鋭い声が聞こえて、俺の顔面に強烈な痛みがする液体みたいなものをかけられた!

「ぎゃああああ!?」 目が、目が……!!??」

あまりの痛さに床に転がりながら叫んでしまった。

痛さで目は開けられないが、これは……。

シャンプー、か?

匂いからしてシャンプーだがなんでもんを人の顔にかけるんだ!

というか、さっき見たのは、もしかしてキリカの裸なのか!??

脳内で先ほど見た光景をちよつと再生リプレイしてしまう。

キリカの白い肌、豊かな胸、水に濡れる赤くて長い綺麗な髪。

脳内再生をしまい、血流の流れが加速する。

ドクン、ドクン、ドクドクドク……。

偶然とはいえ、キリカの裸を見た事で性的に興奮してしまい、ヒステリアモードが強化されてしまった。

「お、お風呂だから……で、電話に、出るの遅れて、ご、ごめんね？」

キリカのもじもじした声が聞こえたが、俺の目は激痛のせいで全く開く事が出来ないでいる。

しかし、キリカのお風呂姿か……。

「キリカのお風呂姿……それは是非見たいな」

ヒステリアモードの俺はついぼろっと思つた事を口にしてしまった。

それを聞いていた奴がすぐ側にいる事も忘れて……。

「死になさいっ」

ザクウツ、と背中に突き刺さる凶器の感触がした。

「ぐああああっ!!? まだだ! この程度の痛みならまだ耐えられる……」

「もう、モンジ君つたら……つていうか、瑞江ちゃん……」

「まだ死なないようですね」

「何をやってるんですか、ご主人様? そんなに裸が見たいのならリサが……」

「つていうか、ええと、モロに刃物が背中を突き刺しているんだけど……ええと……いい

の?」

「モンジお兄ちゃん、大丈夫なの?」

「音央様、ミーちゃん。大丈夫ですよ、ご主人様なら」

「わはははは!!? モンジ刺さってるー」

「うくん、大丈夫なのかなあ?」

「大丈夫ですよ、ご主人様ですし」

音央やミーちゃんが心配する声が聞こえ、リサは何やら若干失礼な物言いをしているようで、タツくんは俺の背中に突き刺さる凶器を見て笑っている声が聞こえた。

というか、主人に対してなんちゆう物言いだりサの奴。

あれか。キリカの裸見たのを怒ってるのか?

「死なないんだよね、瑞江ちゃんがそういう状態にいる時は」

キリカが一之江の攻撃で俺が死なない訳を音央に語るのを聞きながら思う。

最近、俺の扱いが人間扱いされてねええええ!!?」

いや、自業自得だけど……人間だぞ、俺。

ちなみにキリカがいう、一之江のそういう状態とは、『月隠のメリーズドール』の能力を発動させている時の状態で、以前ちらっと見たボロボロのドレスを纏った金髪少女の人形姿の事だ。

「まあ、そうです。なので音央さん、心配はいりませんよ」

「え、あ、うん、いいのかなあ……?」

良くないぞ。本当は良くないからな。

前世でもそうだったが、こういう事が日常的にあると、きつと『慣れつて怖いね』で終わるからな！

俺は激痛とショックのために薄れていく意識に必死に抵抗しようとするが、どうやら一之江の刺し方は、相手の意識を奪う事にも長けたものようだ。

消えていく思考の中で俺は……。

脱出不可能とされる、『人喰い村カーニヴァルのロア』から抜け出せた事を理解してすっかり安堵したから気絶した。

そういう事にしたのだった。

……ガクリ。

2010年×日×時×分。

不意に目を覚ますと、そこは物静かな和室だった。

畳の匂いが仄かに鼻をくすぐり……なんとなく記憶を刺激する。

この畳の匂いを何処かで嗅いだ事があるような、ないような不思議な感覚がした。

外の光が障子越しに薄く眩しいのを見て、俺はこの場所を思い出した。

布団の中はぬくぬくと暖かく、何時迄も入っていたいがそろそろ出ないと『彼女』に笑われてしまう。

——あの優しい笑顔が見れるなら二度寝もいいかもしれないけどな。

そんな事を思いながら柔らかな微睡みの中に溶けこんでいく。

ここがどこで、今がいつで、自分が誰なのか、なのかは。

そんな事はどうでもいい。

今はただ……。

「もう一度寝てしまうのですか?」

枕元に佇む『彼女』の優しい声をもっと聞いていたい。

彼女とここですつと過ごしていたい、という想いが溢れる。

「それもいいかもしれないね」

自分で呟いた言葉が、まるで誰かの言葉のように頭に響いた。まるで産まれて初めて言葉を発したかのような、そんな感覚に陥った。

「あ…………ふふっ」

「ん？」

俺の声を聞いて、その少女はくすくすと笑ってくれた。

その笑顔を見ているだけで、心が安らぐ。

このまま彼女の笑顔を見つめていたい。

このまま彼女とずっと一緒に…………。

このまま彼女とずっと…………。

ドクン、ドクン、ドクドクドク…………。

恋にも似た感覚を覚えて胸の高まりが増していき、そして何故か…………。

つくん、と胸が痛んだ。

「やっとお話が出来ましたね」

「ん、そうだったけ？」

「よかった。ずっとお話がしたかったです」

彼女のその言葉により、僅かにだが記憶が戻った。

そういえば前に会った時に言っていたな。

『次は……しましょうね』と。

あれは、『次はお話しましょうね』だったのか。

記憶が曖昧でいつ見た夢なのかも定かではなかったが……良かった。

俺も彼女と話があったからね。

こうして見つめ合っているだけで不思議な事に、切ないような、もどかしいような胸の痛みを感じる。

それを払拭しなくなった俺は彼女に話しかけようとして……。

「ふふつ。あんまり動かないでください」

彼女の顔が近い事によく気付いた。

俺は今までずっと彼女に膝枕してもらっていたんだ。

頭の後ろに当たる柔らかな太ももの感触にドキドキしてしまう。

そして不意に、彼女が髪をかきあげたその時……。

何処かで感じた匂いがした。

(この匂い……つい最近、嗅いだ事があるような!!?)

「この匂い……何処かで……」

頭の片隅に描かれる全く、別人のシルエット。

記憶に手を伸ばそうとした時——
辺りの景色が霞み始めた。

「また、眠ってしまうのですね」

その声はどこか寂しそうで、俺の頬を彼女の手が撫でた。

「次は……一緒にご飯を食べましょうね？」

一緒に食事の約束。

彼女と二人だけの秘密の約束。

それはなんていう甘い誘惑だろう。

だけど、なぜかな？

彼女の顔が寂しさと、苦痛に歪んでいるみたいに、そう見えてしまった。

彼女を不安にさせる何かがあるのだろうか？

胸の中に、そんな不安と心残りを抱いたまま。

俺は眠りから覚めるのだった。

2010年6月2日。

俺達が無事に見事『人喰い村』から帰還したその後。

俺は気絶させられたまま、四人の手によって運び出され、キリカの家のリビングで目を覚ました。家の人がいなくてよかつたよ、とキリカに安心されたのを覚えている。

その言葉を聞いた俺も安心した。

ご両親がいる時に娘が入っていたはずの風呂場から男が運び出されていたら通報されても仕方ない状況だからな。

そして、それとは別に困った問題というか、後処理がある。

タツさんとミーちゃんはキリカがしばらく預かってくれる事になったのだが、問題はリサだ。

本人の熱望により、我が家。一文字家というより、俺の側で過ごす事が決まっていた。俺が気絶した後に。俺の知らないうちに。

というか、そういう大切な決め事をする時にこの世界でもはぶかれてしまう俺って……。

まあ、なんとなくそうなる予感はしていたから心構えは出来ていたんだが、リサが我が家で過ごすには超えないといけない高いハードルがあつて。

(両親、とりわけ従姉妹理になんて説明したらいいんだ!!?)

一文字家の実質的な支配者というか、家計を支えているのは理亜なので彼女に説明をして、納得してもらえるか、その説得の仕方により、リサの処遇は決まってしまう。

一文字の両親はほとんど家に帰ってこないからな。

「はふう」

授業終了後、頭を悩ませて溜息を吐いていると。

「おいおい、何辛気臭いキモ顔をしてんだモンジ?」

「モンジっていうな。」

それにお前に話したらお前が殺人犯になり、俺が被害者になっちゃう事を考えていたから話さん」

「なっ……お前……!」

「悪いな、アラン。」

俺はお前より先に大人になっちまったんだ」

嘘ではない。高校生の身でありながら専属のメイドがいる時点でただの子供じゃないからな。

「お、おい、マジか……!!?」

もの凄い狼狽えようだが、からかいすぎたか?

「お前……まさか……!」

「ああ、そのまさかだ!」

まさかかって何がだ?

と思いつながら悪ノリしてやるとアランは……。

「音央たんと何かあつたのか?!」

とんでもない勘違いをしていた。

「昨日の放課後、お前と音央たんが一緒に出かけたのは知っているんだぞ!」

「なんで?」

「3人で出て行くのを見たからだ!」

いや、そこに一之江もいるのを見てんじやねえか!

まあ、アランの妄想が先走っただけなんだろうが。

「まあ、落ち着け」

「落ち着こう」

アランの態度はあっさりしたものだつた。

きつとアランの事だから俺が女の子達と何かあつたなんて思いもしないだろう。

別に何かあるのが嬉しいわけではないがな。

むしろ、ヒス持ちとしては即刻立場をアランと入れ替えて欲しい。

俺は出来れば女子達と関わりあいたくないんだよ。

「つてか、お前。音央も狙つてたのか？」

「フツ……甘いぞモンジ」

「何、得意げになつてるんだよ。あとモンジつて言うな」

「僕は可愛い子はみんな好きだ！　だが、自分から仲良くする勇氣は、無い！」

いつそ清々しいほどのチキンぶりだな、アランよ。

「試しに聞いてみるが、なんでだ？」

可愛い子と話せるのは嬉しいものじゃないのか？」

俺にはよくわからんが、一般的な男子高校生は女子と会話したいと思うものじゃないのか？

「そりゃあ嬉しいき！　だがな……それ以上に、嫌われたらショックだからな」

嫌われたら嫌だから、遠巻きにニヤニヤする。

なるほど、それは正しいピュアボーイの在り方かもな。

「だからお前が仲良くしているのを見ると妬ましいわけだよ」

「理不尽だろう!!？」　キリカとかは多分、お前の事を嫌つたりしないと思うぜ？」

一之江や音央は確かに気が強いからそういう事もありそうだが、キリカに至つてはなさそうな気がする。

そもそも『人を嫌う』という概念を持つているのかすら怪しいからな。

もしキリカが嫌う事があるとしたら……魔女だけに『人間を増悪する』とか、そつちの方向になるだろうしな。

だからアランみたいな奴がセクハラ発言をしたりしたくらいじゃ、嫌ったりしないだろう。

……多分。

「マジか?!?」　もしかしてキリカたんは僕の事を……?」

「面白い人（笑）だつて言つてたぜ」

「よっしやあー!!?」

思いつきり叫んでガッツポーズをしたアラン。

そして、そんなアランを微笑ましく見守るクラスメイト達。今日も俺達のクラスは平和だ。

「モンジ。アランさんとラブラブなのは構いませんが、そろそろ行きますよ」

俺の背後から声がかかった。

振り返ると一之江は冷めた視線で俺達を見つめていた。

「誰と誰がラブラブだ?!?」

「ユー、アンド、ヒー」

「何故英語!?」

「英語の宿題を片付けていたからです」

「そういうえばさつき、そんな宿題が出たような。」

「一之江は授業終了からホームルームにかけて、ずっと宿題をしてたのか。」

「どうりで静かだったはずだな。」

「モンジとラブラブ……待てよ?」

「モンジとラブラブになったら、もしかしてモンジの周りの女の子達とも仲良くなれる。」

「んじゃ……?」

「お前は落ち着け」

「ゴスつとアランの頭に頭突きをお見舞いしてやった。」

「G I I I やシャーロックに通じた俺の必殺技だ。」

「頭突きを食らわしてやったアランは痛みに悶えている。」

「桜花を使わないだけ、俺は優しいと思う。」

「そーいや、キリカは?」

「気になる事があるからと、早々に市立図書館に行きましたよ。」

『モンジ君によろしくね、キャピキャピ』って言ってましたよ」

「キャピキャピ、はお前の演出だろ?」

「実際に言ってみましたて」

「……言い切られると、言つてそんなヤツだから強く言い返せねえな」

「言つてましたて」

二度も言われると本当にキリカが『キャピキャピ』と言つていたような気がしてきた。押し強い発言には用心が必要かもな。

「音央さんは？」

「あいつは……なんだろうな。ちよつと避けられてる気がする」

あの後。キリカの家からあいつの家の前まで送り届けたんだが、その時から様子がおかしかった。

なんとというか、やたらと曖昧な態度をとられるんだ。

話しかけても生返事だったし、色々説明しようとしても『また今度でいいわ』って言われるし。

もしかしたら無理矢理抱きつかせた事とか、根に持つているのかもな。

「流石にあんな目に遭つたばかりだから、落ち着いていないのかもしれないな」

「今はまだ余計な事を他人に話したりしれないと思いますが、後でちゃんと説明する時間を作らないといけませんよ。噂を広められたら大変ですから」

「ああ、そうだな」

あんな大変な事件に巻き込まれたんだ。きちんと説明しないと、音央だって怖いままだろう。

「んじゃ、2人で行くか？」

「ええ。タクシーはもう呼んであります」

「痛だだだだっ……ん？　なんだ、一之江さんモンジと出かけるの？」

復活したアランがそう尋ねてきた。

「ちよつとモンジを山に捨ててに」

「検討を祈ります！」

「死ね」

ゴソツと、再びアランに頭突きを食らわした俺は一之江と一緒に学校を後にした。

第十三話。一之江の秘密

「それじゃ、撮りますよ」

「ああ、向こうに着いたら電話するよ」

日没の時間になり、俺と一之江は一緒に『境山ワンダーパーク』のゲート前に来た。た。

『神隠し』事件の顛末を確認する為に、『人喰い村』に通じるゲートが開くかどうかを確認する。

「行くぞ」

右手側にある機械にチケットを投入し、ゲートが開くのを待つ。

カシヨン、という音と共に目の前のゲートが開く。

「……変わらないな」

ゲートは開いたが、景色はまるで変化なく、不思議なワープ空間も発生しない。

念のため、5回ほど同じ動作を繰り返してみたが、この間のような村の姿が目の前に映るといった現象もない。これは解決したと判断していいのだろうか？

そう疑問に思った俺は隣の一之江に話しかけた。

「解決したって事か？」

「あの村そのものは、まだどこかに残っているでしょうね」

「そういうものなんだな」

「日本各地の、様々な場所から繋がっていると行ってましたから。」

まあ、少なくともこの『境山ワンダーパーク』で発生する『神隠し』は解決したとみて問題ありません」

一之江のその言葉に俺はほっとしたような、『止められない』事が悔しいようななんとも言えない複雑な気分になった。

俺達が無事に帰ってきた事により、詩穂先輩から頼まれた『境山ワンダーパーク』で起きる『神隠し』は確かに解決したのかもしれない。

だが、果たして素直に喜んでいいのだろうか？

今でも、日本の何処かで誰かがあの村に行き、そして、彼女に殺されて……死んだ村人としてあの村で永遠に過ごし続けるのかもしれない。

そう考えると、焦りのようなものが胸に湧いた。

「なんとか出来ないのか？」

「残念ながら、それを考えるのは私ではなく『主人公』の役目です」

一之江のその言葉に……。

「そういう事か、と納得する。」

一之江はあくまで『悪い口ア』を退治するが、それは自分の噂を強める為で、いわば、生きていく為には狩りをしているのと同じ行動だ。

物語を解決していくのは『主人公』の役目で、特権だと言っているんだ。

なんとなくだが、自分が何をしたいのか解ってきた。

「あの子……詞乃ちゃんはずっと怖い奴だったけどさ。キリカみたいに説得する事も出来るんだよね？」

「オバケ萌えですか？」

「そういうわけではないんだが、出来るなら平和的解決が望ましいだろう？」

まあ、キリカの時間が平和だったかと言われればそうでもないんだがな。

「私の率直な感想を述べますと、出来ないでしょう」

「……だよなあ、やつぱり」

『魔女』というのは、人間の心を持っていますからね。お話によつては普通に人々の味方をしたりしています。ですが、詞乃さんは『人喰い村』そのものですから。

『村』が人間の心を持っていたりする、という話は聞きません」

一之江の説明でやつぱりなあ、と思ってしまう。

人の姿をしているからといって、人の心を持っているとは限らないらしい。

「もつとも貴方の話によると、そんな『村』に名前を付けた者がいるようでしたけど」
「……『神隠し』か」

「名前を付けられれば、そこに『人格』が生まれます。貴方お得意のナンパ……トークが出来るかもしれませんので、まあ説得の可能性は……」

「ありそうか？」

「やっぱりないでしょうね」

「だよなあ」

はあー、と溜息を吐いてからガツクリと肩を落とした。

一之江の言い方から察するに、「試してみてもいいけど、責任はもちませんよ」という事だな。

「そういえば、一之江も信じているのか？」

「はい？　自分の美しさをですか？」

「それはわざわざ聞かなくてもお前なら信じてるだろう。」

そうじゃなくて。ほら、詞乃ちゃんの名前が、『神隠し』に付けられたっていう話だ。

あれは詞乃ちゃんが俺達を惑わせる為についたハツタリだったっていう可能性は？」

「無いでしょうね。強いロアほど嘘をつけば自分の存在が危うくなりますから」

「ん？　　そうなのか？」

「そういや、そんな話も前にチラツと言つてたなあ」

「適当な噂が流れれば、信憑性が薄くなつていくでしょう?」

「ああ……確かに」

一つの噂に余計な尾ひれが付き過ぎると、その噂はつまらないものになつて人々の口から語られなくなるな。

「それが『嘘』ともなれば、自分の存在を変革してしまうかもしれないかもしれませんね」

「あくまで噂がベースな存在だけに、嘘をついたら存在そのものが危ういつて事か」

「我々『ハーフロア』だと人間的な意識があるので、調整が効きますけど」

「噂から生まれた『ロア』は、自分のついた嘘に流されるかもしれないんだな」

だから嘘はつけない。強ければ強いほど。

——キリカもそうなんだろうか、なんてぼんやり思う。

あいつも、隠し事はあつてもあんまり嘘はついてない気がするしな。

それにしても、俺はまだまだ無力だな。

今回も一之江の能力があつたからなんとかなつたが、本当にこの調子で残り九十八話? 九十七話かな?

『百物語』を無事に完成させる事が出来るのだろうか?

「おや、珍しいですね、しょんぼりした顔をして」

「いや、せっかく一之江とテーマパークに来たのに、遊ばないで調査だけして帰るつてももつたいいいなー、なんて思ったただけだ」

バレてないよなあ？

内心の焦りや自身に対して感じた憤りを隠しながら軽口を叩いて誤魔化したのが、一之江は俺の心を読むからなあ。

「……なるほど」

一之江は納得したようにワンダーパークの中を見て。

「今度は一緒にキリカさんも連れてくればいいじゃないですか」

口元に笑みを浮かべて、振り向いた。

「おっ？」

「なんですか?」

「ああ、いや。うん」

コイツがキリカと一緒に、なんて言うってくるのは珍しい。

基本一之江はキリカの事も警戒しているの、コイツの口から自然と出たその言葉を聞けてなんだか嬉しく思ってしまった。

ロアをどうこうするだけではない、普通の友達みたいな認識。

そういうのが、一之江の中にも芽生えているのかもしれないな。

「そのニヤけヅラを見てみると、また気絶するくらい突き刺したくなります」

「落ち着け！冗談だ」

「よろしく」

あの時の苦しみを思い出し、ドツと冷や汗が流れた。

そんな俺を他所に、ぷいつ、と振り向いて、ゲートから出てくる一之江。

その仕草はわかりにくかったが、今は……もしかして。

俺の不安を見抜いた一之江なりの優しさだったりするのだろうか。

普段が冷たい態度のせいで忘れそうになるが、何気に一之江は面倒見がいい。

自分の身よりも俺や音央、他人の身を案じてくれる優しさを持つていたりする節もある。

る。

わかりにくい彼女がいい奴なんだ。

……いい奴なだけに、少し不安に思っている事もある。

「なあ、一之江」

「なんですか？」

「一之江ってこう……」

喉から出かかっているその言葉を続けたいが、聞いていい事なのか躊躇ってしまう。

あの村の中で村人を大量に『殺して』確かめた、と一之江は言っていた。

つまり、一之江はそういう時に躊躇いを持たないんだ。
あの時、タツくんやミーちゃん、あるいは村人を相手にした俺はかなり躊躇ってしまっただけだ。

最後まで本気で『殺す覚悟』が持てなかったからだ。

俺が甘すぎるっていうのは解っている。

だけど、一之江は……？

「一般人でも殺すのか、という問いですか？」

俺が言いづらい事を平気で察してくれた一之江は、言いにくい問いに対してズバツと口にしてくれた。

「あ……まあ、そうなんだが」

「殺しますよ。そうしなければ私が消えてしまいますから」

「……そうか。そうだよな」

胸の中にモヤモヤした感覚が広がっていく。目の前の少女がまた遠くなったような、そんな悔しさが俺の中でむくむくと起き上がっていく……。

「……………よし!!??」

「ん??」

「決めた！」

「……何をですか？」

俺は心の中で感じた想いを一之江に語り出す。

「俺はもつと強くなつてだな……」

「……はい」

「誰にも負けないくらいの強い『主人公』になつて」

「なつて？」

「一之江が……」

「『誰も殺さなくても立派に生き続けられるような物語に物語を変えてみせる』とかですか？」

「ああ。悪いな、一之江。今の俺にはこんな台詞しか思いつかないけど、一之江が堂々とお天道様の下を歩いていけるように、お前の物語を俺の物語ロアでア変えてやるよ！」

もう、俺の台詞を取られるのには慣れた。

だったら、いつそ開き直つてやるよ！

一之江に合わせてブルーになるのではなくて、俺はコイツを含めた『俺の物語』として、堂々と胸を張ればいいんだ。そうすればいつか一之江も誰かを殺さなくても生きていける。

俺自身がそういう『物語』になればいい。

そんな決意を新たに胸に抱く俺を一之江はまじまじと見つめていた。

「貴方は真性のバカなのですな」

まじまじと見つめながら溜息まじりにそう告げてきた。

だけど、仄かに感じる嬉しさのようなものを一之江から感じて嬉しくなる。

「知ってたろ？」

「出会った時から知っていました」

一之江はニヤニヤして見つめてしまった俺の顔を見ないように逸らして、そそくさと帰ろうとした。

俺はその背中を追いかけているが、決意を胸に秘めた。

俺は正義の味方にはなれない。

だけどたった一人で戦い続けてきた彼女の味方くらいにはなれるから。

それが最強の物語『月隠のメリーズドール』を『百物語』にした、俺の覚悟だ。

「……まあ」

「ん？」

ぼつりと聞こえるか、聞こえないかというくらいの大きさの声で一之江が呟いた。

「一般人を殺す……覚悟があります」

ほとんど囁き声、聞き取れたのかどうなのか、俺の気のせいかもしれないような小声で、一之江は呟いた。

その内容から察するに……。

「……つていう事は……」

「うっさい、ハゲ」

「ハゲてねえよ!!?」

と、普段通り突っ込みを入れながら思う。

『覚悟はある』という事は。

「なあ、一之江……」

「うっさいツラ」

「地毛だつっの!!?」

「私の噂に関わるので、絶対に他言無用ですよ」

「ああ、解った」

一之江が『殺してない』という情報が出回ってしまうと、それだけで一之江は弱くなってしまうからな。だから、ずっと主張し続けるしかなかったんだ。

『どんな相手であれ、殺している』と。

そんな彼女の『秘密』を打ち明けてもらって、俺はかなり有頂天になっ

て
いた。

第十四話。再会と神隠しの噂……

2010年6月2日。午後19時20分。境山山道。

一之江と境山にある『境山ワンダーパーク』からの帰り道。

俺達は一之江が呼んだタクシーで山道を下っていた。

『人喰い村』が起こす『神隠し』は解決した、という判断を下した俺達だが、何処かモヤモヤを感じたままで、スツキリしない気分で織原さんの運転する車の中で考え事をしていると、突然車が激しく揺れ、急停車した。

「痛てえ……何だ？」

「っ!?」

対面に向かい合うように座っている一之江の方を見ると、彼女は俺の背後、運転手側を真剣な眼差しで見つめていた。

「……やられました」

一之江の呟きが聞こえ、背後を振り返ると、フロントガラスの向こう側、車のエンジンがあるボンネットが黒煙を上げていた。

「故障か……まいったな」

こんな山道で故障してしまうなんてツイてないな。

なんて思いながら一之江の表情を見ると、一之江は真剣な眼差しをしたまま、首を横に振って囁いてきた。

「……解らないんですか？」

何をだ？

という疑問を湧いた俺は当然のように首を横に振った。

すると一之江は小さく溜息を吐いて、「仕方ありませんね……」などと言いながら説明を始めた。

「織原さんが運転する車は、当然のように安全に、安全を重ねた車です。

毎日、織原さんや専属の整備士により点検をされていて安全性を確認されています。

万が一に備えて週一で車検までされている『特別な人しか乗れないタクシー』なのです。

そのタクシーが山道を走っていただけで『偶然』故障なんてするでしょうか？」

「いや、故障なんて……それこそ『何時起きるか解らない』ものだろう？」

どんなに安全性を高めていたって起こる時には起こっちゃうものだろう？」

『絶対』なんていうものなんてないんだからな！」

「ええ、確かにモンジの言う通り、この世に『絶対』なんていうものはほとんどありえませんが。」

「ですが、忘れたのですか……それが世界に『認識』されたら起こらないはずのものが、『絶対に起こる事がある』存在がいるという事を……」

「……ロアか」

歪んだ世界により認識された事で起きる存在。

様々な人の噂や逸話、伝説などによつて存在してしまう歪んだ存在。

「確かにモンジの言う通り、さつき起こった車の故障は偶然かもしれませんが。」

「ですが……その偶然起きた出来事を人々が噂してしまった場合、『自動車を故障させるロア』が発生してしまいます」

「いるのか……そんな存在が」

「はい。自動車ではありませんが飛行機などの機械を狂わせて破壊、或いは墜落させられる存在なら知っています。」

外国。特にイギリスでは有名なロアです」

飛行機などの機械を狂わせて、破壊出来る存在。

そんな事が出来るロアが存在する。

「……それって」

「はい。『破滅の悪戯妖精』です」

「グレムリン……っ？？」

俺がその名前を呟いたその時。

車外から強烈な視線を感じた。

胸ポケットとズボンのポケットに入れておいた、Dフォンが熱くなっていた。

これは……

「来ましたね……」

鋭い目付きを窓ガラスの向こう側、俺達がいるタクシーが止まっている正面。

ちようどガードレールが右に曲がって大きくカーブする辺りにそれはいた。

黒いフードを被り、そのフードはまるでお伽話に出てくる魔法使いが羽織るマントやロープみたいになっていてマントの先はボロボロに引き裂かれている。

背中には黒くて小さな羽根のようなものが見えて、フードの先は尖った耳のような形をしている。

そのフードを被ったヤツの手には刀剣のようなものが握られているが……何故だろう。

その刀剣に、見覚えがある気がしてしまう。

その刀剣……刀は……日本刀やタクティカルナイフのように見えるが違う。

鎬や樋の部分に、筋のような蛍光ブルーの発光が見られ、ただの刃物ではない感じがする。

そう……前世での俺の妹が使っていたあの武器のようにも見える。

刀剣だけではない。

初めて会うはずなのに……俺はこの子をよく知っているような気がするのだ。

知っている……知識ではなく、血が知っている。そんな感じがする。

(いや、待て……ありえん。ありえないだろ!?)

そんな馬鹿な事が……)

だが、俺の記憶は、血筋は知っている。知ってしまったているんだ。

近い——この子と俺は近い。

(アイツが……アイツがこの世界にいるはずがない!)

いるはずがないんだ……)

いないはずの人物。

目の前に佇むその人物を見つめていると、一之江が先に動いていた。

「……すみません、モンジ」

信じられない事に、一之江の小さな口から謝罪の言葉が漏れた。

「え?」

と尋ね返す間もなく、俺の背後の座席に座っていた一之江の姿が突然消えた。

慌てて、『破滅の悪戯妖精』の方を振り向いたその時には……一之江の手に一本のナイフが握られていて、一之江はグレムリンの、そいつの前にいた。

「一之江ッ!?」

静止する暇もなかった。

一瞬で一之江はナイフをソイツの胸に突き刺そうとして。

「やっ、止め……」

止めろ、という言葉が終わる前に……。

その子の姿が忽然と消えた。

まるで、何もない空間の中に引きずり込まれたかのように忽然と……。

「えっ……」

「っ……モンジ、後ろ!?」

一之江の声が聞こえた、その時。

俺は背後から誰かに抱きつかれた。

ぶわあと、広がるキャラメル……の匂い。

驚いた俺は背後を振り返って思わず固まってしまふ。

抱きついた拍子に、或いは一之江に斬りかかれた拍子にフードが取れたのか、その子

の素顔が現れたからだ。

その素顔は

息を吞んでしまうほどの、美少女だった。

パツと見た感じでは、見た目は俺が知るその子よりも1、2歳年上の15、16才くらいのような印象で高校生くらいに見える。

栗色のボブカットの髪、自信に満ちる目はパツチリとしていて、瞳は青みがかった深海色で、鼻筋はスラツとしていて唇はピンク色だ。

胸は重巡洋艦級から成長していて、戦艦級になっている。

全体的に……俺が知る彼女よりも少しだけ成長している。

「会いたかったよ、お兄ちゃん」

そう。

何故だか、俺の前世の妹。

遠山金女かなめが目の前にいた。

2010年6月2日。午後8時。一文字家。

今、俺の目の前にはありえない光景が広がっている。

何故だか帰った直後から不機嫌な理亜。

顔は笑っているが目が笑っていないリサ。

不機嫌な態度を隠す気がまるでないかなめ。

……そして、何故だか俺の家のソファでアイスを啜えて寛いでいるアリサ。

……何だこれ？

……よし、まずは状況を整理してみよう。

今日、俺は一之江と境山に行つて『境山ワンダーパーク』で『神隠し』が起きないか、確認しに行つた。

ここまではいい。

それで帰り道に、突然乗っていた車が故障して、Dフォンが赤く光つたかと思つたら『破滅の悪戯妖精』の格好をしたかなめに抱きつかれて、一之江に白い目で見られて、一旦、キリカの家に寄つたらリサとかなめが何やら話して仲良くなつて……。

で、家に帰つて来たら何故だか女子達みんな怒り出したわけで……。

……ダメだ、わからん。

解るわけないだろ!!?

なんでキレてんだよ、この3人は。

「あー、お前ら……」

「だから言った通りです。」

兄さんは疲れていてゆっくりしたがっているんです。

兄さんの疲れを癒せるのは長い間、兄さんと一緒に暮らした私以外にいません。

ですから明日からも兄さんのお世話は私がします！」

「いえいえ、遠……一文字様のお世話をするのはメイドである私の担当です。」

おはようからおやすみまでご主人様専属の使用人であるリサがします」

「2人とも何、勝手な事言ってるの？」

お兄ちゃんのお世話をするのは妹の私に決まってるんじゃない。妹こそ最強なんだから黙って引き下がらなよ？ 非合理的イ」

「わ、私も妹です」

「はあ？ ただの従姉妹が真の妹に勝てるわけじゃないじゃん。」

血が繋がっている私こそ、最強の妹なんだから」

「いえ、やはりここは年上が一番かと。」

私の一族は代々『便利な女』を極めた一族ですので、ご主人様にご奉仕するのならやはり私こそ……」

「絶対、駄目ですー!!?」

「野良犬は引つ込んでろー!!?」

お兄ちゃんは私だけのお兄ちゃんなんだー」

……何だこれ？

この日の争いは深夜まで及んだ。

この間、色々な話し合いが彼女達の間であったようだが、途中で寝ちまった俺はその内容を詳しく教えてもらう事は出来なかった。

翌朝には……『兄さんはまだ知らなくていい事です。普通に日常を送れるように私がきちんと身の回りのお世話しますから』と理亜に言われ、『お兄ちゃんは私が守るから知らなくても問題ないよ？大丈夫！』お兄ちゃんの周りに群がるハイエナは私が退治するから……だから私だけを見て？』とかなめが言い、『ご主人様、ご自宅の家事などは私が担当しますからねっ！ご主人様が気持ちよく過ごせるように最適な環境を作ってみせますから』とリサが言ってきた。

どうやら3人の中で役割分担が出来たようだ。

理亜が俺の身の回りの世話係りで、かなめが護衛役、リサが家事担当のようだが……なんだろう。

なんとなく、不安になるな。

特になめが……。

かなめにどうやってこの世界に来たのか、と聞いたがはぐらかされた。

『今はまだ言えない』の一点張りだった。

一之江の攻撃を回避した手段についても『そういうロアだから……』というだけで、詳しくは教えてくれなかった。

と、まあ。こんな感じで日常を過ごした俺はその翌日。

俺は1人で生徒会室にいた。

2010年6月3日。夜坂学園生徒会室。

音央や一之江と一緒に『富士蔵村』に入ってから、2日が過ぎた。

「念のため昨日も、日没と同時に入りまくっても何もありませんでした」

と昨日、一之江と確認した内容を、詩穂先輩に報告した。

「そっかー、良かったあ……モンジくんやみずみずがいなくなっちゃったら、と思うともう、夜も眠れなかったよー、ぷはあー」

詩穂先輩は胸に手を当てて、安堵の息を吐いた。

豊か過ぎるその胸に手を当てた先輩を見てしまったせいで……また、血流が昂つてき

た。

（くっ、あれは先輩じゃない。先輩じゃない。）

ジャガイモ、ジャガイモだ。断じて先輩の胸じゃねええええ!!?）

ヒステリアモードを防ぐため、先輩をジャガイモと思つて会話を続ける。

「既に新聞部には手配済みです。翌日か、翌々日には校内に張り出されるはずですよ」

「お、ありがとうね、音央ちゃん」

「いえ。モンジ達のおかげですから」

音央は先輩にペコツと、頭を下げてから告げた。

因みに一之江は欠席だ。彼奴が頻繁に休むのはいつもの事で慣れているが、昨日あんな事があつたせいで、その原因が俺やかなめにあるのではないかと不安になつてしまふ。

「ふうー……安心するとかくつたりするねえ」

べたー、と詩穂先輩が机に突つ伏した。

そんなちよつとした仕草や様子も可愛らしくて、思わず見惚れてしまふ。

「やはり可愛い先輩の姿を見ると、とても安心するね！

先輩の姿を切り取つて部屋に飾りたくなつてきたよ」

かかりは甘い、若干ヒステリアモードになつてしまつていた俺は思わずそんな事を

言ってしまった。

「ふんっ、変態っぽいわよモンジ」

「あ、わ、悪い」

どうも最近の音央は機嫌が悪い。

無事に助かって、キリカの家（の浴室）から出た直後からだろうか。

普段からツンツンした性格だったが、最近はさらにキツくなっていた。

「んもう、バカっ」

音央は腕を組んだまま、俺と視線を合わせようとしない。

なんとなくタイミングが掴めないせいもあって、まだ色々な説明が出来ていないのだが……やっぱりまだ様子を見た方がいいのだろうか？

「それにしても、本当に良かったよモンジくんが無事で」

詩穂先輩はそう言って、俺を見つめてきた。

俺も先輩の顔を見つめ返した。

「詩穂先輩の為なら黄泉の国からでも戻ってきますよ」

「あははっ！　今のモンジくんなら出来るかもねっ！

音央ちゃんも無事で良かったよ？」

「え、あ……ありがとうございます、会長」

自分も言われるとは思ってなかったのか、音央は少し動揺しながら先輩を見つめた。「えへへ。はふうー……もう、最近怖い事が多いから疲れちゃって……」

「怖い事が多い？」

「そうなんですか、会長？」

一つの事件が解決したから安心してはいたが、詩穂先輩は他にも何か情報を知っているのだろうか？

昨夜の『破滅の悪戯妖精』の事も……かなめが隠す能力についての噂も……。

「うん。いっぱいあるけど今流行ってるのは、『破滅の悪戯妖精』と『夜霞の隙間女』。

それに……『神隠し』だね」

「『神隠し』……」

俺と音央は顔を見合わせた。

『破滅の悪戯妖精』や『隙間女』も気にならないと言えば嘘になるが、それよりも『神隠し』の噂があるという事に驚いた。

確かに、『富士蔵村の口ア』である『人喰い村』の詩乃ちゃんは『神隠し』に名付けられたと言っていた。

だが、こうも早くまた噂になるなんて……。

そう思っていると、詩穂先輩が続けた言葉に俺はさらに衝撃を受ける事になった。

「夢の中に、女の子が出るんだって」

「っー！」

心臓が早鐘を打つ。

『夢の中に出る女の子』。

それは、俺が今まさに体験しているもので。

「で、その子の夢を何度か見ているうちに、その女の子が、彼女のいる世界に連れ去って
いっちゃって、二度と戻って来ないー、みたいな」

「……………」

詩穂先輩の声を聞きながら、俺は夢の中の記憶を断片的に思い出していた。

とても安らいだ気持ちになって。

このままそこにいたい気分になって。

そして……………。

「連れ去られちゃうと、どうなるんですか?」

記憶を頼りに思い出していると……………。

音央が恐る恐る、と言った声で詩穂先輩に尋ねていた。

詩穂先輩は眉を寄せて、ちよつと不安そうに呟いた。

「みんなの記憶から消えて、綺麗サッパリいなくなるみたいなの」

第十五話。妖精の神隠し 《チエンジリング》の噂

2010年6月3日。午後17時半。夜坂学園校舎内。

生徒会室を出た俺と音央は夕暮れに染まる廊下を歩いてた。

赤紫に色づく校舎内は何処か幻想的で、夕陽に照らされた音央の薄茶色の髪は、金色に輝いていて……とても綺麗だった。

と、そんな風に音央を凝視していると音央が何やら言いつらそうに聞いてきた。

「モンジ、さあ……」

「うん？」

「あんたが見る夢つてもしかして……えーと」

言いつらそうに尋ねてくる音央の姿を見ていると、そんなしおらしい姿が、夢の中で出会った少女と重なった。

「……和室で、女と二人つきりでいる、夢？」

その音央の言葉を聞いた俺は正直、ドキっとした。

夢に女の子が出てきた、というのは話したが、俺は音央に夢の中の場所が和室であるという話は一度もしていないはずだ。

それなのに、音央は俺が見た夢が和室にいた夢という事を知っている。

これはどういう事だ!?!?

「そ、そうだ、が……」

心臓が早鐘を打つ。

「……」飯、食べた?」

続けて尋ねられた言葉に驚き、喉から心臓が飛び出るんじゃないかと思つたくらい驚いた。

同時に夢の中で出会つたあの少女が語つた言葉を思い出す。

『次は……一緒にご飯を食べましょうね?』

「次、食べよう、つて言われた、よ」

「そう、まだ2回目なのね」

そう、静かな口調で音央は呟いた。

その呟きを聞いた俺は混乱した。

ちよつと待て!?!?

俺は確かに、音央に夢の話はしたが、あれは『夢の中に清楚な女の子が出てくる』つだけのものだったはずだ。

和室つて事は話してないし、二度見たという事は、キリカにもまだ話してない。

なのに……。

「音央、君は……何か知ってるのか？」

音央は……。

中学時代からの一文字疾風の友人で、一緒に遊んだり、笑ったり、時には喧嘩したりした、仲だ。

それなのに何故か今は、まるで全然別の知らない人みたいな雰囲気を持って、夕暮れの廊下に佇んで、静かに俺を見つめていた。

数秒間俺を見つめていた音央は……。

「そっか……ごめん、あたし、先に帰るね」

と、言うが早いか、その二つに結った髪を翻して、廊下を走りだした。

「え、おいっ！」

追いかけるべきか、追いかけない方がいいのか……悩むがどうしてだろうか？

音央の……俺を見つめる、その瞳には『哀しさ』や『悔しさ』が映っていたような気がした。

追いかける、追いかけない。

どちらの選択を選べば正解なんだろうか？

「なるほど、ね。追わない方がいいよ」

躊躇う俺の背後から突然、声が聞こえて、追いかける選択肢は消えた。

「キリカ……」

「色々調べたの。お話しどうか、モンジ君？」

振り返った先にいたのは、やっぱり鮮やかに色づいた赤い髪の色をした美少女がいて。

なんとなく……。

音央が儚い存在なら、キリカは強い存在だな、と思つてしまった。

2010年6月3日。午後18時。屋上。

キリカに連れられてやってきたのは屋上だった。

屋上から見回した夕焼けに照らされた景色は遠くまで見渡せる街が赤く色づいていて、本当に綺麗だと思えるほどだった。

と、同時に。

——黄昏が綺麗な日は、切ない気持ちにもなる。

理由はよく解らないが、郷愁きょうしゅうでも刺激されているのかもしれない。

そんな事を感じていると。

「まず、モンジ君の方はどんな感じ？」

屋上を囲むように設置されている柵に手をつきながら、キリカが風に吹かれた長い赤髪を押さえながら聞いてきた。

風に吹かれて、髪が靡くその横顔は……年相応以上に美しい気がして、ドキドキしてしまうほどだった。

(やつぱり……綺麗だな。キリカも……)

「うん？　なあに？　まじまじと見つめて」

「いや、ごめん。あまりにも綺麗だから見惚れてたよ」

「あはっ！　先輩から乗り換えちゃう？」

「ははっ、どちらも魅力的だからそれなら両方かな？」

冗談めかして、そう、俺が言うのと。

「モンジ君は誘惑に弱いにやー」

クスクスと笑うキリカ。彼女の態度はいつも通りで安心してしまふ。

何故だか知らないがいつも通りのその態度を見ていると妙に安心してしまふ。

(何故だ？　何故、いつも通りの態度がこんなに安心できるんだ……)

どうしていつも通りが嬉しいのだろう、と考えたら。

……いつも通りじゃない友人がいたせいで、キリカのいつも通りな態度が安心でき

た、という事に気づいてしまった。

音央の、あの思いつめたような表情がやっぱり気になって仕方ない。

(音央、どうしてお前は……)

「焦つてもダメだよモンジ君」

そんな俺の心を、キリカはキリカなりに気遣い、読んでくれた。

一之江とは違う。キリカの場合『人間観察』による気遣いだ。

それが、つまり彼女の優しさという形になっている。

「ん……そうだね。今、音央を追いかけても混乱させるだけか」

「そういう事。モンジ君つてば、やっぱり女の子には優しいね？」

「苦しそうだったんだ。苦しそうな顔をしてたんだ。だから、安心させる要素くらいは

仕入れておきたい」

「ん……残念ながら、もつと辛い現実になっちゃうかもよ？」

「うん。それならそれでいいさ。それはそれで、気を使いやすいからね」

「あはっ、そういうもんなんだね」

そうやって頷くキリカは、俺の判断にダメ出しなんてしてこない。

いつだって『俺』の判断を信じて、それを肯定してくれるんだ。

人をのせるのが上手いんだ。キリカは。

「あー、そういうもんって事で……。悪魔や魔女の方が優しい、というのは本当かもしれないな、やつぱり。」

それより、俺の方は、2度目の夢を見たよ」

「ああ、こないだ話してくれた夢だね。進展した？ エッチとかした？」

「ははっ……してもキリカには教えないな。」

っていうか、キリカみたいな可愛い子がそんな事言っちゃいけないよ？」

「えー、可愛い子だからこそエッチな話が好きかもしれないじゃない」

流し目をしたキリカは俺の方に近寄ってきた。

(マズイ……)

ベッドもソファーもない屋外だから油断していた。

俺はキリカの正体が『魔女』という事を解っているからそっちの警戒はしていた。

が、こつち系の警戒を、怠っていた。そこに隙ができた。

いや、全部計算ずくだったんだらう。このしたたかさ、まさに理子並みだ。

「あはっ、体は正直だねえ」

気づいた時には、俺の体は俺自身の意思とは別に、キリカに近づいていた。

まるで俺とは別の意思が身体を動かしているかのように自然と動いていた。

(クソ、油断していた……。これは、アイツの……)

どうする？　　どうしたらいい？

いや、方法ならある。

こういう時には傷つけないよう――言葉で、なんとかしよう。

きつとできる。こういう時の『対処法』は、前世でも何度か使っていたしな。

とはいえ、ここまで踏み込まれると、五分五分の賭けだぞ。

キリカの誘惑に負けたら……その先は考えたくないな。

「キリカには誘惑されっぱなしだからね！理性が勝っているのが奇跡だよ」

「ストレートに言われると流石に照れるなあ、ありがとうね、モンジ君」

「いいよ。そう思ったのは本当だからね！」

「あはっ、嬉しいなー。モンジ君になら何されてもいいよ？」

「だがもう、この橋を渡るしかない。行くぞ……キリカ！」

「ふ、なら質問させてくれ！」

「キリカは俺にどんな事をされたんだ？」

「えっ……？　　そ、それは……いや……そんなの……言えないよ」

よし、思いつきり真つ赤になつて動揺しながら顔を伏せて、言葉を詰まらせてくれた。

「何だい？　　言つてごらん。キリカ？　　さあ……キリカ」

今、使つたこの技は以前アリアや菊代に使つた事のある、『啄木』。

言いづらい言葉が回答になっていく質問を用意し（即答されてしまえばアウトだが、一度答えられなければならないばこつちの勝ちだ！）

恥心を煽りに煽る。そして答えさせない手法だ。

勝率を上げる為、昔、白雪や以前、詩穂先輩に使った『呼蕩』も加えた。

ようは催眠術だからな、アレは。

「……それはその、も、モンジ君が考えてよ……そしたら私は、なんでも……」

「ははっ、冗談だ！　それより、夢の中の子とは平凡に、仲良くお話ししてだな」

真つ赤になって動揺するキリカの言葉を遮るように、『話題逸らし』^{スラッシュキューリー}を使い、話題を変

えた。

「う、うん」

「それで、『次は一緒に御飯を食べましょう』って約束したよ」

「ふむふむ、なるほどね」

キリカは直ぐに真面目な顔付きに戻ると、ポケットから自分のDフォンを取り出して、ぽちぽちと操作をした。

「はい、モンジ君」

そして、俺にそこに表示されたページを見せてきた。

「って、そんな他人にほいほい見せていいのか？」

「Dフォンの画面って、ロアか、ハーフロアくらいしか見る事が出来ないからね」

「あ、そういうものなのか」

「一般人が見ちやったら大変でしょ？」

「そうだね。しかし、見えるのが当たり前だと感動とかはしないものだなあ、こういうのは……」

キリカの説明に納得してしまった。

幽霊が見える、見えないでテレビ番組が出来るほど大騒ぎするが、世の中にいる見える人。

俗に言う、『霊能者』の人達は当たり前のように見えているから、あの番組でドキドキしたりハラハラしたり、『なーんだヤラセかー』とガツカリしたり出来ない。

『見える』側になった俺はそういうった楽しみ方はもう出来ないんだな。

見える側の憂鬱感を感じつつ、俺はキリカのDフォンの画面を見た。

そこには……。

『^{チェンジリング}妖精の神隠し』

妖精に魅入られた者は、少女の夢を見る。

一度目は会うだけ。

二度目は食事に誘われる。

三度目は手土産を渡される。

四度目はもう帰れない。

帰れなくなった人は忘れられる。

「……………これは」

それは、まさに俺が見ている夢そのものだった。

「ピンポイントっぽいね？」

「ああ、しかしあの女の子は妖精さんだったんだね。どうりで美少女だと思ったよ」

「あははっ、もう、モンジ君つてば、さりげなく、私の知らないところで、『都市伝説』に巻き込まれてたんだね？」

そう言いながらキリカはしようがないなあ、と眉を下げた。

「これが、詩穂先輩が話していた方の『神隠し』かあ……」

「こっちは確実にいるだろうね、本体が」

本体。

『人喰い村のロア』である詞乃ちゃんに名前を付けた張本人、か……。

「『人喰い村』の『朱井詞乃』ちゃんは、なんで名前を付けられたのかな？」

「うーん……そうだなあ……」

人差し指を口に当てながらキリカは考え込んだ。

「一番解り易く考えるとしたら、隠れ蓑だね」

「隠れ……蓑？」

「どういう意味だ？」

「ほら。『人喰い村』も、『神隠し』って言われてたでしょ？」

「ああ、うんうん」

確かに最初、俺達は『人喰い村』イコール『神隠し』だと思っていた。

『村』をなんとかすれば、『神隠し』も終わると思っていたんだ。

だけど実際は、村の話がなくなっても『神隠し』は残っていた。

「私達ロアも、個人の『名前』がつくと人格が生まれるの。単なる『魔女』だと、漠然とするけど『魔女喰いの魔女・ニトウレスト』とかだと、なんだか凄そうでしょ？」

「確かに……なんか凄そうだね」

「カーニヴァル『人喰い村』の存在に、『朱井詩乃』っていう名前がついた瞬間から……自動的だった村

は、詩乃の意思によって動くようになった」

「それまでは、自然発生していた『人喰い村』が、詞乃ちゃんの意味で発生したりしなかつ

たりするようになった、っていう事か？」

「そ。独立して、自分で考えて、犠牲者を取り込んで、消えないように、ずっと存在出来るように、考えるようになるの」

キリカのその説明に驚愕した。

単に『名前』を付けるだけでそこまで出来るようになってしまう。

それなら。

……この町、『夜霞市』やがすみで発生している『神隠し』がイコール『境山ワンダーパークのもの』という認識になるのが当然で。夢を見ている人が遇う『神隠し』はそれほど話題に上らなくなる。

現に先輩も、ワンダーパークの方を最初に怖がっていた。

「だけど、ロアって人の噂に立たなくなると弱くなるんじゃないかなかったかな？」

「普通ならそうなんだけど、何せ『神隠し』だからね。『神隠し』そのものは有名だから」「ああ、なるほどね。『魔女』と一緒に、人々が噂しなくなるっていう事がないからか」「そ。人類の生活から『行方不明事件』がなくならない限りはね」

行方不明者がいなくなれば『神隠し』は起こらない、かあ。

それは……なくならないな……。

毎年、年間何十万人という人が行方不明扱いされる世の中だからな。

……そんな事件がある限り、『神隠し』はなくならない。

だから『妖精の神隠し』は『人喰い村』の方が目立っても消える事はないわけか。

「しかもロアの性質上、噂でしか広がらないんだよね、これが」

「うん？　ああ、『忘れられちゃう』からか、この『神隠し』に遭った人は」

「そういう事。実際の犠牲者っていうのは絶対に発見出来ないの。私もちよくちよく使う手だけど、記憶操作するのは本当に便利だからね」

本物の『魔女』であるキリカが言うと言葉だと思った。

「キリカも、確か記憶を消すんだったよね？」

「うーん、私が食べちゃたロアは確かにみんなの記憶から消えるけど……私のそれとは意味が違うっぽいね」

「そうなのか？」

「うん。私の食べた子達は私の中で生きているからね。モンジ君とはやり方は違うけど、えいつ！　って召喚すると出てきてくれたりするんだよ」

「……流石は『魔女』だね。そんな能力まであるのか、キリカには」

「えへへ、凄いです？」

「凄いです」

キリカの頭をナデナデしながら思う。

ロアを召喚して戦う。

俺だけが持つ能力だと思っていたが、他のロアにも似たような能力を持つ奴らがいるわけだ。

……果たして俺は今のままで、戦えるのか？

「あれ？　　召喚出来るって事は……実質消えてないって事だよな。キリカのは」

「存在は継続しているけど、世界からは存在を把握されていない。つまり『私』の力の一部になった、という認識なんだろうね」

「……流石は『魔女』だな。」

それっていつでも呼び出せるのかな？」

「うん。困ったらいつでも言ってるねっ」

「いいのか？」

「その代わり、代償を貰うけど」

片目を閉じて、ビツ、と人差し指を向けてきながらキリカは言った。

代償。その言葉はかなり重く聞こえた。

第十六話。魔女の代償

「代償……どんなものかな？」

「支払う代償は大きければ大きいほど、魔術の力は上がるの」

「ああ、ようはゲームでいう、MPとかみたいな術を発動させる為に使う魔力みたいなもののなのか？」

「うん。この間の『霧』の魔術を使う場合ならそうだね……」

「ああ……キリカと戦った日の朝に出てたヤツだね」

あの朝の霧はやつぱりキリカが造り出していたのか。

どうりでいつもより深いと思つたよ……。

魔術で自然の法則を無視して『霧』を出せるとか、流石は『魔女』だね。

あの朝の光景を思い出していると、キリカが告げた。

「例えば……あの霧を1時間発生させるのに必要な代償は、一週間分の味覚不全……とかね」

「なんだって!?？」

キリカが告げたその代償の大きさに驚きの声を上げてしまった。

キリカは甘い物が大好きだ。

あの日から数日後には皆んなでケーキバイキングにも行った。

他にも、クラスの友人達と食べ歩いていた姿を見かけていたが……言われなければ味覚不全なんて思えないくらいいつも通り、美味しそうに食べていた。

「すっごく美味しいに違いないものを、全く味わえない。しかも、それを一切悟られないように楽しく過ごす……みたいな代償だよ」

「キツい代償だな……それは」

味を感じないのはキツイ。

感じないだけではなく、周りの人に悟られてないように『演技』までしないとイケないんだ。

本当は美味しくないのに、美味しそうに。しかも楽しく過ごし、一緒にいる人には悟られてはいけない。

そんな代償をキリカはさりげなく支払っていた。

女の子は演技上手、とはキリカが言っていた言葉だが、全く俺にそんな気配を感じさせずに楽しんでいたのなら、それは、なんというか……。

「ごめんよ。気づいてあげられな……って、そうか。気づかれたら代償にならないのか」

「こっちのモンジ君ならそう言ってくれると解ってたから余計にね」

こっち、とはどっちの俺の事を指しているのか、気になるが。

それよりも重要なのはキリカの代償の方だ。今までのキリカの話聞いて解ったが。

キリカは代償を……隠さなくちゃいけない。何故なら、それを自分で設定したからだ。

わざと、苦しい道、理に反する代償を支払う。

それがキリカの魔術なんだろう。

他にも理由がありそうだが。

「キリカ、もっと詳しく聞かせてくれるかな？」

「うん、いいよ。後はそうだね……使い魔のあの子達には、定期的に血をあげるの。たまに貧血っぽいのはそのせいなんだよね」

キリカのその発言により、キリカと戦ったあの時に、キリカの血に群がっていた蟲達を思い出す。

そういえば、大量に群がっていたな。

「結構あげてるのかな？」

「普通の人の献血の2倍くらいかな？」

普通の人の献血が一回で400mmℓだから……キリカの場合、一回で800mmℓくらいか？

年間だと1200mmまでしか献血できないから一回蟲達に献血しただけでかなりの血液を失う事になるんだな。

『魔女』が支払う代償って大きいんだな。

「魔女とはいえ、辛くないか？」

「あは、ありがと、モンジ君。辛くないと、魔女じゃないんだよ」

『魔女』だからこそ、辛くても『代償』を支払う、か……。

魔女の大変さを知ってしまったな。

一見なんでも出来るように見えて、その実、支払うのが大変。

だけど『強い魔女』として君臨する為には、それらを余裕で支払っているフリをしないとイケないわけで。

……ロアっていいのは、自分も他人も騙しながら生きていかないとイケない存在なのかもな。

そんなキリカの代償を聞いた俺は、キリカの魔術が万能だからといって、あんまりキリカを頼る事はしないようにしよう、と心に誓った。

「他のロアもそういう辛い代償とかあるのかな？」

「ない場合がほとんどかな。完全に『物語』や『伝説』をなぞっているからこそ、特殊な力を使えるのがロア達なの」

「なるほどなあ。それじゃあ、キリカから見たら他のロアは結構チートに見えるのかな？」

『魔女』はこの国に行っても大抵通じる存在だが、その実、結構弱点多くあって、苦労するようだ。『魔女』以外の他のロアは、大抵、代償もなく能力が使えるようなので『魔女』であるキリカからしたら結構不憫なのかもしれないな。『魔女』というロアは。

「う〜ん……他の子は他の子で、ちゃんと手順を踏んで、きちんと名前を残さないと消えちゃうからその辺りが大変そうだけど。私はその点、いつ力を使うのも自由だし、何を食べるのも自由だし。消える確率もほとんどないからね」

「なるほどね……キリカなら普通にしてるだけでも、可愛い『小悪魔』っ子とか噂されるからね」

「あはっ、ありがとう」

キリカの嬉しそうな笑顔を見ると心が和むな。

やはり、今後も俺や一之江が現地調査で、キリカが情報担当の癒しキャラ役の方がいいのかもしれないな？

「つて、話大分逸れたね」

「そうだね。まあ、記憶の操作そのものはそこまで難しくないんだけど」

「そうなのか？」

「うん。『そういう逸話』があればいいだけだから。例えば『魔女』の場合、『いつの間にか貴方の隣にいて、当たり前のように生活しているかも?』みたいなお話あるじゃない」
「ああ、聞くといかにもそれっぽいな」

「私の記憶操作はそれを利用したものだから、ある意味ロアにしてみるとベタな力かな」
「記憶を操る、なんて万能な力っぽいけど、キリカみたいなロアからすると別に凄い事ではないみたいだ。」

「今回の場合、厄介だな、とは思うけどね」

「やっぱりそうなのかな?」

「本当ならモンジ君には戦ってほしくなかったんだけどね『神隠し』」

「確かに、戦いた……くはないなあ」

『神隠し』とされてるが、あの夢は。

とても優しくくて、穏やかで、気持ち良かった夢だからな。

「戦っても、勝てないと思うもん。『神隠し』っていうのは昔から『いる』と思われている、妖怪とか伝説レベルに近いロア。『魔女』みたいに弱点がいつぱいあるようなモノじゃないものね」

『魔女』であるキリカが勝てないと言い切るからには、勝率はかなり低いんだろう。

勝てないと言い切ったキリカは、俺の為に頭をひねって対策を考えてくれている。

『神隠しのロア』が確実に存在しているから……先に倒す方法かあ……うーん」
キリカが頭を悩ませるのも無理はない。

「一之江の時みたいになんとかする方法は？」

『神隠し』は攻略出来ないんだよ。解決方法っていうのがないから」

「く、口説くとか」

「あははっ！ モンジ君なら出来るかもしれないけど。でも、夢の中のモンジ君はそれが幸せになっているんだよね？ しかも、自分の事を忘れている状態で」

「うぐつ、確かに……」

「口説けるかもしれないけど……『この世界』の事を忘れているモンジ君が、果たして『この世界』に連れて帰ってこれるかな？」

そう。忘れていたら、そもそも戻りたいとも思えない。

思えないから、知らない世界に回帰したいなんて思うわけがないんだ。

「うーん、どうしたらいいのかな？」

「まあ、その鍵が彼女なのかもしれないね」

「うん？」

意味有りげに呟いたキリカは風になびく髪を押さえながら、俺の顔をまじまじと見つめた。

……何かを知っているという感じに。

そして、その時、俺の脳内に浮かんだのは。

今日いきなり去ってしまった少女の姿で。

「……そう、だな」

音央は何かを知っている。

そう思えてならなかった。

2010年6月3日。午後10時。一文字家、疾風の部屋にて。

帰宅して夕飯や風呂を終えた俺はベッドに横になって天井を見上げていた。

思い起こすのは、音央の事ばかりだ。

『ごめん、あたし、先に帰るね』

悲しそうな、辛そうな顔をして去っていった音央。

一文字の中学時代からの友人で、いつも元気な明るい少女。

そんな彼女に、あんな顔をさせてしまった。

それがどうしても……気になって仕方がなかった。

どうして、あんなに寂しそうな顔をしていたのだろうか？

どうして、あんなに苦しそうな顔をしていたのだろうか？

どうして……俺に謝ってきたのだろうか？

どうして……。

「考えろ！　　遠山金次」

尋ねれば、話せば解る、なんていうのは幻想だ。

全部の『どうして』を聞き出すのは、考えるところを放置したのと同じだ。

全部の『どうして』を聞き出すのは友人を……人の心を考えない、大切にしないヤツがやる事だ。

俺は……彼女の『どうして』を考えたい。

「謝った、っていう事は申し訳ないって事で……」

彼女が俺に罪悪感を持っている、という事だ。

そして、思い当たるのはそれより少し前の会話。

俺が『神隠し』の夢を『二度』まで見てるといふ会話。

音央は……彼女は、俺が『8番目のセカイ』で『妖精の神隠し』を知る前に、既にその内容を知っていた。

「何故知っているのか……」

その噂をどこからか聞いている、というのが一番よくあるパターンだが。

それでは謝る理由にならない。

知っていたのに教えなくてごめんね、という感じでななかった、からな。むしろ、自分が何か悪い事をしているから、そんな表情だった。つて、まてよ。

『自分』が？

「まさか」

よく考えろ、遠山金次。

音央が見ていた夢とはどんなものだった？

音央が言っていた、あの時の言葉を思い出す。そう、確か……。

『そーいや、あたしも最近変な夢を見るのよね』

出だしはこんな感じだったはずだ。

『ハッキリ覚えているわけじゃないんだけど。あたしが、誰かと知らない部屋にいるの』

『たまに見る夢なんだけど、一緒にいる人はちよくちよく入れ替わっていく感じ』

『なんでか知らないけど、悲しい気分になる夢でね』

『あたしは、その人とずっと一緒にいたいのに、必ず『別れ』があるの』

『ずっと一緒にいちゃいけない、みたいなの。それで、お別れするときゆううつと胸が苦しくなつて目が覚めるの。起きたら泣いてる事もあつたりして』

必ず別れがある、不思議な夢。

その夢に、もし『俺』が出ていたとしたら？

「音央、アイツ、まさか……」

俺はガバツとベッドから身を起き上がらせた。

もし、アイツの見ている夢と、俺が見ている夢が『同じ』夢だったとしたら？

あの夢の少女が……音央？

コンコン。

「うおっ!?」

「ん……どうかしましたか兄さん？」

「お兄ちゃん、大丈夫？」

部屋のノックにビツクリして声を上げると、ドアの向こう側から理亜と金女の声が聞こえてきた。

「ああ、いや……寝ぼけていただけだ」

「そうですか？　ともあれ兄さんお風呂上がりましたよ」

「そうだよ、早く入らないとダメだよ？妹の汗が溜まった妹風呂だから早く入ってね、お兄ちゃん」

「つて、妹風呂つてなんだよ!!? (ですか?)」

ハモつて同時に金女に突つ込みをいれた俺と理亜。

「妹の体液とか、妹の髪の毛とか、妹の……「あー、もう解つた。直ぐに湯を入れ替えろ。後で入るから……金女、お前は少し落ち着け」……もう、お兄ちゃん非合理的」

そう言いながら金女の気配はなくなった。

おそらく言った通りに風呂を入れ直しに行つたのだろう。

本当、なんで金女はこんな残念な思考回路してんのかね？

人工天才ジュニオンでアメリカの有名大学を卒業してくるくらいに頭はいいのに……。

なんでこんなに残念なんだ。

「兄さん、スミマセン」

「いや、理亜が謝る事じゃないだろ?」

「ですが……金女さんより先に上がったせいで兄さんに迷惑を……」

「迷惑とかそんな事考えるな。家族だろ、俺達は!」

迷惑はかけていいんだ。迷惑をかけて、かけられるのが家族なんだから」

「あ、そう……ですね。ふふつ、兄さん、ありがとうございます。それじゃあ今後迷惑

をかけますね」

「ああ、ほんと来い！」

ただし、女性関係は勘弁してくれ。

「それじゃ、私はかなめさんの様子見てきますね。

兄さんも直ぐに来てくださいね」

「ああ、解った。つて、あ、そうだ理亜」

「なんですか？」

「念のため、なんだが。音央の事は覚えてるか？」

「これで『知りません』とか言われたらショックなんだが。

「何度かお会いしましたよね。私にも大変よくしてくれました。それに、兄さんが音央さんの話をする時は必ずスタイルの話題になりますので、覚えています」

「うぐつ、ま、まあ、覚えてるならいいんだ」

スタイルの話題をしていたのは一文字疾風であって『俺』じゃない。

ヒステリアモード時の俺なら何か言い出すかもしれないが俺が女性のスタイルを言うわけない。

……ないぞ？

そんな事より、俺が理亜に音央の存在確認をしたのにはわけがある。

以前、『ロア喰い』を調べた際にあった事だが、『人々の記憶から消える』というのが今回の『神隠し』にもある出来事だからな。

音央という存在は確かにいて、理亜という証人もいる。

その存在自体が消えたわけではない。

それを確認出来ただけでもホツとした。

「最近、音央のヤツ頑張っているらしいんだけどさ。アイツの噂って何か知ってるか？」

「ええ、頑張られているようですね、雑誌モデルなどもされていますし、それ以外に何か

……中学校での評判、などですか？」

「そういうのでもいいし、昔の話が噂になっていたりとか、そんなのでもいい」

「ん……思い出してみます」

ドアの外で考え込むような理亜の気配があった。

「あ、そういえば」

「ん、何だ？」

「音央さんは昔、神隠しに遭ったそうですね」

「え……？」

その単語が理亜の口から出た事に驚いてしまった。

音央自身……『神隠し』に？

「ほ、本当にか?」

「ええ、音央さんの熱狂的なファンの子が言っていました。迷子になって、1日だけいなくなつたとかなんとか。誘拐ではないかと思われたそうですが、翌日には帰つてきたそうです。その時の証言から、単に迷子になつただけで話で落ち着いたとか」

「……そうか」

「女の子が1日いなくなつた、という噂でその近所は大騒ぎだつたそうですよ」
『神隠し』。

音央自身が『神隠し』に遭つていたという噂。

俺の頭の中で、何かが符合しそうだった。

『神隠し』に遭つた音央。

近所で騒がれた音央の『神隠し』。

「ありがとうな、理亜」

「いえ、また民俗学ですか?」

以前適当に吐いた嘘を思い出したのか、理亜が尋ねてきた。

「いや、友達の悩みを解決したいだけだ」

「……なるほど。頑張ってくださいね」

「ああ」

俺が一人で悩んだりしていても仕方がない。

今の俺が一人でできる事なんてタカがしれてるしな。

ひとまず頭の中を整理する為にもひとつ風呂浴びてくるか。

「じゃあ、風呂に入るかな。せっかくだから理亜、一緒に入るか？」

妹風呂をしよう」

「冗談は脳だけにしてください」

「脳を否定された!?？」

「それでは」

俺の冗談に、即答して。

クールな言葉を残して去っていく理亜。

「よしっ！」

ヒステリアモードじゃない、こっちの俺だが、考えるだけ考えて、まとめるだけまと

めてやろう！

そしたら、明日。

音央と話をしてみるか。

俺はそう思っていたのだが……。

翌日から、音央は学校に来なくなつて。

——そして、まるで『神隠し』に遭つたかのように、その行方は突然解らなくなつていたのだった。

第十七話。夢の少女の正体は……

2010年×月×日。夢の中で……。

不意に目を覚ました場所は、物静かな和室だった。

またここかあ、という思いと。何か、忘れてはいけない何かを忘れているような、そんな不思議な気持ちを持っている。

……自分の名前すら『どうでもいい』と思い出す必要すら感じなくなっているのに、思いつかないと『いけない』気持ちがあるなんて。

『俺』は一体……？

「どうかしましたか？」

考え込んでしまった、俺の頭の上から声が聞こえた。

目を開けて見てみると、そこには『いつもの少女』がいた。

透き通るような優しさと落ち着きを持った俺が安心できる人。

この子さえいれば、他の子はいらぬ、そう思える少女。

……思い出せない『何か』は、この少女に関係する事だったような気がする。

「何でもない」

俺は少女に膝枕されている事に気づきつつも、『これが当たり前の事』のような気がして、そのまま膝枕の状態で、しばらく堪能してから少女に手を伸ばした。

少女は一瞬、驚いてから嬉しそうに俺の手を受け入れた。

ほんのりと暖かく、柔らかい。そんな少女の頬の感触が手に伝わった。

「そんな事より、よく覚えてないが……『次は……一緒に食事を食べましょう』とか誘ってなかったかな？」

「ええ。それじゃあ……頭を退かしていただけですか？」

「つと、ごめんよ……」

名残惜しきを感じつつ、俺は少女の膝の上から頭を退かして、体を起き上げた。

起き上がった視界に入ったのは――程よい広さの和室と、障子越しに差し込

む陽光が目に優しく入った。

辺りを見回していると少女がスツと立ち上がり、部屋の隅に用意されていた膳を持ってきた。

少女のその仕草や、今の俺の状況を見ると、何だか看病されているみたいな感じがしてきた。

……どこも悪くはないんだけどな。

「何かおかしいですか？」

自虐気味に笑った俺に、心配そうな視線を向ける少女。

「いや、かいがいしく看病されているみたいだなあ、って思ったんだよ」

「ああ……ふふ、看病ではなく、ご奉仕ですよ」

「ははっ……それはドキドキするね」

「ええ、ドキドキしてくれたら嬉しいので」

クスクス、と小さく握った手を口元に当てて少女は笑う。

そして……。

「さあ、どうぞ、召し上がれ」

御膳を差し出してきた。見ると御膳の上には、純和食が乗っている。

俺はその御膳に手を伸ばそうとして……その時。

一瞬だけ。一瞬だけ思考にノイズめいたものが走った。

食事を摂ってはいけない、そんな注意を受けたような……？

……気のせい、だよな？

「何か嫌いなものでもありましたか？」

「あ、ん、いや……」

改めて御膳の上に乗っている料理を見てみるが、ほかほかの御飯とお味噌汁。魚の塩焼き、煮物、漬け物に、そして……お茶。

どれも美味しそうな料理だ。

何で食べてはいけないなんて思ったんだ？

不思議に思いながらも俺は箸を手取る。

「いただきます」

箸で料理を摘み、一口目を口に運んだ。

……その料理は、控えめな味付けなのにとっても美味しくて、『素朴』な味わいがする、まさに彼女のイメージそのままだった。

「うん、美味しいよ」

「あ……ありがとうございます……」

俺の言葉に俯いた彼女の顔がほんのり赤く色づいていて、ドキっとしてしまった。

こんな美少女に手料理を作ってもらえるなんて俺は幸せものだなあ、としみじみ思った。

この穏やかで静かな時間がいつまでも続けばいい。そんな事も思ってしまう。

「あの……」

そんな事を思っていた時だった。

俺が食べる様子をじつ、と見つめていた彼女が口を開いた。

「ん、なにかな？」

「あの……もし良かったら、ですが……」

ほんのりと頬を赤く染めながら、瞳を潤ませて彼女は言った。

「ずっと……一緒にいてくれませんか？」

彼女からの突然の告白。

「あつ……ん、えーと、だな……」

つい今しがたまでは、この時間がいつまでも続けばいいと思っていた俺だが。

なのに、何故だか即答ができないでいる。

答えはすでに決まっているのだが……なんとなく。

そう、なんとなく——この少女を見ていると……。

彼女の顔が思い浮かんだ。

いや、その顔に見覚えはない筈なのだが……。

「……音央？」

なんとなく

その名前が自然と口をついて出てきた。

「つ!?」 何故!?」

そして俺がその名前を口にした途端、彼女が目を見開き、慌てて立ち上がった。

その瞬間——俺の中に、音央という少女に関する大量の記憶が流れ込んできた。

あの日、物憂げな表情で別れた少女。その後、忽然と姿を消して、どこを探しても見つからなかった事。

『神隠し』に遭ったんだ、と囁かれ初めている事——。

そう、この夢は!

「いや、お前は『神隠し』か!?」

「つ、いや!」

音央と『同じ顔』をした少女は、逃げ出すように立ち上がると、一気に駆け出して障子を開けた。

障子の、その先にはちよつとした板張りの廊下があつて、そして庭に通じる窓もあり

……。

「つ!?」 あれは……」

そこは見覚えのある場面だった。

少女が『外』に走り出すと、俺の視界が揺らぎ……ぐにやりと風景が歪んで、足が重

くなり、前に進めなくなった。

まるで、強制的に目覚めさせようとしている……ようだ。

「ま、待ちやがれっ！」

追いかけてようとしても、身体は言うことを聞かず、なんだか、身体の中から力が抜けていくような感覚がして。頭痛と吐き気もしてきて……。

『もう遅いよ?』

そして、その時。

聞き覚えのある声が頭の中に響いた。

——この、特徴的な語尾上げの声は……!!

『貴方は、この『富士蔵村』の料理を食べちゃったもんね?』

「この声、詞乃ちゃん……か?」

『だから、次に眠った時。貴方はもう元の世界に戻れないよ?』

やっと、食べてくれたね。ずっと待ってたんだよ?

貴方が『富士蔵村』の料理を食べるのを……。

リサさんが貴方に出した料理にはこの村の食材は使われてなかったから。

だから貴方が眠って、この村の料理を直接口にするのをずっと待ってたんだよ?

ようやく食べてくれたね?

あはははっ!』

詞乃ちゃんの笑い声が頭の中でこだまして……。

俺は自分の部屋の布団の中で目を覚ました。

「……………今は……………」

夢の中の少女は音央と同じ顔で。

あの場所は『富士蔵村』で。

そして……………。

「朱井詞乃……………」

『神隠し』に名前を付けられたという『人喰い村カーニヴァールのロア』の声。

見間違いないじゃなかったのか、と額に手を当てて現実逃避をしようとして、その手に『何か』を持っている事に気付いた。

「小型の……………ラジオ？」

これは確か、『富士蔵村』で音央に持たせていたものだ。それが今ここにある、という事は……。

これが『3度目』の『手土産』なのか？

予期せぬ出来事だったが、ようやく掴んだ。

この数日、まるで消息が掴めなくなっていた『六実音央』の手掛かりを、やっと。

手掛かりを掴めた俺は、不意に、音央が消えた日に見た顔と。さつき見た少女の顔が脳内で思い浮かんだ。

そして、重なり合った。

「……つたく、ホラーっぽく誘い込むんだったら。あんな寂しそうな顔すんなよ、音央」

音央が消えてからすでに1週間経っていた。

その音央が夢に現れた。

……出るならもつと早く出てこいよ。

そう、悪態を吐きながらも、『境山』の方を向いて俺は言った。

「いいぜ。『主人公』が助けてやる。無理矢理、その顔を笑顔にしてやるよ！」

そう口に出して、『4度目』に挑む為の気合を入れたのだった。

2010年6月10日。午前5時。一文字家前。

すっかり目が覚めてしまった俺は、頭をスッキリさせようと、早朝ランニングしようと思いついて家を出る事にした。

そして、ジャージに着替えてから家を出た瞬間、ビツクリするようなイベントが起きていた。

なんと。

「おはようー！」

キリカが満面の笑みを浮かべて家の目の前で待っていたんだ。

朝から美少女が迎えに来てくれる。

美少女とのドキドキ登下校がしたい！

なーんて、思うのは浅はかってもんだ。

だって現実になんな事をしてくれる女の子はどれだけいる？

仮にいたとしたら……その子はよほど束縛が強い子か、計算高い女の子なんだと、俺は思う。

きつと男受けするような仕草や表情を浮かべて自身に都合のいいように言う事を聞かせているんだ！

まあ、これはあくまで俺の意見だけだな。

そんな美少女なキリカが満面の笑みで俺の家の前にいる。

……そういえば似たようなシチュエーションが一之江であったな。
なんて思い出す。

「よお、おはよう！ キリカ」

「うん、おはよう、モンジ君っ！」

「こんな朝っぱらからどうしたんだ？」

キリカと早朝ランニングの思い出といえば……あの日の朝を思い出す。

深い霧と大量の蟲に包まれたあの日を。

まさかとは思うが……キリカは『魔女』だからな。

もしかしたら……という可能性もある。

「大丈夫。今日は食べにきたんじゃないし。むしろ、私はモンジ君に食べられちゃった女の子みたいなものだからね」

今日はこの部分に不安を感じつつ、すぐ様突っ込みを入れる。

「待て！ その言い方は誤解を招くから禁止な」

「これから美味しくいただくかれちやいます♡の方がいい？」

言葉を変えて言ってきたが……それも誤解を招く言い方だな。

まあ、いいや。もう諦めた。

キリカみたいなタイプは言うだけ無駄だしな。

しかし諦めたが言われっぱなしなのもアレだな。

よし、少し乗ってやろう。

「もう、ご馳走様だ」

「わっ、もう食べられちゃった!?」

大げさに驚きつつ、俺に手を差し出しながらニッコリ笑いかけてきた。

「行こっ」

「ああ」

溜息混じりに呟いた俺はその手を取ると、キリカと一緒に歩き出した。

2010年。6月10日。境山山道。

俺とキリカは2人だけで歩いてた。

肩を並べて手を繋いで。

それはいわゆる恋人繋ぎというやつだった。

恥ずかしいのとヒスリたくない衝動で何度も手を振り払おうとしたが、その都度キリカがぎゅうううと手を握ってきたので振り払えなかった。

何故か、ここで拒んではいけないようなそんな気がした。

そんな事を思ったその瞬間、隣を歩くキリカの、その髪からふわりのいい香りがした。俺が見ている事に気付いたのか、キリカは俺を見上げてニツコリと笑った。その表情を見てようやく気付いた。

優しくして貰っている、という事に。

「音央ちゃん、見つからないね？」

キリカが優しい声色で発した。話題はもちろん、音央の事だ。

「そうだな。よく言う話だけど、警察も動けない……いや、動かないんだな」
「私達くらいの年齢の女の子は、ちよくちよく家出ごっこするからだろうね」

思春期の青少年少女の家出。

家出ごっこ。

親や教師への軽い反発。

ちよつとグレてみた、みたいな反抗心の現れ。

俺達くらいの年齢ではよくある出来事。

だから、音央もそう思われてしまっているという事のようにだ。

本当は違ってもそれに事件性がない限り、動かないのが警察だからな。

「1週間ちよつとの行方不明では、そんなに本腰を入れないものなんだよ」

「やっぱり、そういうもんなんだな……」

世界が違えど警察という組織の本質は変わらない、という事なんだろう。

「行方不明の捜索って、時間が経てば経つほど証拠が見つけづらくなるんだけどね」

「……だろうな」

時間が経てば経つほど、証拠が見つけにくくなる。

だから最近の俺は焦っていた。

それこそ、日課だった一之江との訓練（という名の虐待）やキリカの講習をサボって探し回るくらいに。そしてそんな俺を、2人は文句を言う事もなく見守ってくれていたんだ。

だが、そんな風に見守っていてくれていたキリカがわざわざ俺の家の前で待っていた。た。

それも夢を見た、その日に。

「俺が『3度目』の夢を見た、って気付いたのか？」

「うん。目が覚めたら、モンジ君の存在が、気配がいつもと違って薄くなっていたからね」

「そういう事もわかるんだな、キリカは」

「モンジ君だからだよ。ほら、君ってば私の事……自分の物語にしてくれるって言った

でしょ？

だからだと思う」

「そ、そうか……恥ずかしいな、なんか」

今更だがキリカに告げた言葉を思い出して恥ずかしくなった。

あつちの俺がした事だが、こつちの俺もその事は覚えてるわけで……。

「ふふつ。多分、瑞江ちゃんも気付いているんだと思うよ？」

キリカは自分だけではないよ？ と一之江も気付いていると言った。

だけど、一之江はわざわざやって来ない。

俺がピンチになったら自分を呼ぶと確信しているからか。

或いは、こういうメンタルケアはキリカに一任しているからか。

どちらも一之江の優しさと信頼の現れで……俺はなんだか嬉しくなった。

『^{チェンジリング}妖精の神隠し』に取り込まれつつあるからかな。モンジ君は今、この世界での存在が

とても薄くなっているの」

「ああ、皆んなの記憶からも消えてしまう、って言うヤツか」

「このまま完全に取り込まれてしまったら、きつと私達の記憶からも消えてしまうから、

ちよつと心配だね」

「……悪いな、心配させて」

「ううん。会いに来てみたら、私を口説いた時みたいな目をしてるんだもん。逆に安心しちゃったよ。」

『ああ、この目は誰かを助ける主人公の目だ』って」

「買いかぶりすぎだ。俺にそんな力はない」

ヒステリアモードじゃない、こっちの俺に主人公の素質はない。

自分で言うのもアレだと最近思うようになってきたが……俺はちよつと争い事に耐性がある普通の高校生だからな。

だから映画や漫画の『主人公』のように、ヒロインを救う事なんてできやしない。

できないと思うが……。

だけど、俺が助けてやりたいのはヒロインじゃない。

友達を助けたい。だから俺は……。

『神隠し』に挑む。

有名な誰でも知ってる都市伝説『神隠し』。

それに挑むのはロアにしてみれば、かなりの自殺行為なのかもしれない。

だが、俺がなんとかしたいのは『神隠し』ではなくて、『音央』なんだ。

「なあ、キリカ」

「うん？」

俺の声に返事をしながらもキリカは導くみたいに歩き続ける。

その行き先は何処なのか、というのは何故か気にならない。

「ありがとうな」

「わ、何もしないうちから感謝された」

驚きながらも嬉しそうなか、ニンマリ口になるキリカ。

「どんな状態でもモンジ君はモンジ君だからね。だから私は私なんだよ」

「ん？」

キリカの言葉に何か引つかかるが俺がその疑問を口に出す前にキリカは続け様に告げる。

「ちゃんと、魔女的に打算で行動しているって事。モンジ君に優しくするのも、ゼーンぶ自分のためだから、感謝し過ぎる必要はないんだよ？」

「ははっ、そう言ってくれるのが既に優しいよな、キリカは」

後で打算で動いていた、と思われなため、ではなくて。

キリカはこう言っているんだ。

「だから気にしないで」と。

……キリカを気にせず、俺は俺のやりたいようにやればいい。

そう、教えてくれたのだ。

だが、なんとなく気になった事があるから尋ねてみる。
「なあ、何でキリカは俺にそんなによくしてくれるんだ？」

俺以外にも有能な『主人公』っていうのはいるんだろ？」

キリカのおカルト講義の中で、何人かの『主人公』の話聞いた事がある。

彼ら、彼女らは歴史に名を残した『英雄』や『勇者』、或いは『聖女』で俺に比べたら間違いなく本物の『主人公』だった。

それに比べて俺は一高校生に過ぎない。

ヒステリアモードになれば別だけどな。

「モンジ君はモンジ君だからだよ」

さっきと同じ言葉を理由にするキリカ。

俺が考え込むとキリカはクスクス笑って手を強く握り締めてきた。

「魔女が、打算以外で……こうやって手を握りたくなるような子だから。普段の君はなんとかな……『力』とか『情報』以外の何かで私達を支えようとしてくれるからね」
力や情報ではない何か。

俺にそんなものがあるとは思えないんだが……。

「だからきつと、『神隠し』にだって負けないんじゃないか、って思っちゃった」

「そう、なのか？」

「これが全く赤の他人である『神隠し』なら別なんだけど。なんせ……音央ちゃんなんでしょ?。」

確信しているように、その名を告げるキリカ。

だから俺もその名を告げた。

「ああ、夢の中で遭った少女は、音央だったよ」

第十八話。 魔女の刻印 《キスマーク》

俺がそう言うときリカは予想通りといった表情で頷きそして告げた。

「やっぱりね。色々調べていたら、あの子が昔『神隠し』に遭ったっていうデータを見つけたから、ピンとききたの」

それは以前理亜が言っていた情報と同じものだった。

どうやらキリカはキリカで情報を手に入れていたらしい。

「今から大体十年くらい前。堺山の近くで『六実音央』という少女が行方不明になり、翌朝、警察に保護されたっていう小さな事件があつてね」

片手でDフォンを弄りながら、キリカは事件の内容を俺に語り始めた。

「彼女は学校の友人達と別れた後にその行方が解らなくなつて。誘拐事件つて疑われたりしたんだけど、翌日保護された彼女から事情を聞いてみると、道に迷つて怖かったから近くにあつた電話ボックスの中で一晩明かしたただけだった、というお話」

「ま、よくある話と言えば、よくある話だな」

道に迷つたからたまたま近くにあつた電話ボックスで一晩明かした、ただそれだけの事。

だが、俺はもう知っている。

そんな『よくある話』が、『都市伝説』になってしまったという事。

「彼女が行方不明になった時、当然こう語られたんだよね。」

『音央ちゃんは神隠しに遭ったんだ』って」

そう。音央は当然そう言われていたんだらう。

何故なら、彼女が通う小学校では常々言われていたからな。

夜遅くまで遊んでいると『富士蔵村に連れて行かれ』そして、『神隠しに遭ってしまった』と。

少なくともその小学校では、児童はもちろん保護者までそんな噂をしていたのだ。

「しかも、こんな噂まで流れていたんだよ。多分、本人は知らないけど」

「ん?」

足をピタリ、と止めてキリカは言った。

「六実音央は、別人になって戻ってきた、って」

「別人!?」

その噂は初耳だった。

「ちなみにこれはアラン君からの情報ね」

アランからの情報……アイツはキリカにとっていい情報源になっているんだな。

よかったな、アラン。

マジでキリカの役に立っているぞ。

これで『アラン君って顔はいいよね』なんて事は言われ……なくなるといういな。

……うん。

「ん？ どうしたの？」

「いや、今頃クシャミしてるであろう奴に同情してただけだ。

で、それってどういう意味だ？」

「これは私の予想なだけけど」

とキリカは前置きしてその場から歩き出した。

「音央ちゃんは、きつとバツが悪かったんだと思うの。自分の不注意で帰れなくなっただけなのに、そんな風に噂が広まっちゃて」

キリカはそう言いながら歩を進めていく。

気づけば周囲は山道になり始めていた。

向かう先はワンダーパークの方向だ。

「だから次の日から、きつと……彼女の事だから、いつも以上に元気にしたんじゃないのかな？」

自分は大丈夫！ 全然神隠しなんて関係ないよ、って」

「あー、ヤンチャだったみたいだからな」

そう言えば、女の子が行方不明になったという話をした時、音央は言いづらそうにしていたな。

それに昔はヤンチャだった、とかも言っていたな。

「いつも以上にテンションを上げて元気に騒ぐ音央ちゃん。大人から見れば、恥ずかしさのあまり失敗の埋め合わせをしているっていうのは一目瞭然だけど……子供達にしてみると？」

「……『まるで別人になったみたい』……か」

なるほどな。噂っていうのはそうやって連鎖していくものなんだな。

そうやって噂されたから音央は……。

「チェンジリングっていうのは元々、妖精と人間が入れ替わるっていう類の神隠しだからね。」

音央ちゃんが妖精と入れ替わった、と思われたから出来た噂の可能性が高いよ」

妖精と人間が入れ替わる、都市伝説。

別人になって戻ってきたと思われた音央。

だから————アイツが『神隠しのロア』になってしまった。そういう事か。

「だけど、音央は自分で神隠しを密かにやっていたにしては、ロアに詳しくなかったぞ

「？」

「そこなんだよね。自分で密かにやっていたにしては、あまりに普通の女の子ぽかったし。」

無意識のうちに『神隠し』をしていたんだとしたら、そんな事つてあるのかなあ、なんて思っちゃうし……だからね、モンジ君」

キリカの後に続いてやってきたのは……。

堺山ワンダーパークに近い道路。

人里離れたその場所に、電話ボックスがあつた。

「君がその謎を説明してきて。多分、君と音央ちゃんの縁は深い。きっと彼女は……」

「……『百物語』の一人、か」

キリカにそう言われた俺はDフォンを取り出すと、カメラを電話ボックスに向ける。

おそらくこの場所が、この電話ボックスが、音央が一晩過ごした場所なんだろう。

「電話系にはトラウマがあるんだがなあ……」

「『人喰い』系にもあるでしょ？」

『電話系』の『月隠のメリースドル』。

『人喰い系』の『魔女喰いの魔女』。

そして、『人喰い村』の影に隠れた、『神隠し』。

「まあな。つまり……どっちもキリカや一之江に縁があった話だったのか、これは」
 なんとなく、そんな繋がりにも苦笑いしてしまう。

そんな事をしているうちにDフォンのカメラが電話ボックスを捉えて映し出した瞬間。

ピロリロリーン♪

Dフォンからメロデーが流れた。

「コード取得だね、これでモンジ君は『1001番目の百物語』として……」

『妖精の神隠し』に挑まないといけなくなつた、というわけか」

元々そのつもりだったが、キリカにお膳立てされてしまった。

キリカの事だから俺が躊躇う事を見過ごしていたんだろう。

だからここに連れてきたんだ。

俺の背中を押すために。

「キリカはいいお嫁さんになりそうだなあ」

「モンジ君が貰ってくれればいいのに」

「うっ……心臓に悪いから変な冗談は辞めてくれ」

キリカみたいな美少女が嫁とか……想像しただけでヒスリかねん。

「ほんっと、今の状態のモンジ君はすぐ揺れてくれるからちよろくていいよねっ
ん？　今の？」

まさかと思うが……バレてる？！？

ヒステリアモードの事が？！？

「なっ、キリカ……お前……まさか？！？」

「さて、それじゃあ、魔術でチョコチョコイと眠らせてあげるね？」

「話題を逸らすな！」

話題を逸らすのは俺の専売特許だ！

「クスっ、モンジ君、私は……なあに？」

「何って……キリカはキリカだろ？」

「そ。だからだよ。」

私はキリカ。キリカという名の『魔女喰いの魔女・ニトウレスト』だよ。

『魔女』だから……君の事を色々知ってるんだよ？」

「……なんだかその説明だけで納得出来てしまう、自分が嫌になるな……」

魔女だから、俺の事もお見通ししてわけか。

怖えな、魔女……。

「というわけだから、眠らせるね？」

「はぐらかされたが、いつか必ず理由を聞いてやるからな」

「うん、いつか……私をちゃんと口説いたらその時は話すよ」

「うん？　ああ、約束だ！」

この時の俺はキリカ力の口なら何時でも割らせる事が出来るだろう、とそんな事を考えていた。

ずっと側にいる筈だから、もう俺の物語なんだから、と。

のちにあんな事になるとは知らずに……。

俺は電話ボックスを見つめた。

次に寝たら、四度目の夢を見るだろう。

そして、二度と帰って来られなくなるかもしれない。

夢の中でちゃんと、キリカや音央の事を思い出せるかどうか……。

俺が完全に消える前にそれが出来るかどうかが問題だ。

「ふふ、それじゃあ……そうだね。こっち来て」

そんな風に不安に思う俺を、キリカは電話ボックスの前まで導いてくれた。

「ちよっ」

「いいからいいから」

ガチャ、とドアを開けて、電話ボックスの中に一緒に入った。

電話ボックスの扉や周りは透明なガラスに囲まれているから外から丸見えとはいえ、狭い屋内に美少女と二人つきり。

しかも、車の通りがほとんどない山道の電話ボックスの中でだ。

密着した姿勢でくっついたせいとか、ドキドキしてしまったのは仕方ない事だ。

ドキドキして、し過ぎて血流の流れが速くなった。

「一度ある事は二度、三度ある……か」

「ふふふつ、なつたんだね、モンジ君？」

「ああ、まったく困った子猫ちゃんだ」

「子猫は甘えたがり屋だからね。」

それより、ちゃんと自分の事とか、私達の事とか思い出せるか心配なんですよ？」

「まあ、な。三度目は上手い事いったが、次も同じように思い出せる保障はないからね」

「記憶つて曖昧だもんね。だから、記憶のエキスパートである魔女さんが、ちよつこと手伝つてあげるね？」

ちよつと中腰になつて？」

「ん？　つて、ちよつとキリカ!?!？」

「よいしよつ、つと。ちゃんと支えてね？」

言われるままに、背中をガラスに預けて中腰になると、そんな俺にのしかかるように、

キリカは自分の体を密着させてきた。

「俺じゃなければ襲われるよ、キリカ？」

体と体が密着しあい、顔と顔の距離が近い。非常にドキドキし放しな体勢だった。

密着しあう体でお互いの体温を感じて、キリカから非常にいい匂いもしてきた。

ドキドキし放しの俺に対してキリカは何も言わずに、潤んだ瞳で俺をじーつと見つめ

てきて、俺の頬に片手を添えると。

そのまま顔を近づけてきて……。

「……………」

「っっっ？」

俺の唇……のすぐ横に、口づけをしてきた。

ほんのちよつと、ほんのちよつとでも俺が頭を動かせば、すぐに唇のキスになる。

キリカの唇の柔らかさ、息遣い、髪香り、肌の暖かさがすぐく身近に感じて、頭の

中が真っ白になりそうになった。

「……………魔女のキスは……とても熱いんだよ……う？」

キリカの囁き声が耳に届いてぞくぞくした。と、同時に背中がざわざわと騒いで、な

んだか足が震えた。

「モンジ君が何かしたくなったら……好きにしていんだからね？」

それは甘い、甘い誘惑だった。

こんな状態でしたくない男がいたら、それは神か仏だ。

キリカはそのまま、俺の首筋にキスをして……。

首の下に長い口づけをした。

そこが、とても熱くなると同時に、たまらない気持ち溢れた。

「えへ、キスマークを作っちゃった」

「え、どこに??」

「ほら、ここ」

キリカが指でその場所を突いた。

ガラスに映る俺の、首筋に赤いアザが出来ていた。

「悪戯されちゃったんだな、俺」

「正にそういう事だね。嫌だった?」

「いや、嫌なわけないだろ。君のような綺麗な女の子にされるんなら本望さ」

「ふふっ、ありがとう」

クスクス笑うキリカの、その唇とても艶めかしい。

震える手でキリカを抱き締めて、その唇を貪りたくなる。

ああ、駄目だ……耐えられねえ。

キリカが……欲しい。

こんな美少女を前にして耐えられる男はいない。俺は神や仏じゃないから無理だ。今の俺が普段の俺なら、その数少ない神や仏に例えられていただろう。

だが、こつちの俺にはこれは悪手だ。

今の行為は俺を増長させるだけだからね。

欲しい。

……キリカが……欲しい。

……女が欲しい。

……音央が……。

……音央も俺の女だ。

……返せ。返せ……。

奪え。奪い返せ。

『俺の女を、記憶を奪い返せ』

(これは——ヒステリアベルセ^{何?}?)

この身体の中央・中心が焼け付くような感覚に俺は覚えがあった。

これは——ヒステリア・ベルセ。

女を奪うヒステリアモード。

だが、どうしてだ？

何で俺はベルセになったんだ？

ベルセは他の男に女を奪われた時に発現するヒステリアモードのはずだ。
今、俺の周りに男はいない。

だからなれないはずなのに……。

「ごめんね……モンジ君」

何でだ、何で謝る!!？

一体何をしたんだ、キリカは……。

「少し頭の中を弄らせて貰ったよ。

大丈夫。寝ればすぐに解るから」

「おい、キリカ」

問い詰めようとした俺だが、身体を動かさなかった。

気づいた時にはすでに、キリカの髪とは別の甘い香りが辺りに漂っていて、俺の頭の中はぼーっとしてきて、何も考えられなくなっていたからだ。

「それにしても……君にこんな能力があったなんてね。

教えてくれた教授には感謝しないといけないね。ねえ、モンジ君」

瞼が重くなり……。

「……気をつけてね」

「……待て……」

眠りに落ちる瞬間、キリカルの心配そうな声が聞こえて。

俺は意識を失った。

2010年×月×日。夢の中で。

不意に目を覚ました場所は、物静かな和室だった。

なんとなく、いい夢を見ていた気がする。

夢の最後はなんだか怖かったような気がするが……。

だけど、それがどんな夢だったのかははつきりとは思いつけない。

体を起こしてみると、妙に体が軽い。

頭はすつきりしている。

目覚めは良好のようだ。

改めて辺りを見回すと、ふと、障子の向こう側が気になった。

そう言えば、こないだ……ご飯を食べた後。

何かあつたような……。

俺が何かを思いだそうとした、その時だった。

「あの……」

背後から控えめな声がかかってきたので振り向くと、そこにはいつもの少女がいた。

濡れたような黒い髪が艶やかに輝き、着物姿が似合っている。

ただいつもと一つ違うのは、そこに浮かんでいる顔が普段の優しく穏やかなものでは

なく、とても……寂しそうな表情をしている事だ。

「どうかしたのか？」

心配になって尋ねてみると、彼女は弱々しく首を横に振った。

「いえ……どうして、来てくれたのかなと思ひまして」

おずおずと上目遣いで俺を見るその瞳に含まれているのは、罪悪感かな？

何に罪悪感を抱いているのかは解らないが。

いつだって彼女は俺に優しくしてくれた。
いつだって彼女は柔らかく接してくれた。

それは、俺が喜ぶ事をするのが嬉しい、そんな態度だった。

「うーん……どうして、って言われても困るけどな」

「そう……ですよね」

俺の言葉に、再び俯いてしまう彼女。

俺はその場から立ち上がって、そんな彼女の前まで移動した。

驚いたように顔を上げた彼女の目を見て、俺ははつきりと告げた。

「だけど、そんな寂しそうな顔を見に来たんじゃないのは確かだ」

「……ほんとう、スケコマシさんなのですね」

そう呟いた彼女の頬がほんのり赤く染まった。

それだけで満足しそうになったが……そうだ、俺はここに、何かをしに来たんだ。

「だから、良ければ話してくれないか？　君が悲しんでる理由を」

「記憶……ないんですよね？」

彼女に言われて納得した。

そうだ。今の俺には自分が誰なのか、ここが何処なのか、何をしに来たのか。

一切合切全く解ってない。

「ああ、全く思い出せないな」

「なのに、どうしてそんなに自信満々なんですか？」

「それは多分……」

「多分？」

「君が悲しそうな顔をしている事に比べれば、俺がどんな状態かなんて事は些細な問題だからだ」

そう、多分そう思うのが『俺』だ。

目の前に辛そうな女の子がいるなら、自分の状態は一旦置いておく。

もちろん、自分の状態が気にならないわけではないが、優先順位は女の子の方が高い。

「それに、ここで見て見ぬふりをしたら寝覚めが悪くなる……安眠は大切だからな」

「ほんとう、貴方は今までここに来た人達とはまるで違いますね」

「あれ？　今までもここに来た人達がいたのか」

「ええ、そして……四度目には、あちらにお連れしていたので」

俺は少女の視線の先、障子の方を見た。

何故かは解らない。

解らないが……俺はあの先を知っている気がした。

確か、ちよつとした板張りの廊下があつて、庭が一望できる窓があり……。

その先は

「そして貴方も……ここに来たからには、連れて行かないと行けません」

「連れて行く?」

「そうです。ここではないあちら側のの世界。もう、戻れない場所に連れて行かなければいけない。」

だから彼女はこんなにも苦しそうなのだろうか。

「それが私の」

考え事をしていた俺の手をぎゅつ、と握った少女は

『神隠しのロア』としての役目だから」

ポロツ、と大粒の涙をその瞳から流した。

ロア。

その言葉には聞き覚えがある。

とても重要で、忘れてはいけない言葉のはずだ。

だけど俺はそんなものよりも重要なものを見てしまった。

女の子の涙。

これを見た男が取る行動なんて決まっている。

「俺が助ける」

その言葉を口にした瞬間、俺は不思議な感覚を感じていた。

以前、似たような言葉をこの少女に言ったような……？

そうだ。俺は彼女にもこの言葉を言っているんだ。

『何かあったら俺が守るから』

「え？」

そうだ。俺は約束したんだ。

君を守るって！

身体は勝手に動いていた。

「あつ……」

気づいた時には、俺はその細くて、柔らかい彼女の体を抱き締めていた。

「俺が君を助ける。多分、いや……絶対。俺はそのためにここに来たんだ」

俺が彼女の頭を自分の首元に抱き寄せると。

固くなっていった彼女の体から、力が抜けていった。

「そんな事……でも……」

「出来ない、か？」

「はい。だって私は……『神隠し』だから」

『神隠し』のロア。

きっと彼女は今までも、『神隠し』の力で何人もの人を『あちら側の世界』に連れて行ってしまったのだろう。もしかしたら、連れて行きたくない人だっていたのかもしれない。

それなのに、彼女は……『神隠し』だからという、ただそれだけの理由で、嫌々やっていたのだとしたら。

それは、とても苦しくて辛い事だ。

「認めない」

「え？」

「君が、『あー神隠し楽しい！　消してスッキリしたー！』って思っているんじゃないなら、俺は向こう側に行くわけにはいかない」

「え？」

「だってさ。毎回誰かを連れて行く度に……君は泣いているんだろう？

そして、今回は俺を連れて行って、また泣くんだろう？

なら、そんなの認めるわけにいかない！」

強く断言して彼女の身をさらに強く抱き締めた。

「……強引な……人だったんですね……」

「つと、ごめんよ。苦しいか？」

「いえ……こんなに強く誰かに抱き締められたのは初めてでしたけど……」

「ふっ、ならもつと強く抱き締めてもいいんだよ?」

「ふふっ……それは遠慮しておきます。」

うん、でも、本当にありがとうございました」

少し落ち着いたのか、彼女は小さく、涙声だけど笑ってくれた。

「でも……本当にごめんなさい。私は、貴方を連れて行かないと……」

「困る事情があるんだね?」

「……はい」

それも予想していた。

誰かを連れ去る事に抵抗がある女の子が、それでもやっていた。

それは何かしらの理由があるはずだと。

「解った、ならこうしよう」

俺は彼女の体を解放すると、そのまま障子に向かって歩き出した。

「え……そっちは……」

解ってる。

この先に向かうと、俺は消えてしまうという事は。

だが……。

それでも俺はこうしたいんだ！

「君が連れて行くんじゃない」

障子に手をかけると俺は……。

「自分の意思で、俺が行くんだ！」

その障子を、開け放った！

第十九話。奈落の底で……。

瞬間、目の前に広がったのは————舗装された道路、広大な田畑、遠くに見える古い民家。

ここは————!??

脳がズキンと痛み出した。

そうだ。ここは……。

『富士蔵村』————俺達が脱出した、あの村だ！

脳内に広がったのは『村』に関する断片的な記憶。

ここが『人喰い村』だと言うのは思い出せても、まだ自分の事は思い出せない。

つまり、それだけこの、『四度目の夢』の効果は確実性が高いという事なんだろう。

と、その時。

聞き覚えがありまくる声が聞こえてきた。

「あはははっ、まさか自分から消え去ろうとするとは思わなかったよ？」

窓の外からその語尾上がりの特徴的な声が聞こえてきた。

この声は……。

「朱井詞乃……」

そう。窓の外に立っていたその少女は見慣れた赤いワンピースを着た『人喰い村』のロア。

朱井詞乃だった。

「へえー。私が誰かって事は覚えてるんだ？」

「自分の事は解らなくても君の事はよく覚えてるよ。」

君は『カーニヴァル人喰い村のロア』だろ？」

「質問を質問で返すなんて……ズルイな。」

そうだよ、私はこの村のロアだから……村がある限り何処でも存在出来るんだよ。

それより……そっか。モンジさんは自分の事を覚えていないんだ？」

おっと、余計な情報を与えてしまったかな？

「ああ。確かに俺が誰なのかとか、自分に関する記憶は一切ないな」

「ふーん。なのに消えようとしているんだ。」

自分の事も解らないのに……変な人？」

まあ、そう思うのが普通の反応かもな。

誰だつて自分から消えたいなんて思わない。

いくら困っている美少女の為だからと言っても自分から消え去ろうなんてするワケ

がない。

誰だって他人より自分の身が大事だからな。

だから詞乃ちゃんに変な人だと思われるのは仕方ない。

だが……それでも構わない。

「俺が消えなければいいだけだろ？」

それで『神隠し』は終わりだ！」

確かに俺は。

自分の事を思い出せない。

自分についての何もかもが思い出せない。

この現象がつまり……。

忘れられて『消える』という事なのかもしれない。

だけど逆に考えればいいんだ。

「確かに君の言う通り俺は自分の名前も思い出せない。

だけど逆に考えれば『自分を思い出す事が出来れば消えない』んだろ？」

そう詞乃ちゃんに言うよ。

彼女は爆笑した。

「あはははははははは!!？」

そんな事、今まで出来た人はいないのにな？」

笑うところか？

「……」

何で爆笑されているのか解らない俺は振り返って背後に佇んでいる少女の方を見ると。

着物を着た少女は酷く不安そうな顔をしていた。

「……」
今まで出来た人がいないのに出来るはずがない。

今の言葉はそういう意味だろう。

それはつまり、出来た人がいないという事実だけで出来ない、というわけではない。不可能だと思われるけど無理ではない、というわけだ。

「……そうか」

不敵に笑いながら何処かで聞いた言葉が頭の中に浮かんだ。

彼女はおそらく『嘘』をつけない。

本当に出来ないのなら、『誰も出来ない』と語ればいいだけだが彼女は『出来た人はいい』と答えたただだからな。

それはつまり。

「俺が最初の一人になればいいだけだよな」

「ふふっ、そう？」

詞乃ちゃんは楽しそうに笑いながら告げる。

「じゃあ、やってみるといいよ!!?」

詞乃ちゃんが右手を挙げると。

「や、やめてー!!?」

それと同時に着物少女の声が響き。真つ黒な穴が俺の足元に開いて……。

「きゃあつ!!?」

「ちっ!」

何故か慌てて駆け寄ってきた着物少女を咄嗟に抱き締めた俺は……。

その暗闇の中に飲み込まれていったのだった。

2010年□月□日。

そこは純粹に真つ黒な場所だった。

目を開いているのか、閉じているのかも解らないほど暗黒に包まれた場所で、『自分』という存在が消えてしまったような感覚に囚われる。

試しに手を動かしてみたが、そもそも手の動かし方が解らない。

自分に『手』があるのかも解らない。

自分が立っているのか、寝ているのか、浮かんでいるのかすら解らない。

ただそこにあるのは『何も無い』微睡眠だけで……。

何かをする気力や考える意志や思考力といったものがどんどん削られていき。

ぼんやり、と何もかもが曖昧になっていく。

……なるほど。これが『消える』という事なのか。

なんとなく『死後の世界』があつたらこんな感じなのか、と思つてしまった。

ここが『死後の世界』だとするとこの暗闇は『奈落の底』なのかもしれないな。

もつと絶望や恐怖に包まれるかと思つていたが、そういった感情すら湧かない。

もう何も考えなくていい、もう何も気にしなくてか。

体を動かす事も出来なければ、感じる事も出来ないのだから。

このままぼーっとしていれば、本当に何もなくなっていくのだろうな。これが『消失』という事なのかもしれない。

ああ……どんだん心というものが溢れ落ちていくのが解る。

このまま、消えるのもいいのかもしれないな。

そんな事を思った瞬間。

頭がズキンと痛んだ。

まるで硬い金属で殴られたかのような、ズキズキとした痛みを感じて……。

そして、俺の頭の中にその声が聞こえてきた。

『本当にいいのか?』

何だ?

『それで本当にいいのかよ、答えろ!』

エネイブル!』

「うっ……誰……だ!?」

俺の頭の中で叫ぶお前は一体誰なんだ?

『気がついたか……』

俺が誰か、か。

解らない。俺も自分が誰かなんて覚えてないからな。

俺の事は今はいい。

それより早く彼女を探してくれ！」

ズキンズキンと痛む頭を抑えた俺はその痛みによつて自分が置かれている現状を思
い出した。

「そうだ俺は……。」

『四度目の夢』を見て……和服の少女に会つて……。

「つて、そうだ！」

彼女は？

あの和室でしか会えない少女は何処にいるんだ？

声が出た事により意識がはっきりとしてきた。

「そうだ俺よ。何忘れていたんだ。」

彼女の、あの少女の涙を止めるのが先だろ。

何まつたりと、『消えよう！』なんて思っていたんだ、バカか俺は。

『まったくバカでハゲだなお前も』

「ハゲてねえよ!!?」

「つてんな事より、何処だ……何処にいる!!?」

『落ち着けよ』

落ち着いて辺りを探ってみると、自分の体が温かくて柔らかいものに触れているのが解る。

まだ、体はあったのか、という気持ちと。

その温かいものが何か、というのはいい出せた。

そうだ！

彼女は、この暗黒空間と一緒に飛び込んで来たんだ。

本来なら俺だけが来て消えるはずだったであろうこの暗闇と一緒に来るなんて……

そんなのは自殺行為以外のなにものでもない。

「あ……良かった。消えて……ませんでしたね……」

その弱々しい声はすぐ近くから聞こえた。

俺の胸元から聞こえた事から察すると……どうやら俺は彼女に抱き締められている

らしい。

体を感じる温もりがそれを把握させてくれたおかげで、ちゃんと意識を保っていら

る。

抱き締められた事により……ドキドキしたせいとか、血流が体の芯に集まったけどな。

『彼女に抱き締められていた、だと!?』

爆発しろ！

エネイブル爆発しろ！』

そして頭の中にその声は変わらず響く。

お前が爆発しろよ。

「どうして、飛び込んで来たんだ？」

彼女が側にいてくれた。

その事実には安堵しながらも思わず尋ねてしまう。

彼女が何故、一緒に来たのかを。

「……その……」

「うん？」

「初めて……抱き締めてくれた人を……失うのが怖かったです」

『うひょー、なんていい子なんだ！』

抱き締めてええええ』

お前は少し黙れ！

つてか、頭の中で号泣すんな。

何故か解らないが俺の頭の中で叫ぶお前と俺は繋がっているんだから、お前の感情は俺にだだ漏れだぞ？

だからその、人生で初めてモテた！　　みたいな事を思うの辞めろ！

記憶を無くしているだけで、本当はモテモテだったのかもしれないぞ。

『マジで!??!?』

いや、知らんけど。

そんな事より……。

「君が助けてくれたんだね、ありがとう。君がいなければ危うく消えるところだったよ」
「忘却は永遠の安らぎとも言います。本当はそのまま消えてしまった方が、貴方は気持ちよかつたのかも知れませんが……」

『何言ってるんだ。君みたいな子を抱き締めた方が気持ちいいに決まってるだろ』

「何言ってるのかな? 君みたいな子を抱き締めた方が気持ちいいに決まってるだろ」
「ろっ」

息びったり重なってしまった俺とソイツの声。

『真似すんなよ』

お前こそ真似すんな。

そんな俺達の内心を知らない彼女は……。

「あ……」

照れたような反応をした。

そしてもじもじしたような身じろぎをして。

「……恥ずかしい、です……」

そして困ったような嬉しいような眩きをした。

その姿はなんて言うか……。

『う、初々しい』

ああ、初々しいな。

どうしてかは解らないが、俺の感動はかなり大きかった。

まるで普段から、例えばきつつい事を言ってくるDS少女や、優しいんだけど小悪魔過ぎる少女や、明るいんだけど思わせぶりな少女や、潔癖症でクールな少女や、優秀なんだけど人格に問題のある少女や、家事が得意で頼りになるんだけどちよつと腹黒いかもしれない少女しか身の回りにいないかのような気分だ。

あくまで例えだが。

『あー、なんだか俺も似たような気分を感じたな……』

それと……。

『ツンツンしているけど気楽に話が出来る少女、がいたような気がしたんだろ？』

ああ。誰かは思い出せないけどな。

目の前にいるこの子のがそうじゃなかったか？　なんて思ったが……。

『タイプ違うしな……』

そう。目の前の和服の少女は清楚で可憐、控えめで大人しいタイプの子だ。

タイプが間逆なんだ。

なのに、どうしてこの子がその女の子だと思ってしまうんだろう？

解らない。記憶を取り戻せば解るのかな？

「しかし、どうしたもんかね、これは」

真つ黒な空間に対処出来ないでいる。

和服の少女の温もりを頼りにして自我を保っていられるのにも限度があるだろう。

むしろ意識がはつきりしたせいで、時間の感覚を失っていた事に気づいてしまった。

つまり、ここに来てどれくらい経過したのかが解らないんだ。

或いは、とつくに何日も過ぎているかもしれないけど正確な日時も解らない。

さっきまでの。意識が曖昧でいた時間でもっと何かが出来たかもしれないのに。

「くそっ……」

自分の事さえ思い出せれば、なんとかなるなんて思っていたが、自分が誰かを思い出すのがこんなに難しいなんて思いもしなかった。

『今後は、記憶喪失物の物語を読んだら、どれだけ記憶を取り戻すのが大変なのか、共感して読む事が出来るな』

ああ、全くその通りだな。

「ごめんよ。君を助けるつもりが、助けられた」

「いえ、なんと言いますか……」

「ん？」

「こうして抱き合っているだけで、幸せなもので……」

『勝手にお嫁さんにした人ランキング5位以内確定です！』

なんだよ、そのランキング……。

俺の頭の中で馬鹿な事考えるなよ。

まあ、気持ちは解らなくもないけどな。

確かに、お嫁さんにするならこういう子の方が……。

ゾクリ。

「っ!!??」

『っ!!??』 今、背筋が寒くなったような……気のせいかな?』

ああ、気のせいだ。うん、きつと気のせいだ。

なんだか誰かに見られている『視線』とかも感じるけど……気のせいだよ。うん。

さて、冗談は置いといて……。

「そっか。なら、いいのかなあ……?」

心臓がやたらとドキドキしているのが解る。

つまり、俺の体は健康体なんだ。

それだけでも解れば安心だ。うん。

「ふふっ、でも……恋人さんに悪いから、これ以上は遠慮しておきます」

『恋人……だと!?』

爆発しろ! 即効爆発しろ!!?』

「いや、恋人は……いたような記憶はないけどな……」

そもそも記憶がなくなっているのだから、そんなのは解らないのだが。

というか、頭の中の俺よ。

お前が言うな!

……なんて、なんとなく思ってしまった。

「そうなんですか? だって……」

「ん?」

和服少女が、俺の首筋を人差し指でなぞるような感触がした。

「ここに……キスマークが」

そう彼女に言われた瞬間。

ずぐんっ!!?」

頭を再び硬い金属で殴られたような衝撃が走った。

「ぐうっ!!?」

『これは……!!?』

「どうしたんですか!!?」

背筋が熱くなった。

まるで炎がすぐそこに生まれたような感じでもとても熱い。

だが、それ以上に脳が焼き切れるんじゃないかと思うくらい熱い!

「あ、あ、あ、あっ!!?」

『……蟲……赤い虫』

脳の血管の中に、無数の蟲がざわざわと這いずり回っているかのように激痛が走った。

脳細胞の細胞という細胞に、熱くておぞましいものが取り憑いて、その熱で脳を内側から噛み千切るんじゃないかと思うくらい、そんな勢いだ。

「ど、どうしたんですか?」

少女の心配そうに泣き叫ぶ声がもの凄く遠くから聞こえる。

激痛のせい、その声がぐわんぐわんと響いては、頭の傷口に唐辛子でも塗り込んだかのようにさらなる刺激を与えてきた。

『待ってくれ。そんなに泣き叫ばないでくれ!』

痛い。痛みでどうにかなりそうだ。

いや、もうどうなってもいい。

この痛みから解放してくれ!

『辞めろ!　泣かすな!　これ以上、彼女を泣かすなよ!』

変われ!　俺と変わってくれ!　俺はどうなってもいいから……!』

気を失いそうになる中。

頭の中でそんな声が響き。それと同時に……。

ぎゅううう、と前から強く抱き締めてくれる感触と。

背中から励ますかのような熱さがあつた。

———
そうか、これは。

思い出す為に必要な苦しみなんだ。

『出来ない』を『出来る』に変える為に必要な痛みなんだ。

だったら、これに……。

『負けられ……るかよおおおお!!?』

負けられない。

負けてたまるかよ。

俺の桜吹雪を……

「散らせられるものなら……散らせてみやがれええええええ!!？」

目の前の少女を力強く抱き締めながら叫ぶ！

背中 of 熱さを信じる。

頭の中の俺にも負けたくない。

頭を駆け巡る激痛さえも頼りにする。

そうだ。

「俺は………!!？」

眠る前に、熱いキスをしてくれた少女を思い出す。

「俺は………!!？」

異世界から俺を探しに来てくれた、俺のメイドさんを思い出す。

「俺は………!!？」

いつだって、背中を守ってくれる少女を思い出す。

「俺は………!!？」

ロアとなっても変わらずに接してきた、自分の義妹を思い出す。

「俺は!!？」

そして、そんな彼女達を自分の物語にした。

『俺』自身を思い出す！

そうだ……俺は。

いや、俺達は……。

『101番目の主人公』、一文字疾風だああ!!?』

『101番目の主人公』、遠山金次だああ!!?』

絶叫した瞬間。

頭の中で何かが弾けたような、そんなイメージと。

まるで鏡に向かい合う俺とアイツの姿がイメージして……。

そんなイメージと共に。

俺の視界は白くなり……。

俺は、『俺達』は一つになった。

第二十話。託された想ひ

……。

……！

……？

……は？

気づけば俺は暗闇の中にいた。

何も無い。何も見えない。感じない。そこにあるのは無の世界。

自分が誰なのか、ここは何処なのか……そんな事は気にならなくなる。

ただ、一つ……いや二つ気になるのが。

……俺の周りには誰もいないはずなのに感じる人の温もりと、俺の中にいるもう一人
いる俺の事。

正直訳がわからなかった。

俺は俺で。俺という人物は一人しかいないはずなのに。

何故か俺の中にいる俺という人物を認識出来てしまう。

ここは何処なのかとか、自分の名前は誰かとか、そういう事は解らないのに、何故かソイツの名前は理解できて。

そうだ！

もう一人の俺は……。

『遠山金次』という名前だという事が解ってしまう。

そうだ！

俺は確か……。

確か俺はアイツに……。

俺という存在がずっと眠っていた事は解る。

俺とは別の存在が俺の身体を操るあの感覚……。

考えただけでゾツとしてくる。

俺じゃない人が俺として振る舞う、あの感覚……。

何度叫んだだろうか。

何度変わろうともがいただろうか。

でも結局、何も出来なくて。

唯一、安心したのはアイツが周りの女の子を幸せにできる奴だという事で……。周りにいる女の子が幸せそうなのを見てみると、女の子が幸せならいいかなー、なんて思ってしまった。

でもキリカがアイツに口づけをした瞬間、俺の理性は暴れ出して……。キリカは俺の……。とか思ってしまった。

その瞬間、なんとなく……。キリカと一之江という少女は俺の『物語』なんだと。そんな認識を持つてしまい、その瞬間。

アイツの雰囲気が変わるのを俺は感じた。

まるで、別人のように獰猛な雰囲気になったアイツは……。恋人を奪われた男のような顔つきになった。

怖い。

アイツのその顔を見た俺は恐怖で身が竦みそうになった。相手を萎縮させる強烈な視線。

その視線を受けて身が竦んだ俺の意識は途切れて……。気づいたときには……。俺は、アイツの目の前に立っていた。

身体は透けた状態で、おそらく相手からは見えていないだろうけど。

確かに俺はアイツの目の前にいた。

そして俺はアイツが暗闇の中に消えそうになっていくのを見て怒りを感じた。

何で、何でも出来るお前が消えそうになっていて、一緒について来た女の子が消えそうなお前を守ろうとしているんだ！

お前は『不可能を可能にする男』なんだから！

なら、守るべき女の子をほったらかしにして勝手に消えそうになってるなよ！
そう思い、俺はアイツの身体に飛び込んだ。

『本当にいいのか？』

力があるのにお前なら守れるかもしれないのになにもしないで諦める……それで本当にいいのかよ？

『それで本当にいいのかよ、答えろ！』

エネイブル！』

『エネイブル』その言葉に秘められた意味も理解できてしまう。

『不可能を可能にする男』

それは『出来ない』を『出来る』に変えられる男。

決められた物語を『改変』出来る異色の『主人公』。

そして……ズキンと頭が痛み出してこれまでの記憶が流れ込んできた。
そうだ！

そうだった。

俺は……。

俺とは別の人が体験した俺としての記憶や知識が流れ込んできた。

俺は……！

いや、俺『達』は……。

『101番目の主人公、一文字疾風だああ!!?』
ハンドレッドワン

気づけば俺はそう叫んでいた。

そして叫んだとほぼ同時に俺の視界は白く染まって……俺とアイツは鏡に向き合うように向かい合って。

そして俺達は一つになった……。

一つになる瞬間、俺は思った。

もしこのまま俺という存在が消えてしまっても……コイツになら、音央やキリカ、一之江や先輩……俺の周りに集まる女の子達を託してもいいのかもしれない。

そんな事を考えながら俺は……。

「きやあつッ？」

気づいた時には詞乃ちゃんの悲鳴がすぐ側で聞こえていた。

ガシャン！ とガラスが割れる音が鳴り響いて、詞乃ちゃんが窓の外に飛ばされていくのが目に入った。

助けようと動いた時にはすでに遅く詞乃ちゃんは庭石にぶつかって、ぐったり倒れていた。

「だ、大丈夫か？」

自分の命を狙う相手でも女の子なので心配になった俺が声をかけると。

「詞乃ちゃんにも優しいんですね？」

俺に抱きついていて……というより、俺が抱き寄せている少女がジト目で見つめてきた。

「あ、いや、ほら、美少女に優しいのは男の性というか……」

『相手が美少女ならどんなオバケだろうと大歓迎だからな！』

もう一人の俺の言葉を無視しつつ、何だか修羅場っぽいなー、などと思いつつも自

然と口から出た言葉を言う。

「むー……」

俺の返答に不満なのか、抱き寄せた少女は不満そうに頬を膨らませている。

……修羅場っぽいな。

「あはっ……？」

そんな事を考えていると、庭石にぶつかって倒れていた詩乃ちゃんが石に手をついて、ゆっくりと立ち上がった。

「まさか本当に、自分の事を思い出せるなんて……どんなカラクリ？」

「あ、いや……実は俺にもよくわからん」

「私がキスマークに触れた瞬間に苦しみましたよね？」

ツンツン、というよりは指先でちよつと強く刺すみたいに突付きながら少女が言う。

……キスマーク。直後の激痛。

それらの事から考えられるのは……。

「モンジ君はやっぱり女の子を抱き寄せたりしたかあ」

突然聞こえてきた聞きなれた声。

辺りを見回すと俺の首筋がやたらと熱くなり。そこから赤い光の粒が、まるでシャ

ワーのように無数に溢れ出した。

「そうなるかな、と思つて首筋に仕込んだんだけど……ビンゴでもちよつぴりジエラシーな気分になつちやうものだね」

赤い光の粒が集まってぼんやりとした姿が実体化する。

「よいしょ、つと」

その光のシャワーが収まると、そこにはキリカが佇んでいた。

「ここが夢の中かあ、そして君が『チエンジリング神隠し』ちゃんで、……あつちが噂の『カーニヴァール人喰い村』朱井詞乃ちゃんかな？」

『チエンジリング神隠し』ちゃんと呼ばれた少女は目をパチクリさせながらもキリカに尋ねる。

「え、ええと……キリカ、さん？」

「へえ、ちゃんと表の音央ちゃんの情報は得てるんだね。そりやそうか。そうじゃなきゃ、モンジ君の事を狙えないもんね」

訳知り顔をしてきは色々確認していた。

「ええと、キリカ？」

「あはつ、痛くしてごめんね、モンジ君。でも浮気男の罰としては軽いよね？」

直前まで私とあんなにラブラブだったのに、夢の中に入った瞬間にそっちの『神隠し』ちゃんとイチャイチャしてたんだもん」

「うっ、み、見てたのか？」

「うん。そのための刻印だったからね」

俺の首筋に人差し指を当てて、クスツと笑いウインクするキリカ。

ああ、ちきしよう。可愛いな。

「ちなみに、頭の中を駆け巡っていたのは、私の小さな小さな蟲達です」

「うおおおおおい！」

魔女の刻印怖いな!?!?

キリカの事だからただのキスマークじゃないと思っていたが、まさか直接蟲を体内に入れられていたなんて。

……魔女おつかねえな。

「でも……やつぱり『神隠し』ちゃんの『ロアのセカイ』の中だと、あんまり本調子にはなれないなあ。

モンジ君に送り込んだ私の情報因子が少ないってのもあるけど」

ジジツとまるでG I I Iジーサードが使うメタマテリアル・ギリ光屈折迷彩のコートが出すようなノイズ音と共に、

キリカの体が一瞬歪んだ。

……どんな状態か、詳しい状態はわからないけど……。

「凄いなだね、魔女って」

「魔女だからね」

つまりそういう事なんだと納得してしまう。

「とうか、やつぱり君は『神隠し』の……音央、なのか？」

キリカの言葉から察すると、この着物少女^{イコール} Ⅱ 音央という事になるが……。

「えっと、その……」

その少女を見ると少女は困ったように視線をきよるきよるさせ、頬を染め、おたおたしている。

確かに顔立ちと、体つきは音央なのだが。

あのツツツつ子の音央とはあまりにも態度が違うので同一人物として一致しない。

音央だが音央ではないみたいで……間際らしいから俺も便宜上『神隠し』^{チエンジリング}と呼ぶ事にしよう。

「へえ、『神隠し』はこれでいいんだ？」

と、それまでキリカの様子を観察していた詞乃ちゃんが『神隠し』^{チエンジリング}に尋ねた。

彼女に話しかけられた『神隠し』^{チエンジリング}のその肩がビクツと震えた。

「『神隠し』が消えちゃうと……『あの子』も消えちゃうの？」

「あ……う……」

辛そうに顔を歪めて吐息を零す『神隠し』^{チエンジリング}。

その光景を見た俺は彼女の置かれている状況を理解した。

つまり、この『神隠し』はその『あの子』を消させないために神隠しをしていたんだ、と。

自分から進んで『神隠し』を行うタイプではないと思っていたが。

やはり、そういった理由があつたんだ。

「つまり、『あの子』が消えなければ、もう嫌々『神隠し』をしなくて済むんだな？」

「あははっ！　まあ、そうだけどね？」

ふむ。詞乃ちゃんの言い回しは、何かありそうな感じだな。

そもそもあの子って、どの子の事なんだ？

「モンジ君達は、ちゃんと『神隠し』と向き合わないといけないみたいだね」
チエンジリング

考え込む俺の前にキリカは立って、のんびりと告げた。

「うーん、それってこの『神隠し』の事じゃないのか？」

「あはっ、それを考えるのも、私達の『主人公』の役目だよ、モンジ君っ！」

うーん……キリカのその言い方だと……まだ俺のやるべき事がある。

そういう意味だ、と思うようになるな。

そしてモンジ君『達』って……やっぱりキリカは。

いや、まだ結論を出すには早いな。

俺『達』って事は……俺と『神隠し』の少女の事なのかもしれないしな。

うん。後者だと考えてみるか。

俺の隣にいる『神隠し』チエンジリンクの少女。

この少女が音央なのは間違いない。

間違いないが……。

キリカに彼女について尋ねようと思ったが、キリカは詞乃ちゃんに向き合ってお互いに見つめ合っていた。

「へえ、初めまして、魔女さん。もしかして魔女さんが相手してくれるんだ？」

「うん、初めまして。貴女は『百物語』じゃないっほいから……」

キリカをよく見てみると、その手に赤い粒子みたいな光が集まって……。

やがてその光は赤い大きな、百科事典みたいな『本』になった。

「いただきますーす、しに来ました」

「いただきますすきれに、じゃなくて？」

にこやかに笑う詞乃ちゃんに、にこやかに笑い返すキリカ。

……互いに強力な口ア。

お互いに笑顔なのはどちらも自分自身に絶対的な自信を持っているから、なのか。

「さ、モンジ君。『あの子』を『神隠し』ちゃんと一緒に探してきて？」

「あ、う、うん……任せていいんだな？」

「もちろんっ」

キリカはその分厚い本を掲げて、親指を立ててくれた。

……その赤い表紙からは禍々しい雰囲気を感じられて、背筋がゾクゾクした。

だが、俺はキリカに向かって親指を立て返して叫ぶ。

「じゃあ、頼んだよ。キリカ！」

「うんっ。頼まれたっ」

俺は黙り込んでしまった『チエンジリング神隠し』の手を引いて和室の先にある……その庭から、外に

飛び出した。

2010年。 ☒月☒日。 ☒時☒分。

『神隠し』である少女の手を引いて、俺は村の中を歩く。

気づけば陽は沈もうとしていた。

その光景は音央の姿を見た、あの日のように真つ赤な夕暮れ時で……。

辺りの景色は確かに『富士蔵村』なのだが、以前に感じた禍々しさは感じられない。

どちらかという和田舎特有の落ち着いた空気や安心出来るような、ホツとするような。

だけどこか物悲しい……。

そんなノスタルジックな雰囲気だった。

「あの時、なんとなく感じた懐かしさは、この村に来てたからだだったんだな」

「はい。おそらく、私の心と既に同調していたからだ……思います」

あの時一緒にいたから、ではなく。あくまで夢の中の存在として語る『神隠し』の少女。

……この少女はやっぱり俺がよく知る『音央』ではない。

そんな気がした。

「てつきり、音央が眠っている時の存在が君なのかと思っていたが」

『^{チェンジリング}妖精の神隠し』というからには、夢の中で音央とロアがチェンジしていると思っていたのだが。

「……………」

沈黙した彼女の顔を見る限り、そんな簡単ものではないようだ。

「音央……なんだよな？」

「はい……それは間違いありません」

やや、間が空いてから返事を返してくれたが、彼女の顔は浮かないままだった。

その顔はどちらかと言えば……悲しんでいるのではなく、悩んでいる顔。

「でも、貴女の知っている『音央』とは別人です」

「……そうか」

「はい。」

……疾風さんは、それでも……私を救おうとしてくれますか？」

疾風さん、と呼ばれる事に違和感があるが。

モンジ呼ばわりに慣れたって事か。

まあ、仕方ないな。

『仕方なくねえよ？』

頭の中に俺の声で俺が叫ぶ。そう、消えなかったんだ。俺もアイツも。

モンジがモンジ呼ばわりされて頭の中でぎゃんぎゃん騒いでいるが……それは放つ

て置くとして。

目の前の少女を救うかという問いにはこの答えしかないな。

『救うのは当然だ』

「救うのは当然だ」

全く同じタイムミングで重なる俺とアイツの声。

「結果、貴女がよく知る『音央』が消えてしまったとしてもですか？」

「……どういう事だ？」

「消えるという事がどういう意味なのかはよく解らないけど……俺は『音央』を助けた
い」

「解りました……彼女のもとに、案内します」

『神隠し』は俺の手を引いて、村から遠ざかる道を歩き始めた。

その後ろ姿が、背中が、どうしてもか悲壮な決意を秘めているように見える。

彼女の手を握り返しながら……今日はよく女の子の手を握る日だな、なんて思いながら彼女についていくと。

彼女が俺を導いた目的地も、また同じ場所だった。

山の道路脇にある、電話ボックス。

さつきキリカとドキドキイチャイチャした場所だが、今はそこに先客がいた。

あれは……。

「小さい頃の、音央か？」

目の前の電話ボックスの中にツインテールの勝ち気そうな少女がいた。

自分自身を守るように膝を抱えてじっとしている。

「これは私の記憶です」

『神隠し』が眩き、細めた視線で俺に向かって振り向いた。

「ああやって……ずっと、朝が来るのを待っていたのか」

陽が落ちて、辺りは真つ暗になりつつあった。

周りの灯りは電話ボックスを照らす電灯と、月明かりくらいしかない。

「大好きな担任の先生に渡すプレゼントを買った帰り……プレゼント代ピツタリしかお金を持っていないなかった私は、財布の中に一円も入っていませんでした。だから……隣町から、歩いて帰るしかなかったんです」

隣町というのは、月隠市の事か。

夜霞市では手に入らないものも、月隠に行けば手に入るからな。

そして月隠市に行くのには境川を渡るか、境山の山道を向かうしか道はない。

「気がついたら、この道に迷い込んでいました」

ああ、だから迷ったのか。

境山の山道はちよつと複雑で、山越えるルートがいくつかあり、一本間違えると、どんどん深い山の中に入ってしまふからな。

小学生の足で一度別の道に行ってしまったのなら……まだ明るいうちにここまで

戻って来た音央の判断は間違っではないなかっただろうな。

「ああ……もしかして、このラジオって」

俺はDフォンと一緒にポケットに入れていた『三度目の夢のお土産』で渡されたラジオを取り出した。

「はい。結局渡す事が出来なかったプレゼントです」

「え？ 何で」

「……担任の先生は、もう………『チエンジリッ神隠し』に遭い、消えてしまいました。

いえ。私が消しました」

見ている風景が変わった。

そこは……小学校だった。

小学校の教室。

賑やかな小学校の教室で、子供達が、ワイワイと音央の周りに集まっていた。

「おっと!?？」

子供の一人がぶつかってきたが、その姿は俺を擦り抜けた。

「記憶の投影です」

「ホログラム立体映像みたいなものか……」

試しにロッカーや本棚に触れてみたが、擦り抜けた。

『おおっ！　こりやあ面白いなー』

何だか楽しくなってきたその時だった。

「ほんとよ!!?」

小学生の音央が叫ぶ声が聞こえた。

『ほんとに、プレゼントを買ってきただけなんだから!』

『じゃあなんでそのプレゼントを持ってないんだよ!!?』

もうとつくに過ぎてるぜ!!?』

いい加減な事言つて本当は誘拐されたんじゃないのかー?』

お前、本当は音央じゃないんじゃないかー?　なあ!』

『うきーっ!　殴り倒す!!?』

『ひい!　ごめんなさーい!!?　調子に乗りましたあー!!?』

『泣いても許さないわよー!!?』

それは音央が男子に虐められるシーン……ではなく、力押しでなんとかするシーンだった。

殴られた男子に思わず合掌してしまう。

「お巡りさんに保護された私は、疲労とか検査で色々あつて、一週間ほど学校を休んだんです。

そして、その一週間の間に『担任』の先生は……『神隠し』に遭いました。

なので、吉島先生という教師は元々副担任だった先生の名前です」

『チエンジリシグ神隠し』か……もしかしてあの音央もその先生の事を忘れてしまっているのか？」

担任が変わった事を疑問に思っていない様子の音央。

担任の為に買ったプレゼントは何処かに失くしたようだ。

辻褄が合わないところを、持ち前の強引さで納得させたのだろう。

「あの子は何も知らないままです。全て、私の独断です」

『あの子』……その言い方で確信を得る。

つまり今見ている音央と、ここで語っている『神隠し』は別人なのだ、と。

『神隠し』に遭った人は消えます。疾風さんも体験した、あの真つ暗な場所で気持ち良く、自我と共に全ての感覚と存在を忘れていくのです。そして……」

視線を『音央』の方に戻すと……。

音央はスクスクと成長していった。

楽しそうに笑いながら、幸せそうに。

強気な性格のせいもあってか、悲しい事があってもへこたれる事もなく、立ち向かう姿勢で挑み、なんとか頑張って生きていた。

そんな音央の様子を、こちらの音央は母親のような包み込む視線で見つめていた。

まるで、自分の全てを託すかのように。

だが、そんな彼女の視線の先にいる『音央』を見ていた俺はふと疑問に思ってしまう。記憶の中の音央にはいくつか不自然な点があるような？

そう、記憶の中の音央と俺が知る音央には記憶に差異があるんだ。

例えば、小学生時代の音央は両親と一緒に暮らしていたが、今は当たり前のように親戚と一緒に暮らしていたり。さつき、音央にちよつかいをかけていた少年や宥めていた少女達は、次の学年になると全く現れなくなったり。中学生時代に音央が憧れていた先輩も、すぐに記憶の中に登場しなくなったりして。

そして音央本人は、その人物達がいらない事を当然のように受け止めていて、平和に楽しそうに過ごしている。

そう。いなくなっているという事が当たり前になっているんだ。

「……『神隠し』か？」

「いなくなった方々の事はみんな私が覚えています。ですが、『あの子』は覚えていません。

……きつと知ったら、あの子の性格なら」

『強気を装っているだけで、基本ヘタレだから……壊れてしまいかねないな。音央なら』
「強気に見えて、実際は繊細だから……真実を知ったら壊れてしまう、か」

「はい。あの子が頼りにしたり、気に入ったり、淡い想いを抱いたり、依存したり……逆
に嫌ったり、腹を立てた人物が『夢』に出ます。

そしてその夢は……その人物も見る夢で。

……私が、『神隠し』に遭わせる形になります」

彼女のその言葉を聞いた俺の、胸の中に熱い気持ち溢れてきた。

これは悲しみや哀れみ、同情といった優しい類のものではない。

怒りだ。

「何で、何でそんな事を……」

音央はあの子は普通に、楽しく、明るく生きていたただけだ。

ごく普通の女の子として、本当は弱いのに強がつて生きているそんな普通の子だ。

それなのに、あの子が大事に思った人物はみんな消えていく事になるなんて。

それも、彼女は何も知らずに覚えている事すら出来ないなんて……。

「そうしないと、あの子は消えてしまうからです」

淡々と、感情を押し殺した口調で『チエンジリン神隠し』は告げた。

彼女のその言葉にふと疑問を感じた。

そうしないと消えてしまうなんて、まるで口アみたいじゃないか。

こっちの彼女。『神隠し』が消えてしまうなら、解らなくはないが……。

……いや、まてよ？

「もしかして……」

疑問を感じた俺は彼女の方に視線を向けた。

着物姿の彼女は俯く事もなく、俺をじっと見つめていた。

「『神隠し』をしないと。消えてしまうのは、君じゃなくて……」

「はい。あちらの『音央』です。だってあの子は……」

辺りの風景は俺もよく知っているものになっていた。

そこは、俺達を通う高校の、生徒会室。

『怖いにゃー』

声が出た方を見ると、詩穂先生が机の上にくったりしていた。

『何がですか？』

音が資料の整理をしながら尋ねていた。

『神隠しがこの街で起きているんだって。やっぱりまたモンジくんにご相談しようか』

にゃー』

『モンジに？』

『そ、モンジくん。とっても頼りになるよね？』

『あいつ……ですか。確かにアホですけど……まあ、頼りにはなる……かな？』

『誰がアホだ!??』

モンジのツツコミが入った。

うん。音央が普段、俺の事をどう思っているのか、露見した瞬間だな。

風景の中の、記憶の中の音央は詩穂先輩にからかわれて。

『あ、あいつはスケコマシです！ 絶対！ 女の子とすぐ仲良くなりますしっ』

『ふーん……じゃあ音央ちゃんも仲良しなんだろうね。明日、相談してみてくれるかな？』

例の『神隠し』を調べてーって』

『会長の口からお願ひした方がいいと思うので、あたしは連れて来るだけにしますね』

『うんうん、それでいいよ！ ありがとねん♪』

……そして、此間の朝に繋がるわけか。

「この日、貴方を強く意識した音央は、貴方の夢を見ました」

「それで、俺は君に会ったっていうわけか」

「……はい」

『スケコマシっていうところは否定したいなあ』

全く同感だな。

『しかし、もっと早く……俺が一之江と会う前にこの手の状況に陥っていたら。

なす術なく、消えていたな。きつと。

「……」
「ただ、本当に、『今』で良かった」

「ああ。『今』だからこそ、なんとか出来るからな。」

「俺達はさ、音央が俺の夢を見てくれた事が嬉しいよ」

「え、疾風……さん？」

「音央が俺の事を夢で想ってくれたから、だから俺達はここに来れたんだ。」

「そうなのですか？　だって、あの子が貴方を想わなかったら……」

「想ってくれたから、こうして2人とも助ける事が出来るんだよ？」

「2人とも、助ける……？」

「ああ。だから今、彼女がいる場所に案内してほしい」

「……ですが、あの子は……真実を知ったら、きつと……」

「大丈夫だ！」

『神隠し』の手をぎゅつ、と強く握り締めながら俺は言う。

「大丈夫だ。音央は……とことん弱い！」

「え……？」

「本当ならここは『強いから大丈夫』というべきなのかもしれない。」

「……」
「ただ、それは逆効果だ。」

『弱いから強がるんだ。弱いから負けないように頑張るんだ。あいつは……』

「音央は弱いから大丈夫なんだ！」

弱いからどんな困難にも立ち向かおうとしてくれるんだ！

もし、倒れそうになったら、絶対に大丈夫にしてみせる！そして君も助ける！

ここから外に出してみせる！

俺が教わった心得にこうあるんだ。

仲間を信じ、仲間を助けよ。

依頼人との契約は必ず守れ、つて。

俺は音央と約束した。

『何かあったら、俺が守る』つてね。

だから俺達に任せてくれ！」

俺がそう言うのと、『神隠し』の少女の瞳から大粒の涙が溢れ落ちた。

「……疾風さん……助けて、くれるんですか……?」

「俺は、いや、俺達は『主人公』だ。泣いているヒロインをみんな助ける役だからね！」

きつぱり言い切ると。

『チエンジリング神隠し』の少女はそのままポロポロと泣き出して。

「わかりました……貴方に……託します」

目を閉じ、俯き、眩いた。
『フェアリーガーデン』
『妖精庭園』

第二十一話。妖精の神隠し

少女が呟いた直後、辺りは茨の壁に囲まれた美しい広大な庭園になっていた。

その庭園の花壇には色とりどりの花が咲き乱れていて、その庭園の中央にあるアーチの先……一番奥の壁に。

「音央……」

制服姿の六実音央が、まるで囚われたお姫様のように茨の中に捕まっていた。

その光景を見て呆然とした俺に、『神隠し』の少女が囁く。

「あの子はあの日、自分が見ている夢が貴方を消すかもしれないと思って……自分の存在を無意識のうちに放棄しようと思いました。それ以来、ずっとここに逃げていたのです」

「それでも、逃げた先でも俺と過ごす夢を見てしまったっていう事か……やれやれ」

絶対に『助けて』と言わない気の強さを持つ少女。

だからこうして想いが溢れてしまうんだ。

素直に生きられれば楽なのだろうが……まあ、ツンツンした天邪鬼な性格だからこそ音央らしいとも言える。

「さてと。それじゃあ……お姫様を助けに行くかな」

そう言つて俺が一步を踏み出そうとした瞬間。

「あー！」

『神隠し』の少女の叫び声が聞こえ、俺を阻むように両サイドの壁からシウルシウルと地面を這うように茨の蔦が伸びてきた。

その蔦は俺の進路を阻むかのように、俺の目の前でうねり始めた。

「どうして来たのよ」

瞳を閉ざしていた音央がその目を開けるやいなや、強気な眼差しを俺に向けて睨みつけてきた。

音央の言葉と今の状況から察するとこの蔦植物を操っているのは音央なのだろう。

そして、この阻みっぷりからして俺に近づいて欲しくないという事なのだろう。

「どうして、つて囚われのお姫様二元に騎士が来る理由なんて昔から変わらないものだよ？」

君を————救いに来たんだ！」

「なっ……ば、馬鹿じゃないの!?？」

「馬鹿で結構。目の前で苦しんでいる女の子を救えるのなら俺は一生馬鹿でいい」

「馬鹿よ。あんたは本当に大馬鹿よ！」

なんで……なんでよ。なんでよりによつてあんたが来ちやうのよ」

「誰かさんが俺の夢を見たからじゃないか？」

「うぐつ、それは……」

「冗談だ。友達が、しかもとっても可愛いらしい美少女が困っていたら助けるのは当たり前前だろ？」

目の前で畝っている蔦植物を気にせず歩き出そうとした瞬間。

「あ、危ない！」

『神隠し』の少女の叫び声と同時に、茨の蔦が俺の両腕に絡みついてきた。

茨の棘がジャージ越しに肌に食い込み、全身に鋭い痛みが走った。

「来ないで！」

「まあ、君ならそう言うよね」

全身が痛む。

だがそんな痛みを気にする事もなく、俺はそのまま歩き始めた。

「疾風さん！ この『妖精庭園』^{フェアリーガーデン}は……彼女の心の中そのものです！ 何者にも踏

み入れられないように、固く閉ざした絶対の空間……疾風さんを敵とみなしたら、無限の茨に襲われます！」

「ああ、解った！ ありがとう」

外敵とみなすならみなせばいい。
そんな程度じゃ俺は止まらない。

そんな思いで、俺はさらに一步、足を踏み入れた。

シウルシウルと伸びてきた茨によって腕に傷が付けられるが……。

こんなもの、アリアや一之江から受ける痛みに比べたら全然大した事はねえ！

桃まん買い忘れただけで銃撃された前世や突然背中を刃物で刺されたりしている今の俺の日常を舐めるなよおおお!!?」

「いや……嫌だ、来ないでよ!!?」

うっ、涙目になってそんな風に言われると結構来るな。精神的に。

「なんかその言い方だと暴漢してる犯罪者みたいに聞こえるからやめてほしいな」

「う、うっさいバカ!」

そんなやり取りをしながらも、絡みついてくる茨の蔦の中を気にせず歩いて音央に近づいて行くと、蔦の刺によって腕や頬、足、胸といったように全身を切られるが、そんな事は大きく気にならない。

それくらい、俺は怒っているんだ。

「っ、バカっ、ち、血まみれになってるじゃない!」

「そうしたのも君だろ?」

我ながら意地の悪い言い方だなあ、なんて思う。

だけど俺は彼女に解ってほしい。伝えたい想いがあるんだ。

俺の想いを知らない彼女は俺を睨み、唇を噛みながら泣き出しそんな顔をしながら叫んだ。

「どうしてよ！ どうしてそこまでして、あたしなんかを！」

「なんかかって。ファンがいるくらいみんなから好かれてるじゃないか」

「なんかはなんかよ！ あたしが、あたしが、みんなを消したかもしれないでしょ？」

音央のその言葉に、俺の後ろで見守っていた『神隠し』の少女が息を飲むのが伝わってきた。

「先生も、パパも、ママも、お友達も……皆んなみんな、あたしが夢を見たせいでいなくなっちゃたんでしょ!!？」

そして、モンジも……!」

そうか。気づいてしまったのか音央は。

……いや、薄々感じていたのかもしれない。

自分の身の回りの大事な人がいなくなっているという事に。

周りから人が消えていけば、そりゃあ違和感も残っただろう。

いくら『世界』が上手い事修正しても、人の『心』にある欠落まで綺麗に埋める事は出来ないのだから。

それに……音央は覚えていたんだ。

夢を見て、その人と一緒に過ごした、という事を。

楽しく過ごして、いなくなったら悲しかったという気持ちを。

記憶は調整出来ても、気持ちまで『世界』は弄れなかったんだ。

「だから、だから消えてしまえばいいのよ……あたしなんて……あたしなんて、いなくなっちゃえば、いいのよ!!？」

何て言えばいいのだろう？

何て声をかければ音央を救えるんだ？

かける言葉なんか見つからない。

どうやって声をかけたらいいのか解らない。

だから俺は行動に移す。

言葉で現せなくても気持ちで現せる事もあるから。

だけどさらに近づこうとした俺に、両サイドの壁だけではなく四方八方の壁から伸びてきた茨の蔦が立ち塞がった。

これ以上一歩たりとも進ませないというかのようには、念入りに、凄まじい力でぐるぐ

ると俺に絡みついてくる。

「だから……だから、来ないで、モンジ……あたし、気づいたの」

ボロボロ、と大粒の涙が音央の瞳から溢れ落ちた。

「あたし……あたしは、本物の音央じゃないのよ」

音央がそう言った瞬間。

辺りの全ての茨が。庭園の花々が。

全て真紅色に染まった。

『^{チェンジリング}妖精の神隠し』。

それは、妖精が人間の子供と妖精の子供を入れ替えるという話。

一晩、行方不明になった音央は、周囲の人々からまるで『別人のようになった』と言われ、噂された。

そう。その噂こそが今回の本当の原因なんだ。

無事に帰ってきた音央は『妖精』で。

本物の音央は『妖精の国』にいる。
それが実現してしまったんだ。

つまり、みんなの前で明るく過ごす『薄い茶色の髪』をした、アイドル的な存在である『音央』こそが『ロア』であり。

『本物の音央』は……『神隠し』チエンジリングとして夢の中でずっと過ごしていた方だった、というのが今回の『神隠し』事件の真実だ。

「どうして偽物のあたしの為に、あたしなんかの為に、ずっとずっと……本物のあんたが、本物のくせに『神隠し』なんてやっていったのよ!!?」

泣きながら絶叫する音央。

俺の後ろからも鳴き声が聞こえる。

「それは……だって……」

「だって、何よ!!? 大好きな人、大事な人を消し去ってまで、なんであたしみたいな化け物の為に人を消したりしてたのよ!!?」

前門の『音央』、後門の『神隠し』。

俺を挟んでの、音央と音央の喧嘩。

美少女二人に挟まれるなんて、ヒステリア^今モード時の俺には嬉しい至福の時間だが……いけません、シリアスな空気のせいか素直に喜べる状況ではないのが残念だ。

「それは……貴女は、私の希望でしたから」

そう、涙声で告げる『神隠し』の音央。

「き、希望？」

『妖精』の音央は意味が解らないというように疑問気味に言った。

だが俺はその意味に気づいた。

気づいてしまった。

——そう、多分、希望だったんだ。

二度と人間の世界、外の世界に出る事が出来ないと理解した音央は、夢の中からずっと『妖精』の事を見続けていた。同一人物である以上、好きになる人も嫌いになる人も一緒だったのだから。

だから、消える前に。

せめて気分を良くしようとしていた。

消えてしまうのだから、せめて心穏やかなままいなくなるようにしていた。

……消失の痛みは、自分が負えばいい。

妖精は、何も知らずに明るく楽しく過ごしていればいい。そう、諦めるしかなかったんだ。

『妖精』は口アだから、噂が無くなったら消えてしまう。

でも、『妖精』である彼女は何も知らない……自分の事を『音央』だと思っているから、誰かを消したりする事も出来ない。

もしかしたら『妖精』が消えれば自分は元の世界に戻れるかもしれない、と考えた事もあった。

だけど出来なかった。

何故なら『妖精』は自分の思い描く最高に素敵な人生を、楽しそうに歩んでいたのだから。

そして、その楽しさと喜びは、自分の中にも流れていたのだから。

だから、そんな彼女を生き延びさせる為には、チエンジンダ 自分が人を消すしかない。

『神隠し』として、人を消し続ける事でしか『妖精』の存在は維持出来ないのだから。
あの明るい笑顔を絶やさない為に。

自分の分身……自分自身の『希望』を絶やさない為に。

少女は『神隠し』という鬼になる事を選択したんだ。

それがこの『妖精の神隠し』という都市伝説

だと言うのなら。

俺はその都市伝説を……。

「変えてやる!」

「えっ?」

「変えてやるよ!」

どちらかしか幸せになれないような物語なんてそんなの認めない!

そんな物語はみんな俺が変えてやる!」

「も、モンジ?」

「……は、疾風さん?」

突然大声を上げた俺に驚いたのか喧嘩を中断して俺の方を見つめる二人。

俺はそんな二人の視線を感じつつ、言葉が続ける。

「本物じゃないから?」

希望の存在だから、自分はどうなってもいい?

……ふざ、けるな!!?」

『そんなの俺は認めねえええええ!!?』

「うおおおお!!?」

大声で叫びながら俺は体を動かす。

肌に大量の刺が食い込んできた。

このまま無理矢理動かして、歩けば大事な血管すら傷つけて俺の体は修復不可なダメージを負ってしまいかもしれない。

だけど、それがどうした！

目の前で泣いてる女の子がいる、それだけで自分の体の事なんてどうでもよくなる。傷ついた女の子がいる、それ以上の辛さなんてないのだから。

ヒステリアモードが続いているせいか、何がなんでも目の前にいる女の子を助けたい

！

そう、思える。

いや、違うな。目の前にいる女の子だけではない。

俺の背後にいる『神隠し』の少女も俺は助けたいんだ！

俺が救いたいのは、『音央』なんだから。

だから俺は……。

「俺は怒っているんだ、音央！　どっちの音央にもだ!!？」

「つ!!？」

「つ!!？」

同時に息を呑む気配を感じながらも俺は体を動かし続けた。

刺が喉に刺さるが、俺は気にせず顔を突き出した。

刺が手首に刺さるが、それも気にせず俺は腕を振るつた。

刺が首筋に刺さるが、それも気にせず、俺は足を踏み出した。

踏み出した途端、真紅の蔦に俺の血がさらに降りかかった。

「や、やめてモンジ!!?」

「やめて下さい、疾風さん!!?」

前と後ろからかかる悲痛な叫び声。

いつもの俺なら、女の子にそんな声を出させたりしないだろう。

女の子は笑顔じゃないといけない、と思っているからね。

いや、そもそも普段の俺なら、女性と関わろうとすらしないかもしれないけど。

だが……。

今の俺は腸が煮えくり返っている状態だから、そんな事を気にしてられない!

「間違つてないが、気に入らないな!!?」

俺の姿は血まみれになっているだろう。

大量の茨に刺されたせいかな、かなりの出血をしているのが自分でも解る。

貧血でぼんやりして意識を失いそうになるが、倒れそうになるのを気合で堪える。

ここで俺が倒れたら彼女達を救う事なんて出来ないからな。

「自分が消えればいいとか、自分が辛い目に遭えばいいとか、そんな事は言うなよ!

音央は音央らしく『うっさいバカ!』とか言つて強がれよ!

君の悩ましい体型に癒やされる男の子は俺だけじゃないんだよ?

君は弩級戦艦級の立派な武器を持つているんだ!

それに女の子のファンがいるつて理亜も言つてたんだ!

明るくて、元気でスタイルもいい……。

一之江が欲しくて堪らないものを持つているのに……。

人に求められてるのに、勝手に消えようとするなよバカ!

「なっ……あ、あんたに言われたくないわよ、バカ!!?」

『チエンジリンダ神隠し』の方の音央もバカだ!

自分が犠牲になればいいとか、そんな事言うな!

本当は自分も外に出たかつたんだらう?

音央と一緒に、笑顔で過ごしたいと思つているんだらう?

なら、何で諦めて達観してるんだよ、バカ!!?」

「つ……一緒に、なんて……それが出来ないから……!」

「出来る!!?」

無理、という言葉は禁止されてるからな。

前世の相棒に……。

前世でも色々な事件に巻き込まれ、そして今まで体験してきた経験から断言出来る！人間、死ぬ気になってやれば出来ない事なんてない。

それを俺は学んだんだ。

だから俺は音央に伝えたい。

諦めないで挑むという『強さ』があるという事を。

「出来る!!?」 俺がやってやる! だから諦めるな!!?

二人とも、自己主張するのは胸だけじゃなくて、思っている事を……ちゃんと本心を

言え!!?」

そう、本当だ。

本当の気持ち俺は知りたいたんだ。

「う、うるさい、うるさい、うるさいいいいい!!?」

『妖精』の方の音央が叫んだのとほぼ同時に、大量の茨の蔦が襲いかかってきた。

万力のように締め付けてくる強力な蔦。

その刺は既に鋭利な刃物のように硬く鋭くなっている。

その蔦が俺の全身を包み、巻き取ろうとしてきた。

だけど……。

俺は『全身』を巻き取られる事はない、と知っている。

さつきから……いや、ずっと。

背中に感じる温かさがあるからだ。

「あ、あの……疾風さん？」

背後にいる『神隠し』の少女は気づいたようで。

おずおずとした態度をしながら尋ねてきた。

「どうして疾風さんの背中は……茨に包まれないのですか？」

彼女がその疑問を口にした瞬間だった。

ピピピピピピピピピピピピピピピピピピピピピピピピピピピピピ!

突然、着信音が鳴り響き。

『神隠し』と『妖精』。

二人の音声が驚いている間に、それは勝手に鳴り止み……。

『もしもし、私よ』

ズボンのポケットに入れていたDフォンからそんな電子音っぽい声が聞こえた。

『今、貴方の後ろにいるの』

第二十二話。選択の時

「っ!?? 貴女……」

目の前にいる『妖精』の音央が驚いて息を飲んだ。

それと同時に俺の背後に、ピツタリと寄り添う暖かい彼女の感触が伝わってきた。

そう。これが、俺が感じていた熱の正体で……。

この子は……夢の中だろうが何処でも現れるんだ。

彼女は俺を『殺す』まで何処にいようと必ず背後に『存在』している。

それは、そう、間違いなく。

「一之江!」

「わ、私の夢を見るなんて……いやらしいっ!」

「ごめんよ、夢の中の君も綺麗だよ」

「うわっ、夢の中でも口説くとか……貴女は本当に真性のバカなのですね」

「可愛い女の子を口説くのは紳士の嗜みだよ?」

「ふむ……なるほど。私は超絶美少女ですからね。モンジが口説きたくなるのはある意

味当然かもですね」

「……美少女なのは確かだけど、その自信は何処からくるんだい？」

「私、メリーさん。とっても可愛い美少女なの」

「可愛い美少女の姿をした人形に追われるのならある意味幸せかもしれないな……うん」

「人形萌えですか……変態ですね」

「いや、違うよ。一之江みたいな可愛い女の子には萌えるかもしれないけどね」

「うわっ、キモ……いやらしいっ！」

「ええっ!?!」

「まあ、キモンジらしいですね」

「待て！　　なんだキモンジって。」

「キモいモンジ。略してキモンジです」

「言い直してないし、余計酷くなってる!?!」

「失礼。嘸みまちた」

「違う。わざとだ！」

「嘸みまちた」

「わざとじゃない!?!」

「そんな小ネタはどうでもいいのですよ」

「うん。そうだろうな」

一之江はどうも登場シーンでは小ネタを挟まないと思いがすまないようだ。

シリアスな空気が苦手なのかもしれない。シリアスな都市伝説なのに……。

だが、そのおかげで俺は冷静になれた。

「え、い、一之江さん……なんですか？」

「はい。ナイスバディに変身した一之江です。これでトリプルボインですね」

「え、え？」

一之江の言葉に動揺している『チェンジリング神隠し』の音央。

妖精の音央の方が無言になっているのは、一度一之江の登場シーンを見た事があるからだろうか。

まあ、狼狽えるのは仕方ない。

一之江はロア状態になっても、ボインには程遠い洗濯い……慎ましい体つきをしているからな。

それにこれまで。『妖精』のテリトリーである『何者も踏み入れられないように固く閉ざした絶対的空間』である『フェアリーガーデン妖精庭園』に『別の存在』が入る事などなかったのだから。

だが、一之江は。

『月隠のメリーブドール』はいかなる空間にもやってくる。

俺を『殺す』まで、絶対に逃がしてはくれないのだから。

「しかし……早朝にキリカさんとイチャイチャしたかと思つたら、夢の中では本物の音央さんとイチャイチャし、んでもって今は妖精の音央さんとイチャイチャするために説得中ですか……節操ありませんね、ほんと」

グサツ、グサツと茨ではない痛みが俺の背中に何度も感じた。

何故だろうか？

茨の刺はたいして痛く感じないのに、この背中の痛みは妙に痛く感じる。

「浮気ばかりしていると刺しますよ？」

「刺されても止められないな。浮気は文化だからねっ！」

ザクッ！

鋭い痛みが襲ってきた。

今までで一番の痛さだ。

「このスケコマシ野郎！」

「……そんなわけで手伝ってくれ」

「うわっ、否定しやがりませんね」

ハア、と溜息が背後から聞こえた。

浮気は止められない、などと言つたが……この背後を守ってくれる少女には感謝と申し

訳なさが浮かんでくる。

「それで、どうしますか？」

一之江はあくまでいつも通り、冷静に尋ねてきた。

「この本物の音央さんを私が殺せば『神隠し』は滅び、既にみんなに認識されているあちらの『音央』さんが戻って来ます。私には『確実に抹殺する』という逸話があるので、例え神隠しだろうが神だろうが殺してみせます」

「……ああ」

一之江がこう断言するのは、より『そう在る』為だろう。

だから彼女は何か何でもどんな相手だろうが殺してみせる。自分が強くある為に。

「ですがその場合、ご本人であったこの方はもちろん消滅です。跡形も、記憶すらも誰の中にも残りません。」

もつとも、この方が消しまくった方々にしてみると、ある意味当然の結末ではありませんが」

一之江のその言葉で確信した。

ああ、そうか。

彼女はわざと煽っているんだ、という事に。

彼女は音央がどういう『罪』を犯したのか、その『罪』にあつたどんな『結末』を迎

えるべきか、俺に示しているんだ。

「ちなみにこの方を殺さずにここを出た場合『神隠し』は残り、あちらの『音央』さんはまたこの事を忘れ……また『神隠し』が発生します。事件は終わる事なくいつまでも続くでしょう」

「……そうか」

前方の音央、後方の音央。

どちらからも苦い気持ち伝わってきた。

「どちらにしますか？」

「解つてて二択にするのはやめような、一之江」

「解つていたから二択しか出したくなかったんです」

俺と一之江はお互いだけが分かり合える含んだ言葉を言いあつた。

俺も一之江もとつくに選ぶべき『結末』は決めている。

なのにこんな確認したのはほとんどわざとだ。

……自分達が下した決断がどういう意味を持つものか。

それをお互いに再確認するための、通過儀礼みたいなものだ。

だから俺は、口を開く。

3つ目の選択肢を突きつけるために。

「あのさ、2人とも」

「……は、」 「……何よ」

同時に前後から聞こえてきた音央の声、

俺は2人に向かってなるべく優しい声色で語りかける。

「君達も俺の物語にならないか？」

それは俺がこの夢に入る前から決めていた事だ。

「俺はどちらかを選ぶとか、どっちも選ばないとか出来ない。音央は……ああ、妖精の方のな。君は昔からの友人だし、一緒にいて楽しいし、君にバカって言われると何だか懐かしい気持ちになつてホツとするんだよ」

「……バカって言われて嬉しそうにするとか、ヘンタイなんじゃないの……バカ……」
弱々しくも変事をしてくれた音央を見ると、やっぱり懐かしくてホツとする。

ああ、そうか。

俺は音央にアリアの面影をみていたんだ。

いや、『妖精』の方の音央だけではない、な。

「そして、黒髪の方の音は……俺に優しくしてくれて、幼馴染みの武装巫女を思い出せ
よ。」

似てるからね雰囲気……鳥の籠に入れられていた境遇とか、自己主張しないその性

格とか。

そんな子を一人きりにさせるなんて俺には出来ないんだ」

もつとも、彼女と白雪は境遇こそ似ているが違う。

白雪は星伽ほしぎの掟に従い、自由を知らずに生きていた。

そしてこちらの……『神隠し』の音央は世界から自由を奪われて生きています。

どちらの方が良い悪いのかは俺には解らんが……解っている事が一つだけある。

境遇こそ違えど、そんな子だからこそ俺は助けたい。

その気持ちに嘘偽りはない。

それに、こちらの音央なら俺が他の女子と会話するだけで襲いかかってきたりはしな

い……はずだしな。

「でも、それは……貴方を消してしまふ為の優しさで……」

確かに彼女のその行いは……甘い言葉で獲物を食べる赤ずきんちゃんの話にそっくりだ。

でも、誰かを騙す為の優しさだったとしても、優しくされた事実は変わらずに残るんだ。

その時感じた気持ちは……嘘じゃない。

例え裏切られると解っていても。

それが嘘じゃないのなら、それはそれでいい時だつてあるのだから。
「助けて欲しかったんだらう？」

「……………」

「俺は、どんなに悪い子だろうと、とりあえず助ける。償いとか、罰とか、そういうのは……消えたり、死んだりする事じゃないからな。

その気持ちを持つて、後悔したり、苦しんだり、反省したり、悪夢に苛まれたりしながら、ずっと生きていく事が本当の償いだ」

それをしない、出来ない純粋な『ロア』みたいなオバケもいるが……。

この音央は人間で。

あつちの音央は人間と同じ感覚を持っている。

なら、2人共……ちゃんと罪に向き合つて、その罪を背負つて生きていける。

俺はそう信じたい。

いや……信じている。

「君が出してくれた御飯も美味しかったしね。俺は、俺に優しくしてくれる女の子はみんな大好きだ」

「私は……貴方も……消すつもりだったのに……っ」

「……脳天に風穴でも開けましようか？」

そんな音央の言葉と一之江の眩きが聞こえて。

それと同時に背後から感じたのは身を凍らせるような寒気と背中に感じる冷たい金属のようなものの感触。

風穴を開ける、か。

ああ、懐かしいな……その台詞は。

そして後ろの方からひく、ひくつという泣き声。

……とんだ泣き虫だな、本物の音央は。

俺はやっぱり女の子の涙には弱いな。

なんとかしたくなってきた。

「優しさっていうのは、された方が感じるものであって、した方は気にしなくていいんだ。」

「キリカなんかを見てごらん。凄い優しくしてくれるけど、当人の中では全部計算だよ？」

「……………」

「一之江を見てごらん。なんだかんだ言って優しいけど、それは全部自分が消えないようにする為であって、自分のロアの力を強くする為でもあるんだからね？」

「まあ、そうです。それに気づいていながら、貴方はキリカさんや私の優しさを信じて

いたりするのですね」

「そりゃ、どっちも俺にとって大事な物語……大事な子だからね」

「このハーレム野郎」

一之江は慚然とした物言いでそう言ったが、不満はいくらか軽くなっているようだ。

「一之江、お願いだ！」

「仕方ありませんね」

鳶は俺の全身を頑ななまでに包み込んでいる。

だから俺は自分の力だけではろくに動けない。

だが、一之江が俺の背にいる時は……。

俺を阻む事なんて出来ないんだ。

「音央、聞こえているんだろう？」

俺の声にぴくつ、と反応した音央。

その姿は茨に囚われたままだ。

俺が音央に話しかけた直後。

俺は音央の、すぐ側に現れていた。

「想起跳躍リングガールです」

言葉が聞こえた人物の場所に一瞬で跳躍する一之江の能力。

その能力を使った俺の目と鼻の先には音央がいた。

俺は自分の体が傷つくのも構わずに茨の中に手を突っ込んだ。

そして音央の手を握った。

「……あんたは……本当に、バカよね」

「君もかなりのバカだけどね？」

ニヤリと笑いかけてそう言うのと、音央はようやく
————— 微笑んでくれた。

その顔には力はなかったが、ずっと悩んで閉じ籠っていた音央を笑顔に出来た。

その事実が何より嬉しい。

「……言いたい事、あるのだろうか？　俺じゃなくて、あの子に」

俺は自分の背後にいるであろう本物の音央の方を指差した。

そう。今まで音央は知らない側だった。

ただどこから先の『未来』を歩むにはそれじゃ駄目だ。

何も知らなかった音央も、知らせなかった本当の音央もお互いに向き合う必要があるのだから。

だから俺は2人に向き合う機会を与える。

「うん………解った」

『妖精』の音央にしてみれば『無知』という罪と向き合う形になる。

本当は辛いし、苦しいだろうが……それでも向き合わないと始まらないんだ。
2人の物語は。

それを知っているのか、茨の壁の中から自分が傷つく事も恐れずに音央は一步を踏み出した。

向かう先は本物の音央の所だ。

「あつ……」

近寄ってくる妖精の音央に、本物の音央は一瞬ビクツとしたが、それでも逃げずにその場に留まる。

「……ごめんね、気づかないまんま、ずっと一人にしてて」

妖精の音央にしてみると、言いたい事はたくさんあるだろう。

自分の大切な人達を、妖精の音央にしてみれば『勝手な判断』で消していた相手なのだから。

だが、音央のその瞳に怒りや憎しみといった負の感情はない。

浮かんでいるのは、いかにも音央らしい強がっている笑顔だ。

「これからは、あたしとずっと一緒にいましょう？　あたしはロアだけど……でも、消えたくない。あたしを生み出してくれた貴女を消してまで生きたくない」

妖精の音央が血だらけになった手を本当の六実音央に差し出した。

その手を見た、音央は涙を零して……。

「でも……でも、私……っ」

「……うん、多分あたしも貴女も絶対に許されないし、今後も生きていくために誰かを消さなきゃいけない時だってあるかもしれない。でも、なんかもつと別の方法もあるかもしれないし……悪いヤツだけ神隠しにする、っていうのもアリかもしれないわよ？」

だから、そういうのをもう一人で決めないで……一緒に、考えよう？
あたし達が消えない方法。

一緒に……仲良くやっていける方法を」

「……一緒にいても、いいのですか？」

「じゃあないもん。勝手に人、消されまくったりするよりマシだし……」

プイっと、顔を逸らしてそう言う音央。

音央が逸らした視線の先は……。

俺や一之江がいる方向だ。

つまり。

音央はきつとこう言いたいんだ。

大丈夫！

私達はもう、一人じゃないよ……と。

「助けてくれる、超御節介な仲間もいるみたいだしね？」

そう笑いながらウインクする音央。

ああ、流石は雑誌モデル。

詩穂先輩と並ぶ学園のアイドル的な存在だけあって、やっぱり可愛いな。

「うっ……ひくっ……うあああああああ!!？」

そして……泣き虫な『神隠し』の音央は、大泣きしながら音央の手を取ると、その胸に顔を埋めて抱きついた。

直後、チャリーン、というDフォンのメロディーが鳴って。

俺は『神隠し』のロアを物語りに出来た事に気付いた。

「『^{チェンジリリング}妖精の神隠し』のロア、取得だな。

これにて一件落着——————かな？」

そう呟いた直後。

グサツ!!？」

「痛っ!!？」

何故か一之江に切り突き刺されたのだった。

「何故刺すんだ？」

「ニヤけ顔にイラつとききました。

ですが、安心してください。

イラつとしたから刺ししたいと思うのは……貴方だけですから」

「その言葉の何処に安心する要素があるんだ!?!」

「特別扱いです。嬉しいでしょ?」

「ああ……嬉しすぎて涙が出てきたよ」

「これは背中からの痛みから出た涙ではない。

音央達が俺の物語になったのが嬉しくて出た涙だ!

そういう事にしてほしい……。

「……あ、あははっ! 見て、アレ」

「……え? ふふっ。疾風さんったら……」

そんな俺の姿がおかしいのか、俺の方を見た音央は笑い合った。

背中に刃物のような何か刺さっていても……2人が笑い合っているのならいいや。

そんな風に思ってしまった。

笑いが収まってから、音央は俺に尋ねてきた。

「ねえ、モンジ……ちよつと聞いてみたい事があるんだけど」

「あつ、あの……疾風さん。私もあります」

「うん？　何かな？」

俺が尋ねると2人は息を揃えて同時に質問をしてきた。

『あんた（貴方）は結局、何者なのよ（ですか）？』と。

何者なのか、か。

もう、自分でもよくわかんないや。

ただ、その質問にはお決まりの言葉がある。

だから、その質問にはこう返すよ。

「ただの高校生だよ。わりと偏差値高めな、都市伝説変わり者が集まる学校のね」

第二十三話。夢の終わり

2010年6月14日。午後5時30分。境山山道。

その日の放課後。私は思い出の電話ボックスを目指して境山を徒歩で登っています。

あの後、妖精の世界から人間の世界に戻る為にキリカさんの力を借りながら、あの子の姉としてこっちの世界で生きる準備をして過ごしていました。

ようやく落ち着いたので今日は皆さんとここ、境山ワンダーパークで遊ぶのです。やりたくても出来なかった友人との遊び。

楽しく平穩に過ごす日常。

夢の中で見ていた夢が今叶おうとしています。

ずっと憧れていた世界。

帰りたいとずっと夢見ていた日常。

ようやく私は夢の中から現実へと戻ることができたのだと、実感しています。

いなくなった人達が戻ってくる事はないけど。

チエンジリング

『神隠し』として過ごしていた私が名付けた事によって『朱井詩乃』ちゃんという『人喰

い村』が自我を持って犠牲者をたくさん出していた事は許される事ではありません。

警察に自主して罪を償いたいと思ってもそれは出来ないのです。

ロアという存在を社会的に認知させる事はあの子や私を救ってくれた皆さんをも危険に晒す行為になるからです。

ロアは人に噂される事によって発生します。

もし今回の事件が大々的に報道されたりすれば彼らやあの子の存在がその噂によって危険な目に遭う可能性すらあるからです。

だからあまりに人間の手に余る事件は……闇から闇へと葬られていくのかもしれない。

誰かが消してくれれば……なんて思うのは単なる甘えで。

本当は自分でずつと抱えていかなければいけない問題なんだと思います。

裁かれたり、罰を受ければ楽になります。

つまり『私』と『あの子』が選んだのは、絶対に楽になれない道なのです。

『幸せ』になってはいけません。

そう思う事もあります。

だけど、私と同じくこの世界に長く身を置く一之江さんはこう言ってくれました。

『死にたくなったらいつでも殺すので言っておきなさい』

その言葉のままの意味で取るなら好きな時に殺してあげるからいつでも楽になれる、

という事なのでしようが、私には『一人で抱えこまないでこの業界を知り尽くしている私達に相談して下さい』なんて言っているように聞こえてしまいました。

……敵わないなあ、なんて思ってしまった。

そういう相談出来る人がいてくれたり、ロアの先輩がいてくれたりする事は、かなり恵まれている事だと思います。この恵まれた状況で何をして、どう生きるのか。

そういう事を真剣に考えるのもまた……私の終わらない罪滅ぼしなんだと思います。
いえ……。

『私達』の。

「お待たせしました」

目の前にある思い出の電話ボックスの前に立っていた少女に声をかけました。

「ううん、待ってないわ」

その女の子の外見は私と同じ顔立ちで、薄い茶色の髪をツインテールにした快活そうな子です。

子供の頃に入れ替わった私の『分身』。六実音楽として自分の代わりに過ごしていた妖精。

「ほんとに良かったの？」

彼女をしげしげと見ていたらその彼女に問われました。

「はい？　ああ、名前の件ですか？」

一瞬、何のことを聞かれたのか解りませんでしたでしたがそれが名前の事だとすぐに察しがつきました。

そうです。私は自分の名前を新しく付けたのです。

前の名前である『音央』も気に入っていましたが、同じ名前だと周りが混乱してしまいますから私は自分の名前を変える事にしたのです。

最初は目の前の『音央』が自分が変わると言って反対していましたが、彼女は既に『音央』として世界に認知されているので私が名前を変える事で納得してもらいました。

「構いません。今の名前も気に入っていますから」

「そう……なら、いいんだけど」

あの夢から出るのに必要だったのは、私自身の『個体認識』でした。

『魔女』であるキリカさんが魔術的にいろいろやってくださったみたいで、詳しい事は解りませんが。

そこには二つの選択肢があつた事は知っています。

『私』の中で二重人格みたいに存在する方法と。

別々の存在として独立して存在する方法。

私達は迷わず後者を選びました。

それは多分……似たような理由からだったのでしよう。

キリカさんはニッコリ笑って、私達が2人とも『表の世界』に出られるようにしてくれました。

今回の件では彼女には本当にお世話になりっぱなしです。

他にも記憶操作をしてくれたり、一之江さんのお金や組織っぽい力を使って、私が夜坂学園に『転校』出来るように手続きまでしてくれています。

……人を使うのが上手い2人を見ていたらなんだか自分が考えていた悩みなどが小さな事のように思えてきました。記憶を弄ったり、お金を使って手続きまでしてしまうなんて……ズルいですよね、本当。

でも、まあ。

彼女達のような『都市伝説』もズルい存在だけど、そんなズルい存在に親しくさせてもらっている私の『リアル』も既にズルいような気がします。

そんな風に思って、思わず溜息を吐いていると。

「へえ、助かったんだね？」

お姉さん達」

不意に背後から声をかけられました。

2人揃って後ろを降り向くとそこには真っ白いワンピースを着た、小さな女の子が立っています。

その女の子の顔は白い帽子で隠れているので誰だかは解りませんが、私は……この女の子に会った事があります。

「貴方は……」

そうです。思い出しました。

幼い頃、私がこの場所で一晩過ごした日。

彼女はあの時もこうやって幽霊みたいに現れて

『これは、いつかお姉さん達を助けてくれるお守りだよ』

そう言つて両手を広げて黒い巾着袋を手渡したのです。

『もつとも、消えなければだけど』

そんな言葉も言つてました。

その言葉を言つた瞬間、すぐに消えてしまった事も覚えています。

「私の名前はヤシロだよ、お姉さん達」

「ヤシロちゃん……そういえばあの時、既に……」

『お姉さん達』と言つていたのを思い出しました。

私がこの場所で一晩明かし、それから噂されるまでにはタイムラグがあります。

だから、あの時の私はまだ『ただの音央』だったはずなのです。

それなのに、あの時から私『達』になる事に……気付いていた？

「ふふっ」

底がしれない子だなあ、と思いつながら。以前手渡された『お守り』を、開けてみるべきだと思いました。

袋の中を見てみると……中には疾風さんが持っていたDフォンと呼ばれる携帯端末が入っていました。

『『8番目のセカイ』によるこそ。おめでとう、やっとお姉さん達の物語が始まるね?』

まるで、今までの『神隠し』は序章に過ぎなかったかのように言うヤシロさん。

「お姉さん達は2人で1人だから、Dフォンは一台しか渡せないけど。危険察知には『神隠しのラジオ』があるからいいよね」

「そういうものなんですね……」

感心するように呟いてしまった私に、ヤシロさんはその白くてほっそりした腕を伸ばしてきました。

「良ければ、新しいお名前を教えてください、お姉さん?」

ヤシロさんに名前を尋ねられた私は、思わず『音央』の方を見てしまいました。

目が合った彼女は何か苦笑いをしながら頷きました。

……なんだか、双子の妹が突然出来た気分です。

「私の名前は……六実^{むつみ}鳴央^な。一応、音央ちゃんの双子の姉になる予定、です」

「へえ。音が鳴る、の双子ってことだね。よろしく、鳴央お姉さん」

ヤシロさんはそう言って手を差し伸べてきました。

これは……握手をしないといけないのでしょうか？

求められたのならないわけにはいきません。

私はヤシロさんと固い握手を交わしました。

「具現化した『神隠し』達が今後、彼らと共にどんな物語を紡ぐのか

ヤシロさんは道路の方に視線を向けた。

「楽しみにしているね、お姉さん達」

私達もそちらに目を向けると。

「ごめんよ、待たせたかな？」

いつもより、鋭い視線をしている疾風さんの姿が見えて、クールな口調の声も聞こえ

てきました。

その声に注意を逸らされていたせいか、気づけばヤシロさんの姿はどこにもありません。

神出鬼没な女の子ですね、本当に。

私は視線を隣にいる音央ちゃんに向けると、彼女も視線を私に向けていました。

元々同一人物というだけあって気が合いますね、やっぱり。

お互いに頷きあつた私達は

私が『ラジオ』を持って、音央が『Dフォン』を持ちました。

2人で一つの『ロア』なのだから、今後もうやつて役割分担をしなければいけません。

「やつほうー！　ねおなおちゃん！」

見れば疾風さんの後ろから会長さんや一之江さん、キリカさん。

ついでにやたらと荷物を持たされているアランさんの姿が見えました。

私達はこれから、みんな『境山ワンダーパーク』で遊びます。

考えなければいけない事はたくさんあるけど。

だからと言って何かを始めてはいけないなんていう事はないのですから。

「おーいー！」

疾風さんの呼ぶ声が聞こえて。

それに手を振り返してから、私は音央に笑いかけました。

うん。

私1人だったら怖くて無理だったかもしれないけど。

「行きましょ、鳴央」

「はい、音央ちゃんっ！」

こうして繋ぐ手があるのならばなんとか頑張れるんじゃないか、なんて思います。私達は手を繋いで、2人で走り出しました。

そう、ヤシロさんの言う通り。

長かった夢の時間は終わって。

……私達、2人の物語は、これから始まるのですから。

番外編4。人喰い村と魔女と……

「えいつー！」

手に持つ魔道書で飛び掛かってくる村人さんをなぎ払う。

魔道書で払われた村人さんはスパアンと小気味いい音と共に光の粒子となって弾け飛んだ。

一見するとなぎ払う動作だけど実はこれは私の食事方法でもある。

なぎ払うと見せかけて光の粒子として獲物を取り込む私の魔術の一種。

……よく見ないで食べちゃたけど、ムサイおっさんとかだったら嫌だな。

まあ、見た目なんかどうでもいいか。

ここの村人ってどれも食べたんだか食べてないんだか解らなくなるような曖昧な味だし。

「へえ、強いね、魔女さん？」

「このくらいのは、人並みの運動能力しかない子達なら楽勝だね」

いくら魔女という、いかにも運動能力がない存在であろうと一応口アである以上、人間には負けないくらいの強さは持っている。

戦闘力に特化した人間相手には魔術なしだと厳しいと思うけどね。

「おっ？」

そんな事を思っていた時だった。

胸が熱くなって……体の奥底がじんわりと温かくなる感覚を感じた。

この感覚……優しい強さ。

ああ、そうか。

この温かく、優しい感じは……。

「モンジ君が『妖精チエンジンの神隠し』を攻略したみたいだよ？」

確証はない。

ただなんとなく解る。

解ってしまう。

今の私と彼は繋がっているから。

「へえ……彼女に名付けられたわたしは、もしかしたら消えちゃうかな？」

「どうだろうね？」

村系のロアとしては残るかもしれないけれど、詩乃ちゃん、という個性は消えちゃうかもしれないよ。『親』が別の物語に組み込まれてしまったからね」

私達ロアは噂がベースとなっている為、別の物語に組み込まれてしまうとその噂が消

されてしまう可能性がある。詩乃ちゃんの場合、ベースとなつている村系のロア。『カーニヴァル人喰い村』は消えないけど、そこに名前を付けられて誕生した朱井詩乃という人格は消えてしまう。

「ふうん……でもさ？」

「うん？」

詩乃ちゃんは私に話しかけて来ながらも村人をけしかけるのは忘れない。

ちよつと面倒になつてきた私は魔術を使い、蟲を操つて村人を消滅させていく。

そんな風に対処していた私に詩乃ちゃんは笑顔のまま告げた。

『カーニヴァル人喰い村』が『魔女』を倒しました、つていうのは？』

「ああ……それなら、確かに残るかもしれないね。詩乃ちゃんの名前」

当たり前過ぎて気付けなかった可能性。

より強くて有名なロアを取り込めれば、そのロアはより有名になり強くなる。

詩乃ちゃん自身が存在している間にそれが達成出来れば、可能かもしれない。

そんな可能性がある事に気付けなかった。

なるほどなあ。

「それに、魔女つてさ？」

なんとなく嫌な予感を感じつつ、詩乃ちゃんの言葉を聞いてしまう。

「うん？」

「村人に囚われるっていうのが、定番だよね？」

その言葉を聞いて久しぶりに寒気を感じた時だった。

私のDフオンが赤く、熱く光って。

「『狂気セイレラムの魔女狩り』！」

魔女狩り。

そう、それは『魔女』である私の弱点の一つだ。

詩乃ちゃんが手を上げるのと、私が逃げようと動き出すのでは、詩乃ちゃんの方が速かった。

動き出そうとした直後。

ドスツ!!？

私のお腹を、背中から貫いたものがあつた。

お腹を貫通したもの。

それには見覚えがある。

『槍』だ。

その槍に身動きを封じられた瞬間、四方八方から同様に柄が長い槍が繰り出されて、私の体に次々と突き刺さつた。

そう、久しぶりに私は、肌が裂け、肉を貫かれ、骨が砕ける感触を感じたのだ。

「あっ……けほっ」

喉の奥から血の塊が込み上げてきたのではしたくないなあ、と思いつつ仕方がないので外に吐き出した。

直後、私に刺さった槍が燃え始めた。

「あははっ！ 『魔女』と『村』は相性が悪かったね？ やっぱり最期は、村人達の手によつて火あぶりにされる、つていうのが決まりだしね？」

そう言われてみればそうなのかもしれない。

私達ロアには相性が存在している。

ゲームみたいに優劣はつきりしている都市伝説もある。

『魔女』と『村』の相性は最悪だ。

いろんな物語で『魔女』は『村人』に倒されているのだから。

中世の頃には大規模な魔女狩りなんでものがあつたくらいだし。

そんなピンチな状況だけど昔を思い出すようでなんだか懐かしいなあ、なんて思えるくらいには余裕がある。

だつて……。

私には彼女を倒す手段がまだあるのだから。

「ああ、そうだね。貴女が詩乃ちゃんじゃなくて『村』のままだったら……もしかしたら、私の魔女人生は終わっていたかもしれない」

「ふうん？　負け惜しみ？　いいよ、最期に魔女が何を言うのか、楽しみだよ？」

私に負けるとは微塵も思っていない様子で詩乃ちゃんはそう告げてきた。

なら、その余裕顔を絶望に変えてあげるね？

「そう？　じゃあ魔女らしい事を言うね？」

かろうじて動く右腕を持ち上げて、私は焼け爛れた人差し指を詩乃ちゃんに向ける。

『私の他にも悪魔と契約した女の子がいます』……そう、『告白』するよ』

そして、そう一言告げた。

「っ！！？」

直後、詩乃ちゃんの体にも……大量の槍が突き刺さり。

彼女の周りにいた村人達が突然、その手に持っていた凶器を詩乃ちゃんに突き立てた。

「え？　……なんで……？　ゴフツ」

詩乃ちゃんは笑顔のまま、意味が解らないというように首を傾げた。

その口からは大量の血が吐き出されている。

「詩乃ちゃんが『狂気の魔女狩り』をなぞったから、魔女は魔女を増やす事が出来るの。

貴女が、ただの『村』の概念だったら『指名』は出来なかつたけどね。ところが、貴女はちゃんとした一人の女の子『朱井詩乃』ちゃんだった。だから……」

「……『魔女』と勘違いされて……殺される……？」

それが本当か、嘘かなんて関係ない。

『魔女』と認識されてしまえば、魔女狩りの対象にされてしまうのだから。

「どうしてそんな事……ロアは……その性質上……嘘は付けないんじゃないの……？」

その通り。

ハーフロアのように人間から派生したロアの場合は、意思がある以上ズルは出来なくもない。

だけど、私や彼女のように生まれついでのおバケには制約がある。

つまり『物語を改変出来ない』という制約が。

だからこそ、情報戦や知恵比べになるのだ。

通常の純粋なロアは嘘を付けないから。

だけど

「私は魔女だからね。魔女の言う言葉はどれもこれも嘘ばかり。それが私の能力……」

辺りの状況は一変して。

私を焼いていた火が消えて。

私を貫いていた槍も消えていた。

その代わりに、今度は詩乃ちやんが『魔女』として燃やされていた。

……ロアとロア。オバケとオバケの対決の結末はいつだって呆気ない。

『魔女の口車』

ロアとしてのズルさが違ったね、詩乃ちやん

私は魔女だから……。

だから嘘を本当のように思わせる事が出来る。

「本当ならこのまま消えちゃう貴女を食べようかなー、なんて思うけど……」

「……けど？」

「気づかないとでも思われているのかな？」

いるんでしょう？ リサちゃん」

私は視線を村人達の方に向けた。

私が村人達に視線を向けたその時。

村人達の体が突如消滅した。

いや、違う。

食い殺されているのだ。

その背後から現れた金色の獣によって。

「『ジエヴオーダンの獣』かあ。村を滅ぼす『破滅系』のロアだよね、確か？」

「グルルルル」

「声は届かないかあ。モンジ君……いや、キンジ君がいたらまた違った結果になっていたのかもしれないね。瑞江ちゃんから話を聞いておかしいと思っただよね。『人喰い村』の中において、貴女だけは村の影響を全く受けていないようだったから」

それもその筈。

『ジェヴォーダンの獣』は『村』を殲滅出来る存在で村系のロアである『人喰い村』詩乃ちゃんがおいそれと手を出せる存在ではなかったのだから。

「参ったなあ。本当なら貴女だけは絶対に相手にしたくなかったんだけど……仕方ないかあ」

彼女は私と同じ存在だ。

モンジ君達はまだ気づいていないみたいだけど。

彼女はまだ完全には彼の物語にはなっていない。

私が『魔女・ニトウレスト』として呼ばれているように、彼女も秘密がある物語という事に気づいていないのだ。

「邪魔をするなら貴女のその美味しそうな魂も……いただきます、するよっ」

「グルルルル」

本当ならすぐにもモンジ君の近くに行きたいけど……目の前に極上の獲物が現れ

たので。

私は目の前に現れた最強の存在に挑む事にする。

なんて思っていたけど。

「無駄な戦いをするなんて……非合理的〜！

させないよ……」インフイニティスリットゾーン『無限隙間空間』！」

私がリサちゃんに近寄ろうとした瞬間。

どこかで聞いた事があるような声が聞こえ。

突然、雪が降り始めて。異変に気づいた時にはすでにリサちゃんの体は何もない空間の中に吸い込まれてしまった。

私は突然の出来事に　呆然としてしまう。

リサちゃんが忽然とその姿を消してしまったからだ。

それは本当に突然だった。

何もない筈の空間に吸い込まれるようにして消えた『ジェヴオーダンの獣』。

降り続ける雪。

その雪は強く降り注ぎ視界を覆い尽くした。

そして弱まった時にはそこにはリサちゃんの姿はなかった。

「……神隠し？」

その言葉が自然と口から出たけど私は神隠しはもうモンジ君が攻略したというのを知っている。

だから違う。これは神隠しじゃない。

誰かは解らないけど別のロアの力だ。

『チエンジリング神隠し』以外にも神隠しと同じような能力を持つ存在が近くにいる!??

正直、パニックになりそうになった。

周囲を見回してもそこにいるのは消えそうになっている村人達と。

槍に貫かれて燃やされている詩乃ちゃんしかいない。

ただ解るのは降り続ける雪が魔術で作られているという事だけ。

これは魔女の仕業？

雪を降らせる魔女。

いろいろと疑問に思う事があるけど。

今はとにかく。

目の前の少女の後始末を先にする事にしよう。

そう思い人喰い村のロアである詩乃ちゃんに向き合う。

「どうする?　消えたくない?」

能力を使いすぎたせいとか、支払う代償とか、蟲達に提供する血とかを考えつつ、私は詩乃ちゃんに声をかける。

「私が食べたロアは、いつまでも私の中で生き続けるの」

「消えないで済むの?」

「そういうロアだからね、私」

放っておいても、この『朱井詩乃』という『人喰い村のロア』は消滅する。

何故なら、名付け親である『チエンジリング神隠し』からしてみれば、自分のせいで大勢の人を食べてしまったこのロアには残っていてほしくないはずだからだ。

でも、それは……ロア側からしてみれば身勝手な話。

私達ロアは人間の噂から生まれた存在。

つまり、人間が求めたから発生したものだからだ。

無意識だとしても、生み出してにおいて現れたら困るからポイとするなんて。

それはちよつと酷いんじゃない?

なんて思ってしまう。

だから私はロアを取り込む。

私の食べたロアで、いつか人間達にギャフンと言わせる為に。貴方達が生んだ私達は、こんなにも貴方達の脅威になるんですよー、と思いき知らせる為に。

そこに意味なんてない。

何故なら……私は「そう」生まれてきたのだから。

まあ、最近がちよつぷりだけ。

そんな人間達と仲良くするのも悪くないかなあ、なんて思っちゃってるけどね。

「どうする？　詩乃ちゃん」

「あはっ……お願いね？」

「OK！　それじゃあ……！」

私が魔道書を開くと、そのページに記されている『ロア』が発動した。

赤い光が周囲を走り……『5つのドア』が空中に現れて詩乃ちゃんをぐるりと囲んだ。

コンコンツとドアの内側から叩く音が聞こえて。

「花子さん達、お願いね？」

『はーい！』

2つのドアから元気な女の子の声が聞こえると、3番目と5番目のドアが同時に開い

て、ザバーツ、と両サイドから詩乃ちゃんに大量の水がかかった。

「うわっ!?? トイレの水!??」

「花子さんだもの、仕方ないよね」

開いたドアから出てきたのは双子のようにそっくりな女の子。

おかつぱ頭で、可愛いらしい赤いドレスに身を包んだ『花子さん』が顔を覗かせて微笑んだ。

そして。

地面からは大量の赤い蟲達が一斉に詩乃ちゃんに向かって襲いかかり。

その小柄な体を一瞬で包み込んだ。

瞬きをした——次の瞬間には、詩乃ちゃんの体はそこにはなくなっていた。

「捕食完了。ごちそうさまでした」

ボタン、と魔道書を閉じると、表紙がぼんやりと赤く光った。

空中に浮かんでいたドア達も消失していて、花子さん達も消えていた。

「ふう、終わったね。これにて一件落着……かな?」

モンジ君達といると大変だけど退屈しない。

キツイ代償は嫌だけどそれ以上の見返りも彼らといればある。

研究も進むしね。

私が今しているのは人間についての研究。

それは『魔女』として生きる、存在価値、ライフワークみたいなものでもある。

「代償は嫌だけど……ふふっ『人喰い村のロア』をゲット出来たんだから、お釣りがくる

かな？　ありがとう、モンジ君。やっぱり君といると、いい事、いっぱいだね？」

愛しい、愛しい彼の顔を思い出したら、なんだか無性に会いたくなってきた。

早くこの場からおさらばして、彼に会おう。

そう思った私は、魔道書をシュツと消し去り、この場からさっさと退散したのだった。

コラボ編。biwanoshinコラボ

コラボ編① 逢う魔が時

2010年6月16日。コンビニ近くの路上にて。

それはある日の夕方に起きた。

不思議な夢を見た事から始まった『神隠し』事件が解決し、境山ワンダーパークに行つたあの日から2日が過ぎたある日の夕方。

学校から戻つた俺は近所にあるコンビニを指して歩き慣れた道を歩いていた。
時刻は午後6時。

西の空に夕焼けの赤さが残るも、ふと空を見上げるとその赤さもやがて失う。

藍色の空が広がっていく時間帯でもある。

空を見上げながら思うのはこの世界で出会つた少女達のこと。

始まりは……そう。

目覚めた俺が、クラスメイトの仁藤キリカという少女と都市伝説のトークをしたことから全てが始まった。

実体化した都市伝説。

通称『ロア』と呼ばれる都市伝説のオバケ、『呪言人形』のロア。

『月隠のメリーズドール』である一之江瑞江に狙われて襲われたり。

親友だと思っていた少女が、『最悪の魔女』。

『ロア喰い』こと、『魔女喰いの魔女・ニトウレスト』であって、再び襲われたり。

不思議な夢を見たと思ったら先輩から『神隠し』の調査を依頼されて。

『人喰い村』に紛れ込んで死人や人喰い村のロアに襲われたり。

中学時代の友人が神隠しを起こしていた妖精のロアで、妖精と入れ替わった本物の彼女がずっと神隠しを起こしていたり。

何も知らない妖精は真実を知って消えようとしていたりしてたり。

と、そんな怒涛の展開がこの日の数日前まであった。

今は落ち着いて。

そんな彼女らと仲良くしていた。

まあ、仲良くと言っても。

普通に会話するだけだが……普段の俺は。

残念な事になってしまおうと、あつちの俺は自重しないので彼女達にいろいろやらかさ
ないか、いつもビクビクしながらならないように過ごしている。

特に今日は大変だった。

神隠しを起こした少女が転入生として俺が通う学園、『夜坂学園』に入学したからな。困った事に悩まし過ぎる豊かな胸を持つ彼女はヒステリア地雷の塊だった。

いつ爆破してもおかしくないプロモーションを誇る彼女はヒステリアモードを持つ俺の天敵と言っても過言ではない。

「……凄かったなあ」

彼女の豊か過ぎる胸元を思い出してしまふ。

D……いや、Eは楽々いつてるな。

戦艦で例えると戦艦クラスのカリカを楽々と越していた。

弩級戦艦胸を持つ音央と同じくらいの大きさだ。

(まあ、元々同じ存在だったという事もあるから……同じなのは当然かあ。

って、何考えてんだ俺は……いかん、ヒスる)

ヒステリアモードになりたくない俺は何とか自重する。

と、そんなバカな事を考えながら角を曲がったその時だった。

「ねえ、お兄さん。『逢う魔が時』って知ってる?」

呼ばれて背後を振り返ると、そこにはヤシロちゃん立っていた。

いつもの白い帽子に、真っ白なワンピース。それに白い大きな傘を差している。

「久しぶり、ヤシロちゃん」

「うん、久しぶりだね」

「こんな時間にどうしたんだ？ ヤシロちゃん」

まだ明るい時間帯とはいえ、ヤシロちゃんみたいな可愛い小さな女の子が一人で出歩いているのを見ると、心配になる。昨今はいろいろな危ないからな。

日が出てるとはいえ、危険がいつあるかなんて誰にも解らないしな。

「わたしまで心配してくれるなんて、お兄さんって本当スケコマシだよね」

「うぐっ」

一之江とかに散々言われてるが、違う……とりたい。俺はスケコマシではない。

ただ、小さな女の子を放っておけない善良な小市民だ。

「最近、声かけ事案とかってあるけどもしかして……お兄さんって」

「違う！ 俺は普通の一般人だ。小さな女の子が好きとかそんな事はねえ！」

「うん、解ってるよ。お兄さんは『逸般人』でしょ？ 『逸般人』」

あれ？ 何か知らんが思いつきりデイスられてるような気がするのなんでだろうな。

「それでね。こんな日の夕方の薄暗くなる、昼と夜の移り変わる時刻。黄昏時は魔物に遭遇する、あるいは大きな災禍を蒙ると信じられているんだよ」

「災禍？」

「うん。大禍時とも言うけど一般的にはこう呼ばれているよ？」

『逢う魔が時』って」

「逢う魔が時？」

さつきも言っていたが、どういう意味だ？

俺が疑問に思っていると、ヤシロちゃんが直ぐに説明してくれた。

「逢う魔が時っていうのはね、読んで字の如く、「妖怪、幽霊など怪しいものに出会いそうな時間」、もしくは「著しく不吉な時間」を表していて、昼間の妖怪が出難い時間帯からいよいよ彼ら『妖』や『魔物』の本領発揮といった時間となることを表しているんだよ。逢魔時の風情を描いたものとして、鳥山石燕の『今昔画図続百鬼』が有名だね？」

それは夕暮れ時に実体化しようとしている魍魎魍魎を表しているとも言われているよ。

まあ、簡単に言うとな吉が起きる兆候だね」

「不吉……？」

「うん。わたしが知る都市伝説はまたちよつと違うんだけどね。」

でね、何でこんな話をしているかというところ……お兄さんはこのまま進めばその不吉な兆候に出くわすことになるの」

「うん？　不吉な兆候に出くわす？」

「そう。だからこの先に進めば、お兄さんは『主人公』として異界の怪異に挑むことになるよ？」

「主人公として……？」

「その結果、いつもより大変な目に遭ったり、死んだりするかもしれないけど。今なら引き返せばそうならなくてすむよ？」

「そうか。わざわざ教えに来てくれたのか？」

「ありがとうな、ヤシロちゃん」

「うん。わたしはお兄さんのことを気に入ってるからね、だからなのか。妹にお兄さんを取られるのがちよつと嫌だなー、なんて思っちゃたよ。」

「おかしいよね、わたし」

「いや、おかしくはないさ。それよりヤシロちゃんには妹がいるのか？」

「うん。わたしも最近知ったんだけどね。後2年くらいしたら嫌でもみんなもその存在を知ることになると思うよ？」

「うん？　2年後に何かあるのか」

「ふふふつ、2年後のお楽しみだよ、お兄さんっ！」

ヤシロちゃんの表情は帽子に隠れているせいか見えない。

ただ、その声色から何か良からぬ事が起きるといふのは伝わってきた。

「で、話を戻すけどこのまま進めばお兄さんは大変な目に遭うことになるけどどうする？」

「そつか。じゃあ、引き返すか」

「あれ、主人公らしく先に進むじゃないんだ？」

「『行く』か『行かない』かを決めるのも主人公の特権だからな。」

「選択肢を選んで進むのも主人公の醍醐味だろ？」

「ふえ？ その答えは予想外だったよ。流石はお兄さん。理を、因果を壊してしまう不可能を可能にしてしまう男らしい意外な行動だねっ！」

プログラムのバグのような発言をするヤシロちゃん。

「ふふっ、まあ、今のお兄さんならそうするかもなあー、とは思ってたけどね。」

そつか。それじゃ、気をつけて帰っ……!!?」

ヤシロちゃんが言葉を言い終わる前に、ソレは現れた。

俺とヤシロちゃんを囲むように空間が渦巻き、その渦から白い手のようなものや、人の手じゃない鬼の手のような化け物の手が現れた。

ニヨッキ、と何も無い空間から無数の手が現れるその姿はかなり不気味だ。

「……まさか、わたしの預言が外れた!!?」

ううん、外されたんだね、流石はお兄さん。

不可能を可能にしてしまう男、だね！」

「言ってる意味がよく解らないんだが、この状況は一体？」

「ふふっ、どうやらお兄さんは逃げられないみたいだよ？」

お兄さん一人を攫う為に百鬼の力を使うなんて……あの子もお兄さんが気になるんだね！」

「なっ!?? ちよっ、は、離せ———！」

ヤシロちゃん言葉通り、無数の手が伸びてきて、俺は巨大な鬼の手に捕まり、渦巻いた異空間の中に吸い込まれてしまう。

ズブズブと足の中から異空間の穴に吸い込まれていき、やがて抵抗むなく俺は巨大な鬼の手に握られたまま、異空間の穴に吸い込まれてしまった。

吸い込まれていく最中、ヤシロちゃんの言葉が聞こえたような気がした。

理由は解らないが、頭の思考力が低下し、瞼が重くなつていき俺の意識はそこでプツリと途切れてしまった。

「ふふっ……予想外な行動を取られたけど、お兄さんがあつちの物語の中でどういった活躍をするのか楽しみだよ？」

2010年5月20日。

目を覚ますと俺は知らない場所にいた。

最初に目に入ったのは鉄筋コンクリートの建物。

そして、門と思わしきもの。

そこには、『○○県立八霧高等学校』と刻まれている。

そう、何故か知らんが俺は身に覚えがない学校の校門前に立っていた。

校舎はパツとみ、どこの町にもある鉄筋コンクリート建ての普通の校舎だ。

これといって目立つものはないが、校舎には垂れ幕が下がっており、『祝！

射撃部

全国大会出場！』といった文字が書かれている。

「射撃部……？」

そんなものがあるってことは……武偵みたいな戦闘職を育成する教育機関か？」

射撃と聞くと、やはり思い出すのは前世での出来事。

戦闘職、武偵を輩出する専門総合教育機関、『東京武偵高』に通っていただけあって。

俺はほぼ毎日のように銃を撃ちあっていた。

一年の三学期までは強襲科アサルトのSランクに格付けされていて、当時は将来の首席候補生

とまで言われた。

まあ、いろいろあつて三学期の途中からは探偵科インケスタに転科したりしたわけだが。銃の扱いにはちよつと自信がある。

ほぼ毎日のようにパートナーに銃口を突きつけられていたしな。

と、そんな風に懐かしさで俺が射撃という文字に目を奪われていた、その時にやー、と猫の鳴き声が聞こえた。

振り返るとそこには一匹の黒猫が佇んでいて。

じーつと、俺の顔を凝視していた。

なんだ？

と思つたその時。

猫は高い塀を飛び越えて学校の敷地内に入ってしまった。

残された俺はなんとなく猫を追いかけないといけな……そんな気持ちで学校の敷地内に足を一步踏み入れた。

その時だった。

俺は夢を見た。

グラウンドを走る女生徒が突然、俺の方に駆け寄つてきて。

その手に持っていたナイフで俺を刺す！

刺された俺は右の脇腹から大量の血を流して死んでしまう。
そんな夢を見た。

「……はっ！　今のは……？」

明晰夢？

夢に若干トラウマがある俺は学校のグラウンドを見渡した。

どこにでもありそうな普通のグラウンド。

そこを体操着姿の一人の女生徒が走っていた。

少女を見ているとその少女と目が合って……思わずドキリとしてしまう。

薄い茶色の髪を腰まで伸ばし、ツインテールに結っている何処か、強気な印象を与える少女だった。

俺の知り合いでいうと、音央に似ていた。

ただ、残念な事に胸の大きさは音央の圧勝だが。

そんな事を思ったその瞬間。

ゾクリとした感覚が俺を襲った。

胸ポケットと、ズボンに入れていたDフォンが熱く発熱していて、俺に身の危険が迫っている事を知らせてくれた。

この背筋が凍るような感覚には身に覚えがある。

そう、一之江に追いかけられたあの時のような…。

(熱く発熱してるとして事は、俺に危険が迫っているという事で。

危険を与えるのはやはり……?)

そんな事を思っていると、目の前にいた少女の姿が一瞬消えて。

気づいた時には。

「……(っ)めんね」

少女が一言言つて、右手に握るナイフを俺に突き刺していた。

つかの間の静寂。

学校の中にもかかわらず、人っ子一人いる気配がしない。

誰もいない学校。

そんな場所で突然ナイフを腹に刺された俺だが……死んでいなかった。

なんて事はない。

ナイフが刺さる瞬間、空いていた両手を使い白羽取りをして刺さるのを防いだ、ただ

それだけだ。

そう、俺はなっちまったんだ。

ヒステリアモードに。

「そんな……? 刺さるはずだったのに!」

「君みたいな可愛い女の子がこんなものを振り回したらダメだよ？」

君のその綺麗な手はこんなものを握る為にあるのではないのだからね？」

アリアや一之江並みの可愛い（幼児体型な）女の子が目の前で汗だくで走っていたら、それは興奮しないはずはないだろう？

「なっ……か、可愛い!?？」

可愛いという言葉に予想以上に反応した少女。

美少女が赤面する姿はいつ見てもいいものだね。

「ああ、君みたいな可愛い女の子に刺されるなんて体験は普通、なかなか出来ないけどね。」

君のようにほぼ毎日ナイフで刺してくる女の子やら銃で風穴を開けてくる女の子とかの相手をした事があるからなんとか反応できたよ」

「何そのバイオレンスな日常!?？」

「それが俺にとつての日常だよ？」

うん、我ながら言っていて悲しくなってきた。

一之江はその日の気分でグサグサ、ザクザクしてくるし。アリアはアリアで機嫌が悪いと口より先にガバが出たからな。

『デス・ノウテイス夢予告』!』

そんな事を思っていると、さつきとは違う夢を見た。

今度は目の前の少女に銃で撃たれて死ぬ夢だ。

「今度こそ」

少女の言葉で目が覚めると。

少女は夢の通り、手にしたマスケット銃で俺を撃つ。

亜音速で飛来する弾丸。

このままでは弾丸が俺の頭部に当たって潰れたトマトのようにグシャリとなる。

それはごめんこうむりたい。

なので俺は……！

『桜花』気味に右手を引いて……ソツと飛んできた弾を摘んだ。

「『銃弾掴み』……熱いな、このカイロは」

夢の通りに死なない俺を見て、少女は口をぽかーんと開けた。

「あ、あんた、本当に人間？」

失礼な子だな。俺はれっきとしたただの普通の人間だ。

「くっ、それならこれはどう？」

『デス・エント
死夢』

少女が技名を叫んだその瞬間。

俺の頭の中にイメージが思い浮かぶ。

それは『死』のイメージだ。

一歩前に出れば墜落してくる隕石に当たって死ぬ。

後ろに下がれば何故か地雷を踏んで爆死する。

右に動けば学校の敷地に入ってきたダンプカーに轢かれて死ぬし、左に動けば日本刀を持った怪人に斬られて死ぬ。

前後、左右どこに動いても死ぬ。

そう告げている。

逃げ場はない。

「あははっ、どう？　動けないでしょう？」

負けを認めるなら解いてあげるわよ！」

「それは魅力的な提案だけど断るよ」

「そう？　ならさっさと死んで！」

「散らせるものなら……散らしてごらん」

一歩も動けない。

動けば死ぬ。

見たイメージ通りに殺される。

……ん？

見たイメージ通りに？

そうか。それなら……！

「武偵憲章10条。諦めるな。武偵は決して諦めるな」

「何を言ってるの？ おかしくなったの？」

「君は言ったね、動けば死ぬと。」

「逆に言えば動かなければ死なないんだよね？」

「そうだけど、そのままじゃ何も出来ないよ？」

「そうだね、じゃあ、こうするよ！」

『羅刹』^{らせつ}！

俺は右手の掌を心臓に当てて、ノーモーションでの掌底を放った。

自分自身に向けて。

直後、俺は突然死した事を理解して。

そして……！

(……ッ……！)

パツンッ

！

左手を背に当てて、続けて右手で『桜花』を、全く同じタイミングで発動させて

亜音速2発、合計およそマッハ2の衝撃を心臓のど真ん中で衝突させた。

『羅刹』からの自己蘇生技『回天』かいてんを放ち蘇生したのだ。

グラウンドに片膝を着くように倒れる俺だが、よかった。生きている。

動けば死ぬとイメージで見たが、イメージ以外の死に方をすれば、逆に死なない。

その思いつきは上手くいったようだな。

一度『羅刹』を喰らって死んだからか、一撃で死ぬならこの技だと思いつき、咄嗟に放つたが上手くいった。

『回天』心肺蘇生技が使える今の俺なら心臓が止まってもすぐに蘇生できるしな。

「なっ、そんな……」

「ははっ……」

俺が生きている事が信じられないといった俺と戦った敵がよくするような顔をした少女の姿が目に入り、思わず笑ってしまった。

「……夢と違うことをするなよな！」

少女の呟きが聞こえたが……どうしようもないだろう？

ただ忠告はしておこう。

「これ以上、俺を殺さない方がいいよっ！」

俺は……遠山キンジは殺せば殺すほど、強くなる！

そして、今のでヒステリア・アゴニザンテにもなったのが解る。
「そんなわけにはいかないわ！」

夢を見させて、夢の通りに行動させて殺害する！

それがわたし、『日影市の正夢造り』のロアだから」

コラボ編②

恋と戦は突然に……

「正夢……造り？」

正夢なら解る。

だが……正夢造りってなんだ？

聞いたことのない都市伝説に戸惑う俺を他所に、目の前の少女は語り始める。

「訳がわからないって顔してるわね？」

特別に説明してあげるわ！

元々、私のロアの原点となった物語は『夢と違うことをするなよな』とか、『夢違い』と呼ばれるものだったのよ！ある日コンビニに行く夢を見て、夢の中で知らない男に刺されて死ぬ夢を見た。

ただの夢だと思っていたら、実際にコンビニに行った時に夢の男と出会ってしまいそこから逃げ出したら背後から男の声が聞こえて。

背後の男は『夢と違うことをするなよな』と言っていた、とかね。

元々そういう物語だったんだけどロアとして過ごしていくうちに、いろいろな尾ひれがついて呼ばれるようになったのが私のロア『正夢造り』よ！」

「なるほどな。噂されたことで元々あった物語が変化して生まれたのが君という存在と
いうわけだ」

一之江やキリカの講義でも散々言っていたな。

ロアは噂されればされるほど、尾ひれがつけばつくほど強くなっていく、と。

元々あった『夢と違うことをするなよ』という都市伝説に『様々な夢を相手に見せる』とか、『一度に多くの夢を見せてその通りに行動させると相手を殺すことができる』
といった尾ひれや噂がついて誕生したのが、彼女のロア『正夢造り』なのだろう。

「凄いなだなー、正夢造りって」

「そうよ。凄いのよ、あたしは！そんな凄いやあたしに狙われたことに感謝して殺されて
くださいー！」

「お断りだー！」

殺されるのに、感謝も何もあるか！

「悪いがそういうのは間に合っているんだ」

俺を殺す奴は既に決まっている。

ソイツは俺を殺すまで決して逃してはくれないからな。

「ふーん、売約済みかあ……まあ、いいや。

どっちみちアンタは今ここで死ぬんだし」

少女がそう呟いた直後。

俺は再び夢を見た！

空から巨大な隕石が落ちてきて、躲さなければ俺を潰す……そんな夢だ。

「無茶苦茶だろ!?」

俺はその場から飛び跳ねようと体を動かそうとした。

直後、また夢を見る。

俺が飛び跳ねると何処からともなくレーザービームが飛んできて、俺を射抜いて殺す

！

そのレーザービームは孫が使うものと同じくらいの太さだ。

(ツ!!?) 矛盾を……盾にする武器はないな……仕方ねえ)

飛び跳ねるという動作をキャンセルする。レーザービームの攻略は諦めて、空から墮

ちてくる隕石の対処に専念することにした。

隕石の大きさは直径1メートルほど。

通常なら大気圏内で燃えるはずだが、燃えたような形跡はない。

あくまでもロアが生み出した幻の隕石ということか。

スピードは其れ程早くない。

マッハ1くらいか？

だが、運動エネルギーが働いているのなら、破壊するには少なくともその倍の力が必要だ。

普通の『桜花』では破壊出来ない。

なら……

「散らせるものなら……散らしてごらん」

俺は落ちてくる隕石にタイミングを合わせて『桜花』を放つ。

インパクトの瞬間、『秋水』も加えて。

ただの『桜花』では威力負けをしてしまう。

だから俺は『桜花』の力の出し方を工夫する。

通常の間人は拳を突き出す際、全身の筋骨を『一気に』動かす。

しかし、『桜花』は全身の筋骨を『順番に』動かす。

体内で後ろから前へ速度を次々とパスし、加算していく術理だ。

通常の桜花に必要なパスの回数は4〜6回。『つま先↓膝↓脘↓肩↓腕↓手首』でやっていく。

ワトソン戦の時は『左手首↓左肘↓左肩↓右肩↓右肘↓右手首』でやっていく。

だが、俺はこの瞬間通常の桜花を放つのに必要なパスの回数、4回分を『右肩↓右腕↓右手首↓右五指』と『左肩↓左腕↓左手首↓左五指』に分けて実現する。

片腕だけの桜花が放てるのなら、同時に突き出せばマツハ2の桜花が出来るはずだからな。

右腕でマツハ1、左腕でマツハ1。

足せばマツハ2になる。

2倍桜花ッ

！)

隕石に手が触れたインパクトの瞬間、『秋水』を使って押し出すように掌を突き出す。

ドゴオオオオオオツツツツ

！

そして、放った瞬間理解した。

失敗した、と。

確かに上半身だけなら隕石を押し返す力がある。

だが俺は下半身を全く考慮していなかった。

両足がズキズキと痛み出す。

隕石の撃力に、ヒステリアモードとはいえ俺の足は限界にきている。

諦めるしかない。

隕石は俺では破壊出来ない。

そう、破壊は出来ない。

マズイ、このままじゃ……)

そう思いながらも俺は下半身に力を入れて反撃した。
右足だけでの桜花と。

自分の力だけではなく……相手の力を利用して。

（絶牢ツ!!?）

隕石の撃力を右足に乗せて蹴りを放つ。

「おりやあああああああああ」

「ツ!!?」

ドゴオオオオオツ!!?

俺を押し潰さんとしていた隕石だが……真下に墮ちるのではなく真横に弾かれるように逸れていった。

「はあはあ……隕石逸スラツシューらし！」

二度とやりたくない大技だな」

右足で放った蹴りにより、軌道をなんとか逸らすことが出来た。

ヒステリアモードとはいえ、ただの人間だった俺ではできなかった。

だが、今の俺はハーフロアでもある。

人間を超えた力を持つハーフロアの身体能力にも助けられてなんとか死を回避した。

動けばレーザービームに貫かれるとあったが、逸らした隕石にレーザービームは阻ま

れて……俺には被害はなかった。

どうやら夢と違うことをすれば回避出来てしまう、みたいだな。

「夢と違うことをするなよな……」

「違うことをするに決まってるよ！」

死ぬと解つていて同じ行動を取るものか！

ただでさえ、毎日一之江に殺されそうになるくらい痛めつけられているのだ。

危険察知くらい出来て当然だろ？

「あんた、実は人間じゃないでしょ？」

「とことん、失礼な奴だな君は。」

俺はただの人間だよ？」

「絶対、嘘よ！　ただの人間が私の夢予告や死夢を回避出来るわけないでしょ！」

「俺はただの一般人だ！」

「あ、もしかして。今朝の8番目のセカイに載っていた『逸般人』って……？」

「違う！　俺はただの一般人だ！」

「解ったわよ。『逸般人』ね、『逸般人』」

「全然解ってない!?？」

とそんなやり取りをしていたその時だった。

俺と少女の前に猫が集まりだした。

一匹ではない。

たくさん様々な種類の猫が集まってきた。

「あー、アンタも来たのね？ ティア」

「はい……ケホケホ。なんだか面白い人が来たみたいですから」

猫が一箇所に集まったかと思えば、猫の体が光輝き光が収まるとそこには1人のこれまた凄い可愛い美少女が立っていた。

「ケホケホ……始めまして『^{エネイブル}呪』さん。私は『^{ペスト}黒死斑の魔女・ケオプスミ』です」

少女はちよつこと、スカートの裾を広げるようにしてご丁寧^{ゴテンテイ}に挨拶してきた。

話す前に咳き込んでいたけど風邪かな？

それにケオプスミってなんだか嘔みそうな名前だなあ。

ヒステリアモードの俺でも三回に一回は嘔むぞ。きつと。

「ああ、そういうえげまだちゃん和自己紹介してなかったわね！

さつきも言ったけどあたしは『日影市の正夢造り』のロア、夢宮天樹。テンって呼んでもいいわよ」

「ふふつ、私の名前が言いにくいならティアと呼んでください。

学校とかではそう名乗っていますから」

先ほどまで命の取り合いをしていた少女とは思えないくらいに可愛いらしきでテンと名乗る少女も挨拶し、魔女と名乗る少女も人間としての名前を名乗ってきた。

これはなんと言うか。

命を狙う相手に挨拶をしないとイケないとはなんとも妙な気分だが、名乗らせておいて自分は名乗らないなんてことは出来ない。

特に今の俺は。

「俺は『不可能を可能にする男』と『101番目の百物語』の『主人公』の口ア。一文字疾風だ！

よろしくね、お二人さん」

「一文字疾風……じゃあ、モンジね！」

「待て！ 何故そのアダ名を知ってる!?？」

何故、初対面のはずのテンがそのアダ名を知っている？

そんなに解りやすいか、モンジって……。

「ケホケホ……なるほど、イチモンジ、略してモンジ君ですか。可愛いアダ名ですね」

「初対面の人にまでモンジ呼ばわりされんのかよ……」

「いいじゃない。似合うわよモンジ」

俺の背をバシバシ叩きながら笑うテン。

しかも、手で叩くのではなく金属の棒状のようなもので叩くのは如何かと思うぞ？
さつきまでの戦いはなんだったのか、気まぐれな子なのかもしれないな。

俺の命を狙っていたのが男だったらきつとわだかまりとかが残るかもしれないけど。
それが可愛い女の子なら許せてしまう。

理屈や理解が出来ない存在。

まあ、それがいいんだけどな。

だつて……女の子つてそういうもんだろ？

「しかし、モンジがああ『百物語』の主人公とはねえ。『不可能を可能にする男』なんていうロアも同時に持っているなんて……あんた、本当に人間辞めてるよね」

「『百物語』の主人公ですかあ？

ケホケホ……それも存在しないはずの『101番目』の物語なんて……興味深いですね」

やはり101番目の百物語は異質な存在のようだ。

普通の『百物語』は有名で『百個物語を集める』と怪異が起きるといふのは都市伝説や民俗学に詳しくない人でも知っていることだろう。

だが、『101番目』が付いた俺の『百物語』は元々存在しないはずの物語だ。

魔女であるキリカや一之江でさえも、警戒したほどの。

「『不可能を可能にする男』なんていう都市伝説があることは先ほどDフォンを見て知りましたが凄いですね？」

物語を変えてしまう能力を持つなんて……」

「そんなに凄い存在なのかな？」

自分だとよく解らん。

自覚もなしに気づけばなっていたからな。

「無自覚であの強さって……まあ、いいわ。」

あんたが人間辞めてるのはよく解ったから」

「ふふつ、ですね。ところで……ケホケホ」

「ん？ どうしたんだ？」

心配になり、激しく咳き込むティアに声をかけるとティアは「大丈夫です」と言つて言葉を続けた。

「ちよつと場所を変えませか？」

ティアに連れてこられたのは校舎の屋上だった。

落下防止用のフェンスがある以外、何も無い無機質な空間。

コンクリートと防水処理されたモルタル以外には何も無い。

給水タンクがさらに高い位置に設置されてはいるがあるのはそれだけだ。

「随分と派手にやりましたね……」

ティアの視線は階下のグラウンドに向いている。

そこには隕石が衝突した余波で出来た穴とかが出来ていた。

「あれでも隕石を逸らしたから被害は軽くなっただけだね……」

「私もまさか、逸らされるとは思わなかったわ」

直撃してたら、と思うとゾツとするな。

1メートルの直径の隕石だろうと当たれば間違いなく死んでいただろうし。

「今まで逸らした中でも一番難しかったな、アレは」

「他にも何か逸らしたの？」

聞いてきたテンに俺がこれまで逸らしてきたものやこれまでの戦いを簡単に話した。

もちろん、前世やらヒステリアモードの事は避けて。

「銃弾ならまだしも……ミサイルに、戦車の砲弾って……あんた、やっぱり人間じゃない

わよー！」

「きつとやろうと思えばテンも出来るよ？」

「ロアなら身体能力が高いはずだからな」

「あたしはハーフロアよ！　それでも……無理よ。」

「人間辞めてるあんたと同じにすんな！」

「ケホケホ……魔女の私も無理ですね。」

「魔術を使えば出来るかもしれませんが代償がキツそうですし」

「死ぬ気でやれば出来るんだけどなあ……」

「そんな事あんた以外に不可能よ。出来る方がおかしいわ……というか、あんたの存在自体がおかしいわ」

「それは流石に言い過ぎだろ？」

「だけど……まあ、そうだな。」

『不可能』って言ったテンに面白いものを見せてあげるよ！」

「うん？」

首を傾げるテン。

ワクワク顔をするティア。

その反応は違うが、どちらも次は何をしてくるのだろう、と期待感を示している。期待されているならそれに添わないとな。

そんな彼女達に俺は自分の能力を見せることにした。

「不可能を可能に変えてみせよう！」

直後。

Dフォンから和風のメロディーが流れて。

勝手に動作したDフォンが俺自身をそのカメラに写す！

直後、俺が着ていた服は夜坂学園の制服から東京武偵高の制服に一瞬で変化し、Dフォンはスクラマサクスにその形を変えた。

「変身したのね！」

「ケホケホ……『死』が遠ざかりましたね」

「主人公は『変身する事で強くなる』からね、これが俺自身のロア『エネイフル 罨』の能力だよ！」

「へー、という事はさっきまでのアンタは……」

「ああ、あんまり生身と変わらなかつたな」

「やっぱり人間辞めてるわよ！」

「私が狙う前に会えて良かったです。」

……ケホケホ、『逸般人』を襲うにはそれなりの準備がいますから」

大変失礼なテンの物言いと、なんだか物騒な事をいうティア。

「……はあー、まあいいわ。」

それよりそれがあんたの全力なのね？」

「ああ。今はこれしか出来ないな」

「そう、それじゃ始めましょう」

ん？　始める？

何を、という前にテンは呟いた。

「死デスエンド夢」

直後、俺は夢を見る。

一方前に動けばレーザービームに貫かれて死ぬ。

後ろに下がれば『妖刀の静刃』に斬られて死ぬ。

右に動けば屋上の給水タンクが落ちてきて死ぬし。

左に動けば金棒を持った鬼に殴られて死ぬ。

前後左右、どこに逃げてでも死ぬ。

そんなイメージが見える。

……というか、このイメージ悪意が入ってるだろう。

『妖刀』とか、『鬼』辺りに。

一歩も動けない俺だが、それはなす術がないから……ではない。

どのイメージを覆せばテンが満足するか。

それを考えていた。

「なあ、テンちゃんや」

「何よ?」

「どれを攻略してほしい?」

「うーん、そうねえ……じゃあ、レーザービームで!」

「了解!」

俺は一步前に出た。

直後。俺の胸に向かいレーザービームが放たれた。

光線が放たれた瞬間、ヒステリアモードの俺の視界は、世界がスローモーションに変わる。

それは超々高感度カメラで撮影しているかのようなウルトラ・スローの世界だ。

この世の何もかもが今、ほぼ静止しているように見える。

その世界で俺は、レーザーに対抗する為にスクラマサクスを軽く放り投げた。

極々精密に。

直径が7ミリしかないレーザービームを防ぐには、レーザーの射線に、先端から柄に覆われている金属部分

中子の後端までを正確に乗せなければならない。

ヒステリアモードの俺なら集中力を高めれば簡単に出来る。

矛を、盾にする。

剣を垂直に投げてその長さを厚さに変える事でレーザービームを防ぐ大技。

デイスコルダンツァ
「矛盾の傘ッ！」

スクラマサクスを軽く放った俺だが、このままでは貫かれる事を知っている。長さが足りないのだ。

刀身から柄までの長さではレーザービームを防ぐには……。

だから、俺はそのイメージをする。

(伸びろ
ッ！)

俺の口ア、『エネイプル 罨』は物語や事象を改変出来る存在だ。

それは何も物語を変える事だけではない。

物理法則すらも捻じ曲げることが出来る……そういう存在のはずなんだ。

頭の中でスクラマサクスの刀身が伸びるイメージをすると、スクラマサクスの剣先がグングーンと伸びて長さ約2メートルくらいにまで伸びた。

直後、レーザーがスクラマサクスに直撃し、融解を始める。

そして、そこで
時間の流れは戻る。

バツと刀鍛冶の側にいるようなもの凄い熱風が吹き荒れ。

スクラマサクスは刀身の半分くらいを熱で溶かされたせいとか、膨れ上がって先端は傘

のようになった。

柄が異様に長い傘のように。

孫の時は失敗したが今度は上手くいっただよう。

「……Dフォンの交換とかつてやってるのかな？」

俺がそんな心配をしていると。

「心配する事ってソツチ?!？」

テンとティアの二人に突っ込まれた。

いや、重要でしょ？

「レーザービームを剣一本で防ぐとか……『夢と違うことをするなよな!』」

そう言われても防がなかったら死ぬからな。

「どう? 楽しめたかな?」

「ええ、とつてもドキドキしたわっ!」

「ゴホゴホ……ワクワクしました」

「ははっ、どうかな? 俺の物語になればもつとワクワクドキドキ出来るよ?」

「なっ?!? 何バカな事言ってるのよ」

「パラメーターは少し上がりましたけど、それはないです」

「おや、好感度が上昇したのかな?」

「残念、友好度よ（です）！」

パラメーターが二つあるタイプか。

手強いな。

「ケホケホ……だけどこれは珍しい技を見れました。

さっきの技は『峰搦め』の応用ですね」

「知っているのか？」

「はい。ケホケホ……こう見えても私は『魔女』ですから」

黒死斑^{ベスト}の魔女。

それがどんな物語かは詳しくは知らない。

ただ、見た目とは違いかなりおっかない存在だという事は解る。

キリカと同じ『魔女』だしな。

俺が魔女について考えていたその時。

「こんにちは、お兄さん」

俺の背後から声が聞こえて。

振り返るとそこにヤシロちゃんが立っていた。

全身白づくめな幼女。

白いドレスに、白い帽子。

白い傘。

見た目はまんまヤシロちゃんなのだが……。

なんだろう、何か違和感を感じる。

「ヤシロ、ちゃん……だよな？」

「え？ ヤシロ……？」

「だよね？」

テンの声が進中から聞こえなくなつた。

というのも俺の体が透け始めたからだ。

「っ!!? 体が……」

「え、なんでモンジの体は透けてるの？」

「いえ、『全身』は透けていませんよ。アレは……」

「ふふつ、もう帰る時間だよ。『逢う魔が時』は時間で発生するロアだからね！」

今日はこれにて、お終い。『また』ねっ！ お兄さん『達』っ!!?」

突然、眠気に襲われて瞼が重くなつた俺は薄れ行く意識の中でテンやティア、ヤシロ

ちゃんに似ている女の子の声が聞こえたような気がした。

彼女達だけではない……。

「『もしもし、私よ。今貴方の後ろにいるの』。」

ふう……全く。何他所様の世界に迷い込んで死にそうになっ
ているんですか。殺しますよ?」

「この背中の（硬い）感触……ああ、一之江だな」

グサツ!

背中に金属の棒状なものが突き刺さり意識を失ったが。

それは、よく知る少女の声聞こえ、その声にホツとしたまま深い眠りに入
ったからだ。

そういう事にしてほしい。

第三部。終わる日常

プロローグ。キンジの日常①

よお、元気か？　さて、今回も前回同様にハーレムを作りあげた男の話を語ろうと思うのだが。

……なんだかうんざりした顔をしているな？

まるで俺の話を聞きたくないみたいじゃないか！

ははーん、さては「こんな調子で百人もの物語こと、美少女を集められるのか？」みたいな心配をしているんだな？

まあ、普通に考えたらこの調子だと無理だろうな。

今のところ、ハーレム要員はまだ四人しかいないし、一見すると攻略されてる感じの子達をいれても百物語にはほど遠いしな。

だからお前らが無理だと思うのも解るぜ！

だが、だがな。

奴はハーレムを作りやがったんだ。

なんせ奴は百物語の主人公でもあり、不可能を可能にする伝説の男だからな。

不可能という言葉はやり難い、成し遂げるのが困難というだけで、無理ではないのだから。

それにどんなものにも抜け道や裏技があるものだろ？

よく聞かないか？　ギャンブルで必ず当たる方法とか、絶対モテる口説き方とか！

あれ？　さつきまで話を聞きたくなさそうにしてたのになんだか聞きたそうな顔をしているなあ。

大変解りやすい反応だから話す俺としては楽しいぜ！

……まあ、その手の裏技系のほとんどは眉唾ものなんだけどな。

そんな方法が実際にあるはずないけどな。

あつたら、世の中の誰もバラ色の人生を歩めるはずだし、わざわざその方法を他人に教えてくれる親切な人なんて、そうそういるはずないんだからな。

おっと、話が逸れたな。

で。その方法というのが。

そう、ライバルの登場という奴だ。

……つて、おいおい。

なんでまたげつそりして溜息なんて吐くんだよ？

ライバルだぜ、ライバル。

涙あり、笑いあり、友情あり。

信念と思想の戦いの果てに培われたそういつたものは、物語を盛り上げるのになくはならないキーワードみたいなものだろ？

……だから、げっそりするなっ！

わかってるよ。

どうせまた、ライバル戦とかいつておいて、結局可愛い女の子達とイチヤイチャするだけだろう、って思っているなら……まあ、その通りだけどな。

つまり今回はそういう裏技があるせいで、ライバルが出たり、余計なバトルに巻き込まれたりして大変な目に遭うみたいな話だ。

いつの世も、楽をしようとするとなんとなく楽してはるはずが実際には大変な道を歩んでいた、そういう教訓的な話の内容だ。

やっぱり苦勞をして生きる方が充実した楽しい人生を歩めるのかもしれないな。

おっと、また話が逸れたな。

では、百物語のエピソード3を語ろうとしよう。

とある都市伝説系サイトに記載された書き込み。

目撃者Aさんの話。

これは、私と私の友人が体験した恐怖体験である。

20□年?月?日。境山峠道。

一台の車が暗い山道を爆走しています。

その赤いスポーツカーを運転しているのは、地元の大学に通う学生。

私の友人です。

彼の名前はそこまで重要ではないですが、一応記しておくようにしましょう。

彼の名前は茶羅伊織と言います。

社会的な身分は大学生という事になっていますが、長髪茶髪で普段からシルバーのアクセサリーを身に付けていることか、学内ではチャラ男と呼ばれていました。

そのアダ名の通り、彼は女性関係にだらしなく。よく女性関係のトラブルを抱えていました。

そんな彼はほとんど毎日のように、深夜になるとここ境山の峠道を魔改造したお気に入りの愛車で爆走していました。彼の趣味というか、特技がカーレースなのです。

俗にいう、『走り屋』というやつです。

急勾配のある山道でもほとんどスピードを落とさずに駆け抜けるその様は、地元でも知られた存在で多くの若者から羨望の眼差しで見られていました。

そう、見られていたのです。
とある日まで。

その日、彼はいつものように愛車を走らせていると、車のバックミラーとサイドミラーに不思議なものが映っているのを見つけしてしまう。

自身が運転する車の後ろ。後方に車ではない異様なものが車間距離ギリギリに、ピツタリと張り付いていたからだ。

「おいおい。なんだよ、アレは？」

そう声に出してから気づく。

彼が運転する車の真横にピツタリと寄り添うように走るバイクがあることに。

(族の奴ら……か？ いや、でも……そんな……)

「う、うわあああああ!!?」

彼が驚きのあまり大声をあげたのには訳がある。

彼の運転する車の横に寄り添うように走るバイク。

それを運転するライダーの体。

そのライダーの体が一部アリエナイ事になっていたからだ。

(ク、首から上がねえ!??)

そう。彼が見たのは上半身の首から上がない人間と思わしき人が運転するバイク。

都市伝説として語られる『首なしライダー』を彼は見てしまったのです。

「おいおい……嘘だろ? 夢だ。夢、夢、これは夢だ!」

彼はあまりの恐怖に車を停車させようとブレーキを踏んだ。

その瞬間、後方から迫っていた何かの声が聞こえてしまう。

「なんじゃ、せつかくわらわが走っているのに止めようとするなんて競いがいない奴

じゃな」

「ケツ、だから言っただろうが。美しい車を美しくない改造している奴なんて戦う価値

もねえって」

後方のその何かの姿が見えた。

それは一人の少女だった。

フリフリで、ヒラヒラのいわゆるゴシックロリータと呼ばれる服装を身に纏い、体の至るところには包帯は巻かれていた。

年齢は小学生くらいだろうか。

怪我をしているのか、全身を包帯で巻かれていて、片目も包帯に包まれている。

その様は怪我の痛々しさよりも、ゴシックホラー的な恐怖と威圧感を放っていた。

一方の『首なしライダー』はド派手な特攻服を着用している。

その特攻服には『天上天下唯牙独尊』という刺繍が入っていた。

「まあ、そういうな。キンゾーよ。わらわ達を見て驚いただけなのかもしれぬ。」

平常時に競い合ってみたら意外とやる奴なのかもしれないぞ?」

「ブチ殺すぞ! てめえらがその名前で呼ぶんじゃねえよ!」

車外から聞こえてくる化け物達の怒鳴り声。

恐怖のあまり、運転していた彼はそこで気を喪ってしまいました。

私?

私は、助手席で最後まで彼らの声を聞いていましたよ。

彼が気を喪ったのが解ると、その人達は私に向かいニツコリ微笑みましたから。

ええ、怖かったです。

トラウマものです。

停車している私達の車を置き去りにして。

彼らは去っていきました。

去り際に彼らの叫び声が聞こえたのでここに記しておきます。

「それじゃ、とつとと行くかの、キンゾー？」
『音速境界』ライン・ザ・マツハ

「ライン、てめえは後でブチ殺す！」
『流星』メテオ

気を喪った彼はその日から街中で幼女や高齢の女性を見ると失神してしまうようになりました。

あれ以来、境山はおろか。

他の場所にもカーレースに行くことはなくなり。

バイクや特攻服を見ると奇声をあげるようになったとか。

これは本当にあつた怖い話です。

2010年6月18日。夜坂学園。2年A組。

俺は一人で自分の席にぼんやりと座って教室のドアを眺めていた。

ここ最近の俺の日課と化している行動だ。

ここでいくら待とうが、毎朝楽しそうにトークしてくるあいつの姿があるわけないのは解るのだから、ついなんとなく待つてしまふんだ。

仁藤キリカ。

俺の親友であり……この世界で初めて俺に話しかけてきた人物でもあり、また『魔女喰いの魔女・ニトウレスト』でもある。

そのキリカはここ数日、学校を休んでいるんだ。

元々そんなに体が丈夫な方ではなく、ちよくちよく病気になるって学校を休む。

そういう事になっている。

本当のところちよつと違うという理由を知っている俺は複雑な気持ちになるが、俺の口からはなんとも言えない。

そんな事を考えていた時だった。

ピロリロリーン！ と俺の携帯にメール着信があった。

メールを開いて見るとそこには……。

差出人・仁藤キリカ

タイトル・モンジ君へ

内容・モンジ君おはよー！ 今日も雨で外がしとしとだね。

ちゃんと傘を持ってきてるかな？

もしかしたら、予備の傘があると……中略……。

それじゃ、瑞江ちゃんや音央ちゃん、鳴央ちゃんと仲良くね。

今日もぐつつすり寝て過ごしまーす♪

おやすみなさいっ。

あなたのキリカより。 チュツ♡

いかん、頭痛がしてきた。

それと同時に体中に血液が勢い良く流れるのも感じる。

くっ、静まれ！ 俺の血流。

いろいろツツコミたいが、一番ツツコミたいのはモンジ君っていう辺りだな。

まあ、可愛い子からこんなメールを貰って嬉しくないわけがない……なんて思わないがな。

病^{ヒス}気持ちには朝っぱらから辛いメールだ。

だが、メールの返信はしておこう。

「俺にはちやんと一文字疾風という名前があるんだからな、つと」

そんな返信をしながらふと、教室のドアの方を見てしまう。

キリカの体が弱っているのは本当だが、それは病気だからではない。

実際は『神^{チキンジリシ}隠し』をなんとかするために力を使い過ぎてしまい、そこで失われた体力や魔力を回復するために自宅療法をしているんだ。

た。——こないだの事件の時に、魔女の魔術には代償が必要だということを語られた。

あの時はかなり魔術を使ってくれたり、俺を助けてくれたからその代償はかなりキツイはずだ。

「……ちやんと休むといいんだが」

もしかしたら、今頃苦しくて大変な目に遭っているのかもしれない。

もしかしたら、今頃あの綺麗な髪や玉のような肌を掻き毟っているのかもしれない。

もしかしたら、また別の五感の何かを喪って、辛い思いをしているのかもしれない。

……そんな事を考えてしまい、いてもたってもいられなくなるのだが、グツと耐えている。

キリカのところへ駆けつけても、今の俺では出来る事なんてないからな。

「ちよつと悔しいな……」

『百物語の主人公』、『ハンドレッドワン』。

『不可能を可能にする男』、『罎』、『エネイブル』。

そんな風と呼ばれても、苦しむ親友を助けることも出来ないのなら意味がない。

主人公というのは、苦しむ仲間や人を助けることが出来る奴の事をいうのだから。

そう思うのは、俺が未熟で。

キリカを頼らないと事件を解決出来ないからだ。

「早く、一人前の物語にならないとな」

キリカの席を見ながらそう呟いた時だった。

「おはようございます」

俺の背後を一瞬でとつたような、冷たい声が聞こえた。

(なつ、そんなバカな。つい一瞬まで俺は教室のドアを見つめていたのに。ほんの一瞬キリカの席を見ただけで俺の背後を取った……だと!?!?)

ヒステリアモードではないとはいえ、元武偵である俺に気づかれることなく背後を取

るとは……やはり油断ならない奴だ。

『朝のトークタイム』とやらをしてあげます」

「いや、別にしなくていいんだが」

「遠慮はいりません。ほら、とつと話しやがれです」

「こんな殺伐としたトークタイムなんて御断りだ！」

なんで俺は朝つばらから首にナイフのような金属を押し当てられないといけないんだ？

『月隠のメリーズドール』というロアである一之江は、何かある度に俺を刺す癖がある。

前世でアリアが事あるごとに俺に銃を向けてきたように。

だが、人前でザツクリやるほどのお茶目な奴ではないはずだ。

というかないといいな。

「いいからとつとトークしなさい。こちとら、キリカさんに言われたので仕方なく付き合っているのですから」

一之江が何故こんな殺伐としたトークをしたがるのか。

それはキリカに頼まれたかららしい。

キリカを心配して電話した一之江にキリカが『モンジ君との朝のトークはお願いね！』

などと言ったそうだ。

それを毎朝実行しようとする律儀さはいいが、いかんせん本人にその気が無さ過ぎだ。

「では、語りなさい」

「急に言われてもな……ええと、いい天気だな?」

「ええ、朝から土砂降りでテンション下がりますね」

「昨夜はよく寝れたか?」

「深夜まで通信番組を見ていたので3時間しか寝ていません」

「朝食は何を食べたんだ?」

「朝は基本何も食べません」

「……」

「他には?」

「……特にないな」

「コミュニケーションの低い人ですね」

お前が言うな—!

どうしろというんだ?

話題を出そうとすればその話題を全てぶつ潰す一之江相手にトークしないといけな

いなんて。

これ何の罰ゲームだよ！

そう思っていると。

一之江がはあ、と溜息を吐いたのと同時に首筋に当てられた金属の冷たさは無くなつた。

会話するつもりが微塵も感じられなかった一之江に愚痴りそうになったが、愚痴つたが最期。

どんな目に遭うかは想像出来るので心の中だけで愚痴ることにしよう。

そう思いながらも、それとは別に聞きたい事があつた俺は一之江に小声で話しかけた。

「なあ、一之江」

「なんですか。宿題ならやっていませんよ」

「見せませんよ、じゃなくてやってないのかよっ」

「宿題は決して家ではやらない主義なのです」

「……昨日学校でやってなかったか？」

「授業の時は眠いので寝ていました」

堂々とした態度で言う一之江。

これで、宿題提出の時もしれっと「すいません、やってません。申し訳ありませんがやる気も起きませんでした」などと語るの、教師泣かせだったりもする。

「ちよつとあつち系で聞きたい事があるから、教室の外で話さないか?」

「またどこかに連れ込んでエロい事をするつもりですね」

「またつて、お前にはしてないよな!!?」

「には?」

「うぐっ」

しまった、という表情を浮かべてしまった。

そうなんだ。一之江以外の子にはアクシデントが起きてしまったせいでヒステリアモードになってしまい、あつちの俺がいろいろやらかしてしまっているのだ。

「このエロ助」

「エロ助じゃないが……本当にすまん」

「まあ、貴方の性癖については後でお仕置きするからいいとして。いいでしょう、話があるからツラを貸せ、ということですね」

言い方は悪いがその通りなので俺は頷くしかなかった。

プロログ2。キンジの日常②

2010年6月18日。夜坂学園校舎内廊下。

一之江と廊下を歩いていると、多くの生徒から注目を集めている視線を感じた。

無理もない。一之江は隣街の名門校、蒼青学園の制服を転入してきてからずっと身に付けているのだからな。

ごくごく平凡な生徒からしてみると、その制服だけでお嬢様イメージがついてしまうのだろう。

しかも、彼女は衣替えが終わっても同じ制服を着続けているのだからな。

以前、制服の事を聞いた時には『噂されやすくする為』などと言っていたが、俺達口アは噂に左右されやすい存在なはずだ。

そんな噂に左右されやすい俺達口アが噂をされやすくするメリットがあるのだろうか？

それとも、『都市伝説』の正体はバレた方がいいのだろうか？

うーん、わからん。

一人で考えても解らなかつたので、俺は階段の踊り場までくるとまずそれを尋ねてみることにした。

「なあ、前に制服の事を聞いた時に噂されやすくする為って言っていたが」

「はい？」 ああ、何故この学園の制服を着ないでわざわざ蒼青学園の制服を着続けているのか、という問いですか？」

「あの時にも疑問に思ったんだが、ロアの正体はバレた方がいいのか？」

ロアは噂に左右されやすい存在だが、その正体を明かしてしまってもいいのだろうか？

正体を明かしてしまったら他のロアに狙われやすくなるのではないか。そう考えると正体を無闇に明かすのは危険だが……。

逆に明かした方が噂になりやすくなる。

より強力な存在になるなら明かした方が物語としてより完成するのだからそっちの方がいいのだろうか？

どっちの可能性もある為、ロアの先輩の一之江に尋ねてみると。

一之江は……。

「ああ、いえ、噂される程度が丁度いいんです。バレてもいいっちゃいいんですが、私くらい有名だと他のロア狙われまくってしまうので。殺しまくるのも疲れますし」

さらりに物騒な事を呟いた。

「その辺りのシステムがいまいちまだ解らないんだよなあ」

「その手の説明担当はキリカさんなので、彼女の復活を心待ちにして下さい」

「うーむ……そうかあ」

キリカが情報担当。一之江は戦闘担当みたいな役割りが二人の間に出来ているようで、キリカは優しく、例えば話を使っていろいろ話してくれたり、一之江は容赦なしで俺に戦闘訓練を課してくる。

ただし、ここ数日は一之江がどちらも担当していた。

一之江は基本面倒くさがり屋なので、こうして保留にすることが多いのだが。

「うーん……」

「そのうちイヤでも解りますよ」

不思議そうな顔をしていたからか、一之江は溜息交じりにそんな返事をしてきた。

俺も、いずれは自分の噂を広める行動をとらないといけないのだろうか。

自己プロデュース、みたいな事を。

極力目立つ行動はしたくないんだがな。

「聞きたいのはそのことでしたか?」

「いや、違うな。っていうか、こんな話題を堂々と人前でしていいのか?」

HR前とはいえ、廊下には学生がチラホラいるんだぞ？

「構いません。私達の話題に聞き耳を立てている人物がいたとしても、それがどんな話の内容かを理解できなければ話半分になりますから」

「へえ……そんなもんなんだな」

「そんなもんです。むしろ、たまに聞こえる会話というものの方が噂になりやすいので、こういう話題は理解されない範囲でパンパンした方がいいとも言えます」

「なるほどなあ。噂を広めるのにも広めるテクニクとかがあるんだな」

「ええ。理解されない程度の会話でも、『アイツ、もしかして?』という認識をされれば私達口アはより強くなりますから」

そんな会話をしていたその時だった。

俺達がいる階段の踊り場に向かって近寄ってくる聞きなれた奴の足音と声が聞こえた。

「いやあー、やつぱこう、凄いわけよ、間近で見ると!」

我がクラスの残念なイケメン。アラン・シアーズが友人と思わしき少年達と一緒に会話しながら、階段の下を通りかかった。

「やつぱ、鳴央ちゃんのあれはFカップはいつてるとみたね!

姉妹揃ってデカイっ

て、たまらんならないだろおい!」

F?

なんのことだ？

気になった俺がアランに話しかけようとした時、隣にいる一之江の様子がおかしいことに気づいた。

「牛乳女^{うしちち}なんてみんな消えればいいんです。っていうか消しましょう！」

牛乳呪呪呪呪呪呪呪呪呪呪……」

「一之江が壊れた!?」

リアル呪いの人形である一之江が呪いをかけようとする姿はなんとというか、マジで恐ろしいな。

今の一之江を見たらきつとみんなこういうのだろう。

『牛乳を呪う女を見た!』と。

ああ、つまりはこうやって新たな都市伝説が誕生するんだな。

「つて、感心してる場合じゃない、落ち着け一之江!」

「落ち着きましたよう」

……あ、戻った。よかった。

「話が逸れましたがああして、六実鳴央の名前とFカップという噂は広まり、彼女イコールでかい胸、という認識が世の中に広がっていくというわけです」

そんな説明を淡々とする一之江も凄いが、そうかあ、鳴央ちゃんはFカップもあるのか……俺的には要注意だな。ヒス的な意味で。

そしてなんとなく『噂のシステム』みたいなものも解ったような気がした。

「あ……モンジさんっ。おはようございます」

「うん？　　モンジじゃない。おはよ。なんでそんなトコでコソコソしてんの？」

噂をすればなんとやら。

その噂の人物である鳴央ちゃんと音央の六実姉妹が揃って階段を上ってきた。

アラン達とは違い、俺や一之江の姿にちゃんと気づく辺りやっぱり違うなー、なんて思ってしまう。

ちなみに鳴央ちゃんという人物こそ、先の事件で『神隠し』をやっていた少女で。

今は六実音央の双子の姉ということにして生活している。

清楚でお淑やかな黒髪の方が鳴央ちゃん、強気で薄い茶色の髪をツインテールにしている方が音央だ。

「おはよう。っていうか、二人揃ってモンジっていうのはやめろ。俺には一文字疾風というれつきとした名前が……」

「え、ですが……音央ちゃんが、その方がモンジさんが喜ぶわよ、って……」

うっ。マズイ、血流が……。

はにかみながら、手を胸の前で合わせてもじもじするその姿に思わずドキツとしてしまふ。

言葉の内容はさておき、彼女からは俺を喜ばせたいという想いが伝わってきた。

……そんな仕事とかをされたら見逃すしかないか。

「いいじゃない、モンジは所詮モンジなんだし。で、一之江さんと密談？」

鳴央ちゃんに吹き込んだ当の本人はこれだしな。

つていうか、所詮つてなんだよ。所詮つて。

俺が一人心中で抗議していると。

「ちようど、鳴央さんの話をしていましたよ」

一之江がさらりと告げた。

「え。わ、私、ですか……？」

何故か鳴央ちゃんの頬はさつと朱色に染まり、俺をもじもじと上目遣いで見てくる。

うん？　なんだ。

俺何かしたっけ？

「どうせエロい話でもしてたんでしょ？」

反して、じとー、という目で睨んでくる音央。

いやだから、俺何もしてないんだが。

全く同じ顔をしているのに、どうしてこうも印象が違うのだろうか。

元々は同じ人間だったというのが信じられないくらい、二人の個性は完璧に分かれていた。

「胸がFカップという話を」

「っ!??　ど、どうしてそれを……!??」

っ!??。エ、Fカップだと!??

白雪や中空知級……或いは二人よりもデカイのかもしれないな。

いや、白雪のバストサイズなんて知らないが。

「こら、鳴央。そこはちゃんと誤魔化さないよ。ほら、モンジがエロい目でアンタの胸をじろじろー、つて見ちやつてるわよ?」

「は、はうつ」

音央の言葉に鳴央ちゃんは慌てて自分の胸を隠すように押さえたが。

そんな態度すら、大変奥ゆかしくてたまらなくなる、

特にこっちの俺には。

「ご馳走様です」

「拝まれましてもっ!」

高まっていた血流をなんとか抑えていた俺だが、彼女が胸を隠す仕草をしたことによ

りついに、俺の対ヒステリア堤防は決壊した。

思わず手を合わせる仕草をした俺に、鳴央ちゃんは困ったような表情をしながらもツツコミを入れてくれた。

うん、可愛いツツコミは華があっていいよね。

なんて馬鹿な事を考えていると。

「拝まれましたもっ」

グサツ。

「ぎゃあ!!?!」

何気なく俺の背後に回った一之江が、俺の背中に何かを突き刺した。

「い、痛い!!?!? 何を刺したんだ!!?!」

「別に、何も」

ほら、と両手を開いて見せる一之江。

その手には確かに何もなかった。

一瞬で制服の中にしまったにしては、今の衝撃は大きかったが……つというか、俺は一之江の胸を拝んだりしていないんだが。

「だ、大丈夫ですか?」

心配してくれるのは鳴央ちゃんだけだ。

「あ、ああ、うん、大丈夫だよ」

「いつものことみたいよ」

「そうなんですか？」

音央の「いつものこと」というフォローも嬉しくないが、まあ中学時代からの付き合いだし、これくらい痛い痛さなら前世でも今世でも日常茶飯事だから、まあいいや。

「で、胸の話ですが」

「続くのかよ」

一之江が語り始めたので、俺は思わずツツコミを入れてしまった。

「せっかく、音央さんも鳴央さんも二人ともいますしね」

「うん？ ……そっち系の話？」

一之江のその言葉に音央の顔つきも真面目なものになった。音央の隣に立つ鳴央ちゃんも姿勢を正して聞いている。

「気をつけないといけないのは、Fカップの噂話をされているのが、鳴央さんではなく、ここにいる音央さんだった場合です」

「あたし？ まあ、それくらいよくされてるけど……」

よくされてるのか。

まあ、噂の中心人物になりやすいのは確かだな。目立つし、可愛いし、スタイルもい

いいし、雑誌のモデルもやっつてるし、生徒会副会長だし、と話題のネタは尽きないからな。「例えば音央さんの胸が『Zカップだぜヒヤツハー』とか広がったとします。世間的にもそれが認知されてしまうとしましょう」

「Zって。しかもヒヤツハーって」

その表現はさすがにどうかと思うよ？

「それが世界に認められると、音央さんの胸はZカップに変貌してしまいます」

「うっそ」

驚きのあまり、俺と音央の声が重なってしまった。

「Zってどんなんだよ」

メーヤや詩穂先輩より柔らかい胸というわけだよな。

……戦艦で例えるなら航空母艦とか、宇宙戦艦並みの大きさだよな？

ありえるのか、そんな胸を持つことが。

だとしたら一之江も噂されればゴムボ「ツーアウトです」……女性は胸じゃないよな

！

うん、女性は胸じゃない。

だから背にチクチクする物騒なものを押し当てるのやめようか。一之江さん。

やっぱり一之江に胸の話題は鬼門のようだ。

「さて、ハゲは後で殺すとして。

乙カップを持つものは凄いことになります」

「凄い」と？」

「はい、それはもう、ボバーン、と凄いものに」

両手を広げてその大変さを無表情のまま、アピールする一之江。

言われた音央は顔をしかめている。

「音央ちゃんは……その……『ロア』だからなんです」

鳴央ちゃんが言い辛そうに言った。

長年『神隠し』としてロアの世界に身を置いていたせいか、『ロア』である音央よりも

鳴央ちゃんの方がこういう事には詳しくかったする。

「……そうなのね」

今の音央は元々存在しない人間だ。『妖精の神隠し』^{チエンジン}に遭った本物の『音央（今は鳴央

と名乗っている）』と入れ替わりで生み出された『妖精』だからだ。

今でこそ別々の人間として存在しているが、それはキリカの魔術を使ったからであつ

て。

俺達ハーフロアとは違い純粋な『ロア』なんだ。

だけど、元々一人の存在だけあつて音央と鳴央。

その内面は似ているところが多い。

「純粹な『ロア』は人の噂として認識されてしまうと、その存在になってしまいうのです」
そう言い放ち一之江は鋭い視線を音央に向ける。

彼女にしてみると、仲良くはしているが音央は『ロア』だ。

心を許せる存在ではない、と思っっているのかもしれない。

「なるほど、ね」

多少青ざめながらも、音央は気丈一之江の視線を受け止めた。

「ですから、貴女が『悪の妖精・神隠しボインクイーン』とか呼ばれるようになったら、
貴女はそういう恥ずかしい存在になってしまいうのです」

「え、何それ恥ずかしい!?」

何だよ神隠しボインクイーンって。

神隠しがボインでクイーンなんだろうが。

やたら恥ずかしい存在だな。

そんな事を思っていると、音央の隣にいる鳴央ちゃんまで便乗して深刻そうな顔で語り出した。

「悪の妖精神隠しボインクイーンは、妖精と人間を入れ替えて、人間界の全ての人々を妖精にしようと画策する恐怖の女王なんです……」

「え、鳴央^{!!}? あんたまで何言ってるの^{!!}?」

「その悩殺バディから繰り出される、必殺『ボインバスター』により、数多くの勇者たちが殺されたのです……」

「やめて一之江さん! 必殺技が嫌すぎるんだけどっ!」

「俺も『ボインバスター』には勝てないな……」

人間辞めましたランキングアジア71位に格付けされていた俺でも、『ボインバスター』には勝てる気がしないな。

「あんたも乗るな^{!!}?」

と、そんな事を考えていた俺の頭に音央のチョップが炸裂した。

「何で俺だけ^{!!}?」

「あんたが一番ムカついたのでよ」

何この理不尽さ^{!!}?

男女差別反対だ。

だが、今の俺はヒステリアモード。

そんな理不尽な暴力を受けても許してしまう。

「悪かったよ。調子に乗りすぎた。」

『ボインバスター』を使えなくても音央は音央だ。

俺は今の音央の方が好きだよー」

「なっ!??」 ば、バカじゃないの!??

バカ、バカのノーベル賞よ」

意味が解らん。

「ふふっ、すみません、モンジさん。

音央ちゃんは照れてるだけですから怒らないであげて下さいね?」

音央の隣にいた鳴央ちゃんが俺の頭を優しく撫でてくれた。

「ああ、大丈夫だよ。音央が素直じゃないのは昔から知ってるから」

鳴央ちゃんみたいな美少女が俺の頭を優しくナデナデしてくれている。

それだけで俺は幸福感に包まれていた。

「ふん。すぐに鼻の下伸ばして。まったくもう……」

「モンジは後でモグとして。「モグなよ!??」と、まあ。そんな感じの存在になるかもしれないので気をつけて下さいね」

「そ、そりや気をつけるけど……今まであたしが普通に過ごしていたのは、もしかしてたまたまってことなの?」

「音央ちゃんの場合、雑誌モデルとかの時にスリーサイズが掲載されているからですね。公式発表的なものがどこかにあれば、人はそれを真実と認識するんです」

「それじゃ、音央がいつだって理想なボディをしているのは、周りの人間から『そういう最高のスタイルをしている』と認識されているから……そんな可能性もあるってことか」

「そうなの？ あたし、結構頑張つて筋トレとかダイエットとかで体作ってるのに」

「そういう努力も広まれば、より確実ですね」

噂によって自分の体が左右されてしまう。

そんな恐怖を感じたのか音央は眉をひそめていた。

「音央ちゃん……」

そんな彼女の背に手を添えて鳴央ちゃんは励ましている。

「ん……大丈夫、ありがとう鳴央。別にそれくらい……なんてことないわ」

音央は下唇を噛み締めながら、前を睨んだ。

音央と鳴央ちゃん。

二人が『神隠し』として犠牲にしてきた人々はもう戻つてはこない。

だけど二人は二人として生き続けることを選択したんだ。

そんな選択をした二人はこれからも、罪の意識と戦い続けながら、償いの人生を歩んでいくことを決意したんだ。

自分が感じる恐怖、そんなものに負けていられないと。

恐怖に負けずに、前を睨む音央の姿は格好良かった。

『ロア』と『噂』と『認識』——ロアとして過ごす以上、これらに気をつけなければ大変なことになる。

それこそ、大切な人を失わせない為に重要な知識なんだと理解した。

そして、そんな彼女らを自分の物語として引き入れた俺は、彼女ら以上の覚悟が必要だった。

音央と鳴央ちゃんの悩みや苦しみ、恐怖や不安。

そういったものを全部受け止めて、それでいて二人が『生きていて良かった』と思えるような。

そんな物語をこれからも作っていかなければいけない。

毎日が楽しく、平和で、明るく過ごせる。

そんな誰もが当たり前前に過ごせる普通の『日常』を歩めるような物語を作っていく。それが俺の『主人公』としての役目なのだから。

第1章 赤マントのロア

第一話。雷雨の中の襲撃者

2010年6月18日午前10時30分。夜坂学園2年A組教室内。

授業中でも俺は別の事を考えていた。

音央と鳴央の決意の事や一之江の本気具合とか。キリカが代償を払ってまで俺に力を貸してくれるのは何故なのか、とか。カナメやリサがこの世界に来た理由だとか。そして……。

リアがロアである可能性があるという疑いがかけられている事についてだとか、そういった事に対して俺は自問自答していた。

俺は一体何の為に頑張っているのだろうか？

ほとんどなり行きで手に入れたDフォン。

これが最初のきっかけになったのは間違いない。

消えないように頑張る一之江を見て手助けをしたくなかったとか、キリカの正体を知ってなんとかしたくなかったとか、歪んだ世界によって夢の中に閉じ込められていた鳴央

ちゃんを助けたくなくなったとか、自分が人間ではなくロアという都市伝説が実体化したもので、自分が存在する為に知らないうちに大切な人達を消してしまっていた音央を見て救いたくなつたとか。

そういう目先の理由はすぐに出来たし、そんな彼女らが消えないように俺の物語はずっと続けていく、なんて事をヤシロちゃんに語った事もあった。

だが、そこにあつた目的はあくまでも受動的なものだ。周りの環境に合わせた与えられた目的に過ぎない。

俺自身が見たいこと……それが何かは解らないままだ。

「うーん……」

物凄く真剣に考え事をしている俺だが、周りからはさぞかし真面目に授業を受けていると思われているだろう。考え事をしながら、同時にキリカの為にノートもきちんと取っている。

側からみたら完璧に優等生だ。

そんな優等生のフリをしている俺だが、実際には優等生ではないのだけどな。

今もこうして、授業中にも関わらず授業とは全く関係ない考え事をしているし。

そんな優等生のフリをしていた俺の携帯電話が振動した。

慌てて取り出すと、差出人は……従姉妹の理亜だった。

差出人・理亜。

タイトル・兄さんへ。

内容・お疲れ様です、兄さん。理亜です。

本日の予定はどうなっていますか？

もし遅くなるようでしたら連絡を下さい。

本日は兄さんのご両親がいないので私達で料理を作ることになっていますから。

もし食べたい物などがあればリクエストをお願いします。

それではお返事をお待ちしています。

そういえば、今日は父さんや母さんもない日だったな。

俺が一文字疾風になってからまだ数回しか顔を合わせていないほど二人とも仕事で

家を開けることが多い。

そんなわけで理亜が料理を作るのは決して珍しくはないんだが……。

従姉妹同士とはいえ、メールの内容固すぎないか？

これがカナメとかだったら人様にお見せできないくらいに文量を送ってくるのだが。

朝に貰ったキリカのメールとは正反対なイメージだ。

だが、リクエストOKとある辺りちよつと可愛いなあ、なんて思つてしまう。理重が作る料理は絶品なので、今から夕飯が楽しみだ。

「とりあえず、カレーライスと送つておくか」

小声で呟きながら、左手だけでメールを打ち込む。

今日はキリカがないから、一之江との訓練だけで帰れるはずだしな。

俺の物語になる『都市伝説』を探す、コードとかも先送りになるはずだし。

何か突発的な事件でも起こらない限りは当たり前のように帰れるはずだ。

そう思いながら俺は送信ボタンを押した。

直後、俺の携帯が鳴り出した。

確認してみると、差出人はカナメからだつた。

差出人・カナメ。

タイトル・今夜は美味しい妹カレーだよ♡

内容・やつほー！ お兄ちゃん、ちゃんと勉強してる？

可愛い、可愛い妹とのメールタイムだよ♡

今夜は叔父さんや叔母さんもないから、兄妹水いらずで過ごせるね？

お兄ちゃんが大好きな妹が作るカレーを用意して待つているから早めに帰ってきて

ね？

リサさんやリアちゃんも何か作るとか言ってたけどお兄ちゃんは私のカレーだけを食べればいいからね？

お兄ちゃんの家で初めて作ったカレーと同じ分量・味になるように作るから私の妹カレーをお腹いっぱい食べてね？

それじゃ、お兄ちゃんが早く帰ってくるのを楽しみにしているよ。

それじゃあね！

お兄ちゃんの可愛い、可愛い妹のかなめより♡

……いかん。頭が痛くなってきた。

何だよ、妹カレーって。

わざわざ♡マークなんて付けんよ！

とかいろいろツツコミどころが多いのだが。

この文の通りなら、リサの奴も何か作る予感がするな。

美少女達が俺の為にわざわざ手料理を作ってくれる、こんなシチュエーションなかなかないよな？

世の中の男子諸君なら夢のような至福の時間なんだろうが、俺にとっては拷問と変わ

らないぜ。

代われるものから代わってやりたい。

理亜のカレーだけで十分なんだけど、全部きちんと食べないと暴動が起きそうだしな。

前世では大変だったからな。

包丁とかブンブン振り回した妹に襲われたり、家に同居人が他にいるのが気に入らないからと、俺の女装写真を家の壁に貼られそうになったり。

前者は身の危険を感じたし、後者は精神的に死にかけてた。

だからただ、カレーを食べるだけでは済まないのだ。

カレーを食べるだけで命懸けになる俺の日常って一体……。

と、そんな事を思っていると。

「すう……」

背後からは俺の背中を利用して隠れて寝ている、一之江の穏やかな寝息が聞こえてきた。

一見真面目そうに見えて真面目じゃない、というのもコイツの個性だ。

なんでも、大概の授業は既に予習してあったり、前の学園で習っていたとのこと。

何気に優等生なのかよくわからんがそれがいかにも一之江らしい。

そんな事を考えていたその時だった。

「ん？」

不意に窓の外がキラツと光った気がした。

直後。

ゴロゴロドシャーン！

雷が近くに落ちたらしく、教室が騒然とした。

「いがいと近くに落ちたなあ」

窓の外を見て呟く。

バラバラ！ と窓ガラスを雨が打ち付ける音が響き、授業は一時中断された。

教師がカーテンを閉めるように促すと、窓際の生徒はしつかりとカーテンを閉じでいく。

そんな光景を眺めていると。

「……………ふむ」

今の音で起きたらしい一之江が深刻そうな声を背後で零した。

「どうかしたのか？」

「何かあったようです」

「何か？」

俺に返事するよりも先に、一之江はガタツと席を立った。

そして。

「すみません、病弱な私は天候不良すらも影響を受ける薄幸の美少女なので、保健室に向かいます。ついでに言うと、フラフラなので目の前にいる不埒な男を連れていきます」

俺の首根っこを掴みながらそんな事を言いやがった。

「不埒ってお前！」

「事実でしょう？」

一之江に襲われた時にしでかした事やあつちの俺がやらかした事を思い出してしま
う。

「……否定できないな」

そんな俺達のやり取りに、クラスメイト達がクスクス笑う。

「では一文字君。一之江さんに不埒なことはしないで、保健室へ連れて行きなさい」

「真面目に授業を受けていた生徒に対して酷い仕打ちですね!!？」

担任の安藤先生にツツコミを入れると、さらにクラスメイト達が大笑いしてクラスの
雰囲気は和やかになった。

チキシヨウ、雷への不安を払拭する為に上手く使いやがったな。
この美人教師め。

教師にまで不埒と思われていたなんて。

さすがは不運に定評のある遠山金次。

いや、今は一文字疾風だが。

「では保健室へ行つてきます」

一之江はぺこりと頭を下げると、俺を引つ張つたまま廊下に出たのだった。
2010年6月18日。午前10時35分。

「どうしたんだよ、突然」

一之江が歩く先は、どう考えても保健室がある方向ではなかった。

「Dフォンに、キリカさんから連絡が」

懐からDフォンを取り出して俺に見せてきた。

そのDフォンは仄かに赤く光っている。

「キリカから？」

「一言、『気をつけて』と」

気をつけて？

その表示を見せてもらうと、本当にそれしか書かれていなかった。

キリカにしては内容が単刀直入過ぎるメールだな。

しかも、普通の携帯ではなく、わざわざDフォンに送る辺り緊急性を感じる。

「キリカさんがこうして送ってくるからには対応速度が求められるかと」

「対応速度が求められる事態っていうと」

「それはもちろん戦闘でしょう」

一之江がそう言ったその時だった。

気がついた時には。

学校の中で物音が一切感じられなくなっていた。

教室を覗いてみても、中にいるはずの生徒達の姿が一人もいない。

物音が無く、人もいない。この世界には覚えがあった。

「『ロアの世界』？」

隣にいるはずの一之江に声をかけてみるが……返事はない。

まさか、と思いつながら振り向くと。

そこに一之江の姿はなかった。

「一之江？」

一之江の名を言った瞬間、背筋に冷たいものが走った。

慌ててDフォンを取り出してその熱さを確認すると。

「熱くない……し、光つてもいない、か」

つまり俺には危険はない、という意味なのだろうか？

だとしたらこの『ロアの世界』を張った奴の狙いは。

……一之江を狙ったもの？

「っ、一之江！」

廊下を一気に俺は走り出した。

誰もいない廊下、誰もいない校舎、誰もいない世界。

廊下を走る俺の額や全身から大量の汗が出る。

暑いからとか、走っているから、ではない。

嫌な予感が背中越しに感じる為に変な汗が出てしまうのだ。

つまり俺は焦っているのだ。

一之江に危険が迫っていることに対する焦りが。

この焦りには覚えがある。

「メリーさんの人形に追いかけられた時みたいだな」

この『ロアの世界』を展開している奴もそういうホラーっぽい何かなのだろう。

しかも対象は俺ではなく一之江のようだ。心のどこかで、一之江なら放置していても

平気だろうと思う気持ちもある。なんせ、一之江は自他共に認めるくらい強い奴だからな。その圧倒的強さに俺は何度も助けられている。

だが、もう一つの心がそう思つて安心するのを許さなかつた。

一之江だつて、ごく普通の少女なんだ。

キリカに言われてわざわざ毎朝俺とトークしてくれたり、宿題をサボつたり、授業中に先生に見つからないように寝ていたり。

殺伐とした世界に踏み込んでいるからこそ、俺はアイツのそういう普通の。

ごくごく平和な日常の姿というのを大切にしてやりたい。

アイツの、ただの女の子である部分をもつともつと大事にしてやりたい。

そう思う。

だから。

『ロア』！ 俺の前に出てきやがれ！」

廊下を走りながら俺は叫ぶ。

怖がつたり、逃げたり、悩んだりするのは『主人公』の特権で、一之江みたいなオバケサイドじゃないからな。だつたら俺がこの『ロア』の相手をしてやるよ！

そう叫んで、数秒が経つたその時。

Dフォンが一気に発熱し、赤い光を放ち始めた。

「っ……」

手の中の熱さに驚きながら、周囲を見回す。

辺りは相変わらず物音はしなく静かだ。

だが……何かの気配を感じる。

それは、じつとりとした気配だ。

だが、外で雨が降っているから……ではない。

誰かが俺をじつと見ている。そういう気配だ。

それも一つじゃない。

一つは好意的な視線で。

もう一つは好意的な視線でも、敵意でもない。

そう、値踏みされているかのような、そんな感覚を感じる。

「どこで見ている？」

焦りを感じながらもその視線の主を探すと。

すつ、と白くて細い手が俺の首の横から二本挟むように伸びてきた。

「うおおっ……」

それは紛れもなく、手だった。

青白い人間の手。

一之江の『ロアの世界』での恐怖は、追いかけられ、追い詰められ、そして気づいた時には真後ろにいるみたいなものだった。

狙った獲物の精神を追い込んでいくあの手法は、DSなアイツにピッタリなものだった。

だが、コイツは違う。

静寂な中から、静かに腕だけを伸ばして……。

その冷たい手が、俺の首を静かに握っていた。

「ぐっ!?」

気づいた時には既に遅く。細い指が喉に食い込んでいた。

真綿を締めるように、ただひたすらゆっくりと。じわじわと。

「つつっ!」

それはプロレス技でいうところの、ネックハンギングツリー……!!

(これはまるで『妖刀』に襲われたあの時みたいだな。

ただあの時と違うのは相手が素手で締めているところだ!

なら……)

俺は首が傷つくのも気にせず、無理矢理その手を引き剥がそうと手で掴んだ。

その拍子に、手にしていたDフォンが廊下を転がった。

赤く、ぼんやりとした光が俺への警告として薄気味悪く輝いていた。

肌に食い込む爪が、首の肌ごと削る激痛に意識が逆にはつきりしてきた。

こんなものに殺されてたまるかよ！

(散らせるものなら……散らせてみやがれ！)

首がちよん切られるくらいの痛みが全身を襲った。

だが俺は諦めずに無理矢理その手から脱出した。

と同時に、どろりと熱いものが首から流れる感触を感じた。

その直後。

「っー」

ゾクッと寒気を感じた俺は首の痛みを無視して後ろを振り返る。

……そこには。

何も無い空間から伸びる、二本の腕があった。

「な、なんだよ、これ!?」

生身の、腕だけというのは不気味だ。気味が悪すぎる。

しかもその指先には自分の血が付いていて、わきわきと蠢いているのを見てしまうのは。

「な、なんなんだよ!?」

思わず頭が混乱してしまい、叫び声を上げてしまった。

その腕は俺が見ている前でスーッと音もなく消えていきひやり。

再び俺の背後から、首を包むように冷たい感触を感じた。

「がっ……あっ………！」

首の締め方に上手さ、下手さがあるのなら、この腕を操る奴は間違いなく達人だ。的確に俺の呼吸を止め、意識を奪う筋を覚えている。

傷に触れれば痛みで覚醒できるはずなのに、その箇所を的確に避けて掴んできた。手に力が入らず、頭が朦朧として、目が霞む。

「やっ……め、ろ………！」

俺はその手を両手で掴むが、万力のような力で締めつけられた首から外れることはなかった。

その指先はそれ以上締めつけることはなく。

殺害目的の首締めというよりは、俺を落とすことが目的のように感じられた。

「うぐっ、お、おとおおっ！」

両足をバタつかせていると、上履きの先にさつき落としたDフォンが触れた。

（コイツを俺に近づけて……一之江を呼ぶボタンさえ押せば！）

そんな俺の目論見を嘲笑うかのように。

もう一本の腕が地面から現れて俺の足を掴んだ。

「うぐっ ぽっ」

腕は二本だけではなかった。さらにもう一本現れて、もう片方の足も掴まれた。完全に動きを封じるため————だけではいけないよう。

霞む視界の中で、俺の足が廊下の床にめり込んでいくのを捉えた。

「なっ ぽっ?」

まるで底なし沼にはまったかのように、足が沈んでいった。

感触はまるでないのに、足の先はまるで動かない。

「ぐっ……あっ……」

俺はこのまま、床に埋められるのか?

コイツは俺を締め殺すロアではないということか?

青白い腕。何本も出る手。

そんな都市伝説はたくさんある。

思い出せ!

考えろ!

コイツは一体、何の都市伝説だ?

床に埋められながらも、俺はこの都市伝説について考える。

だが、霞む頭では何も考えられなくなっていく。

思考力を奪う、というのは情報戦が主体であるロアとの戦いでは、こんなにも有利なんだな。

つと、薄れゆく意識の中で色々思考を巡らせていた。

このまま目を閉じたら……意識を失ってしまうから。

気絶しないように踏ん張る、それだけを最後の抵抗にして。

「負け、られるかよ……!」

このまま、意識がぼんやりしたまま戸惑っていたら負けてしまう。

そうだったら。

『主人公』である俺が負けたら、一之江も、キリカも、音央も、鳴央ちゃんも。

みんなが……負けたことになる。

そんなのは……嫌だ!

「う、おおお!」

喉から声を振り絞り意識を強く保つ。

そして、なんとか動く場所を考えてみる。

両手はフリーだ。

この首を掴んでいる手を離せばいくらでも動かせる。
そして……息は苦しいが、口も動く。

目もなんとか開けられるし、耳も聞こえる。

足は……もう膝まで廊下に沈んでいるが、それがどうした！

今は俺を締めつける手をなんとかするのが先決だ。

今の俺はヒステリアモードではないただの俺だ。

『桜花』や『秋水』は放てない。

だったら！

俺は手を離して、むしろ相手の手首を掴んだ。

細くて華奢な腕。女の子の腕だろうか？

——女の子が、自分のいる場所に引き込もうとしているのか？

何の為に？

「……げほっ……なあ……もしかして、俺に……そっちに行つてほしいのか？」

なんとか声を振り絞つて、そう尋ねてみる。

反応はない。

「だったら……」

いつそそっちに行つてやるよ！

本音を言うとはわざわざ自分から女の子の場所に行きたくはないが、俺は『不可能を可能にする男』、『エネイブル』だ！

目の前で困っている奴を見捨てられない。

そんな寝覚めが悪いことは出来ない。

それこそ、神隠しの中にだって平気で突っ込んでいくような男だ。

「俺を」

連れていけ。

そう、言いかけた時だった。

「えっ、男!? 間違えた!」

そんな声が聞こえて。

「……はい?」

俺は思わず聞き返してしまった。

第二話。夜霞のロツソ・パルデモントウム

「……間違え？」

俺が呟いた直後。

途端に首が軽くなって、足元が床にふわっと浮き上がり。

気付けば俺は廊下の床に立ち尽くしていた。

「げほっ、げほっ、なんだ？」

首に食い込むようにして掴まれていた手が離れ、息苦しきから開放された俺は咳込みながらも声がした方に振り返る。

元氣いつぱいな少女の声がした方を振り返ると、真つ白な手と一緒にチラツと赤い服みたいなものが見えた。

あれは……!!?

(赤いマント?)

一瞬の出来事だったので、見間違いかもしいれない。

だが、少女の身体を覆い尽くすかのように赤い布が広がるのを確かに俺は見た。

見間違いかもしれないが、それは少女の正体に迫る貴重な情報だ。

なんとかして、その情報を一之江に伝えよう。

そう思いながら俺は目の前に出現している手に話しかける。

「間違え？」

「男なんていらぬもの！」

手に話しかけると、そんなことを言われてしまった。

なんだ、つまり、あれか。

人違いか。

……。

つて、おい！

人違いで殺されそうになったのか、俺は。

「お前は一体」

何者なんだ？

そう、言いかけたその時。

一瞬だけ、キーンと酷い耳鳴り音が聞こえて、誰もいないはずの教室からは教師の
声が聞こえた。

これは……元の世界に戻れたのか？

と、思ったらすぐにまた周囲の音が無くなった。

『ロアの世界』の張り直しというヤツか？

気付けば目の前に出現していた手は消えていて。

「おや、こんにちは」

代わりに一之江が立っていた。

その顔と声を見たり、聞いただけで安心してしまう。

「早速仕掛けられたようですね。いきなり消えて笑いましたよ」

「笑うなよ！　げほっ……人違いだったとき」

「なるほど」

一之江は視線を俺から逸らすと、手をポケットに入れてそこからハンカチを取り出した。

「差し上げます。光栄に思っんですよ」

「……あ、ああ、ありがとうな」

首の怪我を心配してくれたのか。

そして、洗って返さなくていい、ということを教えてくれたのか。

一之江の態度はイマイチよく解らなかつたものの、それでも彼女に氣遣って貰えたという事実は嬉しく感じた。

「……ありがとうな」

「感謝を二度する必要はありません。キモい」

「キモいとか、言うな！」

その言葉が照れ隠しとしても、言葉の刃は相変わらずだった。

一之江にツツコミをいれながらも、俺は首にハンカチを当てて廊下に転がったままのDフォンを拾った。

手に持ったが、特に熱くなったり、赤くなったりという反応はなかった。

どうやら、俺にはもう危険は迫っていないようだ。

だが、まだ終わったわけではない。

俺には危険はないが、一之江には危険が迫っているからな。

だから俺は俺が知り得た情報を出来るだけ一之江に伝える。

「なんか白い手が出てきて、それに襲われたんだ。首を掴まれて、足を床に引きずり込まれた。」

それに、床から開放された時にチラツと赤い布みたいなものが見えた。

さつきまでは俺のDフォンが赤く光っていたが、今はなんともない」

「そうですか。私のは熱くなっていますから、今の狙いは私かもしれない」

俺の情報を聞いた一之江は周囲を注意深く観察しながらも、少しも気負った様子は見せない。

相手の『ロアの世界』だろうと、一之江が戸惑ったところは一度もない。

「それで敵の都市伝説の正体だが……これじゃないかというものを一つだけ知ってるんだが」

「ほう、奇遇ですね。私もそれだと思うものに覚えがあります。

しかし、モンジも成長してきましたね」

「まあ、そりゃ、毎日のように訓練で叩き込まれているからな」

「ええ、第一に『これがなんの都市伝説なのか』。第二に『それをどう倒すのか』というのを考えなければ、以後も生き残れないので気をつけてくださいね」

「了解だ」

そんなレクチャーをした一之江は、不意に窓の方を見た。

一之江の視線の先。

窓の外は大雨が降っていて、向かいの校舎の姿すら霞んでるように見える。

だが、その校舎の屋上。

そこに。

「以外と大物でしたね」

「やっぱり……な」

赤いマントを羽織った金髪少女の姿があった。

そんな彼女の背後で雷が光ったというのに、轟音は鳴らない。

そんな雷雨の中――屋上の手すりに座って彼女は真つ直ぐに俺達を見つめていた。

「怪人赤マント。聞いたことくらいあるでしょう?」

「確かにあるな。トイレで、赤か青かを尋ねる奴だったか?」

「それは赤マントの派生物語で、『赤マント、青マント』です。今回はおそらく、その原点である『怪人赤マント』という『都市伝説』のロアでしょう」

原点と派生。

噂に左右されるロアの物語にはそれらがあつて。

確か一之江のロア、『月隠れのメリーズドール』は原点である『メリーさん人形』の『都市伝説』が実体化したものだつたな。派生としては『リコちゃん人形』というのがあつて、そちらは『最期どうなるかは解らない』とか、『終わりをわざと曖昧にして語らない事により怖くする』とか、キリカが朝のトークで語っていたな。

そうやって身近な形で派生したり、新しい話が生まれたりするというわけだ。

「ロアはオリジナルに近づけば近づくほど強い。そして彼女は、そのオリジナルに近い存在です。もっとも『赤マントの怪人』は男というのが定番ですが」

「どう考えても女の子だな。さっきの手の子が彼女なら、腕も細かつたし」

遠目からでも、金髪をクルクルドリルのように回してヘアーをしているのをなんとなく見える。

ドリルヘアーなおっさん、とかいたら即刻通報してやる。

金髪でドリルヘアーなら、女の子と思うのは間違った先入観だろうか？

「まあ、性別のアレンジくらいよくあることです。『なんとか男』という名前が付いた都市伝説のくせに女の子だったこともありまますからね」

「そんないい加減でいいのかよ！」

「ロアは女性である率が高いと言ったではありませんか」

「それも……そうか」

理由は解らないが、オカルトというのは女性と深い関わりがあるような気がする。

白雪やジャンヌ、ヒルダに、パトラ、メーヤにカツエ、リサ……前世関係だけでも多くの女性達がオカルト関係の奴らだった。

「嬉しいでしょう？」

「夢を見ているようだよ」

まあ、むさいおっさんよりマシだが。

いや、病^{ヒス}気^ス持ちの俺としてはおっさんの方がいいのかもしれないが。

ヒステリア地雷を踏まない為にも美少女よりいいかもしれない。

そんな風に若干、現実逃避をしながらも俺は首にハンカチを当てたまま『赤マント』の方を見た。

向こうも俺達を見ている。

遠目過ぎて細かい顔立ちまでは解らないが……どちらかといえば、俺というより一之江を見て笑っているように見えた。

そう見えたのは……さっきの『間違えた!』という発言があつたからだろうか。

そんな風に思つた俺が一之江の方をふと見たその瞬間。

「一之江っ!」

「っ!」

一之江の背後から、いきなり白くて細い手がぬつと現れ、一之江の腕を掴んだ。

「これは……」

一之江はいきなり掴まれた腕を離そうと抵抗するが、その腕がどンドン……何も無い空間へと引きずり込まれていた。

まるで、何もない空間に見えない壁……というよりは、透明な水面でもあるかのよう
に。

引きずり込まれた一之江の手は、その水面の先から、ぷつぷつと無くなつて見えた。

「そうでした。赤マントは少女を誘拐する存在でしたね」
無表情にそう呟く一之江。

少女を浚う存在だから、一之江が誘拐されそうになっている。

そういう存在が目の前にいると淡々と彼女は告げた。

俺はさっきの『赤マント』の発言を思い出す。

『男なんていらぬもの』。

そう彼女は言っていた。

それは、自身が少女を浚う存在だからそう言っていたのだ、というのをこの時理解した。

ロアである以上、物語をなぞるのは当然だし、逆に言えば決められた物語以外の行動は取りにくいというのがロアである以上、足枷になる。

だからそこに勝機を見出せる。

そう思ったその時。

「その通り！ わたしは、『少女』である以上はみーんな攫つちやうんだから！」

こちらのピンチな状況にはすぐわない、明るい声がどこからともなく響き渡った。

「間違いがありますね」

肘の辺りまでその空間に沈みかけているのにもかかわらず、一之江は穏やかな声でそ

う告げた。

「私は『美』少女です」

「そこ重要なのかよ（なんだ!??）」

思わずツツコミを入れてしまった俺と、『赤マント』の少女の声が重なった。

「いやいやいや、でも、少女である以上は攫っちゃうんだから！」

「実はこう見えて、私の正体は妖艶な美女なのです」

「えっ、うっそ!??」

『赤マント』のその手がピタッと止まった。

どうやらこの子、力はかなりあるが頭は残念なようだ。

一之江の嘘に翻弄されまくっている。

「ほら、モンジ。貴方も何か言いなさい」

「え? あー……うん。 ミヨウレイノビジヨ、ダヨ?」

「えええっ!??」

「ていつ!」

『赤マント』の少女が驚きのあまりにその手を緩めた瞬間、一之江はその僅かな瞬間を見

逃さずに『赤マント』の手を掴み、空間から引き抜いた。

「きゃわわわ!??」

スポン、とその空間から出てきたのは、赤いマントを羽織った少女だった。
「攫つてしまいました」

「なんと、わたしが攫われてしまったのね！　そいつはビックリだわ！」

それはやたらと元気な女の子だった。

金髪のかくるくるドルルヘアが目印の、まだ幼さの残る顔立ちをした少女。

幼い顔立ちとは裏腹に、その表情には勝気さと自信に満ち溢れた、なんとも眩しい笑顔が彩られていた。

そして、その顔には見に覚えがあった。

「確か……十二宮中の女子トイレ前にいた」

「あ！　あの時、女子トイレを盗撮していた変態ね！」

待て、誰が変態だ！

「盗撮なんかしてねえよ！」

「誤魔化そうとしてもそうはいかないんだからね！　ちやんと見てたんだから！」

じとー、とした目で俺を見つめる『赤マント』。

その目は完全に不審者を見つめる目だった。

「モンジは盗撮なんてしませんよ？」

チキシヨウ、美少女に盗撮犯扱いされるとは……。

さすがは不運に定評のある俺だぜ。

この状況をどうするか悩んでいると。

かなり珍しい事に一之江が助け船を出してくれた。

「モンジは盗撮ではなく、堂々と女子トイレ内を撮影するかなりの変態ですから」

「うわあー、ド変態なのね！」

「どうせそんなことだろうと思つたよ!!?」

「ちなみに妖艶な私はとても可愛いらしい『美』少女でもあります」

「結局、どっちなんだよ!!?」

「つて、やつぱり少女じゃん！」

俺がツツコミを入れるのと同時に、『赤マント』の少女は一之江の姿を見て抗議した。

「その通りです。ですが実は妙齡なのです」

「え、そうなの？」

嘘か本当か、確認をするかのように俺を見る少女。

そこで俺に振られても反応に困るのだが。

「妙齡なのは確かかもしれないな」

「なるほど、それがミョーレイなのね！」

その金髪の見た目通りに、外国育ちなのかもしれないが、単にもの知らないだけな

のかもしれない。

俺の嘘にコロツと騙されるその姿を見ると、なんだか申し訳ない気持ちになってきた。

「でもでも、見た目が少女ならやっぱり攫っちゃうんだから……」

そう言つて赤マントをバサツと翻す少女。

その赤マントの下に着ていたのは、高級そうな、中世ヨーロッパの貴族が好んで着ているような上質な衣装だった。それはいかにもマントが似合う服装だった。

「そして、女の子を攫った後に抹殺する！　それがわたしのロア、『夜霞やがすみのロツソ・パ

ルデモントウム』よ！」

ロツソ・パルデモントウム。

……それが何語かは解らないが、きつと『赤マント』という意味だという事は理解できた。

そして、得意げに胸（といつても一之江並みにないが）を張って宣言している辺り、余程の自信があるということなんだろう。

「なるほど、振り向いたら必ず抹殺する私への挑戦とみました」

「うん！　『月隠のメリーズドル』、勝負よ!!？」

「いいでしょう。その勝負受けて立ちます。」

つと、その前に……」

グサツ！

「切られた!?？」

「誰の胸がない乳ですか？」

殺しますよハゲ」

「もう刺してるじゃねえか!?？」

刺されたことに抗議した俺だが、刺した張本人の一之江はいつもの無表情顔で言い放った。

「これはただの優しい準備運動ですよ、グリグリ」

「全然優しくくない!?？」

グサツという痛みの後に、刺された痛みとは別の傷を抉られてるようなかなか激しい痛みが襲う。

「痛だだだだっー!!」

その痛みはそれから数分間続いた。

「さて、では始めましょうか」

「えつと……いいの?」

「心配いりません。そのこのハゲは殺しても死なない『呪われた』男ですから」
「そう、ならいいわね！」

「いいわけあるかー!?？」

一之江のお仕置きを受けて床に倒れた俺を他所に戦う気満々な一之江と赤マント。知らない人が一見すると、単なる喧嘩に見えなくもないが、実際問題。

これは殺し合いだ。

何故か俺の存在は蚊帳の外に置かれているが。

そんな風に、蚊帳の外に置かれている俺がどうしたもんかと悩んでいると。

「せやっー！」

痺れを切らしたのか、先に仕掛けたのは赤マントの少女だった。

その小さな体に似合いくらいの鋭いキックを一之江に放った。

どれくらい鋭いかというと、今の俺では視認することすら困難なくらい速くて、ハーフロアである一之江が両腕でガードして止めるくらいの威力と速さを兼ね備えているキックだった。

「やるじゃない！」

「貴方もキャラの割に強いですね」

「え、何!?? キアラの割について」

「こう……元気っ娘っていうのは咬ませ犬なのがこの業界の通例ですからね」

「そんなことないよ!?」 元気っ娘Ⅱ主人公クラスだよ!」

そう叫びながら放たれる赤マンツのパンチ。

これもまた視認できないくらい速かったのだが、一之江は腕でガードすることによって防いでいた。

今の俺が視認できないくらい速いってことは、もし、あのまま俺が戦っていたらまるで相手にならなかつたということなんだろうか。

そして……負けて消えていた、のかもしれない。

いや、弱気になるな、キンジ。

まだ俺は負けた訳ではない。

相手の攻撃が認識できないくらい速かつたとしても、俺にはまだ切っていない切り札があるのだ。

そう、今の俺は普段の俺だ。

ヒステリアモードじゃない。

俺にはまだヒステリアモードというジョーカーがあるんだから。

「くう、そんなにヒョイヒョイかわさないで!」

「当たったら痛いじゃないですか」

「ん？　もしかして、防いでいる攻撃以外にも何か躲したりしてるのか？」

「何言ってるの！　目にも留まらぬ早技で頑張ってるんじゃない！」

いや、目にも留まらぬからその速さで何が起きてるのか解らないのだが。

「モンジにはまだ解らないのかもしれないね、いいですか、こういう素早い相手の場合、まずは視線を見て、それから相手の体の軸を見るんです。すると、次にどこを狙って攻撃するのが解るから、目に見えなくても避けられるということですよ」

「……なるほど」

さらっと攻略の仕方を暴露する一之江。

目で捉えられない攻撃でも防ぎ方を知っていれば、それほど脅威にはならないからな。

戦闘中にもかかわらず、素早い敵の攻略方法をレクチャーする一之江に感心している。

「なるほど……そうだったのね……」

赤マントの少女も俺と同じように感心していた。

この子は強いけど、アホな子なのかもしれないな。

「じゃあ、これならどう？？」

赤マントをバツと広げて叫んだ。

『マジシャンズハンド
怪人の手！』

その瞬間、一之江の周囲に大量の白い腕が一齐に生えて、ざっと数えただけでも軽く百は超えるほどのその腕が何も無い空間と床からも生え。

その一本、一本が赤マントの手だ。

白くて愛らしい少女の手。それが無数に蠢き。

完全に球形に囲みように出現していた。

「空間を超えて、無数の手を生み出す能力……ですか。これは凄い」

「でしょ！　しかも、引き込んで攫っちゃう能力だもんね！　『赤マント』はたくさんの女の子をこの手で攫ったって有名なんだから！」

都市伝説の解釈によって、ロアの能力は変わるみたいだな。

大勢の女の子を攫う為には、多くの手がないといけない。

そう彼女が考えたから多くの手を操る能力を得たということなんだろう。

その大量の白い腕に周囲360度を囲まれてしまった一之江は身動きが取れない状況に追い詰められている。

「ちえつくめいとー！」

その大量の腕が一齐に一之江に襲いかかり、一之江の体は、何も無い空間の中に沈み込むかのように消えてしまった。

「い、一之江ええええええ!!?」

俺の叫び声が俺と『赤マント』しかない廊下に響き渡る。

「やった! サイキョーと言われている『月隠のメリーズドール』をこのわたし『夜霞のロツツ・パールデモントウム』がやっつけたわー!」

『赤マント』が大量の腕を握って喜びを噛み締めるように、天高く突き上げた。

そして。

その後。

俺の視界は揺らぎ。

「ぐがあああ」

ズキンと頭の中で何かが暴れるような感触を感じた。

まるで頭の中を虫が這いずり回るかのような感覚。

その瞬間。

俺の視界には男になった『赤マント』の姿が目に入った。

奪え。

奪い返せ!

許すな。奪え。

闘って……奪い返せ!

「ユルスナ」

ドクドクドクドクドク……。

血流が激しさを増して体の芯に集まる感覚を感じて。

自分が自分で無くなるかのような感覚を感じた。

これは——ヒステリアモード……？

いや、違う。この焼けつくような胸の鼓動は……!!？

二度、三度、その鼓動が走った。

どういう事だ。

この頭に血が上り——何も考えられなくなるような感覚。

ヒステリアモードよりももっと獰猛なこの感覚は……。

ヒステリアベルセ。

女を奪うヒステリアモード。

俺がそれを認識したその時。

俺のDフォンが鳴り出した。

メールが届いた。

差出人は……キリカだ。

『残ってた力を使ってモンジ君の頭の中に残っていた蟲さん達にお願いしたよ。頑張つてね、モンジ君』

画面には短くその文面しか書かれていなかった。

どうやったのかなんて解らない。

解つたのは、目の前の少女が男に見えるのはキリカの仕業だということだけだ。

俺は廊下の壁に寄りかかるようにして手をつき、胸を掻きむしつた。

もう――止められなさそうだ。この流れは。

確か、ベルセは……危険なモード。

戦闘力は通常のヒステリアモードの1.7倍に増大するが、その代わり……思考が攻

撃一辺倒になる。

いわば諸刃の剣――だったな。

――だが、それが何だ。

――もうそんな事、どうでもいい。

――どうでもいい、何もかも。

俺のパートナーを奪うなら取り返してやるよ！

今回も。

ん？ 待てよ……奪う？

「おい、赤マント」

「サイキョーのロツソ・パルデモントゥムね！」

「そんなことはどうでもいい。」

攫つた一之江をどこにやった？」

「ふうんだ、あんたなんか教えるわけないでしょ！」

「……そうかよ。『羅桜』！」

出来るかどうかは五分五分だな。

頭の中でイメージしたのはかつて闇に放たれたノーモーションの打撃技、『羅刹』。

この技は特定の角度・範囲・威力で相手の心臓に非穿通性の衝撃を与えて

――発生する振動により『心臓震盪』という致命的不整脈を意図的に起こし、急停止させる技だ。

さらに余剰のエネルギーで横隔膜震盪も起こし、呼吸も止める。

シンプルに言えば、『敵の心肺を止める技』だ。

そして……『桜花』。

それらを組み合わせて掌打を放つ。

ただし、相手の胸は避ける。

殺す前に聞きたい事があるからな。

ハーフフロアとして覚醒したことにより、肉体の耐久性も上がっている俺は『桜花』気味にそれを超音速で放つ。

パアアアン。

ノーモーションからの超音速の打撃を赤マントに叩き込んだ。

「がつ!?」

いきなり技を放ったからか、避ける事すら出来ずに吹き飛ぶ赤マント。

いつもの俺や通常のヒステリアモードの俺ならこんなことは出来なかつたかもしれないが。

今の俺には、目の前の少女が男に見える。

だから、容赦せずに叩き潰せる。

「うえええええくん!?」 痛いよー!」

一之江が苦戦して最後は消されてしまった赤マントをワンパンで俺は沈めてしまった。

「もう一度聞く。一之江はどこにやった」

「ひいつ、話すから、話すから……もう辞めてー!」

「どこだ」

「うえええええくん!?」

怖いよー!?」

助けてマスター！「さっさと話せ」ひいつ！

メリーズドールならわたしのサイキョー抹殺空間！

そこに入ってるわ。入ったら二度と出られないっていうのが、ユーカイつてもん

よー！」

「じゃあ、生きてるんだな？」

俺の問いかけにビクツとなりながらも強気な態度を崩さない赤マント。

「わたしが殺すまでは生きてるわねっ！」

「そうか……」

なら。

もう用はない。

殺せ……待てよ。

何を考えているんだ、俺は？

落ち着け……静まれ。

何とかベルセを制御して赤マントに問いかける。

「ところでロアの戦いには相性があるっていうのは知ってるか？」

「あ、うん。聞いたことあるわ。大変みたいよね？」

「ああ、お前のロアは相手を閉じ込めて殺す能力だよな」

「そうよ！　今まで色んなロアをポイポイ放り込んでおいたわ！」

「殺してないんだな？」

「後で纏めてやっっちゃうのよ！」

愉快犯らしい……のか？

ユーカイするらしく。

「そうか、ちよつと待ってろ」

「電話するの？　いいわよ！」

俺は手に持ったDフォンを操作した。

直後。

トウルルル。トウルルル。

「あー、もしもし？　繋がったな」

「はあ……もしもし私よ。今貴方の後ろにいるの」

「うええええええ!!？」　な、なんで帰って来ちゃてんの!!？」

俺の背後にいる奴を見て仰け反そうになるくらい動揺する赤マント。

「まあ、こういうロアだからな、コイツは」

「こんにちは、『月隠のメリーズドール』です」

「い、いんちちは」

見てわかるほど、挙動不振になる赤マント。

一之江がそんな隙を見逃すはずがない。

「さつきまで私、普通の格好をしていたでしょう？」

「そ、そういえば」

「つまり、私はまるで本気じゃなかったのです。そして本気の私は、さつきよりも10億倍は強いんですよ」

それはいくらなんでもふかし過ぎだ、一之江。

誰もそんな嘘には引つかかたり……。

「じゅ、10億倍も!?」

引つかかてるよ!??

赤マントには通じていた。

露骨にビビっている。

「さあ、そのドリルをストレートにしてあげましょうか……」

「ひいっ!　こ、今回は引き分けて報告しておいてあげる!　それじゃね!」

赤マントはそう叫ぶと、自分の後ろにある空間にダイブした。

何も無い場所に水面のような波紋が広がって、そこにトポンと沈み込むかのようにい

なくなっちゃった。

「……騒がしい奴だったな……」

「あの逃げ方をされると、私の声も届きませんね。まあ、引き分けなのでしょう」

「俺の時みたいに電話をかけて追い詰めるってのは？」

「今私を呼んだのは貴方でしょうに」

「あー、そういう決まりもあるのか」

つまり、現状だと『月隠のメリーズドールの被害者役』は俺ということになってるのか。

物語的になぞらないと能力は発動できないんだな？

「意外と制限が多いな、ロア同士のバトルは」

「ええ。今回は強敵がアホの子だったので楽勝でしたがなんか気になることを抜かして

ましたね、あの子」

「ああ、そういえば」

『引き分けって報告しておいてあげる！』

「あれはつまり……」

「彼女は彼女で、私みたいなものなのかもしれませんね」

「一之江みたいなもの？」

「ええ、ですから」

次の言葉を呟くまでに少しの間を置いて。

「誰かの物語、ということですよ」

一之江はそう告げた。

第2章 ベッド下の男

第三話。口は災いの元って言うけど……ヒス金にとって
はそれがデフォ!

2010年6月18日。午後1時。夜坂学園生徒会室。

昼休み、俺は生徒会室にて詩穂先輩達とランチをしていた。

「わっ、モンジくんのおべんと、美味しそう!」

「実際に美味しいのは確かですが、それより俺の名前は疾風です」

「うんうん、格好いいよねー、モンジくんの名前つ。お弁当も美味しそうだしっ」

生徒会室の机の上にあるのは手作りのお弁当。

かつて白雪が作ってくれたような豪華なお重ではないが、いかにも女の子が手作りしました、的な色鮮やかな可愛いらしいお弁当。

中身は卵焼きに、タコさんウィンナーなど定番なおかずがたくさん入っている。

見た目的にも、味的にもとても美味しいお弁当だ。

そんなお弁当を作ってきてくれたのは……。

「その……あの……」

音央の横に座りもじもじとしている鳴央ちゃんだ。

「わっ、もしかして鳴央ちゃんの手作り!?」

「は、はい……」

恥ずかしそうに呟く鳴央ちゃん。

途端にニマニマとした表情で俺を見つめてくる詩穂先輩。

ミスったな。

生徒会室でランチという選択肢は間違ったかもしれん。

詩穂先輩に鳴央ちゃんとの仲を誤解させてしまったようだ。

このままでは「なるほど、お幸せに〜」なんて言われて既成事実化されかねない。

なんとしてでも誤解を解かなければ俺は詩穂先輩や他の女子を口説いたあげくに、鳴

央ちゃんと付き合っている女たらしという変な噂を流されかねない。

ここはなんとしてでも誤解を解かなければ……。

しかし。

「あ、あう……」

俺の視線の先には真っ赤な顔をしながら俺を見る鳴央ちゃんの姿が目に入った。

そんな彼女の前で「いやいや、鳴央ちゃんとは単なる友達です。俺は女子は苦手です

から」

などと言ってしまったら目の前の少女を傷つけかねない。

そんな事できるか？

駄目だ。ヒステリアモードではないとはいえ、非がない彼女を傷つける行為はしたくない。

だが、どうする？ どうすりゃあいいんだ？

考えろ、考えろ遠山キンジ！

「二つ目のお弁当お疲れ様です」

と、そんな事を考えていた俺に止めを刺すように一之江がバラしてきやがった。

「むむっ？」

先輩はその言葉にすぐに反応して。

「え……そう、なんですか……？」

鳴央ちゃんは驚いたような、ショックを受けたようなそんな顔で俺を見る。

……美少女と一緒にランチを食べる。

世の男共が憧れるシチュエーションだが、こうなるともうこれはただの修羅場ではない。誰でもいい。代われるものなら速攻代わってやるからこの状況をなんとかしてくれ

!

「妹の手作りよ。モンジにはよく出来た、コイツにはもつたない妹がいるの」

そんなピンチな俺を見かねてか、音央が助け船を出してくれた。

「どうせ、鳴央のお弁当も嬉しいからって、妹のも早弁したんでしょ? いくら運動し

てるからって食べ過ぎよ」

「あ……う、嬉しいのですか?」

「そりゃあもちろん。美味そうなお弁当を貰ったら食べないと失礼だからな」

実際、夢の中やこれまでも何度か食べた事があるが鳴央ちゃんの作るご飯は美味し
い。

だから味に釣られた……なんて事はいえなけれどな。

「わお、モンジくんったら、プレイボーイさんだねえ」

プレイボーイ?

ただ、美味しいお弁当を食いたかっただけなんだが。

「なんなら先輩も俺に作ってきてもいいですよ?」

話題逸らして先輩に話を振ると。

「あはは! 私にはモンジくんがそんなに頑張つて食べちゃうほど美味しい、妹さんか
鳴央ちゃんのが食べてみたいな」

詩穂先輩は笑顔でそう答えてくれた。

「じゃあ、今度妹に……」

といいかけて。気づく。

そんな事を妹達に言ったらどうなるか……脳内シミュレートしてみた。

かなめの場合……『あははは、お兄ちゃん。スリーアウトはチェンジだよ?』

うん、論外だな。

リサの場合……『わかりました。ご主人様がお世話になる方でしたら精一杯作ります

ねー!』

おおっ、いいかもしれん。

『その代わりに、今夜はリサめにお情けをください』

……いや、やつぱり駄目だ!

リサはそう言つて夜中にベッドに忍び込んできかねん。

理亜の場合……『お世話になつて会長さんに……ですか?』、『兄さんがお世話に

なつていらっしゃるなら……まあ、いいですけど……その、女性ですか?』

この場合理亜が一番安全かつ、なんの見返りも求めないのだが、いかんせん。

理亜と詩穂先輩にはなんの面識もない。

いきなりお弁当を作らせるのもおかしい話だな。

と思い直すと。

「ううん、冗談だよ。会ったこともないのに、いきなりご飯作って、なんてお願い出来ないもんね」

先輩が気を遣ってくれた。

「まあ、確かにうちの妹は潔癖症なので、そういうの気にしそうですし」

先輩や音央達にはかなめの事はまだ話していない。

どう説明していいかわからんし、かなめ達と出会った事で先輩をこちらの世界に巻き込みたくないからな。

「わ、私は……会長さんの分も作って構いませんよ?」

「ほんとに!?」 鳴央ちゃんありがとう〜!」

「わわっ!?」

先輩は席を立ち上がると、ぎゅううう、と胸で鳴央ちゃんの頭を抱き締めた。

……ああ、詩穂先輩の胸はデカくて柔らかいからな。

一度体験したが……天国はきつとああいうところなんだろう。

……って、俺のバカ!

そんなに見てたら、また……!

「鼻の下伸ばし過ぎよ、バカ」

音央に叱られた。

「バカとは失礼だな。女性の胸を見るのは男の本能で、紳士の嗜みだよ?」

「ふんっ!」

例のごとく、またヒスつちまった俺に音央は蔑んだ瞳を向けると、顔を背けて一人でご飯をパクパクと食べた。

……何を怒っているのかな?

音央は怒りだったが、まあいつもの事だ。

比較的平和なランチと言っていていいだろう。

「モンジン」

俺の隣に座り静かにお弁当を食べていた一之江が急かすように呟いた。

ああ、わかってるよ。

わざわざ生徒会室までご飯を食べに来たのは、先輩を見てデレデレする為じゃないって事は。

ただ……先輩を見ていたらデレデレしなくなってきたなあ。

「殺しますよ?」

「はい、冗談ですとも一之江様!」

一之江の殺しますよ、は冗談ではすまないからな。

いや、冗談だと思うけど。

……冗談だよな?

「ごほん。ああ、そういえば先輩」

俺は極力自然を装って会話を始めた。

「むにゃ? モンジくんもむぎゆうく、つてされたい?」

「是非に!!?」

反射で答えてしまった俺は悪くない。

直後。

ぐさり。

と、俺の脇腹を熱い何か突き刺さったような、そんな感触を感じた。

「ぐほおおおおおつ!!?」

「わっ、どうしたの!!?」

脇腹が熱い!　　というか痛い!　　というより死ぬほどヤバイ!
のに死ねな

い!

苦の四段活用を味わう俺をよそに一之江はすまし顔をしている。

一之江は毎回俺に何を刺しているんだ!!?

凶器はどこにもないし。

「ちよ、ちよつと、突然腹痛が……」

「わわつ、だいじようぶ?!? おトイレ行ってくる?」

「い、いえ、すぐに治りますので……ぐうう」

チラツと一之江を見ると、すまし顔でお弁当を食べている。

ぐつ、清楚な見た目だけに絵になるのが腹ただしい。

「会長、最近は何かクラスメイトさんから、怖い話を聞いたりしませんでしたか?」

そんな事を思っていると見かねたのか、溜息交じりに俺の代わりに音央が聞いてくれた。

そう、俺達にとって詩穂先輩は重要な情報源だったりするのだ。

『赤マント』の事も含めて何か噂話だけでも知っていれば聞き出したい。

それが今回生徒会室でランチを食べる一番の理由だ。

「あ、そうなの! もう、聞いてよ、音央ちゃん、モンジくんつ!」

音央の問いに先輩はそうだった! と思いついたかのようにパタパタとホワイト

ボードの方に走って、黒いペンのギャップを外しながら言う。

『『ベッド下の男』っていうのがあるらしいの!』

先輩はホワイトボードに、平たいベッドのようなものを書いて、その下の部分に矢印

を描いた。

俺が知りたかった『赤マント』ではないが、それも気になる話だ。

ベッド下の男……どこかで聞いたような気がする。

テレビとかだったかな？

「なんでも、一人暮らしの女の子の家のベッド下に隠れてて、寝静まった頃に包丁とか斧とかでザツクリ！　って殺しちゃうらしいの」

ホワイトボードに先輩は、ベッド下に黒い人影を描いて『包丁』とか『斧』とか『おつかない!』とか、どんどん描き加えていく。本人は本気で怖がっているのだが、なんだか微笑ましく見える。

「ああ、あたしも聞いたことがありますね、その噂」

「お、そうなの、音央ちゃん？」

「ええ。一人暮らしの女の子の家に泊まった子が、突然寝ている家主を起こして『コンビニに行こう!』」

私、アイス食べたくなくなっちゃった!』って叫び出すとかで。

それで家主がその剣幕に驚いて部屋を飛び出したところで『貴方のベッドの下に、包丁を持った男がいたの!』って慌てて警察に駆け込むっていうお話」

「そうそう、それぞれ!　わたしが聞いた話もそれだよ!」

……ああ、やっぱりその都市伝説か。
聞いたことがあるな。

聞く話の内容次第ではベッド下の男が斧を持った女に変わつてたり、ベッド下に煙草をもみ消す何者かの姿が見えたりといったバリエーションがあつたりする。

そんな風に俺や音央でさえ知っているメジャーな都市伝説。
つまりはかなり強いロアが現れたのかもしれない。

そんな事を考えていると一之江は弁当を食べる手を止めて先輩を見て尋ねた。

「先輩は、一人暮らしなのですか？」

「そうなの！　だから、ちよつと怖くて……」

先輩が一人暮らしというのは俺は既に知っていた。

あの日、詩穂先輩をお姫様抱っこして街中を走り回った時に先輩の自宅前まで行った事があるからな。

しかし、詩穂先輩みたいな可愛い人が一人暮らしをしているとか。

……家庭の事情とかがあるのかな。

聞いてみたいが……聞くのもなあ。

「会長つて一人暮らしなんですな。〴〵両親は？」

そんな俺のハードルをあつさり乗り越えていくのが音央だった。

「うん、外国なのつ。イタリアのフィレンツェだよん」

イタリアか。

イタリアと聞くと幸運加護持ちのシスターやらバチカンとかを思い出すな。

元気かな、メーヤとか。

「わたしも卒業したら来ないか、って言われているんだけどね」

そうか……仕方ないよな。

そう『俺』は思うものの。

先輩のその言葉に、俺の中のもう一つの想いがざわめいた。

「へえー、先輩はどうするんですか?」

『俺』は平静を装いつつ、笑顔で尋ねた。

「んー、大学に受かったらこっちのままかな? 落ちちやったら行くかも」

『っ!』

俺の想いとは裏腹に先輩の返事はあっけらかんとしていた。

だが『俺』は納得してしまう。

そうか、そうだよな。両親がいるんだったら一緒に暮らすのは普通だし。

大学生になったら一人暮らしをしてもおかしくない。

先輩にとってはごくごく当たり前な選択に、それでも胸はドキドキした。

先輩がいなくなるかもしれない。

それは寂しい事だが、どうしようも出来ない現実で。

自分自身の境遇に重ね合わせてしまい、どんよりとした気分になってきた。もし、大切な人がいなくなったら？

気楽に会えないほど遠くに行ってしまったら？

残された奴らは……どう思うのだろうか？

「モンジ。しつかりしなさい」

そんな俺を現実に戻したのはやはり一之江だった。

—— そうだ。今はそういう感情で戸惑っている場合じゃない。

先輩が怖がっている都市伝説は、実際に「いる」可能性が高いのだ。

しかも一人暮らしという事は先輩が狙われる可能性が高いんだ。

「ん、ありがとうな」

小声で一之江に感謝を伝えると、一之江は僅かにコクリと頷いた。

……普段もこういう優しいツツコミをしてくれるといいのだが。

何でいつもザクザク刺してくるのかな？

あれか？ 愛情の裏返しというやつか？

好きな人ほど刺したい、みたいなの……。

いや、一之江に限ってそれはないか。

ツンデレじゃあるまいし。

「最期に言いたい事はそれだけですか?」

「すみませんでした——っ!」

何で考えてる事が筒抜けになつてゐるんだよ!?!?

あれか、一之江には人の心を読む力とかがデフォルトされてるのか?

一之江ならありえそうで怖いな……。

「しかし、先輩が一人暮らしとなると、心配ですね」

そんな事を考えながら俺は先輩に話しかける。

「うん、私も怖いなー、と思つて。最近はベッドで寝るのが怖いから、リビングのソファにお布団を持つてつて寝てるくらいだもん」

なるほど。

最初からベッドで寝なければその都市伝説は発生しないはずだからな。

対処法をさりげなくやつてる辺り、さすがは先輩だな。

「でも、おかげで体が痛いし、ちよつと寝不足なの。ふあゝ……」

……それはそうだよな。ベッドの方がフカフカだろうし、よく眠れるのは当然だ。

よーし、それじゃあ……。

「じゃあここは俺が先輩の家に泊まりますよ、なんちゃって！」
冗談っぽく言ってみたが……。

「ほんと?!?」 モンジくん一緒に寝てくれるの?!?」

詩穂先輩はもの凄い勢いで食いついてきた。

……。

……あれ?

もしかして、俺……。

やっちゃまったか?

第四話。メールとお泊まりと

2010年6月18日午後6時30分。七里家。

そんなわけで、俺は……詩穂先輩の家に。

部屋の中に入ってしまっただ。

そこは駅前から歩いて10分くらいの距離にある、大きなマンションで。

707号室が詩穂先輩の部屋だ。

そんな高い場所にある1LDKの部屋に俺達は免れていた。

「いらつしゃーい。何も無い部屋だけど、ゆっくりしていつてねっ!」

詩穂先輩に案内されて室内に入ると、そこはデザイナーマンションのように綺麗に揃えられたかのような穏やかな色彩のお洒落な部屋で、男の俺には敷居が高く感じるほどのお洒落な空間だった。

置かれているソファはフカフカで、カーペットは肌触りがよく、調度品一つ見てもセンスが良いそんな部屋だ。壁には先輩の趣味なのか、お洒落な帽子がいくつも掛けられていて、それ自体がインテリアのようだ。

つまり、先輩の部屋は『女の子が理想な一人暮らしをしてみた』みたいな部屋だった。女性らしい部屋のせいかな、部屋に入った瞬間。

女性特有の匂いにより俺はまた……なっちまった。

「ふえー」

「凄い綺麗……」

一緒に部屋に入った音央や鳴央ちゃんもすっぴん感心していた。

俺達三人が部屋に入ったところでまるで狭さを感じない。

それくらい広いリビングだった。

ちなみに一之江は今はいない。

何でも外せない用事があるとかで、夜中に合流することになっている。

なので一之江は夜中に先輩から借りた合鍵を使ってくるはずだ。

パジャマを持参してな。

そう、何故かしらんが女子達は皆パジャマパーティーをやる気になっている。

男の俺がいるのにもかかわらずにな！

そんなこんなで先輩の部屋に通された俺はソファに、音央達はリビングのテーブルに

着いたのだが。

……落ち着かないな。

綺麗過ぎる部屋だから、というのもあるが。
なんとなく。

そう、なんとなく部屋に違和感を感じるのだ。

……うーん、なんだろうな？

「うふふつ、それじゃ、ご飯の用意しちゃうね？」

「あ、何か手伝いましょうか？」

先輩がキッチンに向かおうとしたのを見てすかさず音央が立ち上がる。
しかし。

「いいのいいのっ。お客さんたちはのんびりしてて！ 今日頑張ってくれてるモン

ジくんや音央ちゃんたちにわたしからのお礼もしたかったんだよん」

先輩はそう言って一人でキッチンの方にパタパタと行ってしまった。

「え、あ……すみません。お言葉に甘えます」

音央はそのままストン、と座って。

「どうすんの？」

ソファに座っていた俺に小声で尋ねてきた。

「どうするって、何を？」

「お泊まり会って言うてるけど、あんたが会長の何かを手伝うと、大抵オバケか何かが出

るんでしょ？」

「まあ、その時出たオバケと今は一緒にいるわけだが」

俺は音央と鳴央ちゃんを見ながら頷く。

「あ、あはは……」

照れたみたいに俯いて笑ってから、鳴央ちゃんは上目遣いで俺を見た。

「でも、本当に、その『ベッド下の男』が現れてしまったらどうなさるんですか？」

そう言いながら心配そうに先輩の寝室を見た。

「とりあえず出たらやつつけるのは確定として、だな」

「まあ、そうよね。そんな物騒な痴漢オバケ、とつと倒したいもの」

俺の言葉に音央も同意して拳を握り締めた。

「しかも先輩の家に、というのが許せないしな」

「先輩の家に泊まるっていう、この事実を知ったらあんたを許せないって思う会長のフアンは大勢いるでしょうね」

「ああ……何だってこんな事になっちゃったんだ」

いらぬところで恨みを買ってしまっている。

泊まるのは俺の意思じゃないのに、それが原因で妬まれるとは。

さすがは不運に定評のある二年の遠山。

今は一文字だが。

この事がバレたら、俺はもう穏やかな学校生活を送れなくなるだろう。だけど、そんなリスクがどうした？

こんな事はいつもの事だろ？

「まあ、なんとかなんだらう。」

それよりも問題は倒し方だな」

「はい。ただ、『ベッド下の男』噂自体は、別に殺傷などがあるわけではないので、戦闘になつたとしても私と音央ちゃんならなんとか出来るかと思えます」

自信満々にそう語る鳴央ちゃん。

普段見る泣き虫というイメージを覆すほど、その目には強い光が宿っていた。

「え、音央と鳴央ちゃん、戦えるのか？」

「うん？ あたしはほら。あんたをザクザクした事があるじゃない」

「ああ……あの茨か。使えるのか、あれ？」

「うん。鳴央と練習したもの」

「音央ちゃん、最初は全然上手く使えなかつたんですけど……」

「モンジをぶち殺そうとした時の気持ち思い出して！ つて意識を変えたら、その瞬間からまるで手足のように茨の鞭をビシバシ使えるようになったわ」

「……そうか。それはよかったな」

「うふふっ」

もう嫌だー！

なんで俺の周りには俺を殺そうとする奴が集まるんだよ!!??

アリア（風穴）、理子（爆弾、ナイフ、ヘッドショット）、白雪（日本刀&機関銃乱射）、レキ（狙撃）、かなめ（刀、包丁……eat）、一之江（背後を振り向かせて殺害）、キリカ（蟲でおしよくじ……いただきまーす♡）……そして今度は音央か。

また死ぬかも俺。

まあ、二度、三度すでに死んでるから今更感があるけど。

死んでも生き返ればどうっていう事はないからな。

だが殺られて喜ぶ性癖はねえ！

ヒステリアモードの派生にもしかしたらそっち方面のものがあるかもしれないが、少なくとも俺にはそっちの趣味はない。

「はあー、まあ、いいや。それで鳴央ちゃんは何が出来るんだ？」

音央はあの茨で巻き

ついて相手をくびり殺すとか出来そうだけど」

「わざわざ物騒ない方すんなー」

いや、だってなー。

さつきまでの態度見てたら誰だつてそう思うよ？

反対に鳴央ちゃんは殺す以前に戦うことすら苦手そうだけど。

「え、あ、私は、その……戦闘は、苦手ですね」

音央の講義をスルーして、鳴央ちゃんに話しかけると予想通りの答えが返ってきた。

「だよー。鳴央ちゃんがいたあの家だつて、富士蔵村の一部だったわけだしな」

「ま、鳴央が何もしないでも済むようにあたしたちで頑張ればいいわよ」

「それもそうだね」

「あんたも主人公なんだし、私より数十倍も強いんだからなんとかなるわよ」

「そうだね。音央や鳴央ちゃんみたいな美少女が戦わなくても済むように俺が頑張る

よ」

「ま、またそんな事を言つて……本当にバカなんだから！」

「あ、あう……」

真つ赤になる六実姉妹を堪能しながら俺は考える。

主人公として、俺が出来ることはなんだろうか。

皆んなを俺の物語にした責任。

大切な物語を守る為に必要な強さ。

そういったものなら既にある。

他に足りないとしたら……なんだろうか？

「ま、最悪やつつけられなかったとしても、先輩の家からは撃退するという方向で。」

一之江が合流してからやつつけるといふ手もあるからね」

「そうね。夜中からでも来てくれるなら心強いわ」

「私も見てましたが、一之江さんは息をするかのように、当たり前のように大勢の村人をやつつけてましたから。あの方は本当に強いんだと思います」

自分が強くあるために、様々な努力をし続けている一之江。

だからこそ、彼女は強く、気高く在るのだろう。

負けていけないな。

彼女の隣を並んで歩く。

いや、彼女の前を歩いて守る。

そんな存在になるくらいではないと彼女を物語にした責任は果たせない。

強くなろう。

誰よりも。

大切な物語達を守る為に。

そう決意した時だった。

「ひゃあああ、焦げちゃったー！」

先輩の悲鳴がキッチンから聞こえてきて、俺達三人は顔を見合わせた。

「音央、鳴央ちゃん、やっぱり手伝いにいつて貰えるかな？」

「うん、そうね」

「ふふっ、行つてきます」

音央と鳴央ちゃんは立ち上がり、キッチンの方に歩いていく。

俺もせめて食器の用意くらいはしよう。

そう思い立ち上がったその時だった。

違和感を感じた。

お洒落で雰囲気も良く、適度に生活感もある理想的な一人暮らしの部屋。

それなのに、何故か違和感みたいなものを感じてしまう。

……気のせいだろうか？

既に『ベッド下の男』が存在していて、条件が整るまで姿を見せない……とかならある程度のピンチは承知の上なんだが。

……何故だろう。

『ベッド下の男』とは関係ないのだが、何か違和感を感じずにはいられない。

「モンジー！ あんたもちよつと手伝いなさいよー！」

キッチンから俺を呼ぶ音央の声が聞こえてきて。

俺はその声に返事を返し、キッチンに向かう。だが、やっぱりもう一度背後を振り返った。

「……なんだろうな？　何かが引つかかる」

首を傾げるが、その原因は解らない。

気になりながらも俺はキッチンに向かった。

この部屋に時計が一つも無かった事に気付いたのは、この事件を解決したずっと後のことだった。

2010年6月18日。

午後3時15分。

差出人・仁藤キリカ。

タイトル・いいなー



内容・モンジ君たら、詩穂先輩の家にお泊まりなんだって？

いいなー！ ずるい！ 私も行きたい！

ううっ、でも今は結構大変なので我慢します。しよぼん。

お土産話いっぱい聞かせてね。

特に恋話とかだつたらポイント高いよ！

あつ、一応心配だから『ベッド下の男』は調べておくね。

何か解つたらメールしまーす。

ふふっ、頑張るんだゾ☆

モンジ君のキリカより、チュツ

時は少し遡り、午後の授業を受けていた時にそのメールに気がついた。

「……頭痛くなってきたな」

キリカから送られてきたメールを何度も読み流して思う。

送る相手間違えてませんか、キリカさん？

特濃葛根湯、この世界に売ってるかな？

頭痛とかにも効くんだよなー、アレ。

今度探しに月隠に行ってみるか。

「……ジジくさいですよ、モンジ」

「人の心を読むなよー」

背後から聞こえてきた一之江に溜息を吐きながら返答する。

「特濃葛根湯って……高校生が飲むようなもんじゃないでしょうに」

仕方ないだろう！　クスリが効きにくい体質なんだから。

ワトソンと戦った時もそうだったが、俺はクスリが効きにくい。

だから普通の医薬品じゃ効きにくいから成分を凝縮した葛根湯が効くんのだ。

「なるほど。そして貴方は新たな都市伝説となるのですね」

「ん？　何の話だ」

「101番目の葛根湯物語の主人公、一文字モンジとなったのです」

「待て！　何だよ、101番目の葛根湯物語って。それとモンジ言うな！

俺の名前は「文字疾風だ、」

「「文字疾風?」 それはどこのモンジですか?」

「解つてて言うな!」

一之江に突っ込みながらも思う。

『ベッド下の男』のロアの事を。

かなり有名なロアである以上、強い存在なのは確かだろう。

そんな存在に俺は挑まないといけないのだ。

それも、一之江は夜中までいない状況で。

「やっぱり、例の『赤マント』を調べるのか?」

「はい。ロア状態だったから外見が変化しているかと思うのですが、あの特徴的な性格や姿ならば意外と見つけやすいかと。蒼青学園そうせいの仲間達に連絡して調べてみます」

俺の問いかけに囁き声で返す一之江。

「仲間……達?」

それは初耳だった。

一之江に俺以外のロアについて語れる仲間がいるという事が。

「言っていませんでしたっけ」

「うん、初耳だ」

「蒼青学園にはロアやハーフロアが結構な人数いるので、チームを組んだりしているのですよ。とても頼りになる人々です」

「おいおい、あの金持ち学園にそんなにロアがいるのかよ」

「全国でも有数なロアの産地かと」

「どこの地方特産品だよ！」

お金持ちの息子令嬢の為の名門校が、まさか都市伝説の溜まり場になっているとは。そんな事誰が予測できるのか。いや、予測できないからそうなっているのか。

しかも、一之江が頼るくらいだとかなりの実力者がいるのだろう。

……なんだかな。

なんとなく、悔しいと思ってしまう。

「仲間の一人に境山を縄張りしている人がいるので、その人に『赤マント』の事を尋ねてみます。かなりの派手好きな人ですがトマトさえ与えとけば大概の言う事を聞かれるのでちよろいです。なんとなくモンジに似ていますし信用はできますよ。強さ的にも」

「そうか」

……なんだろうな、この感じ。

一之江が俺以外の人を頼るのを聞くと面白くない。

「嫉妬オツ」

「うるせえー!!」

違う。嫉妬ではない……と思いたい。

「まあ、今は貴方の物語なんですから。そんな嫉妬する必要はありませんよ」
「うん?」

……もしかして今のは、フオローだったりするのだろうか。

「……いや、まあ、えーと……ありがとうな」

「こーやってちよつとデレたフリをすると立ち直るからちよろいですよね」

「ちよろいとか言うな!」

授業中にもかかわらず強めの囁き声を出してしまい、多くの生徒達の視線が俺達に集まってしまった。

「静かにしてください、ハゲ」

「ハゲてねえよ!」

まるで被害者のように言う一之江。

こいつは本当に読めないな。

まあ、いい。今日の授業も残り僅かだ。

キリカに返信するか。

そう思い携帯を取り出すと。

その時、またもやメールの着信があった。

俺はメールを開いて見た。

見てしまった。

このメールが俺達の日常の終わりを告げていたとは知らずに。

差出人・理亜。

タイトル・申し訳ありません

内容・お疲れ様です、兄さん。理亜です。

申し訳ありませんが、本日は友人の家に宿泊の予定です。

早く帰ってカレーライスを作る予定だったのですが、どうしてもはずせない用事が出来てしまいました。

もちろん女性の友人なのでご安心下さい。

いづれ兄さんにも紹介いたします。

宿泊する旨は私の両親にも兄さんの両親にも、どちらにも連絡済みです。

本当に申し訳ありません。

かなめさんも一緒です。

カレーライスは後日作りますね。
それでは。

この時のメールがのちに。

俺やかなめ。

そして、俺と理亜の関係を大きく変える出来事へと発展していったのだが。
この時の俺にはまだ解らなかった。

第五話。ベッド下の怪人……

2010年6月18日。七里家リビングルーム。

携帯電話で時間を確認すると、もうすぐ日付が変わる時間になっていた。

夜中まで起きていることが多かった一文字の身体ではまだまだ眠くはないのだが。

「ふあ……」

パジャマ姿の先輩は眠そうに目を擦っていた。ソファの上でゴロンと転がってダラダラしているその姿はなんとも可愛らしかった。俺はそんな先輩を床に敷いたクツシヨンに座りながら眺めていた。

(なんとというか……平和だな)

普段、生死をかけた殺伐とした日常を送っているせいかな、詩穂先輩のような普通の人を送る。

普通の日常というものを確認すると……なんとというか。

安心するな。

といつても、俺はその普通の日常の中で生きようとは思えない。

一度武偵を辞めて、普通の人のように生きようと思った事もあったが俺には普通の生

活は合わなかったからな。

別に普通の生活に不満があったわけでも、ましてや常に死と隣り合わせになるような環境に身を置きたいわけじゃない。

ただ俺は気がついてしまっただけだ。

普通の人が普通に暮らせるように、力を持つ者にはその力を正しく使う責任があるという事実。

それは死んで憑依してしまった今でも変わる事はない。

ロアの力は巨大だ。

これまで俺が使ってきた銃器や刀剣類なんかよりも遥かにその力は巨大で、危険だ。

噂一つで力が増減する存在。

ただの人間をも噂一つで化け物に変えてしまう世界。

その力は恐ろしいが戦うことでしか生きられない俺にとっては必要な力だ。別にその力を悪用しようとかそんなことを考えているわけじゃない。

むしろ、普段の俺にとってはヒステリアモードと同じくらいいらぬ力だ。

だが力がある以上、俺には責任がある。

成り行きでなっちまったが、主人公としてその力を正しく使う責任が。

大切な人やその人の周りの日常を守るといふ責任があるんだ。

だから俺は戦ってやる。

世界を救う主人公とか、正義の味方にはなれないが。

……俺の大切な物語達や周りの人を助けることはできるから。な—んて事を考えていると、先輩は眠そうに欠伸をし始めた。

ちなみに今は俺と先輩の二人つきりだ。

「詩穂先輩っていつもこの時間帯まで起きてるんですか？」

「ううん、いつもはもつと遅いよ。夜中のアニメとか見てるもん」

「ああ、俺も見てましたよ」

同じ学科の理子に付き合わされて、電話で感想を聞かれたりしたからな。

「面白いもんね—！ いつもワクワクしちゃうもんっ」

そんな話題をしつつも、俺は緊張で胃が痛くなっていた。

と、言うのも……。

「んにゅ？」

先輩は。パジャマ姿。入浴を終えたその濡れた髪がセクシー度を上げている。

さらに湯上がりのいい香りがふわあつと漂ってきて、俺のドキドキをヒートアップさせていた。

ようは、つまり……。

またヒスリそうになっていたのだ。

「んふふ、どうしたのん？」

(うつ……!??)

よりによつて、先輩はソファから降りて四つん這いになった体勢で俺に近寄つてきた。

湯上がりの先輩の髪。そこから漂う花の香りを模したシャンプーの匂い。

濡れた長くて綺麗な髪。

パジャマの隙間から今にも飛び出さんとしているかのような山を持つ、豊かな谷間。

俺は今、視線を外したくても外せない状況に陥った。

視線を外せば先輩の豊かな谷間危険ゾーンを直視しなくてすむ。

だが、あからかさまに視線を逸らせば先輩を傷つけるかもしれない。

それに……俺の中のもう一人の俺はこのまま先輩の胸を見ることに賛成している。

「い、いや、先輩が……可愛くて」

歯切れが悪いのは先輩の胸を凝視してしまった事への罪悪感と気まずさからだ。

「あら、ありがとっ！ モンジくんも可愛いよ？」

「ふえ？」

「女の子の部屋で、お風呂上がりのわたしを見て、ドキドキ緊張してる顔が、なんだか

とっても可愛いもの」

チキショーやられた。

先輩に弄ばれてる感じがするが……怒るに怒れない。

こっちの俺ではとくに。

「うん、それは、ほら……詩穂先輩が魅力的な女の子だからだよ？」

「っ!?? ……ありがとう」

「詩穂先輩のような魅力的な可愛い女の子が俺の先輩なんて。俺は幸せ者だよ？」

「ふにゃあ……可愛い、私が？」

「ああ。詩穂先輩はとっても可愛い、魅力的な女の子さ」

ダメだ。止まらない。

「詩穂先輩……いや、俺の詩穂はやっぱ最高だね！

どうだい、君も俺のもの」

ヒステリアモードの俺が一世風靡の告白をしようとした……まさにその時。

「ひゃああああ！ こ、こら鳴央！ へんなどこ触らないで！」

「音央ちゃんの肌ってほんつと、綺麗ですよね……」

シャワ~~~~~、つと解りやすいシャワーの音と共に、そんな会話がエ

コーして聞こえてきた。

先輩の家の風呂はデカイ。

先ほどまで先輩が入っていたそこに、今はダブルボイ的な姉妹が入っているのだ。

「あいつら……」

俺の顔はさぞかし真っ赤になっているだろう。

告白を仕損なつたから……というのもあるが。美少女がお風呂でキャキャウフフと
はしゃぐ姿を想像してしまった、というのが一番の理由だ。

「んふふふ、楽しそうだよね、二人とも」

楽しそうに笑う詩穂先輩。

先輩がいる前で他の子のことを想像してしまうのはどうかと思うが。

それでもお風呂ではしゃぐボイ的な美少女の姿を妄想してしまうのは悲しいことに
男の性というやつだ。

ちなみに、さつき先輩がお風呂に入つて『ふんふんふん♪』と鼻歌を歌っていた音
もゴシゴシとボディタオルで身体を洗う音もちゃつぷと水が浴槽から溢れる音が聞こ
えたのもヒステリアモードで強化された俺の聴力はしっかり聞いていた。

ヒステリアモードの無駄使い？

いや。これは詩穂先輩の身を『ベッド下の男』から守るのに必要な行動だ。

だから仕方ない！

と、そんな言い訳を脳内ですべてしていると。

「モンジくん、わたしのお風呂覗きに来なかったね？」

先輩が爆弾を落としてきた。

「ナニヲイツテルンデスカ!?」

いきなりナニを言ってるんだこの人は！

俺の頭の中ではかなりスピーディに、

『お風呂覗きに来なかったね?』↓『覗きに来てくれてもよかったのに』↓『モンジくん、

これがわたしの体だよ……』↓『ふふ、いらっしやい……♡』

のように変換された。

イヤイヤイヤ。そんなはずねえから！　いつもの先輩のお茶目だから！

そう思う自分と。

いや、でも詩穂先輩が望むならそれに応えるのが男の、俺の役目だ！

という想いがある。

前者は普段の俺やモンジの思考だが。

後者はヒステリアモードの今の俺だ。

こっちの俺は女性の頼みを断ることはできないからね！

「もし音央ちゃんと鳴央ちゃんがいなかったら覗いてた？」

ヒステリアモードの俺がそんな思考をしているとは知らない詩穂先輩は。

あろうことか。まるで本当に望んでいたかのような仕草をして。

俺の方にさりげなく身を寄せてきた。

当然、その豊かな胸元も寄せてきた。

え、何だこれ？

もしかして俺、誘惑されてる？

ははは、まさか。

そんなはずあるわけないだろ……ゴクリ。

しかし……先輩、やつぱり大きくて形もいいなっ！

一之江やアリアにも先輩のような物理的な包容力があれば……。

おっと、いかんいかん。

ここにいないとはいえ、一之江は俺の心読めるみたいだからそれ以上は考えるはよせう。

まだ死にたくないし。

「いなかったら、ですか？」

「うん。あ、いなかったら家にお泊まりに来てないー、とかはなしね。『もしかしたら』のお話だもの」

「うっ、わ、解ったよ……」

先輩の顔が近い。風呂上がりの上気した頬は愛らしいピンク色をしていて、触ったらきつと気持ちいいんだろうな。それに、先輩の体からはやつぱり柑橘系のいい香りが漂っていて、もつと近くでその空気を吸いたくなってきた。ああ
男つてヤツは、可愛い女の子が側にいるとおかしくなっちゃうものなんだよなあ……。

「……た、多分」

「多分？」

「先輩が望んで言ったのなら覗いていたかもしれません」

「わたしが望んで？」

「はい。先輩が俺になら見られてもいい、とか思ってくれていたのなら覗いていました。だけど……そうじゃないのなら覗いたりはしませんね。先輩に嫌われたくないです
し」

「わたしがモンジくんを嫌うの？」

「ええ。というか、何ていうかほら。大事にしたいんですよ、やつぱり。こう……詩穂先輩のこと、ちゃんと。そういう邪なノリとかじゃなくて。ちゃんと」

ああ、クソっ！　自分でも何を言ってるのかよくわからなくなってるが。大事にしたいという気持ちに嘘偽りはない。

「大事に？」

「はい。だって、詩穂先輩は俺の……」

大事な人だから、と続けようとして。

俺の視界の隅に、不意に何かが映った。

……なんだ……あれ？

ソレを見た瞬間、俺の頭はクリアになり、荒かった呼吸が静かになった。

……さっきまで先輩が座っていたソファの下。そこに『ソイツはいた』。

ソファの下なんて僅かなスペースだ。ベッド下なら人一人隠れていたとしても納得できるが、ソファの下なんて数センチしかない。

なのに。

そこに『ソイツ』はいた。

「俺の、何かな？」

先輩は気づいていない。

相変わらず俺に身を寄せて、火照った顔を近づけて、甘い吐息を吐いている。

クソツ！ 美少女な先輩がこんな無防備な格好で俺に身を寄せてくれているのに、

どうして俺はソファの下なんか気にしなくちゃいけないんだ！

チキシヨウ！

俺は今ほど『ロア』というものを恨んだことはない。

後にも先にも、きつと今のこの瞬間が一番ロアに対してキレた瞬間だった。

「俺の……大事な先輩なので、一緒にアイスを食べに行きましょう！」

「ほえ、アイス？」

「湯上がりと言えばアイスです！ ここに近いコンビニに、俺オススメのアイスが売ってるんですよ。それをぜひぜひ、先輩にも……あの子達にも食べて欲しいので！」

行きましょう！」

「ふえ、ほんとうっ？ うん、食べる、食べる！」

「パジャマ姿のままだとアレなんで、ちよつと着替えてきてもらえるかな？ 俺とコ

ンビニデートしましょう！」

「ん、りょうかい！」

詩穂先輩は嬉しそうに立ち上がると、パタパタと自分の部屋に駆け込んだ。そして、先輩の部屋のドアが閉まる。

「つ————づり————あんたって人はあああああつっつ!!？」

俺は先輩やご近所さんに配慮して、小声で絶叫した。

Dフォンが熱くなり、赤く光るのが解ったが、そんなことどうでもいい。

「とりゃあつー！」

ソファを力一杯持ち上げた瞬間、そこには————小さな人影がいた。

いや、人影と言ってもただの人間ではない。

まず、性別は（一応）女。

ショートカットの黒髪で。

目は据わって————俗に言うイツチャツテル感じで、真つ黒なコートを羽織つ

ている。

この女性の名前は、綴 梅子。

東京武偵高。ダギユラス 尋問科の教師だ。

その綴は————

ぷは、と美味そうに室内で。それも家主の詩穂先輩に許可を得ずに喫煙してタバコの

煙を輪つか型に吹いているが……そんなこと大した問題じゃない。

綴がイツチャツテルのはいつものことだからな。

そんなことより問題なのは……。

「小さい……？」

そう。俺が知る綴よりその背丈がかなり小さいのだ。

大きさを言うときセンチくらいだろうか？

ソファの下にいてもおかしくない。それくらい小さな存在として俺の目の前にいる。

「あん？　なにこのクソガキ。　初めてあつた奴にいきなり小さいとかはないん

じゃない？」

やっべー、声に出てた……。

「ん、んー？　おかしいな……なーんかどつかで見た気がするんだけど？」

ってそれはないか。ただの気のせいだよな？　武偵高ウヂウチの生徒でもないしなー

俺の体から大量の汗が流れ出ていたがそれは仕方ないことだろう。

(あつ危ねえ……　　……　　バレたかと思つたぜ……)

綴はそんな俺の内心を知らずに明らかに市販のものじゃない二本目のタバコを取り出して吸い始めた。

「……うっ、草っぽい」

「あふあ……まあ、そんなことどーでもいいんだけどさあ」

こら、駄目教師。

室内で、それも詩穂先輩の部屋でそんな怪しいもの吸うな！

「なーに……えーつと……あれ……あ、ロア。お前もロアとかいう奴か？」

ほら見ろ！ 怪しいタバコなんか吸ってるからそんな単語を忘れる残念な脳味噌になっちまってんだ。

「お前も……つてことは、やっぱり綴……先生も？」

いかん。つい癖で先生呼びしちまった。

呼び捨てだと後が怖いから、癖でそう呼んじまったが……。

案の定。

「んー？ 『先生』呼びつてことはどつかで会ったかー？ まあ、後で聞き出せばい

いか。

『ベッド下の小人斧女』のハーフロア。綴 梅子だ。よろしく」

獲物を見つけた、そういう目つきで俺を見つめ。

綴は薄ら笑いを浮かべてそう名乗った。

第六話。魔王降臨？

ツツリがあらわれた。

どうする？

コマンド

1、殴る

2、抱きつく

3、デートしてデレさせる

脳内に浮かんだ選択肢は……

「つて、どれも死亡フラグじゃねえかー!!?」

脳内に浮かんだ選択肢に思わず全力でツツコミを入れてしまう。目の前にいる存在に起こす行動がそれだけつて。

おい、どうなってんだ!!?

と、一人狼狽えていると。

「んー？ 何一人で狼狽えてんの？」

俺の顔を見つめて綴は、

「ま、いいけどー？　自分から話すより喋らせる方が面白いからなー！」

スーッと、とタバコを一息すると、こき、こき。なんか薄ら笑いを浮かべてナナメ上を見つつ首を鳴らした。

あ……アブネーな。コイツ。

まあ、綴がアブネー奴っていうのは解ってるけど。

「さーて、楽しませてくれよな？」

視線を俺に戻し、綴は手に持っていたタバコを俺に向けて投げつける。

ビューン、と。チョーク投げのようにタバコを投げってきたが綴が吸うタバコは僅か3センチほどの背丈しかない彼女が持つもので、普通のタバコに比べるとタバコというより最早針と言った方がいいほどに薄く、それでいて長い品物だった。

ヒステリアモードの俺は迫り来るそのタバコを軽々避けたが……

—— ああ、クソッ。

やっちゃったぜ！

タバコの投擲は単なる目眩まし。

本命の武器は綴の小さな両手が持つ、黒い筒に持ち手がついたもの。

綴御用達のあれは……

「ん？　何だ？　ああ……これが気になるのか？」

俺の視線の先に映るソレを綴は上に向ける。

「小人斧女っていうロアだからな。トレードマークみたいなものだ。」

ようするにこれが私の武器※なんだけど」

綴が掲げたもの。

それは紛れもなく……

「斧って……どう見ても銃だろ、ソレ!?？」

それは紛れもなく銃器だ。

彼女が愛用する自動拳銃。

グロック18。

それは、グロック17にフルオート機構を搭載したモデルでオーストリア国家憲兵隊に属する精鋭の対テロ部隊G E K　C O B R Aの要請によって開発されたものだ。小型である上にポリマーフレームが軽量なため連射時の反動は大きく、集弾性は低い。そのためカスタムパーツとして折りたたみストックが存在する。

外観はグロック17とほとんど変わらないが、スライドの左後方にセミ／フルオートの切り替えレバーがある。

「ふむふむ……なるほどな」

その銃器を手にした綴は虚空を見つめてなにやら一人納得した表情を浮かべた。

「アイツが言ってた元の世界に戻る為の鍵キってお前のことか？」

「……アイツ？」

「アイツの手の上で転がされてる感じがするのは気に入らないけど……さつさと帰りたいしなー」

何だ？

何の話をしてるんだ？

「うん、悪いけど……ここでリタイヤしてくれ」

一人納得してから綴は呟いた。

『『狂気の拷問者』』
マッドクイーン

空間に現れたのは、鉄アイアンの処女、三角木馬、巨大斧ベシの振り子ラム、水責め椅子……etc。

綴が一言呟いたそれだけで。

俺を取り囲むように様々な拷問器具が具現化した。

「さーて、楽しい時間拷問の始まりだー！」

綴がそう言った直後。

まるで意思があるかのように拷問器具は自動的に作動して俺を傷つけようと襲ってきた。

アイアンメイデン

鉄の処女は内側の血に塗れた無数の刃がチラツと見えて。

大きな振り子斧はビュー、ビューと風を切るように鋭い音を出して。

三角木馬は三角の部分が鋭い刃物のようになっていて。

水責め椅子は体を固定するはずの縄が頑丈な鉄鎖に一瞬で変化したのが見えた。

(おいおいおいおいおい………?)

嫌がらせか！　と思える過剰な拷問器具を見た俺は。

(行くぞー！ 『潜林』！)

ヒステリアモードの反射神経により、しゃがんで這うように進みながら迫りくる拷問器具の一撃を回避してその場を離脱した。

とにかく逃げなければ！

そう思った俺は全速力で走って。

逃げ込んだ先はお風呂場がある方向だった。

直後。

ザザザザザザザツツ!!?

あの富士蔵村で聞いたラジオのノイズが辺りに響いた。

「モンジさんー！」

ガチャ、つとバスルームの扉が開き。そこから勢いよく飛び出してきたのはラジオを

右手に、左手で自分の濡れた体にバスタオルを巻きつけながら走る鳴央ちゃんだ。

そのセクシーすぎる彼女の格好を見た俺の血流は最早止まらない!

「ちよつ、鳴央つ!?? そんな格好でっ!」

バスルームの奥からはそれを咎める音央の声が響いた。

「音央ちゃん、ですが……きやあ!?? 早くしないとモンジさんが拷問されちゃいます!

ます!

つて、モンジさん!??」

俺は背後を振り向かないようにして。

スピードを落とさないうまま、音央がいるであろうバスルームへと入ろうとして

。

バスルームから溢れ出た大量の茨の蔦により俺の体ごと、俺を襲っていた拷問器具は壁に抑えられた。

リビング全体に茨の蔦が伸びている状況だ。

「鳴央つ、あの場所に連れて行く!」

「わ、解りましたっ!」
『フェアリーガーデン
妖精庭園』!」

鳴央ちゃんが叫んだ直後、辺りは茨の壁に囲まれた美しい広大な庭園に変わった。

花壇には色とりどりの花が咲き乱れていて……ああ、ここは。

『神隠し』の先、音央と鳴央ちゃんの『居場所』だった空間だ。

「はふう……これでもう、絶対に取り逃がすことはありません、モンジさん」

濡れたままで、バスタオルを巻いた鳴央ちゃんが声をかけてきて。

その声が聞こえるのと同時に。

巻きついていていた茨の蔦は俺を解放し、拷問器具と綴のみを茨の蔦で覆って拘束していた。

鳴央ちゃんの方を向こうとして、すぐに視線を逸らした。

逸らさないといけなかった。

何故なら……

「見たら殺すわよ」

茨の蔦や花でピンポイントで体の大事な場所を隠している音央が、庭園の中央にいたからだ。

「……ああ、うん。悪い……」

裸の美少女が大事な場所を手で隠すその仕草。

それはそれでドキドキする格好だったが、あまりジロジロ見るわけにはいかずに。チラチラっと音央をチラ見しつつ。

視線を綴の方に向けると。

綴は、音央が操る茨に巻き付かれて身動きが取れないでいる。

「やった……のか?」

あの綴を捕獲した……?

こんな簡単に……。

あまりにあつさりと捕まった綴を見て、俺が呆然とする中

「で、こいつ、何?」

音央は腰に手を当てながら、首で綴を示した。

「あゝ、ソファの下にいたんだ」

「ソファ? だって、『ベッド下の男』なんじゃないの?」

音央の疑問ももつともなんだが……

「あつ、そっか。……会長さんが『ソファにお布団を持ってきて寝ている』って言うたから……ですね」

鳴央ちゃんが思い出したように言った。

その通りなので俺も頷く。

「だろなあ。つまり、こいつにしてみればソファがベッドなんだ」

「小さな女の人?」

ああ……小人のロアなんですわね」

鳴央ちゃんは綴を見て頷いた。

綴が何故小さな姿になっているかは俺にはわからんが……ああ、やっぱり小人のロアというものはいるんだな。

「ベッド下の男……のロアなのに、どう見ても女だよな……」

「それはそんなに珍しい事ではないですよ。く男というロアでも実際には可愛い女の子とかだった、なんて話もありますし……」

ああ。そういえば一之江も似たような事を言っていたな。ロアは女性になる確率が高いとか、なんとか。

という事は綴がロア化しても特に不思議ではないという事か？

……いやいや。やっぱりおかしいぞ。

最近、非現実かつ、非日常的な出来事に慣れた生活を送っていたからか、以前よりもオカルトを受け入れられてる俺だが。やっぱり綴がここに存在している事は違和感しかない。

それは……赤マントのロアの時とは前提が違うからな。

赤マントが女性のロアでも受け入れられたのは、俺とは面識がない他人だからだ。

だがこの『ベッド下の男』は違う。

なんたって……綴はこの世界の人ではないのだから。

前世に通っていた学校の教師。

それも犯罪者や生徒に拷問紛いな尋問をするスペシャリスト。
尋問科の問題教師だったのだから。

「んじや、サクツとやつつけちやいまいしょ」

「そうですね。このまま放置もできませんし、やつつけちやいます」

サラツとやつつけちやうという二人。

綴化け物度の強さを知らない二人は簡単な感じで言ってるが。

「いや、あのな……二人とも」

止めようと思ったが遅かった。

「それでは、いきますね」

俺が口を挟む間もなく、音央ちゃんの口からその言葉が出た。

『アビスフォール奈落落とし』

鳴央ちゃんの口から物騒な言葉が出たと思った瞬間。

茨の蔦に絡まれていた綴の背後から『ピキン』というガラスに亀裂が走ったみたい
音が聞こえ、直後、その音の発生源に黒い線が走り

そこには巨大な暗黒の『穴』が発生していた。

「うわあ、何だよ……あれ!?」

その『穴』は見ているだけで根源的な恐怖が呼び起こされるような、身震いしてしまうような威圧感を放っていた。そう、全てを飲み込み、そして吸い込まれたものは二度と戻って来れなくなるブラックホールのように。

「何って、あんたもあれに落ちたことあるじゃない」

音央の言葉に、我に返った俺はマジマジとその『穴』を見つめる。

——この、『穴』つてもしかして……？

「……飲み込んだ存在を完全に消し去る、『神隠し』の向こう側の世界です」

鳴央ちゃんのその言葉で俺は確信した。

この『穴』はかつてその彼女……今は鳴央と名乗っている音央と共に落ちたあの暗黒の世界の入り口だということを。

「じゃ、落とすわよ？」

「はっ」

あつさりゴミを捨てるみたいに、音央は綴の全身に巻き付いた茨を解いて。

解放された綴はそのまま、真下に現れた暗黒の穴に落とされていき。

「ちよつと待て。まだタバコ吸って……うおおおー」

そのまま黒い穴の奥底へと落ちていった。

「……やった、のか……？」

「あの穴の空間は、自分の存在すら忘れて穏やかなまま消えていくだけの場所。ロアにとっては……最も安息出来る居場所となっています」

「人間の俺にとっては、何も無くて寂しい場所だったけどな」

「はい。貴方が彼処から戻ってこれて、本当に良かった」

俺達が見ているうちに、その『穴』は何事もなかったように消えていった。

本当にやった、のか？

あの綴を……倒せた？

ははっ、やつちまつたぜ！

俺だけでは到底敵人間辞めてる化け物わない敵な綴だが。

仲間がいればなんとかなる。

いや……それもこれも彼女達だから出来たんだ。

これがあの一之江やキリカが恐れた神話クラスの都市伝説。

『神隠し』の力なのか……。

「さて、早いところ戻りましょう。鳴央が風邪引いたらアレだし」

「あ……はい。ちよつと……恥ずかしいですね……」

恥ずかしい？

音央のその言葉で、鳴央ちゃんを見れば、彼女はバスタオルを巻いただけという何と

も素晴らしい格好で。黒髪清楚ナイスボディな美少女のバスタオル姿。しかもその髪は濡れていて、肌はまだ水滴が残っていた。

首筋やうなじ。そして、水滴が流れ鎖骨などに視線がいつてしまい……俺の理性は限界寸前だった。

ああ、クソツ！

ヒステリア性の血流が流れちまう！

と、そんなことを思っていた時だった。

ピシリ。

まるでガラスが割れたかのような『音』が聞こえると。

何もないはずの空間に亀裂が走り

ピシ、ピシ、パキン。

まるでガラスが砕け散るかのような『音』が辺り一面に聞こえて。

俺や音楽。鳴央ちゃんの目の前にソイツは降臨した。

ゲホゲホ。ハンドレッドワン なかなかやるな、エネイブル 『罫』ウ。

いや、今は『101番目の百物語』と呼ぶべきか？

ま、どっちだっていいんだけ

ど……」

空間に突如出来た穴から出てきたのはたった今さつき、奈落の穴に落とされたはずの

綴だった。

綴は俺や音央達を一瞥した後、「なるほど……」と呟いて。

「一文字疾風

性格はややお調子者の傾向が見られるも、社交的で特に女子

との関わり合いが高い。

しかしその反面、押しが弱いチキンなところもあり、結局は面白い人止まりで終わる傾向が見られる。

ただし、潜在的なカリスマ性を持ち、自身が関わった人物の生き方をも変える可能性をも秘めている。

特にここ数ヶ月の間に性格の変化が見られ、以前より女子や他人との距離を置く傾向が見られる。

……ふーん、ここ数ヶ月で性格が変わった、かあ。ね……アンタ、なんか怪しいブツでもやってんの?」

コイツ、一文字のプロフィールまで熟知してるのかよ!?!?

「してない。俺は俺……ですよ」

「ふーん……ま、いいけど?」

「どうやってあの穴から抜け出したのよ?」

音央が綴に問いたですと。

「ああ？ あー、あの穴？」

なんか真つ暗で気分悪かったけど気合でどうにかなったわ〜

気合!!?

「う、嘘でしょ!!?」

「え、え？」

混乱する音央、鳴央の『神隠し』姉妹。

「……というのは冗談だけ〜」

冗談……なのか？

綴なら気合でなんとか出来そうで怖い。

「確かにあそこは嫌な気分になるけど、はつきり言つて『軽い』！」

尋問のエキスパートの私からしてみたら、軽すぎて準備運動にすらならないわ」

綴のその言葉に鳴央ちゃんは泣いた。

「本当の絶望はあの程度ではないな。

全てを忘れるなんて軽すぎるわ！

私なら忘れられないくらい絶望を身に染みらせるがな」

「あれが軽いって……アンタ一体」

「ごめんなさいごめんなさい……忘れさせてごめんなさい」

シヨックから立ち上がれないのか、音央は呆然とし。

鳴央ちゃんは泣いたまま、謝罪の言葉を吐いた。

「だが……なかなかいい技だ。

どうだ？ 私の下に来ないか？

私の配下生徒になれば……。

世界の半分をやろう」

「どこの魔王だよ？！」

思わず突っ込んだ俺は悪くない。

「はつくしゅーん……！！！」

俺が綴に突っ込んだタイミングで全裸にバスタオルを巻いただけという何とも目のやり場に困る格好をした鳴央ちゃんが大きなくしゃみをして。

「ただけない気分になった俺達は鳴央ちゃんに優しく言った。

「服、着ようか？」

「痴女がいるな」

「ちよつ、鳴央!?」

「まだあんたその格好だったの!?」

「い、いやあああ

「!?」

「叫びながら鳴央ちゃんが『フェアリーガーデン妖精庭園』を解除すると。

「おつまたせー!」

「丁度詩穂先輩が学校指定のジャージに着替えて出てきたところだった。

「おりよ?」

「あ……!」

「先輩の視線の先にはバスタオル一枚巻いただけの鳴央ちゃんの姿があつて。

「わあつ、鳴央ちゃんつてダイタンだね! モンジくん裸アプローチ!?」

「えええ!?」
「あ、いや、これは、その、あの、ちがつ!」

「耳まで真っ赤にして、手に持ったままのラジオをブンブン振り回す鳴央ちゃん。

「鳴央ー、あんまりそんな格好で暴れるとー」

「え?」

「あつ」

「ほう……!」

俺、先輩、綴の眩きが聞こえた。

っていうか、綴まだいたのか?!?

あれ? でも先輩は気づいてない?

小さくて見えない……のか。

「あつ……!」

暴れたせいか。

鳴央ちゃんの胸を押さえていたバスタオルの結び目が解け……。

ドキドキしながらヒステリアモードが見せるスローな世界で観察していると。

「おおつとそこまでです」

「なつ?!?」

いきなり現れた一之江ボイスと同時に、俺の視界は真っ暗になった!

「なんだ!?!? 何が起きたんだこれは!?!? いきなり真つ暗になった!?!? 鳴

央ちゃんの『バスタオルはらり』事件はどうなった!?!?」

「その紙袋は特注品です。いわゆる闇属性です!」

「くつ、事件は暗闇で起きてるんじゃない。

明るい場所で起きたんだ!」

「死になさい!」

グサツ!

一之江に刺されながら思う。

真の魔王は綴なんかじゃない。

より身近にいたんだ、と……。

「え、えつと……」

鳴央ちゃんの困ったような、安心したかのような声が聞こえるが、きつと今だに彼女はバスタオルがはらりと落ちていて、大変なことになっているに違いない。

「(ハハ)は(ヒステリアモードの)妄想力で……」

脳内に浮かぶのは全裸になった鳴央ちゃんと、音央。大事なところは薔薇の茨がきちんとガードしている。はらりと落ちるバスタオル。

頬を赤く染めるナイスバディな巨乳姉妹。

肌から落ちる雫がまた印象的で……。

「そういうのいいですから」

ポカッ、一之江に頭を軽く殴られた。

「はい、スミマセン」

「よろしい」

俺はその場に正座して、反省の意を示した。

「ふええ……ともあれ、みずみずいらっしやい」

「もしもの時の鍵が、こんな形で役立ちましたね」

「こんなこともあるのか、だよねん」

「流石でした」

「どんな周到さなんだよ、それ」

2010年5月☒日。

ふと目を覚ますと、そこは知らない部屋だった。

赤い絨毯、何百本とある蝋燭。

山羊や鶏の骨。

分厚いカーテンに遮られた大きな窓。

あたしが寝かされていた部屋の暖炉の中ではグツグツと煮える大きな鍋が置かれていて。

極めつけに床に敷かれている赤い絨毯には巨大な円形に、円の内側に描かれた五芒星の印。

そう。一般的にいう『魔法陣』という物が描かれていた。

まるで物語に出てくる『魔女』の館や黒魔術の儀式を行う……そんな怪しい感じがした部屋だった。

「ううっ……」

呻き声がすぐ近くから聞こえてきて。

恐る恐る背後を振り向くと。

そこには……。

金髪ツインテールの身に覚えがある女の子が床に寝ていた。

「理子?　ちよつと起きなさい、理子!?!?」

驚いたあたしは理子の身体を揺らすと。

「えへへー、キーくん。そこはダ・メだぞー♡」

気持ち良さそうにヨダレを垂らした馬鹿がおかしな妄想をしていた。

イラツときたあたしがこのあと発砲したのは悪くない!

第七話。遭遇

2010年6月19日午前0時半。

土砂降りだった雨が、真夜中には止んだ頃。

俺と一之江は、二人でコンビニに向かっていた。アイスの買い出しだ。

二人で出たのには理由がある。

お風呂に入ったばかりの詩穂先輩や音央、鳴央ちゃんを連れて出したら湯冷めしそうだったからだ。

というのは建前で……本当は一之江とゆっくり会話したかったからだ。

『『ベッド下の斧女』はそんなに凄かったのですか』

「ああ。あれはなんていうか……バグだな。存在自体がチートな奴だから。正直一之江が来てくれてよかったぜ」

さすがの一之江でもあの人を倒せるとは思えないが、一之江が負ける姿も想像できない。戦いになっても一之江ならなんとかしそうな気がする。

「私の強さが解りましたか」

「身にしてみたっていう感じだな」

「身に刻んでもいますしね」

「正直、本当に勘弁してほしいんだが」

「あの痛みを知っているからこそ、敵に襲われても頑張れるんですよ。それこそ音央さんの時のように」

一之江のその言葉で音央を探しに『妖精庭園』^{フェアリーガーデン}の中に突っ込んだ時を思い出す。

あの時。茨の棘が刺さりまくりかなり痛かったが、それでも前へと進めたのは『一之江の刃物の方が痛い』とか思ったから、という事実があるわけで……

「いや、それを見越したとしても、本当に痛いんでマジでやめて下さい」

文句を言っつてやろうと思ったが、背中にチクチクとした硬いものが当たった瞬間、口から出た言葉が途中から敬語になった。

^{ブライド}矜持？ 何だそれ、喰んのか？

「まあ、私も鬼ではありません、ほどほどにするとしましょう。グサグサ」

「つて言いながら人の背中を刃物で突付くなよ!?!?」

「今私に命令しましたか？」

「……麗しき一之江瑞江様。その刃物によるザクザク攻撃をお止め遊ばせ下さいませ」

「よしなに」

あつさりと突き刺す手を止める一之江。

クソ、一之江の奴！

俺の背中を突き刺すのが当たり前になっていやがる。

最初のうちは嫉妬とか、お叱りの合図だと思っていたが。今となっては単に暇つぶしに刺しているような気がする。

それだけ打ち解けたから、親愛の表現のようなものと思いたいが……なにより厄介なのが、そのザクザク攻撃にすっかり慣れてしまったせいで刺されるのが当たり前になっていることだ。

アリアのガバハンと言い、一之江のザクザクといい、スキンシップが過激過ぎる女子が多いな。

俺にはそういった女子しか寄ってこないのか。

泣けてくるぜ。

思いがけずではあるが、せっかく新たな人生を歩んでいるのに……俺には安らぎがないのか。

などと内心愚痴りながらも。

『『ベッド下の男』はもう解決でいいのか？』

倒せなかったが、一旦は綴を退けたのも事実なので念のために一之江に確認すると。

「そういうのを確認するためにも『8番目のセカイ』はお勧めですよ」

澄まし顔のまま、一之江は答えた。

「そうなのか」

一之江に言われるままに、Dフォンを取り出しサイト接続を行う。

「その情報板です」

「ああ、これか」

画面には『速報はこちら』というリンクがあつた。

※ただし真偽確認の為、デマにご注意下さい！

という注意書きも同時に目に入る。

「嘘の可能性もあるのか？」

「まあ、誰かが適当に『あの都市伝説やつつけたぜー』とか書き込むこともありますからね。こう名前を売りたい小物とかがあるほどな」

なるほどな。

一之江の情報収集力に関心しつつ、サイトを見てみると。

タイトル・『神隠し』が『ベッド下の男』と引き分け！

内容・『夜霞のチェンジリング』と『ベッド下の小人斧女』が、戦闘を開始し、結果引き分けに終わりました。

「こんなところに載るのか」

「後は管理人がその事実を確認して、事実だと解ればきちんと都市伝説として掲載される形です。その確認は早ければ一晩で済みますが、どうしても検証出来ないものもありますので、そういうのは過去ログ倉庫に流されます」

「どこにでもある掲示板みたいだな……」

面白そうなので、カチカチと記事を進めて見てみる。

タイトル・『赤マント』が『メリーさん人形』と引き分け！

内容・『月隠のメリーズドール』と『夜霞のロツソ・パルデモントゥム』が、戦闘を開始し、結果引き分けに終わりました。

うわあ、もうこの情報も載ってるのか。昨日の出来事なのに既に掲示板に知らされているとは、これを書いた奴はかなりの情報通に違いない。

「これを書いているのは誰なんだ？」

「大体が『語り部』と呼ばれる、色んな都市伝説を追いかけている情報通たちです。我々のクラスだと三枝さんですね」

あのメガネで真面目な委員長が、まさかこっち関係の人だったとは。

「語り部はロアなのか？」

「ロアである人物もいますし、普通の人間である場合もあります。その正体が解らないとかがほとんどなので、あまり気にしないのが正解ですよ」

うわあ。まさか身近にロア関係者がいたとは。

俺が知らないだけでクラスの中にもロア関係者がいる可能性もありそうだな。嫌だな。どんどん平穏な学園生活から遠ざかってる気がするな。

……いまさらだが。

とはいえ、クラス委員長が『語り部』とか言われれば気になって仕方ない。今度話をしてみるか。だが話すにしても何を尋ねればいいんだ。

駄目だ。話題が思いつかん。

ヒスれば普通に会話出来ると思うがそんな地雷は踏みたくない。

それに一之江の言葉は『忠告』だ。あまり気にしないのが正解なんだろう。などと考え事をしながらコンビニの前まで歩いたところで。

「あー!!？」

どこかで聞き覚えのある元気な女の子の声が響いてきた。

声が出た方へ顔を向けると、見覚えのある金髪ドリル少女がコンビニの前に座り込んで、Dフォンと思わしき黒い携帯電話を見ていた。

「狙ってた『ベッド下の男』が取られたー!」

街中でそんな解りやすいことを叫んでいた。もうどう考えてもこっち系の子だ。

「話しかけた方がいいのか?」

「まあ、出会ってしまいましたからね」

一之江に目配せしてから、一応警戒して近くことにした。

「よう」

「ん? あー!!?」

今は普通の女の子らしい私服に身を包んでいる金髪ドリル娘は近づいた俺達に気づくと俺や一之江を指差して口をポカンと開けていた。年齢はやっぱり中学生か、或いは小学生くらいだな。

背も低いせいで、従姉妹の理亜より年下に見えるし。

「こんなところにいるってことは買物か?」

「そうよ! 張り込みのためにアンパンと牛乳とキャラメルを買おうとしてたんだからっ!」

確かに張り込みの定番アイテムだな。

アンパンと牛乳は。

だがしかし……

「アンパンと牛乳は解るがキャラメルは違うだろう」

「へ？　　そうなの？」

でも私の仲間が張り込みの定番アイテムにはキャラメルもないとダメー、非合理的だつて言つてたわよ？」

誰だ、張り込みアイテムにキャラメルを加えたやつは。

まるでかなめみたいな奴だなあ。

かなめみたいな思考の奴が世の中にいたんだな……はっははは。

「……まあ、好きなもんは人それぞれだからそれは置いておくとして、『ベッド下の男』を張り込むつもりだったのか？」

「当たり前じゃない！　　女の子の夜を守るのも正義の赤マントの使命だもの！」

……お前は女の子を攫うのが役目の物語だろ！

まあ、少なくとも正義の為に戦っている『良い都市伝説』なのは確かなのか？

「貴女一人ですか？」

一之江が尋ねると、少女は途端に挙動不審なつた。

チラチラ、とコンビニの中を見てはそわそわし始める。

「ひ、一人よ！」

「ふむ。じゃあ俺達が入っても問題はないんだな？」

「ちよつ、ばつ、ダメに決まってるじゃない！」

「どうしてだ？」

「このコンビニはわたしたちの占領下にあるからよ！」

「わたし『たち』？」

「しまったー!?？」

可哀想なくらい解りやすい子だった。

一之江はチラ、とコンビニを見て何事かを考え込むと。

「モンジ、少し歩いた先にある、アイスが充実しているコンビニに行きましょう」

「あれ、いいの？」

「人が隠すものを、無理矢理暴くのは失礼に当たります。それが許されるのは『主人公』の中でも『探偵』に属する人だけなので」

人の背中に刃物を突き刺すのは失礼に当たらないのか、などと思ったが言えばザクザクなので黙って頷くことにした。

それにしても探偵か。

探偵というどうしても『あの男』を思い出す。

死んだと見せかけて、生きてるのが当たり前のように描かれている奴だからな。

もしかしたらこつちの世界でも『あの男』の名前を冠したロアとかがいるかもしれない。

「まあ……俺は普通の『探偵』とかは無理かもな」

武装探偵ならやれそうだけど。

「おおお……いい人達だ……」

赤マントは、一之江の配慮に感激して目を潤ませていた。昨日は殺試合をしたような奴だが案外、こいつは本当は純粹でいいヤツなのかもしれないな。

「いい人でしょう。以後、私を崇めなさい」

「え、崇めないよ!!?」

「では崇拜するといいです」

「スーハイ?」

「尊敬して凄いなー、とか思うことだ」

「ああ、それならOK!　ずっと凄いなーと思ってたもの!」

本当単純な奴だ。これから『赤マントはメリーズドールを崇拜している』という噂が流れてしまったらちよつと申し訳ないと思うが。

「時に私は一之江瑞江。こいつはモンジです。貴女のお名前は？」

「うん？　わたしはスナオ・ミレニアムよ！」

苗字は凄いが、名前は性格のように素直だった。

というか、ロアっておいそれと名乗っていいんだっけ？

っていうか、スナオちゃんは本名なのか？　一之江も偽名なのだが。

「なんか凄い『主人公』に仕えている雰囲気ですね」

と、そんなことを考えていたら一之江が情報収集聞き取りを始めていた。

「へへん、そうよ。わたしの『主人公』ってば本当に最高なんだから！　そっちのモン

ジとか変な名前の人よりも10倍素敵よ！」

「その人がコンビニの中いるんだな？」

「い、いいいいないってばさ！　ぴゅーひゅるりー」

露骨に目を逸らし、下手くそな口笛まで吹き出した。

「ふむ……で、その主人公さんはどんな物語なんです？」

「うん？　ふふーん、聞いて驚かないでよね！　わたしの主人公は……」

スナオちゃんは得意げに、かなりもったいぶってから平坦な胸を張りながら答えた。

『『エンドレス・シエラザード』終わらない千夜一夜』よ！』

その名を聞いた瞬間、一之江がもの凄く反応して。

「なるほど、流石です。モンジ、とつとつ行きますよ」

大慌てで俺の手を引つ張った。

「あ、ああ……じゃ、またな、スナオちゃん」

「はーい、またねー！」

ぶんぶんと手を振るスナオちゃん。一之江はそんなスナオちゃんに見向きもせず、一刻も早くこの場から立ち去ろうという気概で俺を引つ張る。

「お、おい、ど、どうしたんだよっ」

やがてさっきのコンビニが見えなくなった辺りで解放された俺は一之江に尋ねた。

一之江の態度はあまりにもおかしい。スナオちゃんが『主人公』の名前を言った瞬間から血相を変えていた。

あの一之江をこんなに焦らす物語……そんなに凄いものなんだろうか？

「貴方という男は本当に恐ろしいものを引き寄せますね」

「そんなに凄いのか？」

そう指摘されると、確かに。『メリーさん人形』『魔女』『神隠し』『人狼』『悪戯妖精』『ベッド下の男』はどれもこれも恐ろしい都市伝説だが。

「あつちも主人公なんだから、仲良く協力とかは出来ないのか？」

それこそ、一之江の『仲間』達みたいにも、情報交換とか出来たら助かるのだが。

主人公の知り合いがない俺としては、別の『主人公』に会って話を聞いてみたいっていうのもある。

「……今から、まるで別の会話をしますが、これは前フリです」

「お、おう」

俺と一之江は話ながら大きな道路から隠れるように脇道に入っていく。小さな路地の入り口で立ち止まり。

一之江は真つ直ぐに俺を見つめて口を開いた。

「このままモンジが都市伝説を、今までと同じペースで集めていったら……合計百個。とてつもない時間がかかるのは解るでしょう」

「ああ、それは解る。やっぱそうだよな……」

ちよつと前に計算してみたが、週に一つ都市伝説を解決したとして、一年で48個。二年で96個。かなりの時間がかかる。それが二週間なら倍はかかるわけで。今のところ一之江と出会ったのは五月だから、2カ月で三、四個というペースだ。

「うん、かなり時間がかかるな」

このままだと一年で18個から20個くらいで。実に五年以上かかる計算になる。

「そこに、裏技があるとしたらどうしますか」

「裏技？　　一気に物語が集まる技とかチートとかがあるのか？」

詳しくは知らんがゲームだとよくある、いわゆるズルみみたいな技を裏技やチートという。

いきなり強くなったり、いきなりお金持ちになったり、そういうルールを逸脱して楽をする行為だ。便利だが、想定外の行為の為ゲームのシステムに負荷がかかったり、想定された遊びではない為、ゲームそのものがつまらなくなったりしてしまうこともあるとか。

「ええ、実は『こいつ到底百物語を集めるなんて無理だろ、ギャハハ』とか思っていたので、貴方がもうちよつと強くなってから言う予定だったので……割と事態は深刻ですのすので」

「そうか……」

さつきスナオちゃんが言っていた『終わらない千夜一夜』エンドレスシエラザード。

あれは一之江にとって、かなりの深刻な事態ということなんだろう。

「貴方には私やキリカさん、音央さん、鳴央さんと、かなり強いカードが揃っていますので、上手くやればいけると思っていました」

『メリーズドール』『魔女』『神隠し』……すでに裏技を使って物語にしたかのようなライ

ンナップだよな。

どの都市伝説もおいそれと手が出せないくらいの強さがあるみたいだし。

「そんな私たちを上手く使いこなし。他の『主人公』を貴方がやつつけて、自分の物語に出来てしまえば……」

待て。一之江は今なんて言った？

他の『主人公』をやつつける、だって……？

ということとはもしかして……

「そうすれば、その『主人公』の持つ物語が俺の物語になる、のか？」
「その通りです」

ここでようやく、『主人公』という存在が何者なのか理解できた。

様々な都市伝説を自分の物語として取り込み、強さを増す『伝説』。

それがよく物語で見えるような『英雄』や『勇者』なんだろう。

主人公は倒した存在の持っていた物語を吸収する。

吸収した物語を取り込むことで物語としての質が上がる。

そして俺ははずれ『百』の物語を集めるとされる『主人公』だ。

だからこそ、今まで色々な口アたちが俺を見て驚いていたんだな。

……って、待てよ？

「なあ、一之江。俺が『主人公』をやっつけられれば、その物語が全部俺の物語になるってことは……今さっき聞いた『千夜一夜』に狙われて、もしもやっつけられたら……」

「ええ。貴方はとても容易く取り込まれるでしょう。相手の物語許容量は、実に貴方の10倍ですしね」

自分が誰かの物語になる。

なってしまう……そんな可能性がある。

そうなってしまうえば一之江たちの物語すら、相手の支配下の置かれてしまうんだ。

そしてこの俺すらも。

完全に自由を奪われ、後は取り込まれた『主人公』の為だけに存在する『単なる物語』になってしまう。

時には不本意な戦いを強いられ、俺の物語たちが使い捨てのように扱われても逆らうことも出来ない。

その可能性を示唆されただけで、体の芯が冷えるような。

そんな恐怖を感じた。

「だから……」

俺の手を握る手に力を込めて、真剣な目で俺を見つめて一之江は告げた。

『エンドレス・シエラザード終わらない千夜一夜』には絶対に近づかないようにして下さいね」

真剣な表情で告げた一之江の言葉に、俺は頷くことしか出来なかった。

第3章 音速兄弟

第八話。『星座の女神』

2010年6月19日午前2時半。詩穂先輩宅。

「どうしてこうなった!?」

詩穂先輩の家のリビングで俺は先ほど自身で持ち上げたソファの上で、俺は眠れない夜を過ごしていた。隣の部屋に美少女+α（飲んだくれ教師）があられもない姿でぐっすり眠っていると思うとドキドキしてしまう。

まあ、約一名。別の意味でドキドキしてるのだが。

なぜなら……

コンビニでアイスを買っていた俺の携帯にどうやって調べたのか、綴先生から『お使いリスト』なる名目で大量の酒類とツマミを買って来い、買わないと解ってるよな？ 的なお使いメールが送られてきたからな。

しかも俺の進入を拒むかのように茨がそのドアを塞いでいるのが気になる。

なんでもあれは内側からはすんなり開き、外からは絶対に開かないようになってるらしい。

そこまでしなくてもあんな美少女だらけの空間に入りたくないなんて思うはずがねえのに！

入ったら確実にヒステリアモードになる魔鏡に誰が好き好んで入るか。

部屋は別とはいえ、ただでさえ女臭さが満悦している空間で寝泊まりしないといけな
いんだぞ。

そんなヒステリア地雷満載な空間でぐっすり寝れるはずがない。

ヒステリアモードを避けたい俺にとって、この家は魔界に等しい。

そしてもう一つ、目が覚めてる理由として挙げるならば、女子達の他に気になってい
ることがあるからだ。

『主人公』か……」

ここにきて、重くその言葉がのしかかる。

それと同時に心の奥底から湧き出す感情がある。

……これは焦りだ。

正直な話、俺は今まで主人公という存在になったことに特別な意味など何もないと
思っていた。

それは当たり前のような日常を過ごしているせいもあり、あんまり主人公という自覚
を持っていないからだ。

そりや、怖い目にはいくらでも遭っているのだが……それを引いてもいいことがあったからな。

そう……様々な都市伝説達との出会いやその出会いにより起きた騒動で仲間が出来たことが一番大きい。

キリ力をなんとかした時も、ずっと仲間くしていたい一心だったし。音央達の時は、2人とも助けたいと思つたからだ。

俺としては助けたいからしただけであつて。感じた痛みや傷も、残っていないから気にならない。

仮に残つてたとしても怪我をするなんて、武偵時代には当たり前なことだったし。強襲科では誰も気にも止めなかつたからな。

だけどなんとなくロアに狙われるのと『主人公』に狙われるのでは意味が違つてくる。

少なくともこれまで戦つてきたロアは、生きる為、自分の存在を高める為に俺を狙つた。『ハンドレッドワン』を倒せば、それだけでロアとしての知名度が上がるからだ。それはつまり、彼女らの存在が安定するという意味でもある。

だが『主人公』は違う。俺と同じ立場、つまり人間らしい、人間としての思考を持つているはずだ。

悩んだり苦しんだり楽しんでる人々なのだろう。

人間らしいということはそんな彼らが俺を狙うということはつまり、自らの意思で俺と俺の物語を取り込み、奪うということなのだ。

『人間』に狙われる。

そんな根本的な恐怖が俺を焦らせる。

俺が物語を、みんなを守るためには『百物語』を完成させなければならない。

それには他の『主人公』を倒して取り込んだ方がいい。

それをした方がいいという提案を一之江がいずれしてくれようとしていた、ということも焦りの原因になっている。

そして、『主人公』が『他の主人公』を倒して物語に取り込めるのなら俺も……

「俺も、同じように他の『主人公』やロア達に恐れられているってわけか……」

自分が知らない誰かから、そんな理由で恐れられているというのは精神的にあまりいい気はしない。

自分的には人畜無害だと思っているから尚更だ。

「どうしたものかなあ……」

……いや、対策はわかりきっている。

例の『終わらない千夜一夜』という人物から逃げ続けた方がいいのだろう。

関わらない、それが生き残るのに一番賢い選択だ。

もしその人物の機嫌を損ねたりして、俺のことを取り込もうとか思われたら厄介だしな。

出来れば一生絶対に出会いたくない。

だが、今までの経験上。

俺が絶対、絶対とか言う度に関わることになってるので……

(遭遇は避けられないだろうなあ……)

同じ街に住んでいる以上、いつか鉢合わせするのは避けられないだろうし。

その時、戦闘になったら。

俺は今のままで守りきれぬだろうか？

俺が切れるカードはかなり強力なものばかりだが……一之江は相手の赤マントこと、スナオちゃんと引き分けだったし。

向こうにスナオちゃん以上の強力なロアが物語として取り込まれていたら……。

今の俺が使えるカードで、キリカがダウンしている状況で。仮に戦いになったとしたら……。

戦いに向かない鳴央ちゃんを除くと俺の戦力は実質一之江と音央の2人になる。

そこに俺を加えても三人しかない。

相手の戦力が未知数なのにこっちの手札はすでに1人見破れている。

それも最大戦力の一之江が相手に知られてしまっている。

音央や鳴央ちゃんの能力は確かに強力だが、どちらかといえば戦闘向きな能力でな
い。
い。

そして。

「俺、か」

実際、普段の俺では出来ることなんてたかが知れている。

Dフォンで一之江を召喚したり、ちよつとした近接格闘くらいならできる。

だが、それはあくまでも対人、それもアマチュアレベルの話だ。

一之江に扱かれて、ここ数ヶ月で対コア戦を想定した訓練も受けてはいたが……どこ
まで通用するのは解らない。

普段の俺は強い力を持つているわけでもなく、特別な能力を發揮出来るわけでもな
い。

もし、こっちの俺が『終わらない千夜一夜』と遭遇してしまつたら

いや、戦いになるのが『終わらない千夜一夜』だけとは限らない。

もし、他の『主人公』との戦闘になつたら

果たして俺は無事に帰つて来れるのだろうか。

「どんな『主人公』がいるか、ちよつと調べてみるか」

悩んでいたって始まらない。

俺はDフォンを取り出すと早速『8番目のセカイ』に接続してみた。

画面に出たのはいつものながらの簡素なデザイン。

検索ワードの欄に『主人公』と入力してみる。

表示された件数は……108件。煩惱と同じ回数だな。

『主人公』という存在はロア的には煩惱の塊だよ、みたいには呼ばれてるようで不思議な気分になった。

「いかん。いっぱいあるせいでいまいちどれを見ればいいのか解らん」

以前、神隠しを検索した時にも思ったが……多すぎだろ、主人公!?!?

主人公だけで『百物語』が完成するぞ。

これはあれか？

百物語を完成させるには、主人公を全員倒せ！　みたいなハードモードが設定され

てんのか。

鬼畜だな。ロア達を認識している『世界』さんは。

しかし困ったな。

こんなに検索数があるとどれを選んだらいいのか解らん。

やっぱりこういった検索は『魔女』であるキリカに任せた方がいいんだろうな。そう思いながら、せめて自分と『終わらない千夜一夜』^{エンドレスシエラザード}を調べてみようと思い、検索をかけてみた。

『101番目の百物語』^{ハンドレッドワン}

百のロアを従えたとされる『百物語』の主人公。

百の物語を集める使命がある。

百番目までの主人公は全員脱落済み。

『エネイッド』^{エネイッド}

不可能を可能に変えたとされる『不可能を可能にする男』の主人公。あらゆる物語に干渉し、改変、削除する使命を持つ。

必ず男性が主人公として選ばれる。

どんな物語にも干渉出来ることから『世界の改変者』とも呼ばれる。

「おおおおお」

こんな風に俺の情報は載っていたのか。っていうか、案外少ないものなんだな。特に『百物語』は。

もつと色々書いてあってもいいと思うのだが。
ざつと目を通してから、次に『終わらない千夜一夜』^{エンドレスシエラザード}について調べてみる。

『終わらない千夜一夜』^{エンドレスシエラザード}

千の物語を続べるとされる『千夜一夜』の主人公。

千の物語を語る使命を持つ。

必ず女性がその主人公として選ばれる。

星の数ほど物語を経験することから『星座の女神』『正義の星女神』とも呼ばれる。

……なんか凄い異名がついていた。

俺の『弝』にも『世界の改変者』とかあったが……『終わらない千夜一夜』には『女神』なんて仰々しい呼び名が付いている。

つまりそれだけ物語を経験する予定であり、それを女神のように格好良く解決するということなんだろうか。

反して、百物語の文面はネガテイヴだ。百物語を達成出来た主人公は今まで一人もない、という内容だけ。101番目たる俺『たち』が成功する可能性も示唆されていない。

この段階で既に『主人公』としての格が違う気がしてならない。

これは……積んでるな。

出会ってしまったら、なんとしてもヒステリアモードになって。

『^{エネイッル}弝』の力で切り抜けるしか方法がない。

正義の女神様なんだから、仲良く出来たら一番いいのだが。

出会ってしまったら、ヒステリアモードの俺に丸投げしよう。

いささか、というより。大分不本意だが。

「はあ……ん？」

Dフォンの操作に夢中になって気づかなかったが、普通の携帯電話の方にメールの着信があった。

バイブレーション
振動設定にしていたせいでまるで気付かなかった。

「あ……なんだ、理亜からか」

その表示名を見て安心しそうになり……そういえば、あいつらは今日お泊まりだと、メールが来ていたのを思い出した。女の子の家だというのは聞いているが……何故だろう。

なんだか面白くない。

かなめも一緒だから何の心配もいらなはずだが……やっぱり心配だ。別の意味でも。

差出人・理亜

タイトル・確認です

内容・こんばんは、兄さん。理亜です。

確認なのですが、兄さんも今日はお泊まりですよね？

それはちゃんと男性の部屋なのでしようか？

兄さんを疑うつもりはありませんが。

どうしても気になってしまいます。

女性と二人つきりで夜遅くに出歩く……なんてことはありませんよね？

兄さんを信じていますが、どうしても気になってしまったので。

こんな夜中に申し訳ありません。

どぼつ、と冷や汗が大量に流れた俺だった。

なんだこのピンポイントなメールは？

一之江と二人つきりでコンビニに行ったのがバレてる？

イヤイヤイヤ!!?

誰にも見られなかったはずだ。

少なくとも俺が知る知り合いには会わなかった。

一人を除いて。

……まさか、な。

そんなはずはない。

そんなこと、あるはずないだろ。

きつと俺が知らないクラスメイトとかに目撃されただけだ。

……そう思いたい。

それよりも、だ。

どう返そうか。

……アランの家とかにしておくのが無難と言えば無難なんだが。

従姉妹とはいえ、一緒に住んでいる大事な妹に嘘は吐きたくない。

だが……。

『女の先輩の家で、他は女子＋αです』

なんて返信したら『不潔です！』と怒られるのは目に見えている。

だがありのままを話す訳にはいかない。

「どうしたもんか……寝てたことにする……か？」

いや、駄目だ。それは問題の先送りだ。

「音央辺りに口裏を合わせて貰うか……」

携帯の前で悩むこと数分。

—— 答えが出なかつた俺は、一度部屋を出ることにした。

外の空気を吸って、リフレッシュする為だ。

幸い一之江が借りていた鍵がテーブルの上にあつたし、これで戸締まりをすれば問題

ないだろう。

「まさかこういう悩みを抱くとはなあ……」

最近、悩み尽きないな、などと思いつながら。

俺は詩穂先輩の家を後にした。

2010年6月19日。午前2時45分

夜霞市内某所

雨がしとしとと降る夜中の街を。

コンビニで購入した傘を差しながら、俺は電話をかけていた。
相手はアランだ。

『イヤだよ、そんなの』

「そこをなんとかしてくれ親友のアラン」

『こういう時だけ親友って呼ぶなモンジ』

「モンジって呼ぶな」

『ほほう？　　いいのかなあ？　　僕が協力しないと、理亜ちゃんが怖いんじゃないかなあ？』

くつくつくつー』

くそつー！　　アランのくせに足元みやがって!!？

「……受けてくれるならキリカや一之江とのウハウハデートのセッティングをしてやつてもいいぞ」

『何?!?　　美少女達とのウハウハデートだと?!?』

『毒舌美少女と小悪魔っ子なクラスメイトとのラブラブデート』です」

『く、クラスメイト、ら、ラブラブデート……!』

『ご協力頂けませんか、アラン様』

『いいだろう！　　僕は今日、モンジと過ごしていた』

ふっ、チョロイな。

『ありがとうアラン……それとモンジって言うな』

『わはは。どこにいるのか知らないが、ちゃんとデートさせろよ!』

『おう、恩にきるぜ』

アランとの電話を切って、ひとまず安堵する。

結局嘘を付くことに変わらないのだが、アランとも電話口とはいえ過ごしたのは事実

だ。

まあ、そのせいで別の問題も出来たが……。

(……デートのセッティング、どうしよう)

ノリと勢いでデートさせる、と言っちまったがキリカはともかく、一之江を説得するとか……無理ゲーじゃねえか？

マズイ。背後を刺される未来しか見えない。

……どうしよう。

ま、それはおいおい考えるところ。

それよりも……

「女の先輩の相談に、友達と乗っていました。アランもだよ……っ」と

そんな返信を理亜にしつつも、胸が痛むが仕方ない。

……今回は些細な問題だ。

理亜だって、まあ、怒る原因が嫉妬から来るものなのか潔癖症だからなのかは解らないが、もしバレてもちよつと怒るくらいで許してくれるはずだ。

だが、これからはどうだろう？

命懸けで俺が何かをしようとしていると知ったら、その内容を知ったら、理亜はどう思うだろうか？

クールだけど、優しい彼女のことだ。心配して心を痛めるかもしれない。

もし、俺が今までのモンジ

—— 一文字疾風

—— ではないと知ってしま

まったら。

どうするだろうか？

—— 自分から望んで一文字に憑依したわけじゃない。

—— 自分で選んで『主人公』になつたわけではない。

だが、だからといって、逃げ出したくない。今の俺でも頑張れば、誰かを救えたりできるのだから。

それは今までの。

『ただの一文字疾風』では無理だつたことが出来るという意味だ。

「全てをありのままに話すことは出来ないが」

でも、心配をかけないように振る舞うことは出来るはず。少なくとも、理亜やアラン達には、こんな殺伐としたホラーでオカルトな世界は一生知らないままでいてほしい。

……そうだ。知らなくていいんだ。こんな世界は。

「出来ないんだ」

と、その時だった。

気づけば目の前に見知つた人物が立っていた。

白い帽子に、白いワンピース。

それらを身に付けたヤシロちゃんは今日も突然現れた。

手に持つ白い大きな傘は色合いはバッチリだが、大きさはミスマツチだな。

「やあ、こんばんは、ヤシロちゃん」

「うん、こんばんは、お兄さん」

俺が軽く会釈すると、ヤシロちゃんは帽子の下に笑みを浮かべながら返してくれた。

目の前に突然現れたヤシロちゃん。

突然現れた彼女は、安心と不安を同時に与えるような、そんな存在だ。

俺がこんな殺伐としたホラーなオカルト世界に首を突っ込むキツカケになったのも、

思えばヤシロちゃんにDフォンを手渡たされてからだ。

「それで、何が話すことが出来ないの、お兄さん？」

「ん、ああ……ほら。自分の家族とか友人とかには話せないよな、と思つて」

「そうなの？」

「そうなんだよ。知つたら巻き込んでしまうだろう？」

音楽の時も似たような事を思つたが、結局彼女はこっち側に来てしまったからな。

「ふうん……そういうものなんだね」

「ああ、そういうものなんだよ。つていうか、ヤシロちゃんはこんな時間に、こんなところ

ろでどうしたんだ？」

「うん？　もちろん、お兄さんに会いに来たんだよ？」

「……子供がこんな時間に出歩くなんて危ねえぞ。送ってやるからさっさと家に帰れ」

「ふふ、はい。気をつけまーす」

「うん、素直でよろしい」

その素直さを1／10でいいから、一之江やアリアに分けてやってくれ。

もつともヤシロちゃんもロアだから、本当ならこんな心配はいらないなんていうことは知ってるが。

でも、やっぱり気になっちまうんだよな。

こういう子も、ちゃんと楽しい日常を過ごせるようになればいい。

そんな風に思ってしまう。

「お兄さん？」

「つと、悪い。考え事をしていた」

「ううん。わたしのことまで考えるなんて。お兄さんはやっぱりスケコマシさんだね」

「うぐっ」

一之江に言われた『ハーレム野郎』という言葉を思い出す。

俺はハーレム野郎なのか……。

いや、違う。ただの誤解だ。

女を避けてる俺がハーレム野郎なはずはない。絶対。うん。

「それでね。十字路……『四辻』では、良くないものと出会う。そんな都市伝説が実はあつたりしてね？」

「ん？　良くないもの？」

「そう。だからこの先に進めば、お兄さんはこれから『主人公』として、とても大変なことになるの」

「『主人公』として……？」

胸の鼓動が高まる。それは今正に俺が悩んでいるものだからだ。

「その結果、もしかしたら望まない方向に向かうかもしれないし、望んでも苦しいことになるかもしれない。今なら、ここを戻ればそういう苦しい思いをしなくても済むけど。どうする？」

このまま進めば、望む望まないに限らず、苦しい道になるかもしれない、か。

そして、ここから早急に立ち去れば。先輩の家にも戻れば。

きつと朝が来て、ドキドキ、デレデレして怒られる……という。

当たり前な日常を過ごせるのだろう。

迷うことなんかねえ！

当たり前な日常を選ぶべきだ。

俺が一番望んでいるのはそれだろ？

そう思っているのに。

「進んだ先に……俺が望んだものはあるのか？」

そんな質問をしてしまう。

俺の質問に対し、ヤシロちゃんは少しもつたいぶるかのように歩いてから。

くるっと体を向けて。

「苦しくても、進めば何かはあるよ」

ただ一言、そう告げた。

「……戻ると何もないうってことか」

進むか、戻るか。

その二択しかないのなら……

俺が出す答えは決まっている。

「ありがとう、ヤシロちゃん。やっぱり俺は先に進むよ。苦しくても、自分に何が出来る

のか探してみるよ」

その『何か』も、探してみなければずっと見つからないままだしな。

たとえ苦しくても進まなければ、何も手に入らない。

それに俺は東池袋高で学んだ。

『力を持つ者には正しく力を使う責任がある』ということ。

「そう、やっぱり進むんだね。そんなお兄さんに、朗報んだけど」

「朗報？」

「うん。この先に進めば、お兄さんはみんなを守れるようになるかもしれない」
みんなを守れるように？」

「それは……」

どういう意味だ、と聞こうとしたところで。

「もっとも、大事なものを奪われなければ、だけどね」

ヤシロちゃんの口元が酷薄な笑みに変わった。

第九話。『音速境界』

その瞬間、制服の胸ポケットとズボンのポケットに入れていたDフォンが発熱し、気づけば辺りに人の気配が無くなっていった。

恐る恐るDフォンを取り出すと、赤く発光し、俺自身に危険が迫っていることを知らせてくれていた。

はっ！ とDフォンからヤシロちゃんへと視線を戻すと。そこに……
ヤシロちゃんの姿は……ない。

もう、彼女は役目を終えたのだろう。

この状況は俺が初めてヤシロちゃんとお会った日と似ている。
それはつまり。

これから新たな『敵』に襲われるということだ。

「はあ……不幸だ」

今日は朝からツイてない。

学校では赤マント。夜はベッド下の男。そして……。

「初めまして、『101番目の百物語』」

人気がない十字路の中心に、見覚えのない人物が立っていた。

背は俺と同じくらいだろうか。細身で、街灯に照らされたメガネが光っているのが特徴的の青年。

なんだが気づいたポーズで立っているが、その声には自信が満ち溢れていた。

「……初めまして。で、お前は誰だ？」

ヤシロちゃんの言っていた『良くないもの』だろうか。

警戒レベルを2に引き上げて対応しよう。

そう思った俺はすぐに一之江を呼び出せるようにDフォンのデータフォルダを開いておく。

これでボタンを一つ押せばいつでも一之江を呼び出せる。

「俺は『蒼ブルーアイズの邪眼』」

そう名乗った青年のメガネの下にある双眸が、怪しく——青く光っていた。

その瞬間、Dフォンが制服越しでも痛いくらいに熱く発熱し、赤い輝きを増している。「お前の物語を取り込みにきた……『主人公』だ！」

青年がメガネを外してその双眸を見せた瞬間、俺は彼に背を向けて。

一目散に駆け出した。

「悪いが、そういうのは間に合ってるんだ！」

「逃がしはしないぞー！ 来い、ラインー！」

背後で『蒼の邪眼』^{ブルーアイズ}が誰かを呼ぶ声が聞こえて。

直後、突風が吹いた。

「っ？？」

俺は慌てて足を止めた。

気づけば、俺の数メートル先に『蒼の邪眼』^{ブルーアイズ}と……。

ゴシツクロリータという、理子が好き好んで着そうな、フリフリでヒラヒラな、西洋の人形が着ているような服装を身に纏った少女が立っていた。年齢は小学生の高学年くらいだろうか。

怪我でもしているのか、身体の至るところに包帯が巻かれており、その片目も包帯に包まれている。

その様はどちらかというところと怪我の痛々しきというより、ゴシツクホラー的な恐怖と威圧感を放っていた。

「わらわを呼ぶほどの相手なのか、氷澄？」^{ひずみ}

「こいつには『最強』と名高い殺戮都市伝説、『月隠のメリーズドール』がいるからな。ちよつとした油断が即、命取りになるはずだ」

氷澄、というのがメガネ青年の名前なのだろうか？

そして、片目のゴシックロリータ少女は『最強』と恐れられている一之江に対抗できるほどの『都市伝説』なんだろうか。

「ふむ。ならば呼ぶがいい。わらわから逃げられる存在など、いないのだからな」

俺に一之江を呼ぶように促し、一之江が呼ばれるのを腕を組みながら待つ、ラインと呼べれた少女。

「今は寝てるから、また後日じゃ……駄目か？」

一応尋ねてみた。俺の発言をジョークか何かだと思つたメガネ青年は口元に皮肉げな笑みを浮かべる。

「それが命乞いだとしたら、もっと上等な言葉を発した方がいい。どれが遺言になるのか、解らないのだからな？」

こいつは解りやすいくらい、いかにもな悪役だな。

武偵高にもいたな。こういう感じの三下。

こういう奴に限って、因縁とかつけてくるんだよな……。だが、まあ。

こういうストリートで言う奴の方が助かる気分だ。

敵が女の子だったら……なんというか、倒しにくいしな。

「じゃあ、お言葉に甘えて」

一之江はさつき寝たばかりだから、起こすと絶対不機嫌だろうが。

噂になってるほどの『最強』つぼさには、何度も助けられているのは事実だからな。

Dフォンのデータフォルダにある、人形の写真を表示して。

俺はそのままボタンをポチツとな、と押してみる。

その瞬間――。

「もしもし私よ、以下略」

「そこ重要なんじゃないのかよ、アイデンティティーとして!」

「うるさい殺す」

「ツツコミすら許すつもりもない!?!?」

予想通り。寝てるどころを起こされた一之江の機嫌はメチャクチャ悪かった。

背後からイライラとした声が聞こえたので、せめて雨除けをしようとビニール傘で後ろをかざしておく。

これで少しは機嫌を直してくれるといいのだが。

「ほう、お主が『月隠のメリーズドール』か……」

「ゴシックロリータの服とは、なんかキャラがかぶっていますね。そういう貴女はどな

たんですか」

「よくぞ聞いてくれた。わらわの名はライン。都市伝説の名は……」

ラインと名乗ったゴシックロリータ少女の姿が一瞬にして消えて。

気付いた時には、俺の……いや、背後にいる一之江の真横に現れていた。

「っ!? 『想起跳躍』っ」

一之江もいきなり現れたラインの姿に驚いた様子で、慌てて技名を叫ぶが。

しかし。

「ははは、遅いぞっ」

空間跳躍した一之江の真横に、ラインは一瞬にして現れた。

「っ!?? 馬鹿な……一之江の技は空間を超えるはずじゃ……!??」

「超えましたて。このロリババアが空間跳躍並みのスピードを持っているんですよ」

驚いた俺に対して答える一之江の声はいつも通り静かなものだった。

ガキイイイイ!!?

背後から刃物同士がぶつかり合う物騒な音が聞こえたので、俺は一之江の邪魔になら

ないように慌ててしゃがみこんだ。

「どうした? 俺達を殺害しないのか?」

氷澄という男は余裕なのか、そんな言葉を吐いて一之江を挑発した。

安い挑発だが俺が一之江ならば……。

「安い挑発ですが高くつきますよ？」

やっぱり買うだろうな。

「それか交渉の基本だろ？」

しかし、さつきから気にはなっていたが……。

俺は眼中にないってか。

「わらわを殺してみよ、メリーズドール」

氷澄もラインもターゲットは一之江ってわけか。

巻き込まれた俺としては、こういう風に扱われることに対しては特に不満はないのだ

が……。

「ただ、ちよつとばかりこの『^{エネ}罫』さんこと俺と一之江を舐めていませんかね、お二

人さん？」

「いいでしょう。貴女はモロに『ロア』。心を痛める理由もありません」

一之江は相手が『ロア』なら容赦するつもりはない。

「『^{リンガール}想起跳躍』！」

その一之江の言葉を聞いた人物の背後に、一瞬で移動する能力。

その言葉を聞いた相手は必ず一之江に背後を取られるのだが……。

「遅いと言うておろう！」

気づけば、ラインは離れた電信柱の下に移動していた。

一瞬で移動する一之江よりも速くラインは移動できるようで。

「くっ、モンジ。私の顔を見ないように気を付けなさい！」

『想起跳躍^{リンガーベル}』！」

俺は初めて戦闘で一之江が焦った声を出すのを聞いた。

一之江が言葉を発した後に、俺は慌てて一之江の姿を見ないように視線を下げて。

人形らしいフリフリの、だけどボロボロの衣装を纏った一之江の。その体の、腰から下が見えないように注意深く手で目を覆いながらラインの背後に現れる姿を目で追い続けた。

だが、一之江が現れた場所には既にラインの姿はなかった。

「なんじゃ。やはりわらわには追いつけぬのか」

そんなのんびりした声は、俺の背後から聞こえた。

「一之江の空間跳躍よりも、もっと速く移動してるのか……？」

だが、そんなこと可能なのか？

あれはワープと同じだろ？

一之江の能力はそれこそズルなレベルで、声さえ届けばどんな空間だろうと超えられる能力のはずじゃ……？

……声さえ届けば？

「まさか」

「気付いたか。ラインは音速を超えての移動が可能だ」

俺の呟きに答えるかのように。氷澄が自慢気に語った。俺はその青い目をなるべく見ないようにしつつ、彼の言葉の意味を考える。

「一之江の技が……声、つまり音を使ったものだから」

「うむ。わらわはその音よりも速く動いているに過ぎぬ」

なんてことだ。生身で音速に至るとはどんな化物だよ？

……あんまり人のこと言えないけど。

「なるほど。『想起跳躍』！」
リンガーベル

一之江は再びその言葉を発し。

一瞬で俺の横に回ったが……そこには既にラインの姿はなかった。

「無駄じゃよ。わらわはどんな速度のものにも負けずに追いつき、追い越す伝説じゃ。

それがわらわのロア」

「『ターボ婆さん』なのですね」

ラインに向けて一之江はその名を口にした。その噂なら聞いたことがある。

人気のない山道をバイクで走っていると、凄いスピードで並走してくる老人がいて驚

く、とかいうものだったはずだ。慌てて見直してみると、そんな老人はいなくなっており、見間違いかと思って前を見たら、目の前にいてさらに驚く。

確かそんな感じの都市伝説だったはずだ。

だが一之江の言葉に引つかかる部分があった。

「……婆さん？」

「最近じゃと『境山のターボロリババア』と呼ばれておるな」

「ロリババアって」

「なんだそのジャンル？」

「あざといジャンルですね」

「そういうな。境山でツーリングするライダーなどには、老婆が追いかけてくるよりも喜ばれておるのじゃぞ？」

「そりや、ババアより見た目が若いロリっ子の方がいいのかもしれないが……それでいいのかわよ？」

「フツ。これでメリーズドール最大の能力を封じたことになる」

氷澄の得意げな声で現実に戻れた。

「悪いな、氷澄。」

「お前の存在ちよつとばかり忘れてたぜ。」

「あとはお前の『エネイプル』としての能力だが……ライン相手ならそれも封じたに等しい。

俺が得た情報では普段のお前は自由自在に能力を使えないようだからな。

コイツが変身するのは若くて可愛い女限定だからな！

フツ、『エネイプル』ここに敗れたり！」

「……それはどういう意味じゃ氷澄？」

「ライン相手では発情しない、という意味だ。コイツがいくら女好きのたらしだとしてもババア相手に発情したりしない……はずだからな。『百物語』に関しては未だ能力が使えない。

従って、コイツが持つ最大の能力……HSSさえ気を付ければ取るに足らん相手だ」

氷澄が放ったその言葉に思わず固まってしまった。

コイツ……今なんて言った？

(知ってるのか？ HSS……ヒステリアモードのことを……？)

コイツは俺や一之江の情報を掴んでいる。

一之江の能力がバレていて、対策されていて、なおかつ俺にも詳しい。

ロアは、情報量が多い方が強い。その点でも、俺達は圧倒的に不利だ。

「能力が使えない『主人公』……それが生き残る道などない！」

「それじゃ、とつととやっつけるかの、氷澄？」

「ああ、やるぞライン」

その言葉を聞いた直後。

ラインの姿が、再び一瞬で

路地の先に現れた。

やつつける、なんて簡単に言ってくれるが。実際、今のままでは一之江が対応できない状況というのも確かだ。そして、ラインの目は明らかに……一之江だけではなく、俺のことも狙っている。

そこに加えて。コイツらは一緒に技を放とうとしている。

俺が自在に使えない『主人公』としての力を既に持つていて。

それが俺達に向けられる。

それが解った瞬間。

全身を冷たい汗が流れた。

このまま、このまま、何も出来ずに……コイツらに倒される？

そうになったら、キリカは。音央は。鳴央ちゃんは。

一之江は、どうなってしまうんだ？

頭の中を焦りが支配してぐるぐると駆け巡るが、相手は『速度』に秀でた都市伝説。俺が迷っている時間なんて与えてくれるはずもなく。

「二人とも吹き飛ばしてくれ、ゆくぞー！」

畜生！ やめろ、やめてくれっ。

こんなこと、俺の女達に手を出すな！

「やめ……」

口にしようとした瞬間には。

『厄災の眼』！

辺りの景色が一瞬で青と黒のモノトーンカラーに染まり。

『音速境界』！

「っ!? モンジ！」

その一瞬で何が起きたのか解らなかった。

俺の目の前で、長い金髪がはらりと舞い。

その少女の服装は、さつき見た一之江の……ボロボロの人形衣装で。

それが、一之江の『ロア』状態である、というのを初めて認識した瞬間。

ズガガガガガガガ!!?

物凄い衝撃が走り抜けて、一之江の体が大きく弾かれて上空に飛ばされていた。

「なっ……!?」

何が起きたのかさっぱり解らなかつた。

まさか。

まさか、一之江は俺を庇って……？

そして、今。

「くはっ……」

小さな吐息と共に、アスファルトの上に落ちてそのまま倒れ込んだ。

「ほう。二人に降りかかるはずの災厄を……一人で肩代わりしたというのか」

「ちっ、まさか『主人公』を庇うなど、わらわは絶対にしない行動じやの」

「いや、お前もたまには俺を敬えよ、ライン」

俺達の背後……ずっと後ろの方からライン達の声が聞こえてきた。

そんなやり取りを聞いていられるくらい冷静でいられる自分に驚く。

ああ……そうか。俺は……。

「まあ、『主人公』が足を引つ張るようじゃ、どんなに強いロアでも勝てるはずがない」

氷澄の声は聞こえていたが、頭の中には入らなかつた。

「俺は貴様を倒して……貴様ごとその『物語』を奪うぞ」

氷澄の口から出されたのは最後忠告だった。

だが俺は思いの他。冷静でいられた。

冷静な自分に自分自身で驚く。

これは……??

「『音速境界』！」
ライン・ザ・マツハ

凄まじい衝撃を受けて俺の体は宙を舞った。

今のは『桜花』!??

『妖刀』の『炸牙』にも似た衝撃が俺を襲った。

やがて、どさりと背中から地面に叩きつけられた。

全身を痛みが駆け巡る。

だが痛みよりもずっと感じるものがある。

これは？

俺はな……つ……て……いる……??

分かる。

分かるぞ。

俺の体の中心・中央に、何か異様な血が流れているのが分かる。

さつきまでの逃げ腰な自分とは違う。危険な感情が、湧いていた。

これは——怒り。

『物語』を奪う。ただそれだけの理由で一之江を襲い。苦しめ、最後は見せしめのようにして吹き飛ばした目の前の男達への怒り。

俺の一之江を倒した奴らに対する怒りだ。

ベルセに似ているがアレとは根本的に違う。

もつと強力な、危険な力。

黙って立ち上がる俺に警戒したのか、氷澄とラインはその場を動かずにいる。

「何、立ち上がる……だと」

「わらわの技を受けて尚、まだやり合うというのか？」

立ち上がった俺を見て驚愕の表情を浮かべてじりじりと、後ずさる二人。

無意識な内に行ったのか、そんな行動に対して信じられないといった顔を浮かべる。

無理もない。虫の息だと思っていた格下の相手に恐れるはずはないと思っていたのだからかな。

「馬鹿な！ HSSになるには発情しないと成れないはずだ！」

「それは違うぞ、氷澄。わらわの知るあの男は性的興奮以外でもなっておったからの」

ラインはそう言い。そして再びその姿を消した。

一瞬のうちに俺の背後に現れたライン。

今度は音速の技を俺に放つつもりか。

普通の人間なら絶対に避けられない『速度』での攻撃。

だが俺にはその動きは全て見えていてる。

「どんな手を使ったのか知らぬが、これで終わりじゃ。」

『音速境界』！」

「よし行くぞ！ 『厄災の眼』！」

ラインにより放たれた攻撃が俺の体に届いた、刹那の時間。

俺は倒れた一之江を視界に入れないように注意しつつ、全身の筋肉を連動させた。

「『橘花』！」

通常の『桜花』とは違う。

逆の方向ベクトルに放つ第二の桜花。

ラインが放つ技が音速を超えているのならば、それを打ち消すだけの『速度』を放てばいい。

ただし放つのは技とは間逆の方向。

どんな強力な攻撃だろうと相殺出来れば0となる。

『音速境界』を破るにはこの減速防御が効果的はずだ！

ヒステリアモードが見せる超スローな空間の中で。

パアアアン、という衝撃音が鳴り響き。

スローな時間が解かれるのと同時に。

俺は音速を超えて迫ってきたラインをその体ごと受け止めた。

「なぬっ!?? わらわを受け止めた……じゃと!??」

「馬鹿な、『101番目の百物語』や『エネイブル』にこんな能力があるなんて聞いてないぞ!??」

「わらわの技のみならず、氷澄の厄災をも打ち破ったじゃと……!」

「フツ、面白い。流石は『不可能を可能にする男』だ。」

だが……相手が悪かったな。俺の仲間はずいぶんではないぞ!」

「何?」

氷澄がそう言った直後。

辺りが騒がしくなった。

ドロン、ドロン。

ドドドドドツ! と、突然バイクのエンジン音が鳴り響いたからだ。

気づいた時には俺の視界の先に。

大型のバイクに跨った男性らしき人の姿が目に入った。

顔は見えない。

それは真夜中で暗いから、という理由ではない。

首から上が物理的に存在していないのだ。

それはある意味。

一之江のロア『メリーさん人形』やキリカのロアである『魔女』と同じくらい有名な存在だ。

日本各地で目撃されるその都市伝説は。

首なしライダー。

不慮の事故により、首から上を喪った存在として日本各地で度々目撃される存在だ。

そして。

俺は個人的に。目の前の男のことを知っている。

顔は解らない。

だが、血は知っている。

「つたく、何やってんだよ、ライン？」

言っただろ。兄貴は人間辞めてるから気を付けろって。

闘るならその時は俺も呼べよ」

目の前の男。

遠山金三こと、G I I I は俺を見つめながらそう言った。

第十話。 対決の刻

「なんじゃ、来たのかキンゾー」

「ブチ殺すぞ！ お前らはその名で呼ぶんじゃねえよ!!?」

「……」

状況が理解できない。

いや、目の前にいるのはキンゾーで。先ほどの言葉から察すると『蒼ブルーの邪眼』や『ターボロリババ』の仲間だというのは解る。

俺の目の前に立ち塞がるからには味方ではなく、敵対するといった意思表示なのだろう。

ここまでは解る。

だがな。

「なんでお前までいんだよ!!?」

それが解らない。

今まで深く考えないようになってきたが。

リサ、かなめ、綴……そして、キンゾー。

俺の知り合いが都市伝説となって現れる率が高過ぎる。

確かにどいつもこいつも、ある意味『都市伝説』として語られてもおかしくないくらい人間離れてしているが、そもそも彼らはこの世界の人間ではない。

この世界の人間ではない彼らが、『都市伝説』として俺の前に現れる。

……これは全て偶然の出来事なのだろうか？

そんな偶然あつてたまるか！

そう叫びたいのを我慢してキンゾーに問いかけるも……

「たつく……兄貴も兄貴だぜ？ 何やってんだよう？」

キンゾーは俺の言葉をスルーして質問を質問で返してきやがった。

その言葉。そのまんまお前に返したい。

キンゾーは、首から上は相変わらず見えませんが……俺が東池袋高でレオンから貰った特攻服に身を包み、手に俺のオロチに似たフィンガーグローブを着けている。特攻服の下が少し膨らんでいるのが解る。

おそらく軽量化したプロテクターを着けているんだろう。

「降りかかる火の粉を払おうとしていただけだ」

「チイツ、兄貴……なつてんのか？」

舌打ちしてキンゾーがそう言った。

ああ————やっぱりこれは。

「おかげさまでな。その氷澄が一之江や俺の仲間を『奪う』って言ったのもあるが、なにより一之江を傷つけられたからな。

ならないはずがない……だろ？」

「チイツ……やり過ぎるな、ってラインには言ったんだがな」

「仕方ないじやろう？ お主に聞いていた以上に面白い相手だったからのう。『メ

リーズドール』もその『^{エネイブル} 罫』もな」

「何だ、言いたい貴様らは何を言ってる!!?」

一人状況が解つてないのか、氷澄が戸惑いの声をあげる。

そんな氷澄にレクチャーするように、キンゾーは語りかける。

「なつてんだよ。HSS……ヒステリア・レガルメンテに」

「ヒステリア・レガルメンテ？」

氷澄の目が大きく開かれる。

その意味を正しく理解できたのだろう。

そう、ヒステリアモードには状況や熟練度にもよるが、派生がある。

『死に際』のヒステリアモード。アゴニザンテ。

力は増すが攻撃一辺になる『諸刃の剣』であるベルセ。

性的興奮を一切しなくなる代わりに攻撃力が皆無になるワイズマン。

そして……。

「兄貴がなってるんのは、ヒステリア・レガルメンテ。

『王者のHSS』……HSSを持つ男が、自分の女を滅ぼされた時に発現するモノだ」
俺の知ってることをペラペラ言うGIIII。

俺はすでに知ってるが。

人前で余計なこと話してんじゃねえよ！

「フン、そんな切り札を持っていたなんてな。

だが、いいのかGIIII？ お前が兄と慕う男の情報をペラペラ喋ってる？」

「べ、別に慕ってねえよ!!？」

あ、兄貴は人間辞めてる奴だからな！

このくらいの情報でやられる奴じゃねえんだよ」

おい、それはどういう意味だ？

「Rランク武偵の人間辞めてる代表のお前に言われたくねえ！

というか、ペラペラとヒステリアモードのことを勝手に話してんじゃねえよ！」

「う、うるせー！ 兄貴は黙って俺に従ってればいいんだよ！」

という訳だ、兄貴！ お互いの『物語』をかけて勝負しやがれ！」

「待て！　何がという訳、だ！　お前が戦う理由も聞いてねえのに誰が勝負するかー!?？」

何言つてんだ、お前は。

いきなり乱入してきて勝負しやがれつて言う相手に、「ああ、やろう！」という奴なんているのか？

いるかもしれないが、俺はしないぞ。

やんないからな！

「うるせー！　やろうぜ！

兄貴の物語は俺のモノ。俺のモノは俺のモノだろ？」

どこのジャイアンだ、お前は？

クソ、一難去つて。また一難。

一之江がやられた今。俺には仲間がない。

「待てキンゾー。それはあまりに一方的過ぎるぞ？」

と思つたが。ラインが助け船を出してくれた。

さすがは年の功。

見た目はロリだが、中身は婆さんだけあつて常識的だな。

「わらわたしが先に狙つてた奴なのじゃ。ここは共闘するといふのでどうじゃ？」

どうせそんなことだろうと思ったよ！

「チィ、仕方ねえな。先に倒した方が兄貴を『物語』に加えるつてのでどうだ？」

「というわけじゃが、よいかの氷澄？」

「俺は構わない」

「ふざけんな！」

「じゃあ決まりだな」

「ちよつ、待て！」

俺の意見は完全スルーかよ！

右手拳を振り上げてプルプル震えた俺にラインは若干気の毒そうな目を向けつつ。

ラインの体を掴んでいた俺の腕を捻り上げた。

「ちよつ？　い痛だだだっ！」

腕捻りをかけられた俺はラインを咄嗟に放してしまふ。

俺の拘束から抜け出したラインは一瞬にして、その姿を消し。

気づけば遠く離れた電信柱の真下にいた。

「それじゃ、とつととやつつけるかの氷澄、キンゾー？」

「ああ、やるぞライン！」

氷澄の両眼が青く光り。

「ケツ、本当なら兄貴とはタイマンをやりたかったんだけどな。

仕方ねえ……おい、兄貴。命^{タマア}までは取らないから安心しろよ」

「ふぎけんな！ 何でお前らと闘らなきゃならないんだ！」

「……馬鹿だな兄貴は。そんなの決まってるんだろ。俺には俺の、氷澄には氷澄の戦う理由があるからだ」

理由？

「何だよ、その理由って……」

「氷澄の理由は言えねが……というより詳しくは知らねえが、俺はあるロアを追ってる。そのロアの力が俺には必要だからな。」

だがその為にはより強いロアの力が必要だ。

だから俺は『物語』を集めてやる。

最高の物語を集めて望みを叶えてやる！」

「何だよ、その望みって？」

「あー……そりゃあ、言えねなア」

顎を指で掻きながら片眉を上げたジーサードは、答えない。

「じゃあ質問を変えてやる。」

お前はそのロアの力を使って、何をするつもりだ。まさかと思うが死人を生き還らす

……なんて言わないよな？」

俺に問われたジーサードは目つきをシリアスなものに変えた。

「知つてて聞いてくるのはマナー違反だぜ！」

(……)

しばらく黙って回答を促しても、何も言わない。

ジーサードの目に、深い哀しみを感じる。

(……ああ、そうか。ジーサードは……)

ベルセ気味のレガルメンテの頭だったせいか……解つた。

解つて、しまった。

ジーサードは、死者蘇生をしようとしている。

ジーサードがかつて愛した女性を。

「生き還らせようとしてんだな。サラ博士を……！」

俺のその言葉に———— ジーサードは。

「ああ、そうだ。生き還れるんだ！ ロアの力があればな！」

あまり触れられたくないからか、低い声で答える。

「まだそんなこと考えてたのか……」

「諦めるかよ！ やつと見つけたんだ。サラを生き還らせる方法を！」

『死者の書』……そのロアの力があれば生き還るんだ、サラが！」

「おい馬鹿よせ、そんな事は。死人を生き還らせるなんて自然に逆らう行為だぞ」

『人喰い村』で自身がやらかした事を柵に上げつつ、ジーサードの説得を試みたが……。

「ハツ、知るかよ。俺は神にだって逆らつてやる！」

ジーサードは恐れるものなど何もないという強気な姿勢を崩さなかった。

まあ、解つてたげどさ。

相模湾上空で戦つたあの時も同じこと言つてたし。

だが、キンゾーよ。

その後、女神こと、緋緋神様が乗り移つた『闘戦勝仏』・孫悟空に胸貫かれてなかつたか？

レーザービームで……。

クリスチャン教徒なら嘘でも神に逆らうとか言うのは辞めた方がいいぞ。

でないとまた、撃たれるぞ。

今度はBC兵器とかで。

「だから悪いな……俺の目的の為にここで散つてくれよ、兄貴！」

「散らせるものなら……散らせてみやがれっ！」

ラインや氷澄の動きにも注意しつつ。

『桜花』の構えを取る。

ジーサードの方に視線を向けると。

(……やっぱり、ソレを使う気か)

ジーサードの構えを見て思わず笑ってしまった。

お互い考える事は同じなんだよな。

俺達には銃も刃物も効かない。

俺達は銃弾を斬り、逸らし、跳ね返し、受け止める。

刃物は素手で掴んで止められる。

そんな人間離れたした技を使える奴と戦わなければならない。

ならどうするか？

そんなの決まってるだろ？

「同じこと考えてるな……」

「ハッ、今更何言ってるんだ？」

『剣は銃より強し。拳は剣より強し……』だ！
そして、俺達には音速

の拳がある！

なら解るだろ？

キンゾーのそんな言葉が聞こえた気がした。

「いくぞ、『厄災の眼』!!?」

ライン・ザ・マツハ
『音速境界』!!?」

「いくぜ!」 『流星』!!?」

俺を挟むように、右側からライン。

左側からはジーサードがバイクに乗ったまま迫ってきた。

アクセルを吹かしながら『轢いてやる』とか言ってたが……お前本当は武藤じゃないよな?」

内心の心配を他所に、ほとんど同時にライン達は突っ込んできたが、完全に同じタイミングではない。

わずかに間がある。

それなら!

俺はヒステリアモードが見せる超超スロー空間の中で自身の筋骨を順番に連動させていく。

(橘花) 絶牢 (桜花ツ!)

それは以前、相模湾上空での戦いで放ったカウンター技。

それを俺は代わるばんこ順番に放とうとしたが……。

(ありえん)

思わずそんな言葉を心の中で呟いてしまう。

迫り来るライン達は変わらずに突っ込んできた。

「ぐはっ……」

だからラインには橘花で受け止めた力を、絶牢で返して、桜花気味の蹴りを体に叩き込んで吹き飛ばした。

しかし、ジーサードは俺が使う技が何かが解つたのか、『流星』をキャンセルして咄嗟にバイクから降りて『流星』とは別の構えをとっていた。

突っ込んできたバイクは『桜花』気味に蹴りを入れて吹き飛ばしたが、キズ付いても弁償とかはしないぞ。

まあ、今はバイク事は後で考えよう。

それよりもだ。ジーサードが行なっている構え。

あれは……。

(……絶牢)

『見せたら殺せ』。

そう先祖代々受け継がれてきた秘中の奥義。

全身を回転扉のように使い、相手の力を返すカウンター技。

それを使う気だ。俺がジーサードに攻撃をした瞬間に。

ジーサードの呻き声と共に、衝撃が上半身まで及んだのか、奴が着ていた特攻服の下にあるプロテクターが、破片となって飛び散った。それと同時にドサリと地面に倒れるジーサード。

（勝った……のか？）

桜花と絶牢を何度も放ったせいで、乱れた息を整えてながら安堵したその時

「まさか、ラインだけではなくジーサードがやられるとはな。

だが、これで戦いが終わったと思つてないだろうな？　　一文字疾風」

氷澄がその双眸を青く光らせながら笑う。

「通常のロアとの戦いならば、確かにこれで決着してもおかしくない。だが

『主人公』と戦っているということをお前はまだ知らないようだな」

「……何？」

「俺が思い描く『主人公』像は、窮地こそ自身の転機に変える」

ドクン。

その『主人公』の在り方に、俺は寒気みたいなものを感じた。

「ライン」

氷澄は倒されたラインの名を呼ぶ。

「お前は——『いなくなったと思ったら目の前にいる』ロアだろう!!?」

「っ!!?」

俺はラインが倒れている方へ視線を向ける。

が、そこには誰もいない。

「なにつ!!?」

倒したはずのラインがない!!?

と、その時。

一瞬、何かの気配を感じて、慌てて横を見た。

今、一瞬だが、誰かの姿が見えた……!!?

いや、そんなはずは……。

『橘花』と『絶牢』、『桜花』のコンボ技を喰らって無事でいられるはずが……。

視線を氷澄に向けると——。

「ばあ」

「うおおおつ!!?」

目の前にラインが立っていた。

そんな馬鹿な……!!?

俺は目の前のラインを見つめた。

やがてその姿がぼんやりと消えていき……。

「ふむ、氷澄。『ばあ』はどうかかと思うんじやが」

その姿は氷澄の真横に現れていた。

「つ……？　今、何をしやがった？」

「お前は俺の青い光を受け過ぎていたのさ」

氷澄は口元に歪んだ笑みを浮かべて、俺に語りかける。

「故に、暗示にかかりやすくなっていた。いるはずのないものを、見るくらいにはな」

「いるはずが……ない？」

「うむ、つまりお主が見たわらわとキンゾーは幻

氷澄の使う『フアントムアイズ幻の邪眼』に

よって、幻惑を見せられたということじやよ」

「だが、お前はこう思ったはずだ。『ラインとジーサードは目の前にいる』と」

「そう、わらわとキンゾーは『ターボ婆さん』と『首なしライダー』のロアじやからな。

『そこにいる』と思わせれば、現れることができるのじやよ！

ほれ、そこに……キンゾーがいるぞ！」

ラインが指差した方へ視線を向けると。

そこには無傷でバイクに跨ったキンゾーがいた。

「つたく、何やってんだよ、兄貴？」

幻になんかに惑わされやがって……だらしねえなア」

その姿を見た瞬間。俺はハッキリと解った。

違う。今まで見えていたキンゾーとは雰囲気がるで違う。

例えるならばそう。

カナではない兄さんや『静かなる鬼』と呼ばれていた父さんのような、圧倒的な存在感がある。そこにいるだけで周囲を圧倒するような、そんな威圧感を放っている。

「本当に……キンゾー、か？」

「その呼び方やめろって言ったろ！」

「まったく、兄貴といい、ラインといい変な呼び方しやがって」

心底嫌そうに言うキンゾー。

キンゾー呼びは嫌なんだな。

「そりや、悪かったなキンゾー。」

「で、やっぱりお前の目的はサラ博士を生き還らすことなのかキンゾー？」

「キンゾーはキンゾーじゃろ？ 他の呼び方なぞ、わらわは認めん」

「てめエら……！」

などとキレたキンゾーだったが、すぐに目的を思い出したのか会話を続けた。

「幻の俺も言っていたと思うが、俺は『死ル・ヌ・ベレト・エム・ヘル者の書』のロアの力を得るまで誰にも負け

る気はねえからよ！

だから……悪いな兄貴。

ここで散つてくれよ」

ジーサードは言うやいなや、俺の方にバイクを走らせてきた。

幻惑ではない本物のRランク武偵。

それも血の繋がった弟に『物語』を狙われるとは。

ジーサードの力は以前戦った時よりも格段に増している。

まだ拳を交わしてないが解る。

雰囲気で。

俺のように数多くの修羅場くぐり抜けてきたのだろう。

一つ一つの動作がより洗練されている。

ただでさえ強かったジーサードはその腕前をさらに上げたのが解る。

そして『ロア』としても覚醒している。

だが……何故キンゾーが『首なしライダー』のロアなんだ？

そもそも『首なしライダー』の都市伝説とはどういったものだったか。

確か、とある道路を横断するようにピアノ線が張ってあり、そこに猛スピードのバイクで突っ込んだライダーは首をはねられてしまった。しかし、首のないライダーを乗せ

たままバイクはしばらく走り続けた。それからというものの亡霊となった彼は夜な夜なその道路を猛スピードでさまよい続ける。首が切断される原因は道路標識やガードレールに変化していたり、走り回る理由は自分を殺害した犯人、もしくは切り落とされた自分の頭部を捜している、とかそんな感じだ。

キンゾーが首なしライダーと呼ばれるには首を切断しないと成れないはずでは？

そう思い俺の前でバイクを止めたキンゾーに聞いてみると……。

「それがよ、この世界に来た時に俺が着ていた光屈折迷彩のメタマテリアル・ギリコートがイカれちゃまってよう。首から下が消えなくなっちゃったのさ。

直すのも面倒だからそのままにしてたら、ヤシロが現れた、ってわけさ」

えっと、つまり。

キンゾーが来た時に着ていたステルス迷彩の服が壊れて首から上だけしか消えなくなっていたのにもかかわらず、キンゾーはそのまま着て過ごしていたせいで。

周りから、世界から『首なし男』が存在していると認識されてしまった、というわけか。

……何やってんの、キンゾー？

第十一話。散花

啞然とした俺を他所にキンゾーは語る。

「そーいや、Dフォンを渡された際にヤシロから兄貴に言付けを頼まれたぜ? 『お兄さん』『達』にはDフォンを二台渡したけど、その意味をよく考えてみて!』 つてな。

……なんのことがよく解んねえが、気に入られてんな。

あんな小さなガキにまで好かれるとは、流石だな、兄貴は!

ま、『緋弾のアリア』や『月隠のメリーズドール』みたいな体型をしてる奴らを手懐ける兄貴だからな。そういつた方面に興味があるのは仕方ねえか……」

おい、それはどういう意味だ?

問いただそうとしたが、キンゾーは口を噤んだ。

いろいろ言いたい事が出来たが、今奴はなんて言った?

ヤシロちゃんが『俺達』にメッセージを残した?

『8番目のセカイの案内人』と呼ばれるヤシロちゃんが?

「ふむ。あのヤシロがのう……こやつにはヤシロが氣にいる『何か』があるということか?」

「ただのロリコンじゃないのか？」

おい、氷澄！ お前、表へ出る

!!?

あ、ここが表か。

……じゃない！ 人をロリコン扱いするな！

俺は普通だ！

幼女嗜好なんてない！

「俺がロリコンなら、お前はババコンだろ！ ラブラブカップルで羨ましいぜ！

ババコンで痛い厨二属性とか……引くぜ」

氷澄に反論すると。

動揺したせいか、奴の目は一瞬大きく開かれ……

その青い瞳がさらに輝きを増した。

「なっ!!? 俺がバ、ババコンだと!!?」

っ!!? ラブラブカップルって誰の事だ！」

「ユ一、アンド、シー？」

以前一之江が俺にした時のように、英語で話しながら氷澄とラインを指差して返すと。

「ぐっ！ 貴様、ふぎげやがって！ ライン、サード！」

馬鹿にされたのが解ったのか、氷澄は逆上した。

よし、相手のペースを奪ったぞ！

一之江がよくやる手だが、会話で相手のペースを乱し、主導権を握る手法。それを俺はやってみた。

「うむ、やるぞ！　氷澄はババコンではないからのう！」

「ケツ、ババコンもロリコンも同じようなモンだろうが」

「それは違うぞ、キンゾー！　氷澄はわらわを愛しておるだけじゃ。俗にいう、ライン

コンプレックス。ラインコンだけじゃ！」

「ああ……なるほど！」

ラインの言葉に思わず納得してしまう俺とキンゾー。

「納得するんじゃない！」

氷澄のツツコミが入る。

そして、そのツツコミが合図になったかのようなタイミングで俺の前まで近寄っていたキンゾーがバイクを発車させた！

（ツツ？　くそ　桜花ッ！）

咄嗟に桜花を放ってバイクの車体を蹴り上げ吹き飛ばしたが……そのバイクにはキンゾーの姿はなかった。

（ツヾ??）

周囲を見回したその時。

チリ、チリつと。俺の中で何かを感じた。

何だ？ この感覚!!？

首の辺りに何か違和感を感じる。

虫の知らせのような、嫌な予感。

俗にいう『シックセンス第六感』が働いた。

これはマズイ!!？

そう思った俺は『潜林』を放って身を屈めた。

次の瞬間。

『インヴィジビレ・ライン不可視の線糸』

キンゾーの声が聞こえ。

頭上を見上げるとヒステリアモードの俺の視力は、先ほどまで俺の首があつた位置を、何か細長い物が瞬時に通過するのを視認した。

あれは……ワイヤー？

細長い、極小の線。

ピアノ線にも見えるソレは俺の首があつた位置から向かいにある民家の塀へと向

かつて伸びていた。

「チツ、避けられたか。当たっていれば即死だったんだがなア……流石だぜ、兄貴！」

よく躲せたな。誇つていいぜ兄貴！ この技を見切ったのは兄貴が初めてだからな！」

「……なんだ、今の？？」

ただのワイヤーじゃない。ワイヤーよりも硬く、切れ味がいい。そんな素材で出来ている。

「ピアノ線……正確にはT N Kだ！ ツイストナノケブラー 兄貴が昔、まだ敵だった『ダイヤモンド銀氷の魔女』にしてやられそうになったモンと同じさ。あの時はアリアが気づいて防いだようだが……懐かしいだろ？」

そう言ったキンゾーの声はイタズラに成功した子供のような笑いを含んでいた。

「そんなことも知ってたんかよ……！ どんだけ俺の事を調べたんだよ。」

やっぱりお前、俺のファンだろ？」

「だから、ゾツとするような事言うんじゃねえよ！ べ、別に兄貴の事が気になつたからとか、兄貴の過去に興味が湧いたから昔のことも全部調べた、とかそんなことはないんだからなっ！」

「……お前からツンデレ族は聞いてもいないことをどうしてそうペラペラ話すんだ？」

「!?? そ、そんなんじやねえよ!」

分かりやすいな、キンゾー。

そんなんじや自分がツンデレだつて認めてるようなモンだぞ?

キンゾーの弱点その①。ツンデレを指摘されると照れる、だな。

だが、今の技はかなり危ねえぞ。

咄嗟に気づいたから躲せたが、視認できない速さでの攻撃だったからな。

『首なしライダーはピアノ線で首を切断した』……そう云った噂によつて今の攻撃が出来るのなら。

かなりやつつかいな相手だぞ。キンゾーを相手にするのは。

今の技は兄さんの『不可視の銃弾』にもひけをとらないくらい速かつたからな。

「兄さんの不可視の銃弾をアレンジしたのか?」

「……そんなんじやねえよ」

キンゾーは否定してるが、あれは間違はなく『不可視の銃弾』だ。

やつつかいだな。『不可視の銃弾』なら攻略できる。あの技の攻略をするなら相手の銃

口の向きを察して、全く同じタイミングで相手の銃口に銃弾を返してやればいい。

だが、キンゾーの『不可視の線系』は糸の出処が全く見えない。

見えないから、返しようがない。

糸が出てから視認するしかないんだ！

『不可視の銃弾』は視認できないくらい速いが、ヒステリアモードの俺なら銃口の角度から大体の狙いは解る。だから銃弾を銃弾で撃ち返せる。

だが、『不可視の線糸』は糸という特性上、近寄れば視認はできるが何処に張られるかは解らない。

だから一歩動けば……ただそれだけの動作をしたが為に糸で首を切断されるかもしれない。

実にやつかない技だ。

身動きが取れない状態にして、相手を倒す。

それは『振り返った相手を確実に抹殺する』、そういった逸話を持つ一之江と俺が相手に散々やってきた戦法と似たようなものだ。

それを今度は自分達がやられている。

動けない！ 動いたら切断されかねない。

「フツ、これで貴様の動きは封じた！ ラインとサード。コイツらなら絶対に躲せない音速での攻撃が可能だ。音速を超える者。2人がかりでなら貴様も防げない……はずだからな。『101番目の百物語』。そして、『罫』ここに敗れたり！」

氷澄が得意げに宣言したが、事実なので何も言えない。

先ほどラインの『音速境界』ライン・ザ・マツハを受け止めたが、あれはラインと一対一の状況だったからできたんだ。2人がかりで音速を超える技を使ってくる奴を受け止める技はない。

「行くぞ、ライン。ソード。『厄災の眼』イーヴルアイ！」

氷澄の青い両眼が光り。

「うぬ、今がチャンスじゃな！　行くぞよ、『音速境界』ライン・ザ・マツハ！」

動きを止められた俺の背後からラインの声が聞こえ。

「じゃあな、兄貴……『流星』メテオ！」

「この桜吹雪　散らせるものならッ！」

俺の真正面からキンゾーが突っ込んできた。

前と後ろからの挟み撃ち！

人間では避けられない。

誰も躲せない。音を超える攻撃。

その音速での挟み撃ち。

それが俺に向けられた。

「散らしてみやがれッ！」

———— パアアアアアアアアアアアン!!??

ズガガガガガガガガガ!!??

(橘花

絶牢

桜……ぐはっ!!?)

ヒステリアモードの超スローで見える視界で、近寄る奴らを見ていた俺は……左右から来た衝撃を受けその打撃エネルギーを受け止めようともがき。

『橘花』を放つことにより、ライン・ザ・マッハ『流星』の打撃エネルギーを受け止めたが……全てを受け止めることはできずに。

あまりに強い衝撃を身体で受けてしまった俺はまるで大型トラックに轢かれたかのように、吹き飛ばされてしまった。

(ぐはっ……体が痛てえ……)

全身に走る痛み。ポタポタと流れていた血は激しさを増し、ドバァー、と吹き出した。それでも痛む体に鞭を打って無理矢理立ち上がろうとしたが。

身体は動かない。

ああ、ヤバイ。

これは長くは持たない。

死んでないのが奇跡と思えるくらい、俺の全身は傷ついていた。

このまま戦っても勝てない。

無駄死にだ。そんなことは解ってる。

賢い奴なら降参していかに自分が不利にならないか、といった交渉をするところだろう。

続けても負ける。

だけどそれがどうした？

勝ち目がない戦いに挑むのはそんなこと、いつものことだ！

俺は『エネイブル 罫』

『不可能を可能にする男』だ！

こんなところで負けてたまるかよ！

そう思うのに、俺の身体は動かない。

このままじゃ負けるのに。

このままじゃ一之江が底ってくれたことも無駄になるのに。

解つてるのに。立ち上がりたいのに。

なのに俺の体は一切の力が入らなかった。

「すっかり観念したか。じゃあ……」

氷澄が片手を上げた、その瞬間。

『スリーピングビューティ
茨姫の檻』!!?』

鋭い声と共に、氷澄に向けて大量の茨の蔦が放たれた。

「っ、増援か!」

『フェアリーガーデン
妖精庭園』!」

聞こえてきた鳴央ちゃんの声と同時に。

俺はさつきも訪れた、妖精の花園に立っていた。

辺りを見回したが、氷澄やライン、キンゾーの姿はない。

鳴央ちゃんが俺と一之江をこの場所に隔離してくれたようだ。

「一之江さん!」

音央が俺の前に倒れている一之江に駆け寄る。ラインの攻撃が直撃した一之江。一体どれくらい酷い怪我をしたのか検討もつかない。

俺にできるのはその姿を見ないように、上を向くことだけだ。

「モンジさん、無事でしたかっ。きゃあ、酷い怪我! 早く手当しないと!」

音央ちゃんは俺の姿を見て悲鳴を上げた。

俺や一之江の側に駆け寄ってきた2人は、慌てて飛び出してきたようで髪形がちよっ

と乱れていた。

「いや、いい。これ以上治すな」

ベルセ気味のレガルメンテでもある俺は普段よりも少し荒い口調で鳴央ちゃんに告げる。

「……モンジさん……?」

強めに言った俺に驚いたのか、鳴央ちゃんは俺の顔を覗き込んだ。

「ごめんよ……助けに来てくれてありがとう。だけど治療は今はいいい」

格好付けて言ってるわけではない。

今の俺の体はボロボロだ。それこそあのまま戦い続けていれば死んでいてもおかしくないくらいに。

『死にかけて』いた。

そう。それはつまり。

俺はなっているということだ。

HSSの派生の一つ。ヒステリア・アゴニザンテ

別名、『死ダイイシに際シマのヒステ

リア』。瀕死の重症を負った男は、死ぬ前に子孫を残す本能がある。これは、その本能を利用して発現させるヒステリアモードだ。

それは————命と引き換えのヒステリアモード。

だが、まだ俺は動ける。

それはきつと。ハーフロアとして、人間よりも生命力とか、基礎体力が大幅に上がっているからだろう。

「つ、モンジさん……」

俺の変化を感じ取ったのか。鳴央ちゃんが息を飲むのが解った。

「音央。一之江のこと、ちゃんと見てやってくれないか？　俺は、一之江の姿を見ることはできないから、さ」

自分でも声が震えてるのが解る。

——音央と鳴央ちゃんが来てくれなかったら、俺はあいつらに負けていた。

ちようどいいタイミングで仲間が現れるなんて、漫画だけだと思っていた。

来てくれなかったら……俺は。

「……ちきしょう……」

大切な女性を守れなかった。

それが何よりも悔しい。

「モンジ……」

「モンジさん……」

悔しかった。どうしようもなく、果てしなく悔しかった。あんなババコンのナルシス

トメガネに負けたこととか、そういうこともあるが。それだけじゃなく。

自分が。一之江に庇われるまで何も出来なかった自分が。

そして……一之江を傷つけさせてしまった自分が。

何よりも肌立たしくて、許せなくて、悔しかった。

「俺は、俺は……一之江や……キリカ……音央や……鳴央ちゃん……みんなの、物語の主
人公なのに……！」

それなのに、助けられてばかりで。何かをしてあげることなんて何もなくて。

今だってそうだ。鳴央ちゃんの『フェアリーガーデン妖精庭園』のおかげで安心して隠れることが出来て

いるから甘えられている。

いくらどんなに強い戦闘力を持っていても。

ヒステリアモードで戦えても。

それでも口アを相手にするには力が足りないんだ。

今のままでは大切な女性すら守れない。

今回の戦いで俺はその程度の人間なのだ、と。

まざまざと思い知らされた。

「あ……えつと……」

何か声をかけようとしてくる鳴央ちゃん。

「……………」

そんな彼女を、首を振って止める音央。

今、優しい言葉をかけられたら俺はそれに甘えてしまうから。

今、厳しい言葉を投げかけたら逆切れしてしまうかもしれないから。

だから、何も言わないでいるのが正解。音央は腐れ縁だけあつて、『俺』のことをよく解っている。

だから今は、それに甘えさせて貰う。

「一之江を頼む、どんな怪我をしてるか解らないけど」

「……………うん、解った、任せて。あんたはどうする？」

音央はいつも通りに接してくれた。

だから俺は、もう見つともないとこは見せられない！

ここで甘えたり、泣きつくのは逃げだ。

逃げるのはいつでもできる。

2人ならそれを許してくれる。

だから、なおさらそれはできない。

2人の物語の主人公として。みんなを物語にした主人公として胸を張っていられる
為に。

俺は逃げない!

「手に入れた情報をキリカに伝えてくるよ」

そう。逃げ場にする為じゃなくて。前へと進む為に。

今、ここにいない仲間には伝達し、対応を相談する。

それが主人公と魔女キリカの関係なんだから。

「解りました。でも、モンジさん」

「うん?」

懐からハンカチを取り出した鳴央ちゃんは。

「せめてこれを」

俺に手渡してくれた。

「……ありがとう、鳴央ちゃんには優しくして貰ってばかりだな」

「音央ちゃんにも、ですよね?」

「ははっ、その通りだ」

わざと明るく笑いながら、ハンカチを受け取った。

そのハンカチが妙に暖かく感じて、何だか泣きそうになってきた。

いかん。こんなところで泣き顔なんて見せられん。

人前で泣くなんて。女性の前で男が泣くなんて見つともないからな。

「それでは、庭園の出口を……キリカさんの家の辺りにしておきますね？」

「別に文句とかつけるつもりもないし、何か言うつもりはないけどさ」

「ああ」

「ちゃんとあんたらしく、立ち直りなさいよね」

「……………」

俺らしく、か……。

「音央、君はやっぱいい女だよ」

「そんなのとづくに解つてたでしょ？」

「ふふっ」

俺と音央のやり取りに、鳴央ちゃんが微笑む。

——そう、これだ。

俺はこんな空気を守る為に、ちゃんと立ち直らないといけないんだ。

今はまだ、とつてつけた『いつも通り』だけど。

それが当たり前の『日常』を取り戻さないといけないんだ。

「任せて！　　つて言いたいところだけど……うん、まあ……もう少し後悔するよ」

「そうね。いっぱい反省して、どん底から這い上がりなさい」

「お待ちしますね」

俺に叱咤激励してくれた音央と鳴央ちゃん。

そんな彼女を見ると改めて思う。

……あの時、頑張つてこの2人を助けてよかった、と。

そんな気持ちだが、悔しさで潰されそうだった俺の一つの糧になる。

今はこの気持ちがあれば、前へと進めそうだ。

「それじゃ、頼む」

「はい」

俺は、この優しい『フェアリーガーデン妖精庭園』から抜け出して。

今は力を失っている『魔女』の元へと向かったのだった。

第十二話。魔女との接触

2010年6月19日3時30分。仁藤家前

キリカの家の前に着いた俺はひとまず彼女に着いたことを知らせる為にメールを打つ。

メールのタイトルは「もしもし、私よ。今、貴女の家の前にいるの」でいいや。しばらく待っていると、キリカから。

「お帰りなさいませ、ご主人様♡　今お風呂だから、少し待っててね♡」という返事が返ってきた。

流石はキリカだ。まさかこう返してくるとは予想外だ。

やるな。『魔女』。

しばらくしてやってきたキリカに連れられてキリカの部屋に入ると。

「こんな時間にお見舞いにくるなんてね！」

ベッドの上でにこやかに、パジャマ姿のキリカは笑いかけてくれた。

……が、顔は俺の方を向いているものの、視線は関係ない場所に向いていたのを俺は見逃せなかった。

「まだ悪いのか、視力」

「あは、ほんとはモンジ君に会うのは遠慮したかったんだけどね。ぜーったい、心配かけちゃうから」

「そりゃあ、心配するだろ」

いつもならここで、モンジっていうな、というツツコミを入れるが今はそんなことを言う気力もなかった。

いや、例え気力があろうがとてもではないがそんなことを言う気にはなれなかっただろう。

何故なら……。

キリカの目は開いていたが、その目は俺を見ていないからだ。

そう。キリカは先の事件。

『チエンジリンク神隠し』を解決する為に『魔術』を使った代償により。

視覚を、失っているのだ。

「ちゃんと治るのか？」

「そりゃもちろん。もうちよつとかかるけど、ね。正直な話をする、鳴央ちゃんをこの世界に人として連れて来るのは大変だった、つてことなの。『入れ替わり』で創られた世界に存在する個体をこちらの世界にも存在として固定するには……とか専門的な話に

なっっちゃうしね」

専門的な用語はよく解らんが……大まかに纏めると。

人の世界と神隠しの世界に存在していた音央や鳴央ちゃんを人間の世界に同時に存在させるにはかなりの力を使う必要があつて……結果、キリカが支払う『代償』も大きくなつた、ということらしい。

「ま、モンジ君の活躍を見られなかったのはちよつと残念かな?」

「残念?」

「だって……モンジ君。瑞江ちゃんがやられてからは君、一人で戦つたんでしょ?」

なんでもお見通しか。

「ああ……」

「そつか。相手は……その感じだと複数人かな?」

メールにはお見舞いに行くとしか書いてなかつたから心配してただけ……心身共にズタボロにされたみたいだね!」

実はキリカにはまだ『蒼^{ブルー}の邪眼』や『ターボ婆さん』、『首なしライダー』のロアに襲われたことは伝えていない。

余計な心配をかけたくなかつたというのもあるが、何よりキリカには自分の口で説明したかつたからだ。

前世のことも含めていろいろと。

「目が見えないのに解つちやうのか……やっぱおつかないな『魔女』は」

「目が見えなくてもメールを書いちゃうくらいの魔女だからね」

そういうば。キリカから普通にメールの返信があつたが、視覚が奪われてるのに、キリカはどうやってメールを読んで返信までしたんだ？

「ちなみに疑問の答えはあちらです」

まるで俺の心を読んだかのようなタイミングでキリカは指差した。

キリカが示した先にはノートパソコンが置かれていた。

「文字を読み上げてくれるソフトっていうのもあるんだよ」

「ハイテクな魔女だなあ、キリカは」

「今の時代に生きる魔女ならこれくらい出来ないとねっ」

うん？ その言い方だと時代と共に魔女も進歩するみたいだな。

あと百年くらい経つたら魔女もロボットとかを使い魔にするのかもしれないな、などと考えていると。

「モンジ君、というわけで目が見えないから、そばに座つてくれる？」

ポンポン、とベッドを叩かれて。

ヒステリア性の血流が高まる中、俺はキリカが腰かけるベッドの隣に座る。

「ふふっ。ごめんねー！」

そしてそのまま手を握られた。

ドキドキと脈は速くなり、ヒステリア性の血流は高まる。

「お、脈も速くなつたね。つまり私は脈アリかな？」

「ふっ、キリカみたいな可愛い女の子が近くにいるんだ。ドキドキしないわけないだろう？」

「あはっ、相変わらず嬉しいこと言ってくれるよね、モンジ君ってば」

ぎゅぎゅつと、何度も手を握ってくるたびにドキドキして、血流の流れは速くなる。

「なるほど。いっぱいこの手を握り締めたいだね。よっぽど悔しかったのに、周りに八つ当たりしないでここに來れたんだ？」

「……八つ当たりするものがなかったからな。氷澄やジーサードの写真やビラとかが街中に貼られていたらナイフでズタズタに切り裂いていたさ……きつと」

「なるほど。なるほど。冷静に見えて内心はかなり怒ってるんだね。特に……自分自身に対して」

「手を握っただけでそこまで見抜くってどうなんだよ」

呆れたように言うときリカは『魔女』だからね！』の一言で済ませた。

魔女だから、で済ませていいのだろうか？

「だってたら人間離れした技をやっちゃった後はこれからは俺も『エネイブル 罎』だからで済ませようかな？」

「とそんなことを思っていると。」

「で、悔しかつたんでしょ？」

ズバツと本題に入られた。

「……まあ、な」

俺はキリカに相手のロアの特徴を全て話した。

『ブルーアイズ 蒼の邪眼』、『ターボ婆さん』、『首なしライダー』の俺が知る限りの情報を全て。

「あいつら、悔しいけどちゃんと『主人公』と『仲間のロア』してたんだよ。技も連携みたいのしている」

もつとも俺が解つたのは音速を超えたり、見えないワイヤーを張るくらいとかで、技の詳細とかは全く解らなかつたけど。

「それが羨ましかつた？」

「……ああ。同じ『主人公』なのに、仲間と一緒に戦えてるのが羨ましくて……悔しかつた」

前世でも俺は強敵と死闘を繰り返してきたが、あれだつて周りに仲間がいたから戦えたんだ。自分一人だけでは俺は勝てなかつた。多くの人に支えられて、あるいは俺が支

えて。

俺達『バスカービル』は強敵との死闘に打ち勝ってきた。

そう。俺は多くの仲間と共に戦ってきたんだ。

『仲間を信じ、仲間を助ける』

武偵憲章にもなってる言葉だが、俺は今までたくさんの方に支えられて、助けられて、助けて。あるいは信じて、戦ってきた。

それは一文字疾風として過ぐす今でも変わらない。

仲間と共に戦いたい。

そう思っているのに。

一緒に戦いたい……そう思っているから。

「だから、何も出来ずに一之江に庇われた自分に腹が立つ」

ヒステリアモードじゃないから、っていう言い訳はもうしたくない。

ヒステリアモードじゃないから。普通のハーフロアだから、だから……一之江を守れない。

そんなことはもう、言いたくねえ！

「俺は自分の口ア。『不可能^エを可能^ネにする男^イ』の能力に目覚めてるけど、今回は使う間もなかった。『自由自在に能力が使えない主人公』……そんなことをあいつに、氷澄って奴

に言われて悔しかったんだ！」

ヒステリアモードになれなければなにもできない自分に。

ヒステリアモードになってもやられそうになった自分に。

そんな自分に腹がたつ！

なにもできない悔しさ。

あんな想いは二度と経験したくないものだ。

「それに、あつちの『主人公』……氷澄やジーソードも特別な力を持っていた。あのまま戦っていても、今の俺のままじゃ勝てないだろうな、って」

「そうだね。彼らは結構この業界じゃ有名な『主人公狩り』だしね」

「主人公……狩り？」

「うん、モンジ君の前の百物語の主人公のうち、何人かが彼らにやられてるみたいだよ？」

「……先輩の仇だったのか」

「殺してはいないみたいだけど。脱落させられていたのは確かだね」

殺してはいない、か。確かに氷澄と呼ばれた男はスカした奴だったが、悪人には見えなかつたな。

うちの弟
キンゾーは相変わらずのヤンキーだったけど。

ラインとのやり取りも何処か……俺と一之江の関係に似ていたし。

『ターボ婆さんの』のロアが、ロリババアになっていたー、つてのも時代の流れかな？』
「そういう需要があるらしいからな」

しかし包帯ゴスロリ少女の見た目で中身婆さんとはこれ如何に？

でも、まあ。相方の氷澄は『邪眼』という如何にも中学二年生が好きそうな属性を持っているから……ある意味お似合いな二人なのかもな。

「それで、どんな風に二人はやつつけられちゃったの？」

キリカの問いかけに、胸が苦しくなる。

あの時の光景が脳内で再生されるからだ。

だけどキリカに伝ええないというのは、それこそ意味がなくなってしまう。

「氷澄。あいつが、えーと……『イーヴルアイ』っていう技を使って、その直後に世界が青と黒のモノトーンカラーみたいになって」

「うんうん。『厄災の眼』だね」

「そういえばそんな技名を叫んでいたな。えーと、それからラインが離れた位置から『ライン・ザ・マツハ』っていう技を使ってきて、ズカガガガツて物凄い音が響いてだな……」

『音速境界』。ターボな老人系が持つ割とベタな技だね」

ベタな技なのか？

ま、俺やキンゾーのように生身で音速を超える人間もいるから……ベタなのかもな。

「物凄いスピードで、動くことで、ソニックブームを巻き起こしているんなものをズスタズタに引き裂いちやう技なの」

「ソニックブーム？」

「空気がぶわつと動いて、すんごい風が起きるみたいなものかな。でも本来ならそれは辺り一面……それこそ氷澄君ごと吹き飛ばしてしまうはずのもの。だけど彼は、

『厄災の眼』^{イーヴルアイ}でモンジ君と、瑞江ちゃんだけが受けるように呪いをかけた」

呪い？

……そういえば。

『音速境界！』^{ライン・ザ・マツハ}

『厄災の眼！』^{イーヴルアイ}

戦いの最中では気にしなかったが。

ラインが技を放つ時に決まって氷澄は『厄災の眼』^{イーヴルアイ}を使っていた。

それだけじゃない。

『ほう。二人にかかるはずの厄災を……一人で肩代わりしたというのか』

そんなことを言っていた。

つまり一之江は、俺が受けるはずだったダメージまでもを一人で受けてしまった、というわけか。

「……………、そう……………」

悔しさが込み上げてくる。

キリカの手間、抑えておきたかったが抑えられない気持ち言葉として出てしまう。

「今日はいろいろあったんだね、モンジ君。

身体の方も酷い傷だね。ちよつと待ってね」

俺に優しく告げるとキリカは。

そのおでこを右肩に当てるようにして、もたれかかってきた。

まるで慰めてくれるような仕草だったが……………。

「……………キリカ」

肩がやたらと熱い。

「うん、結構熱もあるんだよね」

キリカをよくよく見ると、汗がうっすらと浮んでいる。

「悪い、こんな状態の時に」

「ううん、モンジ君。私なら大丈夫だよ。モンジ君にこうしてるだけで落ち着くから平気。ごめんね、普通にお話し聞いたり、治してあげられなくて」

その言葉に胸が締め付けられる。

キリカに相談しに来たが。

そのキリカは、まだ人に会えるような状態ではなかったのだ。

「悪いキリカ」

俺はやっぱり自分の力でなんとかしようと思ひ、立ち上がろうとして……！
ぎゅっ。

その手をキリカにしつかり握られて、動けなくなった。

「キリカ……？」

「弱ってる時に、人恋しくなるのは、私も一緒だよ」

……人恋しい。そう聞くと。

キリカの側にもつといたくなつた。

「すまん。俺で良ければ一緒にいてやるからな」

「あは。うん……本当はこうやって、魔女の私にも優しくしてくれるモンジ君がいる、それだけで君には価値があるのにな」

キリカはそう言いながらも、自分の体を動かして俺を間近で見つめるように至近距離に顔を近づけた。

「そんなの……」

そんなのは何にもならない。

ただそこにいるだけじゃ、誰も救えない。

俺にはキリカが言うような価値があるとは思えない。

「瑞江ちゃんにしてもそう。君は相手がどんなにおつかない存在であろうと、いつも通りモンジ君のまま接してくれる。何があっても、君は君のままだから。だから嬉しいんだよ、私たちは。音央ちゃんも鳴央ちゃんもそうじゃないかな？」

キリカの顔が近づいてくる。

「そんなことはない。俺は器用じゃないから器用に態度を変えて接するのが苦手なだけ」

おでことおでこがぶつかりそうになるくらいまで近寄り。

離れようとしたが……。

「ふふつ、なるほど。なるほど。確かにあつちの君はそうかもね。でも今の君なら違うでしょ？」

ねつ、『エネイフル 呪』の遠山金次君？」

しつかり握られた手は離れない。

コッソッソ！

キリカのおでこと俺のおでこがぶつかり。

キリカの体温が伝わってきた。

かなり熱いな、と思っただその時。

俺は頭の中が突然痛くなった。

それと同時に、ポケットに入れていたDフォンが赤く、熱く発光している。

ヤバいと思い身体を動かそうとしたが……動けなかった。

「ふふふつ、油断したね。モンジ君」

キリカはそのまま俺に近づき……。

第十三話。魔女の誘惑

えっ、と思った時にはすでに遅く。

キリカの唇が俺の唇

の横、頬にあたる。

頬に当たってしまった。

そう。

俺がほんのちよつと、ほんのちよつと動けば唇に当たってしまった。

「ふふっ、魔女のキスは……とても熱いんだよ……うっ」

境山の電話ボックスの中でも言われた言葉がキリカの口から囁かれる。

頬から伝わるキリカの体温を感じてドクドクとヒステリア性の血流が高まる。

それと同時に不思議な事に俺の体中にあつた傷が消えていく。

「モンジ君を捕まえ」 た♡

にこやかに笑うキリカだが。

その声にはいつもの余裕が感じられない。

キリカから感じる体温が高いせいだろうか。

「本当ならもう少し物語を集めてから聞こうかなー、なーんて思っていたんだけど……」

うん、これも運命なのかもね。

ふー、なんだか緊張するねえ」

キリカは溜息を吐く。

溜息を吐き終えるとキリカはそのおでこを俺の右肩にあてるように、もたれかかってきた。

美少女に寄りかかりられる。

側から見たら美少女を誑かしているような姿だが。

そんな雰囲気にはなれなかった。

何故なら……

「モンジ君……君は本当はだあれ？」

キリカは彼女自身のロアでもある『魔女』ロア強いの魔術を使つて俺とキリカを囲むように赤い虫を顕現させていたからだ。

「ちよ、キリカお前……その虫達はなんだ？」

「ふふつ、可愛い可愛い用心棒兼浮気男を断罪する処刑人かなー？」

周りを囲む赤い虫達はキリカが呼びかければ何時でも俺を襲える、そう言うことなんだろう。

というか、浮気男つて俺のことか？

「もうっ！ 私か熱出して休んでいるのに音央ちゃんや鳴央ちゃん、瑞江ちゃんに穂先輩ともイチャイチャしてー、ズルい！ 私ももつとモンジ君とイチャイチャしたいのにー」

「それは誤解だよ！ 俺は誰ともイチャイチャしてない。俺が今気にしてるのはいつだってキリカ、君だけだ！」

頬を膨らませて怒るキリカの姿も可愛い。

一之江や音央、鳴央ちゃんとはまた違った可愛いさがある。

なんとというか妖憐な、怪しい雰囲気の中で醸し出す美しさがある。

それがキリカにまたあう。

まあ、そういった雰囲気キリカにあうのは当然だけだな。

なんてたってキリカは『魔女』だからな。一之江曰く、魔女は信用してはいけない。だから誰かが常にその動向に注意しないとイケないと言っているが、俺がキリカを気にかけてるのはそれが理由じゃない。

確かにキリカは……魔女の言葉は信用できない。『魔女の口車』に乗れば痛い目に遭う。それは既に俺自身が身を以て経験していることだ。

だけど……魔女だから、とか。ロアだから……とか。そんなことは俺はどうでもいい。

キリカみたいな可愛い女の子が俺を頼ってくれる。笑いかけてくれる、それだけでいい。

少なくとも、こっちの俺は。

「むう、なんか誤魔化された気もするけど、まあいいや。

で、君の本当の名前は遠山金次君であつてゐるのかな？」

「その質問に答える前に聞かせてくれ！ キリカはいつから解つていたんだ？」

俺が……その……ただの一字じやないってことに……」

『神隠し』を調べに音央ちゃんが通つていた小学校に行つた時にね。

ある人が教えてくれたんだよ。君がモンジ君じやなく、『人間を辞めた人間』、俗にい

う……『逸般人』って呼ばれていた人だつてことを」

「おい、ちよつと待て！ 誰だそんなこと言つた奴は!!? 違うからな！ 俺は

れつきとしたただの普通の人間だから!!?」

「あはは、モンジ君。そんなこと今叫んでも残念ながらも遅いよー？」

君、既にハーフロアになつてゐるし。『主人公』なんていうロアの世界の肩書きを持つて

るからね」

キリカの言葉に俺のハートは撃ち抜かれた。

いい意味ではなく。俺の精神をぶち壊すかのような言葉の矢がグサグサと突き刺

さる。

なんとというか、先程までのキリカとの甘い時間の幻から急に現実に戻された感じだ。ズーンと落ち込んだ俺を慰めるかのように、キリカは自分の頭を俺の右肩に載せたまま、垂れかかっていた。

「そのある人が言っていたけどね、君なら大丈夫だって言っていたよ。だから……私も君を信じるよ」

「信用してるんだな、其奴のこと。其奴は俺の知り合いか？」

「うん。彼は信用できるよ。何故なら、彼の推理は外れたことはないからね。それに君と因縁があるって言っていたよ。私達ロアの間でも彼は有名な存在で、彼は『世界最高の主人公』。『千以上の都市伝説を体験したモノ』に送られる『どんな伝説でも消せない者』の称号『FOAF』をこの世界でただ一人持っている存在で、本名はかなり有名なロアそのものだったけど。」

彼と出会った人々は私も含めてこう呼んでいたよ。『教授』とね」
プロフェッショナル
 教授 ㄷ?」

その名を忘れるはずがない。
プロフェッショナル
 教授

それはかつて俺とアリアが乗り込んだ原子力潜水艦。

伊・Uにいた世界最高の名探偵が名乗っていた名と同じものだ。

……彼奴がこの世界にいやがる!!??

「何処だ? シャーロック・ホームズ……彼奴は今、何処にいる!!?」

この世界で出会ったが100年目だ!

逮捕してやる!

とベルセ気味のヒス^レテリア^ガモードの俺が意気込んだものの。

「わあ、落ち着いてモンジ君!!?」 今この町にいないし、居場所も知らないよ。

彼は神出鬼没だから。突然現れて、突然消える……『魔女』の私でも追跡は困難なんだよ」

キリカにしがみつかれて動けなかった。

まただ。さつきもそうだったが急に体が動けなくなる。

これは……もしかして?

と、そんな俺の肩に頭を載せていたキリカはゆっくり離れると。

動けない俺のおでこにキリカは自身の右手で触れた。

まるで頭をそつと撫でるかのように。

その瞬間。

リイイイイインと不思議な音が鳴り響き。

俺は頭の中から何かを抜き取られるかのような不思議な体験をした。

「……………やっぱりね」

キリカは呟くと。ゆっくりと俺の頭から手を離した。

キリカが離れた途端、どっと疲れが出てきた。

(なんだ、今……………の?)

昔これと似たような場面見たなー、アニメで。

龍が出る球を探すアニメで、とある惑星の最長老様に頭を触られたら、坊主頭の青年の戦闘力が大幅にUPするとかってやつ。

「どう? 少しは落ち着いたかな?」

「あ、すまん。少し興奮し過ぎたな……………で、今何をしたんだ?」

「ちよつと見させて貰ったよ。君と彼の間で何があったのかを。」

君がどういった人生を歩んできたのかを」

「……………それはおつかないな。魔女ってみんなそんなことができるのか?」

「私は特別な魔女だからね。『ロア喰い』だから人の記憶とか、ロアとかの物語に干渉できるとだよ」

そういえばキリカは人やロアの記憶とかに干渉できるんだよな。すっかり忘れたたけどキリカは……………トンデモない能力持ってるな。

「あー、なるほどな。見られちゃったのか……悪いな今まで黙っていて。気持ち悪いだろ？」 本当の一字句じやないのに、彼奴のフリをしてた奴が側にいて」

「ううん。さつきも言ったでしょ？ 君は何があつても君のまままでいてくれる。だから、そんなこと言わないで！」

今の君でも……ううん、今の君だからこそ、私たちは救われたんだよ？

驚いたのは確かだけどね。

まさか彼と君との間でそんな因縁があつたなんて思わなかつたから……でも、そっか。

ようやく解つたよ。教プロフェッショナル授が君なら大丈夫だつて言つた意味が」

「うん？ シャーロックの奴、キリカに何か言つたのか？」

「ふふつ、それは秘密だよ？ 女の子と紳士との二人だけの秘密♡。」

あ、でも安心して？ わたしはモンジ君一筋だから♡」
秘密か。秘密なら仕方ない……かな。

「話を戻すけど、私は君に変わつてほしくない。今以上に強い力を手に入れてしまったら、君が君じゃなくなつてしまふかもしれないから。それは嫌だな、つて思う」

キリカは笑みを浮かべててそう告げてきたが。

だが、やはり。熱があるせいかな、キリカにはいつもの余裕がない気がする。

「だけど……だからこそ、本心からそう思っている、という想いが伝わってくる。

「本当は私や瑞江ちゃん、君が後悔しないくらい上手くやれていれば良かったのにね。きつと瑞江ちゃんも……そこが悔しいんじゃないかな」

「あいつが？」

「ふふつ、きつと、ね」

いつも無表情で毒付いている一之江。

だが、そんな彼女がラインから俺を庇つたのを思い出し。

胸がぎゅううう、と苦しくなった。

「バカだな、君も彼女も」

だから俺はそんなキリカの手を握り返して言つてやった。

「あんなおつかない目に遭いまくつて……呪いの人形に追いかけられたり、蟲に食べられそうになったり、村人に殺されかけたり、神隠しで消えそうになったりしたのに。それでも、俺は俺のままだろ？」

口にしてみると、相変わらず俺は濃い日常を送っているな。

普通の人が体験できない日々を過ごしてるその事実を澁々受けいれようと溜息を吐くと。

「あ……ふふ、そうだね」

俺と過ごした日常を思い出したのかキリカが笑った。

「そうだろう？　それで今さら、どう変わるって言うんだ。それに……そうだなあ。仮に俺が強くなったとして『ヒヤッハー』とか言つて暴れたとしてもさ」

キリカのその細くて熱い指を握りながら、爪を撫でつつ。

「それこそそんな怖い目に遭わせた四人が『調子に乗るな』って嗜めてくれるに違いないからな。それに俺が俺じゃなくなつてもみんななら俺を取り戻そうとするだろう？

　　「なんだって俺の仲間たちはさ……」

「そうだね。みんな一級品の都市伝説だもんね」

「そう。だから、約束するよ。今後何があつたって俺は変わらない。いつも通り、ネグラで、バカで時たま女の子を口説いたりするかもしれないけど、だけど何があつても俺は……俺達は俺の物語たちを大事にするさ」

「ふふっ……はあ……」

俺の言葉が伝わったのか、キリカは安心したように溜息を吐いた。

キリカが吐いた溜息が肩にかかつて、その熱さを感じる。

「ごめんなキリカ、無理させて。おかげでなんとかやっつけていけそうな気になつたよ」
「なんとかやっつけていく為の相談だったの？」

俺をキリカは熱っぽい視線で見上げてくる。

その目は見えていないはずなのに、真つ直ぐ俺の目を捉えていた。

「つてきり、モンジ君は……『蒼の邪眼』^{ブルーアイズ}や『境山のターボロリババ』。

……それに、『夜霞の首なしライダー』^{デユラ}の倒し方を聞きに来たんだと思つていたのに。モンジ君自身をさらに強くする方法とか」

「キリカ？」

それはどういう意味だ、と聞こうとしたところで。

「出来るよ。さつきから言つてるでしょ？ 強くなつたとして、君が変わつちやう

のが怖いだけ、つて」

キリカは真つ直ぐに俺を見つめて、そう告げた。

「そして、君は変わらないでいてくれるつて約束してくれだ。だったら……君がちゃん
と百物語の『主人公』になる方法を教えてもいいかもしれないな、つて思うけど……」

キリカの目は熱さのせいか、潤んでいた。

そんな熱い視線で見つめられると、ドキドキしてしまう。

「……キスしてくれたら……教えてあげるつて言つたら……どうする？」

キリカがそう囁いた瞬間。

もの凄い勢いで血流が速くなる。

「見えないから。もつとモンジ君を感じたいの」

「それが君が望むことなら、喜んで」

「うん、キスされたら……早く良くなるかもしれないから」

俺はキリカの体を強く抱き締めた。

至近距離でキリカの顔を見つめると。

キリカの瞳はじつ、と俺を捉えていた。

口は本当にすぐそこにある。俺少し姿勢を変えるだけで……出てしまう。

その唇からちらりと見える、赤い舌が妙に艶かしく感じる。

あのふつくらとした唇と唇を重ねて、あの舌に……。

キリカの全てが欲しい。

そんな情欲が膨らむ。

「……初めてだから……優しくね？」

キリカがして欲しいと言ってきた。

今の俺はヒステリアモード。

それも女を奪うベルセと、自分の女としてキリカを見てしまうレガルメンテの状態だ。

普段のヒステリアモードより悪い意味での積極的な状態だ。

それにキリカみたいな美少女からお願いされたら、断るなんてそんなことはキリカの

男として出来ない。

覚悟を決めろ、遠山金次！

据え膳食わぬばなんたら……とも言うじやないか！

というか、今すぐ俺と変われー！ リア充爆破しろー！

そんな俺の中のもう一人の俺。一文字疾風の声が聞こえたような気がして。

俺はキリカを元気にする為ならと、目を閉じて、顔を近づけ。

……本当にいいのか？

……キリカの本当の気持ちなのか？

……『彼女』を傷つけてもいいのか？

何故だか、俺の脳内に。

悲しそうな顔をしたアリアと。

よく知る少女の姿が鮮明に映った。

常に俺の背後を守ってくれる存在で。

無表情で毒舌だが、本当は誰よりも優しく、強い少女。

そんな『彼女』の悲しそうな顔を思い浮かべてしまい……。

『女性を悲しませて……いいわけあるかあああああ!!?』

ハッと、我に返った俺は。

「キリカ、もしキリカとキスをするなら……俺は君とちゃんとした恋人関係になつてからしたい」

ギリギリの状態で理性を保つて。

そして、キリカのそのおでこにキスをした。

「わっ」

「だから、ごめんよ……」

「モンジ君ってばっ！」

「ん？」

いきなり元気になったキリカの声に俺はきよとんとした顔をしてしまった。

「私を恋人にする可能性もあるんだね！」

「え？　　あ……」

指摘されて気づいた。

確かに今の発言だとそうなる……のか？

「ひゃー！　　ビックリした！　　体だけの女じゃなくて、そんな大事にされるかもし

れないとはー！」

ビックリしたのは俺もだ。

「体だけの女で、お前な」

キリカが俺をどう思っているのか今の返事でよく解ったよ。

「にやるほどにやるほど、モンジ君ってばほんつと誘惑に弱いよね！　　そつかあ、詩穂

先輩以外の子も恋人にするつもりがあつたんだあー。へえー」

キリカは何故だか嬉しそうにニヤニヤしている。

そんなキリカを見ていると、何だか罪悪感が湧いてしまう。

ヒステリアモードだからといって、女の子の唇を奪おうとしたのは事実だからな。制御出来たのはハッキリいって偶々だ。

一歩間違えばキス以上の行為に及んでいたかもしれない。

女性の大切な唇だ。ノリや勢いだけでしてはいけないよな？

「あ、いや、なんつうか……その」

罪悪感でキリカの顔をまともに見れない。

だけど、自分でした行為だ。責任は取らないといけない。

「誘惑に弱いのは、男の本能だから仕方ないんだよ！

だけど……まあ、その。キリカのおでこにキス出来ただけで俺は嬉しいよ」

「ふふーん、なるほどねえー。くすくすっ」

キリカはすっかり、さっきまでのしっとりとした雰囲気とはうって変わって。

面白いものを見つけた小悪魔。そんな表現がピッタリな顔をしていた。

「んふふー。もつと誘惑しちやおうかな？」

今以上の誘惑だと!??

想像しただけでヒステリア性の血流が速くなる。

「うぐっ、か、勘弁してくれ……」

「実は、今、上に下着着けてないんだよ、私」

な、なんだって……！！？

第十四話。魔女のアドバイス

「ずっと寝てるだけだし。きついから外してるの。だから……ほら」

チラリと、キリカはパジャマから覗く豊かな胸元をチラ見せしてきた。

そこはちよつと汗ばんでいるせいかな、妙に輝いていて。

「……ねえ、モンジ君。私、いっぱい汗かいたやつた。汗、拭いてくれる……?」

キリカが覗かせている胸元。そこには当然のように戦艦級のお胸様が存在しているわけ。

そこの汗を拭いて欲しい……だとうううう!!?

ちよ、ちよつと待て。落ち着け俺!

これは罠だ! 魔女の口車に乗ったら駄目だ!

そう思うのに、体は正直なもので。

俺の目は、その胸元。谷間を流れる汗のしずくをガン見してしまった。

ゴクリ。

「キ、キリカさん、ええと。その……」

ヤバい。何がヤバいって。

今の俺はヒステリアモード。

基本的に女性の頼みは断りにくくなっている。

だからキリカから胸元を拭いて欲しいと、『お願い』されてしまったら。当然断るという選択肢はないわけで。

「いいんだな？」

キリカに同意を求めると。

「うん。優しくして……ね？」

キリカは恥ずかしそうな顔をしながらも同意した。

腰掛けていたベッド近くにある机。その上に置いてあったタオルを桶

これも机の上に置いてあった———の中にあつたお湯で濡らし、よく絞る。

そして。

キリカの胸元へゆっくりと近づいていき。

その胸元を直視しないように目を瞑って拭こうとして。

「ひゃあんー！」

キリカの喘ぎ声と。

ふにゆんと、柔らかい感触を掌に感じる。

これは……もしかして？

「やあん……モンジ君のエッチ」

うおおおお！ 知らなかった。女性の胸って布越してもこんなに柔らかいものなんだな。

掌の中に感じるふるんふるんという感触を堪能しつつ。

俺は俺の中を駆け巡る血の巡りを感じていた。

ドクドクドクドク、通常時と比べあきらかに早く血が巡り。

その血流によつて俺の思考力はより高まる！

そして。ヒステリア・アゴニザンテが強制的に解除されているのが解る。

ああ。そうか。やってくれたな……キリカの奴。

「ふふっ、どうモンジ君？ 体の調子は良くなった？」

キリカの言葉通り。

俺の体にあつた傷はすっかり癒えていた。

いつの間に……という思いが湧いたが。

思い当たる節はあつた。

最初にキリカが口付けした時。

思えばあの時から体が軽くなっていた。

『魔女のキスはとても熱い』……それはこういう事か」

『キスは癒しを与える』。

これは遙か昔から語られる逸話で。

『眠り姫』などの童話でも登場している。

まあ、『眠り姫』の場合は『魔女』の呪いや毒から脱する手段として描かれているが。そして。そんな逸話を利用した目の前の少女。キリカは『魔女』のロアだ。

魔女とのキスは様々な憶測を呼ぶ。

曰く。

魔女とキスしたらどうなるか分からない。

魔女にキスされると、魔女の眷属になる。

眷属となった者には魔女の魔力が与えられる。

などなど……。

そういった逸話を多く持つ『魔女』ならではの治療法。

「身体的接触。そして……精神的感応。それが私たち『魔女』の回復手段だから、ね！
だから、私と『契約』しているモンジ君にもそれは当てはまるんだよ。

だけどそれは本当なら大変なこと。傷を癒すにも『代償』とかがいるんだけど……何故かな。君といると私の力が増大して治療も簡単に出来たよ。君からは何かロアの力を増幅させるパワーとか、エナジーとかが出てるのかもね？」

「主人公補正って奴かな」とキリカはクスクス笑いながら告げる。

主人公補正はともかく。キリカの言葉を要約すると。

つまり。魔女と『契約』しているから体を接触させれば接触させるだけ回復が早くなる。

そういう『繋がり』が俺とキリカにはある、というわけか。

キリカは俺が離れた胸に手を当てて笑うと。

「でも……ぶつ、あはは！　モンジ君ってば、ほんつとちよろいよね！」

笑いながらそんなことを告げた。

ちよろいという自覚ならある。

「仕方ないだろ！　キリカみたいな美少女に誘惑されたら仕方ないんだ」

ヒステリアモードのせい、というのもあるがキリカみたいな美少女に誘惑されて断る

男なんているのだろうか？

普段の俺ならば断っているが……

ヒステリアモードの俺には無理だ！

「んもう、お風呂だつて見たくせに」

「実は詳しく覚えていないんだよ、あの時のこと」

背後から一之江の声が聞こえたと思ったら。

突然真つ暗闇になつて。

背中をグサリッ！ だったからな。

「あれれ、そうなんだ？」

「ああ。一之江にザックリやられて記憶が飛んだんだ」

あの時は目にシャンプーをかけられた痛みと背中を刃物で刺された痛みでじつくり見る余裕なんてなかったからな。

「へええ。私はモンジ君になら見られてもよかつたのにね」

そんなキリカの言葉にドキバクするが。一之江の名前を口に出すと、さっきの光景

一之江が俺を庇つて倒された場面

が思い浮かんでしまい、その

せいか冷静さを取り戻す。

「で、だな、キリカ」

「うん、そうだね、おでこはいえキスしてくれたし。胸まで拭いてくれたし……」

キリカはふう、と一息吐くと。

「私が教えられるのは、多分きつかけの考え方だけだと思う」

「きつかけの考え方？」

「そ。こういう方向で考えていけば、きつかけを掴めるよ、っていう方法。なんでかかっていうと、それって私たちロアなら当たり前前に使えるものだし。ハーフロアになっちゃつ

た子も、無意識のうちに使えるようになるものなんだよね」

「ふむ……」

キリカの言葉に俺は思考を巡らせる。

ロアなら当たり前に出来て、ハーフロアでも無意識に出来る方法。

抽象的でもうにも要領が得ない判りにくい説明だが。

その方法には心当たりがある。

「それってキリカと戦った時にキリカが言っていたやり方か？ ええつと、イメージ

をして『作家さんみたいに物語を描く』……そんな感じだったよな？」

「うん。あの時はまだ君を食べようと思ってたし。まさか君が自力でハーフロアになる

なんて思っていなかったから……だから私は教えただけど」

「君を絶望させてから食べる為だね」と如何にも魔女らしい邪悪な笑みを浮かべるキリ

カ。

その笑みを見た俺はホッとす。

あの時。『不可能を可能にする男』の能力に目覚めてよかった、と心から思う。

「あの時もちよつこと言っただけ……あのね、モンジ君の物語は何か、つて話

なの」

「……俺の物語？」

「そ。例えばモンジ君が『主人公』を描くとしたら、『メリーさんの人形』というタイトルだったら、どんなお話にする？

『魔女喰いの魔女』は？ 『神隠し』は？」

俺が『主人公』を描くとしたら。

「俺自身が『主人公』だったんじゃないんだな？」

「うん。モンジ君が描くの。作家さんみたいにね」

作家か。偏差値が低い武偵高でも成績が良くなかった俺の国語力で物語を描かないといけないのはいささかというか……かなりハードルが高いのだが。

……でも、何故だろう。

キリカのアドバイスが、ストンと心の中に落ち着いた。

「それと……これはもしかしたら……だけど。君が『百物語』の力で戦えないのはそのDフォンの真の持ち主じゃないからかもしれない。

あくまで推測だけど、君に与えられたDフォンは君専用の『不可能を可能にする男』のDフォンだけで。

『百物語』の主人公に選ばれた本当のモンジ君にしか、『百物語』専用のDフォンは使えないのかもしれない。

もしそうだったら……君は『不可能を可能にする男』の能力だけで他の『ロア』や『主

人公』を倒さないといけなくなる」

まあ、普通は主人公でも一つの物語しか持たないはずなんだけどねー、とキリカは告げた。

「特別扱いされてるんだな……俺は」

『はい。これはお兄さんの『Dフォン』だよ』

そう言つて、Dフォンを手渡したヤシロちゃんを思い浮かべる。

『そう。運命を導く為の。そして運命から身を守る為のお兄さんだけの端末。だから

……持つておいた方がいいよ』

ヤシロちゃんの言葉通りに俺はDフォンを手に入れた時から運命に導かれて。

そして、運命ロアから身を守ってきた。

だがあの時俺はまだ目覚めたばかりで。

キリカはおろか、誰にも自身に起きた問題を話せずにした……のに。

『だつてお兄さん、一人じゃないでしょ？』

ヤシロちゃんは確かそう言つていた。

あの時は周りに誰もいない状況で。俺一人だったから人違いとは考えにくい。

それなのに……ヤシロちゃんはすでに俺が本当の一字疾風じゃないと解つていた

？

混乱しそうになつた俺にキリカは優しく告げる。

「さつきも言つたけど、本当は私も瑞江ちゃんも君に『ハーフロア』になつてほしくない。出来ることなら君には変わつてほしくない。」

それが私達の想い。君に教えた方法は、『ロア』にする方法。モンジ君は今まで、ずっとただの……とはいえない、かなりおかしな人間だつたけど「それはどういう意味かな、キリカ?」、これからはモンジ君自身も『ロア』になれる、完全な『ハーフロア』になつてしまう方法。

だから……よく考えて」

「ああ……解つた」

キリカは変わつてほしくないと言つてゐるし、一之江も変わつてほしくないと思つてゐるといふ想いを聞いた。俺だつて出来ればそんな力に頼りたくない。普通の一般人として普通に生きる。そういう想いもある。

だが、本当に悔しかったんだ。

そして、本当に怖かつたのだ。

自分の命の恐怖や痛みに対する恐怖は確かにあるが。それよりも……

仲間を、大切な人を失う恐怖は、二度とごめんだ。

それはかつて、カナ……兄さんを失つたと思つていた時にも感じていたが。

俺は、俺が大切に想っている人が傷ついたら黙ってジツとなんかしてられない。

ましてや、自分のせいで大切な人を失うかもしれない恐怖は二度と味わいたくない。そう。怖いのだ。

怖いから頑張れる。

強い力を手に入れて、世界征服とかしたいわけじゃない。

弱いから。俺は弱いから勇気を出して、自分に出来ることをしたいだけだ。

だから、俺は。

「キリカ、俺はちゃんとキリカも、一之江も、音央も鳴央ちゃんも。……俺に関わるみんなのことを考えて、決断するよ」

「そっか……やっぱり君にはあるんだね。主人公になる『覚悟』が」

主人公になる覚悟。

その言葉もキリカと戦った時にすでに告げられていた言葉だ。

そして、嬉しそうに頷くと俺に抱き着いてきた。

熱っぽい体でぎゅつと締め付けてきた。

「あの時のことを思い出して。君が初めて『ハーフロア』として目覚めたあの時を……」

あの時は無我夢中だったが。戦いの中で明確に俺冊という物語をイメージして。

そして……俺自身の物語。『エネイタル 罫』のハーフロアが浮かんだ。

そうだ！ あの時……。

「なんか、見えた気がするよ、キリカ」

「うん。じゃあ、後は考えるだけだよ、モンジ君」

キリカは握っていた俺の手を自分の口元まで持つてくると。

「モンジ君が『百物語』の『主人公』になったら、もつと美味しくなるんだろうなあ」

そのまま、俺の手を。

「かぶっ」と可愛く甘噛みした。

「うおっ」

甘噛みされて感じるのは熱い吐息と。歯の固いけどむず痒いような感触と。

ぺろっ。

「わわっ！！？」

さらには熱い感触まで感じて、ヒステリアモードの俺はもう堪らなくなってきた。

「んっ……ふふ、味見完了」

ちゅぱ、ちゅぱ、なんてやらしい音を残してキリカが俺の手から口を離す。

「キ、キリカさんや」

「んにゃ？」

「この誘惑はエスカレートしていくと、どんなトコまで行くのでしょうか？」

「んふふ。モンジ君が望めばいくらでも、だよ?」

ペロ、と艶めかしい舌を見せるキリカに、俺の頭は沸騰寸前だ。

「でも、今日はここまで」

「……危なかった。もう少しで理性を失うところだったよ」

「あはは、うん。せつかくだもん、そんなモンジ君の顔もみたいしね?」

キリカを見ると、やはり焦点が定まらない視線をしていた。

さつきまで俺の目を見ているような視線をしていたのは……こいつが、俺にそこを気づかせないように、頑張つて『演技』をしていたのだろう。キリカが支払う代償は他人に気づかれないといけないみたいだからな。

人知れず代償を支払う。

そんな風に影で頑張つてくれている魔女キリカに。

「キリカが良くなつたらまたいつでも見せるからさ」

よし、ここは。

「ん? わわわっ」

ご褒美をあげようじゃないか。

俺はキリカの肩を両手で掴んで。

そのままベッドに、ゆっくり押し倒す。

「も、モンジ君……?」

「今は、俺の活躍を見てゆつくり休んでくれ」

そんなキリカに布団をかけて、ポンポンと、軽く叩いてやる。

「あはっ、ビックリした。押し倒してくれるのかと思った」

「女の子が、そういう期待するような発言をしちゃいけないよ?」

「はーいっ」

嬉しそうにキリカは布団を鼻の辺りまで持ち上げると。

「ねえ、モンジ君」

「何かな?」

「……もつかい、おでこにキスして欲しいな……」

照れながらそんな言葉を口にした。

「ああ、それくらいなら」

おでこならいいか、と顔を近づけると……なんてこった。

この姿勢だと本当に、押し倒したみたいになつてるじゃないか。

ドギマギする俺を他所に。

キリカは目を閉じて、ジツと俺のキスを待っている。

ああ、またやられちゃったな。

魔女の口車にまんまと乗せられてしまった形になる。

だけど……今の俺はヒステリアモード。

女性の頼みは断られない。

……やっぱり可愛いな。キリカは。

「……おやすみ、俺のキリカ」

俺は全身全霊、全ての意思の力を振り絞って。

キリカに『キス』をした。

熱い、熱い『キス』が終わり。

俺が離れると。

「ふっ、おやすみ、キンジ君。……勝ってきてね」

キリカがそう囁いた。

「ああ」

キリカのそんな願いを聞いてしまえば。

不思議と、もう負ける気がしなくなっていた。

第十五話。妹でも愛ささえあれば関係ない……よな？

2010年6月19日 午前4時。一文字家

「ただいまー」

あの後、ヒステリアモードが解けた俺は、ヒステリアモードの俺がしでかした言動に頭を痛め、同じく痛む心臓や胃を気にしながら一度、自分の家に帰ることにした。

前世で、魔女連隊のイヴイリタは俺を『呪いの男』^{フルヒマン}と呼んで殺せないとか悩んでいたが、殺すにはトラウマを突いて心臓にダメージを与えたり、ストレスで胃にダメージを与えたり、キリカみたいに誘惑してイチヤイチャさせてから、正気に戻った俺を社会的、精神的に殺すとか、いろいろ方法はあると思うなー。特に胃は女さえ押し付けりゃ基本ストレス感じて胃潰瘍まっしぐらなんだし、楽なもんだらうよ。

ま、実際やられたら困るけどさ。

などと、考えごとをしながら誰もいないはずの家に帰って来た俺だが。

ちゃんとただいまの挨拶はしてしまおう。

前世でも、こういう挨拶とかは厳しく躰けられたからな。爺ちゃんや兄さんに。

まあ、誰もいないのに挨拶しても返事は返ってくるはずはないのだが……。

「えつ、兄さんですか!?」

と、思ったたら、家の奥から理亜のビックリした声が聞こえてきた。

「つと、あれ、理亜？ 帰ってたのか」

「ええ、あの、はい」

俺が尋ねると理亜は焦ったような声を出した。

声の方角からして……ああ、風呂場か。

夜中に帰ってきて、風呂に入っていた。そんな時に俺が帰ってきてしまった。状況から察してそんなところだろう。

「ええと……お風呂の脱衣場にいるので、こっちに来ないで下さいね?」

「あー……はいはい、了解した」

ようやくヒステリアモードが解けて一安心したばかりなのに、うっかり入浴後の理亜の体を見てしまい、またなっちまったら今度こそ拳銃自殺したくなるね、間違いない。

なので、ここはあまり話しかけずにさっさと二階の自室に戻ろうとして、ふと足元を見ると。

理亜の靴がきちんと揃えられて置いてあった。

妹ながら感心していると。

……ん？　見覚えのない靴が置いてあるな。足のサイズからして女の子のものだ。

リサやかなめの……ではないな。

かつて、探偵科インヴェスタにいた頃の習慣で身の周りの人が身に付けている靴やアクセサリー、服などはなるべく把握することになっている。

リサやかなめはこの靴よりもサイズが大きい。

理亜の靴でもない。

となると……？

「理亜、友達を呼んだのか？」

こんな時間に？

なんて思ったが、自分のことを棚に上げてまで問い詰めたくはない。

だが、理亜がこんな時間に呼ぶ友人というのに興味があるので確認すると。

「え、あ、はい。せつかくなので」

理亜は頷いた。

そうか、やっぱり女の子だったのか。

ふう……安心したぜ。

これで理亜が今晩会っていたのが男ではないと、ほぼ確定した。

わざわざダミーを頼むような妹じゃないしな。俺と違って。

「兄さんはアランさんとは別れたんですか？」

ギクウウウ。

風呂場から聞こえてきた理亜の声にドクンと、心臓が飛び跳ねた。

今日だけでも俺の心臓はかなり動きまくったので、きつと寿命は縮んだことだろう。

「そんな、俺とアランが付き合ってるみたいな言い方するなよ」

「ふふつ、違うんですか？」

「違うわー」

まさか、妹同然の女子にそんな風に思われていたとは。

とりあえずアラン、お前は殴る！

理不尽な八つ当たりを考えていると。

「いい人だと思えますけどね、アランさん。見た目も格好いいし」

……む。

何故かは解らんが、理亜がアランを褒めるとイラつとするな。

……やっぱアランは殺そう。

そんな物騒な事を思ってしまうが。

まあ、これもあれだ。可愛い妹を持つ兄の苦勞とかいう奴だな。

妹が格好いいとかいう奴に対して嫉妬してしまうのは仕方あるまい。だからつい言ってしまう。

「あいつはアホでムツツリスケベだからダメだからな」

「え？ ……あははっ、んもう、兄さんったら」

朗らかに笑う理亜の声が脱衣場から聞こえた。

「私は、そういうのは興味ありませんから。男性とのそういうのなんてちつとも」

「そ、そうか？」

「そうです。近くに寄られただけで体が避けちゃうくらいですよ？」

「ああ……そうだったな」

理亜の潔癖性は過剰なレベルだからな。

誰かが触ろうとしただけで体が勝手に避けてしまうような。そんな反射神経に影響するくらいのレベルだ。それは男性だけに関わらず、同性であってもそうだしな。

「男性で私の近くにおいて不快でないのは兄さんくらいなんです」

……そうだった。俺だけが理亜の頭を撫でてやれるのだ。

それはとても誇らしいのだが。やはり兄という立場からしたら複雑だ。

「あー、いや、しかし、な……」

玄関にいたままで、風呂場にいる妹分と会話しているという状況もおかしいが。

それよりもおかしいのは……俺が本当の意味での兄ではないという状況だ。

いや、まあ。かなめを妹にしてる時点でおかしいのだが。

しかし、かなめはかなめで一応繋がりはある。

前世での異母兄妹という繋がりが。

だが、今の一文字疾風である俺は本当の意味での兄ではない。

体は一文字でも心は遠山なのだから。

だから、そんな俺が理亜の兄という立場でいていいのか不安がある。

もつとも、心の中にはもう一人の俺こと……一文字疾風も存在してはいるのだが。

……やっぱりいずれはきちんと話した方がいいのだろうか。

疾風の中には俺がいるということ。

だが、真実を話して大丈夫だろうか？

話したせいで、関係が変わらないだろうか？

実を言うと。

……怖い。

関係が変わるのが一番怖い。

しかし、兄妹という立場である以上。

いずれは別れの時がくる。

それこそ理亜に恋人でも出来ればすぐに。

……考えただけでイライラしてくるのは何故だろうか？

「しかし、なんだ。いずれは理亜も、その……」

と、俺がそんな風に理亜の恋人のことを考えていると。

「いずれは恋人を、ですか？」

「あ、う、うむ……」

ストレートに言われて言葉に詰まる。

「ふふ。そういうのはまだ、本当にいいんです。最近は特に忙しいですし……」

「ん？　忙しいのか？」

忙しい、と言う理亜の言葉に何故か違和感を感じる。

彼女は部活はおろか、特に習い事とかもやっていないはずなんだが……。

「え、あ、ええと……べ、勉強が忙しいんですっ」

「勉強？　理亜は成績はいいだろう」

俺と違って理亜は出来る妹だ。

かなめの時もそうだったが、最近では賢妹愚兄と呼ばれているのを知らないのだろうか？

か？

まあ、呼んでいるのは主に一之江なんだが。

「良くてもです。最近、お友達に教える機会も増えてきたので」

「ああ。なるほどなあ。教える時に解らないと格好がつかないもんな」

「……はい、そんなところですよ」

「なるほど、解った。って、いかな。あんまり脱衣場で会話させるのも悪いな」

風邪とかひくかもしれん。

ここをとつとと会話を終わらせないと駄目だな。

「あ、そうでした。ふふ、でも、最近は兄さんとゆつくりお話する時間もありませんでしたから、こういうのもたまにはいいですね」

言われみれば確かに最近は理亜と二人きりで会話する機会がなかった。

リサやかなめがいるせいというのもあるが、何よりお互い相手とゆつくり会話する時間がなかったからな。

俺は特に口ア関係で忙し過ぎて。

「……悪かったな。だったら今度の休みは一緒に過ごすか？」

「いいのですか？」

「ああ」

自分で言うておいてなんだが、自分の口から理亜を誘ったのに自分でビツクリした。

普段の、こつちの俺は女子なんかと会話なんかしたくはないのだが……だが、理亜は

別だ。

会話してもいい、したいと思う女子。

それが理亜なんだ。

その理由とかはよく解らないのだが。

不思議と理亜と話すのは苦にならない。

このまま、ずっと会話していたいが、やはり大事な妹分を脱衣場にずっといさせるわけにはいかない。

「それじゃ今度の休みにな……」

会話を切り上げて自室に戻ろうとしたが。

「あ、兄さん……」

「ん？」

言いかけたところで、逆に理亜から止められた。

「最近、ええと。民俗学に凝ってる、って言っていましたよね？」

そういえば前にそんな誤魔化し方をしていたな。

「ああ。民俗学というか、都市伝説を調べてるんだ。友達と一緒に、な」

嘘は言っていない。嘘は、な。

「そうだったのですね。……ん……」

「ん？」

理亜は何かを言いかけて、言葉を嚙んだ。

その様子からして何か怖い都市伝説を聞いた……のか？

今は、まだ雨が降っているせいか、ロケーション的には怖がらせるにはピッタリなんだが、妹を怖がらせてニヤニヤするような趣味は俺にはない。

だから、理亜が話すまで待つか……と思っていると。

理亜の口から予想以上の言葉を聞くハメになった。

「兄さんは『ベッド下の男』という都市伝説をご存知ですか？」

「っ!?？」

完全な不意打ちだった。

まさか理亜の口から、ついさつき撃退した都市伝説の名が出るとは思っていないなかった。

「あ、ああ。知ってる。実は今日、その都市伝説の相談を受けたんだ」

「え、兄さんもものですか？」

「も、つて事は理亜もものか？」

「はい。実は私も『ベッド下の男』が怖いから泊まって欲しいって急に頼まれたんです」

「ああ—————そういうこと、かあ」

いろいろ納得できた。

そつか。理亜に男がいるとかだつたら、なんか嫌だからな。

……何故かは解らないが。

「その子の家も、今日は誰もいないから、つて。……それで、結局何も出ませんでしたので、帰ってきたんです」

ああ、そうか。俺達が撃退しなかつたら、理亜達の方に現れていたんだな。

あの迷惑教師が。

出たのが俺達の方で良かった。本当に。

綴が現れたのが俺達の前じゃなかつたら、と思うと……

ゾツとしてしまう。

まるで関係ない家族が、ロアに襲われる可能性がある。

それは本当に怖いことで。

「まあ、理亜はクールだから頼りになるんだろうな……」

「もう、兄さんまでかなめお姉ちゃんやあの子と同じことを言わないで下さい」

脱衣場の方からそんな拗ねた声が聞こえて。

そんな理亜の声を聞きながら思う。

これからも、危険な可能性のある都市伝説を倒していかないと。

理亜の、家族の、大切な人達の平穩を守る為にも、と。
それと同時に。

「そんな『決意』もまた、『主人公』っぽいよな、なんて思ってしまった。
——
「ありがとうな、理亜」

「はい？」

「ああ、いや。無事に帰ってきてくれて、だ」

ロアと遭遇していたかもしれない妹に対し、本心から出た言葉だったのだが。

理亜には冗談に聞こえたらしく。

「ふふっ、大げさですよ兄さん。でも、はい。どういたしまして」

理亜は柔らかな口調でそう言ってくれる。

そして、その返事に満足してしまう自分がいる。

普段がクールな妹だけに、こういった柔らかな声を出す『柔らかかタイム』はとても貴重でありがたいからだ。

「さて、そろそろここを出ますので兄さんは自分の部屋に戻って下さい」

「ああ。そういえば友達が来てるんだったな」

「ええ。今晩は私も外泊の予定でしたので。今度は自分が付いていくと」

「そうか。まあ、気をつけろよ」

かなめやりサもいる事だし、いざという時は大丈夫だろう。

「ええ。解つてます」

「それじゃ、朝にな」

「はい、また朝に」

俺は理亜の声を聞きながら、新たな勇気を貰った。そういえば、憑依してからずっと。

理亜の声を聞いてから何かの事件に挑んでいた気がする。

「……よし、やるか！」

気合を入れ直した俺は自分の部屋に向かって歩き始めた。

第十六話。情報共有

2010年6月19日4時30分。夜霞市内路上。

主人公としての力。

それはどういったものなのだろうか？

キリカは、俺の物語達にとっての『主人公』を描けとアドバイスをしてくれた。

俺の物語達にとっての『主人公』……物語から見た『主人公』。

百物語とは何か。

ふと、考え込んでいるとキリカに噛まれた手の甲が妙に熱くなっているのを感じていた。

……また何かされたのか？

神隠しの時に首筋につけられたキスマークが実は魔術の一つだったのを思い出す。

キリカはああ見えて、大量の蟲達を操り人やロアを襲う『魔女』だ。可愛い外見に騙されがちだが、キリカは俺や一之江や鳴央ちゃんとは違う人ではない純粋なロアなんだ。

彼女が何を考えて俺の味方をしているのか、その内心は読めない。

あんなサツパリとした子が、蟲みたいなグロいものを使うのかも俺には理解できない。

まあ、その辺りのミスマッチ差がある意味オカルトとかホラーっぽくて『魔女』的
はいいのかもしれないけどさ。

オカルトといえば……一之江は大丈夫だろうか？

確認したくてもできない。

一之江の姿を見れない、というのも理由の一つだが。（ロア状態の一之江を見たら俺
は死ぬからな）

一番の理由は……。

怖いからだ。

俺のせいで傷ついた一之江を見るのが怖い。

アイツがまだ目覚めていないというのを見てしまったら、俺はきつとまた自分を責め
てしまうと思うから。

だから……一之江の姿はまだ見れない。

それに出来ることなら一之江はギリギリまで休ませてやりたい。

次に氷澄やライン、ジーサードが現れた時は、音央や鳴央ちゃんの力に頼ろうと思う。

そう思って、詩穂先輩の自宅マンションまで戻ってくると。

「あ、やっと帰ってきた」

「一度自宅に帰られたのですね」

マンションの前に、六実姉妹が立っていた。

「あれ？」

「あれ？　じゃないわよ、まったく。あんたの帰りを待っていたの」

「キリカさんから情報を貰っていらつしやるのでは、と思いましたが」

「あ、ああ、貰ってきたよ。『蒼の邪眼』や『境山のターポロリババア』。それに……『夜

霞の首なしライダー』の情報を」

「さっきの連中はそんな名前だったのね」

「境山にそんな都市伝説があったんですね……」

強気だけど、責任感がある音央。

おとなしめで、泣き虫な鳴央。

そんな二人がこうして待ち構えて。俺と会った早々、情報の話を聞いてきたというこ
とは。

……一緒に戦うつもりがある、ということか、アイツらと。

「一之江は？」

「ロア状態から戻ったら、ケガは何もなくなってたわ」

「ですが、かなりの疲労状態でしたので、眠っていただいています」

鳴央ちゃんの視線がマンシヨンの方へ向いた。

視線の先はマンシヨンの7階。詩穂先輩の自室があるところだ。

きつと一之江は先輩の部屋で眠っているのだろう。

あの、にやばにやばした優しい先輩と一緒になら、一之江もすぐに良くなるはずだ。そう信じることにする。

「ふう。んで、なんでアンタはジャージ着てんのよ」

「いや、なんつか。動きやすい服装といたらジャージとかじゃないか？」

特にこれから頑張るぞ！　って時とか」

本当は防弾、防刃製の服があればよかったのだが……そんなモンはないからな。

「頑張られるのですか？」

鳴央ちゃんは心配そうに俺を見る。

不安がない、と言ったら嘘になる。

ロアや強い敵と戦うのはいつだって怖いし、今回は一之江やキリカみたいな頼りになる強い味方もいない。ヒステリアモードではない俺なんて、たいした能力も持たないのだからな。

音央や鳴央ちゃんが強力な『神隠し』のロアというのは知っているが、音央は戦闘に
関しては素人同然だし、鳴央ちゃんは戦闘向きの性格ではない。

言わば、凡庸な俺が戦い慣れてない素人同然の女の子を連れて……『主人公狩り』と
呼ばれる男達と戦う。

そんな無謀な行為をしないとイケないのだ。

もし、俺が、『星座の女神』とも噂される例の『終わらない千夜一夜』みたいな有名で
強い『主人公』のロアならば、もっと上手くやれるのかもしれないが。

だが、俺は俺。

『101番目の百物語』と『不可能を可能にする男』の『主人公』、一文字疾風なんだ。

ヒステリアモードになれば別だが、普段の俺は前世でもいたって普通のちよつとヤ
ンチャな学園生活を送っていた普通の高校生なんだから。

だから、いっぱい足掻いて、必死になって、それでも頑張つてなんとかしてみせる。

そう思う。

なんたつて……俺は。

『主人公』なんだから。

「……へえ」

「ふふっ」

と、そんな決意をしていると。

音央は口をへの字にして。鳴央ちゃんはとても嬉しそうに。

俺の顔を見ていた。

「うん？」

「ううん。アンタがそんな顔をしてる時は、もうやる気満々なんだろうなー、って思っただけ」

「ええ。おかげで私たちも、覚悟が完了しました」

可愛いらしく、グツと掌を握りしめてガッツポーズをしてくる鳴央ちゃん。

そんな彼女とは対照的に音央はヤレヤレ、と首を振っている。

「そんで、あの人達の居場所解るの？」

「ああ、いそうな場所なら検討はついてるよ」

ヒステリアモードの時に彼らがいそうな場所は推理しておいた。

推測だが、彼らの、アイツの性格からしていそうな場所は。

「多分、さっきの場所にいるだろうなー、って」

「とつくに移動してるかもしれないわよ？」

「だとしても、さ。氷澄もそうなんだが……アイツの、ジーサードの性格からしてあの場所から動いていないだろうなー、って」

「なんで解るのよ?」

兄弟だからです。

なーんて言えないわけで。

『主人公』の勘……っていうのは冗談だが。ヤシロちゃんから『四辻よっじでは良くないものと出会う』っていう話を聞いたのと……アイツらなら、そういう演出が好きそうだから」

以下にもつともらしい推測を話す。

まあ、全部が全部嘘ではないんだけどな。

水澄もそうだが、ジーサードは芝居かかった演出とか言い回しとかが好きなタイプだからな。

派手な演出を好んだり、以外にもテンプレな展開とか好きそうだったり。

だからこそ、きっと奴らは朝まであそこか、もしくはあの周辺で待っているはずだ。

「ヤシロさんにお会いになったのですね……」

「ああ、いつもなんかこう……いきなり現れて、いい話と怖い話をしてくれるよな」

「あー、そんな感じよねえ、あの子」

どうやらヤシロちゃんに対する認識はみんな似たようなものらしい。

「まあ、いいけど。で、えーっと。その男達に挑むのはいいけど勝算はあるの?」

「勝てる見込みがあつて戦つたことつて、今まで一度もないんだよなあ……相手が強過ぎて」

前世でもそうだったが、思えば俺が戦う相手はみんな強敵だらけだった。

中には明らかに人間じゃない奴らとかもいたし……今思うと本当、よく生きてられたな、俺。

「まあ……そう、ですよな」

その『強過ぎる』うちの一人というか二人というか。

それが今、目の前に仲間として居るのだから、人生つて不思議だよなー、なんて改めて思う。

「解つた。もう、後は行き当たりばったりつてことね？」

「ああ。あ、あと、情報共有だが、氷澄が使う技の一つに『厄災の眼』イーヴルアイつてのがあ

る。あれはその眼を見た人に不幸を集めるようなものらしい。で、女の子が使う技は

『音速境界』ライン・ザ・マツハといつてももの凄く速く動くことでソニックブームを巻き起こして、なん

でもかんでも吹き飛ばすつていう能力らしい」

「なんでもかんでも……なの？」

「その吹き飛ばす力の指向性を、彼の眼によつて対象にだけ向けるのですね。辺り一面が受けるはずだった被害を、狙つた相手だけに向けたりするよな」

ヒステリアモードではない俺ではちゃんと能力を説明しようにも、専門的な用語とかあつてよく解らん。

悪い、今の俺にはこれが限界なんだ……と思つていたら鳴央ちゃんが解説してくれた。

さすがは『神隠し』として長年ロアの世界で生きていただけあつて。

俺がキリカから聞いたのとほとんど同じ内容を説明してくれた。

「原理はよく解らないが、そういうことらしい」

「なるほど……別にその男を見ちゃいけない、つてわけじゃないのね？」

「邪眼つていうものは、元々『見る側』が呪いをかけるもので。見られた側はそれに気づかないというのが基本だそうですよ」

「つまり、視線ばかりは防ぎようがないってことかあ……」

音央は真摯に戦いを見据えている。

そんな彼女達がいるんだ。

なら俺も頑張らないと！

「それだけじゃない。あともう一人、ジーサードつていう『首なしライダー』のハーフロアがいるんだが……コイツがまたメチャクチャ強い。

多分、まともに戦つても勝てないだろうな……」

特に今の俺では。

ヒスつてない俺では相手にならない。

ヒステリアモードの中でも、最強のヒステリアモードと言われるヒステリア・レガルメンテを発動させてギリギリ互角に渡り合える。そのくらいにヤバい奴だからな。

あのアホの弟は。

「アイツが使う技は音速を超える技とか、銃弾を跳ね返す技とか、まあ、いろいろあるんだが……中でも一番ヤバいのが無行の構えから、見えないワイヤーを出すインヴェイジビレ・ライン『不可視の線糸』という技だ。ロアとしてのあの技は防ぎようがない。

『首なしライダー』というロアとしての特性を生かした技なんだろうが……対処法はま
だ思いつかん」

「……音速つて、見えないワイヤーつて……アンタよく生きて帰れたわね……」

「なるほど……『首なしライダー』は『ワイヤーピアノ線で首を切断された』。その逸話から生まれた技なんですかね？」

よくご無事でしたね。

本当に、良かったです。あの時間に合つて」

音央は呆れたように、鳴央ちゃんは感心したように俺を見つめてきた。

「まあな……自分でも何で生きていたのか解らないよ」

キリカ曰く、『主人公』だから。

主人公補正で生き延びた、のかもしれないな。

「しかし、驚いたよ」

「何がよ？」

「いや、あんまり戦いたくないのかもかもしれない、って。音央はツンツンしてるけど、別に好戦的ってわけじゃないだろう？」

「アリアみたいにツンツンしてる音央だが、その内面は誰よりも優しく。誰よりも弱い。」

強気だけど、繊細な美少女。それが音央だ。

「そりやそうよ。ケンカなんかしないに越したことないもの。ただでさえ変な噂立てられやすいわけだしね」

「それもそうか。音央くらい目立つと、何もしなくても勝手に変な噂、悪い噂が流れてしまうこともあるのかもな。」

「だからって、売られたケンカを買わないのも癪でしょ？ それに、あたしは友達が酷い目に遭っているのにのんびりなんてしてられないの」

「ふふつ、音央ちゃん。さっきまで本当に怒っていたんですよ？」

「あ、こら、鳴央っ！」

「モンジさんがあんな辛そうなのは初めて見た、って。一之江さん可愛いのにこんな風にするの酷い、むかつくー、って」

「こらこら！　　そういう鳴央だって、さっきまでめそめそしてたじゃない！　『私が

強ければこんなことには……』とかなんとか！」

「あつ！　　ね、音央ちゃん、それは……っ！」

「くっ、はははっ！」

二人がいい争ってるのを見て。

俺は笑ってしまった。

「むっ」

「お、おかしかったですか……？」

「いや、元々同じ人物とは思えないほど違うよな、二人とも。良かったよ……どっちかを
選ぶみたいな選択をしないで。俺はやっぱり、どっちもいてくれる。そんな選択をして
本当に良かったって思う」

「何言ってるの」

「ふふ、そうですよ。私たちから見たら、モンジさんがいてくれて良かった、なんです」
「あたしも、ずっと知らないままでいたくなかったからね。本物の自分のことも、知らない
うちに消してしまった人達のことも。あんたのおかげよ、モンジ」

「だから、私たちもちやんと貴方の物語として、役に立てて下さい」

ドキッ、とするような笑顔でそう言ってくる二人。

強気だけど、優しくて繊細な美少女な音央。

お淑やかで泣き虫だけど、優しく、芯が強い鳴央。

……参ったな。

同じ顔をしているが、性格は全然違うのに。

『優しい強さ』。

こういう、根底はやっぱり一緒なんだな。

そんな優しい言葉をかけられたら……耐えられないぞ。

特に、こっちの俺は。

「それなら心配いらないよ？」

君達は俺の。俺だけの物語なんだから」

優しい二人の笑顔を見ていたら、胸がドキドキしてしまった。

まあ、視線がお胸様にいつってしまったというのもあるが。

そう。また……なっちまったのだ。

そんな二人に優しくされている俺だが。

我ながら、節操ないなー、なんて思ってしまう。

一之江に庇われて。

傷ついた一之江の顔をマトモに見れなくて。

周りに心配かけて。

キリカの家に行つたかと思えば、誘惑されてドキドキして。

キスまでしてしまつて。

自宅に戻れば可愛い妹と楽しくおしゃべりして。

そして今度は……可愛い美少女姉妹に慰められている。

どうしてこうなつた？

「な、何言つてんのよ。ばーか。調子に乗るんじゃないわよ」

「そ、そうですよ。そういうのは私たちだけにではなくて、一之江さんにも言つてあげて

下さい。

でないと、怒られますよ?」

「うん? 一之江に?」

一之江が怒るのはやつぱり節操がないからだろうか?

俺が他の女子にしでかしてしまつた、そういった方面のことでは特に厳しいからな、

一之江は。

こつちの俺がちよつとラツキースケベを発動させただけで、ツンツン、グサツ!

と、刺してくるような奴だからな。

「一之江には言えないなあ。言ったら刺しそうだし」

この時。何故だか理由は解らないが。

俺の脳内で。一之江がラインや氷澄にやられた光景が浮かびあがった。

宙を舞うボロボロの人形。

金髪の少女の姿。

そして。

ロア状態の一之江を抱き締めたあの時の光景も思い起こしてしまい……。

『貴方は……真性のバカなのですね』

一之江の事を考えていたら何故だか涙が流れてきた。

これはアレだ。

一之江のお仕置きが怖いから出た涙で、決して彼女の為に流した涙ではない。

「あはは、ぼーか。こんなくらいで泣きそうになるんじゃないわよ。

っていうか、見せちゃいなさいよー」

「そうです。どうせ泣くなら、一之江さんに見せてあげて下さい」

一之江に涙なんか見せられない。

絶対からかってくるだろうし。

だけど、音央も鳴央ちゃんもそれが当たり前、みたいな顔をしている。

うーむ、女の子的に何か確信とかがあるのだろうか？

うーむ……解らん。

「……よく解らないけど、じゃあ……そんな不甲斐ない主人公なりに、全力でやるから、サポートはよろしくね、お二人さん？」

「ふふっ、OK」

「はい。出来る限りのことはしますね」

笑顔の二人に頷いて。

俺はさつき彼らと出会った場所へと歩き始めた。

第十七話。再戦の刻

その十字路に足を踏み入れた途端、空気が変わるのが解った。

『ロアの世界』。

ロアたちが、自分の戦う領域として形成する、都市伝説の世界に入り込んだのだ。

その世界の中では、科学的、論理的に解明されるような事象ではなく、『物語』的な力が作用するロアの為の世界。

ロアのルールによって支配される不思議空間。

だから、本当は……

『ターボ婆さん』や『首なしライダー』が相手だから、本当はバイクとかに乗っている方が現れ易いのかもね」

などと口に出すと。

「まあ、それを追いかけて驚かしたり、殺すのがわらわたちのロアじゃしの」

「ケツ、いつまで待たせる気だよ。来るの遅エぞ、兄貴」

十字路の真ん中に、ラインと氷澄、それに相変わらずド派手な特攻服を着たジーサードが立っていた。

「わざわざ戻ってくるとは、どういう風の吹き回しだ？」

水澄は右手でメガネのフレームに触れ、そのままメガネを上げながらキザつたらしい台詞を吐いた。

……うん。こいつは、こういう如何にも的な台詞を言ってくると思っていたよ。

「なんせ俺は『101番目の百物語』と『不可能を可能にする男』の『主人公』だからな。仲間と相談して君達を倒して、俺の話聞かせる為に来たんだよ」

「俺を倒す？ お前が？ 一体何の冗談だ？ それに……話だと？ お前を

取り込んだ後に、お前の物語達を厚遇する、という話なら乗るけどな」

「水澄はその辺りは守るぞ。契約通り、わらわにもちゃんと携帯ゲーム機と最新のゲームは必ず渡してくれるしの」

「つて、ライン。そういう情報は敵に言わなくいい！」

「親しみ易い『主人公』像を作ってやるのも、物語としての責務じやろ」

「そんな責任はないから、静かにしてくれっ！」

肩を竦めながら大げさに「ヤレヤレ、最近の若者はキレ易いのう」と首を振るライン。あんな小さな女の子に『若者』呼ばわりされるのって、なんだか不思議な気分だろうな。

そして、契約はゲームでいいのかよ！

「チツ、オイ、ライン、ヒズミ！」

話が進まねエぞ！ ラブコメは後にしやがれ！」

「ラブコメしてねえよ!!? ラインが騒がしいだけだ」

「ぬっ、わらわのせいにするのかのう。昨夜はあんなに激しくしておいて……」

「間際らしい事言うな!!?」

「やれやれ、男の責任逃れは見苦しいぞ？」

「だから、してねえだろうが——!!?」

氷澄が絶叫したその時。

「静かに出来んのかアア——ツ!!?」

まるで俺や一之江みたいなやり取りだな、などと思っていたら、キレ易い若者こと。

ジーサードはライン達に向かって大声で恫喝し始めた。

怒鳴られた氷澄はビクツとしながらも、すぐに何でもなさそうな表情をして俺の方に顔を向け。

「……ゴホン、では改めて。話ってなんだ？」

そう尋ねてきた。

「やれやれ……仕方ないのう」

ラインも氷澄との話を切り上げて、俺の方に顔を向けてきた。

今のやり取りで解ったが、どうやらジーサードは氷澄の物語というわけではないみたいだ。

氷澄の反応は昔のかなめ……品川の火力発電所でジーサードの命令に逆らえなかった頃の態度そのものだったからな。

そう。それはつまり……！

逆らえないのだ。自分より強い奴に……。

「おい兄貴、話ってなんだ？」

段々解ってきたぞ。奴らの力関係が。

氷澄にとつて、ラインは俺と一之江みたいな感じで。

そう考えるとジーサードはカナ。

主人公のロアを物語として持つていようが、逆らえないんだ。

物語としての『格』が違い過ぎて。

などと、考え事をしていると。

ジーサードが尋ねてきたので。

俺はジーサード達と『交渉』を進める事にした。

「ああ、『主人公』が『主人公』が取り込むと、そいつの持つている物語が増えるっていうのは理解したんだ。だから、狙われるっていうのも仕方ないってな」

「その通りだ。俺は既に、お前以外の『主人公』も狩っているからな」
「遅えよ。理解すんのが……だが、その通りだ。俺も何人かの『主人公』を既に取り込んでいるからな」

俺の言葉に同調する氷澄やジーサード。

彼らも彼らでそれぞれの『物語』があつたんだろう。

『主人公』が『主人公』を取り込む。

人間が人間を襲う。

だからこそ、『主人公狩り』なんていう異名で呼ばれているのだろう。

それは、例えるなら人材の奪い合い。

優秀な人材を無理矢理相手から奪う、略奪行為。

元武偵として、その行為を認めたくないが……。

(だが、まあ。戦いなんてものは結局、奪い合いだからな……)

欲しいもの。手にしたいものがあるから戦いは起きるわけで。

その戦い自体を全部無くすなんてことは当然ながら出来ない。

だが、だからこそ。ルールや決まりごとを守る必要がある。

奴らは態度や言葉こそ乱暴だが、そのルールとかは守る奴というのは理解出来る。

先ほどのラインの発言では、『契約は必ず守る』と言っていたしな。

だから、俺はジーサードや氷澄にある事を提案しようと思う。

「俺よりも経験があるお前らなら、仲間になってくれたら心強いと思ったんだよ」

「……仲間？」

氷澄は俺の言葉の意味を考えるように問いを挟み。

「ケツ、なんだそりゃあ」

ジーサードは呆れたような、だけど何故か嬉しそうな顔をして。

「フンツ、命乞いか？」

氷澄は馬鹿にしたような視線を俺に向けてくるが。

「いや、命まで取る気はないだろ、お前ら」

そう、命まで奪う気は初めからなかったのだ。コイツらは。

やろうと思えば出来たのに。コイツらからは悪意や殺気といったような人に害をな

す感じは感じられなかったからな。

「む……」

「チツ……」

「人の物語を無理矢理奪うつてのはあんまり褒められた事じゃないけどさ。でもある意味『主人公』なんて多かれ少なかれ、他人の物語を無理矢理終わらせたりするような奴だからね。だから、それに関しては別に悪いことだとは思わないさ、俺は」

それにコイツらは、最初から正々堂々と現れた。

正面から戦いを挑んできたし、畏にかけるようなこともなかった。

「俺はこの街……つてより、友人とか、家族とか、大切な人達を守りたいんだよ。怖がらせるだけで害を与えない『ロア』やハーフロアならいいけど、命を奪ったりする危険な『ロア』から。だけど、俺一人じゃ絶対に手が回らないだろう？　だから、一緒に街を守ってくれる『主人公』仲間が増やせたらいいなー、つて思ったんだ」

これが、『俺』の本心だ。

戦いたくない、という気持ちも未だにあるが。

俺には、俺達には戦う力があるのだ。

せっかく戦う力があるんだ。だったら悪意があるロアを退治するのが本来の『主人公』の役目だろ？

「……………ふむ」

頭ごなしに否定されるかと思っただが、氷澄は考え込むように顎に手を当てる。

「ケツ、何を言うかと思えば……………んなこと、当たり前だろうがア！」

ジーソードは悪意あるロアから街を守るのは当然といった感じで腕を組む。

……………というか、ジーソード。

ツンケンしてるが、やはりお前ツンデレだろう。

「氷澄、向こうの小僧の方がお主よりも何倍もちゃんと主人公っぽいぞ」

「うるさい、黙っているライン。ああいう主張は、甘いから出来るものだ」

「お主だつて充分甘いくせに。追いかけて、リベンジの機会を与えるためにこの雨の中ずつと待っているなどを甘さ以外の何物でもあるまいて」

「ばつ……こらつ、バラすなライン！」

「ほっほっほっ」

あ、やつぱりこいつら、いい奴なのかも。

実を言うと、さつきまでコイツらの事は許せなかつた。

一之江を傷つけ、俺の物語を奪おうとしている奴らだからだ。

だが、今こうして接してみると。

コイツらにはコイツらの事情があつて、やむなく戦つていふというのに気づいた。

「一文字疾風。貴様の主張は……」

「つ……? 今、なんて……?」

「何だよ、今度は」

「ちゃ、ちゃんと名前で呼ばれたっ」

「うん?」

と氷澄。

「は？」

とジーサード。

二人は訝し気に俺を見る。

「いや、周りに何度言っても、みんなモンジモンジ言うから嬉しくて」

「ああ—— うん、いや、そうなのか」

「お前だけだよ、俺をちゃんと名前と呼んでくれたのは……お前、やっぱり良い奴だな」
「いや、俺がいきなりお前をモンジとか呼んだら、仲良すぎだろ」

「確かに……愛称で呼ばれるくらい仲良しになってしまっわけか。参ったな。俺にはそっちのけはないから女性に愛称で呼ばれるのならいいんだけど……いや、しかし、親しくなるのは問題ないか。こっち関係に男友達っていないしな……」

大変悩ましい問題だ。

「解るぜ、兄貴。俺も何度言ってもキンゾー、キンゾーって呼ぶ奴らがいるせいで、何度ブチのめそうかと思つたことか。やっぱり呼ばれるなら美しく、周りの奴らがビビるくらいのカッコイイ愛称で呼ばれたいよな、男なら！」

と思つていたら、ジーサードが凄い勢いで喰いついてきた。

ああ、やっぱりお前も苦勞していたんだな、俺と同じような問題で。

「えり？ わかつちやうのか！ ジーサード」

「キンゾーはキンゾーじゃろ？　　ジーサードより呼びやすくもいい名前じゃと思うがな。」

ジーサードじゃとジジくさいしろう」

確かにジーサードはじーさんと間違えやすいが。

「おい、ライン！　　てめエは後で殴る！」

そして、そんなジーサードに反応する人達がいた。

うん、意図してやってはいないが、俺のペースに相手を巻き込むことができた。

こういう戦法を得意とするのが一之江だ。おかげで、戦闘面におけるイニシアティブは取れていた。

場の空気を支配する者が、後の戦いも制する。

それは、戦では当たり前のこと。

「ま、それはさておき。俺だって、こんな提案をタダでするつもりはないよ氷澄」

「ほう……取り引きというわけか」

「ああ。ただ俺には差し出せるものが何もないからな」

そう。俺には差し出せるものなんて何も無い。

俺の物語達を差し出す？

そんなものは論外だ！

大事な人達を差し出すつもりなんてさらさらない。

「だったら、何で取り引きするつもりだ？」

「俺達が勝ったら、今の提案を考えてくれ」

「なるほど。それで、俺達が勝ったら？」

「ああ、俺を……」

好きにしゃがれ！

と言いかけたその時。

「私達が貴方の物語になるわ！」

今まで黙っていた音央が高らかに宣言してしまった。

「おい、音央!?」

止めようとしたが。

「私たちは『神隠し』。先ほど見た通り、その能力はかなり有効です！」

それに続いて、鳴央ちゃんまでもが強い口調で告げた。

「い、いや、何を言っているんだ、二人共、そんなこと」

「いいのよ、勝てばいいんですよ！」

「そうです、勝ちますよ、モンジさんっ！」

しまった、二人共熱血状態になっている。これは何を言っても止まりそうにない。

「ほう……面白い。『神隠し』か」

そして氷澄も楽しげに口を歪めた。

乗せられてるとは気づいていないようだ。

「氷澄、言うておくが、今お主めっちゃ乗せられているぞ？」

対して、ラインは冷静に突っ込んだ。

あれが熟年の余裕というやつか。

「そんなことは解っている。だが——俺に、俺達に勝てると思っているのが、ど

れだけ間違っているのか。教えてやらないとな？」

……気づいていて、それでもあえて乗ったのか。

いかにもプライドの高いタイプだと思っていたから、こういう挑発には乗ると思っていたが、気づかれていたというのは計算違いだ。乗せられているというのが解つていて。それでもあえて乗ってくるとは思わなかった。意外と警戒心が強い、用意周到な奴なのかもな。

「いいだろう。その提案、乗ってやる！ 『神隠し』を手に入れる為にもな！」

その宣言を聞いた時、俺の中でも絶対に負けられない気持ちさがさらに強まった。

「さて、頼むわよモンジ。あんた、絶対勝ちなさいよねっ」

「ああ、解ってるよ。ありがとうな、音央、鳴央ちゃん。おかげで俺ももう後には引けな

口元に笑みを浮かべながら、氷澄は振り向いた。

「おりやあああ！」

拳を氷澄に向けて突き出す。が、氷澄の体は青い残像を残してひらりと俺のパンチを躲していた。

「くつ、幻か。これも『幻ファンタムアイズの邪眼』の能力か」

「俺の目を見ていた者は、現実と虚実の認識があやふやになるのさ」

「なら、これならどうだ————！」

俺は一度後退をしてから再び氷澄に向かって駆け出し、そして全身の筋骨を順番に連動させていく。

音速を超える突きを氷澄に向けて繰り出す為に。

『イメージは世界を、ロアを変える力を持つ』

キリカと初めて戦った日に言われた言葉がふと頭の中で思い浮かぶ。

俺の持つロア。

『不可能エネを可能イブにする男』。

それは、物語を変えることができる存在。

『出来ない』を『出来る』に変える力を持つロア。

まるで、作家や編集者が物語を手直すように……。

ふと、そのことを思い出した俺の頭の中で。

チリツと、何かが反応した。

作家や編集者みたいに……？

この考え方は間違っていないはずだ。

……駄目だ。まだ何かが足りない。

何かを見つけないといけない。

俺が『百物語』の『主人公』になる為には。

俺はヒステリアモードの空間把握能力と、常人を超越した反射神経を駆使して。

『桜花』を放った。

ただし、片手のみで。

『桜花』は片手でも放てる。

なら右手で一発。左手で一発。

右足で一発。左足で一発。

計4回分の桜花をほとんど同時に発動させたらどうなるか？

それも刺撃や打撃ではなく、衝撃波で吹き飛ばせれば……。

イメージ的には『妖刀』の『炸牙』を思い浮かべる。

漫画やアニメで同じみの飛ぶ斬撃。

『桜花』の衝撃波を飛ばす技。

その、手刀版。

「炸牙」

いわば、劣化版『炸牙』。

名前は思い浮かばなかったから、暫定的に妖刀と同じ技名だけど……ま、いいか。

バガアアアアアアアアアアアアンツツ

！

「あ……ぐツ……」

俺が放った衝撃波により、氷澄は後ろに10メートルほど吹き飛ばされた。

仰向けにぶっ倒れた氷澄に、ガラガラと、崩壊した塀の瓦礫が降り落ちる。

「安心しろ。この技は距離さえ空いていればハエも死なない技だからな」

かつて、『妖刀のセイジ』に言われた言葉を告げながら考える。

これで一之江がやられた分はやり返してやったぜ。

残るは……。

「俺の物語は誰にも渡さない！

奪いたきや、俺を散らせてみやがれっ！」

残るはラインとジーソードだけだ。

氷澄単体なら最早さほど脅威ではない。

「何驚いてんだ、前にも言っただろう？　俺はお前さ、遠山金次。

『G』の血族ならこのくらい、一度みりゃ、簡単に出来る！」

そうなのか？

出来んのか？

確かにジーサードの言う通り、遠山うちの家系は全員ほぼ人間離れしている奴らしかいないが。

遠山の血を引く奴なら出来ても不思議では……イヤイヤ。

やっぱりおかしいからな！

見取り稽古を簡単に出来る人間がいてたまるか！

「さて、あの日の決着を付けようぜ、兄貴」

「はあー、本当に今日はツイてない」

朝に、赤マント。夜にはベッド下の男に、邪眼使いに、ターボ婆さんときて……：よりによってお前かよ。

キンゾー。

俺の精神はもう崩壊寸前まで落ちてるぞ？

かなめもそうだが、お前には兄を敬う気持ちとかないのかよ？

だが……ま、仕方ないか。

お前にはお前の理由。サラ博士を生き返らせたい、という理由があるのだからさ。だけど……負けて俺の物語になっても文句は言わせないぞ？

俺にも負けられない理由ができたからな。

だから……。

「いいぜ。闘ってやるよ。兄として弟に教育してやる」

第十八話。目覚めの刻

『兄として、弟に教育してやるよ！』

俺は目の前にいるキンゾーに高々とした態度で宣言した。

キンゾーは俺が戦線布告ともとれる態度をしたことに、苛立ちを募らせたのか……。

「ケツ、兄貴の分際で何言ってるんだよ？」

そんなこと言ってるのか？ Eランクの落ちこぼれのくせによ

「こつちじや、そんなランクなんて意味がないだろ？」

「……本当にいいんだな？ 俺はRランク。兄貴はEランク。」

武偵ならこの意味わかるよな？」

キンゾーの言い分は正しい。

確かにEランク武偵が喧嘩を売っていい相手ではない。

ランク付けされることなんて（模試の結果を除いて）普通の高校生は早々ないことだが。

俺達武偵はランクによって格付けされていて。

通常E〜Sランクまで格付けされる。

Eは落ちこぼれ。Sは人間離れした、いわゆる超人が格付けされる。

Sランクは世界中に（前世での話だが）500人弱しか格付けされていない。

エリート武偵だ。

俺も武偵高時代に一年の三学期までは強襲科アサルトでSランク認定されていた。

探偵科インクレスタへの転科に伴い、Eランク落ちしたのだが……。

（キンゾーはSランクより上のランクに格付けされている世界に7人しかいない『Rランク』武偵で。

エリート意識は俺よりも高い……負けず嫌いだからな）

だから、自分よりも弱い相手に舐められるのは嫌なはずだ！

だから、俺はキンゾーの性格を把握した上で喧嘩を売る。

相手を挑発させればさせるだけ有利になる。

冷静さをなくせばなくすだけ隙が生まれるからな。

上手くいけば、場を支配できる……と思っていたが。

「ま、でも解らなくても仕方ねえか。兄貴だしな……」

「どういう意味だ？」

「兄貴はバカだからな。」

普通の人間がやらないことを平然と行うのが兄貴だろ？」

おい！　それはどういう意味だ？

「兄貴の分際で俺をバカにするなんて百年早えんだよ」

キンゾーはそう言って、全身の筋骨を連動させる技である『桜花』——キンゾーの呼び名では『流星^{メテオ}』を放ってきた。

俺は『橘花』で減速防御をして受け流し、カウンター技である『絶牢』を放つが。

キンゾーは全く同じタイミングで『絶牢』を繰り出してきた。

『絶花』……『絶牢』を絶牢で返す二重カウンター技だ。

俺はキンゾーが放つ蹴りを『絶花』で、受け止めて。

再度『絶花』を放つ。

しかし、キンゾーは俺が放つ『絶花』を『絶花』でまた返し……その繰り返しが20回行なわれ。

21回目の『絶花』がキンゾーから放たれた。

俺は再び『絶花』で返そうとして気づく。

……氷澄の姿が見えないことに。

一度繰り出してしまった『絶花』のモーションはキャンセル出来ずに。

キンゾーに繰り出したその瞬間。

キンゾーの姿が突然目の前から消えた。

「!?？」

煙のように消えたキンゾーを見て。

頭の中に過ぎったのは。

前回の戦いでのラインとキンゾーのこと。

俺はキンゾーが目の前にいるはずだ、と思つて戦つていたが……。

『俺の首を撥ねたのは……お前か?』

その声が聞こえ。

ゾクリ。

背後から感じる冷たい気配に身体が膠着してしまい。

その瞬間。

俺の身体が突然、自分の意識とは別に動き始めて。

ヒュン。

俺の首があつた場所を何かが通過した音が聞こえた。

「チツ……また避けられたか。誇つていいぜ、兄貴。俺の『不可視の線系』インヴァイジビレ・ラインを何度も躲したの兄貴が初めてだからな」

地面に倒れこんだ俺の頭上からそんなキンゾーの声が聞こえてきた。

(い、今のは……まさか)

『ファントムアイズ
の邪眼』。

「今のを躲すとは……どうやらお前の認識を改めねばならないみたいだな、一文字疾風」

氷澄の瞳が蒼い光を放つ。

何かしてくる！

「それを待っていたぜ……」

直後、ゾワツとした寒気と。

その光が強くなっているのを感じた俺は……。

「これを喰らえ！」

すぐさまジャージのズボンのポケットに入れていた手鏡を取り出して、氷澄の顔に突きつけた。

「つ……？」

「邪眼には、鏡だ！」

わざわざ、家に戻った理由。

それは、この手鏡を取りに行く為だ。

昔、映画で、見ただけで相手を石に変えてしまうという『メデューサ』という名の怪物を倒す方法が、『鏡に映ったメデューサを倒す』といったもので。

それとは微妙に違うが、ヒントにはなった。

つまり、相手の眼から何かが出るのなら、光を反射させるとか、自分と相手の間に障害になるものを割り込ませるとかすればいいんだ。

「くっ!?」

氷澄は苦しげに呻き、後ろによろけた。

何かをする気だったのかはわからないが……チャンスだ!

そう思った俺は左手にDフォンを構え

俺は氷澄に向かって右手で『桜花』を放つが……。

「!?」

「させるかよー!

パシユ!

『橘花』と同じ技を使われて。

その突きは、キンゾーによって防がれる。

左手に持ったDフォンのカメラを氷澄に向けたが。

俺はキンゾーに脇腹を蹴られDフォンで氷澄の姿を撮ることはできなかつた。

「チツ……」

「マナーがなっていないぜ兄貴。写真撮影はNGだ」

「くっ……やるじゃないか、一文字疾風。だが、それもここまでだ！」

氷澄はその目を抑えながら、よろめきつつ立ち上がるが、すぐに倒れそうに体が傾いて、慌てて持ち直そうとしていた。その姿はまるで酔っ払いのようだ。

「それに、Dフオンを構えたか……百物語め。やつぱり殺さないという甘い認識で戦うのは無理のようだな」

……Dフオンを構えたのは、なんとなくそうした方がいいような気がしたからだ。

カメラで捉えたら解決する。ロアを相手にするならそんな認識が自然と付いている。

「あー、もうちょよこまかと……」

苛立つ音央の声が聞こえて視線を向けると。

あちらも、音央の放つ無数の茨かシウルツとラインに向かって伸びては、ヒラリと躲かされていた。茨の蔦はさらに音央の手首辺りから伸び始めると、それが独特の生き物のようにウネウネとラインに向かっていった。

鳴央ちゃんはそのような様子をじつと見つめていた。

おそらく、音央が茨でラインを誘い込み、そして動きを封じてからあの真つ暗な暗闇。全てを忘れる暗黒の穴。『アビスフォール奈落落とし』に落とす！ それを狙っているのだろうか。

『主人公』対『主人公』、『ロア』対『ロア』。

それが理想の戦い方なら、俺は今この戦いの場で、この瞬間から強くなるしかない。

みんなを。俺の物語を守る為に。

「せやああああ!!?」

そんなことを考えていたその時。

音央の鋭い声と共に大量の茨が俺達の方にも伸びてきた。

あの茨はかなり痛かったのを思い出す。一つ一つが鋭い刃のような棘を持っているので、囚われた相手はひとたまりもないのだ。あの痛みはもう味わいたくない。

だから俺は慌ててその場から遠ざかった。

「チツ、ラインの奴邪魔しやがって」

「敵味方関係なく攻撃するとは恐ろしいな。あれが『神隠し』か……」

ジーソードと氷澄も、ほとんど同じタイミングでその場から遠ざかっていた。

「ほっほっほっ、なるほど。わらわの速度には敵わんから、ここら一帯をその茨で包もうというのか」

「素早い相手には手数で勝負って一之江さんに聞いたもの!」

「ふむ……そして、そちらの黒髪の方はわらわを……何かの効果範囲に入れる為に待つておるようじゃの」

「うくっ……」

鳴央ちゃんは狙いを読まれて、下唇を噛んでいた。

おそらく『妖精庭園』^{フェアリーガーデン}。あの場所にラインを取り込もうとしているのだろう。だが、ラインの速度は音速。

鳴央ちゃんが『妖精庭園』^{フェアリーガーデン}でその姿を捕らえるより速く移動されてしまったら、『奈落落とし』^{アビスフォール}に落とすこともできないのだろうか。

「あんなに素早く動くのに、どうやって捉えればいいのよ……」

「ほっほっほっ、わらわの強さが身に染みたか、神隠し？」

「なーんてね、弱音を吐いたフリを試みただけよ！」

「ぬっ?」

その言葉通り、ラインの背後から迫っていた茨が、一気にラインの背中に向かって伸びた!

「フンツ、そんなもの……」

「逃がさないわよ! 左右どつちに避けるのかはもう見抜いたんだから!」

音央の両腕から伸びた蔦がラインの両サイドから迫った。

「うおっ! なるほど! 先ほどまでの無闇な攻撃は、わらわの回避の癖を読んでおった、というわけか!」

「え!?? そ、そうだけど、説明ありがと!」

「じゃが、わらわには真っ直ぐが……」

『奈落落とし』^{アビスフォール}！」

「ぬおおお!!?」

ラインの逃げ場は前方しかない、が。前にはすでに……巨大な口を開けた、漆黒の暗闇が待ち構えている。

「待て待て、わらわは急に止まらぬー!!?」

「ラインっ!!?」

氷澄の焦った声が響き渡るが。

そのまま、ラインは言葉通り止まることなど出来ずに。

すっぽりと暗闇の穴の中に入り込んでしまった。

「え、あれ、あっさり?」

「これで終わりでもいいのでしょうか?」

二人は戸惑いの声をあげる。

それも無理はない。

一之江や俺が苦戦した相手。

それがあっさりと倒せたのだろうか。

だが……俺は知っている。

ラインはこの程度で『いなくならない』ということ。

「まだだ、二人共！　まだ終わってない！」

「フツ、その通りだ。ライン！　お前は――『いなくなったと思ったら、目の

前にいる』ロアだろう？」

「えっ？」

「っ!?？」

そして、俺達の前を一瞬で何者かが横切るような気配を感じて。

「わっ、誰かいた!?？」

「まさか、出てきたのですか!?？」

二人の焦った声が聞こえた。

ラインがああの間から抜け出せるはずはない。

神隠しは『最強』クラスの能力を持つロアなのだから。

だが……。

「ばあ」

「きゃあ!?？」

「め、目の前に!?？」

ラインが再びその姿を現した。

「ふむ、やはり『ぼあ』はどうかと思うんじやが」

「気にするな。その方が怖いだろう？」

氷澄の言葉にラインは「そうかもしれんが……」などとボヤいている。

「どうやって出たのよ?？」

「お主らは暗示にかかりやすくなっておったのじや。いるはずがないわらわを見るくらいに」

「いるはずが……ない?」

「うむ、つまりお主らはこう思ったはずじや。わらわが……『ラインは目の前にいる』と」

「ラインは『ターボ婆さん』のロアだからな。『目の前にいる』と思わせれば、現れることが出来る。そういうロアだからな」

そう、それもまた都市伝説のルール。

俺達は氷澄の幻惑にかかってしまったせいにより、ラインが『目の前にいる』と思いついてしまったのだ。だから、ラインは『奈落落とし』に閉じ込められても、出てくることができた。

「ま、幻とかずるいわよ!」

音央は抗議するが、氷澄は取り合わずに首を振った。

「勝利を間近に控えた瞬間の油断……勝ったのかどうかも解らない、思考の隙間。そこに俺の言葉による誘導催眠を行ったに過ぎない。つまり——俺を窮地に追い込んだと思った、お前達の油断が幻を受け入れさせたのさ」

『窮地こそ自身の転機に変える』

それが氷澄が描く主人公像。

氷澄はすでに持っているのだ。俺にはない主人公としてのイメージや具体的な形を。

「さて、氷澄。起死回生も成したのじゃから、そろそろ終わりにするかの？」

「そうだな。まあ、よくやった方だったよ」

「ケツ、兄貴を抑えたのはほとんど俺だろうが！」

「わかっとなるよ、キンゾー。じゃから最期にアレをやるぞー？」

「アレか。ま、いいか。兄貴ならアレを喰らっても死なないだろうしな」

氷澄の瞳が蒼く輝き始める。

ラインとジーサードは、真っ直ぐ俺の方を見つめている。

そして。

ジーサードはラインと俺達との間に立った。

ラインの姿が見えなくなる。

来るぞ。

『ライン・ザ・マツハ音速境界』と『メテオ流星』が来る！

「ふえ……『妖精……』」

音央が技名を言おうとした時には。

「遅いわ!!？」

ラインの叫び声が聞こえて。

『イーヴルアイ厄災の眼』

『ライン・ザ・マツハ音速境界』

『メテオ流星』

もの凄い衝撃音と共に。

ジーサードの体がラインによって押され。

音速の速度からさらに加速して向かって来て。

『メテオ・ザ・マツハ流星境界』！

その姿を俺の視界が捉えた時にはすでに
たのだった。

俺の体は派手に吹き飛んでい

2010年6月19日。午前4時40分。

???

気づけば俺は知らない場所でプカプカ浮いていた。

そこは実に不思議な空間だった。

色とりどりの花が咲き乱れているが、どれもこれも毒々しい色合いをしていて、ステンドグラスのような彩られた様々な光が四方八方から差し込んでいる。キイキイと小さな虫が鳴いているような耳障りな音が辺りから響いてきて……。

虫……蟲だと!?!?

つまり、ここは……。

『ウィッチアトリエ魔法の工房』にようこそ、モンジ君

その声の方に視線を向けると。

プカプカと浮いている俺のすぐ傍に、黒い帽子とフードマントを纏ったキリカがふわふわ浮いていた。

「こんなことも出来るのか。魔法って凄いよなあ」

「魔法だからね!」

お決まりの台詞を吐いたキリカの言う通り。

その場所の印象は魔女らしかった。

キリカの愛らしさとはまるで逆の『気持ち悪さ』を詰め込んだような。

そこにいるだけで吐きそうになる感じの。

まるで邪悪な万華鏡だな、という印象の場所だ。

「モンジ君は一時的にここにを入れるように、さつき契約の証をつけておいたの」

キリカの指摘通り。

手の甲がメチャクチャ熱かった。

……やっぱり、キリカにキスされると何かしらがあるんだな。

「キリカ、音央と鳴央ちゃんが大変なんだ」

「そうだね、瑞江ちゃんほどじゃないけど、立てないくらいは痛めつけられたみたい」

「立てないくらい？」

「だって、君が負けたらあの二人は氷澄君のものになるんでしょ？」

「だったら、氷澄君だっておいそれとは傷つけないよ。」

「……なんだ、そういう交渉じゃなかったんだね？ 最悪、あの二人は無事に済むって

いう」

「ああ……うん。言われてみればそうかもしれないな」

キリカはクスリと、笑うと俺の頭をナデナデしてきた。
かなり恥ずかしいのだが……。

「交渉上手くなつたな」と思ったけど偶然だったんだね。ま、相手が女の子じゃないからモンジ君らしいと言え、モンジ君らしいかな」

それはどういう意味かな、キリカさん？

「ちなみにここは、私が色々と悪巧みをする為の秘密の工房なの。鳴央ちゃんの『妖精庭園』の簡易版かな。魔女はこうやって秘密の工房を持っていて、それぞれ人の道を外れた研究をしている———そういう逸話があるからね」

「なるほど、逸話があるからこういう工房をキリカも持っているのか」

「魔女の逸話っていっぱいあるから楽でいいよ」

キリカはクスクス笑うと。

「それで、モンジ君。どうするの？」

そう、尋ねてきた。

「どうもしない。戻って、氷澄とライン、ジーサードを倒す」

「そんな体で？」

「……どんな体なんだ？」

「内蔵破裂、頭蓋骨粉碎、脳や臓器がピー、で。ピーで。ピーみたいな……」

「え、本当に？」

「う・そ☆」

「おい、キリカ！」

くつ、魔女の口車にまた引っかかちまった。

「それは冗談だけど、かなりズタボロにされてるのは本当かな。血まみれで大変な大怪我。今は私の工房にいるから大丈夫だけど。氷澄君も、君を侮るのは辞めたみたいだよ？」

「あー、なるほど」

氷澄は俺を全力で倒したいってことか。

「だけどさ、キリカ」

「うん？」

「いつも通り、一部分は無傷なんだろう？」

確信があった。

そこだけは無事だと。

そこは無傷だと。

何故ならそこは約束の場所。

だって、俺を殺せるのは一人しかいないのだから。

「あははっ、まあね。なんだ、解ってたんだ？」

「俺の物語だからな。それに氷澄のおかげでようやく理解したんだよ。俺がどんな物語を描きたいかを」

「ああ……そうなんだね」

俺の言葉を聞いたキリカは……どこか遠い目をしながら俺を見た。

「そっか、モンジ君は本当になっちゃうんだ。『百物語』の主人公に」

「うん。だからヒロイン役の一人として、サポートよろしくね」

キリカや一之江がそれを望んでいないことは聞いた。

俺が逆の立場だったら……やっぱり望まない。

だけど、そう。

前に進みたいんだ！

「だって俺は、俺の主人公だからな」

自分の人生の主役は、いつだって自分だ。

だから、自分で選んで、自分で勝ち取らないといけない。

だから。

「あはは！ うん、OKだよモンジ君っ！」

キリカも笑って頷いてくれた。

「それにしても、モンジ君ってやつぱりハーレム野郎だね」

「一之江に言われた呼び方だなあ」

「それじゃ、女たらしの方がいい？」

「ハーレム野郎でお願いします！」

女たらしなんて、不名誉な呼び方は嫌だ。まあ、ハーレム野郎もあまり変わらないと思うが。

だつて仕方がないじゃないか！

みんなを幸せにしたいのだから。

「じゃあ、ちよつとだけモンジ君がちゃんと動けるように、私の力も預けておくね？」

「そんなことをして、またキリカ……」

代償が大変なのに……。

「私も君の物語なんでしょ？　だつたら……後で優しくしてくれればいいから」

「……ああ、優しくするよ。約束だ」

夢げに微笑むとキリカは俺の手の甲に口づけをして。

そこが、さらにやたらと熱くなった。

それと同時に体の底から漲る力を感じた。

「いい女は、こうやって大好きな人を頑張つて送り出すものなんですよ」

「自分で言っちゃうのか、それ」

「あははっ！　じゃあモンジ君。ガンバ！」

キリカの応援が俺にさらなる炎を宿してくれる。

そうか。そうだな。

俺はまだ――。

2010年6月19日。午前4時50分。

「負けてないんだあああああ!!?」

俺は自分の体から出た血だまりから一気に体を動かして起き上がる。

「何っ!!?　貴様……」

「ほう、結構ズタズタにしたんじゃが……」

「ハハハハハッ！ 流石は兄貴だ！

やっぱり兄貴は人間辞めてんなー」

「も、モンジ……？」

「む、無理しないで……ください……」

振り向くと、音央も鳴央ちゃんもアスファルトの上に苦しそうな顔をして倒れていた。

大怪我はしていないさそうだが、それでもダメージはあるのだろう。

「ごめんな、少し休んでいてくれ」

俺は震える手を膝で殴りつけながら、ゆっくり氷澄達の方を見た。

「氷澄、ジーソード……感謝するぜ。お前らのおかげでようやく出来た」

「何が……だ？」

氷澄の警戒の色が高まるのが解る。

無理もない。今、窮地に陥っているのは俺の方で。

『主人公』は窮地こそ、自身の転機に変える。

そう言ったのが、他でもない。氷澄なのだから。

「俺の『百物語』さ」

ようやく理解出来た。

『主人公』や『百物語』で考えていたから駄目だったんだ。
キリカのヒント通りで良かったのだ。

そう、つまり。

「行くぞ、氷澄、ライン、ジーソード」

脳の中で『物語』をイメージする。

『イメージ』出来たら、力を使う為の言葉を唱える。

そうすれば。

俺は自分の『物語』を描ける。

そう。好きに描けばいいんだ。

作家みたいに。

自分だけの、物語を……。

俺は出来る限り、厳かな雰囲気になるように

真剣にその言葉を口した。

「さあ、不可能を可能に変える百物語を始めよう

——！」

その言葉を言い放った瞬間、俺は自身の体が軽くなっていくのと俺の周りから音が消

えていくのを感じた。

それは、まるで空中に浮かんでいくような無重力空間を漂うような不思議な感覚で、ただ不思議な事にそれは決して嫌な感覚ではなかった。

そして、体が軽くなったのと同時に、痛めつけられた身体が軽くなるのも感じる。

自分の体を改めて見渡すと動かせなかった体全体からは赤い、緋色の光が溢れていた。

その光の源を探すとその光は制服のズボンから溢れている。

その光源の中心はズボンのポケットだ。

ポケットに左手を突っ込んで光源の元である緋色に光り輝いくDフォンを取り出すと俺はそれを握りしめたまま、熱い左手の甲をジーソードに向けた。

直後Dフォンが勝手に動作し、俺自身を写真に写す！

すると、今までにない不思議な和音のメロディーが動作音として鳴り響き

「チツ」

ジーソードが舌打ちして。

雨が降り注ぐ路地を黒と金色の光が包み込んだ。

俺の周囲を蠟燭の炎に似た無数の緋色の光が回転していく。

その炎を見つめると炎が変化し、一条の光の線となって俺の頭の中に入ってきた。

頭の中に入った光は俺が持つ力の使い方の情報として頭の中に流れ、ヒステリアモードの俺はその情報により俺の力の使い方を理解していく。

それは、例えるならば、脳がもう一つある感覚。

その脳を名付けるならば、『ロアの知識』。

その『ロアの知識』により俺は知る。

その頭の中には、常に大きな書物が、幾つもの蠟燭に照らされて大量に浮かんでいるという、『書庫』のイメージがある。

その中でも二冊の本が俺の前に浮かんでいた。

『月隠のメリーズドール』。そして……もう一つ。

その本に手を伸ばすと、それは『不可能を可能にする男』の物語だった。

俺はその一冊を自身の本として、共に歩むことを選択する。

途端に『不可能を可能にする男』の物語が、俺の中に溢れ始めた。

物語に『干渉』してその物語の存在性を『変化』させることができる存在。

それが……！

『不可能を可能にする男』。

『エネイフ
ル
』

それは俺自身を示す二つ名。俺自身の事だが、その姿、その存在とは一体どんなものなんだろうか？

俺が思い描くその物語とはなんだろうか？

それはきつと、こういう物語に違いない。

『不可能を可能にする男とは……人々が嘆き、絶望し、諦める現実には、たった一人になつても立ち向かおうとする存在』。

絶望しても、挫けそうになつても、ただひたすら前へと進んで『絶望を無くす』為に奔走する存在。

『たった一人になつても挑み続けるヒーロー』。

『最後の希望』

そう、それがきつと……。

『不可能を可能にする』といった存在なんだ！

武偵憲章第10条。

『諦めるな。武偵は絶対、諦めるな！』

諦めの悪さなら、誰にも負けねえ！

そう思いながら、『不可能を可能にする男』の本を手にとると、イメージの中で手に

取った本が実体化した。

そして……自身の姿をイメージすると自分自分が想像した姿へと俺の姿が変化していく。

『不可能を可能に変える男』なら、きつと……その姿は。

「ハハハ、面白れえ。さすがは兄貴だ」

「なぬ?!? 変身したかどうか?!?」

いかん、氷澄、キンゾー!

さささつと、倒さないとマズイぞ。

『音速境界』!」

「馬鹿な……二つのロアを融合させた……だと?　くつ、行くぞ。『厄災の眼』」

「ハハ、流石だぜ。やっぱ兄貴は『天才』だな。俺も本気で行くからよオ、楽しませろよ

?　ぶち抜け、『不可視の線糸』」

ラインの大声が聞こえ。

キンゾーが技名を叫んだ次の瞬間。

それまで見えていたラインの姿が消えた。

それは一瞬の出来事だった。

だが……。

「そこだー」

俺は自身の前方に向けて『橘花』と『桜花』を放ち。

さらに右手を差し出し、前方へ掌を向けた。

次の瞬間。

パーアアアアアアアんと、衝撃音と。

パリーン、と何かが弾け飛ぶような音が聞こえると。

受けた衝撃は、ラインの『音速境界』。

弾け飛んだのは、キンゾーが作り出した糸。『不可視の線糸』だ。

そう。今俺は……音速で突っ込んできたラインを『橘花』で受け止めただけではなく。

キンゾーの技を消したのだ。

ずっと考えていた。

俺のロアとは何かを。

そして、気づいたんだ。

俺というロアの特異性に。

キリ力戦で出来た事象。

『物語の改変』。

相手の物語に干渉してその物語を変えられるなら……その物語を消すこともできる

はずだと。

そう。俺の能力とは……。

『消去と干渉』。

俺はありとあらゆる物語に干渉して、その物語を作り変えたり、あるいは消すことができる。

そういつた存在ではないかと。

「全てを無に還せ。『削除』。そして、物語を描き直せ、『改稿』」

キリカが言っていたように『作家や編集者のように物語を作り変える存在』……それが俺のロア。

『不可能を可能にする男』なのだから。

俺が思い描いた姿は、全身は黒い背広姿で、その上から白のロングコートを羽織り、頭に黒いシルクハットを被っている。

『百物語』用のDフォンはモノクルに変化した。

左右両眼にそのモノクルを装着している。

見た目はかなり怪しい人物だが、一応学者賢者っぽくも見えなくはない。

百もの物語を集めるならば、学者や賢者っぽい感じで。

不可能を可能に変えるなら……それはきつと探偵っぽい感じだろう、と思つてイメー

ジした姿がこれだ！

ただ、普通の学者にはない……胸の内ポケットにホルスターを付けていて。

左右のホルスターには俺の愛銃、ベレッタM92Fsと黒いデザートイーグルが収められている。

さらに右手に握っていた『エネイブル弩』用のDフォンは緋色に光り、今や細身の刀。

直刀に近い形状の……スクラマ・サクスに変化している。

『ロアの知識』によって把握すると。

今の俺はすでにただの『百物語』の主人公ではなくなっていることを知る。

そう。『物語が書き換わった』のだ。『不可能を可能にする男』の力によって。

今や『不可能を可能にする男』の力は『百物語』と完全に融合していた。

「主人公は変身してからが本番だろ？」

スクラマサクスを右手に握り、ラインへの返事を返しながらジーソード達を睨み付ける。

スクラマサクスを振るい、ジーソードが張ったピアノ線を全て切り裂いていく。

今の俺にはどこにピアノ線が張られているのかが、手に取るように解る。

見えるからだ！

ヒス化している今の俺には、全て見える。

ジーサードがどこにピアノ線を張ったのか、とか。

高速で動き回るラインのその姿でさえも……。

全て、見える。

世界が、視界が超超スローモーションの映像のようになって見えてしまう。

『ロアの知識』に接続した俺は、これが俺の能力の一つだと知る。

『加速する思考』
アクセルワールド

『不可能を可能にする男は起こる事象をスローモーションで見ることが出来る』

そういつた逸話から生まれた能力だ。

ま、実際はヒステリアモードの空間把握能力とか、加速した思考力とか、そういつた

要因でできることなのだが……その噂を利用しない手はない。

『ロアは噂に左右されるもの』だからな！

そして。

百物語の主人公とは何か……を考えて得たイメージ。

俺にとっての『百物語』とは何か？

それはきつと。

———
手に入れた大切な物語達と共に歩み、戦い、どうしようもない出来事を

一緒に変えていく為の力。

それが俺の『百物語』だ！

第十九話。終わる日常

「なっ……なんだその力は!?？」

氷澄の驚愕顔を、その意図するものも鮮明に捉える事が出来る。まるで、見えている世界の情報が一気に書き換わったかのような、別の脳がもう一つあるかのようなそんな感じだ。

ただの目で見た情報ではなく、物語を『ロアの視点』で把握するような意識が俺のものとは別に生まれている。ヒステリアモードではない、『ロア』としての俺の力。

そんな新たな脳……『ロアの知識』の中にはあるイメージがある。

それは大きな書物が、幾つにも蠟燭に照らされて大量に浮かんでいるという『書庫』のイメージだ。

その中の一冊。先ほど、俺が選ばなかった物語に手を伸ばすと、それは『月隠のメリーズドール』の物語だった。

俺はその物語を、自身が共に歩む物語として選択する。

その途端、『月隠のメリーズドール』の物語が、俺の中に溢れ始めた。

—— そうだ。これが人間ではなく、という感覚なんだ！

これが『ロア』になるという意識なんだ！

高揚感と共に寂寥感もあるのは、『人間を辞めた人間』になった、というのを受け止めなければならぬからだ。理子語でいう『逸般人』に俺はなってしまったのだ。

だけど……。

大事な物語を守る為なら。

大事な人達の笑顔を守る為ならば。

いつも通りの『日常』を過ごせるようにする為ならば。

この力はなくてはならないものだ！

『月隠のメリーズドル』！』

俺が一言口にした瞬間、そのイメージで手にしていた本が実体化した。

直後、俺は跳躍していた。

『^{リンガーベル}想起跳躍』！』

言葉を聞いた対象の元に空間を超えて移動する能力。

その能力を使うと、一瞬で視界が切り替わり、そこは氷澄の背後になっていた。

「おりやつ！！？」

手刀をそのから空きの背中に向けて繰り出す……が。

「させるかよー！」

その手はキンゾーによって阻まれる。

反対側の手を使って『桜花』気味に手刀を繰り出したが……その手は横からラインに掴まれて止められた。

「ぐっ！ やりおるな……お主、自身がバケモノになることを認めおったか！」

「バケモノじゃない、俺の大切な物語達だ！」

そのまま、ラインに向けて、今度は『桜花』気味に蹴りを放つが、彼女は一瞬のうちにその姿を消していた。

キンゾーと氷澄の姿もない、音よりも速く移動してしまったようだ。

だが、今度は見える。今の俺ならラインの動きも、キンゾーの動きも見える！

実際に触れ合って解ったが、ラインは速度は速いが、実際の身体能力や殺傷力はあまりない。

攻撃として警戒しなければいけないのは、『音速境界』ライン・ザ・マツハを始めとしたロアならではの技だけだ。ラインよりも警戒しなければならぬのは、やはり。

『俺の首を撥ねたのは、お前か？』

その声が聞こえた瞬間、俺の瞳にはスローな動きながらも俺の首の位置。丁度頸動脈を切る角度にワイヤーが迫るのが見える。俺はすぐ様、首の位置を右下に傾ける。

その直後！

ヒューン、と何かが地面に向かって突き刺さる音が聞こえ。

その音の正体を確認すると。

それは、細いピアノ線のようなワイヤーだった。

ピアノ線を自在に操る存在。

……そんなことが出来るロアは、奴しかいない。

「剣や銃より、拳の方が強いんじゃないか？ キンゾー？」

「ケツ、兄貴を今ので仕留められるなんて思っちゃいねえよ。ただの準備運動さ。本気になった兄貴と闘る為の、な」

氷澄よりも、その相棒であるラインよりも警戒しなければならぬ相手。

それは俺の弟。遠山金三だ！

このアホ弟は……キンゾーはアホみたいに強い。

ロア化してなくても軽く人間を辞めてるような奴で。むしろ、『逸般人』と呼ぶにふさわしいのはこのアホの弟の方だ。

「なんか今……兄貴に思いつきりバカにされた感じがしたな……バカ兄貴の分際で、『人工天才』をバカにしゃがったら許さねえからな！」

兄貴の分際ってなんだよ!!?

ま、いいけどさ。

「で、準備運動はもう終わりか？」

俺の問いにキンゾーは頷くと。

ノーモーションで掌打を放ってきた。

それは紛れもない、キンゾーの本気の一撃。

『桜花』や『流星』とは違う、相手を殺す為の真正正銘の『必殺技』。

そう。鬼の一味。『閻』が放って、俺がこの世界に来ることになった原因ともいえる技。

『羅刹』。

相手を確実に心肺停止させる文字通りの必殺技だ。

(これは避けられない。なら……『回天』！)

バ、シューーン。

キンゾーの掌から放たれた衝撃により一度は俺の心臓はその機能を停止させるも。

『桜花』を前後から同時にぶつけて無理矢理自己蘇生させる荒技、『回天』を放った事により、その鼓動は再び開始される。

「痛つてえええ……死にかけてたじゃねえか！」

「兄貴ならこのくらい平気だろ？」

次は兄貴が俺に放てよ？　自己^{マッサー}蘇生の練習しようぜ？」

まるで、キャッチボールやろうぜ、的なノリで話しかけてくるアホの弟。
ほら見ろ！

お前のその常識外の珍行動のせいで、氷澄やラインが呆然としてるじゃねえかー!!??
「……ヤバい奴らと関わりあつてしまったようじゃな。氷澄、撤退した方が良いかもし
れぬぞ」

「バカな……死んで生き返つた、だど!!??」

悪い夢でも見てるのか……俺は？」

氷澄の顔には焦りや怖れといった感情が浮かんでいた。

今まで数多くの『主人公』に勝ち続けてきた氷澄だが、俺やキンゾーのような『超人』
染みた強さを持つ人間とは戦つた事はなかつたみたいだ。

「氷澄、撤退じゃ。今のお主では奴には勝てぬ。」

『畏れ』を抱いた、今のお主ではな……」

「この俺が怖れているだど？」

バカな……俺があいつに負けると言うのか!!??」

しかし、氷澄のプライドは撤退を認めなかった。

そんな氷澄に対してラインは複雑そうな顔を浮かべながらも「それでも仕方ないか」
という見守るような視線を向けていた。

そのラインの顔を見た俺は、あのコンビにもチームワークがきちんと存在しているというのを理解した。

それがどんな絆で繋がっているものなのかは解らないが、強い結びつきなのかは理解できる。

だが、氷澄はそんなラインの視線には気付くことはなく、俺を睨み。

「それに、あいつの全身はポロポロだ。いかにロア化したとはいえ、長く動けるはずがない。お前やサードが回避し続ける限り、力尽きるのは時間の問題だ！」

氷澄の指摘は冷静で、正しい。

俺はロア化した瞬間から、急速に力が『世界』に奪われていくような……まるで、自分の中の体力が蒸気となって吸い上げられているかのような感覚を感じていた。

このまま、戦闘が長期化すれば、先に倒れてしまうのは俺の方だ。

本当に不利なのは実を言うと俺の方なのだ。

だが、氷澄は一つだけ勘違いをしている。

「間違えてるぞ、氷澄」

不敵な笑みを浮かべた俺に、氷澄は警戒した顔で聞き返す。

「『全身』をポロポロにした。本当にそう思っているのか？」

確かに俺の体はポロポロだ。

あちこちの肉は裂け、血は嘔き出している。
だが。

俺は『全身』をズタズタにされることはない、と知っている。

さつきから……いや、思い返せば、ずっと。

背中に感じる熱さがある！

「お主……」

ラインが訝しげな視線を俺に向ける。

彼女は気付いたのだろう。全身を切り裂くはずの、音速を超える技を何度も受けたに
もかかわらず。

その部分だけは影響を全く受けていないということに。

「何故、その背中には……一切の傷がないのじゃ？」

ピピピピピピピピピピピピピピピピピピピピピピピピピピピピ！

ラインがそう尋ねたその時だった。

突然、スクラマサクストモノクルとなったDフォンから、着信音がけたたましく鳴り
響き。

「「……………っ!!??」」

氷澄、ライン、キンゾーが驚いている間に、その音は勝手に鳴り止み……。

『もしもし、私よ』

俺のDフォンから、そんな電子音っぽい声が響き渡る。

『今、貴方の後ろにいるの』

「貴様……………!!??」

氷澄がソイツの登場に、戦慄して息を飲むのが解る。

それと同時に、俺の背後に、ピツタリと寄り添う彼女の感触を感じる。

そう。これが俺が感じていた熱の正体。有利だろうが、不利だろうがどこでも現れる少女。

それは、そう、紛れもなく。

「一之江……………「ミズエ・ドリル!!??」痛ダダダダダダダダダ!!??」

久しぶりの登場。そこには感動の再会が……。

ガリガリガリガリ！ 何かが背中に突き立てられてる!!??

「アダダダダダダダダ!!??」

感動の再会？

何ソレ？

喰えんのか？

「新たな必殺技は成功のようですね……」

「いきなり何するんだ？？」

「うっわっ、カッコつけ病をこじらせたみたいな格好ですね。うっわ」

「うっわ、とか二度も言うな！」

「いや、だって。白いロングコートで。黒いスーツに。モノクルに、スクラマサクスつて。うわー。しかも私の能力を使うからって金髪までパクツて。このパクリストめ！」

「あー……何かいろいろすまん」

指摘されると、どんどん恥ずかしくなる。

変身ヒーローは皆んな、こんな羞恥心とかとも戦っていたんだな。これからは変身ヒーロー達に共感しながら、特撮とかも見れそうだ。

「まあ、外見の痛さはさておき。ついに『百物語』の『主人公』にもなりやがりましたか。

あーあ」

「あ、ああ、まあな」

あーあ、つて。一之江の声は、やや責めるような感じだな。

そういうえば、キリカが言っていたな。

『俺が戦う力を求めるのが、一之江も悔しいはず……だ』と。

一之江やキリカが俺に対して求めなかった『百物語』の力。

だけど、やっぱり悔しかったんだ。

守られるだけの存在にはなりたくない。

女に守られるのは……何か違う。

やっぱり、男なら皆んなこう思うはずだ！

何がなんでも……女を守るってな。

それに。

コイツと……皆んなと一緒にやっついていく為にはやっぱり必要な力だ！

「……じゃあ、もう守らなくてもいいんですね？」

「ああ、任せてくれ！　今度は俺が守るよ。君のことをずっと！」

「な、なら任せましょう」

そう答えた一之江の声は僅かに震えていたが……あれか？

まだ本調子ではないからか？

そんなことを考えていると。

俺の背後から一之江の気配が消えて。

「それでも、私を見ないようにしなさい、モンジ。うつかり殺してしまうので」

一瞬でラインの背後に現れていた。

「なっ!??!」

ラインは慌ててその場から移動するが、一之江はそんなラインの背後にピッタリとくっついたまま離れない。

「アホな格好つけ男を守らなくてよくなったので、ようやく私もちよつとだけ本気を出せます」

「本気じゃと……? ふん、ハッターを!」

ラインはさらに加速して一之江から距離を取ろうとするが、一之江の姿はラインの背にくっついたまま、離れる事はなかった。

「なぬっ!??! わらわについて来るじゃと!??!」

「ですから、本気をちよつぴり出すと言ったでしょう?」

一之江はピッタリとラインの背後にくっついて、高速移動をしている。

あまりにも速い動きのせいか、俺は一之江の顔を見ないですむ。

「どういうことだ……?」

ラインの速度にピッタリとくっついて一之江を見て、氷澄は冷や汗を流している。

俺は今、一之江のロア……『月隠のメリーズドール』を自分の物語として宿している

から、一之江がどのような『逸話』を使ってラインを追っているのかか解ってしまった。「二之江のロアは『逃げる対象を絶対に逃がさない』。その逸話を持つ限り、一之江から……月隠のメリーズドールからは逃げられないだよ。ラインが『いなくなつたと思つたら、目の前にいる』ロアなのと同じようにな」

ラインは音速で動く為、音を聞いた対象の背後に現れるという『想起跳躍』リンガーベルは通じなかつたが、本気を出した一之江はそんな技を使わなくても、延々と追いかけて続けることが出来るのだ。

あの日、『ロアの世界』に閉じ込めて、俺を延々と追いかけて回した時のように……。自分の逸話を、自分の為だけに使うことが出来れば。

一之江は、最強の殺戮都市伝説……『月隠のメリーズドール』なのだから。

「貴様……その知識、完全にロアをその身に宿しているというのか……？」

「ああ、だから俺もお前達を逃がさない。いいか、……」

氷澄、キンゾー

俺は氷澄とその隣にいるキンゾーに指を向けて。

「俺が背後を取つたら、絶対に振り向くなよ？」

そう一言告げた。

すると氷澄は逃げ出そうとし、俺はそんな氷澄の背後に現れたが。

突然消えて現れたキンゾーによって道を塞がれる。

『いなくなっただと思っただら、目の前にいる口ア』……それはキンゾーにも当てはまる。

「チツ……ついに人間を辞めたか。いや、元から辞めてたな。だが……兄貴の人外っぷりはNASAも驚くほどだな。そうだと兄貴？　ちよつと兄貴の髪の毛採らせてくれよ。兄貴の細胞から『人間兵器』造るからよ」

そんなことを言ったキンゾーの背後に『想起跳躍』で移動した俺は、『桜花』を放ったやっただが……そこはRランクの超人武偵。『橘花』と同じような技で拳を受け流すと、『流星』を放ってきた。

俺はその『流星』を『橘花』で受け流し、『絶牢』で返す、それをキンゾーは『絶花』返す。その一連の流れを15回繰り返したが、決着はつかない。

「なら、キンゾー。そろそろ決着付けようぜ？」

仕方ないので、代々遠山家に伝わる『切り札』で勝敗を決めることにした。

キンゾーは「それで決着をつけるのが俺達にふさわしい方法だよな」とノリ気で快諾し。

そして、お互いにそれを繰り返した。

俺はキンゾーの背後にピッタリとくっついたまま、前に向かって頭を『桜花』気味に

振り放ち。

キンゾーは俺の姿を見ないように視線を逸らしながら……『流星』^{メテオ}を振り放った。
拳や脚ではなく。

超音速の……文字通り、全身全霊をかけた《切り札》を放った。

ゴスツ!!?

「ぐはっ……!!?」

ゴスツ、と何か硬いものに当たる感触を感じる。

「痛てええええ……この石頭野郎——!」

「それはお互い様だろうが——!」

「うぐっ!!? つううう……兄貴の石頭はそれだけで都市伝説になるレベルだぜ

……」

そんな軽口を叩き合いながら気づく。

「つうか、キンゾー。お前、首から上なのにこの勝負受けたのかよー」

『首なしライダー』のロアであるにもかかわらず、キンゾーはあたかも頭突きを食らったかのような感じで話す。だが、首がないなら当然、頭突きなんか出来るわけは……
圧倒的に不利な勝敗の決着なのだが。

「……まあ、なんだ。俺としちゃ、兄貴と会えた時点で勝ち負けはワリとどうでもいいん

だよ。

兄貴がどんな口アで、どんな能力を持っているか。それを知れたかっただけだしな。だけど勘違いすんなよ？ 俺は負けてねえからな！ ……今回の勝負も引き分けだ！」

そう言つて降参のポーズを取るキンゾー。

どうでもいい、と言いなながらも負けは認めないのかよ。

ま、それならそれでキンゾーらしいから、いいんだけどな。

と、そんなやり取りをしていると。

「ぐっ！」

キンゾーの様子を見守っていた氷澄がその場から離れようと走り出した。

ラインだけではなく、キンゾーまでもがやられてしまった。

氷澄の頭の中は恐怖やパニックでいっぱいなのだろう。

だが、今の俺は『月隠のメリーズドール』を模した口ア。

その背を逃すことは————ない。

俺、という対象を『被害者』として指定する必要がなくなつたからか。ここにいるのは一之江が『都市伝説』の逸話通りに殺す『被害者』ではない。彼女の物語を自分の体に宿した、『月隠のメリーズドール』の逸話を纏つた『主人公』なのだから。

そう、俺がイメージした『百物語』はそれだ。

『大切な物語』と共に、不可能を可能に変えていく『主人公』。

一緒に、この街を、大切な人達を守る
仲間だ！

「くそっ！」

氷澄から、苦々しい声が溢れる。

今の俺はそんな氷澄の背を確実に追い詰める、そういった存在。

スクラマサクスではなく、鎌を持っていたら間違ひなく死神とかと間違われるような、そんな存在だ。

狙った相手に思考をする時間すら与えずに追い詰め、そして
決着をつけ
る！

それが今の俺の役目だ。

「ライン！」

「なんじゃの？」　いて、いてっ！」

ラインはラインで、ずっと走って逃げ続けていた。

背中に一之江が刃物をつんつんと突き刺している。

「俺がコイツらの姿を捉える。お前は無差別に仕掛ける！」

「ふむ。危険性も高いが、やるしかないようじゃな！」

氷澄とラインのやり取りで解った。

来るぞ！

『イヴァルアイ厄災の眼』と『ライン・ザ・マツハ音速境界』の合わせ技が！

氷澄の『見た』対象に厄災を集めてラインの無差別攻撃を対象指定に出来る、という無茶苦茶な能力が。

確かに……俺と一之江の姿を既に見ているアイツなら可能だろう。

だが……それだけならばまだ大丈夫だ！

と、思っている。

「キンゾー！ お主も来い！」

「ケツ、仕方ねえな……」

ラインの呼びかけにキンゾーも参加の意思表示をし出した。

空気読めよ、キンゾーさん!!?

さすがは不運に定評のある俺だ。無理ゲー仕様の強制イベントに参加させられるとは。

おいおい、勘弁してくれよ。

こちとらただの高校生なんだからさ。

強制イベントなんか願ひ下げだ！

だが俺の願い虚しく……キンゾーはなぜだかやる気に満ち溢れている。
マズイぞ。来るぞ！

ラインだけではなく、キンゾーの『流星』^{メテオ}を加えた超音速の合わせ技が！
『モンジ君、どうするの？』

右手の甲が熱くなり、キリカの声が聞こえた。

俺は————— 少しだけ考えた後。

「なんとなく、やりたいことがある。……一之江！ こつちに来てくれ！」
ラインを追っていた一之江を呼んだ。

「む……」

俺の意図を読んだのか、それとも普通に従ってくれたのか。

それは解らないが一之江はラインの背中を突き刺すのを止めて、俺の背に一瞬で戻ってきて開口一番に、尋ねてきた。

「で、あの技以上のものが来るわけですが、それをどうするんですか？」

「撃ち破ろうと思う」

「勝算は？」

「君の能力を使うんだ。勝てないわけない……だろ？」

「はい、素晴らしい勝算です」

そんな会話を交わした後、氷澄達を見た。

「なんと、あやつら立ち向かうつもりのようにやぞ」

「フンツ、俺達の攻撃を打ち破れるものか」

「氷澄……それは打ち破られるフラグじゃぞ」

「うっ……じゃあ、なんて言えばいいんだよ？」

「撃ち破られるかもしれんが、愛と友情で勝ってみせる、とかじゃな」

「……愛とか友情、あるのか？」

「わからからお主にはこれっぽっちもないな」

「そうか……」

「なんの話してんだよ？　打ち破れるもんなら、打ち破ってみやがれ!!!」

「……そのくらいふかせよ」

「おおっ！　　なんか『主人公』っぽいとう」

「やれるものなら、やってみやがれ!!!」

「……こんな感じか？」

「……お主には似合わないな」

「……さっきの感じでいいんじゃないやねえか？」

「やらせておいてそれかよ!?!？」

向こうは向こうで、仲よさそうな雰囲気だ。

なんだろうな。やっぱり氷澄には親近感が湧く。

『モンジ君や瑞江ちゃんに似た関係だからだろうね』

「馬鹿な。私ほど博愛精神と友愛の心を持った善良乙女はいませんて」

「そうだといいんだけどなあ……」

氷澄とは、この戦いが終わった後に仲良くなれそうだ。

相棒に対する扱いについてとかで。

そういった関係を築く為にも……

「よし、勝つか!」

「ですね」

『うん、やっちゃえっ』

俺達の心は一つになった。

「さて、いくぞ、一文字疾風!!?」

「ああ、こい、氷澄!!?」

氷澄がその青い瞳で俺達を睨みつけてきた。

その瞬間、辺りの景色が一瞬で青と黒のモノトーンカラーに染まり……

『厄災の眼!』

「一之江！」

「もしもし私よ……」

『音速境界』！
ライン・ザ・マツハ

「行くぜ、兄貴！！？」
『流星』！
メテオ

（散らせるもんなら……散らせてみやがれ！！）

一之江の言葉が終わるよりも速く、ラインは攻撃に移っていて。

一瞬のうちに最高速度に対したラインはキンゾーの背中を押しだしながら加速した。

ラインに押し出されたキンゾーは音速を超える速度で俺達に迫る。

だが……その『速度』こそが。

焦ったように、ただひたすら『先に』行動してしまつたことが。

彼らの失敗だつたんだ。

『流星境界』！！
メテオ・ザ・マツハ

ズガガガガガ！！？

もの凄い衝撃音が鳴り響く。

『音速境界』によつて『加速』したラインが、キンゾーを押しだし。

ラインに押し出された瞬間、キンゾーは『流星』メテオを放ちさらに『加速』する。

音速と音速が合わせ合い、より高い撃力を加える超音速技。

それはまるで『人間砲弾』のような荒技。

その荒技によって発生した凄まじい空気の衝撃波が俺と一之江を襲う瞬間。その瞬間を俺の瞳はスローモーションのように捉えていた。超解析度のカメラで見るとのよう。鮮明に。

そして、その衝撃波が俺と一之江を襲う……その瞬間。僅かコマ数秒の刻。俺達は同時にソレを口にしていた。

『今、貴方の後ろにいるの』

「何っ!!?」

ラインは一之江の声を聞いてしまった。

「馬鹿な……」

水澄は、俺の声を聞いてしまった。

だから。

一之江はラインの背後にピッタリ、くっついて彼女を抱き締めて。

俺は水澄の背後について、彼を羽交い締めにしていった。

キンゾーは何もない。誰もいない場所に一人で突っ込み。

ガツシャーンと何かを壊すような音をあげ、そして静かになった。

多分死んでいないと思うので放置して氷澄とラインに向かつて話しかける。

「一之江が俺を庇って倒れた時、お前は言ったよな。『二人に降りかかるはずの厄災を一人で肩代わりしたというのか』って。つまり、こうやってその厄災は……」

「目の前にいる人に肩代わりさせることが出来るということですよ」

そう言ったその瞬間、まるで台風のような、強力な空気の渦がキンゾーが向かった先から突然発生して、俺達を襲いかかる。

俺達はその渦に飲み込まれて、空中に高く放り出された。

俺は空中に突然投げ出されたにもかかわらず、意外に冷静だった。ヒステリアモードの俺だから、というのものもあるが、なぜだかまるで負ける気はしなかった。

俺は投げ出された空中で、体を動かし……おもいつきり氷澄を空中に放り投げた。

まったく同じタイミングで一之江が放り投げたラインに向けて。

直後、ゴチン、と鈍い音が鳴り響き、二人は地面に落下していった。

それを見届けながら、俺と一之江は空中で手を繋いで

衝撃の威力を殺すように、何度か回転しながら地面に着地した。

「す……」

「モンジさん、一之江さん……」

着地点にいた音央、鳴央ちゃん姉妹の呆けたような声を聞きながら、ドサツと地面に落ちたラインと氷澄の姿を確認して。

その姿を見納めてから、俺達は安堵の溜息をついて。

「俺達の勝ちだ」

「私の勝ちですよ『ターポロリババ』」

そう宣言したのだった。

2010年6月19日。午前5時半。夜霞市内路上。

しばらくして目を覚ました氷澄にはもう戦鬪の意思はなくなっていた。

雨も止み、雲も薄くなっているせいかな、朝日は明るく感じる。

そんな朝日を見ながら思う。

（今日、学校なくてよかった……）

「で、だ、氷澄」

「約束は守るさ」

「心配せんでも氷澄は約束は守る男じゃよ?」

眼鏡をかけ直した氷澄を見ながら、ラインはスカートに付いた汚れを叩きながらそう言う。

（ちよ、スカート叩くな?!? 見えたらヒスるだろうが!）

ヒステリア性の血流が収まってきた俺はラインから慌てて視線を逸らす。

「仲間になる、という意味はよく解らないが……この街を守るといふのは、まあ気まぐれに手を貸してもいい。俺にとってもお前のような人間を辞めた人間が同じ街にいるだけでもプラスだからな」

「なんだよ、人間辞めた人間って……ま、協力してくれるのは嬉しいけどさ」

「本当は貴方が勝つたのだから、彼を貴方の物語として取り込んでもいいのですよ?」

俺の横で、いつもの蒼青学園の制服姿になった一之江がさりとそう言ったが。

「いや、それは違うだろ?」

確かにさっきの勝負には勝つたが、その前の戦いでは負けていたからな。

「一勝一敗だろ?」

「まあ、そうですが」

「うむ。わらわとお主も一勝一敗じゃぞ」

「ですから、最初のは本気を出していなかったと言っているでしょう」

「わはは、それでも一勝一敗はかわりあるまい！」

豪快に笑いながら、ラインは一之江に告げる。

一之江はそんなラインに反論はせずに、ふう、と溜息を吐いた。

そんな彼女らの傍らでは音央や鳴央の姉妹は「お風呂に入りたい」と言っている。

……雨降って地固まる、ってヤツか。

『お疲れ様、モンジ君っ』

と、手の甲からキリカの声が聞こえた。

「ああ、キリカもありがとうな。お前のアドバイスのおかげで助かったぜ」

「いいって、いいって。私もモンジ君のお役に立てて嬉しいからね」

「そうか？ それならいいや」

などと呟いた俺だが、ヒステリアモードに軽くかかっていた俺はふと、キリカが先ほどまで弱っていた光景を思い出してしまい。

キリカへの感謝を込めて……自分の手の甲に口づけをってしまった。

と、その瞬間。

『ひゃわああああ!!?』

キリカの声が頭の中で響いた。

「え? な、なんだ、どうした?」

『も、もも……』

「桃?」

『も、もも、ももモンジ君、ま、まんで?』

「桃……まん?」

なんだよ? まさか、キリカ……アリアみたいな桃まん中毒になったとか言わない

よな?

『い、今、今っ!』

「……?」 手の甲に口づけしたのがいけなかったのか?

感謝の気持ちを込めてみたんだが……」

軽い挨拶みたいなものだったんだが。

『か、感謝、か、そ、そうだよね。うん、そうだよねっ! ……モンジ君だし』

……うーん、感謝はやっぱ言葉で伝えないと伝わらないのかもな。

「そうだよな。すまん。間接キスみたいになっちゃったな」

『へ？ 間接キス？ ……あー、うん、そうね、そうだね、それで驚いたんだよ！』
「うん？」

キリカの声がなんか沈んだのだが、なんかしたか俺？

「瑞江・ドリル」

「うっ、ぎゃああああ!!？」

背中に突然激痛が走った。

ガリガリガリガリと、背中になにやら硬いものが突き刺さるような感触を感じる。

「何すんだよ、一之江!!？」

「さっきのはミズエ・ドリル。あれはロアバージョンだったので、回転度をかなり上げたものでした。そして今のは瑞江・ドリル。良い子にも優しい指先の大回転です」

右手の人差し指を立てて一之江は説明した。

確かにさっきのに比べたらだいぶ優しいが……って、ちよつと待て！

「指先だけで、あの激痛を起こした……だと!!？」

「困るキリカさんを助ける為でした」

『うう、瑞江ちゃんありがとう……』

キリカは困っていたのか。なんとというか、女心ってやつぱり難しいな。

「何やってんのよ」

「おそらく、何かの手段でキリカさんと交信しているみたいですね」

音央や鳴央ちゃんまでもが加わって賑やかになってきた。

と、そんなこんなで姦しく騒いでいると。

「痛つてええ、バカ兄貴の分際でやりやがったな……」

キンゾーが起き上がり。

それを合図に、氷澄やラインも立ち上がった。

「もう回復したのか？」

「歩ける程度にはな。そろそろ戻って完全回復に専念させて貰うさ」

「そっか。それじゃ、連絡先交換しようぜ」

俺たちは互いの連絡先を交換し合った。

『氷澄・エンフィールド』……それが氷澄の本名らしい。

「それじゃあの。たまには境山でバイクでも運転するがよい」

「免許取つたらな」

ラインはラインでマイペースにその姿を消していき。

「俺のでよければいつでも乗せてやるよ」

キンゾーはキンゾーで派手派手な特攻服を着て、爆音を立ててバイクを走らせ消えていった。

氷澄は、軽く片手を挙げて立ち去っていく。

「それじゃ、また、な！」

俺は立ち去る氷澄の背にそう呟いた。

「ふうー、終わったな」

地面に膝を着きながら、俺はそう呟くと。

「ええ、結構疲れましたね……」

一之江は溜息交じりに呟き。

「よいしょっ」

膝をついた俺の背中に、自身の背中を乗せて寄りかかってきた。

「うおっと!!?」

「ちゃんと支えなさい。私は怪我人の身でありながらわざわざ来てやったのですから」

「ああ、そう……だな」

「そうですよ。それにしても……勝手に『百物語』になりやがりましたね」

「……まあ、それは、ほら」

「ほら……なんですか？」

「……お前が傷付く姿は見たくなかったんだ。

俺はお前らを、みんなを、大切な物語を守る『主人公』になりたい！」

「……ふう、貴方も男の子なんですネ」

一之江のその口調は諦めを含む声色だが、優しい響きも持っていた。

「これ以上、足を引つ張つたら許しませんからね」

「ああ————解つた」

「約束しなさい。無茶だけはしないと。力を手に入れたからつて、一人で無茶はしないと。私やキリカさん、音央さん、鳴央さんが心配するような事は極力しないようにする、と」

「ああ————約束するよ」

「指切りです。嘘付いたらナイフ千本————串刺す。指切つたよ」

「針千本じゃないのかよ!?」

「サウザンドナイフ。カツコイイでしょう?」

「……まあ、確かに」

ちよつと男心を刺激する言葉だが。

実際はナイフ千本を背中に突き刺すだけだろう。

俺の背中に、な。

『ふふつ、じゃあ私は先に休ませて貰うね』

「ああ、おやすみキリカ」

「ん？ キリカちゃんは先に寝るのね。だったらあたしたちもそろそろ帰りましよう」

「そうですね、会長さんも起きてしまいますし」

「ええ、早くベッドに入って寝るとしましょう」

音央と鳴央ちゃん、一之江がそう眩き。

「これにて一件落着……と。それじゃ、俺も帰るか。

妹達も心配するしな」

そんな言葉をした。

その時だった。

「その心配は必要ありませんよ、兄さん」

「全部見てたよ、お兄ちゃん」

聞こえてくるはずのない人物の声が聞こえてきて、一気に血の気が引くのが解った。『いつから？』見られていたんだ、という恐怖があったが。

「一部始終は見させていただきました」

「私の能力。『無限隙間空間』ならどんな空間でも入れるんだよ？ お兄ちゃん」

インフィニティ・スリット・ゾーン

声の主達は上の方から聞こえてきて。

見上げてみると、そこは三階建てのマンションで。

そのの屋上に、見覚えのあるシルエットがあった。

一つは、馴染み深い従姉妹のもの。

もう一つは、血が半分繋がった妹のもの。

そして、もう一つは――。

「見事な戦いぶりだったわね、流星は私のライバルよ、メリーズドール！」

昨日、学校で交戦した真紅のマントに身を包んだ、金髪ドリルの少女。

スナオ・ミレニアム。

今は……『夜霞のロツソ・パルデモントゥム』の格好をしているということとは。

いや、まさか。そんな……。

「スナオさん、かなめさん、行きますよ」

「はいな、マスター」

「うん。いっちょやおー」

スナオ達に命令した理亜はマンションの屋上から飛び降りて。

「つつつっ!?」

慌てて落下地点に行きそうになった俺を一之江は止めた。

「何を……」

「忘れたのですか、あの『赤マント』が仕える『主人公』は」

一之江の顔には緊張と……汗が流れる。

次の瞬間、スナオちゃんの赤マントが大きく広がると、飛び降りた理亜達を包み込んで。

スタツ。スナオちゃんが近くのスフェンズに着地したのと同時に。

その赤いマントを翻すと理亜とかなめの姿もスフェンズの上に出現していた。

「か、完全にあの赤マントっ子の力を使いこなしてるわっ！」

「も、モンジさんっ、気をつけてください」

理亜は音央と鳴央ちゃんを一瞥してから。

静かに尋ねてきた。

「兄さん、答えてください」

「な、何をだ、理亜」

「兄さんが『101番目の百物語』……そして、『架』^{エネイブル}なんですかね？」

心臓が早鐘を打った。答えたくない。返事を返したら決定的に……。

俺の大切な『生活』が、『日常』が終わる。

家に帰って、当たり前のように妹と過ごす、そんな『普通』の生活が終わってしまふ。前世では考えられなかった。普通の学校に行つて、普通の高校生のようなひと時を過す。

ロア関連以外のこの『日常』は俺の癒しだった。それなのに。

「答えてください、兄さん」

理亜は容赦なく、一切のためらいもなく、ただ冷徹な存在として、俺をフェンスの上から見下ろしていた。

「答えてください、兄さんは……兄さんは私の本当の兄さんではない……のですね？」

彼女の瞳には悲しみや喪失感。あるいは『絶望』といった感情が浮かんでいる。

「ああ、そうだ。俺は『101番目の百物語』……そして、『^{エネイブル}罍』のロア。遠山金次だ！」

返事を返すと、理亜は深い溜息を吐いて……。

「……兄さんが平和な生活を送れるように、この世界に入ったというのに……」

「え、理亜もなのか？」

「はい。……ということは兄さんもですね。はう……」

「なあ、理亜……」

「一つだけ教えてください。今も貴方の中に兄さんはいるんですか？」

「ん？ あ、ああ……」

「そうですか……なら」

理亜は目を伏せて頷き。

そして、その時。

空の雲が切れて。

理亜の姿を夜明けの光がスポットライトのように照らした。

その姿はまさに、女神のように神々しく。

「解りました。兄さん。」

兄さんがもう戦わなくていいように、兄さんのロア。『101番目の百物語』と『呪』

を、この私『終わらない千夜一夜』の一つにします」

「は……」

理亜は厳かな光に包まれながら、圧倒的な威圧感と共に宣言する。

それは……俺が一之江やキリカ、音央や鳴央ちゃんに言った言葉そのまんまだった。

『私の物語になりなさい、
兄さん』

突発的番外編シリーズ

連載1周年記念！

突破的番外編。

ロア達の野球大会

.....

「野球大会？」

「そう、野球！」

それはある昼下がりだった。

俺の席までやってきた女の子が、爽やかな明るい声で得意げに告げた。

愛くるしい瞳は猫を思わせるようにクリクリとした輝きを放っており、やや洋風っぽく整った顔立ちには、多少高貴な面影すら感じさせる。

この子の名前は仁藤キリカ。短いスカートを履いているので綺麗な脚線美が見えてしまっている。風に煽られたらスカートの中が見えそうなくらい短い。指摘しようと思っただけすぐに思い直す。下手に刺激して「モンジ君なら……見てもいいんだよ♡」なんて返されたらたまらんからな。『美少女』で『裕福な家庭で育ったお嬢様』、『才色兼備』

で『社交的』、それが周りから見たキリカの評価だ。それ故にヒス持ちの俺にとっては要注意である美少女だ。

まあ……それは表の顔なんだかな。

その正体は『ロア喰い』、『最悪な魔女』、『魔女喰いの魔女』などと呼ばれる存在で。伝説や噂話が実体化した存在。

『ロア』と呼ばれる、いわゆる『都市伝説のお化け』なのだが。

「来週、私みたいいな人達が集まる恒例のイベントがあつてね。その一つに野球大会があるの」

「そんなお化けの存在なキリカはこれまたクラスの男共が喜びそうなくらい特大な笑みを浮かべて俺に話しかけてきた。

「キリカみたいいな人達つて……やっぱあっち系の人達か？」

「うん、そっち系の人達。あ、でも安心して！」

全員モンジ君の知つてる人達だから」

それは安心できるのだろうか。

あっち系というだけで俺的には関わりたくない奴らという認識になるのだが。

「大丈夫だよ？」

ちゃんとチーム分けは平等に行なうし、報酬もちゃんと出るから」

キリカは俺の心配を、チーム分けや報酬がきちんとされないのが原因だと受け取った

ようだ。

「そんな心配はしてない。むしろ、報酬が出るならやってもいいと思いはじめてる」
「ここんところ、非日常な事に時間が割かれていたからな。」

たまには息抜きというか、普通の日常を送ってみたいと思うのは普通の高校生として当然だ。

「やった！　じゃあ、決定だね！　　日時はまたメールで知らせるから！」

——それが三日前の事だった。

試合当日。

試合場所として指定されたのは俺の、というか。

一文字疾風がかつて通っていた中学校。市立十二宮中学校の野球部が練習場所として使っているグラウンドだった。グラウンドと言っても名門野球部ではないので、他の部活……サッカー部などの兼任で使う普通の中学校にある普通の校庭だ。

そこに俺を含めて20人弱の人達が集まっている。
ちなみにオーダーはこんな感じだ。

Aチーム。

一、(ファースト) スナオ・ミレニウム

二、(ライト) 六実 鳴央

三、(セカンド) 口裂け女のロア(名前は貞子さん)

四、俺。(センター) 一文字疾風(遠山金次)

五、綴 梅子(サード)(なんでいるの?)

六、アリサ(レフト)

七、三枝さん(ショート)

八、遠山金三(キャッチャー)

九、キリカ(ピッチャー)

Bチーム。

一、ライン(ショート)

二、七里詩穂(ライト)

- 三、須藤理亜（ファースト）
- 四、一之江瑞江（キャッチャー）
- 五、六実音央（センター）
- 六、氷澄（セカンド）
- 七、リサ（レフト）
- 八、遠山金女（ピッチャー）
- 九、ツクモ（サード）（金三が呼んだ……）

……うん、いろいろ突っ込みてえ。

個性豊かなイロモノばかり集まった気がするな。

大丈夫か？　この大会？

ちなみにこの大会の正式名称は、集まれロアっ子達！

みんなでワイワイ楽しく存在を世界にアピールしようぜ！

ロアとロアとで親交！　ガチバトルで友情を深めあおう！

もちろん殺しもありだよ！　ベースボール大会！

……という。

（長え——　よ？！？　ロアっ子って何だよ！）

何だよガチバトルって、野球はスポーツだろ!

殺し合いを認めんなよ、馬鹿野

郎!)

……それが俺の感想だ。

「さて、参加者も揃ったし始めようか?」

あ、今回はきちんと審判役もいるから安心してね♡

じゃあ、紹介するねー! 今回審判役を買って出てくれた」

キリカの紹介で現れたのは。

「はい、みんなのヤシロだよ?」

みんなこんにちわー」

神出鬼没な全身白づくめの美少女。

ヤシロちゃんだった。

いつも通り、白いワンピースに、白い帽子。白い傘を差している。

「正々堂々と戦……わなくてもいいから、きちんと存在をアピールしてね?」

世界に存在をアピールできればしばらくは消えないから!

もつとも……殺されて消えなければだけど」

不吉な台詞を放つヤシロちゃん。

そんなヤシロちゃんをよそにキリカの元気な声が聞こえた。

「さあ、ロア達の野球大会を始めようー♪」

一回裏。

Bチームの攻撃。

え？ Aチームの攻撃はどうしたかって？

三者凡退だが、何か？

詳しく話せば長くなるので省略するが。

トップバッターのスナオちゃんは見逃し三振だった。

「さあ、勝負よ！ メリーズドール！」

野球でもあたしの方が上手いってとこ、見せてあげるんだから！」とか、キャッチャーの一之江に宣言してバッターボックスに立ったのだが。

結果は見逃し三振。

遠くから見たからよくわからないがバッターボックスに立つなり、ブルブル震えていたのは見えた。

……緊張し過ぎて震えたのかな。

スナオちゃんに聞いても……。

「打つたら殺される……打つたら殺される……打つたら殺さ……」といふかなり心配な台詞があつたが、緊張したから出たんだよな！ うん、深く考えるな！

感じる金次！

次の打者は鳴央ちゃんだつた。

野球の経験はない。

かと思いきや……音央と入れ替わるまで男子に混じつて遊んでいた幼少期があるせいか、草野球程度の経験ならあるとのこと。

これは期待出来る！

と思いきや……バッターボックスに立つなり。

泣き出した。

え？ 何が起きたんだ？

キャッチャーミット目掛けて飛んできたボールにバットが当たることはなく。

スナオちゃんに続く2人目の見逃し三振となつた。

目にゴミでも入つたんだよな？

うん、そうだよな。たまたま、だよな？

三人目。貞子さん。

バッターボックスに立つなり、マスクを外して「私、綺麗？」と言って後ろを振り返った。

その瞬間。

貞子さんは光の粒子となって消えてしまった。

……見逃し三振。

スリーアウト。

「スリーアウトはチェンジだよ？　お兄ちゃん」

かなめに言われて我に返ったが……何やってんの貞子さん!!??

わずか数行、それも一言しか話さないで（物理的に）消えるとか……何しちゃってく

れてんの!!??

まだ一回なんだけど！

もうすでにチームメイトが一人いなくなったんだけどー!!??

「ありえん」

ありえないだろ。こんな展開。

「モンジ君、もうチェンジだよ？

早く守備についてね？」

キリカに言われ、渋々守備位置であるセンターのポジションについていたが……

「ふふふつ、本当は少し遊ぼうと思ったけど……少し本気で行くよ！」

『消える魔球』!」

キリカが投げたボールは打者の目の前で突然消えて無くなった。

一瞬の出来事だった為、何が起きたのかわからなかったが。

「ストライク！」

ミットの中にボールはあるよ?」

ヤシロちゃんの声が聞こえ、キャッチャーを見ると。

キンゾーの手にはしつかりボールが握られていた。

「ケツ、こんな球モンも打てないのか。」

この国の野球はレベルが低いぜ」

イヤイヤイヤイヤ。

目の前でボールが消えたら誰も打てないだろ!?!?

何言っちゃてんの?

キリカの力投……というか、ほとんど反則とっていい『魔球』により三者三振で終

える一回の裏。

そして始まる二回表。

最初のバッターは……俺だ。

「フレ、フレ、お兄ちゃん♪」

敵チームなのに応援してくるかなめ。

味方を敵に回しているのか？

と思いつながらファーストを守っている理亜と目が合うと。

「頑張ってくださいね、兄さん」

などと呟いていたのが聞こえた。

普段の俺ならば絶対に聞こえないくらい小さな声だったが。

今の俺ならバツチり聞こえる。

そう。なっているからだ。

なんでなっているのかというと。

一回裏が終わった直後。

「お兄ちゃん、妹ハグしてえー」などと言われ。

敵チームのピッチャーであるかなめに抱きつかれたからだ。

汗を掻いた半分血の繋がりがあつた美少女に抱きつかれる。

それはなんというか。

そう。かなめの言うときまに……背徳感がある。

結果、ヒスってしまった。

「やったー！ 今度はお兄ちゃんが相手だ！ やつと本気で投げれるよ」

「ははっ！ お手柔らかに、ね？」

「わかりました。お手柔らかに殺します」

背後から物騒な声が聞こえたので思わず振り向きそうになり……。

——ピピピピッ！

『もしもし、私よ。今貴方の後ろにいるの』

一之江の声がユニホームのポケットに入れたDフォンから聞こえてきたので堪える。

「背後を振り向いたらウツカリ殺してしまいますのでぜひ振り向いてくださいね？」

「そこは『後ろを振り返らないで気をつけて』っていうのがセオリーなんじゃないかな

？」

「私は過去の人を振り返らない主義なんです」

「過去の人扱いされた！」

などといったものやり取りをしながらバッターボックスに立つ。

「じゃあ、行くよー！」

かなめが第1球目を投げた。

外角いっばいストレートだ！

バットを振ったが予想以上に速い！

「ストライク！」

ヤシロちゃんの声聞きながら、俺は今の球の攻略を考える。

想像以上に速いな。

球速は140 km/h ってところか。

女子にしてはかなりというか、めっちゃくちゃ速くないか？

……打てるかな。

アメリカ生まれ、アメリカ育ちとだけあって、かなめはかなり上手い。

球の出どころが見えにくいフォームに、スピんがかかる球。

スタミナは武偵をやっていただけあってかなりあるだろうし、コントロールもいい。

これはちよつとやさつとじゃ打てないぞ。

それにさらに打てない原因がある。

それはかなめの真正面。

要は俺の背後にいる存在。

『月隠のメリーズドール』こと、一之江瑞江が原因だ。

一之江は俺がバッターボックスに立ったその瞬間から。

「打ったら殺します……打ったら殺します……打ったら殺します……打ったら殺します……打ったら殺します……打ったら殺します……打ったら殺します……」

そう囁き続けていた。

恐い。

ヒステリアモードの俺でも一之江のこの囁き声には恐怖を覚える。

「ちよ、ちよつと待て! ヤシロちゃん、審判! これは反則じゃ……」

「反則? ただの囁き戦術ですよ?」

嘘だ! 絶対違う。

「うん? ルール上は問題ないよ?」

審判役のヤシロちゃんに確認を取ってみたが……そんな答えを言われてしまった。

いや、大アリだと思っぞ。

「偉大なるノ○ラ元監督も言っていました。

キヤツチャーは相手をイラつかせたら勝ちだつて」

「嘘だ。そんなことノ○さんが言うわけないだろ!!?」

「言っていました。」

月見草でも枯れた向日葵には勝てるって言っていましたつて」

「アウト! 一之江その発言はいろいろアウトだ!」

問題発言連発の一之江に突っ込みを入れていると。

バンッ!

「ストライク！　バッターアウト！」

気づけば見逃し三振していた。

チームのみんな……ごめんよ。

なんやかんだあり。

試合は進んで9回表。Aチームの攻撃。

ノーアウトランナー一塁。

打席には四番の俺が立っていた。

前の攻撃ではキャッチャーをしているキンゾーに向かって、ラインが『音速境界！』を放ちキンゾーを吹き飛ばすなど些細な乱闘騒ぎがあったが。

まあ、おおむね順調に試合は進んでいる。

三番には代打でタツくんが入った。

こんな子供にクリーンナップが務まるのか？　と思つたが予想に反してタツくん

は野球のセンスがあつた。

タツくんが作つたこのチャンス無駄にはしない！

子供が頑張ってるんだ、俺が打てなくてどうする？

それに……

「お兄ちゃん、あたしの球を打とうとするなんて……非合理的〜!」

「妹にカツコ悪いところばっかり見せられないからな。打つさ」

そう。可愛い『妹』が見てる試合で情けない姿ばかり見せられない!

たとえば、その妹が敵チームにしようと。そんなことは関係ない。

『兄は妹の前では、大切な女の子の前ではカツコいいヒーローでないとダメ』だからな。

ヒーローなんて本当はいないけど。俺はヒーローにはなれないけど……それでもせめて、大切な人達の笑顔は守れる男でいたいから。

一之江の囁き声が背後から聞こえているが気にしない。

囁き声と共に、ツンツン、グサツと何か硬い金属が当てられているが気にしない。

……気にしたら負けだ!

「打つたら針千本突き刺す! 打たなければ千回斬ります。」

どっちにしますか?」

「それ選択肢ないよな?」

どちらに転んでもバッドエンドしかない。

詰んでいる。

だがそれがどうした？

将棋だって、詰んだら詰んだで盤をひっくり返せばなかったことになるんだ。

打てなくても、点さえ取られなければ負けないんだ！

かなめ相手にそれやったし。

ここまでお互い一安打のみ。

このまま九回を終えれば延長戦。

だけど一点でも取れば、必ず勝てる。

なら……打つ！

「さあ、来い！」

俺はかなめが投球動作に入るのをヒステリアモードの目でじつと見た。

かなめが投げる球種は5つ。

ストレート、カーブ、縦スライダー、チェンジアップ、カットボールだ！

カーブは曲がり微妙に違って速さも違うものが2種類ある。

大きく弧を描くカーブと、スロー気味であまり曲がらないカーブだ。

ここまでのかなめの投球動作を見ていると。

ストレート21%、スライダー12%、チェンジアップ7%、カーブ系60%だ。

カーブを多用する傾向が高い。

なら狙うのはカーブだ!

……なんて思うのはあかさかってやつだ。

だって俺の時にはカーブ系はほとんど投げてこないからな。
俺に投げる球種でもっとも多く投げるのはストレートだ!

それも140km/h後半の、な。

かなめは本当に女子なのかと疑いたくなる。

生まれる性別間違ってますか?

「今、お兄ちゃんに凄く馬鹿にされた気がする……非合理的!」

……鋭い。

「気のせいだ。それより速く投げてくれ」

「……まあ、いいや。じゃあ、お兄ちゃん……本気で行くよ?」

かなめが大きく振りかぶって投げた。

ドゴオオオオンツ!!?!

大砲が放たれたような大きな音が鳴り響き。

放たれたボールは一之江のキャッチャーミットに収まっていた。

「は、速い……」

いや、速いなんてもんじゃない。

ヒステリアモードの俺でも見るのがやっとだった。

亜音速に至ってたぞ、今の。

「うーん、まあまあかな？」

球は走ってるから……上出来だね！」

「……」

あんな球を普通に投げたかなめも、かなめだが……それよりも。

「……あれを……捕った、だと!?」

一之江のハイスペックに驚きを隠せない。

亜音速に至る白球。それを一之江は眉ひとつ動かさずに掴み捕っていた。

「大丈夫なのか、一之江？」

「別に平気ですが？」

なんたつて私つたら、『最強』ですからね！」

亜音速の物体を掴み捕るなんてどんな超人だよ。

さすがは一之江だ。

「……まあ、捕れたのはモンジのおかげですけど」

「うん？」

「貴方が前にやった、銃弾を素手で掴んで止める技。あれを参考にしました」

ああ、『銃弾掴み』か。確かにあれならできるかもな。

「お兄ちゃん、二球目行くよ——！」

かなめの声で現実に戻った俺は。

真正面を向いて。

迫る白球目掛けてバットを高速で振り抜いた。

(桜花—— ツー！)

亜音速気味に桜花を放つ。

バットの先が何やら重くなり。

そして。

——キンッ！　　というバットとボールが当たった際に起きる音が鳴り響

いた。

(いっ—————— けえ—————— ええええ！)

弾き返された白球は大空高くへ舞い上がる。

どこまでも。どこまでも。遠くに……。

突発的番外編！

温泉では変態に注意！

「温泉に行くわよー！」

開口一番、スナオは俺に向かってそう言った。

ちなみに、スナオはいつもの赤マント姿ではない。

十二宮中学校の制服を身に纏った金髪ドリル頭の美少女の姿だ。

『必要悪』と描かれたTシャツとジーンズだけのシンプルな姿故、その平な胸が服の上からでもわかる程、ペツタンペツタンとなっている。

『……………はっ？』

『何言ってるのこイツ？』みたいな顔するんじゃないわよ。温泉回よ、温泉回。前回の話で、ストーリー的に一山越えたから、箸休めの番外編をしようって事よ。作者の世界ではもうクリスマスだしね」

何を言っているのだろうか、この元気っ子は？

ていうか、今の俺は理亜の一件で精神的にボロボロだからそもそも外出なんて——

て、アレ？

そこで俺は、自分の姿に気付く。

『なんで、ロアの姿になってるんだ?』

俺の格好は武偵高の防弾制服を着ていて、手にはスクラマサクスと、ベレッタM92 Fsを持っていた。

………それだけじゃない。

よく見れば、ここはいつもの街じゃない。

木製のテーブルとイスが並び、カウンター越しにガスコンロと調理台が見える。

更にまな板の上には、調理に使うであろう食材と共に桃まんとキャラメルが無造作に置かれている。

………最後の時点で気が付いた。

こんなトチ狂った食材で調理を行う料理人を俺は少数しか知らない。

そう、ここは――。

俺が結論に達したことに気付いたのか、スナオが俺を指差して言う。

「そう!ここは本編じゃないわ! 『緋弾のアリアのキャラと101番目のキャラがな
んやかんやで交流する無茶振り企画』の世界よ!」

『なんだそのトチ狂った世界は!?!』

マジか!?

あのアリアがロア化したり、理子やキリカみたいに『混ぜるな！ 危険』な二人とか、レキや一之江が出会ったり、鳴央ちゃんや白雪が共演しちゃう世界かよ!?

『まさかこんなことをやらかすなんて……』

「……世の中にはね、色々あるのよ、モンジ。例えば、ハードな仕事とシリアスなストーリー展開に疲れた作者が気分転換に壊れた物語を書きたいとかね……」

どこか切なそうにスナオは語る。

いや、それ全然切くないよ？

ただの現実逃避だろうが。

俺が言うのもなんだけどさ。

『ん？あれ、ちよつと待て。それじゃあ何で尚更、俺は元の姿になってるんだ？』

確か俺はこの世界では一文字の姿だった筈だ。

なのになんで元の遠山キンジの姿に？

「ああ、それはね。話の都合上時間を巻き戻して、アンタは憑依しなかった。遠山キンジとして『逸般人』な姿で101番目の百物語の世界に来たからと言う訳」

『マジか!?!』

つーか何で、突然時間が戻って俺が101番目の百物語の世界に来てんだよ！

何でもありかつ！

『あれ?でも、何でそんなことを?ま、まさか……さつきの料理を俺に——』

「うん、アンタなら食べれるでしょう?」

『不可能を可能にする男』なら……だから食べさせたわ

『ふざけんな!』

なんで俺がそんなことを。

というかそんなことされた記憶はないんだが。

「実はね……調理が終盤に差し掛かってきた頃、メリーズドールが突然『そろそろ切り札を出すしかないですね』って言ってるね」

『うん』

「『最後の調理するのは——キンジを『食材』にする事です』って言って、いきなりアンタを『食材化』し始めて……」

うおおおおおおおおおおおおおおい!!

『ちよつと待つて?!いやいやいやいや、散々色々スルーしてきただけど、それはちよつと待つて!何それ?!一之江がそんな事言つて、いきなり俺を食材化しようとしたのかよ!』

「ロア化」ならぬ「食材化」!?

何やってんの、一之江!?やっちゃいけないクスリでもキメてたんじゃねーのか?

あ、キメてたのか………多分。

「リアはそれを泣きながら調理したわ……ブフツ！」

『嘘言つってんじゃねーよ!』

「ま、それは嘘だけど、その直後にメリーズドールはアンタをメツタ刺しにしてたわ」

まさか、所々記憶が曖昧なのはそれが原因か!?

何やってんだよ一之江。

「まあ、結局リアが他の食材使つて調理したんだけどね。その甲斐あつて勝負は圧勝。料理審査員全員が料理を食つた瞬間、宇宙空間で全裸になるリアクションを取つたわ」

『だから嘘言つてんじゃねえよ!?!?』

薬か何かやってらっしやる?

頭湧いてんじゃねーのその審査員たち。

「ちなみに、同じくそれを食べた鳴央ちゃんは今裸に着物を持った状態で牛乳(白)を全身にぶっかけられる感じのリアクション(イメージ)を取つたよ。いやーアレはエロかつたねー。黒髪と白いドロツとした液体(牛乳)のコントラストが絶妙で……」

いつの間にか側にいたキリカは怪しげな笑みを浮かべてそう言った。

『ああ、うん。わかつた。もういいや……』

なんか、既にもう疲れた。お腹いっぱいです。

話を戻そう。

『……………んで、それでなんで温泉なわけ?』

「私が見たいからだよ!サービス回!ハイッ!サービス回!」

『ごめん、意味が分からん。あとそのテンションウザい』

「と言う訳で、魔術発動!」

『は?……………うおおおおお!?!』

足元に青白い光と魔術陣が浮かぶ。

直後、強烈な浮遊感が俺を襲った。

暗転。

目が覚めるとそこには立派な温泉宿があった。

木造作りの昔からある古き良き伝統の温泉宿って感じだな。

木の匂いがする。

癒されるわー。

超展開の連続で疲れた心にしみわたる……。

ああ、現実逃避だよ。悪いか。

「瑞江ちゃん達は既に入浴してるよ。ちなみに入浴メンバーはモンジ君、瑞江ちゃんに、音央ちゃん、鳴央ちゃん、理亜ちゃん、かなめちゃん、リサちゃん、アリアちゃん、りこりん、ゆつきー、レキちゃん、あと詩穂先輩とヤシロちゃん、アラン君も居るよ」

『あれ？アランって死んだんじゃないやなかったか？』

「僕を勝手に殺すな！」

『悪い悪い。それは冗談だが、混浴なのか？』

温泉回って言ってアレだろ？

男女別なお約束……。

「番外編だから混浴なんだよ」

「あ、そう……」

便利だな番外編……。

ヒス持ちには優しくないんだな。

あと、誰かナチュラルに省かれた気がする。誰だっけな……？

アリ……何だっけ？まあ、いいや。

「ちなみに胸囲力は上から順に詩穂先輩ⅡゆつきⅠ音央ちゃんⅡ鳴央ちゃんⅠりこりん、かなめちゃんⅠ理亜ちゃんⅠレキちゃんⅠスナオちゃんⅡアリアちゃんⅡ瑞江ちゃんという感じだよ。あ、ちなみに私は音央ちゃんや鳴央ちゃんとりこりんの間ね。どう、参考になったかな？」

「何が？」

胸のサイズとかすげーどうでもいいわ。

というか、俺も普通に温泉に入りたいただけ。

101番目の世界に来てから温泉なんて入ったことなかったし。

というか、俺は今更ながら当たり前の疑問が思い浮かんだ。

「つーかさ、何で覗きに行く必要があるんだ？ キリカお前一応女だろう。覗く必要
なくないか？」

そう。今回残念臭が見事に全てを打ち消しているが、キリカは一応、*“女”*なんだ。
ならば、覗きなどせず堂々と女湯に入れればいい。

俺がそう言うと、キリカの表情に一層陰りが出来る。

「……………実は私ね、仲の良い友達とかこの町の公衆浴場や温泉施設に入ったこと
ないの……………私は魔女だから、入っても誰も覚えてないしね」

『あー、成程ね』

そういや忘れてたが、キリカは魔女だった。

他人の記憶を操り食べる『最悪の魔女』とか呼ばれるロアだったな。

『だからって何で俺を覗きに誘うわけ？ 嫌だぜ、俺。犯罪者になるのは』

別に見たくもないし。

「ええー、行こうよ！ キンジ君には主人公補正^{ラッキースケベ}つていうとてつもない能力が備わってる
んだよ！」

『……………は？』

何そのルビの振り方？

頭おかしいんじゃないか？

つーか、そんな能力初めて聞いたんだが。

「アンタなら、たとえメリーズドール達に気付かれても『わ、私は別にも、モンジさえよければいつでも一緒に……』とか、『お兄ちゃんー、一緒に入ろうー』とか、『キ、キンちゃん様！　お、お背中流しますね？』やら『あ、あの、モンジさん。いつ……一緒にお湯に入りませんか？』とか、そう言う感じでなあなあで済まされるに決まってるのよー！」

決まってるねーよ。アホか。

だいたい一之江やアリアとかも入ってるんだろ。

気づかれた瞬間背後からグサツ、と刺された後にガバで風穴開けられるわ。

「だから、お願いします！　キンジ君！　どうか私にもその主人公補正ラッキースケベを分けて下さい！！どうしても、瑞江ちゃんとかアリアちゃん達と一緒にお湯に入りたいの。

皆んなで思い出作りたいんです！」

「わたしも可愛い子と一緒にのお湯に入りたいわ！」

「僕もだ、モンジ！　男なら誰だっけ見る夢だろう？」

がぼつとアランは、俺に土下座をかます。

うわぁー……。

正直ドン引きである。

己の欲望の為にここまでプライトをかなぐり捨てる人間を俺は他に知らない。

裸みたい為にここまでするか、普通……。

そんなんだから、『アラン君って顔はいいんだけどね……』とか言われるんだよ。

「今な何か凄い失礼な事を考えた気がしたけど、今回は許す。だから僕にもキンジやモ

ンジのようなラツキースケベを分けて下さい」

いや、やれるならそんなもんはくれてやるよ。

だから、もうこの話これで終わりにしない？

俺も温泉には入りたくないから。

「温泉……ぶっぶっ」

モンジは鼻血を吹き出した。

大丈夫か、コイツ？

出血多量で死ぬんじゃないか？

「話は纏まったみたいだね！」

『……本当にやるのか?』

スナオはやけにノリノリである。

お前なに早速番外編だからっハリきってんだよ!

便乗してしてんじゃねーよっ!

「ここは本編でも説明されなかった私のロアの能力出番ね!」

『ロアの能力?』

「そうよ。私は『夜霞のロツソ・パルデモントゥム』と呼ばれる『赤マント』の『ハーフロア』よ。その逸話に『少女を攫う』と言われるものがあるのよ。それは、どんな状況下でも赤マントに包んだ少女を異空間に連れ去っちゃうという優れた能力なのよ」

『ほー、そりやすごい。一之江の攻撃が効かなかったのはそう言う訳か』

つーか、そういう事は本編で説明しなくていいのか?

なんでこんなどうでもいい番外編でネタバレしてんだよ。

「成程、『赤マント』か……はっ!まさか、スナオちゃん……君は……っ!?!」

アランが何かに気付いたようで、はっ! とした顔をスナオに向ける。

「そつちのお兄さんは気付いたようね、そうよ。この能力を使えば、女湯に入ろうとする女性客を連れ去りそのまま監禁!」

そして、『怪人の手!』で攫ったその少女を裸にして見放題という素晴らしい能力なのよ!」

そんなすげー能力を下らないことに使うな馬鹿。

だが、アランはまるで雷に打たれたかのように硬直していた。

「な、何て素晴らしい能力なんだ……っ!人数制限は!?限界稼働時間は!」

アランの質問に、スナオは微笑む。

「ごくり、とアランが生唾を飲む音が聞こえる。

「——どちらも、問題ないわよ!」

「きゃっほおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお!スナオちゃん、

いやスナオ神! 貴女様は最高だ! それじゃあ早速——っ!」

そこでアランは素早く身を捻る。

先ほどまでアランが居た場所に黒い穴の様なものが発生したのだ。

その黒い穴がアランの足を引きずり込む。

「……これは何だ! た、助け……!」

「……モンジさんとキンジさん? 一体何を話し合われているんです?」

いつの間にか、目の前には鳴央ちゃん、音央、白雪、レキ、理子……の姿があり。

そして。

「風穴」

背後から懐かしいアリアの声が聞こえ。

そして背中からは。

「『もしもし、私よ。今貴方の後ろにいるの』」

一之江の冷んやりした声が聞こえる。

Dフォンがメチャクチャ熱くなつたままで、今にも『お前殺されるぞ?』と警告するかのように発光していた。

「美少女の——可愛い女の子の裸を見るのはこの私一人で十分!悪いけど、男にはここで消えてもらおうわ!」

「ちっ、成程……っ!最初からそのつもりで、時間稼ぎをしていたわけか!」

何故か無傷のアランが立ち上がり。

「その通りよ! リアの裸を見るのは私だけなんだから——! さあ、アナタ達ここを通りたくば、この私を倒してから——」

「『その少女は攫われた瞬間、それまでのことを振り返りました……』」

「いやあああああああああああああああああつ!?!」

スナオの言葉を遮って、理亜はいきなり反則技を発動した。

スナオが消滅しそうになる。そのまま消える。

だが……

「なっ、なんだと!?」 無傷……ッ?」

「ぜえぜえぜえ! やるわねリア。だけど甘いわよ! リアの『対抗神話』を何度も側

で聞いていたのは何を隠そうこの私よ! その技ではこの私を止められると思わな

いやあああああああ!!! ちよつと待ってリア。激しい、激し過ぎて嫌あああああ

あああああああああああああああああああ!!!」

理亜の語る対抗神話により、体が透けるスナオ。

「手をワキワキさせながら気色悪いことを言わないでください!」

「り、リアの恥ずかしやさー!」 リアの裸は私のモノなんだからあああああ

あああああああああああああああああああああああああああ!!!」

『いや、お前のものじゃねーよ………』

理亜泣くぞ。

読者を無視して変な性癖だそうとすんな。

というか、スナオのせいで話が進まないな。

俺がそう思って旅館の方を見て見ると――。

「あ、女将つすか？ええ、また不審者が現れたみたいで……ええ、はい警察呼んでおきます」「皆さーん、従業員の指示に従って移動してください」「あ、もしもし〇〇工務店さんですか？また補修工事の依頼で……」「ママーアレなーにー？」「しっ、見ちゃいけませんー！」

従業員の方たちも慣れているのか、そそくさと避難誘導や連絡をしている。

「あ、お客様いらっしやいませー。『緋弾の百物語旅館』へようこそお越しくださいませー。おひとりですか？」

従業員さんが俺に声を掛けてくる。

『あ、いえ、ここにいる奴らと一緒に後は待ち合わせです。多分もう着いてると思います』

「では、こちらへどうぞー」

従業員さんは慣れた様子で俺を案内する。

手慣れすぎだろ……。客商売つてすげーな。

あと旅館の名前凄いな。

などと現実逃避していると、背後からアランとモンジの叫び声が聞こえてきた。

おしおきされているみたいだな。

「今日はこのくらいにしとくわー！ それとキンジは後で風穴!!!」

「ですね、後でサウザンドナイフの刑です」

「理不尽過ぎる!?」

はあ……疲れたあ。さっさと温泉行こう。

馬鹿達を無視して、俺はさっさと温泉へ向かう事にした。

男湯にて――

『ふうー……』

俺はあの騒ぎの後一文字と一緒に温泉に向かった。

もちろん男湯だ。

混浴という話だったが急遽混浴は中止になったらしい。

何故かはわからんが今日の俺持つてる!

天然の石造りの温泉で、お湯がどんどん湧き出ている。

ししおどしの音が心地いい。

『あー……生き返るなー……』

「あー確かに……いい湯だなー……」

こっちの世界の温泉に入るなんてこれが初めてだ。

前世も温泉なんてほとんど入れなかつたけど、やっぱ温泉は良いよなー。

癒されるし、気持ちいい。

俺が温泉につかっていると、後ろの脱衣所の方からガラガラと音が鳴り、誰かが入ってくる。

「おお、これが温泉かあ。美しい……」

「周りの人に迷惑かけんなよ、ジーサード」

声のした方を見る。

おや、他のお客さんが来たみたいじゃないか。

「あ、どうも。……ってなんでいんだよ。キンゾーと氷澄^{!!}？」

今日は何で此処に？」

「うん？　なんだ……一文字貴様かあ！　隣の人は誰だ？」

番外編だから、な。

シャンプー使うか？」

「そうだぜえ。今日は利用者の方たちと一緒に日帰りのバスツアーに参加して来た……」

という設定だぜ、兄貴もか？」

「いいや、何でいるんだろうな」

俺にもよくわからん。

「しまった。メガネが曇ってみえない」

「ここで会ったが百年目だぜ！　兄貴後で背中流してやるよお！」

「あ、じゃあ頼むぞ、キンゾー。あと、シャンプーは持つてきてるから大丈夫だ」
それと、氷燈。

メガネは外せばいいだろ？

その後、俺は一緒になった観光客の人達と背中を流しあったり、サウナに入ったり、風呂上りに皆でコーヒー牛乳を飲んだりと、そこそこ楽しい休日を通すことが出来た。
いやーやつぱ温泉は楽しいな。

いろいろあったが、来てよかった。

ありがとな、アラン。

俺は心の中でアランにお礼を言った。

そして気づく。

「……………そう言えば、アラン。あいつまだ来ないのか？」

一方、女湯にて——

『ふう……………たまにはこうして敵味方関係なくお湯につかるというのも良いものですね』
タオルを頭に巻いて黒髪を整えながら一之江は詩穂の方を見る。
女性の一之江から見ても詩穂の裸は芸術的なまでに美しかった。

出るところはきちんとでている抜群のボディーパーバランスと、女性特有の柔らかさが同居し、まるで一種の彫刻の様だ。

「全く奇妙な縁だよ。全く別の世界の人達と一緒に風呂に入るなんて……」
にぱー、と詩穂は笑いながらそう告げる。

ちなみにタオルはつけていない。

その為その暴力的なまでのダイナマイトボディーが謎の光とかに隠されることなく晒されている。

「じー……」 ↑（一之江とアリア）

「じーっ」

「ん？どうしたのキリカちゃん達。人の体をじろじろ見て？」

「やっぱおつきーなーと思って……お湯に浮いてる。ゆつきーのも浮いてるね……」

「え？そうかな？こんな胸だもん、戦闘では邪魔なだけなんだよ？ 肩も凝るし、下着もサイズが無くて困るし、不便なだけだよ？」

むにむにと白雪は己の胸をもむ。

それを見て、アリアと一之江も己の胸に手を当ててみる。

ぺたぺたぺた。

「うぐ………」

『あら、どうしたの、一之江さん?』

アリアをスルーして一之江に白雪は話しかける。

アリアは「風穴!!」などと叫ぶが。

なにやらショックを受けたらしい一之江は、そのまま無言で白雪の胸に顔をうずめた。

入れ替わる様に近づいて来たのはキリカだ。

長い赤髪が表面に浮き蜘蛛の巣のようになっている。

彼女もまた白雪の圧倒的存在に目を奪われていた。

「……………うわあああすーごつく大きい。さわってもいい?」

「む?　　む?　　確かに…………喧嘩を売ってるのかと言いたくなる大きさですね」

「え?　　え?　　なんで触るの?というか、一之江さんって言ったかな? 錆びるから、

そのナイフは置いた方が良いよ?あと髪の毛を湯に入れられないで」

大丈夫です、これは能力で出した奴ですから。では挨拶変わりに…………ぼふつと」

一之江は白雪の胸に顔をうずめた。

「あ、ダメ、いきなり揉むのは…………くすぐったいよ」

むにむにの手で自由自在に形を変える二つの果実。

番外編だから、何でもありなのだ。

「柔らかいし、あつたかい……手でつかみきれない。瑞江ちゃんどう？」

白雪の胸に顔をうずめながらチラチラと様子をうかがうが、やがて好奇心が勝つたのか、

「……えい」

「あ、ちよつと！後ろから揉みしたらダメ！ 一之江さんもそんなところを触っちゃ、

だ、ダメだよ。あ、アリア、キリカちゃん達をどうにかして」

『クスツ……いいんじゃない？たまには……』

アリアは白雪に笑みを浮かべる。

笑みを浮かべているが、目は笑っていない。

さっきの事を根に持っているからだ。

白雪がキリカ達にいいように弄ばれるのを横目に。

アリアはそういえば——と考える。

互いに殺し合った敵同士や本来なら決して交わることのない物語が同じ湯につかる。

実に奇妙な光景だ。

そんなことを考えていると。

リア達の声が聞こえてきた。

話題は女の子らしく、恋話を語っていた。

好きな人はとの問いに。

かなめは「お兄ちゃん」と答え。

リサは「ご主人様」、音央は「べ、別にモンジ達のことなんて……」、鳴央は「夢の中
で出会った素敵な人です!」などと答えている。

それを聞いた一之江は。

「全く、番外編とは厄介なものです。ですが……」

ちらりと、隅で騒ぎに巻き込まれまいとするアリアに目を向ける。

その視線に気づいたアリアはバツの悪そうに顔をそむける。

そして何を思ったか一之江は『もしもし、私よ……』と唱え、一瞬でアリアの背後に
跳躍した。

そして一之江は、アリアにこう告げた。

『負けませんからね……』

アリアは一之江と視線をぶつける!

こうして、お互いを認め合うのだった。

その光景を、キリカは目を細めて見守り内心喜んだ。

「……悪くないです」

レキがポツリと呟く。

沈む夕日が湯に映し出される中、彼女たちは温泉を堪能した。

☆

そんな彼女らの様子を見つめる男がいた。

アラン・シアーズである。

双眼鏡を片手に彼は女湯を覗いていた。

「ぶふう……もう、僕は……死んでもいい！」

鼻血を吹き出しながらも、彼は手に持つ双眼鏡は放さない！

そんな彼に近くものがいた。

「やあ、初めまして。ここに来れば会える。そう——推理したよ」

出会うはずがない人と人が出会い、そして混じり合う物語。

『101番目の罫物語』連載中です！

『つて、最後は宣伝かよ!!?』

連載2周年&通算100話記念。突発的番外編。『もう一つの勢力』

神奈川県横須賀市。

軍港として栄えるこの街に僕はいた。

誰もいない深夜。

「準備出来ましたよ。お父様」

高台にある中央公園のベンチに座る僕の背後からその声は聞こえた。

「ありがとう、綾^{あや}、君」

背後を振り返らないまま、僕は後ろにいる彼女に話しかける。

「今日のマフラーもなかなか似合うよ、綾^{あや}、君」

視力を失っている僕はそれがどんな色をしているのかとか、どんな形をしているのかは目では判断出来ないが。マフラーが風に靡いた時に発する微かな匂い、布の擦れる音、綾^{あや}、君がマフラーに触れた時に出す呼吸音や空気の流れからそれがどんなものなのかは推理出来てしまう。

卓越した推理は予知に近いしていくものだからね。

『条理予知』。

それがこの僕最大の能力だ。

「ありがとうございます。このマフラーとつてもお気に入りなんです。お父様が初めて買ってくれたものですから」

「そうかい。世界中を回って買ってきた甲斐があつたよ」

「私の為に選んでくださるなんて。……ラブラブですね、ぽつ」

口では『ぽつ』なんて言ってるが僕には解る。

実際の彼女の顔に変化はないということとは。

推理出来てしまうから。

「実は、綾，君。君には一つやってももらいたいことがあるのだが……」

「そんな……まだ早いですよ、お父様。そういうのはもう少し私が大きくなってからでも……でも、お父様がそう望むのなら……」

「……一体何の話しだい？」

おや？　なんだか会話が噛み合っていない気がするな。

おかしいな。僕の推理ではこの後、彼女は僕の言いつけ通りに彼女に師事を受けるはずなんだが……。

「お父様はちっちゃい子が好きなんですね？」

なら、全然大丈夫です。私、まだ小学生

ですから。バッチコイ、です！」

「ふむ。……何だか会話が噛み合っていないようだね。一体何故そうなったんだね？」

「え？　だって私とえっちいことやりたいのですよね？」

「何故そうなるのだね？！」

「え？　だって雪さんが……」プロフェッショナル「教授はちっちゃい子が大好きな変態さんだから注意しな

さい』つて……」

「……後で雪女を連れて来なさい。大事なお話しがあるから」

しつかりとO　HA　NA　SHI　をしなれば！

僕は決してちっちゃい子が好きなのではない。

たまたま周りに小さな子が集まるだけだ。

曾孫のアリアは緋弾の影響であんな体型になってしまっただけだし。孫や鬼の一族、

覇美も色金の影響でそうなっていただけだ。

僕は決して幼女が好きなのではない。キンジ君とは違うのだよ、キンジ君とは！

僕は幼女が持つ美しさ、幼さ故の脆さや儂さが好きなだけのただの紳士なのだよ。

だから昔、理子君が言ったようなロリコンではない！　断じて違う。

「……なんか、怖いです。お父様」

「おっと、怖がらせてしまったようだね。大丈夫だ。さあ、おいで。君の都合が良けれ

ば、おいで。悪くても、おいで」

ベンチから立ち上がり、後ろを振り返って両手を広げて彼女が飛び込んでくるのを待つ。

父親代わりの僕が出来る最大限の愛情表現が抱っこだ。

ぼすん、と飛び込んできた綾，君を受け止めて抱き抱える。

「夏場とはいえ、やはり夜は冷えるね。そろそろ行こうか」

「はい、お父様」

落とさないように気をつけながら僕は公園を後にした。「綾，君を抱き抱えながら昔を思い出す。

“綾，君との出会いを……”。

「ねえねえ、私、綺麗？」

夕暮れ時の路上。

『勢力』の長として、全国各地を旅していた私は突然背後からそう声をかけられた。

声をかけられた瞬間、気づいた。

周りから『音』が一切聞こえないことに。

そして、おそらくどこまで走ってもこの永遠と続く夕方の『世界』からは逃れられないということ。

試しにこの世界からの脱出方法を推理したが……出来なかった。

どうやら私の『条理予知』は相手のこういつた世界の中では正常に作用しなくなるようだ。

おそらく、相手が定めたルールから大きく逸脱出来ないように制限がかかってしまっているのだろう。

都市伝説が実体化した存在『ロア』。

ルールに縛られる彼らと対峙する時には彼らが定めたルールに従わなければいけない時もある。

おそらく、今のこの世界には『迷い込んだら、どこにも逃げられない』というルールがあるのだろう。

「ねえねえ、私、綺麗ですか？」

もう一度声をかけてきた彼女を見る。

赤いワンピースを着た、とっても可愛い美少女。

口元には何故かつきはぎだらけのマフラーを巻いている。

その少女の姿を見るだけで、僕の本能が警告を発した。

あれは——『死』そのもの——だと。

「ねえねえ、私、綺麗だよね？」

口を開いてはいけない。

口を閉じてはいけない。

そう、『条理予知』が導き出している。

彼女は『口裂け女』のロアだと。

YESと返しても、NOと返しても、無言のままでもいけない。

遭遇したら最後……絶対に相手を殺せる『最強』のロアの一人だと。

「ふむ。懐かしい都市伝説だね。口裂け女とは……」

日本でも流行ったという噂は何度か聞いたことがある。

確か、社会的ブームとなつて。あまりに有名になり過ぎたせいで語られなくなった悲

劇の都市伝説。

それが口裂け女だったはず。

「ふむ。『ポマード』……は効かないか」

口裂け女は魔女と同じくらい弱点が露見している都市伝説でもある。

何故か整髪剤が苦手だったり。犬やべっこう飴で撃退できたり。

「はい、最近はその『ぼまード』とかいうのを付ける人もあまりいませんから」

「なるほどね、進化しているのだね。君達みたいな物語も」

弱点はいずれ克服されるもの。

人は日々成長していくものだ。その人によってもたらされた噂が変化していつもおかしくはないか。物語的なルールに縛られているとはいえ、噂に縛られる彼女のような存在なら、噂に縛られるからこそ、進化、成長していても不思議でない。

「とはいえ、まだまだ甘いね。僕は毎朝ポマードでガッチリ固めているのだよ！

このオールバックを維持するのに大量のポマードを使用しているのさ」

「な、なんですって!?？」

「はははっ！ 150歳生きる僕を舐めたらいけないよ？」

「さあ、今から君を僕のポマードでたっぷり塗りと塗り潰してあげよう」

「お父様。お父様……」

腕の中の綾がもぞもぞと動き出す。腕の中で眠っていた綾の寝顔はとても可愛らしかった。

目を開けた綾の瞳が僕を見つめる。

「うん？　なんだい？」

「初めてお父様とお会いした日のことを思い出したのです」

奇遇だね。僕もだ。

「あの時のお父様……今思うと、かなりの変態さんでした！」

グサリ。

娘同然に接している子の言葉は僕の胸に突き刺さる。

こんなにダメージを受けたのはキンジ君に頭突きされた時以来だ。

あつちには物理的なダメージを受けたが、今のは精神的にきた。

この僕に一撃を入れるとは。綾……恐ろしい子だ。

ち、違うのだよ！　僕は決して変態ではないのだ。

「あの後のあの言葉もいきなり殺そうと襲い掛かかってきた人に言うセリフじゃないと思います。ドン引きしました。いえ、嫌いになったわけではないです。

ただ……」

「ただ、なんだい？」

「……です」

「綾、君は賢いねえ。さすがは僕の娘だ。もう少ししたら僕のような推理が出来るよ

うになるかもしれないね。いや、ひよつとしたら……さらにその先の段階にも進めるかもしれないよ」

「お父様みたいなことが出来るようになったら私と結婚してくれますか？」

「まだ、早いか……」

結婚はともかく……普通の推理が出来るようになるまでまだ何年もかかるだろう。

アレに関してははつきり使えるとは断言出来ない。

推理を越えた未来予知。

あの領域にたどり着けたとしても何十年も先のことだろう。

「まだ？」

「言葉の綾……いや、あやだよ」

「……なるほど、脈ありだね」

ぐつ、と拳を握る綾君。

その姿はとても可愛らしいのだが、その可愛さ故に悪い男に引つかからないか、育ての親としてはかなり心配になる。10年くらいしたら、彼女も恋人とか作るのだろうか？

想像も推理もできない。色恋沙汰は推理出来ない分野だからね。ただ一つはつきり言えるのは……いずれ僕は彼女の前からいなくなるといふことだ。

僕がいなくなったら、彼女は生きていけるのだろうか？

そんなことを考えながら歩いていると目的地の港に着いていた。

「お待ちしておりました教授プロフェッサー」

「出迎えご苦労様。フラン君」

フランケンシュタイン……のロアであるフランにそう返事を返して僕は何も無い海上の上を歩く。

「さて、いよいよ出航の時が来たようだ。さあ、始めようじゃないか！

この歪んだ世界を破滅させる為の僕らの戦いを……」

僕の言葉に呼応したかのようなタイミングで海中からソレは現れた。

大きな木造船。地獄の番犬を象った船首。帆には大きく漢字の伊を囲むようにUの字が描かれている。

見た目は朽ち果てた幽霊船のような船体だが、中身は外形とは違いかかなり近代的な造りに改修されている。

超大型潜水船、『ネオ・セレスト号』。

メアリー・セレスト号という都市伝説に尾ひれが付き、この船は何もない海域から、何もない海中から突然現れるゴースシップだという噂によって誕生した新世代のロアなのだ。幽霊船と無人漂流船が融合し、さらに海中移動が出来るという潜水要素を得たロ

アだ。

まあ、これは僕の実験によつて偶然出来たロアの一体なのだが……それを知るものは少ない。

そう僕はある目的の為に噂を操作して人工のロアを作り出そうと研究を重ねているのだ。……まだ成功例は少ないが。

船内を歩いていると見知つた人と遭遇した。

「あつ、お帰りなさいませ。教授プロフェッサー」

「やあ、ただいま文君あや」

僕が彼女にそう言うと、腕の中の“綾”、君は何故か不機嫌な表情を浮かべた。

名前を呼んだだけなのだが……何がいけなかつたのかね？

女心は難しいものだ。

「お荷物をお預かり致します」

僕に深々と頭を下げるこの女性は文車ふぐるま妖妃まよわびのロア。

手紙や荷物を体内に収納できる運び屋的な人材。

いるとかなり便利なのだが……一つ問題が。

「そういえばこの前預けた物品購入要求の書類はあるかね？」

「はい、ここに……」

それは……

「おげええええええ!!!」

預けた荷物を取り出す際には彼女は吐き出さなければならないことだ。

ゲロ塗れの書類を手に取ることになる僕の心中を察してくれ。

『返品不要』。

体内に収納したものを相手に強制的に受け取らせる能力。

拒否出来ないという制約がある為、例えばゲロ塗れでも相手は受け取らなければならない。
い。

「はい、どうぞー」

「あ、ああ……どうも」

重要書類や大切なものは文君には預けられない。どこよりも安全なのは確かなのだが……取りだす際にゲロ塗れになるのは勘弁してほしい。

条理予知でも文君のゲロは防げない。

わかっけていてもどうにもならないことなど、この世にはたくさんあるのだよ。ワトソン君。

「?」 どうかされましたか、教授」

「いや……なんでもないよワトソン君」

「ワトソン？」

「いや、なんでもないのだよ文君」

「ゲロ塗れの書類を手に取り、これ以上汚れないように注意する。

うっ……匂いが服に付いた。これはまた雪女に怒られてしまうのではないかね。

洗濯家事全般を担当してくれるのはいいのだが、彼女を怒らせると、全身凍傷にされかねないから怒らせたくないのだよ。

「出航の準備は……出てきているようだね」

文君に確認を取ろうとしたその時、僕の背中が突如発火した。

「お父様!?」

綾君の慌てる声が響き渡る。

背中から発火した火の熱さとは別に人の温もりのようなものを感じていた。

熱くはない。いや、服は燃えそうだったが水の魔術や風の魔術を使える僕にとってこの程度の炎では熱さは感じられない。

「やあ、派手な登場だね。君は火車君かな？」

「わざわざ確認しなくても推理出来てるだりよにゃん」

「それはそうだが、こういうことは直接言葉で伝えた方がいいのだよ、火車君」

『火車』。猫の姿をした妖怪。

遺体安置所や葬式の火災場などから死人を浚うとされる妖魔の一種。

『火の車』と呼ばれる車の怪異と混合されることもあるようだが、日本に昔から伝わる都市伝説の一つだね。

「出航の準備出来てるにや。早く来るにや、みんな待つてる」

「では行くこうか」

水の魔術を使って消火をし、風と火の魔術で服を乾かした僕は先頭を歩いて甲板に向かう。

甲板にはこれまで僕が集めた世界各地のロアやハーフロアが集まっていた。

僕は集まった全員の顔やその姿を見渡して声をかける。

死体を攫ってその血肉を喰らうとされる雷鳴と共に現れる猫又『火車』

公文書や手紙、大事な家財道具などを体内で保管できるといふ配達者『文車妖妃』

雪山などで遭難した男性を助けて唇を奪い、氷漬けにするとされる雪の化身『雪女』

沼や湖を作ったと言われる国造りの神の眷属、巨人『ダイダラボッチ』

何人もの女性を切り裂いて快楽に溺れていたとされる殺人鬼『夜霞の切り裂きジャック』

触れたものや人を切り裂く、風の精『月隠の鎌鼬』

座ると必ず死ぬとされる椅子『椅子形チャア・イン・キョウの恐禍』

きゆうりが大好物で、頭の上の皿が干からびると死ぬと言われる『境川の河童』

血の契約により、契約者を守るとされる妖刀『叢雲』

手にしたものに聖なる力を与えるとされる聖剣『エクスカリバー』

人の形をした真つ黒な影『シャドーピープル』

細身で長身、真つ黒なスーツを着たスレンダーでのつぺらぼうな怪人『スレンダーマ

ン』

見たものに必ず災いをもたらすとされる呪いのビデオ『終わらない呪いの貞子さん』

齢800年以上生きてるお稲荷大好き妖狐『玉藻御前』

男か？ 女か？ 真の性別は誰も知らない絶世の美人間。『天衣無縫な天邪鬼』

……他にもいるが全員紹介はまた今度にしよう。

「誰に言ってるのですか？ お父様」

「番外編だからなんでもありなのだ、そう推理したよ。気にしたら負けなのだよ」

これが僕が集めた『勢力』だ。新生伊・Uというべきかな。

さあ、キンジ君。君にこの僕が止められるかな？

もうすぐだ。もうすぐ僕の願いが叶う。

さあ、この世界に『破滅』をもたらすでしょうじゃないか。

第四部。 変わる日常

プロローグ。『終わらない千夜一夜』

よう！ 待ったか？ 前回の続きを話すぜ。

ん？ 何だ？

もう待ちきれない、つていう顔してるな。

あれか？ やっぱりお前も『妹大好きー、妹萌えー』とかいう奴なのか？

いやあ、実際の妹はそんなにいいもんじゃないんだけどな。

異性とちよつと会話しただけで『私以外の女とは話さないで！』とか、『妹は兄の物』とか、『妹は最強』とか、『私が触わられても不快に思わないのは、兄さんだけなんです』とか言うんだぜ？

ん？ 前半はともかく。後半は羨ましい？

そうなのか。よくわからん。

俺にはいつものことだからな。

……つて、おいおい。

どうしてそこで『はいはい』みたいな顔をすんだよ。

そんなに羨ましいのか？　妹がいる俺が。

その気持ちはほんのちよつとしかわからんが。

今回語る妹は実際の妹……も少しは関わりあいがあるんだが、メインは『従姉妹』の方だ。

民俗学的にはイトコとカタカタで表記するみたいだぞ。

『結婚できるし、血も繋がっている』その手の属性が大好きな奴らからしたら、大変美味しい存在。それが『従姉妹』だったりするんだが。

ん？　何故ここで従姉妹の話に入るのかって？

それはだな……

前回のラストで、可愛い妹が実はかなりの強敵で、なおかつ宣戦布告までされた！
つていうところで終わつたんだが、覚えてるか？

忘れた？

なら、もう一度思い出してくれ。

仕方ねえな。簡単に言うぞ。

『百物語』の『主人公』として目覚めた『哥』の前に、いきなりいろんな意味で勝てそう
にない相手が名乗り出てしまった、というわけだ。

どうだ？　思い出したか？

うん？　まだわからんか。

まあ、時期に思い出すだろう。

俺もそうだったからな。

……ま、それはともかく。

可愛いがついていた妹に対して暴力的な行為は出来なかつたんだ。

ん？　本当に手を出したことはなかつたか、だつて？

……あー。別の意味でなら手を出しそうにはなつたな。あつちの俺は……。

……なんだよ。その目は。

いいんだよ。そんな昔のことは。

と、ともかく。

大事なのはここからだ！

世の中には『お前が敵対するなら仕方ない、キリツ』とか言つて容赦なく妹を殴る奴もいるかもしれないが、この物語の主人公はそんなことはできない。

むしろ、『君のような可愛い子を殴るくらいなら、君の望みを叶えてあげるよ』くらいのことを言いそうな奴だからな。つうか、もし、俺がその兄に殴られる妹側だったら、殴る兄のことを許したりできないな。

うちの妹なら、絶対に殴られたことは忘れないな。

根に持って、確実にやり返すな、絶対。

おっと、悪い。また話が逸れたな。

と、まあ。そんなわけでこの物語の主人公は、妹を殴ったりはできないんだ。

ほら、女性には基本優しく接していたろ？

まあ、だからこそ。『従姉妹』はそんな彼に対して宣戦布告なんてしたんだけどな。

ん？　こんなにピンチっぽく話てるのに、随分余裕そうな顔をしてるな。　　は

はーん、解ったぜ。

さては俺が最初に『この物語の主人公はハーレムを作った』ってオチを話していたから、どうせなんとかするんだろう？　　なーんて、思ってるんだろう。

まあ、確かにその通りなのだが、だが俺はまだお前に語っていないことがある。

それは……

――　奴はハーレムを作る前に、とても大事な何かを失うんだよ。

ははっ、ちょっとシリアスな顔付きになったな。ああ、そうさ。俺が話している物語

には、意図的に語っていない部分もあつたりするんだよ。だから、このまま最期まできちんと付きあつてくれよ？

さもないと、お前自身も『物語』に食べられてしまうかもしれないぜ……？

などと、脅したところで。

早速続きを語るとするか――。

さあ、百物語のエピソード4を語るとしよう。

2010年6月19日。夜霞市内路上。

「私の物語になりなさい、兄さん」

理亜の口から、そんな言葉が紡がれる。

妹のように可愛いがつっている従姉妹からその言葉を聞かされ、俺はあまりの衝撃を受けて動けなくなる。

自分自身で動揺しているのが解ってしまふ。

何故だ。何でこんなことになってしまったんだ！

混乱するあまり、頭は正常に働かず、ただひたすら『どうして』とか、『なんで』という疑問ばかりが頭の中でぐるぐる巡っている。

何がいけなくて、どこで選択を間違えたのか。

どうしてこんなことになってしまったのかが解らない。

「り、理亜、は、話を聞いてくれっ」

俺の顔をただただ冷たい目で見下すように高い場所から見下ろす理亜。

その視線には『怒り』や『悲しみ』といった感情が浮かんでいるのがなんとなく解る。

『終わらない千夜一夜』の主人公。

『絶対に関わるな』と一之江が忠告したほどの存在。

そんな存在が俺の従姉妹だなんて、誰が予想出来ただろうか？

「物語になる、とか……理亜と戦うとか、俺は、絶対に嫌だ！」

一文字疾風が大事にしてきたたった一人の妹のような存在。

何がきっかけかは解らないが、俺は今一文字の体を奪っている。

理由は解らない。望んでそうなったわけではない。

ただ、変わらない事実はある。

憑依して存在している。

その事実は変わらない。

そんな一文字が大事にしていた妹。

困っていたら助けたいと常々考えていた、仲良しな妹。

須藤理亜の存在。

—— 本当の兄ではないけど。

—— 血が繋がっている従姉妹だけど。

それでも、一文字が大切にしていた大事な存在だ。だから。

—— 俺は一文字ではないけど……

—— ずっと、彼女を見てきたから。だから、こそ。

理亜と戦うとか、危害を加えるなんて、絶対に出来ない。

—— 一文字に代わり、理亜を守る。

それは俺が負うべき『義務』であり、『責任』だからだ。

「俺には絶対に、無理、だっ」

「兄さんには無理でも、私には出来ませう」

あくまでも冷酷な言葉で、理亜は俺に語りかける。

今、目の前にいるのは本当に理亜なのか？

俺の知っている、一文字が大切にしてきた妹なのだろうか？

自問自答する俺に向かつて一之江が。

「モンジ。しっかりしなさい」

鋭い言葉をかけてくれた。

その視線はあくまでも、理亜を見つめたままだ。

「貴方が吞まれてしまつては、私たちはどうすることも出来ないのですよ」

一之江が言う、私たち。

それはつまり、俺の物語になつた彼女たちを指している、ということだ。俺がきちんと立ち向かう意識を待たなければ、一之江たちも立ち向かえない。俺が凹んでしまつていたら、彼女たちは動くことすら出来ないということだ。

そうだ。しっかりしろ！ お前は今まで何をしてきたんだ、遠山金次。

皆んなを守る『主人公』になると覚悟したじゃないか。

一緒に仲間と戦い、理不尽な物語を変えていく、という決めたばかりだろ？

それに、さつき戦つた『氷澄』達とは和解できたじゃないか。

だったら。

それこそ、いつも一緒に過ごしていた理亜となら分かり合えるはずだ！

物語になる、戦う以外の選択肢があるはずだ！

そう思つて、理亜に話しかけようとしたが。

「実力行使してしまった方が早いのでしょうか？」

だが、理亜はいかにも怜悧な表情で、淡々と語り、俺と、俺の物語である少女達を見つめた。

そこには、話し合いが全く通じない雰囲気醸し出していた。

視線には、いつもの優しさや温かみは存在しない。俺の肝を冷やすレベルの、それこそ、オルゴと呼ばれた死んだ父さんやカナ……切れた兄さんが放つレベルの殺気を放っている。

まだ中学二年生なのに。

あまりにも、威厳がある大人びた態度。

これが『主人公』という分類でも、特に危険視されている

「これが『終わらない千夜一夜』ですか」

俺の隣で一之江が呟く。

その呟きで『終わらない千夜一夜』がどんな物語だったかを思い出す。

そうだ。俺が『百物語』を集める主人公だとすれば、理亜は『千の物語』を語る存在。物語としての格が違うのだ。

「マスター。メリーズドールはわたしがやつつけようか？」

と、そんな理亜を見つめていると彼女の隣に立つ少女。理亜の『物語』の一つである『夜霞のロツソ・パルデモントゥム』のスナオが強きな眼差しを一之江に向けていた。

『赤マント』のロアである彼女は一之江に強いライバル心を持っている。

前回、一之江とスナオが戦った時は『引き分け』だった。

一之江は『最強』と名高いロアらしいので、最強を目指しているスナオからすると越えたい壁、目標なのだろう。

だが、当の一之江はそんなスナオには目もくれず、今も視線を理亜に向けたままだ。

スナオよりも、理亜を警戒しているのだ。

臨戦態勢に入ればいつでも戦えるように。

一之江と理亜が戦う……そんな可能性がある。

それは避けたい可能性だ。

そもそも、今の一之江にマトモに戦える力はない。

『ロア』状態が解除されるという理由ではなく、昨日の『赤マント』、『ターボロリババ』と連戦続きで体に傷があちらこちらにあるからだ。

疲れきっているはずなのに、背筋を伸ばして凜と佇む。

全く隙を見せる気はない。

そう、理亜に宣言するかのよう、理亜の一挙一動を見逃さないようにしている。

一之江がただひたすらに注目しないといけないほど、理亜は『強い』ということだ。

「必要ありません、スナオさん。兄さんの物語たちは、全て私が倒しますので」

冷たい眼差しのまま、理亜は一之江、音央、鳴央ちゃんを見回した。

(おいおい、いくらなんでもそれは無理だろ!!?)

一之江は最強と詠われるほどのロア『月隠のメリーズドール』だぞ。

それに、音央は『神隠しの妖精』、鳴央ちゃんはそのままの『神隠し』だ。

噂が広がつていたり、有名であればあるほどロアとしては強くなる。

そんなことは理亜もハーフロアになっているのなら知っているだろう……それなのに)

『全て倒す』だなんて。何で言いきれんだ？

もし、それが——俺に対する怒りで我を忘れて、感情的になっている言葉だ

としたら慌てて止めないといけないのだが。

……今の理亜を見る限り、落ち着いているように見える。

それこそ、単なる事実を口にしただけ、当たり前のことを告げているだけ、という感じだ。

「兄さん、兄さんみたいな心優しい人が、こんな世界でやっていくのは不可能です」

「そうか？　けっこう上手くやれてるのだけだな」

「今だけです。いずれ仲間が傷ついたり、命を落としてしまったりした日には、兄さんはぜーっつたいに、立ち直れません」

「ぜーったいに、って。そんなことは……」

「前科あるよね？ お兄ちゃん」

それまで黙っていたかなめが口を開く。

かなめが言う前科。

それは……兄さん。カナが『消えた日』のことだ。

秘密組織伊・U。そこに潜入する為に俺の兄……というか姉……やっぱり兄である遠山金一は世間的に『死に』。真実を知らなかった俺は無気力な状態になり、武偵高からの転入を考えるようになった。

「いや、確かにあれはそうだが。だけど、そんなことはもう……」

「ありそうでしょう？」

……一之江が傷ついた時。俺はかなりシヨックだった。

音央や鳴央、キリカやかなめ、リサ、そして……理亜がいなくなってしまうたら。

強くいられる自信、本当にあるか？

「無理でしょう？」

「いや、けどどな！」

だけど、ここで抵抗しなかったら、それこそ全てを失ってしまう。

理亜だって、本当はそんなことはしたくないはずだ。

だから俺は抵抗する。

「だけどな、俺は理亜にだってそんな想いはさせたくないんだ！」

拳を握り締めて叫ぶと、理亜は一度目を丸くして驚き。

「いいでしょう、兄さん」

そう目を伏せて頷いてくれた。

「おっ、解ってくれたか」

俺は説得が出来たと内心喜んだが。

理亜が放った一言は、そんな喜びを一瞬で吹き飛ばした。

「それなら実力行使で行きます！」

兄さん、私は貴方の物語を倒す『千の夜話』を持っていきます。ですから、降参して私の物語になってください」

「やわ？」

聞きなれない単語に、首を傾げながら尋ねると。俺のすぐ後ろで鳴央ちゃんがビクツと体を震わせた。

「そ、そんな……ロアを消すだなんて……そんなことが出来るロアが疾風さん以外にも

いた、だなんて……」

「え、ちよつと、鳴央、どうしたの!?？」

ガクガクと震える鳴央ちゃんを、音央が戸惑いながら抱き締める。

一之江を見るとその頬を汗が一つ流れていた。

俺は驚いた。

一之江がこんなにも緊張している姿は初めて見る。

其れ程までに恐ろしい、ということなのか？

理亜のロア『エンドレス・シエラザード終わらない千夜一夜』という『主人公』は。

そんなにも格が違うのか？

俺と理亜は。

「あら、そつちのツインテールボイーンとおにいさんは知らないみたいねっ」

「何を、だ？」

「んー、つまり相性っていうヤツよ」

昨日、その相性のせいで一之江と引き分けたスナオは、まるで知った言葉をすぐに使いたがる子供みたいに、その大変慎重ましいお胸様を張って告げた。

「兄さんは『対抗神話』という言葉をご存知ですか？」

「対抗神話？」

聞いたことあるような……キリカが確か教えてくれたな。

「ええと。確か『広がった噂』を沈静化させる為の噂だったかな」

「その通りよ！ 例えば、そうね。この街で流れている『隙間女』の場合を教えてくださいとね？」 その『対抗神話』はこんな感じなの！」

得意げに話すスナオ。こんな状況じゃなければ微笑んでいただろう。

それが出来ない。

「この街の場合、単に長年引き籠りをしてきた女の子がいて、その子の事を両親が周りの人に話して『うちの娘は臆病者ですぐに押入れの中に引き籠る子だったんだけど、外の世界に出れるようになった』と話ただけで。それ以来、彼女は実際はちよつと臆病者なだけの普通の女の子、そんな都市伝説のオバケはいなかったんだ、つて噂が広がったという感じよっ」

「そして、今その人はどうなっているかと言えば、すでに、普通に学校に行つて、普通の生活を送っている。外の世界に出て活躍されている。————— そこまで語つて、対抗神話は完成するんですよ、スナオさん」

「はい、マスターっ」

理亜が引き継ぎの言葉を言ったのを聞いた瞬間。違和感しか感じなかった。

理亜はそういう都市伝説にまるで詳しくない。知つていても誰もが小耳に挟んだレ

ベルしか解らない。

都市伝説にあまり興味はない、そんな風に勝手に思い込んでいた。

だから、理亜が『対抗神話』を語るのを聞いて、違和感を感じたし、それを当たり前のように語ってほしくはなかった。

「そういうのもあるのね……」

「ああ、『隙間女』のロアを消し去る方法だ、って俺はキリカに聞いたよ」

音央の呟きに答えながら俺はその方法がどんなものだったのかを思い出す。

噂が流れてロアが発生した場合、その物語を弱める手段として噂を流してロアを弱体化させてしまう、というもの。

その方法が、『対抗神話』だと言っていた。

いつだかの放課後の特別講習を思い出す。

『こういう噂が流れるとね。『隙間女』はいなかったんだ、なんだー』ってみんなの間に広がりがまくって。結果……』

『『隙間女』のロアは消えて無くなる』

キリカがちよっぴり怖そうに、眉を下げながら教えてくれたのを思い出す。

純粋なロアであるキリカにしてみると、ロアが消える話はやはり恐怖を感じたのだらう。

「そんな感じだったか？」

「はい、その通りです。多少は知っているようなので何よりです。さて――」

俺の反応を見て把握すると、理亜は一之江を睨みつけた。

一之江は負けずに理亜を睨み返すと。真剣に理亜が持つロアの噂を語り始めた。

『千夜一夜』の語る『夜話』――それが全てのロアにとつての『対抗神話』に

なる、という噂があるのです」

いつもは飄々としている、どんなシリアスなシーンでもおふぎけを忘れない一之江。

そんな彼女が、今はただただシリアスな表情と声で理亜を見つめている。

――まるで。

「はい。それが私の能力の一つ『千の夜話』です」

まるで、目を離れた瞬間に自分が殺されるとも言うかのように。

第1章 千夜一夜物語

第一話。『対抗神話』

「なるほど」

そう答えた一之江は今にも飛びかかりそうな勢いだった。しかし、今の一之江は力を使い果たしている。昨日は『赤マント』であるスナオ・ミレニウムと戦い、氷澄やそのロアである『ターポロリババ』のラインと戦ったばかりだからだ。

今は『ロア』状態を解除したから何の怪我を負っていないように見えるのだが、その精神的な疲労やダメージは残っているはずだ。

そんな状態で、仮にも引き分けたスナオと戦えるとは思えないし。

ましてや、最強の『主人公』などと呼ばれる理亜と戦えるなんて思えない。

いや、例え一之江が万全な状態だったとしても、俺は戦ってほしくない。

妹のような存在である理亜と、パートナーの一之江が戦うだなんて。

そんなの、俺にとっては悪夢以外の何ものでもない。

「なあ、一之江……」

「モンジ。貴方の妹さんは我々ロアにとって最も危険な存在です。そして貴方は、そん

そんな態度だ。今の理亜なら音央を容赦なく消し去る……そんなことはしない、なんて言い切れない態度と鋭く細めた瞳で俺や一之江、音央、鳴央を見つめている。

理亜がさつき俺に告げた言葉が脳内でリピートされた。

『いずれ仲間がもつと傷ついたり、命を落としてしまったりした日には、兄さんはぜーったい立ち直れません』

あの言葉は、俺の覚悟を問うものだった。

「で、でも、そんなの……理亜ちゃん、苦しいだけじゃないっ」

音央の語調が強くなる。『ロア』とはいえ、誰かを消す力。

それはある意味殺人を犯すのと同じだからだ。

「そうですね……当然、胸も痛みますし。泣きたくなることもあります」
音央の言葉で。

理亜からようやく感情というものが読み取れた。

それは『悲しみ』、『後悔』、『怒り』、『そして……』。

「ですが。私はこの『終わらない千夜一夜』の『主人公』としての道を歩み。いくら犠牲が出たとしても、再び立ち上がって戦うという意志があります」

理亜が抑えていた感情。

それは。

『恐怖』。

その感情を理亜が持ち、そして……俺の前に現れたということとは。

『最強の主人公』である理亜が恐れるほどの何かが起きている、ということだ。

そして。

その何かが俺に迫っているということでもある。

「つ、理亜ちゃん……」

理亜は苦しそうに声を振るわせてから、目を細めた。

今の言葉は音央への返事でありながら、俺に問い質したものでもあったんだ。

『兄さんには、私のような『覚悟』はありますか?』と。

理亜は俺になんらかの『覚悟』を持って対峙している。

なら、俺も。

『覚悟』を決めて伝えないといけない。

「さて、私の説明は以上でよろしいですか?」

あくまで淡々と。朗々と。女王が民衆に告げるように上から目線と口調で。

理亜は俺と、一之江達を見た。

「では兄さん。改めて言います。私の物語になりなさい」

理亜がその台詞を呟いたのと同時に。

「……すみません、モンジ」

信じられないことに、一之江の口から謝罪の言葉が溢れた。

「え？」

尋ねる間もなく、隣にいた一之江の姿は一瞬で消えた。

その姿を再び捉えた時には、一之江は手にナイフを持ち、それを理亜の胸に突き付けようとしていた。

「ばっ、やめ……」

止める、と言おうとしたその時。

「音央ちゃん、今ですっ」

鳴央ちゃんの悲痛な声が横から聞こえ。

「つぐ、ごめんね、理亜ちゃん！」

「音央、鳴央ちゃん!?」

『神隠し』コンビが、連携して理亜目掛けて技を放っていた。

まるで、鞭のように、鋭くなった蔦が理亜を拘束しようと迫り、そして、鳴央ちゃんは一之江と音央に合わせようと真面目な顔をして理亜を見つめている。

「モンジさん、ごめんなさいっ。私たちは……!」

『私たちは何があっても貴方を守りたいんです！』

……………。

ああ、解ってる。解ってるよ鳴央ちゃん。だから、そんな目をしなくていいんだ。

そんな目を潤ませて申し訳なさそうな表情をしないでくれ。

君達は、俺の物語だから。俺が下せない決断を、最良の決断を代わりにしてくれただ。俺も、みんなも生き残ることが出来る最善の方法を。

だから一之江が珍しく『すみません』なんて言い出し、音央が半べそになってまで攻撃を繰り返して、鳴央ちゃんは悲痛な声で叫んでいるんだろう。

これは、誰の責任でもない。

誰も予想できなかった。

一つの現実だ。

俺の大事な物語たちと、大事な妹が戦いを始めてしまった。

もし責任があるのなら。

その責任は俺にある。

俺は一之江と出会った頃から、その可能性に目を瞑ってきた。

理亜が何かしらの『ロア』であるという可能性から。

もつと早く、理亜を調べていれば。

もつと早く対策を練っていれば。

少なくとも、俺の物語たちを巻き込むことにはならなかったはずだ。

『もし』、『たら』、『れば』なんて言い出したらキリがないが。

だが、それでも。

それでも思わずにはいられない。

「甘いわよー!」

一之江と音央の攻撃が届く前に、理亜の体は赤いマントによって消失する。

その隣にいたスナオやかなめの姿もどこにもいない。

スナオ・ミレニアムのもつ『ロア』は『赤マント』。

そう、彼女の能力は『少女を浚う』というもの。

どんな状況下であっても、その赤いマントは理亜やかなめといった『少女』を浚えるのだ。

と、そんなことを考えていると。

「くっ!」

一之江の悔しそうな声が聞こえ。

彼女の方を（姿を見ないように気をつけつつ）見ると。

一之江は今まで理亜達が立っていた柵フェンスの上に着地していた。辺りを見回している様子から理亜達の姿を見失ったようだ。

一之江の目はすっかり戦士の目で、対象を倒す以外のことを考えていない。そんな目をしていた。

「ど、どこに消えたの？」

「気をつけて下さいっ！」

音央が放った茨の蔦も空を切り。

焦った顔をした音央と、青ざめた顔をしている鳴央ちゃんが叫んだ。

その時だった。

すっかり動揺していた俺達の耳に、理亜の静かな声が響いた。

『メリーさんの人形に襲われた人物は、その最期の瞬間に眩きました』

「っ!?」

その声を聞いた瞬間。

一之江の体がビクツと跳ねた。

どこからともなく響くその声が、まるで物語を朗読するかのよう
に。淡々と、そして綺麗なトーンで響き渡る。

『そう。もしもこの人形が探しているのが、私ではなくて『メリーさん』
のだとしたら。復讐の相手はメリーさん自身なのだとしたら。彼女はそう
考えて』

「あああああつ!??!」

理亜のその静かな声を聞いた途端。

一之江が、今まで聞いたこともないような大声を上げ、両手で体を抱きしめるように
して苦しみだした。

「一之江!??!」

その目は大きく見開かれ、顔面は蒼白になっている。

まさか、これがさつき理亜の言っていた『夜話』なのか?!?

『だから復讐にやってきた人形にこう語ったのです。「もしもし、私は』

「あう、く、ああああつ!!?」

一之江の苦しみ方は尋常ではない。胸を抑えて、目を強く閉じ、柵フェンスに必死にしがみついている。

何が起きているのかを確認するまでもない。

『対抗神話』

それは。

『噂』によつて、『実体化』する都市伝説である存在。『ロア』を『消滅』させる方法。

その力を理亜は一之江に向けているのだ。

「や、止めろ理亜!!?」

おそらくだが、今理亜が語っている物語は『メリーさんの人形』を打ち消す為の対抗神話。

つまり、その続きを読まれたら……『メリーさんの人形』の物語は解決してしまう。

その意味するところは……一之江が消滅する可能性があるということだ。

「う、あ、ああああああ!」

一之江がこんなに苦しそうな声を出すなんて、今まで想像すらできなかった。いつだって気高く、慇懃無礼いんぎんぶれいで、余裕を持っている一之江が。今は口から搾り出すような悲鳴を上げているんだ。

「止めろ理亜！」

俺の叫びもまた、悲痛な哀願になっていた。

なんでだ？

どうして？

なぜ？

理亜がこんなことを。

いや、とつくに理由は解っている。

一之江が先にしかけたから。

理亜はそれに応じただけ。

正当防衛。

襲われたから、危険な対象を排除する。

それは当たり前前の考え方だが、だが……それでも。

それでも、俺は認めたくない。

あんなに優しい理亜が容赦も躊躇いもなく、一之江を消そうとしているなんて。
『……………ふむ』

そんな俺の声が届いたのか、どこからともなく響いてきた理亜の声は、夜話を読むのを止めてくれた。

助かった、と、ホツとしたのも束の間。

『兄さんにとつて、一之江さんがどれほど大事なのかは解りました。では次は……………』
「つ、次だと!?」

(おいおい、何の冗談だよ!?)

これは夢か? 夢なら覚めてくれ!

理亜は夜話を読むのを止めたわけではなかった。

ただ、読む対象を変えただけだ。

俺にさらなる絶望を与える為に。

「や、止めて、理亜ちゃん! 見せしめなら、ロアである私になるから!!」
と、愕然とする俺を他所に音央が虚空に向かって叫び。

「音央ちゃん!?」

俺以上に驚きの声を上げて鳴央ちゃんが叫んだ。

音央だって、鳴央ちゃんだってさっきの戦いで傷ついているのに。

それでも頑張つて、踏ん張つて立っているのに。

音央も、鳴央ちゃんもお互いがお互いを支えあつて辛うじて立っているのに。それなのに。

「元々あたしはいない存在だもの。こういう時は、ハーフロアのアんたたちより、あたしがそういう目に遭うべきだと思うの」

「そ、そんなの、いけませんっ!!?」

「ふざけんなよ、音央!」

音央の決意に、鳴央ちゃんと俺は断固反対する。

「ロアであるからとか、ハーフロアだからとか、そんなの関係ない。誰かを犠牲にして勝つなんてそんなこと認められない!」

俺は声を張り上げて抗議したが。

『いいでしょう、音央さん。次は貴女です』

俺が音央に言い終わると同時に、理亜の声は容赦のない一言を告げた。

そして。

『妖精の森に攫われた少女が帰ってきた時、そこには暖かな食事と、優しい両親がいました。だから、その少女は————自分が妖精であることを伏せようと』

思ったのです』

「ひうつつ??？」

理亜の声が聞こえたその瞬間。

音央は小さな悲鳴を上げた。

『ですが、その夜ご飯を食べた時。そこにあるのが強い愛であり、そしてその愛は自分に向けられたものではないと知った彼女は、自分の正体を——自分という存在が消えてしまうことも厭いとわずに告げようとしたのです。「すみません、私は

——』

「やつ、あ、あたしの体がつ??？」

「いやあつ、音央ちゃんつ??？」

音央を見ると、その体が薄つすらと……薄く、透明になり始めていた。

隣にいる鳴央ちゃんが慌てて抱き締めるものの、その体はまるで空気に溶け込むかのように、じわりじわりと色を失っていく。

「や、止めてくれ理亜!!?」

『兄さん、では、私の物語になる決心をしてくれましたか?』

理亜の声はやはりその続きを語ることはなく、俺に尋ねてきた。いいところで止めることで、その力を見せつけるかのように。

なんて少女だ。

こんな能力、反則なんじゃないか?

理亜が一人いれば、どんなロアだつて退治できてしまう。

そのくらい圧倒的な力だ。

まさに一騎当千。

『最強の主人公』にふさわしい能力だ。

それはまるで、物語の『英雄』とか『勇者』が持つ力。

あ、いや。女の子だから、『聖女』や『女神』だな。

俺の『百物語』とはまさしく格が違う。

そう。本当は……本当は、俺なんて要らないんじゃないや

「も、モンジ……のまれたら……ただじゃおきませんよ……」

^{フェンス}柵の上から聞こえてきた一之江の声にハツとする。

そうだ。俺は一体何の為に。誰の為に『主人公』になつたんだ?

何で『百物語』の『主人公』になったんだ？

塞ぎこむ為か？

絶望する為か？

投げ出す為か？

—— 違うだろ、遠山金次！

大切な物語を……仲間を守る為、その為に俺は『主人公』になったんだ！

何より……俺は『あの日』誓ったんだ。

初めてDフォンで一之江を呼び出した日。

一緒にベッドで添い寝したあの日。

俺は誓ったんだ！

『大事な物語にする為に、頑張る』って……。

武偵憲章2条。依頼人との契約は絶対守れ。

俺は約束した。一之江を消させたりしない。

「そうか。そうだったね。一之江。」

もう、大丈夫だ。俺は諦めないから」

武偵憲章10条。諦めるな。武偵は決して諦めるな。

「そ、そうです、モンジさんっ！ 諦めないで下さいっ！

私たちは、モンジさんだ

から、モンジさんの物語になりたいて思ってたんです」

鳴央ちゃんも必死に叫んでくれた。

そんな彼女らの『想い』を聞いた以上。

諦められるかよー!!?

理亜と戦う決意は固まった。

だが。

次の瞬間。

『……………こういう話があるんです。境山で発生した『神隠し』について。新聞に載っていたんだけど、あれは家に帰っても帰ってこない親に向けて、自分がいなくなっただけを心配して欲しいと願った子が流した全くのウソで……………
実際、その女の子は……………』

「や……………やああああ!?」

理亜の声が聞こえた途端、鳴央ちゃんは大きな声を上げて苦しみだした。

「な、なんだよ、その話は!?？」

全くのウソ。デタラメだ!

本当の『神隠し』は、鳴央ちゃんが音央を生き延びさせたいが為に、多くの罪を犯して頑張っていた話だったはずだ。

それなのに、理亜が語った夜話は全くのウソだった。

だが、ウソであっても、鳴央ちゃんは胸を抑えて苦しんでいる。

『對抗神話』。

より多くの人が信じるであろう、都市伝説の解決方法。

理亜は、それを完璧に、完全に使いこなしている。

噂を、コントロール出来るくらいに。

「止めろ!　もう、止めてくれ!

この通りだ!」

俺はすぐに日本人伝統の謝罪方法。

土下座をした。

^{フエンス}
柵の上で苦しみ続ける一之江。

姿が消えかけてる音央。

悲鳴を上げる鳴央ちゃん。

彼女らがこれ以上苦しむ姿は見たくない。

「お願いだ、理亜っ！　この三人を苦しめるのを、止めてくれ、頼む……！」

どこに居るのは解らない。おそらく、スナオちゃんによって『攫われた』先の空間からその『夜話』を続ける理亜に声をかける。

理亜が止めるまで、俺は頭をアスファルトにガンガンと打ちつけた。

頭から血が流れたが、そんなことは気にならない。

アスファルトが削られ、周りに飛び散るが気にならなかった。

ただ、ただ愚直にもそうすることしか出来なかった。

だって。

俺は理亜に、可愛い女の子に手を上げたりなんてできないのだから。

『は、ふう』

理亜の困ったような、呆れたような溜息がどこからともなく聞こえる。

『ご理解いただけましたか、兄さん。いかに『ロア』というものが曖昧で、

儚く、些細なことで消滅の危険に陥ってしまう存在であるのかを。そして、兄さんは彼女たちを守ることなんて出来ないということ』

俺には一之江たちを守れない。

今までの理亜の行動が。

それを思い知らせる為だとしたら、それは最適な方法だ。

俺はただただそれを実感してしまう。

敗北でもない、諦めでもない。

理亜は、俺が彼女たちを失った時に何も出来なくなることを見越して、その事実を知らしめたただけだ。

だから、ここにあるのは現実だ。

相手に対して、頭を下げることは出来ない。

そんな現実を痛感させられた。

そして、そんな俺に理亜は告げた。

『千の夜話』

『今宵はここまでにいたします』

第二話。消えない伝説

『千の夜話』
アルフ・ライラ今宵はここまでにいたします』
フェンス

理亜がその言葉を告げたその瞬間、それまで柵にしがみついていた一之江が、ふらつとバランスを崩した。

「一之江……？」

俺は正座状態から慌てて立ち上がり、柵の下に飛び込んだ。

「ぐっ」

一之江の体を支えようとしたが、いくら一之江の体は小さいとはいえ、女の子一人分の体重を受け止めきれず、俺は背中に強い衝撃を受けてしまう。

本当は受け止めた瞬間にお姫様抱っこをした方がいいのだろうが、まあ、それはまたの機会にとっておくでしょう。

それより今は……。

「今、夜話の続きを語っていけば、皆さんの中にある『ロア』は消滅していたのです」
目の前に降り立ったこの少女の相手をするのが先だ。

玄関で確認した靴と同じもので、靴下は几帳面に白いソックスを履き。そして、白く

てスラツとした細い足を俺の眼前に晒している。このまま、上を見たらいつかの屋上の時のように絶対領域が見えてしまいそうだったので、俺は2秒ほどの葛藤の末視線をその足元に固定した。

そして、理亜が言った言葉の意味を考える。

「ロアが……消滅……?」

「はい、兄さん。ハーフロアであるその方なら、そのまま人間に戻ることも出来るかと」
ハーフロアを人間に……!??

その言葉を聞いた瞬間、俺は思わず顔を上に上げてしまい。

その白い太もが見えた辺りで、視線を逸らした。

や、ヤバイ。

これは……なつちまう!!?

「あー! 今、マスターのぱんつ見ようとしたわよこいつ!」

「し、してない。それは誤解だ。俺は何も見えないよ。見えそうだったから慌てて視線を逸らしたからね!」

「兄さん……こんな時に」

あれ? なんか理亜の好感度が一気に下がったような感じがするな。

押し殺したような低い声で理亜は呟くと一歩俺から離れた。

じりじりと後ろに後退していく。

いや……だから誤解なんだって。

「ハーフロアから、ロアを消滅させて、人間に戻す……？」

そんな俺らを他所に鳴央ちゃんは荒げた息を抑えながら、震える声で尋ねた。

「その通りです。もつとも、純粋なロアであれば先ほどの音央さんのように消滅してしましますが」

理亜の言葉に戦慄する。

一之江達の方を見ると。

一之江は気絶したままで、音央は消えかけていた体が元に戻ったことに安堵していて、鳴央ちゃんはそんな音央を抱きしめたまま、迷うような顔をしていた。

そして、そんな能力を見せた理亜は、彼女達に恨まれたり嫌われることなどなんとも思っていないかのように、ただ毅然とした姿で立っている。

「後悔は……していないのか？」

「はい。私は——この力を得る為に『主人公』になりましたので」

その言葉は俺にとって衝撃的だった。理亜は自ら、その物語の『主人公』の道を選んだのだという。

俺みたいに偶然なってしまったのではなく、『ロア』を消す為に。自らの意思で。

「ですから、貴女から『神隠し』だけを消し去り、普通の少女に戻すことも出来ますよ。

本物の、六実音央さん」

理亜が鳴央ちゃんにそう告げる。

そうか。やっぱり知ってるのか。

音央の正体も——鳴央ちゃんが犯した罪も。全部……。

「り、理亜ちゃんっ」

理亜と面識がある音央が声を荒げる。

怒ったような声だが、そこには戸惑いや動揺があきらかに含まれていた。

「音央さん。貴女の場合、その対抗神話を口にする다고消えてしまうのがご理解いただけ
たと思います。ただ、私は貴女のことには気に入ってますし、お友達が貴女のファンなの
で——
兄さんが私と敵対する、という展開にでもならない限り、消したりする
ことはありません。ご安心下さい」

「うぐっ」

音央は何かを言おうとしたが、言葉を飲み込み、そのまま手を握り締めた。

その光景はまさに。

——圧倒的。圧倒的な『君臨』だった。

この場だけではない。ロアの事を知り尽くし、その物語を熟知し、そして対抗神話を

語ることでその力を消し去る事が出来る。そんな能力を有している。

ロアという存在はさつき理亜が言ったように曖昧で儂く、脆い。

それは人々に噂されることで発生してしまい、語られる噂に影響される存在だからだ。

不本意なまま、ハーフロアになってしまった俺みたいな人や人々に噂された事により実体化し、発生してしまった都市伝説『ロア』。

元は人間だったハーフロアはともかく……。

噂によって生まれた純粋なロアは生まれた瞬間から決められた物語の通りに行動する。

無害な都市伝説もあれば、殺害系や神隠しなど、人々に直接危害を加える物語もある。

それが成長すれば多くの人々を害する可能性がある。

そんな人^{ハーフロア}やロアがいる中で、そんな全てを『なんとか出来る』力。

それを自分から望んで手に入れた主人公。

それが『終わらない千夜一夜』^{エンドレス・シエラザード}、理亜なんだ。

その考え方や行動力は見事すぎるほどの『主人公』だ。

「理亜……」

俺は背中に乗っている一之江をそつと抱え直しつつ理亜を見上げる。

そして理亜に語りかけようと口を開いたが。

「ただ、私の力では兄さんの『百物語』と『不可能を可能にする男』の物語を消し去るのは不可能なので、私の物語にするしかありません。大丈夫です。もう戦わせたり、苦しい思いをさせたりはしませんから」

「俺のは消せないのか？」

「はい。兄さんのロア『百物語の主人公』は特殊なので、ピンポイントに語れば消えるような物語がないのです。一番オーソドックスな対抗神話は『百物語』をしても何も起きない……というもののなのですが、兄さんの百物語は『101番目』ですしね。今まで類似した話が存在しません。

『不可能を可能にする男』に至っては……どんな物語にも『干渉』するという特性上、対抗神話に干渉される恐れすらありますから……下手に夜話を語ればその夜話を改変されてしまう、そんなことが出来る存在です。そもそも『不可能を可能にする男』の対抗神話も『何も変わらない』というものしかありませんし」

「そう、なのか」

理亜の言葉に驚愕すると同時に安堵してしまう。

『千夜一夜』^{シユエラザード}も完璧ではない、ということか。

それが解っただけでも充分だ。

「さあ、兄さん。これで解つたでしょう?」

理亜は最後通告をしてきた。

「ああ……痛いほど。苦しいほどによく解つたよ……」

弱つてたとはいえ、一之江や音央が同時に仕掛けたというのに、理亜には何も出来なかつた。

一之江が、音央、鳴央ちゃんが苦しんだ時に、俺は何も出来なかつた。

『俺』の物語は消せないという抜け道があるということは、俺一人でなら『理亜と戦える』という選択肢もあるのだが、俺はそんな選択肢は選べない。

可愛い妹同然の少女。

それも俺を慕ってくれる子を『攻撃』なんてこつちの俺には出来ないのだから。

例え、唯一理亜の『千の夜話』アルフ・ライラに対抗出来る存在だとしても。

それに俺が理亜に『攻撃』した場合。

理亜は俺よりも先に一之江達を完全に消そうとするだろう。

つまり、誰かを犠牲にすることになるのだ。

それだけは嫌だし、そんな選択は俺には出来ない。

と、いうことは、だ。

俺が今とるべき正しい選択肢は。

一之江や鳴央ちゃんを殺すつもりはないと言った理亜の言葉を信じることに。音央のことも消すつもりはないとも言っていたのだから。

だから——正しい選択肢は、俺がそのまま理亜の物語になること。

それが正しい選択肢ということが解る。

「兄さん。もう兄さんは充分頑張りました」

ああ、そうだよ。

頑張ったさ。

『さあ、元の生活に戻りましょう』

理亜は優しく語りかけてきた。

ついさっきまでの、冷たくて怖かった口調からいつもの柔らかくて優しい声で語りかけてきた。

その柔らかさだけで涙が出そうになってしまう。

元の生活……一之江や音央、鳴央ちゃんやキリカと過ごす普通の生活。

普通に学校に通って普通の高校生として過ごす。

普遍的な生活。

ああ、そうだな。

そうすれば、もうみんなは傷つかなくて済むし、怖い目に遭わなくて済むようになる。

今までの日常がおかしかったんだ。

都市伝説のオバケと戦うような日常。

そんな日常は終わりに出来る。

理亜の物語になれば過ごせる……

高校生としての辺り前の生活――を。

それはとても魅力的な提案だが。

だが……しかし。

「……元の生活じゃ、ないだろ」

そう。そんな日常を選択しても。

家に帰ればそこには。

そこには、理亜やかなめ、リサがいるんだ。

「俺が普通の生活を送っているのに、裏では理亜達が苦しんで戦って、傷ついたりしてるかもしれない。」

そんな日常を送るなんて俺は嫌だ！」

いつものように扉越しに会話したとしても、その理亜は戦いで苦しんでいたり、悲しんだり、辛い思いをしているのかもしれない。普通の女の子が味わう必要のない苦しみを、まだ中学生の女の子に味わさせたまま、俺は、俺だけは普通の生活を送るなんて……

そんなの。

「兄さん」

「そんなの、絶対に駄目だ。俺が元の生活に戻るのなら、理亜も一緒に戻る！」

「そうじゃなきゃ、認められない」

「ん……」

理亜の口からは判断に迷うような、小さな吐息が溢れる。

理亜が最強の『主人公』で、それだけの力を持つ、ということはよく解った。

でも、だからこそ。

二人とも『元に戻る』道でなければ、俺は認めることなど出来ない。

「兄さん、それは……」

理亜の顔を見ると、僅かに瞳は揺れていた。

「理亜！ 俺はな、理亜がそんな困った顔をするくらい、理亜のことが大事なんだ！」

そんな理亜が『主人公』として頑張るっていうなら、俺は全力で助けたいし、手伝いたい。

理亜が抱える苦しみを減らしたいんだ！

「それは、ですが、甘い認識で

「甘くてもいい！ 馬鹿でもいい！」

俺はな理亜。大切な人を守る為なら例え世界を敵にまわしても構わない」

「……飛躍し過ぎですよ。ですが、本当にそう思いますか？」

「ああ世界なんて知ったことか！　大事なのは世界じゃない！」

もし世界と理亜、どちらを選ぶかと言われたら理亜を選ぶ！」

そのくらい、理亜。君が大切なんだ！」

「……兄さん」

理亜が心を鬼にしてる理由ならなんとなく解る。

それはきつと……俺の為だ。

本当は、誰かを傷つけたり、誰かを突き放したりするのは苦手な女の子だから。

そんな彼女がそれでもそうしなければいけない理由。

それは俺の心を折る為にやっているんだ。

そんなことをさせてしまったのは、俺だ。

俺が不甲斐ないから。

だから、理亜はクールな『主人公』になることで、俺を守ろうとしているのだ。

「ごめんよ、理亜。ごめん……俺は理亜の兄なのに。」

理亜の想いにも、苦しみや辛さにも気づいてやれなくて……ごめん」

ああ、ちきしょう！

過去の自分を殴ってやりたい。

もつと注意深くしてれば、理亜の変化に気づいてやれたのに。

なのに俺は自分のことではいっばいだった。

不思議な出来事に巻き込まれて、自分だけが苦勞しているものだと、思い込んでいた。

こんな近くに、同じように苦しんでいる人がいるのに。

「ごめんな、ほんと……」

あれ？ おかしいな、涙が……ちきしょう。目にゴミが入りやがった。

「はふう……」

理亜はまるで見かねたかのように、深い溜息を吐くと。

「スナオさん、かなめさん、帰りますよ」

スナオやかなめに声をかけた。

「あれ、いいの？」

スナオちゃんはそれは予想外だ、とばかりに驚いたが。

かなめはさもありません、という表情をして頷いた。

「ん、合理的な判断だね。」

今のお兄ちゃんは冷静な状態じゃないから」

「はい。こんな状態の兄さんが『物語になる』と言ったとしても、それは一時の感情に過ぎませんか」

確かに、今の俺はまともな判断は出来そうにない。

そんな状態で理亜の物語になっても、誰も納得しないだろう。

俺も、俺の物語達も。そして……理亜やかなめも。

理亜もかなめも理性的に俺が判断するのを求めているのだから。

「んー」

スナオちゃんはそんな俺をじつと見つめた後。

理亜やかなめの顔を見て呟いた。

「二人とも……ブラコンだなあ」

「スナオさんっ」

「わっ、すみません！」

怒ったような理亜の声に謝罪の言葉を口にして、スナオちゃんはチラチラ俺の方を見ながら理亜の背に着いて行く。立ち去っていく間、理亜は一度も俺の方を振り返らなかった。

かなめは何度かチラチラ俺の方を振り返ったが、声をかけることはなく。

理亜とスナオちゃんの背を追いかけるように立ち去って行った。

そんな風に立ち去って行く少女達を見て、さらに込み上げるものを必死に抑えながら。

俺達は、最強の『主人公』である『終わらない千夜一夜』との————最大の恐怖との対決を、なんとか切り抜けたのだった。

2010年6月19日。七里家寝室。

気を失っていた一之江が目を覚ましたのは、それから少し経ってからだ。

「あ、みずみず、おはよんよん！」

「おはようございますよん」

嬉しそうに挨拶する先輩に合わせて、一之江もそれなりに不思議な挨拶で返す。

自分が寝ていた場所が先輩の部屋のベッドの上だと気づいたのか、いろいろ納得した

かのように頷いていた。

「びっくりしちゃったよ。みずみず、みんなでコンビニに出かけた時に貧血で倒れちゃったんだって？」

「あー……どうやらそのようですね。薄幸の美女なもので、朝は低血圧なんです」

「うん、いかにも弱い子っぽいもんねみずみず。よしよし」

先輩が一之江の頭を撫でているのを見て、ようやく俺は心を落ち着けさせることが出来た。

「モンジくんなんか心配して、目を真っ赤にしてたんだからっ」

「モンジが？」

俺の顔をマジマジ見つめてくる一之江。

俺は部屋のドア付近で腕を組んだまま立っていた。

「ふむ。私はもう完璧に大丈夫なので、部屋を出るとしましょう」

「わっ、もう起きて平気？」

「はい。それに貴女の部屋に野獣のような男を入れておくのは良くありません。モンジが万全の状態だったら、今頃この部屋の空気が薄くなるくらい匂いを嗅がれますよ」

「どんな変態だ俺は!?」

「ふえー。あ、でも、うーん、モンジくん。匂いは流石に恥ずかしいから、ちよつぴり勘

弁して欲しいかなあ……あ、あはは……」

先輩が恥ずかしそうにそう告げる。

うむ、照れた顔は可愛いらしい。

……つて、何言つてんだ俺は!!?

いかん、こんな先輩がいる空間にこれ以上いたら、間違いなくヒスつてしまう。

帰ろう。直ちに。今すぐ!

「しませんから大丈夫です。一之江が目覚めたからそろそろ帰りますよ」

「そうですね」

一之江がベッドから降りるのをさりげなく見守る。

一之江の足取りはしつかりしていて、ダメージの蓄積はさほどないように見えた。

まあ、一之江が他人に解り易くダメージを見せるなんてことはほとんどないんだがな。

「あれ、やつぱり帰っちゃうのん?」

先輩がしよんぼりした顔をする。

うつ……なんか罪悪感がするな。

ずっと居たくなる。

先輩の側と一緒に……。

「いけません。あれは『ベッド下の男』ではなく『ベッド上のモンジ』に進化する前の顔ですよ」

「どんな変態だそれは!!?」

突っ込みたくないのに、突っ込んでしまう。

流石は一之江。

ボケは健在だ。

なんて思っていたら……。

「ふふ、モンジくんだったらしいよん♪」

突然先輩が爆弾発言をした。

「な、な、ナニを言ってるんすか!!?」

「私を好きにしているよん——疾風♪」

なっ、なん……だと!!?」

第三話。　　パンツを拾ったら全力で、ランドリーへぶち込め！　　それが優しき、だ。

「ふふっ、さあ、いらっしやい疾風♪」

詩穂先輩は俺に向かって、微笑むとジリジリと詰め寄ってきた。

ヒステリアモードが解けていた俺は、先輩の発言と行動に戸惑いながらもなんとかの場をやり過ぎそうと行動を起こす！

としようとした瞬間。

「なっ、だ、駄目ですー！」

「そ、そうよ。会長、モンジなんかにそんなことを言ったら駄目です」

鳴央ちゃんと音央が反対してくれた。

『『ベッド上のモンジ』は上半身裸になると、少女を襲い……全てが終わると』
「モンジ君だったら、いいよん♪」

「何がいいんですかー!?!」

モンジさんにそんなこと言ったら本気にしちゃいますよ!?!」

また口説き文句を言うに決まっています」

「そうよ、絶対、駄目ですから。モンジに会長を好きにさせたたら大変なことになっちゃいます!」

生徒会副会長として、そんなことは認められません!」

『ベッド上のモンジ』は町中の少女を手籠めにし、次から次へと襲いかかるのでした。鳴央ちゃんや音央が味方してくれてるが、よくよく聞くと二人とも信用していません。か、結構酷いこと言ってるな。まあ、今までのこと（ヒステリアモード時の俺が言った発言）を振り返ると、自業自得かもしれないけどさ。

それはそうと……一之江は変なこと言うな!

「先輩、ちょっとトイレ借ります!」

居心地が急に悪くなった俺はとりあえず、その場から逃げる為にトイレに向かった。

「うふふ、モンジ君ったら、可愛い」

そんな俺に向かつて詩穂先輩は微笑んでいた。

あれ?

トイレに向かった俺だが、戸を開けるとそこは脱衣所だった。

脱衣所の隅には、洗濯機と乾燥機が置かれている。

先輩の家は広く、作りが似ている。

その為、間違つて開けてしまったわけだが……。

「……誰も入つてなくつてよかつた」

戸を開けた途端、着脱中の女子の裸なんか見た日には拳銃自殺したくなるね！

ヒステリアモード間違いなしの行為だからな。

そういつた意味ではよかつた。

誰もいなくて。

と、そんなことを思っていたその時だった。

洗濯機の前に、何やら黒いものが落ちていることに気づいてしまった。

……

……？

なんかハンカチみたいなの、黒い布で……若干くたびれてるといふか、使用感があるな。だが縫い目があるところを見るに、ハンカチじゃない。

……イヤな予感がするぞ。

と、その布を手に取り広げていくと。

「……………ツ……………ツ……………！」

パ、パンツ……

女子の、し、下着じゃねーかつ! 下の! な、なんで床に落ちてんの!
しかも、黒い生地で、ヘソ下にリボンが一個付いてるこれは見覚えがある。
初めてヤシロちゃんにあった日。

その日に、お姫様抱っこした時にちらつと見えてしまった、夜坂学園生徒会長

—— 七里詩穂先輩のものじゃないですか!

などと困惑して硬直してたのが、運の尽き。

不幸に定評のある俺の背後で、ガチャ。

ドアが開く音が聞こえ、振り向くと。

ブラウスや下着の洗濯がそろそろ終わるとみて、やって来た

—— 詩穂先輩

が、俺とご対面。

「……………」

詩穂先輩は、その布を仮面の如く被ろうとしているかのように広げて静止していた俺を見て固まり。

「あ、あ、や、やあ……い、嫌あああああああああ」

ご近所さんに響き渡るほど、大きな叫び声をあげた。

……不幸だ。

そう思ったその時だった。

ピーッ

洗濯機が洗濯完了の音を上げた時、俺は……

確証は無いのだが、なんと手にしたものでなものがヒステリアモードになっていることを認識する。

だが、血流からして、数秒しか続かない。

これはそういうタイプの血流だ。

（ッ！）

次の瞬間。

叫び声をあげた先輩の目に

じわあああ、と涙を浮かんだが。

俺がその目を確認しようと動き出す前に。

俺の背が、背後がじわつと熱くなった。

……この感じ、まさか!??

「今、貴方の後ろにいるの……死ね」

背後からゾクリと冷え冷えした一之江の声が聞こえ。

驚くべきことに、自分

ザクウ……背中に硬いものが突き刺さる。

「イタタタアアア!!?」

一体今のは何だ?

「サウザンドナイフ!

ちなみに、本気を出せば万本ナイフも使えます」

「イタタター。地味に痛い!　　というか、何を刺したんだ、一之江?」

「別に何も……ほら」

両手を広げて見せてくるが、確かにその手には何も握られていない。

「馬鹿な……確かに刃物で刺された感触が……」

気のせい、か?

いや、だが、しかし。

「今回はかなり許せない下着ド口をしでかしましたからね。

その報復にしては優しいものです」

「うう、ありがとう、みずみずー」

「いえ、下着ド口モンジは女性の敵ですので当然のことをしただけです」

詩穂先輩は一之江にお礼を言う。

俺に下着を触られたのが余程ショックだったのか涙目だ。

「というか、下着ドロって俺のことか！」

「ち、違う。あれは誤解で……」

「性犯罪者は皆んなそう言うんです」

「まづい。まづいぞ。」

「このままでは、俺は下着ドロにされちまう。」

「なんとか言い逃れをしなければ。」

「そう思った俺は、手に握り締めていたそれを一之江に見せた。」

「何を勘違いしてるんだ？　これは、ただのティッシュペーパーだよ？」

「手に握り締めていた白い紙を丸めて一之江に投げ渡す。」

「一之江と先輩はぼかーんと、呆気にとられた表情をした。」

「先輩はそのティッシュを見て、パツと、洗濯機にへばりついて中を見て、そこに自分の」

「下着があることに気づくと。」

「ゴ、ゴめん、モンジくん！」

「わ、わたし、私ってきり……」

「先輩、最近眠れていなかったみたいだから疲れてるんですよ？」

「さあ、ゆっくり休みましょう」

「う、うん。そうだね、疲れてんだね。私……」

先輩は納得して、リビングに歩いて行ったが。

先輩の後に続こうとした俺の背後から一之江の呟きが聞こえてきた。

「……見えましたからね」

俺の横を無言で通り過ぎてリビングへ向かう一之江。

一之江の呟きに、内心ドキマギしつつ、その後ろ姿を見送った俺は脱衣所を出て……
フーツ……と、安堵の溜息を吐いた。

一之江に見破られた事に戦慄したのと同時に。

普段と変わらない一之江の態度に安心してしまう。

やってわかったが。さつき、俺は

右腕だけで、桜花を使ったのだ。パンツを超音速で洗濯機に入れる為に。

人間はおよそ4秒に一回、120ミリ秒のマバタキを行う。詩穂先輩や一之江も例外ではない。

なので俺は彼女達がマバタキした瞬間を狙ってドラム式洗濯機のフタを開き、下着を中に安置し、フタをして、ポケットに偶々入れていたティッシュペーパーを取り出し、丸めて、一之江達に見せたのだ。その間、120ミリ秒……その後、ティッシュペーパーを一之江達が確認し、先輩はリビングに戻ったのだが……

(一之江にはバレてたか……)

どんなに高速で細工をしても。

『月隠のメリーズドール』の目は誤魔化せなかったみたいだ。

さすがは一之江。俺の動きを見破るとは……最強の都市伝説だけはある。などと感心しながらも俺は自身がやらかしたことに驚く。

人間が全力で拳を突き出す際、普通は全身の筋骨を『一気に』動かす。

しかし桜花では、全身の筋骨を『順番に』動かす。

体内で後ろから前へ速度を次々とパスし、加算していくのが術理なのだ。

マツハーに到達させるパスの回数は、4〜6回数。

当初はこれを『爪先↓膝↓胸↓肩↓腕↓手首』でやってたが、スカイツリーでワトソンと戦った時には『左手首↓左肘↓左肩↓右肩↓右肘↓右手首』でも出来ている。

つまり、桜花に使う筋骨はどこでもいい。

これらの条件から、ヒステリアモードの頭脳が……新たな技の、断片を……思いつきそうだったが、この辺りでヒステリアモードが終わってしまった。

多分、今までで最短時間だったな。俺の滞ヒステリア時間。

世間には、女性そのものより女性の衣服や持ち物でβエンドルフィンを分泌する体質を持つ兄さんのような男性もいるのだが……

ああいった布キレだけでヒスるのは、未熟な俺には高度過ぎたみたいだ。

ああ、残念だ。非常に残念だ。
本当だぜ？

2010年6月19日午前7時30分。

マンションのエントランスまで降りると、そこには見覚えのありまくる黒塗りの大きな車が停まっていた。

以前にも乗ったことがある一之江の家の車だ。

「皆さんもどうぞ」

一之江はそう俺達に告げると、自分はさっさと後部座席に乗り込んでしまった。いつの間にか呼んだのかわからんが。その手際の良さには感心する。

「わ、凄い車ねっ。一之江さんこの車なの!?!?」

「ふええ……お、お願いします……」

一之江の車に、音央も鳴央ちゃんもビックリしながら、ドアの前に佇んでいる老紳士が開いたドアの中、後部座席に乗り込む。

後部座席は女子達だけでいっぱいかな？

これは助手席しか座れないなー、などと女子密度が高い後部座席に座らなくて済む、と考えていた俺だが。現実はそのなりに甘くなかった。

中を覗いてみると、後部座席は向かい合わせのボックス席のようになっていて。

後ろに四人乗ることができるようになっていた。

チキシヨウ。

女子密度が高い空間にいないといけないなんて……なんの罰ゲームだよ、これは。

そんな風に内心思いながらも後部座席に座ると。

バタン、と静かにドアが閉じられるが、中はやたらと広いままだった。

「ふえー、すごい、ふええー！」

「ふわー……」

しきりに感心しまくってる六実姉妹を他所に一之江は静かに車が動き出すとコーヒーを淹れてくれた。こうして見ると、いいトコのお嬢様なんだけだな。おとなしくしていれば。

「……道端にモンジを捨てていきましよう」

「冗談です一之江様」

「まあ、いいでしょう。熱いうちにどうぞ」

「うわっ、おいしっ!??」 何このコーヒー!??」

「ほんとだ……かなり高級な豆を使っているのですね……」

一之江が淹れたコーヒーに感動する二人を見てみると、なんだか一月前のことを思い出した。

一之江に追いかけて回されて、そんな一之江彼女を攻略した次の日の朝。

俺の家……一文字家の前で待ち構えていた一之江に車に乗せられて、その車内で『ロア』について語られたあの日のことを。

ひどく懐かしく感じるが、まだたった一月くらいしか経ってないんだよな。

「しかし、この車に乗ったってことは、一之江」

「ええ。夜霞市が出るまで『終わらない千夜一夜』の会話は禁止です」

……以前は『ロア喰い』、つまりは『魔女喰いの魔女』であるキリカを警戒して街を出たのだが、今回は『終わらない千夜一夜』である理亜リアを警戒して街を出る、そういうことなんだろう。

「どゆういこと?」

ロアの知識面が足りない音央は疑問の声を挙げる。

そんな彼女に、長年『神隠し』をやっていたロアに詳しい鳴央ちゃんは優しく語りかける。

「『ロアの有効範囲というものは、街単位』なんです。例えば探査や調査が得意な……それこそ魔女さんみたいなロアがいた場合、街の外に出ないと盗み聞きされてしまうかもしれないってというのがあるんですよ」

「ふへえー。都市伝説ってそういうものなのね」

「街単位で広がる噂、というのが基本なんです。なので『土地の名前十都市伝説のオバケ名』というタイプのロアが多いんですよ」

その情報は知らなかったな。確かにそう言われてみれば、一之江のロアは『月隠市』で広がる『メリーズドール』の噂だから『月隠のメリーズドール』であるわけで。

氷澄のパートナーであるラインは『境山』を縄張りに行っているから、『境山のターボロリババア』だったし。

理亜のパートナーの赤マントのスナオは『夜霞のロツソ・パルデモントゥム』と名乗りを上げていた。

そういう意味だと、異世界に連れ出す系の物語である『神隠し』の音央や鳴央ちゃんは地域限定ではないタイプなのかもしれないな。

「まあ、この夜霞市に『夜霞のメリーズドール』とかがいたとしても、私の敵ではありません。私は月隠市ではかなりおつかない存在として悪名を広めまくりましたから」

どこか得意げに語る一之江の横顔は、自信に満ち溢れていた。だというのに、彼女か

ら語られた言葉には苦味も混じっているように感じたのは、さつき理亜との戦いでロアというものがいかに曖昧で、儂く、脆い存在であるかを思い知ったからだろう。

「つと、『境川』を越えましたね。ようこそ私の街、『月隠市』へ」

横目で窓の外を確認しながら一之江は俺達にそう告げた。

そして本題を口にした。

「それでは早速、『終わらない千夜一夜』対策会を始めますか」

「はい、一之江さん」

一之江がそう告げると、さつそく音央が質問をした。

「はい、音央さん」

「さつき、『終わらない千夜一夜』を警戒したって言うってたけど、理亜ちゃんにも鳴央が

言ったみたいだな探査とか調査とかの力があるかもしれないってこと?」

「可能性はゼロではありませんね。全てのロアの『対抗神話』が語れるなんて能力、破格過ぎます。そういう、多くの知識を集められるような力は所持しているかもしれないですね。でなければ、あらゆるロアの対抗神話を覚えるなんて、普通は出来ないと思いますから」

一之江の言葉に同意する。

確かに破格過ぎる能力だ。理亜の頭が良くても、普通全てのロアの対抗神話を覚える

なんて出来やしない。と、なれば、一之江が警戒したみたいに噂話のアンテナみたいなものを広げることで、必要な情報を集める能力とかを持っている、とか。先に対抗神話を覚えるとかしてるはずだ。

「あ、そつか。相手を見てから、検索できるみたいな形かもしれないのね」

そう。相手がどんなロアなのか、を見て。そこから唱えなければいけない対抗神話を検索する、そういうった能力とかを持っていることも考えられる。

「でも、一之江さんはそれだけを警戒しているわけではありませんね？」

と、そこで。何かに気付いたらしく鳴央ちゃんが質問した。

「流石に解りましたか」

鳴央ちゃん相手では、一之江も誤魔化せないみたいだ。

「このモンジでさえ、かなり食えない『魔女』が付いていますからね。理亜さんはかなり短期間で最強の『主人公』として名を馳せました。それこそ、モンジよりもほんのちよっぴり早いくらいに『主人公』になったのに、です」

「あれ？ そんなもんだったのか？」

長いこと『主人公』をやってるもんだと思っていたが、あんまり変わらないのか。

「そんな短期間であそこまで『ロア』の使い方と対処に慣れているということは、スナオさんの他にもブレインがいるのではないかな、と。それこそ『魔女』のような」

『魔女』。

そんな存在を思い浮かべると、キリカと。

アリサの姿が思い浮かぶ。

確か、アリサは『予兆』の魔女とか名乗っていた。

俺を仲間に勝手にしたら『マスター』に怒られるとも言っていたが……いや、まさか。

そんな……。

「なので、そういう人物がいると意識して今後は対応していきますよ。キリカさんは自分自身がそういう食えない存在なので、言わずもがなで上手くやるだろうから伝えなくても平気だとは思いますが」

一之江はそう言ったが、その言い回しからするとキリカのことをまだ警戒しているみたいだな。

……無理はないか。キリカはキリカで最悪と呼ばれている魔女だし。

元々人間である鳴央ちゃんや人間に近い感覚を持つ音央は人の法で裁けない罪を犯していたが、ちゃんとその罪を償おうと反省し、向き合おうとしている。

だがキリカは違う。

純粋に悪いことをしてきた魔女で、純粋に人の命を弄んで、そして純粋に食べてしまう、そんな生粹のパケモノ。『ロア』なのだ。

罪の意識などはない。人が牛や豚を食べると同じ感覚で、人やロアを食べる。

—— 普段は優しく、愛らしくて、楽しくて、話しやすい女の子だが。一番食えない存在。それが俺の親友である仁藤キリカという少女なのだ。

「とりあえずモンジ。これだけは先に確認しておきます」

「……ああ」

ついにきたか。

予想していたが、一之江から直接問われるのはやはり嫌な感じだ。

先輩の部屋で眠る一之江を見て、何度も繰り返し考えた結論。

それを一之江はちゃんと確認してくる。

「理亜さんは。貴方の大事な妹さんは、貴方という存在、引いては私達の存在そのものにとつてかなり危険です」

「……ああ。解ってる」

一之江に言われなくても、それはずっと考え続けていたことだ。

「では、問います。どうしますか?」

一之江は俺の横からじつと俺の顔を見つめて尋ねてきた。正直な話、一之江や音央、鳴央ちゃんが傷ついたり消えたりするのは見たくない。だが、それと同じくらいに、俺は理亜を傷つけたりしたくない。理亜とその能力。『対抗神話』に唯一対抗出来る能力

を持つていようが、理亜に手を出せない。

だが、仲間を消させたりさせざる事や俺が理亜の物語となつて、戦わずに理亜だけに全てを背負わるなんてことも絶対に出来ない。

だから、俺がここで宣言出来る言葉は一つだけだ。

「理亜は俺が倒して、俺の物語にする」

決意を口にするだけでも心臓が弾け飛びそうになる。

胸が痛む。心が痛む。

だけど、気持ち奮い立たせて言葉を続ける。

「だから……苦しむかもしれない、辛いかもしれない、困ったりするだろうけど、その時は力を貸してくれ、みんな」

「……うん、良く出来ました」

一之江はいつになく、優しい声で頷いてくれた。

そして、そんな俺達に優しい眼差しを向けながら。

音央や鳴央ちゃんも心配そうな顔で俺を見つめていた。

第四話。パンパカパーン！

「た、ただいま……」

控えめな声で挨拶をする。

家に帰ってきたが、理亜と顔を合わすのは気まずい。

誰もいませんように。

玄関のドアを開けて中を見ると靴は置いてなかった。

誰も帰っていないのか？

そんなことを思いながら帰宅の挨拶をするが。

「お帰りなさい」

リビングからスリッパの音が聞こえて来て、エプロン姿の理亜が玄関まで出迎えにきた。

その顔を見ただけでドキッとしてしまう。理亜とどう接すればいいか、今まさにそれを俺は悩んでいるから。

だが理亜は敵ではない。

一之江達からしたら、敵対関係なのかもしれないが俺からしたら妹のような存在だか

らな。

むしろ、こういった事態になってしまったのだから、それこそずっと一緒に、仲良くしたい。

そう思うのだが……。

「か、帰ってたのか」

それでも、声は上ずってしまふ。

気まずい、非常に気まずい。

リサやかなめでいい。

誰か早く帰って来てくれ!

「はい。……兄さん」

理亜は俺を見つめると。

「はふう」と溜息を吐いて。

お説教っぽい口調で告げる。

「いいですか、兄さん。私と兄さんは確かに、今はちよつぱり意見のすれ違いが発生しています。ですが、それはそれ、これはこれです。私たちがそれを気にして生活態度までおかしくなると、兄さんの両親や私の両親がまず心配します。それは兄さんにとつても嬉しくないでしょう?」

確かに理亜の言う通りなのだが。

「それはそうかもしれないが……」

それは簡単に見えて、難しくないか？

「朝は朝。夜は夜です。夜の物語のことは朝の世界に持ち込みません。ですから、ちよつと最初は難しいかもしれませんが、極力いつもの生活を続けますよ。兄さんも出来れば頑張ってみて下さいね？」

「ああ、解った」

問題点はいっぱいあるが、少なくとも理亜がいつもの生活を続けようとしてくれるというのはなんだか安心する。ついさつき、みんなには理亜を倒すと宣言したばかりだが、それでも理亜がいつもの理亜でいてくれるのが嬉しいのだ。

だが、理亜の方からそう言ってきたのは予想外だった。

本当は俺の方から「出来れば、朝の間だけでも、いつも通りの生活を続けないか？」と提案するつもりだったからだ。

ギクシヤクしたままで凄さなきやならんのは嫌だったからな。

「それにしても、帰ってくるのが遅かったですね。もしかして宿泊先で御飯を食べてしまいましたか？」

理亜の口から宿泊先という言葉が出た事にドキツとしてしまう。

先輩の家に泊まっていた事がバレた日には、この仮初めかもしれない『いつもの生活』すらも、俺は失ってしまうかもしれない。いや、むしろ家族会議が開かれてかなめやりサに『俺断罪』やら、『俺浄化』とかされるかもしれない。

……胃が痛くなってきた。

胃腸薬あるかな？

などと、現実逃避していると。

「まあ、兄さんからしたら色々と考えないといけない事もあるのでしよう……それは判ります。」

ただ、作っておいたカレーが冷めてしまったのが残念です」

「カレー作っておいてくれたのか？」

「はい。だって、食べたかったんでしよう？」

理亜に言われて思い出した。授業中に来たメールで確かにそんなやりとりしていたな。

……すっかり忘れてたが、わざわざカレーを作ってくれる辺り、理亜の優しさを感じる。さつきまであんなに冷酷な口調と態度で接しられた相手なだけに、今のこのいつもの優しい雰囲気ですべて貰えると嬉しくて仕方がない。

これが理亜が言っていたツンデレっていう奴か？

いや、理亜はいつもはクールな娘だからクーデレも兼ねたツンクーデレなのかもしれない。

「なんか変なことを考えていませんか、兄さん？」

そして鋭い娘でもある。

「か、考えてない。それじゃあ、早速食べようかな」

「まあ、いいでしょう。それでは手を洗つてうがいするのを忘れないで下さいね。ただでさえ徹夜して戦っていたんですから、抵抗力が弱まっているはずですので」

そう言つて理亜は台所に向かつて歩き始めた。

さらりと『戦つていた』なんて言う以外はいつも通りの会話だった。

だからこそ余計に、俺は悩みを深めることになる。

本当に戦つたり、反発しあう道はないものか。理亜ならちやんと話し合えば解つてくれるのではないか。そういう……兄妹が仲直りするの、物語としては王道だろう。

かなめやジーサードの件もあるが、よし、なんとかしてみるか。

そんな決意を密かに固めて、俺は洗面所に向かった。

2010年6月19日。一文字家リビングルーム

理亜特製のカレーは、少し冷めたぐらいでは味を損なったりはしていなかった。

甘口というわけでもないが辛さが控えめで、カレーの風味や理亜が入れる隠し味的な何かのおかげか、普通に美味かった。

「ご馳走様でした」

「はい、ありがとうございます」

理亜はいつもこう言う。

そこは『お粗末様でした』ではないのか、と以前聞いてみたが、理亜曰く『お粗末様でした』という言葉は、粗末なものを出したみたいで許せないんです、とか言っていた。

そんなプライドを持っている理亜は面白い子だと思う。

「それじゃあ兄さん。洗い物はお任せしますけど。今は寝てしまって、起きてからでいいですからね?」

理亜が料理を作って、俺が洗う。

それは、俺が憑く前の一文字が行なっていた俺達2人の役割分担的なルールとなっていた。

「それと、兄さん。私は、やっぱり……諦めませんからね」

その言葉を、食べ終わるのを待ってから言う辺り、理亜の優しさを感じる。

「ああ、解る。俺も気持ちは同じだからな。大事な家族に……妹に危険な真似はさせないからな」

「はい。私も大事な兄には、苦しんだり、悲しんだりして欲しく……ありませんから」

俺をじつと見つめてくる理亜。その目には折れない決意があるような気がした。

「私の物語になること、考えておいて下さいね。その……悪いようにはしませんから」

「ああ、きちんと考える。ちゃんと、理亜のこと、俺のこと、みんなのこと。考えて考え続けて、俺達にとって最高ネバーエンディングにいい結末になるように考え込んでやるよ」

「兄さん……」

「理亜。俺はお前が既に知ってる通り、ただの一字疾風なんかじゃない。全くの他人。遠山金次だ。騙してた事は謝る。悪いと思ってる。本当ならここでお前と話すのは俺じゃない。一字の役目だ。」

その機会を奪ったのは、お前から大事な家族を奪ったのは俺だ。

だから俺はどんな罰でも受ける。傷つけてくれても構わない。

だけど、これだけは知っておいて欲しい。

俺もお前の兄同様……理亜のことは大事な妹だと思ってる」

「だったら……」

「だが、ここでお前の言葉に屈したら。お前の物語になったら俺の仲間は……一之江達はどうなる？」

アイツらは望んでロアやハーフロアになつたんじゃない。アイツらだって、苦しんで、悩んで、それでも前へ進もうと一生懸命頑張つてるんだ。理亜、お前の力なら確かにハーフロアである一之江や鳴央ちゃんを人間に戻せるかもしれない。だけどき、それまでハーフロアとして歩んできた一之江達の物語は。ハーフロアとして過ごしてきた想いはどうなる？」

ロアであるキリカや音央はどうなるんだ？

ロアというだけで消されるかもしれないと思うアイツらはお前のことをどう思うと思う？

悩んでるのは俺やお前だけじゃない。

頼むからアイツらの努力を、苦しみを、想いを、存在を否定しないでくれ！」

……。

……

言つちまつた。熱く語るつもりはなかったが思つていたことが全て出てしまった。

気まずい雰囲気再び室内に漂うが、理亜はそんな空気の中でも口を開く。

「……兄さんの言いたい事は解ります。それでも私は兄さんに私の物語になつて欲しい

んです。

私は……諦めませんか」

「ああ、それは俺も同じだ。考える事は諦めない。

どんな難関だって、考え続ければ突破口があるはずだ。今は見えなくても、いつかそれが形になる日が必ず来る。俺はそれを散々学んできたからな」

前世で散々無理難題に挑んで、何とかしてきたからな。

だから、今抱えてる問題も何とかなるに違いない。

仲間を信じ、仲間を助けよ。

武偵憲章にもあるが、仲間を信じて無様だろうとカツコ悪いだろうが、突き進む。それが俺だ。

「……はふう。考えるのは構いませんが、猶予はそんなに与えるつもりはありませんよ」

理亜は俺から視線を逸らすと、伏し目になって告げた。

「だから、なるべく早く。私の物語になることにした、と結論して下さいね」

「その結論になるかは解らんが、答えを先延ばしにならないように出す」

俺がそう告げると、理亜はさらに伏し目がちになり、その長いまつげが憂いを持って
いるかのように見えて、なんだかその姿を見るだけで胸が締め付けられてくる。

理亜の姿を見ていると、やはりというべきか。

お約束な展開で、血流が体の中心に集まりそうになったので、俺は食器をキッチンの流しに置くと、そのまま自室に戻ることにした。

そんな俺に理亜は声をかける。

「兄さん。ちゃんと歯磨きしてから寝るんですよ」

「子供扱いするな。……理亜もなるべく早く寝るんだぞ」

「……は」

ちよつときごちないが、いつも通りの会話を交わす俺達。ぎごちないこのやりとりを早くいつも通りのやりとりにならないといけない。俺の為にも、理亜の為にも。

それがいい兄というものなんだろう。きっと。

2010年6月19日。疾風の部屋

とは言ったものの。俺はパジャマになることもなく自分の部屋のベッドに寝転がって天井を見つめていた。

「あんなに優しい理亜が……俺を物語にしたい理由、ダメだ。解らん」

戦っていた時の怖かった理亜の姿。

さつきの優しい理亜。

どっちも理亜なのは確かだ。

あんなに優しい理亜が、あそこまで怖い存在となつてまで戦う理由。

それはどんな理由なんだ？

……。

「ダメだ。解らん……」

ベッドの上でゴロゴロ転がっても仕方がないのだが、『考えることを諦めない』と格好つけたところで、ヒステリアモードではない俺にいいアイディアが浮かぶはずもなく。

だからこそ、人はすぐに考えることを諦めて、安易な方向に走ってしまうのだということを感じする。

「なんか哲学っぽいな」

実際哲学がどんな学問なのかはよく解らんが、きつとそういう人の考え方とか本質とかについての学問に違いない、なんて偏見を抱きつつ。

「なんて説明すりゃいいんだ……」

俺はDフォンを眺めながら、キリカにどう説明するべきか悩んでいた。あいつはまだ魔術を使用した代償のせいで満足に動くことも出来ないでいるからな。一時的にせよ

目が見えなくなっているキリカには、起きた出来事を報告しておくべきだろう。そう思っているのだが、どこから説明すりゃいいんだ？
などと悩んでいると。

ピロリロリーン!

「うおっ」

いきなりDフォンから軽妙な音が鳴り響き、その音に驚いた俺は手に持っていたDフォンを落としそうになった。

「つとつとつとお」

両手でお手玉しつつ、なんとか落とすのは免れる。

Dフォンの画面を見るとそこには『メール着信』とある。

誰からだ?

メールを開いてみると……。

差出人・管理人

タイトル・おめでとうございます！

内容・パンパカパーン！

流石にメールに音が鳴る機能は付けられませんが。

一文字疾風様『百物語の主人公』化と『不可能を可能にする男の主人公』化おめでとうございます！

いやー、めでたい！

管理人は、一文字疾風さんことモンジさんの活躍を、今後も超楽しみにしております！

頑張ってください!!?

p s ・ パンパカパーン！

おめでとうございます。

貴方は都市伝説『パンツを亜音速でランドリーに投げ込む男』のハーフロアになることが決定しました。

管理人はモンジ君の変態……ゴホン。ご活躍を超楽しみにしています。

決して捕まっちゃえ、などとは思っていません。

ええ、思っていますよ。

そんな内容だった。

「う、胡散臭え〜」

Dフォンに仲間以外から初めてメールが来たが、何で俺のアドレスバレてんだよ、とか。

『8番目のセカイ』に管理人なんていたのか、とか。

何で主人公化したのがバレてんだよ、とか。

最後の何で知ってんの!?!?

とか、いろいろ突っ込みどころがありまくるメールの内容だった。

「しかも、モンジってなんだ。そこは一文字疾風のままでいいだろうが!」

突っ込みを入れてDフォンをベッドの上に放り捨てる。

「ふーっ」

なんかドツと疲れてきた。

そろそろひと休みするかな、なんて思っていたが。

ピピピピピピピピピッ

今度は普段使っている普通の携帯電話から着信音が鳴り響いた。

「今度は誰だよ？」

ベッドから手を伸ばして、携帯電話を持つてくる。

画面を開くとそこに表示されていたのはキリカの名前だった。

「おおっ、もしもしー！」

『わっ、勢いがあるねモンジ君？』

キリカの声を聞いていると、それだけで何故だか目頭が熱くなった。

俺はキリカに弱いなあ。クラスメイトなのに年上の存在だからか、あるいはメンタルケアをしてくれるからだからか。俺はキリカに弱い。

「あー、いや。ちようどキリカの声を聞きたいと思つてたんだ」

『わわっ、モンジ君がなんか嬉しいことを言つてくれてる！　　デレ期だ！』

このノリ。まるで理子みたいだなあ、本当。

『そういえば、さつき街の外に出てたね？　なんかあったのかなー、つて。『主人公』の

能力関連でおつかないことでもあった?』

「ああ、いや、そっか」

キリカとの交信を終えた後に理亜が現れたんだったな。つまり、キリカは知らないのだ。

俺が理亜こと『終わらない千夜一夜』^{エンドレス・シエラザード}と出会い、そして悩んでいるということを。

「そっち方面では問題ない。あれから特に進んでないよ」

部屋の中とはいえ、街中ということもあり俺は言葉を濁すが。

「ふーん、なるほどね。なるほど。つまり、あの後になんかあったんだね。んでもって、多分瑞江ちゃんも、それについて会話する為に街の外に出た、と」

キリカは俺が敢えて触れない理由を察してくれた。

流石の頭の回転力だ。キリカがこう気付くのだから、理亜にいるかもしれないブレインこと『魔女』もそう思っているはずだ。ということは、だ。

一之江の言う通り、この街の中で『終わらない千夜一夜』^{エンドレス・シエラザード}の会話はやはり避けた方がいいのかもしれない。

『じゃあ、そっちの話は後回しにして。先に言っておかないと危ないかなーと思ったことを連絡しておくね?』

「うん? 危ないこと?」

『モンジ君、さつき瑞江ちゃん的能力が使えるようになっていたけれど。もし、私の力を使いたいなー、と思つた時は注意して欲しいな、と思つて』

「注意か。やっぱ代償関係か？」

キリカの力。『魔女』の能力は凄まじく。かなり便利で、いろいろなことが出来る反面、その力を使うにあつて代償を支払わなければいけない。今こうしてキリカは普通に会話しているが、その当のキリカは一時的に目が見えなくなつている。便利だが、その力を使うには支払わなければいけない代償は大きいのだ。

『それもあるけど、そもそも『魔女』の力は女の子用だからね。男の子が使うようには出ていないつてもあるの。割とメンタルに直接影響が出たりするから。こう、モンジ君の理性が利かなくなつちやつたり』

「マジでか」

理性が利かない俺。

ヒステリアモードの俺よりもヤバイなそれ。

ただでさえ、ヒステリアモードなんていう地雷を抱えてるのに、キリカの魔術を使った代償で理性が崩壊したら、拳銃自殺間違いなしになるぞ。間違いなく。

『うん。もし理性が利かなくなつちやつて、瑞江ちゃんとか襲つたら大変だもんね』

「一之江を？」

俺が？

襲う？」

襲われるの間違いだらう。

『ふふっ。まあとにかく。誘惑に抵抗してくれないモンジ君はつまらないと思うので、そのままの君でいて欲しいわけですよ、親友のキリカちゃんとしては』

「小悪魔めっ」

『あははっ』

キリカの発言を要約すると。

『私がどんどん誘惑しても一線を越えないさじ加減でいてね?』という意味だらう。

さすがは『魔女』だ。

まあ、ヒステリアモードなんて地雷を抱える俺からしたら、キリカがそういう風に接してくれるのなら大いに助かるんだけどな。

とはいえ……。

「俺はこれ以上キリカに代償を支払って欲しくないぞ」

魔術を使う度にキリカが代償を支払う姿なんか見たくない。

だからそう伝えると。

『あ……うん。それは大丈夫だと思うよ。モンジ君がきちんと『主人公』になったおかげで、私も頼ったり出来るかもしれないの』

キリカは俺の心配が杞憂だとばかりに苦笑いしながら説明してくれる。

「ん、そうなのか？」

『代償の肩代わりとかね。私の力をモンジ君を通して使う、っていうのが出来るようになったから、モンジ君が私の代わりに代償を負うっていうのも出来るようになるんだよ』

「そんなことも出来るのか!?!？」

驚きのあまり、大声を出してしまふ。

……しまったな。

今の声量だと理亜に聞こえたかもしれない。

『それで喜んじやうんだね……私がモンジ君を利用するかもしれないのに』

「キリカには恩があるからな。返せる恩はきちんと返さないと寝覚めが悪い。それに俺『達』にとつて不本意じゃない使い方をするなら、構わないと思う。ああ、でも、誰かを殺すーとかは勘弁な」

『君はそれで本当にいいの?』

「正直……よくわからん。だが、利用されるは前いた場所じゃあ、よくあることだつたからな。

だから人間を生け贄にしてやるー、とかそういったことでもしない限りその事に関しては俺は何も言わないさ」

『ふーん、そうなんだー。安心してー、流石にモンジ君と一緒にいるウチは、あんまり悪いこともしないから』

「つまり、俺と一緒にいれば、キリカは良い魔女になるんだな」

『お、それってプロポーズ？　くすくすっ』

「うぐっ」

そんな気はなかったのだが。言われてみるとプロポーズっぽい、のか？

いや、だが、しかし。一緒にいれば悪さをしないなら、俺が監視役としてキリカの周りにい続けなければならないのは間違いない。

だが、プロポーズとか言われるとキリカのウエディングドレス姿なんかを思い浮かべてしまい……

『ん、どうかした？』

「あ、いや……キリカってウエディングドレス似合いそうだなって思って」

『妄想が飛躍してたー!?』

「ば、違っ!??　そう言うんじゃないくて、今後も長く一緒にいられたらいいよな、とか思っただけだ。流石にまだ結婚とかは考えられん」

『まだ?』

「あ、いや……おいおい考える予定とかもない。すまん、変な事言ったな」

ヒステリアモードになっていないはずなのに、今日の俺は何かおかしい。疲れが溜まつてるせいかな、自制が利かなくなってるみたいだ。

『もう、モンジ君つたら。最近はちよいちよい私も口説くよね?』

……そう言われると、そうかもしれない。俺はなんだかんだで、キリカにしかこの手の事は口にしていないような気がする。うーむ?

『ま、嬉しいからいいけどね。嬉しいと回復も早くなるし』

『そういや、そんなことも言ってたな』

『うん。魔女の魔力はメンタル、精神力から来るからね。嬉しい、楽しい、美味しい、気持ちいい、この辺りがいっぱいあると、それだけ回復も早くなるんだよ』

なるほど、嬉しい、楽しい、美味しい……その辺は気分を高める感情だからわかるからそれはいいとして。

き、気持ちいい、だと……。

キリカが気持ちいい事……。

いかん、ヒスる?!?

『モンジ君のスケベっ!』

「な、何でだ?!? まだ何も言っていないだろう?!?」

『エッチな妄想してドキドキしてたでしょ!』

何でわかんない?!

してたけど。してヒスリかけたけど。

「す、すまん。なんか今の俺はやっぱ、誰かにすがりたいのかもしれない」

理亜のことは俺の精神をガリガリ削っているような気がする。

そのせいか、普段は言わない言葉や妄想がホイホイ湧き出てしまうようだ。

なんというか良くないよな。こういうの。

ヒステリアモードになりたくないってのももちろんあるが、なによりキリカが優しいからってそういう対象で見るのは。

『あー、ふーん、なるほどね。つまり、そういう感じの出来事があったってわけだね』

もつとも、俺がどんなに言葉を濁しても、キリカにはバレてしまうのだが。

キリカならきつと良い心理カウンセラーの先生になれるだろう。

しかし、キリカが心理カウンセラーの先生になったら、患者さんを誘惑しそうだからやっぱダメだ!

『うん、なんとなく解った。モンジ君、そろそろ寝ておいた方がいいかもしれないね。』

君の脳はかなりのダメージを受けてるみたいだから。

私の魔術のせいっていうのもあるんだけど。これはそうだね……神経性の遺伝形質が原因かな?』

「なっ……どうしてそれを」

『君の頭の中に入った蟲さん達がいろいろ教えてくれたの。いろいろ……と。聞きたい？』

「いや、いい……」

聞いてはいけない話というものがある。これはきつとそういつた類の話だ。

厄介事に巻き込まれやすい、不運な俺にもそのくらい解る。

『そっか、それは残念』

全然残念な声じゃないのに、キリカが残念というと、本当に残念と思えてくる。

不思議だ……。

『昨日からいろいろあったみたいだからね。今日はもうゆっくり休んだ方がいいと思うよっ。』

「……そうだな。そうさせてもらおうとするかな。そんじや、おやすみなさいだな」

『うん、おやすみ、キンジ君っ。ゆっくり寝てね？』

「おうっ」

俺達はほぼ同時に電話を切った。

キリカとの通話を終えた俺は驚くほど落ち着いた自分の心に、キリカという存在が癒しになっていることを実感する。

「……よし、寝るかー」

俺はベッドに寝転がって毛布を掛けると。

キリカとの電話の余韻に浸りながら、静かに目を閉じた。

第五話。『異界の迷い家』《テイルナノグ》

ここは夢の中なんだな、とはつきり解るのはあの『神隠し』の時に体験しているからだろう。

今俺がいる場所。そこは見覚えのある和室。

そう、初めて鳴央ちゃんと出会ったあの場所だった。

「なんだかここで会うのも久しぶりですね」

俺が冷静に今いる場所がどこなのか、思案していると、そんな声が聞こえて。

目の前を見るとそこにはもじもじと頬を染めて正座している鳴央ちゃんがいた。

「え、あれ？　鳴央ちゃん……だよな？」

「はい。お待ちしていました、モンジさん。その……貴方が眠るのを」

照れたように俯くその姿は大変可愛らしいのだが。ヒス持ちの俺からすればこのまま彼女の姿を見続けるのは精神上よろしくないのです、俺が何故ここにいるのかを尋ねることにする。

「えっと……つまり、俺は今眠っていて、鳴央ちゃんの『ロアの世界』に入った、っていう認識でいいのか？」

「はい。ここは私のロアの能力の一つ『異界の迷い家』テイルナノグという場所です」
異界の迷い家？

「眠っている相手をこちらの夢の中に引き込んだり、眠っている相手の夢の中に出たり、眠っている人の夢を覗いたりすることが出来る能力です」

「そんなことが出来るのか!?!」

凄いなあ、神隠し。

「私はこうやって、色んな人の夢に触れていたの……その、結構色々な知識があったりするんです。長年、『神隠し』をやっていましたから」

そう言っただけか申し訳なさそうな顔をする鳴央ちゃん。

彼女がそんな表情を浮かべるのは罪の意識があるからだろう。

相手を夢の中に連れてきたり、夢に出るのはまだしも、相手の夢を覗き見るのは確かに気が引ける行為だからな。とはいえ、その能力はかなり重要な情報源になるのは確かだ。

ただ、気になることがある。

「やっぱり、『神隠し』を退治しよう、なんてロアもいたのか?」

強力な能力を持つが故に、強敵だから手を出さない方がいいと言われていたロア、『神隠し』。

俺が何とか出来たのも、それが『音央』と『鳴央ちゃん』だったからで、まったく知らない相手だったらどうにか出来たか解らない。一之江やキリカの反応からすると消える確率の方が高かったのかもしれない。

「は、はい……。大抵は詞乃ちゃんがなんとかしてくれましたけど」

朱井詞乃。『神隠し』と同時に発生していた『人喰い村』の口アか。

語尾上がりの口調が特徴的な、迷い込んできた人を食べまくる『村』の化身のような口ア。

その詞乃と鳴央ちゃんは名付け親と、隠れ蓑という関係であり。ある意味協力関係にあったわけなので、詞乃が鳴央ちゃんを守っていたという言葉には納得出来る。

人懐っこい口調と笑顔で相手を油断させ、死人に相手を襲わせて殺害する。

そういった存在だった彼女は今はキリカが倒して『なんとか』したらしい。

具体的にどうしたかは解らないが。あれ以来『人喰い村』は現れていないようなので解決したと判断している。

「モンジさんが、元氣そうで良かった。少しだけ、心配していました」

鳴央ちゃんは胸に手を当ててホッ、と小さく息を零して安心してくれる。

そんな彼女を見てどれだけ周りの人達に心配をかけているのかを痛感する。

「そっか、悪いな。心配させちゃまって。それと、その……。ありがとうな。心配してくれ

て」

「いえ。私はモンジさんに救われましたので、それくらい当然です。むしろ、あまりお役に立てなくて申し訳ないな、と」

「それは違うぞ。充分過ぎるほど俺は助けられてる」

『ベッド下の斧女』というロアになつていた綴を異空間に放り込んでくれたり（自力で脱出しやがったが）、俺が氷澄やライン、キンゾーにやられそうになつた時に『妖精庭園』フェアリーガーデンに引き込んでくれたり。鳴央ちゃんがいなかったらと思うと背筋がゾツとしてしまうほど助けられている。

「モンジさんにそう言つて頂けるなら、嬉しいですよ」

鳴央ちゃんのその奥ゆかしい言葉や態度に、ドキツとしてしまう。

お淑やかな女の子が和服姿でいる。

その光景に俺の心臓は……その鼓動は……血流が高まる。

ああ。やつぱりお淑やかな女の子が和服を着るとその魅力は……その色気は凄まじいものがあるな。

よくアランが『女の子にどんな服を着て貰いたいか』なんて会話してくるが、メイドやナース服なんかもアレはアレでいいものだが、アランにも巫女服や和服の魅力を教えてやりたいね！

昔、武藤が『可愛い大和撫子が巫女服や和服を着るとその魅力は100倍増しになる』などと、言っていたが。今ならその気持ちも理解出来る。

「まあ、会いに来てくれたのか夢に引き込んでくれたのかはさておき。夢の中でも会えたのは嬉しいさ」

眠ったら和服姿の美少女がいた。そんな現実なんて贅沢なんだ。しかし寝る前はキリカと電話して、その前は妹と食事。これだけ並べると、俺はかなりのリア充なのかもしれないな。

「もう、モンジさんったら」

鳴央ちゃんはさらに頬が赤くなった事を自覚したのか、自分のほっぺをそつと撫でて熱くなっていることに気づくと、さらにはにかんだ。

「ええと、その」

そして、再びもじもじと何かを話そうとしているのだが、気づけば耳まで赤くなっており、気のせいか目も潤んでいるような気がする。

そんな彼女の姿を見てしまい。

ゴクリ。

その内容は全く予想もつかないが、彼女がとても恥ずかしがりながら何かを言おうとしてくれているというのは解る。

今いるここは夢の中。

二人つきり、誰にも邪魔されるものはない、というシチュエーション。
ということとはもしかして……！

バキメキグシャツ！

と、そんなことを思っていると。

何処からともなく、何か壊れるような物音が聞こえてきた。

「ひゃっ！！？」

鳴央ちゃんはずびったのか、びよん！ 俺に飛びつくように抱きついて来て。

むにん。彼女のその柔らかい部位が俺の顔を包み込んだ。

や、柔らかい。

なんて気持ちいいんだ。

ああ、天国はこんなところにあつたんだな。
彼女のソレを堪能しつつ。

それが来るのが解る。

さあ、来たぞ。

ヤ ツ が 来 る ぞ!!?

血流が体の芯に集まり。

夢の中でも俺はなつてしまった。

夢の中でもヒスれるんだな。

ああ、これが本当の夢ヒスかあ。

なんて思いつつ。

そして、なつたことでその異常に気づく。

(……何だ、今の物音……?)

周りを見渡そうとしたが

は、離れられない!

あ、当たつてる!!? 弩級戦艦が。

鳴央ちゃんの……む、胸が! お胸様が俺の視界のみならず、鼻と口を塞いでいて

……く、苦しい!!?

息が出来ない!!?!

しかも、頭を両手でガツチリホールドしている!!?!

ま、まずいぞ。

さすがの俺でもこの戦艦には勝てそうにない。

「ふがー、ふもー、ふはへへー！」

(苦しい、早く、離れてくれ！)

俺は鳴央ちゃんに訴えかけた。

しばらくして、鳴央ちゃんは俺の顔を放してくれたが。

彼女はかなり混乱していた。

「あうー、す、すみません。モンジさん!!?!

『^{テイルナノグ}異界の迷い家』が破られるなんて」

彼女のその言葉に、彼女の視線の先を見つめると。

そこは。

和室の障子がビリビリに破られていて。

その先にある廊下、その先は村が見渡せる庭になっているのだが。その庭の上空。その空間が歪んでいて。

まるで鏡が割られたかのようにひび割れていた。

「この空間の破損具合からすると、『異界』や『空間』に精通しているモノの仕業かと思えます」

庭の惨状を目にした鳴央ちゃんは視線を向けたまま語りかける。

「ということとは……」

「はい。紛れもなく、ロアの仕業です。それも『空間系』の仕業ですね」

流石は神隠し。

俺が知らないロアの知識を幅広く持っている。

大和撫子のような清楚な容姿に、豊富な知識。

そして、女性としてとても魅力的なものを持っている鳴央ちゃんをマジマジと見てしまふ。

外見も音央そっくりでとても可愛いらしいしな。

まあ、元々の音央はこちらの鳴央ちゃんの方なのだから、正確に言えば音央が鳴央ちゃんに似ているのだが。

ああ、ややこしいな。

ともかく、色目なしで見ても鳴央ちゃんは美少女だ。

そんな和服姿の美少女と二人つきり。

ドキドキするな、という方が無理な相談だ。

だから、さっきのアクセシビリティでヒステリアモードが強化されても仕方ないよな？

「もうその存在を確認することは出来ませんがしばらく用心した方がいいかもしれないですね」

鳴央ちゃんは注意を呼びかけてくるがやはりその姿も可愛いらしい。

「どうしたんですか？」

「ああ、いや、やっぱり鳴央ちゃんは可愛いなー、と思ったただだよ」

「もう、モンジさんったら。でも……ありがとうございます」

照れて顔を真っ赤に染める鳴央ちゃん。

うむ。やはり、和服姿の美少女がもじもじするのはとても可愛いらしい。

「(こ)う……」

「うん？」

「モンジさんが、疲れてたり、苦しかったりしたら、せめて自分で何か……例えば、ご飯を作ったり、ひ、膝枕とか、出来ればいいな、なんて思って、お招きしたのですが……」

H I Z A M A K U R A。俺の視線は否応なしに、その足に吸い寄せられた。

和服に包まれた、柔らかそうな太ももの盛り上がり。そこに頭を乗せるのは、とても気持ち良くて幸福なことだろうな、うん。

「で、ですが、その……」

両手でほっぺを包んで、さらに言いづらそうに続ける。

「男の子の妄想は、その、激しいと言いますか、もつと直接的だから、気をつけなさいよ、と音央ちゃんには言われているので……」

音央の奴、なんて忠告をしているんだ。だが、音央が言いたいことも解る気がする。

色んな妄想を掻き立てられまくっている音央からしてみると、そういう男の妄想に辟易しつつも気をつけているのだろうからな。そんな状況の中で自分の姉みたいな存在が現れたら、色々気にかけるのも解るのだが。

などと納得していると。

「もつと、激しい方が……いい、です、か？」

鳴央ちゃんの口から爆弾発言が飛び出した。

ナニを言ってるんですか、鳴央さん!!?

この時俺の中で、相反する二つの想いが浮かんだ。

『いいのか俺？　　ここで、鳴央ちゃんの申し出を断つていいのか、俺!?!?　　こんなチャンス生涯二度とないかもしれないんだぞ。しかも、向こうから言ってくれているんだ。膝枕だけでも魅力的な提案なのに、もしかしたらもつと凄いいことをしてくれるかもしれないんだぞ！』

「ここは攻めるべきだろう、一文字^俺疾風!』」
 「……そうかもしれないな」

鳴央ちゃんの方から言ってくれたんだ。ここで断つたら恥をかかせることになる。男として。いや……武士として、据え膳食わねば名折れになってしまうよな？

『やめろ！　　落ち着け！　　早まるな！』

ここで誘いに乗つちまったら取り返しがつかなくなるぞ！

確かにこんなチャンスもうはないかもしれないが、お前にはまだやらないといけないことがあるだろう。帰りを待っているかもしれない奴らがいるのに、そんな一時の感情に身を任せていいのか？　　よく、考えろ！　　遠山^俺金次!』

悪魔^{モシジ}の囁きに、天使^{普段の俺}が反論する。

そうだよな、いくら本人がそう言ってくれてるとはいえ。

こういつたことをするにはまだ早いよな。俺も彼女も。

そうは思っているのだが……

「ここは夢の中ですし、現実の体には特に影響も出ませんし、その……私とモンジさんが黙ってれば、誰にも何も解りませんし……」

彼女の口から魅力的な言葉が生まれる。

そういつた妄想やよくない夢とかも当然見たことはあるわけで。

そして、今の状況だと、所詮夢の中だしね、で話は通ってしまうのだ。だったら

ドクン。

ドクドクドクドク——ツ!

血流は高まり、俺は俺じゃなくなる感覚に陥っていく。

ああ、ダメだ。抑えが利かなくなりそうだ。

鳴央を見上げれば、そこにあるのは必殺の上目遣い。

ああ、ダメだ。

そんな表情をされたら。

俺は死ぬ。

「ぐはっ」

一文字疾風（遠山金次）。

この世界に来てから。

俺は三度目の死を迎えた。

全身の力が抜けて、そのまま床に倒れる俺。

慌てて鳴央ちゃんが近づいてきたものの、俺は床に寝そべったままだった。

「わわっ、どうしました!?」

「いや、君のあまりの可愛いさが俺の臨界点を突破したんだ」

自分で言つた意味が良く解らないが、とにかく自分の中で抱えきれない想いが爆発したのは間違いない。

「ええと？」

当然、鳴央ちゃんが理解できるはずもなく。

「いや、ええと……膝枕だけで満足できるつてことだよ。それ以上はまだ俺にはハードルが高いつぽいからね。ははっ」

ちよつと笑つてしまいなから、ゴロンと仰向けになる。

俺の返答に俺を覗き込むように見ていた鳴央ちゃんはクスクス笑い。

「実は私もまだハードルが高いな、つて思っていました」

そんな言葉を言つてくれる。

「そっか。危ないところだったよ、鳴央ちゃん。君の魅力にメロメロになつていたからね」

「そう言つて貰えるだけで、嬉しいんです、今は。ありがとうございますね」

俺の頭を軽く撫でると、俺の頭を少し上げてそこに膝を割り込ませてきた。

もしかしたら……いや、もしかしなくてもこれは……。

「やっぱり君のこれは最高だな」

「ふふっ、ありがとうございます」

ああ、最高だ。

心地いい。ずっとうろこうしていたい！

前にもして貰った記憶はあるが、あの時よりもなんだろうな。俺達の距離は近くなっている気がする。

ただ、あの時は気にもしていなかったが……。

「そう言えばさ、鳴央ちゃん」

「はい？」

自分の足の上に俺の頭を乗せた鳴央ちゃんは、そのまま俺の髪をやりわりと撫で続けてくれた。ああ、気持ちいい。このまま寝てしまいたくなるが、ここは既に夢の中。

「あ、いや。気分を悪くしたらあれなんだけど。あの日。前にもこうやってくれた時もあれって、ええと、あ、その……」

尋ねてから、しまったと思った。

他の人にもしたのか、なんて。聞いてどうする？

それに彼女は自分が犯した過ちを悔いているのに、あの出来事を思い出させてどうする気だ？

死んだ人にも膝枕をしたのか、なんて……言えるわけないだろ！

やっちまったな。

一人後悔していると。

「ふふつ、大丈夫ですよ」

「う、うん？」

俺の葛藤とは裏腹に。

彼女は静かな口調のまま語りかけてくる。

「ちゃんと向き合うつて決めているから、神隠ししてしまった人達のことを尋ねられても頑張りますし。それに、膝枕をしたり、抱きついたりしたのは、疾風さんだけです」

どっちの意味でも大丈夫、だったのか。

それを聞いて安心してしまふ俺も俺だけだな。

だが、それはそれで疑問が浮かぶ。

「どうしてだい？　あの時は別に……俺はただの被害者の一人だったのに」

「どうしてでしょうね。なんとなくです。貴方に、ああやって優しくしたいと思ったのは、もしかしたら、貴方を消すことをとても内心では嫌がっていて。だから、せめてとても楽しく過ごして欲しい。そんな気持ちだったのかもしれない」

当時のことを語る鳴央ちゃんのはやっぱ寂しそうな目をしていた。

「そっか。なら、嬉しいなあ」

「ふふっ、嬉しいなら何よりですよ」

ニコニコと楽しそうに俺の髪を指で弄る鳴央ちゃん。

最近は何も続かないで、おんぶりなんて出来なかったから、こんなおんぶりした時間がいつまでも続けばいいな、と思ってしまうくらいには、俺は彼女と過ごすこの空間で寛いでいた。

だが、寛いでばかりではいられないのだ。

こうやって落ち着いた気持ちになれたからこそ、ちゃんと冷静に考えないといけない。

「ありがとう、君のおかげで冷静に考えることが出来たよ」

「妹さんのこと、ですか？」

「ああ。理亜が俺より有能な『主人公』なのは間違いない。けど、それでも俺は彼女にはそういう——責任っていうのかな。覚悟もだけど。そういうものを感じさせたままでいさせるのはやっぱり嫌なんだ」

「うん、疾風さんならそういうだろうなあ、と思っていました」

なんだ。やっぱり解ったのか。解りやすかったかな？

感謝の意味を込めて。

俺が鳴央ちゃんの片手を、その指を絡めるように握ると彼女もぎゅっつと握り返してく

れる。

「そして多分、心の中では理亜さんは……お兄さんに助けて欲しい、楽にして欲しいと願っている気がします」

「え？　　理亜が……俺に？」

「はい。これは女の子だから解るといいうのもありますが。それとは別に、疾風さんの近くにある二つの『夢』の気配は……とても弱くて、もがいてるような。悪夢を見ている気配がするんです」

俺の近くにある『夢の気配』……ということとは、俺の家辺りという意味か。

一つは理亜の夢としても、二つというのは気になる。

そして、それが本当なら理亜が見ている夢は……悪夢ということになる。

「なんとかしてやれないかな。悪夢を消してやるだけでもいいんだけど」

「これを教えたら貴方ならそう言うと思っていました。今の疾風さんは『百物語の主人公』の力を使って、私が誘導すれば夢の中に入ることも出来ます。もしかしたら夢の内容次第では中に入ったら戻って来れなくなるかもしれないませんが、『哥』の力を使えば夢自体を消し去ることも可能ですので、その心配もありません」

「そっか。それなら大丈夫そうだね。

万が一、俺が起きなかつたら、みんなで叩き起こしに来てくれるかな？」

「ふふつ、音央ちゃんや一之江さん辺りは率先して酷い起こし方を実行しそうです」
鳴央ちゃんその言葉に、もし起きなかつたら……を想像してしまう。

ブルリ。

背中に寒気を感じた。

彼女達なら本当に容赦ない方法を試しそうだ。

俺は気を紛らせる為、もう一度鳴央ちゃんの手を握る。

鳴央ちゃんも握り返してくれた。

「それはおつかないから極力自分で起きるよ」

「はい。お待ちしておりますね」

鳴央ちゃんの手が俺を覆う。世界が暗闇に包まれる中、俺は——青くて、冷たい『夢の気配』を近くに感じる。ああ、そうか。

これが『理亜』の夢なのか。

そう思った俺は、意を決すると。

その夢に向けて意識を集中させた——。

第六話。千夜一夜夢物語①告げられた予兆

「お前さん、もうすぐ死ぬぜ」

理亜の夢に入り込んだ途端、その声が聞こえてきた。

俺の視界の先に映るのは長い銀色の髪を伸ばした綺麗な青目をした少女。その少女の顔に見覚えがありまくる。お洒落な帽子を片手で押さえながら、もう片手で俺を……いや、理亜の顔を指差しているその少女は……

『予兆の魔女・アリシエル』。通称アリサ。

口ア喰いであるキリカを攻略する直前。霧の中で出会った銀髪青目の『魔女』の口ア。その少女が、俺を……理亜を見つめていた。

そのアリサの表情は口端が釣りあがっていて、いかにも『不敵』といった雰囲気なのだが、顔立ちがとても愛らしい部類に入るせいか、憎めない印象を与える。独特の口調の『だぜ』も彼女の雰囲気によくあっているというのもそうだった印象を与える要因となっているのかもしれない。

そんなアリサが、理亜が通う十二宮中学の制服を着て理亜の前に立っていた。

今、俺は夢の中で理亜を通して見ているからその表情を見ることはできないが、もし、

ここで第三者的な立場で自分の顔を見ることが出来たら、さぞかし俺は驚きを隠せなかつただろう。

アリサが着ている制服。十二宮中学の制服。

その制服を着ているということは十二宮中学に通っているということなのかもしれないが、それについては俺は気にしないことにした。何故ならば彼女と同じ『魔女』であるキリカは普通に人間として、女子高生の生活をエンジョイしているから。都市伝説が実体化したオバケ。『ロア』とはいえ、『魔女』であるアリサが人に紛れて中学校に通うのはそれほどおかしくないことなのかもしれない、なんて思ったからだ。

むしろ、俺が驚いたのはアリサが告げた一言。

『お前さん、もうすぐ死ぬぜ』

以前、俺もアリサに告げられた言葉だが、その言葉を告げられた理亜が落ちついてることに俺は驚いた。

「私ですか？」

「そ、お前さんだつてば」

「私はもうすぐ死んでしまうんですか」

実感が湧かない、そういうった態度を取る理亜だが、アリサの不躰な言葉の問いかけに對しても、ちゃんと丁寧に対応する様子に驚いた。

普通、自分が死ぬなんて言われてこんなに冷静でいられるだろうか？

俺の場合は、すでに何度か『死』を経験していたから、心構えが出来ているという理由があるのだが。

だが、理亜は違う。

『死』を宣告されているのにも関わらず、冷静に対応出来てしまっている。

この理亜の冷静さ。

これが、理亜が最強の主人公たる所以なのかもしれない。

「ま、実感なんて湧かないのは当たり前だと思うがな。どんな人間だっていつ自分が死ぬかなんて解らないから気楽に生きていられるんだし。生存率なんて、場所や環境での確率でしかないからな」

人が生きるか死ぬかは確率でしかない。

『魔女』であるアリサにそう告げられると、かつてセーラらに告げられた『死相』を思い出す。

『もうすぐ、死ぬ』

もうすぐ、ということとは直ぐに死ぬわけではない。死ぬまでに何かしらの予兆や要因。きつかけがあるということ。

つまり、回避することができるということ。

理亜もその可能性に気づいたのか、あるいは無意識なのか。

理亜は「もうすぐ死ぬということに対して、反応を考えてみました。怒って問いただす、焦って問いただす、怖がりながら問いただす、の三択で」と言い、アリサの「結局、どれを選ぶんだ?」との質問にあるうことか、「第四の選択肢」を提示した。

『どれも結果は同じなら、普通に問いただす』と。

「ははは!　面白いな、お前!　三択まで用意しておいて結局どれも選ばないのかよ!」

どこかで聞いたことのある言葉を放つと、アリサは楽しそうに笑いながら、顔を覗き込んできた。

そして、かつて俺にも言ったように意味深な言葉を告げる。

「うん、素質があるのかもしれないな、お前さん」

「素質、ですか?」

「ああ、私が探していた女なのかもしれない」

アリサはそう告げると、おもむろに理亜に手を伸ばした。

理亜のからだは自然な仕草で、サツと回避する。

「一体、何を……」

と理亜が言いかけた瞬間、俺の視界がぐるりと変化した。

理亜の体が、大きく回転したのだ。

理亜の体に意識がある俺から見てもその回避行動は異常だった。

「へえ、やっぱりな」

カツン、と地面に小石が落ちる音を聞こえる。

理亜の体を通して俺は、ヒステリアモードの視力によつて今起きた出来事を瞬時に把握することが出来た。

アリサは理亜に向けて手にしていた小石を投げつけていたのだ。

「自身が認められた者でなければ触れることすら許さない。人であろうと物であろうと。そんな才能、聖女か女神くらいしか持つてないものだぜ？」

「咄嗟に体が避けてしまうだけです。多分、潔癖症なもので」

「そう、最初はきつと『触られたら嫌だ』くらいだったんだろうな。だけど、それが次第に自分の才能として昇華され、やがては『どんな不浄なものも触れること能あたわらない』のレベルまで達した。立派に聖女か女神だよ」

アリサの口から告げられた言葉に、俺も理亜も啞然としてしまう。

聖女、女神。

そんないかにもファンタジックな言葉も、目の前の少女から告げられると信憑性がある気がしてしまう。アリサの外見的なものもそう思わせる要因かもしれないが……。

それにしても、女神かあ。

前世でもそうだったが、俺は非現実的な存在と縁があり、そういったものから逃げられないらしい。

「ますます、私のパートナーに相応しい」

ニヤツと笑うアリサを見て俺は理解した。やはり、彼女が理亜のブレインだと。

「……死にそうな人で、そういう才能がある人を探していたのですか?」

理亜は落ち着いて淡々とアリサに語りかける。

「わははは!　そこは話せばちと長いんだが。どうだい、お嬢さん。死にたくないかい?」

「私はお嬢さん、という名ではなく、理亜という名前があります」

「そんじやリア。私と一緒に千夜一夜を過ぎないか?　そしたら『予兆の魔女・アリシ

エル』。通称アリサがその命を守ってやらなくもないぜ?」

『予兆の魔女・アリシエル』こと、自称アリサ。

それが理亜を『エンドレス・シエラザード終わらない千夜一夜』にした張本人だった。

気がつくと、場所が変わっていた。夢の中だからか、移動が省略されるらしい。

ここは……見覚えがあるような、ないような、そんな曖昧な記憶だがいくつか解るところがある。

今いるここは整った女の子の部屋の中だということ。

椅子の上に一時的に制服がかけられていて、それが見覚えのある十二宮中学の女子制服だということ。

部屋の模様からしてここは理亜の部屋だということ。

……………。

制服がかけられている？

俺が状況を確認するよりも早く。

「は、ふう」

理亜の溜息と共に。

シウルツ、と俺が見ている視界の中で首のリボンが白い手によって取られる。

これは……………！

「すぐに死ぬわけではないようなので、そこは良かったです。アリサさんの言葉はどうも冗談には思えませんでした」

妹の着替えシーンに、こんな形で遭遇してしまう不幸な俺だった。

これじゃ本当に、すっかり妹の着替えを覗く気満々な変態さんじゃないですか！

俺は俺でテンパリりするようになる。理亜は独り言の時も丁寧語なんだなあ、とかどうでも

いいことを同時に考えながら、目を閉じるにはどうすればいいかを必死に考えた。

このまま見続けていたら確実にヒステリアモードが強まる。

見たくないのか、と問われれば返答に困る。

これ以上ヒステリアモードの俺でいたくない。

だけど、理亜の。可愛い従姉妹の着替えを見たくないというのも、それはそれで理亜

に失礼だ。

と、見る見ないで葛藤していると、視界はあくまでも部屋の中を見ていることに気づく。

ああ、そりやそうか。理亜の視点なんだから、理亜が自分自身をマジマジと見ない限り視界には入らないよな。自分が着替える時を思い出して納得する。

自分の体をわざわざ見るのは、筋肉がどのくらいついたのかを確実にする時くらいだ。

とはいえ。

パサ、と椅子の上にかけられたスカートなどを見てしまうと、ヒステリア性の血流が強まるのを感じてしまう。今はYシャツと下着姿なのか、我が妹は。

って、何考えてんだ俺は!!?

妹の着替えにドキドキするとかそりやまずいだろ!

と思うが、過去に妹でヒステリアモードになつてしまった出来事を思い出し、憂鬱な気持ちになる。あの時のかなめもYシャツを着てたよなー、裸で……って。バカ!

そんなことを考えてたら……ああ、畜生。また……ヒステリア性の血流が強まつてしまった。

『妹みたいな存在とはいえ、血が繋がってない限り確か結婚も出来るよな?』なんてことを考えてしまうが。

よくよく考えてみたら、例えば血が繋がっていようと、ヒステリアモード時の俺ならば確実に口説くよな、と最早諦めの境地に達した。

「兄さんに相談して心配をかけたくありませんし。明日にでも学校で詳しく尋ねるとしましようか。はふう」

理亜の呟きに俺の胸が小さく痛んだ。そっか、理亜も俺も、互いに想いあつていたからこそ相談出来なかつたんだな。

そう思うと、やっぱりこのすれ違いが寂しく感じる。

「んー、それにしましても」

などと考えていたら理亜はそのまま部屋の隅にある姿見の前に立っていた。

俺はすれ違いうんぬんを考えていたせいで、目を閉じるタイミングを逃してしまい、Yシャツ一枚の理亜をバッチリ見てしまった。

Yシャツと裾から、綺麗な細い脚が伸びていて。その付け根に、淡いピンク色の薄い布地が見えてしまつて。ドクンドクンと、興奮しているのが自分でもよく解る。

ああ、ダメだ。これはもう……抑えられない。

血流が滾^{たぎ}っているのが解る。

止まらない。

止められない。

大切な妹分で興奮してしまつていることに果てしない罪悪感も感じてはいるが。

それよりも、まだ幼いと思つていた理亜がすっかり大人の女性になつていることにドキドキが止まらなくなつている。

「やつぱり兄さんは、音央さんみたいな体つきの方が好きなのでしょうか」

理亜は自分の胸に手を当てて、憂鬱そうに呟く。

イヤイヤイヤイヤイヤイヤイヤイヤ!!?

そんなことはない!

理亜も充分素敵だよ!!?

兄さんは理亜くらいのスタイルも好きだし、アリアや一之江よりあるんだから大丈夫だ！

それに、音央だつて中学時代はそうでもなかったんだから、これからだよ理亜!!?

罪悪感もあつたせいで思いつき叫びたくなつたが、ここは理亜の夢の中。当然声が届くわけもなく。

「つと、こんな格好でいるのはアウトですね。兄さんにバツタリ覗かたりでもしようものなら、夕食に何かを仕込まなくてはなりませんし」

理亜がそう呟いたのをバツチり聞いてしまう。

怖っ！

理亜のこういう時の報復はご飯攻めだったのか。

———だが、今の俺はその報復を甘んじて受けるレベルの罪悪感を感じている。

理亜よ。すまない。そして。

ご馳走様。

などとヒステリアモードの俺が心で拝んでいると、辺りの風景が再び変わった。

そこは十二宮中学校の教室。

俺の記憶にはない風景が広がっているので、恐らくここは理亜が過ごしている教室なのだろう。

理亜は確か2年A組だったはずだ。

そんなことを思っていると、キーンコーンカーンコーン、と懐かしいチャイムの音が響く。

チャイムの音は俺が今通っている夜坂学園のものとも、東京武偵高のものとも微妙に違っていた。

学校ごとに違っているのかもしれないな。

ガラツとドアが開いた瞬間に教室の中がザワツと色めき立つ。

教室に入ってきた担任の先生

四糸先生

に向けられたもの

ではない。

先生の後ろを、女子生徒が付いて来ていたからだ。

その女の子には見覚えがありまくったが、理亜からしてみるとこの時が初めての接触だったのだろう。その女の子の金髪やドリル頭をマジマジと見つめているのが解る。

「起立、気を付け、礼っ」

ハキハキした声で、メガネをかけた女生徒が号令をかける。

なんとなく、俺のクラスにもいる三枝さんと雰囲気似ていた。

妹か何かだろうか？

「はい、おはようみんな、今日は転入生を紹介するよ」

四条先生はにこやかにみんなを見渡しながら言う。

紹介された女生徒は元気良く自己紹介を始めた。

「グッモーニン！ おはよう、はじめまして！ わたしはスナオ・ミレニアムよつ。パ

パがニツポン大好きで、スナオな子になりますように、つて付けてくれたの。仲良くし

てくれたら嬉しいわっ！ よろしくね！」

その元気いっぱいな挨拶っぷりにクラス中から好意的な笑みが向けられていた。

緊張を感じさせない人懐こさが可愛いと思われたのかもしれない。

初めて会った人に対するこのノリの良さなどは何処か理子を感じさせるものがある。

この時には既にロアとなっていたのか、それともまだロアではないのか。现阶段では

解らないが。

「んー……」

と、思っていたらスナオちゃんは何かを物色するかなのような目をして、クラス内を見渡していた。

そして、俺……ではなく理亜と目が合ったところで視線を止めて、満面の笑みを浮かべると。次の瞬間。

「私、あの子の隣がいいわ!」

何処かの桃まん武偵を彷彿させるかのような言葉を告げた。

「センセ、いいかしら?」

「……私は別に構いませんよ」

理亜は理亜で、驚きながらもクールな返事をしていたが。

俺は気が気じゃなかった。

スナオ・ミレニアム。

彼女は『夜霞赤のロツソマ・パルデモンントウムト』のロア。

可愛い女の子を誘拐して最終的には殺害してしまう、という恐ろしい逸話を持った少女が理亜の前に現れた。

夢の中の出来事。ましてや、過去に起きた出来事とはいえ、俺は気が気じゃなかった。

「うーん、次の席替えまで、だよ」

「やったあー！」

無邪気に笑って喜ぶ彼女からは、悪意や敵意は感じられないが。

それでも、彼女が現在理亜の物語になっているということは。この先理亜と彼女との間でロアとして対峙してしまうような出来事が起きる。

それだけは避けて通れないのだろう。

「よろしくね！ スナオ・ミレニアムよっ！」

「須藤理亜です。よろしくお願いします」

スナオちゃんが差し出した手を理亜がしっかりと握る。

理亜の体を通してスナオちゃんの体温を感じることができたが。その手は小さくて細くて、そしてとても冷たかった。

「いやー、リアってばわたしの超好みだわー！ えーい、ハグー！」

かなめやりサ、理子が俺に抱きついてくるみたいな感じでスナオちゃんが理亜に抱きつこうとするが……。

ガターン!!？

気がつけば理亜は椅子から立ち上がっており。スナオちゃんは机と共に床に倒れて
いた。

「いたたたた……なんで避けるのよー!!?」

「えーつと、すみません、つい、体が勝手に動いてしまいました」

「ハグはダメなの!!?」

「そういう文化に慣れていないもので」

理亜はクールな声で淡々と告げる。

解るぞ、その気持ち。

俺もかなめやりサに抱きつかれる旅に、文化の違いを思い知らされるからな。

「うう……絶対ハグしてやるんだから!!?」

理亜や俺の思いを他所に。

スナオちゃんの決意表明に、クラス中が笑いに包まれる姿がそこにはあった。

第七話。千夜一夜夢物語②素直な転入生

気づけばまた景色が変わっていた。

ふと、鼻をついたのは塩素の香り。

辺りを見渡すと、左右にロッカーが立ち並んでいる。ここはロッカールームか？

「転入初日からプールなんてねー、楽しみー！」

状況確認をしていると。

制服姿のスナオちゃんが、満面の笑みを浮かべながら、制服のリボンを解こうとしていた。

「これは?!？」

「スナオさんはプールが好きなのですか？」

「泳ぐのは大好きよ！ 水の中って、なんか全身リラククス！ みたいな気分なるし」

シユルリと首もとのリボンを抜き取り、辺り前のようにスカートの中のホックを外すスナオちゃんの姿が見えた。

「これって……まさか！

「リアは？」

「私は人前で水着になるのは抵抗がありますが、泳ぎ自体は嫌いではありませんね、本日のように女子のみの場合は問題ないのですが、男子も一緒の際は毎回見学しています」などと、言いながら理亜は自分の制服のリボンを外しながら返事をする。シユルリ、と布が擦れる音が聞こえる。

まさかと思つたが……やはり

これは。

「そう？」

男子にその綺麗な体を魅せつけてあげればいいじゃない！

「確かに、綺麗にしているつもりですが。見せる為ではありませんから」

ついに、理亜のその手が制服スカートのホックにかかる。

つて、ちよつと待てくれー!!!

理亜の夢は何でこんな地雷原が多いんだ!?!?

他の人には天国かもしれないけど、あつちの俺にとつては地獄だぞ。これは。

ああ、でも……理亜やスナオちゃんはいつ見ても美しいね。まだ幼いながらも、女性としての魅力がぎゅつと詰まっているね。例えるなら、そう。可憐な花。まだ蕾かもしれないけど将来的には綺麗な花が咲き乱れることは間違いないね。その花の中には、甘い蜜がたっぷり入っている。そんな、魅力がこの2人にはある！　そして、こつちの俺は彼女達と共存関係にある働き蜂かな？

もつとも甘い蜜理亜達は他の蜂には渡さないけどね！

などと思っていると。

リアの手がスカートを下ろして……いったところで俺は視界を塞いだ。自分自身で目を閉じたのだ。

プールの着替えを覗くのはまずいからね。

普通の体育の着替えでもまずいけど。

プールは確実に素肌が見えてしまう。

許可なく女性の肌を見ることはこつちの俺ではできない。

いや、あつちの俺もしないが。

しかし、理亜の視界と同調しているはずなのに自分自身目を閉じることが出来るとは、中々便利なようで、人によっては不便を感じるスキルだな。この『夢覗きスキル』は、ともあれ、今はそのスキルは自分自身の意思によって、視界は真つ暗に包まれている。目を開けたら見えてしまう。なら、見なければいい。

ここから先は音声のみだ。

『ふうん。まあ、でも解らなくはないわねっ。やっぱ、どつちかって言うと、好きな人に見せたいもんだもんねっ』

『好きな人に見せるのはもつと嫌です』

『あれ、そうなの？』

『緊張して死にそうになりそうですから』
『へえええ！ リア、好きな人いるのね！』

ざわり！

スナオちゃんの声がロッカールーム内に響き渡り。
ざわつきが起きる。

『え、須藤さん好きな人いるの!?!』 『こないだサッカー部の部長さんフツてたのは、好きな人がいるからだったのね!』 『誰、理亜さんに好かれるなんて恐れ多いのは誰!?!』

『私、理亜さんに憧れていたのに！ 　どこの男よ!』

女子達の驚きと、困惑、嫉妬の声が響き渡る。

『え、ええと……』

困惑気味な理亜の声が聞こえる。

『ねえねえ、リアの好きな人ってどんな人!?!』

『……もし、いたらの話、です』

スナオちゃんが名前の通り、素直な性格を活かして直球にリアに聞いた。兄として、理亜に想い人がいるのは気になってしまう。

俺はいけない、と思いつつもその会話を耳を傾けてしまう。

もし、なんて言っているが、その口ぶりはいると公言しているようなものだからだ。

『いいや、今のはいるっぽい言い回しだったぜ?』

と、聞き覚えのある声が聞こえてきた。

俺はいけないと思いつつも、薄めを開けて見てしまう。

そこには、学校指定の水着、俗にいうスク水を着用しているアリサが腕を組んで立っていた。

スラリと細長く見える体つきは、健康的だが、妙な色気を含んでいる。

「アリサさん」

「よう、リア。いいじゃないか、ここでドバツとぶちまけてしまえよ」

恨みがましい視線をアリサに向ける理亜。

アリサはその視線を受け流し、リアに続きを話すように囁し立てている。

「そうそう、言っちゃいなよ!」

スナオちゃんはスナオちゃんで、続きが気になるのか、リアに催促を始める。

周りの女子達は瞳を輝かせて、今か今かと、理亜がぶちまけるのを待っている。理亜の味方はこの場にはいないようだ。

そんな状況に置かれた理亜は、小さな溜息を吐くと。

「ええと……好みのタイプなら」

「うんうん！」

それが誰かを直接言うのではなく、漠然とした情報を伝えるという手段に出た。

苦肉の策だったのだろう。

「こう、背は高い方がいいですね」

ふむ、元々の俺は身長170cmほどだが。

今のこの身体。一文字疾風は割と背は高い方だ。

「後は優しくして、頼りがいがあつて、頭は良くなってもいいのですが、お話をして面白い人がいいかもしれません。それと……」

この辺りの理想は、普通の女の子っぽいな。

なんだか安心した。

「浮気しない、一途な人がいいです」

ズキン。

それはすぐく辺り前な条件なのだが。理亜の言葉は俺の胸を深く抉った。

違うんですよ、理亜さん!!?」

「浮気は文化なんです。」

「あはは、リアもフツの女の子なのね!」

「クールだからもつと変わったヤツが好きなのかと思っただぜ」

「私は普通です。スナオさんやアリサさんみたいに普通じゃない人とは違いますから」

『なーんだ。普通だね〜』 『須藤さんの好みは普通な人……』 『浮気男には死を

……』

理亜の好みが普通だったせいとか、一部を除いて周りの女子達も騒ぎ立てるようなことにはならず。

理亜がほつと胸を撫で下ろしたタイミングでアリサは。

「で、本命はお前の兄さんだったりするの?」

爆弾を投下しやがった。

「つ……」

アリサの不意打ちな発言のせいで、理亜は露骨に反応してしまい。

「あつ、顔が真っ赤になった!!?」

スナオちゃんのダメ出しにも反応してしまい。

「なつ、なつてません!!?」 に、兄さんはその、そういうんじや!」

『反応が本当っぽい!!?』

途端に、女子更衣室の中はチャイムが鳴るまで、大騒ぎとなった。

気づけばまた景色が変わっていた。

ふと、鼻をついたのは塩素の香り。

辺りを見渡すと、そこは室内プールだった。

プールサイドで体育座りをしながら、理亜はみんなが自由に泳いでいるのを眺めていた。

「ぶはあーっ!!?」

理亜が眺めるプール。その水の中から現れたのはスナオちゃんだった。

トレードマークのドリルヘアも水に入ると張り付いてしまうようだ。

一瞬、誰か解らなかった。

「あー、リアは泳がないの?」

彼女はリアのいるプールサイドまで水を滴らせながらペタペタと歩いてきた。

「どなたですか?」

「ぶふーっ、スナオだよ、スナオ!」

「ああ……すみません、ドリルではなかったもので、つい」

「ドリル以外にも特徴的だよねわたし!!?」 他に金髪の子とかいないよね!!?」

「大丈夫、全て冗談ですよ」

「もう、変な冗談言う子にはぶんぶんがおー、だぞ?」

「ふふ、気をつけますね」

「リアは転入初日のわたしにも容赦ないなー! わはは!!?」

ん?」

……気のせいかな。

スナオちゃんの姿が一瞬、知り合いに重なってみえたような……。

「と、隙について、えーい、ハグー!!?」

「あっ」

スナオちゃんは理亜に勢い良く飛びつこうとして、理亜は反射的にそんなスナオちゃんの体をドン、と押していた。

スナオちゃんの後ろは当然ながらプールで。

ドボーン!!?」

上がってきたばかりのプールに突き落とされたスナオちゃんによって、水柱が立つ。

「ぶはあーっ、な、何すんのよー!?!?」

「すみません、つい、体が勝手に動いてしまいました」

「どう体が勝手に動けば水に突き落とすのよ!?!?」

悪態を吐きながらも、ザバア、と水を滴らせながらプールから出るスナオちゃん。

「いつか絶対にハグしてやるんだからっ!」

彼女は握り拳を作りながらそんな決意をしていた。

そんな彼女の姿を見ていると。先ほど感じたあの既視感はただの思い過ごしだったのか、と思ってしまう。

『ぶんぶんがおー、だぞ?』

……元気だろうか。あの子達は。

「よーう、リア。転入生!」

などと、感傷に浸っていると。

理亜とスナオちゃんの所にアリサがやってきた。細い銀髪は光を反射しているせいか、キラキラ輝き幻想的な美しさが醸し出されている。

「アリサさん」

アリサの名を呼ぶ理亜の声には緊張以上に、恨みがましい空気が含まれていた。さっ

き爆弾を投げたアリサに対し、不満があるのだろう。

「さっきのような話は困ります」

「ま、いいじゃないか。リアがブラコンだつて話は有名なんだし」

「え、そうなんだ？ キンダンの恋つてヤツ？」

「いんや、リアと一緒に住んでんのは従兄弟らしい。高校二年だ」

「おおー！ 三つ上のお兄さん！ しかもイトコなら結婚も出来ちゃうわね！ なるほどね。リアのお兄さんならなんだか落ち着いたクールなイケメン！ つて感じなのかしら？」

「ごめんよ。クールかどうかは自信ない。」

「いえ、子どもっぽくてヤンチャで格好つけたがりなお調子者です」

「きつとその内、ネクラで、昼行灯で、女の子をすぐに口説くような駄目人間になる、そう予兆したぜ！」

理亜は一文字の性格を的確に表現し。アリサはアリサで予言めいた事を言い放つ。

事実だが、それはそれで凹むぞ。お二人さん。

「なあんだ、なら別に会わなくていいわー」

「がっかりした表情を浮かべるスナオちゃん。」

「そこまでがっかりされると流星に傷つくんだが。」

「それに、わたしは可愛い女の子の方が好きだし？」

「そこで手をわきわきして私を見るのはやめて下さい、スナオさん」

スナオちゃんにさらりとクールに告げると理亜はアリサを見上げて。

「それにしても、アリサさんは私の事情にも詳しいですね？」

「そりゃあな。この学校にはとっくに溶け込んでいたことになっているし。噂に聞くクールビューティーな理亜の話はちよくちよく耳にしてたぜ」

なるほど……ことになっている、ね。

それをバラす辺り、アリサはいい加減な魔女なのかもしれないな。

「そうでなくても、お前さんの情報収集はちゃんとするさ。今後はもしかしたら私の相手になるかもしれないしな？」

「そうですか」

やや緊張を含む返事をする理亜。無理もない。

『もうすぐ死ぬ』なんて言ってきた人物に話しかけられれば、警戒して当然だろう。

「それで、何をしに来たんですか？」

「隣のクラスの友達が、休んでいる友達に話しかけにきただけじゃないか」

警戒感を丸出しする理亜に対し、アリサは腕を組んでケラケラ笑いながら告げる。

特に意に介した様子ではなさそうだが、『魔女』の逸話には『真実の話』を信憑性にか

る話のように語りかけて、相手を惑わす』とか。『いつの間にか生活の中に紛れ込んでいく』という話があるから、目の前のこの『予兆の魔女』も油断は出来ない。

「しかし……」

アリサは視線をスナオちゃんに向けると。

「ん？」

「面白そうな娘だよな、こいつ」

興味深そうにスナオちゃんを見つめた。

「あは！ わたしも貴女みたいな綺麗な銀髪の子は好きよ！」

「そうだろうさだろう。私の髪は天下一品だからな？」

「テンカイチなのね！ グレートだわ！ わたしは転入してきたスナオよ！」

「隣のクラスのお銀髪美少女、アリサだけ」

「よろしくね、アリサ！」

「ああ。フォロー・ミー、だぜ。スナオよ？」

いきなり仲良くなった。

このフレンドリーさ。

理子系女子なら標準装備しているのかな？

この金髪と銀髪の水着少女達を見てみると、国際交流を見ている気持ちになってく

る。

「アリサさん」

そんな二人が仲良く笑い合っているのを止めるかのように理亜はアリサに話しかけた。

「私はまだ大丈夫なのですか？」

理亜がストレートに尋ねると、アリサはその口元を歪めて返答した。

「みたいだな。今日辺りに一回山が来るかもしれないが」

『予兆の魔女』に尊大に告げられた理亜は口元を引き結ぶ。

「ん？ ナニナニ、なんの話？」

事情が解っていないスナオちゃんは首を傾げて二人に尋ねる。

「なあに」

アリサはこれから語る言葉が面白くて仕方ない、とでも言うかのように『ククク』と含み笑いをしてから。

「運命的な話さ」

意味ありげに、そう呟いた。

……。

……？

景色がまた変わった。

「あちらが美術室で、その隣が音楽室ですよ」

「んー……」

放課後になり、理亜はスナオちゃんを連れて校内を案内していた。

他所のクラスのせいとか、アリスの姿は何処にもない。

校舎の窓からふと外を見ると、あかね色に染まるグラウンドが見える。太陽が沈もうと
している時間帯というのが解る。

下校時間が近いせいとか、校舎の中は閑散としており、寂しい雰囲気漂っている。遠くから聞こえる運動部の掛け声やブラスバンド部の楽器の音が、妙に郷愁を誘っている。

「スナオさん？」

「あ、うん、何？」

隣を歩く金髪ドリルの少女に校内の説明をしていた理亜だが、そのスナオちゃんはぼんやりしていて、先ほどまでの元気がないような様子だった。

「いえ、元気がなくなっていましたから」

「そんなことないって。わたしはいつでも元気だよ」

小さくガッツポーズをするスナオちゃんだが、さっきまでの突き抜けるような元気がなくなっているのは明らかだった。

「ん？ ああ、須藤にミレニアムか」

と、そんな二人のもとに、校内を見回っていたらしい四条先生が話しかけてきた。

「あ、四条先生。こんにちは」

「こんにちは。学校案内ご苦労様だね」

四条先生は柔和な笑顔を浮かべて理亜とスナオちゃんを見る。

女子の視点から見てるせいかな、この先生が生徒達からの人気が高いのもなんだか解るような気がした。

「ふうー」

しかし、スナオちゃんは先生の存在に気づいていないかのように大きな溜息を吐いた。

「ミレニアム？」

「どうかしましたか、スナオさん？」

「うえっ!? あ、ううん。別にどうもしてないわよ!?」

あ、センス、こんにちは！
明らかに何か考え事をしていました、と言わんばかりの態度だが。理亜と先生はお互

いの顔を見合わせてからスナオちゃんの顔をマジマジと見つめるが、スナオちゃんは、バツが悪そうに視線を横に向けて何かを思い悩んでいるような、そんな顔をしていた。

「ふむ、流石に水泳の授業もあつたから疲れたのかな？」

「そうかもしれないね。そろそろ帰りましょうか、スナオさん」

「あ、あう……ごめん」

氣遣われたのが解つたのか、スナオちゃんは申し訳なさそうに頭を下げた。

「転入初日で、あんなに元気に頑張っていたのですから。疲れたりしてしまうのも無理はありません。それよりも明日からもずっと長いのですから、初日はほどほどにして帰りましょうね、スナオさん」

「あう……ありがとう。リアってばほんと、氣遣いさんよね……」

「そんなことありません。世話のかかる兄がいるから出来るようになっただけです」

「確かに一文字は世話のかかる兄だろうなあ」

何気に酷い事言ってますんかね、お二人さん!?!?

まあ、否定はしないけどさ。

「と、いうわけで帰りましょう、スナオさん」

「うん……」

優しく微笑んでスナオちゃんを諭す理亜。

しかし、スナオちゃんはそれでも思い悩んでいる様子だった。

「ああ、そういうえば」と四条先生が思い出したかのように話し始める。

「最近……というわけでもないが、どこかの町で下校中に攫われてしまった女子中学生がいたらしい。須藤も、ミレニアムも気をつけるようにな」

「攫われる、ですか？」

「事件としてニュースにはなっていないものの。先生達の間ではちよつとした噂になっているからな。こうやって注意を呼びかけているんだ」

「あくまでも気休めだけだな」と四条先生は笑う。

まだこの町で直接的な被害が出ていない現状、注意を呼びかけるくらいしか手のうちようがないのだろう。

『攫われる』と聞いて、俺は何かを思い出しそうになる。

だが、頭の中に霞がかかったかのようにそれが何なのかは思い出せなかった。

夢の世界では記憶とかが曖昧になるのかもしれないな、などと思いつつ、三人の会話を耳を傾ける。

「スナオさんは目立つので、いかにも攫われそうですね」

「え、そんなことないわよ!?」 まだ一回も攫われたことないしっ」

「一度でも攫われていたら、それはとづくにアウトだからなあ」

「あ、そっか」

先生のツツコミに頬を赤くするスナオちゃん。

その様子は非常に可愛らしかった。

「それじゃまた明日な、須藤、ミレニウム」

「はい、また明日」

「うん、先生バイバイっ」

廊下を歩いて去っていく四条先生。

その後ろ姿を見送ってから、理亜はスナオちゃんの背に手を当てて帰宅を促そうとする。

「さ、それでは私達も帰りましょう。スナオさんの家の場所によっては、近くまで送れるかもしれないし」

「あっ！ ええと……」

スナオちゃんは視線をうつろつかせると、そのまま理亜をじつ、と見つめた。

「ん？ どうかしましたか？」

「ううん。わたし、やっぱり一人で帰るよっ」

「え、ですが……」

「わたしは絶対大丈夫！ でもね……」

夕焼けに滲む表情をしたスナオちゃんは、どこか寂しそうな空気を出しながら。

「リアは、本当に気をつけてね？」

意味深げに告げると、パタパタと逃げるように走り去ってしまった。

「……スナオさん？」

とても追いかけられる速度でも雰囲気でもなく、残された俺と理亜は途方に暮れる。

「本当に気をつけて、ですか」

その言葉の意味は解らない。

だが、不安を過ぎらせるには充分なものだった。

場面はまた変わり、一人で下校する理亜。

「はふう。『もうすぐ』というのはいつなのでしょうか」

アリサに告げられた『死』の予兆。

そして、スナオちゃんに言われた『気をつけて』という言葉。

今まで『死』に対する不安な気持ちなんかを見せなかった理亜だが、やはり独り言を零すくらいには不安を感じていたようだ。

それもそうだよなあ。クールに振舞っているせいかな、そうは見えないが理亜はまだ中学二年の女の子。

『死』に対する耐性などあるはずないのだから。

「気は抜けませんけど、ずっと張り詰めているのも疲れてしまいますね。はふう」

理亜の癖になっている溜息。

元々、理亜が吐く『はふう』は『もうしかたないなあ』みたいな軽いもの。

しかし、今の『はふう』は困った内心を吐き出すかのような、幸せを逃しそうな重みがある溜息だった。

「それより、今日は兄さんに何を作るかを考えましょう。冷蔵庫に残っているものはなんだったでしょうか……」

勇気を奮いたたせる為に独り言を零しているような理亜の姿を見て、胸が締め付けられる。

なんで俺は彼女の様子が違うのに気づかなかったんだ！

過去の自分を殴りたくなる。

「こんにちは、お姉さん」

その言葉が聞こえた瞬間、世界は凍りついた。

俺はその言葉をかける人物と、この世界を知っている。

だが、理亜は全く知らなかったようで、ピクツと肩を震わせ慌てて背後を振り返った。

振り返った理亜の視線の先
1mも離れていない距離に。

そこには、大きな白い帽子を目深に被った白いワンピース姿の女の子が立っていた。

少女の存在に気づくと同時に、どこか甘い、花のような香りが漂ってくる。

「私はヤシロだよ、お姉さん」

そう、目の前には実在する都市伝説だけを集めたサイト。

『8番目のセカイ』の案内人にして、そのサイトに唯一繋ぐことが出来る端末『Dフォン』

を配る存在のヤシロちゃんがいた。

「こんにちは、ヤシロさん。私は理亜です」

「うんうん、よろしくね、理亜お姉さん」

クスクス笑ったヤシロちゃんは「はい、これ。お姉さんの」といかにも渡すのが当た

り前なように掌に乗ったソレを両手を掬い上げる形で差し出した。

「私の？」

「そう。お姉さんのDフォン」

ヤシロちゃんの掌にはかつて俺が手渡されたのと同じ特殊な端末。
漆黒の携帯端末機。

Dフォンが乗っていた。

第八話。千夜一夜夢物語③

ハグは涙と共に……

「じゃあ、お姉さん。生きてたら『また』ね？ バイバイ」

理亜に漆黒の携帯電話。『Dフォン』を渡し、『他人に触れられるのを嫌がる』理由を説明した少女、『ヤシロちゃん』は手を振って消えた。いつの間に？ と思う間も無いほど速く、気配や音すらもなく。

気がつくと、辺りの様子が元の世界に戻っていて。

その光景に安心したのも束の間
理亜の体がぐるりと回転し、片膝をついた。

「っ？？」

あれは！

たった今まで理亜がいた場所。

そこには見覚えのある真っ白い『手』が地面から伸びていた。

すでに、『ロアの世界』は解除されているのに、白い手が伸びている。俺はその事実を

認めたくないが、目の前にその手が伸びているせいとか、認めざるを得ない。何度見ても、やはりそうだ。

あれは――！

『夜霞のロツソ・パルデモントゥム』、スナオちゃんのロアの能力だ。

それを思い出した途端、チリツと、頭が痛み、霞かかっていたものが何かを思い出す。

俺はついさつきまでスナオちゃんに関する情報を思い出しにくく、なっていた。

夢の世界に入った影響だろうか？

今は全て思い出した。彼女は『少女を攫う』ことで存在を維持する有名なロアだとい

うことを。

俺がスナオちゃんのロアの能力に意識を向けている間。

理亜は通りかかった女子生徒に「あの、すみませんっ」と声をかけていた。

しかし、女子生徒は理亜の声がまるで聞こえていないかのように。

「でね、その先輩がとっても面白い人なんっスよ！」

「へえ、陸上部ってOBの人がたまに来てくれるんだね」

理亜の横を通り過ぎてしまう。

その存在に気がついていないかのように。

「私の声が届かない？」

理亜は赤く発光、発熱したDフォンを強く握り締めると、自分の携帯電話を取り出して、連絡を取ろうとした。

「っ!!？」

だが、白い手はそんな理亜の行動を妨害するかのようになり、再び理亜に襲いかかる!

視界がぐるりと回転し、体勢を整えた理亜が目にしたのは、今まで理亜がいた場所の壁から白い手が伸びていたことだった。

壁から白い手が伸びる。そんな異常な事態にも関わらず、理亜の横を通行人が何事もなにかのように通り過ぎていく。

これも一種の『ロアの世界』なのかもしれない。

誰もいなくなるのではなく、そのままの世界で自分だけが世界から切り離される。

まるで自分が幽霊にでもなったかのような、そんな感覚を覚えそうになる場所。

『当たり前前の空間からすらも人を切り離して攫う』、それがスナオちゃんのロアの能力だとしてたら？

「手……私を捕まえようとしているのですね？」

ただの人間であるはずの理亜はどうやって切り抜けたのだろうか？

俺の疑問に答えるかのように。

理亜は何も解らない恐怖に怯えるように、周囲の人々や白い手を交互に見るとその視

線が自身の携帯電話のストラップに行った。昔の俺、一文字が理亜にプレゼントした『眠り猫』のストラップだ。継るようにそのストラップを握り締めた。

「これがさつき注意された人攫いでしようか？」

理亜はやや震える口調で話しながらも、ただ怖がるのではなく、情報を一つ一つ整理していた。

直後、理亜の体が前に飛びつき、ぐるりと回転して立ち上がる！

理亜がいた場所にはやはり白い手が生えていた。

白い手が生えるより速く、それを感知出来るのだとしたら

理亜の才能は

本当に、聖女や女神とか、そういった超常的なものなのかもしれない。

それはおそろく……。

『前兆の感知』。

理亜の意思とは関係なく働く、超感覚的な力なのだろう。

「もし、この『手』が私を攫うというだけなら、こうして避け続けていればなんとかかなりそうですが。それではいつか私が疲れ果ててしまいますしね」

そして、理亜本人がその才能が『ロア』にも通じると把握しているようだった。

自身の才能を把握した理亜。彼女が落ち着きを取り戻していくのに、そう時間はかからなかった。

まるで、こういった経験が過去にあるかのように理亜の体は動く。

「それにしても、どうしてでしょうね。これを回避し続けるだけなら出来る気がします。以前にもこういったものを受けたような……」

理亜も同じことを感じていたようで、そう呟くと。

「ならばどこまで出来るのか。確かめてみましょうか」

自分自身を試すかのように走り始めた。

走り続ける間も、理亜はヒラリヒラリと地面から生えてくる白い手を躲し続けていた。

時には通行人にぶつかりそうになりながらも、走行中の車を避けたりしつつ、転ばないようにアクロバティックに。理亜は通行人が自分のことを気にもとめないという不思議な世界の中を我が物のように駆け抜けていく。

向かっている場所は一つ。

かつて、俺がキリカと戦った場所。

市立十二宮公園。

戦闘では広い場所で対処するのは戦いの基本だが、相手から狙われやすいというリスクもある。

それをどうするつもりなのか。

公園の入口が目の前に迫って来たその時。

「はっ」

公園入口の柵の両側。そこに白い手が伸びたのを見て。理亜は柵に手を付くことで高らかにジャンプして乗り越える！

理亜はこんなにも運動神経が良かったのか、と驚きつつも。Dフオンを受け取った時点でハーフロアとして片足を突っ込んだ状態にいるのだから当然か、と思い直す。

理亜が柵を乗り越えた瞬間、スカートを抑えていた為、見えなかったが兄としては安心したような、ちよつと残念なような……複雑な気分になった。

「ハア、ハア、ハア……」

そして、公園の中心、噴水がある位置まで理亜は一気に駆け抜ける。

広場の中心に向かって行く理亜を見て、俺は彼女の狙いを察した。

ヒステリアモードの俺なら、理亜と同じ目に遭ったらきつと同じことをしただろう。

「ふう……早くなんとかして。兄さんに飯を作りませんとね」

理亜は握っていたストラップを額に当ててくるくらいに持ち上げると祈るように囁いた。

「だから、絶対に生き残ります。兄さん、勇気を下さいね」

ギユツと、ストラップをより強く握り締めると。

「さあ、来なさい、人攫いさん！ 私は納得しなければ貴女に攫われてあげたりするつ

もりはありませんよ！」

凜とした声でそう告げた。

理亜が宣言した瞬間、地面いつぱいに白い手が生えてきた。

手の大きさ、長さは一緒で。それが理亜を求めるように波のように押し寄せてきた。

「なんとかなくそうなるんじゃないかと思っていました。いぎ、本当にこの光景を見ると、気味が悪くて足が竦みそうになりますね」

誰かに語りかけるかのようにそう口にする理亜。

「もし私が帰って来なかったら、兄さんは泣いてしまうでしょう？

だから、私

絶対に帰って、当たり前前に生活しないといけないんです」

そう呟くと理亜はそのまま、自ら飛び込むように白い手の方に駆け寄っていく。

大量の手が理亜に迫るのを理亜はじっくりと見つめると。

「この手ですね！」

その中の一つに向けて手を伸ばし、がっしりその手首を握った。

「っ……？」

「やや半透明な手が多い中、たまにはつきりと見える手があるのを逃げながら確認していました。貴女が、本体の手ですね！」

そのまま理亜はその手を引つ張り上げると。

地面がまるで水溜りのようにゆらゆらと揺らいで、そこから

「う、うそっ!? どうして!?」

赤いマントを纏ったスナオちゃんが飛び出し、驚いた顔で見つめていた。

スナオちゃんが現れると同時に、地面に生えていた手も消える。

「あてずっぽうです、スナオさん。まあ、この手の正体が貴女だった、というのは今知ってビックリしているところですが」

「リ、リア……」

愕然とした表情をして、理亜を見つめるスナオちゃん。

理亜はそんなスナオちゃんに告げる。

「申し訳ありませんが。私は攫われるわけにはいかないんです。兄さんにご飯を作つてあげないとはいけませんから」

理亜が握っていたスナオちゃんの手を離すと、スナオちゃんは腰を抜かしたのか、ペタンと地面に座り込んだ。

何という洞察力だ。

ヒステリアモードの俺はスローモーションの世界で、理亜に襲いかかっていた手の中に、本物の手があるのを見ることは容易に出来たが。驚くべきことに同じことを理亜はやっていた。

俺とは違い、ヒステリアモードにもなれないのに。

理亜は、戦いの中で、回避と観察を重ねながら『赤マント』の弱点を見抜くべく動いていたんだ。

『それが失敗するかもしれない』という恐怖を乗り越えて。自分の方法を、信じて実行した。

運命を引き寄せたかのように。

「うくっ……うううっ！」

手を離されたスナオちゃんは抵抗する力すら失ったのか、そのまま地面に座り込んで泣き出してしまった。

「うくっ、どうしよう、どうしよう……このままじゃ、わたし、消えちゃうっ」

その目から大量の涙を流す。

そうか。彼女も一之江と同じなんだな。

ハーフロアである彼女は、誰かを攫わないと消えてしまう。

学校にいる時、理亜にバイバイと手を振った時から……或いはもつとまえ、初めて教室で出会った時から攫う対象を理亜に決めていたのだろう。『赤マントのロア』の標的として。だが、その理亜は一筋縄でいくような相手ではなかった。

理亜を攫う事に失敗してしまい、このまま『少女を攫えないロア』として噂が定着してしまえば、彼女はその存在ごと、消えてしまうかもしれない。

「消えちやう、ですか？」

「ふえええ!!? やだ、やだよう、消えたくないー!!?」

スナオちやんは理亜の問いかけには答えずに、泣きじやくつてしまう。

「ん……私が尊敬する兄さんなら。女の子が泣くのを放つておいたりしませんね」

スナオちやんは手慣れていた。

おそらく、こういった犯行は初めてではないのだろう。

決して許されることではない。

被害者達からすれば決して許しはしないだろう。

だけど……俺は。

俺はこんなに泣いている女の子がいたら、自業自得といって見捨てることなんてできない。

「ううん……もし、私を攫えないと貴女が消えてしまうというのなら、私の兄はきつと……こう語るのではないでしょうか」

「ひくつ、ふえ？」

理亜はスナオちゃんの前にしやがみ込むと、その両手取って、自分の胸元に引き寄せた。

「スナオさん、みたいな子が誰かを攫う理由が……一人でいたいくらいから、誰かと一緒にいたいから、みたいなものだったとしたら。自分でよければいくらでも一緒にいる、と」

優しく語りかける理亜の顔をスナオちゃんはハツとした顔で見つめる。

「ただ、嫌がらせとか、困るのを見て笑うとか。そういった悪い理由なら許せません、ですが、もしそこに寂しい気持ちがあるのだったら、絶対に見逃せないし、見逃す理由もない、と」

「リア……」

スナオちゃんの手を、自分の胸に押し当てて、安心させるかのように笑みを浮かべて頷くと。

「もし、誰かを攫わないとスナオさんが消えるというのなら。自分は攫われてもあげてもいい
きつと兄さんなら、そんな風に言うと思います。だから

ぎゅつと、スナオちゃんの手を握り締めたまま、理亜はその言葉を口にする。

「私、貴女に攫われてもいいですよ？」

「……え、リア……？」

スナオちゃんの目が見開かれる。

自分が襲った相手から、攫われてもいい、そんな言葉を言われるなんて。

信じられない。

スナオちゃんの顔はそんな顔をしていた。

「私は兄さんの見ているものを見たい、兄さんの感じているものを感じたい。尊敬する……大好きな兄ですから。兄さんが私を大事にしてくれるように、私も兄さんを大事にしたいんです。だから、私はこうします」

スナオちゃんの目が驚きでさらに潤み始めるのを見ながらも、理亜は言葉を続ける。

「スナオさん、私は貴女がどんな罪人であろうと、どんなオバケであろうと、泣くのは嫌です。そして消えられるのはもっと嫌です。なのでそんなこと、私が絶対に許しません。」

そして……もし、私を攫って少しだけでも後悔するようなことがあれば、絶対に攫われてあげるつもりはありません」

「リア……」

ポロポロ、スナオちゃんの目から涙が溢れ出す！

「だって、そうでしょう？　スナオさんが私を攫って『あー、攫うのすつきりした！

超素敵』って気分でないと、もし攫われて殺されるだとしても、攫われ甲斐がないじゃないですか。なので、スナオさん」

「……………ん……………」

「一緒にいてあげますから。いつでも攫われてあげますから、だから、泣いたり、消えたりしないで下さい。せっかく今日、お友達になったんですよ？」

「う……………あ……………うああああああああん!!？」

理亜の胸にそのまま抱きつき、顔を埋めるスナオちゃん。

理亜はそんな彼女を静かに抱き締めていた。

「はい、これが、待望のハグ、ですよ」

「ふえええええええ、リアああああ!!？」

ピロリロリーン。

Dフォンが二人の友情を祝福するかのように、軽やかなメロディーを奏でる。

俺はそれで理解した。

こうして、スナオちゃんは理亜の物語になったのだと。

理亜は胸で泣きじやくるスナオちゃんの背中を撫でながら、小さな溜息を吐く。

「攫った方がいるのなら、帰してあげてくれませんか？」

「ん……解った。みんなまだ生きてるから、家に帰しておくね」

「はい。……よかった、生きていますね。はふっ」

溜め込んでいた息を吐き出すかのように、溜息を吐くと。スナオちゃんの頭をヨシヨシと撫で続ける。

解放された人達が『赤マント』は解決した、という噂を流してしまえばスナオちゃん
の存在は危険な事になるのかもしれないが、それでも理亜はそうしたかったのだろう。

そう思った、その時————— だった。

「千夜の一夜目の物語、確かに見させて貰ったぜ、リア」

第九話。千夜一夜夢物語④ 悪夢

背後から聞こえてきた声に振り返ると、中央広場にあるベンチ。かつて俺とキリカが座った事のあるベンチにいつからいたのだろうか、そのベンチに腰掛けながらアリサがニヤケ顔をしていた。

「アリサさん」

「最初が超有名なロア『赤マント』だなんて、やるじゃないか。流石は私が認めた『主人公』だな？」

「ロア……『主人公』……このスナオさんや、さっきのヤシロさんのような人ですね？」
「ああ、そうさ。この世の中には、そいつみたいに『噂通り』に動かないと消えてしまう、都市伝説のオバケになっちまった人間がいるんだ。スナオは『怪人赤マント』は少女を攫う』という噂に縛られたせいで、少女を攫い続けると消えてしまう存在になってしまっていた、ってわけだな。」

ちなみにそれをハーフロアって言うんだが」
「ハーフ、ですか」

理亜はアリサの話をスナオちゃんの背中や肩をポンポン、よしよし、撫でながら聞いて

ている。

「ああ。んでもって、純粹に何も無いところから噂話だけで生まれたオバケを『ロア』つて言う。私みたいな、純粹なオバケのことだな。オバケでもあり人間でもある一番きつつい『ハーフロア』よりも多少は楽な立場つてことさ」

「スナオさんが、人攫いをする『赤マント』であると噂された、ということですか？」

「その通りだ。そしてその噂を子供だけでなく大人まで信じて、そしてこの『世界』の意志すらもその噂を信じた。故に、スナオ・ミレニアムは『怪人赤マント』になった。ま、どうしてそうなったかは後で当人に聞いておくれ」

かつて、一之江から聞いた話でも同じことを告げられたが……世界の意志。

この世界は、そんな曖昧な認識で動いているという事実には俺は寒気と怒りを感じてしまふ。

「世界の意志……」

アリサに告げられた理亜もまた、僅かな怒りを声に含んでいた。

自分達が当たり前のように生きてきたこの世界は、なんと曖昧で脆いものなのかをなんとなく理解させられたからだ。

「まあ、世界なんてものは人類の無意識・統合意識つて考える説もあるがね」

「そうですか。人が、世界が、スナオさんみたいな子を苦しめているのですね」

理亜はぎゅっと、力強くスナオちゃんを抱き締める。

理亜は怒っていた。この世界に対して。そういったシステムに対して、遣り場のない怒りを覚えたのだろう。

「さて、ここで取り引きだ」

そんな理亜の怒りを見てアリサは口の端を釣り上げた。

「お前が私と組んで『千夜一夜』^{シエラザード}っていう『主人公』になれば、そんな『ハーフフロア』の物語だけを消し去って、人に戻してやることも出来る」

「っ!?」

そのアリサの言葉を聞いて、スナオちゃんは慌てて顔を上げた。

真つ赤な両目を見開きながらアリサと理亜を交互に見つめる。

「それに『主人公』になれば、もうすぐ死ぬというお前さんの運命も自分の手で覆せる。お前さんは本来ならさつき、スナオの手に捕まった後は攫われてしまはずだった。だけど、負けたくない、絶対に負けられないという意志の力でその運命を跳ね除けて、自分の意志で、命もスナオの心も掴み取ったんだ。お前さんには、自分の運命を自分で引き寄せる、そんな才能もあるのさ。これは紛れもなく『主人公』の才能だ」

アリサの言葉はかなり魅力的な提案に聞こえる。スナオちゃんのような苦しむ人々を救えるばかりか。死ぬ可能性にある自分の運命を自分で覆せるようになるのだから。

だが、それは……。

「つてなわけだ、リア。私と一緒に『千夜一夜』を過ごさないか？」

それは、これからはずつと。こんな戦いや恐怖の中で生きていくということ。

死の運命は自分で跳ね除けられるかもしれないが、死ぬ確率そのものは上がってしまった。そんな世界で生き続けるということ。

当たり前の日常から戦場への移行。

それは、ごく普通に過ごしてきた人間にとっては決断したくない道だ。

元武偵の俺でさえ、この短期間で何度死ぬかもしれないと思ったほど、恐ろしい目に遭ってきた。

一之江に殺されるまで追いかけられたり、キリカの蟲に食べられそうになったり、人喰い村の中で死んだ村人達から逃げ惑う羽目になったり、夢の中で茨で貫かれて殺されそうになったり、超音速の衝撃で吹き飛ばされたり。

そんな怖い目に、理亜が遭うことになるなんて。そんなことは――。

「何故ですか？」
アリサを真つ直ぐ見つめて理亜は問いかける。

「何故、貴女はそんなにも『主人公』を求めているのですか？」

理亜の問いにアリサはニヤリと口元を釣り上げたまま語り始める。

「私は『予兆の魔女』だからな。よくあるだろ？ 『もうすぐ死ぬヤツの所に現れる猫』とか『もうすぐ死ぬ老人の家にカラスが近寄ってくる』とか『自分と同じ姿のヤツを見たら3日以内に死ぬ』とか、そういうの。私はそんな『予兆』を司っている魔女だからだよ」

ベンチから立ち上がったアリサは、ゆっくりとスナオちゃんの元に近寄ってきた。

「だから、この曖昧でいい加減な『世界』がもうすぐ死ぬつていうのを理解してしまつたのさ。むしろ、もうそろそろ死ぬからこそいい加減で曖昧になつていられるのかもしれないな」

——— この世界が死ぬ？

そんなことをいきなり言われてもそれこそ理解できない。

理亜だつて、いきなりこの世界が『もうすぐ死ぬ』とか言われてはいい、そうですか、なんて思わない様子で。

ただでさえ、いきなり『もうすぐ死ぬ』と言われて、何も解らない状態で白い手に襲われたりして、混乱している状況でそんな『世界の危機』なんて知らされても、混乱するだけだろう。

しかし、そんな理亜の様子にも構わずにアリサは言葉を続ける。

「だからなんとかしたいなあ、と思つてたわけよ。確かにこの世界は曖昧でいい加減で

のんきで適当だが、私は個人的に気に入っているしな。食い物は美味しいし、人間は面白いし、アニメは楽しいし、可愛い女は多いし、アホな男も多いし」

「アリサさんは……なんだかんだで、この世界が好きなんですね」

「まあな。だから、そいつをなんとか出来る『最強』の『主人公』とか、そういった世界規模の危機に干渉出来る『不可能を可能に変えられる存在』を探していたんだよ。ここしばらくの間な？」

アリサは淡々と告げるが、『世界の危機を救える存在』。

そんなことが出来るのは『主人公』の中でも……『救世主』とか、そういった存在だけだ。

「そんなわけで『主人公』を探していたら、星座に『可能性』を封じられた『主人公』が最近出来たつていうのを察したんだよ。で、会いたくなつたわけさ。そいつなら私と一緒に『千夜一夜の物語』を集めて、この世界を死なないようにしてくれるんじゃないかって」

「星座に、ですか？」

「ああ。『予兆の魔女』だからな。星に現れるそういったものも全部把握出来るわけさ。

それは『乙女座』に封じられた『正義の女神』の可能性」

アリサは水色の瞳を理亜に向けてと、理亜の顔をじつと見つめて覗き込んだ。

「それが、お前さんだよ『正義の星女神』」
リア||ストライア

アリスの『告白』に頭が真っ白になりそうになる。

理亜の中で聞いている俺だが、そのあまりにもスケールのでかい危機に、夢物語のよう感じられた。

もうすぐこの『世界』は終わる。

『世界』を終わらせない為にはある『主人公』達の力がある。

その『主人公』の一人は。

星座に『可能性』を封じられていた。それは『女神』の可能性である。

そして、それが理亜である。

……全くもって、荒唐無稽こうとうむげいだ。

どこのファンタジー物語だよ。

理亜だってそんな話をそのまま受け入れたりなんて出来ないだろう。

だが。

「その話を私が信じる、信じないは特に気にしていませんね」

「もちろんさ。こんなデンパな話、いきなり信じられた方が引くからな」

「つまり、私の『何故』に貴女は正直に答えてくれただけである、と」

「察しいいじゃないか。ますます相棒に欲しくなっただけ」

やはり、受け入れさせる為の言葉ではなく、あくまでも理亜質問に、アリサとしての返事をしただけの内容だった。それを信じさせるつもりもなかった、だから荒唐無稽なのは当たり前な話。

そういうことか。

「私以外の人と組んだことはあるのですか？」

「もちろんさ。だが『千の物語』を集め切ったヤツなんていない。一日一話だったとしても千日だろう？

約三年かかる計算だ。ましてや、ロアなんてもんはそんなにホイホイいるわけじゃない。い。

平均一週間に一話だったとしても七倍になるから、二十一年かかるって計算だしな？

まあ、厳密に言うともっと違う計算になるが」

『百物語』よりも、純粹に十倍かかるわけだしな。

確かに途方も無い話だ。

「つまり集め続けている間は、私の『もうすぐ死ぬ』というのは先送りになるのですね」
理亜は何かを決意するかのようには、アリサに尋ねる。

「そういうことだ。お前さんが死なないうよう、私が全力で守るからな。ただ、もちろん口アに負けちゃったりしたら死んでしまう。むしろ、人間としての死じゃなくて、もっと

きつつい死に様になるかもしれないわけだが」

アリサは理亜の決意を受け入れよう、微笑みながらリスクも告げた。

そう、魔女と契約するのならリスクがあるんだ。

むしろリスクは減るところが増える。

だけど、理亜のメリツトも大きい。

そして、俺の知っている理亜という少女の価値観からすれば……。

「もし兄さんなら、散々迷った挙句、結局OKしてしまうとみました。何故なら、やはり一番大きな理由はスナオさんみたいな子を助けられるということ。そして……私や家族、友人がそういう目に遭わないよう、こっそり戦い続けてしまおうと思います」

そう、なるらしい。

理亜の中で俺が大分美化されてる気がするのだが。

理亜の正義感からしても、やはり許せないのはスナオちゃんみたいな子がいるということ。

この世界がそういった存在を生み出しているということだろう。

だから。

「だから。兄さんがそんな目に遭わないようにする為に。私は、貴女と共に歩む『千夜一夜』になりましょう、アリサさん」

真剣な表情で理亜はそう口にした。

俺なんかの為に。

俺を危険な目に遭わせないようにする為に。

理亜は『終わらない千夜一夜』エンドレスセラザードとなることを決意したのだ。

「ハハハハハ!!？」 いやはや、お前さんはほんつと、かなりブラコンだな！ 　　いつそ

告白しちまつたりしないのかよ?」

「つ！　　そ、そんなこと。……出来るはずありません」

アリサのとんでも発言に顔を真っ赤に染まらせる理亜。

普段クールな妹なだけあって、動揺して赤く染めた顔を背ける姿も可愛らしい。

本人には言えないけどね!

「ハハツ、まあいいさ。私はいつでも応援するぜ?　『主人公』は大体の恋愛も成功さ

せたりするしな?」

もつとも、失恋も『主人公』の醍醐味だいごみだったりするが」

「そういうのはいいんですってば。私は今の兄さんと、穏やかに過ごせれば」

「ハツ、OK了解したぜ。ともあれ、これで契約成立だ。今度とも宜しく頼むぜ、相棒」

理亜の前までやって来ると、アリサはその右手を差し出した。

「宜しく願います。アリサさん」

理亜は差し出さられたその手を力強く握る。――その瞬間だった。

理亜の頭の中に、怒涛のように光の粒子が大量に流れ込んできた。

宇宙空間を瞬く間に高速で移動し、通り過ぎていくかのように。

その一つ一つの星の光が、アリサの言う『予兆』だと理解出来たのはヒステリアモードになっているから。

というのもあるが、アリサの手を握っているからだろう。

高速で通り過ぎていく中、その光の一つを、理亜はハッキリ見てしまう。

そこには――。

真紅に染まっている空。まるで大災害にでも遭ったかのように崩壊している街並み。

そして、狂ったように高笑いしている少女の声――。

その声には、なんだか聞き覚えがあるような、ないような。

ハッキリと思いつけないが。

何故だか非常に気になった。

そして。

崩れた瓦礫の上にながりの血溜まりが存在していて。全身の血を全てぶちまけたかのような、絶対に助からないかと思うほどの危険な血の量があった。

そこに、誰かが倒れている。

見覚えのある顔だが、そんなしよつちゆう見るわけではないような男の顔。いつも鏡に写るくらいにしか見ない顔。

あれは——俺だ。

一文字疾風が、血溜まりの中——全身傷だらけで倒れていた。

そう、その顔は蒼白で。

傍からみても完全に、死——。

「いやああああああ!!?」

空気を引き裂くような悲鳴を聞いて、俺は飛び起きた。

場所は……俺の部屋のベッドだ。

どうやら、鳴央ちゃんが見せてくれていた理亜の夢ツアーは終了したらしい。

つまり、理亜が目覚めたっていうことで――――つて。

今の悲鳴は、まさか!!?

「り、理亜!!?」

俺はすぐさま部屋を飛び出し、理亜の部屋の前まで行って部屋のドアを開けようとした。

「理亜、どうした!!?」

だが鍵がかかっているのか、ガチャガチャと鳴るだけでドアは開かない。

「理亜っ！」

部屋のドアをドンドン、と強く叩くが返事はない。

俺は部屋の中にいるであろう理亜に向けて叫ぶ。

ドアを叩きながらも、自分自身心臓が早鐘を打っているのが解る。

崩壊した街並み。

その瓦礫の上に倒れていたのは間違いない、俺だ。

そして理亜はそれを『予兆の魔女』の力で見てしまった。

つまり、俺は——死ぬかもしれないんだ。

近い将来、高い確率で！

すでに何度か死んだことのある身だが、あんなものを見せられたら冷静ではいられない。

い。

俺は——もうすぐ死ぬのか。

「……おにい、ちゃんっ？」

と、そんなことを考えていた——その時だった。

理亜の隣の部屋。

昔は客間として使われていたその部屋から出てきたのは、パジャマ姿の俺のもう一人

の妹、遠山金女^{かなめ}だった。女優だった母親の遺伝子を受け継いでいるせいか、前世で最後に見た時よりも急成長して、かなりの美人さんになっている。

最近成長著しいとある部分なんか特に。一之江やアリアが見たら絶望しそうな程だ。理亜が買ってきた女物のパジャマを着ているがそのパジャマは、悪い夢でも見たのか、汗でびっしょりと湿っていた。汗で濡れたパジャマからは下着が透けて見えそうで……って、何考えてるんだ俺は!!?

雑念を振り解き、かなめをよく見れば、その顔色も青白く、目元にはクマが出来ていた。

「……どうしたの?」

「いや、どうしたの何も。お前こそどうしたんだ?」

顔色悪いぞ」

「あはは、ちよつと寝付けなくて。大丈夫、横になれば平気だから。

私のことより……今はリアちゃんを見てあげて」

かなめが自分のことより、理亜の心配をしている、だと!!?

俺に異性が近寄るだけであつて人殺しをしようとしていたあのかなめが!

人は成長するものだな。

身体だけでなく、心も。

お兄ちゃん、嬉しいぞ。かなめよ。

「……なんか、凄く失礼な事を言われた気がする。非合理的！」

かなめにジト目をされてしまった。

と、そんなことをしていると。

「……兄さん？」

カチャ、と鍵が外される音が聞こえ、ドアが開かれる。

中からパジャマ姿の理亜が赤い目をして現れた。

「理亜、悲鳴が……」

と言いかけたところで、理亜は俺の体に抱きついてきた。

「り、理亜？」

ぎゅううううう、と背中に回された手が力強く俺を抱き締める。俺の胸に思いつきり顔を押し付けたまま、理亜はぐりぐりと頬を当てる。俺の感触を確かめるみたいに。

「兄さん……」

もう、絶対に離さない。

そういうかのように、力強く抱き締めてくる。

理亜がぎゅううう、と抱き締めるたびに彼女の感触が伝わってくるのだが。

「んもう、お兄ちゃん、デレデレし過ぎ……でも、しょうがないなあ。今だけ貸してあげ

る。

それじゃ、私は寝るから。また、ね？ お兄ちゃん」

かなめはチラッと理亜の顔を伺うように覗き込むと、自分の部屋に入っていった。

バタンと、部屋のドアが閉まり、廊下に残された俺と理亜。

泣きじやくる妹のような女の子と二人きり。

この状況—— どうしろと？

「兄さん……」

真つ赤な目で俺を見つめる理亜。

彼女の顔を見て。俺は『ああ、そういうことかあ』と理解する。

理亜が見た『悪夢』の内容。

彼女は、俺が死ぬ夢を見たのだ。

しかも—— それはただの夢ではなく。アリスの能力である『予兆』として。

「兄さん、私……嫌なんです」

搾り出すかのように、理亜は声を出しているがその声にはいつものクールさが無くなっていた。

切なそうな、苦しそうな。震えた声が聞こえて俺の胸を打つ。

あんなに怖い目に遭っている時でさえ落ち着いていた理亜が、今はすっかり弱い女

の子のようになっていて。

「嫌なんです。私、兄さんが死ぬの。だから……だから……」

俺の為に『主人公』になってくれた理亜の。

『物語の主人公になってみたいか？』

もし、黒い携帯電話を受け取るだけで、物語の『主人公』になれるとしたら

——受け取るか？』

俺との日常の為に戦うことを決意してくれた理亜の。

『それはきつと、特別なことが起きるプロローグ。』

だけど、俺、遠山金次は主人公になんか、なりたくない。

だって、面倒事に巻き込まれるだけだけだぜ？

したくもないコード探しをさせられて。戦いたくもないのに、戦わされる。

それは面倒で、大変で、危険なことしか起きない日常と掛け離れた厄介事だ！」

それは痛いくらいに激しい、想いだった。

『だけど、俺、遠山金次は——彼女達の為になら、この身を危険に晒してやろうと思う。』

おそらく、世界中の男達……世界中の『主人公』と同じように——！』
そう思っている俺だが……。

「お願いだから、もう戦うのを止めて下さい」

今の俺には、泣きじゃくる理亜の背中を静かに抱き締めることしか出来なかった。

第2章 予兆の魔女

第十話。デート・ア・ミズエ 前編

本日の天気は晴天。

昨夜の雨が嘘のように、駆け抜ける爽やかな風、心地よいお日様の光。それらを感じながら俺は月隠駅西口にある時計塔の真下にいる。

通りすがりの人々が楽しそうに笑いあいながら歩く姿や腕を組む男女の姿を見て思う。

せつかくの休みに、男女で出かけるのはそんなに良いことなのか、と。

しかし、今の俺を他人が見たらデートの待ち合わせをしている奴とか思われてるよな。

一之江とはそんな関係じゃないのだが……やはりデートっぽいよなー。なんで、俺がそんなことを考えているかと言うと。

これから一之江のショッピングに同行しないとならんのだ。

事の始まりは理亜を寝かしつけた後。

一之江に連絡を取った事から始まった。

「あー、もしもし、俺だが」

『もしもし私よ。実は寝ていたの。だから死ね』

「いきなり物騒な返事をするな！」

『なんですか。私の睡眠を妨げるほどの用件ですか？　もし、大したことのない用件

だった場合は、電話から貴方の耳にところてんを流しこみます』

「地味に嫌な嫌がらせだな、それは」

『そして、貴方は〃ところてんワンの百物語〃に』

「ならないからな!!?」

『ちよつとワンコっぽくって可愛いじゃないですか。今の貴方より可愛げがありますよ

?　どうですか是非』

「是非じゃねえ!　ランチに誘うみたいなノリで気軽に誘うな!」

『全くもう、賑やかですね。ふー』

「賑やかにしたのはお前だろう?」

……まあ、いい。実は相談があるんだが……」

『お金なら……トサンで貸しますよ?』

「お前の実家は闇金か!!?」

「むう……トサンでは不満ですか。ならトゴでも」

10日で5割とか、どこの闇ウシジマくん金だよ！

「何で相談事が金銭絡みだと思われてるんだ!?？」

『金欠だろうなー、と』

ああ、金欠だよ。

前の世界なら出てたベレッタ社からの奨学金とかもないから、金欠だ。

主にロア関連でな。

「確かに金欠だが、内容はそっちじゃない」

『あー、なるほど。なんとなく解りました。』

北140 西80の辺りですよ。そこに『しるし』があります』

「何の話だ？」

『ん？ もしかしてサイズが違うバージョンですか？ そしたら北70の西40で

す』

「……もしかしなくても何かのネタバレだよな、それ」

『それでは頑張つて下さいね。ふあー。おやすみなさい』

「ちよ、ちよつと待て！」

『なんですか、まだ解らないんですか？ 攻略サイトを見て下さいよ』

「ゲームのネタバレじゃねえよ！ 何でこのタイミングでゲーム攻略の相談しないと

いけないんだよ!!?」

『好きかなあ、と思いまして』

「まあ、嫌いじゃないが……って、それはともかく。深刻な悩みがあるんだ」

『ああ、髪の毛ですか?』

「ハゲてねえよ!!?」 もっと深刻な悩みがあるだろう!!?」

『私は私の睡眠以上に深刻なものなどありません』

「いい切りやがったな、コイツ……」

『ですが……ふむ。お昼も結構過ぎた時間のようですね。そろそろ起きてもいいでしょう。』

ふあーあ……で、何ですか?』

「だから相談に乗って欲しいんだが……」

『貴方の相談相手はキリカさんでは?』

「そ、そうかもしれないが、キリカはまだ本調子じゃないからな」

『まあ、それもそうですね。仕方ありません。休日の午後という貴重な時間を貴方に割いてあげるのも、ごくたまにはいいのかもしれないね』

「お、ありがとうな」

『どうせ妹関連でしょう?』

面倒なので今すぐ月隠駅西口、時計塔広場に来てくださ

い。

「本日はシヨッピングと外食の予定だったので、それに付き合うのならいいですよ」
「あー、そうか。悪いな」

俺の都合で一之江の予定を変えるのは悪いと思い、そう返事すると。

『さあ、私達の戦争を始めましょう！』

一之江はそう言い放ち電話を切った。

「お待ちせしました」

「いや、俺も今来たところ……え？」

待ち合わせをした少女の声がしたので、そちらを振り返ってみると。そこには愛らしい、清楚でお洒落な私服に身を包んだ一之江がいた。

普段、蒼青学園の制服姿しか見たことがなかったせい、可憐で優雅なその立ち振る舞いとそのファッションサンスの高さに驚いてしまう。

清楚な私服が一之江には似合うと普段から思っていたが、まさかこれほどとは……。

そんな内心を感じていると、一之江は。

「どうしました。私の私服姿があまりに美しくて言葉を失ったみたいな顔をして」

まるで、人の心が読めるかのように、核心を突いてくる。

「つて、なんで解んだよ!?」

「貴方の思っていることくらい、解るといつも言っているではありませんか。ほら、ボケた顔しないで、とつとと行きますよ」

俺に背を向けるようにして、一之江はスタスタと先に歩き始めてしまう。

一之江の後ろ手にはポシエットが握られていて、それもまた可愛いらしくて、普段、殺伐とした世界を生きる一之江に……年相応なお洒落好きな面があることが解ってなんだか安心してしまった。

「貴方もそれなりの格好をしていますね」

「まあ、それなりには」

「大変いい心がけです」

本当はどんな服を着ればいいか、よく解んかったので。今朝まで着ていた服をそのまま着てくるつもりだったんだが、朝風呂に入って着替えようとしたら、今まで着ていた服はリサに洗われていて。この服が用意されていたから着ただけだ。

メイドがいると、こういう時便利だよな。

「で、まずはどこに行くんだ?」

「百貨店のブティックからです」

先に行く一之江の後を追いかけて、その横に並ぶ。

途端、いい香りが漂ってくるのが解る。

「なんかいい香りがするな」

鼻が効く俺には、それが香水の匂いだとすぐに解った。

「会って早々、女の子の匂いを嗅ぐとか流石の変態ですね」

「そんなんじゃないやねえよ!?!」

プイツと、顔を背けてスタスタと一之江は先を歩いて行ってしまうが。

あいつ、普段から外出の時はこんな感じなのか？

それとも、俺と出かけるから……。

「つて、流石にそれはないな」

一之江に限ってそんなはずはない。

理子が言うところの。

永久凍土少女。いや、一之江の場合。ナイフで刺すからツングサだな。

ツングサグサはあっても、ツングサグサはあっても、ツングサグサはない。

一之江と過ごした中で解ったが一之江にはデレはない。
デレないツングサ少女。

それが一之江だ。

そんな彼女が俺の為にわざわざお洒落や化粧をするはずがない。

そう結論付けて俺は彼女の後を追った。

百貨店に並んで入ると、一之江はまるで俺なんかいないかのように自由気儘に店内を歩き回り。気になる店があれば立ち止まり。ウィンドウを眺めていると思ったら、別の店に入って行ったりとその行動は先が読めない。

だけど、服を見ている時の一之江の横顔や、小物を物色している時の楽しそうな表情なんかを見ていると出かけて良かったと思ってしまう。

あつちのモードじゃないのに、そんな風に思ってしまうなんて……。

俺は……一之江の事が……。

「モンジ」

「っ!? ……なんだ?」

一之江に突然名前を呼ばれてテンパってしまう。

まさか、今のも読まれたのか？

「……不埒な事を一人でムフフとか、考え込んでいるのは構いませんが、そんなことよ
り」

「不埒な事なんて考え込んでないからな！」

……で、どうした？」

さらつとモンジ呼ばわりされてるが、もういい。突っ込むのも疲れた。

「ちよつと質問なんですが」

「ん？」

「この汚れを知らない乙女のような白いワンピースと、返り血に染まった戦乙女のような赤いワンピース。どっちがいいですか？」

一之江は両手に色違えますワンピースを持って俺に尋ねてきた。その行為そのものはまるでデート中のカップルがやりそうな事で、俺達くらいの年齢の男女がしてもおかしくはないのだが、いかんせん表現がおかしくないか？

「返り血ってお前な」

「貴方の血管を切り裂いた時に目立たないかな、と思ひまして」

「やっぱり俺のかよー！」

「ですが、ほら。白いワンピースが貴方の血の色で染まるのもそれはそれで」

「どれがどれだ!?」　　つてか結局俺はグツサリされんのかよ!」

「まあ、それが貴方ですし」

「さらにと嫌な存在認定するな!」

「まあ、軽く人間辞めてる貴方なら素手でナイフを受け止めるなり。相手がナイフを抜く前に倒すなり出来るのでいいではないですか。それはそうと。えーと」

一之江は何故か迷うように斜め上を見て。

「……どっちが私に似合うと思いますか?」

いい辛そうにそう口にした。

えっと。

なんだこれ?

これはどういった状況なんだ。

やっぱりデート的なアレだったのか?

実は一之江は俺のことを……みたいなの?

いや、待て。早まるな!

これはアレだ。

これは偽デレ。女が標的を仕留める常套手段。ハニートラップという奴だ。

騙されるな。

武債の弱点を忘れるな。

金、毒、女。

それらは武債が堕ち易い弱点だ。

だから騙されるな！

「ほら、ニセデレしているのですから早く乗かって下さい」

「やっぱりニセデレかよー！」

ふう、危なかった。早まらなくて良かったぜ。

「当たり前じゃないですか。今はせっかくこういう状況だから試しにそれっぽいことを

しているだけで、別に、貴方ノコトナンカ！」

「何で棒読みな上にカタゴトなんだ！」

どうせ言うならそれっぽく言えよな」

「嫌ですよめんどくさい」

心底面倒くさそうに言う一之江。

こういう反応を見ると、安心する。

これでこそ一之江だな。

「それで……どっち、ですか？」

手に持ったままの白いワンピースと赤いワンピースを見せてくる。そんなに俺を切り裂きたいのか!

まあ、切り裂く云々は冗談だとして……冗談だよな? 冗談だったとして。

どっちがいいかと言われても、女性の服なんてよく解らん。なので。

「どっちでもいいさ。お前はお前だろ?」

お得意の生返事を返す。

「それより、一之江。」

今日はありがとうな。わざわざ休みの日に会ってくれて」

からの……話題逸らし。

「貴方から感謝の言葉を聞かされても気持ち悪いだけです。本当に貴方は真性のバカ

なのです、全く……」

プイッと顔を逸らす一之江。

真性のバカ。

初めて会った時から言われてるな、それ。

「何笑ってるんですか。気持ち悪いです。デュフフとかそんな風に笑ってないで、次行きますよ」

「デユフフなんて笑つてないよな!?!?」

俺の抗議をスルーして一之江はスタスタ先を歩いてしまう。
全く、本当に。何を考えてるのか解らん奴だな。

「ほら、早く来なさい」

一之江の後を追うと、彼女は様々な店の中に入って、出たりを繰り返していた。

「歩くの遅いですよ、モンジ。次の店はお気に入りなんですから早く来なさい」

へいへい。今行きますよ。

しかし、次行くと言うが何件回る気だ?

女の買い物は長いとは聞くが……まさか、本当だったとは。

もうどこでもいいから早く入ろうぜ。

そう思った俺の視界に、猫のマークのカフェが目に入る。

猫の図柄のマーク……どこかで見たことがあるような気がする店なのだが……姉妹店とかだろうか。その店の隣はセレクトショップとなっていて、店内を覗くと森をイメージしてるのか、棚やケースが全部木製だった。

疲れたし、俺は隣のカフェでひと休みするか。

そう思ったその時。

「ほら、あそこにある猫のマークのカフェ。あのカフェの隣にあるこの店は『シャトン
b b』^{ペー}というのですが。最近、この街に出来た私のお気に入りのお店の一つです」

一之江はそう言うやいなや、店の中を我が物顔でスタスタ歩いて行ってしまふ。

見慣れているのか、店員さんも「いらつしやーい、今日は新作入荷してますよ」などと和かに接客してくる。

「ほら、モンジも来なさい」

店員さんは「おー？今日はカレシさん連れですか？」などと、一之江に尋ねるが。

「いいえ、ただの下僕です」

下僕ってお前な。

「ふふつ、仲がよろしいのですね？ お兄さん、頑張つて下さいね。」

今日は彼女さんにどーん、とプレゼントを送つて好感度を上げましょう！」

いや、違うんですつて。

「そうですね、たまには貢がせてやりましょう」

一之江は店員さんの言葉でノリノリになる。

悪ノリに直ぐに乗る辺り、一之江は一之江だな。

「……なんだかとても失礼な事を考えられた気がします。」

殺しますよ?」

「一之江様は清楚で優しく、大変可憐なお人です!」

……やっぱり心読めるんだな。

「まあ、いいでしょう。」

店員さん、今日はアノ日ですよね?」

……アノ日?

「はい、本日は『シャトンbb月隠店&シャトンカフェ月隠店合同イベント☆シャトン・コール☆

優勝者にはお買い上げの商品全額無料引き換えキャンペーン! モフモフナデナ

デにやんにやにやー』……の日となっております」

……どこから突っ込めばいいんだ。

というか、そのイベント。

よく思い出したら大阪でレキに服買ってやった店がやっていたイベントそのまんまじゃねえかー!!? というかまんま系列店じゃねえかー!!?」

何でこの世界にあるんだよ!!?」

「15時からの開始となっております」

店員さんに言われ時計を確認すると、後30分ほどある。

「参加しますよ、モンジ」

一之江の目が怖い。マジだ。

標的を狙う狩人の目になってる。

イベントまで少し時間があるので、その間に買いたい商品を選ぶ一之江と別れ、店内を物色した後、隣接するカフェでコーヒーを飲むことにしたのだが……何でこうなる？

「いかがですか？」

さっきの店員に連れて行かれた一之江が戻ってきたので振り返ると。

コーヒーを飲んでいた俺は「ぷはぁーっ」と嘔き出してしまった。

というのもそれは――

よ、幼稚園児の、制服……！

それを着こなす。

ミズエちゃん5歳♡が目の前に立っていたからだ！

「な、なんだよそれー」

紙ナプキンで口周りを拭きながら、俺はイスごと後ずさる。

黄色い園児帽を被り、水色スモックを着て大人しく立っている一之江は、ご丁寧に胸に「さくらぐみ ミズエ」という名札を付けている。

い、いや、それより何より……おみ足が、凄い事になってるぞ。

丈だけ園児服なのか、驚愕のミニつぷりだ？股下1cmを切ってる……絶対領域スカートの中が見えてるし。

な、なんてもん着てんだよ!!?

いかん、ヒスる!!?

動揺した俺の横で店員さんが。

「お客様大変お似合いですよー!」

大変お似合いですよ……じゃねーよ!

地雷だよ、誤爆だよ。

放送事故だよ。

世に出しちゃいけないもんだよ!

「……とりあえず、モンジ殺す」

「何故!!?」

「殺す」

「すまん！」

殺されるのは勘弁だ。

つていうか、お前もホイホイ着るなよ、そんなもん。

「……まさか買うのか、それ」

「……」

「……」

「……」

「……え、マジで!?？」

この間って……まさか!??

「冗談ですよ」

ダ、ダヨナー。

本当に買う気ならドン引きもんだ。

「小さい頃着れなかったので、着てみたかっただけです」

ああ、一之江の家は金持ちだからな。

きつと海外暮らしとか、家庭教師が付いたりとかで、幼稚園に行つてなかつたんだな。

「本命はコチラです」

一之江が指パッチンすると。

執事服の男が現れ、一之江に服を渡す。

……どこにいたんだ？

突然現れる黒服の男とか、なんか都市伝説っぽいな。

服を渡された一之江は試着室の中に入っけいき。

シャラツ、とカーテンが開かれた向こうから、白いミユールの足が出てきた。

スタスタ、と店内を歩いてきた一之江に……。

店員、シャトン・カフェの客、俺、皆が視線を釘付けにした。

薄化粧され、梳い直した髪、白を基調としたノースリーブのワンピースを着た一之江

は

(き、キレイ……だな)

素直に、そう思ってしまう。

そもそも一之江の私服姿を見ること自体が新鮮なんだが。

それを差し引いても、やはり一之江は美少女だ。

元々人形のような端正な顔立ちに、清楚な服の組み合わせはよく似合う。

「どうです？ 似合いますか？」

微笑んだ一之江の顔はとても綺麗だった。

一之江に確認すると、やはりシャトン・コールとは前にレキと体験したイベントで、カフェの中にいる猫を自分達のテーブルに何匹呼び寄せられるかを競うものだった。制限時間は1分。席を立ったら失格。手で掴むのもNG。

参加資格はカップルの男女。

カップルに間違わられるのは死ぬほど恥ずかしいのだが、背に腹は代えられない。

誤解されてる事を逆手に取って、カップルの振りで商品を無料でGETしてやろう。

『参加カップル名。疾風・瑞江』……と俺は震える手で黒板に名前を書く。

イベント参加者の名前を書く黒板を見る度に恥ずかしくなるのだが……。

一之江は俺の向かい側で平然と紅茶を飲んでいる。

優雅に、気品良く。

コイツには恥ずかしさとか、羞恥心はないのだろうか？

(しかし……猫を呼び寄せる、か……)

勝算は低いな。俺、動物に好かれないし。

昔、青海で迷子の子猫を見つけた時も爪で引っ搔かかれたくらいだし。

「はい、準備はよろしいでしょうか？」

はい、始め！」

そんな俺の心境を他所に、カフェの店員さんが開始の宣言をしてしまう。

店内にいた他のお客さんは、一齐に「おいで、おいで」しているが。

猫は寄り付かない。

それもそのはず。

猫は警戒心の強い生き物だ。

店内をウロウロするだけでは、寄り付かない。

「ほ、ほら、ここにおいでー」

俺も近くにいた猫に手招きするが―― フンツと、そっぽを向かれてしまう。

やはり、簡単にはいかないか。

「動物を従わせるレキやりサもないしな……何とかしないと」

代金を支払う羽目になる。

さつき、店内を見て回ったが、置かれている商品は全て諭吉さんクラスを最低でも数枚支払わないといけない値段だった。

見かけとは違い高級店のよう。

庶民の俺では払えない。

何とかしないと財布がヤバイ……。

と、焦る俺の横にしゃがみ込み奴がいた。

一之江だ。

一之江は――猫に一度視線を向けると、猫達とは別の方に背を向けて。

一言。

「にゃーん」

と、言った。

……

……

……に……

……『にゃーん』……だ、と……？

聞き間違いじゃない。あの一之江が間違いなくそう言った。

絶対に言わないであろう言葉・ベスト3に入りそうな台詞の言葉。

それを言った。

つていうか……何でにゃーん？

鳴き真似のつもりか？

そんなことで猫が近寄るはずは……あれ？

て、店内の猫達が近寄って来ちやったよ！

「なッ……？」

何故だ？

「当然です。猫すらも振り向かせることが出来る。

それが私『月隠のメリーズドール』ですから」

あー……これはあれだ。

さっきの鳴き真似。

きつとあれは……「来なさい。来ないとひどいですよ。来ないと振り向かせて殺しま

すよ？」的なものだったんだろうな。

一之江、怖い奴だな。

第十一話。デート・ア・ミズエ 中編

2010年6月19日午後6時。

陽も暮れてきた頃には、もう俺の両手は買い物袋で埋まっていた。

あの後、ぶつちぎりで猫を呼び寄せたせいか、優勝した一之江は沢山買い込みまくり。さらに別の店でも買い込んだ一之江の荷物によって。

俺の両手は買い物袋で一杯になっていた。

ヒロインとの買い物⇨荷物持ち。

それは主人公のお約束。

つてな、わけで。俺もそのお約束通り、一之江に荷物持ち扱いされているわけで。

「もう少しですよ。我が家の車にそれを運んだら貴方はお役ご免です」

「いや、俺の用事は終わってないんだが」

「？」

「何も言わずに不思議そうな顔をするな！」

「何も言わなくてもツツコミが出来るなんて器用な男ですね」

くそつ、天然無自覚なボケの達人め！

ツツコミを入れたくないのに、ツツコミを入れたくなる。

そんな微妙なラインを突いてきやがる。

「到着したようですね。荷物持ち御苦労様でした」

気づけば目の前の道路脇に見覚えのある黒い車が停車していた。

「ああ」

「おかえりなさいませ。お荷物をお預かり致します」

「あ、どうも」

車から出てきた運転手さん、ち○まるこちゃんに出てきそうなに爺やさんに手荷物を渡すと、爺やさんは開けたトランクの中に手慣れた感じに丁寧に且つ素早く荷物を並べていった。

「こちらはよろしいので？」

俺の手に握られた紙袋を指す爺やさん。

「あつ、はい。これは俺のもんなんで」

シャトンbで買ったそれは、後で必要になる物だから手に持ったままにいる。

「さようですか、きつと御喜びになりますよ」

「？」

意味が解らないのか、キョトンとする一之江。

「べ、別にそういうんじゃないですよ！ それより速く荷物をしまつて下さい」

普段、人に使われることが多いせいか、人を使うのってなんだか疲れるな。なんて思ってしまう。

「久しぶりに買い込みました。ちよつぴりスッキリしましたね」

「なんだ、一之江の趣味はショッピングだったのか？」

「ウインドウショッピングです。今日は少し奮発しました」

「へえ、そうなのか」

「ちよつとストレスも溜まりまくりでしたからね。引き分けたり負けたり」

「なんだ、一之江のストレス解消法はウインドウショッピングなのか。」

「なら、これからも俺と一緒に行ってやろうか？」

「え？」

「つきあつてやるよ」

一之江のストレスが溜まりに溜まつたら俺の身が危ないからな。

こんなんで刺突される回数が減るなら、喜んで買い物につきあつてやる。

そんな意味で言ったのだが、あれ？

なんで一之江は顔を赤くしてるんだ？

風邪か？

心配になって一之江の顔を覗き込もうとしたが。

一之江は何故か俺から顔を逸らすと。

「寝言は寝てから言つて下さい」

ただ一言呟いた。

「あれ。ダメだったか？」

つてきり、今後も荷物持ちやらされると思つたんだが。

「……本当に、貴方は真性のバカなんですから」

小さな声で何かを呟いたが、聞き取れなかった。

読心をやろうと思えば出来たが……それは野暮だからな。

だから話題を変えることにした。

「それにしても一之江は負けず嫌いだよな。まあ、あの戦いに負けたのは俺が足を引つ張ったから負けたり引き分けたりしたせいだけだ」

「私くらい超最強美少女になると、貴方が足を引つ張つたくらいで本来、負けたり引き分けたりしないんです。なので、これは私の慢心が生んだ結果だつたと思ひ込むことにしました」

本当、自分自身に対して負けず嫌いな奴だよな。勝利への弛まない努力とか、反省し

て次へを見据えるその行動力とか。本当、そういうところはアリアにそっくりだよ。

『お嬢様』な一面とか。『幼児体型』とか。『切れるとすぐに手が出る』とか。

そういつた外面もだが。

内面もそっくりだよな。本当に。

俺はお前に出会えてよかったよ。

そして、そんなお前のような『最強』を『物語』にしているなら『最強』なお前を超える『物語』にならないといけないよな。

いずれ、『離れ離れになる』にしろ。

……なんとなく。なんとなく予感がするんだ。

アリサに『もうすぐ死ぬ』なんて告げられたからかもしれない。

だから、こんなことを考えるのかもしれない。

俺はもうすぐお前の前からいなくなる。

そんな予感が。

「……モンジ?」

「あつ、悪い。なんだ?」

「いえ、ここから少し行った先に美味しいハンバーグ屋があるのですが……どうします

？」

ハンバーグ屋か。

そういや、最近ハンバーグ食べてないなあ。

前世ではよくハンバーグ弁当食べてただけだなあ、コンビニの。

しかし、荷物持ちのお礼でハンバーグって……。

子供じゃないんだが……。

「お供させていただきます」

「ええ。荷物持ちのご褒美に、金持ちの私が下々に恵んであげましょう」

え？　子供扱いされるのは嫌じゃないのかって？

せつかくの一之江の好意を断るのも悪いだろう？

決してハンバーグに心惹かれたとか、割り勘じゃなく一之江の奢りで食べれるから、

とかそんな理由じゃない。ないったらない！

「こつちです」

一之江の言葉にハツと我に返る。誰に説明してただ俺は？

一之江を見るとスタスタと歩き始めてしまう。どうやら移動は徒歩のようだ。身軽

になった俺は、先を歩く一之江の背を追って駆け出した。

境川に面した川沿いの通り道を一之江と共に静かに歩く。

ジョギングをする人、犬の散歩をする人、川沿いで野球に興じる子供達。とても長閑で和やかで、平穏な風景。

つい、朝方まで戦いに身を投じていたのが嘘のようだ。

「いい雰囲気の中でありますが、そろそろ暇つぶしに相談事とやらを聞いてあげてもいいですよ」

「……なんで偉そうなんだよ。まあ、頑張る気力が湧いたからいいけどさ」

「私本気をだせば、メンタルケアすらも出来るのです。キリカさんにお任せしてるのは、私が面倒くさいからですよ」

そんなところでキリカに対抗するなよな。

なんて思いつつ、せっかく相談に乗ってくれるというのだ、正直に話そうと思う。

「何、大したことじゃないんだが……俺は」

「やっぱり戦いたくない、とかぬかしたら、そろそろちよん切る予定です」

「いや、戦う覚悟はあるんだ。俺は彼女達を俺の物語にする。それは間違いない」

「おや。今朝よりもハッキリ言うんですね?」

「ああ。あいつらが苦しんでる姿を見てしまったからな。あいつらもきつと、俺が苦し

むのが嫌だから頑張る　　ってるんだろうし。そんな彼女達がこれ以上苦しむ姿は見たくない」

俺が死ぬから死なせないように頑張る。

そんな苦しみを彼女達だけにさせたままで、自分だけ平穩に暮らす？

そんなこと……出来るはずないだろうが！

「どんな理由があろうが、あいつらが泣くのは許せないんだ。……大事な妹だからな」

そして、それは俺の傲慢でもある。

一文字の居場所を俺は意図せずとはいえ、奪っている。

俺が今受けている、感じているこの苦しみや悩みは本来なら一文字が受けるはずのもの。

理亜が助けたい、死なせたたくない兄は俺ではなく、一文字疾風なんだから。

俺は理亜と一文字が本来語り合う時に、その機会を奪ってしまったのだから。

だから……これは俺の我儘だ。

「まあ、解らなくもありません。私にも双子の妹がいるので」

「ああ、そーいや、前に言ってたな」

『優都は……妹は、私が守る』。

一之江に襲われた時。あの時、確かにそう言っていた。

それにしても、一之江の妹かあ。どんな妹なんだろうな？

双子って事は外見は似てるのだろうけど、まさか中身まで似てるとかはないよな？

一之江のようなドS少女が二人もいるとか……それはそれでホラーな都市伝説になりそうだ。

いや、反対にすごく優しい子っていう可能性も……一之江の外見で優しくて健気でいい子。

……俺の知り合いでいうと……白雪のような感じで。

……

……

……あれ？ それはそれで心配になってきたぞ。

大丈夫か、月隠市？

などと隣町の心配していると。

「貴方には会わせませんよ。ハーレムの一員にされたらたまりませんから」

「ハーレムってお前なあ……」

俺そんなもんがいつハーレムを作った！

ヒステリアモード
病 気を抱える俺そんなもん築くわけないだろうが！

「妹には口アも何も知らないままでいて欲しいので。なのでまあ……貴方と妹さんの気持ちは、少なからず解らなくもない、みたいな気持ちでいます」

——ああ。そうか。だから今日は、一緒に外出してくれたのか。

面倒くさがり屋な一之江が、一緒に外出してくれた理由が解らなかつたが。

身内を巻き込みたくない気持ち。それが解るから俺の相談に乗ってくれたんだな。

「だからこそ、理亜さんの気持ちも解らなくはありません。結局、向こうは貴方に戦って欲しくないのです。力づくでも。きつと、そこには強い覚悟があるわけですよ」

このままだと、俺が『死ぬ』。そんな『予兆』を見せられた理亜。

だからこそ、俺に戦わせたくないのだろう。俺を死なせない為に。

「だから、貴方自身ももつと強い覚悟を見せないといけないんです。単に彼女を巻き込みたくない、では弱い。貴方自身が何をしたいのか。————苦しみ、もがき、辛

さがあるけど乗り越える。そんな道を示して、その覚悟を見せないことには、理亜さんは納得しないでしよう」

一之江は俺を見つめる。

俺は負けじと一之江を見つめ返す。

覚悟。そんなことは解ってるんだ。本当の『主人公』になる為の、守られるだけじゃない、何があるうと仲間を信じて、仲間を守り抜く。そんな覚悟なら出来ている。

だが……。

「だけどさ。どんな苦しみが建設的な覚悟に繋がるんだ？」

「建設的な覚悟。面白い言葉ですな」

俺の言葉に一之江は小さな笑みを浮かべる。

あれ？　笑うところか、ここ。

「例えばモンジ。貴方は私のロア能力に消えて欲しいですか？」

「一之江のロアが消える？」

ありえんだろう。そんなこと。

「そうすれば、私はただの美少女金持ち女子高生に戻ります。危ない目に遭ったり、痛い思いや苦しさを味わうこともありませんし、誰かを殺し続けなければいけない、なんて罪を犯し続けることもなくなります」

「なるほどなあ……」

一之江がただの人間に戻ったらどうなるか、か……。ごく普通の女子高生になったこいつ、というのがまるで想像出来ない。ああ、つまり。

「一之江は能力が無くなっても、戦いを止めたりしないだろ？」

「どうしてそう思いますか？」

「一之江がどうして『メリーズドール』のロアになったのかは知らないけどさ。でも、一

之江がその物語をとてても大事にしているっていうのは知ってるからな。すつげえ誇りに思っていることだつて解つてる。だから、お前はその力が無くなつたつて『メリーズドール』のまま、戦い続けようとするだろう?」

「その通り。解つているようで何よりです」

俺は『百物語』の能力を使った時に、コイツの物語に触れた。

あの時、そこに描かれていたのは、強く、気高い『メリーズドール』だった。

復讐相手を探している哀れで悲しい人形なんかじゃない。

あくまで自分の意志で相手を殺すまで追い詰める、誇り高い殺人鬼。その『対象の抹殺』こそが『月隠のメリーズドール』の真髄なのだから。

一之江はそれを貫き通す、その覚悟を持っていた。

「格好いいな、なんて思っちゃったんだよ。……不覚にもな。一之江の物語。いや、殺人鬼を格好いいなんて思っちゃいけないんだろうけどさ。でも、それつて一之江は敢えて『最強で最恐』の存在になることで、悪さする口アを止めようとしているつてもあるんだらう?」

ヒステリアモードの時に思い浮かべていた事をここで聞いてみる。

「そこまで気づかかかっていると恥ずかしいのは確かですが。私の物語に触れた貴方なら仕方ないのかもしれないね。くそう」

一之江は俺の言葉に小さく悪態を吐く。

「私にそういう想いがあるように。理亜さんにも譲れない想いがあるように。モンジ、貴方にも貴方にしか大事に出来ない我儘な強い想いがあるはずですよ。それをぶつけてみることでいい」

「そうか。そうだな。」

俺にも俺の想いがある。

絶対に譲りたくない我儘な強い想いがあるんだ。

「……よし」

「それで駄目だったらまあ……禁断な妹とのあれこれにでも走って説得して下さい」

「禁断のあれこれって……おい」

「ん？ ああ、でも従姉妹なんでしたっけ。だったら禁断でもなんでもないもので、ただのいちやつきになりますね。そんなものに価値はないのでやっぱり今のはなしで」

「価値はないのか？」

「当たり前なことをして当たり前前の結果しか出ませんよ。ものごと、危ない橋を渡ろうとする人の方が革新的な結果を生むものです」

「そういうものなんだな」

意外と深い事を一之江は語ってる気がするが。よくよく考えてみると、この件には実

妹のかなめも絡んでるから、危ない橋を渡ろうとしている俺は革新的な結果を生み出せるのか？

「まあ、買い物に付き合わせた分くらいは私も貴方の我儘に付き合いますよ。貴方には、どの『主人公』にも負けて貰うわけにはいきませんからね」

そんな風に語る一之江の顔はどこか赤くなっている気がした。

これはあれか？ 今が夕暮れ時だからか？

某有名検索エンジンに今の一之江をかけたら『もしかして・ツンデレでは？』と出てるのか？

「ま、一之江が絶対消えないように。俺も全力で『主人公』をやるからさ」

例え、俺は死ぬ未来が待っているとしても。あんなに血塗れになって倒れるにしても、きつと……背中だけは無事なんだと。今ならそう信じられるから。

背後にコイツがいるのなら、俺はどんなに怖い、強い存在にだって立ち向かえる。

「……信じてるからな。一之江」

「約束ですよ？」

『貴方を殺すのは私です。私だけが、貴方を殺していいのです。』

ですから、私に殺されるまで。貴方は生き延びて下さい』

そんな一之江の声が聞こえたような気がした。

「……つと、そうだ!?」 一之江、これ

俺は右手に持った紙袋を一之江に渡す。

「これは？」

「開けてみてくれ」

一之江は紙袋の中を開けると、その瞳が大きく見開きられた。

紙袋の中から出てきたのは指輪

がチェーンに繋がったネックレス

だ。

『月clair de luneの光』。

一之江が住む街。そして彼女のロアの名前にもある『月隠』にちなんで月をイメージしたそれを選んでみた。

シャトントbbの店頭に並んでいたそれは、月をイメージした指輪型のネックレス。

イベントが始まる前に店内を物色していた時に目に付いたもの。

それを俺は一之江へのプレゼントとして購入することにしたのだ。

もちろん、代金はイベントの優勝によって無料。

店内価格は……今の俺では手が出せないほどだ。

では、どうしてこんなものをプレゼントしようと思ったのか。

それは——俺の身の安全の為だ。

一之江のストレスが溜まるとそれは周りにいる人物
—— 主に俺に当たるか
らな。

一之江の精神的なストレスを緩和させ、俺に対する刺突行為を減らす目的と、日頃、世話になってるお札を兼ねて贈ってみた。

ジャンヌがいない今、女のストレスを緩和させる有効な手段が思い浮かばなかったから、物を与えて懐柔するという手段を取ってみた。古典的な方法だが、上手くいったみたいだな。

「……………も、モンジ。これは、一体?」

「そのまんまだ」

日頃の感謝を込めて渡した。それ以外に理由なんか無い。

「……………受け取っていいんですね?」

「ああ、受け取ってくれ」

「本当に受け取りますよ?」

「ああ、なんなら指輪をチェーンから外して指に付けてやろうか?」

見た感じ、一之江のサイズは……………アリアくらいだな。

他の指だと抜けちゃうな。

なら……………。

「左手の薬指にでも付けるか？」

「……っ!?？」

俺の言葉に一之江の体はビクツと震えた。

「ん? どうした?　なんで震えてんだ?」

「……貴方という人は、本当に……」

ん?　小さな声でよく聞こえないが。

なんでそんな情緒不穏になつてんだよ?

「……本当に、真性のバカ、なんですから」

そう言いながら、一之江は俺の右手を左手で掴む。

しつとりとしていてら気持ちいい、細くて繊細な手が俺の右手を包み込む。

「え、ど、どうした、え、な、なんだ?」

「……モンジ。」

今だけ、むちやくちや嫌々ですが、貴方を確実にレベルアップさせる呪いの呪文をかけてあげます」

「呪い?　いや、そんなのいらん」

一之江自身が呪いの人形なだけに、なんか嫌な予感がする。

どうせ、女運が悪くなるとか。

何かあるたびに背中を刺されるとか。
そんなもんだろ。

「い・い・か・ら、かけますよ？」

「……はい」

「私を消さないで下さいね。……金次」

ほそ、とはにかんだように呼ばれた俺の名前。

その名前を聞いた俺は……。

今更ながら一之江にも俺の正体が気づかれていたと、ようやく理解した。

第十二話。デート・ア・ミズエ 後編

「何故……どうして？」

いつ、知ったんだ？

「最初は解りませんでしたでしたが、貴方が普通の人間ではないと疑ったのはキリカさんと戦った時からです」

俺の疑問すら想定内といった感じで一之江は答える。

「あの時、貴方の様子が普通ではなかったので二重人格者かと疑いましたが……貴方の後ろを見守る内に貴方は別の人間……違う意思が宿った人間だと気付きました」

まさか、そんな頃から気付かれていたとは……迂闊だった。いや、これは想定内だな。完全に俺のミスだ。最初から解っていた事じゃねえかー。一之江は俺の心が読めるんだからな。

「そうか。で、どうする気だ？」

俺の正体をこのタイミングで明かすということは……。

「どうもしません。これまで通りに貴方は私の標的ですので」

「は……」

って、おい！

どうもしないのかよ!!?

「貴方がどこの誰だろうと、構いません。

変わるはずはありません。

だって……」

一之江はそれまで見せたことのない笑顔で俺に告げる。

「貴方を殺すのは……殺していいのは……私だけなんですから」

……一之江のそんな表情を見てしまった俺は、不覚にも。

不覚にも、可愛いなんて思ってしまった。

それから5秒後。

「さて、デレタイムは終了です」

「って、今のデレタイムなのかよ！」

「当たり前じゃないですかー、私が貴方にデレるはずがあるわけ……以下略」

「……どうせなら最期までツンデレしろよ」

「嫌ですよー、面倒くさい」

うん、これでこそ一之江だな。

「デレタイムは時給五百万円です」

「高っ!」

「滅多に見れない貴重な時間ですからね。これでも安いくらいです。続きを見たいなら五百万円で見れますよ。どうですか、是非?」

「気楽な感じに誘われても払えんぞ。普通の人には支払えん金額だからな」

「……うわあー。まだ『普通』の人感覚でいるんですか貴方は。『普通』の意味を辞書で調べる事をお勧めします」

どういう意味だ!

「俺はごくごく普通の平凡な高校生だ!」

「……普通の高校生は自分から普通なんて言いません。普通の高校生は呪いの人形に追いかけてられても抱きついたりしません。普通の高校生は……」

「すまん、勘弁してくれ!」

俺は即座に日本人伝統の奥義『DOG E Z A』を行った。

月隠駅の隣駅に近い辺りを歩く俺と一之江。

彼女お勧めのハンバーグ屋はもう少し距離があるとの事なので二人並んでゆっくり歩く。

隣を歩いていた俺はふと思いついた疑問を一之江に聞いてみる。

「そういえば『主人公』と『普通のロア』って何が違うんだ？」

「そういうのは『主人公』同士で会話して下さい。こう、バラっぼく」

バラの意味はよく解らんが、なんか嫌な響きだな。

そんなことを思いながら、一之江が指した先を見る。そこには……。

「あいつは……」

昨日、俺や一之江を襲った男の一人。氷澄ひずみが私服姿の女の子と歩いていた。

「なんだ、デートしてんのか？」

好き好んで女子と出かける奴の気持ちはよく解らん……と言いたいが、今の俺の状況も似たようなものなので声には出さないようにする。

「ですが、なんか見覚えのあるロリっ子ですね」

一之江の言葉が気になった俺は探偵科イんケスタで習った足音を立てない歩き方を実践し、近づ

いて二人の様子を見ることにする。

水澄はつまらなさそうな仏頂面で歩いてた。デートという雰囲気ではない。

しかし、隣を歩く少女は弾むような足取りで浮かれていた。

まるで対照的な二人の様子だ。

「あれは私服姿のラインさんのようですね」

「……マジかよ」

確かに、言われてみれば……髪型も服装もごくごく普通の健康的な女の子のものだから印象は違うが、よく見れば『境山のターボロリババ』こと、ラインだった。

「なんか声、かけづらくないか？」

雰囲気的に声をかけてはいけない気がする。

「ふむ……」

一之江は二人の様子をしげしげと見つめ少し考え込み。

「『ふふふ、ひーずみっ！ 今日हतつても楽しかったのうー』と、ラインのセリフを

勝手に捏造し始めた。

オイオイー一之江そんなこと……と思っていたら、一之江が近づいてきて、俺の耳元で囁いた。

何？ そんなことを言えだど？

かなり恥ずかしいんだが……って、解った。解ったから背中を刺すな！
 言えばいいんだろう？

すまん、氷澄。一之江の脅しには勝てん……。

『フン、デートくらいで浮かれるな、ライン』

『ああん、氷澄はつれないのう……昨夜はあんなに激しかったというのに……』

激しかった？ 何をやったんだ。いいのか氷澄、ラインは見た目的には犯罪だぞ。

『フツ、あれ以上の激しさを今晚も見せてやる……』

激しかったの意味はよく解らんが、一之江の言葉に乗つかてみた。

『ぼつ、夜の『音速境界』ライン・ザ・マツハも楽しみじやな、氷澄……』

『ふつ、俺の『厄災の眼』イーヴルアイはいっただってお前だけを見てるさ……』

見つめ合う二人。

そして、二人は……。

『氷澄……』

『ライン……！ ガバア！』

「何がガバアだ！」

ゴチン!!?

「痛てえ!」

氷澄の頭突きが炸裂した。

この痛み……これは、間違いない。遠山家に伝わる奥義だ。

「何故、お前がその技を使えるんだ?」

「ふん、キンゾーにやり方を習っただけだ。」

ハーフロアの俺ならば、人間離れしたあいつの技も少しは使えるからな」

「馬鹿な……ありえん!?」

何教えちゃってんのキンゾー。

いくら氷澄が人間離れした力を持つハーフロアだからって、そんな簡単に技教えたら駄目だろう。

「心配しなくても悪用なんかしない。

それに来るのはほんの一部だ。流石にマツハは出せんからな。

今は『秋水』を取得中だ」

「なんだそれなら安心……出来るかよ！」

『秋水』を教えるとか、何しちやっつてんの。あの馬鹿弟は!??

『秋水』?」

「なんだ、パートナーなのに知らんのか。キンゾーが言うには『余すことなく全体重を拳に乗せて放つ一撃』、それが『秋水』という技らしいぞ」

「そうですか。こんな感じですか?」

一之江が近づいて来たと思つた次の瞬間。

「かはっ……」

俺の体は5〜6m吹き飛んだ。

ちよ、ちよつと待て!

今のまさか……?」

「ふむ。初めて使いましたが、なかなか難しいですね。余すことなく、体重を乗せるのは……」

いやいや、いきなり出来るお前の方がおかしいからな!

「……俺の認識は甘かったようだな。キンゾーほど非常識な人間はいないと思つていたが、お前達ほどではなかったな」

「いやいや、一之江やキンゾーと同じ扱いにするな!

俺は普通の人間だから!」

「普通の人間は秋水をくらって平然と立ち上がらんぞ」

くつ、ラインの奴。こんな時に正論を言いやがって。

言い訳できん。

「ところでお主達はデートか？」

「いえ、荷物持ちをさせた帰りに食事を恵んでやりに行く途中です」

「なるほどな。わらわ達は新作ゲームを買った帰りじゃ」

本当にラインとはゲームで契約してんのかよ！

やっぱりレースゲームとかか？ いや、ラインくらい速かったら逆に遅く感じてつ

まらんだろうし、別のジャンルなのかもしれないな。どんなゲームをやるのか気になる

が、今は他に聞きたいことがあるからそっちを聞かか。

「ここで会ったのも何かの縁だよな？」

「何だ？」

「実は……『終わらない千夜一夜』と戦うことになったんだ」

「何………っ!?」

氷澄はメガネの下で目を大きく見開いて、解り易く驚いていた。

「厄介な口アばかり従えているかと思つたが、お前は本当に厄介なのに好かれるな……」

メガネをついっと上げて、それから頭をかく。その仕草も本当に解り易い男だよな。

「俺は手伝わないからな、あんなバケモノみたいな『主人公』との戦いなんて」

「あれは、本当は心の中で一緒に戦いたいと思ってるんじゃないぞ」

「ですね。いかにもツンデレ男子です」

氷澄をニヤニヤ見ながら、ラインと一之江はボソボソと会話している。

「むしろお前さんとこの主人公がピンチになったら助けに行く気満々じゃぞ、あれ」

「ですね。いかにもツンデレ男子です」

「うるさいぞそこ!?」

怒鳴っているとこ悪いが氷澄……顔を赤くして言っても説得力ないぞ。

ラインなんてケラケラ笑ってるし。

「まあ、ともあれ。ともあれだ。手を貸すことは絶対に、絶対にしないが……アドバイスくらいなら出来るかもしれないな」

その言い回し自体がツンデレ男子になってるんだが、本人は気づいてないな。ここで指摘したらアドバイスも貰えなくなりそうなので黙って頷くことにする。

『主人公』とただの『ロア』との違いは、『物語』を作っていく側か、物語をなぞる側か、だ。つまり『主人公』同士の戦いは相手よりも強い『物語』を描けるかどうかによるわけだ」

「……えつと……ああ！ だから氷澄は、雨の中、それも夜中にあの十字路で俺を待つて

いたんだな。自分の物語に自信があつたから、再び挑みに来るかもしれない俺を待つていた、つてことか？」

「その結果負けたんじゃから、世話ないがのう」

「うるさいぞ、ライン。お前も負けただから他人事みたいに言うなつ」

氷澄が突つ込みを入れるごとに、ラインはニシシと意地悪く笑う。

「そもそも『主人公』と『ロア』ではDフォンの機能からして違う。『主人公』のDフォンはコードの読み取ることと自分の仲間に出来るロアを探したり、物語として登録したりする機能があるが、ロア達にはそれが無いからな」

「なるほどな。その『自分の物語に合つたロア』つていうのは、誰の選定基準で決まるものなんだ？」

「それこそ、因果——縁だつたりするんだろう」

つまり、運命的なものというわけか。『厄介なロア』ばかり従えていると言われたばかりだが、そんな物語でも俺にとつては大事な仲間達だ。そんな彼女らとの出会いが縁だつたりするのなら、少しくらい感謝してもいいかもしれないな。

「俺が氷澄やライン達と出会つたのも縁の一つなのかもしれないな」

「俺はお前に会つたせいで調子が狂い始めた気がするよ」

溜息交じりに氷澄は言うが、その表情は軽く笑つていた。

だから、俺も笑い返す。

こういう立場の男同士の友人がいるっていうのは、やっぱり心強い気がするな。ヒスる心配もないし。

男同士の友情を見て一之江達も触発されたのか仲良く……。

「なんか怪しい雰囲気じゃのう……」

「掛け算で言うとどつちが前でしようね」

「氷澄は総受けじゃろうな」

「おい、ライン!!?」

……仲良くし過ぎだお前ら!

「掛け算とか、変なこと言うの止めろ一之江っ」

お前は通信科コネットの奴らと同類か!!?

「いやあ、いつそバラにでも走ってしまえば女性陣達も仕方ないって思うかな、と」

「どんな諦めだそれは!」

「ロア憲章第十条。『諦めろ。仕える主人公がバラに走ったら即刻諦めよ』」

「嫌な憲章だな、それ……」

こつちはこつちで一之江への突っ込みが大変だった。

っていうか、武偵憲章のことまで知ってんのかよ!

……どこから突っ込めばいいんだ？

「はあ……まあいい。話はそれくらいだ。そろそろ俺達は行くぞ」

「ですね、私達もさっさとハンバーグを食べるとしましょう」

「ふむ。わらわ達も帰ったらハンバーグにせぬか、氷澄？」

「検討しておいてやる」

氷澄はぶつきらぼうにラインに告げると、俺を見て一度頷いてから。

「ロアの中でも特に『魔女』には気をつけるよ？」

と、言い捨てて俺達の横を通り過ぎた。

「おい、どういう意味だ？」

なんだか胸がざわつく。この果てしなく不安になる感じは……何故だ？

「あいつらは『主人公』に寄生することが多いのさ。悪女に上手いこと騙された『英雄』

が破滅したり、いろいろ喰われるという話も多いだろう？ だからな」

氷澄は一度も振り返ることなく、そんな言葉だけを残して歩き続ける。

ラインも意味深に笑って俺を見てから、てくてくと氷澄に付いていった。

……魔女に気をつける、か。

「キリカはやっぱり信用出来なかつたりするののか？」

「それはもう。彼女は本当に最悪の魔女ですからね。」

ですが、そんな最悪の魔女が貴方だけはちよつぱり特別扱いしているというのも気になります」

「特別扱いなのか、やつぱり」

「あれほどの『魔女』に気に入られているというのは、つまり貴方自身が興味を持たれているということ。好かれていると言っても過言ではありません」

「俺は……そんな好かれるようないい男じゃないんだけどな」

「ふう。タラシはこれだから……いいですか？ 貴方には人やロアを惹きつける十分な魅力があります。カリスマ性と言つてもいいでしょう。天性的な将の器……物語的

に言うくと貴方には生まれながらにして『主人公属性』があるんですよ」

「……俺にそんな属性はない」

「はあー、まあいいです。そのうち解りますよ。貴方は自分が思っている以上に主人公ですから。」

さて、話を戻しますが、彼女の興味対象から貴方が外れた瞬間、貴方は食べられてしまふでしょう。——とつくに、死と隣り合わせなんですよ貴方は」

死と言われて俺は理亜の夢の中で見た光景を思い出す。

崩れた町並み。瓦礫の上に倒れていた

俺。

高笑いしていた少女。

あの少女は誰だ？ どこかで聞いたことのある声だったか……。

頭の中に反響していたせいかわ、それが誰なのかまでは掴めない。

「……一応肝に銘じておく。だけど、今は理亜に付いてる『魔女』の警戒が先だ」
「その情報も掴んでいたのですね？」

「ああ。名前は『予兆の魔女・アリシエル』。自称アリサと名乗る魔女だ。理亜に『もうすぐ死ぬ』と告げて、同時に理亜みたいな『主人公』を探していたと言ってた」

「アリシエル……『予兆』ということはある意味、未来予知みたいなものですか」
「ああ、多分、な」

あの光景は未来予知なのだろう。

とはいえ、あれは予言ではなくあくまで予兆。

つまり、回避する手段はいくらでもあるということだ。それこそ……俺を戦わせない、とかな。

「なるほど。そのアリシエルに貴方に関する不都合な未来を見せられたから、あんなにも冷徹になつて戦っているというわけですね。納得しました」

これだけの情報でいろいろ察することが出来る一之江も大概だよな。

「さて、そろそろハンバーグ屋さんです」

「ああ、もう着くのか。難しい話は一旦休憩だな」

「ええ。食べて食べて食べまくりますよ」

「了解だ！」

気になることはまだまだある。

だけど今は……今後の為にも腹ごしらえだ！

腹が減っては戦は出来ぬ、っていうからな。

俺は意気揚々と一之江と共に店の中に入っていった。

そして、注文をしたのだが……。

なに、これ？

目の前にはこれでもか、といったようにタワー状に積み重ねられたハンバーグがある。

注文の際、一之江が「私はいつものを。こっちのタラシには特別メニューのアレを」とか注文したのだが。

特別メニューがこんなトンデモハンバーグなんて聞いてませんよ、一之江さん？

普通のハンバーグの十倍はあるぞ。

食えんのか、この量。

「さあ、遠慮なく食べて下さい。あ、恵んでやったのですから残したらグサグサの刑です

からね」

「なあ、一之江……」

「なんですか？　ほらほら早く食べないと冷めてしまいますよ？」

「お前、寝てる所こ起こされたの……絶対根に持つてるだろ！」

「いいえ、せつかくの休みの日に叩き起こされた事なんか根に持っていないませんで」

「本当に？」

「ただ、タワーハンバーグを前にした貴方が困る反応を見たかっただけですって」

「この性悪女が！」

言ってからしまった、と思ったが遅い。

背中越しにひんやりとした金属の感触を感じる。

「……それが最期の言葉でいいですか？」

「すみません、一之江様。貴方は大変優しい美少女デス」

背中に刃物を突き刺されながら思う。

なんというか、俺らしいな。こういうの。

第十三話。デート・ア・キリカ

やたらと肉汁たつぷり溢れる美味しいハンバーグをこれでもか！と食べた俺は、一之江の車で月隠駅まで送って貰った。この後、一之江は妹さんと久しぶりに会うらしく、さつき買った買い物もいくつかは妹さんへのプレゼントも兼ねているのかなんとか。

（まあ、明らかに一之江のサイズではないものも買ってたしなあ……何処がとは言えんが）

「やはり殺しましょうか？」

「すまん、今日はもう勘弁してくれー！」

「まあいいでしょう。ですが、妹には絶対に会わせませんからね。いいですね、会ったら殺します」

「……偶然会った時くらいは情状酌量の余地をくれ」

「いいえ、現行犯なので刺殺可です」

「射殺じゃなくて、刺殺かよ!?？」

一之江に似た娘、というのがいたら近寄らない方がベストみたいだな。偶然何処かで

ぶつかりませんように。

絶対に会いませんように、いいか絶対だぞ！

「それにしても。今朝……というより、昼間に会った時よりもいい顔をするようになり
ましたね？」

「ん？ ああ。それに關しては一之江のおかげだな。いろいろ吹っ切れたからな。あ
りがとうな」

「べつ、別に、以下略」

「だからそこまで言ったんなら最後まで言おうぜ、ツンデレ！」

「貴方の為になど誰がデレるものですか。デレタイムは時給800万円です」

「何か増えてるし……」

「時価ですから。さて、それはともかく……まっすぐ帰るんですよ」

「ああ、解ってるよー」

そう言つて助手席に乗り込んだ一之江に手を振つて、一之江を乗せた車が走り出すの
を見送る。

一之江を乗せた車が走り去つた後。

朝からいろいろあつたせいかなんだか眠くなつてきた。思えば昨夜からヒステリア
モードを使い続けたせいで、脳神経に負担がかかつてるのかもな。今まではいろいろな

意味で緊張してたから眠くならなかったけど、ここに来て眠気のピークが……ふあくあ……。

いかん、いかん。このままじゃ、道端で寝ちまう。

早く帰らんとまづいな。

などと思っている。

「わお、モンジ君つてば、瑞江ちゃんとデートしてたの？」

なんだか、お肉の匂いがするね？　くんくん」

……だよな。解ってたよ。このまますんなり帰って眠れるわけがないよな、こんちきしよう！

さすがは不運に定評のある2年の遠山だ。

……今は一文字だけど。

「もう出歩いて大丈夫なのか、キリカ？」

後ろを振り返って、声をかけてきたキリカにそう尋ねる。

「うん、目が見えるようになったからね、体は騙し騙しで」

「視力が回復したというのは安心出来る話したが、だからってなんで月隠に？」

「んー？　だって」

いつもより若干ゆっくりな仕草で、上目遣いでキリカは俺の顔を覗き込む。

「私に聞こえないトコでちよくちよく会話してるんだもん。ちよつと気になつちやうよ」

そして、不貞腐れるように唇を尖らせた。

「あー、そつか。すまん。敵にも『魔女』がいるから警戒して、街を変えたんだ。そつか、街の外にいたキリカにも解らない状態になつちまうのか」

「んー？ 私だけ仲間はずれー、とかじゃないの？」

「俺にそんなつもりはないが、そうだな……キリカ、『仲間を信じ、仲間を助けよ』、だ。もしくは、『自ら考え、自ら行動せよ』、だ」

「むー、何それ？ 勝手にやれつてこと？」

「違う。俺や仲間を信じろつてことだ」

そう言うのと、何故かキリカは驚いた顔をした。

「……私も君にとつてちゃんと仲間に入ってるんだね」

「当たり前だろ！ お前はもう、大切な俺の物語だからな」

「……つ？？」

「……キリカ？」

ん？　なんで、そこで顔を赤くするんだ。

つて、そつか。

ロア達にとって大切な物語って発言はプロポーズみたいなものだったな、確か。いけねー、武偵高のノリで大切な仲間って言おうとしたのを失敗しちゃった。

どうする？ 訂正するか……だが、ここでそういう意味じゃないなんて言うものなら、何をされるか……。

困ったな、なんて言えばいいんだ？

「そっか、そうなんだね。うん、君はそうだよ……そんな君だから、私は……」
「キリカ？」

「ううん、何でもない。それよりそっか、心配して損しちゃった。モンジ君、私に隠し事してたわけじゃないんだね」

「あ、ああ。そんなつもりはなかったんだが……そんな風に思わせちゃまってごめんな。一人だけ仲間はずれにされたら嫌だよな？ もっと考えるべきだったな」

夜霞を出て、月隠に入れば『魔女』の探查範囲から外れる。それは同時に仲間の『魔女』に不安を与えることになる。そんなこと、思ってもみなかった。完全に失念だ。

「ほんと、ごめんな、キリカ」

俺はキリカに頭を下げた。

「あはっ、モンジ君ったら。そこまで反省しなくてもいいのに」

キリカの困ったような声を聞いて顔を上げると、キリカは安心したみたいに『ふーっ』

と深い吐息を零して。

「焦って飛び出して来ちゃったから汗掻いちゃったよ」

在ろう事か胸元を捲り、パタパタと扇ぎ始めた。

バカ！ そんなことをしたら……ああ、ダメだ。なる。なっちまった。

ヒステリアモードに。

「……まったく、困った子猫ちゃんだ」

「ふふ、子猫は甘えたがり屋……な……んだ……よ……あれ？」

キリカは笑いながら甘える声を出していたが……

「キリカ！」

話してる途中で突然、ふらりと前のめりに倒れそうになる。

「つと、大丈夫か！ しっかりしろ！」

俺は腕を伸ばしてキリカの体を支えた。

「あはは……目は回復したけど、実はまだフラフラでした」

「何たってこんな無茶を」

「だって……モンジ君……ううん、キンジ君、君を……君の存在が感じられなかったから……なんとなく不安になっちゃったんだもん。自分でもよく解らないくらい不思議なんだけどね、こんな気持ちになるの。落ち着いて考えれば、作戦会議だって解ったはず

なのになね？」

俺の肩に頭を乗せるように、もたれかかるようにしてキリカは体を預けてきた。

体を支える手は熱く、熱があることを教えてくれた。

「そこまで思ってくれる……それだけで俺は嬉しいよ、キリカ。さ、帰ろう。俺達の街へ。タクシーを使えばすぐに帰れるからね」

すぐに病院に連れて行かないと。

いや、待てよ？ キリカは口アだ。

人間用の病院で診て貰っても大丈夫なのか？

「ん……キンジ君」

「ん、なんだい？」

「えつとね、その……ちょっと休めば、回復すると思うんだよね。キンジ君と一緒にいてくれるならなおさら。ほら、嬉しいとか、楽しいとか、そういう気持ちになれば回復が早いっていうのは前に教えたでしょ？」

「あー、今朝聞いた奴だね。うん。解った。それじゃえーと……何処か休めるところで休むか？」

「……お布団が……あ……る……所が……い……いな」

モジモジとしながらそう言ってきた。

お布団かあ。

それはビジネスホテルや旅館の部屋を用意してくれということか？

ちよつと、その要望は厳しいですよ、キリカさん。

周りを見渡してそれらが無いか、探していると俺の目にそれは入る。

（あつたが……ここはマズイ気がする。何がと言われてもわからんが、なんとなく、なんとなくだが、入ったら詰む気がする。）

そこはちよつと外装がお洒落な建物で。

中にはお布団のある部屋があつて。しかも『ちよつと休む』、その為の場所

。要望通りの部屋だが……。

よ、よーし、他を探そう。そうしよう！

何故だかそこに入ったらいけない気がした。

他を探そう……。

と、思っていたが、くいくい。

キリカに服を引つ張られる。

「え、えーと、キリカ……さん？」

「……ダメ……かな？」

本音を言うつもりは入りにたくない。入ったら最後……嫌な予感しかない。

……だが、今のキリカは病人だ。

一刻も早く休めさせないとマズイ。

吐息は荒く、顔は熱で真っ赤、ちよつと汗ばんでいるのか、髪の毛が頬に張り付いている。

早く休めさせた方がいい。

何より今の俺はヒステリアモード……。

それがキリカのお願ひなら俺は何が何でも叶えてやりたくなる。

だけど……。

本当にいいのか、俺？

「あ、あは……ごめんね、キンジ君……困らせる、つもりはなかったんだけど……うん、そう、だよ。……ちよつとぴりハードル高いよね、あ、あは……」

焦ってる俺の様子を見て、キリカは起き上がろうとする。

「ごめん、言ってみただけ。えへへ」

そんなキリカの態度を見ていたら、俺も覚悟を決めるしかない。

「ごめんよ、キリカ」

俺はキリカに一言謝ってから。

彼女のその体をお姫様抱っこで抱える！

「ふわっ？？」 き、キンジ君っ？？」

『お布団がある部屋で休みたい』……その依頼、確かに引き受けたよ！

でも、キリカ、君とだから入るんだよ？ 　少し休んだら一緒に帰るからね！」

「う、うん……」

「じゃあ、キリカ……入るぞー！」

そして、俺はキリカをお姫様抱っこしたまま、建物の入り口に入って行った。

まるでお城のような外見の、その宿泊施設の中に。

「キンジ君……」

キリカが嬉しそうに囁くが、何でそんなに嬉しそうな声を出していたのかは最後まで解らないままだった。

我ながら……我ながら本当に不幸だ。

俺はそう痛感していた。

キリカをお姫様抱っこしたまま、建物に入った俺は受付前の機械で部屋を選んでポタンを押し、従業員の顔が見えないように出来てる受付でおばちゃん（と思われる人物）か

ら鍵を渡されたのだが、『若いのに無理させるんじゃないよ』などと言われ、意味が解らないまま、部屋の扉を開けたのだ。

部屋の中を見て驚いた。

部屋の中がとんでもなく、豪華で、可愛らしく、ベッドも広いからな。まるで理子の部屋にいるような気分になった俺はヒステリア性の血流が強くなるのを感じてしまった。

はつきりいつて、まったく言っていないほど落ち着かない。

なぜなら……。

シャワ……。

室内にあるバスルームからシャワーの音が聞こえてくるからだ。

マズイ、このままで状況的にマズイ。

これ以上ここにいたら危険だ。

俺の身がもたないぞ。精神や理性も含めて。

だが、逃げようにも逃げられない。

なぜなら、ヒステリアモードの俺はキリカと約束したからな。

『一緒にいる』と。

武偵憲章第2条『依頼人との契約は絶対守れ！』。

俺は約束した。『キリカの側にいる』と。

だから俺は逃げられない。逃げない。

約束したからな。

しかし、だからつといて、ドキドキしないなんてことは出来ず。

この昂つた気持ちを鎮めるには……。

「ふはー、キンジ君お待たせ……つて、何してんの？」

風呂から上がってきたキリカが不思議そうな顔をして聞いてきた。

そりゃ、風呂から出たら、同じ部屋に虚空見つめながら素数数える奴がいたらビツク

りするよな？

「いや、突然素数数えなくなっただけだから、気にしないでくれ……」

「あはは！　　キンジ君つて相変わらず面白いね！」

やつぱりキンジ君はキンジ君だね！」

キリカが笑いながらそんなことを言うがそんなに可笑しいか？

……笑いのツボに入ることと言ってる自覚はないのだが。

まあ、いいや。

そのおかげでキリカの姿を見なくて済むのだからな。

それにヒステリアモードも解けてきたし。

なあに、振り向かないことと不運になら定評のある俺だ。

きつと、死んでも振り向かないと決め込めば、振り向かない自信ならあるからな。

「あれ、振り向かないんだ？」

「ああ、不運に定評があるからな」

「なあんだ残念く、実はバスタオル一枚なのに……」

「やっぱりかー」

「なーんてね、冗談。そんなことしないから、振り向いても平気だよ？」

「なあ、キリカ」

「何かな、キンジ君？」

「えーと……ちゃんと服は着てるよな？」

「わつ、そんな心配してたんだ!?　んもう、キンジ君つてばエッチなんだから」

「ち、違う。経験上、着てないことがあったから……」

前世では不運のオンパレードだったからな。特に神奈川武偵中時代は酷かった。

「あはは！　ちゃんとバスローブ着てるから大丈夫だよ」

「バスローブ、か……」

安心……できるのかな、それ。

ヒステリアモード的にはアウトじゃないか？

「ふはーっ！」

ボスツ、とベッドに背中からダイブしたキリカは寝転がると、すぐに体を起こした。

「ねえ、キンジ君っ」

「何かな？」

「すっごい回復してるんだけど。キンジ君、私のこと考えまくってくれた？」

「それはそうだよ。安心してくれ、キリカ。俺はいつも君のことを考えてる。

君のことしか考えてないから」

残っていたヒステリア性の血流を絞り出すようにしながら、俺はキリカに告げる。

「俺がいつも見てるのは君だ。君だけだ！」

だから安心していい、そんな台詞を言った……ような気がした。

気がした……というのはこの後のことはよく覚えていないからだ。

「……ん、ん、うんにゃ？」

(……寝ちまったのか？ キリカは大丈夫……って、あれ？)

気付いた時には俺は自分の部屋のベッドに寝ていた。

そして……。

混乱する間もなく。

ピピピピピピピッ！

携帯電話の着信で目が覚めた。

「どうやらヒステリアモードを酷使したことで脳神経にかなり負担をかけていたらしい。」

「一眠りしたことで大分スッキリした！」

「……つと、電話に出ないとな。」

「もしもし?」

『あ、よかった。繋がった……』

「鳴央ちゃん?」

「た、大変なんです!　音央ちゃんがつ!」

「音央が?」

「た。鳴央ちゃんの声は落ち着かず、早口になっていた。その喋り方はかなり余裕がなかった。」

「その只ならぬ雰囲気、俺も否応なしに真剣に聞き入る。」

「音央ちゃんが、理亜さんに会って話をするって出て行ってしまったんです!」

「音央が理亜と?」

「そういえば。」

『や、やめて、理亜ちゃん!　見せしめなら、ロアであるあたしがなるから!!?』

『元々あたしはいい存在だもの。こういう時は、ハーフロアのアんたたちより、あたしがそういう目に遇うべきだと思うの』

今朝の戦いの時、彼女はそんなことを言っていたのを俺は聞いていた。

『音央ちゃん、今日は寝ないでずっと悩んでいたみたいで……私に『ごめん』って言うかどうか行っちゃって、連絡しても出てくれなくて……!』

「あの、馬鹿……っ!」

何一人で思いつめてるんだ!

何一人で悩んでんだ!

何で誰かに相談しない!

何で俺は気付かなかった!

ちきしょう……間に合え!

「解った、鳴央ちゃん。俺は思い当たる場所をすぐに探してみる!」

『は、はいっ、私も探してみますっ!!?』

「ああ、必ず見つけて、文句言ってやろうなっ!」

『は、はいっ!』

電話越しから聞こえてくる鳴央ちゃんの声は可哀想なくらい動揺していた。

その気持ちは俺にも解る。いつも一緒に生活していた妹的な存在。

それは、一之江にせよ、俺にせよ、鳴央ちゃんにせよ、大切にかけがえのないものだからだ。

「じゃあ、後でまた連絡し合おう！
取り敢えず音央の母校。十二宮中学に行ってみよう！」

『了解しました、ではまた後でっ』

鳴央ちゃんとの通話を切って。

俺はすぐに家から飛びだそうとした、が。

『どこ行くの？ お兄ちゃん？』

『行かせないよ？』

『お兄ちゃんは私だけ、見てればいいの……』

何処からか聞こえてくるその声に眉を顰めていると。

ばふう！

突然、背後から誰かに抱きつかれた。

この感触。この甘いキャラメルの匂いは……？

「……かなめ、か？」

「正解だよ、お兄ちゃん。合理的に妹ハグしてえー？」

第十四話。哥の妹

背後から抱きつかれて、広がる甘い匂い。

ああ、このニオイ。なんだか懐かしいな。

それに、背中越しに伝わってくる弾力のある柔らかいモノ。

知らなかった。かなめの奴、こんなに成長していたのか……ああ、ダメだ。なる。なっちまう。ああ……なっちまった。

『ヒステリアモード』に！

ヒスった俺は彼女かなめが好んで食べるキャラメルの匂いを嗅ぎながら思索する。

何故、かなめがいるんだ？

いや、いるのは問題じゃない。

今はかなめも一文字家で暮らしているからな。いるのは当たり前だ。

問題なのは何故かなめは……俺が出掛けるタイミングで抱きついてきたんだ？

ただの偶然か？ それとも……。

「か、かなめ……？ そろそろ離れろ！」

「えー、何で？ 可愛い妹とのスキンシップだよ、お兄ちゃん？」

「普通の兄妹はこんなことしない！」

「えっ!!?　もしかして、キスの方がいいの!!?」

「なんでそうなる!!?」

「だって、兄妹だもん。キスするのは当たり前だよ?」

「そりゃあ、アメリカ的な考え方だろう?　ここは日本だ！」

「ついでに言うが、兄

妹同士でキスはしない。いかん、かなめの発言を聞いたせいで、キスしてる武藤兄妹の姿を思い浮かべてしまった。

「……吐き気がしてきた」

「大丈夫?　妹看病しようか?」

「誰のせいだ。誰の。」

クソ、かなめのせいで嫌な想像してしまった。慰謝料寄越せ。

「『普通の兄妹』はそんなことしないよ」

「えー、非合理的い。もつと合理的に考えないと、人生損するよお兄ちゃん!」

「そんなんで得をするくらいなら、お前の兄なんか辞めてやる」

「えっ?　結婚してくれるってこと?」

「ポジティブだな、おいつ!!?」

『人工天才』のはずなのに、なんでこんな残念な頭してるんだ、うちの妹は……。

「んー、じゃあ仕方ないなー、頭ナデナデして、お兄ちゃん！」

何が仕方ない、だ。そんな甘え声出しても、そんなことしてやらんぞ。

そんなナデナデなんて……。

「こうか？」

「あつ、うん、気持ちいいよ、お兄ちゃん……」

頭ナデナデしてやってるが。これはあれだ。

ペットを舐ける時に、おとなしくさせる為にやったり、いいことをした時にご褒美で撫でるアレと同じだ。

決して甘やかしてるわけじゃない。

「えへへ、やつぱお兄ちゃんは優しいねー。頭撫でるのも上手だし」

「そうかな？」

「うん、こんなに気持ちいい撫で方はお兄ちゃんしかできないよ」

大袈裟だな。ただ頭撫でただけでコレとは。

「そんなんで褒められても嬉しくない」

「あはは、お兄ちゃん照れてるー」

照れてねえ！

まったく、たまには兄らしくスキンシップしてやればこれかよ。

まあ、いい。スキンシップの時間は終わりだ。

こんな時間ない時に、何で抱きついてきたのか、そろそろ話してもらおうぞ。

「なあ、かなめ……」

俺が言いかけたその時だった。

キーン、という音がしたかと思うと俺

の視界が、景色が、周囲が、一変した。

気付いた時には俺は畳がある和室に移動していた。

(な、何が起きたんだ?)

俺の視界に映るのは、6畳半くらいの和室部屋。

まるで巣鴨の実家に住む爺ちゃん、婆ちゃんフスマの部屋みたいな造りだ。

目の前にあるのは如何にも和風っぽい襖フスマがある押入れ。

右を向いても押入れ。左を向いても押入れ。

試しに後ろを向いたが、押入れしかない。

前後左右、どこを向いてもあるのは押入れと、足元に広がる畳だけだ。

天井には蛍光灯がついてるが、カバーはなく、裸電球のままだ。

(この感じ……まさか???)

俺がその可能性に気付いたその時。

どこからか、声が聞こえてきた。

『あははっ！ お兄ちゃん』

『約束、覚えてる？』

『スリーアウトは……チェンジ、だよ？』

どこからか、聞こえてくるその声の主に俺は聞き覚えがありまくる。そして、彼女が作り出したこの空間は彼女の『ロアの世界』というのも解る。

しかし、何で彼女がわざわざこんな空間に招いてやってるのは、理解できない。
直後言った方が早いからな。

「一体、何のことだ……かなめ？」

『お兄ちゃん、今朝、六実鳴央と夢の中でイチャイチャしてた！』

『それだけじゃない！ 昼間は一之江瑞江とラブラブデートしてた！』

『夜には、仁藤キリカと一緒に大人のイケナイ施設に入ってた！』

「……見てたのかよ」

夢の中で浸入してきたの、やっぱお前かよ！

というか、一之江やキリカとのあれやこれやも見てたんですか。かなめさん!!?

俺のプライバシーとか、人権どこいった？

『お兄ちゃん、約束したよね？』

『私、以外の女とは口も聞かず。私以外愛さない、結婚してくれるって』

『お兄ちゃんが今日だけで接触した女子は……六実鳴央。一之江瑞江。仁藤キリカ……はい、スリーアウト！ スリーアウトはチェンジだ！』

「いや、待て待て待て！ 『人を傷つけるな』と約束したのは事実だが、勝手に約束の内容捏造するのはやめろ！」

何さらつと、結婚とか付け加えてんだ？！？

血が繋がった妹と結婚とか……拳銃自殺もんだろ！

『血の繋がりなんて……些細な問題だよ？』

「根本的な問題だろ？！？」 それと自然に心読むな！

なんなの、ロアには心読む能力とかデフォルトで装備されてんの？

『違うよ、お兄ちゃんだからだよ』

『愛の成せる技。妹愛だよ』

『だから、結婚しよう？』

「イヤイヤ、何で結婚に行き着くのかよくわからん」

『もう、非合理的なんだからー。いい、血の繋がらない妹っていうのはね……』

それから五分くらい、かなめによる妹談義を受けた俺は、終わる頃には『妹と結婚するべきじゃないか？』なんて、考えるようになっていた。

今すぐ婚姻届を提出するべきなんじゃないか？

……いや、待てよ？

冷静になって考えると、かなめの理屈はおかしい事に気づいた。

危ねえ。かなめの奴……実の兄に『教唆術』メンタリズムをかけたな。なんてもんをかけやがる。あやうく、襖の中から飛んできた（かなめが差し出してきたと思われる）婚姻届にサインするところだったぞ。

「よくわかったよ。かなめ」

『わかつてくれた!!? さすがお兄ちゃん』

『拳式はいつにする?』

『式はアメリカと日本で挙げようか?』

「お前の頭がおかしいことがよくわかった」

実の兄妹で結婚とかありえん。

そもそも、俺もお前もまだ未成年だろうが。未成年では両親の承諾が必要だから、するなら爺ちゃん、婆ちゃんの許可がいるし、あの爺ちゃんでもそんな許可出すとは思えん。

もし、かなめと結婚とかになっても駆け落ちになるぞ。

『駆け落ちかあ。それっていいアイディアだよ、お兄ちゃん』

いかん。地雷踏んだか？

『私はお兄ちゃんと一緒になら、それでもいいよ』

『だから、今すぐ結婚しよう?』

ダメだ、コイツ。早くなんとかしないと……。

「なあ、かなめ。話し合おうぜ。」

姿見せてくれよ?」

俺が一言言ったその時。

ゾクリ。

背後で誰かに見られている、そんな視線を感じた。

バツ!!?

後ろを振り返ると、そこには押入れがあり。そのフスマが少し開いていた。

?

変だな。さつき見た時（婚姻届が飛んできた後は）フスマはきちんと閉じていたのに

……?

気になった俺は押入れに近づいて、フスマに手をかける。

そして、ゆつくりとフスマを開こうと動かした……その時だった。

バチツと、胸ポケットとズボンのポケットに入れていたDフォンから火花が飛んだ。

熱い。急いで取り出すと、Dフォンは真っ赤に光り、発熱している。

これは、もしかして？

『あははっ！ 残念くあのまま開けてくれればお兄ちゃんはずっと私と一緒にいられたのに』

「お前は誰だ！」

かなめじゃない。声は確かにかなめだが。俺にはわかる。コイツは違う。別の何かだ。

『私はかなめだよ？』

『正確には遠山かなめが生み出した擬似人格だけだね。』

第二、第三のかなめ。

お兄ちゃんも知ってる『スイッチ』が入ったかなめかな？』

『あっちの世界だと、私達は表に出にくいんだけど、この世界だと私達は個々の意識として存在できるの。』

ネットを介して世界中に存在をアピールするだけで、私達は出やすくなれたんだよ』
かなめの発言に驚かされる。

確かにかなめは人格のスイッチが変わると、包丁をぶんぶん振り回したりしちゃうくらい危険な奴だが、目の前のかなめからは何か、違和感を感じる。

あっちの世界？

それは『前世』だと仮定して。

ネットを介して存在をアピールすることで存在した、ということは……。

「……ロアか？」

『えへへー。正解ー、私は第二のかなめ。『破滅^レの悪戯^ム妖精^ン』のロアだよ、お兄ちゃん？』

『私は第三のかなめ。ロアを操る『脚本^{ブック}作り^{メイカー}』のロア』

「ロアを三体も持つてるなんて、かなめは大丈夫なのか？」

『えへへ、お兄ちゃんが心配してくれてるー。背徳う』

余計な心配はいらないみたいだな、うん。

『主人格のかなめなら大丈夫だよ。今はね。『破滅』の属性を持つ私が表に出やすい今、いつまで無事でいられるかはわからないけど』

「破滅の属性？」

『そのことでお兄ちゃんと話があつて出てきたんだよ。』

いい、お兄ちゃん？　このままいくと、お兄ちゃんの大切な物語……皆んな、死ん

じやうよ？』

「死ぬ？　アリサに俺はもうすぐ死ぬって言われたことがあるが、それと関係あるの

か？」

『『予兆の魔女』の予兆かあ。確かにそれもあるけど、お兄ちゃんはもうすぐ大切な人を

失う。

『破滅』の属性を持つ、大切な人がいなくなる。私にはわかる。同じ破滅を持つてるか
ら』

「何なんだ、その破滅っていうのは」

『破滅することが決まってるロアだよ。物語的にいう悪役。』

「そうだねー、『シャーロック・ホームズの物語』は知ってるよね？」

例えば、その物語に出てくる悪役、モリアーティ教授とかがそれかな』

「……破滅が決まっているロア？」

『そう。普通、大抵の物語はハッピーエンドに向かって進んでいくんだけど、中には自身を含めて、人やロア、世界をも破滅に導く、そういうった物語も存在するんだよ。』

有名どころだと『○○○の大予言』とか、『世界終末戦争』とか。

『世界が破滅する』——その類の噂が広まれば広まるほど、その属性を持つロアは強くなるんだよ。』

世界のどこかで災害が起きる、世界のどこかで戦争が起きる、世界のどこかで人が死ぬ——そういうった事件が起きると、多くの人が噂するからね』

「世界を破滅に導くロア？ それって……」

『うん、そう。お兄ちゃんがこれから先、挑むことになる相手もその属性を持つているん

だよ。

その相手こそ『最悪の大有言』。アリサさんが視た予兆そのもの。

だから、私は止めに来たんだよ。『不可能を可能に出来る』お兄ちゃんでも絶対に勝てない相手だから』

「勝てない？ 戦つてすらいらないのに……解るのか？」

『アレは戦つて勝てるものじゃないんだよ』

『例えその破滅に勝てても、本当の勝利にはならないよ。特にお兄ちゃんみたいな優しい人は。』

お兄ちゃんは、もしその破滅を持つのが可愛い女の子だしたら全力で助けようとするでしょう？』

「……否定できないな、女の子を守るのが男の役目だからね」

『……否定してほしいんだけど。非合理的だからなあ、お兄ちゃんは』

呆れたかなめの声が聞こえる。

姿は見えないが、声色から呆れられているのが解る。

『破滅を持つコアを倒しても、そのコアは消えるだけだよ。決して仲間にはならない。

ううん、お兄ちゃんなら出来るかもしれないけど、絶対仲間にしちゃダメだからね。

周りを巻き込んで破滅をもたらすから』

『物語を終わらす物語。それが破滅の属性なんだよ』

「なるほどね。理亜みたいに物語を消す物語がいるんだ。存在自体を終わらす物語がいてもおかしくはない、か……」

理亜と違うのは、自身で制御できない点と、世界をも巻き込んでしまう点か。

理亜の場合、ロアだけを消して、ハーフロアを人間に戻すことが出来るが、破滅を持つ物語の場合、終わりに向けて物語を進めていかなければならないから、融通が効かないんだな。

「その属性をかなめも持つているのか？」

『うん。私が持つ『破滅の悪戯妖精』はその物語の通り、機械を狂わせて人を惑わし、最後は破滅をもたらす。それがどんだけ優れた機械でも、先端技術の塊でも狂わせる。そういうった物語だから』

『もし、私が飛行機に乗ったら多分十中八九、墜落させるよ？』

今は自我があるけど、この能力を使う度に私は私じゃない感覚を感じるから』

「だったら使わなければいい」

『それじゃ、駄目だよ。私はかなめの一部だから、物語の通りになければ私は消える。私が消えたらかなめも消える。すでに一心同体なんだよ、私達は』

「だったら、俺が変えてやる！

俺の能力なら上書き出来るはずだ」
『^{エネイフル} 呪』の能力なら改変出来るはずだ。

まったく違う物語にしてしまえばいい。

『……ありがとう、お兄ちゃん。』

でも、今はまだ大丈夫だから。お兄ちゃんは心配しないで。もう何もしないで。戦わないで』

「そうしたいのはやまやまなんだけど……パートナーと約束しているからね。君を最強の物語にしてみせると」

『……そう。どうしても戦うのを止めないんだね?』

「ああ、俺は戦う」

『じゃあ、私を倒してみせてよ。』

お兄ちゃんが私を倒せたら、今日は退いてあげる』

「大切な妹に手は出せないな……」

『じゃあ、諦めて!』

「武偵憲章第十条。諦めるな。武偵は決して、諦めるな……俺はもう武偵じゃないけど、諦めることはしない。」

俺が諦めるのを諦めてほしいな?」

……。

お互い無言で睨み合う。

かなめの姿は見えないが、おそらく睨んでるだろう。

確証はない。ただの兄の勘だ。

『やっぱりお兄ちゃん是非合理的だねえ。解った。それなら力尽くでも戦わせないから』

かなめがそう言うと、前後左右の押入れのフスマが開き、強烈な引力が発生した。それはまるで俺を囲むようにして、フスマの中に引きずるように、風が、引力が、引きずり込む力が発生している。

「うおっ!??!?」なんだ、この力は……」

『無限隙間空間』!』
インフイニティ・スリット・ゾーン

『私の最初のロア、隙間女の能力。どんな小さな隙間だろうと、そこに隙間があるのなら私は入り込めるんだよ?』どんなに小さな隙間だろうが、小さな、小さな粒だろうが、『分子』だろうが、例えばそれが『素粒子』でもそこに僅かでも『隙間』があれば干渉することだって出来るんだから。

「ただど私の真の能力はただたんに隙間に入るだけじゃない。隙間から相手を攫って、隠したり、閉じ込めたり出来る。」

そういった逸話を持つことで私は気に入った相手を隙間に閉じ込めることが出来るんだよ、お兄ちゃん』

な、なんだよ！ そのトンデモ能力!?!?

まずいな。ただでさえ、一人でアリア達を纏めて倒せるくらいの戦闘力を持つてるのに、ロアの能力を手にしたかなめを倒すのは至難の技だぞ？

しかも、今の俺は通常のヒステリアモード。

『女を守る』という特性上、かなめと戦いたくはない。

『本気にはなれない』……だが、かなめは本気でくるだろう。

バスカービルの女子を圧倒する実力を発揮されたら、本当に閉じ込められるかもしれない。

さらに悪い事に今の俺には戦う時間すらない。

一刻も早く、音央を探しにいかなければならんだ。

どうする？ どうしたらいい？

「ま、待て。話し合おう。話せば解る」

『何を話し合うの？ どんなに話し合っても答えは変わらない。一つしかないよ？

お兄ちゃんはまだ戦わない。私とずっと一緒にいる。結婚してくれる。そう言ってくれるの？』

「……最後の方の言葉はよく聞こえなかったが、それは話し合いじゃない。話し合いは『話し』『合う』ってことだ。人と人が意見をぶつけてお互いに納得するまで論議する場であって、かなめのそれはただ自分に都合の良い提案を押し付けてるのと変わらな
い。

それじゃ、人は納得しないよ？」

『いいもん。力づくで納得させればいいんだもん。『弱者は強者に従う』……それがアメリカのルールだもん』

「ここは日本だ。『個の強さ』より『周りとの和』を重んじる文化の国だからな。

だからかなめの提案は受け入れられない」

『……非合理的ー』

かなめの声が響く。風が、引力がさらに強くなる。

俺の体はその力に引きずられて、自分の意思とは反対に、フスマの方へと動いてしま
う。

（クソ、何かないのか。この状況を覆す方法は！

考えろ！ 何かあるはずだ。引力に抗う。引力をも退ける方法が。

あるはずだ。ないなら、作れ！）

第十五話。最悪の都市伝説

ついに俺の体は、目の前にある襖の中に吸い込まれていく。

ズブ、ズブと、まるで底なし沼に沈んでいくような感触を感じながら俺は脱出方法を考える。

（何か方法はないか？　引力から脱出する方法は……引力より速く動ければ！

いや、あの技は体の負担は大きい。これから音央を探しに行かなきゃならんのに、消耗して動かなくなったらもともともうもない……だつたら！）

ヒステリアモードの俺はある方法を思いついた。

まず、最初に思い浮かんだのは、人喰い村で音央が村人に襲われた時に使った『夜桜』トキクラ。超音速を超える光速で突っ込む技だが、あの技は体力の消耗が激しいので、この後、音央を探しに行かなきゃならない俺としては使いたくない。

次に思い浮かんだのは……。

オイオイ、本当に大丈夫か？

ヒス俺よ？

思いついたが……それはいいのか？

しかし、やらなきゃいけない。

覚悟を決めろ、俺！

その技は俺にしか出来ない。

いや、俺にしか……かなめは許さないだろう。

かなめが俺の寮に住み着いた時、かなめは米国が提唱した机上の空論。『アルカナム・デユオ双極兄妹』を成し遂げようとしてきた。その時にかなめが俺と結ばれるように仕向けてきた時に起きた出来事。

そう、これは……対かなめ用の撃退法。

(行くぜ！　この桜吹雪……散らせるものなら)

「散らしてみやがれ！」と内心思いながら俺は体の力を抜いて、自ら襖の中に飛び込んだ。

襖の先は驚いたことに、飛行機の機内だった。

座席とその座席の上部に荷物入れがある、見慣れた普通の機内。

見た感じここはエコノミークラスか？

そのたくさんある席の一番前の席に見たことのある茶髪のボブカットをした少女がいた。

他でもない。それは俺の妹、遠山かなめさんだ。

「……来てくれたんだね、お兄ちゃん」

「可愛い妹が呼んだんだ、来ないのは兄として失格だろうか？」

ヒスつてる俺はつい、そんな言動をしてしまう。

「背徳うー！ やっぱりお兄ちゃんはいいいいよ！

お兄ちゃんがいないと私は

耐えられないッ！」

「全く困った妹だな……」

「こんな妹は……嫌い？」

「いや、愛してるよ」

あつ、コラ。そんな誤解されるようなこと言うな、ヒス俺よ!??

そこはハッキリ家族愛と言え！

「つ~~~~~~~~背徳う————!!!」

かなめは、かなめでうつとりした顔をしてるし。ああ、なんだか誤解が深まった感じがしてるな。

どうすんだ、これ。

などと、思いながら俺は周りを見渡す。

普通の機内と変わらない、ありふれた飛行機の中。

……なのだが、ここは普通の世界じゃないのは何となく感じられる。

それだけじゃない。なぜかはわからないが、この機内には見覚えがある。まるで乗ったことのあるような気がするのだ。

「ここも……『ロアの世界』なのか？」

「うん、そうだよ。ここはANA600便を再現したところ。

もし、あの時、お兄ちゃんが来なくて、アリアが一人で『武偵殺し』と戦っていたら……っっていう世界。

『H』の真の能力を發揮できなくて、武偵殺しにアリアは負けて、そしてこの飛行機も墜落する……そんな世界。或いはお兄ちゃんが間に合っても、不時着に失敗する世界。操縦機材が全て狂って制御が効かなくて墜落してしまう世界。

「この世界は『もし、ANA600便に不測の事態が起きて墜落したら？』という噂から成り立つ世界なんだよ！」

「そんな世界も再現出来るのか？」

「うん、私は『悪戯妖精』のロアでもあるからね。だから過去、現在、未来で起きるありとあらゆる航空機事故、事件を再現出来るという逸話を持つてるんだよ」

「なんだよ、そのチート能力。」

「隙間女だけでもやっかいなのに、さらにやっかいじゃねえか！」

「それでお兄ちゃん……自分から来てくれたってことは私と結婚してくれる気になっ

た、つてこと？」

「そうだね。その返事をしに来たんだよ」

俺はかなめの隣の席に腰掛け、そしてかなめに向き合う。

かなめの暴走を止める為とはいえ、これからすることはかなめを傷付ける行為かもしれない。

だが、俺はどうしても守りたいものがあるんだ。

だから……すまん。かなめ。

俺にはこうすることしか出来ないんだ。

俺は顔をかなめに近づけて、その唇に自身の口を押し付けた。

ああ、やつぱりかかりは甘い……かなめでもなれるんだな。

ヒステリア性の血流が高まるのを感じながら、俺は舌を絡ませるように。

かなめを弱らせる為、キリ力直伝のキスをしてやった。

「ぶはあーっ……どうだかなめ。兄のキスは凄いだろ？」

かなめの顔を見ると、キスをされたかなめは……。

「はっー、はっー、だ、ダメ。こんなことしちや……ダメっ……ー！」

さつきまで俺にされるがままにキスされていたのに、その手を俺の胸に押し付けるように、拒んできたのだ。

「……」

「や、やめてっ」

「兄妹でこんなことしちゃ……ダメっなのに……！」

かなめは今までと矛盾することを言いながら、愛おしさを感じさせる仕草で、潤んだ瞳から涙を零している。

その姿は小動物のように儂く、か弱い。男の力で押し倒したら抵抗すら出来ない感じに。足の膝は震え、本能的に内股に閉ざされてしまっている。

これは……演技でやってるのではない。

かなめは、変化したんだ。

(すまん、かなめ。後で泣かせた責任は取るからな)

俺の目論見通りかなめはなった。

HSS……ヒステリアモードに。

ヒステリアモードは『子孫を残す』という本能が発達したもので、それにより男は『女にとって魅力的な男』を演じること、『強くなる』。しかし、逆に女は『弱くなる』。

『男が守りたい女になることで、生き残る』為に。

そうなることを知っていた俺はそれを利用させてもらった。

かなめを無傷で倒す為に……。

(体は無傷だが、心のケアは後でしてやるからな)

恨まれてもいい。呆れられてもいい、俺はお前に拳を向けることなんか出来ないんだから。

鈍感な俺だつて、これが最低な行為だつてことくらい解る。

だけど、それでも俺はやらなくちやいけなかつたんだ。

俺を信じて待つてる人達の為に。

すまん、かなめ……そう、心の中で謝りつつ、この空間から出るために行動を起こそうとした俺の肩を誰かが掴んだ。

いや、誰かじゃない。

ここに居るのは……俺と、かなめしかいないんだから。

「……お兄ちゃん、どこ行くの？」

泣き止んでいたかなめの手が俺の肩をがっしりと掴む。

ギリギリ、ともの凄いい力で掴まれているのだが……かなめさん、弱体化してるはずですよー？

どこにこんな力が？

「……お兄ちゃん、行つちやダメ！ 行つたらお兄ちゃん……死んじやうよー、嫌だ

よ。もう、お兄ちゃんがなくなるのは嫌っ

!!!

ギリギリ、肩を掴むかなめの手はさらに強まる。

ちよつ、ヒステリアモードとはいえ、筋肉や骨までは強化できないから普通に痛いんですが、かなめさん!!? 肉が裂ける!!? 骨が砕けるー!!

「ヒステリアモードになつてない……のか!!?」

そんな……確かにかなめからは弱くなつた雰囲気があるのに。

この力はどうゆうことだ? ロア化したからか?

いや、そうだとしてもここまで強くなるだろうか?

「……お兄ちゃんは……私と一緒になればいいの。強さも何もかも……」

かなめのその言葉にある可能性が思い浮かんだ。

……待て。待ってくれ。

そんな……まさか!

そんなことが可能なのか!

ソレを認識した瞬間、俺は自身の身に起きてる変化を感じた。

そんな……こんなことつてあるのかよー!!?

血流が収まつてる。ヒステリアモードが解除されてる!!?

「……気づいたお兄ちゃん?」

「これはお前がやったのか!!?」

「うん、お兄ちゃんのおかげで『私』が人格の主導権を握れたからね」

「お前はもしかして……?」

「そうだよ。今の私は『脚本作り』のロア。お兄ちゃんが言ってた『チャンネル3ヒステリアモードのかなめ』だよ!」

やはりか。チャンネル1のかなめが普通のかなめだとしたら。チャンネル2のかなめは攻撃性が増したかなめ。そして、今のかなめはヒステリアモード時の弱体化したかなめになる。

しかし、弱体化してるはずのかなめだが、俺には俺と同等の力を持つように感じる。

まさか……!」

「なるほどなあ、『相手を自分と同じレベルまで引き下げる』……それがお前のロアの力か」

レベル99の敵も、同じレベルに落としてしまえば脅威ではなくなる。

つまり、ヒステリアモードになって弱くなったかなめと強制的に同じ強さに俺はさせられているのだ。

「弱くなっちゃえばお兄ちゃんもう戦えないよねー?」

合理的ー、最初からこうすればよかった!」

そのどこが合理的なんだ、どこが!」

しかし、困ったな。かなめの言う通り今の俺は弱体化している。

マイナス30倍くらいになった感じだ。

いや、マイナス30倍とか、自分で言っというてアレだが意味わからん。

「待て、かなめ！　俺の力を弱めたとしても俺の意思は変わらないぞ。

嫌だからな。俺は！

他の仲間だけを戦わせておいて、自分は高みの見物をするとか、絶対に嫌だからな！」

「それなら心配いらないよ？」

お兄ちゃんの仲間達は理亜ちゃんが全部きちんと消してあげるから」

消す？　消される？

俺の仲間が、一之江やキリカ、音央、鳴央ちゃん……みんなの力が、存在が消される

？

「見てみる？　ほら、もうすぐ一人消えるよ？」

かなめがそういった瞬間、機内にあるモニターが点滅して映像が流れる。

そこは俺がよく知っている場所。

学校のグラウンド。

夜坂学園のではない、一文字疾風がかって通っていた十二宮中学校の校庭。

そのグラウンドで、音央がボロボロになりながら誰かと戦っていた。

誰か、そんなのは決まっている。

だが、その現実を認めたくない！

そんなの。そんなの。

「認められるかあああああああああ!!!!」

つい、叫んでしまいが俺の声は届かない。

『スリーピングビョウテイ
茨姫の檻』!!?』

音央は校庭の真ん中を走りながら、茨を一本だけ放った。

伸びた茨の蔦が地面にある白い手を薙ぎはらうが、すぐさまによき新しい手が生えてくる。

あの手はスナオの能力か？

走って近づく音央の足をその白い手が掴み、音央は前のめりに転ばされる。

大量の手が音央に伸びる！

まずい、このままだと音央が……。

映像を見た俺はそこで自身に起きてる変化に気づく。

ドクン、ドクンドクン。

ああ、なる。なっていく。この身体の真芯に血が集まる感覚。

そして、通常のヒステリアモードではない、湧き上がるドス黒い感情もないから、べ

ルセでもない。

だが、なっていくのがわかる。

自分の女が傷付かれた時に発動する最強のヒステリアモードに。

ああ、俺はなっちまったみたいだな。

『ヒステリア・レガルメンテ』に。

だが、今の俺は弱体化している為、レガルメンテになっても普段の俺と変わらない。

マイナス30倍から0になったってところか。

通常時と比べたらちよこつと強くなつてはいるが、その変化量は普通のヒステリアモード時とあまり変わらないからな。

これならベルセの方が強い。

だが、それも仕方ない。ヒステリア・レガルメンテは傷付かれた女性の数だけ便乗して強くなっていくモードだから音央一人分だけじゃ、あまり変わらないのだ。

「大丈夫だよ。お兄ちゃんは今もう戦わなくていいから。理亜ちゃんと私でお兄ちゃんに降りかかる火の粉は振り払うから」

「それは魅力的な提案だけど、お断りするよ。」

女性に守られるだけの男にはなりたくないからね」

映像を見ると、音央は空を飛んだ。

アレは理子やアリアがやったみたいなのツインテールで飛行……ではないな。背中からなんか小さな羽が見えたし。

その姿はまるで『妖精』のようだな。

「『妖精の羽』かあ。ロアってなんでもありなんだね〜」

かなめが感心するかのような声をあげた。

確かになんでもありだな。

『都市伝説』の通り、噂をなぞえばなんでも出来る、応用が効く力。

それが『ロア』の強さなんだろう。

そう、応用が効くんだ。

だから、俺が今からやることも成功するはずだ！

成功率は50%・50%だが、0じゃない。だからきつと成功できる！
ファイフティー・ファイフティー

「かなめ、悪いけどそろそろ俺は音央のところに行くよ」

「どうやって？ HSSになれたみたいだけとそれでもいつもよりは弱いのに？」

「どうにかするよ。俺は『不可能を可能にする』……そんな男だからな」
ロア

かなめにそう言った俺はかなめの手を振りほどき、何も無い空間に掌をかざす。

そして、ただ一言呟いた。

『削除』
デリート

パキイイーン!!??

空間に亀裂が入り、そしてその空間の先には……。

「兄さん!?」

俺の姿を見て驚く理亜の姿と。

「あ、なんだ。来たのね。ふふーんどう? 『妖精』すらも攫つちやう私の赤マントはやっぱり最強なのよ! はい」

得意げな顔をしながら気絶した音央を差し出すスナオの姿があった。

かなめに視線を向けるとかなめは絶句していた。自分の『ロアの世界』を破られたことがシヨックだったようだ。だが、これでわかつたら、かなめ? 俺を相手にするのは容易じゃないって。

俺はかなめが展開していた『ロアの世界』を強制的に解除して、尚且つ、空間を十二宮中学校に繋がるように『干渉』したのだ。

『消去』と『干渉』。

それが俺のロアの力だからな。

音央を受け取りながらそんなことを思っていると、理亜が語りかけてきた。

「音央さんは、兄さんの代わりに戦いに来たと仰いました。自分の罪は決して許されることはないけど、自分や鳴央さんにとって兄さんは恩人で……これからも、自分のよう

な口アやハーフロアを助ける『主人公』である、と」

「……音央……」

よく見ると俺の腕の中で気を失っている音央の目元はちよつと赤くなつていて、泣いたような形跡があつた。

音央が泣くほど悩んでくれた。その事実嬉しさも感じるが、だが何より泣くまで追い詰めてしまったことに悔しさを感じる。

「ん……え？　あ、モンジ……」

と、腕の中でもぞもぞつと音央が動く。どうやら失つていた意識を取り戻したみたいだな。

「何勝手に突つ走つてるのかな？　　後でオシオキだよ」

「お、オシオキつて何する気よ！　　つていうか、あんたなんでこんなトコ来てんのよ！

つてか下ろせ変態むつつりスケベスケコマシ!!?」

「むつつりじゃねえ!?」

返對つて、何で音央がヒステリアモードの昔の呼び方を知つてるんだ？

「むつつりしか否定しないのねっ」

スナオちゃんからツツコミが入り、理亜とかなめのじとーつとした冷たい視線が突き刺さる。

いや、否定したいんだけど……今までいろいろやらかしてきたから否定できないんだよ。

そんなことを内心思いつつ、音央の体をゆっくりと地面に立たせた。

「でも、ありがとう。俺と理亜の為に悩んでくれて」

そう言いながら俺は音央と理亜の間に入るように立つ。

そして、理亜と目を合わせる。

「音央さんが『妖精の神隠し』そのもので、大勢の人々を消してしまった罪滅ぼしがしたいというのは理解できました。そして、兄さんがそんな貴女達罪のあるロアでさえ救おうとしているのも、納得しました」

「理亜ちゃん……」

「ですが、それとこれとはまた話が別なのです。音央さんだからこそお話しますが、私が兄さんを私の物語にしたいのは、兄さんを信用していかないからではありません。むしろ、兄さんならば私よりも多くのロアやハーフロア、ロアの事件に巻き込まれた人々を救うこともできるとすら思っています」

「っ、だつたら!!?」

「だからこそです。そうやって仲間を増やし続けた兄さんは、その仲間が傷付くことや消失を恐れるあまり、単独で最悪の敵に挑むことになるからです」

「最悪の敵……?」

音央が疑問の声を上げる。

俺はかなめが語っていたいくつかの話からそれがどういった存在かを思い浮かべることができた。

「かなめが言っていた破滅の属性を持つロアか?」

俺の眩きに理亜はキツとした表情を浮かべ、かなめを見る。

「……話されたんですか?」

「うん。でも、まだその正体までは言っていないよ?」

多分、お兄ちゃんも薄々感じているとは思うけど」

ヒステリアモードの時に思い浮かんだのは、理亜が見たあの夢。

真紅に染まった空。大災害にでもあったかのような崩壊した街並み。

そして、狂ったように高笑いしていた聞き覚えのある少女の声

「さ、最悪の敵……理亜ちゃんとか、あの氷澄って人とか、みんなの力を合わせればなんとかなるんじゃない?」

「おそらく、今集められる全員の力を使っても。それどころか近隣のロア達を集めても。勝利する確率は低いのです。それだけ、その敵は恐ろしいロアなんです」

「そんなのっ! だって、自分で言うのもなんだけど『神隠し』とか、ええと、なんか

マツハの凄い技とかだつて、なんとかしてたのよ？」

「そうですね。兄さんはそういう意味ではとてもよくやっているとあります。最初から強いロアばかりと戦い、そのレベルアップも早く、頼もしい『主人公』になっているのは確かなことでしよう」

「だつたらー！」

「でも不可能です。それだけ、その『最悪の敵』というのは恐ろしい存在なんです。兄さんがいくら人間離れた人でも、8番目のセカイに『逸般人』なんて書かれた変人だとしても、ゼーったい勝てません。

皆さんが力を合わせても、この町にいるロアの力を集結させても勝てないくらい、それだけ強い敵なんです。

それこそ、皆さんを守る為に単独で挑む、なんて愚かな選択をとってしまったくらいに俺が挑むことになるロアはそんな凄い存在なのか……っていうか、あの、理亜さん。さりげなく、俺のことデイスつてませんか？

しかし、『終わらない千夜一夜』と呼ばれる、どんな都市伝説でも対抗できるはずの『主人公』が恐れる存在かあ。

……二つほど、思い浮かんだんだが……それは流石にないな。

絶対、違うな。うん。頼むから絶対に当たらないでくれ。もし、当たったら俺は戦わ

ないぞ、絶対だぞ！

などと、思うが俺が絶対、絶対言うのとロクな目に遭わないわけで。

「はい、一体なんなの？　理亜ちゃんくらい凄い『主人公』がそんなに恐れる敵って。えっと、都市伝説なんだよね？」

「はい。それは世界中で信じられたほどの、恐怖の都市伝説」

その名を口にするのも恐ろしいとばかりに、理亜は間をとって、そして、言うのを躊躇うかのように視線を落とす。

「そ、それってなんなの？」

尋ねる音央の声も震えていた。ロアである彼女は、もしかしたら何かを察したのかも
しれない。

世界中で噂されるには、世界中の人間がそれを半信半疑で語り合わないといけない。

それくらい有名な、誰でも知っているレベルの噂話——『世界』が危険になっ
てしまうような噂話。

それは……。

「はい、その最悪のロアは、かつて1999年7月に、多くのロアやハーフロアが挑み、
戦い、多大な犠牲を払って、絶望的な戦争の果てになんとか封じることの出来た存在」

1999年、7月。

それは、子供でも知っているほど有名な『予言』。

俺が子供の頃流行っていた、『世界』をも巻き込む大騒動を起こした『逸話』。

『ァンストゴルラムモアの大予言』です」

第十六話。二人の魔女

『アンゴルモア・プロフィット』
『ノストラダムスの大予言』です」

理亜のその言葉が響いた瞬間、俺は信じられない場所に立ち、信じられない奴との再会を果たしていた。

辺り一面に広がる、雪景色。灰色に濁った空。

白銀の平原に、一瞬で変わったのは、『ロアの世界』に取り込まれたという認識で理解できる。

だが……だが、なんでお前がここにいるんだよ？

「アリサさん達もいらっしやいましたか」

「おう、今来たぜ」

「久しぶりだな、遠山」

俺の背後から響く明るい声。

振り向けばそこに佇むのは銀色の髪を伸ばす二人の少女の姿があった。

一人は、ニヤリと不敵な笑みを浮かべて、銀髪をこれでもかかってくらい伸ばした青い瞳の少女。

そして、もう一人は……

二本の三つ編みをつむじ辺りに上げて結った、刃のような切れ長の、サファイア色の瞳をした少女。

俺はどちらの少女も知……っている。

二人とも、面識がある『魔女』だからだ。

青い瞳をした少女の名はアリサ。

『予兆の魔女・アリシエル』その人だ。

そして、もう一人のサファイア色の瞳をした少女も『魔女』だ。

「久しぶりだな、アリサと……ジャンヌ」

『銀氷の魔女』こと、ジャンヌ・ダルク30世。

かつてのイ・ウーの一員。

イ・ウーの中でも穏健派……研鑽派ダイオの一員で、極東戦役エでは俺達のチーム『バスカール』が所属した師団ディンに所属し、お互い協力関係にあった魔女。

何故かは知らんが、その魔女が俺の前に現れたのだ。

「ようこそ『101番目の百物語』……いや、『呪』エネイブル。私の『魔女の工房』ウイツチアトリエに」

アリサが告げたその言葉に驚く。

「これも、魔女の工房なのか……」

今朝方、氷澄や金三と戦った時にキリカが招き入れてくれた異空間『魔女の工房』ウイッチアトリエ。キリカの空間は気味が悪い場所だったが、ここは『雪』しかない。

工房というより、平原といった方が正しい。そんな場所だ。と、そんなことを考えていた俺に銀氷さんは。

「遠山はこういった魔術や魔法とかには疎いからわからないかもしれないが、いいか。魔女の工房は必ずしも、何かを生み出す場所とは限らないのだ。

魔術を使うのに、最適な空間を構築する。そういった空間を創るのも立派な魔法だからな。

これは魔女に限った話ではないぞ？　これはロアなら誰もがあてはまることで、お前にも関わることだからな。いずれ、お前も自分だけの『ロアの世界』を展開出来るようになるだろう。

だから、遠山は知っておくべきなのだ。ロアや魔術のことをもつと。そもそも、お前はもう少し魔女私や女性についてだな……」

お説教気味に言ってきた。なので俺は役立ちそうな前半はともかく、後半は聞き流す。

ジャンヌのお説教を聞き流して、アリサと音央の会話を盗み聞きしていると。

「まさか『神隠し』を隠せるとは思わなかったぜ」

「う……」

音央は音央で、スナオちゃんに攫われ、アリサに『神隠し』みたいな目に遭わされ、かなりバツが悪そうな顔をしている。まあ、真の『神隠し』は鳴央ちゃんの方で、音央はどちらかというと同なる『妖精』っていう感じだからな。

「さて、本題に入るが……丁度、ラスボスの存在を明かしてたみたいだな？」

「はい。兄さんが殺されるであろうロアについて教えていました」

「うん、お兄ちゃんに『破滅』について、少し教えたところだよ」

理亜とかなめの言葉に頷いたアリサはそのまま、理亜の隣に立つと腕を組みながら偉そうな姿勢をしながら語り始めた。

「今聞いた通りだ、エネイブル。『ノストラムスの大予言』^{アンゴルモア・プロフィット}つてのは、こつちの世界、業界じゃあ神話や伝説より何倍もおつかない存在だったのさ。1999年には世界中にいた『ロア』が一丸となって戦った、なんてドリームバトルもあつたくらいなんだぜ？」

そんなドリームバトルがあつたのかよ!!?

元いた世界じゃ、何も起きないまま、普通に21世紀を迎えたつていうのに……。

「そして、とあるロアの中に封じることによってようやくその脅威は去った。ま、その辺りはいずれ誰かから聞いておくれ。それなりに悲劇的でそれなりに格好いい話が、それなりな時間で語られるはずさ」

「もしかして……話すのが面倒なのか？」

「ああ、まあな。私が話さなくても、いずれ嫌でも聞くことになるからな、お前さんは。一ついいことを教えてやるよ。『女難』の予兆が強く出てるぜ、お前さん？」

「うわあ、嫌だな。『魔女』であるアリサから言われると、本当に女難な出来事が起こりそうで不安しかないんだが……。『魔女』から告られるとか本物の占いっぽいな。いや、アリサ的にはこれも『予兆』なのかもしれないけどさ。というか、占いで思い出したけど。そういえば、昔、白雪がやった巫女占札で『キンちゃんみんなの前からいなくなる』とか出たって言うってたが……。アレ、当たったな。俺、死んで異世界に来ちゃったし。あの時は笑い飛ばしたけど、『魔女』の占いは本当に当たってるからな。嫌だな、こりゃあ、『女難』の予兆も当たるかもな。」

「というより、すでにこの状況が『女難』そのものっぽいし。」

「などと考えていた俺はふと思った疑問をアリサにした。」

「ラスボスが『ノストラダムスの大予言』なのは解った。それが封印されてることも。ということは、だ。そいつがもうすぐ復活して、俺が殺される……。あの予兆はそれが原因なのか？」

「ご名答。『アンゴルモア、プロフェット』は、そりゃ大予言つくくらいだからな。復活すらも予言されてしまっているわけよ。んで、一度目覚めてしまったらやっぱりまた世界を

滅ぼそうとするわけさ。なんせロアだからな？

噂通りの行動をとる。まあ、大抵の

『主人公』はまた殺されるんじゃないかな」

「え、えつと……理亜ちゃんの『千の夜話』は……？」

話を聞いていた音央が継るような表情を浮かべて、アリサに尋ねる。

「それだけでは無理だな。なんせ奴は『大予言』だからな。一度噂されただけで復活してしまう。奴の『予言』は世界規模で広まつてるからな、噂が尽きることはない。つまり、奴は死なないのだ！」

「はい、ジャンヌさんの言う通り、私のロア的能力でも完全に消すことは出来ないかもしれません。『ノストラダムスの大予言』は様々な憶測が飛び交い、人々が実に様々な姿形を描いた『人類が築いたロア』です。その対抗神話は……『その後、世界はやつぱり滅んでいかなかった』というものかしかありません。そして、それであっても人々はまだ『予言』を信じて広め続けるのです。それが『ノストラダムスの大予言』の能力の中で最も恐ろしいもの『破滅の日』です」

対抗神話でさえ、覆す予言。

その予言を無くすには、それこそ、人類が滅びるとかしない限り、消えないのかもしれないな。

「そ、そんなのどうやって……？」

音央が声を震わせながら尋ねる。

「どうやっても無理だったから、私らは頑張つて噂を広めてだな。とあるロアの中で眠りについて貰ったわけよ。だけど、まあ寝てるだけだからな？」

もうすぐ目覚めてし

まうわけだ。それが解るのが私の能力『終末の予兆』さ」

それが本当なら、アリサも大概だなあ、やつぱり。

世界の終末すらも予兆できる、そんな能力をアリサは持つのかよ。

「だから、そいつをなんとか出来る可能性のある『主人公』を探していたわけよ。

そして、見つけたのがお前さん達さ。『千夜一夜』と『不可能を可能にする男』。対抗神話や完璧な推理を覆す。理を破壊する存在のお前さん達ならなんとか出来るかもしれない……そう思っていたんだが」

思っていた？

過去形つてことは……つまり。

「だが、さっきの戦いを見て解つた。お前さんには失望したぜ、エネイブル。

『悪戯妖精』ごときにその様じゃあ、『第二の可能性』はない！

『第一の可能性』……『ノストラダムスの大予言』を対抗神話で弱らせてから殺す。我々にはその道しかない。

つまり、『ノストラダムスの大予言』を倒すのは兄さんの方ではなく、理亜の方つてこ

とだ」

「第二の……可能性？」

その言葉には聞き覚えがあつた。それはピラミディオン台場で警備任務に就いた時、パトラに襲われたアリアを助ける為に、動き出した俺の前に立ちはだかつた、兄さんが告げた言葉。それが第二の可能性。

『イ・ウーのリーダー、『教授』プロフェッショナルこと、シャーロック・ホームズの暗殺』。

それを思い出す。

「なんだ？ なんのことだ！」

キリカが言っていた。シャーロックは、あいつはこの世界に来てると。

もしかして……この件に、あいつが関わってるのか？

「……ああ、お前さん勘違いしてるな。この件にあの人達は関与してないぞ？ 全く

の無関係ってわけじゃないが、少なくとも敵じゃない。

私達に協力してくれる良いブレインになつてるからな？」

「信用できるか！ 少なくとも理亜を唆してそんな危険なロアと戦わせようとする奴の言うことなんか聞けない」

「お前さんの信用は必要としていないんだよ。少なくとも私はな。ただ、ウチのマスターは言いたいことがあるみたいだぜ？」

アリサのその言葉で、理亜の顔を見ると理亜の顔にはなんの感情も浮んでいなかった。

「はい、『ノストラダムス』との戦いに兄さんと、兄さんの物語達は必要ありません。なので、兄さん」

そう言つて、理亜はその台詞を再び口にした。

「私の物語になつてください」

雪がしんしんと降り続く中。何故か、その言葉は悲しみに彩られているように聞こえた。

理亜の言葉に感情はこもつてない。表情にもだ。

だが、だからこそ。

だからこそ、今の俺には解る。

「絶対にお断りだ」

憑依してからだだが、ずっと側で彼女を見てきた俺だからこそ、解る。

だから、ヒステリアモードの俺でも強い口調で理亜の言葉を否定出来た。

「兄さん？」

「絶対に嫌だね。理亜がそんなおつかないロアと戦わなきゃいけないってだけでも嫌なのに、その時、俺はのんきに過ごさなくちゃいけないなんてもつと嫌だ。理亜のお願い

だから、本当は聞いてあげたいけど。それが『私の物語になって一緒に戦ってください』ならOKだけど。だが……そうじゃないのならお断りだよ！」

「そんな我儘を言わないでください。兄さんがあの戦いに参加したら、死んでしまうんです。私はアリサさんの能力によって、何十、何百ものパターンを繰り返して、兄さんが死なないようにイメージして、シミュレーションしました。でも、どうしても兄さんの死は回避出来なかつたんです！　兄さんはご自身の物語と私を大事にする余り、確実に負けてしまうんですよっ！」

理亜の口調が強まる。それを聞いていた音央は痛そうに目を細めたかのような表情を浮かべる。

「嫌なんです。私、兄さんがいなくなるのは嫌なんです！　兄さんには幸せになってもらいたいです！　例え、ここにるのが別の人格が乗り移った兄さんでも、それでも……いいからっ、だから、私の前からいなくならないでください。兄さん……！」

それは、必死な理亜の心からの叫びだった。

「……理亜は確かに、自分からその物語の『主人公』になったみたいだね。自分から、その苦しい道を許諾したんだと思う」

「……はい……」

「だけど、だからといって、ずっと苦しみ続けないといけないなんてことはないんだ！」

『主人公』をやつてるからつて、ずーっと悩み続けないといけないなんてことはないはずだ！

『普通の幸せ』を掴み取る為に、嫌なら戦わなくてもいいはずだ！

「勝手なこと言わないでよね！ アンタにマスターの気持ちなんて解らないわよ！」

「ああ、全く解らないさ！ 人の気持ちなんて、特に女性の本心なんて解つていいもんじゃないんだ！ 解らないからこそ、考えて、想像して、気を使って、優しくして、時に叱りあったり、銃口を向けあったり、刃物をぶつけあったりしながら。お互いの気持ちを近付けていくのが人間だからな！」

つていうか、女性の気持ち全て解つたら、俺はこんな苦勞してないつーの!!?」

ヒステリアモードが切れかかってきた俺は、ついついスナオちゃんの売り言葉に、買言葉つてしまった。いかん、自制しなくては。

だが、今の言葉に対しては俺は謝る気はない。もう、謝らない覚悟も出来ている。

「俺が逆の立場だったら、確かに理亜やかなめのように戦わせないつていう手段をとつていたと思う。戦いを止めさせる為に、自分の物語にして。危ないことはさせないようにしたはずだ。おつかない、ラスボスに挑む前に、格好つけて、『絡指』なんかして、『行つてきます』『行つてらっしゃい』なんかしてたと思う。だけどな！」

俺は人差し指を理亜に向けて叫ぶ。

「実際にそれをされてみたら、いかに嫌なことか解ったからな俺は。だからそうされた俺じゃなきゃや言えない言葉で、お前らに提案するぜ、理亜、かなめ！」

俺は最初から……遠回りをすることになったが、この言葉を伝える為にここに来たんだ。

「俺の物語になつて、一緒に戦おう、理亜、かなめ!!？」

本当は、理亜やかなめを戦わせたくない。コイツらが傷つく姿なんか見たくない。苦しむ姿を見たくない。泣き顔を見たくない。もしかしたら……いなくなるかもしれない。

そんな恐怖に耐えられる自信なんかねえ！

でも、だからこそ。だからこそ……俺はコイツらに側にいてほしいのだ。一緒に戦ってほしいんだ。

大切だから、だから側で……！

「俺が絶対死ぬ運命っていうのなら、俺の真横で俺を支えてくれ！絶対に考えたくないけど、俺だけを死なせたくないのなら……」

この先の言葉を言うのにはかなりの抵抗がある。勇気がある。

だけど、その勇気を出すのが、俺の『主人公』としての『覚悟』だ！

「俺と一緒に死んでくれ！」

「つ!??!」

理亜の顔に衝撃が走る。まさか、こんなこと言われるなんて思わないよな？

だけど、俺は言つてやる。理亜やかなめと。

大切な妹達と。これからも一緒に歩む為に。

「あ、あんた、何言つてんのよ!??!」

「モンジ!??!」

スナオちゃんや音央からは当然のように抗議の声があがる。

ジャン又なんか呆れた顔をしている。

だが、俺はこの手を引つ込めるつもりはさらさらない。

「俺だって、一緒に死ぬのは本当は嫌だ！　本当は理亜やかなめには幸せになつて欲

しい。理亜達が死ぬくらいなら、自分が庇つて死んだ方がマシだって、そう思つてる。

けどよ、理亜達だってそう思つてるなら……だつたら一緒に死ぬか……」

「一緒に……」

「生きるんだね、お兄ちゃん……」

俺の言葉にボロボロと大粒の涙を流す二人を見ながら、俺は二人に声をかける。

「決めたよ。俺は、二人を俺の物語にして、ガンガン戦つて貰う。傷つくかもしれないし、苦しむかもしれない、泣くことになるかもしれない、命の危険だつていっぱいある。

それは本当はすつごく嫌だけど。俺自身も苦しむかもしれないけどな。でも、だからこそ。――『主人公兄妹』として、嫌な気持ちも分け合って生きていかないか？」

俺は右手を突き出すように、差し出した。

「嫌なこと。苦しいこと。辛いこと。そういうものを受け入れて、そして乗り越える道を探すことが『覚悟』だと思ったんだ。絶対にそういうことから逃げないように立ち向かうのが『主人公』の覚悟だと思ったんだ。だから俺は、その覚悟を示す」

俺がそう思えたのは他でもない、理亜が言ったある台詞が決めてでもある。

「それに、理亜はさつき、俺にこう言ったね？」

『アンゴルモア・プロフィット』
『ノストラダムスの大予言』を倒すのは絶対に不可能だつて」

「……確かに言いましたが、それがなんですか？」

「それを聞いて、安心したんだ」

「……何故ですか？」

かなり弱まっているが……ヒステリアモードはまだ続いている。

「『不可能』」

その言葉が、理亜の口から出たからな。理亜は知らないのか？

俺がなんて呼ばれるロアなのかを。俺は『呪』

『エネイブル』

不可能を可能にする男な

んでね」

第十七話。予兆の魔女

「あはははははは」

俺の言葉に、スナオちゃんとかなめは不服そうな、理亜とジャン又は呆れたような顔をしていた。

そんな中で、ただ一人高笑いをした奴がいた。

それはやはり。

「いや、なるほどな！　これはいい。その返答は予想しなかったぜ。ルーキーにしちゃ、いい覚悟を持つてるじゃないか。うん、それは『私達』が一番恐れる資質だ！」
高笑いしながら、俺を見つめるアリサ。その笑いにはどこか、薄ら寒いものを感じてしまう。

「リア、お前さんの兄さんはなるほど。お前さんが大事に思うことあって、かなり面白くて、楽しい存在だな。うん、こいつは面白い。お前さんの物語にするのは諦めるんだな」

「え、あ、アリサさん……？」

アリサの言葉に、理亜は戸惑うような視線を向けた。

「だけど、悪いな。私は口先だけの覚悟つてのは信じないことにしているんだ。いや、結

構いいことを言つてるとは思うぜ？　苦しいとか、悲しいとか、そういうのを受け入

れて戦う覚悟……大変結構な覚悟だ。だけど、悪いな。私は正直、お前さんが言う覚悟
が正しい、それをやり遂げられる、なんて、思えないんだよ。だから――

アリサが自分の頭を手をかざすと、白くて大きなとんがり帽子が現れた。とんがり帽
子と同時に真つ白なマントも現れ、アリサは一瞬のうちにそれらを身に纏う。

「お前さんが本当に不可能を可能に変えられると思つているのなら……理亜ですら絶望
しそうになった、私の得意技。『予兆』と戦つて貰おうか」

そして、俺に向けて人差し指を突きつけた。

「お前さん、もうすぐ死ぬぜ？」

不敵な笑みを浮かべながらまるで決め台詞のように、そう告げた。

アリサに人差し指を突きつけられただけというのに、俺は目眩に似た感覚を味わつて
いた。

『もうすぐ死ぬ』と言われた瞬間、言いようのない胸騒ぎに似た、何か胸の奥からじわじ
わと溢れ出してきたような。強いて言えば、銃撃された時や水の中に沈められた時に感じ
る、死の恐怖。『俺はこのまま死ぬのか』という不安感に近い。

理亜やかなめ、音央もアリサの声を聞いて黙りこんでしまつてゐる。それだけアリサ
の声には威圧感があり、有無を言わさない強さがあるのだ。

「それは『ノストラムスの大予言』^{アンゴルモア・プロフィット}が復活したら死ぬ、という意味かな？」

「いんや。私は『予兆の魔女』だからな？」

私に会ったつてだけでその人間の寿命は一

気に縮むこともあるのさ。もつとも、そうじゃない場合もあるわけだが……お前さんか

らは撲殺、刺殺、斬殺、銃殺……脳の病による突然死とかの死の予兆を感じたぜ？」

まあ、いずれにしてもあれだ……私程度の死の運命、乗り越えられないことにはラスボ

スには勝てないぜ？」

「なるほどね、『予言』の前に『予兆』と戦えつてことか」

「話が解るじゃないか、さて……出せる本気があるなら出してみるよ？」

『本気を出されても、どうとでもなる』……といった感じに腕を組み、俺が行動を起こす

のをアリサは待っている。

「解った。とりあえず、大切な妹を巻き込んだ責任はとつて貰うからな？」

「おお、いいぜ。どーんと胸を貸してやるよ」

胸を叩いて得意げに語るアリサだが……いや、あの。

そのスレンダーな体のどこに借りる胸があるんだ？

そんなことを考えていると、様子を見守っていた理亜が意を決したように一步前に進

み出た。

「アリサさん、兄さん」

その口から出た声は震えていて、今にも泣き出しそうなくらいか弱く、儂さそうな感じに聞こえるが理亜はなんとか声を張り詰めて、俺とアリサの名を呼ぶ。

「正直、私は迷っています。兄さんの先ほどの言葉に対する返事がまだ出来ていません」

その目からはまだ涙の跡が残っていて、戸惑いを残しているように感じるが。

「だから、私も戦います、アリサさん。私も戦って、兄さんの意志が本当なのか……確かめます」

すぐに強い視線になって、俺を見据えたのを俺は見過ごさなかつた。

「私は構わないぜ。だが、その兄さんは妹に手を上げられないんじゃないか？」

確かにその通りだ。切れかけているとはいえ、ヒステリア性の血流が残っている俺には、妹を攻撃することなんかできやしない。いや……例えば、ヒステリアモードじゃない普段の俺でも、妹に攻撃なんかできない。

………返り討ちに遭いそうだしな。

だが、それでもやらなければならないのなら俺は。

「俺も構わん。それで理亜が納得するのなら、俺は理亜に覚悟を示す。『千の夜話』アルフ・ライラを攻略してやるよ」

そんなことが出来る確証なんかない。

勝てるかどうかなんか、解らない。

多分、出来ない可能性の方が高いだろう。分が悪い賭けをしているのは重々承知だ。だが、それが何だ！

分が悪いなんて、いつものことだ。

「だとよ。そんな自分を攻撃出来ない兄相手に、非情になつて本気で戦えるのか？」
アリサが意地の悪い質問を、意地の悪そうな顔で理亜にした。

「戦えます」

そんなことを言われた理亜の答えは即答だった。

理亜のその態度に満足そうに、アリサは微笑む。

きつとアリサは悪い奴ではない。

だが、やはり『魔女』だけあって、油断できない。

そこには人間のような情や常識、倫理観なんかないのだから。

それに、どんな理由があろうと、大切な妹達を誑かし、苛酷な運命を選ばせたこの『魔女』を俺は許せそうにない。例えば、それが理亜の命を救う為であっても。

俺はこの魔女を許しはしない。だから、躊躇わずに自分の口アとしての『力』を使うことにする。

「も、モンジツ」

「ん？」

振り返ると、音央が真剣な顔をして俺を見つめていた。何故か口元を引き締めて、俺を睨んでいる。

「あたしだって、覚悟、決めてるんだから」

それは、俺が先ほど理亜に対して告げたことに対する言葉だった。

「だから、あんた、一人には戦わせない。あたしだって戦える、あたしだって、役に立てる。あんただけを苦しませない」

「……だつたら、もう一人で戦おうとするな。お前は俺の腐れ縁な友達なんだから」

「ん……そうね。あんたなんか気を使ったあたしがバカだったわ。むしろ、あんたに全部押し付けて楽にすれば良かったわ」

音央言葉に、俺達は笑い合う。

一之江やキリカとは違う、音央だからこそその言葉。

その言葉や、態度に安心感を感じる。

「よし、行くぜ音央。お前の力貸して貰うからな」

「いいわよ。上手く使いこなさないよね！」

音央の言葉に頷いてから、俺は右手に持ったDフォンを強く握り締める。途端、右手の甲が熱くなり、その熱をアリサに向けて一気に真横に振り抜いた。

そこに一筋の赤い軌跡が生まれる。

俺は出来るだけ、厳かな雰囲気になるように真剣な口調で語り始める。

「さあ、不可能を可能に変える『百物語』を始めよう」

直後、Dフォンが勝手に動作し、俺自身を写真に写す！

不思議な和音のメロディーが動作音として鳴り響き、辺りの雪景色が黒と金色のモノトーンカラーに包まれた。

俺の周囲を蠟燭の炎に似た無数の緋色の光が回転していく。

その炎が立ち込める中、俺は俺が思い描く『物語の主人公』の姿を取り始める。

俺が思い描いた姿は、全身は黒い背広姿で、その上から白のロングコートを羽織り、頭に黒いシルクハットを被っている。

『百物語』用のDフォンはモノクルに変化した。

右眼にそのモノクルを装着している。

見た目はかなり怪しい人物だが、一応学者や賢者っぽくも見えなくはない。

百もの物語を集めるならば、学者や賢者っぽい感じで。

不可能を可能に変えるなら……それはきつと探偵っぽい感じだろう、と思っ
てイメージした姿がこれだ！

ただ、普通の学者にはない……胸の内ポケットにホルスターを付けていて。

左右のホルスターには俺の愛銃、ベレッタM92Fsと黒いデザートイーグルが収め

られている。

さらに右手に握っていた『エネイフル 罎』用のDフォンは緋色に光り、今や細身の刀。

直刀に近い形状の……スクラマ・サクスに変化している。

「へえ、それがお前さんが描いた『百物語』の主人公の姿か。人間を捨ててバケモノの側へのシフトチェンジってわけだな。ふむ……」

アリサが俺の状態を的確に指摘してくる。

「どうやら『魔女』というのは好奇心旺盛で研究熱心なところがあるのはキリカもアリサも変わらず、同じらしい。」

「一番興味深いのは……お前さんの『死の予兆』が塗り変わったことだ。さつきまで、いつ死んでもおかしくないくらいだったのに、ロアになった途端、いつ死ぬのか解らないくらいになりやがった。お前さんは自分の運命、物語を自分で創り上げる『主人公』ってことみたいだな」

俺の変化をあくまで余裕な表情で指摘して、把握するアリサ。

確かにアリサの言う通り『人間』一文字疾風の生命力は死ぬ確率が高かったのかもしれない。

だが、『101番目の百物語』であり、『不可能を可能にする男』である『エネイフル 罎』遠山金次の生命がどうなるのかは、どんな予兆も予言も解らないということなるのかもしれない。

い。

だったら……俺は俺のすべきことをしてやる。

そして、アリサが把握出来るように、俺の脳も今は『ロアの知識』によって理解していた。

今まで謎だった『魔女』アリサの正体が把握出来る！

「人々が不安に思ったり、ジnkクスを信じたりする気持ち。そういつたものを操る存在が何処かにいるのかもしれない……そんな想いが生んだ『魔女』。それがアリサなんだな」

「ご名答。興味深いな、その姿になった途端に人の認識ではなく、『ロアの認識』で物事を把握出来るようになったってことか。『百物語』とか『罍』とか『千夜一夜』ってのは本当に厄介なロアみたいだなあ」

厄介と言いつつ、その瞳は嬉しそうに輝いてるのはなんでだ？

「リアよ、お前さんの兄さんは、我々の予想を超えるバケモノに進化してしまってるかもしれないぜ？」

理亜はそんな俺の変化を——無表情に、ただ真剣な目で見つめている。

本当はこんな姿は見せたくないが、それでも俺は彼女に伝えたい『想い』があるのだ。それに、ロアの視点から見る事が出来る俺は、理亜がどんな存在なのかも解ってし

まった。

最強の『主人公』として名高い『終わらない千夜一夜』。

だが、そんな最強のはずな彼女には凄い身体能力も、その身を守る能力も実は存在しない。

あくまで理亜が使えるのは『話すこと』だけ、だ。

「モンジ、あたしもいけるわ」

音央に頷き返し、頭の中にある『書庫』のイメージに意識を向ける。

そこには大きな『書物』がいくつもの蠟燭に照らされて大量に浮かんでいた。

その中の一冊に手を伸ばすと、それは『妖精の神隠し』の物語だった。

脳の中に『妖精の神隠し』の物語が浮かび上がる。『神隠し』ではない、妖精側から見た物語。人に悪戯したり、人を導いたりすることもある身近な存在。そう、俺にとっても身近な少女がその物語のヒロインとして重なった。

その瞬間、この物語が『可能性』に満ちている物語であることを把握する。

———
 そうか。音央はまだまだ駆け出しの口ア。その物語はまだ完成していない、多くの『可能性』を秘めた口アなのか。

彼女がどんな物語になるのかは、音央自身と『主人公』であり、『書き手』でもある俺が作っていくのか。

「ふあ、ああつ！」

俺の横にいる音央が声を上げ、自分の両腕で体を抱きしめた。

その体がほのかに光輝くのを見て、俺はかつてアリアが見せた現象を思い出す。

（これは『共鳴現象』？

いや、違う。この力は……）

アリアが見せた緋弾による共鳴現象とは違い、その力は俺にも流れ混んでくるのが解る。

それは『物語』の記録。すでに完成されている一之江やキリカ、鳴央ちゃんと違って、これから成長していく『妖精物語』の全て。まだ完成されてないからこそ、未知の力に音央は震えているのだ。

だから、俺はその物語を自身の本として共に歩むことを選択する。

その一冊が自身の物語として、共に成長していくことを許容する。

「一緒に成長するぞ、音央。俺もお前も、自分の進む道で！」

「うん！」

俺達がそう誓いあつた途端に『妖精の神隠し』の物語が、俺の中に溢れ始めた。

可能性に満ち溢れる妖精の物語が今、俺と共に進化していく。

『妖精の神隠し』！

俺が口にした瞬間、イメージの中で手にした本が実体化した。

直後、俺は跳躍——いや、飛行していた。

『妖精の羽』！

『ロアの知識』に触れている俺にはそれがどんな技なのか、瞬時に理解した。

風の流れ、空気の流れを操作して、自由自在に空を飛ぶ能力。

背中に小さな透明な『羽』が生えているのが解る。

ああ、ついに俺は……空を飛べるようになっちまったのか。

なんだか、越えてはいけな一線を越えてしまった気がするな。

自分が人間を本格的に辞めたようで、素直に喜ぶ気にはなれない。

「……人類の夢。『飛行』をこんな形で実現してしまうなんて……これ、夢だよな？」

「……ついつい、現実逃避してしまう。」

「モンジ、現実逃避しないで戦うわよっ」

「すぐ真横に浮かび上がってきた音央が、強気な視線を送ってきた。」

俺達は地上から3mほど、浮かんでいる。

「ふはー、空を飛べるロアってのは結構少ないんだぜ。ま、『魔女』は箒さえあれば飛べるんだけどな。つてなわけで」

アリサは空に浮かぶ俺達を見上げながら、自身のマントに手を突っ込み。

「行くぜ『アゾット剣』」

マントの中から――どう見てもマントに入らねえだろう、という突っ込みどころ満載な巨大な銃器を取り出した。昔、理亜に無理矢理見せられたロボットものアニメに登場する銃器で戦うロボットが使うような巨大なライフル。メカメカしい未来的なデザインは男心をくすぐり、絶対ビームとか出るだろう、って確信が持てるそんなライフル銃だった。

「って、剣じゃないわよね!?!」

隣で音央が突っ込みを入れていたが、うん……それは俺も気になってたところだ。

だが、その返答は予想通りだったのだろう。

「わはは、まあ、気にするなよ。私の箒みたいなもんさ。ほら、理亜、かなめ。乗るぜ?」
「はい」

その巨大ビームライフルには何故か背もたれのあるシートが付属されており、アリサはそこにちよこんと座った。理亜はそのシートの後ろに、横座りで乗る。かなめはそんな理亜に背を向けて同じく横座りで乗った。

直後、ブオオオオン! と水色の光を発しながら『アゾット剣』は浮き上がり始めた。

なんともデタラメな物体だな。

「つてか、アゾット剣つて何よ!?!?」

「……ロアの知識にはないな。あれが『魔女の魔術』で生み出されたもの、つてのは解るんだが」

フオオオオン、と浮かび上がってきたアリサ達を見ながら俺は思案する。

(あれがなんなのかは解らないが、少なくとも魔術で生み出されたものなら、キリカの魔術のように代償が必要なはず。つまり、そこに勝つ為の勝機がある!)

「さて、そんなじゃバトルをおっ始めるとすつか!」

俺達がいる高さまで上がってきたアリサがニヤリと笑う。理亜も風に靡く髪を抑えながら頷き、かなめも「よーし、やつちやおう!」と楽しそうに笑っている。ジャンヌは自分で出した箒に跨って空を飛んでいる。

よかった。ジャンヌはマトモそうだ。などと安心していた。
ところが。

「ちよつと待ったー!」

「うん?」

元氣な、ちよつと待ったコールに目を向けると、スナオちゃんが俺達を見上げているのが解る。

あれ? 乗ってなかったのか。

「いくらアリスがそんなじよそこらのロアよりも遥かに強くて、マスターのリアがさいきよーで、かなめもめちやくちやずるいロアだからって、わたしが置いてけぼりなのは納得いかないわ！」

と、大声で叫んだかと思えば、次の瞬間。その姿は赤いマントの中に包まれ、消えたかと思つたら、タンツと、着地の音が聞こえ、気づいた時にはアゾット剣の先。『砲身』と思われるところに静かに立っていた。

「わはは、まあ確かに。お前さんがいると戦いは盛り上がるよな」

「ふふーん、わたしがいると心強いでしょ？　空の上じやなんも出来ないけどね」

「確かにな。ついでに言うと、そこに立たれると私は照準をつけられないんだ」

「あ、ごめん。しゃがめばいい？」

「おお、それならバッチリだぜ。そんなじや行こうか、リア、カナメ、スナオ」

「うん、マスターの為にこいつらをやっつけちゃうね！」

「本当は兄さんの覚悟を示して貰うのが一番なのですが、似たようなもので構いません」

「うん、お兄ちゃんに近づくと女は皆殺しだよ」

「……カナメのそれは何か違うが、よし、構わん。やっつけちゃうおう」

「OKよ！」

あつちはチームワークがあるんだからないんだか解らない霧囲気だが。

「ねえモンジ。あの銃からビームとか出たら、防げる?」

「ただのレーザーなら多分なんとかなると思うが……正直、解らん」

「あんた、そんな痛々しい格好してるくらいならなんとかしなさいよ!」

「痛々しいとか言うな!　　これでも一応、探偵とか刑事とか、学者っぽくイメージしたんだぞ!　　つてか、パートナーならせめて本名で呼べ!」

「うっさいハゲ!」

「ハゲてねえよ!!?」

急造なチームだけあり、こっちのチームワークはあまり良くない。

「気をつけるスナオ。あれは痴話喧嘩つて言つて、腐れ縁的な幼馴染みと主人公ぐらいしか使えないチームワークだぜ」

「え、そうなの!!?　　わたし、てつきりチームワークはガタガタでラクシヨーなのかと

思っちゃたわつ!」

なんだか妙な評価で警戒させてしまっていた。

スナオちゃん、いくら素直だからつて、『魔女』であるアリサの言葉を鵜呑みにするのは感心しないよ?」

まあ、その素直さで警戒してくれたから助かってるけどさ。

しかし、確かに遮蔽物すら存在しない雪だらけの世界で、あの砲撃から身を守るのは困難だよな。

うーん、一つだけ可能性が思い浮かんだが……本当に出来るのか、そんなこと。

「よそ見してるわよ!」

「よし、早速発射しちまおう」

『アゾット剣』にアリサが両手をつくると、その砲身の前に巨大な魔法陣が浮かんだ。

「なんだ、あれ?」

「知らないわよ! 早く避けないと撃たれるわよ!」

アリサがチラツと背後の理亜を見た。理亜は躊躇いもなくコクンと頷く。

そして、『朗読』を始めた。

『妖精の森に攫われた少女が帰ってきた時、そこには暖かな食事と、優しい

両親がいました。だから、その少女は————自分が妖精であることを伏せようと

思ったのです』

マズイ。あれは『対抗神話』!??

第十八話。死の予兆

「ひうつ!?」

理亜の口から『對抗神話』が語られた瞬間、俺の横を飛ぶ音央が悲鳴をあげた。

音央が悲鳴をあげたのと同時に、俺の胸の中心に激痛が走る。まるで胸の内側を鋭利な刃物で切り裂かれたかのような鋭い痛み。心臓や肺といった内蔵を痛みつけるような違和感と苦しみが襲ってきた。

『ですが、夜ご飯を食べた時。そこにあるのが強い愛であり、そしてその愛は自分に向けられたものではないと知った彼女は、自分の正体を——自分という存在が消えてしまうことも厭わずに告げようとしたのです。「すみません、私は——」』

その『声』を聞いた音央の身体は薄くなり、今にも存在が消えようとしていた。

同時に俺の身に宿る『妖精の神隠し』の力も消えていく。

これが……『對抗神話』。

『千の夜話』を語られた『物語』が辿る末路。

このままでは飛行を維持するのは不可能だ。

そう判断した俺は、すぐさま音央の手を引いて、さらに空高く舞い上がる。

そのままでは回避できるか五分五分だったから右手に持つスクラマサクスを振るい、瞬間的に刀身を超音速に加速させて自身の足元に向けて『桜花』を放ち、その時に発生した衝撃波を利用して上昇した。

『ロアの知識』により、『ロアの視点』で理亜の能力を把握した俺は理解していた。『千の夜話』^{アルフ・ライラ}を発動させるには相手に『声』を聞かせなければならぬ、と。

それも、理亜の声は静かに語る『朗読』口調だった。大声で読み上げるタイプではない以上、おそらく『千の夜話』^{アルフ・ライラ}の有効範囲は『雑音で邪魔されない範囲』、ようは近距離だと判断した俺は音央を連れて『声』が届かないギリギリの高さまで退避したのだ。

『声』が届かない位置に逃げることで回避する、この方法。

これはさつきラインに会った時に思いついた防衛手段だ。ラインは一之江との戦闘時に、一之江の声よりも速く移動することで回避していたからな。ラインが出来たんだ、だったらヒステリアモードの俺にも出来るだろうと思ひ、実践してみた。

まあ、まさかそれを空中でやることになるとは思わなかったけどな。

そして、『ロアの知識』でわかったことだが音央が放つ蔦は

「音央、あのアゾット剣が追ってこれないように、茨で縛るよ！」

「わ、解ったわ!!？」

無数に放つことが出来るし、どこまでも伸びるのだ。

『スリーピングビューティ
茨姫の檻!!?』

俺と音央は同時に両手から茨を放ち、理亜達の乗るアゾット剣を縛りあげた。

これであの飛行するビームライフルが俺達に追いつくことはない。

「これで一安心だな……」

と、安心しそうになった瞬間にそれは起きた。

眼下にいる理亜がアゾット剣に手を付くと、アゾット剣の銃身が怪しく水色に光輝き始めたのだ。

『千の夜話』こそ、ロアにとつての『死の予兆』！ さあ、ハンドレッドワン、ロアの死をたつぷり詰め込んだ一撃をお見舞いしてやるぜ!!?」

アリサが高らかに宣言した。離れていてもその声が聞こえるのはアリサ達との距離が大声を出せば届く距離というのもあるが、離れていてもアリサの声がよく通るからだ。

理亜の声を届かせることが出来る、とかじゃなくて安心したが……『千の夜話』を一撃として放つ、だと？

そんなこと可能なのか！

俺達が見ているうちに、茨の蔦で縛られたアゾット剣の先端に青白く光る魔法陣が生まれだ。

『夜話』の装填完了！」

アリサの声が聞こえたその時。

その砲口に青白い光の粒子が集まっていき

「行くぜ」

『終結砲撃』!!?」

「てーっ！」

スナオちゃんの大声と共に人差し指を振り下ろすと、青白い光が砲口から放たれ、俺と音央に襲いかかった。その砲弾は魔法陣によって増幅され、巨大な光の渦になったものだった。

「うおっ」

「きゃっっ！」

その砲撃は一瞬で俺達のもとへ達し、音央の背中に生えていた羽に直撃した。

直撃された片羽は一瞬のうちに撃ち抜かれ、音央はぐらっ、とバランスを崩して落下し……そうになったのを間一髪のところまで音央の手を取り防いだ。そして、そのまま音央を抱き寄せる。

抱き寄せた音央の体は恐怖で震えている。

震える音央を強く抱き締めてやり、安心させるように声をかける。

「大丈夫だよ、音央。君は俺が守るから」

「あ……あんがと。でもへんなところ触ったら殺すわよ」

「へんなこと？ それはどこかな？」

「ばっ、バカ！ 変態、変態、変態ー！ あんまりジロジロ見んなー」

「やれやれ。助けたのに……姫はご立腹か。女心は難しいね」

強く抱き締めたせい、間近で音央の匂いを嗅いだり、柔らかい感触を確かめたせいもあり、俺はまたなっちまったようだな。

タイミングがいいのか、悪いのか。早速アリサに告げられた女難の予兆が当たった気がするよ。

なーんて思いながら、今された攻撃を思い出しゾツとする。

今のは……間違いない。『対抗神話』の力を込めた超遠距離精密狙撃。

それで狙撃してきやがった。しかも、ワザと羽だけを狙って。

かなり精密な射撃が出来るみたいだな。さすがに今の一撃だけじゃ、絶対半徑……必ず狙撃出来る正確な距離までは解らないが。

いや、今の砲撃はそんな距離なんか関係ないくらい圧倒的な飛距離だった。

空の彼方まで飛んでいったように見えたからな。

そもそも、実弾じゃなくて、ビームという時点で反則だ！

「リアの弱点に気づいたのは流石だな、ハンドレッドワン！ こいつの『千の夜話』は

近い相手にしか聞かせられないからなつ。空の上じやスナオがこつそり運んで聞かせ
るつても無理だ。だが、だからこそ私がいるんだぜ？」

アリサが不敵に微笑みながら告げる。

「アリサさんは『千の夜話』を、すつぱい遠くまで撃てるつてこと？」

音央が俺の左腕の中に抱かれたまま、青ざめた顔をしながら尋ねる。

「ああ！　ピンポイントに超遠距離まで精密に届かせることができるぜ！　だから

お前らがどこに逃げようが、確実に撃ち抜いてやる！」

音央の疑問に対して、アリサは肯定した。

「そして、撃ち抜かれたら音央の羽みたいに『ロアの能力』をかき消される。もしくは、
直撃すればロア自身を消滅させることも出来る————というわけだね？」

「ご名答。その通りだぜ？」

俺の疑問もアリサは肯定した。

そつか。やはり、簡単に勝たせてはくれないか。

飛行すれば理亜の『千の夜話』とスナオちゃんの『赤マント』の空間転移能力は封じ
られる、なんて思ったけど。破天荒な『魔女』の存在でそれも意味がなくなつてしまつ
た。

「よーし、茨も解き終わったわー！」

スナオちゃんの方を見れば、無数の白い手によりアゾツト剣に巻きついていた茨の蔦が解かれていた。そして、茨の拘束から解き放たれたアゾツト剣は……。

フオオオン、と青白い光の尾を引きながら俺達の近くまで上昇してくる。

この距離だと理亜の『千の夜話』^{アルフ・ライヴ}が届くが……既に『語り始めたら逃げる』を実践した以上、再び使ってくるとは思えない。

そして、どんなに遠くに逃げてても精密射撃で撃ち抜かれるなら、近かろうが、遠かろうが……その距離に意味などない。近距離では『対抗神話』。遠距離では『死の予兆を込めた一撃』が放たれるのだから。

「さて、降参するかい、エネイブル?」

「まさか。『主人公』は窮地に陥ってからが本番だからね!」

「ハハッ、違うない!」

逃げ場が無い状況。無いなら作れ、と昔、強襲科^{アサルト}で習ったが、現状だと逃げ場を作る為に行動する余裕もない。あの砲撃を一撃喰らっただけでアウトというのと、音央の能力では茨と羽くらいしか使えないからな。

だが、俺にはまだ切れる手札が残っている。

それは……『^{エネイブル}罫』の『消去』と『干涉』の能力。

さつき、閃いたが。

かなめの『ロアの世界』に『干渉』出来た『エネイフル 罨』の能力なら、『対抗神話』やアリサの『死の予兆』にも対抗出来るんじゃないか。

確証なんてないが。思えば今まで思いついた技が必ず出来るなんて思ったことは一度もなかったのに、なんとかこなってきたから……きつと出来る。

出来るはずなんだ。俺は『不可能を可能にする男』なんだから。

だから俺は試すことにする。自分のロアの力を。

「なあ、音央」

「何よ?」

「俺のここと信じられるか?」

俺の問いかけに一瞬、言葉を詰まらせた音央だが、俺の顔をジロリと睨むように見つめると。

「はあ……あんた、やつぱりバカでしょ?」

呆れたように溜息を吐きながら呟いた。

「え?」

「あたしを信じられる、モンジ?」

「うん?」　そりゃあ可愛い音央の言うことなら全力で信じるさ。その方が楽だしな?」

ヒステリアモードだから、女性を疑いたくないってのもあるが、何より……疑ったり、心配したりするよりも、信じる方が俺には楽だ。それに武偵憲章にもあるしな。『仲間を信じ、仲間を助けよ』と。

「そうね。じゃあ、あたしにも楽しませなさいよ」

音央はニツコリ笑うと、俺の腕に身を寄せてきた。

「あたしはあんたを信じる方が楽なの。疑ったり、不安になったり、心配したりなんて、正直美容に悪いからしたくないのよ。だから、あたしが危ないかもしれないと思うなら、必ずなんとか出来るように、あたしにあんたを信じさせなさい」

あくまで強気に語る音央を見て笑ってしまう。その言葉の意味は一つ。『俺を信じた』ということなのだから。

「解った。何があっても俺を信じてくれ、音央」

「解ったわ。生涯何があってもあんたを信じるわ。だから……ちゃんと楽しませなさいよね」

音央がポンつと俺の胸を叩くと、叩かれたところから熱い気持ちが生まれた。

こいつを何がなんでも守ってみせる。こいつと共に勝利してみせる！

そんな決心をさせてくれた。

「よし、もう飛べるか？」

「ん？ OKよ。どこに行けばいい？」

「俺の後ろで、俺を支えてくれ！ 俺の勇姿を見守っていてくれ」

音央の背に再び妖精の羽が生えた。それと同時に音央は俺の手を離れて背後に回ってくれた。

俺は背後にいる音央の存在を感じながら、そのまま、アリサが構える砲口の前までふわりと移動した。

そんな俺の行動に、スナオちゃんは驚いた顔をするのと、理亜が息を飲む姿が目に入る。

だが、かなめとジャンヌは『やっぱりね』と言った瞳を向けてきた。

今からやることを察してるみたいだ。

「へえ、なんだ。殺る気に満ちた顔してるじゃないか、ハンドレットエネイブダウン」

「殺る気はないさ。これでも元武偵だからね。不殺を信条にして戦うことには変わりはないよ。ただ……」

「ただ？」

「もう後には引けないからね。例えば負ける戦でも男には戦わないといけない時がある。

それは——— 今だ。女を守る時だからね。それにここで引いたら、死の運命を

覆すことやら、理亜の信用とか、そういうのは得られないからね」

だから……ひたすら前へ進む。進むんだ！

「だから、その砲撃を攻略する。全力で撃ってこいよ、アリサー！」

「おおう、マジでか！」

「マジさ。だから容赦なく最大出力で撃ってくるっていいぜ？」

「ふむ。その姉さんもそれでいいのかい？ 失敗したら一緒に消し炭になるわけだ

が」

「いいに決まってるじゃない。あたしはこいつの物語だもの」

音央は誰よりも偉そうに堂々と告げた。

そして、音央のその言葉に理亜の眉がピクリと動いたのが解る。

「おーっ。でかいのは胸だけじゃなく、肝っ玉もだったんだなあ。ま、肝っ玉の場合は据わっている、つてのが正しい用法だが」

「へー」

スナオちゃんのはあきらかに解ってなさそうな感じに返答していた。

「頑張ればこれくらいは大きくなるわよ？」

音央は余裕を見せるかのように、後輩達に向かつてレクチャーしていたが……頑張ればでかくなるものなのか。だったら、一之江やアリアの胸も頑張ればでかくなるのかな？

……想像してごらん。胸がでかくなった一之江やアリアの姿を。

……ダメだ。想像できない。

胸がある一之江やアリアとか、そんな奴らがいたらまず変装を疑うからな！

「ま、ハンドレッドワンがいいならいいぜ。その決断のせいで自分ばかりか、自分の大切な物語までもが消えてしまう可能性があるんだからな？」

そんな中でもアリサはいつもの不敵な笑みの中に、深い意味を込めた視線で俺を見つめてきた。

「どんな手があるのか知らないが、今あんたとそのボインちゃんの『死』はかなり強まっている。それこそ、あともう少しで命、存在が消えるんじゃないかってくらいに」

アリサのその言葉で確信した。アリサは『人の死』までの時間が見えるのではないかと。

「その作戦はあんたの思い込みに過ぎず、大失敗する。そんな『予兆』が見えているんだが、本当にいいのかい？　ボインちゃんも本当にいいのかい？」

それは俺を試す言葉だった。あくまで今、アリサが俺達と戦っているのは俺の力や覚悟を試す為のもの。口先だけではない、本当に俺が理亜と一緒に戦える覚悟をしたかを見る為の。

アリサの杞憂も解らなくはない。それは俺も散々考えて、悩んで……そして決めたこ

と。

だからこそ俺はアリサに告げる。

「多分、今の俺とポインちゃんだったら死ぬだろうな」

「ほほう？」

「つてか、変なあだ名であたしを呼ぶな！」

音央に頭をべしつと叩かれた。

言い出したのアリサなのに理不尽だ。まあ、理不尽な扱いには慣れてるからいいけどさ。

「コホン。ともあれ今の俺と音央だったら死ぬだろうな。なんせハンドレットワンの能力カを手に入れて解つたんだが『妖精の神隠し』には茨の蔦発射と空を飛ぶくらいしか能力はないんだ」

「あつさりバラしちやつていいのか。ロアにとつては弱点の暴露は致命的だぜ？」

「だから致命的に死にそうな予兆なんだろう？」

不敵なアリサに対して不敵に返す。

「だから、その致命的つてのを打ち破つてやる。まずは『不可能を可能にする男』がどれだけチートな『主人公』なのかを見せてあげるよ」

まだ駆け出しの『主人公』である俺だが、『実戦経験』という意味では他の人に引けを

取らないと思う。

だからまずは『俺』が真正面から『死の予兆』を打ち破ってやるよ。

「ハハハ！　OK、お前さんの覚悟の片鱗は見せて貰った。んじゃ、遠慮なくぶつ放すから、死んでも恨まないでくれよ！」

「散らせるものなら、散らしてごらん？」

アリサは大笑いしながら両手を広げた。その手のひらに小さな青白い魔法陣が浮かび上がり、同時に砲身の前にはさっきの倍くらいでかい光の魔法陣が現れる。

「リア、『夜話』を頼む！」

「……了解しました。完全に『妖精の神隠し』チエンジリシグを消し去るキーワードを乗せます」

理亜がアリサの耳元でボソボソ語ると、アゾット剣全体が強い光に包まれた。

その光と対峙してるだけで、もの凄い力が集まっていることが解る。

「おおー、アリサとマスターの本気だ！」

「ああ、本気を見せるさ。あいつらも本気を見せるらしいからな！」

「はい。兄さんが本気である以上、私も本気を出すのは当然です」

「うん、本気のお兄ちゃんもカッコイイからね。『妹』の私も本気で応援するよ！」

「あはは！　アリサとマスターとカナメのそういつたところ好きだよわたし！」

「なるほど、ラブラブだな私達四人は！」

「……大丈夫だろうか、こいつら」

その魔法陣の光が強まる中、四人の少女達は笑いあっていた。

ただ一人ジャンヌは呆れていたが、その頬は緩んでいた。

彼女達には彼女達で絆が存在している。それが微笑ましく映る。

「俺達もラブラブなところ見せつけようか?」

「ば、バカなこと言つてないで、準備はいいのよね?」

「ああ、姫は後ろでのんびりご鑑賞を。ああいうのを相手するのは……俺だけでいいからね」

「ちよつと、あんた本当に大丈夫? 頭打った?」

ヒステリアモード的な言い回しで俺は音声を安心させる。

「つしや、行くぜ!!? 私とリアの、最大出力の『死の予兆』……!」

青白い光の粒子が砲身に集まっていくな。その様子はまるで昔^アテレビ^ニで観た宇宙戦艦の主砲みたいだ。波〇砲だっけ?

戦車やミサイルとやりやったことはあったが、今度の相手は戦艦の主砲クラスそのものとは……なんか、本格的に人間辞めた感がするのは何でだろうな。

「来るわよ、モンジ!」

「解つてる!!?」

俺は真っ直ぐその主砲を見つめた。

敵が銃器を使ってくるなら俺にとってはアドバンテージがある。

なぜなら銃技や銃弾を返す技は俺の十八番だからな。

まあ、今回はビームだけだ。

光学兵器を相手にするのは初めてじゃない。

シャーロックの『緋天』、孫の『レーザービーム』……ビーム系の攻撃を攻略する仕方の復習と予習はとうの昔に済ませてある。

だから、あとは技を出すタイミングさえ、間違わなければいけるはずだ。

「さあ、来い！」

(この桜吹雪……散らせるものなら)

「いっけえー！」

俺の台詞とスナオちゃんの号令が同時に発せられると、アリスは魔法陣の浮かんだ両手を思いっきり前に突き出し。

「全ての可能性を塗り潰せ!!？」 『絶死の結末』デッドエンド ーっ!!?？」

さっきの比ではない、巨大な砲撃を解き放った。

放たれた一撃は真っ直ぐ、俺達に向かって突き進む。

眩い光が視界を埋め尽くし。飛行する程度では避けられないほどの範囲を正に「塗り

潰す」かのように埋めて封じるような一撃。

俺達はその光を真正面から見据えて、全身に力を込めた。

(散らしてみやがれー!!!)

「モンジ!!?」

音央の叫び声が聞こえるのと同時に、俺が突き出した右手にその光が直撃する!!?

「うおおおおおおお!!?」

俺はその光を突き出した右手の掌で受け止める!

(もし、この世界の認識が大きな歪みによって乱れてるっていうのなら……もし、歪みのせいで不幸な奴らが生まれてるだとしたら。もし、歪みによって『破滅』に向かうのを止められないなら——そして、そんな奴らを助けられる可能性を。全ての可能性を塗り潰そうとするのなら——『世界』の『破滅』。それを止めるのが不可能っていうのなら——)

「だったら、俺は……全ての不可能を消し去ってやる——」

俺が叫び声をあげた瞬間、バリーンとガラスが破れたような音と共に。

放たれた光は『消滅』した。

第十九話。螺旋

(出来た!??)

右手に当たった感触に戸惑いながらも、俺は全身全霊の力を込めて立ちふさがる。

避けるという選択肢は最初からない。避ければ後ろにいる音楽に当たってしまう。それにこれを避けたら俺はアリサや理亜とはもう、真正面から対峙出来なくなる。本気でかかってきた相手には本気で挑まなければ顔向けできない。彼女達のような美少女が全力で挑んできたんだ。なら、『男』の俺が避けるなんて選択できるわけない。

それに、俺にはなんとなく理解出来ていた。

例えば、俺に『^{エネアル}哥』の能力なんかなくなつたつて、俺の『全て』を『塗り潰す』ことなんかできやしないつてことを!

「なつ、お前さんどうやって……?」

五体満足でいる俺に、アリサは初めて動揺した姿をみせた。俺はその姿を見てほつとしてしまう。初めてこの^{アリサ}魔女が動揺する姿を見ることが出来たからな。

「諦めなかつたからだ。……君は言ったよね?」

俺の『死の予兆』が見えるつて。だったらもういつペンよく見てみなよ。そして、も

う一度撃てばいい。ただし、これだけは言っておくよ。

『予兆』なんかじゃ、俺は殺すことは出来ない、ってね」

俺がそう宣言すると、アリサは大きく見開く。

そして絶句した表情を戻して俺に問いかける。

「……確かにお前さんの『死の予兆』は限りなく低くなって、今やほぼ0になりやがったが……どうやったんだ？」

俺がどうやって、アリサの『死の予兆』を攻略したのかは『魔女』である彼女にはわからないみたいだな。

どんな予兆をも把握出来るが故に、『予兆』を覆されたら理解ができなくなる。

そこらへんはやっぱり『魔女』だな、なんて思う。

「可能性がなくなる時って、どんな時か解るか？」

アリサに逆に問いかける。

すぐに首を横に振ったアリサを見て『してやったぜ』、という気になる。

かつて、キリカとの戦いで、一之江が言っていた『魔女』の弱点。『自分の予想を超えられること』。

「それは『諦めた時』だ！」

諦めなければ可能性は限りなく0に近くても『ある』んだ

よー！」

『結果論』かもしれないが、『結果』を出す前に諦めたら、その結果は出せない。

「俺に放たれたのはあくまでも『妖精の神隠し』の『対抗神話』だったからな。だから、『呪』の能力である『削除』で『対抗神話』を打ち消したただだよ」

まあ、理亜が『妖精の神隠し』の『夜話』を装填していたから、思いついた方法なんだけどな。つまり『夜話』を理亜が語って、それをアリサが『アゾット剣』に装填して発射するのなら、語られる物語の対象を無効なものに差し替えてしまえば、『対抗神話』は弱まるのではないか。

つまり、『夜話』を『ムダ撃ち』させること。それが俺が思いついた方法だ。アリサが魔術を使う以上、その魔術には代償が必要なはずだからな。

しかし、『呪』の能力である消去がどれくらいの範囲を無効にできるのかは把握出来ていなかったからそこは心配なところだったが、今ので自身の身体が届く範囲内なら問題なく打ち消せるってのは解った。これなら『夜話』を放たれても対抗出来る！

「なるほどなあ、確かにリアの語る『夜話』は一つだけだ。同時に複数の『夜話』を『朗読』することなんて流石に出来ないからな。だが、それをバラしてもいいのか？」

「構わないさ。全力の理亜の一撃を攻略しないと、本当の覚悟なんか示せないからね」

「ちなみに言っとくが、私に魔術を使わせて代償で自滅させる気なら意味ないぜ？」

なぜなら、この『アゾット剣』には『悪魔がいる』っていう噂があるからな。その悪魔が私の代わりに魔力を使ってくれるから私は代償を支払わなくていいわけだ」

「へー」

何故か、アリサの味方であるスナオちゃんがよくわかってなさそうに返事をしたが……なるほど。そんな方法もあるのか。それならキリカの代償を肩代わりするってのもできそうだな。

ん？　　さてよ。肩代わり……かあ。

ヒステリアモードの俺はある方法を思いついた。

「どうかした？」

考え込む俺に音央が尋ねてくる。

「いや、ちよつと思いついたんだが……」

確かに今思いついたこの方法ならアリサの破天荒な力もなんとか出来る気がする。

だが、余りに危険過ぎる。俺一人ならいいが、後ろにいる音央を巻き込むのは許容出来ない。

だから、それは副案にして先に思いついたあの方法を試すことにする。

「音央、もう少しだけ俺から離れていてくれ。これから使う技は全身を使うから、きつと音央もタダじゃ済まないかもしれないから……」

「わ、解ったわ……」

頷いて音央はより後ろに羽ばたいていく。

そして、俺に指摘された理亜は……。

『その男性には未来を変える力が備わっていました』

理亜が静かに『朗読』を始める。

と、同時に——俺の体から、魂から力が抜けていく感覚を感じた。

ああ、やっぱり解ってたのか。

『世界がどんな風に変化していくのか。まるでゲームの選択肢のように脳内で解るので。その選択肢を選べばどんな風に物事が進んでいくか。どんな結末を歩んでいくか。手に取るように。自分自身が思い描いた未来へと導くことも出来たのです。そして、その力を持った男性はその力で様々な、絶対に出来^不ない^能と言われていた出来事を出来^可ることへと変えていきました』

理亜が語る度に、俺は力が削がれていくのを感じていた。頭の中、奥からは強い動悸を感じている。

これが『不可能^エを可能にする男^ネ』の『対抗神話^ル』。

『そして、男性は理解しました。自分には不可能な事なんか、出来ないことなんて何も無いと。どんな無理難題でも必ず可能に出来るのだ、と』

「うぐつ……ぐあああああ!!?」

頭の中が真っ白になった。

『だから男性は行動しました。不可能をなくすことで皆が幸せになれるように。だから男性は戦いました。不可能な状況をひっくり返して、誰も死なないように。だから男性は訴えました。自分ならどんな状況になろうとも、必ずより良い未来へと導くことができるのだ、と』

「うがああああああ!!?」

もう止めてくれ。もう語らないでくれ!

今すぐ、その口を閉じてくれー!

そう俺が思ったその時。

俺の体をギュツと、温かいものが包み込んだ。

柔らかい感触、そして甘い匂い。それらを感じた俺は落ち着きを取り戻す。

と、同時に体の芯に向かって血が強く流れていくのが解る。

ああ、これはアウトだ。血流は止まらない、止められない。

だが、そのおかげで冷静さを取り戻せた。

そして、俺を抱き抱えたまま、ぐーんと空高く上昇していった。

この高さなら理亜の『夜話』は届かない。

チラツと背後を振り返ると、音央が俺の体にしがみついていた。

「ぐっ、馬鹿音央！　離れていろって……」

「バカはあんたでしよう！　さっき言ったこと、もう忘れたの？」

あんただけを苦しませない、あんただけを戦わせない。私も戦える！

そう言ったの、聞いてたでしょ！」

音央が声を張り上げて主張した。

確かに言っていたが、俺は音央に戦ってほしくない。それは音央を信用していないから、というわけではなく、ただ単に危ない目に遭わせたくないからだ。音央はロアとはいえ、長い間普通の人間として暮らしてきた一般人。『妖精の神隠し』という存在が発覚したが、それがなんだ！　普通の生活を送って、普通に生きる。そんな『普通』の暮らしを送っていい存在なんだ。

だから俺は彼女の提案を受けない気でいた。

「確かに言っていたけど、音央はロアとの戦いに慣れてないだろう？　それに理亜との戦いで受けたダメージが残ってるはずだ。あとで音央にはやってもらいたいことがあるから今は体を休めることに集中していてくれ……」

「でも！　私も何かしたいの！　もう、誰かに任せっきりなのは嫌なの！　あたしだって、戦える。あたしだって……誰かの役に立ちたい。お願いだから、一人で抱え込

まないで……」

一人で抱え込むな、か。

まさかそれを音央に指摘されるなんてな。人一倍気が強くて、誰よりも責任を感じやすく、考えるより行動してしまう……そんな音央に諭されるなんてな。

「……悪いな、音央。そして、ありがとうな。君のおかげで気付けたよ。大切なこと」

『仲間を信じて戦う』……そんな当たり前のことを見失うところだった。

「……モンジ」

「だけど、やつぱり今は俺だけにやらせてくれ！　理亜とアリサは強い。正直、勝てるかはわからない。だけど……今だけは俺を信じてくれ！」

音央の力はあとで必ず必要になるから。だから、今は……」

「……解ったわよ。昔から、あんたは一度言い出したら聞かないんだから」

呆れたように溜息を音央は吐く。

そして、俺を抱えたまま、音央はアリサ達の方を見る。

「……あたしの協力を断った以上、必ず勝ちなさいよ」

「ああ、約束するよ。心配しなくても必ず勝つき。なんせ俺には『勝利の女神』様が2人も付いてるからね」

「2人？」

首を傾げる音央に言つてあげたい。一人は君だよ、と。まあ、言つたら言つたであとが大変なことになりそうだから言わないけどね。

「じゃあ、近寄るわよ？」

「ああ、けど近づき過ぎないように気をつけてね？」

「……ここで止まつてくれ。この距離ならギリギリ『夜話』は届かない」

「おや、もう逃げるのは止めるのかい？」

「ああ、戦略的後進は終わりだ。理亜、そしてアリサ！ 『千の夜話』を込めた『死の

予兆』を今度こそ、攻略してみせるぜ！」

「へえー。さつきまで消えそうになつたのに、随分と余裕そうだなあ」

「俺には勝利の女神様が付いてるからな。だから、今回も真正面から挑ませてもらうぜ

！」

「ふむ。私がいいが……リアもいいか？」

「はい。私もいつでもいけます」

「そんじや、今度こそ真正正銘の最期の戦いだ。」

『お前さん、もうすぐ死ぬぜ？』

アリサが不敵な笑みを浮かべて呟き。

『『夜話』の装填始めます』

理亜がアゾット剣に片手を当てて、ブツブツと呟き始める。途端に、アゾット剣は青白く光輝いてその周りに巨大な魔法陣が浮かび上がる。

理亜はゆっくりと、丁寧に、淡々と『夜話』を語っていく。

理亜の声に鼓動するかのようには、理亜が語る度に青白い光は膨れ上がっていく。

やがて―― どのくらいの時間が経ったのか正確な時間はわからないが、やが

て―― その光は一つの巨大な渦となった。

まるで某国民的アニメの元〇玉のような、巨大な光る球体。

それが今すぐにでも、アゾット剣の砲口から放たれようとしている。

「それが理亜達の本気か？」

「ああ、間違いなく本気の『死の一撃』だけ？　なあ、リア」

「はい。『不可能を可能にする男』の『対抗神話』を込めた紛れもなく全力の一撃です！」

「そっか。それを聞いて安心したよ。俺も全力を出せるからね」

「よし、それじゃ、行くぜー！」

全ての可能性を塗り潰せ!!? 『絶死の結末』ーっ!!?」

さっきの砲撃よりもさらに巨大な光が俺を塗り潰さんと襲いかかってきた。

俺はその光に対して、さっきと同じように右手を突き出し消し去……ろうとして、異変に気付く。

さっきの砲撃は手に触れた瞬間に一気に『消失』していく感覚があったが、今は徐々に消していって感じる感覚しかない。

このままでは全てを消し去る前に塗り潰される。

そう判断した俺は、右手をそのままに、左手を突き出して掌で右手同様消し去るイメージをしながら、身体全体を大きく捻った。

(この技の原型は……スカイツリーの戦いで、ワトソン相手にやった『螺旋』、それに相模湾上空高度1,000メートルでキンゾーとの戦いで出した『絶牢』、そして……ヒルダ戦で生み出した『銃弾返し』。

それを組み合わせれば……出来る、はずだ！)

「うおおおおおおお!!!」

俺は、後ろに吹き飛ばされそうになるのに耐えながら。

ヒューン!

全身をくまなく動かす!

「ひゅー」

「ひゅ、あ、危なかつたわ」

「……と、危なかつたぜ。まさか、光弾を跳ね返されるとは思わなかつたぜ」

跳ね返った光弾を空中で回避した理亜、スナオ、アリサはそれぞれ違った『今、私の

目の前で何が起きたんですか?』という反応。『何か飛んできたわねー? 不思議よねー』的な反応、『返されるとは思わなかったぜ! どうやったんだ?』という予想外の出来事に興奮しているような反応をしてくれた。

今のは自分でも驚いている。技の原理は簡単だ。右手と左手で光弾を挟み込むイメージのまま、突き出した両手で光弾を消そうとして、消えなかったから威力を落として干渉することで光弾自体を掴み、全身を回転扉のように大きく捻って溜めを作って『絶牢』と『螺旋』を組み合わせた構えを取り、さらに大きく捻じ曲げた体を反転させて……からの銃弾返しを放った。

言ってしまうえば『不可能を可能にする男』の『消去』と『干渉』の能力を利用した合体技。

名付けて『カタバルトエネイブル光弾返し』!

『架』の能力とこれまで編み出してきた技術を組み合わせることで光弾を180度Uターンさせるといふ荒技をやったのけたのだ。

「はあ、はあ……二度とやりたくない大技だな」

しかし、俺が二度とやりたくない、というと何故かやらないといけなくなるのは……これも世界が歪んでるせいかな? 確か世界の歪みが原因でロアは発生するとか、かつ

て一之江は言ってたが。

だったらもしかして、ロアの能力で歪みを矯正することも出来るのか？　だとしたら世界に認識された逸般人という評価を俺の能力なら覆すことも出来るのかも……試してみる価値はあるかもな。

問題はどうかやって世界の歪みとやらを見つけられるか、だが。

それもなんとなくなるとかなる気がする。いつも厄介事は向こうからやってくるからな。そのうち『世界のロア』とか、『歪みの管理者』とか出てくる気がする。

……なーんてな。さすがにそんなロアが出てくるはずないよな。ハハハッ！

……頼むから絶対出てくんなよ。絶対だぞ！

そんなことを思っていると。

「まさか、『死の予兆』をそのまま返されるとは思わなかったぜ？　だが、私達はまだ

やられたわけじゃないんだぜ」

そう言ったアリサの後ろで、理亜がその口を開こうとしているのが見えた。

『夜話』を語る気か？？

「音央！」

「うん！　『スカーレットビューティー 茨姫の檻』!!？」

音央の声が響き渡り、そして感じる浮遊感。

俺の体を音央が抱き締め、そして空高く上昇していく。

『夜話を語られたら逃げる』。

音央には理亜が『朗読』始めたら逃げるように、と指示を出したおかげか、『千の夜話』アルフ・ライラ対策は万全だ。

そして、距離が離れたらアゾット剣で近寄ってくるから、先に茨の蔦で縛ってしまえば動きは封じられ、そしてたらアリサ達は……。

「当然、そうくるよな！」

「行くぜー」

直後、青白い光線が放たれた。

俺は、その光線を敢えて受ける。

今回は逸らすことも、弾くことも、消すことすらしない。

しなくても俺は消えない自信があるからだ。

そして、青白い光線が直撃し、俺の意識は真っ白になった。

迷いも、恐怖も、勇気も、信頼も、全てが消えていく純白の世界。

ただひたすら『無』に帰す為にあるかのような居場所。そこは体や意志というものがなんの意味も持たない単なる『概念』となっていた。

『可能性』や『希望』みたいなものですら、一瞬で塗り潰されてしまった。

苦痛ではない。むしろ『安息』という感覚でいられる。

そして、この世界では『恐ろしい』といった感覚すらなくなって。

全て、頭の中は真つ白に。きつと、身も心もまっさらに塗り潰されるだろうな。

これが『死ぬ』というのなら、それは『安息』を受け入れるということ。

これがアリサが放つ結末なのだ。

だけど。

これが『信頼』というのなら、俺は絶対的に信用しているものがある。

これだけは絶対に塗り潰されないし、消されない。

俺が『主人公』になる前から決まっていた、絶対の理。

それだけは俺に何があっても変わらないもの。

一種の『女難』と言っつていいもの。

『約束の場所』。

そこがある限り、俺の『全て』は……。

「俺の全てを塗り潰すことなんて出来ないんだあああああ!!？」

第二十話。音央の決意

全力で叫んだ瞬間、真っ白だった世界は飴細工のように砕け散った。

とはいえ、視界はまだ白いままで周りの景色すらわからない。

何も見えないし、何もわからない。

ただ……わかること。変わらないものがある。

白く染まった世界で、「モンジ……っ！」と俺の背後から祈るような音央の声が聞こえてきた。

背後の音央には絶対に影響は出てないはずだ。そう、絶対に。

何故なら――。

「つてか、何であんたの背中が塗り潰されないのよ!?!?」

スナオちゃんはその疑問を発した瞬間だった。

ピピピピピピピピピピピピピピピピピピピピピピピピピピピピピ!

突然、俺が身に付けているモノクルとスクラマサクスから着信音がけたましく鳴り響

く。

「ひわ^ん？ まさか^ん？」

スナオちゃんが驚いている間に、それは勝手に鳴り止んで……。

『もしもし、私よ』

モノクルやスクラマサクスとなったDフォンから、電子音っぽい低くて、ゾツとするような声が聞こえてきた。

『今、貴方の後ろにいるの』

次にその声が聞こえてきたのは俺の背後。背中。

そう、そこだけは何があるろうと消えない『約束の場所』。

俺を『殺す』、その日まで失うことのない絶対^に存在するであろう場所。

「ほうほう！ なるほどな！」

アリスがやたら嬉しそうに叫んだ瞬間、同時に俺の背後に、ピタリと寄り添う彼女の感触があった。

ああ、なる。これはなっちまう。

アウトだ。なっちまった。

『ヒステリアモード』に！

白く染まった世界に意識や体が塗り潰されようが、この『俺』の体質までは塗り潰さ

れないようだな。

ヒステリアモードになったことにより、意識がより覚醒していくのがわかる。

そして、俺自身の可能性やら、意識、心が塗り潰されようが、俺の全身を、全てを塗り潰すことは出来ないということもわかった。俺の背中は俺『だけ』のものではないからな！

コイツは俺が他人の手によって死ぬことなんか、許してくれない。それが

「一之江……！」

「おっちゃんごめん！」

一之江の名前を呼んだ次の瞬間……

ザクッ！

「うおおおい!!?」

いきなり背中を刃物で刺された。

オーガンスル
(内蔵避け……って、出来ねえし！)

「い、一之江さんっ?」

そんな光景を見た音央は驚き半分、嬉しさ半分の声を上げる。

すっかり音央も見慣れたみたいだけど、いきなり背中を刃物で一突きとかつて……ど

この武装巫女や妹さんですか？

「こんにちは。今日は『死の予兆』が溢れているということで探偵風味にしてみました」
「……探偵ならシャーロックじゃないのかよ、ってかその探偵自らおっちゃんを刺すなよ……!!?」

「いやあ、おっちゃんは死なないだろうから被害者になったら新しいかなあ、と思いますして。誰が頭脳は大人で身体つきが子供ですか、殺しますよ。グリグリ」

「言つてねええええ!!?」

さらなる刺激を背中に与えてくる一之江さん。痛くて死ぬ。ビームとかよりも一之江に刺されるだけで死ぬ。

いや、その刺激があるからこそ、こうして意識を保っていられるんだけどき。

視力も取り戻せし。

「これだけ突き刺せば落ちませんね」

「アンカーを突き刺すみたいに!!? つか、おんぶするからしがみついてくれないかな?」

「このエロ坊主。私の柔らかくてポインなあれそれを背中に感じるのが狙いですか」

「一之江の……」

「ポインな」

「あれそれ？」

俺、音央、かなめが疑問の声を上げると、一之江は……ただ一言呟いた。

「殺しますよ？」

「「すいませんでしたー!!？」」

一之江は口ア状態であろうが、スタイルはよくならないのだが、それを言ったら文字通り刃物かなんかで風穴開けられるのでこれ以上、口に出すのは止めとこう。

「仕方ありませんね。いつかメリーズドールが空を飛ぶという噂も流すようにしましょう」

ぶつくさ言いながらも俺の背中にしがみついていた。胸はないが、女子だけあって柔らかな感触を背中に感じる。

……と、こんなことしてる場合じゃないな。

自分の掌を前に翳し、球体をイメージするように突き出すと自分や一之江、音央を囲むように大きな透明な膜が張った。

アリスの『^{デッド}絶死の^{エンド}結末』に『干渉』して、その『夜話』を『打ち消す』ようなイメージで身を守る結界みたいなものを張ったのだ。

あんまり長くは持たないけど、これで時間を稼ぐことなら出来る。

「そんなわけで、おっちゃんの代わりに探偵が代弁しますと。今のこの状況を覆せるのは、音央さんのポインに秘められた可能性なのです」

「え!!? あたしの胸に!!?」

「ミサイルになるとかです」

「絶対にそれはないわっ!」

「そのミサイルは弾き飛ばせないかもな……うん」

ミサイルでも弾力がありそうだからなあ……誘導^{スラッシュ}弾逸^{シュイ}らしが通じないとは……おつ

ばいミサイル恐ろしい。

「ミサイル言うなあああ!!?」

「……兄さん?」

「……お兄ちゃん?」

うっ、妹達の視線が痛い。

理亜の目はちよつと据わってるし、かなめは手に何故か包丁持ってるが、それどつから出した?

どうやらこの手の話題は禁句みたいだな。

「それは残念です。ともあれ、胸の中に秘められた貴女の希望。いや、もしかしたら貴女には絶望かもしれません。ですが、それを乗り越える覚悟があるならばきつとこの状況を打破出来ますよ」

「もつとも……それが出来なくても私やこの変態ならなんとか出来ますが」と一之江は

小声で呟く。

そう、音央の力がなくても俺達ならなんとか出来る。

そのくらい能力をすでに持っている。

だが、それじゃあ、ダメなんだ！

俺達の力をあてにしてたらいつまで経っても音央は成長しない。

音央にはまだ成長する予知が残っている。

進化できるロア。それが『妖精』の神隠しという物語なのだから。

音央に必要なのはきっかけ。

———
そして、成長したいと思う強い覚悟。

それさえあれば音央は変わる。強くなれる！

「とはいえ、考えている時間はあまりありませんけどね。そろそろモンジの精神は真つ白に塗り潰されるか、私の与える激痛に耐えられずに死んでしまうかですから。その状態になってしまったらデッドエンドです。まあ、今のモンジなら自己蘇生とか、夜話を拒絶とか、しそうですけどね」

「……そっか。そうだったのね……あたしが、あたしのことを覚悟する必要があった。そういうことだったのね」

音央はその言葉だけで理解できたようだ。多分……きつと、彼女はずつとその想いと

葛藤していたんだろう。

「なんか嫌な予感がする！　メリーズドールもいるし、やっちゃった方がいい!!?」

スナオちゃんはまだで野生の勘で何かを感じとったかのようによい叫ぶ。

「今、あいつらに近寄ると私の『絶死の結末』を喰らって死んじゃうからダメだな」

「うー、まさかアリサの砲撃があいつらのバリアになるなんて……」

「それもある意味、エネイブルの狙いだっただろうさ」

そう、夜話を砲撃として撃ち出す以上、ロアであるアリサはもちろん、ハーフロアである理亜やスナオちゃんも無闇矢鱈と近寄れないのではないかと。

そういつた考えもあり、あえて喰らったのだが……上手く行って良かった。

理亜やアリサに対抗神話を打ち消す対抗神話とかがあつたらヤバかったけど。

「……決めたわ、モンジ、一之江さん」

音央は何かを決心したかのように呟くと。

「あたしは『妖精のロア』になる!!?」

音央は飛行して俺達の前に出ると、自分のDフォンを手に持ち俺達を塗り潰さんと迫るその光に向けて突き付けた！

「鳴央！」

「了解です、音央ちゃん!!?」

どこからか鳴央ちゃんの声を聞こえてきた瞬間、俺達の体はいきなり目の前に開いた『穴』の中に消えた。

「っ!?」 あいつら消えやがった!」

「え、どういうこと!?」

暗闇の穴の中にいる俺の耳に、焦った声を上げるアリサと、困惑した声を出すスナオちゃんの声が聞こえてきた。

何が起きたんだ?

と、状況を理解しようとした次の瞬間。

視界が広がった。

そして……

『『真夏の夜の夢!!?』』
ミッドサマー・ナイトドリーム

それとほとんど同じタイミングで音央の声が聞こえてきて。

音央が高らかに叫んだのが伝わった瞬間。

ソレは起きる。

「うっわ」

「ひゃあああああ!?」 目の前にでつかい光が迫ってくるー!!?」

先ほどまで俺達に迫っていた光の砲弾が向かった先は俺達ではなく、撃ったアリサ達

目掛けて迫っていた。

一体何が起きたんだ？

ヒステリアモードの視界でも、突然の事で理解が追いつかない。

まるで俺達とアリサ達の位置が入れ替わったかのような状態に……ん？

位置が入れ替わった？

まさか。

と、ヒステリアモードの俺が考え事をしていたその時。

「とりやつー！」

スナオちゃんがり亜とアリサ、かなめの体を赤いマントに包んでその光が到達するギリギリのタイミングで姿を消すのが見えた。り亜やかなめの身の心配はあまりしていない。何故なら彼女達にはあの子が付いているのだから。

『怪人赤マントは少女を攫う』……その『逸話』がある限り、彼女は少女を攫えるのだから。

ズガアアアアアン!!？

アリサの『アゾット剣』とそこから放たれた『夜話』を込めた『死の一撃』。『絶死の結末』が激突し合い、激しくぶつかりあって巨大な爆発音と衝撃を辺り一体に巻き起こす。

これはマズイと思い。

ツヾ?!

俺は『妖精の羽』テイシカールを展開したまま、空中で身を翻すように反転すると、背中にいた一

之江や音央達を守るように彼女達を腕の中に抱きしめた。

突然の俺の行動に一之江はビクツと動き、俺の脇腹に刃物で刺されたかのような痛みを感じたが、俺はそんな痛みなんか気にせず、一之江の姿を見ないように気をつけながら彼女の小さな体を腕いっぱい回して抱きしめた。音央は「ひゃう?!」などと、悲鳴のような声をあげたが、空いてる手を音央の腰に伸ばし、抱きしめた。

放すものか!

二人は……仲間は死んでも守る。

『あっち』の『俺』の分まで、な。

それも本来の一文字の代わりに戦う『俺』がした『覚悟』の一つだ!

背中に爆発により発生した熱風や衝撃に耐えると。

「ふはあー」と眼下の雪原から声が聞こえた。

見下ろすと、雪の中からスナオちゃん和白い帽子が飛び出していた。

彼女がその帽子を引っ張ると、雪まみれのアリサがズボツと抜けて出てきた。

そのアリサの両隣には、理亜とかなめがぺたんと雪の上に座り込んでいるのが見え

る。

『妖精のロア』が持つ本来の力に目覚めたようですね」

俺の腕の中で一之江がもぞつと動き、俺の腕からするつと抜け出すと音央に問いかける。

「うん。鳴央とセットじゃなくて。あたしはあたしだけでも戦える『ロア』になるわ」

「はい。嫌になつたらいつでも言つて下さい。殺して差し上げますので」

そう言う一之江の吐息には薄く笑みのようなものが交ぎついで、俺の腕から抜け出した音央の、その体には薄緑色のドレスを纏っていた。そして、その背中には透明な羽が生えているのが見えた。

文字通り『妖精』となつた音央の姿を見てドキつとしてしまった俺は視線を逸らす為にも一度自分の体に視線を移す。そして自身の身に起きていた変化に驚くこととなる。『妖精の神隠し』の能力を使用した為か、俺も音央と同じ薄緑色の外套がいでうを身に纏っていることに気づいたからだ。

『不可能エネを可能ネにする男』の能力を使用していた時は気づかなかつたが、今の俺は黒いスーツの上に薄緑色の外套を纏い、背中から羽を生やしていた。

仲間の能力を自身の能力として使用できる能力。

これが……『百物語』の力かあ。

規格外なこの力を、どう扱うべきか。

そんなことを考えながら俺はふわりと雪原の上に着地した。

背中や脇腹の痛みは一之江が離れた瞬間なくなり、ただ、ただ雪を踏み潰すギユツという音だけが響き渡る。その音が鳴る中、アリスは自分の身に降りかかっていた雪をばっばと手で払い落としながら帽子を被り直した。

そして、口を開く。

「うわちゃー。『アゾツト剣』がまさか自らの砲撃で壊れちゃうとはな」

「ってか、死ぬかと！　気がついたらわたしたちとポインたちの位置が入れ替わって、マジで焦ったよ!!？」

アリスの言葉に続けて、スナオちゃんがブンブンと、両手を振りながら焦りを主張した。そんな二人の様子を静かに見ていた理亜が、視線を逸らさずにそのまま俺達に語りかける。

『妖精チエンジンの神隠し』……人と妖精を入れ替える話。だから音央さんは自分たちと私たちの居場所を入れ替えたのですね？」

「うん。今まで練習もやったこともなかったから、本当はすっごく心配だったけどね。成功するかは五分五分……ううん。もっと低かったかもしれない。けどあの砲撃はモンジの『不可能エネを可能ネにする男イブ』専用だったから。だからもし喰らっても消し飛ばすの

はモンジだけで私や一之江さんはなんとかなるんじゃないかなー、って。「俺は!?」あんなは人間辞めてるから自力でなんとかするでしょ?それに、理亜ちゃんたちに当たっても怪我くらいはしても消えたりはしないんじゃないかなー、って」

「まあな。純粋なロアである私や、そこから生み出されたアゾツト剣は威力だけで消し飛ぶだろうが、スナオやリアはその力が吹き飛ぶくらいだったろうさ」

結構ヤバめな話のはずなのに、なんでもなさそうにひらひらと手を振るアリサ。そこにはもう、戦意はない……そういう態度を取っていた。

「……兄さんが先ほど指摘したように、音央さんの中には茨と飛行の能力くらいしかありませんでした。それを、あの土壇場で別のロアになるよう促すなんて」

「音央の中には、可能性が残されていたからな。だから、俺はその可能性に賭けたんだよ。本当に出来るのか、とか。不安や失敗する可能性ももちろんあったけど……『仲間を信じ、仲間を助けよ』。一緒に戦う仲間だからこそ、信じようと思ったんだ」

俺の顔をじつと見つめた後、理亜はアリサとスナオちゃん、かなめに目を向けて。そして、何かを考え込む。

多分、いろいろ考えたいこと。話したいことがあるのだろう。

少しばかり、考える時間が必要だな。

などと思いつつも、俺はさつきから視界に入っていた音央の手の中にあるDフォン

の事を音央に尋ねることにした。

「そのDフォン、鳴央ちゃんに繋がっているのか？　でも、君達……確か」

先ほど俺達を取り込んだ黒い穴。あれは間違いないく、『奈落落とし』アレックスフォールだった。

だが、あの技を使った鳴央ちゃんはDフォンを持っていなかったはずだ。異世界であるこの場所と外の世界を通話する際に、普通の携帯電話が繋がった……そんなことが可能なのか？

そんな俺の疑問に、音央は得意げに答えた。

「うん。これはあたしのDフォン。——会長の家から帰る時にね、ヤシロちゃ

んが現れてくれたのよ。『お姉さんはこれから、大事な人を守るかもしれないよ』つて」

「だけど『お姉さんが消えなければね？』だろう？　ヤシロは相変わらずだよなあ」

音央の言葉に続けるように、アリサが答える。

そのアリサの顔には僅かながら、笑みが浮かんでいた。

いつもの『不敵な』笑みではない。

ようやく見つけた、『希望』に託せる。

そんな風な『喜び』に満ちた、満面の笑みを一瞬だが……確かに浮かべていた。

——これでどうやら、戦いは終わりのようだ。

今度こそ、間違いなく……あの台詞を言える。そう思った俺がそれを言おうとしたタ
イミングで。

雪景色に異変が起きた。

突然、雪景色に。空間に亀裂が走り。

バリーーン!!?

その空間がガラス細工のように割れて、周りの風景が見覚えのある十二宮中学の校庭
へと戻った。

そして……。

「終わったみたいだね、モンジ君」

「お疲れ様でしたっ。お帰りなさい、音央ちゃん、モンジさんっ」

そこにはキリカと鳴央ちゃんが笑顔で立っていた。

「ん、ただいま、二人とも」

「ただいま鳴央。助かったわ」

音央は妖精の姿から人間の姿へと戻ると、そのまま鳴央ちゃんに抱きついた。

抱きつかれた鳴央ちゃんは驚くこともなく、優しい微笑みを浮かべたまま、よしよし

とその背中を撫でてやっている。そんな微笑ましい光景の隣では……。

「はじめまして『予兆の魔女・アリシエル』ちゃんっ」

「おう……『魔女喰いの魔女・ニトウレスト』か。ひええ、おっかないな」

魔女同士で何やら意味深な視線を交わし合っていた。

その光景を見ていただけで。

……ちよつと、胃痛がしてきた。

ちよつと訳ありな女子学生同士の交流。

それ自体は大変微笑ましい光景なのだが、何故だろう？

この二人が揃うと『混ぜるな危険』の警告文を思い浮かべてしまう。

だが……。

「今度こそ、これにて一件落着……かな？」

そんなことを呟きながら、二人の様子を見ていると。

「兄さん。お返事をしたいので、少しあちらまでいいですか？」

「……わかった」

声をかけてきた理亜の顔を見ると、その顔は思いつめたような、何かを決意したかの

ような。

そんな顔をしていた。

俺は俺なりに覚悟を示せた、と思う。

だから、後は……理亜がどんな返事をしてくるか、だ。

「えっと、わたしも付いていっていい？」

と、スナオちゃんがそんな言葉を言ったその時。理亜の隣に座っていたかなめが動いた。

「……非合理的だよ」

第二十一話。変わる日常

「非合理的」とかなめが叫ぶ。それは彼女の決め台詞であり、彼女にとって、譲れないもの。渡したくない、引けない時に言う、覚悟を込めた想いそのものだ。

「……かなめ？」

スナオちゃんが驚きの声を上げて、かなめを見る。

「非合理的だよ、スナオちゃん。戦いは終わって、私達は負けた。敗者は勝者に従う。それがアメリカ私達のルールだよ！」

「うー、でも……」

「わたし、アメリカ人じゃないし……負けてもいないわよっ！」とスナオちゃんは抗議する。

かなめの考え方はアメリカ人らしいものだが、自分から負けを認めたくないというスナオちゃんの考え方もイタリア人らしいなあ。

「負けた私達はもうお兄ちゃんの物語になるんだから、新しいマスターの言うことを聞かないのは非合理的！」

「かなめさんの言う通りです。私達『物語』は『主人公』の決定に従う定めですよ」と、

いつの間に着替えたのか、スナオちゃんの首根っこを掴んだ一之江が言う。
「うぐつ、だつて気になるじゃん！」

「気になるからこそ、ここで待つものです。それに、貴女にはどちらが上なのかを体の隅々にまで叩き込んでおかないと気が済みません」

「す、すみずみ!?」

一之江の言葉に顔を青くさせるスナオちゃん。そんな彼女をズルズルと一之江は校庭の脇まで引つ張つていく。一之江の事だ。きつとこれからスナオちゃんはたつぷりと扱われるのだろう。

南無と両手を合わせてしまう。

「よし！ それじゃ、ちよつと行つてくるよ」

気を取り直して、俺は俺の仲間達に告げると。

「あ、理亜ちゃん！」

音央が理亜に声をかけた。理亜はゆっくりと振り向いて、音央の顔を見つめる。

そんな理亜に音央は一言囁いた。

「……頑張つてね」

「……はい。頑張つてきます」

音央がどういった意味を込めてそれを言い、理亜が何に対して頷いたのかはわからな

かったけど、理亜の顔には緊張が走っていたのはわかったから、俺は何も言わず、何も聞かずにただ黙って理亜の隣を歩き始めた。

ゆっくり、と。少しずつ……距離を詰めながら。

2010年6月19日、午後10時。十二宮中学校校庭……の反対側にある校門。

そこまで歩いてきた俺達はそこで足を止めた。辺りは静かな雰囲気、ふと頭上を見上げれば夜空には星が瞬いている。

「何故太陽は昇り、何故星は夜空に瞬くのでしょうか？」

夜空を見上げていた俺に、理亜が問いかける。

「……それは自然現象だからだ。理由なんてない」

「はい、そうですね。私もそう思います……」

そう言った理亜は静かに俺の方を振り向いて……視線を逸らした。

「兄さん、最後の確認なのですが、私の物語にはなっていただけなのですよね？」

「ああ。理亜のお願いは何でも聞いてあげたいが、それだけはダメだ！ 理亜だけを戦わせて、俺はぬくぬくと普通の生活を送るなんて……できないからな」

「……兄さんと同じ覚悟を私がして。私の物語として兄さんも一緒に戦っていただく」と

「いうのはいかがですか？」

「可愛い理亜の願いは極力聞いてあげたいが、それもダメだ！ 理亜は—— きつと、俺がピンチになってしまったら俺が戦えないようにしてしまいそうだし。それに……俺は理亜の兄だからな。大切な妹を守るなら、妹の物語になるんじゃないやなくて、妹の物語を記す物語として語っていく方になりたいたいんだよ。俺はな」

断りを入れると、理亜は目を伏せる。前髪で目が見えなくなるが、肩を大きく震わせたのはわかった。

「兄さん……私はやっぱり、兄さんに死んで欲しくありません」

「ああ、俺も死にたくない。こんな可愛い妹を残して死んでやるものか！

安心してくれ、理亜！ 俺は死なない。

例えば死ぬような場面でも、俺は死なない。もし死んでも、俺は地獄の底から這い上がってくるよ。なんたって俺は—— 不可能を可能にする男だからね！

それに理亜も見ただろう？ 俺には頼りになる仲間がたくさんいるんだよ」

理亜の震える肩にそつと手を伸ばす。

理亜も体は自然とした動きで俺の手を避け……そうになるも、理亜はそのまま我慢するかのように踏み止まった。だから、俺はしっかりと両手で、理亜の肩を掴んでやるこ

とができた。

「我慢してくれてありがとうな、おかげで震える理亜の肩を掴めたよ」
「……兄さんだから、ですよ？」

理亜は揺れた声で呟くと、そのまま俺の胸に抱きついてきた？

「兄さんだから。兄さんだから私は、死んで欲しくないんです。兄さんだから、触られるのも我慢出来るんです。兄さんだから……もつと触って欲しいんです」

「理亜……？」

ぎゅうううう、と俺の背中に手を回し強く強く抱き締めてきた。

回された手の強さから、理亜の気持ちの強さみたいなのが伝わってきて……少しだけ戸惑いを感じてしまう。

「兄さんだから……抱きつきたいし……」

両手を背中に回したまま、理亜は潤んだ瞳で見上げてきた。

「兄さんだから……抱き締めて欲しいんです……」

その弱々しい、華奢な体を俺は壊れないようにそつと包み込む。

「うっ……ひくっ……っ」

理亜の瞳から、大粒の涙が溢れ出し、頬を伝わって溢れ落ちていく。

「理亜……」

「もつと、もつと強く、抱き締めてくれませんか兄さん……？」

切なさが込められたその言葉に、俺の心臓は高鳴りっぱなしだった。

理亜がこんな感情を出す姿を見たのは初めてだ。

今までの記憶の中にも、理亜がこんなに自分の感情を、想いをさらけ出すところはな
い。

それだけ想われていたんだな、一文字は。

いつもクールで落ち着いている理亜。

そんな彼女の素顔に俺は困惑してしまう。

いや、違うな。

本当は解っていたんだ。

理亜がどうしてこんなに感情的になっているのか。

理亜がどうして『主人公』なんて苦しい道を選んだのか。

理亜がどうして……俺に『自分の物語になれ』なんて言ったのか。

本当は——解っているんだ。

「理亜。ありがとうな」

その気持ちごとくも嬉しいから。だから俺は理亜をさらに強く抱締める。

「んう……はふう……」

苦しそうな声を漏らしながら理亜は、それでもせがむように俺の体を強く抱き締めて

きた。

「もつと……苦しくなるくらい……お願いします。……兄さんを全身で感じられるくらい、強く、強く抱き締めて欲しいんです……」

俺はさらに理亜の体を強く抱き締めた。

苦しそうに告げる言葉に応じるように。泣くほど辛く、苦しい想いを抱えながらそれでも俺の為に戦って、俺のことを想ってくれるその体を離さないように。

強く、力強く抱き締める。

「……ん……兄さん……」

抱き締められた理亜は消え入るような声を出して。俺の耳元で囁いた。

「好きです、兄さん」

その言葉を聞いた途端、俺の心臓は停止してしまうんじゃないかと思うほど大きく跳ねた。

身体に中心、中央に向かって血流が集まっていく。

ああ、敵わないな。

天下無敵のヒステリアモードでも、敵わないものがある。

昔、父さんに言われた言葉を思い出す。

『いいか、キンジ』

すぐそこにいるかのように。

父さんの声が、聞こえる。

ような、気がする。

『キンジ』

殉職した俺の前世の父親。

遠山金叉の声が。

走馬灯のように、ゆっくりとりピートされる。

『HSSは最強じゃない。最弱なんだ。世界の半分の間人は俺達HSSを————んだからな』

世界の半分の間人？

それは、誰だ？

『それは————だ。————の為なら俺達HSSは命を投げ打ってしまうのだから』

じゃあ、そうならないようにするためにはどうしたらいいんだ……？

『自分を——を、——のさ』
 どうやって?』

『——してあげなさい。それができれば、HSSは最弱から最強になれる』

父さんのその言葉を思い出した俺は瞳をぎゅつと閉じて、理亜の背中を抱き寄せる。

『『私の物語になりなさい』が、ロアに対するプロポーズだって、私も知っていました。兄さんも知っていたんですよね?』

「ああ、知ってた。知ってたから……悩んだ。動揺もしくった。だけど……本当は嬉しかったんだ」

「あ……ふふっ。私だって、さっき言って貰った『俺の物語になって一緒に戦おう』の言葉は、とても、とても……嬉しかったんですから」

そう告げる理亜の声には穏やかさと……柔らかさが現れていた。

そう。そうなんだ。やっぱり俺にとって理亜は従姉妹であり、大事な、大事な妹の一人なんだ。

俺のことを『好き』でいてくれる……大切な女の子なんだ。

理亜がこれだけの勇気を見せたんだ。

だから、俺もちゃんとした返事をしないとイケない。

理亜に伝えないとイケない。

自分のことを。

自分の気持ちを全て。

「ありがとうな、理亜。」

俺のことを想ってくれて、俺の妹でいてくれてありがとう」

「……兄さん？」

理亜は俺の瞳をじっと見つめてきた。

「理亜。俺はお前の気持ちには答えられない。その資格はない。」

何故なら俺は……お前の知る兄じゃないからだ」

俺は理亜の瞳を見つめ返して、その瞳から目を逸らさないように。逸らしてはいけない気がして、ひたすら見つめ返した。

「……知っています。本当は別人だということくらい、毎日見てれば解ります。」

兄さんは本当はかなめさんの本当のお兄さんなんですよね？」

「知ってたのか？」

「はい。アリサさんから聞きました。ううん、聞かなくても解ります。兄さんのことならなんでも解ります。」

妹ですから。大切な兄さんのことですから」

「それじゃ何故、俺に……」

「好き」なんて言っただんだ？

「なんででしょうね。……貴方の中に兄さんがいるから？

ううん、貴方が兄さんと

似ているから、かもしれませぬ。

兄さんの姿をしているから、兄さんの魂がそこにあるから。ううん、やっぱり一番の理由は……貴方の近くで兄さんの存在を感じて……いたいから」

理亜はぎゅゅと瞳を閉じる。

そして、理亜はその言葉を口にした。

「だから、私を貴方の物語にして、兄さんの側に居させてください」

キラキラリン☆

直後、空気を読まないDフォンがいつもと違う派手な音を奏でた。

「あ……ふふ。なるほど、兄さんの物語になるってことは。心の奥が兄さんと繋がるってことだったんですね」

理亜はそう呟くと自分の胸をぎゅゅと俺のお腹に押し付けてきた。

うっ、いかん。ヒステリア性の血流がまた流れてきた。

理亜の奴、意外にあるんだなあ。

なんて動揺していると。

「あ、いけません、兄さん。そうやってすぐ鼻の下を伸ばしたら」

「いや、これは……理亜が」

「私のせいですか？」

「あ、いや……すまん、自重するから許してください」

「いーえ。兄さんにはおしおきが必要です」

さらにぎゅつと抱きついてきた理亜は、悪戯つ子つぽい笑みを浮かべると。

「兄さん」

「な、なんだよ？」

「私と、私の物語達をよろしくお願いしますね」

そう呟くのだった。

俺は理亜の身体をさらに強く抱き締めて告げる。

「……ああ、任せておけ」

俺の物語はみんな、守り抜いてやる！

そう心に誓ったのだった。

翌日。まだ薄暗い早朝の中。

俺は自宅近くの公園に来ていた。

そこにあるベンチの一つに腰を下ろし、待ち人が来るのを待つ。

頭上にある木々が風に揺れ、木々の葉の間から陽の光が差し込む。

空を見上げれば、青い空に白い雲が浮かぶ。

昨日の雨が嘘みたいだ。

公園を見渡すと、そういえば……と思い出す。

確か、キリカと戦ったあの日に座ったベンチもこの場所だったな。

この変に真つ赤な虫がいて……そうだ。Dフォンで周りの風景を撮っていた俺にキリカが声をかけてきたんだっけ。

ベンチから立ち上がり、ポケットからDフォンを取り出す。

そして。

確か……この辺で。

記憶を頼りに、あの日の再現を行う。

カメラをありとあらゆるところに向け、一心不乱にコードを探す。

カメラをベンチとベンチ脇に生えてる草木に向け、そして再びベンチに向けた。

その時だった。

ゾクリ。

Dフォンのカメラにありえないものが写ってしまった。

今のは!?? 見間違いか? いや、まさか……。

ついさつきまでそこには何もなかったじゃないか!

馬鹿な……ありえん。

再びカメラをベンチに向けるが、そこには何もない。

気のせいかな?

ベンチに背を向けると。

「お待たせしました」

ゾクリ、背後から強烈な寒気を感じる。

同時に手に持つDフォンが真つ赤に発光し、発熱した。

馬鹿な、ありえん。

ついさつきまでそこには誰もいなかったのに……。

背中に先が尖ったものが当てられた。

チクチク、と刺さり痛い。

なんだ? 何をされてる!??

「……って痛えー!!! 一体何で刺してんだ!??」

「別に何も……ほら!」

一之江が両手を広げてみせてくるが、その手には確かに何もなかった。

何も無いのが逆に怖い。いつものことながら、コイツ何を刺したんだ？

「今のはただ指で刺しただけですよ」

「指^{!!}? 指である痛さ^{!!}?」

馬鹿な、どんだけ指先が強いんだ。まるで至近距離から銃弾を食らったような痛さだったぞ。

「指銃^{シガン}です」

なんだその理子とかが付けそうな技のネーミングは！

「この指銃を進化させたのが、先日お見せした瑞江・ドリルなのです」

「そうなのか……?」

「はい、そうなんです」

「……」

あまりに堂々と告げる一之江の態度に、俺はそれ以上突っ込むのをやめた。

「ところでこんなところに呼び出してどうするつもりですか?」

「ん? ああ……大事な話があるんだ」

「ああ……またエロい話ですね」

「また、つて、お前にはしたことないよな!」

「お前『には』?」

「うぐ……いや、誰ともしてないです。はい……」

一之江の奴、相変わらず鋭いなあ。

今朝、アランの馬鹿から電話が着て、延々とエロ話されたせいで余計なことを言っちゃった。クソう、アランの馬鹿のせいで、一之江に弁明しないと俺の身が危ない。

なぜか、一之江は俺が女子にそういう感情向けるのを嫌がるからな。

いや……普段の俺には大助かりなんだが。

「まあ、どうせまたアランさんから電話で『聞いてくれよ。愛しのモンジ。この前、駅前
で理想な女性を見かけたんだ。大和撫子を体現した、黒髪の女性を。あんな美人なかな
かないないぞ。何より……巫女さんだぜ！　巫女さん！　本物の巫女さんを祭りの日
や初詣の時以外に見たのは初めてだった……やっぱ、巫女さんは最高だよなー！
しかも、かなりボインだったんだぜ！　こう、ボインつと……』とか話されたんでしょ
う？」

なんなんですか。そんなに胸が大きいのが重要ななんですか？

あんな脂肪の固まりじゃないですか。そうですね、そんなに脂肪好きなら、いつそ
死亡させてあげましょうか？　ふふふ……」

「誤解だ————!!!」

アランの馬鹿、なんてこと言いやがる。

というか、何故一之江がそれを知っている？

「いつも言ってるじゃないですか。貴方の事は解ります」

なんだろうな。一之江の姿が一瞬だが、どこぞの武装巫女と重なった。

一之江に弁明し、宥めること数十分。

ようやく、一之江が落ちついたところで本題に入る。

「で、大事な話ってなんですか？」

「ああ……驚かないで聞いてくれ。」

実は……」

「……？」

全てを話し、話し終えた俺の顔を驚きの表情を浮かべて一之江が見返してくる。

俺はこの時ある決意をしていた。

そして、その決意を実行する為には、一之江の協力が必要だ。だから彼女には全てを話した。

俺の身に起きた事も。前世の事も全て。

後悔はしてない。

ずっと黙っている選択肢もあつたが、悩んだ末に全てを話すことにした。

武偵憲章にもあるしな。

『仲間を信じ、仲間を助けよ。』って、な。

仲間信じてもらうには、俺が誰よりも仲間を信じないと始まらねえから。

だから、一之江に話した。

一之江は何も言わず、黙って俺の話を最後まで聞いてくれた。

そして、最後に。

『どんな選択をするのかは主人公である貴方次第です。私達『物語』は主人公に従うだけです。』

ですが……どんな選択を選ぼうと、私達は……私は最後の時まで貴方の後ろにいます。決して逃しませんので安心してください』

そう言つて微笑んだ。

まあ、その10秒後には背中をザクツだったけどな。

そして、その日の放課後。俺は生徒会室を訪れた。

これから七里詩穂先輩に告白をしに行くんだ。

いろいろ考えた結果、俺は詩穂先輩に告白することにした。

一文字の想いの代弁……それもあがるが、遠山金次として伝えないといけない言葉があるからな。

放課後、人がまばらな校舎の中を歩き、生徒会室の前に来た。

ノックして少し待つと。

中から詩穂先輩の声が聞こえてきた。

よし、行くか！

緊張しながら戸を開けて中に入る。

そして、詩穂先輩と相対し、雑談をした後想いを告げた。

「詩穂先輩、一文字詩穂になってくれ！　そして……俺達の物語になってください」

こうして、俺の日常は変わり。

日常の中に非日常があり、非日常が日常と化していく生活は続く。

そう。続いていくのだ。

戦いは続く。物語は続いていく。紡がれていくのだ。

第五部。終わりの始まり プロローグ。『白ヶ咲島』

いよいよクライマックスに入ってきたな！

ん？ まだ百個物語が集まってないだろうって？

ああ、確かにここまで聞いた話しだけじゃ百物語の完成までまだまだ時間がかかるだろう、って思うのかもしれないな。うん。

実際、その通りでぶっちゃけるとまだ百物語は完成してないんだ。

え？ それじゃ、何がクライマックスなのかって？

それはな、俺の苦手な分野なんだが、もう一つの物語の話した。

何を言ってるのかわからないって……俺もそうだが、お前もつくづく鈍い奴だよな。ああ、いや、別に悪くない。

何も知らないのだから、ある意味知らないのは仕方ないと思うし。知ってたら知ってたでアイツの計画にとってはマズイことになるかもしれないからな。

……つと。なんでもない。

えーとだな……

どこまで話したっけ？

ああ、そこまでか。クライマックスってのは百物語の完成云々じゃなく、恋愛の方だ。って、そんな思いつき引くな。俺だつて話したくてそんな話題にしたわけじゃないんだからな！

一番この手の話題が苦手な俺がそれを話さなきゃならん状況なんだ。その哀れんだ視線を向けるの今すぐやめろ。ん？　なんだよ。不運に定評のありそうな顔してるな……つてほつとけ！

記憶戻つてからも、それ以前も不運だよ。

つと、また余計なこと言っちゃまったな。

まあ、俺のことは置いといて。

頼むから置かせてくれ。

で、だ。

恋愛がクライマックスになったつていう話しだが……ん？

だから、なんでそんなに引いてるんだ？

ああ、なるほどな。前にハーレムを作つたつて話しをしたからか。「どうせ上手く行くんだろ、リア充爆発しろ、ハハン」とか思ってるのか。

まあ、実際問題その通りだからとつとネタバレしてもいいんだが、今回はその恋愛

の行方が大変なことにー！　　みたいな回だったりするからな。

あ、それと今回は水着回みたいだぞ。

つて、おい！　　何いきなりやる気に満ちた顔つきしてやがる！

わかりやすいな。

まあ、前回もちよつこと水着があつた気もしたが、いかんせん中学生達の水着だったからな。

スク水の。……いかん、ちよつと思ひ出ただけで血流が……セーフだな。

……よし、大丈夫だ。

……この回の説明だけでも代わるべきだったな。

……ああ、いや、こつちの話した。

で、話を戻すとな。なんでもスク水じゃない高校生くらいの、ボインボインな方たちの水着というものを見たくて見たくてもう仕方ないのではないかと……いかん、変なこと考えるな。あれは脂肪だ。脂肪の固まりだ。こんな時は素数を数えるんだ！

……素数を数えたら落ち着いたな。

いや、なんでもない、こつちの話した。

話を戻すとな。爆乳、巨乳、普通、ペタ、と様々な属性があることはとつくの昔にご存知かと思うが、お前はどんなサイズが好みなんだ？

俺？　俺は……そんなのどれでもいい。

胸のサイズなんか考えたこともない。

考えたくもないからな。

ん？　なんでそこでキラキラした目を向けてくるんだ？

って、おい。何故土下座してくるー!!？

師匠と呼ばせろ、だと？　一体なんの師匠だ！

……なんか変な勘違いされたが、えーつとだな。

今回語るのは、そんな恋愛についての話した。まあ、モンジの告白の行方とか、告白の意図だとか、最も胡散臭かった先輩の正体だとか。後は、ラスボスとの遭遇だとか、相変わらずザクザクグサグサやられたりとか。

そんな話しただけだな。

ああ、とつとネタバレして全部終わらせたい！

そんな風に思うほど、いろんな謎が明かされたり、物語的にもガンガン大変なことになる、そんな――。

百物語のエピソード5を語るとしよう。

2010年7月10日 白ヶ咲海岸。

青い空、白い砂浜、輝くように鮮やかな色をした海。

この世の楽園かと思間違えるほど美しいここは、詩穂先輩の紹介でやって来た『しらがさきしま白ヶ咲島』。南国にあるリゾートアイランドだ。

「凄いな……」

ホテルの裏手が海という絶好の場所である上に、貸し切り状態だというのだからその凄さが半端ねえ。

なんでも先輩の親父さんの知り合いが経営しているホテルで、この時期は先輩たち家族に貸し切りにさせてあげてるらしい。最近は先輩の両親達は海外でその権利を使うことはなかったが、今回は特別に招待してくれたみたいだ。金持ちはやっぱり凄いな。

「うふふふっ、楽しんでねんっ」

「はいー」

麦わら帽子を被ってニッコリと笑う先輩の顔に見惚れてしまう。

あんな告白した後だから、尚更。

「兄さん、デレデレし過ぎです」

「おっと、すまん」

白い日傘を差して横に立っていた理亜が小さく唇を尖らせた。

「あんまりデレデレしてますと刺されますよ?」

「うっ、そうだな。まだ死にたくないからほどほどにしとくよ」

冗談っぽく理亜は言うが、冗談ではすまない奴らがここにも来てるから自重することにする。

「……私も刺しますからね」

ボソツと呟いたが、俺はなにも聞いていない。きつと気のせいだ。

俺の従姉妹がこんなに病んでるはずがねえ!

「あー、開放的でいいわねえ。鳴央も海は懐かしいでしょ?」

「そう、ですね……うん。久しぶりなので、とても嬉しいです、音央ちゃん」

理亜の言葉に現実逃避していると、同行者である六実姉妹や。

「ひょー、あつちに崖があるわよ! アリサ! 崖! サスペンスごっこ出来るわよ

!」

「犯人役は任せませ、スナオ。突き落とす役は私がやるからな」

理亜のお供である中学生コンビ。

「どうやらメガシャークと決着をつける時が来たようですよ、キリカさん」

「瑞江ちゃんなら案外勝てそうだよね」

そしてクラスメイト達の会話が聞こえた。

さらに。

「氷澄、水上オートバイを追い越してもよいかの」

「何ババアになるつもりなんだお前は」

ついでに、というわけではないが氷澄とラインの声も聞こえた。男の数が圧倒的に少ないので、先輩に連れてきていいかと尋ねたら、快くOKしてくれたのだ。

氷澄自身は嫌がっていたがな。ラインはノリノリで快諾した為来てくれたのだ。

氷澄の奴、完全に尻に敷かれているな。本当、いいコンビだ。ちなみにライン達の仲間であり俺の弟でもあるキンゾーとは後で合流する予定だ。

そしてもう一人。

「うひょー見ろよモンジュー！　水着だぜ、水着！　ここは天国か？　楽園か？」

そう、アランの馬鹿もノリノリで来やがったのだ。

つてきり、いつもみたいに腹痛になるかもな、と思つたが案の定、腹痛にはなつたが不屈の精神とやらで耐えてきたらしい。

腹痛なだけに。

……寒いな、おい。

「ふふつ、賑やかで楽しいねえ♪」

にやばー、つと笑っている先輩の顔を見ると寒かった心が暖かくなる。

こんな風に思える今の自分の心境に驚きだ。つばの広い麦わら帽子を被る先輩の顔を見ながら思う。

ちよつと前の俺なら。一文字疾風として生きる前の俺ならこんな女子が多い場所に
来ること自体ありえないことだったよな、と。

病^{ヒス}気持ちだからという理由もあるが、女に対して免疫がない俺にとつて女子と海水浴に
来るなんて。それも泊りがけで来るなんて考えられなかったことだ。

これは、あれか？

精神や魂は宿る肉体に左右されるとかなんとかっていう？

オカルトじみた考えだが、今の俺はそのオカルトがオカルトじゃなくなることも知っ
ているから、ついそんな考えを浮かべてしまう。

そして、そんな俺だから詩穂先輩にした告白を思い出してしまう。

結局、告白の返事はもらえなかった。

保留のままだ。

だが、保留ってことはフラれないという可能性もあるんだよな？

「ん？」

無言になった俺を詩穂先輩は不思議そうに見る。

「あ、いや。先輩の家って凄いなー、つと」

「あはっ、そんなことないよん。こんな可愛いお友達がいっぱいいるモンジくんの方が、わたしより何倍も凄いつて」

「それなら先輩も俺の大事な人の一人に入ってますよ」

「ふえ？」

あ、しまった。あのくらい大丈夫だろう、と油断していたが、やっぱり少しばかりなっちまってたみたいだ。

「先輩みたいな綺麗な人と過ごせる俺は幸せ者です」

「にやにゆよいつへんも、みよふうんぢくん!!?」(なにを言ってるの、モンジくん!!?)

「嘩んだ先輩も可愛いな」

「ふえええ!!! も、モンジくんの意地悪」

「あはは、ごめんよ」

おっと、少しからかい過ぎたかな？

俺としては先輩にも楽しんでもらいたいからな。

「も、もう。変なこと言っていないで荷物置いて来て。そして着替えたら、早速遊ば、モン

ジくん！」

「はいー！」

とりあえず、告白の返事は置いて。

今はこの最高のシチュエーションを楽しもう！

—— 30分後。

そこには天国が広がっていた。

いや、俺からしたら地獄でしかない光景だが、アランは大興奮していた。

「見ろよ、モンジ。あの六実姉妹の胸、ポインポインだぜー！」

おい、こら。いったいどこを見てんだ。つうか、誰が見るか！ お前にとっては天

国でも、病^{ヒス}気持^{ヒス}ちの俺にとっては地獄でしかないんだぞ。地雷がアツチコツチにあるからな。だからアラン、俺の代わりにその地雷踏んでくれ！ 地雷だらけのこの島で無

事に過ごせるかはお前の犠牲にかかってんだ。

「来てよかった……本当に……来てよかった……！」

「あはは！ アランくん、泣いてるよ！」

「泣くほどのことか？ って、先輩、その格好……！」

先輩達の姿を見た俺は内心泣きたくなった。

一番恐ろしい破壊兵器原子力空母を持つ先輩。その大きくて張りのあるブツと、柔らかそうな体はもう兵器そのものだ！

「ちよ、ちよつとアラン、モンジ。あまりジロジロ見ないでよね。あと、鳴央を見るのも禁止っ！」

「え、えつと……ほどほどに、でお願いします……」

そして、その先輩に引けを取らないのが六実姉妹だ。

音央はモデルをやってるだけあって、整い過ぎているプロポーションを堂々と披露しているが、恥ずかしそうに頬を染めている辺りがなんとというか……その。先輩には及ばないものの立派な兵器弩銃は健在なわけで……。

さらに、その横でもじもじと胸やら太腿やらを隠そうとしている鳴央ちゃんも、双子……というか、本来は同じ存在だから当然だが、音央と同格の可愛らしさを發揮している。

「んもう、アランくんもモンジくんもエッチだなー！ あははは！」

そして、キリカは何度も夢の中で出てきた（そのせいで何度もヒスった）ほどのビツクリスタイルで俺を悩み殺す気満々だった。悩殺。文字通り、いつか俺キリカのせいで死ぬかもしれん。頭の血管切れて。ガチで。

「……………」

殺す、と言えば先ほどから凄いい殺気を撒き散らして、鋭く細めた目で俺を睨んでくる奴がいる。理亜だ。

同年代のペったんこ組に比べればちゃんとするところは出て、これからどんどん女らしくなりそうな、しかし今は楚楚とした可憐さがあるそんな水着を着ていて、ようは発展途上なんだが、何が気に入らないのか先ほどから自身の胸に両手を当てて溜息を吐いては睨み付け、吐いては睨み付け、を繰り返している。そんなに心配しなくてもいいと思うのだが。

かなめと接した悪影響からか。最近、俺が他の女子と話しただけで睨み付けるようになってきた。クールで優しく兄思いだった理亜が……かなめのせいで、最近、どんどんおかしくなってきた。

そういえば……その原因の源であるかなめの奴は、どこに行つたんだ？ ついさつきまで側にいたのに。

かなめの事に気を取られていると。

目の前に、先輩の水着姿が目に入る。

ああ、これは……もう。

「ありがとうございます！！！」

「もう、勘弁してくれえええええ!!」

アランは耐え切れなくなったのか、満足したのか土下座をしてお礼を始めた。

一方、俺はみんなの水着姿を見たことにより、ドキドキが治まらず、ヒスリかけたので血流を抑えようとした。地面に四つん這いになって。そして、先輩や音央、鳴央、理亜達に対して邪な想いを抱いたことに激しく後悔していると。

グサツ!!

「うぎゃああああ!!」

俺の尻に何か刺さった!?!?

慌てて振り返ると、少し離れたバラソルの下で、ビーチチェアに寝そべり『既に最高のバケーション中ですが、何か?』と言わんばかりに寛いでいる一之江がいた。

サンガラス、片手に持ったトロピカルな飲み物、暇つぶしの雑誌等、こういう高級リゾートを楽しむことに慣れきったような態度には貫禄すらある。

まあ、あいつは実際金持ちのお嬢様だからな。こういう場所にも慣れていても不思議じゃない。

それより気になったのは……あの距離から俺の尻に何を刺したんだ?

「何するんだ一之江、ってか何したんだ!!?」

「ただ指銃シガンを飛ばしただけです。そのまま尻に刺さる感覚が嬉しくなれば皆さんにပါတ出来なくていいかな、と」

「さらりと恐ろしいこと言いやがった!!?」

指銃を飛ばすって何だ!!? お前はどこの政府の暗殺部隊か!

尻に刺さる感覚が嬉しくなるって……俺にそちの趣味はねえ!

あんまり深く考えたくない言葉を発する一之江であった。

しかし、一之江はいつ見ても真つ白で綺麗だな。病的に見えないのはちよつと良い感じに引き締まりつつも柔らかかそうな体の線の賜物か。なんていうか『ちゃんと鍛えてある』感じで武偵的な視線で見てもいい感じな鍛え方をしている。

一之江の体を見つめていると。海の方から。

「アリサーー!　でかい魚がいたわー!　ヒヤッハー!　逃げろ逃げろー!」

「ウニを拾ったぜ!　後であつちにいるスケベ男のケツにでも突っ込んでやろうぜ!」

大はしやぎしてる中学生ズの声が聞こえたきた。アリサはなんか物騒なことを抜かしているが、俺に言ったんじゃないかと、アランに向けて言ったんだよな?

そうだよな?　そうだと行ってくれ!

ちなみにやや沖では、氷澄が運転する水上オートバイに引つ張られて、ラインが水上スキーを楽しんでいるのが見えた。よかった。ラインのことだから水上オートバイを追い越すとか無茶苦茶なこと仕出かすかと思つたが常識はあつたようだ。

「……一番非常識な人が何言つてるんですか」

あ、あー聞こえん。何も聞こえない。

一之江からジトーとした目を向けられていると。

砂浜にいる音央や鳴央と目があつた。

「お？　これからみんなとビーチバレーでも始めるのか？」

「あんたの前では死んでもやりたくないんだけど」

嫌、別に見たいとは言つてないんだが。

「音央ちゃん、鳴央ちゃん、ビーチバレーやろうよ！　　キリちゃんはわたしのチームね

！」

先輩からまさかの援護射撃が来た。

「ちよつ、会長……うー」

口をへの字にしながら、赤い顔で俺を見る音央。

もじもじしながら、やつぱり真つ赤な顔をして俺を見つめてくる鳴央ちゃん。

うん？　俺……なんかしたか？

「ようーし、モンジ君！ 審判やってねっ！」

キリカは早速ビーチボールを用意していてノリノリだった。

はあ、仕方ねえな。あまり近くで見たくないんだが、なんか断られる雰囲気じゃないな。

やってやるよ。

つうか、この四人でビーチバレーとか。

あれだな。

戦艦同士の対決だな。いや、どこに戦艦要素があるのかとは言わんが。

グサツ!!

「うおおおおい」

尻にまた何かが刺さった!?!?

慌てて振り返ると、一之江はトロピカルな飲み物を飲みながら読書していた。まるで『私は何もしてませんが何か?』と言わんばかりに。くそ、ゴムボートで参戦出来ないからって……痛だだだ!?!?

すまん、嘘だ! ジョークだ! 許してくれ!

一之江はゴムボートでもあれだ。軍用のゴムボートだから安心してくれ!

「負けたらモンジ君にサンオイルを塗ってもらおうでいいよねん☆」

「モンジに幸福しかないルールだと!!?」

先輩の提案にアランの馬鹿が大声で叫ぶ。

声デカイな。つうか、それは幸福じゃなく、不幸の間違いだろ?

「い、いけません、会長そんなの!!?　こんなヤツにオイルなんて塗られたら、子供出来ちゃいますよ!!?」

「出来ねえよ!!?」

そんなんで子供出来たら俺は常にヒスリっぱなしだ!

こんな苦勞してねえ!

音央は物凄い顔で先輩に抗議していた。鳴央ちゃんは口に手を当てて、俺を見て、ボールを見て、砂浜を見て、俺を見て……ときよろきよろ忙しい。

「モンジくんの子供なら可愛いだろうねー」

先輩それは……ど、どんな意味で言ってるんですか!

「きつと食べちゃいたくなるくらい可愛いですよねー」

キリカが同意すると別の意味に聞こえるんだが。

「あたしが勝つたらモンジには砂に埋まって貰うわ」

ギロツ、と凄い顔で睨んでくる音央。おー怖い。怖い。綴や蘭豹、切れたアリアの半分くらいしか怖くないけど。

「音央さん、兄さんを埋めたらスイカを割りましょう」

「……えつとな、理亜。それはもしかして、砂で埋まった俺の近くでやったりしないよな？」

「当然兄さんのすぐ隣でやります。その方がいろいろ合理的ですから……ふふふ」

「俺の従姉妹がこんなになんて病んでるはずがねえ！」

「こうして、俺の、いや……俺達の愉快で痛快な海物語は始まったのだ。」

第1章 2000年問題の口ア

第一話。告げる言葉

「もつと右よ」

「うん、左だね音央ちゃん」

「んー、キリちゃんもつと左だよ」

「詩穂先輩、この辺でいいのかなー？」

「うん、そこそこ。鳴央ちゃん、その辺でいいよね？」

「は、はい。え、えつと。……出来るだけ優しめをお願いします」

「あはは。優しいなー鳴央ちゃんは」

「前に二歩。そうそこです。さあ、今です。その虫野郎を叩き潰すのです！」

「容赦ないねー、瑞江ちゃんは」

「ば、バカ違う。もつと右だ。ち、違う。そこじゃない！　　ば、バカ……や、やめつ」

「んーここら辺かなー？　　えいっ♪」

パゴーン、と木の棒で割られたことにより、赤い液体が飛び散る。

グチャーと、中身が飛び散る様を隣で見せられた俺は恐怖で震えていた。今の俺の状

況を一言で言えば砂浜に埋められて身動き取れない。以上。俺の横には木の棒で砕けたスイカの残骸があった。

「あはは、モンジ君。どうびつくりした？」

先輩が楽しそうに笑う。

「ドキドキしっぱなしで死ぬかと思った」

見ての通りだが、スイカ割りに参加させられていた。

スイカの隣に埋められて。割られたのがスイカで本当よかった。

さすがの俺も頭潰されたら死ぬ……と思う。多分。

「つーん。自業自得です。鼻の下伸ばす兄さんが悪いんです」

理亜はそっぽを向く。

「俺は何もしてねえだろ！」

「普段の行いが悪いからです」

うぐつ、そう言われたら反論できん。

普段の俺はともかく、あつちの俺は高確率でやらかすからな。

はあー、と溜息を吐いていると。

「不思議だよね。私達みたいな子達がこんな風に皆んなでワイワイ楽しめるなんて」

キリカが俺の横に立って小声で囁く。

「ああ、そう言われれば楽しそうだよなあ……皆んな」

ロアとハーフロア、そして……人間。全く気にならないほど自然に溶け込むように集まってるが言われてみれば凄く濃い面子だよな。

「これもキンジ君が持つ力だよな」

「俺の？」

「うん。人と私達みたいなロアを惹きつける力。一種のカリスマ性っていうのかな？」

君は持っているんだよ。人やロア、ハーフロアとかの人外。そういった存在を惹きつける力を。本人の意思とか関係なく。強いカリスマ性を持つ人は私達みたいな存在を引き寄せるから。ううん……違うなあ。君だからかな？ 君が君だから、皆んなこう

して集まるんだよ、きつと」

「俺にそんな力はねえよ」

「ふふ、まさに美少女ホイホイだよな」

なんだそれは……。

そんな力はいらん。

普通に、平和に暮らしたいんだよ！ 俺は。

「さてと。これ以上いたらモンジ君にホイホイされちゃいそうだから先にホテル戻るね」

「あ、オイ、待てキリカ!? 俺を置いて行くな! ここから出せ!」

「あはは! じゃ、頑張つてねー、瑞江ちゃんと鳴央ちゃん達後はよろしく!」

「おい、キリカ!?」

俺の言葉をスルーしてキリカはホテルに向かつていく。

「モンジ」

「モンジさん」

「うん?」

一之江と鳴央ちゃんが側に寄つてきた。

ち、近い。二人共水着姿の為か、肌の露出が多いせいか、汗の匂いが普段よりも強く

感じられることもあり……いかん、ヒスる!??

「これをどうぞ」

一之江はしやがみこんで、俺の頭に何かを乗せる。

「つて、いて。いててつ、なんだこれ!?」

「さて、何でしょうね。ヒント・やばい」

「やばい!?」

何だ? 何を乗せやがった!??

なんか俺の頭の上でもぞもぞ動いているぞ!

何か刺さつてきた!

チクチク

痛い！
が。

頭の上よりもつとやばいもんが目の前にあつた。

ちよつ、一之江さん!!?　　ち、近い。

つうか、み、見えてる。

しゃがみこんでいる一之江の水着姿……というか、股間部分が俺の前に全開してるんですがー!!?!

い、いかん。ヒスるー!!?

だが、俺が見えてることを一之江が気づいたら……こ、殺されるかもしれん。どうしましよう……!!!

ここで俺が、閃く。新技ツ

(視線逸らし!)
スラッシュV

見たくないもんは、見ないに限る！　と、単に横に向いたところで。

今度はしゃがみこんだ鳴央ちゃんの胸元が視界に入る。

(視線逸らし失敗した、だと!!?)

キリカよりも大きいたわわ胸に気を捉われていると。

鳴央ちゃんが微笑む。

うつ、き、気づいていないのか？ 目の前ですんごく揺れてるんだが。

「ふふつ、さつきそこを歩いていたカニを一之江さんが捕まえたんです」

「カニすら引き寄せてしまう私の美貌ですから」

「ま、まあ一之江が可愛いのは確かだが、カニに好かれるつてのはどうなんだ」

よ、よし。二人共、まだこの状況に気づいてないようだな。

だったら、ここは最後まで気づかなかつた、見てなかつた、ことにして乗り切つてやる！

「それもそうですね」

一之江は俺の頭からカニを取ると、そのまま砂浜に逃がしてやつていた。

こういう動物と戯れる可愛いところもあるんだなあ、なんて思っている。

「よいしょ」

一之江の手には、いつの間にか鋭利な刃物が握られていた。

「ちよ、ちよつと、一之江さん!?」

美少女がカニと戯れていると思っていたら、いつの間にかその手に刃物持つてました。

「いやいやいやいやいや！」

おかしい。何だこの状況。

「どうかしましたか？」

細い腕、白い手に持った武骨なナイフ。そのナイフの刃は婉曲的に広がっており、かなり殺生力が高そうだ。どう考えても人を殺す為の武器そのもの。

それを、砂浜で当たり前のように手に持って一之江は俺に突きつけてきた。

「股間見物料はその首です」

「高い見物料だな、おい」

「何か？」

「いえ、良心的な価格設定かと思えます？」

うおい。刃先を近づけるんじゃない！

さすがの俺もこんな至近距離から刺されたら死ぬ！ 死んでしまおう！

「まあ、チラ見くらいなら仕方なく許して差し上げますので、凝視はしないで下さいね」

「ぎよ、御意」

一年後輩の某赤貧忍者みたいな返事をしつつ、一之江のことを考えてしまおう。

流石に一之江も今の状況は恥ずかしかったみたいだな。恥ずかしかったから、刺す！

みたいな考えはどうかと思うが……ま、まあ。命取られなかつただけマシだな。

あんま見ないようになしよう。見たら死ぬ。ガチで！

「ドキドキしましたか？」

「ああ、いろんな意味でな」

「なるほど……脈ありですね」

「ふふっ、一之江さんとモンジさんって、本当にいいコンビですよね」

鳴央ちゃんがクスクス笑いながらそう告げる。慎ましい『ザ・癒し系』の鳴央ちゃんと、『ザ・殺伐娘』の代名詞である一之江の組み合わせは珍しい……というか、かなり予想外な組み合わせだ。

「で、なんかあつたのか鳴央ちゃん？」

鳴央ちゃんの方に視線を向けたが……うっ！

ここ、このアングルはまずい。水着姿の彼女はスタイル抜群なんだが、当然あそこも視線にバツチリ入ってしまうわけで。い、いかん。あんまりジロジロ見てたらヒスってしまふ。

一之江の方に視線を向けたが……おい!!?

な、何でまた俺の前で座ってんだよ！

股間見えるだろうが!!!

い、いかん。血流が。

くる。来た。やつが 来る ゾ！

「音央ちゃん達は休憩しに、一度ホテルに戻りました、って連絡をしに来ました」

「……俺を置いていく辺り、流石だな」

理亜も『つーん』とした態度でいなくなってしまったしな。砂浜には顔だけ出したまま、埋められた俺と、俺の横に置かれた潰れたスイカしかないからな。

「まあ、鳴央ちゃんや一之江がいてくれるだけで今の俺は嬉しいよ」

「うわあ、他の人がいなくなつたと知つた途端、口説き始めましたよ、このハゲ」

「ハゲてねえよ!!?」

「私が水着姿だからって、本当いやらしいですね」

「一之江の水着姿が楽しみだったのは本当だけど、前にも見たことあるよな?」

キリカの正体を知つた後、一之江や先輩、キリカと一緒にプールに行つて堪能させてもらつたからな。

「綺麗なものは何度も見たいでしょう?」

「まあ、それは確かに……」

一之江の水着姿はかなり似合つていふか、一之江は何着ても可愛いのは知つてるからそこは同意した。

ただ、惜しむらくは、水着姿になつたとしてもその胸の大きさは……。

チクリ。

「すみませんでした。大変素晴らしい体付きをされてると思つています。俺は胸の大きさに女性を選んだりしないからそこは安心してくれ。小さくても胸は胸だ。君はとて

も可愛らしいよ、一之江」

「よろしい」

首筋に痛みを感じた瞬間、俺の口は動いていた。俺の返答に一之江は満足してくれたようで、構えていたナイフをようやくスツと何処かに仕舞ってくれた。

いつも思うのだが、何処から出してるんだ、あのナイフ。

まるで手品を見ている気分だったが、一之江なら出来ても不思議じゃないな、と思つたから俺は考えるのを止めた。現実逃避つて便利だよな。

「しかし、私は人がごみごみしているビーチとかは嫌悪しますので、このほのぼのプライベートビーチ状態には満足しています」

「あ。私も、他に誰かいたら水着なんて着れなかつたなー、と思います」

「二人が満足しているなら俺も嬉しいよ。俺も二人の水着姿は他の奴には見せたくないしね。」

俺は前から一之江には休んだり、遊んだりして欲しかったし」

「そういう気を使われていたのも知ってます。なので、今な容赦なく遊び倒すつもりです。ここにいる鳴央さんとも親睦を深めたりイチャイチャしたりぼいんぼいんしたりします」

「ぼいんぼいんぽっ？」

ヒス的には大変困った光景だが、二人には仲良くなってほしいし。うーむ。

「え？　え？」

「後で感想を頼む」

オロオロする鳴央ちゃんを見ながら俺は一之江に返答した。

「いいでしょう」

「え、そ、その、あの、こ、困ります……っ！」

困った顔を鳴央ちゃんがする。ああ、やっぱり可愛いなあ。

うん、一之江よ。いろいろと仲良くしてやってくれ。

「ま、最近では都市伝説的な事件もなかったし、親睦を深めるのには丁度いいタイミングだよな」

「こういうリゾート地には大抵、都市伝説が付きものですけどね。例えばあの崖とか、如何にも色々ありそうです」

一之江の視線の先にある崖。

そこはサスペンスドラマとかでありそうな、犯人役と刑事役が対面してそんな断崖絶壁だった。

「誰の胸が断崖絶壁ですか」

「言ってねえしー!!」

背中に、背中になんか刺さってるー!?!?

止めろ一之江! グリグリするな!

「さて、モンジ弄りはこのくらいにして「弄りつて何だ!?!」刺されるの好きでしょう?

「俺にそんな趣向はない」さて、話を戻しますと。ああいう崖下からは、手が出て来たりしそうですね。「スルーされた!?!」……うるさいですよ、虫野郎」

「……」

「ああ、ありますね、そういう噂」

鳴央ちゃん、君もスルーですか。そうっすか。

「ん? 手がいつぱい?」

手に纏わる都市伝説というと、スナオちゃんみたいな感じか?

「あの崖をカメラか何かで写していたら、海からぶわーっと大量の手が手招きしている、という感じのホラー系な噂ですよ」

「うわあ、何だそれ。スナオちゃん系の人を浚う能力を持つアアか?」

「あのような、自殺者が多そうな崖にはそういった噂が立ち易いみたいなんですよ。不謹慎なカメラマンが崖の上に自殺しそうな人がいるのを見つけて。これはスクープになる!」
「と、思つて写真を撮つてみたところ、その人に向かってたくさんの手が崖の下、海の中から何本も現れて手招きしていた——つて感じの」

「うわあ……嫌な噂だな」

自殺者が次の犠牲者を求めて招いている、そんな感じの話しか。

ロアになったら、手強そうだな。

「ちなみにロアになると、その場所限定で現れるロアになります。崖の下の海から手招きするロアなのに、山にいたらおかしいでしょう?」

「地域限定になる分、その力は強いとも言われていますね」

「ああ、前に言ってた『ご当地ロア』って奴かあ」

「ええ、あのトンネルで出た『死ねばよかったのに……』のように、トンネルや山、崖などの出没場所が限定されるロアがそれに当たります。そういった意味では鳴央さんも実はその『場所限定』に近いものではありませんでしたね」

鳴央ちゃんがいいたのは『富士蔵村』の『和室』だったな。

「はい。なので私の場合、あの『和室』や『妖精庭園』フェアリーガーデンに招いてしまえば、とても強い力を発揮出来ます」

「そういうものなんだな」

「この島の崖にはそういった噂はないみたいですね」

一之江は先輩から事前に聞いていたみたいだった。こういう情報収集力も一之江の強さなんだろうな。

「まあ、そういうロアの話しはさておくとしまして……モンジ」

「うん？　何かな？」

「何かありましたか？」

「ま、いろいろ、とな」

——　　ついで、先日。俺は愛の告白に近いものをした。

告白………だったのかははっきり断言できないが、自分の想いを相手に示すという意味ではあれは告白になる………と思う。

本来なら、俺ではなく。一文字が伝えなければいけなかった想い。

だが、一文字は俺と同化しているとはいえ、主人格は『俺』だから、俺の口から伝えなければいけなかったんだ。一文字の想いと覚悟を。

俺の口からちやんと。

俺を好きでいてくれる理亜の為にも。

「なるほど。なるほど。で、フラれたんですね」

エスパー一之江には内心の想いは筒抜けだろうけど。

「フラれてねえよ!?」

まだ、な………。

「あ………そ、そうなんですわね？」

鳴央ちゃんがモジモジと口元に手を当てて確認してきた。

あー、そうか。結果報告とかはしてないからな。保留されたし。

「随分と当たり前のように過ごしていますね。もしかして、そんなまさか、とは思いますが何気にOKを貰ったりしたのですか？」

うん？　なんだ？　一之江は俺の告白結果に興味あったのか。というか、一之江

なら俺の考え読めるだろう。

「読めませんよ。例え読めてしまったとしても、私は貴方の口から聞きたいです」

「OKは貰えなかったんだ」

あの告白の後、先輩は本当にビックリした顔をしていた。

俺が。一文字疾風が先輩のことを好き……なんて、とつくにバレていると思っていたのに。

『わっ。びっくりしちゃった、えへへ。わたしもモンジくん好きだよ♪』

この返事までは予想通りだったのだが。

『でも、お返事は待ってくれたら嬉しいかもかも。それよりモンジくん、テスト明けに遊びに行かないかじゃ？』

という流れで今に至る。

「ふむ、保留されたのですね。まあ、一瞬で撃沈しない分だけ……あの先輩が悩むくらい

には、貴方に脈があったことに驚きました」

「ですね……あ、いえ。モンジさんに魅力がないというわけではなくて、あの七里先輩が返事を待たせるっていうことに驚きました」

「ああ、俺もだ」

先輩が返事を先延ばしするなんて思ってもいかなかった。

撃沈するもんだとばかり思っていたからな。

「で、どんな口説き文句だったんです？」

ん？　なんだ。やっぱり一之江はこういう告白話しに興味あるのか。

保留されてる身としては、失敗談として語るわけにもいかず、だからと言って成功だと語るわけにもいかないので、微妙な話題なんだけどな。

「あー、いや。普通に好きです、って言ってだな……」

「ベタですね。それから？」

やっぱり一之江も女子なんだな。こういう恋愛話とか好きなんだな。

それとも俺を揶揄うネタを探しているだけか？

鳴央ちゃんも顔を赤くして、興味深々に俺の話しに聞き入っているし。

「その後にかキモい言葉を付けてしまったのですね。おっぱい見せてください、先輩のパンツおくれ、とか」

「言わねえよ!!?」 どんな変態だよそれ!!? 俺は神龍にパンツ願った豚じゃねえ

!!?」

「いきなり三連ツツコミとは。貴方もこの2カ月でツツコミが上手くなりましたね」

「よくボケる奴がパートナーだからな」

「感謝してもいいのですよ?」

あくまで上から目線で一之江は言ってくるが。

なんだ? 何か変だな。いつもよりぎこちないっていうか、無理して笑ってるよう
な。

「なあ、一之江」

「パンツならあげませんよ?」

「そんなこと言わねえよ!!?」

気のせいかな。いつも通りの一之江だな。

「で、何ですか?」

「いや、気のせいだな。なんかいつものお前じゃなかった気がして……」

「いつものわたしってなんですか?」

「ん? そりゃ、ボケて、突っまれて、俺を刺すのがお前っぽいけど、それよりもいつも
なら埋れてる俺なんか放置するのがお前だろ?」

いや、もっとエゲツないことをやるのが一之江のはずだ。

それなのに、今は単なる恋バナを聞きに来ていただけなんて。こいつらしくない。

「気まぐれ……と言いたいところですが、まあ……そうですね」

「ん？」

「気になってしまったので。貴方のことが。こつぴどくフラれたのなら、その首でも落として迷いから解放して上げようかと」

「まだフラれてなくてよかったです……！」

前半だけ聞けば一之江は俺に気があるみたいだなあ。前半だけ聞けば。

「その告白結果は私や音央ちゃんも気にしていましたからね。音央ちゃんなんて『会長に会ったらどんな顔すればいいか悩むわー』って言っていました」

なんで音央がそんなことで悩むんだ？

うーむ。分からん。

まあ、周りの奴らをやきもきさせていたのは確かなようだな。

「そつか。ごめんよ。気にさせてしまって……謝るよ」

「あ……いえ」

「で、なんて言ったんですか？」

一之江ははつきり言わせたらしい。俺が先輩になんて告げたのかを。

「俺の中で、大事な人に告げる言葉つてのが、今はあつてだな」
「……はい」

鳴央ちゃんが神妙そうに頷く。

「俺の物語になつてくれませんか、つて」

その瞬間、一之江の目が大きく見開かれた。

第二話。時計の真実

「……七里詩穂に、それを告げたのですか？」

ん？　なんでそんな驚いた顔をしているんだ？

俺が詩穂先輩にそう告げたのがそんなにシヨツクな出来事だったのか。いや、一之江なら俺がわざわざ言わなくてもわかってたはずだろ。

なのに、なんでそんな驚いた顔で俺を見るんだ？

一之江は俺の顔と、俺達が泊まっているホテルの方を何度も繰り返し見る。今頃あのホテルでは音央やキリカ、理亜……そして先輩が休んでいるはずだ。

音央達が戻って来ないことを確認すると、一之江は俺の首を掴み……つて……痛い、痛い。その掴み方、強襲科の蘭豹と同じ掴み方だ。一之江は俺の首根っこを片手で掴んで、そのままズボツと無理矢理砂の中から抜き取ると俺の体を引きずりながら歩き始める。ちよ、首根っこ掴むのは止める。どこへ行くんだよ……？

「ちよと面を貸しなさい」

「引きずりながら言う台詞じゃないよな……？　……ま、こういう扱いには慣れてるか

ら別にいいが、どこへ行くんだよ？」

一之江に文句を言ったその時。

俺を心配そうに見つめる鳴央ちゃんの姿が目に入る。

「すみませんが、ちよつくらこのバカと話しがあります。何事もなければ夜にでも話し合った内容でミーティングを始めましょう」

「あ、はいっ、わかりましたっ」

鳴央ちゃんに指示を出した一之江は俺の首を掴んだまま、ズリズリと引きずりながら歩き出す。

鳴央ちゃんをわざわざ置き去りにするつてことは彼女にはまだ聞かせられないような内容を話したい、つてことだよな。

一之江の首の関節を外して、一之江の拘束から抜け出した俺は鳴央ちゃんに向き合う。

「じゃ、ちよと言つてくるよ。鳴央ちゃんもゆつくり休んでくるといいよ」

「あ、はい。そうしますね」

俺の言葉に鳴央ちゃんはおくくんと頷く。

「あつ、それとな、鳴央ちゃん」

「はい？」

首を傾げるその姿がとても可愛らしくて、思わず笑みを浮かべてしまう。

「君の水着姿、とつてもよく似合ってるよ。感動した」

「え……!?？」 あ……!」

自分の姿に今改めて気付いたのか、自分自身を抱きしめるようにぎゅつとする姿がとても愛おしく感じた。

一之江や鳴央ちゃんの水着姿を間近で見続けたせいとか、ヒステリアモードが強化されていた俺は彼女に感想を告げていた。

「まるで、海の幼精が水浴びをしているかのようなようだったよ。とても綺麗で、驚いたよ」

俺の突然のカミングアウトに……鳴央ちゃんは。

「……頑張って選んだ甲斐がありました」

はにかみながらそう答えてくれた。

うん、音央とは違った魅力が鳴央ちゃんにはあるね。清楚な女の子が水着姿に恥じらいつつ、嬉しそうにはにかむ、その姿は何というか幸福な気持ちになれる。

ありがとう。鳴央ちゃん。とつても幸せな気持ちになれたよ。

「そこで口説いてないで、さっさと行きますよ、ハゲ」

「ハゲてねえよ!?？」

いつものやり取りをしながら俺は一之江の後を追う。

ちらりと振り返って見てみると、鳴央ちゃんは今まで見せたことがない、ふにゃふ

にやとした顔で嬉しそうに笑っていた。……何が嬉しかったのかはよくわからないが、まあ、嬉しそうなら……ま、いいか。

一之江と一緒に崖までやってきた俺は何故か崖際まで追い立てられ。

「犯人は貴方ですねモンジ」

「くっ、どうしてわかったんだ」

「探偵役と共に崖に來た段階で犯人確定です」

「そこは推理で追い詰める場面じゃないのか!」

「では……探偵ぼく。真実はいつも一つ! 爺ちゃんのこと……」

「まてまて。何を言う気だ?!? それ以上はダメだ。お約束でもダメだ!」

「身体は子供、頭脳は大人って……誰の身体付きが子供ですか、殺しますよ、ぐりぐり」

その名は名探偵……って。

「言っつてねえ」

「!!!!」

「ま、それは置いときまして」

「だったら刺すの止めろ! マジで命足りないから」

「大丈夫ですって。心臓止まっても、モンジなら自己蘇生とかできますって」
「…………いや、流石にそれは」

出来ない、と言いたいが…………。

自己蘇生出来…………るんだよね。前世で何度か死にかけたりしたせいで。『桜花』を用いた心肺の自己蘇生技『回天』を使えば心肺が止まっても蘇生出来ちゃうんだよね。今なら心肺停止技の『羅刹』喰らっても何度でも黄泉返れる自信がある。

ま、出来るのはヒステリアモードの時だけだし、流石に心臓を破壊されたら蘇れないけどな。一之江なら確実に心臓を破壊してきそうだよな。

などと考えていると。

「で、ですね」

一之江は声を潜めて話しかけてきた。

周りに誰もいないのに、崖下から僅かに波の音しか聞こえない環境にもかかわらず。「七里詩穂が、何らかのロアである、そう……………思っているのですね？」

一之江のその言葉に、俺の心臓は高まった。

「…………ああ」

先輩が、ロア。

それは何度も頭の中を掠めては『まさか…………』と思いついていたことだった。

だが、俺がその可能性を強めたのは、理亜との戦いの後だ。いや、それよりも前から身近な人物がロアであるという可能性は考えていた。その中で、一番可能性が高かったのは先輩だった。だって不自然すぎるだろう。俺が関わったロア事件はほとんど先輩がもたらしたものだっただから。

初めてヤシロちゃんと出会ったあの日、つまり、俺と一之江の運命が始まった日。俺がヤシロちゃんからDフォンを受け取った時。一番最初に接触したのも先輩だ。

境山へ『神隠し』に調査をしに行ったのも、先輩に頼まれたからだ。

そして、氷澄やライン、ジーサードと戦った時も、今思えば……全ては先輩の頼み事から始まっていた。

「なあ、一之江。先輩の家にはさ、あの時は大して気にもしなかったんだけど」

「はい」

「時計、なかったよな？」

俺の言葉に一之江は記憶を探るように顎に手を当てて考え込む。

「私があの家に入ったのは一度きりなので、そこまで注視していませんでしたが……確かに時計を確認した覚えはありませんね」

「そうなんだよ、俺は携帯電話か、安物の腕時計で時間を確認する癖がついてるから気にもしなかったんだけどな。あの家でいろんな事が起きた時間を確認した記憶がないん

だよ」

「いろんな事?」

『『ベッド下の男』に襲われた時とか』

まあ、その正体は実際は男じゃなくて、斧を持った拷問がエキスパートのイカれ教師綴だったわけだが。

「ああ、貴方が七里詩穂の下着を窃盗してニヤニヤしたり、口説いていた時ですね」

「ニヤニヤしてないし、盗んでいない! あ、あれは脱衣所に落ちていたから……」

「だから、くんかくんかして洗濯機の中に音速シユートした、と?」

「くんかくんかはしてないが……まあ、うん、そうだな」

一部誤解があるが、だいたいそんな感じなので何も言えない。先輩のパンツを手にとって、音速投げしたのは事実だし。

「しかし、それだけでロアと決め付けるのは不可能でしょう?」

「決め付けてはなないき。ただ、俺の周りの人で、可能性がある人物は誰か………みたいに考えた結果だったんだ。……前に、一之江がキリカを探していた時のこと覚えてるか?」

「はい。『ロア喰い』を探していた時ですね」

「ああ。あの時、一之江はキリカが先輩が怪しいって言ってた。結局、『ロア喰い』はキリカの方だったけど、もしかしたら先輩は別のロアなんじゃないか、って考えたんだ」

「……ふむ、ちゃんと考えていたんですね」

「そして、考えた結果、俺達が遭遇したほとんどのロアは先輩の依頼から始まっていた、みたいな感じがあつたんだ。神隠しの時もだが、ベッド下の男もそうだったしな」

「確かにその通りでしたね……ふむ」

一度疑いの目を向けると、詩穂先輩はとことん怪しかった。だが、心の何処かでは『そうじゃない』という感情もある。なんていうか、あのにやぱーつと笑う先輩には、こういう怖い都市伝説みたいなものには関わってほしくないからだ。

きつと、理亜もこんな気持ちだったんだろうな。

俺には、こんな都市伝説が実体化した『ロア』なんていう存在を相手にする世界ではなく、普通の人として生きていてほしい。そう思って行動を起こしたのではないか。

俺に普通の生活が出来るかはともかく。安全で平和な日常を送ってほしい。そんな風に思っていたはずだ。だが、俺は理亜の気持ちに反して辛くて、苦しい茨の道を選んだ。理亜と一緒に辛くても、苦しくても前へと進んでいく為に！ 一緒に生きる為に！

そうやって理亜の気持ちを受け止めた今の俺が、そういう気持ちから逃げるわけにはいかないよな。

詩穂先輩のことがどれだけ大切だろうと。

いや、大切だからこそ。

「憧れの先輩を疑うとは、成長しましたね、モンジ」

「正直、疑いたくなんてないんだけどな。『外れてほしいなあー』なーんて思ってる。だけど……先輩が理亜みたいに怖い思いをしているのかもしれないなんて思うと、なんとかしてやりたいな、って思っちゃうんだ。今の俺だと尚更な」

いや、きつと……ヒステリアモードじゃなくても、女性が辛い目にあってるかもしれないと思っただら居ても立っても居られなくなる。

だから目を背けないで、考えられることは考えようと思っただのだ。

俺は物語に出てくるような、正義の味方なんかにはなれないかもしれない、ただの落ちこぼれだけ……物語に出てくる英雄にはもしかしたらなれるかもしれないから。

「ふむ。まあ、その考えならいいでしょう」

一之江は静かな視線を俺に向けてくる。水着姿だというのに、その鋭い視線も込めて雰囲気はほとんど損なわれていない。人を威圧するのに慣れている、そんな貫禄すらある。

「それにしても、時計がない、ですか……そんな都市伝説があつたかどうか、ちよつと調べてみなければ解りませんが……」

「先輩って、割と時間通りに行動するんだ。一之江と知り合う前からそんな感じだった

みたいだし……」

「だったみたい、ですか……」

お察しの通り、今言った情報は一文字の記憶に残っているものだ。ここにいるのが一之江だけでよかつた。他の人がいたらややこしいことになってた。まあ、一之江だから話したんだけど。

「……家で時計を全く見ない人が、時間に縛られた行動をとるだろうか？」

「携帯電話で時間を確認するのに慣れきつただけかもしれないよ？」

「まあ、その可能性が高いけど……もしくはやたらと、時間感覚が凄いかもかもしれないかもな」

「……時間感覚……ふむ」

……。

……。

一之江は暫し考え込む。

その姿を見ていると、改めて一之江は可愛いらしいなー、なーんて思ってしまう。

清楚で人形っぽい外見なせい、深窓の令嬢みたいだからな。外見は。

リアルお嬢様っぽいし。

アリアといい、一之江といい、なんで俺のパートナーになる奴は金持ちなお嬢様ばか

りなんですかね？

パートナーな俺に、少しばかり恵んでくれないかなー。

まあ、アリアと同じで外見は良くても口を開けばその清楚な雰囲気は台無しだし、胸も……「殺す」……女性は胸じやないけどね！

大切なのは胸じやない。心だよ。

だから、ちよつとナイフ置こうか？ 寛容な心で許しておくれ。

そんなやり取りを数分した後、ナイフでお仕置きされた俺は一之江に声をかけた。

「なんだ？ 考え込んで」

「いえ、当たらなければいいなあー、という都市伝説なら思い浮かびました。ですが……

これは、本当に当たらなければいいなあー、というものです」

一之江が当たらなければいいなあー、と思うほどの都市伝説。そんな都市伝説が存在するなんて。

「な、なんだよ、それ。それはそんなに怖い都市伝説なのか？」

「はい。『終わらない千夜一夜』との戦いの折、貴方も聞いたでしょう。

最強で、最悪の都市伝説の存在を」

「……『ノストラダムスの大予言』のことか？」

『最強の主人公』である理亜ですら恐れる最悪の存在。

その噂の規模は全世界。ワールドワイドに知れ渡ることによって生まれた最強の都市伝説。そういうえば、世界規模で語られるから絶対に倒せない都市伝説だ、って、理亜やアリスは言っていたなあ。

世界を『破滅』に導く終末の大予言。それが……『ノストラダムスの大予言』。

「ええ、かのロアは、とあるロアの中に封印することで、脅威は去った……一時しのぎをした、とされています」

「アリスが言ってたやつか」

1999年に多くのロアとハーフロアが力を合わせて『ノストラダムスの大予言』と戦った、ドリームバトルが人知れずに行われていたと彼女は言っていた。きっと、彼女もその戦いに参加してたんだろう。

「その封印の依り代とされたロアは、『ノストラダムスの大予言』と同じように世界を破滅に導くと言われるほどのものでなければいけなかったそうです。そして、『ノストラダムスの大予言』よりも信憑性の高い、現代の人々にとってそんなオカルトよりももっと『実際に起こり得そうな』ものでなければいけない、そんなロア」

「そんな都合がいいロアが十一年前にいたのか？」

マジかよ!?!? 十一年前ってことは父さんが死んだ頃かあ。あの頃、世間を騒がせていたことって何があったんだ? ……父さんのことで頭いっぱいだったから、当時

の俺は世間のことに無頓着だったからなあ。

だから、『実際に起こり得そうな噂』なんてわからん。わからん、が……何だか、嫌な予感がする。

胃がキリキリしてきた。胸がバクバクしてるし……心臓に悪いな。

『ノストラダムスの大予言』よりも信憑性が高いロアなんかに関わりたくない。もし、先輩が本当にそんなロアで、説得ができなかったとしても絶対に戦いたくない。絶対に戦わないからな！ 絶対だぞ！

……絶対、絶対というと絶対に戦うハメになるのが、不運に定評のある2年の遠山なだけだな。

「はい。私もその名前を調べ当てて納得しました。確かに、あの1999年に世界中で話題になり、現実味もあつた噂が存在したのです」

鋭い視線を一之江は俺に向ける。

一之江に見つめられた俺は唾を飲み込んで彼女が語る言葉の続きを待つ。

何だ……一体、どんな都市伝説なんだ？

「……そいつは、一体……？」

「その『時』が来れば、あらゆる精密機械が狂い始め、下手をすれば核爆弾のスイッチすら押されるのではないか。コンピュータ文明的なものは、絶大なダメージを受けて文明

が崩壊するのではないか……そう囁かされ
「それがノストラダムスの予
言した人類滅亡だったのではないか、とも言われた恐怖の都市伝説」

一之江の言葉を聞いた俺は愕然としていた。まさか……そんな。その噂ならさすがに知っている。20世紀最後に語られた恐怖の都市伝説。ノストラダムスと共に語られた人類滅亡説。

だが……バカな。ありえん。ありえないだろう。流石にそれは。

その都市伝説を思い出した俺の胸と胃がキリキリと痛み出す。おいおい、勘弁してくれよ。

今、鏡で自分の姿を見たら間違いない、青白い顔してるだろうな。

そのくらいショックがでかかった。

「時計がないのも、その彼女自身が『破滅までの時間を正確に刻む』という特性を持つコアであるならば、全くおかしくないはずです」

「時計を見るまでもなく……タイムリミットが解るから、か……」

だが、ありえん。そんなことがありえるのか？

先輩は人間じゃなく、真正銘コアってことになるぞ。あの都市伝説のハーフロアなんて考えにくいからな。

世界規模で語られるくらいの噂を人間を対象にするなんておかしいからな。

「何もおかしくはありませんよ。噂さえされれば、人は誰でも、どんな物語のロアにでもなれますから。それが世界規模に広まって、人々が、世界が。七里詩穂を『文明を破滅させる存在』と認識さえすれば、人はハーフロアになってしまふのがこの世界の法則です。人はそういう変わった噂話が好きですから。

話しを戻しますが、それはかつて世界規模で語られた『コンピュータが狂い始める』という噂。それこそがノストラダムスの大予言を封印した都市伝説——それは」

人の噂話しによつて変わる世界の認識。認識の歪みによつて生まれる都市伝説。それが世界の法則。変えられない絶対的な運命。

その法則によつて、詩穂先輩がなつてしまった恐怖の都市伝説。

一之江ですら『当たらないといいなあー』というほどの都市伝説。

詩穂先輩がその『ロア』である可能性が高いもの。

それは——。

『2000年問題』です」

ロスト・ミレニウム

第三話。ドキツ♡ 男子禁制入浴タイムは波乱がいつ

ばい？

『俺達の物語になつてください』

あれはどういう意味なんだろう!!？

6月21日、私はこの日のことをずっと忘れなと思う。

生まれて初めての告白をされた日。ううん、告白自体はいろんな人からされたことがあるから初めてじゃないけど。この日にされた『告白』は今までされたどの告白よりも、私の心を乱していた。

私は大混乱なまま、誰もいない生徒会室の中をきよろきよろと見渡していた。

モンジ君はさっさ『俺の物語になつてください』と言った。

どういう意味で言つたんだろう？

もしかして、わたしが……その、普通の人間じゃないことに、とつくに気づかれていた？

もしかして、実はモンジ君はわたしがそういう立場の人だって知ってたの？

いつから？ どうして？ 誰から知らされたの？

わからない。わからない。わからないように。

今までそんな素振りは見せたことなかったのに。

従姉妹である『終わらない千夜一夜』との戦いで何かに気づいたの？

それともわたしの家に来た時に何か勘付いた？

確かに、高校生で一人暮らししてるなんて普通じゃないからおかしいと思われるのは解る。でもわたしの場合、本当に両親がいるから、キリカちゃんみたいに人間に寄生している訳ではないから、だから……そこからでは足は付かないはず……なのに。

そもそも、わたしのことを知っているのだとしたら……『何』として知っているのだらう？

「うーん……ぶくぶく……」

わたしはホテルにある大浴場に浸かって、ぶくぶくと顔半分をお湯の中に沈ませていた。

綺麗な海や空が一望できるスペース。ここでならいろいろ考えがまとまりそうだ、と思っただけだ。

ビーチバレーをきりあげたわたし達は各々ホテルに戻って休憩することにしたのだ。

瑞江ちゃんと鳴央ちゃんはモンジ君のところに残ったみたいだけど、音央ちゃん、キリカちゃん、アリサちゃん、理亜^妹ちゃん、スナオちゃん、アラン君は各自に与えられた部屋に戻っていった。

わたしは汗を流したいなー、なんて思ったから浴場に来ただけど……きつと、一人になつていろいろ考えたかつたつて想いもどこかにあつたんだと思う。

今回の旅行は、とつても楽しい。みんなが全力で楽しもうとしてくれるし。だけど、楽しい反面、どうしても気になってしまうのだ。

モンジ君の告白が……。

「どうしたのかなあ。やっぱモンジ君に、告白の返事しないとまずいよねえ……」

バレエでもそうだったけど、昔に比べて彼は女の子の扱い方が上手くなつていた。

いつもは昔と比べて引いたような態度をとつてるんだけど、ここ一番の時の仕草や言動は女の子の心を惹きつけるのだ。そのギャップにやられる子は多いんだと思う。

モンジ君といえは……そこで思ひ出すのは、彼と一緒に帰つたあの日。

わたしをお姫様抱っこして街中を走り周つた彼の姿だ。

男の子に抱き抱えられるなんていう経験はなく、しかも……女の子なら誰もが憧れるお姫様抱っこ。

彼に名前を呼ばれただけで、頭がぼーつとして。彼の言うことなら何でも聞きたくな

るあの感覚。

今、思い出ただけでも顔が真っ赤になるのが自分でも解る。な、なんでわたし、彼に逆らえなかつたんだろう？

あの頃からだ。彼のことを意識し始めたのは。異性という意味ではなく、こつち側の人間として。わたしと同じロアと関わってしまった人間として。

その頃から、彼の姿を目で追うようになっていた。
「うーん、そういう意味でなら、気になるんだけど」

嫌いではない。むしろ、わりと好き。

比較的悪くないっていう感じだ。全く脈がないわけではなく、異性として、恋愛対象としてはわりとありかも？　みたいな。

これからちゃんと育つていく熱さがある……そんな感じだ。
「でもにゃー……色んな女の子と仲良しだしにゃー……ぶくぶく……」

今日来ている女の子達だつてほとんどは彼絡みだし。

妹ちゃんなんて、露骨に『兄さんは私のです！』オーラ出していたし。それはそれで可愛いんだけど……なーんて思ってしまうのは告白された余裕からなのかな？　だとしたらわたしは嫌な子だよなー、なんて自己険悪して。

「うにゃー」

浴槽の中でゴロゴロしていると。

ガラツとドアが開いて女の子が入ってきた。

「うわあ、本当に凄ーい！　広ーい大浴場だね。アラン君やモンジ君がいたら大欲情しちゃうね！」

赤い綺麗な髪を靡かして、胸元に巻かれたタオルにはお見事過ぎる谷間が出来ていた。

うーん、やっぱ大きいなー。肩こりそうだね。でもわたしよりは楽そうかな？

「あは、こんにちは、詩穂先輩っ」

「あ、さつきぶりだね、キリちゃんっ」

体にバスタオルを巻いて手をパタパタ振ってくれるのは、仁藤キリカちゃんだ。

ロア界限でも五指に入るほど、胡散臭くて侮っちゃいけない『魔女』のロア。

「お部屋で休んでいなくていいのん？」

「大浴場が凄ーい！　って聞いたから見に来たのです」

ザバーツ、と掛け湯をしながら辺りをきよろきよろ見渡すキリカちゃん。

その体形は女のわたしから見てもセクシーで。そんなキリカちゃんに抱きつかれたらモンジ君が欲情してしまうのも解る気がする。大ききとかではなく、バランスで勝負

！　　みたいな。

そんなスタイルを持つのがキリカちゃんなのだ。

「綺麗な海、綺麗な空、そして綺麗な先輩の体ゲットですねっ！ モンジ君が食べたくなるのも解るなー、先輩ってば」

「ふふっ、ありがとねん♪」

同じようなことをキリカちゃんも考えていたんだね。

キリカちゃんはそのまま湯船に入ると、わたしの隣にススツとやって来た。

「ふむ。ボイン祭りになりそうな予感だぜ」

突然、そんな声が聞こえて。洗い場を見ると、いつの間に入って来たのだろうか？

そこには女の子がいた。綺麗な銀髪をこれでもか！ つてくらい伸ばした長い髪

の女の子が。

……ついさっきまではわたし一人しかいなかったのに。

「洗わないで入っていいのかよ、キリカ？」

「こようゆう温泉系では掛け湯をすれば入っていいんだよアリサちゃん」

ワシヤワシヤと髪を洗いながら、そうキリカちゃんに告げるアリサちゃん。

あんなに長い髪だと、洗うの大変だろうなー。

「よう、『管理人』。いつの間にかお邪魔してその体を満喫させて貰ったぜ」

「うわあつ、そんなことされちゃったのね」

彼女は『予兆の魔女アリシエル』。通称アリサ。

このロア界隈でも五指に入るほど、意地悪っぽくて侮っちゃいけない『魔女』だ。

「詩穂先輩がうわあつ、つて言ってるよ、アリサちゃん」

「ま、お前さんみたいな胡散臭い魔女がいきなり風呂に來れば、そりや嫌だろうさ。食べられるんじゃないか、つて。色んな意味で」

「あははは！ そりや、食べちゃいたいくらい素敵な体だけどね、色んな意味で。でも、詩穂先輩と私は前からとつくに仲良しだから、やっぱり意地悪で有名なアリサちゃんに対しての『うわあつ』なんだと思うよ？」

「つまり、そんな私たち魔女が二人して來れば、誰でも嫌つてことか」

「かもしれないね」

ニコニコニヤニヤ笑いながら言い合う二人を見て、私は思わず苦笑いをしてしまった。

「わたしみたいな子は、キリカちゃんやアリサちゃんみたいな子達には嫌がられるかな、と思つていたけどね？」

「あはははっ！ 私は平気ですよ、詩穂先輩。私とは仲良く遊んでくれますしね？」

「私だつて平気だぜ？ お前らみたいな胡散臭くて猫被つてる連中は好きだしな」

「悪い魔女さん二人にそう思つて貰えるならいいのかな？」

二人の事を知っているロアやハーフロア、ロアの関係者なら絶対一緒に入りたくないかもしれないね。

二人ともロアの界限では五指に入る、胡散臭くて、侮れなくて、油断出来ない、と一つでも恐ろしい『魔女』だしね。

「こつちに来るといいよ、アリサつちも。ここの温泉にはきつと胸がおつきくなる効果もあつたりするよん」

「……それは本当ですか？」

「うん、多分だけどねー」

「私はこのサイズでいいんだよ。お前さんたちみたいにポインポインしてると、新しいマスターにエロい目で見られまくるからな」

「……それも本当ですか？（ペタペタ）」

「あー、でもアリサちゃん。モンジ君はこないだ、私の胸をバツチり見られるタイミングで我慢したくらいだから、もしかしたら小さい方が好きなのかもしれないよ？」

「……やっぱり、そうなんでしょうか？」

「それはないんじゃないか？ キリカの話しを聞いてる限りだと、一番好きなのはやっぱその『管理人』なんだろ？ つてか、バツチり見られるタイミングってなん

だよっ？」

「……やつぱり、小さい方が好きなんではようか？」

「んふふ、そこは二人だけの秘密だね」

「なるほどな。さすがは胡散臭くて油断出来ない魔女だよな。人に言えないことをやっているとは……ところでキリカ。……さつきから気になっていたんだが」

「あはははっ！　意地悪で侮れない魔女のアリサちゃんがいるから言えないんだよ。とところで私もさつきからちよつろくと気になってただけ……」

「貴女（お前さん）誰（だ）？」

二人の視線は私の隣に向けられた。

今、この浴室にいるのは私、キリカちゃん、アリサちゃん三人のはず。

なのに、さつきからいるはずがない声が聞こえてきたのだ。

キリカちゃんの視線は私の左隣に向いている。

きつと、そこに誰かがいるのだろう。

ジジジ、と何やら機械音が鳴ったと思ったその時。誰もいないはずの空間から突然現れた。

うわあ、ビックリした！　現れたのは……女の子？

緑髪、短髪の小さな全裸の女の子が突然現れた。

その手には何故か……狙撃銃を持っているけど。あれってモデルガンだよな？

まさか、本物？　　つてそんな訳ないよね？

「えー……………つと、どちら様？」

「私は一発の銃弾。銃弾は人の名を持たない。故に答えられない。……………災厄の時が迫っています。もうすぐ、災厄が復活します。気をつけてください。

災厄は貴女のすぐ側にある、そう、『風』は言っています」

えつと……………何を言ってるの、この子？

会話になつてないよ。

「それと……………キンジさんにはもう近づかないでください。これ以上キンジさんを巻き込まないでください。もし、巻き込んだら……………風穴開けますよ？」

そう言い放ち、手元にある狙撃銃を構えてくる緑髪の少女。

え？　　何これ？　　何でわたし、銃口を向けられているの？

「うわああああああ!!　　見て見てアリサちゃん。緑髪のロリっ子が全裸で詩穂先輩に

銃口向けてるよ！

これはあれだねー！　　美味しい光景つてやつだよねー！」

「ああ、凄まじい光景だよな。エロゲでもこんなシユチユなかなかないんじやないか？

あの銃、ドラグノフだろ？　　狙撃手が温泉で全裸になつて銃を構える姿とか……………

萌えないか？」

ちよつと二人とも何言つてんの？ 助けてよ!!?

「……今日は警告だけにしておきます。ですが、もしキンジさんに何かあれば、その時は……私は貴女達を撃ち抜きます」

そう言つて銃を下ろして湯船に入る謎っ子ちゃん。

ひえええん怖過ぎるよー!!!!

キリカちゃんやアリサちゃん!!の魔女コンピは頼りにならないし、味方いないし。

もう、嫌だ！

上がろうかな。

そう思つていた私に緑髪の女の子が話しかけてきた。

「ところでさっきの話は本当ですか？」

さっきの話し？

えーつと……どのことを言つてるのかなー？

「この温泉には本当に胸を大きくする成分が含まれているのですか？」

そう問いかけてくる彼女の目は真剣だった。

何やらその目には凄まじい覚悟があるような気がした私はコクコクと首を縦に振つていた。

……そうしないと撃たれる気がした。

「う、うん、わたしはそう聞いた。お母さんに。昔からよくこの温泉入ってたし……」
そう言ったわたしを見つめる緑髪の子。その視線はある部分を凝視して。

「……まいました」

声のトーンは下がってしまった。

表情は無表情なんだけど、若干、落ち込んでいるような。生徒会長をやってるだけあり、色んな人を見ているわたしはこの子の表情の些細な変化に気づけた。

「だ、大丈夫だよ！　まだまだこれからだよ！」

いけない。励まさないと。

なんかよくわからないけど励まさないと。

「そうそう大丈夫だよ。女の子は胸の大きさじゃないから！」

ほら、キリカちゃんもそう言ってるよ？

キリカちゃんに視線を向けた女の子。そして、自分の手を自身の胸に当ててペタペタ触ると。

「……」

む、無言になっちゃったー！！！！

ど、どうしよう。これ。

この雰囲気どうしたらいいの？

誰か助けてー！！！！

「胸が小さくても大丈夫だぜ。世の中には胸が小さい女が好きっていう特殊な思考をした奴もいるし。きつと、わたし達の新しいマスターもそんな嗜好している。そう予兆したぜ！」

「……確かにキンジさんなら胸の有り無し関係なさそうですね。アリアさんみたいな体型でもなれますし」

おおっ！　アリスちゃんの言葉で元気が出たみたいだ！

よかった。よかったよー。何がよかったのかよくわからないけどよかったー。

安心した私にキリカちゃんの話しかけてきた。

「詩穂先輩よかったですねー。撃たれなくて。お話しようと思ってきただけなのにあやうく惨劇の現場に居合わせるところだったよー。アリスちゃんなら撃たれてもいいけど」

「私も撃たれるのは勘弁だぜ。そもそも戦いに来たわけではないしな。いくらこいつがある業界では有名な狙撃手^{スナイパー}で、私やキリカがいるとしても、今の『管理人』には敵わないからな」

「ま、そうだよね」

……あれ？

「……えっと、それって謙遜か何か？」

「いんや、事実さ」

「ほらね。やっぱり知らないんだよ」

魔女である二人は二人だけで何やら納得していた。そんな魔女達のニヤついた顔を
見ていた私はとても不安になった。

第四話。七里詩穂の過去

『ほらね。やつぱり知らないんだよ』

そう言ったキリカちゃん和阿リサちゃんは二人だけで何か納得している。

そんな二人の顔を見ると、それだけで得体の知れない不安感に押しつぶされそうになる。

「ええと……」

「あ、ごめんね詩穂先輩。気にさせちゃいました？」

「性格悪い魔女はこれだから困るよなあ。気にさせるように言つて確かめるし」

「意地悪な魔女だつて、わざわざ『今の』とかつけたくせに」

「わはは。ならば言い争いは先手必勝だぜ！ そりやつ」

ビュツと指で水鉄砲を作つてキリちゃんにお湯をかけるアリサつち。

「ひやつ！ 仕返しだよつ！」

キリカちゃんも器用に指で作つた水鉄砲で応戦する。

お湯が飛び交う昼間の大浴場で、わたしは二人が言つた言葉の意味を考えていた。

今の『管理人』、つまりわたしに二人が敵わない？

確かにわたしは本当にあつた都市伝説を纏めるサイト。『8番目のセカイ』を管理する『管理人のロア』で、その能力はちよつとエグイものだけど、だとしても色んな魔術を駆使する魔女に。それも一癖、二癖もある最悪な魔女の彼女達に対抗できるなんて思えない。

「ええい、タイダルウェイブだぜ！」

両手でバシヤバシヤとアリサちゃんがお湯をかける。

「わぷっ！　んもう、タイダルウェイブ返し！」

キリカちゃんは負けじとお湯を両手でかけ返した。

二人の間にいたわたしに当然お湯は降りかかり。

「ぷくたくりくとくも〜！」

考え事を中断させられたわたしは二人に対してお仕置きを決心することにした。

わたしが人差し指を立てると、その指先に青い光が灯る。この二人が相手だと、勝てる気がしないけどそれでも一撃くらいは入れたい。

「わっ。ストツプストツプっ」

指先に力を込めていると、慌ててキリカちゃんが手を振って制止してきた。

「正直すまんかった」

アリサちゃんもぺこりと頭を深く下げてる。

「キリカがいけないんだぜ！　悪の魔女はそいつだ！」

そして、キリカちゃんを指差し、責任を擦りつけ始めた。

「アリサちゃんがいけないんだよ！　死の予兆とか告げるいかにも悪い魔女はそっちの方だし！」

キリカちゃんもキリカちゃん、アリサちゃんを指差し責任の押し付け合いを始める。

こうして見ていると、二人とも本当に仲がいいまるで姉妹のように息のあったコンビなんだけどねえ。

「んもうつ。ご飯抜きにしちやうよん！」

「本当にすみませんでした管理人様」

「ごめんなさい詩穂先輩。死んじやうからそれだけは……」

ご飯抜きにしただけじゃ死なないと思うんだけど……ああ、もう！　わかったからそんな涙目で見えないのキリカちゃん！

あと、湯船の中で正座するのはいいけど、二人に正座させたわたしを冷めた目で見るショートカットちゃんの視線が痛いよお!!!

ち、違うからね！　普段からこんなことさせてるわけじゃないんだよ！

「気になる」と言つてすぐに脱線しないでっ」

「あ、それもそうでしたね」

「うむ。やつぱり悪い魔女はキリカだな」

アリサつちの責任転換は聞いてて面白いんだけど、それを当事者としてされるとその対応に困つちやうなあ、なんて思う。指先の光を収めて、唇を尖らせていると、キリカちゃんパタパタ手を振ってくれた。

「流石に『8番目のセカイ』の『管理人』とガチでぶつかりたくはないですよ」

「まあ、それ以外のナニカだったとしても、そもそも『管理人』つてだけで厄介だしな」
 魔女の二人はそんな反応を返してきた。

つまり、まるで反省していないらしい。

まあ、『魔女』という性質上こうやつてすぐに脱線したり遊んだりするのも仕方ないのかもしれない。彼女達はあくまでも研究者。『魔の道を歩む女の子』、『魔女』という存在なんだから。

『人間の意識や道徳』なんてものには一切縛られない存在なんだから。

「あ、でも。ちよつとは見てみたかったよね。『404リンク』」
ノット・ファウンド

「そりや見てみたいが、お前の項目なくなるけどいいのかよ」

「今は困るなあ。アリサちゃんならいいんじゃない？」

「そうやって平気で人に押し付けるなよな。適当な敵でも呼び出して見せて貰えばいい

じゃないか。そういう召喚も得意だろ？」

「アリサちゃんの使い魔の方が良くない？」

「私の可愛い使い魔を捨て駒には使いたくないんだよ」

「私も可愛いロアたちだから使いたくないなあ」

縛られないから自由。人間らしさなんて全くなく、だからこそ逆に最も人間に近い口ア。魔女というのはほとんどのロアが持つ制約はなく、長い、無限に近い年月をただひたすら、自身の研究に費やす少女たちなのだ。

だからこそ、魔女の逸話は多い。一度滅ぼしたくらいでは倒せたとは思えない、というのでも有名で。とてもじゃないけど、ただの『管理人』であるわたしが勝てると思えない。

そのはず……なのに。

『『今の』わたしは『やっぱり』って言われる何かがあつて、それを知らないってことなのん？』

ロアは噂から生まれるもの。

自分でも知らない自分の噂が流れていてもおかしくない。

「それについてもお話ししないなーと思つてたのです」

「私たち……つてか、『終エンドわらない千夜一夜』に仕えるロアも『101番目の百物語』に組み込まれた今、そろそろ本格的に考えなきやいけないことがある」

「詩穂先輩。これから話すのはモンジ君のことと――」

「これからどうするのか、つて話しだな」

「モンジ君との、これから……？」

「うん、その認識で正解」

「告白されたんだろ？ あいつに。あいつのことをこれからどうするつもりなのか

を考えてから、返事してやればいいじゃないか」

そう言った二人の言葉を聞いて、思わず小さな溜息を吐いてしまう。

二人はモンジ君の『物語』。

だから、わたしと彼の物語がどうなるのかも、気になるのは当然のこと。

普通の告白をされていたのなら、わたしはこんなにも悩んでいないのに。

よりによって『あの』告白だったから簡単に返事が出来ない。

そこまで考えて。もしかして？

とある可能性に気づく。

――もしかしてこの二人が、わたしが『8番目のセカイ』の管理人であることを

バラしたのかな？

でも、だとしたらそのメリットは何だろう？

モンジ君の魔女になったからって、わたしの正体を話すメリットはない。

そりゃ、『8番目のセカイの管理人』を物語の一つにするっていうのもある意味最大のメリットなのかもしれないけど、『管理人』であるわたしを取り込んだくらいでは、モンジ君が使える技が物凄く増えるわけではない。強いていうならばサイトでの情報収集能力が強化されて検索速度とかが上がるくらいだ。

でもそんなのは『魔女』の方が得意だろうし。

それに。

それに彼がわたしに恋心とかがあるとしても、キリカちゃんはそのことをどう思っているんだろう？

「……えっと、その告白のことなだけどね」

「うんうん！　モンジ君から、どんな風に言われたんですか、詩穂先輩っ！」

すっごい目をキラキラさせて近いて食いついてきたよ。この食いつきの良さは、流石はロアをむしやむちや食べることで有名な魔女なだけあるなあ。でも、嫉妬とかしないのかな？

やっぱり……恋心というより、獲物。捕食者と獲物みたいな関係。そういう気持ちみたいなものもあって、純粋なロアであるキリカちゃんには恋心はないのか、それとも

……本心は別にモンジ君のことをそれほど好きじゃないとか？

うーん、どうなのかな？

「あの男はオーソドックスか、無駄にキザっぽいかどっちかだろうな」

アリスちゃんを腕を組んで偉そうにしながらも、とても興味深そうに聞いている。

「二人とも、どんな風に彼が告白したのかまでは聞いてないんだ？」

「うん。私は告白したんだろうな、と思つてそつとしいたんだよ」

「私はむしろどんな告白をしたのか気になつて聞きに來たつてのものもある。私のマスター

……ああ、リアの方がが、あいつが気にするに違いないからな」

二人の顔を見ていると本当に純粋な気持ちで恋愛トーク、いわゆる恋バナをしに來ただけつていう気がしてきた。いろいろ警戒していたわたしが馬鹿みたいに思えてくる。

でも、だとすると……。

「実はね」

モンジ君は一体誰に聞いたんだろう？

わたしがただの人間じゃないつてことを。

どう知つたんだろう？

わたしがロアになつた経緯を。

いつ知つたんだろう？

わたしがロアだと、気づいたのは。

——
そう思ったから、もう包み隠さず話しちやうことにした。

「『俺の、俺達の物語になってください』って」

「えっ!?」

最初に驚きの声をあげたのはキリカちゃんだった。

「ヒュー。なんだバラしたのか?」

アリサちゃんが意外そうな顔をしてわたしに尋ねてきた。

わたしは静かに首を横に振るって否定する。

「ううん、全く気づいてなさそうだったのに、テスト前にいきなり言われたから……驚いちやうって。わたし、二人がバラしたのかと思ったよ」

ずっと昔から生きている『魔女』なら、わたしの正体に気づいてもおかしくない。

何故なら『管理人』の交代は古いロアならみんな知ってるから。

十年くらい前に交代した『8番目のセカイ』の管理人。その正体を、情報戦に長けた『魔女』が突き止めていないというのは考えづらいし、現にこうしてバレている。

「私は、そんなことをしたらキ……モンジ君が気にしちやうから、話してませんよ」

「私は、それを話してやる義理がまだあいつにはないからな」

「……だよ。だつたら……」

だつたら。

どうして。

——モンジ君は、わたしが人間側の存在じゃない、って知ってたんだろう？

温度の高い湯気の中でぼんやり座りながら、わたしはキリちゃんどアリサつちにわたしの過去を話すことにした。

わたしがこの『管理人』の立場……ハーフロアになつたのは、丁度十一年くらい前だつた。小学生の女子にありがちな話だけど、怖い話であつたりスピリチュアル的なものにハマつたりして。そこで、わたしは色んな都市伝説を集めては、それをお父さんが作つて放置していたH Pホームページに載せていた。

お父さんはプログラマーとして凄い腕前を持っていて、お母さんもコンピュータ関係のエンジニアをしている人で、そんな凄い両親を持ったわたしはコンピュータにとても詳しい女子小学生として近所で評判だった。

だから、まだ6歳とか7歳のうちにパソコンの使い方は覚えたり、ピアニストの家系にとつてピアノが当たり前のコミュニケーションツールであるように、わたしの家では生活の中心にパソコンが当たり前に存在する。そんな家庭だった。

だからその頃、ホームページに都市伝説や噂話、ちよつとした伝承、おまじないや占い、世界中で流行っていた予言とかを載せて友達に見せたり、ネット上でいろんな人が閲覧するのを見て楽しむ。

そんなちよつとした遊びを当時のわたしはしていた。

やがて、わたしのサイトが大手の掲示板でも注目を浴びるようになって、たくさん知らない人達から注目されるようになった。どんどん増えていくカウンターの数字。

当時盛り上がっていた掲示板やチャット。そこでわたしを小学生だと知らない人達が、顔も名前もわからない人達がわたしのサイトを訪れては様々な都市伝説を話して、議論し、広めてくれた。

わたしは楽しかった。

そんな人達が集まる場所の『管理人』をやることが。

とても誇らしかった。

現実ではなんの力もないただの小学生であったわたしがネットの世界では様々な人
がもたらす情報を『管理』できる立場にあることが。

小学生のわたしは、わたし自身、とても偉い、お姫様か何かになったんだとそう錯覚
するくらいに増長してしまっていた。

『管理人』が決めたことにはみんなが従う。そんなわたしのルールを嫌がったり、歯向
かったり、荒らそうとした人達は、わたしが何もしなくても他の人が勝手に追い出して
くれていた。

サイトでちよつと困ったことがあればお父さんやお母さんが対策してくれたし。

そうやって、わたしの都市伝説情報交換サイトはどんどん有名になり。

気づけばオカルト好きの間では知らない人はいないくらいの大手サイトになつてい
た。

わたしのサイトが発した噂がたちまち広がって、それが有名になつたりしたことも
あった。

中には世界規模で広がる噂とかもあって、余計にわたしのサイトはその名を轟かせて
いた。

だから、わたしが小学二年になる頃には、もうわたしは『管理人』としての存在性を確立していたともいえる。

そんな時、一通のメールが届いた。

『貴女のサイトで『8番目のセカイ』という名を引き継いでくれませんか?』

『8番目のセカイ』。

それはオカルト好きの間では知らない人はいないくらいの伝説的なサイト。

『本当にあった都市伝説しか載ってないサイト』。

それまでのわたしのサイトには作りものの逸話が多かった。いや、どれも信憑性が低いただの噂レベルの話が中心だった。わたし自身、信用していなかった。

だから、そんなメールが来た時、わたしは迷った。

本当にわたしが『8番目のセカイ』の管理人になっていいのか、と。

だけどいつしか、わたしのことを『8番目のセカイを管理する人』。そう噂する人が現れた。

わたしのサイトこそが真の『8番目のセカイ』で。

その『管理人』こそがこのサイトの作成者なのではないか、と。

……だったら。

だったら、わたしが、わたしのサイトが『8番目のセカイ』だと名乗ってもいいのではないかな？

そう思ったわたしは、それがどんな意味をもつのかも良くわからないまま。

サイトのタイトルを『8番目のセカイ』に変更した。
してしまった。

それが全ての始まりだった。

サイトの名前を変えた次の日。わたしは同じクラスメイトの『三枝さん』という子から黒い携帯電話を渡された。シンプルな作りでシンプルなデザインだけど、どこか引き寄せられる。そんな携帯電話を。

「はい、詩穂ちゃん！　これがあなたのDフォンですよ！」

「デュー……フォン？」

「ええ、あなたの運命を導く、あなただけの端末です。」

「ロアならみんな持つてるものだから、詩穂ちゃんも大切にしてくださいね」

「ロア？」

最初は何を言われているのか、わからなかった。

どうしてそれを貰ったのかも解らなかった。

そもそもごく普通のクラスメイトで、一緒に遊んだことのある三枝さんがどうしてこんな物を手渡してきたのかも解らなかった。

「それはこれから詩穂ちゃんを守ってくれるものです！」

あ、でも……もしかした

ら、逆に怖い目に遭わせるものかもしれませんけどね。ふふっ！」

三枝さんがとても楽しそうに話したものだから、わたしはきつとこれも新しい『遊び』なんだと。

そう思ってしまった。

でも、実際は本当のことです。

その瞬間からわたしは『管理人』のハーフロアとなつて。

この『8番目のセカイ』を管理する者になつてしまつていた。

「そのわたしが、別の何かかもしれないってことなのね？」

「わたしは過去を振り返り、そして話を締めくくる。」

全部話しちゃったのは、こうなったら、疑問点は全部解いちゃった方がいいと思っただからだ。

「その流れは全然問題ないんですけどね」

キリカちゃんがちよつと困ったような顔をして切り出してくる。

「言うか、言わないか……迷うように。」

「管理人になれるのは『ロア』か『ハーフロア』じゃないといけないんです」

「え？」

「つまりだな。その話が確かなら……お前さんはとつくに別のロアになっていた、ってことになるんだよ。なんか覚ええないか？」

「覚え……」

ロアの運命はDフォンを受け取ってから始まるとも言われている。

つまり、わたしはあの時に『ロア』になり、そしてその時にほぼ同時のタイミングで『管理人』になったということに……？

「例えば『三枝さん』は何か言っていなかったか？」

『詩穂さんは私の知っている中でも飛び抜けてイレギュラーなロアなんですよ』

そんな言葉を聞いた気がした。

あれは『いつ』、『どこで』会った『三枝さん』の言葉だったかな？

ズキンッ！

「……痛っ!?？」

頭の奥が痛み出す。

『ぶっちやっけ、このDフォンも三つくらいあげたいんですけどね！

あははは！』

「う、うあっ……いい、痛っ……!!」

「わわっ。ここままでしておこう、アリサちゃん！」

痛む頭の中でわたしは考える。

Dフォンを三つあげたい。

『三枝さん』は確かにそう言ってた。

一つは管理人のロアとしてのDフォンだとしても。

あとの二つは何のロアとして、渡そうとしてたんだろう？

第五話。『勢力』として

青空。雲ひとつない澄んだ空。そして、どこまでも続く桜並木。

風に吹かれて舞い散る桜の花がひらり、ひらりと舞い落ちる。

どこまで行っても続く、永遠に終わらない桜並木。

不自然なほど、舞うのをやめない桜の花。

そう。ここは……『ロアの世界』。

その『ロアの世界』の中で俺は全力疾走をしていた。

迫り来る『気配』を感じ取る為に、全身の神経や感覚を研ぎ澄ませ集中しながら。

一之江曰く、俺達『ロア』というものは気配を五感のように感じ取れることができる

らしい。

例えば、見えないものを『視界に何か映った気がする』というように視界で感じ取るタイプ。

るタイプ。

『何かきな臭い空気がする』と嗅覚で感じ取るタイプ。

『何か嫌な味わいが口に広がる』というように味覚で感じ取るタイプ。

『何かの波長が聞こえた気がする』というように聴覚で感じ取るタイプ。

『何か熱さみたいなのを感じ取る気がする』というような触感で感じ取るタイプ。

普段の俺は嗅覚で感じ取るタイプだった。

『女物の香水の匂いや汗、微かなシャンプーの匂いや石鹸の香り、一度嗅いだことがある奴ならそれだけで誰かすぐに分かってしまう。何か嗅いだことがあるような匂いを感ずる気がする』という感じだな。

さらに鍛えれば……あるいはヒスれば五感全てを感じ取れるようになり、超感覚の極みまで高めればただの『勘』だけで相手の位置、行動が予測できるようになるらしい。

一之江が不意打ちで俺をザクザクグサグサ刺してくるのもその感覚を鍛える為だと言われたことがあるが、絶対に違うと思う。半分以上刺し癖だろ。どう考えても。アリアが俺をガバメントで撃つのも同じで理由なんかないんだろうな。

不意に、微かに匂いがしてきた。古タンスから服を取り出した時に感じる匂いみたいな、何処か懐かしい、まるでばあちゃん側にいる時に感じる時の匂いみたいな。

これは？！

「そ、上か？！」

真上を見上げると、青空を遮るように黒い影が飛び込んできた。

俺は前方へ転がるように飛び込み、襲撃者の奇襲から逃れる。

「さあ、来やがれ！」

「うむ。咄嗟の割に良い判断じゃが、まだまだじゃの」

ラインの声が聞こえた瞬間。

俺に向かつて何かが飛んできた。

俺は咄嗟に右手で弾き返す！

ガコン！

何か金属っぽい物を殴ったような音と共に、俺の拳で凹んだ銀色のバケツが地面に転がった。

しまった！　ちきしょう、やられた！

直後、上から落ちてきた黒い影から伸ばされた白い足が俺の腹を踏む。

ぐはっ!!!　いきなりドロップキックかよ!!?　……つて、見えてる。見えて

るって!!?!

飛び蹴りを食らった瞬間、彼女が履いているヒラヒラスカートの中が一瞬見えてしまった。

が、パンツではなく、水着だったのちよつとドキつとしただけで血流はあまり流れなかった。

よし、セーフだ。

「チエックメイトじゃよ」

ゴスツと、腹を踏む力が強くなった。

腹に強烈な圧迫感を感じた俺はその元凶に目を向けると。

いつの間に日が暮れていたのか、夕暮れ時の月明かりの下で、につこり笑う、ゴスロリっぽい水着姿の幼女が視界に入った。

それは間違いなく、『境山のターポロリババア』こと、ラインの姿だった。

ロリババアとはいえ、ゴスロリ水着着て、ドロップキックなんてかますのはどうかと思うんだが。

そのことをラインに伝えると。

「ゴスロリ水着の下はパンツではなくただの水着じゃからな。見えていたとしても美味しくはあるまい」

「それはそうかもしれないな……」

ライン相手にヒスったら拳銃自殺もんだからな。俺としてはヒスる心配が少ないのはいいことだ。

もし、あのスカートタイプの水着から見えるのがパンツであれば、ヒスる可能性もあつたかもしれないが、いや、多分ない……と思いたいんだが、自信が持てない。

ロリババア相手にヒスったらガチで自殺もんだ。

お巡りさんコイツです、と補導しかられん。

「うーむ。あっちのお主ならともかく、今のお主ではロアとの戦闘では使えないレベルじゃな。ハーフロアとしての身のこなしや気配探知も多少使えるようじゃが、ロア相手に対峙できるレベルではないな」

「主人公は変身してからこそが本番だが、変身する前に死ぬことになるだろうな。今のお前では、な……」

声がしたので振り向くとそこには今の戦いを眺めていたであろう氷澄がいた。

「だよなあ。体の動きは前よりも良くなってるのは解るんだが」

「お主は『主人公』じゃしな。本番のバトルじゃないと本領発揮は出来ぬのかもしれない。何なら、殺すつもりでやってやっても良いのじゃが」

「それは勘弁してくれ」

ラインは俺の腹に乗せていた足を退けると、腰に手を当ててニヤニヤ笑っていた。

「どちらにせよ。例の『101番目の百物語』か、『不可能を可能にする男』の力を発揮していないと、お前はラインレベルのロアには勝てないんだろう。それが解つただけでも気をつけられるだろうな」

「氷澄にはどうなんだ？」

ラインには高速移動という身体能力がある。

特殊な能力じゃない、普通に持つステータスで音速を超えて移動できるという。

つまり、スピード特化型で特殊な環境ロアの境界じゃなくても動けるのがラインというバケモノだ。

「ロアとしての長さ、『主人公としての経験』で言えば、お前より遥かに上回る自負がある。だが、戦闘経験で言えばお前の方が上なんじゃないか？　少なくともロアとしてではなく、人間としてお前と戦ったら勝てる気が全くしない」

「あー確かに戦闘経験で言えば俺に少し分はあるかもしれないな。ロアとしてなら氷澄の方が強いのも納得だ。ただの人間である俺が勝てるわけないからな」

「いや、お前もハーフロアだろうが！

それにお前はただの人間じゃない、音速を超えるラインを受け止めた時点で俺からしたら人間辞めた人間、逸般人だ！」

「なんでそうなるんだ？？」

ラインを受け止めたのはヒステリアモードだったからだ。

今の俺にあんな真似はできん。

「ま、お前が人間辞めてるだろうと、それはあくまでルールがある戦いだつたら絶対に勝てないという話だ。ルール無用の『どんな手段でも取っていい』戦いなら、長く『主人公』をやってる俺に分があるのは当然だ」

「氷澄の奴も、負けたらわらわが取られる、という条件であつたら……きつと死に物狂い

で愛するわらわを守ろうとしたに違いなからうな」

「誰が誰を愛してゐるっていうんだ」

「お主がわらわをに決まつておろうが」

「氷澄……人の趣味にあれこれ言いたくないが、それは世間的にまずいんじゃないか？」

ライン、ロリババアといえ見た目幼女だぞ？

世間的に幼女みたいなロリババアと仲良くするのはまずくないか？

一瞬、頭の中で油揚げ大好きなロリ狐神の姿が過ぎつたが、俺とあいつはそんな関係じゃないからセーフだ。

「お前は本気で俺がラインを愛してると思つてるのか」

「なんじゃ、わらわとは遊びじゃつたというのか。わらわのことは飽きてしまったのか。わらわにあんなことをしておいて……」

「誰が誰にどんなことをしたっていうんだ！」

口では溜息を吐いてるが、内心ではラインの事かなり大切にしてそうだな。

きつと、ラインに何かあつたら何がなんでも助けだそうとするに違いない。

こいつはそういうタイプだ。実際にラインの身がかかった勝負ならどんな手を使つても勝とうとしていた可能性が高い。

『主人公』と『主人公』の戦いでは『覚悟の強さ』が試されるからな。

より強い覚悟を持った主人公が勝つ可能性が高いのは当然だ。

それは、氷澄との戦いやその後の理亜との戦いでもまぎまぎと思い知らされたことだ。

だからきつと、ラインがピンチになって、俺を倒さないといけないような戦いだつたら氷澄は何倍もの強さを発揮するだろう。

それはともあれ……

「ありがとうな。いきなりこんな訓練に付き合わせてしまつて」

「全くだ。いきなりだから多少驚いた」

氷澄は何かを探るように俺の目を見てきた。

付き合わせてしまったからな。どうせ氷澄達にも知らせとこうと思つてたし、伝えるか。

「あー……実はな。一之江とちよつとおつかない話をして、いても立つてもいられなくなつたんだよ」

詩穂先輩が『2000年問題』かもしれないということ。もうとつくの昔に終わったはずの破滅の物語コッパがまだ存在する可能性があること。

それを伝えるべきか？

『その『2000年問題』のロアがまだ存在しているというのは、大変怖いことです。そ

れはつまり、この世界にもう一つのIFがあること。彼女が本当に力を発揮してしまえば、過去に遡って歴史が改変されるかもしれないんです。それくらい、時間系のロアは恐ろしいのですよ』と一之江が言っていた言葉を思い出す。

……いや、ダメだ。

水澄達を巻き込みたくはない。知ればきつと嫌々ながらも、協力してくれるだろう。

水澄は金三同様、ツンデレなどころがあるからな。頼まれたら断らないだろう。

だけど、だからこそ巻き込めない。

破滅を齎す、なんていうくらい恐ろしいロアに挑むのは俺だけでいい。

それに、もし先輩が本当に『2000年問題』のロアだったのなら、これは俺達が解決しないといけない問題だ。

だけど、それで本当にいいのか？

恐ろしいロアを相手にするからこそ、ロア退治の経験者に協力を求めるべきじゃないのか？

「いろいろあるようだが、まあいいさ」

水澄は葛藤してしまった俺の様子に気を使ったのか、やれやれと肩を竦める。

「どうせ、ただ遊ぶだけの旅行だと居心地が悪かったしな。お前のトレーニングに付き合うっていう理由があった方が気が楽だ」

「あー、そうだな。すまん、居心地悪くさせていたか」

俺達以外にも男がいるとはいえ、圧倒的に女子の比率が高いからな。それに表面上は仲良くしているが、ついこの間まで敵対していたからな。

もし、逆の立場だったら俺も居心地悪かったかもしれない。

「別に。わらわは全力で楽しんでおる、安心せい！」

ケタケタ笑うラインを呆れ顔で見ていると氷澄が苦笑いをしながら声をかけてきた。

「それにしても、まさか『終わらない千夜一夜』^{エンドレスシエラザード}まで仲間にかけているとはな」

「しかも妹とはのう。実力の差は禁断の愛で埋めたんじゃないかな？」

ニヤニヤしながらラインがからかってきた。

反論してやりたがったが……概ね間違ってもいないから反論できん。くそつ。

「理亜とはちゃんと話し合いで、えつと……仲良くなつたんだよ」

「仲良く、か」

氷澄は俺の言葉のニュアンスで何かを悟つたように口の端しを歪めて笑う。

ラインもニヤニヤ笑つたままなので、何があつたのかはもろバレされたのかもしれない。
い。

「で、突然こんな場所でトレーニングなんか始めて、どういう風の吹き回しだ？」

「あー……ちよつと、な」

先輩がおつかないロアなのかもしれない。

その話を一之江としてからなんだか落ち着かなくなつたから、体を動かしたくなつたというのも理由の一つだが、戦鬪の勤が鈍るのを防ぎたくなつたという理由もある。

「良いではないか、氷澄。男には強くなりたい時というのがあるのじやろう？　氷澄も突然筋トレをキンゾーと始めたではないか」

「そういうのはバラさなくていい、ライン」

「恥ずかしがることはあるまい。先日ウエイトリフウエイトリフ & ジャーグテイニングでキンゾーが持つという記録、203 kgを大きく上回る280 kgを出したとはしゃいでいたではないか」

「お前も十分人間辞めてるよな？」

ウエイトリフウエイトリフ & ジャーグテイニングで280 kg出したって、世界新記録なんじや……？

「キンゾーはその直後に、片手で500 kgを計測してたけどな」

何やってんの、キンゾー。本格的に人間辞めたな。

「コホン、まあ、そんなことよりだ。一つ忠告しといてやる。お前が今、何を抱え、何故焦つて強くなろうとしているのは解らないし、強くなろうとする理由は割とどうでもいいが、別の『主人公』を取り込んだ今、他のことにも目を配る必要がある」

「他の……？」

「ああ。あの最強の『主人公』である『終わらない千夜一夜』を従えた今、お前はもう単

なる『主人公』ではいられなくなった。これからは一つの『勢力』として狙われることになるだろう」

「勢力？」

尋ねる俺に、氷澄は眼鏡を直して頷いた。

「一人や二人で行動している間は、単なる個人行動に過ぎない。だが、お前が抱えているロア達はみな、それぞれが突出した力を持つ強力なロアだ。そんなのが集まって、お前の意思で動くとなれば……それはもう個人の行動ではなく、『勢力』としての行動としてみなされるといふことさ」

「お主が何か悪さをしたら、別の『勢力』に叩かれるといふことじゃよ」

「俺の行動全てが、団体としての意思であるといふようにみなされちまうってことか」「そういうことだ。お前の一人の意思に従う集団なのか、それとも団体としてまとまった意思で動く団体なのか。どちらにせよ、ただお前を倒せば、『101番目の百物語』や『不可能を可能にする男』を倒せるという段階ではなくなったからな。」

すでにお前を狙う『勢力』は幾つか動いている。

有名どころだと、『闇の権力者』、『魔を従えし者』、『ヨハネの黙示録』そして……『N』

「エヌ？」

「都市伝説程度に囁かれている、現実に実在するかどうかもわからない最悪の闇の組織

の名さ。

『もし、世界を破滅に導く組織が実在していたら?』という噂によつて生まれた組織だとか、つてロア界限では有名な組織さ」

「そんな組織がなんで俺を狙うんだよ」

「さあな。そんな理由なんか解らないさ。ただ……」

「ただ?」

「ただ、その組織を率いるリーダーの二つ名がお前が持つロアと瓜二つだから、もしかしたらそれに関係しているのかもしれないな」

「二つ名?」

「その組織のリーダーは一般的には『提督』と呼ばれているらしいが、ロアとしての名乗りはこう名乗っている。

自分は——『^デ可能を^イ不可能にする女^ス』だと

第六話。誰かが……見てる

2010年7月10日19時30分。

結局わたしはなんのロアなんだろう。

わたしは……管理人のロアなんだよね？

じゃあ、管理人になる前はなんのロア？

わからない。思い出せない、覚えてない。

怖い。自分のことなのに知らないのが、何も覚い出せないのが怖い。

わたしは……わたしは……わたしは……なあに？

そんなことを一人部屋で考えているうちに、日が沈み夜が来てしまった。

今はホテルの食堂でみんなとディナーを食べているところだ。

ビュフェ形式でみんな好きなものを皿に取り分けて食べている。

大量のピッツアを皿に取るキリカちゃんやカレーを食べるアリサちゃんら魔女の姿も見える。

二人を見てるとお風呂場で謎の女の子に警告された事を思い出してしまう。

『キンジさんには近づかないでください』

あれはどういう意味なんだろう？

あの子は誰なんだろう？

正体を知る前にあの子の姿は煙のように消えてしまった。

モンジ君の知り合い……なのかな？

消える前に食事に誘ってみたが、『わたしにはコレがありませんから必要ありません』と
か言つてカロリーメイ○の黄色の箱を見せてきたけど。

あんなのでお腹いっぱいになるのかな？

「シユノーケリング楽しかった！　ありがとうね、シホー！」

わたしの隣に座つていたスナオちゃんが満面の笑みを浮かべてお礼を言つてくれた。
スナオちゃんの笑顔を見たらなんだか悩んでいる時間がもつたような気がし
てきた。

そうだね。もっと楽しまないとダメだよね？

「楽しんでくれたなら嬉しいよん♪」

「えへへー。魚があんな間近で見られるなんてねー。リアル水族館！　つて感じ！」

「確かにいい景色でしたね。追い回し放題でした」

おおっ！　みずみずも一緒にやったんだ！　いつの間に仲良しになったんだろ

う？

「メリーズドールもしてたのね！ まったく気づかなかったわ！ 魚を追いかける

メリーズドール見てみたかったわね！」

「魚を追いかけるスナオさんを追いかけるのはスリリングでとても面白かったです。オラ、ワクワクしたぞ、って感じですよ」

「わたしが追われてたのね？？」

みずみずの言葉にスナオちゃんが驚愕した。

シユノーケリングしてたと思ったら、背後から追われていたなんて、想像しただけで怖い。

「明日はスキューバダイビングしてみる？ インストラクターさんを読んで。サン

ゴ礁とかとっても綺麗だよっ」

「わーするする！ 潜る潜る！」

「ふむ。スキューバダイビングですか。それだったらいい考えがあります。背中にボンベ付けて崖から落としましょう。モンジを」

「おい待て！ 何でだよ？？」

みずみずのモンジ君弄りも変わらず行われていて、見てるだけでわたしは楽しめていた。

モンジ君とみずみずの掛け合いを見ていたわたしの隣にスナオちゃんは座って、ピツタリくつついてきた。

なんだか妹が出来たような気分だ。もちろんスナオちゃんみたいな可愛い妹なら大歓迎だけど。

考えないといけない問題はあるけど、今はこうしてみんなと笑いあったり、はしやぎあつたり、遊んで、楽しみたい。だつてそうしないともつたないから。この世界、口アと関わるならそうやって割り切らないとやっていけない。

悩みは悩み。遊びは遊び。ロアはロア。

そうやってちゃんと区切りを付けてやってきたこの十年間は、そのままわたしの経験になつているから。

まあ、おかげで恋とかそういうのは知らないまま大きくなつちやつたけど。

そんなの気にしないくらい充実して生きてきた……今までは。

けど、モンジ君から告白されたあの日からなんだろう。

胸の奥が痛い。痛くて暖かい。

なんなんだろう、この気持ち？

「すつかり懐かれましたね」

向かいの席に座っているみずみずが、白いご飯をぱくぱく食べながら感心している。

さつきは一緒にシユノーケリングしてくれたり、器具の使い方なんかをレクチャーしてくれた。

みずみずはさりげなくなんでもできるみたい。

「ふふーん、シホは優しいのよ！　いっぱいハグしてくれるし！」

「ぽよんぽよんハグですね。あいてはしぬ」

そこで何故かわたしの胸元を見つめてくるみずみず。

わたしの胸に何かついてるのかな？

「死なないよ!?」　むしろ気持ちよかったもん！」

ちよつとムキになってスナオちゃんが反論した。

「既に死より恐ろしい、骨抜きにされているようですね。これでスナオさんり貴女は軟体動物になってしまうのですよ」

「えええええ!?」

「そしてジャイアントオクトパスへと進化するのです」

「嫌よ!?　そんなB級映画に出そうなの！」

みずみずの淡々としたからかいに、すっかり本格的に怖がるスナオちゃん。

「つてか、さつきもメガシャークなんて出なかつたじゃない！」

「油断している美女の前に現れるのですよ」

「へ、そうなの？」

「なのでメガシャークに会いたかったらまずは先輩を油断させるといいでしょう」

「OK、解ったわ！」

何が解ったのかよく解らないけど、スナオちゃんはわたしにぎゅうーつと強く抱きついてきた。

これって……油断、させられているのかな？

「スナオさん。食事中ですから」

「はーいっ！」

理亜ちゃんが困ったようにスナオちゃんに言うと、スナオちゃんは元気な返事で離れる。

この二人は同じ年には見えないなー。スナオちゃんは歳の割に幼くて、理亜ちゃんは歳の割に大人っぽい？ だけど、だからこそ。そんな二人だからパートナーとしてやっていけるんだと思う。

わたしには、パートナーと呼べる人はいなかった。

だから……なんとなく、もしかしたら。今までのわたしは、寂しかったのかもしれない。

そんな風にちよっぴりセンチメンタルになっていると。

「どうかしましたか？」 七里さん

ちよつと心配そうな顔をしながら理亜ちゃんが声をかけてきた。おつと、いけない。年下の理亜ちゃんの前でこんな風に悩んじやダメだよ。弱さを見せたくない。

いつもニコニコ笑っている方がいいに決まっているし、きつと周りの人もそういう私を見たいと思うはずだから。だから、私は笑う。

強がりなのかもしれないけど、それが私だから。

そうして笑いながら理亜ちゃんの顔を見ると、ああ。やつぱり、ね。

——— この子は圧倒的にモンジ君のことが好きだ。

それがわかる。わかつてしまう。

妹的な立場にいるけど、従姉妹なんだから普通に交際や結婚もできる。

今日だって、モンジ君が他の子にデレデレしたり、ドキドキしたりしていたらヤキモチ焼いたり、モンジ君の姿を目で追いかけたりと、わかり易いことこの上ない態度をとっていた。

理亜ちゃんからしたら想い人の想い人であるわたしは敵認定してもおかしくないのに、理亜ちゃんは普通に声をかけてくる。

この子、本当に中学生なのかな？

「理亜ちゃん、貴女……本当に中学生？」

思わずそう聞いてしまった。

すると理亜ちゃんは。クスツと笑って。

「さあ、どうでしょうか。そんなものはどうでもなりますからね」

なんて返事が返ってきた。確かに仲間に魔女がいれば、人間の記憶や記録なんてどうとでもなってしまう。

ロアに不可能なことなんてないのかもしれない。

「そんなことより、本当に大丈夫ですか？」

「わっ、心配されちゃったっ」

おどろけてそう言ったわたしに、理亜ちゃんは真剣な表情を浮かべたまま、淡々と告げる。

「心配します。深刻に何かを考えているようなのに、今回の旅行の発案者としての責務を感じてか、皆さんが楽しめるように気を配っているのを見ていましたから」

……よく見てる。

やっぱり、『終わらない千夜一夜』^{エンドレスシエラザード}は伊達じゃないか。

モンジ君みたいに、気付いたらそうなっていた『主人公』とは違い、自ら選んで『主人公』になった覚悟を持つだけの能力はあるってことだね。

それだけでも凄いことなのに、理亜ちゃんには周囲のことを気にする、『観察力』や『洞

察力』もあるみたい。

「あう……恥ずかしいにやー」

「特に兄さんにはチラチラ見られていましたからね。もし不快でしたら言つて下さいね。きちんと聞かせますからね」

「あはつ、ありがとうねん！　でも大丈夫、モンジ君の視線はそんなに気持ち悪くないから。女の子を見てるつてより、観察してるつて感じの視線だし」

「あつ、それはわかります。兄さんのはなんていうか、探偵とか刑事さんが調査対象や被疑者を見るような感じですからね。それはそれで何とつか女の子扱いされてないようで複雑ですけど……他の男の人が向けてくるよ様な視線ではありませんからね」

クスツと笑う理亜ちゃん。

何を思い出したのか、「でも、時折見せる男らしい顔つきや言動は素敵なんですよ」と顔を赤くしながら言つてる。そう言えばわたしもモンジ君にお姫様抱っことかされたりしたなあ、なんて思い出した。うう、あの時は羞恥心とかでなんでお姫様抱っこしたのかと聞けなかつたけど、モンジ君は時折行動力あるからあれはあれで困る。

「それで詩穂さん。この後の予定はどうなっていますか？」

「うーん、自由時間かな？　エステマツサージとかあるから、それを頼んじやつてもい

いし」

「エステ……ですか？」

わたしの提案に理亜ちゃんは箸を止めて考え込む。この歳では多分、そういうのを受けたことがないんじゃないかなー、と思う。そもそもこの中でそういう美容関係をちゃんとやっているのは。

「何々、エステ行くの？　　気持ちいいわよ、後で一緒に行く？　　あたしも鳴央と一緒に行く予定だし」

モデルをやつてる音央ちゃんくらいだろう。

「あ、そうなんですな」

「美容にもいいし、すつきりするのも確かだしね」

「うーん……少し、興味はある、かもしれない」

理亜ちゃんはアラン君や氷澄君と談笑しているモンジ君の方をチラチラ見る。

この旅行を企画したのはわたしだけど、中心人物は紛れもなく彼。

当人はそれに気付いているのか、いないのか、それはわからないけどとても楽しそうに自由きままに過ごしている。

「自由時間が終わったら花火かな？　　一応用意してあるよん♪」

「なるほど、了解しました」

理亜ちゃんはきつとこの後はエステに行くんだらうな。

理亜ちゃんの目に『ちよつとでも綺麗になつて振り向かせたい』という意思みたいなものを感じた。

理亜ちゃんは小さな頃からモンジ君のことを知っていて、今もそばに居続ける。それつて、本当にどういふ気分なんだろう？

誰かが側にいてくれる感覚。

わたしにはまだわからない……はずなのに。

わたしの中には、わたしの知らない何かがある……。

わたしはそれが何なのか、それが誰なのか、それを知っているような……？
ずぐんつ

「つ……？」

突然、胸が痛んだ。

大きな塊がいきなり胸の中に生まれたみたいなの、そんな痛みを感じた。

「……つ」

そのあまりの痛みに、胸を押さえてしまう。

痛い、苦しい。

何なの……これは。

痛い……けど、いけない。

今の明るくて平和な空気を壊しちゃうのはいけない。

「どうかした、シホ？」

スナオちゃんが心配そうな表情でわたしを見る。

ここで、「胸が痛い。苦しい！」なんて言ったらみんなに迷惑と心配をかけてしまう。

そんなのは駄目！

「実はちよつぱりお腹痛くなっちゃって。先に部屋に戻ってるね？」

「あうー……へーキ？ わたしも行くかうか？」

スナオちゃんが心配そうにわたしの顔を覗き込んでくる。

わたしは「うん、だいじよぶだいじよぶつ。食べ過ぎちゃっただけだもん。それじゃ後で一緒に花火しようねん♪」とスナオちゃんの頭をわしわしと撫でてから席を立つ。

「うん！ じゃあ後でよー！」

スナオちゃんがニッコリ笑ったのを見て安心しつつ。

ゾクリ。

「……………」

そんなわたしを見ている視線があつたような気がして、慌てて振り向いた？

……………気のせい？

そこには誰もいなくて。漆黒の海と星空が見渡せる大きな窓ガラスしかなかった。おかしいな。……気のせい？

もしかして、お風呂で会ったあの短髪の女の子かな？

でも外は真つ暗闇だし、窓ガラスの下は絶壁で海しかないし。

人がいれる環境じゃないし。

きつと、気のせいだよな？

ちよつと怖かったけど、ロア関係で怖さには少し耐性があるから気にしないことにした。

「そんじゃ、今からみんな自由時間ねー。22時に海岸で花火しましょー！」

宣言してから、わたしは痛む胸を押さえたまま。

みんなの心配そうな視線に笑顔を向けて歩く振る舞いながら、食堂を出た。

そして、部屋に戻ると着替えや身だしなみそつちのけでベッドにダイブしてしまつた。

うう、胸の痛みがこんなに続くなんてどーなつちやつたのわたしの体？

痛みは徐々に治まっていき、激痛で大変！　という感じではない。

どちらかと言えば、お腹が痛い時のギリギリした持続性に痛みに近い。

「うーん……」

痛いのは我慢できるのだけど。

それ以上に気になっているのが……。

「誰か、いるのかな」

さつきからずっと誰かに見られている、視線がある。

食堂の時からずっと、わたしのことを見ている誰かがいる。風呂場で会ったあの子じゃない。

その誰かが誰なのかはわからないまま。

だけど。

それは。

なんだかとっても身近で。

なんだかとっても遠い。

そんな存在な気がしていた。

「変なの……」

今まで感じたこともないような感覚なのに。

なのに、わたしは変な確信を持っていた。

気のせいとか幻とかじゃない。

わたしに身近だけど遠い誰かが、さつきからわたしのことをジーツと見ているそんな

確信を。

「うーん……」

わたしはゆつくりと起き上がって、ベッドを降りる。

そして、何か飲み物でも飲もうかなー、と冷蔵庫に行こうとして、ふと部屋の窓ガラスを見たその時だった。

窓ガラスにわたしの姿が映っていて。

——そのすぐ横に、白いワンピース姿の女の子が佇んでいた。

「っ!?」

慌てて後ろを振り向いたけど、そこには誰もいない。

もう一度窓ガラスを見る。女の子はわたしの横にいる。

後ろを振り向く。……いない。

でも、窓ガラスには女の子の姿はハッキリと映ってしまう。

「やっとわたしに気付いたんだね、お姉さん」

大きな帽子を目深に被っているせいかな、顔は口元しか見えない。

その口がニツコリと笑っているのを見ると、寒気を感じてしまう。

8番のセカイの管理人をやっているわたしもその存在は当然知っている。いや、知っているつもりだった。きつきまでは。

だけど、今のわたしは……。

彼女がそんなものじゃないことを知っていた。

「ああ、やっぱり。もう気付きつつあるんだね」

ヤシロは笑いながら、帽子に手を当てる。

「だめ……」

そう、だめ。

わたしは、その顔を見てしまったら、きつと。

きつとわたしは……

「そろそろ、全部知って楽になりたいんじゃないかな、と思って」

「だ、だめ……っ！」

わたしが止めるのも聞かず、ヤシロは帽子を取ってしまう。

そして――。

「あ、あああつ！」

わたしは悲鳴をあげてしまう。

ヤシロの顔は、わたしのよく知っている顔だった。

いや、知ってて当然の顔、存在だった。

何故なら、そこにいたのは。

「さあ、そろそろだよお姉さん。そしてお姉さんの中の、もう一人のお姉さん」
そう、それは――。

「約束通り、破滅の未来を再開しよう？」

8歳の頃のわたし自身だった。

第七話。俺の背後に立つな、って某殺し屋が言うのも防衛反応の一種。人には不可侵領域つてあるんです。

2010年7月10日23時00分

白ヶ咲ホテル

801ROOM

氷澄やラインとの特訓を終えた俺は、自分の部屋でくつろいでいた。今日一日中動きっぱなしだったせいも、足がぱんぱんになり動けないでいた。前世……武偵高時代は今よりもっとハードな動きを……ヒスっていれば一日中出来ていたが、今のこの体ではラインに合わせ、軽く音速を超えた体の動きをただけで疲れてしまう。といっても、普通の人間が行う動きを超越した動きが軽くできるくらいに、人間離れしているが。

「なんかどんどん人間離れしてきてる気がするな。……理子が言ってた人間離れ人間になりかかっているぞ……」

……いかん。いかんぞ。金次。このままでは人間辞めた人間コース一直線だ。

百物語を完成させて、今度こそ俺は普通の人間になるんだ。そして、前世では馴染めなかつた普通の生活を送るんだ！

そう思っているのに……そんな決意をすればするだけ、どンドン俺は人間離れし始め

ている。アリアと出会ってから感じていた事だが、俺が行動すればする程、俺の意思とは間逆に平穏な生活から遠ざかっていく。

……そういうえば、ロアの能力を使えば拳銃生み出せちゃうんだよなあ……。

そんな現実には直面し、手元に拳銃があれば高確率で拳銃自殺をしたい衝動に駆られながらベッドから降りる。

俺が宿泊しているこの部屋はわりと高級感が漂うそれなりに良い4人部屋で、俺と氷澄とアランは同室なのだが、アラン曰くこの部屋の番号にはちよつとした悪意があるようだ。なんだよ、801号室^{ヤオイ}って!?!? 801号室なんてどこにでもあるだろう?

それなのに、この部屋番号を伝えられた時のアランの引き顔と一之江の「三人で仲良く、バラバラしててください」と言う言葉が気になる。女だらけの部屋で過^ごすより、俺は普通に男だらけのこの部屋がいい。そう伝えたら、「さすがはモンジです……。」とか言われた。意味がわからん。

部屋に入って復活したアランの奴は、気分転換に有料サービスをTV視聴する為のカードとやらを買いに行くと言って部屋を出ていった。映画の有料レンタルサービスでもやってるんかな? カードがないと見れない番組というのが気になるが……俺も後で買いに行こうかな。氷澄はラインと何処かに出掛けたまま戻って来ない。特訓の続きでもしてるのだろうか?

「特訓、かあ……」

氷澄との特訓の後、あいつらは涼しい顔をしていた。俺だけが汗だくになっているという現実を見せられ、焦りを感じてしまう。自分でも何でこんなに気持ち焦るのかはよくわかっていない。前世ではもつと動けていたから？

武偵として、凶悪犯や人外達と死闘を繰り返していたから？

……違うな。

がむしやらに体を動かしたくなるほど、俺はシヨックなのかもしれない。

詩穂先輩がロアである可能性。それも、俺を殺すかもしれない

『^アン^ゴル^モア[・]ブ^ロフ^イット^トノストラダムスの大予言』を封印しているロアという可能性があることに。

一之江はあの時、言った。

『^ロス^ト・^ミレ^ニリ^ズム
『2000年問題』……か』

考えるだけで、ゾクツとする。

親しい人が俺を殺すかもしれないという可能性に……。

武偵高時代では『死ね』『殺す』は挨拶だったが……学校では実際に『死』の恐怖を向けられることなんか、ほとんどなかった。それこそ、任務中で『標的』と対峙しない限り。『死』は他人事というか、軽かったんだよな……あの学校では。

それが、今は『予言』として、『死の運命』を告げられている。

ロアという『非現実』的なモノが普通にいる世界だからか、死が『現実』として受け入れやすいのだ。

先輩が、俺を……？

どうして？

どんな理由で？

どんな能力で？

『2000年問題』
ロスト・ミレニウム……」

その都市伝説が流行り出した頃、俺はまだ小学生になったばかりだったな。

もう、10年くらい前になるが、テレビや金融機関が大騒ぎしていたのを子供の頃、なんとなく覚えてる。

父さんが死んで、数年経っていて俺も兄さんもまだまだ子供で、爺ちゃんの家で暮らしていて、爺ちゃんや婆ちゃんやテレビのある居間で、他人事のようにニュースを眺めていたな。

遠山家にはコンピューターなんて、ハイカラなものも当時なかったし、携帯電話もあの頃はまだ持ってなかった。じゃあ、なんで知ってるかというところだとニュースや特番で『全てのコンピュータが対応に追われていて大損害だ』とかやっていたからだ。

つまり、マスコミすらも広めた噂……それが『2000年問題』。

先輩がそのロアだと確定したわけじゃない。本当に先輩がロアやハーフロアなんて、はつきり断言なんかできない。かと言って、確認することも……それが今の俺には出来なかった。

「返事、保留中だからな」

告白の返事が保留中である以上、別件で話しかけるといふ行為も躊躇れた。

普通に話しかけたらいいとは思うが、女子と二人で何を話せばいいのか皆目見当もつかん。病氣^{ヒス}持ちの身としては女子と二人だけで話したくもない。なら、他の奴に頼めばいいやと思ひ。

真つ先に女子に話しかける奴として思い浮かんだ見た目だけなら二枚目な、アランの奴なら話しかけると思ったのだが……『僕は女子と二人きりだけで話をする勇氣はない』と言つてトイレに駆け込んでしまつたから……それ以来、他人に頼むという選択肢も捨てた。

一之江やキリカにそれとなく探つてもらふことも考えたが、そうすると告白の事も洗ざらぬ白状しなくてはいけない流れになる気がして……なんとなく頼みにくい。

告白の事がなくとも、『先輩つて、ロアですか?』なんて聞けるわけねえ!

そもそも、現状、先輩がロアであろうが、なからうが実害もないから動きようがない。

最も、一之江の言うように先輩が『ノストラダムスの大予言』を封印している『2000年問題』のロアという可能性がある以上、樂觀はできないのだが……俺は、武偵憲章にある『悲観論で備え、樂觀論で行動せよ』という教えに従ふことにする。

つまりは『最悪な事態を想定しながら普段通りに過ごす』ということ。

『ノストラダムスの大予言』については、今のところ特に問題がない以上あんまり刺激したくはないし、そもそも、『2000年問題』としても、とつくに解決してる問題なのではないか、ってことだ。

とつくに2000年は過ぎていて、今は2010年だ。

『2000年』問題のロアならとつくに、そのロアとしての役割は終わってるはずだ。

それとも、『ノストラダムス』のロアを封印してるから、『く年』とかは関係ない、とかあるのだろうか？

うーむ……わからん。

……って、そういうええばいるじゃん。そういう噂話に詳しい専門家がすぐ近くに！

一之江やキリカ以上にこの手の噂話に詳しい人が……。

『千の夜話』アルフ・ライラという、都市伝説を終わらせる『対抗神話』を使いこなすロア。

『終わらない千夜一夜』エンドレス・シエラザードという『最強』の主人公が。

こんな俺を『好きだ』と言ってくれた可愛い従姉妹であり、妹のような存在の女の子、須藤理亜。

俺はズボンのポケットから携帯を取り出すと、それを操作し、アドレス帳に登録してある理亜の番号を押そうと思……思いとどまる。

理亜に聞くのは簡単だ。理亜の事だから、きつと俺の為に一生懸命調べてくれるだろ

う。

だが、当の『2000年問題』は、『最強の主人公』である理亜が怖がった『ノストラダムスの大予言』を封印していると言われているロアだ。その話をする事で余計な心配を理亜にかけることになるんじゃないのか？

なにより……。

「それが、先輩かもしれない、って話すのもな……」

確証もないのに、推測だけで話していい内容じゃないよなあ。

「となるとやっぱ直接本人に聞くしかないか」

告白の返事を貰っていないのに、別件で本人と対面しないといけないこの間の悪さ……さすがは、運の悪さに定評のある2年の遠山。ああ、不幸だ……。今は一文字だけでも。

俺は思わず、ベッドの枕に頭を突っ込んだ。

女子と二人つきりで話すのはもの凄く嫌なのだが、仕方ない。覚悟を決めろ、金次！
そんな覚悟をした、その時だった。

……ピンポーン♪

部屋のチャイムが鳴った。

このタイミングで鳴るチャイム……？

……なぜだろう、経験上ろくなことにならない気がする。が、出ないとさらにろくなことにならない気がする。つまり、詰んでる。

俺は探偵科インテクスタで習ったなるべく音を立てない歩き方で、ドアの前まで移動し、ドアスコープから外を覗く。

小さな穴から見えたのは……？

「り、理亜か？」

「はい、そうですよ。兄さん、少しお話しよろしいですか？」

話し？ こんな時間に一体なんの用だ？

それに女の子が一人で男が宿泊している部屋なんかに来るものなんだろうか。いや、でも、理亜は妹みたいなものだし。妹なら夜でも兄の部屋に来るのは普通のことなのかもしれない。金女かなめの奴もよく、俺の部屋に不法侵入して来るし。

「お、おう」

とはいえ、ちよつと緊張するのは仕方ないことだと思う。最もかなめとは違い、理亜は俺が寝てるベッドに潜り込んで来たり、脱衣所に突撃して来たりしないし、包丁をブン振り回したりしないはずだし。……しないよな？ しないといいな……。

「明日の予定についてなんですが……」

あ、なんだ。明日の予定を確認しに来ただけか。そうか……そうだよな。理亜はかなめとは違って良識ある可愛い妹だもんな。俺の部屋を物色したり、下着漁ったりとかするはずないもんな。疑って悪かった。

「……なんだか、大変失礼な事を兄さんが考えてる気がします」

そして、とつても鋭い妹だ。

あと……この癖、もう辞めにしないか？

理亜は当たり前のように、ドアを開けずに会話しようとしてきた。昔からの癖だ。恥ずかしやなのかもしれないが、このまま会話続けるのは変だろう。

俺はドアを開けた。

「あっー」

開けたドアの先に立っていた理亜が、自身が着ているパジャマ姿を庇うように、両手をクロスさせるようにしながら、後ずさる。その姿に思わずドキツとしてしまう。

「どうかしたか？」

「あ、いえ……パジャマ姿が恥ずかしい、ので……」

理亜が着ている薄いピンク色のそのパジャマは彼女にとっても似合っていた。そんな理亜の髪からはふわっ、と甘いシャンプーの香りが漂り、鼻をつく。湯上がりで、パジャマ姿の妹のようなどても可愛い女の子。肌もツルツルしているように見えるのは、夕食

時に音央に誘われていた『エステ』とやらの効果かな？　とても綺麗だよ理亜。

「これは部屋に入れたらドキドキしっぱなしになって、大変だね。でも、俺は嬉しいよ。こんな可愛い妹と一夜を共に過ごせるのなら」

「え？　兄……さん？」

「おっと、声に出していたみたいだね。あまりに理亜が可愛い過ぎて見惚れていたせいか気づかなかったよ？」

「ああ、だめだ。止まらない。止められない。なつていく。なつてしまった。ヒステリアモードに……。」

「ふええ!?　か、可愛い……」

「ああ、とても可愛いよ。まるで物語に出てくるお姫様みたいだ」

「はふう」

俺の言葉に、理亜は顔を真っ赤にさせて俯いてしまう。

「ちよつとやり過ぎたかな？　だけど、仕方ないと思うな。本当に可愛いから。」

「ははっ、あんまり見ないようにするから、お部屋にどうぞお姫様」

ウインクしたら、さらに顔を赤くしてしまった。

「……少し心配だな。将来、悪い男に騙されないか、兄として心配になつてしまうよ、理亜。」

「……水澄さんは？」

「ラインと深夜デートにでもしてるんだらうね」

「え、あ……そうなのですね……あう……お邪魔します……。あ、広いですね。兄さんの部屋は四人部屋なんですね」

「ああ、男三人だけなのに部屋が広すぎて落ち着かないんだ」

「三人？　ああ、なるほど……キンゾーさんもこのお部屋なんですね。兄さんはそうかもしれませんね」

その説明で納得するのか。あと、キンゾーじゃなくて、アランの奴と同じ部屋なんだが……うん、アランよ、おまえの死は無駄にしないぞ。

などとアホな事を考えていると、理亜は部屋に入ってから、困ったように辺りを見渡すと真つ赤な顔をしたまま、ベッドに腰掛けた。

「え、ええと……」

恥ずかしそうに右手の人差し指をちよつと曲げて唇に当てているが、そんな可愛い姿をしたら……ああ、ほら。血流がより強くなってしまった。

「とても綺麗だよ理亜」

「ふえり？」

うん、少し自重しないとな。

▼たたかう↓理性

「そんなに緊張するなって。リサ達と一緒にいつも俺の部屋を片付けてくれてるんだろ？ 男の部屋なんて慣れてるんじゃないのか？」

「兄さんがいない時に、です」

俺から視線を逸らすように顔を伏せるようにして、目を合わせようとしめない。

……やり過ぎたかな？

「あ……すみません、寝ていたんですか？」

俺が先ほどまで寝ていたベッドに触れながら、おずおずと尋ねてきた。

そして、何故か俺が使っている枕を手に取り、両手で抱きしめ顔を近づける。

「ふふっ、兄さんの匂いがします」

「あー、ゴロゴロしてたからな」

「なるほど。何か悩んでいたのですね？」

真っ直ぐな視線を俺に向けてきた。

「……俺って、そんなにわかりやすいのかな？」

「ふふっ、兄さんは昔からそうですから。何か悩んだり困ったりしたら、ベッドの上でゴロゴロするんです。高校に進路を決める時もそうです」

昔を懐かしむようなそんな視線を俺に向けてくる理亜。

俺の記憶にも確かにその記憶はあるが……すまん。お前がその眼差しを向けるべき相手は今の俺ではなく、本来の一字疾風に向けてやるべきものだ。同化した今となつては、俺は俺で。俺は彼奴で。彼奴は俺なんだけど……ああ、もう、ややこしいな。」「誰にでもそういう自分だけのスタイルがあるそうですよ」

「なるほどなあ。理亜にもそういうスタイルがあつたりするのか?」

「あ……多分あるのかも。自分では気づいていないスタイルがあるのかもしれない」

そう言つて、理亜がようやく、くす、と微笑んだ。理亜が微笑んだだけで、俺は安心してしまふ。

「すみません、兄さん。やっぱりちよつと緊張していたようです」

「いいつて、俺もだよ」

俺の場合、ヒステリアモード^の俺が余計な事を言わないか、という心労もあるつちやあるんだが……。

それを悟られないようにしながら、理亜と二人して笑いあつた。

「なので、良ければ兄さんも一緒にベッドに座つてください。一緒に座つた状態なら、そんなに緊張しないと思いますから」

「そんなもんなのか?」

「少なくとも、真正面に立たれるよりかは」

ああ、そういう昔、探偵科インケスタで習った心理学の授業であつたな。

確か……『パーソナルスペース』だっけ？

他人の前や背後に立つたり、逆に立たれると、急に話しかけ難くなる心理的な縄張りみたいなものが人にはあつて、特に女性は男性に真正面に立たれると、『恐怖』や『不安』が増してしまうとかなんとか。

いけないな。可愛い妹に威圧感を与えるのは。

理亜に言われた通りにベッドに腰掛ける。すると、理亜は身体を俺の方に傾けて静かに微笑んだ。その可憐な笑みを見ていると……いかん。また血流が強まってしまった。

「本当に可愛いな理亜は」

「あ、う、その……ありがとうございます？」

顔を赤くして俯いた姿も可愛いなあ。

「それで明日の予定だっけ？」

「あつはい。スキューバダイビングをする場合、色々準備が必要らしいので。身長と体重と足のサイズを知りたいみたいです。スキューバダイビングをするのに使うダイビングスーツやフィンのサイズの確認ですね。その為に事前に申告しないといけないみたいです」

「あーなるほどね」

「女性陣はもう申告しましたから」

ダイビングスーツってあの身体に密着したスーツだよな。

女性の場合、身長や体重以外にも色々申告しないといけないんじゃないかな？

何処とは言わないけど。

「兄さんには絶対に教えませんよ？」

「それは残念だね。俺は理亜の事なら全部知りたいんだけど……うん、好奇心猫を殺す、って言葉もあるしね。それは後々の楽しみにとっておくさ」

「の、後々の……って一体私に何をする気ですか！」

「さあてね？　理亜は俺に何をされたいんだい？　言っつてごらん、理亜？　さあ

……理亜」

これはかつて、水上バイク上でエリアに使った事がある、『啄木^{きつひぎ}』。

言いつらい事が回答になっている質問を用意するもの。

「……それはその、えつと……に、兄さんが考えてください。兄さんが望むなら私は、何でも……」

俺の術中に嵌り、力なくモジモジする理亜の手をそつとぎゅつと握り、そして、理亜の顔に身体を傾けて頬にチュツと、軽くキスをしてやる。

ははっ、恥ずかしがる理亜はとても可愛いね。今のキスで有耶無耶に出来たみたいだ

1849 第七話。俺の背後に立つな、って某殺し屋が言うのも防衛反応の一種。人には不域あってあるんです。

ね。

「ただ、からかい過ぎたかな？
ちよつと待ってくれるかな？」

第八話。キンジ、お説教される……の巻

身長、体重などの情報を理亜に口頭で伝えるよりは、メモに書いて渡した方が早いだろう。その方が盗聴とかの心配も少ないし。そう思つて、ベッドから離れたんだが……理亜よ、何で顔を赤くしてるのかな？

「はふう……」つて溜息までついてるし。

「どうしたんだい？　遊び疲れたのかな？」

「……兄さん、わざとやつてませんか？」

はて？　何か理亜を疲れさせるようなことしたかな？

「もう、兄さんつたら……」

俺の態度が何故かお気に入りに召さらなかった理亜さんはご立腹な様子だ。

女の子の気持ちを理解するのは難しいね。

「まあ、兄さんの言う通り、緊張もしていましたがそれもありますけど。その……」

「ああ、他の男もいたからなあ」

「はい……」

理亜は潔癖症なところがあつて、人に触れられたりすることだけではなく、じろじろ

見られたりするのにも抵抗を感じるようだ。ましてや、肌の露出が多い水着姿を男に見せるのは抵抗感があるんだろう。

理亜をじろじろ見る奴なんてそんな奴……いたな。

「アランか！」

他にもキンゾーがいるが、あいつはサラ博士以外の女に興味なさそうだし第一あのアホ弟に銃を向けたら、兄弟仲良く実弾キャッチボールやることになる。よし、キンゾーは見逃してやろう。弾もつたいないし。

それにしても俺の理亜をじろじろ見るなんてアランにはお仕置が必要だな。

「本当は理亜の水着を見ていいのは兄である俺だけにしたいんだけどね」

かなめが昔言ってた『妹は兄の所有物』発言。あの時は、何言ってるんだコイツは……的な目でかなめを見ていたが、今となってはほんの少しだけそうしたい気持ちかわかる。

何というか、守ってやりたくなるんだよ、理亜は。

「それはそれで問題発言だと思いますけど」

うん、まあ、そうかもしれないな。

クスッ、と笑って頬をやや染めながら理亜は言う。

「それだと兄さん、男性一人で孤立してしまいますし」

あー……確かに自分から積極的に女性に近づきたくはないからね。普段の俺は。

ヒステリアモード時の今ならともかく、素の状態で女性しかいない中で過ごすのは拷問に等しい。

「私も、せめて一人か二人かは男性がいらっしゃった方が、兄さんも楽しめるのではないかな、と思っていましたので、大丈夫ですよ」

「まあ、女の子だらけってのは嬉しいには嬉しいが……」

「……兄さんのことだから、気を使い過ぎて疲れちゃったりしないかな、と思つてました」

そんな心配もしてくれるのか。よく出来た妹だな、本当。かなめにも見習せたいくらいだ。

気苦労をしたままじゃ、誰だつて心から楽しめない。俺が楽しめなければ理亜も楽しめない。理亜が楽しめなければ、他の人も楽しめない。そうなつたら、この旅行は大失敗だ。

「既に相方っぽい女性ヒトがいるから氷澄はOKじゃないかと思つたんだよ。キンゾーは他の女性に興味ないし」

アラン？　　奴は死んだ。

「ああ、氷澄さんにはラインさんがいますからね。キンゾーさんはお付き合ひしてる人

がいたりするんですか？」

「キンゾーはあれだよ。芸術が恋人なんだ、きつと」

サラ博士の事は言えないし、詳しくは聞いてないから答えようがない。

キンゾーが関わった実験中に死んだって事くらいしかわからんし。

「なるほど。詳しくは聞かない方がよきそうですね」

「そうしてもらえると助かる」

「氷澄さんはラインと一緒に……？」

「ああ、今も二人で出かけているんだろう。多分、今頃砂浜や海上を猛スピードで走ってるんじゃないか」

「ふふ、仲良しなんですね」

あの二人の関係を仲良しの一言で表してもいいものか正直わからんが、まあ、仲良くなければきつと今頃ラインに轢殺とかされてるはずだからきつと仲良しなんだろうな。

「ちなみにアランの馬鹿はカードを買いに行くとか言つてどこかに言った」

カードを買いに行くって行つたきり、戻つてこないが何をやってるんだろうなあいつは。

「……アランさん？」

すみません兄さん……アランさんってどんな人でしたっけ

？」

……理亜にまで存在を忘れられるとは、不憫な奴だなアランよ。

「おいおい、アランはアランだろ？」

「すみません、兄さん。私はアランさんっていう人、全く見覚えがありません」

「はっ？」

何を言ってるんだ、理亜よ。

お前は何度も会っているはずだぞ？

俺のクラスメイトの残念なイケメンアランに。

「おいおい、変な冗談はよせ。アランは……アランは……あれ？」

アランって……どんな奴だったけ？

というか、うちのクラスにそんな奴いたっけ？

「兄さん、大丈夫ですか？」

「ああ、大丈夫……だ」

奇妙な違和感を感じつつ、俺は先ほどまで話していた氷澄やライン、キンゾーの話題をした。

「それにしても『蒼の邪眼』^{ブルーアイズ}ですか。ふむ……」

理亜は何かを考えるように視線を横に向けると、何かを決心したかのように頷いた。

『ターボババア』のラインさんや『首なしライダー』のキンゾーさんも含めて、いざと

なつたら問題ありません」

「いざとなつたら何が問題ないんだ？」

『千アルフ・ライラの夜話の準備は万端ということですよ』

さらりと告げるが、おいおい。

氷澄とラインならともかく、小国なら一人で滅ぼせるとか言われてるRランク武偵のキンゾー相手にどうにかなるって本気で思ってるのか。無茶だ。無謀だ。そんなことは不可能だ！

一瞬そんな風に思ったが、理亜の視線、その眼差しを見た瞬間、俺はなんで理亜がこんなことを言い出したのかを理解してしまった。

あ、あの目は本気の時の目だ。

理亜がああいう強い意志を持った目で俺を見る時は、大抵俺の為に決心し、苦悩し、行動しようとする立っ時にする目だ。

それがわかってしまった。

わかってしまったが止められない。止まらない。俺には彼女を止められない。なぜならかつて彼女と約束したから。

『俺が死ぬって運命なら、俺の横で、俺と一瞬に戦って死んでくれ！　一瞬に死のう、

理亜!!!』

『死ぬ気で護る』

そう誓ったから。

理亜は強い。対ロアに対してはまさに最強の能力を持っているのは確かだ。

だが、いくら理亜でも一人で三人を同時に相手するのは無茶だ。

理亜は確かに最強の主人公と言われているが、理亜自身はどこにでもいるただの普通の可愛い女の子となんら変わりない。どんな都市伝説も消滅できる都市伝説『対抗神話』として、『千の夜話』^{アルフ・ライラ}という、反則的な能力を有していようと、理亜自身は他のハーフロアやロアと比べたらなんの力も持っていない。

それに、心優しい理亜がそんなことをするとは思えなかった。

そんな俺の心境に気づいたのか理亜は。

「はふう。兄さんは人を、そしてロアを信用し過ぎです」

ため息を吐くと、淡々と説教を始めた。

「いや、だってなあ。あいつら、俺のトレーニングに付き合ってくれたりしたんだぞ？」

「確かにそうやって、兄さんを手助けする事もあるとは思いますが。ですが……」

「ですが……なんだ？」

「あちらが操られる可能性だってあるんですよ？」

「うぐっ」

「ロアの力には、本当に様々なものがあります。もしかしたら、ロアを使役するロアだっているかもしれません。そんなロアに操られていたら、兄さんの身が危ないです」

「そ、それはそうだが」

「そうでなかったとしても人質を取られたりすれば敵対することだってあるんです。兄さんはそういう点が甘いんだと思います」

「うっ」

それを言われると何も言い返せない。確かに俺は女性に甘い。とくにこつちの俺は。理亜はずいつ、と顔を寄せてくる。そのあまりの迫力に一歩引く俺。

ち、近い。近いし、風呂上がりだからか、理亜の身体からは甘い、香りが漂ってきている。

「いや、だがな、理亜よ」

「だがな、じゃありません。第一兄さんは……」

さらに顔を寄せて来る理亜はすっかりヒステリアお説教モード（俺命名）になっていた。

ヒステリアモード中の俺と同じでくモードとか好きだな、さすがは理亜だ。

などとアホな事を考えていたせいとか、理亜の格好に気づくのが少し遅れた。

ま、マズイ。血流がより強くなってしまったではないか。

理亜はお説教モード中で全く気付いてないが、やや前のめりになっていているからか、胸元がチラチラつと見えてしまっているぞ。ブラジャーが丸見えだ。

角度的に柔らかかそうなたわみが、肌と下着のスキマにいい感じに見え始めつつい、俺の視線が上に向きそうになって……。

つて、馬鹿！ 一体俺は何をしようとしてるんだ！

落ち着け俺よ。ヒステリアモード中から賢者のヒステリアモードへと強制移行していくような感覚でなんとか自制心を保った俺は……。

「理亜、ごめんよ。ちよつとストップだ」

俺は理亜に自分が羽織つて上着をかけてやる。

「え？ ……あつ!!？」

上着をかけられた事で自分がどんな姿でいるのかようやく理解した理亜は物凄く恥ずかしそうに身をよじつて、胸元を隠すような仕草をする。俺は両目を瞑つて理亜に背を向けると衣摺れの音が聞こえてくる。

ちよつとだけ。ほんの少しだけ惜しい事をしたような気がした。

つてか、惜しい。

……いやいやいや、何を考えてるんだ俺は！

「……見えちゃいましたか？」

「いや、えーとな。理亜は女性として大変魅力的だよ。魅力的だからこそ、見てはいけな
いと思つてだな。自制したというかなんというか……」

「そ、そうですか……はふう」

え？　　こんな説明でホツとするの？

つてきり実弾撃ちの一発くらい来るかもと思つて覚悟していたんだが。

それが日本刀で斬られるとか。理亜は拳銃も刃物も持つてないけど。

前世じゃ、ちよつとT O　　L o v e するた日には拳銃や日本刀で襲われるという

流れが一般的だったから。なんていうか理亜の態度は平和過ぎて逆に落ち着かないと
いうか、変な居心地の悪さを感じてしまう。そんなことを考えていると。

「……見たくなかつたんですか？」

理亜が超特大の爆弾を落としやがった。

なんてこと言いやがるんだ、この妹は！

「見たくない……こともないが、やっぱり見れないだろ！」

見たくない、と言つた辺りで理亜が涙目をしたから、否定もできん。

ヒスつた以上、女性を傷付けたくはない。

「あ、その……すみません。兄さんは私くらいの体ではやっぱり……」

「いやいやいやいやいやいやいやいやいやいやいやいやいやいやいや」

安心しろ理亜。アリアより全然女性らしい体つきしてるぞ。

そして、俺はそのアリアでヒスった男だ。

「わっ、十四回もっ!?」

「正直に言えば、それはもちろん見たいよ。理亜みたいな可愛い女の子のそういった姿を見て何も感じない男なんてほとんどいないからね。だから本当はすっごく見たいよ！」

「は、はい……」

「だけど、そんな不意打ちみたいな事をして、大事な体を見られた理亜が、悲しんだり困ったりするのはもつと嫌なんだよ。一時の感情だけで、俺の理亜を俺が自分で傷付いたりしたくないんだっ！」

あつ、馬鹿。何を言ってるんだヒス俺よ。

俺の理亜とか言うな。その言葉を聞いた理亜は顔を真っ赤にして「ふにゆう〜」ってしちまってんぞ。

ちよつとというか、かなり正直に言い過ぎた気がする。

ど、どうしよう?!

「……み、見たかった、の、ですね……えっと……」

ぎゆうううう、と自分の体を力強く、特に胸の辺りを抱き締めながら理亜は呟く。

その顔はもう、耳まで真っ赤にしていた。

「あ、ありがとう、ごさいます……」

「うぐつ……」

そこで感謝するものかどうかと思うのだが。

それにしても、何というか。意識してしまふな、やはり。

チラツ、チラツ、と理亜は何かを言いたげにしている視線を寄越してくるし。

ここで「兄さん、見たいんですか？」とか言われたらいろいろ詰むぞ。

見たくない……わけでもないが、見たら完璧にヒステリア地獄なので、見れん。

見たいが見れん、目の前に可愛い女の子がいるのに見たくないわけあるかー!!?

だが、見たらヒステリアモード強まって、取り返しのつかないことしかしたら理亜と駆け落ち一直線コースなので見れん。従姉妹だから結婚できちゃうけど。

見れるかー!!? と内心一人ツツコミしながら、何とか打開策を打つ為、話題逸らしをすることにする。

「あー、話し戻そうな、理亜。えつと……とりあえず枕でも抱っこしてくれ」

「は、はい」

ベッドにあった枕を渡したが、あつ、これはマズイ。ミスった。

か、可愛い。赤い顔をしたまま枕をぎゅうううう、と抱っこした姿はまさに天界から地上に降りた天使みたいで……いや女神様みたいな可憐さもある分、かなり可愛く思ってしまう。

できることならこのまま、純粹無垢な清楚系妹キャラでいてくれ。

あ、でもそれはそれで兄さん心配だな。

って、そうではなく。

ごほんと息を整えてから。

「つまり、あんまりロアを信用し過ぎるのは危険ってことか？」

真面目な方向に話を戻す。

「あ……はい。とは言っても兄さんはそもそも誰かを疑うというのが苦手だと思いません。特に女の子なら、疑うことなんてできない……というよりは、騙されてもいいと考えているでしょう？」

「うぐっ」

確かに俺は仲間が、例えば一之江やキリカが何かを企んでいて、そのせいで俺が酷い目に遭ったとしても仕方ないと考えてしまう。今まで何度も助けてくれたからというものもあるが、あいつらが俺を騙してまでやり遂げたいことがある場合、それを止めたくないとも思ってしまう。特にこっちの俺は。

それに武偵憲章一条に、『仲間を信じ、仲間を助けよ』ってあるし。

「いけませんからね！　　そうやって、すぐ……誰か別の人のやりたいことを優先するの。私は、兄さんがやりたいことを優先しないと嫌なんですからね」

「うっ、すまん」

「本当に、すまないことなんですからね。兄さんが兄さんのやりたいことをしないなら……その……なんで私が兄さんの物語になったのか解らないじゃないですかー」

むー、とジト目で睨み付けてくる理亜。怒られといてなんだが、怒る姿も可愛いなあ。とはいえ、確かにその通りだから反省しよう。

反省してもそれを守るかはわからないが。

しかし、俺のやりたいこと……か。

俺自身が何をやりたいのか、やればいいのかとかは全く思い付いていない現状だが。そう言ってくれる、心強い味方が出来たことに今は感謝しないとな。

「ありがとうな、理亜。やっぱり理亜と一緒になれてよかったよ」

「いつ、いつしよに……」

なんか知らんが理亜の顔がさつきよりも真っ赤になってしまった。そして、視線をうろろうとあつちこつちに彷徨させた後、やたらと潤んだ瞳で俺を見つめてくる。

「ああ、理亜と一つになれてよかった」

理亜を俺の物語として、『百物語』の中にある『千夜一夜物語』として、一つの物語として共に歩む道を選択して本当によかった。

「ひつ、ひちよちゆに……はふう」

つて、おいおい、なんか顔全体赤くないか？

呼吸も乱れてるし、大丈夫か？

「お、おい理亜？」

「だ、だいひょうぶ……です」

いや、あんまり大丈夫なようには見えないのだが……。

「兄さん……あの」

深呼吸をして息を整えた理亜は、か細い声で、伺うように俺を見る。

「もう少し、そちらに寄っても……いいですか？」

「お、おう」

本当はあまりよくはなかったが、ヒステリアモード時の俺は女性のお願いや頼み事は基本的に断れない。

とくに、今いるのは妹として普段接している理亜相手だ。

妹が近くに寄るといっただけだ。何もおかしいことなんてない。

だと言うのに、俺の心臓はもうバクンバクンに激しく脈だっていた。

理亜は俺の側に近寄ると、俺の顔を……じーつと見つめてきた。頬も耳まで赤くしながら、俺から視線を逸らそうとはしない。

そんな真つ赤な顔で見られたら、ドキドキは止まらない。

ああ、クソ、止まらない。止められない。ヒステリア性の血流が止められない。

「私は……兄さんが、大好き、ですからね」

それは前にも聞いた台詞だった。

ああ、そうだ。あの時、理亜達と戦った後にもしてくれた告白。

そう、それは兄妹としてではない、男女としての気持ち。

「兄さんになら……触られてもいいと思つてますし。……その……見られても、いいと思つているんですからね……?」

理亜から向けられる熱い視線。

熱い吐息が部屋の中を流れる風に乗って俺の頬に当たったようなそんな感じがした。

そう、気づけば理亜の顔は吐息が当たるほど近くにあり……。

「だから……兄さん」

そのまま、枕を離して俺の方に顔を寄せてくる。

理亜の、柔らかそうなピンク色の唇が迫って来て……。

気づいた時には、俺の唇に理亜の唇が押し当てられていた。

理亜の激しいほどに熱い体温が唇から伝わってきて……これは……。

(キス……)

されてる、のか。

それが後からわかった。

それがわかったタイミングで。

ドガン!!?

「っ!!?」

「きゃあ!!?」

とてつもなく大きな衝撃が、ホテル中に走ったのだった。